

公爵家次期当主好色物語

ルペッタ好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

グレモリー家の次男として生まれた前世は人間だった男のハーレム物。

クスでカスで性欲に正直な性格だけど、武力と権力と財力はある男がリアスの立ち位置にいて話です。

兄のサーゼクスに匹敵する悪魔の才能と、前世から人間の魂を引き継いだおかげで手に入れた『赤龍帝の籠手』持ちなオリ主最強モノ戦闘シーンは割とスキップかも。

※盆休みが終わったら開示設定を除外にします。

目次

先頭婚約者のフェニックス

1-1 グレモリー家の転生者 | 1

1-2 レイヴェル・フェニックス(1) | 11

1-3 レイヴェル・フェニックス(2) | 22

1-4 焼き鳥令嬢に串をさす(上) | 32

1-5 焼き鳥令嬢に串をさす(中) | 39

1-6 焼き鳥令嬢に串をさす(下) | 50

1-7 グレモリー、その魔力の秘密(1) | 58

1-8 紫紅の龍帝 | 68

1-9 グレモリー、その魔力の秘密(2) | 80

1-10 『女王』の価値(上) | 94

1-11 『女王』の価値(下) | 101

1-12 『女王』挿入(前) | 119

1-13 『女王』挿入(後) | 132

1-14 可哀想な墮天使の娘が悪魔にされる | 145

1-15 DM墮天使の娘を悪魔にシてやる | 160

1-16 搭乗『戦車(あけの)』 | 168

1-17 『戦車』に乗った | 182

1-18 ラティア・アスタロト | 192

1-19 女体ケーキ二点盛り(前戯) | 201

1-20 女体ケーキ二点盛り(実食) | 211

1-終 『僧侶』探しと、蠢く陰謀 | 224

ダブルエックスの置き場

DX-1-1 魔王少女艶姿撮影会 | 233

	D X 1 2	魔王少女艶姿撮影会	243
	D X 1 3	魔王少女艶姿撮影会	254
	D X 2 1	D Q : 十字架×危機 (クロス×クライシス)	
268	D X 2 2	D Q : 十字架×危機 (クロス×クライシス)	
283	D X 2 3	D Q : 十字架×危機 (クロス×クライシス)	
307	D X 2 4	D Q : 十字架×危機 (クロス×クライシス)	
318	D X 2 5	D Q : エルメンヒルデ・カルンスタイン	334
	D X 2 6	D Q : 吸血鬼のヒメゴト	345
	D X 2 7	バレンタインの吸血鬼	357
	D X 2 8	吸血鬼のホワイトデー (導入)	373
	D X 2 9	吸血鬼のホワイトデー (前戯)	383
	D X 2 10	吸血鬼のホワイトデー (1日目)	397
	D X 4 1	援助交際の饗養	410
	D X 4 2	援助交際の饗養	419
	D X 4 3	援助交際の饗養	428
	D X 4 4	援助交際の饗養	441
	D X 4 5	援助交際の饗養	452
	D X 4 6	援助交際の饗養	462
	D X 4 7	援助交際の饗養	473
	D X 4 8	援助交際の饗養	509
	D X 4 9	援助交際の饗養	526

	DX 4 10	援助交際の饗養	SLASH D・G	
	DX 5	究極箱入り娘 (Telos Karma)		546
	DX 5 2	究極箱入り娘 (Telos Karma)		566
	秘密計画のヘルキヤッツ			
	2 1	ナベリウスからの手紙		583
	2 2	一盗二婢三妓四妾五妻と神々の戯れ		593
	2 3	説得		602
	2 4	勃起不全のアスタロト		613
	2 5	バアル大王家の次期当主さま		625
	2 6	初代バアルとビッグネーム		632
	2 7	ムカツク叔父の第一夫人を寝獲ってやる		647
	2 8	ムカツク叔父の第一夫人を寝獲ってやる その2		657
	2 9	ムカツク叔父の第一夫人を寝獲ってヤッター		669
	2 10	尻に火が付いた		676
	2 11	ロイガン・ベルフェゴール		688
	2 12	不正賭博不正		698
	2 13	アスタロト家訪問		713
	2 14	おやすみからおはようまで (前)		723
	2 15	おやすみからおはようまで (中)		736
	? ?	おやすみからおはようまで (後)		747
	2 16	猫をかう		766
	2 17	虚蟬		777
	2 18	黒歌のお仕事 (1)		787
	2 19	黒歌のお仕事 (2)		798
	2 20	黒歌のお仕事 (3)		810

書初めに	1115
姫初め	1100
妖しい魔王と王の駒	1081
ゲームの話	1107
超越者たちのキムチ鍋	1106
リリンの失墜	21055
冬休みのクラウンジュエル	1041
2—終 龍帝の契約（後）	11020
2—3 8 龍帝の契約（中）	1005
2—3 7 龍帝の契約（前）	991
2—3 6 聖夜に響く鞭の音（後）	982
2—3 5 聖夜に響く鞭の音（前）	969
2—3 4 ラティアの計画？	954
2—3 3 昼休みに焼き鳥弁当を食べた	930
2—3 2 温泉でいこう。（スタンプ1）	920
2—3 1 大王の計画／一方その頃	908
2—3 0 魔王の計画	899
2—2 9 グレイフィアのおとうと	888
2—2 8 ナベリウスの失踪	873
2—2 7 契約は慎重に（下）	862
2—2 6 契約は慎重に（上）	850
2—2 5 駒王学園	841
2—2 4 旅立ち	832
2—2 3 黒歌のお仕事（5）	823
2—2 2 黒歌のお仕事（4）	

根回し、駒回し（上）

根回し、駒回し（中）

根回し、駒回し（下）

いつか並ぶヒト

紅衣の『女王』と紫衣の『騎士』（1）

紅衣の『女王』と紫衣の『騎士』（2）

紅衣の『女王』と紫衣の『騎士』（3）

紅衣の『女王』と紫衣の『騎士』（4）

紅衣の『女王』と紫衣の『騎士』（5）

アドバンスト・クラウン

帰って来た角メイド

帰って来た角メイドと

転生悪魔の子供世代

ロイガン・ベルフェゴール（2）

姿なき殺戮者／イリユールカ・グラシヤラボラス

『無価値（ベリアル）』の価値

死者はかたる／大王の理屈

粛清の理由

魂の牢獄／肉の器

会議の前に

大罪の七冠／憤怒

アドバンスト・リーグ

虚栄と虚飾

夢見る貧亡霊嬢

夢見る貧亡霊嬢を駈ける

ナイトメア (1)	1474
ナイトメア (2)	1486
ナイトメア (3)	1500
夢の終わりに (第1回)	1520
儀式場見学	1536
魔女裁判のラ・ピュセル	
聖書に名を記されなかったケダモノ	1562
モーニングは裸エプロンですわ!	1569
神龍	1582
悪しき霊たちの王 (レイジ・レックス・レギオン)	1593
誘惑の果実 (Bad Apple)	1604
失楽園のウロボロス (前戯)	1614

先頭婚約者のフェニックス

1-1 グレモリー家の転生者

気が付くと異世界らしきところに転生していた。

小説家になりたい系サイトの異世界転生オレ最強モノを徹夜で読みふけていたのが、前世における最後の記憶だ。もしや寝落ちしてそのまま永眠だったのだろうか。

なんだか無性に情けなくて死にたくなってくる。いや、死んだんだけれど。

生まれ変わったことにはすぐに気づいた。なにせ異世界転生物のお約束的なアレ、そうなんだか美形な母親のおっぱいがー！ とか、うわウチの父親めっちゃダンディじゃね？ といったイベントがすぐに発生したからだ。

さて、転生したのだなという認識はそれでいいとして、なぜそこが異世界らしいと思ったのかと言えば周囲の人々(?)に黒い蝙蝠のような翼があつたからだ。

あ、これ人外だけど見た目ほぼ人間系なヤツだ！ と俺はすぐさま理解した。さらに周囲の言葉を拾っていればどうやら自分は悪魔として生まれたらしいことも分かった。悪魔である。邪悪なる魔である。

そのことに気づいたときは、ヒュー、コイツはやベエ！ きつと弱肉強食で謀略渦巻く世界に来ちまったぜ！ などと焦った。が、悪魔の子供生活はそこまで心配するほどのことはなかった。両親とか普通に優しくかつたし。メイドさんとか執事とかそういう使用人もいてものすごく大切に扱われたし。

悪魔の貴族、グレモリー公爵家の次男にして次期当主候補のリヴラクス。それが生まれ変わった俺の立場だった。ちなみに愛称とか略称はリアスだ。

このリアスという愛称、一応最初の『リ』と真ん中の『ラ』、最後の『ス』でリラスとなるので、リラスリラスリラスリアスとならなくもな

い気がするがやや強引だ。リヴとかレヴでいいのでは……。

その辺りを母上に聞いたところ、「もし女の子だったらリアスという名前にしようと考えていたのよ」と言われて納得した。この家で、母の意向は強いのだ。とてもとても。

さて、なぜ次男なのに当主予定なのかと言えば、なんと我が家の長男である兄上は『魔王サーゼクス・ルシファー』と名乗って家から独立したからとのこと。その詳しい経緯は未だ聞けていないが、どうやら我が兄上は本来のルシファー家の連中を武力でもって辺境へと追いやつて魔王の地位を奪い取ったようだ。

うわ、ウチの兄上ツヨスギ……。媚び媚びしとこ。

あと、ルシファー家の連中みたいに下剋上されてせっかく得た超絶お金持ちな権力者である公爵家当主候補の地位を奪われないようにしなきゃ！

というわけで、俺はこれまた異世界転生もののお約束的なアレをすることにした。

そう赤子のときからの魔力トレーニングである。そう、あつたのだよ、魔力。悪魔だからね。そりやそうだ、悪魔がいるんだから神の奇跡も魔法もあるさ。

魔力持ち赤子から意識ある系異世界転生者特有の暇な時間は全部魔力増大訓練にあてるムーブにより、俺の魔力はガンガン上がった。もちろん試行錯誤はあつたが、一度やり方を見つけてしまえばあとは簡単。よくある全部使い切つて、スヤアZZZ……的なトレーニングとかいろいろ試した結果だね。

他にも異世界転生ものといえば、現代知識を活かしてのお金儲けが定番。だが、こっちは上手いかなかった。いろいろ案をだしてはみたものの、既にそれっぽいものがあつたらしい。なにかも上手くは行かない、ということだろう。

まあ、稼がなくても金持ちなんですけどね。我がグレモリー家は！

実は上手く行かなかつたことは、他にもある。それは魔力の増大だ。

いや、成功するにはしたのだけれど、どうやらやりすぎてしまったらしい。ちよつと魔力量が莫大になりすぎて、周りから引かれてしまった。

それだけなら、まだ良かった。そこからもう一つ問題が発生してしまったのだ。

これまたお約束というか定番なものが俺についていたのだ。

俺の魔力量が先代ルシファー（兄上の前の元祖ルシファーさん）を超えたのではないか!? などと騒がれ始めたところにそれは起こった。

まさか、リアルに「なんじやこりゃー!!」などと叫ぶことがあるうとは思ってなかったよ。

周りが騒ごうが同年代の悪魔の坊ちゃんお嬢ちゃん方に怖がられようが、俺は魔力を増やすことをやめない！ と頑張っていたある日のこと。

突然、俺の腕に真つ赤な鎧の一部というか籠手？ らしきものが装着されたのだ。

なんだこれ、なんだこれ、え？ ナニコレ、どうなってるの？ と狼狽える俺の頭の中に、ソイツは直接話しかけてきた。

赤龍帝ドライグ。二天龍とか呼ばれている、この世界でも最強クラスのドラゴンの魂。それが俺の腕から生えてきた籠手に宿っていたのだ。

ドライグから話を聞いてみれば、なんでもこの赤い籠手は《赤龍帝の籠手》と名付けられた最高峰の神器である神滅具の一つのこと。

神器って何ぞやと問いかけ返ってきた答えは、人間への神様からの贈り物っぽいものとのこと。

で、この籠手ってどうすごいの？ と聞けば、なんでも自身のいろいろな《力》などを一定時間毎に倍々に増加していくことが出来るとのこと。

幼少にして先代ルシファー超えちゃったらしい魔力持ちの俺の力が、ガンガン倍加してくって、それ……。

ヤッペーなあ、ヤバすぎる。

これってあれでしょ？ 転生チートってヤツでしょ？ 小説家に

なりたいゼミでよく読んだやつだ。

転生の時に神様に出会って、「間違つて殺しちゃったor前世の善行を評価して、来世ではチート能力あげるよ」などと言われた記憶は一切ない。ないのだけれど、しっかり転生特典だけはもらっていたらしい。

『いや、でも俺って悪魔だけど?』

『お前の魂は人間のものだ』

『ああ、人間だった前世から記憶引き継いでるからってこと……:…:なのか?』

『分からん。分からんが、その可能性はある』

現在過去未来において最強の赤龍帝(推定)にして、魔王を超えた魔力を生み出す悪魔の肉体を持つ、凡才タ人間の魂。それがリヴラクス・グレモリー。

つまり、俺。

大騒ぎになりました。いや、もうね、とんでもないことになりました。

父上も母上も、兄上も兄嫁も、母方の祖父も叔父も、兄上以外の魔王様方も、みんなバタバタバタバタ、ドツタンバツタン、ギシギシアンアン大騒ぎ。

あつちこつち引つ張りまわされて、思想教育的なものを受けさせられて、もうね……:…:俺、疲れちゃったよ。

ちよつとその騒ぎのせいで、やさぐれてしまったというか、こう精神的にいろいろ参っていた時期があつたのだ。兄上はそんな俺が疲れていた頃に、ちゃっかりきつかり嫁さんに仕込んでいたらしく、甥っ子が生まれたりもした。

グレモリー家の血を引く純血の上級悪魔の甥っ子ミリキヤス君の誕生である。魔王ルシファアの地位は世襲制ではないらしいので、このミリキヤス君は十分にグレモリー家次期当主を巡るライバルになるだろう。

ミリキヤス君は、現当主の父上から見て普通に可愛い孫だしね。

神器が生えてきたせいで、前世の人間だった記憶があると白状させ

られてしまった微妙な俺とは違って。

だから俺は、今日も自分を鍛える。誰よりも強くさえあればほとんどのことはどうにかなる、この世で最も信用のおけるものは己の意のままに振るうことの出来る暴力だ！ ってドライグも言ってたし。

たとえ家を追い出されようとも、強ければ栄耀栄華は思いのまま。上手く家を継げたとしても、武力があつて困ることはない。むしろ無ければ馬鹿にされて困ったことになるだけだ。

さて、そんな俺の最近の悩みは……ずばり性欲だ。身体がある程度育ってきたら、なんだかこう毎日毎日ムラムラして仕方がない。

前世の俺は、メイドスキーだった。そんな俺の現在の立場は公爵家次期当主（暫定）。当然のように周囲にはメイドさんがいる。スカートやフリルをヒラヒラさせながら、少しばかり怯えと媚びの混じった視線をこちらに向けたりしながら、あれやこれやと世話を焼いてくれる。

このメイドさん方、みなさん美形だ。悪魔の女性は、人間を誘惑したりする関係かほほほほ美女・美少女ばかり。その中でも我が公爵家に奉公に来ているような女性は、選りすぐりなのである。

こんなのさあ、もうさ、我慢できないよね！

「ということなんだが、どう思う？」

「分かる」

「分かってくれるか。さすがは隠さないシスターコンプレックス。略してシスコン」

「ああ、よく分かるとも同志メイドスキー。ボクもこう手を出したらヤバイって理解はしているんだけど、どうしてもムラムラとくる衝動が抑えきれなくてね……。ついこの間、ヤっちゃったのさ」

「マジか……。お前、マジか……」

「ああ、マジもマジ。アレは実に良かったなあ……。天に仕える清純であるべき少女を、罠にかけ、誘惑し、墮落させる！ これに勝る悦びはないとボクは断言する！」

赤龍帝騒動であちらこちらに引きずり回された日々は、俺に大いなる疲労と多大なストレスを与えた。だがそれは同時に、悪魔の貴族社

会における知人を増やすことにもなった。

そうやって知り合った中には、それ以降友人づき合いをするようになった者もいくらかいる。この修道女・聖女大好き坊ちゃんもそんな一人だ。

現在、聖書の神話に属する悪魔、天使、墮天使などの人外たちは、先の大戦によって受けた多大な被害もあつて自然休戦状態となつてい

る。そんな中で、天界、天使勢力に属するシスターに手を出せば問題になる。場合によってはそれが原因で戦争再開なんてこともなくはない。

だから、この男のやったことはある種のタブーなのだ。だがしかし、だからこそ燃える。イケナイことほどやりたくなる。危険な火遊びほど興奮する。

それは大いに理解できることだ。

その上、彼の性的趣向は一種のNTRになるのではないだろうか。修道女の中には、「私は神と結婚していますので男性とお付き合いすることはありません」などと口にする女がいるという。

ならば彼女らは聖書の神の妻ということになる。

悪魔にとつて最大の敵である聖書の神。その女を誘惑し、落とす。そんなの興奮するに決まっているだろう。

俺はNTRれものは大嫌いだ。もし俺がそんなことになったら相手の男は八つ裂き程度では済まさない。

でも、NTRるものは悪くないと思う。むしろ大興奮。

「なるほど、そうか……ボクは聖書の神からNTRしたことになるのか……」

前世の俺はメイドスキーだったが、修道女や巫女さんものも大好きだった。

この聖書を基に形成された倫理なんぞクソくらえ、そんなことより暴力と金な悪魔社会。

もしも機会があるのなら、一度は彼のような体験を試みたいものだ。いや、一度などと嘘偽りは言うまい、出来るものなら何度だって

ヤツてみたくはある。

「君ならそう言ってくれると思っていたよ。いつか機会があったなら、ボクが君を導いてあげよう……聖書の神からNTRる悦びの世界へ」と

感動を覚えた。新たな見地に至った。そんな目をしながら、彼はそう言つてこちらへと手を差し出してきた。

この日は、二人の男の固い握手が交わされた日となった。

さて、先日は友の所へと我がエロ事情の相談に行つたはずが違う話に終始してしまつた。シスターNTRは実に興味深いが、直近の問題は我があふれだす性欲の処理にある。

寝て起きたら、我が欲棒が爆発して白いマグマを吹き出していた。なんてことが、何度か。それを美人メイドさんに清掃されてしまうというこの状況。

恥辱……興奮……あれ？　なんだかこれはこれでいいような？

などといったことになりかけている我が身を、こんなことではいかんと奮い立たせ、別の知り合いに相談してみることにした。

「話は分かつた。だが、何故メイド程度に手が出せない？　単にお前がヘタレなだけじゃないのか？　俺様はお前ぐらいの頃には、もう毎日イタしていたぞ」

「なんて羨ましい……さすがハーレムキング先輩」

「まあな。俺ぐらいになるとその程度つてやつだ。それで、もう一度聞くが、下級悪魔のメイドなんぞむしろ手を付けられに来ているような者たちだろう？　別にお前が手を出したところで、喜びこそすれ非難されることなぞありえんだろう」

爵位をもつた王侯貴族な上級悪魔の屋敷。そこの奉公にやってくる女悪魔は、貴族男性からのそういった要望に応えることも仕事の内と承知しているらしい。上手く気に入られれば、正妻とはなれずとも愛人としてより良い暮らしを得ることもあり得る。そうはいかなくても、彼女らからしてみれば多額の金銭を贈られる可能性が高い。

悪魔同士の交わりで子供が出来る確率は低いが、もし上級悪魔との

間に子供が出来れば、その子は高い素質を持って生まれてくるだろう。強さが尊ばれる悪魔の世の中で強い子を産めるというのは、名誉なこと、喜ばしいこととして扱われる。

そんなこんなな事情から、貴族の屋敷で働いているメイドさんにその家の主人一家の男性が手を出すのは、普通にアリなのだ。

でも、グレモリー家には他所の家とは異なる事情がある。

「先輩、我が家のメイド長が誰か御存知ですよね？」

「そりゃ……あつー！」

我がグレモリー家では、なぜか兄上の妻のグレイフィアさんがメイドとして働いている。メイドたちのまとめ役だ。

メイドに手を出したいんですけどー、とグレイフィアさんに言うのはなかなかどうして勇気がある。というか、ぶっちゃけ我が家のメイドの中ではあの人が一番ムラムラ来ている。

兄の嫁、子持ち、まだ子供が小さいからおそらくおっぱい出る。メイド。スタイル良好。小さなころから面倒をみてもらった、ある意味第二の母的存在であり、姉的存在でもある。

俺にとつての彼女は、属性多重盛り盛りメガデラックスパフェなのだ。むしゃぶりついてあむあむなめなめと味わって食べたい。

ただし、兄上は完全無欠に彼女一筋な様子。なので、もしも手を出したり、出そうとしたとバレた日には、兄弟で血で血を洗う鬭争を繰り広げることになるだろう。

「というわけで先輩。どっかイトコロ紹介してもらえませんか？」

「あー……そういう、な。いや……しかしな。グレモリー家で素性を確かめて屋敷に上げている女ならともかく……うーん。他所からとなると、アイツがなあ……」

我が家のメイド事情について話したところ、ハーレムキング先輩がどうにもウンウンと言うばかりになってしまった。

俺は貴族男性が遊びに行っても問題のなさそうな、その手の場所さえ教えて、ついでに紹介してもらえただけでいいのだが。

「うーん……すまん。それはまた今度にしてくれるか。今は無理だ。少しばかり家の問題と関わって来そうだから、俺だけでは判断が

つかん。こんなことでアイツにへそを曲げられてもかなわんしな。何千年もグチグチ言われることになつたらたまらん」

その後、ハーレムキング先輩は俺の要請に応えてくれなかった。しつこくしつこく頼んだにも関わらずだ。

なんとケチくさい。エリクサーっぽいものを売りさばいてぼろ儲けしている家の男とは思えん。

「まあなんだ。すぐに分かるから勘弁しろ」

このムラムラを解消したいのにそれが出来ない。イライラと湧き上がる激情が怒りとなつて顔に出てしまっていたらしい。

ハーレム王になるという男の夢。それをすでに叶えている偉大なる男。そんな尊敬すべき男の声。

俺はそれに背を向け立ち去った。

それから数日、俺は父上の部屋に呼び出されていた。

はて、俺なにかやつちやいました？ 日々鍛えて、学んで、悶々として。最近はそれくらいしかしした覚えがないはずだが。

「リアス。いや、リヴラクス」

「はい」

「お前の婚約者が決まった」

「は？」

「お前が将来結婚する相手が決まったと言つたのだ」

「あ、いえそれは分かりますが」

「相手側から希望があつた。我がグレモリー家としても、大きな利がある縁組だ。異論は許さん」

「父上、その相手が誰なのかを聞いているのですが」

「安心しろ。お前も知っているお嬢さんだ。見目も性格もお前の好みに合うだろう」

そういえば、以前父上にそのようなことを聞かれた覚えがある。酒の入った場のことだったので、オッサンのうざい絡みなのかと思っていたが、俺の好みを探っていたのか。

「ありがとうございます」

「うむ。お前はいろいろとあるからな、なかなか苦労したぞ」

俺はメイドスキードが、シスターも巫女さんもナースも好きだ。
もちろん、お嬢様お姫様属性も大好きだ。

公爵家の男の婚約者ならば、相手はそれに釣り合う家柄の娘さんで
あることはまず間違いない。

やったぜ！

「ありがとうございます!!」

お礼は大事。だから二回言う。でも、まだ相手が誰だか聞いてな
かったよ。パパン。

「その相手だが——」

1—2 レイヴェル・フェニックス（1）

「——フェニックス家のレイヴェルだ」

ふ、と口から息が漏れ、肩が下がったのを自覚した。

安堵によるものか、嬉しさによるものか。どちらにせよ、相手がレイヴェルならば悪くはない話だ。彼女とは知らない仲ではないし、性格も酷いものではないと知っている。

なにより可愛いし。

彼女は俺よりも少し年下だが、万を超えるという悪魔の寿命から考えると誤差と言っていい範囲だ。人間に換算したら、同年同月に一日か二日の差で生まれた程度ではないだろうか。

と、そこで父上の顔が変わった。威厳ある公爵家当主としてのものから、ニヤニヤと息子をからかう親父の表情へと。

「最近、よくフェニックス家に入入りしているようだな？」

「はい。ライザーさんから上級悪魔の男性としての心得を教えてくださいだっています」

「そうか。まあ他家との交流を図るのも悪くはない。ライザーくんはお前と年齢も近いことだしな。若い者には若い者同士の付き合いというものがある」

「ライザーさんにはよくしていただいております」

「先日フェニックス卿とこの婚約の件で会ったが、随分と気を良くしていたぞ。お前とライザーくんのはな」

ハーレムキング先輩ことライザー・フェニックス。実際にハーレム形成を成し遂げた偉大なる王だ。^{キング}しかも、作るだけではなくその後もしちゃんと維持し続け、ハーレムメンバー全員とイチャラブックスだという王の中の王。前世は非モテ根暗オタ野郎、今生ではイケメン金持ち権力者転生特典チート持ちながら未だ童貞の俺にとって、彼の偉大なる背中はいまだはるか遠く。

いつかは、そんなライザーさんと肩を並べて歩めるようになりたいものだ。このまだ始まってすらいない長い長い悪魔的ハーレム道を！

というにじみ出る我が尊敬の心に気を良くしてくれているのか、はたまた貴族的打算か。彼には本当に世話になっている。主に若手貴族的な付き合いってヤツで。

前世だったら絶対に近づけなかったようなタイプの男なんだけどもね。ライザーさん。

オス的な勝負なら完敗だが、戦闘的なことならまず俺の勝ちが確定というのがいいのかもしれない。前世で一時期、『コミユ強になりたーい？ ならばまず武術を修めろ！』って本が流行った覚えがあるが、あれに書かれていた「手前の武力に自信があると付き合える人種が増える」という記述は本当だったようだ。

「それがあって、あちらからレイヴェルとの婚約の話が出た？」

「ん、いや？ そうとぼけなくともいいだろう」

テーブルの向こうからこちらへとやや顔を寄せてくる父上。そのニヤニヤ親父度が深まった。

「本当はレイヴェルくんに会いに行っていた。違うか？」

「そのようなことはありませんよ」

「別段、隠す必要はないぞ」

「父上は俺が前世でいくつまで生きたのかご存じでしょう？ まさかそんな子供相手にどうこうなど」

俺はロリコンではない。現在の俺はまだ大人の身体への成長途中であり、そんな俺よりも年下のレイヴェルの身長など人間なら小学生サイズだ。

前世でまがりなりに成人し、一応社会人として生きていたことのある大人がそんなことあるはずが……まあ、ないとはいえない。

俺はロリコンではない。ただし、それはリアルロリコンではないということだ。二次元的な方面でなら、むしろ好物の一つであった。限定条件はあるが。

足はスラリと長く、腰もくびれている、胸は控えめなれど、全体的な体系は童顔スレンダー美人。そんな二次元ロリならばイケる性質なのが俺だ。私見だが、あれは三分の二スケールくらいのスレンダー美少女だろう。美少女フィギュアに少しでも「ムフ」となる輩であれ

ば、そんなの股間の勃起がおつきするに決まっているだろう！

本当の現実の子供のお子様体形に欲情など覚えなし、接し方もどうしていいかわからない。なので、むしろ小さい子からは逃走していただくら이다。

だから、俺はロリコンではない。

「前の年齢を合わせたとしても、大差ないではないか」

貴様などこの千年を越え生きてきたこのグレモリー公爵の目から見れば、まだまだお子様よ。父上の眼がそう言っている。

そうですね。超長寿の悪魔からしたら、命儂き人の子の一生などあつてないような短いものでしょうとも。

つまり俺はまだお子様年齢なので、ロリコンではないということだ。シヨタがロリに行為をしたくなっても、それをロリコンとは言うまい。父上のお墨付きを頂いたので、これが公式判決です。

「気になっていなかったと言えば、嘘になってしまいます」

「そうか、あちらの使用人の勘違いではなかったようだな」

フェニックス家でライザーさんと話していると、レイヴェルとも席を同じくすることがあった。男同士で、(主に)下の話題で盛り上がっているところ遠目でチラチラと見てきて、その後ちよこちよこちよこつと寄ってくるのだ。

で、そうなると女が混じってはそれまでの話題を続けづらくなるので話題が途切れてしまう。そうして会話のメインはライザーさんとレイヴェルの兄妹二人のものになり、俺は時々振られる内容に答えるだけ。やや手持無沙汰となったその時間に、レイヴェルをチラチラと見てしまっていたのは確かだ。

それは別に人間だったら中学生未満の少年の外見にふさわしい恋心だとか、そういういったものではない。前世オタ男の欲棒反応範囲にレイヴェルがひっかかっていただけだったりする。

人外の悪魔という種族だからなのか、フェニックス家のお嬢様は「この子って背は低いけど、体形は大人の女性を小さくしただけですよね」という前世では二次元でしかお目にかからなかった姿をしていたのだ。前世でもそういう子はいたのかもしれないが、すくなくとも

俺は会ったことがない。

それを勘違いしてしまつたらしいフェニックス家の使用人の方々、実は薄汚れた大人の男の下劣ななめまわすような視線ですまない。レイヴエルを見ていて視線が合った時などに慌てて視線を逸らしたりしていたのは、照れていたわけではなく、己の下種思考が見破られたのではないかと恐れていただけなんです。うう、でもまたつい見ってしまう。この行動、今は悪魔的美少年の容姿だからいいが、前世なら「うわ、キモ」とか言われていたことだろう。

思わず俯いてしまう俺と、それをニマニマと見る父上。

「ところで、だ。話は少し変わるが、お前もそろそろ女への興味が抑えきれなくなる年頃になつたようだな」

と、父上はグラスに酒を注ぎながらそんなことを言ってきた。

俺の睡眠中の暴発の処理は、ここの使用人がやってくれている。当然、俺が白いマグマを女に注ぎ込みたい！ そういつも考えてしまう盛りのついた年頃になつたことを父は知っているだろう。

「お前は我がグレモリー家の次期当主。妙な女に入れ込まれても困る。耐性を付けさせるためにもそれについて教える教師を、と見繕っていたところだったのだが……それより早く婚約が決まつた」

「それは、その！ 年上の慣れた方から手取り足取り教えていただくといつたような？」

女教師！ そういうことか！ しかも『おせっせのせんせい』！なるほど！ 貴族男子ともなれば、そういう教育も受けるのか！

食い気味に返した俺に向かつて、父上は苦い笑みを返してくる。

「ああ、その予定だった」

「だった……？」

過去形？ 予定は否定？ なくなつてしまつたということか、素敵なお姉さんからあんなことやこんなことをねつちよりと教えてもらうピンクな授業が。

おせっせ授業はなぜ死んだ。婚約が決まつたからか？

なんということだ。

なんということだ。

なんという、ことだ！

婚約者といえば、婚約破棄もの。前世で愛好していたサイトでの一大ジャンルのひとつ。あれによれば婚約者がいながら他の女とキャツキヤウフフギシギシアンアンしているような浮気者の貴族の男は、後に断罪&没落ざまあいい気味ね、されて苦しみの沼に沈められるのが定番。

つまり、レイヴェルとの婚約が決まってしまった時点で見られるはずだった桃源郷にはもうたどり着くことができないというのか。そういうえばレイヴェルって悪役令嬢っぽいところあるわ。緩めだけど金髪ドリルついてるし。

いやしかし、あんまりだろうそれは。婚約ということは、それはつまり結婚の約束ということ、たぶんきつと婚前交渉なんてNGだろう。その上、他の女もダメなんてなったら、俺のこのもてあますリビドーはどこに吐き出したらいいのだ。

前世だったら、美少女婚約者!? やったぜ！ その時が来るまでは自分で慰めとこ。

となるところだが、基本的に今の俺の周囲には常に使用人がいる状態。見られながら自慰って済ますとかそんな高度なことは出来そうにもない。

一体、どうすれば……。

「分かっているぞリアス、お前が今なにを考えているのか」「父上……」

分かっているのならばなせ……。

「これはフェニックス卿からの許可も出ている話だが……構わんぞ。正式な結婚より前でも」

そう言つて、我が今生の父親は指で卑猥なジェスチャーをしてみせた。悪魔社会でも通じるんだなそれ。

というか、マジか。いいのか、ヤちゃって。いいのか。マジか……。「というかな、すでに面識はあるだろうが形式として今度両家の顔合わせの予定がある。その日に、やってしまえリヴラクス」

「そ!! それは……当主命令ということでしょうか?」

「そうだ。……元人間の転生悪魔等から聞くところによると、人間の男は最初の女というものに深い思い入れを抱きやすいらしいな?」

「ああ、ええ、そういった話を聞いたことはあります」

前世の俺の初体験は、オタ仲間連中と一緒に「二十歳前には済ませときたいよな」と出かけた風俗店なのでそんなことはなかった。でも、高校生ぐらいに恋愛交際の末に——という展開だったならばそういうことになっていたかもしれない。ちなみに初恋は、当の相手から「アイツ、キモいよね」的な陰口を言われているのをうっかり聞いてしまい木っ端みじんになっている。未だにあの日を思い出すと泣きそうになる。

「悪魔にもそういう男はいる。理解できる話だ」

上級悪魔男性のその辺りの事情は、ライザーさんのように広く多くを愛せるタイプと、我が兄上のように少人数への執着が凄まじいタイプに二分されるらしい。ソースはライザーさん。

「お前がどういった傾向にあるのか分かんが、その相手が正式な婚約者であり、未来の正妻となればそれ以上の結果はない。お前もあちらを気に入っているようだしな」

「ですが、その問題は……ないのでしょうか? 体格的にと言いますか、その」

ヤルことがやれるなら、俺はまったくもって構わない。むしろ内心はやったぜ!! の連呼でしかない。でも相手のいる話だ、一応確認しておいたほうがいいだろう。

「ふむ、悪魔の肉体、特に生まれながらの上級悪魔の身体は己の魔力の影響を受けやすい。これは知っているな?」

「はい」

悪魔の寿命はとてつもなく長いが、その老いもまたとんでもなく遅い。これはどちらも魔力の影響が大きいらしい。

母上の年齢はかなりのものになるのだが、見た目は大学生のお姉さんといった風情だ。見た目は若いのに、大人の色気と落ち着きを備えているので、息子は息子が勃ちそうになることがあつて困っています。

「そして魔力の行使に重要なものが何か分かるか？」

「己の意志と、それを叶えるための道筋をイメージする力ですね」

「そうだ。お前のソレがやや早熟だったのも、その影響があるのかもしれん。前の生のイメージがあるのだからな」

「なるほど」

今生の俺が前世よりも早くやりたい盛りになっているのは、前世の頃のイメージが頭の中にあるからだだったのか。イメージに左右される魔力が肉体に影響を与えて、はやくキモチイイコトしたいよってなったワケか。

「相手の方もだな。どうやらフェニックス卿は以前からお前を娘の婚約者候補として考えていたらしく、そのことを伝えてもいたようだ」

ああ、それでレイヴェルと会うことが多かったのか。俺がライザーさんを訪ねることが多かったのは、フェニックス卿にしてみれば実に都合の良いことだったわけだ。

「フェニックスはその自身の肉体を再生、再構築する魔力の特性もあつてか、魔力が肉体に与える影響も大きかったのだろう。婚約とその後をイメージし、意識した結果なのか、あちらも既に子を宿せる状態になっっているらしい」

え、それってなんか、とつてもえつちじゃないかな。レイヴェルが頭の中で婚約者とのあんなことやこんなことを妄想してしまったために、身体の方もそのイメージに合わせてエッチ対応にするように変化したってことだろうか？

なんだ……このエロ種族。上級悪魔はエロも上級なのか。同志シタスキとか、ハレキン先輩のことを考えると、間違つてなさそうな気がする。

というか悪魔だしな。悪魔と言えば人間を誘惑して墮落に誘ったりする存在なのだから、むしろエロいのが普通か。

「あと体格がまだ小さいことを気にしているようだが、上級悪魔の子が出来る確率は低い。サーゼクスも子を得るまでに随分と時が必要だった。その上、お前の相手は不死身のフェニックス。なんの問題もない。むしろ早々に出来ることがあれば、両家を上げての祝宴になる

だろう」

そうか、レイヴエルは不死鳥フェニックス。頭部を吹き飛ばされても平気で再生してケロリとしている一族だ。小さな身体だから出産に耐えられない、なんてことはあり得ない。

ただでさえ上級悪魔の子供は出来にくいのだから、むしろ両家の親推奨でガンガンやらせて子供が出来るようならラッキーという話か。

俺はやりたい盛りの男だし、あちらは婚約・結婚のイメージでそうなっちゃうようなエッチな女の子。正式な結婚は政治的・制度的な都合により後になるとしても、婚約とともに性的に仲良くさせておけば、勝手により仲良くなつていくことだろう。少なくとも俺はそうなると思う。

そしてそうなれば、政略的にも子孫繁栄的にも万歳万歳ということ、両家の現当主としては良いこと尽くめというワケですね。

いやー、考えてるなあ。

「お前は前世の経験があるのだから、入れる穴を間違えるようなことはないと思うが……問題ないな？」

「はい！ 大丈夫です！ 問題ありません!!」

「そうか……では励めよりアス」

「ハッ！ 全力を尽くします！」

テンションが上がって思わず敬礼してしまった。

父上はそんな俺を見て笑うと——呆れられているようにも見えるが。

「リヴラクス、この婚約の日をもってお前の『悪魔の駒』の使用を許可する」と言った。

『イヴァイル・ピース悪魔の駒』。それは上級悪魔に与えられる、現在の悪魔界のトップである四大魔王の一、アジュカ・ベルゼブブが創り上げたチエスの駒を模した魔具。

一つの『女王』、各二つの『戦車』と『僧侶』と『騎士』、そして八つの『兵士』の駒。上級悪魔は自身を『王』とし、これら十五の駒を己の配下となるものに与え眷属と成す。

この駒の効果は凄まじく、悪魔ではない種族の者であってもその種

族に悪魔の性質を追加し、さらに『女王』の駒ならば全体的な能力の向上を、『戦車』ならば攻撃力と防御力を、『僧侶』は魔力を増し、『騎士』には素早さを与える。『兵士』の駒にも特殊な効果がある。

この『悪魔の駒』によって、他種族から悪魔の一員となった者を転生悪魔と呼ぶ。俺も転生して悪魔になった者だが、生まれながらの上級悪魔なので転生悪魔とは言われない。精神的には彼ら彼女らに近い存在のような気がするのだけれど、扱いは違うのだ。

「ようやく、俺も眷属を持てるのですね」

眷属でハーレムを作っている『王』^{キング}先輩の後をようやく追いかけることが出来るのか。

「実は、我慢できなくなったお前がああ堕天使の娘に手を出してしまいうのではないかと心配していた」

「朱乃ですか。かなりなつかれていますので、正直なところ結構我慢していました」

「だろいな。だが、あれは堕天使」

「正確には堕天使と人間のハーフですが」

「それでも扱いは変わらん。堕天使と悪魔は、古くから争い続けてきた種族同士。どちらも冥界に拠点をもつため、天使よりも敵対する機会が多い敵だ」

「はい、それは心得ています。旅行先から朱乃を拾ってきた後の皆の反応でそれを思い知りました」

赤龍帝発覚騒動から僅かの頃、俺はかなり参っていた。そんなときに父の眷属悪魔の一人が、俺を気晴らしの旅行に誘ってくれたのだ。

その旅行先で偶然出会い、なにやら人間たちに殺処分されそうになっていたのが、堕天使と人間のハーフである朱乃だ。可愛い女だったので、「それを殺すなんてとんでもない！ いらぬなら俺にくれ」とグレモリー家に連れ帰ったのはいいのだが、どうにも使用人たちの朱乃に対する態度が冷たい。塩どころではなくアイスエイジって感じだった。

転生悪魔たちはそうでもないらしいのだが、純粋な悪魔にとって堕天使の血筋というのは忌むべき仇敵のもの。態度が冷たくなるのは

仕方のないことだった。

かといって、じゃあやつぱりイライナイやと捨てるわけにもいかず、現在彼女は俺の所有物あるいはペット扱いとして我が家で飼っている状況だ。

最初の頃はいろいろあったのだが、今は墮天使の持つ悪魔にとつて有害な光の力を抑えつげるための拘束具や、脱走防止のために鎖付きの首輪に手枷足枷なども「つけてつけてー！」と嬉しそうに俺にせがんでくるまでになった。

なんか、俺が何をしても喜ぶんだよな、あの子。妙に色っぽい声も出すし……。

たぶん、押し倒したら即OKというか、たぶん大悦びすると思う。だけど残念ながら朱乃は墮天使の血筋を持つ者。

そんな子に手を出した日には、「グレモリー家の次期当主は、墮天使と仲がよろしいそうよ?」「あら、いやだ。もしかしたら悪魔を裏切るのではない?」「まあまあ、それは困りますわね。魔王を輩出したグレモリー家がそのようなことでは」

などなどの批判を浴びかねない。そんなことになってはグレモリー家次期当主の地位が揺らいでしまう。

という事情から、泣く泣く我慢していたのだ。最近、会うとどうしてもムラムラきてしまうので世話を使用人に任せているところだ。あの子の発育が良すぎるのが悪い。

「もし、我慢できず手を出すのなら、先に婚約者の了承を得なさい。そんなことで揉めると困る」

「あつ、はい」

「それから、その際には墮天使には手を出さないようにしなさい。分かるな?」

先の『悪魔の駒』の許可と合わせると、つまり墮天使はダメだけど転生悪魔にしちやえば問題ないということか。

「承知しました」

「あれは墮天使の幹部バラキエルの血筋、将来的には強力な駒になるはずだ。上手く使え。話は以上だ、下がっていいぞ」

「はい、では失礼します」

レイヴェルよし、朱乃も条件付きだが許可が下りた。やったぜ！

まったくもって今日は良い日だ。その日が待ち遠しくて、寝付けないかもしれない。

1—3 レイヴェル・フェニックス（2）

前世におけるひいじいさんは、結婚式の当日まで嫁さんに会ったことがなかったそう。それで式終了からそのまま初夜という流れであったという。子供は七人。

ばあちゃんはお見合いで一度だけ会ったきりで、次に会ったのは式の日でそのまま初夜。子供は三人。

昔は娯楽も少なかったので、夜になったらヤルことは一つだったのかもしれないが、傍から見ている分には夫婦仲は良好に見えた。

しかし、昨今の自由恋愛尊重の風潮が広がる環境にあつて、既婚率は年々減少傾向。夫婦が成立したとしても作る子供の数も少ない。さらに離婚率も上がっていたはずだ。

つまり恋愛は偉大であるという信仰こそが、少子高齢化を促進する最大の元凶だ。もちろん反論はあるだろう、望まぬ縁談で涙を流すという例も多かったことだろう。

だがまあ、それはそれとして、人という種の数を増やしていくことを最大の目的とした場合、ほんの数十年前ばかり前の結婚形態の方が現在の主流よりも優れていたことは確かだと考える。

なにが言いたいのかという、婚約つて制度サイコー!! ということだ。

浮かれているという自覚はある。周りの俺を見る目が生暖かいですらなく、なにやら微笑ましいものを見るような悪魔らしからぬものになつていることも気づいている。

俺はコミュ力に自信がない。一からレイヴェルを口説き落として結婚まで持ち込め等といわれたら「無理」と即答だったと思う。

「こんないい環境に転生させてくれてありがとうございます」

俺はこの幸運を感謝して神に……祈ろうかと思つたが、悪魔なのでそれはおかしいと気づいた。

ならば魔王かとも考えたが、魔王はうちの兄上だ。兄は関係ないだろうコレ。

『ありがとうドライブ。お前のお陰だ』

なので赤龍帝さまに祈りを捧げておくことにした。俺の今の待遇には、この龍を宿した神器の能力の影響が大なることは間違いない。

『なぜ俺に祈りを捧げる』

『いや、たしか前に赤龍帝になった者は、異性と縁に恵まれるとかなんとか言ってたかったか？ だからこの縁もその縁結びパワーなのかと』

『たしかにドラゴンのオーラと強大さは好むと好まざるとに関わらず強く異性を惹きつけると言ったが』

『ああ、だから今回レイヴェルがどうもその気になってくれているのも、出かけた先にたまたま偶然に朱乃がいたのもその縁結びの龍帝さまのご利益だろ？』

ありがたや、ありがたや。ご利益できめん。これは毎日《赤龍帝の籠手》を磨いて祈りを捧げなければ。

全自動で美女・美少女と縁を結び、さらに相手からの好感度を上げてくれる上に、悪魔社会で最重要の戦闘能力もピカイチときている。神様も実によい贈り物をくれたものだ。悪魔だから素直に感謝してやれなくてすまん。この店、お客様神様に飲ませるコーヒーないんだ、匂いだけで我慢してくれや。

『そうなる……のか？』

『そうなるだろ？ 前世の俺にはそんな縁はなかったし、まったくモテたことがないからな』

情けない話だが、事実なのでしょうがない。

『ふん、勝手にしろ。俺は神器の機能の範囲でしか手を貸さんがな』

『ああ、勝手にする』

ふん、ツンデレドラゴンめ。こんなことを言いいながらちよくちよくアドバイスをくれたりもするのだからこの龍は。

基本的に最強クラスのドラゴン目線での意見なので弱者など塵程度にしか思っていないような助言なのだけれど。これが結構、母方の祖父辺りと意見が合ったりすることがあるのが面白い。龍と上級悪魔、生まれつきの強者同士で上から目線な考え方が似てくるのだろうか。

ああこの母方の祖父、「祖父」と言っても「一族の祖たる父」の略なので、俺の思考言語が日本語な上に略しているからなただけだが。でも、一度間違えてそう言った時に、本人からは否定されてないんだよな。曖昧に微笑まれただけで。

実はバアルの叔父上が、叔父さんではない可能性。精子レベルで在りえる？

龍の帝王と神器を介して魂が繋がっているらしい関係なのか、一期祖父から教育を受けていたからなのか、俺の性格にもそういうところが出てくるような気がする。けれどこれを他者のせいにはするまい。

最強チート系異世界転生者にありがちな、俺つえーイキリムーブなだけかもしれないのだから。まあ、元凡人が急に最強クラスに強くなったら性格変わるのは当たり前だろう。

『男は強くなければイキれない。ヤラなきや生きてる甲斐がない』とか言う名言パロの迷言もあった気がするし、これはこれで良ししよう。

俺は急激に強くなったことで調子に乗りまくっている、元凡人非モテオタのおバカな男だ。それを自覚したうえで、このやってきている都合の良い波に乗りまくってやりまくるのだ。ぶるんぶるん。

そして、ついに卒業式の日がやって来た。出会いとお別れの時だ。炎の翼が桜の花を散らし、俺の俺がついに交り合うべきものと出会い、短くも長かった童の期間とお別れする日がやって来たのだ。

さっぱり眠れなかった。明日には！と想いが渦巻いて股間がギンギンで痛くて寝付けなかったのだ。目を閉じれば浮かび上がるのはレイヴェルのあられもない姿ばかり。寝ることも出来ず、君の姿ばかりが浮かんで他のことが何も考えられない。君とああしたい、君とこうしたい、ああ、シタイシタイ、イタシたい。

これは一体どういう状況なのか。もしや、恋か？　まあ、ただの情欲だ。

ただの情欲に違いないが、俺の中に彼女への執着が生まれているこ

とも確かだ。これでもし、「やっぱりやめた」などといわれた日には、俺は父上でもぶつ殺しかねん。そうなれば、そのまま赤龍帝と父上の眷属との戦だ。そして戦禍は拡大し、国が傾くに違いない。これは警告だ、彼女を傾国にするな。レイヴェル入荷絶対厳守を要求する。

「顔には出ていないな」

「眠れませんでしたか」

「ああ」

鏡に映るのは、紅髪紫眼という派手な色合いをした美少年。このまま順当に育てば、将来は乙女ゲームのワガママ俺様系王子っぽくなりそうな顔付だ。

ただしその美少年の股間は、未だに治まっていない。義姉さん、あんなのせいだよ。

「しかし、困りましたね。これでは着替えができません」

だから見ないでくれませんかね。ピクピクしちゃうから。

メイドが着替えさせてくれるのはいいんだよ。俺の身支度整えるのも仕事の内、俺が「自分でやるからいい」と拒めば彼女らの仕事が減って給料も減ってしまうからな。

だが義姉さん、あんたはダメだ。これが別のメイドさんだったなら、

「このままではダメだな、どうにか鎮めるしかない。よし、お前がやれ」

「え？ 何を……」

「その口を使えって言ってるんだよ！ 俺の物が鎮まるまでなあ！」

「うぐう！ ぐっ、げほ……。う……。はい、若様」

「ちゃんと飲み干せよ」

「むく、うつく……。ぐすん」

といった展開もあったかもしれないというのに。義姉さんでは手出し出来ない。

「グレイフィア」

「はい」

「出ていけ」

「いえ、しかしお着替えを」

「出て行けと言っている！ お前の中の俺は、いつまでもオムツを替えていた赤子のままか？」

「そのようなことは」

義姉さんは俺を男扱いしていないのだろうか。

前世を合わせても、相当年下なのは確かだろうし、生れたところから知っていて世話もしてくれていたから。

「義姉さん、俺はもう子供を作れるようになったんだ。あまりお子様扱いしないでくれ」

「リアス……いえ、失礼しました。まだ時間がありますので、後ほど」

「ああ、あとで呼ぶ」

「失礼いたします」

まったく失礼な義姉さんだ。盛り上がったモノを見つめるなら、そのまま「その、良かったら鎮めようか？ 手、だけど、いっぱい出して」くらい言ってくれてもいいだろうに。

微妙に期待してしまつて、余計にカチカチなるわ。ああ、これが反抗期ね、とか思われてそう。

さて、股間のコレをどうにかしなければいくらなんでも恥ずかしくて部屋から外に出られない。

鎮まれ、鎮まるのだ、俺の如意金箍棒。純血の上級悪魔はその豊富な魔力で永遠の若さを保っている、ならばその魔力でもってコレを硬軟伸縮自在の棒とすることも出来るはずだ！

なんとか猛りを静め、義姉さん以外のメイドに用意をさせた。まったくあの義姉ときたら、魔王の妃モード、兄嫁モード、メイドモードの三段変形でギャップ演出してくるので股間に痛くて困る。

こう、なんだ、たとえるのなら勤め先でいつも上から小言を言ってくる美人女上司が、家に帰るとメイドとして働いていて「私などは呼び捨てにして、どうぞなんなりとご命令ください」って感じた。エロ本にありそうでその後の展開まで想像できてしまう。実際には、デキないけれど。

さてレイヴェルとの婚約が本決まりとなった後、無駄に広い我がグ

レモリー邸に新しい区画が用意された。俺とレイヴェルが過ごすための場所だ。

その中に、いくつか大きなベッドがデデンと設置されている部屋がある。いわゆるヤリ部屋だな。

本日俺に与えられたミツシヨンは、ここにレイヴェルを連れ込んでベッドの上でくんずほぐれつして気持ちよくなること。実に素晴らしい、ヤリ甲斐しか感じられない任務だ。ブラボー！

そして今、俺は使用予定の部屋の下見に来ていた。昨日も見に来たが、やはり下見は入念にしなければならぬ。

部屋の中の家具の配置を見る、どこに置くのが良さそうか。小奇麗に裝飾されたビンを手にして、あっちへウロウロ、こっちへフラフラ。しかし、広い部屋だ。俺の寝起きしている部屋もそうだが、無駄に広いと拡散して効果が薄れてしまう可能性が高い。もつと数を揃えるべきだったか。

「リヴラクスさま、その手にされている物が何かお伺いしても？」

今日の義姉さんは俺について回る担当らしい。重要イベントだからだろうか。

「失敗はしたくないからな。そちらの気分が盛り上がる香りの出る代物らしい。どこで聞きつけたのか、献上してきた者がいる」

「少し確認させていただいても？」

やや不機嫌になりながら、メイドのグレイフィアにそれを手渡す。すると彼女はビンの蓋をあけ、手で仰ぐようにして匂いを確かめた。

聞いたところによると、冥界の未開拓領域で最近発見された植物から抽出された香り成分を配合した香料らしい。とつてもハツスルできさるそうなの。

「これは魔力に恵まれた上級悪魔には効果がありませんよ。魔力量の低い者には意味があるのでしようが、リヴラクスさまのような魔力の持ち主や、自己保存能力の高いフェニックスの方ですと……」

魔力が肉体に影響を与える以上、魔力の多い悪魔はそれだけ耐久性も高くなる。ましてや俺のように幼くして魔王級に至るような者の毒物抵抗ときたら。

「そうか、やはり道具に頼るべきではないか。ところでグレイファイア、詳しいな?」

「確認しましたので」

「確認した?」

「はい、確認しましたので」

そうかい、自分たちで試したのね。そりゃ俺の所より魔王ルシファーのところに行く方が早いよね。長い悪魔生、マンネリの打破は永遠の課題らしいからな。ちくしょう。

うん、そうか。手元に来た時に嗅いでみたけど、別にムラムラしなかったものな。半分ぐらい分かってたさ。

なんだかよく分からない気落ちを抱え、俺は部屋を後にした。あとは到着を待つのみ。

こちらの両親、あちらの両親、俺とレイヴェル。六人での会話はつがなく終了し、お見合いにありがちな「あとは若い二人で」という状況になった。

邸内の庭の一つで横長の椅子に二人並んで腰かけ、目の前のテーブルには茶と菓子の類。レイヴェルとの距離は、まあ近い。肩が触れるくらいだ。

しかし、未だに冥界の空にはなれない。空が紫色をしている。人間と悪魔では空色と言われて思い浮かべる色合いが異なるだろう。

「リヴラクスさま……私と一緒にではつまらないですか?」

上に向けていた視線を隣の声の主に移す。隣の彼女からは、どこかで覚えのある香りがしていた。

「そんなことはない」

別にレイヴェルは偉そうに話さなければならぬメイドではないのだ。普通に話してもいい。自分でも分かるが緊張している。

「それでしたら、よいのですけれど」

「レイヴェルは緊張しない?」

声と話し方を、普通にしようとするながら、レイヴェルの瞳をじつと覗き込んだ。油断すると声が上ずりそうだ。あとぶつきらぼうな

話し方になってしまう。

はい、俺は女の子と話すのが得意ではありません。兄妹の関係で会うことのあるソーナ・シトリーくらいキツイ相手なら、こちらも力チンとくるので逆に話しやすいのだけれど。

今のレイヴェルのように、好意的というか、仲良くなれそうな子だと、緊張してしまって上手く話せなくなってしまう。

メイドとか朱乃みたいに上下関係が明確なら、それはそれで余裕が持てるので問題ない。こっちの立場が上で、逆らってこない相手にならグイグイいける小心者なのだ。

レイヴェルの場合は、同じ名家生まれの純血上級悪魔。しかも、この後には卒業式が待っているのだ。緊張するに決まっている。あと油断すると股間も緊張して盛り上がりそうなので、これを抑えるのも大変なのだ。

「それは、そのもちろん私も、緊張しておりますけど。……その、この後ですよね?」

「ああ、うん」

「リヴラクスさまは、ライザー兄さまと仲がよろしいので、そういったことには慣れていらっしやるのかと思っておりますわ」

「いや、実は初めてなんだ。だから、上手くできなかつたらごめん」

「私もそうですので、お互い様ですわね」

そう言った後、レイヴェルは両手を胸の前に持ってきて軽く握ると両の肩を少し上げてからストンと落とした。なんかカワイイ。

「意識してしまって、身体がギュツとなくなってしまいますね」

「俺もやってみるかな」

レイヴェルの仕草を真似てやってみると、「ふふ」と笑われてしまった。男がやっても気持ち悪いか。

「いえ、なんだか可愛らしくて」

「可愛かったから真似してみた」

そう言ったら、また笑ってくれた。うん、可愛いな。

こんな子にこれからするのかと思うと、なんだかもう我慢できそうにない。いつそ、もつとくつついて距離を詰めた方が良い気がしてき

た。

彼女の視線がこちらの股間に向かうとマズい。

「あっ……」

後ろから手をまわして腰を抱え、ぐっと引き寄せる。互いの顔がくつつきそうなほど近くなって、彼女の瞳の中に映る俺の顔が見えた。

もともと紅潮していた頬がより紅くなっていくのが分かった。自身のことは頬の熱で、彼女の方は見たままだ。

「これ、この匂いって」

「新しく見つかった植物の香りのようですね。えっと、こういうときに、とても良いものと聞きました……」

なんだかたまらなくなつて、気が付くと俺はレイヴェルを抱きしめていた。お互いの頬が触れ合うような位置。

「リヴラクスさま」

「リアスがいい。親しい人はそう呼ぶ」

「リアスさま……」

彼女の手が俺の背中に回ったのが分かった。心臓の鼓動がハツキリと分かるくらい、身体と身体をくつつけ合った。

「もし俺が女として生まれていたら、リアスって名付けるつもりだったかららしい。でも、父がジオテイクスだから、男なら名前の後ろ二つの音は父のそれに合わせたかったんだって。兄もサーゼクスだろう?」

「お二人のお名前は、お義母さまが決められたのですか?」

「うちは女の意見の方が強い家系らしいね。昔からそうだったって聞いた。入り婿でも嫁取でも、どっちでもそうなるらしい」

レイヴェルの感触を全身で楽しむ。上級悪魔には効果のない媚香を、肺いっぱい吸い込んだ。

「あら、でしたら。私たちもそうなるのでしょうか?」

「そうなれるといいと、今すぐく思っている」

レイヴェルはとづくに気づいているだろう。なにせグイグイと押し付けるような形にいつの間になってしまっていたのだから。

「でしたら、リアスさま……んう」

言わせる前に彼女の口を塞いだ。ここまでくれば男は度胸だ。

唇と唇が合わさる感触が気持ちいい。それを夢中で味わっていると、その味が変わった。ああ、彼女の舌が俺の唇を嘗め回している。絡め合おうと誘ってくる。

「んっ、ふう、ちゅっ」

服の上から身体をまさぐりあい、互いの口内の形を覚え合った。

股間の棒が欲に濡れてきた、よだれが滲んでしまっているのが分かる。彼女はどうかなんだろうか。

「はあ……♡」

一息ついて、舌をほどき、唇を離し、零れ落ちそうになった唾液をなめとって、顔の距離を少しだけ取る。

なんてえつちな顔をしているんだろう、この子は。そしてこの子の瞳の中の俺の顔のいやらしいこと。

「間違って、香水をつけすぎてしまったようですね。本当は、私、こんな風ではありませんの」

レイヴェルはこの香りに効果がないことを知らないのだろうか？知らないで付けているのなら、それを教えたらどうなるのだろうか。

そんな興味を抱きながら、吐息のかかる近さで見つめ合っていると、彼女の唇の端がツツと上がるのが見えた。

俺はまたたまらなくなつて、レイヴェルを抱きしめていた。抱きしめて、彼女の耳の後ろ付近、一番香りの強い場所で深く息を吸う。

「俺も、これにあてられちゃったみたいだ。もう我慢できそうにない」
「……部屋に参りませんか」

「そうだね。なんだか、もうそうなってるみたいだ」
「もう？」

「グレモリーの夫婦の話」

彼女はこの香りの効果がないこと知っている。

でも、俺と彼女がこんなになっているのは、間違いなくこの香りのせいだ。

1-4 焼き鳥令嬢に串をさす (上)

将来、庶民出身だけどレアな特殊能力を持った淫乱ビッチヒロインに周囲の側近達ごとまとめて籠絡されて、親の決めた婚約者に婚約破棄をかましそうな顔をした公爵家の次男。

そんな俺だが、あの手の話の王子様はなんでもつたいないんだと常々思っていたものだ。悪役令嬢も淫乱ビッチヒロインも両方まとめていただいちまえよ！ 両手に花ぞ、と何度思ったことか。

というわけで、これから金髪縦ロール妹属性な婚約者令嬢をおいしくいただくと思う。

レイヴェルの膝上あたり、太腿の裏側に手を這わす。もう一方の手を彼女の背に回し、脇腹あたりで抱え込む。彼女の両手がこちらの首に絡まるように回され、耳に熱っぽい吐息を感じる。

うむ、いつかやってみたいと思いつつ、ついぞ機会のなかった男のロマンの一つ、お姫様だっこの完成だ。本当のお姫様相手にこれが出るとは、実に感慨深い。この何とも言えぬ「この女は俺のものだ」感。

「これやってみたかったんだ」

自然と魔力で肉体を強化している悪魔の筋力は、見た目と比例しない。その上、悪魔は飛行可能な種族だ。まだまだ成長途中のマイボデイでも、楽々出来るのでキツイところは何もない。

レイヴェル軽いし。激しくキツイのは、パンパンに張られた股間のテントの方だ。

「私もですわ」

俺の首をレイヴェルの腕がギュツとしてきて、軽く耳をついばまれた。はあはあと期待に満ちた声に、テントの盛り上がりがさらに盛り上がりそう。

この既に出来上がっている本日のメインディッシュは、フェニックス。この子の真ん中をグスリと串刺しにして、余すところなく味わい尽くすのだ。あ、よだれが垂れそう。いいや、これは飲ませてしまえ。

「んっ、んんっ……んんっ♡」

せつかく高まった互いの熱が冷めないように、すりすりちゅちゅと口や頬、舌を使ったスキンシップを交えつつ通路を進む。ヤリ部屋へと案内する使用人の背を時折見ながら、ゆったりと歩く。

歩きながら、視線で彼女の身体を嘗め回していることとあることに気づいた。

「この衣装は、レイヴェルが選んだの？」

「いえ、ライザー兄さまが……絶対喜ばれるからと、贈って下さいました」

細めのリボンが各所に配置され、一見可愛らしさを強調しているようなデザイン。だが、気づきを得て注意してみると良く分かる。これはとんだエロドレスだ。

今のレイヴェルはフェニックス家から俺宛に贈られたプレゼント。リボンをほどいていけば、少しずつその包装もほどけていくこの造り。えっちなだね！

これを用意させたライザー義兄上は、実によく分かっておられる。半脱げが一番燃えるとか語り合った甲斐があるというもの。

「ライザー義兄さんには感謝しないとな」
「もう」

どのリボンからほどいてやろうか。他はきっちり着ているのに、胸だけはポロンとでているとか、全体的に着崩れてこれから乱暴にされるんだなこの子感を演出するとか。

そんなことを考えている間に、部屋についた。中に入ると使用人の手によって、微かな音とともに扉が閉じていく。

最後にカチリと聞こえて、俺たちは二人きりになった。

「レイヴェル」

「はい」

ベッドの端にレイヴェルを抱えるようにして座り、壁に設置された大きな鏡に目をやった。そこに映っているのは、人間基準でも悪魔基準でもトップクラスの美形だろう少年と少女の姿。

改めて、幼いと思う。さすがに幼年とは言わないが、人間ならば少年時代の半ばくらいか。俺の悪魔生での初精通は早めだったらしく、

そこからムラムラと湧き上がるものをこらえてある程度の時間が経っている。レイヴェルの準備が出来たというのが、人間基準で考えってしまうとやはり早いなと思うのだ。

悪魔だからそこは違うのだろうけれど。いわゆる淫魔みたいな連中は、人間のそちらの趣味の要望に応えるために幼い容姿のままの者もいるとも聞く。ちなみに稼ぎは大人の姿の者より平均して高いらしい。

なんにしても今更止める気はないが、なんというかその辺りの生育というか性育事情に興味はある。

「大丈夫か？ 今更だけど」

「ええ……その、問題ないと言われていきますわ。婚約後のことを考えていたら、そのイメージで身体に変化があったので」

このレイヴェルの説明、父上から聞かされた時はそんなものかと聞き流してしまった。だが、同じ悪魔であるはずの俺自身の成長具合と随分異なる。

俺は生まれてすぐのころから意識があつた。前世での成人男性の意識だ。そして普通の赤子と思われているのを良いことに、母上はもとより、義姉上やたまにやってくるセラフォルーさんにも無邪気ないたずらを敢行していたものだ。

いやらしいことを考えていたら性的な成熟が加速する。これが正しいのなら、俺のアソコは赤子の頃に既にググつとなっていたはずだ。

そんな俺でもやや早い程度だったのに、レイヴェルは前世もないのに俺と大差ない性長速度。ふむ、興味深い。

魂まで純血のエロ種族は、そっち方面もエリートなのかをきっちり確かめねば。

「はあ、ん、ふう、ああ」

とりあえず、着せたまま彼女の身体の弄り回す。胸はそんなになんと言わなければならないか、見た目に反してあると言わなければならないか。フニフニして、これからの成長に期待したい。いや、このおっぱいは俺が育てる。

小柄な女の子を後ろから抱えて、両手を使って控えめな胸を服ごと

揉んだり摘まんだり。しばらくその感触の鏡の中の光景を楽しんだら、片手をレイヴェルの下半身へと滑らせた。彼女の腰の下、それから太腿辺りの結び目をほどき、さらりとした布地をかき分けると隙間から肌の色がのぞく。

指先と手のひらで脚の感触を楽しみ、腿の内側に手を滑らせ割れ目の方へと滑らせると、

「濡れてる」

「ああ……恥ずかしいですわ」

レイヴェルは両手で顔を隠しながら、尻をこちらの股間に押し付けるようにして腰をくねらせてくる。下着だけではなく服の内側の布地までぐっしよりとさせている、こんなエロい子が一朝一夕で育ったとは思えない。

「こういうことのイメージを思い浮かべたのって、本当に婚約の話が出てから?」

黙っていやいやとこちらの股間に攻撃してくる、不死鳥娘。その肉の割れ目を下着の布地越しにまさぐって、女のスイッチを探す。

見つけたそれをきゅつと摘まんだ。

「ひんっ♡」

くにくにと絹らしき布でこすりあげる。

「ハアツ、ハアツ、ツヒイ、あ、ダメ、それダメ、あっ♡」

「もつと前からじゃないの?」

いくらエロ種族でも数か月でこんな風にはならんだろう。

「豆をいじる手を止めて、胸だけをふにふにとしながら、もう一度訊ねた。」

「そ、その、兄さまが……」

「あ?」

「ああっ、ちっ、違います!」

まさかライザーめ、妹に手を出して開発していたのかとカツとなりかけたところで、慌てた調子で否定された。思わず怒りの籠った声が出てしまったらしい。

中指で縦の裂け目を下からなぞってピンツと弾く、それを繰り返す

て心を落ち着ける。耳から入ってくるハートマークの付いていそうな声が実に心地良くて、いやらしいされる。

「ふっう♡ 小さな頃に、んんっ♡ 兄さまが、アツ♡ 庭などで、やん♡ 下僕たちとお、シテいるところ、オツ♡」

「見ちやつたんだ？」

「ハッ、い♡ それツで、その、それツン♡ なんつど、も」

おっぱいふにクリピンピンをやめて、レイヴェルの顔をあごを掴んでこちらに向かせる。上気してトロけた表情の婚約者の瞳をじつと覗き込む。

「覗いてた？」

「はっ、い……」

「覗きながら、いじつてた？」

こくり、と頷く我が婚約者殿。エロい子だね。俺はそういうの好きです。

半開きの唇に吸い付いた。抱きしめながらしばらく舌を絡め合っている、少しかたくなっていたレイヴェルの身体から力みが抜けるのを感じた。

「どんなのを見てたの？ 最近だと」

「屋敷のあまり使われていない通路で、雪蘭が壁に手をついていて……」

「雪蘭ってあのチャイナっぽい格好の人？」

「ええ、その雪蘭を後ろから兄さまが」

レイヴェルを抱き上げ、鏡の前に運んだ。そして、その鏡面に両手をつかせる。

こちらの意図を理解したのか、レイヴェルはくいつと尻を突き出してフリフリと誘って来た。

「後ろからっ？」

「くつついて、のしかかるみたいにして」

くつつけて、のしかかった。すると自然に、いつの間にか、勝手に俺の手は彼女の胸をいじり始めていた。

「その、服のっ♡ ずらして、手、入れて、その」

もう布越しでは我慢できないらしい。片手を鏡について自重を支え、残った手でレイヴェルの首元や脇のリボンをほどこいていく。

もどかしくて、ビリツとしたくなるが、我慢我慢。胸まわりを全部ほどこき終わると服がはらりと落ちて、下着に包まれた彼女の胸が露わになった。

さて、この胸元からヘソ上あたりまで隠していそうな下着はどうやって脱がせばいいのか。種類の名前もちよつとでてこない。少しだけ、ウエディングドレスを思い出させるデザインだ。

「真ん中の、結び目を」

レイヴェルの誘導に従って、鏡を見ながら作業すると、発展途上のふくらみを隠していた部分だけが外れた。まだこれからのふにふにおっぱい、その先はすつかり尖ってツンとしている。ふにふにつんつんくりゆつくりゆつ、残された部分の下着が彼女の胸のまだこれからのふくらみを強調していて、たまらなくなる。

「ああっ♡ 下もお♡ そつちも、ぐちゅぐちゅって、してましたあ♡」

また腿の横から差し込んで、パンツの中まで手を突っ込む。ああ、これは確かにぐちゅぐちゅだ。

「ここをいじってた？」

「そこ♡、そこもお♡」

「こつちもっ？」

「うん、ううん♡ かたくなるとこおくだあい♡」

ああ、爆発しそうだ。レイヴェルの尻にこすりつけてる股間のテントの中が、先走った汁でぬるつとしてきている。

「それから？」

もう我慢できない。早く続きを言え。

「それ、かつらあ♡ ペろって、めくって、後ろから……」

「後ろから？」

「あっ♡ これ、これえ♡」

レイヴェルの尻の感触が、早く早くと急かしてくる。あああ、もう続きなんか聞かなくても、どうでもいい。

裾の短いチャイナドレスと違って、ロングスカートはすぐさまぺろつとは行かない。それをなんとかまくり上げると、小さいなりのくせによだれを腿に伝わらせているメスが視界に入った。

もう限界までになっていると思っていた肉棒が、さらに硬く膨張した気がする。ずっとバクバクしていた心臓が、もうよくわからないぐらい鳴っている。

いつもは何気なく脱いでいたズボンを何度か失敗しながら床に落とす、下着も脱ぎ捨てた。

「はあ、はあ、はあ……」

鏡に手をついたまま、振り返ってこちらを見ていたレイヴェルの視線。それが妖しく濡れて俺の振り返ったモノを見つめている。

「それ、で、雪蘭を、それ、でっ」

爆発しそうに硬くなったモノを彼女の尻や裏腿にこすりつけながら、秘裂を隠す最後の布を外しにかかった。横にあるヒモをほどくと、スルリと濡れそぼった最後の障害が落ちていった。

「ぐしゅって……」

1—5 焼き鳥令嬢に串をさす (中)

「んっ、ふう♡」

お嬢さまのお求め通り一気に「ぐしゅっ！」とはいかなかった。後ろから差し込むのはなかなか難しい。慣れていけば簡単なのかもしれないが、あいにくどちらも初心者だ。ただ、外れた先にイトコロがあつたらしく、彼女が気にしている様子はない。内腿のすべすべとか、まだ生えてないところをこすり上げたりとか、この感触だけで出てしまいそうだ。

むん、むんむんむん。耐えながらなんとか上手く串刺しにできないかと試してみるが、やはりなかなか。俺は前世で経験があるといっても今の身体では初めて、レイヴェルも覗き見ていたことがあるだけなので、上手く合わせられていないのだろう。

「ああ……♡ いじわるなさらなくてくださいまし」

どうやら焦らしていると思われるようだ。焦ってるのはこっちだとも知らず好き好き言いやがって、この淫乱処女め！

くそ、大好き。絶対ぶち込んで気持ちよくしてやるから待ってろ！

「いじわるじゃなくて、なかなか上手く……」

甘え媚びた艶っぽい声、揺れる尻肉とその間のキュツとした穴、濡れてよだれを垂らす太腿、こすれて得てしまう感触。

「えあ♡ ……たしか、こんな風に」

俺が焦っている、レイヴェルがぐつと背をそらし体勢を変えた。それまで支えにしていた両手を自由にし、顔と肩を鏡面に押し付け身体を預ける。

それから、空いた手を後ろに回し自身の尻を左右に開く。

「うわ……えろ」

生くぱあに、思わず声がでた。えろ。何この子、えろ。好き、絶対嫁にする。

「あん、恥ずかしいですわあ♡ 前に……」

「これも、見たの？」

「は、い……ああ、もう♡ 双子のんんう♡ ああつ♡」

ぐしゅつと突き刺した。ぬめる女体の中に、俺自身が入っていく。まだ入口から少しだが、気持ちいい。爆ぜそう。

「はあ♡ はあ♡ ああ♡」

彼女の腰を両手でしつかりと捕まえ、もう外れないようにする。

「レイヴェル、レイヴェル、レイヴェル。中に出したい!」

「はいっ、ああ♡」

「ごめん、一気にいく!」

「はいっ! んんっ……ああいんんふう、はんんっ♡」

バチンと肉と肉がぶつかる音がした。ぐしゅりと液を散らし、頭の中にドスンと奥にぶつかった音が股間から響いてくる。

ぐちゅり、ぶりゅぎゆるぎゆるぎゆる。ケチャップ、いやマヨネーズか、チューブから粘性のある汁を勢いよく押し出したときのような音が聞こえた気がした。

ああー、出ている。注いでいる。この子の膣の突き当りに塗り付けている。

「んんっ♡ んんっ♡」

ぐいぐいと腰が勝手に前に出て行く。両手で掴んでいるレイヴェルの腰が暴れるのを押さえつけ、彼女を鏡に押し付けていく。

もつと奥へ、もつともつと奥へと、ぐりぐりと押し付けながら、情けなくも一突きで吹き出ししてしまったものを注ぎ続けた。

「はあ、はあ……はあ♡」

再び手を鏡面についたレイヴェルがこちらを振り返った。なんだか情けない気分になっている俺を、彼女は蕩けた眼差しが見つめてくる。

その顔に少しだけ浮かんでいる痛みのシグナルに、俺は情けないと嘆くよりも先にすることがあったと思いついた。

「すまない。我慢できなかった。もつと優しくしたかったのに……」

「大丈夫ですわ。フェニックス家の者は、痛みに鈍くなっておりますから」

たとえ不死身の肉体があつたとしても、痛みで気絶してしまつては

意味がない。だから、フェニックス家の者は、その魔力の特性を活かせる精神と肉体の構造をしているのだという。前にそんな話を聞いたことがある。

まだ萎えていない、あるいはフェニックスの愛液に浸っている状況に興奮して即座に勃起復活したモノ。それを奥まで挿したまま彼女の頬を撫ぜた。

「しばらく、こうしていいかな」

「はい……ん」

激しく前後したくなってくるが、ここは我慢とぎゆうと挿したままにしよう。抜いたり少し引いたほうがいいのかもしいが、この方が我慢できる。

と、動かずにいるつもりだったが、身体が勝手に気持ちよくなりたいという。

「んう♡ ……ふう♡ ……はあ♡」

肉棒の先端で円や八の字を描く様にくりくりと動かしていた。ゆっくりゆっくりレイヴェルの穴の突き当りに先ほど注いだ白いものを塗りこめていると思うと、

「あっ♡ おっきく♡」

硬度を取り戻したモノは、心なしか爆発寸前だった先ほどよりも大きくなった気がする。でもまだしばらくは、このままです。

「はう♡ ふああ♡ んふう♡」

レイヴェルの甘い吐息と、俺の荒い息、それから結合部から響く微かなぬめりのある水音。

どれぐらいそれを堪能していたのだろう。

「はあ……あの、もう♡」

少しだけこちらに振り返ったレイヴェルの流し目に誘われて、腰を前後させ始める。

うっかり抜けないようにゆっくりと引いて、ドスリと突き立て、またゆっくりと引き抜く。それを繰り返す。

「ああああ……ひうん♡ んんうう……あんっ♡ お、ふうん……ああうっ♡」

少し慣れてきたので、抜くときにカリ首を引つ掛けるようにしてみるとこれがまた気持ちいい。お店でゴム有だったときとは大違いだ。

「レイヴェル」

「はひ♡」

「いじつてたのはこの辺り?」

「んんうううう♡ あっ、あっ♡ そこ、そこですわあ♡」

完全に抜けてしまわないように引つ掛けながらギリギリまで腰を引き、今度はレイヴェルが自分で弄り回していた場所。彼女の腹側の入口からその少し奥までをぐりぐりとこすりながら入れていく。これも気持ちいい。裏筋の辺りをこすりつけているので当たり前か。

そこを過ぎると肉棒が、なんだかこう、たわんだような気分になるので、グイツと一気に奥まで突き込んでピンと伸ばしてやる。

「んんっ♡」

レイヴェルは一番奥よりも入口辺りの方が好きなような気がする。反応が違う。

でも、俺は最奥にグリグリと滲み出る汁を塗り付けるのが興奮するので、これはやめない。俺の液で染めてやるといった気分だ。

一通りぐりぐりと奥を先端で撫でくりまわし、またぐにゆうううと引き抜いていく。

「あーあああ♡ あっ♡ あっ♡ んのおあ♡ ……いやうん♡

ううん、はあ♡ あ——あああ♡ アアアん♡ はっああっ♡ ……

んっ♡ んんっんっ♡ ほおあー♡ はあっ♡ あがあう、アっ♡

……うんう♡ はあ、はあっ♡」

そのパターンを何度も何度も繰り返した。

「レイヴェル、どうだ? 俺はすごく気持ちいいけど」

「はひ♡ 私も気持ちいい、ですわあ♡」

「痛かったりはしない?」

「ええ、平気ですわ。ああ、でも前の方をもっとくださいませえ♡」

「ここか」

「ああああっ♡ んっ♡ ンあ♡ そこお♡ そこ、もっとお♡」

やはり自前で予習してただけあって、ここが大好きらしい。

「それなら、こういうのはどうかな」

「んああああああつ♡♡」

彼女の大好きな場所をゴリゴリと責め立てながら、片手で腹を押してやる。俺のモノの圧と感触を逃がさないように、

「あつ♡ ダメつ♡ だめえ♡ それダメつ、はああつ♡ イヤ、いやあつ♡ だめつ、コレすごいいいいい♡」

何がダメダメえだ、腰振って擦りつけてくるクセに。もつと両側から挟み付けてやる。

レイヴェルの中に入っている俺自身を、ぐにぐにといじるようにして、彼女の腹肉を揉みしだく。ついでに指の腹で、ぷっくりと膨れたメスの芽もゾリゾリこすっておく。

「ああつうつうつ♡ うぐうぐうつ♡ おあつ♡ あおつ♡」

「すごい！ くう……締め付けてくる。イイか？ これがイイのか？」

レイヴェルの膣が俺のモノをぎゅぎゅう圧迫してきた。腰が抜けそうになるが、暴れる彼女の腰を残した片手でギリと掴んで逃がさない。ここで抜けてなるものか。

「あつイ♡ すごいイっ♡ あ、ああつ♡ い、やあ♡ ああは♡
おあ、ああはつ♡ う、うううぐゆ♡ んつつうダメえ♡ あつい♡

あつい♡ あついいっ♡ いいいいっうつつ♡♡!!」

ビビクウツと痙攣したようになって、レイヴェルの身体から力が抜けてくたりとなる。

しまった！ 責め立てるのに夢中になって自分のタイミングを逃してしまった。寸前の彼女の痴態で昂りまくった衝動を吐き出すタイミングを！

「んんんっ♡」

はあはあと息を吐き、とろんとした顔になっているレイヴェルの奥に先端を押し付けた。

レイヴェルの力が抜けているので、差し込んだ肉棒と腰を抱えた両腕で彼女の体重を支えている状態だ。レイヴェルがずるつと鏡面を滑り落ちたらチンチン折れそうでちよつとコワイ。でも、俺は出さず

に抜きたくないのだ。

「レイヴェル、少し飛べる？」

「はあい♡ でも、私の羽は……」

「大丈夫、少しぐらいなら燃えないようになってるから」

ほとんどの悪魔の翼はコウモリのような形状のものだが、フェニックスの悪魔の翼は違う。燃え盛る鳥のそれなのだ。

当然だが、性交が盛り上がったたり喧嘩などをして我を忘れた際に備えて、この部屋は防火仕様となっている。しかし龍の鱗も焦がすという不死鳥の本気の炎が相手だと、さすがに厳しい。俺の消滅魔力の方が対策が非常に難しいのもつとヤバいが。

夫婦喧嘩で山々が消し飛ぶ。それが悪魔の貴族というものだ。ただエロいだけではない。

「それでは……少しだけ」

彼女の背を見つめる俺の目の前に、小さく炎が吹き上がり可愛らしいサイズの翼となった。

キューピッドちゃんかな？ 触れたら加熱クッキングされるけど。

不思議なのは、着用している衣服などは燃えないことだ。謎である。まあレイヴェルが飛翔するたびに全裸になっても困るので構わないが。魔力はイメージ、だからだろうか。

「俺はレイヴェルの一番奥が好きなんだけど、しばらくそつちでいいかな？」

「そう、なんですの？」

「ああ、なんだかこう一番繋がってるって感じるから」

やはり注ぎ込むなら一番奥だ。だって発射し始めると腰が勝手にグイグイと前に突き出て行くのだから、これはもう本能だろう。

「あっん♡ お好きなようになさってくださいまし。そこもお、んふう♡」

レイヴェルが浮いてくれたので、実に軽い。これなら股間のモノだけで支えていられる。逆に飛び上がって逃げられないように捕まえておかないとな。

「はああ♡ はああ♡ ああん♡ んうふ♡」

片手で捕まえて、もう一方の手でレイヴェルの好きなどころを押さえて動かし肉の幹に擦りつける。上上下下、左右左右、クリクリ。そうしながら、俺は彼女の最奥を槍でトントンと小突いたり、円を描いてなぞったりして楽しんだ。ゆっくりゆったりリズムだ。そうしないと爆ぜちやうからね。

やはり「一緒にいい、一緒にいい」というのは憧れる。

「こっちは気持ち良くない？」

「いええ♡ そこも、なんだか、だんだん、んんうっ♡ よくなってえ♡」

「それなら、良かった」

「この優しいのすきい♡」

「さっきのはダメだった？ ダメダメって言ってたけど」

「すきい♡ ……でもお、これも好きですわあ♡」

なんだか無性にキスがしたくなってきた。こうぎゅっと抱き合っで、ゆっくり動かし合いながら、ベロベロ絡め合いたい。

バックの欠点だなこれは。不死鳥やドラゴンなケダモノ的にはこの後背位ツクスが正常なんだろうけど。

でも、抜きたくないんだよなあ。いや、正面からなら、たぶんさつきほど苦戦せずに挿入できるのだろうが。

「なあ、レイヴェル。このままグルッと回って向き合えるかな」「えっと？」

「抱きしめて、キスしたくなった。でも、繋がったままでいたい」

「あっ、んんつつっ、ふっう♡」

おおっ、またギユツギユツとキツくなった。

「では、離さないてくださいませ♡」

待て、という前にレイヴェルが回り始めてしまったので、チンチンがぐりゆとねじられるのを我慢して背をそらす。ちよっと、いや、結構痛い。けど、キモチイイ。

「んきやあん♡」

俺の頭にレイヴェルの脚が引つ掛かりそうになったので、それをなんとかやり過ぎし、なんとか正面から抱き合う形に。

「はぁん♡ 旦那さまぁ♡」

ひっしと抱きついてくるレイヴェルの腰を抱え、もう一方の手で金の髪を撫でる。すりすり頬を寄せてくるのでそれに応えながら、股間の槍をトントントンと浮かして突いてとやって振じった皮を戻す。ちよつと涙でそう。こんなアクロバット、人間じゃあ厳しかったね。

「んん、んにゅ、ちゅっ、ちゅ♡ くちやちゆりゅ♡ んんうふぁ♡」

ちゅっちゅレロレロ、ぎゅうぎゅうギョツギョツ、スリスリハアハア、トントトントンといちやつきながら、彼女に手伝ってもらい上着を脱ぎ捨てた。相手が文字通り羽のように軽なお陰でこんなものなるとかなる。裸になったから、レイヴェルの服からぶにとこぼれた胸と直にくつつくのが実にいい。

奥の奥をこすり、彼女のあちらこちらを撫で練り回しながら「好きだ、愛してる、離さない。絶対結婚しよう」などと練り返し囁いて、お互いを昂らせていく。

「ああ、好きです。私も♡ 愛してます。愛してますわ。はい、ああ、嬉しい♡」

正直、愛とかよく分からない。単に性的な興奮でちよつとキているだけだろう。どちらも。

しかし父上が言っていたことは本当だったようだ。最初の相手には、想いが強くなるものという話だ。執着心とか独占欲とか、そんな気持ちガムラムラと高まっていくのを感じる。

もうこの子だけでいいんじゃないかな？ そんな気持ちすら湧いてきているのが確かなところ。俺のハーレム王の道は、どうやらその道の最初に最難関が待ち構えていたらしい。兄上はきつとこれに敗れたのだ。敗れて屈服し、メイドさんに叱責される魔王プレイに走ったのだ。

だが、俺のハーレム道はこんな初めてオマンコなんかには負けない！ ああ、レイヴェル好き。ずっと抱きしめていたい。このぐちゅぐちゅしたままでもいい。愛してる。

「レイヴェル、レイヴェル、レイヴェル。一緒に、一緒にイクと気持ちいいらしいんだ」

「はい♡ 一緒に？ 一緒に♡ ああ、ああ♡ んちゅ、めりよん、んっふ♡ うっああ♡」

俺はもう寸前だ。レイヴェルはどうだろう。絡めた舌を離し、見つめ合うと、うるんだ瞳でこくり頷いてくれる。

「ああ、ああ、ああはあ♡ すごい、なにかジワジワしてたのが、いっぱい♡ なつてきて♡ ああ、もう、すぐ、あ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ んふ、んふう、んっふ♡ あ、もう、もう、もう、もう、もうっ！！」

「一緒だ！ 一緒だぞ！ ずっと」

「はい、はい、ずっと一緒ですわ、ずっと♡ ずっとおっ♡」

彼女の頭を引き寄せて唇を痛くなるくらい重ね、腰を抱えていた手をこちらも強く強く引き寄せる。

おお、気持ちいい。今日一番、いや前世含めて一番良い。両手と両足を使って、もう離さないとばかりに抱き着いてくる女の身体が小刻みに震えている。俺もきつとそうだ。長い時間かけてぐっぐつと溜まりにたまっていたものを、勢いよく彼女の中に叩き込んでいる。

心も肉体も、カツと火が付いたように燃えたまま。その温度が一向に下がらない。実際視界も真っ赤だ。俺とレイヴェルのオーラが混ざって膨れ上がろうとして、でもギリギリ弾けずに、超高密度で二人の周囲を覆いつくしている。そんな気分だ。

「はあ、はあ……」

「はあ、ああ……」

どれぐらいこのまま一つにくっついてしまえばかりに抱き合っていただろうか。ふとした拍子に両方の力りきみが抜けた。

「今までで一番良かった」

「私は初めてでしたけれど、こんなに気持ちのよいものだったのですね」

目じりに涙をためて、ほっこり笑顔のレイヴェル。そんな彼女を抱えながら思う。

なんとというか物凄く、ジャストフィットしていた。これ以上ないのではないかという凸と凹の重なり具合だ。

いや、ホントになんだこれ。セックスってこんなに気持ち良かったの？ 前世で経験したのは何だったんだ!? ってくらい違う。

ああ、そうか。これが、純血の貴族悪魔なのか。

「俺さ、自分もレイヴエルも気持ちよくなれたらいいってずっと思ってた」

「私もですわ」

「そっか、なら多分……ふたりともそういう形になったのかもしれない」

悪魔の肉体は魔力によって変化する。特に純血の貴族悪魔はそれが顕著らしい。

そして魔力を動かすのは、その者の気持ちとイメージ。性交している両者がそうなりたいと想い合っているのならば、一番気持ちよくなるように身体も変化するのだろう。だって、凄かったからそうに違いない。

「純血同士の結婚が推奨されているのって、コレもあるのかな」

「えっど？ ちよつとよく分かりませんわ」

純血同士にこだわる爺さん方（見た目はナイスミドル）の気持ちがちよつと分かったのかもしれない。純血の上級悪魔がこんなエロのエリート種族なら、そりゃ他の種族からの転生悪魔や下級悪魔なんぞ、下賤なエロ下等種族と思うのも仕方ない。

気持ちいいは、全てに優先される。少なくとも天使共が真っ黒に染まって墮ちるくらいには重要なのは確か。エロは世界最大のパワー。エロス神はこの世で一番偉大な神。

きつとあの爺さんたちは、自分と嫁さんの種族が大好きなだけなのだろう。言い方が回りくどいけれど、「ワシはうちの嫁さんが大好きなんだよお！ お前らもそうしろ。純血同士は実によくぞお！」と言っているのだと考えれば、可愛らしくさえ……思えないやつぱり。

「結婚しよう」

「はー」

思わず言った言葉に彼女が頷いた。その拍子に、彼女の目じりた

まっていた涙がこぼれる。

俺は何気なくそれをすつと口に含んだ。それが何かのトリガーになったのか、途端にムクムク膨れ上がるエレクチオンの槍。

「あっ♡ また元気に♡」

彼女の中でふによんとしていた、如意棒はもう元気いっぱい。そうさ、もう100%ヤル気。

レイヴェルもまだイケるらしい、目を見たら分かる。だってこの子エロいもの。エリート種族だから。

「そういえば、ベッド使ってなかったな」

「可愛がってくださいまし」

俺は翼を広げると、レイヴェルを大きなベッドの中央に横たえた。

着衣半脱げツクスは大変満足した。未だかつてない快感だった。

だからまずは、脱がそうか。

1—6 焼き鳥令嬢に串をさす (下)

子供の頃、誕生日やクリスマスでやはり気になるのはプレゼントだった。綺麗な包装紙に包まれ、リボンで括られたそれ。紐をスルリとほどき、紙を丁寧にはがす。そうして出てきた中身を見て、やったあ！ ありがとう！ と喜ぶのだ。

このとき、俺は丁寧に開ける派だった。せつかくもらった物だ、大事に扱っていると思われたい。だけど、ビリビリと破いて素早く中身を確認したいという気持ちもおおいに分かる。

さて、今俺の目の前には「さあ、どうぞ存分に食べてくださいませ♡」と言わんばかりというか、実際言ってくる綺麗で美味しく可愛らしい者が用意されている。

そのちよつと我慢できなくてヤツてしまったので、既に半脱げ状態になっている包装をこれからどうはがしていくのか？ それが問題だ。

大きなベッドの白いシーツ。その真ん中に仰向けで寝かせたレイヴェルは、ポーっとなった表情でこちらを見ている。俺はもう全裸になっているので、今更だがやや恥ずかしい。

彼女の視線はこちらの身体のあちこちに飛んだ後、結局は股間の昂り反り返ったそれと顔を行き来していた。ついさつきまで、「好きだ、好き好き、愛してる、愛してるよ。結婚しよう、結婚しましょう」と言い合いながらも気持ちよくなったばかり。本当に好きになつてくれたのならいいのだが。

「んっ♡」

軽く口づけた後、彼女の足の方に移動して膝立ちで見下ろす。するとレイヴェルは顔を両手で覆いながら、両脚をすつと開いた。

今更になつてレイヴェルは「恥ずかしいですわ♡」と顔を隠す。けれど、むき出しになった胸のツンとした尖りも、初めての行為の証が垂れるスカート奥の割れ目も、どちらも見せつけてくる。誘ってるのかな？ 誘われてます。完全に。

彼女の開いた両脚の間に入り込み、どこから剥いていこうかと考え

つつ、太腿を撫でまわした。

「ああ、なんだかとてもいやらしい触り方ですわ」

「まあ、いやらしいことしてるから」

片手でいやらしい汁にまみれた細い脚の感触を楽しみながら、もう一方の手で肉棒をくいっと腹の方に引き寄せる。そしてデコピンの要領でペチリとレイヴェルの中心にぶつけた。

「ひゃん♡」

ペチン、ペチンとくり返し、クリに打ち当てるとそのたびに甘い反応があつて実に楽しい。

「やあん♡ あんう♡ んあん♡」

ピクンピクンと彼女の腰が浮く。その運動によって膣の中からいろいろと混ざった白い粘液がとろりとろり湧いてきて、それを俺の肉竿が打って淫靡な水音と共に飛び散った。

彼女の下腹部に広がる白っぽい液。それらは広がったスカート下の布にも落ちて、しみ込んでいく。

もう、この汚れは落ちないな。

そう思うと、レイヴェル自身をも俺が汚し染め上げているようでゾワリとくる。

「んんう♡ いじわるしないでえ♡」

「うん、ごめん。レイヴェルは可愛いな」

謝りながら、彼女の顔を隠す手のひらに口づけを何度か落とす。すると彼女が手を退けて応えてくれたので、舌を絡めながら金の髪に指を通す。サラサラだ。

彼女の手も俺の背と髪を撫でていた。たぶんこつちもサラサラだと思う。指と指の間に女の髪を通すのは気持ちいい。でも、普段はセツトが崩れると嫌がられそうなので、こういうときにこそ存分に楽しみたいものだ。

舌はにゆるにゆる、指の間は髪でサラサラ、さらにもう一方の手で太腿のつるつるを楽しむ。互いの性器同士を押し付けこすり合っ、ドロリとしたものを塗り付け合った。

このまま、いつまでもこうしていきたい。そんな気もしてくるが、そ

れでは先に進まない。

「ちよつと起こすよ」

「えあ♡ はい」

唇を離し、髪を弄んでいた手で彼女の後頭部を支える。そうしてグイと態勢を起こした。

レイヴェルの脚の下に自身の脚を潜らせ、彼女を上に乗せる。ちよつと腰を引き寄せてやると、まあ対面坐位に近い格好になった。挿入してはいないが。入れたら剥く前にまた発射までいつてしまう自信がある。

「この中、どうなってると思う?」

翼でバランスを取りつつ、二人のくつついている股間を目で示す。

「うんう♡ その……」

レイヴェルのスカートに隠されたその下は、ぬるぬるのぐちよぐちよだ。レイヴェルはまだあまりその目で確かめていないだろうが、感触でそれは分かっているはず。

口にしづらそうにしているので、腰をゆすつて肉竿でぬるぬるを広げてやる。

「あああ♡ そのお……」

分かっているけれど、なんと表現していいのかわからない。そんな困ったような、それでいてこの先を期待する情欲に濡れた表情を浮かべる彼女。

その頭を引き寄せ、耳を軽く噛む。

「いいよ、言わなくても。見てみようか……レイヴェルはそつちのりポンをほどいて」

「はあ……はあ……わかりましたわ♡」

ちよつと上体を離して股間を見ると、俺のモノがレイヴェルのスカートを持ち上げて山を作っていた。こちらから見ると、まるで彼女が勃起しているようにも見えるのが少し面白い。

翼を広げてバランスを取りながら、スカートの右側と左側をそれぞれほどいていく。初めての共同作業は、精液と陰液まみれの互いの秘部を見ることでした。うん、ひどい。

でも、俺もレイヴェルもそれで興奮しているのだから良いだろう。

「あああ！　こんな、こんなに」

「うわ、すごい」

解けてばらけた布をはらりと払うと、その下にはひどく淫靡な光景が広がっていた。俺はさつき見たけれど、レイヴェルはまだこれをまじまじと見てはいなかったと思う。胸ポロリなノーパン状態ではあったけれど他はそのままの着衣ックスだったからね。

「あつ♡ 私ので、こんなに……♡ ううつんっ♡　こんなに汚して」
レイヴェルは自身の垂らす淫蜜の行く先を見て、唇を淫らに歪めた。その悪魔らしい表情が実にそぞる。

「レイヴェルの愛液でぐっしよりだ」

「はあ♡　ふうう♡　ごめんなさい。　こんなになっているなんて……んっん♡」

両手で彼女の尻肉を掴んでぐっつと引き寄せた。そしてそのままベッドのスプリングを活かして肉竿を上下に揺らす。すると彼女の割れ目から溢れ続けている液と、さつき俺が出したモノ、それから肉棒の先端から滲んでいる汁が二人の身体の間でにちやにちやと絡んでいく。

「こうしていると、レイヴェルを俺のものにしたって感じがする」

「んー♡　んー♡　んふう、んふう♡」

ぎゅっつと抱き着かれた。背中に回った彼女の両腕から、腰に絡む彼女の両脚に込められた力から、「これは私の」という彼女の主張を感じる気がする。俺のうぬぼれでなければだけど。

こちらの首筋に顔を埋めて、吸血鬼のように吸い付いて、喘ぎをもらす。そんな彼女の背に手をまわした。もそもそと撫でまわして、ほどけめを探る。

後ろには無かったのかな？　では横か。

最初に胸をいじろうとほどいた脇あたりのリボン。その続きを手探りで解いていく。難しいな……。

「やんっ♡」

やはり寝かそうと思いき直して押し倒した。そういったお店では女

の方が動いてくれる対面坐位が一番好きだった俺だが、正常位が嫌いな訳ではない。やや抜けやすい気がして難しいバックだって大好きだ。

よく考えたら、駅弁は前世含めてきつきが初体験だったな。悪魔。パワーすごい。空飛べるとかさ。

「上も脱がすよ」

「はい♡ こっちしますね♡」

今度は何も言っていないのに、レイヴェルは俺が解いている側ではない方を自主的にいじっている。やり難そうだが、その積極性やヨシ。ホントは俺が自分でやりたかったけれど、ヤル気をそぐのも良くない。ちよつと剥いてはツンツン、スリスリ。ちよつと剥いては、ねろねろね。とそんな感じで弄ろうと思っていたのだが。

悔しいので肉棒で、女のスイッチ付近を刺激しておく。

「そんっ♡ なぁ♡ うま、く♡ できませんわぁ♡」

レイヴェルは上手く解くことが出来なくなってしまったようだ。俺の楽しみを奪った罰だ。存分に楽しむがいい。

まあ、こっちも腰動かしているせいで、とてもやり難いのでお相子だ。

「もう♡ ようやく外せましたわ」

女の子が自分から脱ごうとしているのを、気持ちよくさせて邪魔する。それでも続けようとするので、キスしたり脇から腰辺りを指でなぞったりしてさらに邪魔をする。

それでもなお頑張つて脱いでくれたレイヴェル可愛い。とても楽しかったです。結婚しよう。

「んうー♡ そんなこと言っても誤魔化されまわせんわ」

「でも楽しかったよね」

「うふ♡ それは否定できませんね」

イチャついている内に、なんだか少し話し方が気安くなった気がする。やはりボディタッチは重要。ただし美形に限る。

さて、それではこの前後に分かれてパーズできるエロ服を剥ごう。

ペロリ、これはおへソ。

フェニックスは不死鳥なので、もしかしたら卵生まれなのかと思っ
ていた。でも、どうやらそうではなかったらしい。可愛い、舐めたい。
俺は自分の頭が随分とバカになっていることを自覚しつつ、おっぱ
いからへソまでの部分だけを下着で覆った婚約者に襲い掛かった。
この下着、確かビスチェとか言ったような気がするな。むやみにエロ
く見える。

「やあん♡ くすぐつ♡ うううん♡」

乳房太腿は大事。エロス神もそう言っている。だが、俺はおでこも
耳も、うなじも目元も頬も、唇も首筋も、鎖骨もそこから徐々に膨ら
みへと近づいていく辺りも好きだ。肩にだって唇と舌を這わせるし、
脇の下に鼻を突っ込んだりもする。恥ずかしがって身をよじるとこ
ろをペロリとするのもいい。

脇から腰骨までのライン。これもたまらない。同じくらいの背丈
の人間にはちよつとなさそうな、大人の女に近いその悩ましいライ
ン。

「あつあつ♡ んんーう♡ はあつ♡ いやあ♡ いいい♡」

お腹も好きだ。こうぽよぽよとしたくなる。キュツと吸い付いて
みたり、頬をすりつけてみたり。

自分でも少しばかり変態的かと思ってしまったが、まあこれからの
長い悪魔性活、一万年もあるのならばいずれ全部味わうのは確定だ。
それが今でも問題あるまい。

レイヴェルも悦んでいるようなので、なおさら無問題。気持ちいが
正義。俺、悪魔だけど。

「あつん、そんなにいい♡ なめ、たらあ♡」

「レイヴェルは可愛くて美味しいな」

「んふう♡ ああ♡ わた、しい♡ 食べられ、てえ、しまっ、のお♡

……です、ね♡」

「次は、背中を食べたいな」

「はあい♡ 味わってくださいませえ♡」

自分でも何を言っているのかと思うが、なんとなくそんなノリだっ

た。もうなんでも楽しくて気持ちいい感じだ。レイヴェルに酔っぱらっているのかもしれない。

くるりと回ってうつぶせになった彼女の上へのしかかる。ベッドとの間に手を差し込んで、おっぱいもみもみ。

「くりっ♡ そっ、くりっ♡ つてえ♡」

くりくりも無論する。むしろ、しない理由が存在しない。

背骨にそって撫で上げたり、舐め上げたり、あちらこちらに唇を落とすとしていく。

「はぁぁー♡」

ゾクリつとしたようにレイヴェルが小刻みに震えた。この炎の翼の出る辺りが良いのかな？

「んっはぁぁ♡」

見たところ人間のそれを違っているようには思えないが、やはり悪魔の背には特殊な器官があるのかもしれない。人外種族の人と異なる部分は性感帯ってそれ、よくある話だから。

手で胸とそのぽちちを、舌で羽の付け根となる場所を刺激する。

「あっ♡ ダメっ♡ だめえ♡ だめです♡ やあ♡ や、やあ♡

まっ♡ てえ♡ まっ♡ くだっ♡ さ、ましい♡」

「いやなの?」

「いっしょお♡ いっしょがイイんですの」

ああ、さっきのは良かった。確かに良かった。

「もう欲しい?」

「う♡ ううん♡」

尻肉の間を肉棒でこすってやると、レイヴェルはよだれを垂らしながら、情欲の熱に溶けた流し目で何度も頷いた。俺の股間もよだれだらだら、眼もギラギラと獣欲を滾らせているに違いない。

「ほら」と手振りです正常位に誘うと、彼女は待ちきれないとばかりに急いで向きを変えた。くねくねと身をよじりるその様子がたまらなく色っぽい。

「綺麗だな。それにえっちでいやらしい。その巻いた髪もふわふわして可愛いし、ずっと触っていたくなる。いろいろ見て、触って、味わっ

たけれどどこにも文句をつけるところがなかった」

「あつ、はあ♡ 旦那さまも旦那さまも♡ 素敵ですわ——」

彼女の開いた股の間に入り込み、先端をくちゆりと埋めた状況。レイヴェルの頭の両側に手をつけて褒めると、彼女もこちらをたくさん褒め返してくれた。

「悪魔の寿命は一万年以上。長いけど、仲良くやっていけそうな気がする」

「ええ、やっていきますわ。きつと、ずっと」

彼女が両手を俺の頭の後ろに回そうとしているのに気づいて、こつちもぎゅつと返す。

「そうだな。きつと、ずっと」

「んんっ♡」

キスをしながら、ずちゆりと挿し込んだ。

「ひゅ——♡♡ ——んはっ♡♡ ——♡♡♡!!」

このあと又チャクチャセつくすした。

1-7 グレモリー、その魔力の秘密（1）

あのあと滅茶苦茶セックスした、大変気持ちよかった、まる。

で終わればめでたしめでたしだったのだが、少々問題があった。滅茶苦茶性交したところ、レイヴェルが滅茶苦茶になっちゃったのだ。

いや、フェニックスでなければ喉を枯れさせていたかもしれない。身も世もなく嬌声を上げ、俺の背をかきむしり、シーツを掴んで激しく悶え「やめてえ♡ もう、ゆる♡ し♡ て、くだひやい♡ ませえ♡」と泣き叫ぶ彼女をさらなる連続絶頂へと追い込んでいくのは実に楽しかった。

それで調子に乗りすぎた結果が、今の俺の現状である。実に悩ましい。混乱しているといつてもいい。

レイヴェル？ 俺の横で寝てるよ。幸せそうな顔で腕枕に頭のつけてくっついてきてる。

レイヴェルはエロくて素直な子だから、「やめてくださいまし♡」
「無理、もう無理♡ ダメエ♡」「いぐう、また、またあ♡ いっちゃあ♡♡」「ああ♡ おあ♡ お、も♡ もお♡ おあ♡ うがあ♡」

と強火で一気にドロドロのグチャグチャコースを何度も何度も許してあげないで繰り返し返した後に、彼女の大好きな優しくゆっくりペースのじっくりとろとろコースをしてあげたら、でろでろに蕩けてくれたのだ。

最後の方はもう「好き♡ 好き♡」としか言っていなかったような気がする。まあ、良いことだ。俺もそんなこと言っていたような覚えなので、両想いってことでヨシとしよう。

さて俺のようなつい先日まで素人童貞野郎だった男に、何故そのようなことが出来たのか。それが問題だ。

『なあドライグ』

『なんだ……』

んふー、と幸せ寝顔でくっついてくるレイヴェルの髪をいじりなが

ら、俺はドライグに尋ねた。くるくる。

『《赤龍帝の籠手》にはおマンコの声を聞き取る力があつたのか?』

『あるわけがないだろう! あるわけが!』

そうなのだ。いくらレイヴェルが初体験エロ娘だったとはいえ、俺ごときの素の実力では、たつた一夜で女の子を快樂完墮ち状態にまで墮とせるはずがない。好き好き大好きおめめハートマークなんでもしくださいませ状態ってヤツにだよ。

『いや、でもレイヴェルが叫んでる時でも、口塞いでる時でも聞こえてきてたよな?』

『ぐうう……たしかにその事実は認めなければならぬかもしれないかもしれん。だが、あれは断じて《赤龍帝の籠手》……俺の力に由来するものではない』

そこでその原因にして要因となつた『謎の声』について、歴代赤龍帝の夜の戦を魂の繋がった状態で見続けてきた歴戦のピーピングドラゴンに相談していると。それが目が覚めてレイヴェルを一通り愛でた後の俺の現状である。

ふむ、ゆるつと金髪サラサラ縦ロール……ここに突っ込んで髪で……ほほう、これは興味深い。頼んだらしてくれるかな? と、まあ、余計なことも考えているが。

いやしかし、あれはなんとも不思議で素晴らしい体験だった。

レイヴェルを剥き終えて、その後に一発発射した後だったか。どうやらレイヴェルは絶頂時に涙を流す癖があることが分かった。

なんでも、フェニックス家の特産品にして最大の資金源でもある超高級回復薬である《フェニックスの涙》を製造するには、フェニックスの魔力特性を持つ者が心を無にしつつ涙を流す必要があるらしい。その練習としてレイヴェルは心が無にする訓練をし、その際に自然と涙を流すようになっていったとか。

つまり、何にも考えられないくらい気持ちイイイイな状態に至ると、涙が出ちやう女の子だもん、となると。

それを聞いた俺は、レイヴェルをもつと泣かせて鳴かせてやろうとハッスルした。絶頂に押し上げては涙をすすり、無我の境地に突き上

げては涙をなめとる。女の泣き顔大好きな異常者になりそうな勢いだ。なんだかよく分からないが興奮してしまったのだから仕方がない。

しかし、何事にも限界はある。俺の神珍鉄如意金箍棒も、ついには硬度と長さを維持することが出来なくなってしまうたのだ。

特殊な儀式（房中術的な）を施し、無の心でレイヴェルが流した涙を、超魔王級の魔力持ち赤龍帝である俺が飲む。コイツはもしかや精力剤的な効果があるのでは？ という気がしていたが、まあ無限セックスは無理だったということだ。

そんな風に諦めかけたときだ。不思議なことが起こったのは――

「うっ……！ レイヴェル!! 出るっ!!」

「あゝ あっ♡ あっうんうっうっん♡♡!!」

上手くいった同時イキに、ほやあと蕩けた彼女の目じりをちゅっと吸い頬を舐めた。心地よい脱力感に身を任せ、だらりと体重をレイヴェルに預けてピタリとくっつく。

触れ合う肌も心地よい。交わる視線に幸福感を感じ、もう今日はこれでよいかな。お互い初めての身体にしては、よく頑張った。自分と彼女を誉めてやりたい。そんな気分になったのだ。

溜め込んだ性欲と、この状況に衰えを知らぬかに見えた若さ滾るちんちんもようやくその硬さを衰えさせてきたことであるし。彼女の膣内でふによりとしているのも、これはこれで良い。

「ああ……あなたあ♡ もっとお……♡」

うん、我が婚約者にして未来の嫁たるレイヴェルちゃんは性豪であった。まだまだ足りないとおっしゃる。肉体の負傷は自動修復なので、スタミナが尽きるまでは貪り合いたいとおっしゃる。

これはなんとか応えねば。なんだか、レイヴェルのピンクに茹つた脳内では俺たちは既に結婚してることになってるようだし。

だがしかし、勃たぬものは起たぬ。されどこの身は、悪魔。こうまで求められてその欲望に応えられないのは如何なものか。

「魔力、そう魔力さえあれば」

「はあー、んっ♡ ふうふうー♡ ひゅふう……♡ くださいませえ♡」

寄せあつた頬に感じる熱いエロ吐息。鼓膜を揺らす情欲に濡れた媚声。

必要なのは魔力だ。成熟した悪魔の肉体は魔力によつて不老も若返りも自由自在。ならば魔力で勃てられないはずがない。古き魔王を置き去りにした魔力量はなんのためにある！ エロでしょ！

ハーレムのために頑張つて来たんだ。十回やそこからダウンしてどうするんだ、俺！ 眷属ハーレムを作るとしたらフルメンバーで十五駒。一人一回でも十五発。せめて一人三回はしてあげたいと思うのなら、四十五発。ぶっかけたり飲ませたりも楽しみたいなら、五十回は余裕でこなせなければならぬ。

魔力はイメージと意志。魔力量は十分。

俺は悪魔だ、ドラゴンだ。イメージするのはエロゲの魔王。何十人の美女・美少女を侍らせ、その全員を快樂漬けにしてトロ顔にした上で、豪華な椅子に座つてさらに弄り犯しながらも余裕の表情を浮かべているような、女の肉を堪能しまくっているああい魔王。

「あんっ♡ また、おおきくなりましたわ♡」

性獣フェニックスの一羽くらいに負けてどうする。まだ最初の一入目だぞ。俺のハーレム道は、ここからだ!!

「レイヴェル」

「はい♡」

嬉しそうな顔しやがつて。俺は負けない。

腰を振る。それに悦ぶ女に何度も何度も打ち付ける。精力を倍加すればいけるのかもしれない。二倍、四倍、八倍、十六倍、その先までいけばなんとかなるだろう。

だが、ことコレに関してはドライグに頼りたくはない。殺し合いの戦闘だけで十分だ。

バル家の血筋からくる魔力特性も役には立たない。アレも殺し合いには有用だが、ベッドの上の戦いでは何の助けにもならない。

頼れるのは悪魔の身体と、魔力量。グレモリー家の血筋に多いとさ

れる、恵まれた魔力量。それをひたすら鍛え上げ続けてきて、これからも伸ばし続けていくだろう魔力の豊富さだ。

グレモリーの血にこそ、超悦者への道がある。

そんな考えに至ったとき、それは起こった。

(あ♡ そこっ♡)(やんっ、こっちもお♡)(ここをね、ぐりぐりつてしてほしいな♡)(おくうーっ♡ もつと、もつとおくに欲しいん♡)(つまんで?♡)(撫でて欲しいなあ♡ うん♡ そう♡ すーつて、触れるか触れないか、あっ♡ そう、それがいいよお♡)(抉って♡)(ぐちゅってしてよお♡)(ごりごりきてー♡)(もみもみしてえ♡)(唇さんが寂しがってるんだけどなあ♡)

レイヴェルの身体のうちらちらから、声が聞こえてきたのだ。主に挿し込んでいる穴の中が多いが、それ以外からも聞こえてくる。

なんだこれは?! なんだこれは!?

声は全部レイヴェルのものだ。しかし、彼女の口を塞いでも聞こえてくる。俺の頭の中に直接、どこがどうして欲しいと語りかけてくる。

(あっ♡ イイツ♡)(やだ、うれし♡)(あおーん♡)(んうん♡
んううう♡)(ああっ♡ トンっトンっ♡ てえ♡)(もつと、もつと
ぎゅーっしてしてえ♡)(ああー、ペろペろも好き♡)(んぎい♡)(お
っ♡ おっ♡ おお♡ お♡)(ああ、イイけどお♡ もつと強く♡ め
ちやくちやにしてえ♡)(ちゅっ♡ れろ、にゅちゅ♡ ああ、もつと
絡めてえ♡)

頭がおかしくなりそうだった。いや、おかしくなっていた。レイヴェルの艶声が幾重にも重なって心の中に響いてくる。でも、おかしくなつて構わないくらいそれに気が持ちよくて、俺はその声に応えまくった。

「んんっ——♡♡♡ んっ、んにゅ♡ ん”ん”ん”——♡♡♡
ふっひひい——♡♡♡」

((((あああああ、イクっ♡ イグっ♡ またイクう♡ とまんな
ずっ♡ すぎよひい♡ すきい♡ これえ♡ ほあん”

♡)()()

そのうちふと頭の中の茹で上がった情欲の熱が冷めて、ぐったりとしてだらしないことこの上ない顔になっていくレイヴェルに気づいた。その後は、無理をさせたなど労わるように抱いて眠りについた。その間、俺の股間硬度は常に確保されていたことを付け加えておく。やはり魔力量こそ至高。基礎スペックの強化こそ最重要の項目なのだ。

うん、思い出していたらググツと来た。

『うーん、あれはつまりレイヴェルの弱いところの声だったのだろうか?』

『俺に聞くな』

『いや、ドライグって男の赤龍帝とも女の赤龍帝とも魂つなげて来たんだよな? なんか神器の中に居たし』

『ああ……そうだ』

『てことは、どっちの立場でも経験済みってことになるよな? だから詳しいのかなって』

『うおおおおおん! なぜ、この俺が、天龍と呼ばれたこの俺が!』

人間どもの情事に付き合わねばならぬのだ!!』

聖書の神は残酷だ。そしてその考えは理解できない。俺がトカゲックスに情欲を抱かないように、ドライグは人間の交尾など興味ないだろう。だというのに長い長い期間、ドライグは龍でありながら人間のそれを味わわされて来たのだ。聖書の神はドライグに人類愛(性癖)でも植え付けるつもりだったのだろうか。

『というか、ベッドでレイヴェル抱えて寝転がってる状態でこうやって話してると……』

『ん?』

『なんかドライグとピロートークしてるみたいで微妙な気分になる』
『……やめろ。その思考を消せ。こういうことをするとき俺の存在を思い出すな。いいな!』

『あつ、はい。あー、ただ……』

『ただ?』

『夢中になってると無防備になると思うので、寝てる時同様の周辺警戒だけお願いできればと』

『ああ、分かった。それはやっておいてやる。だから、俺のことは思い出すな。忘れていろ。絶対だぞ!!』

ガチの本気を感じた。怖い。

俺は性行為やその事前事後にはドライブグの存在を忘れる。気にしない。見られているとか、聞かれているとか、そんなことでどうこう思わない。俺、覚えた。

「んうん……あれ？ ふゆ？ ……あつ♡」

そのうちにレイヴェルが目を覚ました。最初は寝ぼけていたのか状況がつかめず戸惑っていたようだが、俺の顔を見るなりにへらと笑ってくつついてくる。

「おはよう」

「おはようございます。あの……」

「可愛かったよ。絶対、この子と結婚しようって思った」

「まあ！ 私もですわ。嬉しい……その、とつても素敵でした」

実際のところ、レイヴェルは大変な優良物件だ。相性がよほど合わないということでもなければ手放すことがあり得ない。

悪魔の戦闘遊戯レーティングゲーム。それによって需要の増しているフェニックスの涙の利権を握るフェニックス家の娘なのだから、財力もあり、各所へのコネも期待できる。

上に兄が三人いるというのも良い。かつての天使・墮天使・悪魔三つ巴の大戦の結果、悪魔の貴族は人数が少なくなっている。そのため若くとも家を継がなければならぬ立場となっている者が多い。俺のように。年齢の近い知り合いの純血悪魔たちも、大概が次期当主なんて立場にいる。

そうなると他家から嫁や婿を迎えることが大変なのだ。相手を見繕うのも一苦労だろう。さらに上手く婚約したとしても、次期当主の立場の兄姉がなんらかの事情で跡を継げなくなることもある。ポツクリ逝ったり、眠り病にかかったり。そうなると、婚約は続けられない。婚約者が自分の実家を継ぐことになってしまうからだ。

レイヴェル上に兄が三人いるので、そうなる可能性はまずない。

これで純血貴族悪魔にしてはかなり性格も良さそうな上に、エツチも良いとくれば、そりやもう確定でしょう。これを横からかつさらわれたりした日には、《赤龍帝の籠手》で最大倍加した滅びのハイパーオーラキヤノンで冥界を滅すると脅すことも辞さない。

「んー」

「うん」

甘えてくるの抱き返し、身体を回してレイヴェルを上に乗つける。そうしてしばしイチャイチャしていると――。

「あら♡」

「あー、する?」

また大きくなつてくる自分自身。

「んふ♡ はい――」

「ゴホンっ!!」とレイヴェルの承諾の声にかぶさる音があった。実にわざとらしい咳払いだ。

二人してそれにギョツとして抱き合いながら、咳払いの主を探すと――そこに銀髪のメイドさんがいた。義姉上だ。ついでに我が家のメイドの長であり、さらに魔王の妻というワケわからなくなる悪魔である。

「リヴラクスさま、レイヴェルさま。お二人の仲が大変よろしいことはまことに喜ばしいのですが、お待たせしている方々がいらつしやいますので……」

レイヴェルも貴族。我が義姉上のグレイファイアが何者であるかは当然知っている。メイドという名の上位権力者の登場に、俺と彼女はコクコクとそろって頷きを返すのみ。

メイドに時計を示されれば、なるほど既に結構な時間。朝食には遅く、昼食にはまだ早いくらい。

「グレイファイア、フェニックス卿はどうされている?」

「昨晚は当家で宿泊されました。今は当主さま方と朝食を一緒に一緒に、そのまま談笑されているところかと」

なるほど、父上母上とフェニックス家の夫妻。この四人を待たせて

いる、と。うん、よろしくないね。

「あわわわ……ど、どうしましよっ。」

状況を悟って慌てるレイヴェルの頭を撫でつつ、グレイフィアを見上げた。俺はまだベッドで寝ころんだままだ。

「慌てずゆっくり身を整えさせるように、との指示を受けております。つきましては、お二人にはこれから入浴していただきたいのですが」
スンスンと匂いを嗅ぐ。うん、臭いね。事後の臭いがプンプンしている。俺にもレイヴェルにも、エロエロな汁が体中に乾き張り付いているから、そりゃ風呂は必須だろう。

まあ、消滅魔力で身体を覆えば汚れ程度どうとでもなると言えばなるし、レイヴェルも一回全身を自己焼却して蘇生再生すれば綺麗にはなるのだろうが。そこまでしなくても風呂入った方が楽で気分も良いはずだ。

「分かった。行こう」

言って、レイヴェルもごとシーツに包まるようにして立ち上がった。ベッドの下、グレイフィアの足元には転移の魔方陣。グレイフィアは俺たちを風呂場まで直接跳ばすつもりでいるらしい。

ただし、その魔方陣は二つある。

「ん、どっちだ？」

「お風呂は別々ですよ。リヴラクス」

むむ、これは半目で俺をちよつとたしなめる時の義姉さん風の声。くっ、逆らいにくい。お風呂でイチヤイチャ洗いっこしようと思っていたのに。

確かにそれでは、そのまま迎え酒ならぬ迎えツクスに突入してしまう可能性が高い。

そうして待たせまくったフェニックス卿に向かって、「いやー、お宅の娘さんと風呂場でガンガン交尾したら遅くなっちゃいましたわー。いや、ホント、すいませんねえ」などと言つてのける勇氣や豪胆さは俺の手持ちにはないものだ。致し方なし。余は無情である。

「ほら、お義姉ちゃんが洗ってあげるから、早くしなさい」

「えっ？」

唐突に聞こえた意外な言葉にひよんと嬉しくなって声を上げたら、レイヴェルに如意棒をくにとされた。

「ううう……」

「ちよっ！ ちよつと待って、レイヴェル！ 痛いから」

そんな俺たちを見て、義姉さんはふつと笑みを浮かべ「冗談です」と頭を下げた。

そうやって、義弟をからかうのやめてくれませんかねえ。

1—8 紫紅の龍帝

冗談だつて言つてたのに……。

俺は今、兄の嫁さんに身体を洗われている。いつもはメイドさん達が洗ってくれるのでいつも通りと言えはいつも通りなのだけれど、ここ数年は義姉さんがしてくれることは無かつたはず。

いや、別に一人でも洗えるのだが、なんだかもうこれに慣れてしまつたのだ。

「まだ治まらないの？」

うん、アンタが洗つてるから槍がピンピンに尖つてるんですよ義姉さん。そんな「しょうがない子ね」って感じの目で見ないで欲しい。くそつ、これが義姉さんではない一般メイドだつたならそのまま押し倒してスツキリしているというのに——ああ、それでか。

そんなことをしていたら遅くなつてしまふし、婚約しましたというその日に相手を待たせてメイドに手を付けてましたでは困るだろう。確かに。

「でも、あんなに小さかつたのに……子供が大きくなるのつて早いわね」

義姉さん、それはどこを見て言つているのでしょうか。ミリキヤスだつてすぐにこうなるわ。年経た悪魔の感覚では、十年なんて本当にあつという間なはずだから。

しかし……本当にデカくなつてるなコレ。いや、サイズはそう変わつていない気がするけれど、なんとというか、こう形状がエグい。悪魔の肉体は魔力で変化する、それは知っていたたぷりと実感もしたことだ。でも、いや、こうしてじっくりと見るとこの変化にビビつてしまう。

キノコに例えるとこの傘の部分の開き方がすごいことになつていくというか、これゴリゴリ引つ掛けるよねという形になっている。この形で腰を前後した場合を想定すると——丁度レイヴェルが好き、好き、イイ、イイと鳴いていた付近にクリティカルヒットするのではないだろうか。そこをこう抉るようにガリゴリとこすりそうというか。

正常位で当たりそうなどころも、バックでぶち込みそうな付近も、実際にクリティカルになっておられる。

「あの子のこと、よっぽど気に入ったみたい」

ゴシゴシと洗浄されながら。「良かったね、お義姉ちゃん安心よ」そんな雰囲気義姉の声を聞く。

ふむ、気に入ったからこの形なのか。つまり俺のちんちんは、レイヴェルのマンコの形にされてしまったのか……。俺のカタチになってきたな」なんて一度は言ってみたいセリフだが、どうやら俺はそれをレイヴェルから言われてしまう立場だったらしい。

勝負に勝ったと思ったら、実は負けていた感。いや、引き分けということにしておこう。あっちだって影響あったはずだ。そのはずだ。

ところで義姉さん、そのときどき立派なお胸がぽよぽよ当たるんですけど。当ててんのよとか言ってくれるならいいけど、聞いてみたら完全に子ども扱いだと凹むので聞くに聞けない。くそ、この水着っぽい浴場担当メイド用の服め。

けしからん！俺はもう経験済みなんだぞ！こんなんで治まるワケないだろうが!!「仕方ないわね。私が鎮めてあげるわ」とか言って手でも口でもいいから、スッキリさせてくれたりは……。しないんだらうなあ。

「義姉さん、俺も、もう子供じゃないんで……」

「そうね……」

まあ、生れた時から前世記憶持ちだったので。

「思えばあなたは、赤ちゃんの頃から、私やヴェネラさまだけならともかく、レヴィアタンさまにまでイタズラしていたわ」

無邪気な子供のイタズラ。グへへ、だから構わないだろう。なんてやってたのが、赤龍帝の籠手出現後にいろいろバレてヒドイめにあったことを思い出す。

我が母上は見た目は大学生美女くらいなので普通にいけてしまう。義姉上もそう。四大魔王の一角、魔王レヴィアタンさまことセラフォルーさんは、それよりちよつと若作りだが、まあロリババ魔法少女は俺の守備範囲内だ。ロリってほど幼い外見でもないが。

いつかそういう機会があるかもしれないと、俺の使い魔には服だけを溶かすスライムくんとか、マッサージの得意な触手生物くんとかもいる。自称魔法少女さんはやや際どいくらいの撮影もオツケーなので、そのうちけしかけてやりたい。使い魔くんたちでは瞬殺されるだろうが。

魔法少女はえっちな目に合わされてからの悪堕ちがセオリー。だというのに最初から魔王とはこれ如何に。

「もし、あなたが嫌がっているようなら、断ってもいいと言おうと思っていたの」

「レイヴェルはいい子だよ。嫌なんてことはない」

とてもえっちで俺は大変満足している。

「そうだったみたいね。でも、私はあなたに好きな相手がいるのではないかと考えていたのよ」

「そんな風に見えてた？」

「ええ、あなたレヴィアタン……セラフォルと二人で時々籠っていることがあるでしょう？ 結果まで張って」

ただの撮影会です。公爵家の次期当主ともあろう者が、カメラ小僧よろしく魔法少女コス撮影パシャパシャしてる様なんて、使用人にも見せられない。平然と魔法少女の恰好で出歩くばかりか、放映までしてしまうお方もいるが、俺はあそこまで吹っ切れていない。

「てつきり、その彼女が……年下趣味なのかと」

シヨタ美少年を密室に連れ込んでイケナイことをしている魔王少女。そんな疑惑を我が義姉は抱いていたらしい。悪魔故あり得なくもない想像なのかもしれない。

それならそれでもいいか、と放置されていたっぽいのが気になるが。

「あー、そういうのではないかな。別に年齢差は気にならないけど。たんに趣味に付き合っているだけだから」

正直、悪魔になって以来見た目さえイケれば年齢差とかはどうでもよくなっている。人外ヒロインにはありがちな属性であるからして。

この目の前の義姉さんももう——歳だし。単に魔法少女に（いやら

しい方向で)理解があることを知られて、付き合っているだけである。なかなか変わった方だが、あれでも外交関係を担当している魔王だ。仲良くしておいて損はない。コネは大事、前世で覚えた。

「シトリーのソーナちゃんとも仲が良かったわよね? あとアガレス家の——」

「シーグヴァイラというか、アガレス家は嫌だ。それにソーナもそうだけど次の当主だからありえない」

シトリー家のソーナは、姉のセラフォルーさんが魔王レヴィアタンを襲名した関係で繰り上がってシトリー家の次期当主となっている。俺と兄であるサーゼクス・ルシファーとの関係に似た感じた。

我が母上がセラフォルーさんの小さい頃によく面倒をみていたらしく、その関係もあって家同士の付き合いも多かった。

現在はともかく、幼少期は前世の記憶持ちな俺の方が精神年齢が高かったので割とソーナの面倒を見たと思う。でも、最近はこちらにくれてきて、「おにーたま、おにーたま」と慕ってくれたワガママ幼女の頃の面影はない。ただ、近頃はなにやら教育関係に関心を寄せているようで、人間社会の学校経験者としての意見などを聞かれることは結構ある。小難しくなりおつて。

シーグヴァイラ・アガレスとの関係は、「ロボ」だ。もうそれしかない。アイツはロボット大好き女なのだ。

付き合いの始まりは、俺が前世の日本人の記憶持ちだと判明した頃に、向こうから連絡を取ってきたところから。それまで特に交流も無かったのに何事かと思ったら、とにかくロボットものについて語り合う相手が欲しかったらしい。シーグヴァイラの中で日本は「ロボの聖地」と化している。否定できない。

あるとき悪魔にふさわしい「ダンガム」は何かといった話題になり、安直にデビルダンガムを推したら「あれは、ロボっぽくない」と否定されたことから始まる「ナノマシン系はロボっぽいかな否か」論争は記憶に新しい。

ちなみにアガレス大公家への婿入りだけは絶対に御免だ。あの家は現在の悪魔社会における二大派閥、四大魔王派と大王バアル派のど

ちらにも所属せず、間を取り持って実務を進めていく中立派の家だ。気苦労多く、報いは少なく、胃は痛くなること間違いなしのポスト。アガレスだけは嫌だ。未来のアガレス大公に敬礼。

「義姉さんは、俺がどこかの家に婿に行つたほうが良かったの？」

そうなると繰り上がりで息子のミリキヤスがグレモリーの跡継ぎになれますね。

「……そういうことではないわ」

俺の言葉に、義姉さんはひどく悲しそうな顔を見せた。

現在グレモリー家には、次の当主として俺を推すリヴラクス派と、現魔王サーゼクスと「最強の女王」グレイフィアの一人息子を当主にと願うミリキヤス派がある。

既に魔王級を大きく超えた魔力とそれをさらに数百倍にする神器を宿し武力において圧倒している俺と、混じりけのない最高峰の純血悪魔であるミリキヤス。

ミリキヤスの母である義姉上が、どちらと考えられているのかは記すまでもないことだ。

今回のレイヴェル・フェニックスとの婚約によって、どうやら父上は俺を外に出すつもりがなく元々の継承順どおりに進める考えだと家臣連中から受け取られているようだが……。

「でも、そうね。私がおんなことを言えば、そう受け取るしかないわよね。ごめんなさい」

かけられた湯が身体をザッと流れていく。

領民・家臣共や兄上・義姉上がどう考えていようとも、俺はこの家の次期当主の座を渡すつもりはない。

仮に俺が次期当主の座をミリキヤスに譲ってシトリー家に婿に行つたとしよう。その場合、その先でハーレムを作れるか？ いや、厳しいだろう。わざわざ自分から次期当主のポストを捨てるのだ、それはきつとソーナとの間に深い恋愛関係があったのだからうってことになる。その状態で婿入り先で「あ、俺ハーレム作るつもりだからよろしくな」なんて言えようか。俺は言えない。

つい先日までは、ハーレム構築完成後にそれでも来てくれと請われ

たのならやぶかきではなかった。ライザー義兄さんのような立場だな。

ただ、もし今からそうなった場合は、レイヴェルとお別れすることになる。それはもう考えられない話だ。

「いいよ、別に。ただ、俺はレイヴェルを気に入ったし、もう手放すつもりはないから」

「……そう、あなたが良ければいいのよ。ただ、前にバアル家との話もあつたでしょう？」

「養子について話だつたっけ。あれは叔父上を焚きつけるためのものだったと思ってるんだけど」

鏡に映る自身の瞳を見る。俺の髪は父上からのグレモリー家の血を示す紅だが、瞳の色は母上の実家バアル大王家の血統を継ぐ証である紫だ。

『バアルの印しるしを持ち、バアル家の魔力の特性である「滅びの力」を受け継ぐ者だけが大王バアル家の後継者である』という、割と一般的な考えの方々からそういった話が出たことがあるとは聞いている。その話が出たころ、後継者となるべき一人息子のサイラオーグが魔力を持たずに生まれてきたことに叔父上（我が母上の異母弟）は、それはもう思い悩んでいたらしい。

で、家からでた異母姉の子を養子に迎えて家を継がせるなんてありえない！ と奮起して子供の出来にくい純血悪魔としては異例ともいえる早さで次の子供をこしらえたのだ。その頃はミリキヤスがまだいなかったから、父上が俺を手放すことなんてまずないだろうに。サイラオーグを産んだミスラさんとは違う奥方相手に、毎日毎日、朝から晩までパコパコしたのかね。叔父上は頑張ったよ。

とそんな感じで、バアル家中のゴタゴタに関する当て馬にされた俺だ。おかげで今でも叔父上からは警戒マシマシの塩の効いた対応をされる。今のグレモリーにはミリキヤスいるしね……。

跡継ぎがちゃんといるところにわざわざ波風立てて、昔の与太話掘り返して乗っ取りなんて仕掛けませんよ、俺は。そう伝えても、向こうにそれを信じる気がないのでどうにもならん。

さすがに悪いと思ったのかどうなのか、バル家先代当主（母上の父、俺の祖父）や初代バル殿（こちらも祖父と呼んでいる。前世からの人間の言語感覚では一万年前からのご先祖を表現できない）からの扱いは悪くないのだけれど。

まあ、バル家は現当主よりも初代や存命の歴代当主の発言力が強い家なので、これはこれで良いコネではある。もしも兄上と対立でもして、魔王派を離脱するようなハメにでもなったならここを頼ることになるだろう。母の実家で兄上の政敵だしね、「おじいちゃん、兄さんがいじめるのー。たすけてー」といった感じか。

「ジオティクスさまはどうお考えなのかしら……」

「さあ？　ただとりあえず俺は力を付けことにするよ。もっともっと出来る限り」

「あなたのその魔力とその神器。それが既に政治的にも大きな影響力を持っていることは分かっているのよね？」

この悪魔や神々のいる人外魔境の夢^{ファンタジー}世界。ここでは戦争は量よりも質だ。百万の軍勢を一息で吹き飛ばす個人が存在するのだから。

そして俺は、その万軍を一騎で滅ぼせる個人である。まだ成熟していない、成長期の悪魔でありながら、もうその領域に立っている。

父上はそんな俺を他家にくれてやりたくはないだろう。おそらく、だが。

『^{ちから}武力こそ^{パワー}権力』。前世のどこかで、ゼウス神のセリフとして聞いた覚えのある言葉だけど。まさしくその通りだよな」

強くさえあれば、最悪、悪魔社会から離脱したってやっていける。暴力を背景に「死にたくなけりゃあ、お宝と食い物、あと女をよこしなあ！　逆らうようなら皆殺しだあ、ギャハハハ!!」なんて邪悪なドラゴンライフだって出来るだろうさ。昔々にドライグとそのライバルの二頭のドラゴンが、天使と悪魔と墮天使相手に大暴れしたように。

「その言葉には覚えがないけれど、ひとつの真理であることは認めざるを得ないわね」

強いヤツが偉い。『力』ほど純粹で単純で美しい法律はない。『力』こそがすべてを司る真理だ、と前世で見た大魔王も言っていた。実にドラゴンしている。



欲情我慢の大浴場をあとにした俺は、着替えた後にレイヴェルと朝食だか昼食だか分からない食事を取るようになった。

この後、両家の親と話し合いがあつて、その後に解散といった流れだ。

「そういうえば、どうして学校に通つてこれられないのですか？」

レイヴェルとの距離感は近い。ベッドイン前とは雲泥の差である。あの頃のドキドキソワソワした貧弱男子はもはやいないのだ。

これが一皮むけたつてヤツだ。

「三日ぐらいかな、通つただけだ。……ゼファードルって知ってる？」

「グラシヤラボラス家の方でしたよね？ 同級生から聞いたことがあります。なんでも引き籠つていらつしやるとか」

「アイツにしつこく絡まれたんで、ついカツとなつて腹にこう——」

レイヴェルのお腹に拳をポンと当てる。

「——パンチしたら、ゼファードルの腹が消えて上半身と下半身が分かちちやつたんだ」

「まあ！ 怖いですわ」

お腹をポンポンと撫でる。ここには、もしかしたら俺の子がもう宿っているかもしれないのだ。大事大事。

「消滅魔力の制御が緩んでいたみたいで、フェニックスの涙が必要な事態になつてさ。それで俺の魔力量も考えると、万一暴れたときに教師では抑えられないし、まさか兄上に常駐してもらおうワケにも行かないから……出席禁止になつた」

まさかの学校出禁である。子供のケンカで希少な純血上級悪魔を失うわけにはいかないので仕方がない。魔王クラスがいないと抑えられないってことで、その後は家庭教師と消滅魔力制御の権威のところへ時々練習に出かける日々である。

母上でもいいだろうに何故かバアル家に出向かされているのは、たぶん政治的な理由があるのだろう。こっちも次期当主くんに魔力増大トレーニングの指南を頼まれているので、案外それが目的だっただけかもしれないけれど。にしても、こっちも一応教えに行っている部分もあるのに叔父上の態度はさ、もうね。イヤになるね。

「それで、その膨大な魔力もあつてついた二つ名が『紫紅の龍帝』ですか」

「バアルの紫とグレモリーの紅って単純な名前だけどね」

そう、悪魔の社会には二つ名だの異名だのの文化がある。俺の『紫紅の龍帝』なんてまだカワイイもので、母上なんて『マダム・ザ・エクスティンクト 絶滅淑女』だ。

こいつが、ヒュー、カツコイイ！ と茶化すのではなく本気でそう受け取られているのだから、これはなかなかくるものがある。

なお、異名の中にドライグの赤がないのは、紅の中に含まれている扱いらしい。ついでに、たぶんこの紫紅は至高とかけられている。今までで最も強い赤龍帝ということだろう。

そうになると、ライバルの白龍皇が『究極の龍皇』とかになつていそうでややコワイ。至高 vs 究極の天龍一ドツカンバトル武闘会が始まりそう。

それにしても略すと紫紅帝。前世の記憶があることと合わせて、中華な大陸の偉人の転生者のようだ。この世界、英雄やら偉人の魂を受け継ぐ者が普通にいらっしゃるのだが、早とちりするバカはいないよな。俺の前世は、ただの一般オタピープルである。

「私、実はリヴラクスさまのこと、家で会う前から知っておりましたの。『紫紅の龍帝』に憧れていた、とも申しますわね」

「パーティーとかで会っていたかな？」

「いえ、魔王級の魔力を『赤龍帝の籠手』で最大まで増加させた際の

レーティングゲームに与える影響試験のときです」

そんな試験はあった。俺が試されたのではなく、悪魔たちがする戦争遊戯『レーティングゲーム』の会場がどれだけ俺の力に耐えられるかの実験だ。

たしか、《赤龍帝の籠手》が発現してそう日も経たない頃に行ったはずだ。

「あつたな、そんなこと。あれでゲーム中の神器使用に制限が付くことになった」

「はい！ あの時、フェニックスの不死身で耐えられるかどうか見ておこうということになりました、我が家の皆で見に行っていましたの」

実験の結果、最大まで威力を倍増させた滅びの魔力球はレーティングゲームの会場を塵一つ残さず消滅させてしまった。ゲーム用の特殊空間を粉碎し、冥界の通常空間にまで広がった大規模消滅破壊。

くるりと綺麗にくり抜かれた広大な大地を見て、「うわー、これヤバイ。ドライブ怖い」と我がことながら思ったものだ。

俺は歩く核弾頭貯蔵庫、残弾数は二千発で毎日全回復します。そんな感じ。

「素敵でしたわあ」

俺にお腹を撫でられながら、大規模破壊の光景を思い出してうつとり顔のレイヴェル。

悪魔に限らず人外異形の夢ファンタジー 幻な界限では、強いヤツはモテやすい。平和な人間社会でもそういうところはあるので、より物騒なこつち側ではその傾向も強いのだろう。

つまりレイヴェルが最初から好意的だったのは、俺が力ある者であることを先に見せていたからか。

やはり『強いちからこそ魅力パワー』、ゼウス神のやりまくり神話はそのギリシヤ最高峰の強さが根源か。

「それで、あの……お願いがあるのですが」

お腹を見て顔を赤くしつつ、レイヴェルはおねだりの姿勢。ただし、下の話ではなさそうだ。

視線で続きを促すと、彼女はためらいがちにそれを口にした。

「私をあなたの最初の眷属にしてくださいませんか？　昨日から『悪魔の駒』の使用が許されているのですよね」

「それ、意味は分かかって言ってる？」

婚約ならば破棄できる。たとえ婚前交渉があつたとしても、それはまだ確定ではないのだ。両家の都合、悪魔社会内外の状況の変化、それらによって覆えることはある。

しかし、『悪魔の駒』による眷属化は、それとはまた話が異なる。基本的に、『王』この場合は俺の許可がなければトレードによってフェニックス家に戻ることも出来なくなるのだ。圧力などで強制されることもあるだろうが、基本としてはそうなる。

そして、それは俺がもし何らかの事情によってグレモリー家の者ではなくなったとしても変わらない。もし俺が「やっぱり当主なるのやめて独立するから」などと言い出したならば、それについていくことになるのだ。

「フェニックス家とグレモリー家の結びつき、ということだけでしたら婚約からの結婚だけでよろしいのでしょうか。でも、私はあなたのことへ嫁ぎたいのです」

そう言つて、レイヴェルは再度お腹の辺りを見ながら「本当に……素敵でしたわ♡」と続けた。

なるほど、下腹部がキunksンキunksンしているから、どこへでもついてきてくれる、と。そう受け取ることになしよう。俺的には物理的に強いからより、そっちの方が嬉しい。

「その、寝室で何度も何度もおっしゃってくださいましたことですけど……」

もじもじとするレイヴェルの耳に軽く口づけを落とした。自信がつくところという真似も出来る。今の俺はイケメンで権力のある金持ちで、四大魔王の内の二人くらいは倒せる身の上だ。

「覚えてる。本当だ。フェニックス卿の許可がでたら、俺の眷属になつてずっと一緒にいてくれ」

「はい!!」

ギュツと抱き寄せてまたイチヤイチヤしようとしたら、使用人にそれとなく注意されてしまった。

そうだね、これからお義父さんの許可とらないとだからね。遅刻厳禁。

1-9 グレモリー、その魔力の秘密 (2)

両家での話し合いの結果、レイヴェルが俺の眷属になる件についてはフェニックス家側で家に持ち帰り相談してからとなった。

俺が受けた印象としては、フェニックス卿は将来的にはともかく今はまだ早いのではないかといった考えのよう。逆にフェニックス侯爵夫人は乗り気のように感じられた。

どちらにしても、反対という雰囲気ではなかったのでまず問題ないだろう。近日中には返答するということだったので、あとはそれを待つのみだ。

さて、今はもうその翌日の朝。

俺はその朝立ちに苦しむ勃起をメイドに慰めさせていた。

「れろっ、にゅちゅ……、ぴちやくちゅう、んう……」

舌と唇、口内の各所を適度に使うなかなか丁寧な仕事だ。やはりメイドはドジっ子よりもデキル系が良いということか。まあドジっ子メイドは、えっちなおしおきシチュのためだけにいるようなものだからな。

「んふう……ぴじゅう……。じゅうる、れえろ、ちゅっ……いかがでしょうか、若さま」

俺のモノから一旦口を離し、媚びた上目遣いで具合を聞いてくるメイドの頭を撫でてやる。このメイドは俺よりかなり年上の女性だとは思うが、何百歳だろうと見た目は十代なのでまったく問題ない。

頭部の両脇、左右の耳の上辺りからそれぞれ角の生えている珍しい姿をしていたので、なんとなく覚えていたメイドだ。名前は知らん。

「ああ、いいぞ。そのまま続けてくれ」

「かしこまりました」

昨日、レイヴェルたちが帰った後、父上と話をした。母上も他の誰も交えない、グレモリーの血を継ぐ者だけに語られる我が家の秘事についてだ。

その話の最後に聞いてみたところ、朝と夜、それから風呂で俺の世話をするメイドには好きに手を出しても良いと知った。なので早速

今朝からお試し中ということなのだ。

早朝の寝室、ベッドの端に腰かけた貴族の美少年と、その足の間に跪いて股間に顔を埋めるなめしやぶるメイド。実に良い光景だ。

くすぐるように玉をころがされ、竿の幹や先端を艶やかな唇とぬめる舌が這いまわる心地よさ。傘の裏側の敏感なところに舌が巻き付き、いやらしい水音と共に背筋にゾクリと走る快感。ブルブルときてよだれが垂れそうになる。

実に達者な技量だ。昨日までの童貞な俺だったなら、即座に発射していたことだろう。これは相当な数を熟して来た猛者に違いない。

性欲の処理をさせるだけならば、手慣れた者の方が早くて良いな。俺は別に処女性に深いこだわりがあるワケではないし。まあ、生娘を一からいただくということにロマンを感じないわけでもないが。

やれば良いんだよ。やれば。精神的には初めてからの方が盛り上がるが、特に思い入れるつもりもないのならプロフェッショナルな技巧者も良いものだ。

「うっぐおううっ……おっ　っぐうっ……うっ　えええっ♡」

コイツはこの角がいいな。丁度掴みやすい形状をしている。左右の角を掴んで、メイドの頭部をぐっつと引き寄せた。

喉奥に先端を突き立て、ぐりぐりと自分勝手に快楽を貪る。ぐぐぐつと玉から子種が昇ってくるのを感じる。

啜えているモノが大きくなったことでそれを悟ったのか、角メイドの目が見開かれた。彼女は僅かに首をふって、哀願の眼差しで何かを訴えてくる。

「うっ　っぐ、ぐぼっお……じゅっ……。はあ、はあ……若さま。どうか……」

「まあいいだろう。そこに手をつけて尻を出せ」

コイツは俺の子種が欲しいのだ。「はい」と嬉しそうに返事をする。と、指し示したテーブルに片手をつき、ゆっくりとスカートをめくり上げた。

どうでもいいが、俺はメイドのスカートはロング派だ。別にミニも嫌いではないが、隠されているものがこうやって表れる瞬間の喜悦は

こちらの方が大きい気がする。

「どうぞ、存分にお使いください」

ほう、黒ストか。これをビリツとやるのはちよつとした夢だった。これはいい。

では、遠慮なくと楽しく破き、湿った下着をずらして早速ぶち込んだ。

「ああ、いいぞ。いい具合だ」

「ああっ、はい。はい！ ありがとうございます」

少し聞いたただけの話だが、メイドが俺の子を宿した場合、その子は領内の開拓地の代官などになることが多いらしい。辺境とは言え一地方をグレモリー家の代理者として治める支配者だ。

もしくは、グレモリー領軍の幹部候補になるか。

下賤の血が混じるので純血の上級悪魔、貴族としては扱われないが、代官にしろ軍幹部にしろ悪魔内部の地位としてはかなりのものにはなる。

その母となれば、産んだ者もいい思いが出来るというワケだ。メイドにとつては功績を積み上げ上級悪魔へと昇格するなんて夢を見るよりは、ここで俺のモノを啜え込んだ方がよほど現実的なのだろう。そもそも下級悪魔を眷属にする上級悪魔が少ないからな。

「とりあえず一回出すぞ」

さんざんしゃぶられた後だ、一発目が早い。

「くださいっ、ああっ、くださいー！」

俺が押し込むのと同時に、角メイドが尻をこちらに押し付けてくる。最奥の突き当り、そのさらに先まで突き刺さったような感じがしたのと同時。

「おおっ」

「ああああー！」

搾り取ろうと蠢く穴の中にびゆるびゆると注ぎ込む。しばらくして「ふう」と息が漏れた。

挿し込んだまま少し休んで、角メイドに告げる。

「もう一度いくぞ。少し練習相手になつてもらおう」

「はい、若さまの思うままに扱ってください」

「ここまでではメイドのサービスへのチップのようなものだ。孕むといいね。」

「ここからは、次にレイヴェルが来た時や、朱乃の躰けに向けた練習だ。」

それに、昨夜父上から聞いた『グレモリーの魔力特性』も確かめておきたい。レイヴェルとの時は無意識に使用していたようだが、アレは意識してコントロールできるようにしないといかん。何重にも響く甘い嬌声で脳がとけそうになったからな。

角メイドの膺を穿りかき回しながら、昨夜の会話を思い出す。



呼ばれて向かったのは、先日婚約の話聞いた部屋だった。

「来たか」

「はい、父上。話があるとのことでしたが、レイヴェルを眷属に迎えることについてでしょうか？」

「それもあるが……まあ慌てず、まずは座りなさい」

「どうにも、鼻息がふんすふんすとなっていたらしい。でも、しょうがないでしょう？ 初めて眷属を得るんだもの。」

父上に促され、向かいの席に腰を下ろすと、

「お前はどうにも入れ込む性質のようだから先に言っておくが、落ちて置いて聞きなさい。落ち着いて、怒りを抱かず、冷静に、だ。頼むぞ」

前置きとして、ひどく緊張した様子の父上に何度も釘を刺された。父上から若干の怯えさえ感じる。一体、何を言うつもりだというのか。

「これから自分が口にすることは、俺が憤怒するようなことだと言っているようなものだ。」

「約束はできませんが、冷静であろうと努力はします」

「本当に頼むぞ。父をあのグラシヤラボラスの息子のようにはしてくれるなよ」

俺がカツとなつて攻撃的な魔力行使してしまえば、父上であつても塵一つ残らない。

「そこまで念を押されると、非常に不安になるのですが」

本当に何なのだ。実は父上が朱乃かレイヴェルにでも手を出しちやつたテヘペロツとか、そんな話か？ いや、レイヴェルはタイミング的にあり得ないな。

「実はな……レイヴェルくんとお前の行為なのだが……確認させてもらつた」

今、なんと言われた……確認していた？ つまり、父はあれを見ていたということか。

「いいか。これは必要性があつてのことで、決してやましいことは何もない。グレモリー家の当主の務めだつたのだ！」

必死の様子でその必要性を俺に伝えようとする父上を、俺はたぶん睨みつけていたと思う。

別段、俺が見られていたことはどうでもいい。だが、レイヴェルのあの痴態を父とはいえ他の男に見られたことに、どうにもグツグツと怒りが湧いてくる。

「理由を聞いても？」

「ああ、当然だな。グレモリーの血に宿る魔力の特性、それがお前に在るか否か、それを確かめなければならなかつたのだ」

「グレモリーの血筋の特性は、魔力の量に恵まれるということではなかつたのですか？」

貴族家の血に宿る魔力の特性。これは重要な話だ。確かにそれが絡んでいゝのなら、父上が覗きをしなければならなかつた理由にはなる。

よし、落ち着け。頭を冷やせ。俺は独占欲は強い気がするが、そこまで怒りっぽいヤツではないはずだ。そうしなければならぬ理由があつたのなら、話しぐらいは聞くべきだ。ぶん殴るのはその後でいい。いや、殴るのは良くない。

発想を変えるのだ、この経験を後に活かせ。むしろ見せつけて喜べる方向にシフトできれば……いいや、無理だな。まだ経験値が足りな

い。

少しくだらないことを考えたおかげか、膨れ上がりそうになっていた滅びのオーラを抑えることが出来た。これだから「まだまだ制御が甘い」などと言われてしまうのだ。

「はあー、どうやら落ち着いてくれたか。やれやれ息子に殺さるかと思っただぞ」

「とりあえず、その特性とやらは聞いておこうかと。ちなみに、穴は間違えていませんよ」

「うん、まだ少しおかしいな。頭が冷えるよう遠回しに話すでしょう」
父上はやれやれと大げさな仕草を見ると、酒杯をぐつとあおった。

「お前はグレモリー家の者の評判、評価というものを聞いたことがあるか？ 主に身内に対する扱いなどで、だ」

「グレモリーは情が深い悪魔だ。優しく寛大と言えば聞こえはいいが、あれは身内に甘いだけだ。といった内容でしたら」

「他にもあるだろう？ 夫婦の関係などで」

「ああ、グレモリーの男は昔から妻に弱く頭が上がらない者ばかり、でしたか」

うむうむと父上は頷いた。この父上自身、母上の尻に敷かれている様子ばかり見かける。

「あれはな、確かに気質としてそういったものがあることは否定できないが、家訓でもあるのだ。グレモリー家の生存戦略と言ってもいい」

「家訓ということは、父上はあえて母上に……？」

「いや、あれは素だ。演技をしているわけではない。お前は見たことがないかもしれないが、昔のヴェネラナはそれらもうとんでもないじゃじゃ馬でな……」

暴れん坊大王姫ヴェネラナ・バアルの噂は俺でも聞いたことはある。なんでも三勢力による大戦前の頃に強大な消滅魔力を振り回してぶいぶい言わせていたとか。

友人たちと連れ立ってあちらこちらで大暴れ、そんな母上とこの父がどうやって結ばれたのか……案外、押し倒されたのかもしれない。

抵抗する父上を手籠めにする母の姿を想像し、なんとなくありそうだなと思ってしまう。

「なに、そんなヴェネラナもベッドの上では可愛いものだ。……話がそれたな」

今の話は母上には内密に、と頼む父上に首肯で返す。

「生存戦略という……」

「こと婚姻に関して、グレモリーは相手に困ったことがない。どこかしらから良い縁がやってくる」

「一度身内と認めた者には情が深い、からですか？」

「そうだ。この家訓は初代さまの頃からのもの。一万年を超えて続く我が家のこの在り方は、もはやグレモリーとはそういう悪魔だと認識されるに至っている。悪魔のみならず、天使も堕天使も、他の神話連中に、一部の人間たちもそのように考え、我らもそれから外れることは無い」

これは最早呪いだ。父上はそう続けた。

一万年、力ある悪魔達が「グレモリーかくあるべし」としてきたその在り方。この身に流れる血と魔力には、それが染み付いているのだと。

「嫁でも婿でもいい。グレモリーは迎え入れた者を、冷遇することはない。必ず大切に扱い、決して不幸にはしない。そういう家であり悪魔である。この評価は強い」

なるほど。仮にどこかの家が娘の嫁ぎ先を探すとして、他の条件に差がないのであれば他家と比べてグレモリー家を選びやすくなるだろう。

「バアル大王家の当主殿はこの点では失敗したな。魔力を持たない息子の立場が悪くなったのは仕方なかったところもあるだろうが、第一夫人として迎えたミスラをあのようにしては……ウアプラ家の恨みは長く続くぞ」

悪魔は総じて、プライドが高い。貴族ともなればなおさらだ。嫁に出した娘を無下に扱われるということは、自身の家を蔑ろにされたということ。

ウアブラの娘程度ならば、この扱いで構うまい。息子の身柄を枷にして、領内の辺境でさしたる予算も付けず飼い殺しにしてもいい。

俺はまだ子を持っていないが、自分の娘がそんな目にあわされたならと考えると……愉快的気分には到底なれそうもない。

「悪魔の寿命は長い。一万年を超えて未だ初代の健在な家もある。悪魔にとって千年前の恨みというものはな、人間のそれとは違って記された歴史ではなく生の記憶なのだ」

プライドを傷つけられ、恨みを抱いた本人がいつまでも死なずに在り続ける。寿命の短い人間ならば、何世代か過ぎればそれは歴史の一部であり、「そんな昔のことを」と流せるかもしれない。

だが、悪魔はその怒りを抱いた本人が千年先でも残っている。それは恨みも残り続けるということだ。

「バアル家に嫁ぐとあのようにされるかもしれない。その記憶がいつまでも残り続ける。これは良いことではないだろうか？」

それでも、現状の悪魔社会において最も家格が高く力あるバアル大王家ならばどうとでもするのだろうか。

「そうだな、それでもフェニックス卿はこちらを選んだ」

「と言うと？」

「フェニックス卿はレイヴェルくんの相手として、バアル家の次期当主となるだろう次男はどうかと考えていた節がある。政治のみならず多くの場面で権勢を振るう大王派の領袖たるバアル家の次期当主、その正妻に娘を据える。そういうった考えを持つことは貴族の当主として当然のことだ」

だが、レイヴェルの婚約者は俺になった。魔王派のトップであるサーゼクス・ルシファアの弟であり、グレモリー家の次期当主であるリヴラクス・グレモリーに。

絶大な回復効果を持つ秘薬『フェニックスの涙』を独占製造するフェニックス家は、レーティングゲームの流行によって大きな利益を上げている家だ。バアル大王家としても申し出があれば、十分に考えたことだろう。

「お前が個人的にバアル家との伝手を持っていることも影響したのだ

ろうが……。情が深いとされるグレモリーならずとも、悪魔とて我が子を可愛く想う気持ちはあるのだ」

現悪魔社会の二大派閥、魔王派と大王派。魔王派トップとの繋がり、大王派トップとの繋がり、どちらもそれぞれに大きな利がある。

二つを天秤にかけてたとき、グレモリー家とバアル家、どちらがより娘の扱いが良さそうか。その情の重みがフェニックス卿の心の天秤を揺らした可能性はある。

「婚姻以外にも、ベルゼブブさまが『悪魔の駒』を開発してからのことも無視はできない」

「駒と言うと、転生悪魔についてですか？」

「そうだ。基本的に悪魔という種族は信用がない。何か悪いことを考えているだろうと思われるものだ」

それはそうだ、何せ悪魔だ。悪魔というだけで、邪悪だろうと思われる理由になる。

「駒によって悪魔に転生させた下僕の扱いは、その『王』である上級悪魔ごとに様々だ」

眷属のトレードを繰り返してもメンバーが違うような者、ゲームでの勝利のために無茶な命令を平然とする者。これらはまだ良い。レーティングゲームで勝利するための行動だから。

ただ、中には相当酷い扱いをする者もいるようで、そのせいもあって主である上級悪魔の下から逃げ出し『はぐれ悪魔』となる転生悪魔は一向に減らない。その討伐を主導するアガレス大公家の心労と同様に。

「グレモリー家では『悪魔の駒』が開発されて以降、駒によって転生させた者は全て身内として扱っている。領地も与え、教育も施し、治療は優先し、家中の使用人よりも明確に上の立場に置く。『王』の側近としての待遇だ」

この意味は分かるか？ 父上の目がそう問いかけている。

「先の一万年の積み重ねてきた他種族にすら通じる、グレモリーという悪魔の評価と合わせて考えると、他家の悪魔よりも信用を得やすいということでしょうか？」

「ああ、実際、グレモリーならばという場面はあった」

情愛深く、身内には寛大で優しい悪魔グレモリー。他の悪魔はイマイチ信用できないが、遙か昔からそうあり続けてきたグレモリーであれば……と考える者もいるということか。

「さすがに初代さまも『悪魔の駒』のことまでは予想されていなかっただろうが、結果としてグレモリーの者は強い下僕を集めやすくなった。その土壌を積み重ねてきたからな」

父上はそう言うてから、ニタリとスケベ親父のような笑いを浮かべた。

「グレモリーの男は妻に頭が上がらない。これも積み重ねてきた評価だ。……お前もグレモリーの男、レイヴェルくんを立てるのだぞ」

「父上のように尻に敷かれると?」

「言っただろう。ヴェネラナもベッドの上では可愛いものだ、と」

ふむ、と考える。グレモリー家が婿を迎えた場合は良い。もとよりカカア天下の家と知って婿入りしてくる夫だ、次期当主の妻に頭が上がらず言いなりで結構。

だが、他家から嫁を迎えたときは少し問題だ。グレモリーの当主が他家からやって来た妻の言いなりでは困る。妻を通してその生家が、グレモリーからむしり取ろうとするかもしれない。

「だいぶ遠回しになったが、お前が今考えているだろうことを問題としないのが『グレモリーの魔力特性』だ」

じつと聞く姿勢を取る。

「グレモリーの魔力の特性は二つある。魔力量に恵まれやすいことも含めると三つになるが」

特性が三つ。なかなか豪勢なことだ。

「魔力量のこと以外は、耳にしたことがありませんね」

「そうでなくては困る。余所にはもらさぬ秘密の特性だからな」

我が家がそうならば、他の家にも秘した魔力特性なんてものがあるそうだ。

「グレモリーの魔力はその者に『女性の愛を得る術を与え』、『求める宝へと導く』特性を持っている」

ほう、と息を吐いた後、口元がニヤついたので自覚した。

女性の愛を得る術を与えてくれる魔力、なんと素晴らしい特性なのか。ベッドの上では何の役にも立たない消滅魔力とは大違いではないか。

「この女に関する特性は祖先からの経験上、性交の際に自覚するものようだ。だから、お前にグレモリーの特性が受け継がれているのかどうかを確認したかったのだ」

なかなか遠回りだったが、ようやく父上が息子とその嫁の初行為をのぞき見した理由が出てきた。

ここまですごい遠かったからか、俺の内のグツグツとした怒りは冷めていて、その理由をすんなりと心が受け入れた。

「嬉しそうな顔をしていますね、父上」

「ああ、嬉しいとも。初代から続くグレモリーの力だ。これを次代に継いでいくこと、その肩の荷が少し下りたのだからな。ほら、お前も飲め。これほど嬉しい日は久しぶりだ！」

心底ホツとした様子で、上機嫌に秘蔵の酒を進めてくる父。

その杯を受け取って、グイと傾ける。

「まだ舌が子供だったようです。……それにしても兄上がいるでしょうに」

俺は父・ジオテイクスの次男だ。性交によって自覚するというのなら、既に子供のいる兄が知らぬはずがない。

「サーゼクスには伝えていない。あれは、いつの間にかグレイファイアと会っていたようだな。当時の事情もあったが、気づいた時にはルシファーとなっていて、その機会がなかった。……その後も、もし聞いてくることがあれば、と待っていたのだが特に何も言っていない。グレモリーを出てルシファーとなった以上、こちらから我が家の秘事は明かせない。かと言って、魔王の寝所を探るわけにもいかんだろう？」

魔王ルシファーの寝床を盗撮する父上、そんな姿は見たくないものだ。ついでに普通にヤバイ。

「それに……サーゼクスはグレモリーの魔力を受け継いでいないのか

もしれない」

「髪はグレモリーの紅ですが」

「お前はサーゼクスの真の姿を見たことがなかったか……」

「真の姿……ですか」

「人型に凝縮した莫大な消滅魔力の塊。それがサーゼクスの本当の姿だ。アレは、バアルの力、滅びのオーラの化身とも言うべき存在だ。そこにグレモリーの魔力の混じる余地がなかったのかもしれない」

戦の時代故のことかもしれない、とこぼし父上はちびりと酒を舐める。

「お前もバアルの力が強く現れていたのも、もしや……と恐れていたのだ。我が家の特性がバアルに飲まれて消えてしまうのではないかと」

父上は本当に嬉しそうだ。だからと言って、レイヴェルとのことを根掘り葉掘り聞かれても困るのだが。

何が悲しくて父親に、初体験の詳細を話さねばならないのか。俺は話さず。

「そうか……少し残念だが。女の身体の声が聞こえる、そのことが分かっただけでよしとしよう」

「それだけでお願いします。ところで、女の尻に敷かれても問題ないということと、この魔力の性質の関係ですが」

「まあ、既に分かっているだろうと思うが、傍から主導権を妻に取られるように見えようとも、その心、愛さえ掴んでおけばなんら問題ない！」

ちよつと酔っぱらっているのか、父上はそう叫んだ。ここが多重に防音措置の取られた部屋で良かった。

ただその言うところは分かる。一見妻が仕切っているように見えても、その心が当主の下にあるのならば、その仕切りはグレモリー家のためのものである。むしろ自身の仕事が減るので、やや他家から侮られやすくなることを除けば問題はなくなる。

そしてそのグレモリーの男は牛耳りやすいという侮りさえ、他家の女を引き寄せるためのグレモリーの用意した蜜なのだ。

「これが初代より続く戦略……」

「そうだ。いかに力に恵まれたお前であつても、こればかりは守つてもらう」

割と好き放題させてもらっている自覚はあるし、一万年の伝統と言われては無下には出来ない。ここは大人しく領いておこう。

別に困らんし。つまりレイヴェルに実務を放り投げて、ちよつと叱られつつハーレムハーレムしていればいいんだろう？ サイコーじゃないか。いや、サイテーかもしれない。

「ところで父上、この女の愛を得る魔力特性ですが、グレモリーの女性はどうなるのですか？」

俺に娘が出来たとして、その子が百合百合ハーレムでも形成することになるのだろうか。それはそれで見てみたくなるが。

「グレモリーの魔力の特性は『女性の愛を得る術を与え』るものだ。男のグレモリーはそれを己のものとして振るうが、女の場合はそれを他者に与えることが出来る」

「となると、誰かをとて女性に好かれやすくすることが出来ると……」

「そうなるな。女の場合、自覚がないとこの特性を無意識のうちに自らの愛する男に与えてしまうらしい。お前も娘が出来たならそこをよく注意しておけ。下手をすると、娘の婿候補の周囲が女だらけになるぞ」

「あー……ということはさっさと経験させて、魔力の特性を自覚させた方が良いですね」

「娘にこれぞと思う相手が出来たなら、取り返しのつかなくなる前にさっさとくつつけてしまえ」

「分かりました。……これはなかなか、大変そうです」

娘に彼氏が出来たら、「ほう、お前が娘の……そうか、そうか、ところでもうヤツたのか？ 何イまだだど!? さっさとしろよこのヘタレ野郎」とか言わなきゃいかんのか。

なかなかキツイな。でもそうしないと、娘の彼氏がハーレム作ってしまうということに。うーむ、難しいぞこれは。

「もう一つの『求める宝へと導く』特性だが、これは実は本当にあるのかハッキリしていない。その運命や因果律に干渉するその性質上、これだと言える証拠がないのだ」

「運命に因果律とは、それはそれで壮大ですね」

「お前の場合は……あれかもしれないな。たまたま気晴らしに行った人間界の地で、偶然殺される寸前の墮天使幹部の娘に出会ったりしたらどう」

「よく考えるとすごい偶然ですね」

「そういった偶然を拾い集めてくる魔力なのだと考えられている。こちらは他家に知られてもあまり問題はないが、あてにされても困るのぞな」

偶然を引き寄せる力か。意識して使えないとなると、これはもう本当に運任せだな。まあ、俺の場合は赤龍帝のそれと合わさって墮とした頃の美女・美少女と出会いやすくなるのならラッキーといったところか。

「グレモリーの者は求めている何かに関して運が良い。なんだか分からないが引きが強い。そう思わせておけば良いと」

「そんなところだ」

その後、上機嫌の父上の酒にしばし付き合った。

そこでついでのように、「魔力特性の練習相手として、お前の好みそうなメイドを配置しておいたのでよく励みなさい」と言われたのだ。

なんでも俺の魔力量は、真なる姿の兄上を除けばグレモリー史上でもぶつちぎりの最大値なので、加減を覚えないと相手の女性が壊れてしまうかもしれないのだとか。

まったく、ここまで用意してくれるとは、我が父上は最高だな!!

そういえばはつきりとは言われなかったが、父上はあれか、俺がレイヴェルを壊さないようにかぶりつきで見っていたのか……？

うーん、メイドさんで許す!

1-10 『女王』の価値（上）

レイヴェルの兄ライザー・フェニックスは妹のことをこんな風に語っていた。

「レイヴェルは親しくなると礼儀正しく丁寧に接するが、本当のところは相当なワガママだ。特にすぐに『ずるい』と言って他人のものを欲しがる癖がある」と。

親しい間柄になれば、さほど身分を気にせず付き合うことが出来る。逆に言えば、関係の浅い格下の者に対しては、貴族らしく上から目線で傲慢に接するのがレイヴェル・フェニックスという少女だ。

他者の持つものを羨み、憧れ、欲する。それは一概に負の感情とは言えない。悪魔であつても人間であつても、それは一種の向上心と捉えることも出来る。

幼い頃には、憧れたものを手に入れる方法を思いつかず、ただはしたなく地団駄を踏んでワガママを言っていたかもしれない。成長しても親しい者に対して、ある種の甘えの表現としてそれをする事があるかもしれない。

ただある程度の知恵と、内心はともかく外面を取り繕う分別がついてくれば、より上手い方法を考え実行するようになるだろう。憧れを己のものとするために。レディならばエレガントに、レイヴェルの母は少女にいつもそう言っているらしいのだから。

なんにしても、俺はもうレイヴェルを手放すつもりはない。それにどちらかというと、少しくらい性格に問題のある娘の方が好みのような気がしてきている。

それにまあ、そう問題があるとも思えないし。俺も他人のものをとるのは好きだ、とられるのは大嫌いだ。階級的に格下のメイド相手に横暴な権力者プレイするのも大好きだ。

同格のレイヴェルとイチヤイチャするのも大好きだ。少しくらいのワガママはたぶん可愛いだろう、絶対。

ふむ、やはりまったく問題ないな。いや、これもグレモリーの血の呪いのせいかな？

「お父様!! どうしてダメなんですの!?!」

ここはグレモリーのそれに負けない広い広いフェニックス家の屋敷の一室。ほとんど城と言ってよいその屋敷に、レイヴェルの声が響いた。

彼女は地団駄を踏んで、プンスカと父親に詰め寄っている。

「しかしなあ、まだなあ、早いだろう? なあ?」

父と兄が三人。一人娘で末の妹として男の家族から可愛がられて育ったレイヴェルは、家族だけの状況では結構ワガママ放題言いたい放題である。

そんなこともあつて、娘に甘いフェニックス侯爵は自身の妻、つまりレイヴェルの母へと助けを求めた。

「レイヴェル」

「お母さま、でもー!」

男性親族には基本強気のレイヴェルも母には頭が上がらない。

そのはずの娘が反抗的な態度でムムツと口を結び、父親を睨みつける姿に侯爵夫人は「困った子ね」と頭を撫でてから、きつちりと侯爵の方へと身体を向けさせた。

「私は構わないと思いますわよ」

「お母さまー!」

よし、母親は味方だ! 喜色を浮かべる娘の後ろから、その両肩に手を置いて夫人は侯爵と向き合った。

一対二の状況。侯爵の顔に焦りの色が浮かぶ。

レイヴェルをグレモリー家次期当主リヴラクス・グレモリーの眷属とすること。侯爵とてそれを厭うているわけではない。将来的には良いと思っている。だが、そう、まだ早いのだ。

悪魔の寿命は長いが、子供でいる時間は人間のそれと大差ない。精神はともかく、姿かたちが自然に子供である期間というものは、ものすごく希少で貴重なのだ。

「いや、父上……俺を見られても。その、困る」

「ライザー！ お前は、レイヴェルのこの一番可愛い時期をこの私のもとから遠ざけるのに賛成だというのか！」

リヴラクスと親しいということ、他の兄二人と違って家族会議から逃げられなかったライザー。迷惑そうに「はあ……」と息を吐いた。たしかにライザーとて妹は可愛い、別に今生の別れというわけではない。魔力を用いて転移すれば、グレモリー邸などすぐに会いに行ける距離でしかない。

それにリヴラクスはよくライザーを訪ねてくる、そのときにレイヴェルも一緒に来るだろう、とも思っていた。

さらに言えば、学校などが同じになる世代の少なかつたライザーは、年齢の近い男性の話し相手が少ない。だから、年下ではあつても既にその魔力が魔王級を超え、成熟した際にはおそらく超越者と認定されるだろう怪物から「先輩、先輩スゲーっす。尊敬してます」といった態度で慕われて悪い気はしていなかつた。いや、正直非常に気を良くしていた。特にその理由が女の扱いについてというのが、ことさらに機嫌を良くしていた。

もつとも、ハーレム道について教えた相手の最初のハーレム眷属メンバーが自身の妹というのはやや複雑なのだが。

「ライザーお兄さまは、リヴラクスさまと親しくされていますわ！」

だから、私の味方ですよ？ と見てくる妹にライザーは頷いておいた。やや複雑ではあるが、見知らぬ交流もない相手のところに行くわけではないのだから。

「裏切つたな、ライザー!!」

「父上、さすがにそろそろ見苦しいかと」

「ここには家族しかおらん！ だいたい、その、なんだ……レイヴェル。別にそこまで急ぐ必要はないだろう？」

長い時を生きる悪魔にとって、数年など瞬きのこと。既に長い年月を生きてきた侯爵にとっては、そんな認識になる。

「お父さま、私はあの方の一番になりたいのです！ 先手必勝ですわ」「一番最初に眷属になることに拘らなくともいいだろう」

「いいえ、いいえ。ライザーお兄さま、リヴラクスさまはどのような眷属を作りたいかと言った話はされていませんでしたか？」

そりゃ、ハーレムだろう。ライザーはそう思ったが、それをそのままを言うのもためらわれた。そこでリヴラクスがハーレム以外について話していたことを思い出して答えた。

「アニウエを参考にしつつ、いずれ来るだろう白龍皇との対決に備えたいと言っていたな」

妹とリヴラクスが結婚すれば、ライザーは義理の兄なのでアニウエだ。実際、ここに来る前にこちらの状況について通信で聞かれたときにそう呼ばれていた。

サーゼクス・ルシファーもリヴラクスの実兄なのでアニウエだ。ライザーは、何の嘘もついていない。

「そうですね！ 赤龍帝と白龍皇の戦いは必ず起きること。それに備えるためにも、きつと眷属を素早く集められるはずですよ。もたついでには出遅れてしまいます」

白龍皇アルビオンは、赤龍帝ドライグのライバルだ。今はどちらも聖書の神によって神器に封じられてるが、かつて龍の身で争い合っていた頃の因果の名残なのか、いつの時代もその二つの神器の所有者たちは争い続けてきた。

リヴラクス・グレモリーは純血の上級悪魔にしては非常に珍しく、己の武力の追及に熱心なことで良く知られている。まるでとにかく早く強くならなければ生きていけないとでも考えているかのようには、彼はその魔力の増大に余念がなく、消滅魔力の使い方に最も精通している者の所へと足しげく通って研鑽を積んでいた。

悪魔の貴族の中ではそういった努力や鍛錬を優雅ではないと侮蔑する傾向が強いが、ことリヴラクスに関しては「まあ白龍皇が襲ってくるのと分かっているなら仕方ないね」といった扱いだ。あれだけの魔力を得ていながら、何を弱気なことをドンと構えていれればいいと臆病さを笑う者もいることはいるが。

「白龍皇との争いに備えて……赤龍帝故の性か^{さが}」

むむむと唸る侯爵に、レイヴェルが追撃を放つ。

「私は『女王』が欲しいのです！ バラキエルの娘なんかの下に付きたくありませんわ！」

今ならまだ空いているのだ。『王』が従える十五の駒の内、たった一つだけの王の対となるべき最強にして最重要の駒が。

それをもしも、ここで忌々しき墮天使幹部バラキエルの血を引く女などに持つていかれたら、レイヴェルはきつと一生それを羨んでしまう。ずっとずっと、あれが欲しかったのに……と思いつながら過ごすことになるだろう。そんなことになったら、悔しくて悔しくて頭がおかしくなりそうだ。と、ギャンギャン地団駄を踏む娘の姿に、侯爵はため息をついた。

「バラキエルと人間の間生まれた娘か。グレモリーが身柄をおさえているとは知っていたが……眷属として従えられる状態なのか？」
「そうおっしゃっていましたわ。眷属に迎えるつもりだと」

墮天使幹部バラキエル。その名は悪魔の中にあっても大きい。かつての大戦でバラキエルの雷光に殺された悪魔は数知れず、その武力は墮天使総督アザゼルに勝るとも劣らぬほど。現在の墮天使組織における軍部のトップだろう。悪魔の組織にあてはめれば、それは魔王アスモデウスに相当する地位だ。

そんなバラキエルの娘となると、当然ネームバリューも大きい。悪魔に転生したならば、それだけで即座に二つ名の付きそうな存在だ。フェニックスの娘を『女王』に据えるよりも、断然インパクトは強いだろう。

「墮天使の光力は怖いな。それもあの『雷光』直系となると相当な威力だろう」

「それに、聞いたところでは母親は日本の退魔の名門出身だとか」

「光に退魔か……もしレーティングゲームで当たったらと考えるとゾツとするな」

現在、悪魔の戦闘遊戯レーティングゲームに取り組んでいるライザーが、バラキエルの娘のゲームにおける恐ろしさについて考え始めると、レイヴェルからさらに追加の情報が飛んできた。バラキエルの娘を飼っている本人からそう聞いてきたのならば、まず間違いあるま

い。

レーティングゲームは悪魔の競技だ。参加者は全員悪魔である。そこに悪魔の弱点を突く、光力と退魔術のハイブリットなどを放り込まれたらたまったものではない。しかも両親のどちらもそれぞれの血統のトップクラスとなれば、なるほど『女王』に据えてもおかしくはない。

「お父様、嫌ですわよ、私。墮天使が『女王』になったら、それに頭を下げて暮らすんですの？ それに墮天使の指揮に従って戦えと？」

『女王』の駒の眷属は、副官としての役目を持つ。『王』不在の状況では、『王』に代わって他の駒の眷属を従え指揮する立場だ。眷属内での序列が明らかに他の駒よりも高く、尊ばれる存在である。

「うぬぬ……ならば、眷属にならなくともいいだろう。結婚と眷属入りは別の話だ」

当たり前だが、別に結婚相手の眷属にならなければいけないなどという決まりはない。

ただ、現在の悪魔社会の女性には夫の『女王』というものに憧れを持つ者がかなり多いことも確か。魔王サーゼクス・ルシファーとその『最強の女王』グレイフィアの馴れ初めの物語は、悪魔の女性に広く親しまれている読み物だからだ。

「嫌です！ 絶対に『女王』になりますわ！」

基本的に、どこかの『王』の眷属となった者は、その『王』の下に在ることになる。その時点でほぼ家を出たも同然だ。夫がグズグズとしている理由はただそれだけ。

娘が可愛いのは分かるけれど、とジタバタする娘を抑えながら侯爵夫人はこめかみをもみほぐした。

「レイヴェル、どうしてそう思うのか。きちんと話さない。こんなはしたないことまでしているのですから、それなりの理由があるのでしよう。まさか、グレイフィアさまに憧れたからなどとは言いませんよね？」

母にそう言われたレイヴェルは、少し顔を赤くしつつゆっくりと話し出した。

「別に、グレイファイアさまだけを特別意識しているわけではありません。ただ、私は昔、英雄譚が好きだったのですが」

ええ、と頷く母を見上げ、レイヴェルは続けた。

「神話や伝説の英雄たちの物語に心躍らせて、ああ、こんな英雄を支える女性になりたいと、ずっとそう思っておりましたの。それで、あの時、あのレーティングゲームのフィールドの全てを飲み込んで……それでも止まらなかったあの滅びのオーラを見て、あの方なら私の英雄になって下さるのではないかと憧れを抱いておりました。それが、今回現実になつて、なりそう、どうしても小さなころの夢を叶えたいと……」

神話や伝説の英雄とは血なまぐさいものだ。武器を手に取り、知恵を巡らせ、敵や怪物を殺して、財宝と姫君を手に入れる。

人の歴史に語られる英雄の大多数もそう。英雄とは戦場で生まれるのだ。殺した敵の数、流した血の量、征服した土地の広さこそが英雄の偉大さを証明する。

無論、そうではない英雄もいるだろう。

だが、破壊の力に魅せられたレイヴェルの求める英雄は、きっと武力と知略で敵を滅ぼし制圧する英雄なのだろう。現代の悪魔社会において最も知られ讃えられている英雄達——古き魔王の勢力を武力によつて追放した四大魔王のような英雄を。

（レイヴェルの本質は覇道のようなね。それは武と知をもつて世をその手中におさめる道。見込んだ男を支え、英雄に、霸王にしたいという夢……それもいいでしょう。リヴラクスは神や魔の力の源である人間の魂を持ち、赤龍帝の神器を宿した古き魔王を超える魔力の悪魔……あるいは五番目の魔王『龍の魔王』となるかもしれないから）
その後、夫人の説得によりフェニックス侯爵は折れた。

1-1-1 『女王』の価値(下)

今日はレイヴェルと再び会える。ライザー義兄さんからフェニックス家の様子はおおまかに聞いていたので、何の心配もいらぬ。

ふふふ、しかし可愛いではないか。俺の『女王』になりたい！ なりたい！ と言つて駄々をこねるレイヴェル。しかもそれが、俺を全力で支えたいからだなどと……朱乃のことを気にしているのも良い。

まったく可愛い、可愛すぎてビンビンになつてしまう。思わずまた朝のイラ立ちをメイドに慰めさせてしまった。

午後からはレイヴェルとそのご家族御一行がやつて来るというのに、困つたものだ。

ポーつとした表情で、美味しそうに俺のモノをしゃぶつて居るのはまたあの角メイドだ。グレモリーの魔力の練習がてらこねくり回してやつたら、最後には「孕みたくない、孕みたくない」と言いながら俺のモノを股に啞え込んで必死で腰を振つていた。孕んだらちゃん和孩子と一緒に開拓地に送つてやると言っただけなのに「離れたくないんです。ああ、若さまのおそばに置いてください」などと言いながら、孕むための行為を止められないという、なかなかのことをしてくれた。

まったく、年齢五百を超えて経験人数不明だなんて言つていたのに、貴族の肉棒を受けたのは初めてだなんて、な。

献身的なおしゃぶりで、ググつと来たチンポを口内から抜き出す。そして、そのまま別のメイドに声をかけた。

こちらのメイドは、なんと尻から尻尾が生えている。哺乳類系の尻尾ではなく爬虫類系のそれだ。聞けば母親が転生悪魔の下半身蛇女ラミアらしい。それで下半身蛇にならずに尻尾がついてくるとは、異形の交わりとは摩訶不思議だ。

しかし、これは良い。父上は俺が適度に毛色の変わったメイドを求めていることをよくわかつていらつしやる。大変すばらしい。

というわけで、尻尾でスカートを持ち上げさせてぶち込んだ。蛇尻尾メイドを味わい鳴かせながら先ほどの角メイドを見やると、泣きそ

うな顔で、いや泣いているな。大変切なそうにして、涙をこぼしながら自身をなぐさめていた。

ああ、イイ。イイ。思わず尻尾メイドへの行為が激しくなってしまう。それに応えるかのように、尻尾がこちらの腰に巻き付いてくる。注意してやると、この巻き付きは求愛行動の一種で自然とそうなるので、どうか許してほしいなんて言ってくる。そうか、そうか、腰を振ってしまうことと同じか。ならば仕方ないな。

ぎゆうぎゆうと巻き付いてくる尻尾と、それと同じようにいくつもの細かい輪が締め付けてくるような膣内を存分に楽しむ。そして、尻尾メイドを何度目かの絶頂に押し上げたところでフィニッシュ！

うーん、清々しい朝だ。未だ巻き付いてくる尻尾を外させ、ズルリと逸物を抜く。そしてそれを、角メイドにお掃除フェラさせた。

実に媚びた顔で掃除してくるではないか。ふう、でも今朝はこれまでだ。レイヴェルが来る日だからね。

そう言って風呂に行こうとすると、あろうことかだらだらと垂らして大泣きする始末。角メイドの躰はまったくついていない。

やれやれこれは仕方ないなと、俺がわざわざオシオキックスしてやらねばならなくなってしまう。これもご主人様の務めだ、まったく大変だな。

入浴と朝食を終えたがまだ時間はある。今日の予定はフェニックス家のために空けてあるので、勉強やらがなく余裕があるのだ。

「朱乃の様子でも見てくるか」

使用人を従え、監禁部屋へと向かう。このグレモリーの屋敷はほとんど城、いや町のレベルの広大さを誇っている。なにせ地下空間だけで単位：東京ドームで十以上あるのだ。その上の建物は地下よりも広く、外庭も含めるとどうしてこんなに敷地を取っているのか訳がわからないくらいだ。

「リヴラクスさま」

途中で声をかけられた。メイド服の義姉上だ。義姉上は、近頃めつきり俺の部屋に寄り付かなくなった。風呂で出くわすこともない。

まあ、手出しはするなということだろう。当たり前だな。でも

なあ、そのうちなあ。

「どうかしたか？」

「あの墮天使の娘のところへ行かれるのですか」

「少し様子を見てくるだけだ。何か問題があるか？」

「いえ、本日はレイヴェルさまがいらっしやるとのことでしたので」

「分かっている」

さて、それでは改めて向かうかというところで、ふと思い出した。

「そういえば、グレイフィア。あの時の服はどうしたかな」

「あの時、ですか？」

「レイヴェルとの婚約が決まった日の服だ」

あのグチャグチャになったエロ服だが、朝起きてそのまま風呂に行って、その後を見ていなかった。

「保管してありますが」

「ああ、それなら造りを確認して、同じものを用意できるようにしておいてくれないか」

「かしこまりました。理由をお聞きしても……？」

「ん？ 何十年か経った頃に、初心を思い出すのに役に立つかもしれないとな」

「初心……あつ」

義姉上の赤面顔とは珍しいな。目を見開いて、その発想はなかったといった感じだ。

「成熟すれば肉体年齢を操作できるのだろうか？」

「ええ」

「なら、グレイフィア。レイヴェルと同じ年頃だった時の姿になってみてくれ」

「はい、分かりました」

するすると変化していく義姉上の姿。ほほう、だぼだぼメイド服銀髪美少女……これもまたよし。カメラを亜空間から取り出すのは、やめておくか。

「時々、出会ったころの姿になってみるのも新鮮でいいかもしれないということだ」

「なるほど……参考に致します」

そう言つて頭を下げた義姉上は、そのまま歩き出して転がりそうになった。うん、背丈戻さないかね。

やれやれ、兄上は今夜ロリ義姉上を美味しくいただくのかな？

朱乃の部屋はグレモリー家の奥深く、かつての大戦中は捉えた敵を監禁していた区画にある。今はそうでもないが、当時は情報を吐かせるための拷問なども結構やっていたらしい。怖いね。

俺なんか痛みに耐性がないから、すぐに根を上げてベラベラしゃべってしまうと思う。間抜けにも捕らえられそうになったら、さつさと自分自身を消滅させた方がいいのかもしれない。

とはいえそんな歴史も今は昔、この区画の表層はだいぶと感覚的にマシになっている。

俺と係の者の魔力に反応するようになってる扉をガチャリと開くと、前世感覚でビジネスホテルの一室程度の内装の部屋だった。ただし無駄に広い。

「あつー！」

この部屋の唯一の住人が、俺の顔を見るなり満面の笑みを浮かべて鎖の音と共にタタタと走り寄ってくる。

「リアスき……きゃん」

俺はそのカラスのような黒い翼を背負った少女の頬を、手の甲ではいたいた。少女は吹き飛ばのように床に転がり、その手足に付けられた大戦期からの遺物である重そうな光力封じの枷がゴトリゴトリと音を立てる。

うずくまり、うるんだ瞳で俺を見上げる長い黒髪の少女。その傍らに近寄ると、鎖付きの首輪を引っ張って起こしその耳元で、

「そういう態度は二人きりのときだけだ」

そう囁いてから突き飛ばす。突き飛ばされ、背の大きな翼を床との間に挟んで仰向けに倒れた少女を蹴り飛ばすと、俺は使用人に手振りで合図した。

静かに頭を下げ、扉を閉めて出て行った使用人は、これからしばらくこの監禁区画の入り口で待機だ。

「朱乃、いつになったら覚えるんだ」

「ごめんなさい」

両脚の間に朱乃を置く様にして、ソファに深く腰掛ける。そうして、彼女の黒い翼を弄りまわすのがいつもの俺の行動だ。

やはり人型異形の人間とは異なる部位というのは、実に興味深い。レイヴェルも羽の付け根あたりをくすぐったがっていたが、これは朱乃も同じだ。

最初の内はこの翼を出したからなかったので、割と強引に強制していたものだが、最近の朱乃はいつも出しっぱなしだ。正常位は難しいかな？ 翼が痛いかもしれないし。やはり鳥系は、バックが基本か。「使い魔はどうした？」

この部屋に常駐させているはずの俺の使い魔が見当たらない。ちよつと朱乃の手入れに使おうと思っただが……ふむ、召喚するか？

「まって、よばないっで」

「ん？」

「さつき食べて、その……まだ中、だから……」

「全部使ったのか……ちゃんと分けろって言ってるだろ」

耳を真つ赤にしている朱乃の様子に、ああ使用中かと納得する。衛生スライムくんは、囚人の衛生状態を保つために研究所で開発された人工生物だ。このスライムの開発により、危険な囚人を入浴させたり拭いてやる手間が省かれたと看守たちに大人気の使い魔である。ほつといて臭くなるのも困るしね。

トイレもな、昔は牢屋の隅にツボなんてアレだったらしいが、それはどうかと水洗トイレにしたところ、その穴から下水に逃げ出すとかいう荒業をこなす囚人が現れて廃止になってしまった。魔力つてスゴいわ。胎児段階まで小さくなれるんだもの。

ちなみに衛生スライムくんは、ぐつと引つ張ると分裂してそのまま死んだりもしないので、普通は用途別に分けておくことが多い。それをこの娘ときたら……。

「おつきい方が……あつ、ごめんなさい！ ダメ、まって、やめてえ、

出ちやうから、おねがい♡」

そんな朱乃のお腹を後ろからぎゅつと抱えてやると、どんな目にあわされると思ったのか、熱のこもった声で嘆願された。なんというか、口ではダメと言っているのに実際はやってほしいという態度だ。(どうしよ、どうしよ見られちやうよ♡)(やだ♡ そんなの、そんなの……んんっ♡)(ハア、ハア、あん♡)

朱乃の身体の期待には残念ながら応えられそうもない。前からこの娘はDMなのではないかと思っていたが、グレモリーの魔力で探ってみると案の定である。そしていきなりレベルが高い。裏ボスか。

俺はおトイレ替わりをしている衛生スライムくんを押し出して観察してやるような、圧倒的に高度な趣味にはまだ到達していないのだ。ちなみに、さっきの叩いたのも、突き飛ばしたのも大喜びしていやがった。強い。

「しかし、朱乃も大きくなったな」

ハイレベル過ぎる女体の欲求を放置して、俺は話題をサクツと変えることにした。拾ったころの朱乃はガリガリに痩せていて、ろくに洗えていなかったのか肌は汚いし臭いしガサガサしているし、髪もボサボサのパサパサ。それはもう見られたものではなかった。そんな状態でも、あつこイツちゃんとすれば可愛いわと分かるレベルの美少女だったのだから大したものだ。

ちゃんと食べさせ、風呂は……メイドたちが怖がるので衛生スライム君で代用し、俺の訓練に付き合わせて運動させた。ヒマだろうから冥界のテレビを用意し、シーグヴァイラからの布教品やらアダルトなチャンネルやらを見えるようにして学習させたりもした。

その結果がこのたわわである。俺と年齢が変わらないはずなのに、実に発育が良い。たわわのサイズは既にリングくらいはあるだろう。これはきつとメロンまで成長するに違いない。ゴクリ。

背も高くなった。人間の場合、女の方がこの時期の成長が早いと聞いた覚えがあるが、ちよつと俺より背が高いのが悔しい。

「うん、リアスさまのところに来てから、ご飯食べられてるからかな」逃げられないようにと朱乃に付けたゴツイ首輪から伸びる鎖。そ

れをもじもじといじりながら、ポツリとこぼした。

「髪、梳かしてやる」

随分と伸びて、綺麗になった黒髪に亜空間から取り出した櫛をあてる。毛先の方から少しづつ整え、徐々に頭頂へとシユリシユリと進めていく。

「うんー」

朱乃は髪を梳いてやるととても喜ぶ。母親が生きていた頃によくやってもらっていたかららしい。俺としても創作世界ではよく見かけても、現実にはそうそうお目にかかることのなかった黒髪ストレートロングサラサラを堪能できるので大満足だ。梳き終わった後で、手櫛でサーっとやるのがいい。指と指の間って気持ちいいよね。

朱乃は実の父親であるバラキエルから虐待を受けていた節がある。元々、バラキエルと朱乃の母との出会いからして怪しいのだ。

朱乃の母・姫島朱璃は退魔の名門姫島家の、まあ巫女のような者だったようだ。その巫女のところへ、どういうわけか大怪我をしたバラキエルが迷い込んだ。優しい性格だった朱乃の母は、この鬼畜墮天使をそうとは知らずに助けようとしてしまった。治療に要した時間を通して朱璃は次第にバラキエルにほだされて行った。それが肉欲に染まって天より堕ちた黒い天使毘だとも知らず。

果たしてバラキエルは鬼畜ドS巫女スキー墮天使であった。油断した朱璃の隙をついて彼女を誘拐、あらかじめ僻地に用意していた家屋へと監禁。そしてそこで行われたであろう調教の数々。

朱乃を連れてきてから調べさせたところ、かつて朱乃が住んでいた家には調教部屋が存在していたのだ。「この部屋……知ってるよ。絶対に入っちゃダメって言われてた。でも、夜に目が覚めた時、母様もあの男もいなくて……それで探してるところから……おとお、おとおってあの男の叫び声が」様々な拷問器具のようなものが並んだ部屋の映像を見せたときの朱乃の表情はなかなかのものだった。

そうして、バラキエルに屈服させられた朱璃は朱乃を生んだ。日本の神に仕える巫女が、異教の邪悪の子を産み落としたのだ。もう実家には戻れまい。

そうして始まった三人での生活は朱乃が子供から大人へと変わる
移り変わりの時期まで続いた。バラキエルは長期間家にいないこと
が多く、母娘だけで過ごす時間も多かったとか。たまに帰ってくるバ
ラキエルを朱乃は慕っていたが……それすらも次のターゲットへの
バラキエルの仕込みだったのだ。

巫女スキーに近い性質を持つと思われる同志シスタスキーこと
ディオドラ・アスタロトに朱乃の事情を相談してみたらそう推測して
いたので、きつとそう。

「狙った獲物のところへ、あえて大怪我して転がり込む。そして獲物
の優しさに付け込んで誘惑し、居場所をなくして自分のモノへと墮と
す。墮天使もやるものだよね。さすがに幹部ともなるとき。参考に
させてもらおう」

と、こんな風にディオドラはバラキエルを評価していた。

ほとんど二人だけ、たまに父親が帰ってきて三人。そんな朱乃のや
や寂しくも一見穏やかな生活の終わりは、朱乃が十歳になった頃に訪
れた。

バラキエルを憎む者たちが家を襲撃してきたのだ。元々はその日
は家にバラキエルが居る予定だったらしい。バラキエルを憎む者た
ちはそこを狙って襲って来た。

しかし、バラキエルはその日、家にはいなかった。急に用事が出来
たと言って出かけてしまったのだ。

そして、襲撃者たちの怒りはバラキエルの娘である朱乃へと向けら
れた。邪悪の子を寄せせと迫る襲撃者、子供は渡さないと庇う母親。
襲撃者は、墮天使に汚された者として朱乃の母を殺した。

そうして、次は朱乃の命が——というあまりにも絶妙なタイミング
でバラキエルが戻ってきた。襲撃者たちは皆殺しにされ、朱乃は混乱
し恐怖し、一人で家を飛び出しバラキエルから逃げ出した。十歳の女
の子の孤独な放浪が始まった。

「母さまの誕生日について貯めてたお金はすぐになくなっちゃって……
いつもお腹が空いてた」

「住むところも、ないから、雨の日は屋根を探してあるいてずぶぬれに

なつて、震えてた」

「そのうち、霊を払う術で人間からお金を恵んでもらうことを覚えて、それでなんとか生きてた」

「何度もね、教会……神様を信仰してる人たちや、お寺のお坊さんに殺されそうになつて……ずっと逃げ回つて」

「姫島の、母さまの家の人が私を殺しに、来て、やっぱり逃げて、痛くて、寂しくて、悲しくて……」

「それで……リアスさまに捕まつたんだ！ それからはご飯も、屋根も、服もあるし、悪魔の人からは睨まれるけど……リアスさまが撫でしてくれるから、寂しくないよ！」

一年半くらい続いたらしい孤独な逃走生活。朱乃にその時のことを聞いたら、こんな風に言われた。

俺が朱乃と出会つたのは本当に偶然だった。当時、《赤龍帝の籠手》が出現してからの環境の変化でクサクサしていた俺は、父上の眷属の一人であるアグリツパの誘いによって人間界のT県のとある町にやつて来ていた。

冥界とは違う、前世の記憶のままの空。空気も違う。それにありがちな街並み。ああ、ここは前世で過ごした世界だ。そう実感した。

そうして改めて、世界の成り立ちなどを何も知らなかった頃に、リバーシだのトランプだのお金を稼げないだろうかと考えていたことを思い出して恥ずかしくなつた。あるよ！ そんなのあるよ！ この世界！ 俺つてただ単に人間として死んで、地獄（冥界）行きになつただけじゃん！ ハツズカシッ！

その地で俺はリフレツシユタイムを満喫していたのだが、少し問題が起きた。アグリツパの部下が契約した人間が悪霊に憑りつかれたのだ。

亡くなつた親しい者と話がしたいという人間に、霊と話す力を一時的に与えてやつたのはいいのだが、アフターケアを怠つたためにその人間が悪霊に話しかけて殺されそうになつたのだ。それを通りすがりの墮天使らしき者が助けたらしく、アグリツパの面目は丸つぶれ。

で、その話を聞いた俺は、それまで墮天使を見たことがなかったの

で、ひとつ捕まえてやろうと考えた。それから墮天使はどこかなとハンター気分で歩いていると、なんでも日本の術者集団が接触してきたという。

あちらも例の墮天使の娘を探しているようですと伝えてきたアグリツパに、じゃあ一つ競争にしようと話して、そこから俺と姫島家の連中のハンティング競争が始まった。

ルールとしてアグリツパとその部下たちは手を出さないことになったので、こちらは俺一人。姫島家の連中はたくさん。それで殺しはなしの妨害ありルールでは、俺が出遅れてしまったのは仕方ないことだろう。

ただ、結果としてあちらがモタモタ会話なんぞをしているうちに、横からかつさうらうことに成功したのでヨシとしよう。

「返せー」とかいろいろ喚いていたが、返したらどうするのか聞くと「殺す」なんて言う。今は小汚いが、磨けば可愛いだろう少女を殺すなんてとんでもない。

で、まあそこにアグリツパが出てきて何やら話し合いになり、最終的に朱乃は俺がペットとして飼うことになったワケだ。

朱乃は抵抗しなかった。俺が魔力を開放しながら首根っこを掴んだ時点で、すぐにくたつと大人しくなって言うがまだまだだよ。

その威嚇の意味もあつてオーラを広げたときに、近辺に朱乃と同じ光力の気配を感じた。それも朱乃よりも遥かに強大な力の気配だ。後々、アグリツパ経由で姫島から聞き出したところ、どうやら彼らが朱乃を追い詰め、あと一歩で殺せるところまで行くたびに、毎回覆面姿の強力な墮天使による邪魔が入っていたらしい。

「それってつまり、死なないギリギリのラインで娘を追い詰めて観察してたんじゃないかな。バラキエルさんが」

「いや、スゴイよ。墮天使じゃなきや尊敬しちゃうね。巫女をさらって調教する手際、さらに自分の血を引いた娘にも向けられるその加虐嗜好。さすがに年季が違うよ。ボク程度じゃ足元にも及ばないね」

といったデイオドラの推測を朱乃に語ったところ、彼女の目から光が消えた。

ディオドラの考えが正しいのかどうかは知らないが、朱乃を自分のものにしたかった俺は、

「覚醒前の神器持ちを探し出して、誘拐や殺処理しているらしい墮天使の組織力なら、朱乃一人を見つけて捕まえるなんて簡単だ」

「まして、朱乃の父親は組織の大幹部、その気があればすぐに娘を連れ戻せたはず」

「少なくとも、悪魔の、グレモリーの父上なら俺が家出したらすぐに探して連れもどしに来るぞ？ 前に話して、お前が可哀そうだと言っていたバアル家の従兄にしたって、冷遇されてはいても使用人付きで衣食住に困るようなことにはなっていない。お前の方がずっと可哀そうな扱いをされていたんだよ」

とそんなことを言いながら慰めた。それ以降、朱乃は俺にベツタリだ。母親は邪魔になったからと父の陰謀によって処分され、父親は自分を放置・虐待して楽しむ変態。そんな認識になれば、もう朱乃の寄る辺は俺しかないわけだ。

鬼畜加虐変態墮天使に認定してやったバラキエルには、朱乃からの憎しみを一身に受けてもらうことにしようと思う。なんならお札に、ポテ腹になった朱乃の写真をプレゼントしてやってもいい。

朱乃がキラキラとして目を向ける相手は俺一人でいいのだ。

「寂しかった……」

「ん？」

髪を梳かし終えて、その感触を楽しんでいると、朱乃が少しの非難の色のあふる声をこぼした。

「寂しかったの」

「そうか、最近来ていなかったからな」

「なんで？」

「この頃、朱乃も大きくなって、まあ、あれだ、女の体つきになってきただろ」

朱乃肩越しに胸の実り見つめる。その視線を感じ取って、彼女はブルツと背を震わせてから、もたれかかってくる。

「ちっちゃい方が良かったの……？」

「いや、大きくなってきたから、子供を作りたい気分になっただけだ」
「私と……リアスさまの……」

「でも、悪魔と堕天使は敵同士だからな。そういうのダメなんだ」
「だから……来てくれなくなったの？ 寂しかったのに……」

今日はいさつき二連射してきたから大丈夫だがな！ 勃起するにはしているけれど、我慢は効く。

「あとは、婚約者が出来た」

ビクリとついさつきとは違う震え方をして、朱乃は上半身だけこちらに振り返った。

「結婚……するの？ 誰と!？」

「レイヴェル・フェニックス。俺と同じ悪魔の貴族だ」

朱乃の手が俺の手に添えられた。そのまま彼女は俺の手を自身の胸に導いていく。

気が付いたら揉んでいた。いや、根元から絞るようにしていた。ぐにゆりぐにゆりとくるこの感触、簡素なワンピースの下にブラを付けていないな。まあ、ポッチが浮いていたからそうではないかと思っていたが。こんなこと今までしてきたことないのにな。

まあ、お望みとあらばまったくやぶかきではないが。体勢を後ろから抱きしめる形にして、両手で朱乃のおっぱいの声にそれぞれ応えて、強くぎゅうぎゅうとしてやる。

「ふう……んう♡ せ、せいりゃきゅ♡ けっこ、んなの?」

昔、学校の授業で行った牧場を思い出す。乳しぼり体験。あれを思い出しながらぐにゆぐにゆしている、服越してもハッキリわかるぐらいに朱乃の乳首が尖ってきた。人差し指の腹でそこをこすつてやる。

より大きな喘ぎ声を上げる朱乃の耳に唇を寄せた。

「政略結婚なのは確かだけど、俺はレイヴェルのことが好きだし、愛しているぞ」

「ふうっ、んっうう♡ ひっぐう、ひっうっ♡」

「泣いてるのか?」

揉むのをやめて顔を覗き込むと、ぐるりと身体を回して抱き着いて

きた。俺の胸に顔をうずめてぐずぐずと泣きじやくる、その女の背中をゆつくりと撫でた。

「やだあ、やだ、やだ、やああ!」

ひつしと抱き着いてくる背中に腕を回す。同じように抱き返しながら訊ねた。

「何が嫌なんだ。朱乃」

「捨てちゃヤダあ! あの名みたいにしないで! 離さないで! 近くにいてえっ!」

繰り返し繰り返し言い聞かせたので、朱乃の中での父親、バラキエルは母親を弄ぶだけ弄んで飽きたら人間を使つて処分した男になっている。さらに、朱乃自身もバラキエルによって放置され、過酷で孤独な放浪生活となったのだと。

「離さないし、捨てないから安心しろ。お前が逃げ出そうとしても、どこにも行けないようにしてやる」

「ほんと……?」

ぐちゃぐちゃになった瞳で見上げてくる朱乃。その首に嵌めた首輪の鎖を引っ張る。喉を圧迫されて、嬉しそうにする彼女に、

「ああ、お前が俺のところにはいかられないようにしてやる。雁字搦めに縛り付けてやろう。嬉しいか?」

「うん……嬉しい!」

離れたくないとくっついてくる頭を押して身体と身体の間隙間を作る。そうして、そこに亜空間から取り出した『悪魔の駒』を浮かべる。

「まずは、朱乃を俺の下僕にしてやる。俺の命令に従って、俺のために生きて、俺が許すまで死ぬことも許されない。そんな手駒だ」

「悪魔にしてくれるの?」

「前にそう言ったよな。お前は俺の下僕にするって」

「うん……ごめんなさい。ごめんなさい。レイ……」

「レイヴェルだ」

「レイヴェルが」

「朱乃はレイヴェルさまと呼ぶんだぞ」

「レイヴェル……さまと結婚するから、私はいらなくなっちゃうんじゃないかって……」

生憎俺は一人では我慢できないタイプだったようなので、朱乃が解放されることはないのだ。

「それで、どの駒がいい?」

「えつと……」

変異していない『戦車』と『僧侶』と『騎士』、それから変異の『兵士』。この四つが朱乃と俺の間に浮いている。

朱乃はその四つを見て、もう一度見て、何度も顔を左右に動かした。

『女王』はレイヴェルのものだ。お前にはやれない」

『女王』は特別な駒だ。レーティングゲームだけを考えるのなら朱乃でもいいのかもしれない。だが、他に考えを巡らせればレイヴェルが眷属入りを希望した時点で、レイヴェル以外の選択肢はない。

まあ、婚約前に朱乃に手を出していて、その上で賢者タイムにベツドの上でねだられていたら分らなかったが。

戦闘場面での『女王』は、最強の駒であり、『王』に代わって指揮をとることもある存在だ。しかし、『女王』にはそれ以外にも役割がある。

それは『王』の補佐であり、相談相手だ。『王』に代わって関係各所に連絡を取り、各種の申請を行い、許可を取りつけ、根回しをする。『王』と相談し、眷属全体の予定を立て状態を確認し、運営をする。

『女王』とはそういう者だ。

俺の眷属の場合は、ハーレムのこと話さなければならぬ。ライザ―義兄先輩もそう言っていた。順番というか、頻度というか、そういったものが偏ると不満が募る。それが無いように、あるいは発生してもそのヘイトが『王』へと向かわないように、『女王』に頼んでおく。これが円滑なハーレム運営には重要らしい!

これを朱乃にやれるかという……まず、無理だろう。関係各所に連絡しても、堕天使出身という時点で冷たい対応を取られることは必至。根回ししようにも悪魔社会にコネなぞない。ハーレムも……まあ厳しいだろうなあ。これは何となくだが。

その点、レイヴェルは純血悪魔の貴族だ。連絡も調整もスムーズに行くだらう、フェニックス家独自のコネもあるし、俺も自分の知り合いを紹介しやすい。

「フェニックス家出身の婚約者で、『女王』のレイヴェルです。よろしく」と言うのと「悪魔をたくさん殺したバラキエルの娘で、俺の愛人になっている『女王』の朱乃です」では、差がありすぎる。圧倒的にレイヴェルの方が好評だろう。試さなくても分かる。

と、ハーレムの件は抜いて朱乃に説明した。

「……はい、ごめんなさい」

「レイヴェルは俺の正妻になる。それにお前が下僕になれば、その『女王』でもある。レイヴェルの命令は、俺の言葉だと考えてよく言うことを聞くように」

「はい……分かりました。ごめんなさい」

謝りながら朱乃は『戦車』の駒を手に取り、両手でギユツと握りしめる。

うん、レイヴェルもそうだけど、この娘さんたち大駒から欲しがるね。大きいのが好きなのか。そうなのか。

「どうして『戦車』を選んだ？」

「私は、まだ、弱いけどリアスさまと……れ、レイヴェルさまの盾になるつもり、だから」

『戦車』の駒の役目は、砦だという。『王』のある本陣の前に防衛線を引き、敵の進軍を防ぐ盾となる。同時に、敵陣深く突き立てる槍でもある。

俺もレイヴェルも魔力の性質上、防御能力・耐久能力は朱乃よりも高いだろう。だけど、まあ、こういうったものは気持ちが必要か。

「分かった。じゃあ、『戦車』で考えておく」

では、駒を返しなさいと身振りで示すも、朱乃が手を離さない。ギユツと握り込んだままイヤイヤと首を振る。

「ほら、返せ」

「いや、いや」

「なんで急に甘えだすんだ。ほら」

両の手首を掴んで、離そうとするのだが、合わせた両手の指を組んで『戦車』を抱え込もうとする。

「朱乃！」

「やだー！ 悪魔にしてくれるまで持つてる！」

なるほど。ここで手放したら『戦車』をもらえないと思っっているわけか。

「俺が信用できないのか。というよりも、逆らうな」

「でも、でもお！」

朱乃の両手を無理やり持ち上げて、グイッと押し倒す。

俺が朱乃の上に乗る形で、二人して床に倒れ込んだ。朱乃が両手両足につけている光力封じの枷と、首輪の鎖がゴトリと音を立て、彼女の翼が床と身体の間挟まり押し潰される。

「ほら、返しなさい」

「やだあ」

ものすごく嬉しそうな顔で甘えた声を出す朱乃。俺はその脇をくすぐった。

「やだ、だめえ、あは、ひゃああん♡」

身もだえしながら嬉しそうに笑う朱乃。そんな彼女のお腹の辺りからぎゅるぎゅると言う音が聞こえた。

「終わったみたいだな」

「えっ、あっ！ だめえ♡」

ニヤーと出来るだけ悪そうな笑みを意識して、俺は朱乃の腹に片膝を乗せた。

「洗髪用と、洗顔用と、身体用と、歯磨き用と、大小とちゃんと分けて使えって言うてるだろ！」

「押したら、押したらあ♡ だめえ、だめなのお♡ 出ちゃう、出ちゃうからあ♡」

なんでこいつはスライム君を全部尻の穴にぶち込んでるんだ。俺が何もしてないのに、勝手に自分でアナル開発しやがって。

そんなに（やってえ♡）（恥ずかしいところお♡）（見てえ♡）とか言うなら望みどおりにしてヤル！

「あつ、うううっ♡ もう、もう、むりい♡ あああつああ……………」

粘液体というか、スライムが朱乃のまたの間に広がって、いやらしい音を立てながらじゆるじゆると吐き出されていく。

「お前、まさか……………下も履いてないのか」

「あつ♡ うん♡」

自分のぶちまけた代物を俺が見ている。そのことに腰をカクカクさせて悦ぶM女。

さらに、ぐいっとな膝を押し込むと、ぶちゅつぶちゅると残りのスライムが飛び出し、朱乃の背がぐぐつと弓なりになった。

「はあつ！♡ ああつ、んっああっ♡♡」

ビクンビクンと余韻に浸る朱乃の姿を見て、俺はこの先この女についていけるのだろうかと思った。……………こんなんじや俺、いつかこの女に付き合わされてDSにされちゃうよ。

どうしてこんなレベルになってしまったんだ。

「わた、わたし……………おかしいよね？ 変だよね？ 汚い、よね？」

「まあ……………そうだな」

「それでも、こんなでも、捕まえててくれる？」

ハア、とため息が出た。虐待された子供が、他所の家に引き取られたときに、いろいろと問題行動を起こすことがあるとかどうか、そんな話を聞いた覚えがある。朱乃のこれも、そういう類のナニかなのだろうか。わざとこんなことをして、

「俺を試したいのか？」

「ち、ちがうの、ただ……………」

力の抜けた彼女の両手から、『戦車』の駒を取り返す。

それから魔力で朱乃を少し浮かして、抱きかかえた。

「きやつー」

ベッドの上に放り投げて、唇を強引に重ねる。相手のことを何も考えず、ひたすらに食る。

力の抜けていた朱乃の身体、それが再度緊張し、ぐぐつと硬直、それからまたくたたりとなったところで口を離した。

「明日、レイヴェルと会わせる。そのときはちゃんとしていろよ」
そう言い捨てて、俺は部屋から出た。
なんで、ああなったんだ。もうダメだろ、一生面倒見てやらないと。

1-12 『女王』挿入（前）

うっかりやってしまいそうになったので、慌てて朱乃の部屋を後にしたのは午前の話。

今の俺は午後のベッドの上、端の背もたれに背を預け、両脚の間にレイヴェルを挟んで抱えているところだ。彼女のお腹に手を回し、その肩の上に顎を乗つけるスタイル。

この体勢は実に落ち着く、まずいろいろといじりやすい。次になんとなく甘えている気分にもなれる。さらに、こうがっしりと抱え込んでいることで、この女は俺のだぞ！ と主張している感じがして、独占欲が満たされる。

欠点は相手の顔が見にくいのと、キスがやや窮屈になるところ。尻を撫でまわすのに苦労するところか。

ちなみにまだ服は着ている。生と生の肌の接触も良いが、張り詰めたテントに当たると布越しの尻の感触もまた良し。午前に味わったむっちりしたのも良かったが、この小ぶりのしまったものも良い。「もう、お父さまに配慮なんてしなくても良かったのですわ」

よくよく考えると、前世基準ではまだ初等部に通っている年齢に当てはまりそうなレイヴェルに甘えているというのはヤバいのではないだろうか。前世代年齢合わせるとオツサンなんですけども……もしや、これがうわさのバブみ！ ファーストダンガムの仮面の王子様的な……きつと兄上も小さくなった義姉上相手にやってるに違いない。俺には分かる。

まあ、でも、もうやっちゃってるんだからいいよね。俺はもう悪魔なので、人間時代の倫理観など捨てたのだ。

「ライザーお兄さまもです。味方すると言っておきながら、裏から手を回して点数稼ぎなんてして」

さて、我が婚約者にして未来の正妻、ついでにこれから『女王』になってもらおうレイヴェルだが。現在、若干不機嫌である。

それというのも、レイヴェルを俺の眷属にするにあたって、数年間は週替わりでグレモリー家とフェニックス家を行き来してはどうか

とこちらから提案したからだ。昼勤夜勤の切り替えのごとく、帰って寝る家があちこちするレイヴェルには申し訳ないが、これも俺とフェニックス卿の欲ゆえのこと。我慢してもらうほかない。

フェニックス卿は娘可愛さに、そして俺は——まだ手をつけていない父上が用意してくれたメイドさんコレクションを堪能するためだ。ライザー義兄さんからの依頼は渡りに船だったわけだ。

別にレイヴェルが嫌いなワケではない。だが、それはそれとして、夫婦の寝室は一緒にしましようとなったら、朝一のメイドフェラからのお楽しみタイムが厳しくなる。夜伽も奉仕風呂もそうだ。ということ、俺は週替わりで婚約者とのイチャラブックスと、メイドのご奉仕を両方堪能する道を選ぶことにしたのである。

フェニックス卿も大喜びで握手した手をぶんぶんと上下させていたので、義父からの評価も上方修正されたに違いあるまい。なにやら、今後の計画に修正が必要になったとお怒りのレイヴェルには申し訳ないが、俺はメイドさんで遊びたいのだ。

「レイヴェル」

そんな事情を素直に話せるわけもないので、俺は彼女をぐっと抱き寄せ、そのまま体重を後ろにかけさせた。

そうしてから、呼吸の波を合わせていく。何かの本で読んだのだが、こうすると相手が落ち着くそうだ。まあ、人間の頃の話だが。

包み込むように抱きかかえ、腹を回した手で撫でながら感じる彼女の呼吸にこちらを合わせていく。果たして、最初は「なんですの？」ときよんとした様子だったレイヴェルだが、しばらくするとふよつと力が抜いてこちらに身をゆだねてきた。

静かに、タイミングのあった息の音だけが室内に流れる。一緒に吸って、一緒に吐き出す、それをどれぐらい繰り返しただろうか。時計を見るのは無粋な気がしたので、それは分からない。

「はあ」

うっとりとして表現するような声がレイヴェルから漏れた。このやり方を実際に試してみたのは初なので、さて効果があるのかと思っただが、彼女には通じたらしい。

なんでも女は男がロマンへの「わかる！」を求めるように、多くのことで共感を求めているのだとかどうとか。たしか、そんなことが我が愛読サイトにあつた気がする。

でも今の俺は彼女の不機嫌の理由に「そうだよな」「俺だってずっと一緒に暮らしたいよ」なんて嘘は言えない。自分でそうしたのだから。

ということ、合わせられるところを合わせてみたのだが、

「ふうー」

温泉に浸かってほへえーとなっているような声を聞く限りでは、とりあえず機嫌を取れたような気がする。俺の方も、いつの間にか噴火を待ちわびていた活火山が大人しくなり、テントの張りがなくなつてこうなんというか、朝のまどろみの中で人肌が恋しくなつて抱き着きたいときに丁度良い相手がそこにいて、ほへー幸せーとなつていような気分になつてきていた。こう性欲とは別の幸福感的なナニかがある。

例の愛読サイトのおかげで、魔力も上がったし、嫁さんの機嫌もおおる。まったく、これのおかげさまさまというヤツか。

「なんだかいいですね。これ」

二人してふにやーとなつてなつていると、レイヴェルの身体からゆらゆらと炎のようなオーラが出ているのをよく感じ取れた。普段は無意識のうちに気にしないようになっていたのだが、悪魔はニュートラルな状態だと内在する魔力・オーラの量に応じた気配を周囲に放っているものだ。俺自身も紫と紅の混じつたオーラを抑え込むことなく垂れ流しているのだろう。

つまり二人して緊張感がさっぱりない状態になつていふことだ。

「だなあ」

悪魔の魔力の波動は、人間のなかでもその気配を感じ取る素質を持つ者——教会の戦士など——には第六感をピリピリと刺激する不穏なものらしい。恐怖感と不安感を増幅させ、ざわ……ざわ……と幻聴のようなものさえ聴こえてくるという。瘴気なんて呼ばれ方さえし

ているそうだ。教会に詳しい友人に聞いた。

だが、同じ悪魔同士であれば話は別で、かつこの状況になる相手となればむしろそのオーラも愛おしく感じる。だからだろうか、ふとオーラを絡めてみる気になったのは。

「ふえ」

と肉の快楽とは別の悦楽に浸っていたレイヴェルも、夢見心地にこちらに同調してくる。

くるくると二重螺旋のようにねじってみたり、じんわりと溶け合わせてみたり、量の多いこちらの気で飲み込んでみたり、逆に少量をレイヴェルの炎に食わせてみたり……。

身体と呼吸と気を合わせ、そのまま魂までも、ぐでえーつと溶け合ってしまうようなこの感覚。後にとある者から聞いたところ、仙術使いのよくする房中術の一つと似ているのだとか。

「ふうあー♡」

あー……なんだこれ、蕩ける。なんだかこう、射精とはまた違った多幸福感に酔って溺れそうだ。

……………。

ふと気が付くと、部屋の入口脇に食事を載せたワゴンが置かれていた。

「……えつと」

「ああ……」

使用人が誰かが部屋に入ってきて、置いて出て行った。そのときにノックなり声をかけられたはずなのだが、さっぱり記憶にない。

「危険ですわね」

「危ないな、これは」

「でも、良かったですわ」

「言葉に出来ないものがあつた」

なんとなく顔を見合わせて、頷き合った。

貴族たるもの暗殺には備えておくべし。なのだが、延々と一番良い感じが続いていたようなあの感覚には勝てない。幸いなことに、俺に

は用心棒の赤いドラゴンが憑いていて警戒してくれるので問題ない。そろってベッドから降りて、向かおうとした方向も同じで、目的も同じだろうと悟った俺は、無言で先を譲った。

「はあー……」

生理的欲求に従って、排出するものを排泄すると夢見心地だった頭が覚めてくる。

部屋に置かれたテーブルで、冷えた食事を無言で食べる。言葉は交わしていないが、雰囲気は良かった。時折、目が合うと表情がふにやあと崩れるのを抑えられない。そんな感じだった。

俺はもはやデレデレである。

そして、腹が満たされると同時に別の欲求も蘇ってきた。もはや致さねば気が済まない。もとよりそのつもりしかなかったが、より強くそう思う。

抱き寄せてベッドに向かう途中、ふとあの香りが強くなっていることに気づいた。ムクムクと股間が硬くなってくる。一度薄れたそれを化粧室で足して来たのだとすると、あちらもスツカリその気が盛り上がっているらしい。

「これが上級悪魔には効かないというのは、やはり嘘かな」

「とても危ないので、時間があるときにしか使えませんわね」

ベッドの上、裸になって向かい合うように寝ている。顔の半分くらいまでシーツをかぶって、ひそひそと話すような体勢。

「レイヴェルは俺に何を望む」

ギンギンのままでなんだが、今日はレイヴェルに『女王』の駒を挿入するのだ。うっかり忘れてそのままパコパコし続けてしまうところだった。ひん剥いてから思い出したよ。

「望みですか？」

首を傾げて聞き返してくる姿に、笑みを浮かべてしまう。

「俺は前世の人間の意識があるから、なるべく悪魔らしくしようと思っている。だから、眷属……下僕としてレイヴェルをもらい受けるにあたって、契約をしておきたい」

悪魔の取引の基本は、等価交換。基準はそれぞれの心の中での重さ

でいい。年収一億の人間にとっての百万と、年収三百万の人間の百万では重みが違う。

まあ、人間界での縄張りで行う営業の場合は価値基準の統一がされているのだが。

「契約……。でしたら、私がなりたいたいと言いつ出したのですから、むしろ、こちらから何か差し上げた方がいいのでしょうか？」

「いいや、俺がもう側だ。レイヴェルを欲しいと思っっているから」

ふむ、と考え込む彼女の様を見ながら考える。

『はぐれ悪魔』という存在がいる。『悪魔の駒』で眷属となりながら、主の支配下から逃れて好き放題にする連中だ。

駒によって力を得て増長した者。主への不満を爆発させて逃走した者。元から悪魔の下僕になどなりたくなかった者。理由は様々だが、貴族にとつて自身の眷属から『はぐれ』を出すのは大変不名誉なことだ。それなのに、『はぐれ悪魔』の発生は後を絶たない。

上級悪魔として駒を手に来る者は限られているというのに、まったくどうしようもない話だ。

元々悪魔で、婚約者のレイヴェルが逃げ出すなんてことは俺がよほどの暴君でもなければあり得ないが、この先もある。

逃げられないように、他の眷属は納得の上で迎えたいのだ。そうしておいて、あとでレイヴェルにだけは『眷属化の対価』を聞かなかつたなんて言われたくはない。

「でしたら……。私の望みは、英雄を支える女になることですわ」「英雄？」

はい、と言つて続けられたレイヴェルの話は、なんともロマンに満ちたものだった。女のロマンというヤツなのだろうか。

この場合、彼女の未来の夫であり、『王』となる俺がその神話や伝説の英雄になる必要があるのか。何気にとんでもない対価だ。イキナリ難易度がルナティックである。英雄とは大体、その時代の常識を超えた異常者なのだから。

「リヴラクスさまは、現ルシファアの弟であり時代ごとに時折現れるという才に恵まれた悪魔として生まれ、なおかつ赤龍帝の籠手を宿し

た方。きつと平穩なだけの生を送ることはないでしょう」

それなんだよな。赤龍帝ドライブに憑かれた者は、波乱の道を行くしかないのだという。本人にその気がなくとも、騒動の方から寄ってくるのだとか。

少なくともこれまでの赤龍帝の籠手所有者たちの人間一人分の生の間は、そうだったという。

「どうせ波乱の大波が押し寄せてくるのなら、それに乗りましょう。あと、その……色を好まれるのですよね？」

俺のハーレム願望が見抜かれていた！ これから『女王』にどう切り出そうかと思っていたのに、向こうから言ってくれるとは。

「まあ、そうなんだ。なんというか、すまない」

「分かっておりましたわ。ライザーお兄さまとそういつた話をしていたらしたようですし。それに……あの、前るときに……」

まあそうだろう。ライザー義兄さんとあれだけ論を交わしていたのだ、そりゃあちらの身内には知られていて当然か。

「前るときっ」

「その……」

もじもじとするレイヴェルに続きを、と促すと彼女は顔を赤くしながら俺の股間へと視線を落とした。

「先日、その……一緒に過ごしたときに、理想のイメージは何十人もの女性を侍らせて、全員余裕で満足させる魔王だと……そう言いながら」

あれ？ アレは俺が魔力を昂らせるためのイメージだったのだが、「口に出してた？」

「はい……」

そうか、俺はそんなことを言いながら、レイヴェルの弱点をひたすら攻め続けてぐつちやぐちやのどろんどろんにしたのか……。

で、レイヴェルはそれをそのまま受け取って、俺を悪魔の英雄Ⅱ魔王にするよ。

「英雄色を好むと申しますが、色こそ英雄を好むもの。……この間、冗談でおっしゃっていた始皇帝の後宮には百では足りないほどの女が

いたとか」

そうかー……眷属ハーレム十五人とかで夢を見ていた俺などとは桁が違う。歴史に残る偉人とは凄まじいな。

レイヴェルは俺にそれぐらいのモノを求めている、と。なるほど。英雄になったら、英雄になったなら、お妾百人出来るかな。

放っておいても白き龍皇はやって来る。ならば、レイヴェルの夢に協力するのも悪くない。まあ、積極的に「俺は英雄魔王になる！」だなんて意欲はないが、「ハーレム王に、俺はなる！」の方が強いし。

「分かった。といつても、俺にはなんのプランもないし、そこまでやる気もないけれど。それでもいいのならレイヴェルの考えを聞こう」

最悪でも、我が家にはミリキヤスがいるしな。

「私にもまだ具体的なものはありませんわ。ですが、現状の悪魔に足りないものは分かっています」

「領地……というより、『縄張り』か」

『縄張り』というのは、人間界における悪魔の営業活動範囲のことだ。この縄張りの中で、悪魔は人間相手に願いを叶えて対価を受け取る営業活動をしている。そうやって、悪魔という種を存続・繁栄させるために必要な人間の精神エネルギーを得ているのだ。俗にいう『欲望』という代物だ。神々が人々の信仰心を糧とするため迷える子羊を導くように、悪魔にとつても羊たる人類は必要な糧だ。

願いを叶えて対価として何かを受け取る。ただ対価となるものが欲しいだけなら奪えばいい。ドラゴンのように略奪するだけでいい。

そうではなく、対価を支払えば欲を叶えてくれる存在として認知されること。悪魔がエネルギーを人間から得る手段は、人々の神頼みを叶えずとも信じられていさえすれば良い神々とは違う。悪魔はちよつと世知辛いのだ。

そんな種の存続に必要なエネルギー入手活動を行う縄張りだが、今すぐ足りなくなるわけではない。だが、数百年、数千年で見るとこの縄張りが不足することは必定。

なにせ最近は大きな戦争もないので、縄張りを得て活動しようとする新しい上級悪魔は増え始めている。死なないのだから少数ずつで

も増えていくのだ。

現在は断絶・没落した元七十二柱の家の縄張りなどを吸収し生き残った貴族家が、それぞれの家から出る上級悪魔に縄張りを分け与えているが、それもやがてどこかで行き詰る。

どんなにたくさんさんの田畑を持つ大地主であっても、子や孫、さらにその下の世代の分家にまで土地を分け与えてはいずれ分けるものすら無くなり没落する。田を分けるたわけの例えではないが、縄張りにだって限りはあるのだ。

「冥界での領地はまだいいのです。開拓できていないところの方が多いのですから、そちらを治めさせればいい。ですが……」

「人間界はもう縄張りの空白地帯はない、か。人間の人口はかつてより増えた。それにその政治形態・経済活動は欲にかられやすい形へと移行している」

「ええ、信仰は薄れ、人間たちは金銭に支配されるようになりましたわ。欲を叶えるためならば、とたやすく悪魔との取引を受け入れるようにもなりました」

「それでも……か。強大で有名な悪魔の名の下に軍勢を形成しまとめて養う形ではなく、少数精鋭の形態を選んだ弊害かな」

「そこは今でも議論はされておりますが、どちらが良かったかとは一概には言えませんわね。ただ、こうして現在悪魔という種が存続しており、私たちの世代ではかなりの数が生まれて来ている。これは魔王様方の功績であることは確かですわ」

この辺りの話題は、学校などでも議論の授業のお題としてよく使われるらしい。悪魔というのは、議論好きの多い種族だ。最終的に暴力に訴える結論に至るとしても、とりあえずぶん殴ってから考えるドラゴンとは違う。考えてから殴る。

「そうなるよ、レイヴェルの求める英雄にはこの問題を解決するとなれるかな。その場しのぎでも」

「うふふ、ちよつと楽しいですわね」

亜空間から冥界の地図を取り出して宙に浮かべて見せると、我が『女王』はニンマリと嬉しそうにする。やっぱりこういう話好きなん

だね、悪魔だし。

「墮天使だよな」

「それしかありませんわ。他所の神話にちよつかいをかけられるほど、悪魔の戦力は戻っておりませんし」

朱乃の父親バラキエルの種族である墮天使は、悪魔からすると非常にいやらしい種族である。まず、同じ冥界に拠点を置いている。これだけでうざったい。冥界の主たる種族は悪魔だけで良いのだ！なんて主張はよく聞く話だ。

次に人間界においても、独自の支配領域を持っている。人間を上手く使って教会を維持するわけでもなく、悪魔のように取引をするでもなく、外から見る分には神器や技術をいじくりまわして遊んでいるようにしか見えない連中だ。

さらに、これが一番イラつくのだが、墮天使はその存在に必要とする人間の夢ファンタジー 幻な精神エネルギーを、神や天使と悪魔からかすめ取っているのだ。

「なにが墮天使ルシファーだ」

「本当にそうですわ！ 悪魔が元々は天使だったなんてことにして、墮ちた天使たちと同じ種族に見られているなんて」

ルシファーは悪魔の王だ。墮天使の長ではない。だが、前世における俺はルシファーというのは元々は天使の長、あるいはそれに近い存在であったが驕り高ぶった末に天より墮ちた墮天使であると認識していた。他の悪魔にしてもそうだ。

ゲームとかやっているときよく出てくる名前なので、その程度のことには知っていた。どっぷりオカルトに浸かって居なくてもそれくらいは、まあ知れ渡っていたのだ。

つまり、結構な数の人間が悪魔と墮天使の区別がついていないことになる。

墮天使共は、悪魔がお客さーん、今日もありがとうございますー！
なんてセコセコペコペコして稼いだ『欲望』エネルギーを、何もせずに横からかすめ取っているのだ。

「ペ天使どもめ」

「墮ちても元は天使なんて言っつて、教会の信仰も奪っているようですし。本当に薄汚い種族ですこと！」

アイツら、ホントにもう。なぜか教会を追い出されたような連中は、墮天使に吸収されていることが多い。そして、天使の仲間のようなフリをして、とつくに神との縁なんて切っているはずなのに、悪魔を殺しにくるのだ。契約者の人間だって殺されてしまうことがある。そうやって実はイイヤツなフリをして神への『信仰』すら、抜き取っているのだ。

過去の恨みを抜きにしても、朱乃へのヘイト値が高いわけだよ。

「だから、足りない分を取ってくるのならここだろうな。天使を巻き込まれないようにして、墮天使だけを滅ぼせばいいな」

俺は地図上の墮天使領域を指でぐるりと示した。

墮天使を駆逐できれば、レイヴェルも大喜びで、朱乃の逃げ出す先も物理的に消滅する。一石二鳥とはこのことだ。

問題は、戦争必須なことか。『欲望』稼ぎもしない下級悪魔などどれだけすり減つても問題ないが、折角増えてきた上級悪魔とその眷属が減るのは困る。かといって、レーティングゲームなんてものは、結局のところ戦力の維持増大のためにやっていることで、使わなければ意味もない。

「そうですねー」

「といっても、上手いこと政治の流れをそこに持っていく道筋も思いつかないけど」

「そうですね」

大戦経験者の年寄り連中の戦功自慢。これほど戦の機会を得ていない若手にとってイラつくものはない。特にレーティングゲームで高いランクにいるのに、戦争経験がないばかりに古い悪魔から実戦経験がどうこうと言われている者などギリギリとしている。

実力に自信がある。だが、所詮ゲームはゲームよ、とバカにされて苛立っている世代。その辺りをつつけば暴発くらいはしそうだが。「危ないですよね」

「こつちから少数で突っ込む形になるとな。いつそ、本当にバラキエ

ルが釣れるといいんだが」

「どういう話ですか？」

俺は朱乃をバラキエルから引き離す企みの中で思いついたことを話した。

「娘を虐待して、孕ませて、その写真などをバラキエルに送りつけて、釣りあげて首を獲る……悪魔のような計画ですわ」

「いや、悪魔だから。けど朱乃は俺に虐げられると快感を覚えて悦ぶし、孕みたがっていてもいたから、別に悪魔でもないか」

バラキエルなんて、敵勢力の大幹部だ。首を獲って晒してやれば間違いないその功績を称えられることだろう。

「でも、捨てられた娘なんですよね？」

「そういったことに詳しくそうな友人の話によると、そうらしい」

「では、気長に準備して待つのが一番でしょうか。龍の神器が招くというものを」

「千年計画くらいで頼みたいな」

人間の精神性が強く残ったまま長生きすると、心だけが死んでいくと生き急ぎ気味の転生悪魔連中は言うそうだ。

長い悪魔生、目標は遠くに置いてゆったり楽しみたいものだ。ハーレム飽きちゃったなって頃に、レイヴェルの計画が進み始めるとベストかもしれない。

さて、話もひと段落ついた気がするので、そろそろ『女王』を挿入するでしょうか。

「レイヴェル、俺の『女王』になってくれ」

「はい！」

片手をビシッ！ と上げて喜びを表現する彼女に、『女王』の駒を取り出して見せる。

そして、その駒でレイヴェルの今だ慎ましく、しかし確かに主張している突起をツンとつついた。

「あん♡」

「一生に一度の機会だから、な」

そう言いながら、駒の頭でくりくりといじってやると、

「『悪魔の駒』で、こんなことお♡」
と、彼女は半分ほど開いた口内で舌をペロリと蠢かせた。

1—13 『女王』挿入（後）

女の身体には直に触れたいもの。表面の滑らかさ、柔らかさ、体温、その他もろもろが俺に喜びを与えてくれるからだ。だが、ときにはちよつと小道具を使ってみるのも良い。

筆や羽などを使ってちよちよとする話を聞いたことがあるが、あれはなかなか興奮した。前世では機会に恵まれなかったが、今生ではやろうと思えばやりたい放題ではないか。

ということでは、今から未来の嫁さんの肢体にいたずらをしようと思ふ。

ベッドの上で横向きに向き合って寝転がって、頭までシーツをかぶる。小さな子たちが内緒話をするように、俺とレイヴェルは秘密の遊びをするのだ。シーツの中でも、暗くないよ。悪魔の瞳は闇を見通すから。

「ふっ、ふう、はああ、はああ♡」

使用する道具は『悪魔の駒』の『女王』。生まれつきの上級悪魔である俺であっても、基本的には一生に一度しか手にすることが出来ないものだ。この女性的なフォルムをした硬く、しかし身体に挿入するためにある不思議アイテムはとても貴重なのだ。

「ああ、『女王』が、私の……♡ んんっ♡」

レイヴェルのこれから育っていくであろう胸。そのふもとから山頂へと向かって、螺旋を描くようにして駒を動かす。触れるか触れないかのフェザリーなタッチでツツっとなぞると、ピクピクと彼女は反応した。

肉体が受ける実際の快感はそこまででもないだろう。ボールペンでなぞると大差ないはずだ。しかし、使用しているモノによって受け取り方は変わるはず。

ゆるゆると渦巻きながら登っていた、『女王』がようやく色の異なる部分へと到着した。ここからは、可愛らしくもいやらしい薄いピンク色の乳輪地帯。

「あん、ダメですわ♡ こんなことをしては♡」

「でも、もうピンとはじめてる」

先ほどまでよりも細かく輪を描きながら、中心でツンと主張し始めているところへと寄せていく。

期待に震え、愛らしい先がふるふるとしていた。

「ううん、だってえ♡ こんなこと、こんなの♡ ダメですわあ♡」

「ダメか、じゃあこっちにしよう」

ダメと言われたので、反対の丘の麓に『女王』を移動させる。

「あっ♡ イジワルう♡ でしたら」

俺の股間でゾワリと快楽が発生した。レイヴェルの手が、指や手のひらを使って俺のモノをこすっている。

「私もイジワルしますわ♡」

一番良いところを触つてくれないそのもどかしい愛撫に、おまわず腰を動かしてしまう。が、カリへの刺激を求めたその動きは読まれていたのか、スツとレイヴェルの手が引いてしまった。

「んっ、ちゅっ♡」

「レイヴェルは意地が悪いな」

「リアスさまこそ」

その反撃がとても可愛く想えて、唇を合わせた。戻ってきた細く白く心地よい手の感触が、俺の玉袋と竿の根元付近にすりすりと触れてくる。

お返しに、一度止まってしまった登山活動を再開することにした。

「ふーっ♡ ふーっ♡」

身体を引いて逃れようとする彼女を空いた片手で抑えながら、ゆつくりと駒を滑らす。ゆつくり、ゆつくり頂点に向かつて。それに合わせて竿をくすぐるレイヴェルの指先の位置も徐々に上へと上へ。

もどかしい。じりじりとせり上がってくる快感が、実にもどかしい。今すぐギユツと押し込みながら、蜜を滴らせる割れ目に滑り込ませて激しく突き上げたくなってくる。

しかし、やらない。じわりじわりと昂る悦びもいいものだ。

「もどかしいな」

「ええ、んんうー♡」

肉棒を這いまわる傘のすぐ近くまでやってきた。

「んふ♡」

暗闇を見通す悪魔の視力が、妖しい笑みを浮かべる唇の動きを捉えた。誘われるままにそこを舌を伸ばしてねぶる。すると、ねだるようにレイヴェルの爪の先がカリ首の形をそつとなぞっていく。

「あああ……♡ んっ、気持ちいい♡」

お礼にこちらもそつと乳首の端にかすめてやる。

「じれったいですわあ♡」

じわりと悦楽で湿った彼女の瞳の端に口づけた。まだ、涙はこぼれていない。

「頼む」

思わずねだってしまった。

肉棒の先端に手のひらの感触、続いてレイヴェルの五本の指の腹が傘の裏側や裏筋に添えられた。いきり立ったちんこを、真つすぐにわしづかみにされた形だ。

ツーツと傘の裏から一番大きく開いたところを快感が通り過ぎていく。そして透明な汁を漏らしている鈴の口で、五本の指先がキュツとそろろう。そして、我慢汁に濡れた指がまた形状をなぞりながら広がって行き、幹の根元へと伸びて行く。そして指先が根元に到達する前に、レイヴェルの手のひらの親指の付け根あたりが肉棒の先端に触れた。

カウパー液のぬめりを帯びたその柔らかな感触が、にゆるにゆると鈴口をくすぐってくる。

開いて、閉じて、開いて、閉じて。レイヴェルの指先がにちゆにちゆと与えてくる心地よさに、思わず呻きが漏れた。

「気持ちよさそうですね」

「ああ、いいよ」

「ううん……私にもくださいまし♡」

お礼にかすめるように円を描かせていた『女王』をきゅつと、彼女の胸の突起に押し付けてやる。

「ひゃああっ!! ♡♡」

息を吐いた、と同時にこちらもキュツと握られた。二人してビクツとしてから、ふうつとため息をこぼす。

もう一方の胸からの求める声が大いなので、そちらにも応えてやる。

「ほら、っつちも」

「ああっ、きやうう！ ♡♡」

指で摘まんでコリコリとしてやるのに比べたら、刺激は少ないはずなのに反応は強い。俺にしてもそうだ。

身体の奥に熾火のように官能の熱があつて、背骨からそれが全身に伝わって焙られているよう。きつとこれはあのオーラの感応で高まったものが再発してきているのだろう。

強い刺激を受けたせいか、俺のモノから外れたレイヴエルの手が代わりばかりにこちらの身体のあちらこちらに触れてくるが、それがどれも気持よく感じてしまう。触れられた箇所から、ゾワゾワと頭の中を溶かす成分が発生しているようだ。

ああ、入れたい、挿入したい。貪りたい。何も考えずにただただ突き続けたい！

そんな獣欲が湧き上がってくるのを抑え込んで、まだこの戯れを続ける。もつと、じつくり焙るのだ。じつくりことごと煮込んで、煮詰めて、濃く濃くしていくのだ。

自分でもよく分からないそんな意地を、とつくに弾けている理性の代用品にする。

「こうしたらどうなるのかな」

「え？ あっ……♡ ダメ、そんなのダメエ、ダメですわああ♡♡」

元々、『悪魔の駒』という代物は身体の中に挿入されるようにできている。だから、これをレイヴエルの乳に埋め込んで行っても問題ないのだ。

ダメダメと連呼する彼女にずむずむと駒の先を押し込んで、いやいやと首を振る彼女にずむずむと半ばまで挿し込んで、するといやーん♡ と彼女が鳴いた。

「いあやあーん♡ 埋まつてる、うまつて、ああ、私の胸に、『女王』が、

「ああはっ♡」

すごい光景だ。こんな今日しかもう見られない。少なくともレイヴェル相手にはこれつきりだ。

「動かしてみる」

喉がゴクリと音をさせた、それは俺のものか、レイヴェルのものか、あるいは両者のものか。

弱弱しく、彼女は首を振った。怖さ半分、期待半分、そんな表情を見ると止められなくなってしまう。

「あっ♡ あっ！♡ ああっ♡♡ ダメえ、これ、おかつ しっ♡
こん、な、だめえん♡」

身体に侵入し溶け込む駒。それを半ばまで埋めた状態で、駒の首を振る。ぐりぐりぐりぐりと乳首の裏側にこすりつけるような気持で。

「ああひい♡ ひいつ♡ ふえひ♡ いっ、あつい♡ いひゆ、ほおっ♡ やめ、とめ、まつ、くだ、しゃ……まひ♡」

あまりに暴れるので一旦手を止めると、

「んふー♡ んんふー♡ はあ、はああ、はっ、はあ♡ これ、は……
だめ、ですわ……」

口元からよだれを垂らしながら、レイヴェルは息も絶え絶えに訴えてくる。

「痛かった？」

「いえ……はあっ……はあっ……。しげ、きが、つよ、すぎ……ます」
たまに「触手モノ」でおっぱいの穴からほっそい触手を挿し込んで、

内側をきゆるきゆるきゆるとしている描写のあるものがあつたが、そんな感じなのだろうか。

よし。レイヴェルには悪いが、彼女のもう片方のおっぱいが切なそうに、(やってえ♡ こっちもお♡ ちょうだーい♡)とおねだりしてくるのだから、それに応えなければ。

「じゃあ、こっちはこっちまでにしておく」

今いじめたばかりの乳首に吸い付いて、舌で転がす。

「んんっ♡ はあふうん♡」

れろれろちゅぱちゅぱとしていると、レイヴェルが安心したように

身体の強張りを解いた。その瞬間を狙いすまして、もう一方の乳首に
ずむずむと『女王』を挿し込んだ。

「あああ！ いやぁーん♡ やめて、やぁ♡ やっ♡ んんっうん
しゅき♡ これ、はぁにゅんんう♡」

片方を舐め転がしながら、もう一方は駒で内側をかき回す。

視線を上げてレイヴェルの顔を見てみると、表情をぐちゃぐちゃに
して快楽に悶えていた。俺の行為を止めたいのか、それとももつとし
て欲しいのか、彼女の手がこちらのあちこちを叩いたり、掴んだり、こ
すったりしてくる。

「はひっ、ひゅっ♡ アハっ♡ おっ、っあ、っん♡ ……んはんふは、
ひっ！ じゅりゅ、イ♡ んっ、くっふあ♡」

やがてぎゅぎゅうときつく強く抱き着いてきて、ビクンビクンと背
筋を何度も振るわせた。

「しゅ、き…あつ、はぁー♡ はぁー♡ んっ、ひいー、ふうー、
ひいー♡」

いじるのを止めて抱き返すと、首筋に顔をうずめてきた。そしてそ
のまま涙声で何事か言いながら、身体を擦りつけてくる。

「もう、これ、むりい。むり、ですわぁ。おか、し、なって」

「うん、ごめん。もうやめておく」

「うそ、じゃ、ないですよね？」

「本当だ」

おっぱいの内側をあまり開発してしまったら、あとから期待に応え
ることが出来なくなる。ここはこれつきりにしておこう。

触手くんを改造すれば可能かもしれないが、まあ、婚約者にやる所
業ではないだろう。天使とか教会の戦士とか、墮天使とか、その辺り
の敵対勢力の女でも捕らえる機会があれば、そのときに触手くんやス
ライムくんの風呂にドップリと漬けて観察してやろう。

「ずるいですわ。あなたばかりで」

「それじゃあ、お願いしよう」

言葉の意味を悟ったレイヴェルの唇が艶やかな弧を描いた。

「では、耳から行きますわ」

そう言えば、前はそのあたりも責めた覚えがある。

「んっ、ちゅ、ちやつ、むにや、にゅじゅる、んっふ♡」

唇で耳のあちこちをついばまれた後、俺の耳はレイヴェルの口内に飲み込まれてしまった。右耳の鼓膜には、彼女の舌が奏でる水音しか響いてこない。いやらしい音が頭の中でにゅじゅりゅと反響して、肉体的と言うよりも精神的にゾクゾクとしてくる。

「あっ、はぁ♡ 次はそのまま、んっ♡」

頬や首筋、目元、額、鼻の頭に、唇、あちこちにちゅっちゅっとな音を立てて吸い付かれる。誰だこんなの教えたのは……たぶんこの間の俺だ。

少し余裕が出来たのだろうか、口奉仕に集中していたレイヴェルの動きに変化が出てきた。身体をゆすつてこちらに擦りつけてくる。特に股間へと濡れた柔肉を押し付けこすられる刺激には、ピクピクンと反応してしまう。

彼女は、口と両手と全身を使って一所懸命に俺を気持ちよくさせようとしてくれている。ちよつとぐらいそれに応えてやりたくなるのは、仕方がないことだ。

「ひゃうん♡!」

ついつい、駒を使って背筋をツツっとなぞってしまった。そのまま、前回好評だった翼の発生場所の付け根あたりもこすっておく。

「あん♡ もうっ、今は私の番でしてよぉ♡」

「可愛くなって、つい」

「もう♡ ルール違反は、ダメですわ♡」

俺がちよつとした反撃を加えても、レイヴェルは攻勢をやめなかった。なので、こちらもそこそこにお返しをしておく。

首から鎖骨、脇や胸、それからこちらの乳首などを、レイヴェルの硬く尖らせた舌がちゅるちゅぱと音をさせながら、這いまわった。

「こんなの何処で覚えたんだ」

「んっじゅりゅ……、リアスさまがしてくださいったことですけど」

「ああ、レイヴェルはこれ気持ちよかった?」

「んんう……はい、とても♡ ですから、お返ししますわ」

腹の辺りまで唾液まみれにされ、ヘソを穿られる。脇腹を指でなぞられながら腹に頬ずりをされるこれも、俺がやったことか。

「ふうー、ふうーっ……。んふ、おあずけ……。ですわ♡」

下腹部から舌が下り、いよいよ本命にたどり着くか……。というところでお預けされてしまった。我慢汗を吐き出す俺の分身が受けたのは、湿った吐息のサービスだけだ。

それだけなのに、ビクンビクンと反応してしまう。悔しい。

「ちゅぱ、じゅゆ、じゅしゅにゅ……。んんっふうー」

焦らされてピクピクしているチンコを置き去りに、レイヴェルのお口は俺の指をその中に含んでいた。親指から小指まで、丁寧なめしやぶられる。指と指の間は特に念入りに。

「んーふうー♡ あんっ♡」

なめられていない方の手で、駒を掴んだまま尻を楽しむ。つるつるもみもみ、時に彼女の割れ目へと駒を侵入させ、菊穴から裂け目までの間をするすると。ついで二つの穴の中間をぐいぐいともみほぐす。

「だめえ……。今はわたしのお……」

「我慢できなくなってきた。もうレイヴェルにいれたくて仕方がない」

「あああつ、私もお、わたし、もですわあ♡」

もう無理。ダメ。入れる。俺は挿入する。レイヴェルの膣内にぶちまける。

「じゃあ、入れてもらおうかな」

シーツを跳ねのけ状態を起こすと、レイヴェルと正面から向かい合うようにして膝の上に乗せた。

「あう、わ、わたしが……。入れるのですね」

「ああ、頼むよ」

ひいううと息を吞んで、レイヴェルはゆっくりと腰を浮かした。

「はあ……。はあ……。はあ、んっ……。はあっ」

ちよっとお互いに調整して、位置を合わせる。あとはレイヴェルが腰を落とせば一気にズドン！ だ。

そして、その状態で、俺はレイヴェルの割れ目の入口に『女王』を

挿し込んだ。

「ああっ！ そんなっ！ そんなっの！ ♡」

「レイヴェル、俺の『女王』になつてくれ」

「あああっ!! ♡」

子宮で下僕になれ、レイヴェル。

「んっ、ハア、ンンツ、ハアツ」

息を荒くして、しかしためらいがちに、レイヴェルの腰が下りてきた。竿の先端と、割れ目が触れ合い。互いの吐き出している粘液がちゅつと混じり合った。

ちんこの先に硬い感触。『女王』の駒だ。

「当たってるぞ。分かるか？」

「はい！ ああっ、はい♡」

「これを押し込んで、お前を眷属にする。お前を『女王』にしてやる」
「ああっ ♡ こんなもの！ ♡ こんなもの！ ♡」

他の『王』はどうやって駒を挿入するのか知らないが、俺的にはこれがベストだと思う。いや、変態的だと自分でも思うが。やつぱりこの奥深くに、俺の魔力に染まりきった『悪魔の駒』を埋め込んでやりたいのだ。

「んっ、んんっ！ 行きますわ!!」

レイヴェルは思い切りよく、一気に腰を落とした。中で駒がズレないように、魔力で補助しつつ、ずりゆりゆりゆつと『女王』を奥へ奥へと肉棒で押す。

濡れそぼったレイヴェルの中は、それを抵抗なく受け入れ最奥へと導いていった。

コツンとわずかな抵抗を感じた瞬間、俺は思わず腰を突き上げていた。

「レイヴェル!!!」

「あああっつ!! りゅあしゅしやまああ ♡♡」

彼女の細い腰をがっちり掴み、下から何度も何度も打ち付ける。

「おっ ♡ あっ ♡ いう ♡ はっ、いつ、ちえ、きちちゃん ♡」

駒と一緒に、竿までも、何か今までと違うところまで入り込んだ。

そして、その興奮が俺の限界線を切って落とす。

「おおおっ!!」

「あっんあああああ、でてっ♡でてりゅ♡あっ、あちゅ♡んんはあん!!♡」

レイヴェルの身体の奥での出来事のはずなのに、びゆるびゆると注ぎ込む音が聞こえてくるような射精だ。

「おおっ、はっ、とまらなっ!」

「ああっ! すごっ♡ あっ、すごう♡ あっ、いつ♡ あっっ、いですわっああん♡」

いつている。駒を奥に撃ち込まれて、レイヴェルがビクンビクンと震えている。俺の精を注ぎ込まれて、何度も痙攣している。

そのことが、たまらなく嬉しくて。もっと、もっとと腰をグイグイと押し付けてしまう。もう、二人の身体の肉と肉はぴったりとくっついて、限界まで押し付け合っているというのに、それが分かっていても止められない。ああ、これ以上先に進めないのなら、もっと伸びろよ!!!

「んあゝああゝあ♡ほおああ、んぎぎ、おゝああ!!♡♡♡」

……………

「はあー……、はあー……、はあ……」

「ハア……♡ハア……♡ハア……♡」

気が付けば抱き合った状態で、お互いに息を整えようとしていた。特に上下に動かすこともなく、ずむずむつと挿入しただけで思いつきり濃い射精をってしまった。

「わたし、これで、あなたさまの、『女王』、ですわ」

「ああ、レイヴェル。俺の『女王』。これから、ずっとよろしく」

「かしこまりましたわ、私の『王』さま。どうか末永くお仕えさせてくださいまし」

まだ全く萎えていない逸物でレイヴェルを串刺しにしたまま、俺たちはキスをして……。

『——至った』

いいところでドライブの音が俺の中に響き、
『Welsh Dragon Balance Breaker!!!』

勝手に現出した《赤龍帝の籠手》が、その宝玉を紫に輝かせ、紅の炎を噴き上げた。

莫大な龍と悪魔のオーラが紅焰となつて、俺とレイヴェルを取り巻く。

『バランスブレイカー、ブーステッド・ギア・レイジ・レックス・レギオン
禁手、一にして多なる赤龍帝の魔王軍』。お前が定めた条件の成立により、今覚醒したぞ……』

どこか申し訳なさそうな小声でそう告げると、ドライブの声は遠くなつていった。交尾中は顔を出さないし、居ないものとして扱えつて言つてたからな……。

なんか、スマン。眷属が出来たらバランスブレイクするように設定した、駒を預かったばかりの頃の俺のせいだ。すまない、スマナイ……。

「あの……今のは……？」

どこかうつとりとした瞳で、腕の中のレイヴェルがたずねてくる。うん、ぶっ挿したままバランスブレイクしちゃつてスマナイ。禁手作つたころの俺は、普通に駒を入れるつもりだったんだ。性欲みなぎる前の俺はな……。

「《赤龍帝の籠手》が禁手に至つた」

「そうでしたの……。あの、えっと……」

レイヴェルもどう言つていいのか分からないようだ。それはそうだろう。

「歴代の赤龍帝は、神器の力を知ってからすぐに禁手に至っていたらしい。俺の場合もすぐにそうなることが出来る状態になった。ただ……通常の禁手の『赤龍帝の鎧』は、どうも『王』というより『兵士』や『騎士』『戦車』に相応しいイメージだったから、俺が『王』になるまで取つておいたんだ」

「なるほど……それで、今、私が眷属になつたので」

「そうだと思う。正直、ずっと前に条件を設定したから半分ぐらい忘れていた」

レイヴェルに軽くこの禁手の持つ効果を説明して、そう考えた理由を伝えておく。

「おめでとうございます！ その……とても素敵なお姿ですわ!!」

レイヴェルの賛辞はどうも本気のものようだ。キラキラうっとりとした瞳で、俺のこを見つめている。ちなみに彼女の膾内には、俺の剣が納刀されたままだ。

彼女を抱えたまま、翼を広げて鏡の前まで飛ぶ。鏡面に映る俺の今の姿は、なんとというか魔王だった。

兄上が公式行事などで着ていたり、歴史の教科書の中で古キルシファーの一族が纏っていたりする様な装束だ。あと、前世の漫画で見た必殺技が不死鳥の炎の大魔王っぽくもある。

色合いとしては、白を基調としながらも紅の装飾帯が目立つ。肩や王冠などの各所に配置された宝玉は深い色の紫水晶のようだ。

「なんていうか、コスプレ?」

「いいえ、いいえ！ 素晴らしいお姿ですわ！ 私の『王』さま！」

そう言われると、美少年顔もあいまってシヨタ魔王っぽく思えなくもない。そういう魔王もいるだろう。威厳は少なくとも妖しかったり、無邪気に残酷だったりする系統でいそうな気がする。

なんにしても、顔が良ければ衣装の方が合わせてくるってことにしておこう。

「ふむ、こうして見ると美しき姫君を抱きかかえてさらう若き魔王の凶、か」

「まあ♡」

と、ロールプレイしてみたけれど、実際のところその姫君は全裸で絶賛交中なんだけどな。勇者が助けに来たらガツクリだよ。

「すまなかつたな。すぐに解除するから、続きを……」

「あのっ!!」

正直まだまだ射精したりないので、禁手を解除して続きをしよう。そう声をかけたところ、レイヴェルがぎゅーっと抱き着きながら大声を上げた。

「ん?」

「そ、その、私、今のお姿で……可愛がっていただきたいですわ♡」

ふむ、俺の姿を見るレイヴェルの目が、表情が大変興奮していらっしやる。これはそう、修道女を見つめるディオドラとか、あるいはメイドさんにぐふふとなっている俺のような気配。

「あー、レイヴェルは……この格好が好きなのか？」

「えつと……。よく、分かりませんが……今のお姿を見ていると、とても、こう、言い表せない何か胸の奥から湧き上がってくるような」
分かった。覚醒してしまったらしい。彼女の中で新たな性的趣向が。

1-14 可哀想な墮天使の娘が悪魔にサれる

さらわれたお姫様と魔王ごっこは大変楽しかった。拉致されたお姫様が魔王の手練手管により徐々に快樂に目覚めていき、最終的には自分から妻になりたい子供を産みたいなんて言い出して堕ちてしまいうロールプレイである。

さて、寝起きのまどろみの中、俺と堕ちたお姫様とがイチヤイチャ乳練り合っているとメイドに起こされた。起床の時間である。予定もあるので、「嫌だ、まだこれから一戦する」とは言えない。

フェニックス卿ご夫妻は昨夜も泊っていったのだ。けれど、それなりに忙しい身の上なので、朝食を共にしたら家に帰るらしい。

「ん？ またお前か。よく見かけるな」

「はい、その……」

本日もあの角メイドがいた。どうもよく口淫奉仕をさせているので、「お気に入り」扱いになっている気がする。名前も聞いていないのだが。

角メイドは、レイヴェルの様子を大変気にしている様子。それはそうだ、未来の夫がお気に入りになっているご奉仕メイドなんて、レイヴェルの立場からすると複雑だろう。

しかし、メイドたちの顔が赤いな。こうエロい期待とは少し違う感じだ。

「構いませんわ。あなた、名前は？」

「ろ……リユイと申します」

「そう、リヴラクスさまによく仕えなさい」

「かしこまりました」

ふん、と上から目線のレイヴェルと、ペコペコしている角メイドのリユイ。うん、余計なことは言わないでおこう。

いや、ハーレム許可は出てるからいいはずなんだけどね。一応。

角メイドは舌遣いが恐ろしく上手いのと、女体の声が面白いんだよな。

(こんな、人間混じりにい♡)(ああ、年下の子に逆らえなくされちゃっ

てるう♡)(この私の口が、ご奉仕専用になれちゃう♡)

などと、いろいろ楽しんでるようなのだ。コヤツめ、ハハハ。俺は気持ち良ければそれで良いぞ。

メイドに手伝わせて手早く入浴を済ませます。今日はレイヴェルが「私も一緒にいいですわ」と言ったので同じ浴場だ。といっても、そこでアワアワックスや、メイド三人おっぱいスポンジ洗いなどのサービスは受けられない。婚約者がいるからね。仕方ないね。

でもちよつとだけレイヴェルに悪戯したところ、「メイドとはいえ、見られていますから」とハートマーク付きのセリフで怒られてしまった。まだ、少しふざけてみたいお年頃なんだ。

そんなこんなの後、両家交えての朝食となった。なったのだが、なんとというか我が両親も、レイヴェルの両親も、実に機嫌が良さそう。ツヤツヤしておられる。

「ふふ、昨日はあなた達にあてられちゃったのよ」

母上が何やら恥ずかしそうに頬に手を当てている。可愛いんだよなあ。

「しかし、あれだぞ、リヴラクスくん。あんなオーラをやたらと放つてはいかんぞ」

昨日よりも仲の良さそうなフェニックス夫妻。

食後のひと時、俺はミルク多めのコーヒーを飲みながら、何があったのかを聞いていた。

「レイヴェルもですよ。仲が良いのは喜ばしいことですけど」

どうも、俺とレイヴェルでオーラを絡めてぼわーんとやっていたときの気配が、このグレモリー邸内どころか、周辺の領都全体を覆うほどに広がっていたようだ。

御用商人などはさつそく婚姻関係で入用な物の注文を取りに来て、あとは平民のなかでも金のあるヤツなどから献上品などの話も出てくるらしい。

「は、恥ずかしいですわ……」

「リヴラクス……レイヴェルくんが必要な学習過程を終えたらすぐだな！」

父上はめちやくちや機嫌がよろしいです。

いや、そうか。あのオーラが広範囲にな……俺の魔力総量多いから、そういうこともあるか。

そんな感じで冷やかされるやら、からかわれるやらしながらした後、フェニックス夫妻は帰っていった。

「朱乃に会わせるから」

「はい。バラキエルの娘に与える駒は、どうするおつもりですか？」

レイヴェルと連れ立って、監禁している部屋へと向かう。

「本人は『戦車』がいいそうだ」

「あら、『戦車』とは身の程をわきまえているのか。それとも、ただ駒の価値が高いものを選んだのか。どちらでしょうね」

悪魔社会において、特に女性貴族は『騎士』を護衛として近くに侍らせる。そんな文化がある。

『僧侶』は知恵袋。『王』の問いに答え、あるいは調査などもする。

『兵士』は小間使いだ。他の駒の者が出向くまでもない事柄全般に渡って奔走する役どころ。兄上のところの『兵士』を見ているとホントにそう。

これらもあくまで大まかなイメージで、『王』の考え方次第で変わってくるが、なんとなくそんな風潮がある。

「盾になりたいって言ってたな」

膨大な消滅魔力で身を守る俺や、不死身の特性を持つレイヴェルと比べると朱乃は脆い。

「そうですか」

レイヴェルは何やら考えている様子だ。最初に『女王』を欲しがっていたことは、言わない方が良いのだろう。

チエスの『王』、『女王』、『僧侶』、『騎士』、『兵士』これら他の駒と『戦車』は趣が違う。なんというか、『戦車』以外の駒は人なのだ。役職があるというか。

それに対して、戦車あるいは塔、城塞は、兵器や建物だ。どうして戦車に乗る、あるいは城を守る『将軍』ではないのか不思議だが、詳しく調べてみたことは無い。

まあ、なんとなく他とイメージが違う駒であるというだけだ。戦争専門、他のことは任せた！ といった感じか。

「とにかく、会ってみてくれ」

「もう決めていらつしやるのですよね？」

「まあ、そうだな」

「もう……『王』が既に決断されているのでしたら、私はそのバラキエルの娘を上手く扱えるようにするだけですわ。ただ、一応『戦車』に相応しい“力”があるのかどうか、それだけは確かめさせて下さい」

俺の魔力増大とはやり方が異なるが、朱乃にも前世知識による訓練はさせていたのでそこは大丈夫だと思いたい。あれだけ『戦車』を握りしめていたのに、「やっぱり、お前は『兵士』な」とはちよつと言い難い。

比較対象が俺になると見劣りするが、朱乃の『雷光』は並みの上級悪魔を一撃で葬れるだけの威力はあるように思えるから大丈夫だろう。



何も知らない、小さなころは幸せだった。すぐそばに怖いことがあるなんて何も知らなくて、母とバラキエルが居てくれたらそれだけで安心だって思ってたから。

『父さまの羽、嫌いじゃないよ。黒いけど、つやつやで朱乃の髪の毛と一緒にだもの！』

『そうか、ありがとう。朱乃』

バラキエルとお風呂に入るのが好きだった。

『ねえ、母さま。父さまは朱乃のこと好きかな？』

『ええ、もちろん』

やさしく髪をとかしてくれる母が好きだった。

『バラキエルは留守か……。ならば、その子を渡してもらおう。忌々しき邪悪な黒き天使の子を』

でも、バラキエルが今日は休みだって言っていた日。一日中いるよ

と言っていた日。アイツは家から出かけて行った。

急な用事が出来たから。どうしても外せないから。早く帰ってくるから。そう言って、バラキエルは居なくなつた。

『母さまー。いやあああつー！ 母さま、母さまああつ!!』

私の目の前で、母は殺された。バラキエルを憎む人間たちから、私をかばつたせいで殺された。

『黒き天使に心を穢された者は死んだ。次はお前だ、バラキエルの娘』
母が死んで、泣きわめく私に向かって刀が振り下ろされる寸前。雷が光つて、部屋の中が血でいっぱいになった。

バラキエルがやって来て、人間たちを殺したのだ。簡単に、いともたやすく。

あと一分バラキエルが来るのが早ければ、母は殺されなかった。あと五秒、バラキエルが来るのが遅ければ私も殺されていた。

『すごい偶然だな。まるで見計らっていたかのようなタイミングだ』

あの人はそう言った。たしかに、そうだ。

一分、たつたの一分で結果は全く違つたはず。それだけで、母が死んで、私は生き残つた。どうして、そんな……。

『嫌い！ 嫌い！ こんな黒い翼大嫌い！ あなたなんか嫌い！ 皆嫌い！ 大嫌い!』

人間も、墮天使も、みんな怖くて、嫌いで、憎くて、走り出した私をバラキエルは追いかけてこなかった。

何日もさまよつて、持っていた少しのお金を使い切つて、ひもじくて、辛かつた。寂しかつた。

『普通の親なら、家出した娘を探すだろう。それで大嫌いなんて言われようが、無理矢理連れて帰るはずだ』

あの人の言うことは、きつとその通りで、冥界の、邪悪と言われている悪魔のテレビ番組の中でさえ、親はそうしていた。

でも、バラキエルはそうしてくれなかった。逃げた娘なんていらなかったのか。好きと言わない娘なんて必要ないのか。大嫌いなんて言う娘は嫌いなのか。

そうだったら……良かったのに。

『見つけたぞ、バラキエルの娘。今日こそ死んでもらう！』

姫島の、母の家の人間たちに殺されそうになった。

『その力……人に非ざる化生の類か。見た目は童女といえども、見過ごせぬ』

優しそうなお坊さんが、強い力のこもったお札を投げつけてきた。

『墮天使か。可哀そうに思えるが、天に逆らう者に容赦はできん』

天使の、教会の、正義を名乗る人たちに剣を振りかざされた。

『聖書の者は好かん。去れ』

妖怪は冷たかった、けど襲ってこなかった。

『ああ、墮天使か。いや、困るんだよね。ボクって転生したばっかで下積み中だしさ。余計なことされると、主さまにオシオキされちゃうから』

転生悪魔だという人は怖かったけれど、すぐに出て行けば許してくれた。でも、もめごとの種はごめんだからって、悪魔の縄張りには絶対に入るなど何度も言われた。

元は人間の悪魔はともかく、純血の上級悪魔はプライドがとても高いので自分の縄張りに墮天使がうろつくことを酷く嫌うらしい。そういうことをこの時に知った。

悪魔の縄張りを避け、教会の近くに寄らず、山や森に入っては妖怪に追い出され、人間に何度も殺されそうになった。

もうダメだ！ そう思う度になぜか分からないけれど、ギリギリ、本当のほんとうに死んじやうちよつと手前で助かった。

その理由を知ったのは、ここに連れてこられる直前と、ここに来てからだった。

『すまぬな、後生だ。此度は黒き天使たちの邪魔も入らぬようだ。せめて、苦しまずに送ってやろう』

大叔父、母の親類の人間がそう言っていた。いつも墮天使たちが邪魔をしていたのだと。それがなければ私はずっと前に殺されていた。

『朱乃を見つけていたのに、保護するわけでもなく、何度も何度も死にそうなる目に合わせて、ずっと一人で苦しい生活をさせていたんだな』

あの人から、墮天使の組織はとても大きいと教えてもらった。悪魔

や教会と同じくらいには強大で、私を一人を見つけたして捕まえるのなんて簡単なのだと。

『それなのに、そうしていたとすると……』

言い淀むあの人に、私は教えて欲しいとすがった。

『朱乃を苦しめるのが目的だったのかもしれない』

ガラガラと音を立てて、心の中の大事なものが崩れ落ちて行つた。それでもと、もしかしたらと、頼りにしていた何かは粉々になって。その砕けた欠片を必死でかき集めて、私は私を繋ぎとめた。

『これを見てみる』

そう言つてあの人が見せてくれたのは、昔、母と私が住んでいた家。バラキエルが時々やって来ていたあの家屋。その奥にあった、あの部屋の扉。

そしてその扉の奥。バラキエルが家に来た日、まだあの男を信じていた私は、母と三人で一緒に寝ていた。そうした日に、ふと夜中に目を覚ますと——母とバラキエルが居なくなっている。

不安になつた私は家の中をあちこち探し回つた。小さな家だ、すぐに見て回つてしまえる。

『これは……拷問の道具だ』

入つてはいけない。決して中を見てはいけない。近寄つてもダメ。もしかしたら……そう考えた私は、母とバラキエルを探してそこに行つてしまった。

そうして、聞いてしまった。開けてはならない扉の向こうから聞こえてくる、野太いバラキエルの呻き声、聞いたこともないような母の甲高い叫び。

怖い、怖い、怖い。私はそろりそろりと扉から離れて、急いで布団に潜り込んだ。それからガタガタと震えながら、一夜を明かしたのだ。朝方になつて戻つてきた二人は、寝たふりをしている私の横に何事もなかったように入つて来た。

バラキエルは、ニタニタと何やら満足そうな顔をしていたような気がする。そして、母はどこか疲れた顔をして身体のあちこちをさすつていた。

その意味は、このときの私にはよくわからなかった。ただ、なにかとても怖くて、でもどこか……。

『お前の部屋はここだ。食事はきちんと取れ、風呂とトイレはすまないが用意してやれないから、俺の使い魔で代用してくれ。ちゃんと運動もしろよ。それから、暇だろうから何かいるようなら言え』

大叔父に殺される直前、私はあの人に捕まえられた。大叔父とあの人との会話からすると、どうも二人はどちらが先に私を捕まえられるか競っていたらしい。

首根っこを掴まれた私は逃げ出そうとしたけれど、あの人魔力の波動を受けてすぐに諦めた。どうしようもない、こんな子がいるんだ。一瞬で、私は逆らうことの出来ない絶対的な差があることを思い知った。

震えながら何事か言い募る大叔父を、あの方はジオテイクスさまの眷属のアグリツパさまに任せて、私をジロジロと観察していた。そうして、ひとつうんと頷くと私をペットにすると行って、そのままここまで連れて来たのだ。

『だいぶ顔つきが良くなったな』

飼われる生活は正直、家を飛び出してからと比べたらまったく悪くなかった。屋根があつて、布団があつて、寒くなくて、暑くなくて、安心して眠れて、ご飯の心配がいらぬ。

部屋の外に行けないことと、あの人以外はほとんど口もきいてくれないのは辛かったけれど。殺されそうになる毎日よりはずっと良かった。

それに、あの人がいっぱい構ってくれた。

『朱乃の翼は綺麗だな』

『薄汚い堕天使の羽だよ……』

『お前の髪と同じ色だ。汚いなんて言うな。ああ……ただ、俺が堕天使の翼を褒めたなんて誰にも言うなよ』

あの方は、他の悪魔が居る時は冷たかった。つつい甘えてしまうと叩かれたり、蹴られたりして、叱られた。でも、二人だけの時は優しい。

『私の髪、好きなの?』

『ん? こうしていると気持ちいいから』

『私も!』

髪をよく梳いてくれた。櫛で丁寧にした後で、頭を撫でながら何度も何度も手櫛で指を通して。一緒に冥界のテレビを見た。ゲームをして、シーグヴァイラさん? さま? の布教用とかいうアニメも観た。

よく覚えておいて、将来、シーグヴァイラさまの相手をしてくれと頼まれた。だからあの人のいないときに張り切って観て、その話をたくさんした。お気に入りには、紅い機体だ。強いんだけど、でも最後はやられちゃうことが多いのがちよつと残念。

あと、テレビには、えつちな番組ばかりのところがあった。

男の人と女の人が、ずっと絡み合っている映像ばかりが流れていて……。あの人のいる時は見ないけれど、ひとりのときに……。

最初に気づいたときは、びっくりしてすぐに切り替えた。でも、少ししてやっぱり気になって、えつちなのにしたら、音が大きくて、すぐ小さくして、布団にもぐって、でもちよとだけ布団を持ち上げた隙間から覗いてた。

『ヘッドホンが欲しい?』

お願いして、ドキドキしながら観ていたら、男の人が鞭を振ったり、ロウソクとか、縄とか、口に穴の開いたボールみたいなのとか……そんなものが画面に出てきた。あわあわしながら、でもドキドキして、そしてそれが……あの怖い部屋の映像に出ていたものだと、私は気づいた。

男の人が女の人を責め立てて、最後は、嫌がっていた女の人が、男の人のいいなりになってしまう。他の叩いたり縛ったりしないのも大体そんな感じだったけれど。

ああ、母は……そうだったんだ。私は、姫島の人間たちが言っていた言葉を思い出した。

母は、バラキエルに騙されて、優しさにつけ込まれてさらわれて……そうして、あの部屋で……心を穢されてしまったんだ。

バラキエルは、母が殺されてすぐに現れた。バラキエルがいたはずの日に、急にいなくなつたバラキエルを狙つて襲つて来た人間に母は殺された。母を本当に大事にしているのなら、恨んでいる人間の来ないところに連れて行くことだつて出来たのに。

バラキエルは、逃げ出した私を捕まえなかつた。連れ戻さずにと死なないギリギリで……アハ。

急に快適なこの部屋から逃げ出したくなつて、私は食事を運んできた使用人を突き飛ばし、外へと飛び出した。

走つて、走つて、あの人が褒めてくれた翼を広げて、飛び出して――捕まえられた。

捕まえてくれた。逃げられなかつたことが、嬉しい！ 嬉しい！

嬉しい！

怒つたあの人に叩かれた、叱られた。嬉しい！

あの人は私に首輪を付けてくれて鎖で繋いでくれた。それから、どうして逃げ出そうとしたのか聞いてくれて、慰めて、抱きしめてくれた。嬉しい！ 嬉しいよ！

『やっぱり閉じ込めたままだと、ストレスが溜まるか』

それから、散歩に連れて行つてもらえるようになった。首輪を付けて、鎖を引つ張られて、私が違う方向へ行こうとすると、グイツと引つ張つてくれる。首が苦しくて、そのぎゅつと締まる感じがドキドキして、わざと何回もやった。その度に、あの人は私を痛めつけて、冷たい声で叱つて、その後二人だけのときに困った顔で抱きしめてくれた。

私は何度も何度もあの人を困らせた。ダメつて言われたことを繰り返して、何回も叩かれて、慰められて、それがどうしようもなく嬉しかった。

『朱乃、墮天使の光力を見せてくれ』

あの人は、私に墮天使の力を求めた。バラキエルの血からくる、『雷光』の力を。

この力は憎い、嫌いだ。でも、あの人がそれを求めてくれるのなら、私の価値がそこにあるのなら。黒い翼のように褒めてもらえるのなら、

ら、そんなことはどうでも良かった。

『うん、でも、出せないよ』

墮天使の力を抑え込むという、大戦時代に作られた枷。私の手足にはそれがはめられていた。『雷光』の力は、悪魔にとって毒だから。光の槍の一刺しで、弱い悪魔は簡単に死んでしまう。

だから、枷を付けられているのは仕方がないこと。

むしろ……。

『おお、やったな。枷を付けたままでも槍が出せたな』

『うん、リアスさまの言ったとおりにしてたら、出来たよ』

枷があるから使えないのではない。枷をトレーニング用品として使う。一緒に見たドラグ・ソボールのアニメでやっていた。

ホントにできるの？ って思っていたけれど、ホントにできた。最初は何も出せなかったのに、頑張っていたら鉛筆くらいの光の槍が手のひらに。

『それじゃあ、次行くか』

そう言つて、あの人は私につける枷を増やした。手足にかかる重さが増して、それがあの人に縛りつけられているようで……嬉しい！

『朱乃』

名前を呼んでもらえるだけで、嬉しくなる。他に誰も呼んでくれない私の名前。墮天使バラキエルの娘じゃない。人間の姫島でもない。私の名前。

『ん、ちよつと』

ここに来てどれぐらい経った頃だっただろう。窓のない部屋の中で、私の時間の感覚は曖昧だ。一日三回の食事だけが、時の流れを覚えてくれる。

どれぐらいなのかよく分からないけれど。結構な時間が過ぎた頃から、私とあの人の関係は変わった、のだと思う。

あの人が私を避けるようになった。寂しい。

いつものように甘えようとする、もによもによとよく分からないことを言つて離れようとする。前まではあんなに構ってくれたのに、触ってくれない。

でも、悲しくて私が泣くと、ギュツとしてくれる。嬉しい。

後ろから抱えてもらって、一緒に座るのが好きだ。髪を梳いてもらって、羽を撫でてもらって……そうして、お尻に当たるあの人の両脚の間が、硬くなっていてのに気付いた。

ドキドキする。心臓が爆ぜそうで、顔が真っ赤になっているのが自分でよくわかった。とつても嬉しい！

あの人の視線が、大きくなってきた私の胸に向いている。ジツと見つめて、それからすぐに逸らす。

あのテレビの男の人と女の人みたいなことがしたいのかな。だったら、嬉しいな。

あんな風に、縛られて、叩かれて、いろいろされたら、私はどうなっちゃうんだろう。

でも、それなら、どうして避けるの？ もっとくっついて欲しいのに。触って欲しいのに。撫でて欲しいのに。なんだったっていいのに。なんだったってするのにな。

あの人は私がそう思ってくっつくのと、突き飛ばして、苦しそうな顔で部屋からいなくなってしまうた。悲しい、寂しい。なんで……？

私、なんでもするよ？ なんでもしていいよ？ だから、だから……。

あの人が来なくなつて、どれぐらいだろう。

私は悲しくて悲しくて、寂しくてたまらなくなつて、あの人の使い魔をずっと触っていた。私の身体を綺麗にしてくれる子たち、最初は気持ち悪かったけれどプルプルして可愛いかもしれない。

あの人の使い魔に包まれていると、気がまぎれた。あの人を感じたくて、体中たくさん掃除してもらった。えっちなテレビみたいなのに、身体の中でも感じたくて飲み込もうとしたけど、嫌がって入ってくれない。

どうしようかといういろいろ試していたら、お尻の穴には入ってくれた。お掃除好きだから。

頑張つて、全部押し込んだ。お腹が痛くなつて、ぐるぐるして、でもそれがあの人の使い魔の感じだから……嬉しかった。寂しいけど、

ちよつとだけ慰められた。

久しぶりに、あの人が来てくれた！ 嬉しい！ 嬉しい！ 嬉しい！

婚約者が出来たって言われて、もう私はいらないのかと思ったけれど、ずつとずつとずつとずつと縛って捕まえて離さないでいてくれるって、やった！

前に教えてもらった『悪魔の駒』の話。『女王』の駒はレイヴエルさまのものだからダメって言われたけれど、『戦車』ならいいんだって！ 嬉しいな。下僕にしてくれるんだって、嬉しいな！

お腹をぎゅーつとされて、とつても恥ずかしいところ見られちゃったけど……でも、そんな汚い私を見て、あの人は大きくしていた。ドキドキする。ぎゅつてなる。

ベッドに運ばれたときは、これから、ああいうことされちゃうのになつて思ってたけど……嬉しかった。違ってたけど、嬉しかった。

私は勉強しなくて、頭がよくないから、きつと難しいことは考えられない。十まで母と二人だけで、それからはあちこちさまよつて、そのあとはずつとこの部屋。私とあの人だけの部屋。

だから、『僧侶』はきつと無理。『騎士』は礼儀作法が大事って聞いた気がするから、これも無理。『兵士』はあちこち忙しいんだって、それだと構ってもらえないから無理。

無理でも『女王』に憧れたけど、悪魔の知り合いがいなくて、何も分からない私じゃ無理だってそんなことわかつてるもん。憧れたっていいじゃない。

『戦車』でいい。『戦車』がいい。余計なこととは何も考えない。操縦する『王』さまに言われたとおりに真つすぐぶつかつていく、そんなのでいい。

ホントはね。それじゃダメだって知ってる。頭が悪いよりは、賢い方がいいと思うよ。でもね、テレビで言ってたんだ。バカな子の方が可愛いって。

命令して欲しいから、たくさん、たくさん。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

昨日の、たぶん昨日の？ 嬉しかったのがどこかに飛んで行ってしまった。

なにあれ、なにあれ、なに、なんで。あの人と誰かの、気配、魔力の波動、オーラなにかそういうもの。それがブワーッと大きく広がって来て……。

ああ、敵わないんだなって、分かっちゃった。

きつと、昨日言っていたレイヴェルさまだ。もう一人のオーラは。私は悪魔じゃないから、あんな風にはできないけど、でも、きつと悪魔にしてもらってもあれ以上にはなれない。過ぎた時間は私の方が多いはずなのに……なんでだろう。

やだな。やっぱりイライナイって言われちゃうのかな。下僕にはしてくれても、もう構ってくれなかったりするのかな。

怖いよ。寂しいよ。違うって言って。

あつ！ あの人が来た。ゾクゾクってする魔力の波動が近くなってる。

扉が開いた瞬間、私はリアスさまに向かって駆け出した。ぎゅーっとしたい、して欲しい。

「レイヴェル。この子がバラキエルの娘の朱乃だ」

「はあ、随分と懐かれていますわね」

今日は叩いてもらえなかった。頭は撫でてくれるけど、隣の金髪の女の子と話してる。

「ほら、朱乃。昨日話した、俺の婚約者のレイヴェルだ」

くつついたのを離されて、紹介されたのはお姫さまだった。アニメでしか見たことのないような、くるくるした髪型。動き？ 所作？ とにかく、何かが私とは違う。品があるっていうのかな。

「朱乃です」

「レイヴェル・フェニックスですわ」

レイヴェルさまは亜空間から取り出した扇の先で、頭を下げた私のあごを持ち上げた。それから私のあちこちを見て回って、ふうんと鼻

で笑らう。

「リヴラクスさま、少し彼女と二人で話させてもらえませんか？」

「いや……」

「私の『王』さまの大事なハーレム計画に必要なことですわ」

リアスさまは、レイヴエルさまにそう言われると、うーんと唸って外に出て行っちゃった。

「さて、朱乃——」

……………。

レイヴエルさまとの話が終えて、私は少し安心していた。

ハーレム！ リアスさまはたくさんの方の人を愛したいから、それにちゃんと協力すればいいんだ！ でも、一番はレイヴエルさまってことを忘れたらいけない、ということらしい。

もし、一人しか愛さないってことだったら、私はきつといられなかったから、良かったんだ。

私が『戦車』の駒をもらったら、レイヴエルさまは私の先生になってくれるみたい。私の言葉遣い、立ち居振る舞いが悪いと『王』の恥になってしまうから。うん、頑張る！

「それじゃあ、ちよつと朱乃を連れて行くから」

「行ってらっしゃいませ。明日には戻って下さいね」

首輪と枷を外された私は、悪魔になるまえにすることがあると言われて、部屋の外に連れ出された。

手を繋いで、ギューツと握ってもらえて、嬉しい。

「これは転移の魔方陣だ」

魔方陣で連れていかれた先は、どこか見覚えのある場所だった。山と木々に囲まれたそこは——昔住んでいた、あの家だった。

1-15 ドM墮天使の娘を悪魔にシてやる

ここは、朱乃が昔住んでいた家だ。

その大きさは、グレモリーの屋敷というより城レベルの住処と比べると、掘っ立て小屋のようなもの。

墮天使の経済規模とその幹部が得ているであろう金銭を考えると、かなりみすぼらしく思える。前世の感覚で考えても、ちよつと辺鄙な場所過ぎだ。

といって、完全に人間社会と隔絶した山奥でもない。なんというか、中途半端だ。天界に住まう天使でもなく、人の街に紛れる悪魔でもない、墮天使らしい選択なのだろうか。

簡単に言くと、ちよつとした別荘を建ててレジヤーとして過ごすのに丁度よい雰囲気。愛人を囲ってにおいて、息抜きに来るのにいい感じの。

「(´▽｀)……」

戸惑っている様子の朱乃の腰に手を回した。

「この辺りの土地をまとめて買って置いておいた。欲しがるかもしれないと思って」

場所によるのだろうが、日本の山林は結構お安い。輸入木材におされて国産木材の需要はガツクリ落ち込み値段は下がっているらしい。樹木を切り出す手間と費用を考えると黒字化が難しく、放置一択になっってしまう。それなのに不動産にかかる税金だけは支払う必要があるので、負動産なんて呼ばれていたりするぐらいだ。人間やっていた頃の祖父が、田舎の山を相続することになって、どうしようと思いでいたから知っている。

ここは俺の小遣いで買った。墮天使が権利に絡んでいるのかと思っただが、特に妨害も入らずすんなり入手出来てしまった。

「……………あ」

草が伸び放題の庭。家の見た目は完全に廃屋だ。人が住まない木造家屋などすぐダメになる。特にこんな山奥では、自然に飲み込まれていくものだ。

消滅の魔力で玄関までの草木を消し飛ばす。そうやって出来た道を、朱乃の背を押しながら進む。

鍵はかかかっていないのに、なかなか開かない扉を力づくで開くと、そこにはまだ三年ほど前に起きた事件の痕跡が残されていた。

「えっ……!?!」

玄関を潜らず、朱乃だけを家の中へと突き飛ばす。

そんなことをされるとは露ほども思っていなかったのか、朱乃は転がったまま呆然とした表情でこちらを見上げてきた。

「バラキエルは、本当は優しい男だったのかもしれない」

「え、なに?」

「普通に善良な夫で、妻を愛し、娘を愛していたのかもしれない」

「なに?」

膝を曲げて、目線の高さを合わせた。

「もし、本当はそうだったとしたら。どうする?」

困惑した様子の朱乃をジッと見つめ務めて平坦な声で、俺はそう言った。

「なんで……そんなこと言うの?」

「お前とその母親をちゃんと守れる場所に住まわせなかったのも、何かどうしようもない事情があったのかもしれない。お前が一人で寂しくて辛い旅をしていたときも、バラキエル本人にはどうしようもない事情があつて助けに行けなかったのかもしれない」

「なんで!?!」

「もし、そうだったら……どうする?」

うん、泣かせてしまった。そんな趣味はなかったつもりだが、朱乃はどうもいじめてしまいたくなる。俺はDSへと調教されているのかもしれない。

「そんなの、そんなの……」

「優しいお父さんだったら、一緒にいたいかな? バラキエルのところへ帰りたいかな?」

「なんで、そんなこと言うの!?!」

これから悪魔になって、一緒に楽しくエッチしようね。そんな状況

から、冷たく突き放すような雰囲気を感じているつもりだ。

朱乃は立ち上がらない。転んだまま、こちらをぐちゃぐちゃの涙目で見てくる。

「俺はお前が、朱乃が欲しくて、逃がしたくなくて、バラキエルのことを悪く伝えた。朱乃が墮天使を憎むように、人間を嫌うように、そんな風にならずとして来た」

返事はない。口をぎゅっと強く閉じて、彼女はこちらを見つめている。

「悪魔と墮天使は敵同士だ。朱乃が俺の下僕に、眷属悪魔になったら、俺はお前を墮天使と戦わせるぞ。本当は優しいお前のお父さんがここにいたら、『殺せ！』と命令するぞ。出来るか？ お前はバラキエルを殺せるか？」

「出来るよ！ やれるから！」

「お前が今そう思っているのは、俺がそうなるようにしたからだ。もう一度よく思い出せ。この家で過ごした日々はどうだった？ 本当にバラキエルは今の朱乃が憎んでいるような男だったか？」

「いやっ！ イヤイヤイヤっ!!」

何かを拒否するように、首を何度も横に振って強く否定の言葉を吐く朱乃。

しばらくその様子を眺めて、

「ところで話はぜんぜん違うんだが、俺はこの家を壊そうと思っている。お前の思い出が残っている邪魔な家を壊して消して、その場所に新しい家を建てたいと思っている。朱乃が悪魔になって俺の眷属として過ごすようになったら、ここに別荘を建てよう。悪魔の建築技術なら一晩で建てられるが、なんなら二人で一から建ててみるのもいいかもしれない。ログハウスとかそんな感じの建てて、たまに遊びに来るんだ」

急に話を変えた。ついていけない様子の朱乃を置き去りにして続ける。

「俺も昔は人間だったから、こっちの空が恋しくなることもある。今はまだ若いから忙しいけれど、悪魔の寿命は長い。そのうち余裕がで

きたら、二人でそんなことをしてみるのもいいかなと、そんな風に考えていた」

「うん……」

「楽しそうだろう」

「うん……」

嫌な話ではなくなっただけ嬉しいのか、朱乃は頑張っただけ笑顔が浮かべようとしている。

「でも、お前はきつとそれよりも前に逃げていく」

「逃げないよ!」

「捕まえてくれてくれて言っただけよな? 縛ってくれ、離れられないようにしてくれって」

「そう、だよ。そうしてくれたら、ずっといるよ」

「お前が悪魔になったら、もう首輪も枷も付けない。そうすると、お前は逃げて行く」

「逃げないから……逃げない……」

「俺は酷いヤツなんだ。……レイヴェルから聞いたと思うけど、欲深くてお前たちだけでは我慢できない男なんだ。もつとたくさん女を連れてくる。そんなヤツ、朱乃は嫌だよな?」

「いや……じゃないから!」

訳が分からなくなっている感じの朱乃に、微笑みを向けた。合わせるように笑って見せようとする彼女は、実に可愛らしいと思う。

「こんなヒドイ男の所に来なくてもいい。お父さんのところでなくても、どこかにちゃんと朱乃だけを見て、朱乃のことだけを愛してくれる人がいるだろう。そういう人を探しに行ったらどうだ?」

「いらぬの……? リアスさまは、私のこといらぬの?」

「欲しいよ。全部欲しい! 身体も、心も、魂も! 全部だ!」

「だったら、なんで?! なんでそんなこと言うの?! なるから、リアスさまのものになるって言ってるのに! なんで信じてくれないの!」

「一年半くらいか、一年と半年、俺はお前にずっと酷いことをしてきた。力づくで無理矢理さらってきて、閉じ込めて何処にも行けないようにした。鎖で繋いで、ことあるごとに叩いて、蹴った」

「でも、それは！ そうしないといけないう決まりだからって！」
「……あれはな、別にしなくても良かったんだ。俺は次期当主で、それなりに立場が強いから、お前に痛い思いをさせていたのは、別の考えがあつたからだ」

「……え」

表情の抜けた彼女の名前を「朱乃」と優しく呼んで手で招く。おずおずと這うように寄ってきたその頬を何度も撫でた。

「お前は俺を好きにならないと生きて行けなかつただけだ。そのことを思い知らせようとしていたんだ。あの城でお前を守っているのは俺だけだ。俺の機嫌を損ねたら殺されてしまう。だから、お前は俺に好かれよう、気に入られようとして、何をされても嬉しく感じるようになっていてるだけだ」

分からないと、表情で語る朱乃の髪に触れ、そつと指で梳く。

「今は分からないかもしれない。でも、いつかお前はそのことに気付く。そうしたら、もう俺の下にはいられないだろう。どうにかして逃げ出すだろう、そしてお前は『はぐれ悪魔』になる」

「はぐれ悪魔」

「そう、主の下を許可なく去った転生悪魔は、『はぐれ悪魔』として処罰の対象になる。罰の内容はまず間違いなく処刑だ。捕らえるなんて面倒なことはしない。最初から殺しにかかる。一緒にアニメを観たよな、ロボットの。あれを貸してくれたシーグヴァイラの家がその辺りを取り仕切っていて、どこの家から『はぐれ悪魔』が出たから処分しろって指示が全ての悪魔に下されるんだ」

ハンカチで涙をぬぐってやる。

「お前が逃げた先の近くにいる悪魔たちが、お前を殺しにやってくるだろう。それに、『はぐれ悪魔』を出した主は一番責任が重いから、出来る限りそれを追いかけて自分で処理することが求められる」

出来るだけ優しく、包むように抱きしめた。

「俺はお前を殺したくない。お前が欲しくていろいろやってしまったけれど、最初はペットとして飼ってみようかなんて気持ちだったけれど、いつの間にか、本当に朱乃のことが好きになつていたみたいだ」

「リアスさま……」

「だから、な。俺から逃げろ、朱乃。夜になるまで、悪魔の時間になつてしまうまで、俺は遠くで我慢している。その間に何処かに逃げられるんだ。悪魔になる前なら『はぐれ』ではないから他の悪魔からは追われない。お前は俺がさらって来たところよりずっと強くなった。身体も大きくなった。もう一人でも生きていける。襲われても大抵の相手なら倒せるし、翼だつて出したまままでいて慣れたと思う。今なら、出会った頃よりずっと速く飛べるはずだ。勝てそうになかったら、飛んで逃げたらいい」

そう言ってから、俺は朱乃のあごに指を添える。

「最後に口づけをしてもいいか？」

目を閉じた朱乃の唇と、そつと触れ合わせた。

「いいか、夜になるまでだ。もし、日が落ちてもお前がここにいたら、俺はお前を悪魔にする。それからこの家を消し飛ばして、お前が俺から離れていけないように、痛めつけながら滅茶苦茶に犯してやる。——いいか、逃げるんだぞ。俺が我慢出来ている間に、遠くに遠くに行くんだ」

そう言ってから、俺は朱乃に背を向け振り返らずに歩み去り、転移魔方阵を起動した。

まあ、本当に朱乃が逃げて行ったら、すぐに捕まえてまた監禁するのだが。

ディオドラから聞いた、ヤツがどこぞの聖女を口説き落としたりした時の手法を流用してみたのだが、やはりオリジナルには敵いそうもない。途中で自分でも何を言っているんだか訳が分からなくなってきた。最後の方はかなり本音だった気もする。

俺は前世モテない男だったのだ。あんな可愛い子に経過はどうあれ、好き好き何でもしてオーラ出されたら、そんなのこっちも好きになっちまうに決まってるだろ。バカにするな、ちくしょう！

バアルの祖父さんから散々「恋愛は純血悪魔同士でするものであつ

て、他種族は弄ぶだけにしなさい」って言われてたのになあ。

レイヴェルとの婚約がもう少し遅く、先に朱乃とベツドインまで行っていた場合、最悪駆け落ちとかかましていたかもしれん。俺は俺が気が多い性質の男で良かったと心底思う。

もし、俺にはこの娘しかいない！　みたいな性格だったら本当にそうしていた可能性がある。そうだったら……朱乃は父上に処分されていたかもしれないな。魔王の弟と墮天使幹部の娘とか、転生悪魔にしないで本気になっていたら、大スキヤンダルでしかない。

兄上にも多大な迷惑を……、いや、兄上なら応援してくるかもしれないな。義姉上とは元々は敵同士だったのだから。

さて、ボデイタッチに紛れて仕掛けた魔力のマーキングはと……、動いていない。

少し移動している？　うろろうしているな。

飛んだ！

焦った。元の場所に戻っている。

ああーじれつたい。格好つけて、日が沈むまでとか言わなければ良かった。何が「悪魔の時間」だ。アホなのか俺は。

股間が痛いだろう。ホントに。

逃げたら無理矢理スる。嫌がっても許さずにグチャグチャにしてやる。

待っていたら、朱乃の趣味に合わせて、痛めつけてやる。でもって、好みに合わせてグチャグチャにしてやる。

あれ？　これ結局のところ同じなのでは……？

悶々としながら過ごすこと、数時間。

俺は自己最高速で、待ち合わせ場所へと向かった。

「ハハッ、ハハハッハハハッハ！　アハハッハハ!!」

家が燃えていた。雷でも落ちたように、光の槍でもど真ん中に喰らったみたいに、壊されている。

口が三日月のように、ニタリと歪んでいるのが分かる。

なんだこれは、なんだこれは！　嬉しい！　嬉しい！　嬉しい！

本当に、本当に、同志シスタスキー師匠には足を向けては寝られな

いな！

ああ、俺は本当に、自分で思っていた以上に、あの墮天使の娘が好きだったらしい。今、恐ろしいほどの満足感を感じている。

満足？ いや、俺は全く満足していない。そうだ、これからが本番だ！

朱乃を悪魔にして、やる！

1—16 搭乘『戦車（あけの）』

チェスにおける『戦車』は、古代の戦争で使われた戦闘用馬車チャリオットである。貴族やその一族など身分の高い者その上に乗って武器を振るい、御者が車を牽く複数の馬を操って戦う、古の主力兵器だ。

『戦車』とは上に座る、あるいは踏みしめるもの。その上に乗って武器を振るい、馬に鞭を打つものなのだ。

朱乃は俺の『戦車』になりたいと言った。なら望み通りにしてやろう。悪魔は人の欲望を叶える存在だからな。

離れた場所から朱乃の様子を確認していた俺は、夜の訪れとともに悪魔の翼を広げ飛翔した。

燃え上がる家屋を見つめる墮天使の黒い翼を視界に捉えると、すぐさまその後頭部を左手の赤い籠手で鷲掴み地へと引き倒す。

「逃げろと言ったぞ。朱乃」

地面に顔を押し付けられ、歪んだ朱乃の顔に浮かぶのは苦痛と喜悅。熱っぽいその表情は、燃え上がる炎によるものだけではないだろう。

「私を……信じて欲しい」

厳つく刺々しい形状の籠手の指先が食い込むのも構わず、朱乃はそう言った。

「それがお前の望みか？」

「私ね、初めてなんだ。男の子を好きになったの。だから、それだけは疑わないで欲しい。それだけは……信じて」

グレモリーの魔力のせいかな？ 無自覚だったが、よく考えれば朱乃は俺の魔力の影響を十八か月も受けている。

「……………まあいい、どのみちもう逃げられないようにしてやるんだからな」

「逃げないよ。縛ってとか、捕まえてとか、もう言わない。ただ……信じてだけ欲しい」

「痛めつけて滅茶苦茶にすると言ったぞ」

そう言うと、朱乃はブルリと身体を振るわせ期待の籠った目で見つめて来た。

「……して」

煤で汚れた白いワンピースを、魔力で強化した右手で引き裂いた。千切れた布地を投げ捨てると、

「今日は下着を着けているんだな」

続けて下着をむしり取ってしまう。ズボンからいきり立ったモノを取り出して、地べたに頬をつけている朱乃の口に触れさせる。

「舐めろ」

「……はい。んんう」

ちろちろと赤い舌が先端をくすぐる。

「尻を高く上げろ。そうだ、そうやって背をそらして、もつとだ。俺がお前に今舐めさせているものをブチ込みたくなるようにしてみせろ。いいぞ、もつと足を広げて、もつと高く上げろ。尻の穴を真上に向けるつもりでやれ」

頭を抑えつけられたまま、朱乃は尻を段々と高く持ち上げていく。自ら胸を地面に押し付け潰しながら、背をぐいぐいとそらしていく。雌豹のポーズの激しい感じになった。

「ぐうう……こう？ でっすか」

土の上で潰され強調された胸の肉。くびれた腰にしなやかな背中
のライン。太腿も露わに、ふるふると震える形の良い尻。

「いいぞ。いい格好になったな。すぐに入れてください、お願いしますと全身で言っているようだ」

「あつん♡ ちゅん……ちゅんちゅん♡」

肉先を舐める舌遣いが早くなった。屈辱的な恥ずかしい体勢で、必死に俺のモノをなめしゃぶる様を見ていると、頭の後ろの方がチリチリ焦がされるようだ。

「これからどうして欲しいのか言ってみろ。俺がそうしてやりたくなるようになる」

先端からにじみ出る透明な液を舐めとらせながら、朱乃の秘所に指を挿し込んでかき混ぜる。

「あつ、そこっ♡ あ、そこにイ♡ これ、を」

「あそこ？ これ？ 何処に何を、どうして欲しいんだ」

言い淀む彼女の顔の向きを強引に戻じり、その口の中へ、どちゅつと突き込んだ。えずくのも構わずどんどんと押し込む。同時に、かき回す右手を加速させる。

「ほら、どうした。言ってみろ。何処をどうして欲しいんだ？ 今、お前の口に入っているモノはなんだ？」

肉棒で口をいっぱいに塞ぎながら、無理なことを命令する。

「んんうー、うぐえっ♡ うんんうー、んんっほお♡ んんっほお♡
おあっおんん♡ にい♡ ……えっお……うえ」

女の裂け目から指を引き抜いて、尻を叩く。一度目はイマイチ良い音がしなかったので、バチンと良い音が鳴るまで何度も叩いて練習する。

「あっ♡ んい♡ はひい♡ ひん♡ ひん♡ ひいん♡」

「どうした、早く言え」

パアン、パアン、バチン！ と尻肉で音を奏で続けていると、

「オチンポっ♡ オチンポをっ♡ 、あけっのの、オマンコっ♡ いれっ、てえっ♡」

さすが学習させておいただけある。ちゃんとかういう言葉を覚えてくれたわけだ。

嬉しくなったので、朱乃の頭を掴んでいた手を離し、代わりにピンと上に向かって伸びている二つの黒い翼を掴む。

左足で彼女の背を踏みつけ、さらに尻を叩いてやる。

「俺の下僕になりたいか」

「してえ♡」

パアンツ！ とひと際大きな音を立てる。

「お前は、俺に尻を叩かれながらチンポをぶち込んで欲しくて、家を燃やしたんだな？ 思い出を捨てたんだな？」

「はいっ！ はいっ！」

「よし、入れてやる。お前の中に『戦車』をぶち込んで、俺の下僕にしてやる。嬉しいか？」

「うれっ、しい！ うっ、れしい♡」

ペチペチと尻を叩きながら女の後ろに回る。いい尻だ、そこから太腿へと続くラインもたまらない。手を放してもピンと伸ばされたままの黒い翼が邪魔をして、顔を見ることは出来ない。だが乱れて広がる長い黒髪というのはいいものだ。

それらが朱乃自身が火を点けた揺らめく炎に照らされている様子は、どこかの戦場で敗者の女を凌辱でもしているような気分させてくれる。

「この変態が、尻の穴までヒクヒクしているぞ」

「ああっ♡ あああん♡ ください、変態の私を下僕にしてください♡」

命じられたままの姿勢を取りながらも、変態女は淫らに尻を振る。そのいやらしい女の裂け目に、『戦車』の駒を挿し込んだ。この行為も二回目、初めてほどの急激な上昇はない。だが、ぐつぐつと煮えてくるものがあることは確かだ。

「じつくりと形を味わえ。お前を悪魔にしてくれる駒だ」

「はいっ、んっ……あうん……♡」

『戦車』の駒は『女王』よりも頭の尖った部分が大きい。砦を模した駒なので、角ばっているのだ。

そいつでヒダをひっかく様にして、じわじわと淫靡な沼へと沈めていく。抵抗を感じたところで、一旦止める。

「最後にもう一度聞けど。『信じて欲しい』それだけでいいんだな？

お前はそんなもののために、何もかも捨てて、俺の下僕になるんだな？」

「はい。あなたに疑われるのは、いや」

「分かった。今から俺がお前のご主人様だ。いいな」

「はい、ご主人さま。私を下僕に、下僕にいつ、してくださいー！」

よし、朱乃にはメイド服を着せてやろう。そしてことあるごとに理不尽な難癖つけて折檻してやる。

「俺に尻を叩かれたら、好きと言え。気持ちよくしてもらったら、好きと言うんだ。いいな？」

「はい！ あっん、好き♡♡♡　好き♡♡　すきっいい♡♡　これ、好き♡♡
お尻叩かれるの、好き♡♡」

パシン、パシンと尻を叩いた後、肉棒で『戦車』を押し込んだ。

「ああっ、好き♡♡　リアスさまのオチンポお♡♡！」

「リアスは親しい者に許した呼び名だ。お前のような変態ドM下僕女が口にするな」

「ああっ、ヒドイいつ、ううあん、好き♡♡　ご主人さま、すきっ♡♡」

ジリジリと奥深くへと進んでいく『戦車』、俺の右手が尻肉を打つ音、パチパチと家の燃える音と光、「好き♡♡　好き♡♡」と甘く蕩けた声で連呼する黒い翼を生やした黒髪の美しい少女。

そんな情景を思い浮かべながら、朱乃の翼へと手を伸ばした。片方を掴んでグイと強く引く。

「そっちもだ」

「いつ、好き♡♡　とれちや、羽ちぎれっ、好き♡♡」

素直にもう片方を寄こして来たので、そちらもまとめて左の籠手で握りしめてやる。翼を引っ張りながら、駒を進めていくと宮の手前の壁に到達した感触が返ってきた。もう一手でチェックメイトだ。

黒い鳥の羽が舞い散る中、俺は『戦車』をM奴隷の子宮に突入させた。

「おお、これが」

「ああっ♡♡　すっいいい、しゅきい♡♡　しゅきい♡♡　……あく、悪魔に」

これが他種族を悪魔に転生させる感覚か。レイヴェルのときは、元から悪魔だからなのか感じなかったものだ。本来は違う存在を、自分のものへと造り替えていくこの悦楽。とろとろなのに、きゆうきゆうと締め付けてくる女の蜜穴、その感触までも変化している気がする。

「朱乃、分かるか？　悪魔に変わっていく気分はどうだ？」

「おっ♡♡　ああん♡♡　すき♡♡　これ、すき♡♡」

「この先、二度と味わえないものだ。しっかりと味わえ」

「はいつ、はあい♡♡」

『王』とその眷属となる駒には繋がりがある。各駒は『王』の力量によって、転生悪魔に出来る相手の力も変化し、『王』が強ければ強いほ

どその容量とでも呼ぶべきものが増大する。また、『王』の力が増すごとに『変異の駒』と呼ばれる特別容量の多い駒へと変化することがある。

その繋がりを通して、堕天使と人間の間生まれた娘が悪魔へと造り替わっていく過程を愉しむ。

俺は平均よりもかなり多くの変異駒を所有しているが、朱乃に挿入したのは通常の方の『戦車』だ。堕天使幹部バラキエルと人間の退魔名家の血を継いでいても、今の朱乃の力量はその程度までに収まる。まあ『戦車』は元々から価値の高い大駒だが。

「生まれ変わった気分はどうだ？」

「はあ……はあ……、ご主人さまの下僕になれて、んっふう……♡ 幸せです」

ゆるゆるとぬちやぬちやと肉棒の鈴口と、朱乃の子宮口でキスを繰り返す。

「悪魔の翼を出してみろ」

「はあい♡」

どうすればいいのかは、本能が教えてくれるはずだ。朱乃の場合、堕天使の翼を出し入れしているのだから、似たような感覚で出せるだろう。

「んんっ！」

おお、できたできた。鳥の翼のような堕天使のものとは違う。コウモリの翼にたとえられることが多いが、真っ黒な大鎌のようにも見える形状をしている。

「よし、では続きと行こうか。たっぷり痛めつけてやる」

「ああふう♡ ご主人さまのオチンポが、ごりっつてえ♡ 嬉しい、好き♡♡ めくれてるう♡」

肉ヒダを搔き出すように引き、叩きつけるように挿す。

「朱乃！俺がつ、どれだけ、お前に、こうしてやりたかったことか！」

「ああっ♡ あんん♡ ああ好き、好き♡♡」

バチンバチンと何度もピストンを繰り返した。

「この、いやらしい身体で、誘って来やがって、抑えるのが辛かっただ

ろうが。俺のチンポをイライラさせたことを謝れ」

「あーふうっ♡ ごめ、ごめん、なさい。ごめんあさあいい♡ やらしい身体で、ごめん、なさい♡」

「なんでブラ着けてなかった、ノーパンとかどういうことだ！ この変態がつっ！」

「変態の朱乃は、ご主人さまに、こうして、欲しくてえ♡ あああん♡

好き、なのお♡ ご主人さま、好き♡ うい♡」

「やっていいことと、悪いこともわからないのか！ 俺が我慢できなくなっていたらどうするつもりだ！」

「ああっ♡ ごめんなさい♡ ごめんなさい♡」

適当に言いがかりをつけて尻をひっぱたく、バチンと叩く度にキュツと締め付けてくるので、それに合わせて腰を前後させると、これがなかなか良い具合だ。

「俺は今叱っているんだぞ。尻を叩かれて、何を悦んでいる。この変態が！」

墮天使の翼を強く引つ張り、肉棒を強く押し込んで朱乃の背をより弓なりにする。

「うぐえ♡ くる、ひい♡ いたっ、の好きなな、へんたいでえ、ごめんなさい♡ ご主人さまの、おちんぽお、好きなのお♡ オマンゴごひごひされりゆの、しゅきいん♡」

思っていた以上に、良い。特に意味もなく謝らせて、女を叩くこの高揚感。くせになりそうだ。

「出るぞ、朱乃っ！ お前の中にぶちまけてやるぞ。嬉しいか!？」

「うれしい、うれひん♡ あーっ、あっ、はっう♡ ……ああっはあ、もっど、もっどお♡ たたいて、くだしやい♡」

「うるさい、お前は俺に好き勝手されてろ」

「パアン！ パアン！ と今までよりも強く叩きながら、さらに激しく腰を叩きつける。

「いくぞ、いくぞ朱乃」

「はひ♡ はいい♡ ああっ、きて♡ 朱乃のオマンゴに、ザーメン注いでえ♡♡」

「俺の子を産め、たくさん産め！」

「産む、産みますうっ……♡ ご主人さまの子供っ、ほひいよおっ♡♡
!!」

おおおっ、と声が出た。ぐっ、ぐぐぐっとな腰が前に出て行く。

「あっ♡ あああっ♡ 注がれてるっ♡ どぴゅどぴゅってえ♡ ご主人さまのせーえき、きてるう♡ ああっ、好き♡ これ、大好き♡♡!!」

くたんとして、はあふ、はあふ、と息を吐く朱乃の身体を支える。俺の口かも、ふうと吐息が漏れた。

「どうだ、朱乃。良かったか？」

「はひ、はい♡ ご主人さまのオチンポきもちいい、好き、好き、好き♡」

これまで縁がなかったが、やってみると結構盛り上がるものだ。叩きまくって真っ赤になった、目の前の美尻をなでる。うん、いい形だ。キュツとしまった小尻もいいが、これは将来いい感じに育っていきそうな大きめの尻だ。右手でばかり叩いたので、自然と右側の尻だけが真っ赤になっていて、上気しつつもまだ白い左とのコントラストが映える。

そうやって、尻を眺めていると、ムクムクと好奇心と肉棒が勃起あがってきた。こっちの別の穴、このキュツと窄まった方はどうなのだろうかと。

いや、でもな、なかなか勇気がある。でも、ちょっと興味はある。ふむ……。

「朱乃」

「はいっ！」

名前を呼んでやると、期待の籠った視線が返ってきた。苦しい体勢から必死に振り返り、「もっといじめて♡」と懇願する眼差しだ。

「そういうえば、お前は俺のスライムを勝手にこの穴に突っ込んでいたな」

「ひっん♡ ああっん……ごめんなさい。あの、今日も、きれいにしてます♡」

ケツの穴を指先でぐにぐにと押してやると、甘い声で鳴き始める。

「綺麗にして何を期待していたんだ、お前は！」

「お尻、おひりの穴っ♡ 見てたらっ、きもち、よさそうでえっ♡」

「それで、俺の使い魔を勝手に使ったのか」

「はいっ♡ ああっ、すきい♡ お尻、いじってえ♡ もらっ、ああっ♡

♡ 好きっ♡」

「本当にどうしようもないな、お前は！ こんな変態、どこにも出せんだろうが！」

「ごめんなさい♡ 申し訳ありません……ああっ、しゅき♡ ゆびっ、ご主人さまの指があ♡」

ほぐしながら中指を菊の穴に入れていく。

「力を抜け、そう、そうだ、変態のお前の汚い穴に入れてやっているんだ。感謝しろよこのマゾが」

「ありがとうございます！ ありがとうございます♡ じゃいまひゅ♡ お尻好き♡

♡ オマンコも好き♡ オチンポ大しゅきい♡」

ぬぼぬぼと指を上下させ、菊門を弄りながら、腰を動かし膣も抉ってやる。

「尻の穴を弄ってやってる、俺の指はどうした」

「ああっ♡ 指チンポさまも大好きい♡ ああっ、もっど、もっど、ダメな私をしかってえ♡」

指と肉棒で尻穴と膣の間を挟んでこすってやる。

「ああん♡ しゅご、こりえ、しゅご♡ はひよ……すき♡ 好き♡ 好き♡」

「お前は何をしても、好き好きと言うな。尻の穴ほじくられて、気持ちいいのか」

「ああん、好きい♡!! ケツマンコ好きい♡ オマンコもお♡ ご主人さまの全部が好きなのお♡ もっとお、いっぱい、いじめてえ♡」
「お前のような変態は、どこにもやれん。死ぬまでいたぶってやるから、覚悟しろ」

「ああっ♡ うれしいい♡ うれいい♡ ずっと、ずっとお、いたぶってくだひやいいいっ♡♡」

中指で中をこすり上げ、親指で菊穴と蜜壺の間をもむ。そうしながら腰をガンガンと振って、肉と肉がぶつかる音、淫らな水の飛び散る音を響かせる。

「いいのか？ いいのか？ 尻穴ほじくれているのがいんだな？」

「イイっ♡ 好き、好きなのお♡ これも、好き♡ みんな大好き♡
オマンコえぐってえ♡ オチンポお好き♡」

淫らな言葉を吐き出すのが余程嬉しいのだろう、朱乃はアダルトなビデオの中でしか聞いたことのないようなセリフを進んで口にしながら肢体をくねらせる。

「いいぞ、朱乃。もつと言え。お前がどれだけ浅ましいのか、俺によく聞こえるように言ってみろ」

「私は、淫乱な雌堕ち天使ですよ♡ ご主人さまに躰けてもらうの、だいしゆきなっ♡ ああっ♡ ぜんぶ好き♡ 痛いのが好き♡ 苦しいのが好き♡ オチンポ好き♡ なにをされても好きっていちやう変態でう♡」

朱乃は『戦車』にして正解だったな。頑丈になるから、かなり荒っぽいことをしても耐えられるだろう。

「ああ、来た。いくぞ、またいくぞ朱乃」

「はひ♡ ください♡ ああっ、また、また出してえええつつ♡♡♡
♡!!!」

……………。

二回目も良かった。まだ鞭やら縄やらとこの道は奥が深いらしいが、それはまた今度でいいだろう。いろいろどんどん試してみたくもあるが、長い悪魔生飽きるまではこんな感じで……いや、でもなあ、やっていいのなら、イロイロやってみたくもなるな。

うん、その時の情欲に従おう。それがいい。

竿を抜いて両手を放してやると、朱乃がぐたりと潰れた。地面に頬ずりしている横顔を見ると、大変満足そうな塩梅だ。

期待に応えてやれたようで、大変よろしい。俺も十分楽しめたの

で、最後に褒美をやろう。

「朱乃、まだ掃除が残っているぞ」

「ひゃい♡」

とろんとした顔の朱乃の顔の前に、精液と淫液にまみれた好物を突き付けてやる。

「お前の大好きなモノだ。ちゃんと綺麗にしろ」

「あっ♡ はい」

そのまましゃぶりついて来ようとするのを制して、腕を掴んで起こしてひっくり返す。

「そのいやらしい胸も使え」

「ああん♡」

朱乃の上にまたがり、胸の間に肉棒を置く。

「砂でザラつくな。……少しジツとしている。動くなよ」

「はい」

言われるがまま、キュツと力を入れて身体を固くする朱乃の胸から口元辺りを丁寧にぬぐう。手に宿した消滅魔力で、頑固な汚れもスツキリサツパリだ。

「ああ、そうだ。お前が下僕になった記念に、褒美をやろう」

「えっ、ひゃん♡」

使い魔召喚した衛生スライムを、胸の上に落としてやると、ひんやりとしてヌウヌルした感触が俺のモノを包んだ。

「今日までお前の掃除をしてくれたスライムだ。コイツをお前にくれてやる。こっちの契約を解除するから、すぐに使い魔契約を結びなおせ」

「ああ……スライムさん」

契約を解除しようとする、「えっ、ボクなにかしちゃいました?」といった感じの思念を受ける。だが、次は朱乃だと伝えてやると、このスライムはアツサリと乗り換えやがった。実に薄情。

朱乃のお掃除専用だったので、このスライムのこれまでの主食は朱乃なのだから当然ではあるが。

「あの、よろしくね」

ぐによぐによと蠢くスライムに挨拶する朱乃に、

「俺がいつでもお前を使えるように、そいつで常時綺麗にしている。分かるな？」

「ああっ………はい♡ 朱乃は、ご主人さまの性奴隷なので、いつでもご主人さまに使っていただけるように、身体中全部、どの穴もいつも綺麗にしてお待ちしております♡」

「よし、じゃあまずは、お前の汚い汁で汚れたコイツをその胸で綺麗にしろ。それから、クソの穴の臭いがついた指を口で舐めて清めるんだ」

「あっ、ひいっん♡」

尻穴に突っ込んだ指で唇をなぞってやると、すぐにパクリと食いついてきた。それから、朱乃は両手を使って胸をこね回して俺の肉棒にスライムをなすりつけ始めた。

「いいぞ、よく分かってるな。さすがは俺の下僕だ」

「じゅりゅむう♡」

スライムローションでヌメヌメになったおっぱいの中で、肉棒がマッサージされる感触は格別だ。これはいい。

ちゅうちゅうじゅるじゅると、必死で指をしゃぶられるのもいい。

ぐちゅぐちゅ、にゅりゅにゅる、ちゅあちゅぴゃと、わざと大きく音を立てるところもよく分かっている。素晴らしい学習成果だ。

「指はもういいぞ。次はこっちを舐めろ」

腰を前にズラして、竿の先をおっぱいの間から出してやる。

「はあい♡ んっ、ちゅっ♡ にゅちゅる♡ ペリよ、じゅっ♡」

幸せそうに舐める朱乃だが、頭を上げているのがやや辛そうに見えるので、『赤龍帝の籠手』の指先から龍の爪を伸ばして後頭部を掴んでこちら側にグイと引き寄せる。

「はあっふあ♡ んんっちゅ♡ ひゅっりゅん♡ じゅるにゅきゅ♡」

自分の頭を凶悪で鋭利な爪の間に捉えられている状況。それによつて朱乃の興奮は一層高まったらしい。

この籠手は、ラブラブイチャイチャするときには必要ないが、こう

いうプレイには結構役に立つな。こう朱乃の被虐心を煽ってきている気がする。

俺の方もこう「いつでもお前をバラバラに引き裂けるんだぞ。死にたくなければしゃぶれ」とかやっているようで、なにかこう心に来るものがある。

これがドラゴン魂か？

お掃除パイズリフェラが終わったところで、俺の上着をほぼ全裸の朱乃に着せてやるが、おっぱいが邪魔をして前が締められない。着衣ックス好きとしては、なかなかそる姿だ。でも、これ俺も筋トレした方がいいのかな、胸囲的に。

さて。

最後に、邪魔な物を片付けることにしようか。いつの間にか激しい炎の消えていた、朱乃の古い家の燃えカスだ。

「俺の神器の禁手を見せてやる」

バランスブレイク。俺の服装が変わると同時に、能力を発動。

「ご主人さま……これ、ご主人さまの力……？」

「そうだ。俺の禁手の効果は、眷属間の能力の相互倍加譲渡だ。――

朱乃、お前の力を俺に寄こせ。『王』にその『雷光』を献上しろ」

「はい」と朱乃が頷いた瞬間、『Transfer!』と紫宝玉から音声が響いた。

眷属の『王』が持つ、他の駒への影響力、支配権。その繋がりを利用して下僕の『力』を俺へと『献上^{譲渡}』させる。これが禁手
ブーステッド・ギア・レイジ・レックス・レギオン
『一にして多なる赤龍帝の魔王軍』の第一段階。

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost !!!』
『Transfer!』

『王』は臣下の武力を束ねて権力を成す。その権力によって得たものを、今度は臣下へと『恩恵^{ギフト}』として与えるのだ。

「『雷光』の力が……ものすごく強くなって」

「お前の中に、俺が眷属から集めた『力』を倍加して分配した。まだ俺を含めて三人だけだな。さあ、あの残骸にその力を解き放つてみ

ろ」

献上させた『力』を『倍加』で増幅し、全体に分配することで質と武装の整った軍を形成する。戦争は兵の練度と数と武装だ。

これが俺の思う『王』の役割。チェスにおける『王』の駒価値は『∞』、『王』が取られることはプレイヤーの敗北を意味するのだから。『王』とはプレイヤー自身である。そしてプレイヤーは、全ての駒の力を駆使して『王』を守り、全ての駒の力を集めて敵を討つもの。

下僕は『王』のために、『王』は眷属のために、と言ったところか。我らはレギオン。一人であつても多数の者の力を宿す軍勢故に。——なんてな。

朱乃は無言で一步進み出ると、片手を掲げそこ手のひらに槍を生み出す。

「雷光と、消滅と、炎……」

消滅の雷光炎なんて呼ぶと必殺技のようだが、ただの通常技である。

「撃て！」

命令に従って朱乃が投げつけた諸力の槍は、その先に在った全てを消し飛ばした。

……………。

「ところで、尻の痛いのは治ったか？」

「あつ、痛くない」

『不死鳥』特性も効いているようで何より。これで下手すると裂けるようなプレイも可能ということだ。怖いからまだやらないが。

1-17 『戦車』に乗った

父上に朱乃を眷属の『戦車』にしたことを伝えた。

すると父上からの朱乃の呼び方がアレとかバラキエルの娘などから「朱乃くん」に変わった。

そしてすぐさま、我が家の使用人からの扱いも『朱乃さま』に変更。清々しいまでの変わりっぷりである。

朱乃の部屋も例の監禁施設から、俺とレイヴェルに割り当てられている区画（ほぼ城）に移り、いくつかあるプレイルームの一つを与えることになった。

一応そこには、朱乃の好みそうなアレやコレな道具一式も運び込ませたが、俺は使用人たちからどう思われているのだろう。まあ、どうでもいいか。

「朱乃、とりあえず適当に領地を選べ」

「ええと……」

俺の眷属となったからには、朱乃も小領主さまの一人。そこから上がる収入のいくらかが朱乃の個人資産として入ってくるので、そこそこの贅沢は出来るだろう。なお実際の統治は代官が行うので、名目上の領主さまである。

この待遇の変わりように朱乃は戸惑ってばかりだが、これがグレモリー本家の眷属悪魔の扱いなのだ。

ちなみにレイヴェルには領地の割り当てはしない。

「朱乃ばかりずるいですわ」

「レイヴェルは、俺と一緒にグレモリー領全体をみてもらうから」

「いえ、そちらではなく。人間界の山をもらったと聞きましたので」

いつの間にか、二人でそういう話をしていたらしい。

「と言っても、まだレイヴェルの趣味もあまり知らないからな」

山をもらっても困るだろう。

ヤルことはがつつりヤッておいてなんだが、レイヴェルとの付き合いはここ最近のものだ。暇な時間に会うと大概、Y e s Y e s 香水にやられて突入してしまうので、実はあまり普段の趣味などについて話

していない。

「私、料理が趣味ですの。特にお菓子が得意ですわ。あと、庭をいじつてみたいです」

料理を趣味とする貴族は多い。特に女性に多いが、男も結構やる。男性貴族の筆頭ともいえるバルの祖父さんの得意料理は、アップルパイだ。おそろしく美味しい。年季が違い過ぎる。

そして、俺は……女性貴族の趣味の料理にややトラウマがある。妹分的な幼馴染の作るケーキ……あれは実に恐ろしいものだ。ソーナの愛妻料理なんてものを食すことになるかもしれない未来の旦那さんには合掌である。

バルの祖父さんから、「嫌なら嫌とその場ではつきり言いなさい。怒りは溜め込まずにすぐに表すように」と滾々と諭されたこともあって、それまで「あー……うん、まあ、美味しいよ」などと濁していたところを、「クソマズイ」とハッキリ言ってやったときのソーナの泣き顔が忘れられない。

すぐに飛んできたセラフオルーさんにオシオキされたことも忘れない。「おねえちゃんと呼んでね☆」とか言っていたのに、所詮俺のことなんて遊びでしかなかったのだ。実の妹には勝てない。

兄上はそんなに俺に構ってこないぞ。独立した成人の兄などそんなものだと思うが。

「庭は好きにしている。ただ……」

「ただ……?」

「一度、レイヴェルの手料理が食べてみたいな」

その味によつては、レイヴェル料理禁止令を出さなければならぬかもしれない。

「お任せ下さいまし！ 朱乃、手伝いなさい」

「あ、はい」

張り切ったレイヴェルの手によつて、厨房がひとつ占拠され。何故かお菓子作り教室が始まった。

いろいろとまだギクシャクしている二人だが、レイヴェルとしてはちゃんと面倒を見てくれるつものようので一安心なのだろうか。

「それは違いますわ。こうです、こう」

「うん……はい」

レイヴェルが指示を出し、比較的簡単な工程を朱乃にやらせている。

これは……まともな出来を期待できるのではないだろうか。見たところ、おかしなところがないように思えるぞ。

「美味しいー」

しばしの時間が過ぎ、完成したケーキを食べた俺は感動した。

良かった。本当に、良かった。普通に美味しいって素晴らしい。

「この腕前なら毎日でもいける」

「もう、いやですわ。そんなに褒めないでくださいまし」

胸を張って得意そうなレイヴェル。こつちもまだ小ぶりながら美味しいので、そのうちクリーム乗つけて食べてやろう。

「やった……じゃなくて、うふふ、照れますわ?」

朱乃は現在口調が混乱中だ。俺の趣味でメイド服を着せているので、グレイフィアに頼んでメイド道を習わせている。やはり形だけではな。中身もそれらしくしないと。

さらに、レイヴェルから淑女のたしなみ的なあれそれも教えられている。

さらにさらに、俺とのプレイで「オチンポお♡ オマンコいいのお

♡ 好き♡♡ いっくうんっ♡♡ ああぁっ、ご主人さまぁ♡♡」とか言わせまくっている。

そりや混乱するだろう。元々の口調は、十歳で家を飛び出したところからのものなので、いろいろ合わさってしまう。

しばらくしたら落ち着くとは思うが。

「庭は一緒に考えるところ……」

庭をいじりまわすのも、これまたよくある趣味のひとつだ。俺にはよく分からないが、出来を競ったりしている連中も多い。趣向を凝らすのが大事なそうなの。

我がグレモリー家はなぜか日本文化最頂のちよつと間違った感じになっているので、あのカツコーンとかいうのがあつたりする。そし

てその近くの茶室にででんと鎧兜と刀剣が飾ってあったりする。たぶん、何かが違う。

「レイヴェル、今度キッチン一式を買いに行こうか」

「あら、そんなもの取り寄せればよろしいでしょう？」

「まだ二人で出かけたことがないからな」

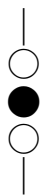
「ああ！ 喜んでご一緒させていただきますわ！」

まずは、キッチンの形状からか。レイヴェルが趣味で使うだけなら、あまり大きく広くても使い勝手が悪いだろう。

諸々の配置や、高さもある。使う道具にしても、あえて古い薪を燃やすオーブンをを使う者もいれば、自動で調整してくれる最新式のものをおもひもいる。

「そのあたり、考えながら決めていこう」

「はい！」



さて、朱乃に関してだが我が家の外にも知り合いの一人くらいは欲しいところだ。

上級悪魔とその眷属は社交に出かけることもよくある。その際に基本的には『王』と『女王』はセットで動くことが多いので、現状では朱乃が一人で残される場面も出てくるだろう。そんなときに知り合いの一人でも別にいれば——ということであは朱乃を横に立たせて、知り合いを紹介しておくことにした。

『こちらで繋いでくるといふことは、そういう話なのですよ？』

通信用の魔方陣が起動し、映像の出現と共に声を発したのは、シーグヴァイラ・アガレス。緑がかった長い金髪と、いかにも知性派ですとアピールしているような、切れ長な目つきのクール系を装った眼鏡っ娘だ。純血の貴族悪魔なので当たり前のように美人である。悪魔の身体能力を考えると、メガネはファッションだと思う。

「やあ、シーちゃん。その件で俺の『戦車』を紹介しておきたくてな」
『その呼び方。こつち以外では使わないでね』

「分かってる。からかっただけだ」

『それでそちらの墮天使の翼の子が、リークんの『戦車』ということでもいいのよね?』

うふふと笑うシーグヴァイラは、公私をかつちり分けたがるタイプだ。わざわざ趣味用とそれ以外で通信も分けている。というか、この趣味用回線、もしかして俺しか使っていないのでは……?

「朱乃だ。例の布教用一式全て学習済み、何度もループして観ていて、セリフを言えば第何話のどの場面かも分かるレベルだ」

『素晴らしいじゃない! ……朱乃さん』

「あつ、はい」

目をキラキラと輝かせるシーグヴァイラの様子に、朱乃は若干怯えているようにも見えるが、

『少し語り合いましょうか?』

俺はそんな朱乃をこのロボマニアに差し出した。えっちなモノ以外にもロボアニメを観させていたのは、全てはこの日のためだったのだ。

存分に語り合い、気に入られてくれ。シーグヴァイラは、悪魔の国の二大派閥双方から気を遣われている大名家の姫君だ。どこかの場で、気安く声をかけてもらうだけで朱乃の扱いが変わってくる。

女ばかりの場とかあるしな。男には分からん社会があるのだ。

ちなみに『リークくん』とは、セラフォルーさんが使う俺の呼び名だ。レヴィアタンさまが使っている呼び方ではない。一度、公式な場面でそれをやられて、無性に恥ずかしかった覚えがある。

あれ以来、俺への反撃としてたまにシーグヴァイラにも呼ばれることになってしまった。シーグヴァイラの『シーちゃん』呼びはソーナが小さい頃にそう呼んでいたことが一時期あった。覚えているかは知らないが。

ソーナもなあ、あの頃は可愛かったのに、最近はなんだか真面目な話題以外は冷たいんだよな。元『おにーさま』は悲しいです。反抗期なのだろうか。

なんてことを俺が考えている間に、二人の話題は「宇宙空間でレー

ザーの軌跡が視認できるのはアリかナシか」などというものになっていた。

「いや、そんなの見栄えの問題だろ」

『そんなことは分かっているわよ。それでもあえて……というところが分からないのかしら?』

シーグヴァイラの言うことは難しい。

「シーグヴァイラ、俺は他に用があるので席を外すが構わないか?」

『ええ……、それで、それで?』

返事がいい加減だ。すでに俺の話などロクに聞いていないなコヤツ。珍しいプラモデルでも見つけたら賄賂として送っておくか。

さて、朱乃は『戦車』なので戦闘技術も磨いてもらわなければならない。まず襲撃をかけてくるであろう白龍皇に備えて最低限、人質に取られたりしない程度の実力は欲しい。ドライグの話では龍のアルビオン自身はそんなことはしないヤツのようだが、所有者はどうだかわからんからな。

俺なら白龍皇の身元が判明したら、人質、奇襲不意打ち、毒を盛る、多数の人員を動員できる立場を利用し休む暇を与えず攻め続け疲弊させるくらいはやる。きつと、向こうもそうだろう。

まあ、予定では命までは取らないつもりなので許すがいい。単に永久封印してやろうというだけだ。神器が新しい所有者に移るたびに戦い再開など、やっていられないからな。

朱乃の魔力の扱いは、俺が教えてやればいい。特に防御に関してはプレイしながらでも出来る。

光力は現状自力で頑張ってもらうしかないな。あれに詳しい知り合いなんていない。

『戦車』ならば近接戦闘も要練習だろうし、朱乃には鬼を従える才能もあるようなので、そのあたりもコミで兄上の眷属に依頼していいおいた。あの新選組やってた人は、刀も魑魅魍魎妖怪変化の扱いも達者だからな。

ふふふ、しかし兄上に朱乃を眷属にしたことを伝えたときは大喜び

してくれた。正直、婚約者を紹介した時よりもニコニコだったと思う。

やはり兄弟、俺が墮天使の娘を虐げていることを知っていて、くくくと内心で魔王笑いしていたのだろう。あの人も、ときどきヒーローコスして遊んでいたからな。義姉上まで付き合わせていたりするし、きつとヒロピンシチュとかも嗜んでいるのだろう。敵に捕らわれたヒロインが、アーンなことヤーンことをされる感じで。

朱乃には普段メイド衣装を着用させているが、巫女服や侍っぽい和服を着せてもいい。黒髪長髪なので、時代劇なんかで見た位置高めのポニーテールもきつと似合うだろう。それをこう、女武芸者緊縛調教みたいな感じで……ふふん、夢が広がる。和と縄は相性がいいと、勉強のために読んだ本にも書かれていた。縄の扱って案外難しい。本番前にメイドで練習しておかないと。

さてさて、それはそれとして、朱乃を眷属にしてから少し経ったが、やはりレイヴエルだけに運営を任せておくのも忍びない。

一人から二人へ、ここが最初の第一歩。長い長いハーレム坂の始まりの一里塚。ここで躓くわけにはいかない。

今後のハーレム人員増加の簡単な解決策としては、肉欲墮天使バラキエルがやったように、愛人をどこかの別荘なり離宮に隔離して、本拠地にいる本妻と会わせないようにしてやればいい。

だが、俺の場合は眷属でハーレムを作ろうとしているのだからそうもいかない。眷属とは一群の戦闘集団でもあるのだ。連携などもしなければいけない。

あっちこつちに愛人用の別宅を作って飛び回っては楽しんでそうな、淫欲に溺れて天より墮ちた男とは違うのだ。

「義兄上、そこで相談なのですが」

何事にも先達はあらまほしきもの。そして俺には頼れる先達が既にいる。悩み事を相談するのは、恥ずべきことではない。

『要するに、お前のハーレムの最初の二人を仲良くさせるにはどうすればいいか聞きたいと』

そう通信魔方陣に映るのは頼れる義兄、ハレキン先輩ことライザーさんだ。

「ええ、レイヴェルは気を回してくれていますし、朱乃も素直に言うことを聞いているのですが……やはりどこかギクシヤクとしているところがあつて。まずは、ここからですし、経験者から何かアドバイスを頂けたらと」

『そりゃあ、なあ。まあ、あれだ……お前、レイヴェルとはどうなんだ？』

「こつちに泊まるときは毎晩一緒に寝てますけど」

レイヴェルの部屋のベッドって使われたことあるのだろうか。ほぼ俺のところの連れ込んでいるんだが。いや、だってあの娘さん、いつもそのくらいのタイミングになるとYes Yes 香水つけてくるし……応えちゃいますよ、そりゃね。

『あー、そうかー……。で、もう一人とは？』

義兄上は、それを聞いて何やら微妙な表情。

「レイヴェルが泊まらない週と、あとは学校に行っている間にですね。俺、学校行ってないですし」

うむ、俺は嫁さんが学校で勉強しているだろう時間に、訓練終わりの朱乃を捕まえておっぱい揉んだり、尻叩いたりしてやっているのだ。

『そうかー……。』

何やら悩んでいる様子のライザー師匠。葛藤が渦巻いているようだ。

『俺がどうしたのか、言わないとダメか？』

「是非とも教えていただきたい」

『あー、なー、まあー、うーん……。』

「いや、男を焦らしても仕方がないでしょう。お願いしますよ義兄上」
『どうしてもか？』

「どうしても」

『そうかー……。どうしてもかー』

「なんとか、どうかお願いします」

『あー……………』

義兄上は、眉を寄せ目をつぶり、苦渋の決断をするように両の肘をテーブルにつき、組み合わせた両手を額にあてる。

『……さんぴーした』

「えーつと、良く聞こえなかつたのですか?」

『だから、三人でやったんだよ!』

おお、なるほど。それはそれは、裸の付き合いで仲よくしようってことか。

『お前な! レイヴェルは俺の妹なんだよ! これでも結構可愛がつてんの! それを、こう、そういうだなあ! 分かるか、今の俺の気持ちちが!』

「あつ、はい。そうですよね。すいません」

『ちよつと想像してみろ』

俺に妹はいないが、妹っぽい娘はいる。

えーとつまり、ソーナの夫になるヤツが通信してきて『すいません、グレモリー先輩。ソーナさま……じゃなくてソーナと愛人の仲を上手くやるにはどうすればいいですかね?』とか聞かれて「んじゃ、3Pしてみたら? 上手くいくかもよ?」と答える状況か……。

「嫌すぎる……」

『だろお!? だから、もう俺にその手の話題を振つて来るな』

「いやいやいや、しかし、ライザー義兄上が頼りなんですよ。こう具体的なことは言いませんから、今後も人数が増えていく形成過程のこととかをですね」

『あー、分かった、分かった。俺のときの話なら、話せるところは話してやる。だから、そっちの今の、生の状況を伝えてくるな』

「はい、了解しました。ありがとうございます」

先輩、あざーつす。と頭を下げておく。

ふむ、しかし、なるほど、3Pか。今生ではメイドさん達で経験済みだが、いざレイヴェルや朱乃と、となると緊張するな。

しかし、俺の夢は広間いっばいに蕩けた女を侍らせて、ワハハと余裕のエロゲ魔王的ハーレム。これぐらい、やれないでどうするという

のか。

「しかし、どうするか……」

二人の姿を思い浮かべ、それを脳内であられもない姿にしてみる。

ふむ、これだけでいいのか？ 何か足した方がいいのでは？ 初回であるし……。

そういえば、レイヴエルと調理関係一式を買いに出かける約束をしたな。

ふむふむ、調理、ケーキ……トッピング。

よし！ 二人が作ってくれたケーキのお礼をしよう。

レイヴェルの趣味に必要なものを買いに出かけることにした。

別段「よきにはからえ」で済む話なのだが、よく考えてみると婚約してから会っているのは屋敷の中ばかり。せつかなのでデートに行こうということである。

前世において、俺はデート経験がほぼない。いや、あつたような？
いや、あれははたして？ といったレベルなので、ハッキリ言つて上手くやる自信などかけらもない。

だがまあ、レイヴェルは婚約者。既に結婚の約束が済んでいるのだから、自由恋愛中の彼女相手に四苦八苦というほど気を遣わないで済む。外しても、よほどでなければオツケーというのは心強いものだ。
「おや、これはルヴァル義兄上。お久しぶりです」

でしたら、フェニックス家に帰っているときに迎えに来ていただけませんか？ と婚約者殿が言うのでそれもいいなと迎えに来たところだ。

我が家から一緒に出掛けるのも良いが、他所の家まで迎えに行くというシチュエーションはまだ完全に同居していない今しか出来ないことだ。レイヴェルも俺の趣味をよく理解してくれているようで善哉、善哉。

「やあ、レイヴェルとは仲良くやってくれているようだね」
「俺にはもつたないくらいに婚約者ですよ」

とまあ、現在出迎えてくれたフェニックス家の長兄ルヴァル・フェニックスさんとハハハと席について会話をしている。どうやら、レイヴェルはこういった場合の定番の一つを抑えてくれていたようで、着ていくものに悩んでアワワワというのをやってくれているらしい。実にグッド。

「おや？ 君は……ぶほっ！」

と、俺が今回のデートの際の小間使いとして連れてきた角メイドことリュイ。彼女に視線を移したルヴァル義兄上が吹き出した。

「リュイがどうかしましたか？」

「いや、ちよつ……なぜ、そんな……。この魔力の波長、いやいや、リュイだつて？ え、君は何を」

ふむ、たしかリュイは何百歳だったかで、過去に数えきれないほどの男と関係を持ってきたと言っていたな。

「申し訳ありません、若さま。少しルヴァルさまと二人で話をさせていただけないでしょうか？」

言葉通りにとても申し訳なさそうな調子のリュイの言葉を受け、俺はルヴァル義兄上に笑みを向けた。

「ルヴァル義兄上、なにやら、我が家のメイドとお知り合いだった様子。どうでしょう？ 少し二人で話されては」

「あ、ああ……。そうだな、そうさせてもらおうか。すまないな」

「いえいえ、ごゆつくりどうぞ。俺はここで待たせてもらいますので」慌てた様子でリュイを連れて離れていくルヴァル義兄上。

やはり、そういうことなのだろうか。だとすると、俺はいつの間にかルヴァル義兄上と別の意味でも兄弟になっていたようだ。

悪魔の寿命は長いからな、関係者の多い女とイタすとそういうこともあるか。

「すまなかつたね。客人を放ってしまつて……」

「申し訳ありませんでした」

フェニックス家のメイドを鑑賞しながら過ごすことしばし、二人は戻ってきた。

なんとなくルヴァル義兄上はげつそりとしているように見える。対照的にリュイは、澄ましているようでいてほくほく顔を隠せていない。

この短時間にナニがあつたのだ。まさか、サクツとやつてきたのか？

テクニシャンだからなこのメイド。あるいは、きゅーれろれろちゅぼんじゅぽあー、うつびゆるびゆりゆびゆるという可能性もあるか。おそろしい。

「お待ちせしましたー！」

といった一幕の間に、レイヴェルの服装も決まったようだ。うん、

いつものドレス姿ではなくこういうのもいいものだ。

おそらく、料理での使い勝手を確認するためなのだろう、動きやすそうな格好をしている。

「うふふ、ありがとうございます」

一通り褒めたあと、では出かけるかと言うことになった。目的地は首都リリスだ。出来るだけ領内の店を使ってやりたいところだが、やはり首都の方が品ぞろえがいい。

転移魔方陣を通り、お手々繋いで微笑ましいローティーンカップルの風情で王都の街並みを歩み、目的の店へと入った。

生まれながらの上級悪魔の中には下賤の者と同じ場に立つことを嫌う者も多い。そのために貴族専用の場を設けている店舗は結構ある。ここはそういった下級悪魔や転生悪魔のお客様は基本お断り場となっている。

俺としてもゴチャゴチャしたところよりも楽でよいので、専らそういった店を利用していいわけだ。使う額の桁が違うので、店側としても特に損はないらしい。

商人側が用意して城まで運んでくる方が普通なので、保管スペースも兼ねているのだろう。悪魔には魔力で空間をいじる技術があるので、スペースの問題がないに等しいからこそなのかもしれない。

「少し高いですね」

高いのは値段のことではなく、まだ背の低いレイヴェルに対する流し台の高さのことである。成人女性の平均に合わせたのであろう品を、つま先立ちになって確かめている仕草は、なんとも可愛いものだ。「低く作らせようか」

「いえ——」

とレイヴェルが何かを探するような仕草をしたところに、角メイドが踏み台を用意した。

さっそくその上に乗って具合を確かめるレイヴェル。やばい、裸エプロン着させて料理中のところを後ろからいただきたくなる。それでもって、事後に焦げてしまった目玉焼きを「もう、あなたのせいだ

すわよ」とか言われながら食したい。

幼な妻、裸エプロン、立ちバック（五・七・五）。これは一度はやつてみたい男の夢のひとつだろう。異論はないと思う。

「お嬢さま、こちらの最新式のものなどは如何でしょう？　料理の種類を設定すれば自動で——」

「手間がかからなすぎるというのも、あまり面白くありませんわ」
「でしたら、こちらなどどうでしょう」

担当の店員とのやり取りを聞いていると、レイヴェルの好みが見えてくる。

一人である程度まわせるが、しかし完全に器具任せは味気ない。その辺りか。

「あまりに手間のかかるものでは、使用人に手伝わせる必要も出てまいります。かといって、機械任せでは私が作ったと胸を張って言いつらい。リアスさまに食べていただくのですから、出来る範囲で手をかけたいのですわ」

ほお、可愛いことを言う。抱きしめたいな、うちの嫁さん。

なんだかもう、正妻と愛人一人と、あとはたくさんのメイドでいいような気がしてきた。俺のハーレム道に再び危機が訪れている。

「ごきげんよう。お久しぶりですね、リアス」

「ん？　ああ、ラティアか。久しぶり、前にアスタロトの本家で会って以来か」

親し気で、それでいてどこか冷たさを感じさせる声に振り向くと、そこにいたのは毛先だけが青みがかつた長い金髪の美少女。

キツイ目つきと冷たく厳しそうな雰囲気のアスタロトの持ち主の名前は、ラティア・アスタロト。

アスタロト家分家の娘で、魔王アジュカ・ベルゼブブさまの姪にあたる我が友デイオドラ・アスタロトの親類だ。分家の者といつてもその地位は高く、アスタロト家の継承順位としては、デイオドラに次ぐものを持っている。グレモリー家にあてはめると、ミリキヤスのような立場だ。兄上のルシファー家をグレモリーの分家と呼ぶのなら。

なお、最近の彼女のおっぱいの成長は目を見張るものがある。

まあ、俺はおっぱいより顔派の面食いなので、視線はどちらかという
とそつちに行くのだが。

上級悪魔の女性は美形がデフォルトで大変よろしい。エロス神の
提唱する三大性域たる乳・尻・ふとももと違って、顔はボケーつと眺
めていてもあまり嫌がられないしな。

「ごきげんよう、ラティアさま。ラティアさまも料理をされるのです
か？」

「そうでもなければ、わざわざ足を運ぶわけがないでしょう。レイ
ヴェル」

ラティアは見た目がキツそうで、オーラもキツそうで、口調も冷た
く感じさせるものがあるのだが、実は大変性格が良い。純血の貴族悪
魔らしからぬと言われてしまうそうなくらいに。

そうだというのに、見た目と口調でどうしても出してしまう高飛車
オーラで勘違いされて排斥されてしまいそうな、悪役令嬢テンプレ
ートのひとつの見本のような令嬢だ。

「だから、ラティア。その言い方と雰囲気」

「変えられないのよ。だから仕方がないので」

もう少し雰囲気を柔らかく出来ないのかと勧めてみたこともある
のだが、どうにもならないらしい。

アジユカ・ベルゼブブさまも、よく分からないがとにかく妖しい気
配を常に漂わせている。そのせいで、なんだかコイツ妖しいぞと誰か
らも思われてしまうのだが、ご本人は「魔王らしくていいだろう」と
既に気にしていないようだ。あの方は、なんというかこう耽美系が似
合うというか、いや耽美とは何ぞやと言われるとハッキリ言えないの
だが、まあアレだ、悪魔の腐女子の間で密やかに少女漫画的作画の『ア
ジユカ×サーゼクス』本などが出ているらしいとだけ。俺をそんな危
険なところに混ぜるなよ、絶対だぞ名も知らぬ作者。

ラティアはなんとというか、ディオドラが雰囲気だけはとても温厚で
優しいような印象を与えるのとは対照的とも言える。アイツほんと、人
当たりは良さそうに見えるからな。中身を知っていても、そんな風に
思えるのだから不思議なものだ。

本人の性格とは別の雰囲気を放ってしまうのは、アスタロト家の特色のひとつなのだろうか。

「ラティアさまとは仲がよろしいのですか?」

レイヴェルが俺の腕をギュッと掴んだ。

「一応、同じ年で学校の同級生だった。短かったけど」

「本当にすぐにいなくなってしまいましたね。その後は、デイオドラさまを訪ねていらした折に話す機会があったくらいでしょうか」

幼年時代の俺は、精神年齢は周囲より上だしなど、コミユ力低いにお兄ちゃん気分だった。なので、その雰囲気のせいかポツンと独りになりがちなラティアに構った。あの頃はソーナも俺に懐いてくれていたので、グレモリー、シトリー、アスタロトと魔王輩出の名家の三人になることが多かったわけだ。今思うと他の子どもは近寄りがたかった気がする。

ルシファア、レヴィアタン、ベルゼブブの三大魔王の家の子供がそろって居れば、残る魔王アスモデウスを輩出したグラシヤラボラス家のゼファードルも気になったことだろう。で、同じ男である俺に対してマウントをとろうとしてきたのだと思う。

その頃の俺は、まあまあ子供のすることだしとあしらっていたつもりだったのだが、それが良くなかった。ゼファードルが調子に乗ってしまい、行動がエスカレート。結局、俺の堪忍袋の緒がプチリと切れてしまって「ひとが我慢してやってりやあ、つけ上がりやがって、もうどうなっても知らん!」とブチギレて、ゼファードルくんのお腹がパン（消滅）事件に至ってしまったのだ。

ゼファードルからしてみたら、ついさつきまで何やつてもハハハと流していた気弱に見えてたヤツが突然ブチ切れたのだから、訳が分からなかっただろう。

うん、前世から引き継いだ本来の俺の性分は、怒りや不満を溜め込んで、貯め込んで、ためこんで、一定ラインを超えた瞬間一気にぶちまけてしまうヤツなのだ。このクソ上司と思いつつヘイヘイと仕事して、ある日突然用意していた辞表を叩きつけるみたいなタイプ。

あのまま育っていたら『倍加』全開超魔王級消滅魔力全方位炸裂な

んてことをやらかしていたかもしれない。そら思想ともども矯正されるわ。危険物過ぎる。

最初っから「ナメてんじゃねえぞこのクソガキが!」と魔力なしでぶん殴るくらいの対応をしていたら、案外ゼファードルとも今頃は仲良くしていたのかもしれない。なんだかんだ、男の子は『力』で関係が出来るところあるし。

「あのときのヌイグルミ、今も持っているわ」

そう言うと、ラティアは亜空間から首の辺りに粗い修復のあとがあるヌイグルミを取り出した。

「ああ、そういえば。そのときだったか」

小さい頃のソーナは、お貴族のお嬢様っぽいわがままプリンセスなところが結構あった。それであの日、ラティアがベルゼブブさまからもらったと嬉しそうに持ってきたヌイグルミをソーナが欲しがって、奪い取ろうとしないで女の子二人で引っぱり合いになったのだ。

そこにゼファードルがいつものように絡んできて、問題の中心となっていたヌイグルミに手を伸ばして、結局ヌイグルミの首がもげてしまった。

ラティアが珍しく大泣きするし、ソーナもつられて泣くしで、なんとか仲裁しようとしてオロオロしていた俺はそこでかなり頭にきた。さらに（たぶんバツが悪かったのだろう）ゼファードルがもぎ取ってしまったヌイグルミの頭を放り投げたものだから……。

「いや、みんなお子様だったな」

俺は前世分を足すとおっさんの域に突入していたはずなのだが、まあ身体に引っぱり張られてということにしておこう。幼稚舎時代の過ちよ。

思い出してみると、ゼファードルにはスマンことをした気がする。さすがに臨死体験までさせてしまったのはやり過ぎた。

「そうね。そして、少し大きくなったあなたはフェニックス家を選んだのね」

そう言って、相変わらずの冷たそうな雰囲気を出しながらラティアはヌイグルミをしまった。

それから立ち去るような素振りを見せたので、

「じゃあ、またな。ディオドラによろしく」

「ええ、ではまた会いましょう」

最後に意味深に見えてしまう笑みをレイヴエルへと向けてから、ラティアは去っていった。

「ううー……」

そして、我が婚約者殿がひつつき虫になった。

ピツタリくつついてくるレイヴエルを連れて残りの品を見て回りながら、俺はリュイに事前に指示しておいたものを手配させる。

さらにお手洗いの隙に朱乃へ通信して、全裸待機命令を出し、メイドたちにも準備をさせる。

「どうしたんだ、レイヴエル」

「なんでもありませんわ」

これまでの経験上、こういった状態になったレイヴエルはエツチなことにより積極的になる。普段よりもさらに、だ。

主に俺が義姉上を見ながら、あらぬ妄想をしてしまったときなどに発生していたヤキモチ焼き状態だが、ラティアでも発生するらしい。

あそこでラティアに会ったのは偶然だが、この機会を逃す手はない。

フェニックス卿には悪いが、今夜は娘さんをお持ち帰りさせていただくことにしよう。

グレモリー邸の俺用区画へと帰り着くと、ちよいちよいとレイヴエルに悪戯を仕掛けながら用意させた部屋へと向かう。

「あんっ♡ もう、リアスさま……まだ、外ですわ」

そうして着いた部屋のドアをメイドが開けると、そこにはケーキのスポンジの上に乗せそうなものが一揃い用意されていて、

「お待ちしておりますわ……ご主人さま」

すでに裸になっている朱乃が待機していた。

「え？ あの……リアスさま？」

戸惑うレイヴエルの首筋に何度かキスをして、そつと囁く耳元に囁く。

「ライザー義兄上のシているところを見ながら、レイヴェルがナニを
していたのか。それを見せて欲しいな」

耳をハムハムと甘く噛みながら、レイヴェルの秘所をぐにぐにとい
じってやる。

「ああ……っ♡ そんな、な……、んっ♡ はず、かしい……ですわ♡」

羞恥と期待の籠った吐息を感じ、俺の股間がググつと硬くなった。

「んんっ……ふう……♡ あんっ……朱乃に見られて……♡ つそん
な、こと♡」

1-19 女体ケーキ二点盛り（前戯）

着衣もいいが今日はそうもいかない。とりあえずさっさと脱いでしまう。

それからぐちゅぐちゅと大きく音を立てるようにして、レイヴェルのあそこをまさぐり、彼女の手を俺のいきり立ったモノに導いた。

「見せてくれるか？」

股間に心地よい感触が走る、互いの性器をいじくり合っていると、やがてレイヴェルはコクリと頷いた。

「ええ……わかりましたわ♡」

仰向けで寝転がる朱乃を頭側から見下ろす位置に椅子を置き、レイヴェルを座らせた。

「そこで、脚を開いて、浅く腰掛けるようにして、それでいつもしていたようにやってみせてくれ」

「ふうふう……♡ ああ♡♡ 見られて……♡」

仰向けの朱乃視線は自然と真上に向き、そこにはレイヴェルの開かれた両脚と、その間で動く細い指が見えることだろう。もちろん俺もじっくりと見る。

兄の行為を見て性長してきた、レイヴェルは見られることにも敏感らしい。まずは、朱乃の乱れる様を見せてやりながら、レイヴェルの自慰を見てあげよう。

「あっ……はっ……♡ レイヴェルさまが……こんな、にして」

「ほら、朱乃、待ちかねていたものを入れてやるぞ」

「どれだけ期待して待っていたんだ、まだ触ってもいないのにぐちゅぐちゅじゃないか。」

「ああ♡ 嬉しい!! オチンポ好き♡」

「自分でいじっていたのか？」

「やってない。触ってないです。ご主人さまを、待ってたら、自然と……こうなって……んっうああああん♡♡」

だらしなくMの字に開いた朱乃の両足の間に入り、すぐさまぶち込む。ゾリゾリと溜まった淫液を掻き出すように、何度も往復してカリ

首で天井をこすり上げていく。

「んんあ……おちんぽ来たのお、おちんぽお、すごいのお♥ ご主人さまのおちんぽで、朱乃のおまんこぐちゃぐちゃにされてるうう♥♥」
朱乃を犯しながら、視線を上げてレイヴエルを見ると口を半開きにして、激しく股間の指を動かしている。

「はあっ……、いやあ♥ ひわいですわ……あんな、いやらしい言葉……んあっ♥」

魔力で耳を強化してやれば、二人の女の艶やかな声が大きく聞こえてきて、頭の中で情欲をグツグツと煮え立たせてくる。

「あっいつ♥ いいのお♥ 好きい、好き、好きいい♥ ご主人さまの好きいい……あああもつと、もつと、乱暴にしてください♥♥」
「はっあ……♥ はあっ、はああ……♥ んっうっ、あっ、あっ、あっ、あっ、はあ……♥ はあ……♥」

トロけた女の顔はいい。甘く媚びた声もいい。

「ああん、おっぱい、おっぱい、いいのお♥ あっ、いつつう、んっう好きい♥ ああっ、つねつちや好きいん♥」

貫いた状態から身体を前に倒して朱乃の胸を強く激しく揉みしだきながら、顔だけをレイヴエルの股ぐらに近づける。

「すごいな、いやらしい」

「ああっん♥ 見られて、んっ、んんっ♥」

「もう少し前に出せるか」

「んっ、はいいい♥」

翼を広げて身体を浮かし、ぐいっと突き出されたレイヴエルの秘所へと、息を吹きかけてみる。

「あっはっう♥ ふうーって、ああっ♥ ふうーってされてえ♥」

嬌声を上げ続けている朱乃の顔に、レイヴエルの淫らな蜜が滴り濡らしていく。

「んゝあああゝ♥ ごひゅじんさま、ひいく♥ もう、わらひ……おまんこお♥ もう、いつひゃい」

朱乃がそろそろか、

「レイヴエルもつと前に突き出せ。朱乃、奥で受け止めろ！」

「ひゃああん♡ はっとううん♡♡♡」

「あっ♡ あっ♡ ひ、いきゅ、好き♡ 好きなのおおお♡♡♡」
レイヴェルの陰核を吸い込むようにして、カリつと歯を立て、朱乃の奥深くに突き込んで一気に解き放った。

顔に淫汗が噴きかかり、びゆるびゆると穂先から子種が出て行く。力が抜ける。

同様にくたりとなったレイヴェルが、椅子からズリ落ち朱乃の上に着落した。椅子の肘を掴んで取っていたバランスを支えていられなくなったようだ。

俺とレイヴェルが絡まり合って朱乃の上に乗る形になると、下から「はあ、好き♡」と声がした。

はあ、はあ、としばし三人で息を整える。

「旦那さまあ……私にもしてくださいまし」

首に腕を絡めてくるレイヴェルを引き寄せ、朱乃とレイヴェルの雌の割れ目を縦に並べてみる。朱乃が下でレイヴェルが上に乗っている形。

ふむ、ふふふ、いい眺めだ。3P定番のあの形はあとで楽しめばいい。ちよつと腰を浮かしてレイヴェルにずぽつと挿入。

「ああっんっうう♡♡ はっ、あっう、んうう♡」

腰を振りながら、ふと思いつく。

「朱乃、レイヴェルを気持ちよくさせてやれ」

「はい、主人さま」

上体を起こした朱乃の手がレイヴェルの脇や背を撫でまわす。それに合わせて、こちらもレイヴェルの胸のポッチをこねこねとしてやる。

「ふああっ♡ こんなっ、のっ、だめえ♡ はああっ♡♡ やあっ、んんっ……♡」

前から後ろから責め立てられたレイヴェルは、膣の中をきゅんきゅんとさせ締め付けてきた。

子宮の口の付近にカリ首を引っかけ、腰をゆする。扉をトントンとノックし、ちよつと引いてグリグリ。

「ああっ♡ そっ♡…、あうん♡ うううん♡」

最初の頃はあまり感じていなかった場所も、この頃はだいぶ気持ちよくなってきたようだ。彼女の身体の奥から聞こえてくる声が、それをはつきりと教えてくれる。

「ああっ♡ リア、スさま…♡ だんなしやま…♡ わたひの、おうひやまあ♡」

両手と両足でこちらにギュッと抱き着いてくる小柄な肢体を抱きしめ返す。涙とよだれを垂らし、口からは「イツ♡ あっあ♡ あっ♡ あっ♡ あお♡♡ ヒイ♡ あっ♡」と小刻みな喘ぎ声。

「んにゅ♡ ちゅ♡ じゅりゅううう…♡♡」

口づけをねだる仕草に応えて舌を絡めながら、ズズン！ と強く突き込み発射した。

「んんっんんっんん♡♡♡!!」

……………♡

ふう、よかった。朱乃とレイヴエルにそれぞれ一発。これで結構満足感がある。

が、今夜はまだこれからだ。とりあえず種付け二杯済ませたので、ここからはお遊びの時間といこう。

改めて、トロんとした顔の二人をマットの上に運ぶ。お風呂のあるお店にあるような弾力を利用したり、ぬるぬるすべすべローションプレイなどで使うアレの大きいものだ。

「朱乃、これが何かわかるか？」

うっとり顔のレイヴエルを左手でつんつんもみもみくちゅくちゅとあちこち弄りつつ、仰向けに寝かせた朱乃に問いかける。

「……チヨコレート？」

そう、メイドに命じて用意させた、湯煎済みで温度も良いぐらいに調整済みのチヨコレートである。

ドロリと熱いそれを、レードルで掬い上げ、朱乃の腹の上に持っていく。

「前、ロウソクに興味があると言っていたな」

「ああっ♡ はいっ…♡!」

これからどうなるのかを知って、身体をより紅潮させた朱乃の腹に黒く熱くドロドロとしたものを垂らした。

「あっん、あつつい♥ ああう、ああっーあつ、あつ……いいああ♥」
思ったよりも暴れる。

たぶんだが、すぐに熱さが飛んでいく蠟よりも長時間熱の残るこちらの方がヤバイと思う。朱乃の元の種族が雷光を扱う堕天使のハーフで、なおかつ『戦車』の駒を入れた転生悪魔であり、さらに治療手段もあるから出来ることだ。人間が真似すると低温火傷で酷いことになりそうだ。

「あう……♥ リアス、さま。そん、なヒドイこと……んっ♥」

朱乃の扱いに抗議の声を上げるレイヴェルの割れ目に中指を突き込み、親指をクリに当てて中と外から挟むようにして擦る擦る擦りあげる！

「ああ、っ♥!! んいいい♥ いういい♥ それ、だめ、ですわああ♥! あっあ、ういいく、んう♥♥!!」

「朱乃、レイヴェルに教えてやれ。お前がどんなことをされるのが好きなのか」

「ああ……レイヴェルさま……私は、朱乃は、ご主人さまにヒドイことをしていただくのが大好きな変態です。お尻を叩かれるのが好き。鞭で打たれるのが好き。縄で縛られて……ああっ♥ この熱いのも好きなんです！ 痛くされるのが気持ちいいのお♥ 甚振られると、感じてしまうのですわああ♥」

朱乃にそのMっぷりを告白させながら、その両手を頭の後ろで縛り上げた。ついでに胸の頂のポッチをぐいとキックつねっておく。

最近、俺の亜空間収納は朱乃用のグッズでいっぱいだ。縄とか鞭とか。ロープワークは勉強中。力加減も勉強中だ。さすがにねじ切ったりするのはジャンルが違う。

「ほら、朱乃……もっと欲しいんだろ？」

「もっと♥ もっと、ご主人様の熱つついの、いっぱいかけてください」

驚愕してるレイヴェルを片手で抱きかかえながら、朱乃の脚を抑え

るように座る。両手を縛り、脚を抑えた。これでもう朱乃は本気で力を出さなければ動けない。

「あつつい♥ あああついい、イイ♥ あつゝいの好きいい♥ あぐつい、あつヴ、好きいい♥」

たたり、たたりと朱乃の肌を黒く塗りつぶしていく。そのたびに悶え、黒髪を振り乱す様がなんともエロい。

「レイヴェルもやるんだ」

「あつ♥ えつ……こんあ、ことお♥ できませんわあ……♥」

朱乃を見ていたらぐんぐんと硬くなってきたそれを、レイヴェルの中に納めて慰める。

「おれが、こんなに、頼んでいるのに、俺の『女王』は、やって、くれないのか?」

「ああうつ♥ でもお……♥ あつう、あはああ♥」

「朱乃からも頼むんだ。どうかイジメてくださいと」

「はあう……ご主人さま以外のヒトにい……、ああつ♥ あつ、あちゅい好きいい……。レイヴェルさま、どうか……私に、かけてえ♥♥」

「ああつ♥ そんな、おく、ばっかりい……♥ わか、わかりましたわ……。こ、こうでよろしいのですか?」

レイヴェルは奥を突かれる快感に震えながら、渡されたレードルを手にとった。

「あひいいん♥ あつ、あああ……」

「ああ、あ、ついいい♥ あああついいんお、おお♥ ああつ、好きいい♥ あついいの好きいい♥」

レイヴェルが朱乃の上にレードルを運んだ頃合いで、彼女のイイところゴツンと突いたところ、中身を一気に全部ぶちまけてしまった。大きく広がる熱地帯に、朱乃がまだ見えている肌を真っ赤に染め、額に汗を大量に浮かべた。

「あつ、あつああ、あつうん♥ ごめ、ごめんなさ……、わた、そんなつもり、じゃ……あつうん♥」

「レイヴェル、謝らなくてもいい。朱乃は悦んでるんだ」

「こんあ、の♥ おかひ♥ おかひい、ですわああ♥!!」

「ああっ……ごめんなさ、ごめんなさいい♥ おか、ひくてえ♥ 変態でえ、ごめんなさい」

レイヴェルを突き上げながら、朱乃の悶える様を見るのは実に良い。今度、大人のおもちやも買い足しておくか。いや、触手くんの方が優秀なのだろうが、イマイチ自分の眷属には使う気になれない。墮天使や教会の女用になるのか。

「レイヴェル、もう一度だ。朱乃は悦んでるだろ」

「はひ……♥ 朱乃が、こんあ、へんひやいだったなん、れっ♥ 思いまひえ、んで、したわ」

俺は股間の槍をレイヴェルに気持ちよくしてもらい、突かれたレイヴェルもよくなる。レイヴェルの手にしたレードルからこぼれる熱く黒い粘液が、朱乃を気持ち良くする。

「レイヴェル、さまあ……♥ もととおお♥ もっと、かけてえ♥ あっうい、おっ、ツ好きいん♥」

「ああっ、わたし、なんだか、ヘンに……んうい♥」

だんだんとレイヴェルの顔に、俺が朱乃を叩いているときのものに似た笑みが浮かび始めた。

「朱乃、どこに欲しいんだ？ 言ってみろ！ どこに欲しいのか、言え！」

レイヴェルへの攻め具合を緩くし、レードルを持つ彼女の手に、自身の手を重ねる。

「おっぱいいい、おっぱいいい、にい、くださあい♥」

腹の辺りをすっかりチョコに染めた朱乃が、レイヴェルが今まで避けていた場所をねだった。

躊躇するレイヴェルの手を取って、その場所へと導く。

『女王』には、下僕のことを把握してもらいたいんだ」

「はっ、はっ、はっ……はあ……朱乃は、ここに、欲しいんですね」
「そうだ。朱乃が欲しがってるんだ」

焦らすようなことはせず、ど真ん中の真上で、グツとレードルを傾けた。

「あゝ うつつイイん、ん♥ アアアツイ、イ、いいん♥♥」

ビクンビクンと腰を浮かす朱乃の姿は、

「朱乃……あなた、本当に……。もう片方にも欲しい?」

「はひい……。♥ かけてえ、あつっいの好きい♥♥」

自分でやっておいてなんだが、こう、なんとも言い難いものがある。俺にはまだDの成分が足りないのだろうか。

「ほら、かけてあげますわ」

「あついい……。イイっんおお♥♥」

レイヴェルの方が才能がありそうな気がしてきた。

「あうん♥」

朱乃のチョコ塗装が終わったところで、レイヴェルから引っこ抜き、いそいそとその上にカットフルーツなどを並べていく。

それから、用意させていた生クリームで飾り付けて、これでようやく一人目完成だ。

その手の漫画などで見たことがあったのだが、やってみると意外と大変だった。今後やるとしたら、一人ずつの時にしよう。

「あの……。私も……。ですか?」

「レイヴェルはこっちメインだな。……。それとも、痛くされたいとか?」

朱乃が完成したところで、レイヴェルをその隣に寝かせた。

不安そうに見上げてくる瞳の端に唇を落としてから、ゴムベラで真っ白な生クリームを掬う。炎を司り、不死身の耐久力を利用して相討ちのような形で戦うフェニックス家の長女に対して、熱いのは意味がない。というか、レイヴェルまで虐げられるのが好きなワケではないだろう。

「少し……。だけ、興味は……。ないこともないような、気がしてきましたわ」

そうか……。朱乃は教育に悪いな。まあ、「ずるい! 私にもやってくださいまし!」と言われなかったのですしとしよう。

「あっ♥ やだ……。そんな……。んっ♥」

ゴムベラで掬ってはぬたくり、掬ってはぬたくり、自分はなんでもんなことをしようと思ったのか、なんて疑問を抱きつつ、生クリーム

レイヴェルの製造を進めていく。途中で乳首をちよんちよんと何度か、ゴムベラで弾いておくのも忘れてはならない工程だ。

「はあ……、こんな……あんっ♡」

こっちはスuisイと作業が進む。

「朱乃は少し待っているよ。すぐに終わらせるから」

そう言いながら、指にクリームをつけて朱乃の口元に運んでみると、

「あっん、ちゅっ、ちゅ、じゅ、ペリよ……」

すぐにパクリと咥えペロペロと舐めとつてくる。目の前に逸物を突きつけたらもつと悦ぶのだろうが、まだまだ我慢。二人まとめて美味しくいただくのだ。

「はあー、はあー、あうふうっ……」

レイヴェルにも、あの生クリームを絞り出して飾り付けるヤツを使つてフリフリに飾っていく。それからイチゴやパイナップル、キウイなどを載せて……。

「完成だ」

墮天使チョコ大盛りパイと、不死鳥クリームショートパイを並べて見下ろす。

我ながら、おかしなことをしたものだと思う。しかし、こう、なんとも言えない達成感があることも確か。

これはエロに必要なのかと言われたら、突っ込んでパコパコしまくった方がきつと気持ちいのだろう。だが、一度はやってみたかったことをヤツテヤツタゼ！ という気持ち湧き上がってくる。

「まずは記念撮影だな」

さつと手を消滅魔力で綺麗にして、魔王少女撮影用に購入したポラロイドカメラを取り出した。

「えっ、あのっ……撮るのですか!？」

「ああ、せっかく美味しそうなケーキが並んでいるんだ。これは記念に残しておくかないと」

パシヤリと一枚。フラッシュの明かりが薄暗い室内を奔りぬける。

「やあっ、やああっ！ ああっ、はずかしいですわっ！ やめてください

いまし！」

そう叫びつつも、レイヴェルは身体を動かさない。ちゃんと飾ったものが落ちないようにしてくれているのだ。

朱乃は、うん、大変嬉しそうなエロい顔をしている。太腿をすり合わせて息を荒げているところを見るに、痛いだけではなく恥ずかしいのも好きなのだろう。

「ああっ！ やめえ、だめえ！ こんなのお、とっちやあっ！ ダメえ、ダメですわあ!!」

恥ずかしがるレイヴェルに構わず、パシヤリ、パシヤリとシャツター音を響かせる。

フラツシユが何度も瞬き、羞恥で真っ赤に染まった肌と、白と黒とのコントラストを写真に残していく。

さて、食事前の写真撮影も終わったところで、いただくとしようか。

ダメダメ言っているけど、結局二人とも白濁と共によだれをたくさん垂らして待っているのだから。

1—20 女体ケーキ二点盛り（実食）

黒髪ロング美少女と金髪縦ロール美少女が並んで仰向けに寝転がり、割れ目から己の流し込んだ白濁液を垂らしながら期待の眼差しで見上げてくる。

それだけでも股間が痛いほど硬くなる状況だというのに、さらに二人にはチョコや生クリームの飾り付けが施されていて、もっと食べてくださいませと言った風情を大きく助長していた。

自分でやっておきながら、この情景は実に肉棒にくる。もう今すぐここまでの準備など忘れて滅茶苦茶に貪ってしまいたい。

そんな湧き上がる衝動をぐっと堪え、二人の間に膝をつき、乱れた黒髪が情欲をそそる女の方を向いた。

「さて、まずは朱乃から食べようか」

「朱乃の身体いっぱい、食べてえ♥」

どこから行こうか、なんて目移りしつつ、やはりここに舌が向かってしまう。

「あんっ♥ おっぱい、いいのおっ♥ あっ、好き……んっ♥」

なにこの柔らかなおっきなパイは二つあるのだ、残りひとつをあとに取っておけばいいだけのこと。はむはむとチョコの甘さと、ふにゅふにゅしっとりした柔肉の感触を同時に味わう。唇と舌を大いに満足させるこの触感。

念入りに麓から頂付近までを何度も何度も舐め上げる。脇の下あたりから乳の天辺手前までに繰り返し舌を這わせていると、こちらを見つめる朱乃の口の端からたらりとよだれが垂れるのが見えた。物欲しそうな瞳を見つめ返すと、たまらなくなってくる。

焦らすのもそろそろ良いか。

先つちよに乗せたパインをパクリと啜え、そのまま乳首を口内に含んだまま咀嚼してやる。

「ああっ♥ 私の、わたしのちくび、たべられてる♥ ご主人さまにちやくちゅされちゃってますわあ♥♥」

ガリっとなやましてしまわないように、慎重にじっくり味わって食べ

る。

「あんんうツ♥ はあツう♥ んうあつ♥」

もちろん適度に甘く噛むのも忘れてはいけない。この食材はいい感じにいじめてやるとより美味しくなるのだ。

「はあ……はあ……♥」

食べ終わったら、盛り上がった器を全体的にペロペロしてお掃除だ。皿を管め回すなど礼儀作法の教師に見られたら叱責ものだが、ここにそんな無粋な輩などいない。初めての時より心なしかぽよんとポリウムを増してきたおもちの周囲に、くるくると舌の跡をつけていく。

「リアスさまあ……」

朱乃の胸の片方を綺麗に唾液まみれにしたところで、後ろから名前を呼ばれてしまった。朱乃の礼儀作法の先生が、はしたなくも甘い媚びに満ちた声で呼んでいる。これは応えてやらねば無作法というもの。

「レイヴェルはここからだな」

「ああつ……また、おなか……♥ いつもそこで……私、おかしくなってますわ♥」

行為の真つ最中はそうでもないが、レイヴェルと並んで座ったり、後ろから抱きしめたりしながらイチャつくとき、よくお腹を撫でまわしている。

いや、バックでやるときは挿入しながら触っているな。彼女のお腹越しに自分のモノの位置を確かめるように……これがまたレイヴェルによく効くのだ。

「大事なところだから、つい触りたくなるんだ」

朱乃やメイドには口でさせたりぶかっけたりもしているが、レイヴェルには全弾膛内に中出しが基本だ。純血の子供を作るのは、貴族の義務だからね。

そんな大事な部分がこの内側にあるのだと思えば、触りたくなり、愛でたくなるのも人情というもの。

「はあ……んう♥ あう……うう♥」

片手を背中の下に腕を通して反対側の脇をくすぐり、もう一方の手をレイヴェルの膝裏から通して太ももをなでる。そうしながら、ヘソの辺りにむしゃぶりついた。顔がクリームまみれになるのも構わず、ヘソの穴の周辺を舐め繰り返す。はむはむとついばんでいく。

大きなスイカを抱えるように手にして、口周りに汗が付くのも気にせずにかぶりつく小さな子供のような気分。まあ、子供は女体を貪ったりしないが。

トッピングしたカットメロンを啜っていると、

「リアスさま……私にもくださいまし」

とねだられたので、唇で挟んだままレイヴェルの口元へと運んでいく。

「はむっ……んふっ……お顔がすごいことになっていますわ♡ おひげがたくさん」

そう言っ、レイヴェルがこちらの口元についたクリームを舐めてくる。

「それじゃあ、綺麗にしてくれるか？」

「ええ、お任せくださいまし♡」

顔を動かして、あちこちについてしまった生クリームを綺麗に舌でぬぐい取ってもらう。うん、これも楽しいな。

なんとというかこう、イチヤついてる感じがあつて良い。どちらかというと、イチヤというよりペチャついているのだろうか。

「んうーん……」

とそんな感じで、食べさせたりなめ合ったりとしていたら、朱乃が切なそうな声を上げた。

見れば、眉を八の字にして涙目でとても悲しそうな表情をしているではないか。

しまった、レイヴェルに夢中になって忘れてしまった……というわけではない。

「朱乃はそうやって見ている。お前はしばらく放置だ」

出来るだけ冷たい口調を意識したその言葉に、朱乃はハッと目を見開いた。

「はい……お待ちしております」

「自分で慰めている」とでも言おうかと思ったが、朱乃の両手はその頭の上で縛り合わせたままだ。せつかく縛ったものをほどくこともない。

しかし、なんだ……もしもじと脚をすり合わせ、もどかしそうに待つ朱乃の仕草は、完全に誘っていてとてもエロい。正直、すぐシたくなるが、放置と言った以上はしばらく放置だ。

「そうだ。ヒマならこの間やった使い魔に、お前の汚らしいメス穴の掃除でもさせて綺麗にしておけ」

「ああっ……♥ はい……わかりました」

汚したのは誰かって話だが、こういうプレイだからいいのだ。太ももをすり合わせる様子を見ていて思いついたこともあるしな。

さて、とレイヴェルに視線を戻すと、なんだか子供っぽい顔をしている。具体的には、頬をぷくつと膨らませて「私、不満です」と表現している。

「また朱乃にだけ……」

どうやら、朱乃にだけ使い魔をあげたことがご不満らしい。頬をつつきたくなる。

「スライムだぞ」

レイヴェルの顔を両手で掴んで、さつそく召喚した使い魔のスライムくん、穴の掃除させている朱乃の姿を見せてみる。

「ええ……アレって……囚人用の……？」

「ああ、レイヴェルも欲しかったか？」

「いえ……遠慮しておきますわ」

レイヴェルの胸の上に載せていたサクラランボを啜え取って、彼女のちよつと尖らせた唇に押し付けてやる。

「レイヴェル・グレモリー用のラクダを用意しないとな」

レイヴェルは少し驚いたような顔でそれを口に含み、照れながらコクリと頷いた。うちの嫁さんは可愛いな。

グレモリーの名を持つ悪魔はラクダに乗って現れる。そんな伝説があるため、グレモリー家の者はラクダを乗騎とするのだが、結婚後

を考えるとレイヴェルにもいるだろう。悪魔の世界でも生家を出て嫁入り、婿入りすると名字が変わる——基本的には。

レイヴェルが「んっ」とサクラランボの茎を出して来たので、噛んで引き千切る。

さて、続きを頂くとしようか。

……………。

「ち……………いいいいい」ゆ……………！ぱっ…あ……………っ…っ、♡……………じゅうつっ、……………♡……………！れりよ……………♡♡み…！ゆ♡っっ…！♡……………む……………っうつっに♡……………い…に！や………………！……………♡…♡ん……………！っ♡♡……………ふっ！ふう♡……………っ！っ…っ…♡…っ♡う♡う♡」

発展途上のおっぱいを頂いた後、デープにキスしながら飴玉をなめ合うなんてプレイをしていたところ、結構な時間が経過した。

「あっ……………」さて、朱乃はどうなったのかと唾液の橋をぬぐって見ると——。

「んんうーっ……………♡んっんっ…うう……………♡う…うふうっ……………♡」

見事に出来上がっているではないか。これはこれは、レイヴェルとペロペロし合っていたのを、間近で長いこと見せつけていた甲斐があるというもの。

ねだる声はこちらの邪魔にならないようにと考えたのか、声を押し殺しているところがとても健気が良い。

「さ、朱乃の続きを頂こうかな」

「ああっ……………んっうっ♡食べてええええ!! 食べてくださいい♡♡！」

朱乃の中からスルスルとスライムが出て行こうとしている。随分念入りに綺麗にしてもらったようだ。

「スライム相手に盛った気分はどうだ？」

「いや、そんな……………こと、して、ないです」

「本当か？もし、コレを相手にイっていたら、もう俺のモノなどいないな？」

「やあつ……ください。ご主人さまのオチンポくださいい♥♥!!」
「どうだかな? 見ていないところで、腰を振っていたんじゃないのか?」

首をイヤイヤと何度も振る朱乃の涙を指ですくった。そうして、さつき残しておいた方の胸に舌を伸ばす。

ついで、スライムと蜜を吹き出している牝肉の裂け目と、その傍でピンピンと主張している女の核を指でこする。

「スライムを入れたまま、イッたらダメだぞ? もしイってしまったら、ずつとおあずけだ。死ぬまでお前の相手は、コイツだけになるかもしれないな?」

「いやああ!! 許して、ゆるしてえ……♥ そんなの、むりですう!」

うんうん、いい顔をする。こういう表情を見るのも良いものだ。期待と不安。恐怖と快楽。それに染まった表情にこそ燃え滾るものがある、我が友もそんなことを言っていた。

朱乃 主の命令を受け、必死に穴から出て行こうとするスライムを押し戻しながら、胸と秘所の性感帯をじわじわと刺激してやる。

そうして、女体の声をつぶさに聴きとり、限界点の寸前で攻め手を一気に緩める。

「はあつ……、はあつ……♥ ゆるひて、ゆるひて、くだひやい……♥
ごひゅじんさまあ……♥♥」

「ダメだ。まだ許してやらん。もつともつと、お前が俺だけのものなのかをきつちり確かめないとな」

「あつんっんうっ♥」
そうして朱乃をいじめると、背中に柔らかい感触が乗ってきた。

「リアスさまあ……こうしていてもいいですか?」
「ああ、気持ちいいよ。レイヴェル」

朱乃に覆いかぶさっている俺の背に、さらにレイヴェルがくつついてきた。背中に当たるおっぱいの感触、さつきのお返しとばかりにこちらの腹や胸板をさすってくる手の愛撫。

こんなことをされたら、うっかり朱乃の快感調整を誤ってしまいそ

うだ。

「ひいうゝ♥！ イヤア、いや、いやあ……イキゝたくない！ イつたらダメなのにい……！ ふううう……はあああ……」

おっと、危ない。

「なんだ朱乃、俺の指ではイキたくないのか？ もう嫌いになつたんだな」

「ああつう、違う、違います！ あつ、好きい♥ 好きなのお♥ でも、イつたら、今は……」

「そうだな。今、イつたらお前のこれからはスライムのものだな。ほら、感じるだろ。コイツも大喜びで暴れているぞ」

必死で主命を果たそうとするスライムを、魔力も併用してまたも奥へと押し込めてやる。コイツ、俺のときより忠誠心が高いな。地味にム力つくが、そりやこんな男より美少女がご主人さまの方がいいだろうな。俺ならそう思う。

「やあ、暴れないでえ！ 出てつて、すぐにでて……！ やだ、いやあ、イキたくない。イキたくないのあお♥♥!!」

ひどい使い魔のご主人さまもいたものだ。こんな矛盾したことを言われたら困るだろうに。

可哀そうだから、ギリギリまで朱乃を昂らせ絶頂寸前ギリギリのところでコイツを解放してやろう。

「あ……♥ あつゝうつ♥ ダツ……メツゝエ、……！ ダゝアアゝメ……えゝつ！ ……今つ……つゝ！ はつああ……つ！ ♥♥だあ♥つ！ めつ……えゝつ！ えつ……！ 出つつ、てえゝ♥……か……つなああああつ！ いっ♥ゝつでええゝ……そ……お！ んっんっなつゝああ♥ 一気つに……しいたつ……らゝ！ ……イイ♥ ……イイゝツイつちやつ……♥ゝつやゝあゝ！ つつ♥♥♥ゝ！」

スライムが勢いよく飛び出し、その衝撃で朱乃はビクンビクンとのたうち回った。散々に責めたていじめ抜いて、どうしようもないところまで昂らせてやったのだ。臍内からジェル状のものを一息に吹き出す感覚に耐えられるはずもない。

「ひぐいいぐつ……グスツ……、私、もう……ヒツうぐうツ……ヒツぐ……やだあ……」

ふうーとプレイの余韻に浸ろうとしたら、朱乃がガチ泣きしていた。涙やいろいろでぐちやぐちやになった顔で、口からは嗚咽が漏れている。

「リアスさま……？ その……」

「いや、分かってる」

朱乃の頭を優しく撫でながら、戒めの縄を消滅魔力を宿した爪でピンと弾いて切ってやる。

「朱乃、きっきのは……その、あれだ……お前が悦ぶかと思ってな……」

「ひつぐ……うぐう……」

顔を胸に抱きしめるようにして、何度も頭を撫でる。手つきも声も、優しく、優しく心をかけて、徐々に髪に手榴を通していく。こうやって優しく慰めるのはいつものことだが、ガチで泣かれたのは初めてだ。

しばらくそうしていると、ギュツと抱きしめ返しながら見上げて来たので、

「悪かったな。やり過ぎてしまった。なかなか加減が……な」

「ううん……。私が悪いの……。私が、ご主人さまにお願いして、していただいているのに……。ごめんなさい、許してください」

「分かった、許すよ。ほら、ここからはイジメないから、素直に気持ちよくなるだけだぞ」

「はい……♥」

朱乃の相手をするときは、だいたいこう叩いたりして甚振ることになる。だけど散々やったあとで、やり過ぎていないか心配になるの。で、こうやって優しく接して、なぜか最終的に朱乃が謝る形になることが多い。このとき、頭や髪に触れてやるとすぐにトロンとなるのだが、やはりここに来てからいつもそうしていたからだろうか。

まあ、その後もガツツリといただいて楽しむだけなのだが。甚振りながら頂いて、優しくしてから激しかったりゆったりで頂いて、最後

は奉仕させて終了がいつものパターンになってきた気がする。なお、そこからもう一周追加もありあり。

「俺もそろそろ我慢できなくなって来た」

朱乃をマットの上に仰向けに横たえる。

「レイヴェル、朱乃の上に覆いかぶさってくれ」

「えつと……やあん……♡」

朱乃と違って、こういうときのレイヴェルはすぐに言うことを聞いてくれないことがある。でも、ちよつと弄ってやると甘い声を上げて頷く。

「ホントはイヤだけど……でも、気持ちよくされちやったら逆らえませんわ♡」といった風情があつて、個人的にはそういうのは大好きだ。たぶん、レイヴェルも俺のそういうところが分かつていてやっているのだろう。

「はあん♡ レイヴェルさまが……」

「あふう……朱乃の……♡」

やはり3Pといえばこれだろう。仰向けの朱乃の上にうつ伏せのレイヴェルを乗せて、二人の女の間でつぶれてぐにやりと形を変える胸のふくらみ。朱乃の背が高く、対してレイヴェルは小柄なので、金髪美少女が黒髪美少女の胸に顔をうずめている形になっているのも、見た目的にグッド。

さて、正常位風朱乃と、後背位風味のレイヴェルどちらからにしようか。ふふふ、贅沢な悩みだ。

「ああつっ、ご主人さまの、オチンポお♡ 入ってますわ……あんつ、ふつ、グリグリつてゝえ……♡♡ あ、好き♡♡ 好きなお♡♡ オマンコ、ずぼずぼされるの好き♡♡♡♡ 好き♡♡♡♡ オチンポお♡♡ オマンコお、もつとお、してくだひゃいい♡♡♡♡」
「うううう……。リアスさまあ……。あつ♡♡ ゆびつ、でえつ……♡♡ やだ、朱乃のこ、え……。いやらし過ぎて……。え♡♡ あう、や、ほんとに、なんて、こと、言うの……♡♡」

ちよつとズラして高さを調整すると、まずは泣かせてしまった朱乃に突き込んだ。すでにドロッドロなので、なんの遠慮もいらぬ。最

初からパンパンパパパンと責めて行ける。その間、レイヴェルに指を這わせるのも忘れてはいけない。俺はどつちも気持ちよくしたいのだ。

朱乃にあまり激しくいくと、レイヴェルを上手くいじれそうになるので、ちよつとペースダウンして、上の女裂をほぐしていく。うんうん、欲しがってるな。朱乃の胸に溺れた状態で、頭のすぐ上からいやらしい言葉を聞かされて、いい感じになってきている。

「好きい♥ ご主人さまあ、好きなの♥ お♥♥ オチンポでえ、オマンコ、ぐちやぐちやあん♥……………」

「あつうう…………。リアスさまあ…………私にも…………」

「あんっ♥ いっちやった…………」

ねだられたら応えてやりたくなるものだ。

「あああうっ♥！ うあつ、入ってえ♥ あつ、あつ、あつん♥♥♥

あつイっ…………あつイっ、ですわあ♥♥♥」

「もつと、強くしてほしいか？」

「はひ♥♥ はひ♥ もつと♥ お、もつと♥ つい、てえ…………くだ、さいまひい♥♥♥」

「レイヴェル、自分だけじゃなくて、朱乃も気持ちよくしてやるんだ。ほら、レイヴェル。ほら、ほら、してやってくれ」

腰を振って串刺しにしたモノでレイヴェルに丁重にお願いすると、彼女は目の前にある双丘に舌を這わせ始めた。

「ああんうう♥♥ ……はひ♥♥ うんっ、ちゅっ、れろれろ、んちゅっ…………じゅっぶつちゅ♥♥」

「はあん♥ あうう、好きい♥」

「朱乃、レイヴェルは好きか？」

「あっ♥ はあっ…………好きい♥ 好きなのお♥ あ、そこ好きですう♥」

「あ、やだ…………、い、ま…………そんな、の言われたらあ…………。あああんうう♥♥ あつうっ♥ あっ♥ うっ♥♥ あんっう…………」

レイヴェルから抜いて、今度は朱乃に、

「ご主人さまあ♥♥♥ 好きい♥ 好きなのお♥ これ♥ え…………♥♥♥

」

「今度は、朱乃がするん、だつ、ぞつ」

「ああっ ♥ レイヴェルさまあ……♥♥」

「やあん……♥ そんなあ、いじつちや……♥」

上に、下にと如意棒を動かして、それぞれの割れ目の違いを味わう。
よいな、実によい。

しかし、そろそろ我慢の限界だ。

「レイヴェル！ 受け取れ！」

「ああああん♥ ♥ 大好きい、くだしやいましい……♥♥♥!!」

「んうう……♥ いいなあ」

ドクンドクンと注ぎ込んでいると、グイグイと二人まとめて押し潰すように身体が勝手に前に出て行く。

「ああああ ♥ リアスさまのがああ……♥ ……あ♥♥」

はあ……と一息つくも、まだこれでは終われない。

上体をぐつと倒して、二人の上のしかかると、レイヴェルの顔を
上向かせる。

「ああっ……んっ♥」

思った通りに蕩けた顔で嬉し泣きしていたので、その目元をすすつて涙をすくう。

これがいいのだ。別に特別な効果はないらしいのだが、俺には効く。

「次は朱乃だな」

ギンギンに復活したモノをあてがってやると、朱乃は身を振じって
レイヴェルに抱き着いた。

「入れてくださいませ、ご主人さま。朱乃のいやらしくて、ほしがりな
オマンコに、ご主人さまのすっごいオチンポぶち込んでくださいませ
せ」

良く言えたな、と相手が朱乃だけなら尻を叩いてやるところだが、
今日の手元のお尻はレイヴェルなので代わりに撫でまわしておく。

「んっうん……♥」

「レイヴェル、朱乃をつねってやれ。そうすると悦ぶ」

「んっ、はあい♡」

「いくぞ、朱乃」

「あああん♡ ご主人さま、きてるう♡ 好きいい♡」

片手をレイヴェルの尻にあて、指で割れ目をなぞる。もう一方の手を二人の間に潜りこませて五本の指の腹や関節を総動員して、二つの牝の芯のあたりで指を躍らせる。

腰はもちろん、ぐりぐりと朱乃の奥に押し当て、引いて、挿して、抜いて、挿して、グラインドさせてと大忙しだ。

「あゝ あゝ ああゝ つあ……………♡ つゝ あ……………♡ つ主……………♡ ……人つつさああまゝ つつの……………おっ♡ おっオゝ オオオゝ チ……………ンツン……………ポポおあおゝ♡ おゝっ！ おっ……………おっ♡！ オツ、オゝ オマアンゝ コツ♡ すっごおいつのお♡ お！ おゝっ！ レイヴェルさまあゝ……………にいつ♡ つねつてえあ♡ もら、えてえ……………つえつ……………♡ ひゝや……………つあつつ♡ あゝ♡ あゝ♡ あい……………いん♡！ うゝ うっ……………んゝっ♡ ああ……………あっ……………ああゝっ♡！ あうゝ……………うう……………つゝつう……………う……………つ……………ああ♡ ……あゝ つつつ♡ ……クリツもおお♡！ ……つ♡！ クリっイイ♡♡！ もおおっあっおっゝつつ♡♡ あ……………ん！ ああつゝ♡！ まん、つこおっ♡♡！ つ、ち……………いあああ……………んゝっ♡ ……なあゝ つがつ！ あっ……………♡♡♡」

「ほんつとにいい♡ なん、て、いやらしい『戦車』でしよう……………♡ ……こん、な人を教えなければならぬなんて、嫌にいい♡ なって、しまします……………わあ♡」

「ごめんなさいいい♡ へん、ちやいのお、しえんしやれう♡♡ ごめんしやいい♡♡」

「朱乃、思いつきりつねってやるから、つな！」

「あああああああんううふいい♡♡♡♡!!!」

朱乃は盛大にイッたが、俺はまだだ。ということ、二種類の陰蜜が混じり合っているところ、さっきまで片手を突っ込んででもそもぞきせていたところに突っ込むことにした。

なんだろう、ダブルスマタとか、おまんこサンドイツチそんな感じ

だろうか？

「レイヴェル、少し上から押すから」

「んっ♡ はい」

きゅつと二人を貝合わせの状態にして、その間にずりゆずりゆと挿入していく。

おお、なんとという新食感。

「ああっ♡」「いんんっ♡」「好きいい♡」「はあっう♡」「クリ、にい♡」

「当たっ、てますわあ♡♡」「んうっう♡♡」「はっう……♡」「あっ♡」

「ああっ♡」

いいな、いいぞ。上からも下からもぬめった粘膜がからみついてくる。そして、あるところまで突き込むと、「ひんう♡」「あふう♡」二人の淫芯に先が当たって……。

「出る！ 出すぞ！ 出すからっ、レイヴェルは仰向けにッ!!」

「あっんうん……♡!」

レイヴェルをひっくり返して、仰向けにさせ、立ち上がりながら……二人並んだその上に……!!

「ああふう……♡主人さまのおあ……♡♡」

降り注いだ白濁を、愛おし気に塗り込み始める黒髪の朱乃。

「あっ……えっ……、これえ♡♡」

金の髪の婚約者は戸惑いながらも、まんざらでもなさそうだ。

「ほお……」と大きく息が漏れる。そういえばレイヴェルにはぶつかったことがなかったか。

あっ……ワカメ酒なるものをやり忘れた。

1—終 『僧侶』探しと、蠢く陰謀

あの後いっぱい、おせっせした。クリームと冷めてきたチョコとその他いろいろをぐちやぐちやに混ぜて、三人でねちよねちよぐちやぐちやしまくった。

「あー、楽園は冥界じじくにあった」

現在はそのまま、部屋に備え付けの風呂に入浴中だ。右手にレイヴェル、左手に朱乃。『嫩』って漢字のような感じ。

ほどよく疲れた後の風呂は良い。おまけに美少女二人を左右に侍らせてとなれば、もう人生勝ったようなものだろう。まあ、その手のお店でそこそ金払えば出来るだろうが。

三人で事後の余韻に浸りながら、お湯に浸かるひと時。

「はあ……朱乃のことが少し分かったような気がしますわ」

「えっと……ごめんなさい。こんな性格で」

「まあ、いいですわ。ただし……表では出さないようにしてくださいまし」

俺の評判に関わるのか？ いや、うちのメイドたちは、朱乃にいろいろヤル準備を頼むと嬉々として用意してくれるが。

「なあ、レイヴェル。『僧侶』なんだが」

「ええ、どなたか候補がおりなのですか？」

「いや、父上と兄上に眷属の構成について相談したんだけど。一人は魔法使いを入れた方がいいんじゃないかって話になってな」

父上はハインリヒ・コルネリウス・アグリツパ。兄上にはマグレガー・メイザース。どちらも魔法使いの界限では伝説的な人物だ。

「なるほど、確かに悪魔と魔法使いの関係は古くからの習わし。眷属に一人召し抱えておこうというのも理解できる考えですわ」

一般的に、『僧侶』駒の眷属は知恵袋的な働きが期待される。そこから考えると、魔法使い達とのつながりや、好奇心と探求心、そして生来寿命の長い悪魔には不足しがちな想像力に満ちた人物の多い魔法使いはうってつけの人種だ。元々悪魔との関りがあるため、転生悪魔となることへの抵抗感が少ないというのも良いところだ。むしろ、

『魔王の弟にして、超越者となる可能性の高い赤龍帝』という俺のステータスを考えれば、募集をかければいくらでも向こうから手を上げてくることだろう。人間にとっては、転生して悪魔の寿命を得られることはいくつかのデメリットを考慮してなお余りあるメリットでもあることだろうし。

ただし、俺が魔法使いに求める条件はやや厳しいものだ。

「それで、とりあえず兄上の『僧侶』のマグレガーに良さそうな相手を見繕ってもらおうかと思っている」

「たしか、マグレガー・メイザースさまは、魔術結社『ゴールドエンドーン黄金の夜明け』の創設者のお一人でしたか」

「兄上の『僧侶』の駒が二つも必要だった大物だな」

「名の知られた魔法使いは、ときに上級悪魔すら上回る力を持っていますから」

そう、魔法使いという連中は『強い』のだ。純血悪魔フェニックス家の長女レイヴェルであっても、眷属にするのに最低限必要な駒価値という観点で見れば、並の上級悪魔が『王』となるとしたら、駒価値『3』程度でいけるだろう。『僧侶』か『騎士』一駒で良い。

それが、マグレガーの場合、冥界最強の悪魔だろう兄上の『僧侶』を二つ必要とした。駒価値の合計は『6』だ。

「それで、だ。俺の眷属集めの方針と合わせて考えると……」

「将来性の期待できる、しかしまだそれほどの力を得ていない。美少女が欲しい、と？」

「まあ……そうなる。知識と技は、悪魔になった後でも磨いていけるとなると、力をつけて必要な駒の数が増える前に手元に欲しい」

「それは理解できますが、外した場合が怖いですわ」

魔法使いの青田買いとでも言えればいいのか。ああ、この子は将来きつと偉大な魔法使いになる、とハッキリ分かるような娘さんを、まだ力の弱い未熟な内にモノにしてしまいたい。一旦眷属としてしまえば、その後にごだけ強くなってくれても駒の消費数としては問題ないからな。

「そこで、蛇の道は蛇ということで、マグレガーにこれはと思う人材を

見つけてもらえないかと思っているわけだ」

「それは……大変贅沢な……。リアスさまのお立場でないと、なかなかできないことです」

「コネと金は、使うためにあるものだろう」

レイヴェルとは政略結婚のための婚約だが、これにしても我が家の権威とコネ、フェニックス家のコネと金、それを目当てにくつついているワケだし。

コネは使った分だけ、相手からも求められるのだけれど。そこは必要経費だ。

魔法使いの女の子、あるいは若き魔女——なかなか良い響きじゃないか。

『僧侶』の駒を二つ、亜空間から取り出す。

「一つ、変異していますね」

「ああ、俺の変異の駒は、他に『騎士』が一つと、『兵士』全部だ。今のところは」

『兵士』の変異数がとても多いが、ただただありがたいだけなので何の問題もない。通常なら『騎士』や『僧侶』の必要な人材を、『兵士』一つで眷属に出来るかもしれないのだ。ハーレムの人数をガッツリ増やせそうで、まったく嬉しすぎる駒の変異である。

「できれば、通常の駒に収まる範囲の内に引き入れたいところだが……」

「それは、なかなか厳しい条件になりそうですわ」

今はまだ弱く、それでいて将来性があり、面食いの俺がグツとくるレベルの女性魔法使い。うん、こんな娘がいたら引く手あまたってヤツだな。

「まあ、急ぐ話じゃない。マグレガーに探してもらっている間に、他所で良い出会いがあるかもしれないしな」

『赤龍帝の籠手』が招くという争いと異性との出会い。グレモリーの魔力特性の一つである、お宝に出会う運命力。これらに期待しようじゃないか。

「ああ、それから今度兄上のところに挨拶に行くから、レイヴェルも朱

乃もそのつもりで用意しておいてくれ」

「ルシファアーさまのお城に……ですよね？」

「あの？ 私も……でしようか？」

魔王サーゼクス・ルシファアーと言っても、俺からすれば兄なのでそこまで緊張する相手ではない。レイヴェルも普段そう話す機会はないだろうが、これからはちよくちよく会うことになるだろう。

貴族の間では『王』には『女王』か『騎士』が付き従うもの、といった考えが広まっているので、レイヴェルには他の俺の知り合いにも会っておいてもらおうつもりだ。

「朱乃はまだ礼儀作法が不安かもしれないが、兄上ならそうそう怒ったりはしない。それこそ目の前で、やってる最中のようなことを言い出さなければ大丈夫だろう。公式な行事でつてことではないし。レイヴェルは、まだいくつか一緒に回ってもらうけどな」

兄上はどうも朱乃の眷属化を喜んでいたようなので、まあ連れて行って媚びを売っておこうと思う。兄上の『僧侶』であるマグレガーに手を借りるし、既に朱乃の教育に『騎士』を借りているわけだから。「いくつかというと、レイヴェアタンさまのところなどでしようか？」
「そこもあるが——」

俺の知り合いはそう多くない。学校行ってないので、級友繋がりで増えて行かないし、社交パーティーなどでもちよつと怖がられているところがあるしな——ゼファードルくん事件のせいだ。

関りが深いのは、兄である魔王筆頭サーゼクス・ルシファアー。

家ぐるみで付き合いのある、四大魔王の紅一点セラフオル・レイヴェアタンとシトリ家。

アスタロト家とはディオドラと交友があるので仲が良いが、ベルゼブブさまとはそこまで話したことは無い。

ドラゴン繋がりで元龍王のタンニンとはちよくちよく話すか。気のいい龍ヒトで、パーティーとかで話しかけて来てくれたりするのだ。シーグヴァイラとは公式の場ではともかく、私的には結構交流があるのでそこも顔を出しておいた方がいいだろう。

で、とりあえず魔王派トップの兄上のところの次に「このレイヴェ

ルが俺の『女王』なので、これから代理として連絡してもらったりすることもあるかと思えますので、どうかお手柔らかにお願いします」その後輩社員を取引先に紹介する先輩のようなムーブをしに行くのは、「まずはバアル家かな。当主の叔父上には嫌われているから適当に済ませて、俺の消滅魔力の師匠でもあるゼクラムさまのところがメインだ」

俺の暴走させたら危険すぎる巨大な消滅魔力と『赤龍帝の籠手』の組み合わせ。その制御を指導してくれているのが、消滅の特性との付き合いが一番長いバアル家の始祖さまになるワケだ。

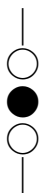
サイラオグのところは祖父さんをお願いしてお目こぼししてもらって、こっそりで行っている。「バアル家に入りできるのなら、サイラオグとミスラのことを頼みますよ」と我が家の権力トップである母上から頼まれているのでな。母上からの援助を、俺がこそこそと運んでいるという。

叔父上がそれを知らないはずもないので、余計に当たりがキツクなってる。

「また、なんというか……私も気合を入れておきませんと！」

「いや、そんなに気張らなくてもいいと思うよ。叔父上ぐらいだから、キツイのは」

俺はどつちかというと、フェニックス卿の方が緊張する。今日も娘さん連れてきちゃったし……ムラムラしたから仕方がないんだ！



N a b e r i u s B r a n c h

純血の上級悪魔ナベリウス家。その分家の長であるエダーギ・ナベリウスは行き詰っていた。かつての主筋にあたるネビロス家より任された、荣誉ある仕事の進捗がはかどらない。

そうそう簡単に実のなる研究ではないことは分かっている。しかし、何かしらの成果を上げねばならないという気持ちは、抑えられるものではない。

『後天的に、超越者を作り出す』

悪魔のイレギュラー体である超越者を作ること、それはまだ誰も成しえていない非常にやりがいのあるテーマだ。ただ、なかなか進んでいないのも事実。

「せめて、もう少し何かしらのサンプルがあれば……」

リゼヴィム・リヴァン・ルシファー。真なる魔王の王子。

サーゼクス・ルシファー（グレモリー）。超越者としての力をもつて、かつての政府を打ち倒し新しい悪魔の国を造った男。

アジュカ・ベルゼブブ（アスタロト）。『悪魔の駒』の作成などに代表される高い技術力を持ちながらも、同時にサーゼクスに匹敵するほどの戦闘能力をも備えた傑物。

これら現在知られている先天的な超越者たちの生体情報を手できたならば、あるいはさらなる進展を望めるかもしれない。

だが、いずれも守りの堅い存在。あるいは恐れ多き存在。そう簡単にそのようなモノが手に入るはずもない。

少し、休んだ方がいいのかもしれない。研究以外の何かしらに目を向けることで、新しいひらめきを得られることもある。

研究者は、頭を振りながらしばしの休息を取ることにした。

研究施設から出て、通常的生活を送っていることになっている屋敷へと戻る。ここで働く者の多くは、エダーギの研究のことなど知らない。

下僕とした転生悪魔達も含めて、せいぜい知っていることと言えば『眷属の強化に熱心な上級悪魔』といったことくらいだろう。

表向き、エダーギの研究は一般的な悪魔の強化方法を探っているということになっている。眷属を鍛えて強くし、それをトレードに出して対価として資金を得る。

一部では『ブリーダー』などと呼ばれてさえいるくらいだ。

「おかえりなさいませ、エダーギさま」

出迎えた使用人の頭に、エダーギは目を向けた。

「何か変わったことはあったか？」

研究施設に籠っていると、余計な情報に煩わされたくないこともあって世間に疎くなる。

「そうですね。ああ、そういうえば……グレモリー家の次男、次期当主のリヴラクスさまとフェニックス家の長女であるレイヴェルさまのご婚約があつたそうですよ」

「ほう……」

グレモリー家は長男のサーゼクスが魔王ルシファーを襲名したことで、現在隆盛を極めている家だ。

そして、フェニックス家はアジユカ・ベルゼブブのもたらした『悪魔の駒』とそれをを用いた戦闘遊戯『レーティングゲーム』の流行によって、大きく力をつけてきた家である。

よくある政略結婚。自身の携わっている偉大な研究とは比べ物にならない些事だ。

「他には何かあるか？」

「ああ、その話題のグレモリーのリヴラクスさまについてですが、少し前にちよつと面白い募集が密かにあつたようで——」

聞いてみると、別に面白くもない話だった。貴族の子息が下賤の女に溺れて道を誤らぬよう、それなりの身分と信頼のある者に依頼して性交の勉強をさせておく。これもまた、別になんとも——。

「いや、待てよ……」

エダーギは急いで研究施設へと戻った。

『紫紅の龍帝』リヴラクス・グレモリー。

今はまだ超越者として認定されてはいないが、現状で既に真なるルシファーさまの五倍にもなる魔力量を誇っているというバケモノ。成熟の暁には、あのサーゼクスの真の戦闘形態の魔力に届くのではないかとさる筋からの情報にあつた。

「ドラゴンが混じるのは、忌まわしいが……」

背に腹は代えられない。コイツの情報を得られたならば何かしらの進展を望めるかもしれない。その誘惑は、エダーギを動かすに十分

なものであった。

「教師を求めたのが、つい先日のこと。となると、まだ色を知って日が浅いはず」

エダーギにとっては遙か昔のことだが、確かにあったあの幼き日々。己の内より湧き出る性欲に悩まされた懐かしの日々が思い出される。

あの年頃の男など、性欲に走らされるケダモノだ。ならば、よし……！

『眷属ブリーダー』などという呼ばれ方も、この際は役に立つ。それに、おあつらえ向きの下僕が丁度いるではないか。

「何か用ですか、にゃん」

とつてつけたような語尾が煩わしい。近頃とみに反抗的な、元猫妖怪の下僕を屋敷の一室に呼び出した。

誰がお前を強くしてやったと思っているのだ。そう言つてやりたるところだが、今はそれも許そう。役に立ちさえすればよいのだ。研究の。

「お前に仕事を任せる」

「それで、どんなお仕事なのかにゃん？ あ・る・じ・さ・ま」

ふん、と鼻を鳴らして不快感を示しておく。下僕風情が付け上がった。転生悪魔など、どれほどいじくりまわしてみてもさして役には立たなかった。

その役立たずが、ようやく本来の目的に役立つ仕事を与えられたのだから、ひれ伏して受け取るべきだろうに。

妹も強くしてやろうとしただけだというのに、何が一体気に食わないのか。強く成れるのだ、喜んで身を差し出すべきだろうに、尻尾を逆立ておつて。

「まあいい、今はその態度も許してやろう」

「寛大な処置に感謝いたします、にゃん。それで……」

ふん、なんだったたら、この苛立たしい猫をくれてやってもいいか。その方が清々するというもの。

「お前の仕事は、リヴラクス・グレモリーの精液を入手してくること

だ。出来るだけ多くな。機会はこちらで作ってやる、上手くたぶらかして搾り取ってこい。ああ……相手は情愛に厚いと評判のグレモリー家だ、そのまま気に入られたらトレードに出してやってもいいぞ？ 妹ともども可愛がってもらえるだろう」

実の兄が超越者のサーゼクス。そして本人も将来、超越者の一人に至るだろう。そんな存在の生体情報を得られたならば、きっと何か新しい発見があるに違いない!!

ダブルエックスの置き場

DXーーー 魔王少女艶姿撮影会

その日、俺ことリヴラクス・グレモリーは、魔王レヴィアタンさまの城に呼び出されていた。

といっても公式なものではない。ごく私的な理由での呼び出しだ。

「どうしてソーナちゃんにイジワルするの!」

城内の私的なスペースに着き、向かい合って座るやいなや、いきなり叱られた。理不尽。

「なんの話ですか、レヴィアタンさま」

「おねーちゃん! おねーちゃん!」

「なんの話だよ、おねーちゃん」

何故か、昔からおねーちゃん呼びを強要されるという、これまた理不尽。

「うんうん……って、だからね、なんでソーナちゃんを連れて行ってあげなかったの!?!」

「連れてって……この間の旅行のこと?」

「そうそう、ソーナちゃんも行きたかったみたいなのに、リーくんがイジワルして、絶対来るな、来たらダメだって言われたって、シクシクしてたんだから!」

「いや、そんなこと言われても……」

日本の夏に合わせて、たしかに旅行に行った。ついこの間のことだ。

まあ、日本では夏というよりも秋になってしまっていたが、常夏の島だったので夏である。

で、そのときに、どこから聞きつけたのかソーナから一緒に行きたいといったような話があったことも確かだ。

しかし、だ。あれは、俺の眷属と、俺のところのメイドたちを引き連れての水着パーティーというか……まあ、つまり『真夏の無人島貸し切り水着祭り手動でポロリしてハメちやうよツアー』だ。岩場の影

でとか、浮き輪に掴まりながらとか、オイル塗りたくった美女と美少女にもみくちやにされながらとか、実によかった。またやりたい。

だが、そんなところにソーナを連れて行けるはずがない。

尊敬するライザー義兄上にしても、「妹を眷属ハーレムに入れてみたかった。いや、睨むな。こうロマンとしてだな」なんてこぼしていたことがあったが、そっち系の旅行には連れて行かないだろう。ちなみに近親者をハーレムinがロマンなのは理解できる。

俺からするとソーナは妹っぽい感じではあるが別に血のつながりはないので、許されるのなら手を出したくはある。

だが、お互いに次期当主の立場とかで、いろいろとあるのでな……。

「おねーちゃんは怒ってるんだからね！ プンプン！」

「プンプンって口で言う……」

「プンプン！ リーくんは昔っから、ソーナちゃんをすぐイジメるんだから！ どうしてそういうことするの！ 好きな子をイジメちゃう男の子なの!？」

「まあ、ソーナは好きだけど？」

「ああ、そうだったんだー☆ って、ええーっ！ そうなの!? ホントに!？」

「妹的な感じで」

「もう！ この、リーくんのおたんこなす!!」

何故か、悪魔の若い女性は怒ったときなどに「おたんこなす」を使う。セラフォルーさんが若い範疇に入るかどうかの判定は、バアルの祖父さまにお任せしたい。たぶん「若いな」って言って下さるだろう。ちなみに、「おたんこなす」なんて言われても可愛いだけだ。一度でいいから、義姉上から言われてみたい。

まあ、ソーナとの付き合いも長い。最近なんだか冷たい理由も大体は分かる。実際、両方が次期当主という立場でなければ、以前なら俺的には『全然有り』だった。

婚約者が決まった今では『無し』だが。グレモリー家をミリキヤスに任せて、『女王』のレイヴェルを連れてシトリーに婿入りとかそんなこと出来るわけがない。

父上にしても、俺のような力のある悪魔をレヴィアタン派に出すつもりはなかっただろう。

なんなら、大公家のシーグヴァイラとくっ付けられていた可能性の目の方がまだ高かっただろう。

悪魔の国の二大派閥は『魔王派』と『大王派』だ。だが、その『魔王派』の内部でもルシファー派、ベルゼブブ派、レヴィアタン派、アスモデウス派と分かれている。魔王本人や、魔王を輩出した家の者同士の交友関係とは別のところで、各魔王の部下たちが張り合っているのだ。

で、まあその辺りも考慮するといろいろ面倒くさいことになるらしい。前にレィヴェルがそんなことを言っていた。

「とういか……レヴィ……おねーちゃんが、シトリーの跡取りを作っていたれば良かったんじゃないかな？　うちのミリキヤスみたいにな」

俺が行くのは無したが、ソーナが来るなら有だったかもしれない。強さ＝権力だからね。

「もうっ！　もう！　もう！　相手がいないんだから仕方ないでしょ！」

今日はプンプンおねーちゃんらしい。

「なんで相手いないんだらうね」

「知らないわよ！」

ちなみに、セラフォル・レヴィアタンがモテていないわけではない……と思う。ただ、選り好み^{シンドレラ・コンプレックス}が激しいというか……妹のソーナの婿の条件の第一が『自分よりも強いこと』な辺りから考えて、条件設定を厳しくし過ぎて時期を逃しちやっつた系のパターンではないかと思う。白馬の王子様^{シンデレラ・コンプレックス}症候群とかそんな感じの。

「俺は魔法少女趣味好きだけど、たぶん百歳越えた方たちは理解できないよね、たぶん」

「そんなことないもん！　魔法少女は共通言語よ☆」

このお方、噂によると昔は結構な暴れん坊だったらしい。我が家の母上と同じで。

でも、母上と違ってお相手を捕まえられずに今も独り身。それでい

て魔法少女趣味にハマってしまったものだから……。昔を知る方々からは恐れられ、ある程度年齢の行った男からは趣味を理解されず、若い世代の純血悪魔からは完全に魔王の一柱と見られていて、そういった対象とは……。あれ？ モテていない……。のか？

「はいー。この話はもう終わりでーす☆」

疑惑の眼差しを注いでいると、サクツと話を打ち切られた。ま、お互いそう楽しい話題でもないか。

「リーくん、婚約したんだよねえー……。大人になってきちやっつて」

セラフォルーさんは立ち上がってテクテクと擬音の付きそうな調子で歩くと、椅子の後ろから俺の首に両の腕を回して来た。寄せられた顔と、ぐにいと双丘が肩に当たって潰れる感触に意識がいく。

この人は結構なおもちをお持ちだ。お腕を伏せたくらいだろうか。大人の男の手でわしっと掴むのに丁度良さそうなサイズ。見た目は今の俺より少し上の十五・六歳程度の年齢だが、妹のソーナは数年後でもこんなにはならなさそうな気がする。

小さいのも良いが、大きいのも良い。ただし大きすぎて巨乳を超えた奇乳になってしまうとNG。義姉上ぐらいが個人的には限界点ギリギリのこぼれだす寸前。セラフォルーさんくらいのもものは非常に優等生でよろしいと思います。

いや、限界ギリギリにおつきいの好きだけどね。過ぎたるは及ばざるが如しとか言うし、相手による。

「いや、中身は結構歳いつてるって知ってるよね？」

前世合算したら、俺は割とおっさんよ。前世バレするまえは無邪気な子供のフリをして、この乳に顔を埋めたりしていたものである。義姉上にもよくやったが。母上は、まあ赤ちゃん時代にたっぷり吸いつきました。

「んー、見た目の話☆ 年齢はく、おねえちゃんからすると大差ない感じかな☆」

それもそうか。兄上と同世代で、アグリツパより年上だからな。

「それよりも、声よ、その声！ 急におじさまソツクリになっっちゃってビックリ！ ちよつと前までは、お胸の大きな年上お姉さん役を演じ

てそんな声優さんが、たまには男の子役やってみました☆ みたいな声してたのに」

レイヴェルとの婚約の少し前辺りの頃に、俺は今生での声変りを体験した。悪魔でもあったんだなって。

で、その結果、普段自分ではよく分からないのだが、録音して聞いてみると確かに父上によく似た声になった。なんというかシーグヴァイラが貸してくれるロボットアニメで、二枚目の敵役にキヤスティングされそうな感じ。黒騎士とか暗黒王子とかなイメージで、悪魔の次期公爵としてはなかなかいいのではないだろうか。

それまでとの変わりように改めて驚いた変化だったが、親子なので似てくるのは普通だろう。

「ソーナは騙せなかつたけど、兄上はしばらく父上だと勘違いさせられたっけ」

「そうだよ！ 通信来て、なんでサウンドオンリー？ って思いながら、リーくんのもりで話しかけたら、おじさまの声でビックリしたんだからね！」

セラフォルーさんはポンポン言いながら、ギユウギユウとしてくる。スキンシップ激しめで大変よろしい。俺の背中がたいそう喜ぶ。

「ひゃあい！ とか言ってたお姉さんがいましたねー」

「もう！ なんでおねーちゃんにまでイジワルするの！ 好きな子イジメちゃう男の子なの!?!」

「まあ、おねーちゃんは好きだけど？」

「ええーっ！ そ、そうだったんだ……リーくんが……」

首ぎゅーつとされたままイヤンイヤンされると、むにむにして反応してしまいそう。

「冗談はともかくとして」

「冗談だったの！ もてあそばれちゃった……おねえちゃん、リーくんにいいようにされちゃったよう、シクシク」

「グレイフィア義姉上から、本気でそうなんじゃないかって一時期思われてたみたいなんだよね」

「そうなの？」

「掃除中にあの写真を見てしまったみたいで」

「あー☆」

セラフオルーさんの私的な魔法少女のコスプレ写真集のカメラマンをやっている俺である。その写真を自室に保管していたところ、どうやら義姉上メイドさんが掃除中に偶然それを見てしまったらしく、『セラフオルーの写真をこんなにくささん……そういうことだったの!?!』とか思われたらしい。

さて、おっぱいの感触は惜しいが時間は無限ではない。

「それで、今日は『マジカル☆レヴィアたん』の新コスチュームのデザインがどうかじゃなかったの？」

「そうそう、そーなの☆ ソーナちゃんのこと、カツとなっちゃって忘れるとこだった☆」

説明しよう、『マジカル☆レヴィアたん』とは恐れ多くも魔王セラフオルー・レヴィアたんさまが主演なさっている悪魔の子供向け特撮番組である！

悪魔の試験の問題にも内容が出題されることがあるので、試験勉強のためにも視聴必須の子供向け番組だ。おもちゃも出ており、その中に同梱された特別編マンガなども試験範囲なので、こちらも購入必須だ。ヒドイ。

「それじゃあ、変身するから意見を聞かせてね☆」

変身シーン入りまーす。俺は反省を踏まえて用意したデジカメを構えた。秒間5連写は伊達じゃない。動画もいいがな。

まず、セラフオルーさんの仕事着がガチガチと凍ってから粉々に砕けます。

その後、一瞬だけ大事な部分を謎の霧が隠した状態の全裸が目の前に展開され、次に足元から立ち上った水流がセラフオルーさん全身をぐるりと回りながら上昇。

手や足、身体などの各所で水が凍って砕ける演出が入り、魔法少女の衣装が装着されていく。最後に帽子が上から振って来て、片手を振ってステッキを取り出しながら、もう一方の手で帽子をキャッチ。

帽子をかぶり、ステッキを構えてキメのセリフ。

「魔法少女マジカル☆レヴィアたん参上！ 悪魔の敵はまとめて滅殺
なんだから☆」

キラキラとダイヤモンドダストが舞い散る中で、セラフオールさん
はキメポーズを取った。

「いまいち」

「なんで!? ばつちりだと思ったのに!」

「ひねりが足りない。具体的には回転」

「回転……そう、回りながら変身するってことね☆」

安産先生、エロさの追加が欲しいです。ぐいつと捻りをくわえるこ
とで、くびれが強調されるのでいいのではないかと思います。腰回り
は謎の霧が発生しないし。

「もうちよと」

「こんな感じー☆」

「惜しい」

「それじゃあ☆ えーい!」

「もうちよと」

「じゃあねー☆ これでどう?」

T A K E 6 6 にしてようやく完成した新キメポーズ。俺は親指を
グッと立てた。

少し肌を上気させたセラフオールさんは、ポーズを解くとホツと一
息。

「いえーい☆」

謎のノリでハイタッチを交わすと、そのまま抱き着かれる。こうい
う無防備さを出していけば男の一人や二人コロツと引っ掛かるだろ
うに。

肌色分ましましたの変身シーンの連続で、やや硬くなりかけているん
だからやめてもらえませんかねえ。股間のドラゴンが倍加してしま
いそなんです、おねえちゃん。

「次はアクションシーンの確認ね☆」

「ハイハイ」

「ハイは一回」

「ハイ」

「伸ばさないの！」

「はい」

「よろしい！ おねえちゃん頑張るから、ちやーんと撮ってねー☆」
ひとに注意しておきながら自分は語尾を伸ばすという。理不尽。

「レヴィアビーム！」

映像作品用の所作というものは、実戦とはちよつと違う。

実用性ではなく、見栄えが重要だ。そしてそれは衣装が変わるとまた少し違ってくるらしい。一応はプロやつてる魔王さまがそう言うのだからそうなのだろう。

「滅殺!!」

ビームを撃つ姿勢も毎回同じではない。ステッキを振り回す型だつてそうだ。

「許さないんだから！」

しかし、毎回そうではあるのだが今回の衣装もまたスカート短い。絶対領域付きの太ももがレンズの向こうで、ふるんふるんしていやがる。

レヴィアさんは、子供向け番組のはずなのだが、割とパンチラも発生する。そういうわけで、ミニのスカートの中からチラチラとのぞくパンツが俺の龍帝砲をどんどんチャージさせていくのだが。

「負けないんだから！」

というか、セラフォルーさんコレ気づいてるよな。こつちをチラチラ見てくるし、その時の視線が結構な頻度でソコに行つてるし。

「さすがね、龍帝！ すごいわ♡」

なんとなくだが、こういうもは星マークついていそうな言葉遣いなのだが、それがこう、なんとなくなのだが、ピンクっぽい雰囲気な艶が混じつて聞こえるというか。というか、想定してる敵役は『龍帝』なのか……。

「くっ……こんなことで、魔法少女は屈しないんだから♡」

そうやって撮っていると、俺はあることに気付いた。いや、これまたなんとなくさつきから気づいてはいたのだが……おねえちゃんな

のだが、アレ、乳首立ってないか。

魔法少女レヴィアさんの衣装は、ラインを美しく見せるためなのかな。ブラを付けていない。なので、最初からこう僅かにポチつとした部分があつてしまふ造りなのだ。それが、その部分が、こう段々おつきなくなつていふように思える。

「きゃあああ♡」

被弾シーンも必要だ。ときにはピンチにならないければ、盛り上がりがないとなつてしまふ。

「なんて、攻撃なの……♡」

吹き飛ばされて転がるシーンを演じるおねえちゃん、床の上に倒れ伏した。そのときシャッターは捉えた……パンツに染みができていふ、だと。

「ああっ、くう……♡ こんな、攻撃で……やああああ♡!!」

倒れ伏すレヴィアさんに、龍帝が追撃を仕掛けるシーン（推測）。

「こんな……ものお♡なんて、こと、ないんだからあー！」

続けざまに攻撃を受け、のたうち回るレヴィアさん。

「うう……んぐう♡ まだあ♡ まだあ♡ 負ける、わけ、にはあ……♡」

おねえちゃんの声がエロイです。テントの天井にガンガン心棒がぶち当たつて、痛くて痛くて辛抱たまらなくなりそう。

いや、なんか、もう染みとかじゃなくて……明らかに……。

「はあ……♡ はあ……♡ はあ……♡ ねえ、リーくん……ちゃんとお撮つてる？」

「大丈夫、全部撮れてる」

俺の指は、下腹部の痛みを耐えてよく頑張つていふ。誉めてやりたい。ここまでの一部始終を光景だけとはいへ、きつちりフレームに納めてくれている。

「そ、そうなんだ♡ あの、ね……、リーくんの、ソコ……痛くないの？」

「いや、その……痛い、かな」

魔王クラスの魔力ともなると、その波動は意識しなくともある程度

の物理的な作用を発生させる。それを視線にのせて見つめられるたりすると、こう触れられてもいけないのに、ゾワゾワとしたものがモノに奔り、頭がクラクラしてきそうだ。

「おねーちゃん、ね♡ なんだか、ヘンな感じなんだ♡」

「ヘンな感じなんだ」

「うん、なんだろう……リーくんに見られてる、撮られてるって思ったら……んっ♡」

「思ったら……う？」

「その、リーくん痛くなっちゃったみたいだから、おねえちゃんが……痛い痛いのとんでけーってしてあげる♡」

ゴクリと喉がなった。視線がこうおねえちゃんの、いろいろと際どい部分から外せない。

「じゃ、じゃあ……お願いしてもいい？」

「うん♡ おねえちゃんに任せて♡」

DX11-2 魔王少女艶姿撮影会

セラフオル・シトリーの初恋は、おじさまだった。

別にその人と何かあったわけでもなく、誰にも話したこともないけれど、たぶんそうだったのだろう。

幼い頃のセラフオルは、母と仲の良いグレモリー家の夫人ヴェネラナによく面倒をみてもらっていた。年の近いサーゼクスともよく会ったが、年相応の子供である彼よりも、セラフオルの興味を引いたのは、その父親だった。

ときどきかなりふざけたことをする人で、いつも妻に叱られていたが、その姿にはどこか余裕があるように思えた。その余裕はなんだろうかと気になってしまい、よく見ていたように思う。

少しばかり大きくなったセラフオルは、ちよつとばかり気性が荒く育った。おそらく、結婚前に『亜麻髪の滅殺姫』などと呼ばれていたヴェネラナの影響だろう。そうに違いない。

いろいろとあつて四大魔王の石柱『レヴィアタン』を襲名することになったころには、サーゼクスはグレイフィアと結ばれていた。幼馴染とライバルの結婚に、なんとなく取り残されたような気持になったことをセラフオルは今も覚えている。

ヴェネラナの影響を強く受けた自分に合うのは、あの人のような男なのだろうか？ 百年ほど過ぎた頃にそんなことを思い、実家からの結婚を望む声もあつて、一度だけ男と付き合ってみたことがある。

最悪だった。

皆が言うほどには、男女の交わりは気持ち良くはなかったし、その後の男の態度もロクなものではなかったのだ。

あちこち身体を触られまさぐられ、その後に入れられて動かされる。それを何度か繰り返されるだけ。何も感じなかったワケではないが、ハマり込むほどのものでもない。

仰向けで寝ていたら、なんかいつの間にか終わっていた。そんな感想を抱いたものだ。

でも、こんなものだと思えばやっていけないこともない。

かつての荒々しきは、外交担当などという気を遣わされる魔王の仕事を務める間に抑え込めるようになっていた。だから、気に入らなとすぐに放り投げなかったのが良くなかったのだろう。

あの暴れていたセラフオール・レヴィアタンが大人しい。そのことに何を勘違いしたのか、男は調子に乗った。

セラフオールに惚れられている。そう思い上がったのか、あちらこちらで魔王の威を借りて問題を起こし、その後始末をさせられた期間。あれによく耐えたものだ。セラフオールは未だに思っている。

実家のシトリー家にも苦情が行くようになり、めでたく破談。何やら喚き散らす男を氷漬けにして放り投げてお終い。

この経験で学んだことは一つ。自分より弱い男はダメだということ。

力ある者がそれを誇り、それに驕るなどは言わない。自分たちが魔王となったのも、結局のところ争った相手よりも強かったからなのだ。でも、勝手に自分の名を使ってそれをされるのは、ただただ不愉快だ。自力でやれ、と思ってしまう。

幼い頃に見て憧れたあの夫婦のように、なかなか上手く行かないのだろう。

そのこともあってか、実家からうるさく言われることもなくなり、それをいいことに長い年月をセラフオールは独り寝で過ごした。

縁談や言い寄ってくる男が、絶えたわけではなかったが、裏を取ってみるとどうも大王派の息がかかっている者ばかり。政治か……と、思うと気が滅入る。

数少ない戦争を生き残った同年代のお仲間が次々と消えていき、ほぼ取り残されてしまったけれど、それも別にどうでもよかった。

寂しいと思うことがなかったと言えば嘘になるけれど。

そんなセラフオールの生活に大きな変化が訪れたのは、悪魔の時間感覚ではごく最近のことだ。

シトリー家の両親と、グレモリー家の夫婦の両方が同じ年に数百年ぶりの子供を成したのだ。セラフオールとサーゼクスの生まれた年もごく近かったことを考えると、この両家の夫婦はどれだけ仲が良い

のだろう。

セラフオルーは生まれてきた妹を可愛がった。それはもうベタベタに甘やかした。なんといっても、妹だ。自分の子供ではないから教育がどうこうと言われることも少ないし、他所の家の子供ではないから遠慮なく可愛がることができる。

もう可愛くて可愛くて仕方なかった。

まだ赤ん坊の妹ソーナを連れてグレモリー家にもよく出かけた。小さい頃にお世話になった人たちに、妹を自慢してやりたかったのかもしれない。

そうして、妹のソーナを構いたくて仕方のないセラフオルーは、リヴラクス・グレモリーと出会う。グレモリーの紅と、バアルの紫。両親の血筋を体現しているような男の子だ。

抱き上げてみると、すぐにおっぱいを触ってくる子だった。残念ながら、セラフオルーに吸い付いても母乳はでない。出ないのだが、どこか満足そうな顔をする変な子だなど、その時は思っていた。

それから数年も経つと、ソーナはリヴラクスの後ろを追いかけるようになっていた。「おにーたん、おにーたん」と呼ばれながらソーナの面倒を見ているその姿は、子供供していた頃のサーゼクスを知る身としては、なんとというか妙に落ち着いた子だなど首を傾げることも多かったように思う。

ただ、すぐにセラフオルーに抱き着いてきて、胸に顔を埋めてグリグリとしてくるので、年相応の甘えん坊なのかなとも思っていたのだ。

それがとんだ思い違いだったと知ったのは、彼の腕に『赤龍帝の籠手』が現れてからのこと。

なるほど、赤ちやんの頃のあれも、小さい子を抱っこしてあげていたつもりでいたアレも、アレもコレも全部前世含めたらおじさんのエロ魂の産物であったのか。

セラフオルーは激怒した。欲望を司る悪魔の王たる者、エロが悪いとは言わない。言わないが、あの頃のほっこりした気持ちを台無しにしてくれやがってと、苛烈なオシオキを敢行した。

と、そんなこともあったが、セラフオールとしてはリヴラクスのおじさんっぽいところは、実はそれほど気にならなかった。何せ幼少時代の憧れが憧れだ。

リヴラクスがある程度育ってきたある日のこと、グレモリー邸に顔を出したセラフオールに重大な転機が訪れた。

負けたのだ。十歳に満たない子供に、魔王レヴィアタンが押し負けた。なんでもありの殺し合いなら別だが、純粹に正面から魔力をぶつけ合うだけの勝負で、吹き飛ばされた。それも『赤龍帝の籠手』を使わずに、だ。しばらく呆然としてしまったことを覚えている。

ソーナは妹だ。魔王の妹。きつと自分のときと同じような輩が寄って来るに違いない。ソーナと結婚するのなら、自分を倒せるような相手でなければならぬ。

そう考えていたセラフオールは、それから熱心に『赤龍帝の籠手事件』以降途絶えていた「おねーちゃん」呼びを強制した。ソーナも慕っている様子であることだし、これはもう義理のおねーちゃんになってやろうと思ったのだ。

一つ問題があったとすれば、肝心のリヴラクスの方が物分かりが良いいつか親の言うことにほぼ従うところだ。ソーナはシトリ一家の次期当主、リヴラクスはグレモリー家の次期当主。政略結婚でくつつけるのは難しい。

なんとかこう、熱愛宣言でもして、恋愛結婚を押し通す！ みたいな感じになって欲しかったのだが、どうにも完全にソーナを妹扱いしかしていかないという始末。

リヴラクスにその辺りの話を振ってみても、「よほど性格の悪い相手でもなければ政略結婚で良い」などと言いやがる。あげくに、アスタロト家によく出入りするようになり、その分家の娘との縁談をおじさまが考えているのではないか、などということに。

どうしようどうしようと思いつつ、セラフオール的にはそれとなくソーナに話を聞いてみると、アスタロト家の娘はどうやらソーナに遠慮しているような塩梅。

よしよしと胸をなでおろしていたら、まさかの横からフェニックス

である！

セラフォルーはガツクリと来た。それでも一縷の望みを託し、リヴラクス本人に話を聞いてみることに。婚約とか見合いとかしてみたが、合わないなんてことはよくあることだ。体験談。

普通に惚気られてしまった。しかもフェニックス家の長女はちやつかり『女王』に納まっている。一旦眷属にしまった以上、婚約を破棄するような事情が起きたとしても、トレードで他所に出さない限りは付いてくる。そして、グレモリーの一族の気性から考えて一度内に入れた相手を離すはずがない。

もうダメだ。お終いだ。セラフォルーはガツクリした。

それはそれとして妹がどんよりしているのは許せないので、自身の用事のついでに怒っておいた。ポンポンだ！

しかし、あの声で「おねーちゃん」と呼ばれるのは、なんとというかムズ痒い気分になる。ヘンな感じだ。頭の後ろあたりが、ソワソワしてしまう。

ホントに「大人になってきちゃって」……。あんなに小さかったのに、おねーちゃんより強くなって……。

「まあ、おねーちゃんは好きだけど？」

んふふ、ほんとに……。昔っからリーくんは、こういうの好きなんだから。

後ろから抱き着いて、押し付けながらゆすってみると……。うわ、大きくなってる。

そっか……。そうかー……。

なんだろう、この感じ。ソーナちゃんに悪くなって思うのに……。セラフォルーにはその感情が何なのかよく分からなかった。表現する言葉を知らず、そんな体験をしたこともなかった。

魔法少女の変身シーンを何度も見せた。脱いで、ほとんど裸な状態を見せて、それから魔法少女の格好になる。

フラッシュが瞬く度に、セラフォルーの身体にキュウキュウと何かが押し寄せてくる。つま先から這い上がるそれは、全身をさわさわと刺激しながら脳髓にまで届いて、頭の中が一瞬白く染まるような感覚

を与えた。

見せちゃってるよ。今までと同じなのに……なんだか。

「いえーい☆」

おかしいな感覚だった。今までに味わったことのないそれをもっと感じたくて、セラフオルーはリヴラクスに抱き着いた。

正面からギューツと抱きしめると、本当に大きくなってきたことが実感できる。それに、少年がセラフオルーに対して興奮を覚えていることも。

じわりと芯の芯からにじみ出るように、身体が熱を持ったのが分かった。

悪い子だ。本当に悪い子だ。婚約者が出来たってあんなに喜んでいたので、妹のことを何でもないように言っていたのに。

おねーちゃん相手にこんなにしてるなんて……。なんて悪い子なんだろう。

「レヴィアビームー！」

カメラが光る、そうするとセラフオルーの身体のあちこちがもっと熱くなってくる。嘗め回すように見るなんて言い方があるが、本当に触れられているようで……。

セラフオルーは様々なポーズを取り、動きをしながら、チラチラとそこへ視線を送ることを止められなかった。どうしても視界に入れてしまう、男の固く盛り上がった部分を。

見られてる。すごい、じいーつと見られてる。撮られてる。

「さすがね、龍帝！　すごいわ♡」

こんなところ、予定にはなかった。でも、スカートの内側を見られるのが、なんだかとても気持ち良くなっていた。胸の先っちょが、服でこすれて……。

あんなになってる。い、痛くないのかな？　もつと、見せちゃったらどうなるんだろ。

自分でおかしくなっているのが分かって、やめられない。

「くっ……こんなことで、魔法少女は屈しないんだから♡」

セラフオルーは、自分から見せ始めていた。

声に甘さが滲んでしまっているのが、分かる。でも、これ我慢できない。

「ぎゃあああ♡」

セラフオルーは自身の身体を見つめるレンズの向こうの紫の瞳を想像して……頭の中をグツグツと煮え立ってくる。

「うう……んぐう♡ まだあ♡ まだあ♡ 負ける、わけ、にはあ……♡」

狭い場所に閉じ込められて、外に出たいと激しく主張しているソレに、どうしても触れてみたい。

ごめんね、ソーナちゃん。おねえちゃんも悪い子だったみたい。

セラフオルーが心の中で愛しい妹に謝ると、その割れ目からドロリと蜜があふれ出た。

「おねーちゃん、ね♡ なんだか、ヘンな感じなんだ♡」

……………。

「い、痛かった……?」

小さなころならともかく、大きくなってから服を脱がせたことなどない。セラフオルーが下を全部脱がせて上げようとすると、ビンと振り返った逸物が目の前に現れた。

こんな形だったっけ……? なんだか、これ、すごい。

パンツを脱がす途中で手を止めて、セラフオルーはそれに触れた。指先でちよんとつつくと、ビクンと反応する。

慌てて上を見上げると、何かに耐えるような少年の顔があった。どうしてか、お腹の下の方がぎゅううとなる。

「その、裏側のあたりを……」

「う、裏? こ、ここかな……ここから、先に方にしゅっしゅっするの……?」

手をとられて、導かれる。先の方のぐっと広がっているとところの、裏側。

熱い。こんなに熱いものだった? ドラゴンだから?

握っていると、脈打っていることが分かる。心臓がドキドキしてくる、バクバクいつている。こんなの、あの時はなかった。

「痛くない？」

「気持ちいいよ。おねーちゃん」

「そ、そうなんだ……♡」

言われたあたりをそつとなぞりながら、興味にひかれてセラフオルーはあちらこちらを見つめた。

浮き出た血管、硬くてでも柔らかい感触。そのグロテスクな造形に惹きつけられる。魅入られたような気持になっていく。

「他の場所もさわっていい？」

「おねがい」

強く触ったら痛いよね？

そつと、そつと握って上下に動かしてみたり、指の腹をあちこちをなぞってみる。

セラフオルーのその行為に合わせて、ピクリ、ピクリと震える牡肉の塊が、なんだか可愛く思えてくる。

「もしかして、あんまり知らないとか？」

「そ、そんなことないよ！ おねーちゃんは経験豊富なんだから！」

なに、え、なにか、透明な汗が出てきた。

わ、うわわ、え？ え、どうすればいいんだろ。

触れてみると、ヌルつとしている。気持ち悪い。でも、なんだか……。

たしか、こんなことをしていたはずだ。セラフオルーは、唇を開き先端を口内に含もうとして……それを止められた。

「そこまでしなくても」

「いいよ、おねえちやんがしてあげる♡」

やったことはなかったが、してみたい気がした。それに、そう、昔、胸に吸い付いてきたお返しをしてやるだけ。

「じゃあ、お願いするけど。先に……」

セラフオルーの頬をそつと撫ぜながら、少年が顔を近づけてきた。ああ、なんだか……こんなの。何が、とは分からなかったけれど、セ

ラフオールはその求めに自然と応じていた。

「んっ♡」

唇と唇が触れ合い。離れ、また触れ合う。それを何度か繰り返すと、互いに相手の唇を上下から挟むようにし始める。

「んちゅ、ちゅ♡」

こんなの……そう、まるで恋人みたい。

数百年ぶり、いや、あの一人だけあった体験をなかったことにしたいセラフオールとしては、初めてのように思える。

ぎゅううと抱きしめていた。そして、それが同じように返つてくることが嬉しくてたまらない。

「んっ、ちゅ……♡ ね、リーくん……」

たしか、そう、舌を……入れたり絡めたりとかするはずだ。自分からは全然経験がないけれど、経験豊富なおねーちゃんだから。

セラフオールは唇の間から、僅かに、少しだけ、やがて大胆に舌を伸ばした。

はむつとそれをついばまれた。伸ばした舌を上から下から、少年の瑞々しい唇が愛撫してくる。

食べられてる、味わわれてる。リーくん……、何百歳も年下の、オムツだつて替えたことのある子に。

生まれた頃からよく知っている。それがセラフオールの中に根付いて、凍り付いた警戒心を融かしていた。

紅の、血のような色合いの髪が目映る。グレモリーの証だ。それに指を通す、セラフオールの瞳から愛おしさが水滴となって滲んではこぼれた。

「リーくんは、おねーちゃんにひどいことしないよね？」

リヴラクスの魔力の師匠が誰なのか、セラフオールが知らないはずもない。こういつたことに疑い深くなったのは、あちらの派閥のせいだ。

「するよ」

その一言にセラフオールの眉が寄る。頭の横に寄せられた少年の唇から、「これからするよ。おねーちゃん」伸ばされた舌が耳を這いま

わる。

「なにこれえ♡ こんなの……ふぁ♡」

されたことがない。

音を拾うための穴の中を舌でくすぐられ、手前の少し尖ったところを舐め転がされる。そうされながら、「こういうことを、たくさんする」囁かれると……。

セラフォールの眉が下がり、口元がだらしなく崩れてしまう。

「んんうー」

紫色のバアルの瞳に見つめられながら、セラフォールはまた舌を食べて欲しくなっていた。突き出してプルプルと上下する、それを少年はしばらくただ見つめるだけ。

セラフォールが求めるように鼻を鳴らすと、ようやく少年はそれを受け入れた。

リーくんはイジワルだ……。おねーちゃんのこと好きなのかな？
好きって言ってたよね？

男の口の中に、自分から求めて舌を入れるなんて、しかもそれを待たされて……。それが嬉しいなんて、おかしい。

セラフォールが挿し入れた舌を少年の舌が迎える。真つすぐ伸ばしただけのセラフォールの舌を、巻き取ろうとでもするかのようにクルクルと歓迎してきた。

それがどうにも嬉しくなってしまう。セラフォールは少しでもたくさん入れようとして、でも慣れていなくて上手く伸ばせなくて、

「んんうう、んふつんう♡」

少年の頭をきつく抱え込んで、ぐいぐいと唇を押し付けた。

あんんう♡ リーくんからも……。

ちよつとだけ顔の角度を直すように動かされて、リヴラクス側からも同じようにしてきた。

舌が絡み合う。ただ伸ばしているだけだったセラフォールのそれを導く様に、少年の舌が動き回る。

えつと……、あつ♡

やがて、セラフォールも同じようにし始めていた。

ソーナちゃんは、リーくんこんなことしたことあるのかな？ ないよね？ たぶん。

妹のことを思い浮かべると、腰からすんと力が抜けてしまう。バランスが崩れセラフォルーが後ろ向きに倒れそうになると、くるりと位置が入れ替わって……。

気が付くと、セラフォルーは少年を押し倒していた。

「えっと、じゃあ、おねーちゃんが口でしてあげるね……♡」

倒れた勢いで唇が離れてしまったのは残念だが、太ももにあたる硬い肉の感触に、セラフォルーはキスを始める前のことを思いだした。

視線を少年の股の間に向けるセラフォルーに、仰向け倒れている少年は「おねーちゃん、俺の顔をまたいでほしい」と言った。

「は、恥ずかしいよ♡」

「おねーちゃんのこと、すごいことになってる」

「いやん♡ 見ちゃ……ダメ♡」

セラフォルー目の前に、ガチガチの肉棒がそそり立っている。セラフォルーの短いスカートの中を紫の瞳が凝視している。

見たくて、見られたい。そんな風に思ってしまうセラフォルーの昂りは、そのまま身体全体を焙る熱となり、肉汁をだらだらと垂れ流させる。

つん、と一度だけ露のにじみ出ている媚肉の裂け目をつつかれた。

じゅわつと音がしたような気がする。

「あんうっ♡♡」

「おねーちゃん、えっちなだね」

「う、うん……♡ おねーちゃんは、欲望の司る悪魔の王様！ ま、魔

王なんだから、当然よ♡」

DX1-3 魔王少女艶姿撮影会

「んんふ、あふ、んんくう……んんう」

セラフオルーは肉棒の先、傘のように広がっている部分を舐めしやぶっていた。

舌を伸ばして全体的になめまわした後、唇を開いて口内に納めていく。

これが、リーくんの味……。

這わせた舌に、亀頭の先から滲む汁の味が染みてくる。美味しいものではないはずなのに、なぜかその味に魅入られてしまう。

鼻の穴を通って出入りする熱い呼吸の音が口内の水音と混じって、いやらしく頭の中に響く。

熱病にかかったように潤んだ瞳と上気した頬。唾液と牡の先走りに濡れて艶めいた唇を、上下にゆっくりと動かす。

「ああ、気持ちいいよ。おねーちゃんのお口」

なんだろう、すごく嬉しくなってくる。

もっと言って欲しくなって、拙い舌技でセラフオルーは懸命にしゃぶり続ける。

こういうときに、どうしたら相手が気持ちよくなってくれるのか。そんなこと、セラフオルーはこれまで考えたことがなかった。

どうしたらいいんだろう。こうした方がいいのかな？

ぐつと奥の方まで、喉に当たるほどに呑み込んでみる。

「おぐう……うえ」

やりすぎた苦しい、そう思って頭を上げると、尻の上の方にぎゅつと抱き着かれる感じがした。

もつと、もつとそうして欲しい。まるでそう言われているように思えて、セラフオルーはその苦しいはずの行為をまたしてしまう。

「んぐう♡ ふはっつ……ふぐううう♡ んっ……くうんん♡

ふあっつ……ふぐぐうう、おうっ ええ♡」

嘔吐きの混じる、自ら進んでやるはずなどないはずの行動。それに何故か夢中になってしまう。

「おねえちゃん！ おねえちゃん、すごいよ」

そう言うと、彼は牝芽をついばんできた。歯ではないと思う、おそらく唇、下着越しに敏感な先端をはむりと挟まれ、じゅるじゅると吸い付かれる。

それと同時に彼はセラフォールの尻を掴んで下に強く引いてきた。快感の中心から電流のような痺れが全身にはしり、彼の肉竿を深く呑み込んだままセラフォールの腰が落ちた。

膝で身体を支えていた両足が伸びて、秘所を少年の顔に押し付けるような形になる。腰を上げようとするが、力が入らない。

連続して肢体を駆け抜ける快感が、上半身を支えていた両腕からも力を奪った。

「んぐう、え、♡」

胸を彼の腹部に押し付け、男根を喉の奥の奥まで咥え込む。そんな体勢で、セラフォールは女の割れ目をひたすら舐め上げられた。時折クリから奔る強い快感に、

ビクリビクリと背をそらせ、それに合わせて上下する喉奥を肉の槍で小突かれる。

なにこれ？　なんで、こんなのが……。

吐き気と呼吸の辛さ、その苦しみと、下半身の真ん中から襲ってくる痺れるような快樂の波。相反する感覚が頭の中をぐちゃぐちゃにして、セラフォールは目の回りそうな気持になった。それが決して嫌ではないだなんて、頭がおかしくなったとしか思えない。

リーくんは、どうなんだろう？

魔力を使つて光の軌道を捻じ曲げ、肉棒への奉仕を続けながら彼の姿を瞳に捉える。

するとそこには、自身と同じように、性器のある場所に顔を埋めて口と舌を動かしている彼の姿があった。

ああっ♡　リーくん！　リーくん!!

何が琴線に触れたのか自分自身でもよく分からなかったが、セラフォールは心の内で彼の名を繰り返し呼んだ。一旦肉棒から口を離すと翼を広げて上体を少し持ち上げ、『レヴィアたん』の衣装の胸の部

分を破り素肌を露わにする。彼の上着もまくり上げてセラフオルーは尖った乳首を押し付けながら、再び彼の肉槍に喉奥を突かせた。しがみつくようにして彼の腿の付け根を抱え込む。身体全体を前後にゆすると、二つの胸の真ん中からはシュリシュリと、股の真ん中からはズキンズキンと快感がやってくる。

「んぐう♡ んぐう♡ うえあ♡♡ んつうう、んううあ♡♡」

息をするのも忘れて、オスのモノにむしゃぶりつくその有様。オスに舐めまわされながら快楽を求めて身体をゆする姿。

そこに魔王としての立場を考える素振りなど最早どこにもない。

「脱がすよ」

「うん、脱がして……おねえちゃんの大事なところ見てえ♡」

もつと刺激が欲しかった。彼の手がパンツを足元へとズラしていくのを、身体をくねらせて助ける。

「ああっ♡ リーくんにい……。いいよお、ソコ、そんなにしたら……♡

♡ おねえちゃん、それ、イイよお♡」

片方の足首に先に愛液と唾液にまみれたパンツを引つ掻けた姿で、セラフオルーは嬌声を上げた。彼の舌が淫らな涎を垂れ流す下の口に入り込み、ぐねぐねと這いまわり、布地越しよりもずっと強い快感を与えてくる。

「おね、おねえちゃんも……。もつと、してあげるから、ね♡」

セラフオルーも、これまでにソコを自分でいじってみたことはあった。しかし、こんなに甘い快感が奔ったことはない。

絶頂、イク、オーガズム、そのように呼ばれるものをセラフオルーは体験したことがなかった。

それなのに彼の舌の鋒先がクリトリスに向かうと、もう堪らなくなってしまう。

「んつうう♡ ……んつぐう、んうつんうつ、じゅを♡ つ、んんう……」

嬌声を響かせてしまいそうになる喉に、彼の肉槍を自ら突き立てて黙らせる。

彼の舌先がセラフオルーの牝の突起を小刻みにつつく、その刺激に慣れる前に今度は舌全体を大きく使って舐め上げられる。まるで弱

いところ、感じてしまうやり方が分かっているかのようなその愛撫に、セラフオルーの腰が何度も跳ね上がった。

こんな知らない。なにこれ？　なんで、こんなになってるの？

口を肉棒で塞ぎ、鼻で荒い息をしながら、下腹部を激しく波打たせてセラフオルーは悶絶した。

「んんうー……んんう、んんううう……んんんっ♡♡………?」

あと少し、もう僅かで、経験したことないなにかが来る。来てしまおう。その期待と不安の最高潮で、彼の舌はセラフオルーの秘所から離れて行った。

ギリギリまで昂らされ、全身にあった痙攣を伴う力みが抜けていく。ちよつとした安心感と大きな不満が、セラフオルーの中で渦巻いた。

なんでやめちゃうの？　もう少しで、あとちよつとで、何かが……。

「じゅっぶお………。何してるの？　リーくん」

いやらしい水音を立てて口内から牡の肉を抜き、手をついて状態を起こして捻る。そうしてセラフオルーが自分の股の間を見ると——そこには、太ももの内側にスリスリと頬をあてて、何やら幸せそうにしている彼の顔があった。

「ダメだった?」

「ダメ……じゃないけど。おねえちゃん、もうちよつとで……」

「もうちよつとで……?」

「んんうう!!　リーくんのイジワル!　バカ、おたんこなす!!」

もう!　なんで怒ってるのに嬉しそうにするの!　いいもん、いいもん、それなら、おねえちゃんだって、同じことしてやるんだから!　プンプンなんだからね!

からかうような笑みを向けられ憤慨したセラフオルーは、丁度いい位置にあった、彼の怒張に頬をあてた。それから、顔を動かして頬でこすってみる。

男性器に頬ズリする。そんなこと、セラフオルーは一度もしたことなかった。いや、そもそもこういうときに男になにかしてやろうなぞという発想自体が、一度だけの交際経験の際にはなかった。

あれ……なんだか、これはこれで。

オムツを替えたことのある子だ。抱っこしてあげたこともあるし、オシオキとしてお尻を叩いたこともある。

そんな子のおちんちんに自分は一体なにをしているのだろうか？

困惑しつつも、セラフホルーの口元はにへつと緩んでいた。それはついさっきみた彼の表情によく似ていて、

「俺はこれ、なんだか好きなんだけど……。おねえちゃんは、イヤかな？」

「ううん……いやじゃないかも。なんだろうね……」

「じゃあ、『もうちよつと』の続きをするから、そのままにしてて」

「え？ ひやつ……あつ、あんんう♡」

太ももや尻をゾワゾワとした快感が撫でまわしてくる。そつとなぞるような手つきで、温度を上げられていく。

絶頂の寸前で一度止められくすぶっていた熾火のような熱が、再びセラフホルーの肢体のあちらこちらで火を噴きはじめた。

「ひあ……、リーくん、触り方がえつちだよ♡」

「おねえちゃんの声が聴きたいから、そのまま続けてよ」

「う、ん……♡」

一度強く激しい刺激で沸騰直前まで持っていていかれた。そこから焦らされ、今度は弱く優し気なタッチで到達点へとジリジリと追い込まれていく。

じれったい切なさにセラフホルーは、甘く鳴いた。あられもない声を上げながら、そそりたつた彼のモノに頬を擦りつける。

「ね、ねえ……もう、イジワルしないで……♡」

頬を寄せ、胸をすりつけ、腰を振って未だ経験したことのないこの先をねだる。

「おねえちゃん、初めてなの！ これえ！ これ、この、この感じ、初めてなの！」

すると、一番強く感じる場所の、その牝の芯の周囲を彼の舌がなぞり始めた。すぐ近くにあるのにギリギリ当ててくれない。セラフホルーは快感を求めて身体をくねらせたが、そのたびに舌先が逃げてい

く。

「んんっ！ リーくんっ！ リーくんっ！ お願いだからあ！

なんでもしてあげるから、ねえ!!」

「ホントに何でもしてくれる?」

「うんっ！ うんっ！ だからあ!」

もどかし過ぎて頭がおかしくなる。圧力鍋の中に閉じ込められた蒸気のように、自分ではどうにも解放できない。

「写真撮ってもいい?」

「いいよ、いいから……うああん♡?」

真っ赤に染まった可愛らしい顔立ちが、驚きと羞恥と悦びに崩れる。限界を超えて茹で上がった頭の中に、牝の割れ目を広げられる感覚が電流となって奔った。

「ああ♡ 何してるの? リーくん、なに、やあ、やつ、そんなところお♡」

指が入っていた、彼の三本の指がセラフォルのソコを広げて中を見つめている。

悪魔の視力は暗闇を見通す。膣内のうねりをハッキリと視認されてしまっている。

「やあ、リーくん……みら、見られてるう♡」

魔力が、彼の魔力が自らの穴の中に侵入してくるのを感じる。遠くの物を魔力を使って手元に取り寄せるのと同じ、その要領でセラフォルの膣は挿入もされていなのに、受け入れたときと同じくらいに拡張されていた。

「撮るの? そんな、とこ、撮っちゃうの? やだあ♡ そんなあ♡」

シャッター音、フラッシュ音。音と点滅が幾度も連続して続いた。

「おねえちゃんのここ、すごいことになってる」

「いやあ、イジワル、イジワル!」

カシャツと音がするたびに、光が瞬く度に、セラフォルの中の快感の圧力が解放を求めて際限なく高まっていく。

髪を振り乱して悶える。身体中が発火しそうなほど熱い。羞恥と快楽に意識が踊り狂う。この先にある悦楽への期待が、どうしようも

なくなったところで、

「ヒイッアツ♡♡♡ —— ツ♡!! —— ツ♡♡!! イイイイイ
イ、ああああアアア♡♡♡!!!」

キュツとクリをこすられた。瞬間、セラフォールの内側に蓄積されていたものが爆ぜた。

足をつっ張って、彼の下半身にしがみつく。そうやって身体を跳ね上げようとするエクスタシーの大波を、セラフォールは味わった。

大人の悪魔女性としては幼い容姿を快感に染め上げ、大きな瞳が恍惚に浸って彷徨う。断続的に甘美な痙攣が襲ってきて、そのたびにセラフォールの股が閉じていき、最後には彼の頭を足で挟み込んでしま

う。
溶けちやうよ、頭が蕩ける……こんなのだったんだ。こんなの、おかしくなるに決まってる。

「ああっ♡ リーくん! リーくん! リーくんうつつ♡♡」

痙攣がおさまり始め、ようやく呼吸することを思い出すと、セラフォールはウツトリと蕩けた瞳を彼の肉棒に向け、愛おしそうに顔を擦りつけた。

「おねえちゃん、さ……経験豊富って」

「うん……ウソつきました、ごめんね。見栄張っちゃった☆」

「なんでもしてくれるんだよね?」

「え……うん。お、おねえちゃんに……な、何させるつもり?」

今、言われたら……なんでも聞いてしまうような気がする。でも、ヒドイこと言わないよね?」

「ここでして欲しい。そう言ったらしてくれる?」

ついさつき、奥の奥まで視線で犯され、途轍もなく恥ずかしい写真を撮られてしまった場所。その入り口を指でくすぐられ、セラフォールは身体をくねらせる。

「いいよ、何でもしてあげる♡ でも、おねえちゃん……お口頑張ったんだけどな」

自分はイカされてしまったのに、相手はなんともなさそうにピンピンしているのはどうなのだろう。

セラフオルーとしては、生れてはじめてくらいに頑張っただけでじゅっぽとしていたのだ。

「あーっと……ハッキリ言ってもいい？」

「う、うん……」

「歯が当たってた……というか、おねえちゃん噛んでたから。ちよつと強めで痛かったから」

よく見てみればたしかに、歯形がある。

「そ、そうだったんだ……ごめんね、痛かったよね。言ってくれたらよかったのに」

「いや、言っただけ。聞こえてなかったみたいで」

どうにも頭の中が茹で上がり過ぎて、聞き逃していたらしい。

セラフオルーは、謝りながら男根に残る己の歯の痕をそつとさすつた。そうすると、なぜか、心の中に奇妙な満足感のようなものが湧き上がってくる。

なんだろう、これ。

ゾワリと背筋に奔った感覚を振り払い、仰向けになっている彼の下腹部に跨った。尻の割れ目にあたる硬い肉の感触に媚熱が上がる。見下ろす形になった彼はいつの間にか上着を脱いでいて、その身体つきが目飛び込んだ。

「リーくん、結構鍛えてるんだ」

腰を浮かして牝穴に牡竿の先端をあてながら、彼の腹や胸の筋肉に指を這わす。

あの小さかった男の子は、いつの間にか適度に筋肉のついた引き締まった男性の身体つきになっていた。上着を着ているとすぐには分からない程度なので、彼の従兄のようなムキムキマッチョではないが。

「ハー、白龍皇と戦わないといけないだろうから、体力をつけておかないと。長期戦の途中でバテるわけにはいかないから」

「あー、そっか……そうだよね」

「ああ、そうだ」

「いっくん♡」ひよいと起き上がった彼の口がセラフオルーの乳首を吸

い上げた。そして、カリツと上下から硬い感触があり、甘い痛みが響く。「やつ♡」背を抱くようにして引かれ、彼の上に倒れ込む。

「ああっ♡ おっぱい食べられちゃってる。リーくんにかじられちゃってるよ♡」

左右の乳首、その周辺、さらに双丘の麓までまんべんなく甘く噛まれてしまう。チクリとくる微かな痛みは、それ以上の快感となってセラフォールの身体を痺れ振るわせた。

「噛んでもいいけど、これぐらいで」

「いいの……っ？」

返事を待たず、セラフォールは彼の胸に噛みついた。今味わわされたように、ほんの少しだけ痛みを与えるような甘噛み。

胸板に舌と唇を這わせ歯を噛み合わせながら、上目遣いに彼の様子をうかがう。

男の子でも、ここカリッてすると気持ちいいんだ。

髪を撫でてくる手に頭を擦りつけるようにしながら、セラフォールは体重を彼に預けた。ずりずりと胸を押し当てながら身体をズラし、彼の肩に歯を当てる。

軽く噛んでみると、返ってくる筋肉の感触。背をそつと撫で上げる彼の手つき。

はむはむと噛り付きながら、セラフォールはまたどんと昂りだしていることを自覚した。

熱い。すごく、熱い。汗がすごく出てる。

先ほどの絶頂のあととも身体と頭の真ん中に残り続けていた官能の熾火が、ごうごうと燃え上がりだす。

男のモノを受け入れるのに十分な潤いを宿していたセラフォールの女の穴が、肉汁をだらだらと垂れ流し始めていた。

ふと目を彼の肩に向けると、自身の付けた大量の噛み痕。これと同じものが、セラフォールの胸にもつけられている。そのことがひどく嬉しく思えた。

「リーくん……♡」

口づけをねだる声が、淫らな期待に濡れて、唇を受け取る前に舌を

突き出してしまおう。

パクリとそれを彼の唇が挟み込んだ。そうして伸ばした舌に上下から微かな痛みを伴う甘い愛撫。

あああ♡ また溶けてる。融かされてる。私、リーくんに蕩けちゃった……♡

「お、おねえちゃんが、してあげる、から」

ずっとこうして愛撫し合いながら、口づけを交わしていたい。そんな気もしたけれど、セラフォルーは彼の肉棒がパンパンなままだったことを思い出した。

シテあげるって言ったのに、こんなにシテもらっちゃって、ダメなおねえちゃん！

「おねえちゃん、あのさ、俺もう結構ギリギリだから、すぐ出ちやうかもだけど……」

身体を起こして腰を浮かし、肉棒の先端をいやらしい涎だらけの裂け目に埋める。

「いいよ！ リーくんの、おねえちゃんにちようだい♡」

否定の言葉を聞きたくなくて、セラフォルーは彼のモノを一気に奥まで沈めた。

「ああっ♡ すごい、こんな……♡ あああっ♡ ああん、リーくんのおちんちん、すごい♡♡」

これまでの数百年はなんだったのか、そう思えてならない悦楽がそこにあった。

夢中になって腰を振りたくる。セラフォルーの頭の中には、もう彼とその男根の与えてくれる快感しかなくなっていた。

「もう出ちやう？ ああっ♡ おねえちゃんの中に、ね♡ なかに、いいよ、ちようだい、ね♡ ちようだい♡」

膣内を広げる牡の象徴に恍惚の笑みを浮かべながら、セラフォルーは我慢している様子の彼を見下ろした。

「ねえ、リーくん……♡ おねえちゃん、赤ちゃんほしいの……だから、我慢しないで、ちようだい♡」

ぎゆうぎゆうと締め付けているのが分かる。これを離すまいと啞

え込んでいる。肉槍の先端を一番奥に押し当てても満足できず、セラフオルーは腰を回して子種をねだった。

「うっ、オオッ！」

「あっん♡ 出てる、リークんの……♡♡ 出して、もっと、出してえ♡
たくさん、ああっん♡ ああついい♡♡」

海獣レヴィアタンの長い封印は解かれた。

性を貪るケダモノの目付きで、セラフオルーは彼を見据えた。ずっと、ずっと、ずっと、知りたいと思いつつも得られなかった官能をもっと味わい尽くしたい。

「おねえちゃん、目が怖いよ」

「でも、リークんのもうおつきくなってるよ」

今しがた放ったばかりだというのに、啜えこんだ牝には萎える気配もない。その逞しさに子宮が疼く。ようやく得た牝の悦びをもっと、もっと、もっと欲しい。

「もっと欲しいよ。リークんの、もっと、欲しいの、ねえ、ちようだい、おねえちゃん、リークんのがほしいの♡」

返答は、激しい突き上げだった。ガツンガツンと遠慮なく、セラフオルーへと打ち付けられる肉の杭。

経験の少ない身体だ、本来なら痛みを覚えそうなその上下動に、セラフオルーの膨大な魔力が応えた。

身体が作り替わる、彼のモノを受け入れる形になっていく。おそろしい勢いで、快感が高まっていく。

「リークん……目が……」

セラフオルーは、自分を見上げてくる彼の紫瞳に背を振るわせた。壊されてしまうのではないか、そう思えるような獣欲の滾りを感じたのだ。

ドラゴン？ でも、きつと、私も似たような目をしてる……。

「リークん……全部、ぶつけてえ♡♡♡!!」

パンパンパンなどというものではない、肉と肉がぶつかり合い、しぶきが飛び散り、なにより暴風のような魔力をまき散らしながら。

二頭の怪獣は、肉欲の限りを貪り合いはじめた。

あー……よかった。ものすごい、よかった。

俺ことリヴラクス・グレモリーは、現在なんだかボロボロになった魔王レヴィアタンの城の一室にいる。

ひっくり返っていた最高級品だろうソファアを戻してベッド代わりにし、おねえちゃんことセラフォルーさんを上に乗つけて寝そべているところだ。

「寝顔だけ見ると、可愛い女の子なんだけど」

どうにも前世があるせいか、悪魔であっても見た目で判断してしまうところがある。

多くの女性悪魔は、二十歳付近から三十歳手前あたりの容姿をしている。だが、セラフォルーさんは十代中盤程度に見えるため、なんとなく感じ方が変わってしまうのだ。

もしくは血と肉と骨に宿ったグレモリー気質なのかもしれない。

生まれた頃は戦争中で、多感な少女時代を内戦に明け暮れ、大人になるとすぐに政治闘争とその裏の暗闘。

悪魔同士で誰が味方で誰が敵なのかも分からず疑って暮らし、天使や墮天使にも警戒し、さらに大戦で弱体化した聖書の勢力を狙う他の神話勢力とのやり取り。

油断の隙も見せられない、見せたとしてもそれはそう見せているだけ。魔王の肩書を背負ってしまい、一番上の立場で責任を抱えて生き続ける、そんな生活を何百年……。魔法少女でもやって、はっちゃけていないとやっていられないのかもしれない。

「頑なにもなるか」

それはそれとして、セラフォルーさんは大変面倒くさい女だった。性格ではなく、いや性格によるものだが、まず精神的に落とすというか融かすというか、安心させるといいうか、とにかく心を揺さぶってほぐしてやらないと感じてくれない。乳クリまんこ、グリグリすりすり

ずつこずこで簡単に感じてくれはしないのだ。面倒と言うより、難しい？ 似たようなものか？

セラフオルーさんの身体が自分でそう言っていたのだから、そうなのだろう。

はつきり言つて、俺の本来の経験値では太刀打ちできない相手だった。グレモリーのエロチート魔力特性がなければどうにもならなかった。

あとは、知り合ってから期間が長く、付き合いが多かったおかげだろう。

最初からある程度、ほぐれていたし。

行為の最中に断片的に聞いた、一人だけいたお相手。その人はたぶん警戒されていたはずだ。しかも、見合いの席で初めて会話したような仲。まず、無理だろう。

安心しきった、あるいは満足感に浸っているような、そんな寝顔の頬を撫ぜると——ふわりと笑みを浮かべる。

相当な年上なのだが、こういう姿を見るとものすごく甘やかしたくなる。身内に甘い一族なせいだろうか。

まあ、甘やかすつて……Hなことするんですけどね。なんでもしてくれるって言ってたし。

☆『魔法少女マジカル☆レヴィアたん』復活の紅色龍帝ブラッド・ライグ!!
××版

かつて天地冥の三界を炎と鮮血の紅に染め上げた紅色の龍帝ブラッド・ライグ。

かの龍帝の復活を企む秘密結社と戦い続けてきたレヴィアたんであつたが、ついに復活してしまつた龍帝の圧倒的な力の前に敗北してしまつた。

そして、蹂躪が始まつた。龍帝は様々な責め苦でレヴィアたんを甚振つた。必死の反抗も、愛と勇気と希望の心も、全ては龍帝の力の前に押し潰された。

嬌声を上げさせられ、よがり狂わされる日々。いつしかレヴィアたんの瞳からは輝きが消え去り、龍に犯されることを悦んでしまう暗い陰が宿つてしまうのだった。

「いい姿になつたものだ」

「龍帝……」

むき出しにされた巨乳を籠手を着けたままの堅い手で鷲掴みにされることも、今のレヴィアたんには快感でしかなかった。

敗北する前よりも明らかに大きくなつた双丘、それを龍帝の手が根元から順に絞つていく。

「あっ♡ あああっ♡ でちやう、で、あああ♡」

するとレヴィアたんの胸から母乳が噴出した。牛の乳を搾る様にして、龍帝はレヴィアたんの二つの丘を何度も絞り上げる。

「ああああ♡ あっ♡ はあう♡」

「ふふふ、気持ちよさそうだな」

「うっ……、あなたがしたんじゃない。こんな風に……」

母乳に濡れたレヴィアたんの膨れた腹を、龍帝の手が愛おしそうに優しく撫でる。

「おっと、ロールプレイ中だった」

「もう！ ちゃんとやってよ、リーくん！」

DX―2―1 DQ：十字架×危機（クロス×クライ
シス）

諸事情あつて、魔王アジユカ・ベルゼブブにいくつかの借りのあつたりヴラクス・グレモリー。彼はアジユカの紹介で引き合わされた、とある龍王からの依頼を引き受けざるを得なくなった。

『まずは吸血鬼の国からにするか……』

『スマン……スマン……』

俺に謝っているのは、赤龍帝ア・ドライグ・ゴツホ。

それはとある龍王――『天魔の業龍』カオス・カルマ・ドラゴンティアマツトからの依頼内容の原因が、ドライグだからだ。

『とうか、ドライグとティアマツトって仲良かったのか？』

『いや、別にそんなことはない』

『ほう？ 俺の認識では、ドラゴンってヤツは自分のお宝を恐ろしく大事にして執着しているものだと思っていたんだが』

『ああ……普通は、そうだ……』

『そうだよな？ で、お前は どうしてティアマツトからお宝を借りた
りできたんだ？ 相当仲が良くないと、そんなもの貸してくれないだ
ろ』

『ぐっ……』

『なるほどなー。そうか、そうか、やっぱデキてたのか。いやー、良
かった、良かった。俺の神器に宿っているドラゴンさまが、童貞じゃ
なくて良かったなー』

『ええい！ うるさい！ 俺とヤツはそんな関係ではない！』

『男のツンデレとかな……。とうか、いいのかドライグ？』

『だから違つと！ 何がだ……』

『いや、ベルゼブブさまとティアマツトって……なんていうか、怪しい
感じじゃなかったか？ いいのか？ お前、封印されてる間に取られ
……』

『しつこいぞー！ だから、何度も謝っているだろうが！』

『いや、いいだろ、ちよつとからかうぐらい許せよ。お前が借りたまま喧嘩に夢中になって、封印されたりしたせいだろうが……』

『そうだがなあ……』

ティアマツトからの依頼の内容は、ドライグが神器に封じられる前に彼女から借りていたお宝の返還。ドライグが借りたものを返す前に封印してしまったため、彼女のお宝までもドライグのお宝と一緒に盗賊に奪われ、世界中に散らばってしまったらしいのだ。

「封印されているドライグから回収できない以上、その力を借りている『赤龍帝の籠手』の所有者に請求させてもらおう」などと言われても、リヴラクスにしてみれば知ったことではない話なのだが、世話になっているアジュカを間に挟まれると断り辛い。

さらに父であるグレモリー公爵ジオティクスからも、「丁度良い機会だから、世の中を見てきなさい」と言われてしまったのは、もう仕方がないというもの。

俺としては、これも社会見学の一環として一人旅も悪くないと思うしかない。幸いなことに、いつでもどこでも話し相手はいるのだから。

『まあ、吸血鬼の女は美形が多いと聞くしな……それだけが楽しみか』
『高慢で狭量、同族以外は見下す連中だぞ』

『俺はそういう女を組み敷いて、とろつとろに蕩けさせるのが好きなんだよ』

『好き者が……』

『安心しろドライグ。俺はお前の彼女には手を出さないから』

『だから違うと言っているだろうが！』

『とうか、赤龍帝と龍王と魔王の三角関係とか、関わり合いになりたくない』

『お前はすぐにそうやって邪推するのだな！』

『そういうお年頃なんだよ、俺は。……封印されてからもずっと追いかけて来てくれたんだろ？ お前と来たらそれから逃げ回ってばかりだったみたいなのに、愛想尽かすわけでもなく……いい女じゃないか』

『だからだな……!』

『はいはい。……早く自力でどうにかできるようになるといいな』

『ああ……そっちは期待している』

『努力はするさ。期限は切れないが』

目的地である吸血鬼の国は、ルーマニアの山奥にあると言われている。

『やっぱ適当に飛び回っても見つからないな』

『その程度で見つけられるなら、とうの昔に教会の連中が戦争を仕掛けているだろうな』

吸血鬼と悪魔は似たところがそれなりに多い。ともに教会の連中から目の敵にされていて、光や聖なるものに弱いなどといった弱点にも共通したものがあある。

だが、教会の連中の中でも特に血の気が多い者。武闘派の戦士たちは、どちらかというとも悪魔よりも吸血鬼を敵視しているという。

なぜなら、悪魔は人間を誘惑し堕落させ、契約を持ち掛けてその欲望を啜るのだが、吸血鬼は物理的に血を啜る。教会としての倫理などではどちらも人間の敵なのだが、現代人の価値観で言えば吸血鬼の被害の方がより凶悪に思えるらしいのだ。

『兄上たちの政策で、悪魔はだいぶマイルド仕様になったらしいからな、ここ数百年で』

昔は魂を頂くことがメインだったが、最近の悪魔の取引はほとんど便利屋のような形態だ。この資本主義が蔓延る世の中、契約して欲望を叶え、その対価として金品を受取る現代的な悪魔のやり口は、人間からの敵意をさほど稼ぐものではない。人間同士がやっていることと大差ないぐらいだ。

無論、中には好き勝手をやる者もいる。それに『はぐれ悪魔』はそういういた配慮などしない者が多い。

『吸血鬼は食事にうるさいからな』

『被害者の親族なんか、教会の戦士になっていたりするんだったか』
たしか、ディオドラがそんなことを言っていた気がする。

と、噂をすればそのディオドラからの通信だ。

『やあ、同志アクジヨスキー』

『よお、同志シリシカレー』

『なんだい、その呼び方は？』

「いや、ラテイアから聞いたんだが、お前、嫁さんの尻に敷かれてるらしいじゃないか」

通信映像の中のディオドラは、その話題は聞きたくないと思わすように顔をしかめた。

『しようがないだろ！ あっちの方がボクより強いんだからさー、聖剣とか刺されたら、ボク死んじゃうよ！』

「なんか、眷属も乗っ取られたとかどうとか」

『あーあー、聞きたくない。はあ……なんかね、ボクよりもあっちの命令の方を優先しがちな気がするんだよね……ボクが「王」なのにさー』

「眷属の大半を聖女やらシスターで固めた弊害だな」

『ま、そうなんだけどね。やっぱ、権威があるらしいよ。なんともね』

「そういう割には、まんざらでもなさそうに見えるとも聞いたんだが」
『実際、そう悪くないんだけどさ。実益を兼ねていれば、ボクの趣味もオツケーだしね。彼女、前世にいろいろあったのと、今生でもアレだったろ？』

「聖剣計画だったか、教会もエグいよな」

『そそ、思い詰めてボクなんかと契約しちゃうくらいだからね。生き残り連中も含めて、大層な教会嫌いになってるからね。あれかな、元は深く信じていた分、裏切られた反動ってヤツ？』

「その点、俺ら悪魔は気楽だな。悪いこととして当たり前、ちよつと優しくすると妙にイイ奴扱いされるっていう」

『そうそう、前にキミから借りた人間たちの漫画にあった、不良が捨て猫理論みたいな』

天使や教会の連中は善行して当たり前なのに、悪魔は悪いことをするのが自然。そのせいなのか、対価ありの取引でも結果が人間から見て良ければやたら感謝されることがある。

やはり日頃の行いが大事ということだ。悪魔の平民どもも、人間と

そう変わらないし。

俺なんか、普段「クソ平民」「平民なんぞ必要ない」「奉仕種族ども」とか言いまくっているのに、たまーにちよつと助けてやると「普段はあんだけど……実は……」みたいなこと言われるのに対して、サイラオーグはいつも助けてやったりしているのに、ちよつと失敗するとボロクソに言われたりして凹んでいるのだ。

貴族なんて強くて怖いと思われておくのが一番楽だろうに、いちいち平民の顔色なんぞ気にしてうかがっているからナメられるのだ。

「で、実際どうなんだ？ 聖処女さまの感想は？」

『いいよね……。普段はアレだけどさー、ベッドじゃヒンヒン言わせてるし。ま、ボクの魔力触手にかかれば大概の女はそうなるんだけど』

どこかで聞いたようなセリフだな。……ああ、父上か。ディオドラにまでグレモリーがうつったのだろうか。

「お前っていうか、アスタロト家はそういう器用なの得意だよな」

『制御のそれが極まったのが、ベルゼブブさまだしね』

ディオドラは魔力の操作がおそろしく精密だ。魔力で蛇やら触手のようなものを作って、細かく動かしたりを簡単にやってのける。触手の先端を尖らせて、鎧の隙間に突き刺したりとかを戦闘中の動いて避ける敵に命中させるからな。ラティアもそうだが、魔法も得意だしなこの家系。

アスタロト家出身のベルゼブブさまともなると事象を式に変換して操作するとかどうとか、意味の分からないことをするらしい。なんだそれ……。

俺にはああいふ細かいのは出来ん。普段ならともかく、戦いとなると大威力広範囲でまとめて薙ぎ払うのが手っ取り早い。それでほぼ勝てるのだけれど。

エロ利用なら結構細かいことも出来るんだがなー、布の繊維にしみ込んだ色々な汁だけを「消滅」させて綺麗にしたりとか。着替えがなйтときの野外ツクスに大変便利。

『さって、それで頼まれてた吸血鬼の国の行き方の件だけど』

「お、分かったのか」

吸血鬼はその王国全体に結界を張り巡らせているらしく、入り方を知らないとな国が難しいらしい。場所さえ分かっているれば、魔力量に任せられた強引な突破も出来なくはないようなのだが。

『いや、分かってない』

「分かってないのかよ。ベルゼブブさまなら知ってそうだし、教えてくれたらいいのにな」

『そこも含めて勉強しろってことじゃないかな？ で、代わりに教会に吸血鬼の情報があつたよ。I国のT市で吸血鬼が暴れてるってさ』
「ああ、そつちに聞けつてことか。さすがだな」

『まあね、本当は代価をもらいたいところだけど、ベルゼブブさまから頼まれてるから今回はなしでいいよ』

「吸血鬼の二大派閥の一つ、『ツエペシユ派』のマインスター家から追放された上級純血吸血鬼……ね。これなら確かに自分の住んでいた国のことは知っているだろうな」

『そそ、そいつを捕まえて吐かせればいいんじゃない？』

こいつは、本当に教会の情報引つ張ってくるのがお上手だ。俺には出来そうもない。

と、とりあえず褒めておくとディオドラは得意げな顔をして、

『ボクはキミみたいに正面切つて暴れるのは向いてないみたいだから、こつち方面で身を立って行こうかと思ってるんだよ。だから、まあ、アレだ』

「聖剣計画のときみたいに、暴力担当だけしろってか？ あれ、お前が呼び出すのがもう少し早かったら、全員助かってただろ？」

『嫌だな、そんなに早めにキミを呼んでいたら、そつちに持っていかれちゃうだろ？ あのぐらいのタイミングで良かったんだよ。おかげで生き残り連中の教会への恨みも大きくなってるしさ』

「そういうものか？」

『そういうものさ。全員生かしていたら、きっと良心がどうこう言いだしてた。全滅させてたら、自棄になっていたかもしれない。適度に生き残らせたから、そいつらのタメって言い訳ができて……こつちに

堕ちて来たんじゃないか』

「相変わらず、口の上いいヤツだな、お前は」

『ハハハ、まあね！ ああ……そうだ、その吸血鬼のマインスターだけで、もう討伐命令が出てたみたいで、教会が最初に送ったエージェントを全滅させたらしいんだよね』

「こいつらは……？」

デイオドラが通信魔方陣の画面に、教会の戦士と思われる女二人——年齢は俺と同じくらいか？ ——の映像が映る。

『その全滅を受けて、教会が追加で送ったAクラスのエージェントらしいね。聖剣の素質があるみたいで』

『エクスカリバーの欠片持ちか、縁があるな。デュランダルも……か』
『ま、キミなら楽勝でしょ？ 先代のデュランダルならともかく、そのゼノヴィアって子はまだまだみたいだし』

紫藤イリナにゼノヴィア。人間にしては、悪くない顔つきをしている。

「しかし、この教会の戦士の恰好はなんなんだ……悪魔を誘惑してるのか、これ？」

パツンパツンでボデイラインくっきりの教会戦士の恰好は、女の子が着ると、こうなかなかそるものがある。

『案外そうかもよ？ 鼻の下のぼしたところをバツサリとか。ああ……ついだしさ、試してみたら？ ボクはちよつと戦士系はもういっぱいいいんだけど、教会女もいいものだって知って欲しいしさ。食わず嫌いはもったいないよ？』

「ものついでにそういうのも……アリ、か」

ふむ、デイオドラから話は聞いているが、俺はコイツほど口が上手くないからな。上手くやれるとも思えんが、ま、物は試しだ。失敗してもこちらに損はない。

『あ、そうそう。その子たち、もう現地向かかってるみたいだから、急がないと吸血鬼かその子たちか、どっちか死んじゃってるかもね』

「それを早く言えー！」

「——ペトロ、バシレイオス、ディオニシウス、そして聖母マリアよ。我が声に耳を傾けてくれ」

上級にして純血の吸血鬼マインスター。それと対峙するイリナの視界の隅で、ゼノヴィアの伸ばした右手の先の空間が歪んでいく。

「この刃に宿りしセイントの御名において、我は解放する」

空間の歪みの内から現れたのは、一振りの巨大な剣と、それが纏う極大の聖なるオーラ！

「——デュランダルト!!」

その名に驚き見つめるイリナの前で、ゼノヴィアが構える聖剣が暴力的で攻撃的なオーラをまき散らす。

吸血鬼との決戦の場となったホール天井、床、散乱する長椅子などが、デュランダルの放つオーラによって刻まれ、砕け始めていた。

「伝説の……デュランダルト!?!」

エクスカリバーの欠片から作られた聖剣に対して余裕を見せていた吸血鬼も、デュランダルの放つ波動の前には驚愕と恐怖を覚えているようだ。

「お、おのれ、神の下僕どもがあああ……! この、私が……こんな、ところでええ!!」

デュランダルの威容に臆し、狂乱の態を見せる吸血鬼に向かって、ゼノヴィアは振りかぶった暴威の聖剣を振り下ろす!

あまりにも強大な聖なるオーラ! 聖剣のオーラが放つまばゆい輝きに、イリナは目を覆った。

「な……に?」

戸惑うゼノヴィアの声に手を退かすと、そこには無傷の吸血鬼と、その前に立って片手をかざすイリナとそう年齢の変わらなような少年の姿があった。

「吸血鬼マインスターだな?」

「ああ……お前は?」

「悪魔だ。少しばかり吸血鬼の国に用のある、な」

深みがあり、艶やかさと華やかさを備えた声色の悪魔の少年は、イリナたちに視線を向けたまま吸血鬼に話しかける。

金髪碧眼、悪魔にはよくある容姿だ。少年から感じる波動は、上級悪魔のそれ。

状況が掴めず様子見に回ってしまったイリナと、必殺のデュランダルをかき消され半ば呆然としているゼノヴィアを他所に、悪魔と吸血鬼の会話が続く。

「悪魔……か。いや、ははは、助かったぞ。丁度いい、ここはどうだ、共闘といかないか？ そこいる小娘共は、我ら共通の敵である教会の雌狗だ」

「共闘？ お前、今死にかけていただろう」

「はは、なに、あの程度のオーラなど、この私ならばどうとでも出来たとも」

マズイ。イリナの心を焦りが覆う。

純血の吸血鬼だけでも苦労していたのだ。そこにどういうカラクリか分からないが、あのデュランダルのオーラすらかき消す術を持つ上級悪魔などが加わったら……。

「そこの教会女ども、俺はコイツに用があつてな……。このままさつさと尻尾を巻いて逃げかえれば、生かしておいてやってもいいぞ？ 負け犬を追うほど暇でもないしな」

悪魔の少年は、どうやらイリナたちとの戦闘を避けたい様子。

デュランダルのオーラ砲を防いだのは、何らかの使い切りの手段だった？

どうするべきか。同時に相手取るのは無茶だ。しかし、初めて見たデュランダルの力はあまりにも頼もしかった。ゼノヴィアは、アレをあと何度放てるのか？

イリナの判断には迷いが生まれた。悪魔と吸血鬼は、神の敵だ。討てるものなら討つべき存在である。

「ゼノヴィア……!?!」

イリナとゼノヴィアが組んで任務をこなすようになって数か月経っているが、デュランダルのことを知ったのはついさっきのこと。

判断材料を求めてゼノヴィアへと視線を向けると、そこには再びデュランダルを振りかぶり、莫大な聖なるオーラを放とうとしている彼女の姿があった。

いける！ 仲間が攻撃の体勢に入っている。ならば、自身のすることはそのサポートだ！

イリナは手にした擬態エクスカリバー・ミミックの聖剣を細く長く伸ばして振るい、悪魔と吸血鬼の周囲に渦巻かせた。

これで、逃げられない……はず！

「受け取れ、悪魔！ 吸血鬼！」

再び放たれたデュランダルの聖なるオーラ砲撃に、慄き逃げようと狼狽える吸血鬼。

もう一方の悪魔の少年は、その端正な顔に三日月のような笑みを浮かべた……。

「一応、言っちゃったぞ」

一言、少年のその一言と共に、紅と紫の混じる魔力が渦巻き、漆黒の防壁を出現させた。

デュランダルの威光がその防壁へと叩きつけられ——あつさりと消えてなくなる。そう、聖なるオーラが、あの途轍もない威力を感じさせた暴力的なまでの聖剣波動が、抗う様すら見せずに闇に飲み込まれたのだ。

黒い「滅び」の防壁が消え、その向こうから姿を現した少年悪魔の容姿は変化していた。

血のような紅の髪。

「あ、ああ……」

イリナは我知らず奥歯をカタカタと震わせていた。

傲慢さと自負のにじむ、紫の瞳。

「まさか……」

吸血鬼と対峙した時にも、住民たちが変じたアンデッドを斬る時にも、冷静さと強気を保っていたゼノヴィアの声にも、動揺がうかがえる。

「がああああッ！」

吸血鬼が、純血にして上級の吸血鬼、マインスターが、目に見えない力——紅髪の悪魔の魔力——によって宙に吊り上げられている。

「マインスター、お前はそこで大人しくしている。今、魔力で標しるしを刻んだ。逃げてても無駄だ。なに、大人しくしていれば命は取らん」

あの吸血鬼が、イリナとゼノヴィアに対して傲慢な態度を最後の最後まで見せていたマインスターが、何度も首を縦に振り、紅髪の悪魔への恭順を示している。

それだけの力があるのだ。異形の者たちの共有する絶対的な価値観。『強さ』の差が。

「俺の中にもな、僅かばかりは人間をやっていたころの良心やら、倫理観の名残があるんだが。まあ、あれだ、こつちに剣を向けて殺しに来たんだ。……何をしても、構わんよな」

イリナが恐怖を覚えるほどだった、デュランダルの聖なるオーラ。それが今はちっぽけに思えてしまう。

それほどの魔力の波動を目の前の紅髪の悪魔は放っていた。

『紫紅の龍帝』……」

イリナのつぶやきを拾ったのか、悪魔はその腕に神をも殺すと恐れられる神器の一つ『赤龍帝の籠手』を顕現させた。

「バカな……こんな、大悪魔が……」

ルシファアの弟にして、赤龍帝。純血にして神滅具持ちの悪魔。その脅威度は、魔王のそれに等しい。

こんな大悪魔の中の大悪魔の相手をするぐらいならば、百の上級悪魔に囲まれた方がまだマシだ。

あのゼノヴィアの声に諦めの色が、混ざっているのが辛い。だが、それも仕方がないことなのかもしれない。直に浴びせられているこの魔力の波動は、それだけで何もかもを消し飛ばしてしまいそうなほどなのだから。

「やはり教会の戦士にも知られているのか、俺も有名になったものだ」悪魔が近づいてくる。ゆっくりと、散歩をするような気楽さで。

後ずさろうとして、イリナはそれが出来ないことに気付いた。身体が動かない。首から上を残して、全身が固定されてしまっている。

魔力だ。この悪魔は、術式も何もない、悪魔のよくやる少し離れた場所にある物を魔力で掴んで取り寄せる魔力の使用法。それだけで、イリナとゼノヴィア、そして吸血鬼をまとめて縛り上げていた。

「たしか、教会の信者どもは自殺が出来ないんだったか？　なら、舌を噛まれることもないか」

悪魔がついと指を動かすと、離れた場所にいたイリナとゼノヴィアが肩をくっつけ並んで立つような形にされた。ついで、指を無理やり開かされてしまい、二人は剣を手放してしまう。

脇から飛んできた長椅子が、床に落ちた聖剣を巻き込んでホルルの端まで飛んでいく。鍛えた戦士の足でも、一息にはたどり着けそうにない位置だ。

「どちらも人間にしては悪くない」

悪魔は左右の手で二人のあごを掴むと、しげしげと瞳の奥までも覗き込むようにして無遠慮な視線を注いでくる。

至近で見える悪魔の顔は、美しかった。負のオーラを放ち、死人や人形を思わせる吸血鬼のそれとは違い、恐ろしいまでの活力に満ちている。そして、同じくらいの傲慢さと嘲りにも。

その悪魔の瞳に、イリナは色欲の火が宿るのを見た。垂れ流されるだけで心を崩されそうなオーラに、こちらを嬲ろうとする意志が加わり、ぞわぞわとした怖気が全身を撫でまわしていく。頭の中をかき回されているようだ。

「お前ら、美形の女で良かったな。生かして返してやろう、ただし、どちらかが俺に処女を差し出せ」

何を、言っている。そんなことが出来るはずがない。

「ああ、殺せ、なんて言うなよ。生かして返してやると言っているんだ。わざわざ自殺を願うことは無いだろう？　それに……」

悪魔はホルルの端へと目を向けた。そこには、さつき吹き飛ばされていった聖剣がある。

「あの剣、俺にとっては忌々しい代物でしかないが、お前らには大事なものだろう？　お前らが俺の提案に頷かず、死んでしまったら。あれはどうなるんだろうな？」

イリナ、そしてゼノヴィアと、悪魔は瞳を合わせて問いかけてくる。「実は俺の知り合いに、聖剣を心の底から憎んでいる連中がいてな。そいつらへの土産にしてやろうか。粉々にされるか、それとも火山の火口にも沈められるか。いや、どうなるんだろうな？」

エクスカリバー、デュランダル。これらの聖剣の価値はイリナの命よりも重い。少なくとも、信仰に生きてきたイリナにとってはそう
だ。

私か……ゼノヴィアか……どちらかが、犠牲になれば……。

悪魔が約束を守るとは限らない。ただ、悪魔は比較的約束事を守る傾向の強い異形だ。契約にこだわるからだろうか。

ほんの少し前のことが思い出される。吸血鬼との戦い。その中で、イリナは元は人間だったアンデッドたちを平然と滅ぼしていくゼノヴィアに恐怖を抱き、距離を置いてしまった。差し出された手を避け、悪いのは自分の方なのに、彼女に謝らせてしまった。

「私が、私……を」

決意しても口にするのは、はばかられる。

「やめろ、イリナ！」

「いいの、私が……だから」

悪魔の手がイリナのあご先にのび、顔を上向かされた。

初めての口づけを、悪魔に奪われた……。それに気づいて涙を浮かべるイリナを、悪魔は見下して、

「献身というヤツか？ 仲間のために身を差し出したお前は、俺が相手をしてやろう」

イリナを抱えあげると、悪魔は破壊が吹き荒れたホールの中でまだ無事な姿をとどめていた長椅子へと横たわらせた。

「そして、ゼノヴィアだったか？ お前の相手はコイツだ」

パチリと悪魔が指を鳴らすと、魔方陣が出現し、その円の内よりおぞましいものが湧きだしてくる。

「冥界でも最下級の魔物。種族の名前すらない、ただの触手だ」

「約束が違うわ！ わた、わたしが……しよ、処女を差し出せばって……」

「ああ、ちゃんと守ってやるさ。この触手には、ゼノヴィアの処女の穴には挿れさせない。ただ、まあ、コイツの主食は女の分泌物でな。汁をあふれさせたら、入り口付近を嚼るぐらいはしてしまうかもしれない……。といつても敬虔な神の信徒が、こんな最下級のおぞましい代物に弄り回されて、愛液を滴らせるなどあるはずもないか」

触手が、動きを封じられているゼノヴィアへと絡みついていく。戦士の着る、身体にピタリと張り付いた戦闘服の、足や腕、首などの露出部分の隙間から内側へとぐねぐねと入り込んで、ゼノヴィアの胸や股の間の敏感箇所、そして尻穴などへと吸い付いて……。

「こんなものでッ！」

口内へと侵入しようとした触手を、ゼノヴィアは食い千切った。口の中に広がる異臭とえぐみにむせながらも、彼女は悪魔を睨みつける。

「なかなか元気だな。それなら、こうしてやるか」

悪魔の片腕に宿る『赤龍帝の籠手』が力の増大に続いて「Transfer」と音を発した。

「これでソイツは魔王級の力をもった、最下級の魔物だ。存分に楽しんでくれ」

「この悪魔ッ！」

再び口を犯そうとする触手を退けようとして、まったく歯が立たなくなっているゼノヴィアの姿。悍ましい存在に悶えさせられている仲間の姿を見せられ、イリナは当たり前前のことを叫んでいた。

「悪魔？ 違うぞ……俺は天使だ。そう……天使の長、ミカエルだ」

何を言っている……。の……。悪魔の瞳を見ていると、頭に添えられた悪魔の手に撫でられると、イリナの認識が歪んでいく。

「ミカ、エルさま……」

「そうです。戦士イリナ」

「これは、一体……どういう」

イリナは何らかの儀式の場に居た。いつの間になくなったのか、その経緯はまったく分からないが、自分を抱きかかえているのが天使長ミカエルであることだけはハッキリと分かる。

「戦士イリナ。貴女は選ばれたのです」

「えら、ばれた……私が？」

「ええ、天使と人間の子供。その母となる者として、貴女は選ばれたのです」

なんとという荣誉なのか！ イリナの心は喜びに満ち溢れた！

DX―2―2 DQ：十字架×危機（クロス×クライ
シス）

天使の子作りには様々な制約がある。

特殊な結界で周囲を覆い、身を清めて祈りを捧げ、行為中も常に信仰心を忘れず、聖人の心を維持したまま無償の愛を抱く必要があるのだとか。

無論、色欲に染まるなどんでもない話だ。

ま、悪魔の俺にはまったく関係のない話なのだが。

「ミカエルさま、私はどうすればいいのでしょうか？」

不安げにつぶやくイリナだが、よく見れば頬をうっすらと朱に染めている。

教会の戦士はこの手の魔力による精神操作には耐性を付けていると聞くが、魔力量でゴリ押ししたら簡単に入ってしまった。

少量でも効く毒に耐性を付けていても、大量に流し込まれたら効いてしまうなんて話を聞いた覚えがあるが、そんな感じだろうか。

「私からいくつか訊ねさせていただきますので、それに答えてください」

「……はい」

俺はミカエルの口調なんぞ知らん。絵姿くらいは教科書で見たことがあるが、詳しいところはサツパリだ。

だが、今この教会の戦士イリナには俺が紫藤イリナの思うミカエルの姿に見えている。そして俺の言葉は勝手に頭の中でイリナの思うミカエルの口調に変換されている状態だ。

どんな風に変換されているのか少しばかり気になるが、まあよし。つい勢いで、天使が人間とのハーフを作る時の話をしてしまったが、まあ、それもヨシ。

どっぴりと色欲に染めてやろう。

「まずどうすれば子供が出来るのかは知っていますか？」

「えっと……その……」

『んっううゝゝゝゝゝゝ』 ひりいいなあゝゝゝゝゝゝ』

知識の確認は重要だな。あつちで触手とくんずほぐれつしているゼノヴィアは、口が塞がっているので答えられないだろうが。

今のイリナには余計な声は聞こえない。認識できない。俺がイリナに聞かせようとしている言葉しか、受け取ることが出来ないのだ。「どうしました？ 今の人間は、そのようなことを教えているのではなかったのでしょうか？」

「い、いえ……男性の……性器を……女性の性器、と……くつつけて……その……」

イリナはもごもごモジモジしている。完全なセクハラ上司です。ミカエルってヤツは酷いな、最低だ。

「くつつけるとは、具体的にはどうするのですか？」

「そ、それは……あの……硬くなった男性の……性器を、女性の性器の、穴に、入れて……精子を……」

保健体育の時間です。

「そのためには、どうすればいいのでしょうか？ 教えていただけませんか？」

「ミカエルさまは……もしかして……」

「ええ、恥ずかしながら。これまで経験がないのです。墮天するわけにはいかない立場ですし」

「そ、それでは……あの……」

「すみませんね。あまりそういった知識を頭に入れないようにしていたものでして。今回、事情があつてこういったことになつたのですが……。人間は学校でそういった教育を受けると聞いていたので、戦士イリナから教えていただく形となりました」

幅広の長椅子の上に仰向けに寝かせていたイリナは、顔を真っ赤にして羞恥に悶えだした。

イリナ先生、無知なミカエルくん(○)に子供の作り方を教えてください。童貞なんです。天使長だから！

「で、ででっで、では……ミカエルさまの……男性器を……見せていただけ、ますか？ か、硬くしないと……」

「分かりました。——これでよろしいですか？」

パンツごと下を脱いで、ぽろんとイリナの目の前に差し出してやる。勃起はしていない。いや、憎々しきミカエルのふりするとか、萎えるわ。

「というのは嘘で、頑張ってたたないように抑えているのだ。これが、性欲を抱かないようにするという行為……ッ！ 辛い！」

「ひっ……。あつ、違います！ その……」

「構いません。敬虔な信徒の女性であれば、幼少期を過ぎてからはその目にするものないはずのものです。恐怖を覚えてしまうのも仕方ありません」

「だ、大丈夫です。ミカエルさまは……その、それを」

「はい、まずはこれを硬くするのですよね。どうしたら硬くなるのでしょうか」

「邪な感情など持たない天使は、自然に勃起してしまうことなどないのだ。股間をフル勃起させながら天から地上の女目掛けて墮ちてダイブしていったバラキエルとは違うのだよ、バラキエルとは。」

「さ、触りますね」

イリナの手が俺のモノの寸前まで近づいて、躊躇うように幾度もその指を彷徨わせる。

「どうしたのですか？」

早くしろよ、とは言わない。ふふふ、こういう躊躇いとか恥じらいはいいものだ。すぐに自分から脱ぎだして、おっぱいマンコぽろーんというのも悪くはないが、やはりこういういったモジモジ感は良きものよ。

「い、いえ……」

「戦士イリナ……愛です」

「愛……」

「そう無償の愛をもって、私に教えてください」

無償の愛を以て男の股間をまさぐれとか、ミカエルさまってちよつとズレてませんか。まあ、俺なんですが。

それでも、こんな言葉が何故かイリナには響いたようで、ゴクリと

喉を鳴らした後に、指先でちよんとつついてきた。

刺激としては、大したことは無い。だが、なんというか、こう来るものがあるのは確か。

「い、痛くはありませんか?」

「いえ、問題ありません。そうやって触れることで、硬くなるのでしようか?」

「は、はい。たぶん……ですが」

「そうですか。では、主のために、もっと触れてください」

イリナはふにやんとした俺のモノを指で包むようにする。

主がどうこう言ったせいか、ちよつと頭痛くなった。ちんちんも萎えるわ。

「や、やつぱり、痛いんじや……」

「大丈夫ですよ、問題ありません。そのまま続けてどうか、私の男性器を硬くしてください」

「……はい」

おずおずとしていた手の動きが徐々に大きくなっていく。しかし、やはり俺が痛そうな顔をしてしまったせいなのか、そのタッチは壊れ物を扱うかのように繊細だ。

潤滑油がない状況だと、この触り方はベストだと思う。良い感じだ、頭痛くなって萎えた逸物が徐々にムクムクしてきた。

『イリイナアアゝ! やめろ! そいつは、悪魔だツ! ミカエルさまではないツ!!』

触手くんが一度口を解放したのか、ゼノヴィアが何やら叫んでいるが——無駄だ。

『ゼノヴィアだったな。お前が何を叫んでも意味はない。この女は、こいつに見せている状況にとって都合のいい言葉しか認識できない』

『貴様ツ! 悪魔めつ! あく……ひあいいゝ、あつ、つぐうゝ♡』

『声が甘くなってきたきているじゃないか。そんな悍ましい触手に全身弄り回されて……教会の者は淫乱なマゾヒストばかりだと聞いていたが、本当だったようだな』

『なに、おゝ♡ やめ、ろ……そんなところ、ああゝ♡』

『ははは、なんだお前は、俺がイリナと遊んでいる間に、すっかり仲良くなつたみたいだな。処女のくせに尻穴を穿られてよがるとは……相当だぞ』

『ああっ、言うなっ！ 言うなああ……くっ♡』

『言つておくが、その触手には媚薬効果とか、そういつたものは一切ない。ただ単に滑りを良くするためにぬるぬるとした粘液を分泌しているだけだ。それなのに気持ちよくなつてしまっているのなら、それがお前の本性ということだ。デユランダル使い』

『ああっ……あっ、うううっ♡ んぐっ……んっんん、んくくくっ』

ちなみに本当は、媚薬的な成分は若干ながらある。ただ、そこまでの効果は本来はない。ごくごく弱いものだ。——俺が『譲渡』して強化していなければ、だがな。

ゼノヴィアもあとで楽しませてもらうつもりだが、イリナと遊んでいる間に触手くんに墮とされてしまうかもしれないな。あの調子だと。

仕事が早すぎるぜ、俺の使い魔は。適度に会話を挟んだら、またお口に突っ込んで黙らせてくれるし。

「ミカエルさま……、硬くなり、ました」

「そうですね、これが硬くなった、という状態なのです。それで、次はこの硬くなった男性器を、戦士イリナの女性器に入れるのでしたか」

「は、はい……」

「どうしました、戦士イリナ」

「いえ、その……じよ、女性器を……ですよね」

「ええ、そうです。その女性器の穴に、この貴女が硬くしてくださいった男性器を入れるのですよね？」

「うっ……ひっぐ……うっ……」

ふむ、イリナが泣き出してしまった。やれやれ、ミカエルさまの逸物をお迎えするというのに、全く失礼な話だ。

悪魔に無理矢理犯されるといふことならともかく。俺の気遣いを

無駄にしないでいただきたいね。

まあ、この年の女の子に、無私だの無償の愛だのなんて、まず無理だろうとは思うが。

「どうしたのですか？ 戦士イリナ、女性器の準備をしてください」「ひつく……。はっ、はい……」

おずおずとイリナは両手を股の間に持っていった。

ああ、なるほどね。このピッチリ戦闘服の股間のアレは、性交用の穴になるのか。小用を足すためのものなのかと思っていたが。

「どうしました、戦士イリナ」

そこまで手を持って行っておきながら、なかなか「くぱあ」としようとしていないイリナに声をかける。

聖なる心に満ちたミカエルさまは人の心など分からないのだ。俺は性なる心の持ち主なので、イリナの気持ちか理解できるがな。

「あ、あの……ミカエルさま、わたし、私……ひつく……」

「何を躊躇うのですか、戦士イリナ。人は罪を犯す前、羞恥などというものは持ち合わせていませんでした。そのときの心を、無私の心を、選ばれた貴女ならば取り戻すことが出来るはずです」

聖書に曰く、『女は実を取って食べ、ともにいた夫にも与えたので、夫も食べた。こうしてふたりの目は開かれ、自分たちが裸であることを知った。そこで彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちのための腰の覆いを作った』らしい。あ、萎えたわ。

サマエルさんにそそのかされて、食べちゃいけない実を食べる前は、男も女も全裸なのを気にもしていなかったんだよ。ということなのだろうか。俺は思うのだが、そんな感じで合ってるのかね。

というか、堕天使の中では唯一サマエルさんだけはリスペクト対象かもしれない。聖書の神話的には、サマエルさんがいなかったら衣服の概念が生まれなかったかもしれないってことだろ。メイド服も、ドレスもチャイナも巫女服も、ナースも、学校の制服も、あれもこれも全部サマエルさんのお陰……ホント、すごいな。恥じらいつてもものすらサマエルさんのお陰……ホント、すごいな。

「はい……。ミカエルさま……」

まあ、イリナには効いたので良しとしよう。神学やつてるヤツに知られたら叱られそうだが、悪魔的には知ったことではない。

両手の指を使って、イリナは戦闘服の股間にある開閉部分をゆっくりと開いていった。

「そこに、硬くなつた男性器を入れるのですか？」

「はい、そうです。あつ……」

イリナの視線が俺のモノを捉えている。うん、すまんな、聖書のこと思ひ浮かべたら、萎えちやつたんだ。

「戦士イリナ、男性器が柔らかくなつてしまったのですが、どうしたらよいでしょう？」

そう言うと、イリナは両手で顔を覆い、ぐじゅぐじゅと泣き出した。

お前の「くぱあ」見てたら萎えたわ、みたいなこと言われたらね……そりゃね。ミカエルはヒドイ天使だよ、まつたく。

両手で隠したその向こう側から、嗚咽を響かせる彼女の手を取つて、俺はそつと悪魔として囁くことにした。

そう、ちよつとだけミカエルさんは「お休み」なのだ。彼女の認識に、ささやく悪魔として入り込む。漫画とかでよくある、あれだ。ちよつと昔の声変りする前の微妙に女の子っぽかった頃の俺の声で、な。

(少しくらいねだつてもいいんじゃない?)

(な、に……だれ?)

(私は貴女。貴女の心)

(わたしの、こころ?)

(そう、貴女の心。貴女は今、どうして泣いているの?)

(それ、は……でも、これは……)

(私を見て、考えて、気にして。そう思っているのでしょうか?)

(ちがう! わたし、は……)

『私は』? ふふふ、いいじゃない。初めてなんだから、少しぐらい構ってほしいと思つてもおかしくない。違う?)

(違う、だつて、これは……天使の子を、奇跡の子の……)

(だからつて、貴女が泣くようなことはないでしょう? キスぐらい

ねだってみたら？ 抱きしめてもらうくらいなら、いいでしょう？
それはおかしいこと？」

(おかしく……ないのかな？ わたし……)

(ほら、言ってみましょうよ)

うむ、我ながら女っぽい話し方をするのは厳しいものがあるな。声的にはいけてたと思うのだが。

「あの……ミカエルさま……」

「なんでしよう、戦士イリナ」

「そ、の……キスして、くださいませんか？」

俺はイリナのその願いに、何の感情も籠らないような冷たい目を向けた——という認識を植え付けた。実際の俺は、なんだコイツ、結構カワイイなとか思っているのだが。

「口づけですね。それは、子供を作るために必要な行為ですか？」

牡の肉棒を雌の肉穴に挿入して、子宮に子種を叩き込めば出来る。キスもハグもしなくたって、ヤレば子供は出来る。お互いへの愛情など必要ないのだ。

「……いえ、必要、ありません」

「戦士イリナ、私情に流されてはいけません。無私の心で、広く遍く人々への愛をもって子を成さねばなりません。なによりも主への無償の愛を常に心の中心に置くのです」

「は……」

涙を流しながら、イリナは酷く悲しそうに頷いた。俺はそんな彼女の目の前に、もう一度逸物を突き付ける。というか、ミカエルの振りって頭痛い……もう二度とやらんぞ。

「柔らかくなってしまうました。もう一度お願いします」

「……はい」

ひつくひつぐとしゃくりあげながら、彼女は俺のモノを手で扱いた。その取扱いは先ほどよりも、少々雑だ。

うーん、この泣き顔を、とろつとろにするのが今から楽しみだな。

「硬くなりましたね。それでは、戦士イリナのここに、この硬くなった男性器を挿し込めばよいのですね？」

「はい……あつ、待って、待ってくださいミカエルさま！」
「どうしたのですか？」

イリナちゃん、濡れてないな。うん、止めてくれなかったらこのまま挿入する流れなのかとヒヤヒヤしてしまった。

おかしいな、こうもつとハードに攻め立てて、ヒギイイツ！とか言わせる予定だったんだが……なんか普通に優しくしてやろうって気になっているような。

『おぐお………！うっ、ぐえあ、あつ、んうん、あは♡うんん♡』

いや、よしこいつ等は俺を殺そうとした教会女どもだ、あのゼノヴィアの姿を見れば、俺の悪魔がそそり立つ。

ふふん、甚振ってヤル。甚振り抜いてヤル。

「じよ、女性器も、その……準備しない、と……ダメなんです」

「そうなのですか。では、その準備をお願いします」

「……はい」

イリナは再び開いた服の小用穴に指を入れ、自らの秘部を刺激し始めた。しかし、その指の動きはなんとも拙い。

ふむ、もしかして自慰の経験が少ないのか？ 教義に忠実ならば、あるいはこれまで一度も無かった可能性もある。

「んっ……んんう……、ぐすっ……んんっ……はっ……、んんん、ひっく……」

なかなか上手くできないらしい。一応、オナニーの仕方の知識はあったようだが、これは時間がかかりそうだ。

かといって、ミカエルさまに扮している俺が手を出すわけにもいかんしなあ。まあ、見ている分には楽しめるが。

「ひっく……、ひっく……ぐすっ……」

いや、泣くなよ。あつちのゼノヴィアみたいに「野郎絶対ぶっ殺してやる！でも、悔しい……感じちゃう」みたいな顔をしていたらいいものを。

あー……くそ、焦れたいなこの女。自分で仕向けておいてなんだが、イライラする。もうグレモリー魔力でもなんでも使ってドロドロ

にしてみたい。

でも、手間かけておいてそれじゃあ、ここまで何だったのかという話だ。

「あ、ああ……ミカエルさま……また……」

イリナが片手で自身を慰めながら、ちよつと萎えかけた俺のモノに手を伸ばして来た。

すすり泣きながら、自分の割れ目と、男の肉槍をいじる女。ふむ、案外興奮しないものだ。これが、あれだ、もうちよつとこう、高慢ちな感じの女がやっているとそそのるのだが。

「戦士イリナ、準備はできましたか？」

まあ、魔力を併用すればこれぐらいでなんとかなるか？　ちよつと濡れ方が足りないような気がするが、いや、だいぶ足りないな。濡れていないところにメリメリメリって、なかなかなあ……。大洪水にしてからが、好みなんだが、これも一つの経験か。

「……はい」

たぶん足りていないが、この雰囲気これ以上は無理だろうな。天使どもは、本番するときにはローションにでも頼っているのだろうか。聖なるローション……聖水で作るのかね。

「では、この硬くなった男性器を、貴女の女性器のこの穴に入れるのですね？」

「……はい」

長椅子ベンチの上で、両脚を広げるイリナ。その開かれた脚の間に腰を進め、ズイと挿入する。

「なかなか、難しいものですね」

「……申し訳ありません」

キツイな。処女の上に、濡れ方が足りず、さらに身体がガチガチに強張っている。

力づくなら押し込めるが、さて……どうしたものか。

「狭くてなかなか入っていきませんね」

「いっ……はい、すいません。うっ、いっ」

うん、イリナの返事がブツ切りだ。ムードも何もないな、これ。

やっぱ、愛撫から入らんと無理でしょ。

滅茶苦茶痛そうにしているし。いや、俺は悪魔だ。ここは、一気に押し込む。教会女に妙な優しきなど必要ない！

「いっきいいい!!」

おお、キツツいな……。だが、奥まで入れてやった。

「戦士イリナ。男性器を入れましたが、ここからどうすれば良いのでしょうか?」

「すっん……ひっ、うっ、ひっぐ……、ぐすっ……」

「戦士イリナ。泣いていては分かりません。この後どうするのか教えてください」

あー、面倒くさい。教会女が敬愛しているだろう天使に化けてやれば、あっさりアンアンするかと思っただが、全然ダメ。さっぱりダメ。「もう、やだあああ——!! いやああ——、やだよ、もう、いやああああ!!」

がんばり泣きし始めてしまった。よし、もうミカエルのフリするのやめ。

前戯にもならん。やっぱ、自分が主導権握って弄りまわしてなんぼだな。もしくは、もっとこう積極的な女に任せるかだ。

でも、ついでだからトドメを刺しておこう。ああ、頭の痛くなる聖書の一節を思い浮かべて……。

「ぐっ……戦士イリナ。柔らかくなってしまいました」

この一言で、手のひらではなく両腕で自分の頭を抱え込むようにして、イリナは大泣きし始めた。

これで、よし! そして、ここまでの部分は、夢だったことにしてしまおう。

はい、精神操作。イリナの認識を切り替えます。

「あ、れ……私……?」

状況を把握できていないイリナを覗き込む。もちろん、彼女に見えるのは本来の俺の姿だ。紅の髪に、紫の瞳、人間基準で十分に美形の部類に入る、イケメン美少年のリヴラクスくんよ。セラフオルー

さん曰く、声もイケボらしい。あの人の好みってだけかもしれないが、父上と似ているのがイイってき……ちよつと嫉妬を覚える。

さて、ここからはガンガン攻めて墮としていくとしよう。なに、我が「おせっせ先生」リュイの言うところによると、いわゆる淫魔連中、インキュバスだのサクキュバスだのは我々純血の上級悪魔の低位種族に過ぎないらしい。俺が普段相手にしている純血のお嬢さんご婦人方は、旧魔王や最古参の番外悪魔などの別格を除けば、淫魔の最上位種でもあるのだ。

俺は、その位階の悪魔すら墮とせるエロ悪魔のグレモリーだ。耐性の低い人間如きどうとでもなるはず。

「ようやく起きたか」

長椅子の上でイリナの頭を膝に乗せ、膝枕の態勢で声をかける。

「え……？」

「まさか、口づけ一つで気絶するとはな……。しかも、眠りながら泣き出す始末」

「ゆ、め……？ あれは……夢？」

「何か怖い夢でも見たのか？ まあ、これから悪魔に犯されると思いながら眠ったんだ、無理もないのかもしれないが」

ぼんやりとこちらを見上げるイリナを起こし、椅子並んで座った状態にする。そこからぎゅつと抱きしめてみるが、ほとんど抵抗がない。

片手で腰を抱えて抑え、もう一方の手で髪や頬、首筋をそつと撫でていくが、ポーつとした表情になっている。

「どうした？ 俺は悪魔だぞ？ もう少し抵抗してみせたらどうだ？」

お仲間のゼノヴィアのことを思い出させると面倒になりそうなので、認識をいじつてあるが、それにしても、ふむ？

「あつ……、わた、しは……そう、だ。死にたくなかったら……、エクスカリバーとデュランダルのため……に」

「ふふ、そうか。それは覚えていたか。寝ている間に忘れてしまったのかと思っていたが、どうやらその心配はなかったようだ」

そういえばそんなことを言っただけで脅したんだって。

「ほら、もつとこっちへ来い」

イリナの後頭部に手を添え、グイと引き寄せる。

「あつ……んんうう。んっ、ちゅう、あつ、んっう」

何度か軽い口づけを繰り返すと、イリナはふわりと幸せそうな表情を浮かべた。

「どうした、気絶するほど嫌だったはずだろう？」

「あう……んっ、……なん、で……ああつ」

よしよし、こういう顔がいいんだよ。内心がどうだろうが、身体は正直ってヤツだ。

「ほら、口を開ける。聖剣がどうなってもいいの？」

「あつ……んんうう……んっ♡」

椅子の上に押し倒し、口内をたつぷりと味わう。グレモリーの魔力に頼ればすぐに見つけ出せるのだが、ここはじっくりと自力で弱いところを探してやるとしよう。

「んむ……あふう、ひゃん♡ ちゅ……んんう♡」

元々、吸血鬼との戦闘中だったこともあってか、イリナは汗をかいていた。その匂いがさらに強くなる。

「悪魔に無理矢理されているというのに、ずいぶん気持ちよさそうだな」

「んああ……、そんな、こと、ないもん……」

一度唇を離して問いかけると、返ってくるのは否定の言葉。だが、「そんな顔をしておいて、教会の女が嘘は良くないな」

もう一度、顔を近づけると、イリナは自分からこちらに顔の角度を合わせ唇を寄せてくる。

「んう……ううん……んっうふ、んふうん♡」

舌を絡めるのが好みなのか。どこかを弄り回されるより、そちらの方がイイらしい。

「あつはあ……、はあ……、あつ、んぐう♡ あつ……」

しばらくねちっこく絡めた後で俺が顔を上げると、少しだがイリナが追いかけるように顔を上げてきた。物欲しそうにピンクの舌を揺

らし、唇を半開きに誘ってくる口内へと唾を垂らすと、イリナはそれを避けようともせず飲み込んだ。

自分のしたことが信じられないのか、紅く染まった顔に戸惑いを広げる彼女の耳元にささやく。

「キスが好きなのか？ 積極的だったな」

「あん……ちがうもん、ちがうの……これは、その……」

そろそろ他のところに手を回してもいいだろう。

「そうだな。俺に逆らうと、どうされるか分からないからだな」

「そ、そうよ。そうじゃなかったら、悪魔になんて……んんうう♡」

ふと彼女の姿に改めて注目すると、どういうことだか腹が丸見え。ヘソをいじって欲しいと言っているようなものだ。

「ところで、この教会の用意した戦闘用の服は、どうしてヘソ出しなんだ？」

「やだあ、そんなトコ、いじらないでえ……」

女の腹は大事だろう。そうでなくても、腹部は肋骨もないし、人体の部位としては大きい上に動きが遅い場所だ。戦いのための服というのなら、普通は覆っておくものではないのだろうか。

「え、どうなんだ？ こんなに露出して、俺のような男を誘っているんじゃないのか？」

「違うもん、そんなんじゃないもん。あつ、ンンん、やめてよう。お腹痛くなっちゃうから、やめ」

この女、淫乱の素質があるな。マゾかもしれんが、いやもしかして両方か？

初めてヘソをほじくられただろうに、それで悶えるとは。開発してやりたくなる。

人間だから、この場限りが無難だな。

「戦闘用の服で腹をさらけ出す奴がいるものか！ 動物でも腹を見せるのは降伏の証だろうに、それをこの淫乱女が！」

「やだあ、やめ、やめてえ……おへソ、いじめないでよう」

「ほら、認める。え？ 男を誘うために、そうやって肌を晒しているんだらう？」

実際、コイツの仲間のゼノヴィアと比べると、肩も脇も出しているし、それにどうも洒落っ気も強いように思える。

ふん、ようは色気づいているわけだ。この教会女は。

「違うもん……違うもん……」

「そうか……お前は結構手入れしているだろう？ 髪も綺麗なものだ。それにここも、ちゃんとしているな」

「やだっ！ 脇なんか……ああっんう♡」

「お前、相当だな。ほら、どうだ……」

ちよつと撫でただけでピクンとしたので、舐め上げてやったらどうかと思ったのだが、

「ふうう……んううあ、ああ♡ やだ、そんなとこ、汚いよ」

「ああ、『消滅』で処理してやったから、むしろ綺麗になったぞ」

「え？ なによこれえ……つるつる！」

悪魔はそもそも本人が望まないものは生えてこないのだが、人間は大変だな。

「ほら、ここでも感じてしまえ。この淫乱マゾ女」

「ああっ、やだあ、やああ♡」

「ここも弱いのか、とんだ教会の戦士さまだ。悪魔に脇の下舐められてよがるなんてな」

おつと、泣きそうになっているな。まあ、さつきと違って半分くらいは気持ち良くてのようだが。

「いじめないでよ……、もうやだよ」

「悪かったな……だが、俺は悪魔なんだ。お前ら教会の連中をいじめるのは当然だろう？ 違うか？」

「そう、だけど……。ひーん……、あつ、やだ、おっぱいさわったら……んんう♡」

全部弱いじゃないか！ なんだコイツ。どこでも気持ちいいのか。「このザコ女がツ！ 弱すぎて滅茶苦茶にする気も失せるわ。ほら、もういいから、ここでも飛んでしまえ。服の上からでも分かるぐらい尖らせやがって」

「つねっちや、つねっちや、やだあ……ああんっ♡」

張り合いがなさすぎる。教会の女ってみんなこうなの？ デイオドラはザコ専なのか？ いや、こういう即落ち2コマみたいなのも、それはそれでいいのかもしれないが。

ふむ、しかしこう、この服越しの感触はなかなかだな。生乳も良いが、この何とも言えない感触。

「もまないでえ……んうっ……んう……あつん♡ やだ、あつ♡」
「感じてるって認めたらやめてやる。その顔を見ればまるわかりだな」

デレッツデレじゃないかコイツの表情。まあ、あれか、もつと反抗的だったら俺もそれなり痛めつけていただろうし、ある意味防衛能力が高いのか。

ぐぬぐにぐにぐに、ぎゅつと。こうも反応がいいと、普通にやってしまう。

「あつあ、あつ、かんじて、ないもん。かんじて、あつ♡ なんかな、ないもん……ひいん♡」

「言わないってことは、もつと揉みしだいて欲しいってことだな。ほら、どうだ。気持ちいいんだろう？」

「ああ、やだ……わたし、なん、でえ……ああつ、きもち、イイ……キモチイイから、あやあん♡ だから、言ったからあ……」

「感じているって認めるんだな？ 悪魔に無理矢理にされて、それで気持ちよくなっている淫乱なマゾ女だって認めるんだな？」

「違うもん……、わたし、インランなんかじゃ、ああつ♡ やめて、くれるって、あつ、ひう♡」

「ほら、認める。自分はマゾですって言え。淫乱だと宣言しろ。このクソザコが！」

と怒鳴った後で、攻め手を緩めて抱きしめてみる。最初のように何度か唇をついばんで、耳に息を吹きかけるとゾゾゾと女の身体に震えが奔ったのが分かった。

気持ち悪くてではない。だらんと、弛緩してこちらに身を任せるような感じになっている。

「どうだ？ 認める気になったか？」

「んっ……あっ……ちがうもん……わたし、あくまのことなんて、すきじゃないもん」

「そうか？ 俺はお前のことが好きだぞ」

「あっ、えっ!? んあんあ、んんう………んんんう、んちゅ」

さつき欲しがっていた、どっぷりと絡めるキスをくれてやる。お、いい感じだ。

さつきよりもぎこちなさがない。

「んんう……んっ、んう……んっ、じゅる、んくう……んはあ、あっ……んん♡」

ふふ、イリナの方から腕を回してくるか。よしよし、このとろーんとした目がいいんだよ。

しばらく、付き合っつてやるか。こうギューツと抱き合う感じで。……。

どうだろうか、二十分くらいはそうしていただろうか。

脱力しきったイリナを見下ろし、もう一度問いかける。

「認める気になったか？」

「マゾじゃ、ないもん……。ちがうもん……。わた、わたし……淫乱じゃ……」

「そうか、認めないなら、そろそろこっちに聞いてやるしかないな」

「あっ……あああ」

「よくもまあ、教会はこんないやらしい服を作るものだ。セックスのための穴を用意しておくとはな」

両脚を広げさせ、戦闘服の股間部分の割れ目をパクリと開いてやる。

「ちがっ、それは……」

「違うのか？ なら、これは何に使うんだ？」

「だから、その……」

「そうだろうな、やはりこういうことをするためにしているんだな」
いきりたった肉棒を、グイと入口に突きつけ。怯えと期待の混じった表情に満足してから、陰唇を肉棒の先でつくくようにする。

同時に、人差し指の腹でくるくる掠めるようにクリに触れて、鳴か

す。

「ああああっ、そこ、だめえ♡ ソレ、さわったら、いやああ♡」

「何がいやあだ！ 腰振って悦んでるじゃないか！ ええッ！ このクソザコ淫乱マゾ女！」

「ちがっ、あっうイイ♡ 気持ちいいッ♡」

「イイならイイって、もつとハッキリ言え！」

「イイっ♡ イイッ♡ イイうん♡ ンンウウイイイッ♡♡♡
っ!!」

ビクビクと痙攣し、イリナがトンだ。

「あっ、はあ、あっ、はっ、あっ……んふっ、んんう……」

「あーあ、悪魔に嬲られていったな。教会の戦士が、悪魔に弄り回されて気持ちよくなって、イイ、イイ叫びながら派手にいったな」

イリナの両脚を持ち上げ、ぐつと背を丸めさせ、下半身を見えるようにしてやる。訓練の賜物なのか、身体が柔らかいようだ。

「ほら、しっかりと見ろ。ぐちゃぐちゃだぞ、お前のマンコ」

「ああ、やだあ……」

だらだらとよだれを垂らす自分の股座を見て、イリナの眉がきゆうと寄る。

「お前は淫乱マゾ女なんだよ。しかも、クソみたいに快樂に弱いザコだ」

「ちがう、もん……。わた、ひ、ザコじゃない、もん。マゾでも、いん、らん、でもないもん……」

「じゃあなんでこんなになってるんだ!? 言ってみろ！」

「ちがう、もん……わたし、ちがうの……」

「こうやって強引にされたら、誰にでもマンコぐちゃぐちゃに濡らすんだろ!? 違うのか、この淫乱戦士！」

「ちがう、もん……だれにでも、じゃ、ないもん……」

イリナの脚を戻し、牝穴の中をかき混ぜてやる。優しく優しく、でも感じてしまうように、だ。

「ひんいい♡ あっ、そこ、だめえ♡ やあ……あっああ、んんあ♡」

「ほら見ろ、すぐに喘ぐじゃないか！ どうなんだ!? この淫乱マゾ

！」

「んんううう、んう♡んあつ、んんっ♡」

口をギョツと結んで声をこらえようとしながら、こらえきれずに漏らしてしまう。こういうのは好きだ。

ついでに、いやいやと首を左右に振りまくっているのも良い。

俺の手を防ごうと自分の股にやっている手が、何の役にも立たず、むしろこちらの手を上から押さえて、「もっと、もっと」とせがんでいるようにしか見えないのもイイ。

「それじゃあ、何か……、誰にでもこうなるワケじゃないのなら……これは、俺が相手だからってことなのか？」

淫液に濡れそぼった手を、イリナの目の前に付きつけ、耳元でそう囁く。

「あつ……、ああつ」

「どうなんだ？ どっちなんだ？ え!? 言ってみろ！ お前は淫乱マゾのクソザコ女なのか？ それとも、俺にこうされたら愛液だらだら垂れ流す女なのか、どっちなんだ？」

鼻の触れる距離でじつと瞳の奥を覗き込む。

イリナの瞳の中に俺の瞳が映る。その紫の中心に、龍の眼光がギリと輝いていた。

「あつ、ううっ……んんう♡」

イリナは答えを口にせず、代わりに俺の頭を抱え込むと唇を合わせてきた。

それに応えて抱き返すと、嬉しそうに身をすりよせてくる。

「イリナ」

「あつ」

「舌を伸ばせ、出来るだけ長くだ」

「う、ん……」

口内ではなく、目に見える場所で舌を絡ませる。己の目で、自分が何を選んだのか分からせてやる。

「れる、れる、ジュ……、あう……じゅ、んんう♡」

唾液まみれになるのも構わず、必死に伸ばした舌を絡めてくる様子

に満足した俺は、ようやくカチカチになったモノを沈めることにした。沈めるのは、もちろんドロドロ口になったイリナの女の沼だ。

「俺に愛撫されると、ぐちゃぐちゃになってしまうイリナは……ここに、俺のを挿れて欲しいよな？」

「ふっ……んう……」

開かせた両脚の間、だらだらと挿入を待ちわびて愛液をわかせている場所に肉棒の頭を埋める。カリ首までの半分ほどを差し込んでやると、

「……うん」

こくりと頷いた。

「おっ、ズルつと入ったな」

やはりこれぐらいがいい。どろっどろにしてから入れるのが、一番だ。

「んんっ、んっ♡」

「痛くなかったようだな」

「あ、あの……あのね」

「ああ、分かってる。あれだろう？ 戦士の訓練が激しかったんだな。

それで破れていたんだろうな」

正常位の態勢で首筋に口づけながらそう言うといリナは、「はあっ……♡」と顔を蕩けさせた。

まあ、俺がさつき強引にぶち破って、大泣きさせたんだが……。嬉しがっているようだから、そのままにしておこう。

「んん、ふっ……その……うぐ、かないの？」

「もう少しこのままにしている。分かるか？ イリナの中が俺に絡みついてきているのが」

「ああっ、やだあ、そんなこと言わないで……」

「まず、俺の形を覚えろ。それから動いてやる」

やはり相性は同じ種族の純血悪魔の方が断然いいな。というか、人間とは身体の造りからして違うのだから当たり前だが。魔力で変化するって、やっぱりすごかったんだなということがよく分かる。

だけど、まあ、人間もなかなか悪くない。鍛えているからか、締ま

りもそこそこある。

「はあ……」

しばらく時間を置いて、イリナの中が俺のモノを啜え込んだ状態に慣れて来たようなので、

「そろそろいいか？」

「……うん」

「それで、どうして欲しい？ 俺は悪魔だから、一応願いを聞いてやってもいいぞ？ 対価はお前自身の身体になるがな」

「どう、って……？」

「激しくして欲しいのか、それとも上手くヤツて欲しいのか、優しくして欲しいのか。教会の戦士は、どんな風に悪魔に犯されたいんだ？」

そう言うのと、イリナは俺の肩に顔を埋めてきた。

「いじめないで……、そんなの、わかんないもん」

「そうか。それなら、激しくしてやろう。教会の女が、悪魔に優しくされたら困るものな？」

巻き付いてきていた肉襷をズルズルと傘で引つ掻きながら、抜ける寸前まで腰を引く。

「ほら、いくぞー！」

「んああああっ♡」

ドスンと音を立てるようなつもりで突き込んで、すぐに引く、それを繰り返しながら、ピストンのギアをどんどんと上げてやる。

「ああああんっ♡ イイツ、あっ、イイツ♡」

「イリナ！ 俺だからイイらしいから、淫乱は取り消してやるが、マゾはそのままで」

「あっイイツ、ちが、ちがうもん、あああっ♡ イイン♡」

「処女が、こんな風にされて、イイ、イイ言いやがって、悪魔に犯されるのがたまらない、マゾ女なのは確定だな！」

強く腰を振ってやると、イリナはすぐによがり始めた。

歓喜の表情で身体をくねらせ、俺の逸物を啜え込んで締め上げてくる。

「ちっが、ああっ、あああっ、イイツ、ひん♡」

「さつさと認めろ、自分はマゾだと叫べー！」

情欲に身悶えするイリナの目には、女の悦びの火が灯っていて、上げる声は痛みがあるはずなのに甘く媚びたものだ。

「ああっ、あああっ、やあ、おくう……♡ そんな、な、たたかないでえ♡」

「痛いのが好きなんだろう！ こつちよりも！」

「イイツ、イツ、あい♡ はあんっ、気持ちイイい♡」

浅いところのザリザリをゴシゴシとこすり上げてやると、これはこれだけでよく鳴く。

両脚を掴んでぐつと体勢を倒して押し掛かる。

「ほら、どうなんだ、ほら、もつとして欲しいだろ！ まだ何も慣らししていない、痛いだけの奥に叩きつけられたいんじゃないのか!？」

痛みと同時に、快楽を感じる。そんな認識にしておいたのだが、まあ、もしかしたら必要なかったのかもしれない。

そうやって何度も叩きつけていると、陥落顔になったイリナはようやく認めた。

「もう、マゾで、いいもん。わたひ、マゾおんなでいいもん。悪魔に、されて、きもちよく、んうう♡ なつちやう、マゾだもん……ああっ、イイよお♡」

バチンバチンと叩きつけ、痛めつける。

「どうして欲しいのか言ってみろ、マゾのイリナ！」

「ああっ、深い、ふかい、奥に、いっぱい、ああっ♡ んイイツ♡」

「これがイイんだな？ こうやって、入り口を叩かれるのが好きなんだな!？」

「好き、これ好き♡ もっと、もつとしてえ♡」

「なら、そろそろイケ！ イクって言いながらイケ！」

ガンガンガンと子宮の扉を激しくノックしてやる。天使のところの女だ。堕ちたら堕天使みたいなものだろう。だから、こうしてやるのがイイ。

「イクっ……ああっ、イつちやう、わたし、あくまに、犯されて、感じて、イつちやうよお♡」

「中に出してやる！ マゾのイリナは嬉しいよな!？」

「ああっダメえ♡ イクう、ダメなのにい……、出されていつちや……、ああっ、んんんっイクっ、イリナ、あっ、イクううううう♡♡♡!!」

……………。

長椅子に上体を預けさせ、尻を突き出させたイリナの膣内をバツクから犯す。

「ああっ、やめてよう♡ 叩かないでえ♡」

「尻を叩かれて、腰を振りまくってる女が、何を言ってる！ ほら、叩かれて嬉しいんだろぅが、ほら！ ほら！ ほら！」

尻を叩くのは、慣れた。『戦車』入りではないので、最初は加減が難しかったが、弱めから初めて、ぐっと締め付けてくるところまで上げて行くだけだと気づけば、後は簡単なものだ。

「ああっ♡ んういイイ♡ おしり、叩かれて、イイのお♡ わたひ、マゾに、マゾにされちゃった……ひん♡」

「されちゃった、じゃないだろうが！ 元からお前はそうだったんだよ！ この、クソザコ、マゾ女、俺に尻を叩かれるのが嬉しいか！」「うれひ、イイん♡ あっ、ちがう、もん……。わ、たし、ザコじゃ、ないもん……んああ♡」

ああっ、くっ、叩く度に締め付けてくる。

「出すぞ、また注いでやる！」

「ああっん♡ 出して、あっ、もつと、あああっ、んああイクっん、いつちやあああ♡♡♡!!」

結わえた二つの髪の毛尻尾を振り乱し、イリナは俺のモノに夢中になっている。

尻を叩けば嬌声を上げ、脇をくすぐれば涎を垂らす。

撫でてでも反応し、キスをせがんで、甘噛みによがって、ピストンの一突きごとに背をそらして腰を振りたくる。

「あく、ま……あくまに、あっ♡♡ イイ♡ あっ、また、またイク、

「いつちやう……♡♡♡」

「何回でもイケ！ このマゾ奴隷女！」

「あああつ♡♡ イクつ、イイイの、悪魔イイよお♡ イクううう
ううう♡♡♡!!」

ん、こんなものかな。たぶん半墮ちってところだろう。疲れたのか、軟体動物のようになった身体を俺に預けてデロデロになっているイリナを見て思う。

もう二、三発注ぎ込んで、それからあつちのゼノヴィアかな……割とイリナで満足してしまったんだが。

ゼノヴィアは、あのまま触手の餌にしっぱなしでもいいのかもしれない。もう『譲渡』の効果は切れているのに、仲良くやってるように見えなくてもないからな……。あの攻めは、人間の形をしている者には無理だからなあ……。

あ、いや。

見た目はどうみても悍ましい怪物でしかない触手にやられている仲間の姿。そいつをイリナに見せてやるのもアリか。

認識できるようにするだけのことだし。

「いつまで呆けている気だ。おい、イリナ」

「キス、して……」

こいつ、ほんとにキスが好きだな。接吻大好き女か。

『ソレ』は冥界の森の中で生まれた。ソレには種としてのハッキリとした名はなく、それを嘆くほどの知性もない。

ソレは、樹木の影に潜み獲物を待つ捕食者である。よく衣服を溶かすスライムと共生関係にあるなどと言われるが、その共生が成り立つのはスライムの主たるエサが排泄物であるのに対して、ソレの好むエサが女性の分泌物であることの影響が大きい。

なぜ女性限定なのか、男性の分泌物ではだめなのか、その理由は『ファンタジー夢幻』生物であることが原因だろう。人間たちの妄想という名の、ある種の信仰、そんなものから『ソレ』ら——触手と呼ばれることが多い——は生まれてきたのだろうから。

『ソレ』中にある第一のモノは、己が主の命令に忠実であることだ。そしてその次にあるモノが、食欲である。

主の命令により、己が捕らえた獲物の『穴』の内、一か所への深い侵入を禁止された『ソレ』は、まず獲物体表のほとんどから摂取できるエサを喰らうことにした。

触手に巻き付かれ、自由を奪われたゼノヴィアは、気色悪い感触に眉をしかめた。

戦闘服の首回り、両腕、そして両の太ももの付け根、それらの部分から触手が服の内側へと侵入してきたのだ。既に素肌を露わにしている部分、頭皮、顔、首、太ももその全てにぬたくられた滑る粘液が服の内側のあらゆる箇所にも塗り付けられていく。

身体のラインを浮き彫りにする、ぴっちり張り付いた戦闘服の内側を触手が蠢くさまは、皮膚の内へと入り込んだ寄生生物のそれに似て見えてゼノヴィアの精神に怖気の波を掻き立てる。

幼い頃から聖剣デュランダルに選ばれた『神の剣』たるべくして育てられ、女らしさを磨く暇があれば剣の腕を磨いて来たゼノヴィアを

して痺ましく感じるのだ。アンデッドと化した元人間を斬ることさえ躊躇ってしまうイリナがこんな目に遭わされなくて良かった。このときはまだそう考えるだけの余裕のような、強がりかゼノヴィアにあった。

(くっ……ああっ……、熱い、なんだこの熱さはッ！)

口は侵入を許してしまった触手によって塞がれているため、ゼノヴィアの声はうめき声の形でしか外には漏れて行かない。

「んんっ……んんんう……んんう、ふっう」

口を塞がれているため自然と鼻の呼吸が荒くなる。

(ああっ……肌が焼けるようだ！)

全身にぬたくられた粘液が発火でもしたのか。そう思えてしまうような熱が、ゼノヴィアの表面を焙る。

プチプチプチと音が身体中から聞こえるような気がした。それと同時に襲ってくるのは、何かを放出する感覚。

(汗が……)

どつとゼノヴィアの身体のいたるところから、猛烈な勢いで汗が噴き出した。

(何が、特殊な効果は無いだ！ 悪魔めッ！)

媚薬のような効果は無い。悪魔はそう言っていた気もするが、今ゼノヴィアの身体を襲っているそれは、触手の塗り付けた粘液に含まれる発汗を促す作用によるものだ。

サウナに入っただけで急激に身体を熱すると、汗が一気に噴き出して僅かな痛みを覚えることがある。ゼノヴィアが今感じているのは、それを強烈にして全身で受けているようなもの。

「んんんっ……んんうひやめ……」

触手が動きを速め、ゼノヴィア身体のあちらこちらを無遠慮に這いまわる。

汗を吸っているのだ。今やゼノヴィアは触手の主食の一つである、女性の流す汗を舐めとられる料理となっていた。バケモノの餌食だ。

(くすぐりたい……ああ、おうっ)

急速な水分の減少に反応して、口が、喉が、身体の内側が、水分の

補給を訴える。

それを待つていたかのように、口内に侵入し居座つていた触手が蠢きだした。

じわりとそれは、口の中に広がってきた。弱い酸味と、濃厚な旨味。触手が口の中に流し込んできた汁が、ゼノヴィアの味覚を刺激し、唾液の分泌を促す。

暴力的なまでのそれは味覚を強く刺激して、否応なくゼノヴィアに涎を垂れ流させる。そうして分泌させた女の唾を、触手は飲み干していった。

汗と唾液。その二つの方法で絞り取られて乾いた喉に向かって口内の触手の先端から汁が迸る。

「んん、んんくつ、んんくつ、んんくつ……」

得体のしれない液体を、嚥下させられる。そうすると、胃の中が熱くなってきた。ゼノヴィアはまだその味を知らないが、それは度数の高い酒を飲み干したようにして、胃の中をカツと燃え立たせる。

ぐらり、とゼノヴィアの頭部が揺れた。血の流れにそつて、彼女の体内を触手の注いだ成分が駆け巡る。

外から粘液によつて焼かれ、内側からもアルコールのそれにも似た成分によつて酔わされる。

なにか、会話をしたような気がする。そう、ミカエルさまに扮した悪魔の邪悪な芝居と、何かしらの術の影響でそれを信じてしまつていくイリナに……何かを、言つたような……。

グラつく意識と弛緩した筋肉。そんな状況の中で、いつの間にかゼノヴィアは身体を這いまわる触手の感触を心地よく感じ始めていた。(ああっ……ううっ……ふうう……)

そうやつてぼんやりとし始めていたゼノヴィアの意識は、突如受けた刺激によつて一気に目覚めた。

尻の穴をまさぐられている。肛門のきゅつとすばまつた菊の花びらの一枚一枚をもみほぐされている。

(なん、なんだ……なにを……っ！)

ゼノヴィアは、聖剣の担い手となるべく教会の中で育てられてきた

娘だ。触手のその動きが、一体なにを意味するのか見当もつかなかった。

ただ、今まで感じたことのない刺激にピクピクと尻を揺らしてしま
うだけ。そして……。

(んう……んあっ♡)

肛門をもみほぐされ、未知の感覚に戸惑うゼノヴィアに対して、触
手は余裕を与えなかった。

彼女の目の前に見せつけるようにして、これまでとは違った形状の
触手を掲げて見せる。それは単に顔を狙っただけの動きだったのだ
が、ゼノヴィアの目はその触手に備えられた器官をまざまざと見てし
まった。

細い、細い、細い、人の髪の毛よりもずっと細い、毛の生えそろつ
たブラシ。簡単に表現するとしたら、そんな言い方になるだろう。

それがゼノヴィアの頬に当てられた。

(ひっう……んあっ♡)

発汗と共に開いた、皮膚表面の小さな穴。それに触手ブラシの細毛
がスツと入り込んでくる。そして穴の内側から、脂をこそげだし喰
らっていくのだ。

『ソレ』にとつては捕食行動の一つでしかないその行為は、しかしゼノ
ヴィアに快楽を与えた。飲まされた触手汗が胃から吸収され血液に
乗って流れ、ゼノヴィアの身体をこんなことでも官能を感じるように
してしまったのだ。

捕らえた獲物から抵抗力を奪うための媚毒液。目標の身体から
様々な形で体液を奪い取り、その代わりに発情を促す毒液を口内に押
し込んだ触手から供給する。失われた水分が渴きを呼び、女の身体が
水分を欲するところに美味しい毒の汁を与えてより深みへと墮として
いく悍ましい体液交換装置。それがゼノヴィアが口に含まされてい
る触手の役割だった。

(んんっ……んくっ、はあああ……んあっ♡)

止むことのない汗を舐めとる舌触手の動き、のたうつそれに続いて
やってくるブラシ触手による全身毛穴蹂躪。胃に流し込まれる媚毒

液によって血液すら犯されて――。

(ああっ!?! なん、なにを……くあああ、んあっ……んおっ♡ ……はっ♡ ……ふあん♡)

ついにはアナルをもみほぐしていた触手が、侵入を始めた。

その触手にはコブがある。ボコボコと生えたそれがゼノヴィアの肛肉をぐつと押し開いたたびに、これまでに感じたことのない感覚が襲ってくる。すぐ、すぐ、とコブによって大きく開き、少し窄まり、また大きく開かされと繰り返される。

一体いつまで続くのかと思えたその腸内侵入が終わったとき、ゼノヴィアの内には驚くほど長いコブ触手が入り込んでしまっていた。

苦しい、それなのに……腸の中でボコボコとした触手がのたうち始める、それに合わせるかのようにゼノヴィアの鼻から淫靡な吐息が漏れ始める。

「んっ、んーふう、んんあ♡ んー、んっふう、んひ、んあっ♡」

コブ触手はただただ入って来るだけではなかった。抜けきらないように一定の長さを腸内に残したまま、今度は引き始めたのだ。ぼこり、ぼこり、ぼこり、ぼこり、コブが肛肉を内側から押し広げて出て行くとびに、奇妙な快感を味わった。それは排便のものと似ていて、そんなもので悦楽を覚えさせられてしまう事実がゼノヴィアの精神にすらヤスリをかけてくる。

(ああ……、なんだ……、尻で、尻の穴なんかで……)

苦痛は無く、快媚感だけが背骨を伝って脳髓を振るわせる。

身体中に駆け巡る官能の波。それを散らしたいのに、あるいは耐えるために何かにすがりたいのに、ゼノヴィアの手は何も掴ませてもらえない。

『ソレ』にとつて、ゼノヴィアは自身の触手によって宙に吊り上げられ、四肢の自由を奪われた獲物でしかない女。その心情などなら汲み取ることはない。いや、それを考慮する知能すらない。これは食事なのだ。生かしたまま喰らう、踊り食いだ。

「おぐお………うっ、ぐえあ、あっ、んううん、あは♡
うんん♡」

腸の中を貪られている。それが分かっちゃいませう。腸内粘膜がコブによつて刺激され、分泌される腸液を吸われているのだ。

どこまでも、どこまでも、『ソレ』はゼノヴィアを貪り喰らう。色欲ではなく、食欲によつて。

それが分かっちゃいませう。分かっちゃいませうのに……そんなものに女としての反応を引き出されてしまっている。

体表を撫でまわす触手に汗と皮脂を喰われてよがり泣き、排便に似た感覚に快感を覚えさせられて翻弄されながら、腸の中の汁までも啜られる。口の中は気味の悪い見た目の触手をほお張らされ、しかしその触手の出す味に惑わされて舌を這わせてしまふ、そうして湧き出てくる唾液を飲み干され、代わりに口内触手の先端から放たれるトロミのある汁を胃へと送り込まれてしまふ。

ゼノヴィアの心にヒビが入り始めていた。これなら、こんな……。襲い来る快感にもはや耐えることは不可能だった。身体が勝手に動いてしまふ。頭の中がぼんやりとして、考えることすら辛くなつてくる。

そんな状況で、ゼノヴィアの目はイリナを探した。助けを求めてなのか、あるいは悪魔という己を蹂躪するこれよりもなお邪悪な存在に犯されているだろう同胞を見ておきたかったのか……。

「柔らかくなつてしまいました」

「ひつつく……、ぐすつ……、ひつ、うつ……、ぐすつ……」

イリナが泣いていた。泣きながら、ミカエルさまに扮した悪魔によつて、自分で自分の秘所をまさぐらされている。

(あの悪魔ツ！ 殺してやる！ ……んああななああつ♡)

怒りが一時的に思考を取り戻させるが、突如襲つて来た強烈な快感によつてそれも消し飛ばされてしまふ。

主への敵意を感知した触手が、ゼノヴィアのクリトリスを攻め始めたのだ。牝の芯ともいえるその場所は、穴の開いた触手に飲み込まれていた。極小の粒とにじみ出る潤滑粘液に満ちたその小さな穴あき触手は、女のクリトリスを攻めるための小さなオナホールだ。

それがパクリとゼノヴィアの尖りを飲み込み、くいくいくいくいと

動かされる。

(ああっ！ あああっ♡♡ あうっあああああうあ、あっあっ♡ あああっあ、ういあんんう♡♡!!)

それまでの官能の比ではない猛烈な刺激、一気にゼノヴィアは絶頂へと導かれ、全身を痙攣させる。そうしてなお、触手はその攻めを緩めようとしめない。

(やめっ、やめああ、あああっ、ひひひいインン、んああああ♡♡) 脳が沸騰する。激しい快樂電流が頭の中を駆け巡り、スパークして、目の前が何度も何度も真っ白に染まる。

ゼノヴィアは才能ある戦士だ。デュランダルという強大な聖剣に選ばれた、生まれつきの『神の剣』。幼いころから訓練に明け暮れ、凄惨な修羅場を幾度も潜り抜けてきた。

それでも、まだ、年相応の少女でしかなかった。少なくとも、教会はこのような存在への対処を教えてください手はいなかった。

(ゆ、ゆるひ、許してくれ……！ ゆるひれえ……、ゆるして、ください)

一瞬にも永遠にも思えるその責め苦に遭わされ、ゼノヴィアは心の中で何度も許しを請うた。ロクな知能もないはずの、悪魔や墮天使の住処である冥界の最下級の魔物に、教会のエリート戦士だったはずの少女が屈服させられたのだ。

(やめてくれ、もう、ゆるして……)

心の中でどれだけ謝ったところで、許しを願ったところで、『ソレ』には届かない。『ソレ』はただ、状況に合わせてゼノヴィアを捕食しているだけなのだ。

クリトリスへの猛烈な刺激によって、ゼノヴィアの秘所は泡を吹きながら蜜を垂れ流し始めていた。もだえ苦しむ少女のことなど気にもせず、『ソレ』はその分泌物へと新たな触手を伸ばす。

イソギンチャクのような無数のウネウネの付いた触手が、獲物の女の割れ目にあてがわれ、そこから噴出する淫蜜を吸い上げる。同時に、主によって禁じられた地点より手前までの膣内をほじくり返す。

(あああっ♡ んっいいいい♡ んあはああっ♡♡)

何度も何度も絶頂へと追い込まれ、思考など消し飛び、何も考えられなくさせられていく。ゼノヴィアは、ただただ貪られた。

……………。

どれほどの時間、それが行われていたのか。時間の感覚などなくなってしまうたゼノヴィアには分からない。

ただ、ある瞬間、突然、全ての触手の動きが止まった。

「んっはぁー、んっはぁー、んっはぁー……」

まずは息を整えることしか考えられなかった。やがてそれが落ちて着いてくると、周囲の状況が気になってくる。

涙や鼻水すら喰われて、見た目は綺麗なままに見える顔を動かし、ゼノヴィアはそれを見てしまった。

「ああつ、やだあ、やあああ♡」

「ひーん……、あつ、やだあ、だめえ♡ おっぱいさわったら……♡♡」

イリナと悪魔が、交わっていた。悪魔に犯されるイリナの様子は明らかな悦びに満ちていて、その顔に浮かぶのは幸福感。

抱き合い、唇を寄せ合い、舌を絡ませ合って、お互いに気持ちよく成ろうとしているようにしか見えない。うつとりと悪魔の少年を見上げるイリナの頬を、やさしく少年の手が撫でると、それに甘えるようにすり寄っていくイリナ。

「もまないでえ……んうっ……んう……あっん♡ やだ、あつ♡」

「ああつ、きもち、イイ。……キモチイイから、あやあん♡」

甘えと媚びに満ちた声色で、男に抱かれている女の姿。

二人はゼノヴィアのことなど気にも留めず、やがて抱き合い、抱きしめ合い、長い長い口づけを交わし始める。

(あ……うう……、なぜ、なぜ、だ……)

暴力的な、あまりにも暴力的で一方的な、食欲に突き動かされるだけの触手の行為。それによって惨めなエサとされている自分。

それなのに、どうしてイリナはあんな風に幸せそうな顔をしているのだろう。

情愛の悪魔グレモリー。その情欲と愛欲に蕩けさせられ、夢中になつて絡まり合う二人の姿を見ていると、何故だか分からないが先ほどのまでの激し過ぎる快樂電流によつて流していた物とは別の涙があふれてくる。

『ソレ』は別段、ゼノヴィアのことを思つて手を休めたわけではない。獲物が焼き切れた廃人になる寸前で控えたただけだ。

そして、獲物がつかの間の休息をとつている間にも、『ソレ』は次の食事の準備を進めていた。

ふと気が付くと、ゼノヴィアは一切の身動きが取れない状態にされていた。四肢を掴まれ吊り上げられていた状況でも、身体を揺らすくらしいのことはできたのだが、今はそれさえも不可能。

全身をぐるぐると巻かれ、ガチガチに固められてしまつている。触手に覆われていないのは、首から上と二つの乳房だけだ。

(なん、だ……、今度は、なにを……)

これまでと異なる態勢、状況。ゼノヴィアにはもう恐怖しかなかつた。また、なにかをされてしまうのだ。また、あんな快樂の地獄に墮とされるのだ……。

しゆるしゆると、それぞれの乳房に触手がらせん状に巻き付き搾り上げられる。戦闘服の内側で行われたそれによつて、ゼノヴィアの尖りきつた乳首がぐつと手前に押し出されて強調された。

「んっ、んうふっ、んうう、ふうっ……」

なんだ、なんだ、何をする気だ。

歯をがち合わせるかわりに、口内に押し込まれた触手を噛みしめて、震える呼吸を鼻から吐き出す。

先端に花の蕾のようなふくらみを備えた触手が二本。ゼノヴィアの乳房の前に並んだ。

(ひいッ……ッ！)

もはや戦士として培ってきたはずの何もかもを崩されてしまつているゼノヴィアは、開いていく蕾の中から現れたものに怯えを覚えるしかない。

それは『針』だった。花の蕾の中からスツと現れたのは真つすぐに伸びる透明な『針』。開いた花卉がゼノヴィアの胸を抑えて固定する。戦闘服の内側の巻き付いている触手も、それに合わせてさらに力を込めてくる。

ガツチリと固定された乳房。針はその先端の乳首の中心を狙って迫ってくる。

(うう、ああああっ……ッ！)

戦闘服を貫いて、チクリとした痛みと快楽がゼノヴィアの両の先端に奔った。そのままスルスルと針は乳房の内へと侵入すると、胸の付け根へと到達。そして、なにかしらの液体を注入しながらゆっくりと引き抜かれていく。

ジワジワと広がっていく奇妙な感覚。何かろくでもないものを注射されたことは分かる。しかし、その効果まではゼノヴィアには想像できなかった。

針が完全に抜けると、そのまま花卉が吸い付いてくる。戦闘服に張り付いたそれはぎゅっと乳首を掴まんで離さない。性感を狂わされたゼノヴィアは、それにすら悶えた。ゆるゆると解かれて行く拘束。また吊り下げられる形になると、乳房に巻き付いた螺旋の触手が、うねうねとうごめきはじめる。肉の丘の麓から頂へと、何かを絞り上げるようなその動きに、ゼノヴィアは鼻から短い吐息を繰り返す。

(んあっ、んんっ、んっあッ♡ んんい……なに、が……、なにかが、のぼって……)

戦闘服からジワリと染み出したそれを、花卉触手が吸い始めた。

(ま、まさか……ああっ、やめ、ああっ、くうん……♡)

『ソレ』は女の分泌物を喰らう生物。女の乳房から分泌されるものなど決まっている。

(子供、も、いない、のに……。まだ、わた、しは……)

処女のまま、服越しに母乳を吸い上げられる。それも、絞り出すようにして。

その屈辱感にゼノヴィアは身を震わせた。

そして、ゼノヴィアのそんな想いなど『ソレ』にとってはどうでも

よいことでもあった。

食欲に突き動かされた『ソレ』の行動が再開される。

汗を喰う触手がゼノヴィアの肌を舐め始める。唾液を啜る触手が、味覚を犯し、媚毒液で胃を埋め尽くそうとする。クリトリスを包む触手が微細な前後運動を再開し、女陰にとりついた触手があふれ出る淫蜜を飲み干しながら、入り口をさわさわとくすぐり上げる。

最後に、肛門を広げているコブ触手が、大きく動き始めた。腸内から、肉の薄壁越しにゼノヴィアの子宮をもみほぐし始めたのだ。

「んっうう……♡♡んあっんん……ぐうあうっいん♡♡!!」

耐えがたい快楽に悶え、何かにすがりたいと思っても触手に吊られたゼノヴィアの手は何も掴めない。

官能によじれる肢体を抱きしめて欲しくても、ゼノヴィアを捕まえているのは悍ましい触手だけ。

そんな中、ゼノヴィアの視線は悪魔に貫かれて嬌声を上げるイリナの姿を見ていた。

DX―2―4 DQ：十字架×危機（クロス×クライ
シス）

「ああっん♥♥ イつつちやうよ、またイつつちやうの♥ マゾ奴隷の
イリナ、またイつつちやう♥ イイよお、ごひゅじんさまのイイいん♥」
「おら、イケー！ 何回でもイケっ！ 悪魔に串刺しにされて、イっつてし
まえー！」

「あつつイっ！ イクっ、イキますっ♥♥ んんあい、イイいのおお
♥♥ すごいい……はあうふう、ああああああっ!!」

やり疲れたのかイリナが眠ってしまった。俺の肩に頭を預け、ふ
にやんと口元を緩めている彼女はとりあえず置いておいて、もう一人
に取りかかるとしよう。

亜空間から毛布を取り出し、イリナをそれに包んで床に寝かしてお
く。コイツの寝相は知らんが、もし悪かったりして椅子から落ちても
困るしな。

「おおお、んうう~~~~、ふうん♥」

おお、おお、いい感じにイカれてきているな。このゼノヴィアって、
デユランダル使い。

触手くんはいい仕事をした。あとでメスの分泌物であるところの
牛乳をたっぷりと飲ませてやるとしよう。汗をかいてダイエツトに、
黒ずんだ皮脂やらなにやらもスッキリサツパリで、いちご鼻もあつと
いう間に解決。そんな夢の使い魔な触手くんは、牛乳だけで仕えてく
れる大変リーズナブルな魔物なのだ。まあ、純血悪魔の女には、美容
効果ってあまり必要ないのだが。魔力ってほんと便利。

「うおお……、あつふ……けほっ……」

ゼノヴィアの前まで寄り、尻穴を犯しているもの以外の触手を退か
せるとぐたりとこちらに倒れ込んでくる。もう足腰立たなくされて
いるようだ。

倒れる前に抱き留めてやると、なんと、あちらからひっしとしがみ
付いてくるではないか。

これは、これは、本当に良い仕事してますねえ。完全にデキ上がってる状態じゃないか。

「もう、もう……許してくれ……。おああっ♡ むり、だ。もう……んうあっ♡」

「許す？ なにを許して欲しいんだ？」

抱き返しながら聞き返してやると、さらにぎゅっと抱き着いてきて「許して、許して」と繰り返す。

「んんっう……ああう♡ だが、ら……剣を、けんを、ふるったこと、を……」

そうそう、コイツが攻撃を仕掛けて来たから、その報復として殺しはしないが痛めつけてやるといった流れだった。処女だけは残してやる、そつちばかりが頭に残っていた。

まあ、ここまでできたら頂いてしまうのだが。

「そのままではロクに話もできないか」

合図して、尻穴を犯す触手も退かせる。

「はあー、はあー、はあー、はあー」

よほど触手の攻めがこたえたのか、全部の触手を取り払ってもゼノヴィアは俺に抱き着いたままだ。

むしろ、こちらが強めに抱きしめてやると、嬉しそうにするまである。イリナはキス好きだったが、こつちはハグ好きなのかね。

まあ、退けたと言ってもゼノヴィアの身体はこれまでの攻めで出来上がったままだし、体内に取り込んだ媚薬成分もたっぷり残っているのだろう。

「どうした？ 俺はまだ何も許していないというのに、そんな安心したような顔をして」

「あああ……、んんっううう……、また、アレを……するつもりなのか……っ？」

「お前は俺を殺そうとしたな？ その報復として死の代わりにくれてやっているものだ。辛いのは当たり前だろう？ 死ぬよりはマシじゃないか」

「やめて……もう、やめてください……。許してください……。アレを

続けられたら、壊れてしまう……おかしくなってしまう」

もう壊れているし、おかしくなっているんだけどな。

教会の戦士、それも聖剣デュランダルに選ばれたような女が、悪魔に抱き着いて懇願しているなんて——やはりドライブグ流の交渉術の威力は凄まじいものだ。

まずぶん殴る。その後に関手が生きていたら、話をしてやってもいい。

そんな感じのやり口だが、俺にはこれが向いているようだ。

ディオドラのように上手く口説き落としてから、絶望に突き落とし、悲嘆の涙と共に墮とすなんて真似は出来ないから。俺はまずは叩いて叩いて、踏みにじって、絶望に落としてから……救いの手を差し伸べるフリをして、それに幸せを覚えさせ、歓喜の涙と共に墮としてやるのだ。

「悪魔に何かを頼むのならば、対価が必要になる。それは知っているな？」

縫り付くゼノヴィアの腰を左手で抑え、右手の指で女の戦闘服の股間にある開閉部分をくぱりと開く。

途端に湧き出る淫らな汁。その源泉へと指を三本沈めていく。わざとぐちゅぐちゅと音を立てて、膣内を弄り回してやる。

「ああっ……、んんああっ♡ あああっ……♡」

コイツは危険なデュランダル使いだから、イリナとは違ってグレモリーの魔力もふんだんに使用してやろう。

乳を滴らせる胸を俺にむにむにと押し付けながら、もうたまらないといった表情でゼノヴィアが抱き着いたまま身をよじる。

もう我慢できないのだろうか。欲しくて欲しくて仕方がなくなっているに違いない。処女のまま、それ以外の場所を開発されつくしてしまった上に、龍のオーラとグレモリーの魔力で焙られているのだからひとたまりもあるまい。まだナニもされていないソコだけが、うずいてうずいて仕方がないはずだ。

「対価……ああっ、なに、を……何を支払えば許してくれるんだ……？」

「そんなに胸を押しつけて来て、俺を誘っているんだな」

「ああ、これは……違う……」

「俺に『お前の何』を寄せと云って欲しいんだ？」

「ああっ……、わた、わたしの……処女を差し出すから……だから……もう、アレはやめ……」

いい感じだな。だが、もう少しか。

挿れて欲しがっている女に挿入するのが対価ではなあ。それでは差し出すのも、得るのも一緒になってしまう。

「それではダメだな」

「ううあ♡ なん、で……」

ほらほら、もつとココにぶち込んで欲しくてたまらなくなってしまう。そんなイメージを魔力にこめながら、ゼノヴィアの秘所をいじり続ける。

「お前、コレが欲しいんだろう？　ここに挿れて欲しいのだろうか？」

「ううっ……あうあ♡　ああっ、んあんあ♡」

俺の肩に顔を埋めて何度も頷くゼノヴィアの頭を、左手で撫でてやる。もちろん右手のマンコいじりは止めてやらない。

「お前が欲しがっているモノではな。それでは対価の支払いではなく、ご褒美をやることになってしまう。ほら、何か他の物を差し出せ。そうしたら、犯してやってもいいぞ」

左に『赤龍帝の籠手』を顕現し、ゼノヴィアの頭の中に『譲渡』してやる。コイツの頭の中にあるだろう、幸福やら快感やら安心感を強化してやるのだ。

神器ってのは便利なもので、所有者のふわつとした扱い方にもわりと応えてくれる。それさえわかれば、あとは何とでもな……本当に『赤龍帝の籠手』はとんでもない代物だよ。

リユイの感覚を倍加しまくってやっていたとき、うっかり傷つけてしまつて滅茶苦茶痛がらせてしまったことを反省して悟つた。

触覚などただの肉体の反応に過ぎない。より良くヤルためには、心に響く『気持ちいい』の気持ちだけを倍増させればいいのだとな。

持ち主の想いに応えて進化する。神器ってのは、実にフアジーで

ファンタジーだ。俺が持ち主なせいかな、主にエロ方面ばかりに進化している気がするが。

「んうあ~~~~~~~~♡」

処女穴いじりを一旦止めて、ゼノヴィアを強く優しく抱きしめる。

「どうだ、ゼノヴィア。……俺はお前の心が欲しい」

「ここ、ろ……」

「そうだ、心だ。魂と言ってもいいし、あるいは……信仰と言い換えてもいいな」

「しん、こう……を」

「ああ、聖書の神を捨てろ。そして、俺を主と呼ぶんだ。それができたら、優しくしてやろう」

イリナには『マゾ奴隷』宣言をさせたしな。

ゼノヴィア、お前にも俺をご主人様と呼ばせてやろう。

「ああ……、主よ……お許しください」

「ふふ、その主は誰のことだ？ ん？ お前を許してやるのは、誰なのか言ってみろ！」

「うああ……」

「ゼノヴィア、お前は今まで幸せだったか？ 俺に抱きしめられている今、お前は幸せか？」

快樂漬けの媚薬漬けにして、触手による容赦ない責め苦を味わわせた。それから魔力とたぶん効いているだろうドラゴンオーラにも漬けて、あげくにさつきまでの劇薬のような快樂の代わりにそっと抱きしめてささやくムーブからの幸福感倍增『譲渡』。からの、一か所だけ攻めずに残しておいて疼きまくっているだろう処女穴を犯して欲しければ信仰捨てる命令。

我ながらあまりにも悪役すぎる所業だが、相手が教会の聖剣使いともなれば心はまったく痛まない。だって、コイツこれまでにたくさんの悪魔を殺して来たのだろうし。

「……………お許しください」

ぐっと抱き着いてくる腕の力が強くなった。

「そうか、なら誓え。今までの主は許してはくれないだろうが、俺がお

前を許してやる」

聖書の神など、ドライブに言わせれば「神如き」だ。ならば、いずれドライブを超えていく俺も「如き」と言つてやらねばならないだろう。

耳元で言うべき言葉を囁いてやる。

「わ、私は、ゼノヴィアは、リヴラクス・グレモリーさまを主とし、いつまでも尽きることなく忠誠と信仰を捧げることが……誓います。だから、わたしも、イリナみたいにしてえ」

ゼノヴィアがそういった瞬間、ぞぞぞと俺の中を快感が奔りぬけた。支配欲が満たされる。

ああ、そうか、これが教会の女を堕とす醍醐味なのか。ああ、たまらない。

「良く言えたな。今この時から、お前は俺のものだ」

頭を撫で、湧き上がる歓喜によって自然と浮かび上がってくる笑顔でゼノヴィアを誘う。

彼女の頬をスーツと流れ落ちる涙は、かつての主への別れのものとして受け取っておこう。

「ああ、主よ。どうか私に……」

涙をぬぐってやりながら、腰を抱いて寝ているイリナの横へと連れて行く。

「たっぷりと可愛がつてやるから、まずその服を脱げ」

教会の戦闘服は、これはこれでエロくてそそる。だが、触手ではない俺の手では、どっぷりと開発されたただらう尻穴まではいじつてやれない。

「ああっ……♡ くっ、張り付いて」

汗でびたびたになった戦闘服は脱ぎ辛いらしく、もどかしそうに苦戦しながら脱いでいくゼノヴィアの姿をしばし眺める。

脱がすのも良いものだが、女が自分から脱いでいく様も良いものだ。少しばかり恥じらいが足りていないのが減点要素だが、俺の股間はそのなこと知ったことかとばかりにそそり立ってしまったている。

「さあ、ゼノヴィアが跨るんだ」

イリナを包んでいた毛布を広げ、その上で仰向けに横たわる。

そうして、俺のいきり立つ怒張の上にゼノヴィアの尻をもつてこさせた。

「ああっ、うあああっ、ひうああっ♡♡」

腰を落とさせ、割れ目に肉棒を擦りつけてやると、ゼノヴィアの顔が快楽への期待と恍惚に蕩けていく。

「そら、欲しいのなら、自分で入れるんだ」

「はあ、はああ♡ はあああっ♡ んあっ♡」

官能に濁った瞳で、ゼノヴィアはクリトリスや肉襞を耕す肉の杭を見つめ……荒い息を吐きながら腰を浮かした。

「そうだ、手を添えて合わせろ」

ゼノヴィアの手が俺のモノを掴んで穴と位置を合わせ、入口へと導いていく。

「腰をゆっくりと降ろせ」

「ああっ、あっああ♡ おおあっ……」

先端がズブズブと飲み込まれ、女の媚肉の感触が傘を包み始めた。

「ほら、あとは腰を落とすだけだ。これだけ涎を垂らしておいて、何を躊躇う」

「んううう……んう、ふうう、んううう、ふううう♡」

決心がつかないのか、ゼノヴィアは腰を少し浮かした状態で止めてしまった。

だが、その止めた腰を揺らして自ら牝穴の入り口付近をこすりつけているのだから、あとは時間の問題だ。

「どうした？ お前はさつき、なんと誓ったんだ。忘れてしまったのなら、今度はこう言ってみろ」

教えた言葉を頭の中で繰り返し、ゼノヴィアは口を開いた。少し長いが、一度で覚えられたかな。

「悪魔の公爵となるリヴラクス・グレモリーさまに、感謝いたします。愚かにも神などに仕え、その剣として生きてきた私にこのような喜びを教えてくださいまして、ありがとうございます。そして……今、そんな私に慈悲と慈愛をどうか、お与えください……。このゼノヴィアの心

も身体も、すべて捧げます。どうか、愚かで弱い雌狗に、貴方の愛と、それに触れられる悦びを教えてください。これからの生涯のすべてを、この愛のために尽くします……ああつ、いいんいい♡」

背徳の陶酔感がゼノヴィアを染め上げ、まだ深い挿入もしていないというのに背をぐいとそらして軽い絶頂を覚えているようにすら見える。

教えたものよりも長くなっているが、俺が興奮したのでよし。ああ、堕ちた。堕とした、ははは。

「ああつ、大きく、なつて……ふううあ♡」

思わず突き上げてしまった肉槍が、ゼノヴィアを下から穴の半ばまで貫いていた。

その快感が彼女の腰を砕き、そのままどすりと落ちてくる。

「んああああああつ♡ あつうああんんああつ♡♡」

アナルの側からほぐされ開発されていた処女穴は、初めての挿入のその最初の一撃で奥を突かれて達した。

自らの体重がゼノヴィアの子宮の入口に押し寄せ、その全てが快楽に変換されて脳天を突き抜ける。

「ふあああああ、イクうつ♡ イツつて、ああつあああああい♡ ひいへやああああああんううつ♡♡！」

牝狗の咆哮を放ちながら、喜悦に身を震わせるゼノヴィア。絶頂に合わせてぎゅうと窄まってくる褰と、吹き出す牝汁。

痙攣しながら倒れ込んできたゼノヴィアの身体を抱き留めると、必死にすがりついてくるのでそれに応えて抱きしめ返す。

「んう、ふうー♡ んう、ふうー♡♡ ふつ、あつふ、はあん♡ んう、ふうー、はあああ!! ♡♡」

少し浮かせてやった背に、ゼノヴィアの腕が回る。とにかくしがみついていたのか、爪をたててまで離すまいとしてくるのだが、性の興奮の中ではその痛みすら心地よい。

「んう……ああ、れ？」

隣で寝ていたイリナが、ほにやりとした顔で目を覚ました。さすがにこれだけ大きく嬌声を上げられては目も覚めるだろう。

「ゼノヴィア、お前が声を抑えないからイリナが起きてしまったぞ」
「ああっ、こんな、の、抑えるなんて無理だ……ああっ、すごい」
「少し落ち着いたら、そのまま腰を振って、自分で良いところを探してみろ」

触手に嬲られ、抵抗の出来ない状態で好き勝手されるのは経験済みだろう。

だから、今度は自分から貪ることを覚えるといい。

「ああっ……、自分で……動いて……んんっ♡ あう、ああっ、こっ、いい♡」

ゼノヴィアに腰を振らせて肉棒に奉仕させながら、未だぼんやりとしているイリナにキスをする。

「んんっ、ちゅっ、ちゅっ、……んむう……♡ あっう♡ ああっ、ごひゅじんさまあ……ああ♡ あむうっ……♡」

イリナはなあ、メイド服似合いそうなんだよなあ……。ゼノヴィアはちよつと捻って執事服とかアリかもしれんが、髪を短くさせると良いのかもしれない。

とはいえ、人間を冥界に連れて行くのは、なかなか難しい。『駒』がいくらでもあるのなら構わないのだが……数に限りがあるし。

何かしら特殊な能力でもあるのなら別だが、どうもそういったものはどちらも有していないようだから。

ふーむ、聖剣を扱えるというのは……俺的にはあまり魅力的な要素ではない。だって、あの剣が近くにあると気分良くないし。あの波動がな……漂白剤の有用性は認めても、それを枕元に置いておきたくはないような感じか。

「イリナ、また犯して欲しいか？」

「ああっ、欲しいよお……♡」

片手をゼノヴィアの上下する腰に添え、もう一方でイリナを愛撫する。肩を抱くようにして腕を回し、乳首を摘まみ上げながら聞いてやると、すぐに欲しがって頬を寄せてくる。

「んああっ、主よ、私も、私も見てくれえ……、んあっ、んんっ、ああっ♡」

そうやって寝起きのイリナとイチャついていると、ゼノヴィアの腰振りが激しくなった。

「なんだゼノヴィア、嫉妬しているのか？」

「ああっ、そう、そう、なのかな……、こっちを、わたひを……んんあああつ♡」

「なんだ、お前も可愛いところがある、なっ！」

「くひいいーん♡♡ はああん♡♡ ああう、そこイイイツ♡♡」

良いところを教えてやるため、ゼノヴィアの膣内で（ああ、ここにも欲しいよお♡）などと鳴いている場所を何か所か、突き上げてやる。すると、ゼノヴィアはなかなか筋が良いのか、教えられた場所を重点的にこすりつけるようにして腰を動かし始めた。

覚えの早い奴は嫌いではない。覚えの悪い娘に根気よく仕込むのも好きだが。

「え……ゼノヴィアが……なんで……？」

「イリナ、コイツはな……お前が羨ましかったんだよ」

「ああっ、すまない。すまない……イリナ。わたし、は、ああ、わたしはああ♡」

イリナの唇を舌でなぞってやると、「んうっ♡」とあちらも舌を出して絡めてくる。

「んんちゅ……♡ んふう……♡ なん、でゼノヴィアま、で……んううじゅっ♡」

「ふふ、ゼノヴィアはお前のように俺に可愛がられたくて、牝奴隷になるのどうか処女を奪ってくださいと頼んで来たんだ」

「ああっ、主のモノが、イイツ！ あっ、そこ、なああ、んああっ♡

そう、なん、だ……イリナが、気持ちよさそうで、幸せそうだったか、からあ……んあんああああ♡♡」

さて、そろそろゼノヴィアをもう一度イカせてやるとしようか。

「イリナ、その服もなかなかいやらしくて良かったが……そろそろ直にお前に触れたい」

俺に突き上げられ、口を大きく開いて涎を垂らしながら夏場の犬のように舌を出すゼノヴィア。そんな仲間の姿を羨ましそうに見つめ

るイリナ。

「あ……うん。じゃあ……脱ぐから……」

「ああ、もつともつと可愛がつてやるからな」

「あう……ううん♥ おへそ、だめえ♥」

なんでイリナには何もキメていないのに、こんなに反応がいいんだ。

生来の淫乱気質なのかね。もしこいつが天使だったら、おっぱい揉まれただけで即墮天してしまいそうだ。

「ゼノヴィア、一度イカせてやる！」

「ああっ、イイっ♡」

「どこがイイんだ！」

「あっ、うう、どこっつて、んああっ♡♡」

「オマンコだよ、オマンコ！ お前がよくなっているその穴のことだ！」

「ああっ、オマンコ、擦れて、気持ちいいッ♡ 主の、主の……モノが、んはアツ♡♡」

肉棒がで上下するたびに、ゼノヴィアの膣内から掻き出された牝汁がだらだらとあふれ出す。

「ああっ♡ オマンコの、奥からっ、頭にい、ああっ響くうっ……♡♡」
快感に震えるゼノヴィアの牝穴が、ぎゅうと締まり始めた。

背骨を伝い、頭蓋骨の中を震わす悪魔の愉悦が教会の戦士だった女を、官能の奴隷へと変えていく。

「んああふう♡ んくうっ♡ あひい、えぐ、えぐられるうッ♡ んあっ、もつと、ああっ、もつとえぐつてえくれえ♡♡!!」

ゼノヴィアの将来期待の出来そうな乳房が、母乳を噴き散らしながら揺れ踊る。

「ははは、そらこつちも揉んでやろう。絞り出してやるぞー！」
「んあああっ、吸われてえ……♡♡ ああん、飲んでるう……主が、わたひのおっぱい、のんでええ♡♡」

処女穴を犯され、触手の注射によって吹き出すようになった乳を吸われ、ゼノヴィアは喘ぎ狂う。

「いうう、いぐう……♡ オマンコ、主の、主ので、イイツん♡ あ
いいつあつ……ん♡ はあん♡♡」

もうここに、『神の剣』であろうとした少女はいない。触手の悦楽に
壊され、悪魔の公爵子息に犯され、それらの与える歓喜によがる牝に
なってしまった。

「そうだな、チンポと言え。俺のチンポでイッてしまえ！」

「あああ♡ イクツん、オマンコのいいところっ、主のチンポでえぐ
られてっ、いぐっ♡ 気持ちいい……！ んあはっ……気持ちいい！
……気持ちいいイイイ♡♡!!」

精液を求めて蠕動する貪欲な処女膣内。その柔肉にきゆうきゆう
とねだられて、肉棒も大きく膨らんで応える。

「ああっ、出すぞ！ 中に出してやる！ ほら、イケっ!!」

「んああああああ♡♡!! いあああああ♡♡ い
うううううん♡♡!!!」

絶頂の中、何かを求めるように伸ばされたゼノヴィアの手を取って
握りしめる。

そのまま引き寄せ、頭を抱きかかえると、

「んっふううう……♡♡♡ んんっふううう……♡♡♡」

ゼノヴィアがイキながら腰を振る。こちらの胸にべつとりとぬた
くりつけられる彼女の乳、抱き着いてくる腕が俺の首を抱え込む。

「ふうっ……♡♡ んうふっ……♡♡ はあっ、あんっ……♡♡ 主

よ、ああっ、主よ、この、この幸福に、感謝……いたします」

「ふふ、そうか……お前が気持ち良かったならいいんだ」

俺も良かったしな。

「んんっ……ごしゅじんさまあ♡ わたしにも、ください……」

脱ぎ終わったイリナが、俺の唇を求めながら懇願してくる。彼女の
指先は自身の秘裂を這いまわり、ぐちゅぐちゅと淫らな音をさせて慰
めていた。

「いいぞ、俺の膝の上に乗れ、背中をこっちに向けてな」

ぐつりとゼノヴィアの膣から引き抜くと、中から白濁と愛液の混
じった汁がどろどろと垂れてくる。

それを目にしたイリナが、「はあっ……ああうん♥ あっ、あっ、あつ、わたし、も、ほしいの」とキスを振らせてくるので、それに応えながら胡坐をかく。

「えっと……んっ、こう？」

「もつと脚を広げろ、ゼノヴィアが良く見えるようにな」

ぐつと真横になるくらいにイリナの両脚を開かせ、背面坐位の態勢。

「ほら、降ろすぞ」

腕力だけだと難しいので、翼を広げてバランスを取り、魔力でイリナを持ち上げ下から挿し込んでヤル。

俺とゼノヴィアの行為を見て濡らしまくっていたのか、それともただの淫乱気質なのか、イリナの膣内は既に一度眠る前と同様のどろどろの泥濘と化していた。

「んんんっ……イイよお♥ ごしゅじんさまのイイっ♥」

「今度は、優しくゆつくりとシテやる」

「あっ……うううん……ああああ……♥」

頭のつむじ、耳、うなじ、首筋、肩と順に口づけを落としながら、イリナの胸をゆつたりと揉みほぐす。

ときに腹をなでてやり、脇腹や脇の下をくすぐって、背中に舌を這わす。

「ふうううん……♥ イっっ……♥♥」

「後ろを向いてみる」

振り向いたイリナはうつとりとした顔で、キス待ちをしてくる。

「んっ、ちゅっ……あっふう……♥」

「イリナ、腰を動かせ。まるく回すようにするんだ」

肉棒の動きは緩やかに、イリナの腰を手で動かして誘導し牝肉壺の奥をぐりぐりと自らの腰振りで擦らせる。

「ああうん……♥ ふああんっ……♥」

「マゾ奴隷のイリナは激しく痛い方が好きだろうから、焦れたいかもしれないが」

「あっん……ううん、そんな、こと、ない……♥ はあっ……気持ちい

いよお……♡♡」

それではとゼノヴィアに目を向けると、こちらもさつきイリナのように指をくわえてしまいそうな顔で、熱情にうるんだ視線を注いできていた。

(わたしにも……ほしい)(犯してほしい……)(イリナ……あんなに気持ちよさそうにして……)

ふふん、元教会の牝犬奴隷め。すっかり発情しているな。いやらしい身体のうちこちから、犯してコールを大量に鳴らしやがって。

「ゼノヴィア、俺とイリナの前に回って、繋がっているところをよく見てろ」

イリナの両脚の膝辺りに手を入れて持ち上げる。小さい子供に小便を指せるようなポーズにするのだ。

「いやあ……、見ちゃダメえ……見ないでえ！ やああ！ ああんうっ♡♡」

「何が見ないで、だ！ グイグイ締め付けて来てるじゃないか！ ゼノヴィアに見られて気持ちいいんだらう。この変態マゾ女が！ ゼノヴィア、もつと近くで見るんだ」

「こ……こんなに拡がっているのか……。イリナの中で……主のチンポがぐじゅぐじゅと……、ものすごく濡れているじゃないか……」

「ああん♡ ヤダああ♡♡ 見ないでえ、見ないでよお……」

「見られて感じてるって言え！ ほら、どんどん感じて来ているだろうが！ 挿れてりやわかるんだよ！」

「ああっ♡ 見られてるう……、ゼノヴィアに繋がっているとこ見られて……あつん♡ 感じちやつてるよお……！ いやあああ♡」

オスとメスの結合部から泡が噴く、それをジツと見つめるゼノヴィアをイリナの肩越しに観察してみると——ゴクリと喉を鳴らしている様子が目に入ってきた。

「羨ましそうだな、ゼノヴィア」

「ああ……はあ、はあ……ほ、欲しい……主のチンポが……イリナが嫌なら……私に……」

「だ、そうだが？ どうするイリナ、そんなに見られるのが嫌なら、ゼ

ノヴィアと交代だ」

「いやああ！ 交代しちや、ヤダあつ！ もっと、もつとしてえ……♡
イイ、イイよお、イイのお……♡」

「やはりお前は、マゾ奴隷女が！ だったらゼノヴィアにねだつてみる！ ここを舐めてくださいって言え！」

結合部とその上、イリナのクリトリスの辺りを指でぐちゃぐちゃに刺激する。

「いやああん♡ あつ、ううん……あつ、いや、いやじゃない……イ
イツ♡ あつ、ああつ、ぜ、ゼノヴィア……、おね、おねがい……舐
めてえ♡ わたひ、の、わたしとごしゅじんさまの、くつついてると
こ……なめてえ……♡♡」

嬌声を上げ舐めて欲しいとねだるイリナ。

ゼノヴィアは四つん這いで尻を上げた姿勢で主を見上げた。

紫の瞳に宿る支配欲が、自身に向けられている。それを感じてブル
リと快感に背を震わし、早く自分にも入れて欲しいとねだる様に尻を
揺らしながら、ゼノヴィアは舌を伸ばした。

イリナにどぷりとハマりこんだ男根に舌を這わせていく。

「いいぞ、ゼノヴィア。そのまま玉の袋からイリナのクリまで舐めま
わせ！」

褒められると嬉しくなってしまう。舐めさせられていると、舌の先に
オスの熱さ、硬さを感じられ、これをまた入れて欲しい気持ちがあどん
どんと強くなっていく。

触手に馴染られた記憶、それで味わわされた焼き尽くされるような官
能。悪魔の主の男根を受け入れたときの、あの抱きしめられる悦び。
それらがグルグルとゼノヴィアの中でこだまして、イリナの次に犯
されることを想像し、子宮からジクジクとした期待感が湧き上がって
くる。

夢中で舐めしやぶりながら、時折上目遣いで媚びる視線を送ると、
必ず主の見下ろす視線と絡み合った。

（ああっ……欲しい……、また犯して欲しい……。イリナではなく、私
を滅茶苦茶にしてほしい……）

じゅぼじゅぼと男根がイリナを犯す音が間近で聞こえる。犯され
悦ぶ女の声に嫉妬を覚える。

至近距離で、目にさせられるオスの勃起と、メスの昂り。鼻腔から
入り込んでくるのは、あまりにも濃厚な男と女の性交の匂い。

(ああっ……ほしい、ほしい、ほしい!! 主のチンポ入れて欲しい……
!!)

ゼノヴィアの頭の中が、悪魔に犯されることではいっばいになってい
く。早く、早く、早く順番が回って来てくれ!

その思いがゼノヴィアの舌先を加速させる。夢中になって舐め続
ける、男根の味わい、イリナを責め立てることで響く嬌声。

「んんっあああああああつ、ごしゅじんさまああ♥♥ イリナ、あ
あつ、イクつ、イキい、いつちやうよおおつ!」

「よし、イケっ! また、中に注ぎ込んでやる! 中出しされながらイ
ケっ!!」

「ふいふい♥ イイイイいん♥♥ ああっああああ♥♥ イツ
くううううううん♥♥♥!」

ゆったりとした攻めでジワジワと昂らされていたイリナが、ようや
く果てた。

派手なヨガリ声を上げながら、喉を背をそらしてビクビクと快楽に
酔っている。最後の瞬間にぎゅうぎゅうと収縮したイリナの女の割
れ目から、どぼりと愛液が吹き出してゼノヴィアの顔にかかった。

はあはあと息を整えるイリナを膝から下ろし、ゼノヴィアの主が萎
えることを知らないかのような剛直を眼前に突きつけてくる。

「欲しいんだな?」

「ああ……欲しい」

「もつと、犯されたいんだな」

「もつと、もつと、犯して……」

「そうか、それなら二人とも朝までたっぷりと可愛がつてやろう」

悪魔に組み伏せられながら、ゼノヴィアは悦楽の中へと沈んでいっ
た。

「んあつ、主よ、ああっ主よ、あ、ああ、あああ~~~~~♥♥」

あの後、イリナとゼノヴィアは放し飼いにすることにした。

俺の禁手的には眷属化するには向いていないし、聖剣ごと確保してしまうのはまだ時期が早い。

といって、性的快楽に漬けてからの放置となると他の男を啜え込んで、アンアン腰振りするかもしれないのだが……それはそれで、ちよつと面白くない。だったらどこぞで囲い込んでおけという話なのだが、デュランダル使いというのは教会内部では結構な立場でもあるようで、攫ってしまってもなかなかどうして扱いに困るところがある。

先代が大物だからな……デュランダル使いの。人間のクセに墮天使幹部と拳で渡り合えるとかさあ……なんなのあのバケモノ。頭おかしい。魔力なしのサイラオーグも拳でガンガンやってるが、それでも肉体は純血悪魔のそれだっていうのに……。ホント人間って一部だけ突出してくるから困る。

ということもあって、イリナとゼノヴィアには中出ししまくったが、ちゃんと妊娠しないようにしておいた。

大物悪魔に犯された聖剣使いの産んだ悲劇の子供——などという如何にも物語の主役になってしまいそうな存在など誕生させてはならないのだ。かの有名なハリウッド脚本でも言われている、主人公のファーザーが悪役なのは、神話類型によくあるパターンなので、人間どもが盛り上がる要素の一つなのだって。

そんな大昔からありがちで、現代でも使いまくらわれている退治される悪役パパの典型的なパターンに陥ってたまるかという話だ。朱乃にバラキエルを討たせて、悪魔内での立場を良くしてやろうなどと考えている俺の言うことだ、間違いない。

異種姦で生まれた子供はその父親の天敵、決まってるんだよな。吸血鬼物でもそんな話があった覚えがあるし。

と、まあいろいろ考えた結果、イリナとゼノヴィアにはレズつてもらうことにした。まさか、擬態の聖剣も双頭ディルドーに擬態させられるとは思っていなかっただろうな。もはや性なる剣である。

「受け止めて、私のエクスカリバー！ はーと」とかやってるんだろう、きつと。

というか、なんであんな扱いをしても持ち主にもそのまま従っているのか……そこがよく分からない。名のある名剣は所有者を選ぶとか聞いたような覚えがあるが、エクスカリバーの欠片にしても、デュランダルにしても、悪魔である俺を『主』呼びして忠誠を誓わせた女にそのまま振るわれて文句がない様子という……。

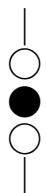
アレ、どっか壊れてるんじゃないかね。こう聖と魔の判定みたいなものが。

ジャンヌが転生悪魔化しても『聖剣創造』の神器を問題なく使えていたり、そもそも純血悪魔の肉体を持っている俺が神器を宿して生まれて来ている時点でガバガバ判定なのは分かっていたことだが。

聖書の神がいい加減すぎる件。仕事しろ！ とは言わないが、その方が今のところ都合が良いしな。

余計なことはしなくていい。今まで通りに行っていると言いつつはきたが……ちゃんとやれるのかね。アイツら。

デオドラはそのあたり、狡猾そうな女はそのまま教会組織に上手く埋伏させているようだが、邪魔すると思いからその辺りのことは何も教えていない。



吸血鬼の国には大昔から男性の真祖を尊ぶ派閥と、女性の真祖を尊ぶ派閥があったらしい。

長い間、その両派閥は軋轢を重ねながらも一緒にやってきたようなのだが、数百年ほど前について両派閥の仲が決裂。

現在は、外から見ると一つの『吸血鬼の国』なのだが、国内では男尊主義のツェペシユ派と、女尊主義のカーミラ派の二つの国があるよ

うな状況になっている。

ディオドラからの情報を受けて俺が確保した吸血鬼マインスターは、男尊主義のツエペシユ派から追放された者。案内させるにしても、ツエペシユ派側には行けない。

ということ、俺はカーミラ派の領域へと踏み込み——現在そのカーミラ派の交渉担当と対面しているところだ。現在地はおそらく、カーミラの枝城の一つになるのだろう建物内部の一室になるのだろうと思う。ここの土地勘はまったくないからな。

「私はエルメンヒルデ・カルンスタイン。エルメとお呼びください」
カルンスタインはカーミラ派のなかでも最上位クラスの家系。まあ、悪魔の公爵家の次期当主にして、赤龍帝である俺の前に出てくる者としては及第点と言ったところか。悪魔で言えば、シーグヴァイラが応対に出てきたような感じだろう。

さすがに女王本人とはいかんよな。悪魔もそうだが、吸血鬼もプライドくそ高種族だからな。どっちも夜だの闇だの魔だのに分類される者の頂点にあるのは、自分たちの種族だと考えていたりする。

無論、俺は悪魔の貴族なので、悪魔こそが悪と魔の頂点種族であると言いつ張るわけだが。

ま、エルメは美人面してるから上から目線で許してやろうって雰囲気にしておこう。

女の面がいいのは、良いことだ。死人のような顔色だが、造形自体は大変よろしい。ぶっちゃけ好みである。

小柄なのもグッド。生命力が感じられないとか、そういったものは雰囲気を増すだけなので、マイナスポイントにはならない。

妖しく冷たい感じの気配を発しているが、異形の存在ならばそこは当たり前である。熱血系には熱血系の、冷血系には冷血系の良さがあるものだ。俺も俺で似たようなものだしな。というか俺のオーラの方がキツイだろう。ドラゴンで悪魔、しかもどちらも強烈なものときている。

瞳が真っ赤なもの、赤龍帝にして紅髪のグレモリーな俺にとっては好印象。

金髪ロングウェーブヘアは、うん、まあこの界限ではよくある髪色で髪型である。悪魔って金髪多いからごく普通。ただし、色合いがかなり薄いのは高評価。

こういった場に出てくるあたり、見た目通りの少女な年齢ではないのだろうか、もう年齢とか気にするのバカらしいんだよな。俺が手を出した女の最高年齢、今のところ八千歳になっていることだし。

そして、ここまでの色々な勝手な俺評価がどうでもよくなるのが、エルフ耳だ！

せっかくファンタジーっぽい悪魔社会に転生したのに、俺は未だにエルフに出会っていない。だが、エルメの耳は人間や悪魔のそれより長くて尖っている！ エルフ耳！ くうーっ、大変よろしい！

「リヴラクス・グレモリーだ」

エルメンヒルデはともかく、一緒に入室してきた御付きらしき吸血鬼たちが動揺しているのが分かる。俺が改めて名乗ったことで、ここまで案内されて来た方法と、その余波を思いだしたのだろう。

「リヴラクスさま、『紫紅の龍帝』のお噂はかねがね伺っております。そして、その噂が偽りではなかったことも理解できました。未来の悪魔公にしてドラゴン公にお会いできて光栄です」

マインスターに案内させて、カーミラ派の領域へと侵入してほどなく、俺たちは吸血鬼の警備隊の一団に囲まれた。不法入国者なのだから、当たり前前の対応だ。

「ドラクル……まあ、そういうことにもなるのか」

俺は悪魔の公爵家グレモリーの次期当主であり、同時に龍の中でも最強クラスの一角である赤龍帝を宿す者でもある。なので、いずれ悪魔の公爵にして龍の公爵となる身だ。

それを指してドラゴン公と言われれば、まあ間違いではない。

「言葉遊びですが」

「なら、遊びついでに俺の子供が生まれたら、龍の公爵の息子ということとで『ドラキュラ』とでも名付けてやるか。……まあ冗談だが」

かの有名な吸血鬼の代名詞的存在『ドラキュラ』の名前の由来は、ドラゴン公の息子とかそんな意味合いのニツクネームから来ているら

しい。前世のオタ趣味で知った。

まあ、あまりにも有名すぎて逆に陳腐に感じられるようになってしまったのか、俺がハマっていた頃の創作界隈ではDraculaを逆から読んでアルカードだの、モデルになったと言われる人物の呼び名から取ってヴラドだのツェペシュだのといった名前が使われがちになっていったものだが。

「フッフ、ツェペシュ派が憤慨しそうですね」

かつて吸血鬼は人間の国を裏から支配していた時代もあったというから、その辺りとツェペシュ派の吸血鬼たちが絡んでいたのかもしれない。

今の俺にとってはどうでもいい話ではあるが。

「吸血鬼の純血種は、それ以外の種族を見下していると聞いていたが、噂はあてにならないものだな」

俺は噂通りなんだろうが、慣れないジョークを飛ばそうとするくらいには気を遣われているように感じる。

ま、俺がやったことのお陰なんだろうが。

「貴方が我々の領域に入ってすぐの、あの威嚇……あれだけで丁重に扱うべき方だと理解させられましたので」

別に大したことをしたわけではない。

「俺の師匠の一人……一頭か？　であるところのドライグが、『まず殴り飛ばす、それで相手が生きていたら話してみてもいい。死んでいたら奪うだけだ』と交渉の基本を教えてくれたものでな。まあ、さすがにそこまでは俺もドラゴンしていないが」

俺はさすがにドライグほどの野蛮さは持ち合わせていないので、ちよいと抑えている魔力を全力解放して、さらに『赤龍帝の籠手』をフル稼働させて魔力の波動を五百倍くらいに『倍加』して周囲に放っただけだ。ちなみに攻撃性は一切付与していない。

魔王クラスの悪魔の魔力があれば、都市一つを消し飛ばせると言われている。俺の現在の魔力量は旧ルシファーのおおよそ100倍程度らしいので、そいつをだいたい五百倍にして約5000ルシファー。

都市つてのを仮にニューヨークつてことで考えると……う

む、俺が『ドラグ・ソボール』の悪役ハゲの如く指を「クンツ」とした瞬間、ビッグアップルが5000個ほどこの世から消えてなくなるわけだ。

その大雑把な話をエルメに伝えてみると、ブルつと震えられた。

「その計算ですと、貴方がその気になれば我々吸血鬼の国どころか、ルーマニアそのもの、いえ東ヨーロッパが消えてなくなりそうなのですが……」

「消滅魔力だから、綺麗な半球状の湖が出来るかもしれないな……あ、海と繋がるのか？」

うむ、フツーに怖い。我ながらとんでもねえな。そして俺は、怒りっぽいと評判な男だ。「ああ、っ!? バカにしてんのかテメーら、そういうつもりなら、もういいわ。皆殺しにして、そのあとお宝さがしとひとつくからよ! 塵一つ残さず消えてなくなってしまう吸血鬼どもが!」なんて俺が言い出したら、そりやまあ困るだろう。

「はあ……、失礼しました。少々、いえ、かなり緊張しております」「まあ気にするな。俺は美人には寛容な方だ」

交渉事ってのは、強い方が有利なのだ。特に戦力差が圧倒的な場合は簡単だ。なにせ決裂したらしたで、武力行使でどうとでも出来てしまふ。

『武力≡権力』

やはり俺の持論が正しいことが証明された。

ただし、俺は面食いな男なので、美女・美少女には弱い。その辺り、吸血鬼の連中の人選はよく分かっていると云っている。

女尊主義のカーミラ派だからなのかもしれないが、髭面のオッサンなんぞが相手だったら俺の沸点はかなり低くなっていたこと間違いない。

これで吸血鬼が他の神話勢力と友好関係なり同盟なりを組んでいればまた話が変わってくるのだが、ここは外部との協力関係なんてない鎖国状態だからな。仮に俺がこの国の内部で暴れまわったとしても助けを求められるような勢力は、たぶんない。

「さて、俺は貴族ではあるがせっかちでな、あまり回りくどいやり取り

は好きではない。俺からの要求は伝えておいた通りだが、そちらの返答は？」

エルメは瞳を閉じ、悩むというよりもためらうといった感じで、しばし返答までに間を取った。

「要求には……お応えできません。赤龍帝の財宝、そう呼ばれている品は確かに我々の国に存在しています。ただ、それがティアマツトさまからドライグさまが借りていた品だとしても、既に長い年月が経過しています」

「いまさら所有権を主張されても困る、と？」

「ええ……」

「そう怯えるな、別にこの程度で怒ったりはしない」

エルメも大変だな。俺のようなヤツの前に出てきて、拒否の返答をしないといけないとは。

俺だったら、絶対に御免こうむりたい役割だ。

「我々としても、武力をチラつかせて要求されたから仕方なく渡しました。だけでは納得できない方も多いのです」

「まあ、そうだろうな。ところで、ティアマツトの宝は、吸血鬼として何か使い道があるのか？」

「いえ、特にはありません。ですが、やはり赤龍帝ア・ドライグ・ゴツホの財宝ともなると希少価値が高いので、ほぼ国宝のような扱いです」

ああ、それは理解できる。あれだ、仮に日本に『アレキサンダー大王の所有していた剣』みたいな物が伝わっていたとしたら、そりゃ他所の者に簡単に渡すわけにはいかないだろう。

実際の使い道などなく、ただ保管・展示しておくだけの物だとしても、ホイホイと譲っていては面子に関わる。

面子つてのは大事だ。その場をしのげても、これが潰れると後が困る。なんか、こう日本の幕末みたいなイメージが湧いてくるな。俺が黒船だ！　みたいな。

「では、どうあっても渡せないか？　一応、ある程度なら対価を支払う用意はあるが」

ドライグのせいで、俺の財布の中身が減りそうなんだよ！

「金銭でどうにかなる問題ではないのです。ただ……」

「ただ……？」

「何かしら、我々に問題が起こった際に、貴方を傭兵という形で雇わせていただく。それが可能でしたら……その働きの支払いとして、ならば可能かと」

「何か問題が起こっているのか？」

「それについては、私の口からはお話しできません。他の者も同様でしょう。何事も起きない、それが最良です……災いを口にすれば、それが災いの呼び水となる。そんな話もありますから」

内政か？ いや、ツエペシユ派との抗争でも起きそうなのか？

ふむ、ああ、そういえば……マインスターが何か言っていたな。

『真祖の「血」は今世において雑種を選んだのだ。宗家の者どもめ、あの雑種共のおぞましい力で滅びるがいい！』

マインスターにツエペシユ派から追放された理由を尋ねた際に、たしかそんなことを口走っていた……。

あの吸血鬼の身柄はカーミラ派に引き渡したから、アイツから何か聞き出したのかもしれないな。

「まあいい。つまり何事か起こった際に、俺の力を借りられるようにしておきたいと」

「はい、保険はあっても困りませんから」

「吸血鬼は余所者の手を借りること嫌うと聞いていたが？」

「ええ、他の勢力の介入は出来る限り避けたい。それは悪魔も同じでしょう？」

「そうだな。悪魔の内部でもいろいろとゴタゴタしているが、そこに他所の勢力の介入は拒むだろうな」

「ですから、傭兵として……貴方個人を雇いたいです。有事の際に」
俺が欲しがっている物を吸血鬼が確保していて、そして吸血鬼——
カーミラ派には戦力を必要とする状況の想定がある。

そこで、もしそうなった場合に悪魔勢力ではなく俺個人を雇い入れて、ティアマットの財宝をその支払いに充てる、と。

カーミラ派から見れば、何事かあった場合の保険を確保でき、さらにその支払いは実質何の役にも立っていない希少だと言うだけの財宝。

「それは、ティアマットにもドライグにも、そしてカーミラ派にもほぼ損の無い取引だな」

「ええ、ですので、それを受けていただけの品でしたら、お求めの品をお渡しすることに反対する者はいないでしょう」

脅されたからといってタダで引き渡すことは出来ない。まあ、これは当たり前主張だ。

何かしらの危険が想定されているので、もしもに備えて戦力を用意できるようにしておきたい。これも良い。

「いいだろう。ただ……」

「ただ……？」

「ティアマットの財宝だけでは支払いが足りていないな」

「他にも何か要求がある？」

「ああ、俺の取り分がない。ティアマットの財宝は、ティアマットの物だ。それを返していないこと、散逸させてしまったことの責はドライグにある」

カーミラ派は、俺の戦力をあてに出来る。ティアマットは借りパクされた物が戻ってくる。ドライグは、ティアマットにちよつとだけ返せる。

だが、そこに俺の利益は何もないのだ！ 有事が起きて雇われて、働くのは俺なのに、何も無い！ そんなバカな話があるものか！

「リヴラクス・グレモリー個人の利益ですか。それで、一体何をお求めなのでしょう？」

「エルメンヒルデ・カルンスタイン」

「はい？」

「エルメ、お前が欲しい」

俺がそう言うと、エルメは苦笑を浮かべた。

「本当に……噂通りの方なのですな」

「外の者を嫌う吸血鬼が、傭兵といっても悪魔を使おうとする。カル

ンスタイン家のお前に国宝級の品を対価とした、そんな取引の指示を出せる者となると女王本人だろう」

「答えは控えさせてもらいます」

「ほとんど肯定しているようなものだが、……となると、その有事の際には希少な品を対価に悪魔を雇い入れても周囲が納得するほどの危険が生じるかもしれない。少なくともその可能性は想定しているはずだ」

エルメは口を開かず、瞳を閉じた。続けろと言っている、そう受け取らせてもらおう。

「今、エルメは俺のような危険な相手との交渉の場に出ているワケだが……その有事の際に、もし話し合いの場があったとしたら、そのとき矢面に立つのもカルンスタイン家のエルメンヒルデ、ということにならないか？」

「……聞かせていただけますか？」

エルメは瞼を上げこちらに視線を向けると、身振り付き人を下げさせた。

「何事もなければそれまでだが、もし、その女王が危惧しているような状況になったとき、その相手との交渉に臨んで……生きて帰れる自信はあるか？」

「厳しいかもしれませんが」

「それで、だ。カーミラの女王が俺を呼んでも事態を解決したいという状態。それはどれぐらいの被害を受けてからになりそうだ？」

「かなり深刻な状況になってからでしょう」

「では、俺は、『紫紅の龍帝』というのは、カーミラ派にしてみれば最後の札の一枚程度には考えていると受け取っていいか？」

「そうなるでしょうね」

「そうか、なら……だ。その対価として、エルメンヒルデ・カルンスタインの身柄があらかじめ契約書に記載されていた場合、エルメの扱いはどうなると思う？」

エルメは考え込みながら二、三度首を縦に揺らした。

「なるほど……。ところで、もしそうなった場合、情愛深いとされるグ

レモリーでの私の扱いはどうなるのでしょいか？」

おお、わりと好感触か？ まあ、こんな相手の機嫌一つで死にそう
な場所に送り込まれる立場なんだ、緊急事態の際の保身も考えるか。

大概のことは、死ぬよりはマシだからな。

三国志だったか、どこかの戦記物だったか。

敵対する陣営へと出向いた使者が、「ええい！ 話にならない！ 首を刎ね、塩漬けにして送り返せ！」などと言われて殺されてしまうシーンを何度か目にした覚えがある。

他所の勢力への使者として出向く者には相応の格が必要だ。

名を知られてもいない下級悪魔一匹送って、いい返事をもらって来いなんてことは悪魔でもしない。そんなことをすれば、相手側が無礼なめられたらと思つて機嫌を悪くすることは間違いない。

そのため、使者として出向く者には相手側が納得するだけの名声なり家格なりが必要になるのだ。

エルメンヒルデ・カルンスタインの立場は、その使者として出向くのに丁度良いところにあるらしい。相手に無礼だと思われない程度の家格を持ち、それでいて国を維持していくのに欠かせない人材でもない。

階級社会における、上層部の中の下層域。悪魔同様、純血の吸血鬼は増えにくいらしいので、エルメンヒルデのそんな立ち位置は何事もなければそのまま百年・二百年と続いていくことになるのだろう。

基本、吸血鬼は他種族に対して高圧的で高慢で、狭量かつ閉鎖的なスタンスを取っている。だが、それでもときには交渉などをしなければならぬときがある。

それはどういった場合かと言うと、今回の俺のような相手の方が強大な存在であるときだ。弱い相手ならば無視するなり踏みつぶせばいい。しかし、相手が強いのなら出来る限り吸血鬼としての基本姿勢を崩さないままに、話をまとめる必要がある。

異形の界限に限らず、人間だってそんなものだ。

つまり、エルメンヒルデが出向かなければならない場合というのは、ほぼ厳しい状況ということだ。

俺ならば絶対にお断りな立場だ。柱にしがみついてもやりたくない。弱い相手を一方的に踏み躪るのが良いのだ。同レベルの敵と

競り合うなんて好かんし、いわんや俺よりも強い相手に決死で挑むなんてことはしたくない。

勝利は圧倒的であるべきなのだ。それ以外は、退いても構わない。確かかつ安全に利益を確保する。これに勝るものはないと思う。ゲームならば話は別だが、実戦となるとな。

椅子に腰かけ、脚を大きく開く。

その両脚の間に床に膝をついた女の頭があり、その女は触覚の集中する敏感な末端部分に舌を這わせている。

人間や悪魔のそれとは異なるひんやりとした口内は、十分な官能をこちらへと与えてくれていた。ぬるりとして柔らかい舌が命の露を滴らせる割れ目を幾度も行き来し、口内の粘膜が吸い付くように周囲を包む。

冷たい唇は、きゅと窄まって啞え込んだものを離すまいと締め付けてきたかと思えば、急に緩まって扱く様に前後する。

「これは、気持ちいいいな。今までにない感覚だ」

「ちゅる……じゅっむ……んうちゅば……じゅりゅううっ……」

瞳を閉じ、飽きることを知らないかのように舌を動かすエルメンヒルデは、時折目を見開いて上目遣いで見上げてくると、ねだるように細めてみせる。

じっとその瞳を見下ろしていると魅了されたような気分になって、ついつい許可を出してしまう。

「続けていいぞ、エルメ」

その言葉を紡ぐとすぐに、雫を滴らせていた裂け目にチクリとした痛みが奔り、すぐにそれが快感へと変わる。

ヴァンパイアの吸血行為には性的な官能が伴う。そんな一部界限でありふれていた能力を、彼女はたしかに持っていた。

捕食の際に獲物に快感を与えることで、抵抗力を奪う。そればかりか、次を、さらに次をと獲物自らが喰われることを望むようにしてしまう。ある意味非常に合理的な吸血鬼の能力と言えるだろう。

「じゅうりゆ……、んつく……はああ……」

恍惚を帯びた吐息をこぼしながら、エルメンヒルデは突き立てた牙を引き抜き舌遣いを再開させる。

彼女の纏うオーラが、紅と紫に染まり、徐々に徐々に強くなっている。その『力』の総量は既に現魔王レヴィアタンのそれを超えているだろう。

「ぴいちゅうっ……、はああ……素晴らしい味わいですね。それにこの圧倒的な力の上昇がもたらす恍惚感……。ふふ、病みつきになってしまいそうです」

一度口を離してそう言うと、彼女は尖らせた舌先で牙の刺し傷を舐め上げ、唾液に濡れた末端部にちゅっとなを唇を吸い付かせた。

「ペリよっ……ちゅっんっ……、ちゅりゅうう……んちゅ……」

しかし、エロい。あちらにとっては食事行為だと分かっているのだが、あまりにもエロい。勃起が収まらず、萎えることを許してくれない。

エルメも俺が性的な興奮をぐっぐつと昂らせているのを分かっているようで、あえてからかうように牙痕とは別の箇所へも舌を伸ばしてきたりするものだから……んん、たまらん！

どうしてこんなことになっているのかと言えば、それはティアマトの財宝返還交渉時にさかのぼる。

俺としては、いつになるのかは分からないが、いつかはエルメンヒルデを手に入れられるのならそれで良かった。吸血鬼の国になにがしかの危機的状況が発生し、どうしても外部から戦力を借りなければならぬような事態が起きてくれればいいのだ。それが起こるのが数年先でも数百年先でも別に構わない。悪魔の生の先は長いのだ、いつかの楽しみというものを残しておいた方が張り合いがあるというもの。

エルメンヒルデとしては、カーミラ派内での自身の立ち位置を上に乗っかっていきたくっらしい。現状の上層部の使い走りの在り方から、

もう少し尊重される立ち位置に上がりたい。そんな思惑があったよ
うだ。

悪魔もそうだが、他種族を見下しつつ、さらに自種族内でも出来る
限りに立ちたいと誰しも思うものらしい。

そのために、エルメンヒルデだけが『純血悪魔の赤龍帝召喚契約』の
札を握る形にすることは、それなりに効果があると彼女は踏んだよう
だ。——まあ、核兵器の発射スイッチを手元に持ち歩くようなものだ
な。

そのカードが切れるのは、そもそも吸血鬼の国、あるいはカーミラ
派が壊滅的な被害を受けているような場面となる。

だから、もしも契約書を使用するような事態となって彼女が自身を
俺に引き渡すことになったとしても、その時、カーミラ派は大損害を
受けていることだろう。そういった状況ならば、ホワイトで知られる
グレモリー家に身を寄せるのもそこまでは悪くなさそうだと判断
が彼女の中で下ったように見受けられた。

『そもそも危機的状況など発生させなければ良いだけのこと』とい
うのが、吸血鬼的な考え方なのだろうか。

まあ、たしかに何も起きなければ、起こさせなければ、カードを握っ
たまま、国内での地位を高めたまままでいられるだろう。

俺としては、今起きようとしているらしい何事かが無事に治められ
てしまったとしても、数百年、数千年の期間があれば、どこかでまた
何事か起きるだろう……そんなスタンスでいるつもりだったのだが。

ああ、くつそ。こんなエロい感じにされたら、今すぐ欲しくなつて
しまうじゃないか。

契約の内容をまとめて、それを持ち歩いている古式ゆかしい悪魔の
契約書に記すときに、魔力を込めやすいように血文字を使ったのがア
レだったなあ。

指をサクツとやって血で内容を記したんだが、エルメの視線が……
こう、血の垂れる俺の指先に釣られてスツ、スツと動くものだから。
つつい、吸いたいのかなとサービスしてしまったんだよな。美少女
だし。

吸血鬼的には、将来超越者認定確定と言われている赤龍帝で純血悪魔で、人間の魂もちの俺の血液はかなりのレア物らしく、是非味わってみたいと彼女の屋敷の奥まったところまで招待されたワケなのだが……。

最初は、普通に高い位置で血の飲ませていたのだ。だけど、やはり腕を下げた方が良かったらしく、だんだんと指先の位置が下がって行って……俺のノリも手伝って現在のこの体勢になったという。

これなあ、指ちゅぱなんだが、横から見たら見た目はきつと口淫奉仕っぽい絵面なんだろうな。と、想像するとより硬くなってしまう。肉棒がズボンの布地をぐいぐい押し上げようとして痛くなってしまう。

エルメもエルメで、なんかこう吸血鬼の能力の一つであると聞く、飲んだ血によって異能を発揮できるとか、そんな感じの能力の資質が高かったのか、俺の血がもたらす『力』の感覚に酔っているっぽいし。圧倒的な『力』ってヤツは、気分がいいものだ。本当にこれは、もうどんな美食や美酒よりも勝る快感だと思う。

女好きな俺だが、『力』と比べるとどつちを取るか迷うくらいだ。いや、やはり『力』かな……『力』さえあれば女に限らず大概のものを手に入れられるってことは、既に良く知っているところだから。

「ああ……頭がおかしくなりそう！ もっと……よろしいですか？」
このエルメの上目遣いなおねだり視線。これ絶対、吸血鬼の能力でも有名な魅了の魔眼だかが発動しているだろ。

彼女の『力』が増大しているからか、俺でもかなりクラクラと来る。こつちも気持ちいいから、何回もオツケー出してしまうのであるけれど……あれ？ 既にかかってしまっているのか？ この状況は……？

「ああ、構わない」
「それでは……んんっ……、ちゅくうっ……んちゅ……、ちゅる……んふう……じゅっう……」

ああ、俺の異性を惹きつけるとかいう赤龍帝ドラゴンオーラ満ち満ち血液に酔っぱらっているエルメと、エルメの魅了の魔眼に半ばか

かっけてきている俺。

これは……いかん。いかにぞ……。

悪魔なのに……俺は悪魔なのに……契約書さつき作ったばかりなのに……指の代わりにチンポなめさせたい衝動が抑えきれなくなってしまう！

それをやったら、もう終わりだ。イクところまでイかねば、止まらなくなる自信がある。

なんなら、もう契約なんぞどうでもいい！ 知ったことか！ となつて攫つてお持ち帰りまでしてしまいそうな気がする……。

ああ、くっそ！ だからその、エロい上目遣いで魅了を仕掛けてくるな……と……。

俺はドラゴンでもあるので、欲しくなつたら力づくで奪い取るのもアリか？

いやいや、悪魔たるもの契約だけは遵守せねば！

くう……悪い貴族な俺は、もつとこう欲を満たしつつ上手いこと切り抜ける方法を思いつかないものだろうか……。

オリ主の選択は？ ドラゴン!! 655 / 67% 悪魔らしく
205 / 21% 貴族したいな116 / 12%

俺の中の龍が吠え猛る。欲しい宝が目の前にあるのだ。奪い取つて何が悪い！ 力づくで頂いてしまえ!!

ああ、欲しい、欲しい、欲しい、この女が欲しく欲しくて、もう我慢なんて出来ない！ 外交何ぞ知ったことか!!

「エルメっ!!」

牙に裂かれるのも構わず、指を彼女の口内から強引に引き抜いた。代わりにその唇に吸い付き、舌を挿し込む。

「んむっ?!」

舌を噛まれた。彼女の牙が俺の舌を突き破り穴を開け、痛みの後に強烈な快感を与えてくる。

至近距離で見つめ合う深紅の瞳が、妖しい魅力で俺の頭の悩乱し、彼女にもつともつと血を与えたくて仕方がなくなる。

ああ、これは完全に術中に嵌まってしまった。エルメンヒルデのお願いならば、なんでも言うことを聞いてやりたくなってしまう。だが、それが同時に俺の欲望を際限なく高め、彼女を欲する以外の何もかもをどうでもよくさせていく。

絹を引き裂く音が室内に響いた。女の悲鳴ではなく、実際に俺の手が彼女のドレスを掴んで引き裂いたのだ。

抵抗しようともがくエルメの腕を抑え込み、いつの間にか顕現させていた『赤龍帝の籠手』を起動する。今のエルメの『力』は通常時の俺と同等クラス。旧ルシファーの十倍ほど。超越者級と言っている。

だが、

『Weish Draggon Balance Breaker!!!』

悪魔としての素の「力」ではない。『龍』としての俺の力はその遥か上に行く。

魔王の衣を纏うと、それをすぐさまはだけさせ肉棒を取り出す。霧や蝙蝠と化して逃走しようとするエルメを極限まで増大させた魔力で押さえつけ、魔力の術式でもって縛り上げる。

吸血鬼の牙に舌が裂かれる心地よさに溺れながら、唇を離して女の艶姿を見下ろす。

「エルメ！ エルメ!! エルメ！ お前が欲しくてたまらないんだ！」

「なに、を……!」

「そんなに誘惑しやがって、お望みのものをくれてやる！」

引き裂いたドレスの中から現れたエルメの下着。ドロワーズを強引にズリ下げようとする。

「やめッ！」

抵抗はあったが、俺の力にも彼女の力にも、ただの布が耐えられるはずがない。ビリッと剥ぎ取った布地を放り投げると、露わになった彼女の秘部に血走った目を向ける。

「はは、いいぞ。可愛いなエルメ！ お前もその気になってるじゃないか！」

エルメンヒルデ・カルンスタインのそこは無毛だった。

血の気のない病的な白い肌は毛に覆われることなく、彼女の興奮をダイレクトに見せつけてくる。パクパクとオスを求める秘裂が、薄暗い明りの下で粘性のぬめりを吐き出し始めていた。

『Transferr!!』

力づくで股を開かせ肉棒を押し込んだ。同時に譲渡するのは、彼女がたっぷりと俺にくれた『魅了』の効果によって芽生えたのだろう。「目を合わせた相手」に対する圧倒的な好意と、それによってどうしようもなく高まった俺の情欲だ。

「あああああつ、あつ、ああつ♡♡ 欲しい！ 欲しい！ 欲しい！

貴方が欲しくてたまらない！ なんでも言ってください！ ああつ

♡ 入って、動いて！ 犯してえ♡♡」

「飲め、吸え、いくらでも俺に噛みついて、血を啜れ！ 俺を喰えエルメ！」

彼女に覆いかぶさり、首筋を差し出すとすぐにガブリと噛みつかれた。

気持ちいい、気持ちいい。なんだこれは！

「ああつ、この味っ！ 力の、この力を感じるッ！ 頭が、脳髓がッ、あ

あつ♡♡ 溶けてしまいそうなおかしくなる！ あつ♡ そこ、そ

こを、んあつ♡」

「ああ、エルメ、エルメ！ 好きだ、大好きだ！ 愛してる！ お前を

くれ！ 俺にくれ！ 全部よこせ!!」

「こんあつ、こんなの、初めてッ♡ ああつダメ、ダメなのに、好きになつて……ああつ、もつとください、ください♡♡」

首筋に付けられた傷口から流れ出る血を、彼女の舌が舐めとるたびに快感の波が押し寄せて頭を犯される。すぐにも射精をしたい、叩き込みたいと、肉棒がいつもよりもずつと硬く大きくなっている。

ああ、出したい、すぐに注いでやりたい。だが、俺だけが先にイッてしまうなど、そんなことは出来ない。エルメを先に飛ばさなければ！

訳の分からない意地で発射を抑えながら、腰を振りたくる。ひんやりとした彼女の膣内は吸血鬼の表向きの高慢さとは裏腹に、オスの象

徴にまとわりついて離そうとはしてくれない。

「おおつ、もう我慢できない！ 出すぞ、出すぞエルメ！」

「んんあつ♡ んあうう♡ くだつ、ください、ください!!」

ぐつ、ぐぐぐつ、と根元から生じた昂ぶりが竿の中を突き進んでいく。

「くつ、あおッ！」

「あああつ♡ きて、る、なかに、あああつ♡ おとこに、あああつ、うああああつ♡♡」

エルメの奥にグリグリと押し付けながら、長い長い射精を続ける。これまでになかった放出の時間だ。快楽に腰が抜けそうになるのを歯を食いしばってこらえながら、ひたすらグラインドを続ける。

「あああつ♡ んあああああつ、んひい、ひい、ああおお♡ つ♡♡♡!!」

「イツたか？ イツたな？ ええ、イツたのか!？」

「ああ、はあ……。ああつ……。はあ……。つ♡ ああはあ……」

コクリと頷いて見せるエルメの姿に、たちまち肉欲が滾りなおした。

「あつ、また……。いえ、なぜ、こんな……。カーミラの女の、私が……。男に、無理矢理され、て……。んあつ♡」

蒼白の美貌に朱を差したエルメンヒルデの瞳に困惑と、隷属の悦楽を見た気がする。女尊主義の吸血鬼、カーミラ派の女性吸血鬼は普段どんなセックスをしているだろうか。

そんなことは分からないが、基本は女性上位なのではなからうか。だとすると、男に組み伏せられて好きにされてしまう経験は少ない、あるいはこれまでに一度も無かったことなのかもしれない。

従えてやりたい、これまで男を下に見て、見下して、従える立場だった女を、もつと、もつと犯してやりたい！

「エルメ、これが何か分かるか？」

俺は亜空間から取り出した指でつまめるサイズのモノを、エルメの眼前に突きつけた。

「それ、は……。まさか、やめ、やめてくだ……。んんううあ♡♡」

ガチガチに回復した肉棒で、エルメの膣内を蹂躞する。

『Transfer!!』

倍増させた官能に染め上げて抵抗できなくし、彼女の身体の声を聞きとって徹底的に責め犯す!

「ああっ、んっぐッ!」

また牙をたてられた。ああ、くおっ、気持ちいい。

「おぐっ、いいぞ、イイ、吸血鬼は、こん、な……!」

ダメだ、これは、俺も、俺もやってみたい。どんな気分なんだ、血を啜りながらの交尾は!

幸い手段はある。なら、やるしかないだろう。

「んぐっ、じゅううッ、んん、こく……!」

「エルメ、エルメ! お前を俺の下僕にするぞ! ああっ、お!」

一旦引き抜き、即座に『駒』を彼女の割れ目に押し込んだ。『兵士』! それもたったの一つ! それが光を放って、これだけで十分だと教えてくれている!

おかしいな。今のエルメンヒルデの『力』は、平時の俺に匹敵するというのに、この駒価値の判断はどんな基準だ!?

「んあああっ、悪魔の、これ、あ、んあっ♡ あくまに、され……なの、に、んふっ♡ んんんっ♡」

「エルメ、くれてやるぞ! 『力』を、『力』に酔っているんだな? お前は欲しいんだろう俺の『力』が、『血』が!」

どこの誰だったか、たしか「神は死んだ」とか言ったヤツの言葉だったか?

『豪華な家、美味しい食事、娯楽、あらゆるものを与えても人は満足しない。彼らが本当に求めているものは、圧倒的な「力」なのだから』とかそんな言葉があった気がする。

エルメンヒルデの牙が、喉が、瞳が、俺の血がもたらす『力』が欲しいと訴えてくる。俺が彼女に与えている快樂よりもなお強く!

「ああっ、欲しい! 欲しい! 欲しい!」

「俺を喰え! これからは、俺の血を飲んで生きていけ! 従属の対価に『力』をくれてやる!」

これから先、この女が口にするのは、生きる糧とするのは、俺の『血』

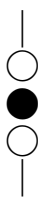
だけでいい。

「ああっ♡ くだ、さい、ください、ください!!」

「さあ、俺の『兵士』になれ!!」

「ああああっ! んああああっっ♡♡♡」

俺の首にいくつも穿たれた牙痕から、血が滴りエルメンヒルデを紅に染める。血濡れた口元を恍惚に緩めながら、エルメンヒルデは背をぐいっとそらして痙攣し、絶頂と共に悪魔になった。



さて、その後の話なのだが、当たり前のように俺とエルメは事後に二人して「どうしよう」と頭を抱えるハメになってしまった。

だが、まあやってしまったものはもうどうにもならん。俺はもうエルメを手放すつもりはないし、転生悪魔になってしまった彼女ももう吸血鬼の国にはいられない。

「カーミラの女王よ! 俺はこの女が気に入った! この契約の手付として頂いていく! 代わりになにかあれば、召喚するがいい!」

まああれだ、女尊主義吸血鬼の親玉のところを衣服をボロボロにしたエルメを抱えたまま乗り込んで、攫って行くぞ宣言。契約書の文言はそのままに、勝手に手付だか前金代わりにエルメを頂いていくと言いつつ搔つ攫って行くことにしたのであった。

「リアスさま! どうしてティアマトの財宝を取り返しに行ったはずが、吸血鬼を連れ帰っているのですか!」

「うん、まあ……俺がコイツを欲しくなっちゃって、どうにも我慢できなくなっただけだ」

で、三日ほどやりまくってからエルメを抱えてお家に帰ったら、嫁さんがプンスカになってしまった。

「私がいつものくせで獲物を魅了してしまっただけですので、お気になさらず」

「いや、俺が我慢できなくなっただけで」

「いえ、どうにも急に湧いてきた『力』が手放し難かったので、私が自分のものにしたくなっただけなのですの」

「いやいや、俺がエルメを下僕の『兵士』にしたんだらう？」

「いえいえ、私が貴方の『血』を自分のものにしたのです」

おのれ、あくまでも自分が主導権を持っていたのだと言い張るのか
エルメンヒルデ！ 女尊主義の吸血鬼め！

お前も事後に「どうしましょう」とか言ってたじゃないか。なのに、
さも計画通り！ みたいな顔と言い方しやがって！

好き、好き、大好き、愛してる、お前が欲しい、ずっと一緒に居ろ、
俺の血以外は飲むな、とか言いまくったせいが増長しやがって！

くそっ、だからその血の色の瞳でジツと見上げてくるなと……
まあ、いいか、こういうタイプの女はいなかったしな。

「会って間もないようですのかばい合うなんて……とても仲がよろ
しいようで、ずるいですわ」

はあ、可愛い。うちの嫁さん可愛い。ぷーっとふくれてる。

禁手状態でなら吸血鬼の能力が使えるようになったんだが……今
晩、血を吸いながら頂いてもいいかな。不死身だから出血多量で死亡
なんてこともないし。

よく考えたら、グレモリー家は元から女が上に来る家だったしな。
うん。

DX―2―7 バレンタインの吸血鬼

日暮れに目覚め、夜明けに眠りにつく者、それが吸血鬼である。

元吸血鬼の転生悪魔エルメンヒルデの一日は、日本時間の午後に始まる。

悪魔に転生したからといって吸血鬼の体質が失われたわけではないから、日光を避ける習性はそのままなのだ。悪魔も日光を苦手とするが、吸血鬼のそれは悪魔よりも強烈である。

悪魔に転生することによるデメリットはいくつかあるが、それらのほとんどは吸血鬼と共通しているため、転生悪魔となったことで彼女は特に弱点を増やしてはいなかった。元々が多すぎるとも言う。

「はい……」

小さく欠伸をし、寝所である棺桶の蓋を開け起き上がったエルメンヒルデがまずすることは、身だしなみを整えることだ。

日によつては仕えている『王』の手で色々と大変な状態にされてしまっていることもあるので、これは重要な目覚めの儀式となっていた。

吸血鬼は鏡に映らない。

そのため、エルメンヒルデの部屋に鏡はない。代わりに分身として蝙蝠を生成し、分身の眼で自身の姿を見る。

吸血鬼の生み出す蝙蝠は、夜行性の蝙蝠が持つ多く持つ音波の反響による位置測定能力の他に、十分な視力も備えている。吸血鬼の異能の内いくつかは視線を媒介とするので、分身たる蝙蝠にもそれが求められるのだ。

すると寝着を脱ぎ捨て裸身を晒す。小柄でスレンダーな姿が蝙蝠の眼に映った。同じ『王』に仕える他の眷属たちと比べて身体の一部の膨らみが乏しいが、エルメンヒルデは特に気にしていなかった。

『大きければいいというものではない。大事なのは顔とスタイルだ』

その点に関しては自信のあるエルメンヒルデであった。根拠もある。他の男からの評価は必要ないので何ら問題ない。

蝙蝠によって自身の姿を確認したところ、本日は一人寝用の棺桶で寝たこともあって、残念ながら特に気になるところは無かった。

それでも彼女は清潔を心掛け、毎朝のお手入れは欠かさない。肉体を綺麗に保つための方法は当然ながら水またはお湯による洗浄ではない。

吸血鬼は流れる水もまた苦手とするからだ。

転生悪魔となったことで、エルメンヒルデは悪魔の異能である魔力を得ている。彼女はその食事情の関係でバアル大王家の特性である『滅び』の力を扱えるので、消滅魔力を全身に纏わせサツと汚れを消し去った。

この一瞬で綺麗な身体だ。これは転生前と比べ大きく手間が減ったところだが、断じて手抜きではない。

吸血鬼の代謝は通常の生物とは異なる。

動く屍であるアンデッドを産み出してしまふこともある吸血鬼の肉体は、半ば屍に近い冷えた性質を備えているからだ。だからといって、別に臭くはない。腐っているわけではないのだから当然だ。

むしろ、どこかほのかに没薬のような匂いがすると好評である。吸血鬼は悪魔と同じく人間を誑かし、魅了することもある誘惑種族なのだから当たり前だろう。

ちなみに没薬というのは、ミイラ造りの防腐剤として使われることもある香料だ。エルメンヒルデは干からびてはいないが、動くミイラというものも世の中にはいるらしいので、吸血鬼とそれらは遠くて近い種族なのかもしれない。

なお純血の吸血鬼はトイレに行かない。口にするものが極端に限られているので、出て行くものがないから。でも、何故か涙や唾液等が出てしまう。

自己チェックを終えたところで、エルメンヒルデは身の回りの世話をさせているメイドたちを呼んだ。

悪魔の国において、エルメンヒルデ・カルンスタインは『悪魔の駒』や爵位こそ受け取っていないが、上級悪魔相当の扱いだ。これには彼女がこの悪魔の国にやって来た表向きの経緯が関係していた。

カルンスタイン家は、吸血鬼の国の二大派閥の一方、女性真祖を王と仰ぐカーミラ派の女王カーミラの血を引く家柄。人間の王国にたとえると、公爵家に相当するだろう。

エルメンヒルデは悪魔への転生前、そのカルンスタイン家に生まれた純血の高位吸血鬼だった。そしてほぼ鎖国状態のため出番は少なかったが、一応外交を担当する役目を負っていたのだ。

そんなエルメンヒルデが、魔王の弟にしてグレモリー公爵家の次期当主に攫われたというか、駆け落ちというか、何とも言い難いことになってしまったため、吸血鬼・悪魔双方の体裁もあって友好のための嫁入りということになっているのだ。

そういったこともあって、悪魔社会でのエルメンヒルデの扱いは悪くない。基本的に見下されることがないというのは、気分の良いものだ。

エルメンヒルデに呼ばれたメイドたちが、どこか怯えた様子で室内に入ってきた。

「リヴラクスさまは？」

「いつものお部屋でお待ちです」

「支度を」

思わず表情が綻びそうになるのを抑え、メイドたちに支度を命じる。

それからしばらくして、エルメンヒルデはやや速足で室外への扉を潜った。身支度に手間暇をかけ、着飾るのも貴族の女の務めである。メイドたちの動きが何故か忙しなかったが、別に急かしたわけではない。

目覚めの食事が一人きりで血液パックを啜る佻しいものではないというのが……少し嬉しいだけだ。生血の方が断然美味しいのだから。

吸血鬼の身体能力は高い。

基本的に、人外異形の種族の身体能力は人間のそれを大きく上回る。元純血の吸血鬼であり、今は悪魔でもあるエルメンヒルデもその例外ではない。

怪力などはよく知られた吸血鬼の能力の一つだ。吸血鬼の持つ多数の異能をある一つを除いて平均的なレベルで有するエルメンヒルデは、多少鍛えた程度の人間の戦士よりも高い運動能力を持っている……はずだ。

「あつ……」

通路を歩いていたエルメンヒルデは、何も無いところで転びそうになってしまった。そこを付き従っていたメイドに助けられたエルメンヒルデは、助けに入ったメイドを思わず睨みつけてしまう。

エルメンヒルデは、よく転びそうになる。高いところから飛び降りると、転んで尻もちをついてしまうことが多い。

その様子を見られ「ドジっ子属性だな」などと言われ、抱きかかえられながらニヤニヤされると、エルメンヒルデは屈辱のあまり頬が紅潮してしまうのだ。

まったくタイミングが悪かったとしか言いようがない。

人間を遥かに超える身体能力を持つはずの元吸血鬼の転生悪魔でありながら、よく転んでしまうエルメンヒルデ。彼女がそうだったとき近くに居たのが別の人物だったならば、この哀れなメイドのように睨まれることはなかっただろうに。

このリヴラクス・グレモリーの後宮^{ハイレム}では、よく発生する不幸な事故だ。エルメンヒルデ担当のメイドはこういつた目に遭うことが多い。

「おはよう」

「ええ、おはようございます」

毎度のトラブルもありつつ、食料係の居る部屋にたどり着いたエルメンヒルデがまずすることは、今日の食事の状態の確認である。

ちなみにメイドは室内には入ってこない。エルメンヒルデは下品ではないので、食事は秘めやかに二人きりでするものだと考えている。

吸血鬼の国では、飼い主である吸血鬼の食料となる人間を食料係と呼ぶ。

食料係の役目と仕事は、吸血鬼のために体調を整え良質な血液を提供することだ。そのため、食料係には絶対に食べてはならない物があ

る。

「ニンニクは食べていませんね？」

「いつも言っていることだが、お前を連れてきてからは一欠けらも口にしたことは無いぞ」

「当然のことですね。あなたは私の食料なのですから」

吸血鬼の宿敵である忌々しい人狼とは違って、エルメンヒルデはさほど鼻は利かない。犬畜生とは違うのだ。

だが、嫌いな物の臭いだけはよく分かるもの。吸血鬼にとってニンニクは毒物だ。だから、よくよく確認しなければならない。

うっかり口にしてしまうと、それはそれは酷いことになるのだから口臭のチェックは重要事項だ。

吸血鬼が啜るのは食料系の血液だが、そこにニンニクの成分が混じるのは許しがたいこと。だから、毎回食事前に食料系の口内を確認する必要がある。

食料系の腕がエルメンヒルデに絡みついてきた。エルメンヒルデも、彼の首に腕を回す。

「んんっ……」

ニンニクを口にしていないかどうか、その確認方法は簡単だ。唇を合わせ、舌を絡め合い、歯や歯茎その他、食料系の口内を端から端までチェックするだけ。

「んふう……んちゅっ……どうやら本当だったようですね」

確認を終えたらさっと距離を取る。

この食料係は生意気なので、血以外の体液を飲まそうとしてくることがある。油断ならない。

別に飲めないことは無いエルメンヒルデだけれど。

「毎回疑り深いな、どうやら俺はよほど信用がないらしい」

「うっかりあの大食い娘と焼き肉に行つて来たなどと言いますから。その都度確認は必要です」

小さなテーブルを挟んでの雑談は、いつものこと。食事には余裕も必要だ。

最近、エルメンヒルデは食料係に紅茶の淹れ方の指導をしている。

吸血鬼式の紅茶は、エルメンヒルデが口にできる数少ない物の一つ。

この淹れ方をマスターすることは、優秀な食料係になるための必須技能と言っている。

「どうかな？」

「ダメですね。まったくなっていません。ハッキリ言ってマズいです」

そう言いながら、エルメンヒルデは美味しくない紅茶の入ったカップを傾けていく。

味覚が違うのだから、ある程度は仕方がない。飲めるようになっただけマシだろう。

「ほら、ここに乘れ」

「自ら椅子になろうなんて、いい心掛けですね」

適度に会話を楽しんだ後は、食事の時間だ。

エルメンヒルデは食料係が大きく開いた両脚の間に立ち、彼の左脚に腰かけた。彼女の細い腰に回された男の左腕は、背もたれの代わりに代わりだ。

女尊男卑のカーミラ派吸血鬼の世界で育ったエルメンヒルデにとって、男とは女に従う者であり、女を支え奉仕する者である。ましてや、食料係などというものはどんな風に扱っても良い存在だ。

つまり、個人的にそこから啜るのが一番美味しいと思っっている首筋に二本の牙を突き立て、思うさま生き血を貪るべきなのだ。遠慮など無用。好き放題にしまえばいい。

「はあ……」

なまめかしい吐息と共にエルメンヒルデは視線を彼の首筋に定め、両手を男の首に絡めようとした。

そんな彼女の唇に触れるものがあつた。食料係の右手人差し指だ。上下の唇を押し開き、侵入してきた指先が牙をなぞる。

牙の先端に指の腹の柔らかい部分を押し当てられると、思わず噛んでしまう。ジワリとにじみ出て来た血潮がエルメンヒルデの舌の上に広がった。

どうやら、首を許してはくれないらしい。今日もまた、指で我慢さ

せられてしまう。悔しい、でもこの血の味は――。

脳髓が焼けるようだ。骨がぐずぐずと溶けていくよう。頭がおかしくなりそう、おかしくなる。くるう、狂わされてしまう。こんなもの一度味わってしまったら、もう離れられない。

エルメンヒルデの血色の瞳に妖しい光が灯った。見つめる者を魅了する吸血鬼の異能が、勝手に発動してしまう。

この血を独り占めにしたくなってしまおう。他の吸血鬼に渡したくない。自分だけのものにしてしまいたい。

吸血鬼は処女の血を好む。

いつからそうなってしまったのか分からないが、吸血鬼という種は『聖書の神話』から多大な影響を受けてしまっている。

処女や、女の穢れを知らない少年など、かの神話で清らかとされる者の血こそが、吸血鬼にとっての美味であり、強い力を与えてくれる代物になっていた。

この男には清らかさなどない。聖なる乙女などとは正反対の存在。淫蕩に耽る強大な悪魔であり、神を蹴散らそうとした龍の力を宿す男だ。

そのはずなのに病みつきになる。吸血鬼の様々な異能の中で、エルメンヒルデが唯一他者より抜きんでているのは、糧とした血の持ち主の力を再現する能力だ。

力の増大は癖になる。だが、この血の持つ心狂わせる味はそれだけでは説明できないものがあつた。

吸血鬼に血を吸われた者は、それに大きな悦びを覚えてしまう。

血を吸われることの快楽に溺れさせ、食事を円滑にするその作用は容易に性的な興奮に繋がる。

エルメンヒルデは鼻から甘えた音を漏らしながら、彼の瞳を見つめた。そこに宿る色合いに満足を覚えつつ、首筋の血管を名残惜しそうに視線で舐め、目を下へと向けていく。

男の両脚の間が盛り上がってきているのを目にすると、彼の指を舐めまわすエルメンヒルデの舌遣いが変わった。

突き立てた牙の周囲から湧いてくる血潮をチロチロと舐めとつて

いた動きから、より深く指を啜え込むんで指と指の間や血のにじみと関係の無い部分にも艶めかしく舌を巻きつけくすぐっていく。

スイツチの入ってしまったエルメンヒルデの様子に、男の股間はより一層大きく盛り上がる。

……………。

「あうん……………♡ はあう……………♡」

床に這いつくばらされたエルメンヒルデが、バックから犯されている。

土下座のように手を床に付き、はしたなく開いた口元から涎を垂らす様子にメイドたちを付き従えていたときの高慢さはない。高く上げた尻を振って男の激しい突き込みに応える様子は、性奉仕する奴隷のようだ。

下僕なのだ、エルメンヒルデは。

あの日に吸血鬼の国から攫われ、ここに連れて来られるまでの間にそれを思い知らされていた。

とつくに堕ちている。普段の彼女の『王』に対する言動は、彼の気を引くための媚態に過ぎない。そうした方が、まぐわう際に彼が悦ぶからと演じているだけだ。

ダメになる。ダメになってしまっている。頭がおかしくなってしまう。

男を従えるはずの女が、性玩具のように道具のように扱われてしまっている。そのことに妖しい倒錯的な悦びがこみ上げて来て、エルメンヒルデは快樂の泥沼に溺れていく。

「あーッ♡ ああ〜ッ♡♡」

ハンマーで杭を打ち付けるような衝撃が、エルメンヒルデの華奢な肢体を激しく揺らす。叩きつけられる肉杭で、子宮が壊されてしまいうそう。

それが善かった。善がり狂ってしまう。牝啼きする吸血鬼の姫君の嗜好を汲み取って、男は彼女を良い様に弄ぶのだ。

「口に出すぞ！ 飲み込めよ！」

男の腰振りが小刻みになり、最奥を振動させられたエルメンヒルデが一気に昇り詰めていく。

「ああつ♡ いや、いやあツ♡ なか、なかにい、ください。このまま、出してください♡♡！」

「ダメだ。お前はそのまま小突かれてイケ」

「ああつ♡ ひどいツツ♡ こんあ、こんあになってりゆ、の、に……ふつあ♡ はあツん♡ んんうゝゝツ♡」

止めを刺そうと膣から抜けそうになる限界まで腰を引いた男は、強烈な一撃をエルメンヒルデにお見舞いした。

「んっひいいい♡♡♡!!」

絶頂し痙攣するエルメンヒルデの膣内から男は素早く男根を抜き取ると、彼女の頭を床に押し付け、その唇に先端を押し付ける。

「しゃぶれ」

「ひいつ、ふうあ……♡ ふあい……♡ んっ、ちゅっ、れろ」

蕩けた顔のエルメンヒルデは、突きつけられた逸物に舌を這わせた。じゅぶじゅぶと肉棒が彼女の口内へと侵入していく。

彼女の牙に触れた部分が傷つくことも構わず、男は吸血鬼の喉奥まで肉棒をぶち込んだ。

「おゝ えう……♡」

苦鳴を漏らしながらも、エルメンヒルデは舐め奉仕をやめない。これが善いのだ。感じてしまう。

「出すぞ。良く味わって、一滴残らず飲み干せ。もし、こぼしたら……分かってるな？」

エルメンヒルデの口の中で牡の精が爆ぜた。咽るような性臭に気が狂う。

言われるままに口中を満たした白濁を舌の上で転がし味わってから、エルメンヒルデはそれをすべて飲み下していった……。

食後の一服に満足ご満悦のエルメンヒルデは、再び身だしなみを整

えると今度はグレモリー家のメイドを束ねるグレイファイアの所へと向かっていた。スケジュールの確認である。

胃袋の中身の比率が、もう吸血鬼というより精飲鬼になってしまっているがそこは気にしてはならない。

特別な紅茶と彼の体液がエルメンヒルデが口にするものの全てだ。

栄養補給直後のこの吸血鬼は、魔王クラスを遥かに凌駕した超越者クラスの魔力を漲らせている。そのため、エルメンヒルデ付きのメイドたちは毎日が戦々恐々だ。

本日は上機嫌なので問題ないが、おあずけをくらった日などは不機嫌極まりない。下手をして気に障ったりしたら、あっさり殺されてしまうのではないかとビクビクとしてしまう。

吸血鬼と悪魔は弱点など似たところもあるが、やはり異種族、文化が違う。異文化交流というのは何かと気を遣うものだ。特に吸血鬼の貴族の噂を聞いていれば、メイドたちが怯えてしまうのは仕方がないことだろう。

エルメンヒルデの方が、メイドたちを気に掛けていないということも大きい。貴族にとって使用人とは道具や家具と同じものなのだ。エルメンヒルデはそういった環境の中で長年過ごして来たため、それが常識となっている。

「本日は、緊急の予定は入っておりません」

エルメンヒルデにとって、この銀髪のメイド長グレイファイア・ルキフグスという存在はなかなか理解しがたい。

本人がメイドと言い張るのでメイドとして扱ってはいるが、魔王ルシファアの妻であり、自身の『王』の義理の姉でもある。正直、どういった態度で接するのが正解なのかがよく分からない存在だ。

非常に困る。ついでに言うと、このどう接したらいいのか分からない存在が、何故かりヴラクス・グレモリー眷属のスケジュール管理を行っていることにも困惑していた。どうしても、こうして話す機会が発生してしまう。

危うきに近寄らずとはいかないのだ。

「そうですか。では、あちらでの日没を待つて駒王学園に向かいます

ので」

「承知いたしました、エルメンヒルデさま」

エルメンヒルデは、大使的な存在でもある。

長らく他の勢力に対して鎖国状態の吸血鬼ではあるが、本音の所では外部勢力との繋がりが欲しくないわけではない。吸血鬼が生きていくためには人間の存在が不可欠であり、その国内には多数の人間が飼われている。自給自足のために繁殖なども行っているほどだ。

しかし、吸血鬼の国は人間にとって良い環境とは言えない。年がら年中、日光対策のために異能で発生させた霧に覆われている土地だ。いろいろと不便はある。

作物などもその一つ。日照不足が深刻なため、人間用の食料は外部からの輸入が重要になってくる。基本的にそれは秘密裏に人間の国家や商人との取引で賄っていたのだが、なにぶん人間の寿命というヤツは短すぎる。その上、寿命以外でも病などで簡単に死んでしまう。

人間はしよっちゅう戦争をしては同種同士で殺し合いもする。そのせいでせっかく作った輸入ルートが潰えてしまったことだって何度もあるのだ。

やはり人間のような低劣で野蛮な生物は、高貴なる吸血鬼によって家畜として管理・飼育されるべき存在なのだろう。それをするには現状の吸血鬼の勢力は力が足りなさすぎるのだけけれど。

一度人間の国を吸血鬼が裏から支配したことがあるのだが、そのときは天使や教会の介入によって台無しにされてしまっている。

人間だって家畜を飼っているではないか。吸血鬼がそれをすることの何が邪悪だというのか。それでいて人間同士の戦争には無関心に見えるのだから、天界勢力の者はロクでもないというのが元吸血鬼の貴族であるエルメンヒルデの見解だ。

といった事情もあり、人間よりはまだマシな悪魔との取引はどうだろうかという話がカーミラ派から出ている。

吸血鬼はやはりプライドが高い種族なので、他の異形との対等の関係での取引なんてことは受け入れられないと言う者が多い。だが、背に腹は代えられない。だけど、誇りを重んじる在り方を変えることも

また出来ない。

そんな感情の落しどころとして、カーミラ女王の末裔であり、今は悪魔の社会に居るエルメンヒルデという存在が丁度良かったのだろう。体裁のための方ではあるが、友好のために嫁入りして来ていることになっているのだから。

そうした役どころを求められたこともあり、エルメンヒルデはたまた外交担当魔王の城に出入りすることがある。

やたら馴れ馴れしく「エルメちゃん」などと魔王から呼ばれることには困惑してしまうのだが、魔王が魔法少女とは一体全体どう反応すれば良いのだろう。

メイド王妃グレイフィア・ルキフグスといい、魔王少女セラフオル・レヴィアタンといい悪魔の文化は理解に苦しむところも多い。ただ、『王』の付き合いで会った大王派貴族たちは分かりやすかった。エルメンヒルデとしては馴染み深いものを感じたものだ。

「縄張り用の服に着替えます」

部屋に戻り、メイドたちに着替えを命じる。最初から人間界に出かける格好をしても文句は言われただけけれど、着飾りたい気分になるときはあるものだ。たとえ二度手間、三度手間になったとしても。

人間界用の服装への着替えを終えたエルメンヒルデは、転移阻害の結界外から人間界へと空間跳躍した。

縄張りでの悪魔のお仕事の時間だ。といっても、ほとんど仕事をこなしてはいないのだけれど。

「今夜もつまらなそうな仕事ばかりですね」

抱っこしたい。アニメキャラのコスプレをして欲しい。そんな依頼が多数。

ふざけているのだろうか。もつと高貴なる吸血鬼に相応しい仕事があるはずだ。

こんなものは雇われの平民悪魔にでもやらせておけばいい。

「エルメが気に入るようなのはなかなか来ないのよ。主さんもそうだけれど、選り好みが激し過ぎるにゃん」

眷属の中で縄張りの管理を任されている者が、この『僧侶』の黒歌だ。仕事の時間前、人間界での拠点となつている駒王学園理事長邸宅で彼女に会うのはエルメンヒルデの日々の営みの一つとなつていた。

地凶の端にある小さな島国のマイナーな妖怪種族出身の転生悪魔だが、人外種族からの転生悪魔という共通点もありエルメンヒルデはそれなりに親しくしているつもりである。

「抱き着かないでもらえますか」

「主さんの匂いがするのよねー、エルメって」

食事の関係でエルメンヒルデの身体を構成するものは、かなり『王』に近くなつてしまつてゐる。そのためなのか、同じ眷属の女性から妙に親し気にされてしまう。

黒歌などはまだいいが、妖怪ハラペコ娘は喰い付いて来そうな気がして若干の恐怖を覚えてしまう。

恐るべきお腹ペコペコ娘も魔力量で押し切れなくもないエルメンヒルデではあるが、全長50mくらいの巨体と化した状態で大口を開けられるとやはり怖いものがある。

それに比べたらこの猫女は怖くはない。やや品性と知識にかけるところがあるが、それを補おうと陰で努力を重ねている様子なので別に嫌いでもない。ただ、だからといってベタベタされたいわけでもなかった。

「離してください。それから、語尾にわざとらしく『にゃん』と付けるのはいい加減やめたらどうですか？ 年若いとはいええ、もう大人なんでしょう?」

「私のキャラ全否定!」

エルメンヒルデは悠久を生きる吸血鬼の中にあつて、外部との交渉を任されていた身だ。それなりに齢を重ねている。

そのエルメンヒルデから見ると、黒歌はかなり年下だ。そのせいなのか、余計なお世話だろうとは思ふけれど、ときどきこうしたことも口にしてしまう。

じゃれてくる猫をあしらうと、エルメンヒルデは最近趣味の一つとしてゐる夜の街の散歩に出かけることにした。

受けたい仕事がないのだから仕方がない。仕事は選べと『王』から言われているので問題ないのだ。

「それでは散歩に行つてきますので」

「行つてらっしゃーい。見回りご苦労にやん」

仕事の量が少ない日は黒猫を肩にのせて出かけることもあるが、今日は件数が多いらしい。平民悪魔の管理をするのだろう黒歌を部屋に残し、エルメンヒルデは屋敷を後にした。

今日のエルメンヒルデの上着には黒いネコミミフードが付いている。

「見回りではなく、ただの散歩です」

屋敷から出たエルメンヒルデは、学園の敷地内にある林の中で無数の蝙蝠を生み出した。分身の一匹一匹に、上級悪魔程度の魔力を分け与える。

まだレーティングゲームの経験はないが、「分身は使い魔の規定に抵触しないので、人海戦術を取る際に有効ですわ!」というのがこの蝙蝠を見た参謀取りの『女王』からの評価であった。

リヴラクス・グレモリーの眷属、そしてその子世代、孫世代眷属には複数の上級悪魔が在籍しているので、縄張り範囲が単独の上級悪魔のみの場合よりもかなり広いらしい。駒王町周辺に大きく広がる縄張り内にエルメンヒルデの蝙蝠たちが散らばっていく。

眼を紅に光らせた上級悪魔クラスの蝙蝠たちが飛び回る駒王町周辺の夜は、今日も悪魔にとっては安全安心だ。

弱い下級悪魔たちは教会の戦士や墮天使たち、あるいはこの国土着の信仰から力を得る退魔士などに出会ったらあつさりど殺されてしまうかもしれない。それでは悪魔の仕事をする者が減ってしまう。

だから、平民悪魔のことも多少は気に掛けてやる必要がある。これも貴族の眷属たる者の務めだ。

吸血鬼には影がない。

古来より人間は夜の闇を恐れて来た。それは科学が発達し、文明的になったと嘯いている現在でも何ら変わらない。その証拠が闇を払おうとでも思っているのか、あちらこちらを無駄に照らす街灯たち

だ。

エルメンヒルデには影がない。街灯の下で人間とすれ違ったとき、そのことに違和感を覚える者もある程度はいるだろう。そう思って夜でも彼女は日傘を差していた。

傘の影だけが、アスファルトの上を滑っていく。

夜の日傘と、影がないこと、どちらの方が目立つのか。それは人間ではないエルメンヒルデにはよく分からない。血の詰まった袋に過ぎない存在の思考を理解するのは、高貴なる身には困難だ。

エルメンヒルデは吸血鬼の国の中だけで長く過ごし、来たので、外の世界が物珍しくて仕方がない。

超越者クラスの魔力を有する元吸血鬼が徘徊し、上級悪魔クラスの蝙蝠が飛び回る夜の駒王町。エルメンヒルデは人間たちの街並みを観察して回った。なお、グレモリー家とこの縄張りの地の神仏たちとの協定により、聖域には立ち入ってはいない。内部に興味はあるが、『王』のところにくれぐれも入らせないでくれと要請があったそうなので仕方がなかった。

ときに吸血鬼は恨み重なる教会の建物を根城にすることがあるが、この国の神々とはさして因縁もないので、あえて事を荒立てることもないだろう。興味はあるけれど。

「バレンタイン……？」

そうして歩き回っていると、とあるコンビニエンスストアのガラスに貼られたポスターが目にとまった。

バレンタインデー。家族や大切な人などに贈り物をする習慣がある日らしい。吸血鬼には縁がないものだ。その由来は諸説あるそうだが、忌々しい教会関係のものが多いので。

何故かこの日本という国では、女性が男性にチョコレートを贈る日という事になっていて、面白いが……。

「ふう……」

ポスターに書かれていることを読んで、エルメンヒルデはどこか考え込むような仕草をした。その後、ポケットから電話を取り出す。

「エルメンヒルデですが——」

人間界で遠方の相手と話をするのなら、通信魔方陣よりも電話を使う方が怪しまれない。それぐらいのことはエルメンヒルデもわきまえている。

通話の相手は、以前会った際エルメンヒルデにお菓子を振舞おうとしてきた者だ。人間界の学校に興味があるとかで、冥界の名門学校ではなく、人間たちの学校である駒王学園に通っている変わり者の悪魔令嬢。

なお、吸血鬼は食べられるものが極端に限られているので、エルメンヒルデはソーナ・クツキングの被害を受けてはいない。そのため、普通にお菓子作りが得意なのだと思っていた。

通話を終えたエルメンヒルデは、コンビニでは足りなかったので後日早めの時間に人間界に赴き、それらしき店で材料を購入した。

食料係ごときにくれてやるものなど、この程度で十分だろう。

ちよつとした気まぐれである。他意はない。

その日の前日、大きな袋をぶら下げたエルメンヒルデは、とある屋敷へ向かって歩き始めた。

DX―2―8 吸血鬼のホワイトデー（導入）

深夜。エルメンヒルデは駒王学園理事長邸の厨房にいた。

エプロンを身に着けてコンロの前に立ち、チョコレートを溶かしているところだ。

冥界の屋敷にも設備はあるが、そんなところでこの作業をするのは恥ずかし過ぎる。

エルメンヒルデは料理をしたことがない。血と紅茶しか口にしない吸血鬼には縁のないものだからだ。

だから知り合いの料理に詳しいと語っていた者に相談したのだが、その相談相手は恐ろしいほどの上級者だった。手本として見せられた完成品の出来栄えは素晴らしいもの様に見えたが、エルメンヒルデは味見の出来ない吸血鬼の身。

初心者では正直ついていくことが出来そうになかった。レシピ通りではなく、そこにオリジナリティを加えてこそなどと言われても味見も不可能なエルメンヒルデには難し過ぎる。塩と砂糖を間違えるなんて、ベタなことをしてしまいそうなのがエルメンヒルデなのだから。

ならばメイドにでも味見をさせてはどうかと考えもした。

だが、どうして使用人風情に自身の初料理を食べさせることなどできようか。あり得ない話だ。

エルメンヒルデは自身のドジっぷりを一応理解している。凝ったことをしようとすれば、必ずどこかで躓くだろう。

お手本のような綺麗な品を完成させることは困難極まるに違いない。

失敗作を渡すなどあり得ない。恥をかきたくはないのだ。といって、他の誰かに食べさせたいとは思えない。

考えた末の結論は――無難に行くことだった。

余計な材料は加えない。溶かして型に流し込み、形状を変化させるだけ。この程度ならば問題ないだろう。

味を確認することは出来ないが、加熱と冷却の工程での変化程度で

あれば問題ないと本にも書かれていた。購入した材料の大半が無駄になってしまったが、そんな物は猫にでもくれてやればいいのだ。妹猫は大食いの甘党なので、喜んで食べてしまうことだろう。

「完成ですね」

しばらくすると、そこには出来上がった大きなハート形を眺めるエルメンヒルデの姿があった。

流し込もうとして躓いてこぼしてしまった物、ラツピングの際にへし折ってしまった物は密かに処分する予定だ。無難にことを進めたおかげで、失敗は二度ほどで済んだらしい。

いそいそと転移魔方陣を展開し冥界に帰還したはずのエルメンヒルデは、グレモリー城内を慎重に歩いていた。ここで転んで壊すわけにはいかない、と。亜空間にでも仕舞いこめばいい話なのだが、そのときの彼女はそこまで頭が回っていなかった。

いざとなると……なんだかとても恥ずかしい。吸血鬼がこんな物を用意するなんて、おかしな話だ。笑われてしまうかもしれない。

やっぱりやめておこうか。いや、でもここまでしておいて捨てるなんて……。

メイドに確認した目当ての人物がいると思われる部屋に向かうエルメンヒルデの頭の中では、退こうか進もうかと思考がグルグル。それでも彼女の足はゆつくりとそちらへと向かっていた。

その様子をハラハラしながら見守るエルメンヒルデ付きメイドたちを引き連れながら。

どうして自分は、こんなにおかしくなってしまったのだろう。

周囲を確認し、足元に気を付け、ラツピング済みのチョコレートをしつかと握りしめながらエルメンヒルデは想う。

ああ、きっとそれはあの三日間のせいなのだろう……と。

それは、エルメンヒルデ・カルンスタインが吸血鬼の国から連れ出され、悪魔の国に着くまでの三日間の出来事。

魔力による転移を用いれば一瞬で済むところを三日。

その一瞬と三日の差分は、彼女に『悪魔の駒』を埋め込んだ紅の悪魔リヴラクス・グレモリーによって、エルメンヒルデが躡けられた時間でもある。

「どこへ連れていくつもりですか？」

自身の手を引くりヴラクスへと向けるエルメンヒルデの声は、厳しいものだ。

血に酔ってしまった末の行為。それに後悔が無いと言えれば嘘になる。

一滴。たった一滴彼の血を口にした瞬間、これまで味わったことの無かった癖のあり過ぎるその味の虜になっていた。そして、無意識にこの食料を自分のものにしてしまうとエルメンヒルデは魅了の魔眼を行使してしまっただ。

それでこの男を言いなりに出来ていたのなら良かったが、魅了を受けたリヴラクスはただただ欲情した。

その上この男は、かつて白き毒龍アルビオン・グウィバーの恐るべき『減少』毒を振り払ったという赤き龍の帝王の『譲渡』の力を行使し、エルメンヒルデが仕掛けた魅了を彼女自身に返してさえきたのだ。

神滅具『赤龍帝の籠手』ブラスレット・ギアを所有する超越者クラスの悪魔。なんと恐ろしい力の化身なのだろう。

エルメンヒルデの魅了によって情欲を滾らせその気になってしまった男と、自身の放った魅了の視線を跳ね返されて逆に魅了されてしまった女。その結果が、エルメンヒルデ・カルンスタインの転生悪魔化だ。

血の味に酔って理性が飛んでしまい、そのせいで交渉相手に攻撃ともとれる行動をとってしまった。そこから返り討ちにされて悪魔の下僕になってしまうなど、大恥もいいところ。

今のエルメンヒルデはそんな自身を情けなく思っていた。

「悪魔の国への正式な入国には手続きが必要だ。その準備期間の間、この島で過ごすかと思つてな。出会ったばかりでお互いのことも良く知らないのだから、話し合うこともあるだろう」

この男は強引だ。エルメンヒルデの手を強い力で握ってぐいぐいと引つ張っていく。

魅了の影響下であったとはいえ既に了承済みで下僕になってしまった身の上なので、それも仕方がないことではあるのだけれど。自分で仕掛けてしまったことの結果だ、文句も言えない。

女尊男卑社会のカーミラ派吸血鬼社会で生まれ育ったエルメンヒルデにとって、こういった扱いはある種新鮮なものではあった。

女が上に立って判断・決定し、男はそれに従って補佐に努める。そんな社会しかエルメンヒルデは知らなかった。

無言のうちに自分の決めたことに従えと伝えてくるこの男の態度に、反発すると同時に何かそれとは違う心の動きを覚えてしまっている。そのことをエルメンヒルデは自覚していた。

「ですから、どこに向かっているのかと聞いているのです」

自身の行動までも勝手に決められてしまう。そのことはもうこうなってしまった以上構わない。転生悪魔となり、この男の眷属となり、下僕の身分となったのだ、そのことについては受け入れるしかない。

ただ、説明ぐらいいは欲しいものだ。なぜ、こんなにも暑い場所を歩かされているのかぐらいいは教えてもらってもいいはず。

リヴラクスに手を引かれ、エルメンヒルデが歩いている場所。そこは年中無休で霧に覆われ、太陽光を避けて生きて来た吸血鬼にとつては大変暑い場所だった。

「別荘だ。この島は、前に海遊びをしようと思つて購入した島でな。俺の別荘があるんだ。冥界行きの列車の準備が整うまで、そこで過ごす」

赤道付近の常夏の島。昼間には青い空に白い雲が流れ、サンサンと太陽光が降り注ぎ、しょつちゅう豪雨や暴風が襲つてきて流れる水だらけになる。そうでなくても、周辺は海流渦巻く海、海、海。

生い茂る植物たち。やかましくギャーギャーと鳴き声が樹々の間に響き、息をひそめて潜む動物の気配、我関せずと生を営む昆虫たちの立てる微小な活動音。

リヴラクスに連れられてエルメンヒルデが転移させられた場所は、吸血鬼にはまったく縁のなさそうな場所だった。今が夜でなければ、エルメンヒルデは全身を布で覆って歩かなければならなかったところだ。昼間だったら日光がヤバイですよ。

説明を聞くと、ここは元々は無人島だったようだがリヴラクスが購入した後に整備されたらしく今ではビーチもあれば森の中に道もつけられている。人間には認識できないように結界も張られているらしい。

「あつ……」

足元は土道だが、別にそうデコボコとしているわけではない。それなのに、エルメンヒルデは転びかけた。

彼女の手を引いていたリヴラクスは、そこをすかさず抱き留める。

「エルメは案外甘えてくるな」

さつきからこうなのだ。もう何度も転びかけて、その度に抱き着くようにして支えられてしまっている。

それがどうやらリヴラクスからはエルメンヒルデが甘えているように見えるらしく、いちいち喜ばれてしまっていた。

「べ、別にわざと転びそうなふりをしているわけではないません！」

「いや、それはさすがに……ああ、土道を歩いたことがないのか？ もしかして」

エルメンヒルデは基本的に屋内暮らし。街に出ても舗装されたところばかりを歩く身分だ。とはいえ、土を踏んだことぐらいはある。

単にこの吸血鬼はよくコケるだけだ。何もないとこでも。

「それぐらいはあります。これは……そう、貴方が手を引くから、バランスが悪くなってしまうからです。逃げたりはしませんから、離してください」

「ん？ そうか」

自分から要求しておきながら、あつきりと手を離されると何やら残念な気持ちになってくるから不思議なものだ。

エルメンヒルデはお嬢様気質なので、ワガママなところもある。

（私の手を取れる男などそうはいないので、もう少し惜しんで

も良いでしように)

何故か湧き上がって来た不満を、エルメンヒルデは頭を左右に振って追い出そうとした。

一度寝たくらいで、何を絆されかかっているというのか。すでに『駒』を入れられてしまっている以上、関係は良好なものの方が良いのだからそれで困るわけではないのだけけれど。

「思っていたよりもみすばらしい建物ですね」

その後も何度か転びそうになりつつ、どうにかたどり着いた仮の宿は貧相な代物だった。

いわゆるコテージだ。一般庶民からすれば十分すぎる代物だが、吸血鬼の真相カーミラ女王の血を引く最高峰の名門カルンスタイン家のエルメンヒルデには相応しくない。

エルメンヒルデにとつては不本意なことだが、彼女の『主』となつた悪魔の名門グレモリー公爵家次期当主リヴラクスにもそれは言えること。

貴族たる者、身に着ける品から所有する物件まで、その家の格に合わせたものが求められる。それは品位において吸血鬼に劣るとはいえ、似たような貴族制度を維持している悪魔でも同じはずだ。

「まあ、このぐらいの方が雰囲気が出るからな。それにこの島全体が庭の一部と考えれば、そこまでみすばらしくも感じないだろう?」

そう言つて島の面積を聞かされると、なるほど悪くないように思われた。吸血鬼の国は面積が狭いので、むしろ広すぎるとさえ感じてしまう。

悪魔の住まう冥界の面積は地球表面と同程度とのことなので、その辺りの感覚が吸血鬼とは違うのだろう。

「なるほど、庭の一部、壁はありますがガゼボのようなものですか」

ガゼボとは西洋風の庭園に設置される壁がなく屋根と柱だけがあるような日除けを兼ねた休憩設備だ。屋根の下にテーブルや椅子などが置かれていることも多い。

日光と縁のない吸血鬼の庭園には、日除けは設置されないけれど、エルメンヒルデは知識としてはそれを知っていた。

「冥界の太陽は魔力で生成した造り物だから、エルメが光を浴びても問題ないはずだ」

「ええ、それは知っています。偽物とはいえ、少し楽しみですね。なんでも空が紫色なのだから——」

そんな会話をしつつ、エルメンヒルデは何気なくその建物の中に入った。

建物の内部も木材が剥き出しだ。これまでのエルメンヒルデの生活圏にはなかった風情がある。

どうやら電気も通っているようで——どちらも闇を見通せるので必要ないが——電灯も点けられるし、人間のような食事をしないエルメンヒルデには関係ないが冷蔵庫も稼働していた。

「俺はそこまで吸血鬼について詳しく無くてな。軽く調べた程度だ。だから、まずは情報交換といかないか？ 文化や生態も違うだろうか、その辺りをすり合わせておきたい。事前に連絡して整えさせておく必要もある」

「そうですね——」

吸血鬼は多様で有用な特性を所持する一方で、弱点も多い。そしてそれらを保有するために人間とは異なる生活習慣も多い。

話してみると悪魔は人間と似通った生活様式のように、やはり吸血鬼とは異なっている部分が多いようだった。

たとえば、血と紅茶しか口にしない吸血鬼はトイレに行かなかつたりする。仮にリヴラクスが吸血鬼の国に滞在することがあった場合、吸血鬼貴族用の区画にはトイレがないので、いちいち食糧係（餌となる人間）用の区画まで移動しなければならなかつただろう。

「ああ、そういうこともあるのか……。他の眷属にもトイレに行かない娘はいるが、あちらは岩でも鉄でも概念でも完全消化だから少し違う……。か？」

何それ怖い。岩や鉄でもバリバリ食べてしまい、それを完全に消化しきってしまうから排泄必要なしの眷属だなんて……。この男、一体どんな眷属を引き連れているのだろうか。

エルメンヒルデは恐れ半分、興味半分でこれから眷属仲間となる同

僚について訊ねた。

「悪魔、それも上級悪魔……貴族が多いのですね」

現在の眷属構成を聞いてみれば、そう悪くないように思える。下品で下劣な者と同列に扱われることがないようで少し安心した。特に忌々しい人狼がいらないというのが良い。

かつての大戦以降、悪魔は『悪魔の駒』によって節操なく他種族を自陣に取り込んでいると聞いていたので、少し心配していたのだ。

毛深く獣臭く卑しい人狼たちは吸血鬼にとって長年の宿敵。

エルメンヒルデはあの畜生種族から転生悪魔となった者がそれなの数いると聞いていたので、場合によっては人狼と並んで生活しなければならぬのだろうかと考えていたのだ。

「人狼は苦手か」

男は考え込むような顔を見せる。

「苦手ではなく嫌いなだけです。眷属に迎える予定でもあるのですか？」

だとしたら問題だ。悪魔と堕天使は冥界で長年小競り合いを続けてきているはず。その堕天使の血を引く娘を眷属に迎えている男だ。

人狼と仲良くしろなどと言われる可能性もある。

「いや、眷属ではないが……どうしてもダメか？」

「どうということですか？」

聞いてみると、どうやら彼の後宮で働いているメイドの中に狼男の子孫がいるらしい。

毛や臭いが苦手というわけではなく、これまでの種族的対立関係による好き嫌いの問題なので、顔を合わせなければなんとかなるだろう。

「そういう話か。分かった、配置について考えるように言っておこう」

この男、噂よりは話を通じるようだ。一夜の過ちのせいで今後長く付き合っていかなければならなくなってしまったエルメンヒルデは、それを確認してホッと一息。

ただし、女好きについては噂通りだったらしい。

眷属の構成、後宮の存在、そこに勤めるメイドたち……話しぶりか

らかなりの数の女に手を出していることが分かる。

現に今も――。

「ところで、いい加減離れてくれませんか？」

このコテージについてソファに腰を下ろして話し始めて以降、リヴラクスはずつとエルメンヒルデの隣に座っている。しかも、自然に腰に腕を回して身体を寄せられている状態だ。

断わりもなく男からこんなことをされるなんて、エルメンヒルデはこれまで経験したことがない。

「いいな……、やはりエルメはその顔が似合う。話すのは明日でもいいか。日もあることだしな」

リヴラクスが身体をエルメンヒルデ方へと向ける。腰に回された腕に力が入って、「離して」と言った言葉とは逆に引き寄せられる。

頬に片手を添えられると、エルメンヒルデのツンと尖った耳に朱がさした。

「そう嫌がるな。分かっているだろう？」

エルメンヒルデはすでに眷属、下僕にされてしまった身の上だ。行為を拒否出来ないと理解してはいる。

ただ、どうにも男性が主体になる形が受け入れがたい。あちらが『王』で、こちらは『兵士』と分かっているのだけけれど。

「あつ……ちよつと……」

思わず顔を逸らして迫る唇を避けると、首筋に吸い付かれた。音を立てて吸われてしまう。さらに何か硬く尖ったものが、チクリとした刺激を……首に犬歯を立てられ、軽く噛まれている。

後頭部から腰に掛けてゾクゾクとしたものが奔り、エルメンヒルデはブルリと身を震わせた。

「俺はお前が『はぐれ』にならないかと心配していてな」

ソファの上で押し倒された。男の体重が押し掛かってくる。強い力で身体を抱え込まれ、顔を無理矢理上向かされる。

『はぐれ悪魔』になどなりません。よほど扱いが悪いのでなければ、あり得ない選択です」

悪魔社会の説明の中で『はぐれ悪魔』についても聞かされていた。

主を裏切り逃走した転生悪魔は——ほとんどの場合において処分される。お尋ね者とされて追い回され、いずれ殺されるのだ。

『悪魔の駒』によって種族の変わってしまったエルメンヒルデは、もう吸血鬼の国には戻れない。その上で悪魔からも『はぐれ』て追われ暮らす放浪生活など考えたくもない。

まともな待遇を受けている者が取るとは思えない行動だ。

「それは良かった。なら、存分に愛し合おう」

「くっ……このッ。結局こうするつもりじゃないですか!」

受け入れなければ『はぐれ』そうと言って犯し。受け入れたらそのまま犯される。

この男はエルメンヒルデがどう言っても彼女と交わるつもりなのだ。

「お前の望みを叶えてやるだけだ。もちろん俺の欲もな」

「何を言って……あつ、血……」

リヴラクスが自らの唇を噛み切った。傷口から滲み出たあの血が玉の雫となつてエルメンヒルデの唇に落ちてくる。

あの味。脳髓が蕩けるような。エルメンヒルデを狂わせる魔性の紅。

その味わいを覚えてしまったエルメンヒルデの舌は勝手に動いて、自分の唇を舐めていた。

「ああつ、この味……これ、ダメになつてしまう……」

すると、吸血鬼の深紅の瞳がこの極上の獲物を自分のものにしようと輝き始めてしまう。

このままでは、またおかしくなつてしまう。お互いに魅了し合つて失敗したアレの二の舞だ。

(また、この男に好き放題されてしまう。目を、目を閉じないと……)「はんっ……んっ、ちゅっ……」

頬を染め、唇を唾液に濡らし、瞳を閉ざした蒼白の美貌を持つ華奢な元吸血鬼。

悪魔は彼女の上に覆いかぶさると、唇を重ね始めた。

血は拒めない。

DX―2―9 吸血鬼のホワイトデー（前戯）

海遊び用に購入した島。その島の森に建てたコテージ内に設置した男女が行為を行うのに十分な大きさ広さを持たせたソファの上。リヴラクスは小柄な美少女を組み敷いて、その身体を抱きしめ、なぞり堪能し始めていた。

お互い服は既に脱いでいる。亜空間に何着か収納しているリヴラクスはともかく、エルメンヒルデは吸血鬼の国から攫われてくる際に一着しか服を持ち出していないので汚したくはなかったのだ。

裸の男と女が抱き合い、肌が触れ合う。

エルメンヒルデ・カルンスタイン。身長150cm、体重42kg、B75W56H80のBカップ。冥界に連れて行った後、既製品で当座の衣服を用意させるために聞きだした彼女のスタイルだ。

リヴラクスが理事長をしている日本の駒王学園の生徒で言えば初等部高学年程度の身長と体重。それでいて、彼女のスタイルは異形の者らしく大人のそれ。

「ん……んんっ……」

ただし、彼女の股間は無毛だった。排泄を必要とせず、汗もほとんどかかないだろう吸血鬼という種には必要ないものなのだろうか。それともエルメンヒルデの個人的な特徴なのだろうか。

リヴラクスにはその判断が付かなかったが、小さく細い体躯の彼女がそこがつるりとしていると、童女を犯しているような気がして背徳感が湧き上がってくる。それで萎えるような繊細な男の象徴ではなかったけれど。

エルメンヒルデは長い寿命を持つ吸血鬼の中にあつて、暴虐なる『紫紅の龍帝』との折衝を任された者。見た目通りの年齢ではなく、リヴラクスよりもずっと年上だ。

前世の祖母より年上で、それでいてロリっぽい女など異形の世界では珍しいことではないので、男の主砲は元気に装填中だ。

「ふっ、ん……」

男の手のひらと指が、彼女の太腿から尻を徹って腰までを幾度も往

復する。細く蒼白い脚はスラリと長く、尻は小振りだが丸みを帯びてキユツと上がり、腰の括れは男の情欲を誘うに足りるラインを描いている。余分な贅肉もむくみもたるみもないスレンダーなボディだ。

エルメンヒルデの胸のふくらみは控えめだが、普段豊満な女に囲まれているリヴラクスとしてはその慎ましさにどこか懐かしいものを覚えていた。彼女の身体の上に押し掛かって背中に腕を回し、胸と胸を合わせてきつく抱きしめるとリヴラクスの胸板の上で潰れる柔らかな乳肉の感触が確かにある。

細いが痩せ過ぎてはいない。ガリガリにやせ細った骨ほねしさはなく、柔らかさと丸みをしっかりと帯びた彼女の身体は、単純に骨格からして細く小さいのだろう。

「吸血鬼の身体は冷たいな」

ウェーブのかかった薄い色合いの金糸のような髪をソファの上に散らす彼女の唇は、リヴラクスの血と二人の唾液に塗れ淫靡に紅く濡れ光っていた。

強く抱きしめれば折れてしまいそうな脆く儂そうな線の細さ、男の両腕ですっぽりと抱え込める華奢で小さな体が庇護欲を煽る。それでいて大人の女性の身体が持つ曲線の魅力が情欲を湧き勃たせる。

「気に入らなければ、離せばいいでしょう」

唇を吸い上げ、散々に唾液を飲ませた時点でエルメンヒルデの肢体からは力が抜けていた。吸血鬼らしくプライドの高い彼女だが、既に眷属下僕悪魔であることを理解しているため、吸血鬼の特殊能力や、悪魔に転生したことによって得た魔力を用いた抵抗はない。

「離すものか。気に入っていると云っているんだ」

エルメンヒルデは両の瞳をきつく閉じているので、彼女の深紅の双眸に宿る感情の色は分からない。

生命の熱のない吸血鬼の身体は冷たく蒼白いものだ。それは悪魔に転生しても変わらず、命のオーラも血の気もないまま変わっていない。整い過ぎた美貌と生気の無いエルメンヒルデを人形にたとえる者もいるだろう。

だが、今の彼女の肌は薄っすらと赤く色づいていて、腕の中の女が

性的な興奮状態にあることをリヴラクスに教えてくれていた。そして、その彼女の発情度合いは強く抱きしめるほどに、力づくで押さえつけるほどに、高まっているように思われてならない。

「そうですね……。でしたら、売り飛ばされる心配はしなくても良さそうですね」

「トレードに出される心配をしていたのか？」

「当然の憂慮です。私は……。だから……。とにかく、他の悪魔に引き渡されては、契約が履行されませんから。詐欺同然です」

上級悪魔の間では、お互いの眷属を交換したり、売却するといった行為が行われていることはエルメンヒルデも承知していた。

トレードによって他の上級悪魔の眷属とされてしまった際にも以前の契約内容が引き継がれるようだが、リヴラクス・グレモリーと他の上級悪魔とでは、エルメンヒルデにとっての重要事が違い過ぎる。

現悪魔の名門六家の内、最高峰の大王バアル家と現ルシファー輩出のグレモリー家。その二つの血を引いた、超越者クラスの魔力を保有する者。さらに、転生により人間の魂を宿したことで、神滅具『赤龍帝の籠手』までも所有している男。

これほどの希少な血を持つ者などそうはいない。これに勝るほどの血があるだろうか。血を条件に悪魔へと転ずる契約をしたことになってしまったエルメンヒルデにとって、この男以外の主などあり得ない話だ。

「俺はお前が『はぐれ』て出て行くことを心配し、お前は捨てられてしまうことを恐れている。つまり、俺たちはどちらも離れたくないと思っているわけだ。両思いだな」

「訳の分からないことを……。私は単に貴方以上の食糧係がいそうにないと考えているだけです。悪魔の中での立場も高い位置にあるようですよ」

あくまでも、打算、取引。エルメンヒルデがこの男に従うのは、もう後戻りできない状況になってしまったから。そして、転生悪魔として生きていくにあたって都合が良さそうだからだ。

それ以外の理由はない。あの過ちも、あの時に口にした言葉も、魅

了の魔眼がお互いに作用してしまったせいではないはずだ。

「そうか。なら、お前が俺の下に居続けたいと思えるようにしてやらないといけないな」

そう考え瞳を閉じたままであるエルメンヒルデの尖った耳に、男の手がするりと触れた。目を閉じて視覚を遮っているせいか、彼の手が触れている場所に意識が集中してしまう。

耳から始まり、首筋、鎖骨、胸の周囲、脇腹へと指先がかすめるように伝っていく。下腹部に到達した男の指は、エルメンヒルデの無毛の股間の周辺を通り過ぎて行った。

太腿、膝裏、ふくらはぎ、足首に足の裏、足指までもを何かをそつと探るようにリヴラクスは撫でまわす。

「犯すなら、犯せばいいでしょう？　下僕の身ですから、逆らいはしません」

「なんだ、早く挿れて欲しいのか？」

「ふっ、う……ち、違います」

身体中をまさぐられてみると、くすぐったさと共にむずむずとした感覚が湧き上がって来てしまう。

エルメンヒルデはカーミラ派にあつて外交を任されていた身。それなりに年齢も重ねていたので、男女の行為の経験もある。

ただ、その際も女性が主導権を握るべきであるという考えがあつたので、この男にいいようにされている状況には慣れないものがあつた。

いつそ自分から積極的に動いてもいいくらいだ。どうせ下僕の身の上、求められれば従うしかない。ならば、自分から動いてもいいはず。そう思うのに、なぜか任せてみたい、委ねてみたいと思つてしまつていた。

「こうしてじっくりと触れてみると、やはり美しい身体だな。肌も滑らかだ」

エルメンヒルデは褒められるのには慣れていた。こんな女の身体を評価、値踏みするような言葉で喜ぶほど初心ではない。

それなのに、つい声が漏れてしまう。

「あつ、んん……んん……」

エルメンヒルデの視界は閉ざされていて、彼の視線がどこに向いているのか分からない。

ただ、彼に触れられている場所がとても熱い。今触れられている場所もそうだが、なぞられた跡に熱が残っているように感じてしまう。

(ああつ……どうして、こんな……)

全身を筆先で刷くように触れ回っていた手が、再び頬に戻って来た。上下の唇の間をすつと撫でていく指の腹の感触に、エルメンヒルデは僅かに唇を開いてしまう。口の中で舌が踊ってしまった。

「エルメはずいぶん敏感なようだな。感じ始めているなら、素直に声を出してくれた方が俺は嬉しいぞ」

冷たい血の流れる吸血鬼の男と比べると、リヴラクスの手は熱い。その熱が肌からエルメンヒルデの身体の奥へと伝わってきているようだった。

これまでになく肌の感覚が敏感になっている。目を閉じているせいもあるのだろうが、男の指の動きに合わせていちいち身体が反応してしまう。

「べ、別に感じてなんか……いませんですけど」

相手は『王』だ。エルメンヒルデがこれから従って行かなくてはいけない相手だ。その男が素直に感じていると言った方が嬉しいと言うのなら、それに合わせてやればいい。

そうは思うものの、そのはずなのだけれど、何故かエルメンヒルデの口からはそういった言葉が出てこなかった。

「そうは見えないが……エルメがそう言うのならそうなんだろうな。なら、少し小道具を使わせてもらおうとするか」

エルメンヒルデは、魔力のゆらぎのようなものを感知した。リヴラクスが亜空間から物を取り出したり仕舞ったりするときを感じる気配のようなものだ。

「なにを……？」

「気になるなら目を開けるといい」

「嫌です」

自分自身でも抑えきれない衝動が、エルメンヒルデの内で渦巻いていた。捕食者の本能がどうしてもこの男に魅了を仕掛けようとしてしまっている。

言われるままに瞼を上げて、もしも目が合ってしまったら……昨夜の二の舞だ。理性が消失して「愛している、愛しています」と繰り返し叫んでしまうような事態は避けたかった。

「なに、ただのマッサージ用のオイルだ」

頑固に目を閉じたままのエルメンヒルデを見て、リヴラクスは無理に目を開かせようとはしなかった。

最初のタッチで彼女の感じるポイントを探り終えていたからだ。あとはとろとろに身体も心も解してしまっただけでいい。

好きにすればいいと観念してソファに横たわるエルメンヒルデの裸身。男は小瓶からとろりと垂れ落ちたオイルを手に取ると、彼女にぬたくり始めた。

「んう……んんう……」

つるりとした首筋から鎖骨、慎ましやかに盛り上がった乳房の上辺りを男の手が這いまわる。ぬるりとしたオイルが擦り込まれていくと、エルメンヒルデはピクリとピクリと反応し始めた。

指の腹で押し込むように、手のひらで擦るようと、特に首筋への愛撫は念入りだった。丁度、吸血鬼が獲物の血を啜るポイント付近を丁寧に丁寧に男の指が揉み解していく。

指と肌の間にオイルが挟まったことで密着度合いが増し、男の熱も良く伝わってくるようになっていた。

触れられている場所から、身体が熱く敏感に変えられていってしまう……。

「あつ、いやあ……こん、な……あんっ……んっ……あつ」

思わずエルメンヒルデが上げてしまった声に満足したのか、男の手は脇の下や肋骨、胸の周囲へと移動していった。乳輪や乳首には触れず、その周辺を指先がぬるりぬるりと撫でていく。特に脇から乳房の中途までの動きを何度も何度も繰り返される。

エルメンヒルデの呼吸に熱っぽいものが混じり始め、「はあ……、

はあー……」と荒く小刻みになり始めていた。緊張していた身体から力が抜け始め、男の手に身を任せるかのように手足が垂れる。白く細い彼女の両脚が薄っすらと桜色に染まり出し、紅潮が深まるにつれて股が開き気味になっていった。

「そろそろ可愛らしいこころも解してやろう」

「あはあ……っ！」

乳首をちよんとつつかれると、ビクッと身体が跳ねてしまう。刺激を受けたことでエルメンヒルデの意識が胸に集中する。

そのタイミングを見計らって、男の手が彼女の胸を揉み解し始めた。

敏感な乳首には触れず、その周囲だけを狙って指が食い込んでくる。

「はああん……あああ……あふう……」

柔いふくらみをもてあそばされ、エルメンヒルデの小さな唇が勝手に開き甘い声が漏れ出てしまう。

彼女の頭に靄がかかり、驚きが広がっていく。これまでこんなに胸で感じたことは無かったからだ。

「だいぶ善くなってきたみたいだな」

女の昂ぶりを確信した声音が降ってくる。男の指遣いはその確信に後押しされて激しくなっていく。先ほどまでの丁寧で繊細なものは違う痛みさえ伴うものになっていく。

「ああつ、んつくっ……いつ、んん……はあ♡ よくなって、何か……あつ♡」

声に滲む甘さを抑えられない。エルメンヒルデは胸を揉み込まれ、きゆうと中心に向かって絞られるたびに無意識に白く細い両腿をよじり合わせ始めていた。

触れられない乳首が疼く、半開きになった唇の奥で舌が蠢いて歯茎をなぞってしまう。

乳頭から刺激を求める電流が脳髓へと流れ込んでくる。自分がどうなってしまうのか気になって仕方がなくなり、エルメンヒルデの伏せていた睫毛が上がりかけた。

「ここがいやらしく腫れてきているぞ」

オイルにまみれて淫靡に照り光る乳房の先端は既に硬く勃起していた。その欲しくてたまらない場所をツンと小突かれると、もう我慢できなくなってしまう。

「あつ♡ もう、焦らさないで……」

エルメンヒルデの口から出た言葉には、懇願の響きが強く滲んでいた。

「どうして欲しいのか言ってみろ。お前の主、お前の『王』に乞い願うんだ」

「ああつ……そんな、こと……ああうつ、うつ、くうつ……んんっ♡」

男に命じることならば慣れていた。だが、「乞え、願え」と言われてはこれまで培ってきたプライドが邪魔をして言い出せない。

「言えないなら、ソコはおあずけだ。ふふ、こつちも熟して来ているようだからな」

男の片手が胸から離れ、下腹部へと滑っていく。もう一方の手はエルメンヒルデの背とソファの間に入り込み、彼女の上半身を抱き起すようにして脇の下をくすぐり始める。

エルメンヒルデの股間に至った手は、クリトリスや陰唇を避けるように無毛の周辺地帯を周回する。脇をくすぐる男の指先はくすぐったさと快感の中間のような感覚を押し付けてくる。

昂らされたままの乳首が疼く。新しく刺激を受けている箇所が、オイルを通して伝わる男の熱で蕩け始め、エルメンヒルデを身悶えさせる。

「言う、ああつ……言います。言いますから……」

いう、いうと声を上げ始めたエルメンヒルデにとどめを刺すように、リヴラクスは彼女の首筋に犬歯を軽く埋め込み甘噛みした。

これはリヴラクスがプライドの高い女によく使う手だった。オイル程度と油断させて女体を昂らせ、ねだらせる。そうして、その場での上下関係を構築するのだ。

「ふあつ♡ ……ああつ、乳首、乳首を触ってください。お願いします。ああつ、お願い……。して、ください。どうにかしてください」

首に食い込んだ歯が去り際にペロリと舌を這わせてから離れて行った。首筋を舐め上げられたエルメンヒルデは、鼻から「ふうーん♡」と甘えた音を漏らしてしまう。

そのことに羞恥を覚える間もなく、エルメンヒルデは「ひゃあん♡」と唇から声を出すことになった。

ほんのりとした曲線を描いて盛り上がるBカップの頂上、そこで勃起し疼き続けている乳首の天辺を硬く尖らせた舌先がつついたからだ。

「自分で摘まんでみたらどうだ？」

嘲るような声音を受けて、エルメンヒルデは身を震わせた。男のしている眼の前で、自分で弄って見せるなんて……と。

（ああつ、でも、こんな……もう）

疼きに耐えられなくなり、エルメンヒルデの頭の中で逡巡が薄れていく。そろりそろりとためらいがちに、白く細い十本の指が自身の両胸に向かう。

もう少しでそれが届くというところで、彼女の乳首の片方がちゅぷりと男の唇に挟み込まれた。

「ひああつ、あふうつ、あああツ♡」

自分で触れようとしていた場所なのに、男が唇が乳首の側面をこすり合わせるようにして転がされると、これまで経験したことのない強い痺れが背中へと身体の表から背中へと突き抜けていく。

さらに勃起乳首の側面を捉えた唇はそのままに、舌先が先端を押し込んでくるとエルメンヒルデは背を反らして悶え狂った。

オイルで濡れ光る白く細い肢体が、男の腕の中で白蛇のようにくねくねとのたくりまわる。そうして、エルメンヒルデが身体をくねらせればくねらせるほど、背の下から脇の下へと回された男の腕と、両脚の間へと伸ばされた男の腕が彼女の身体に絡みついてぬるぬるとした刺激を与えてきた。

（あふつ……あつ、こんな、こんな……今までに）

悶えのたうつのを止めれいはずなのに、身体が言うことを聞いてくれない。両の太腿が男の腕を挟み込むように閉じてしまい、膝をす

り合わせて擦りつけるようにしてしまおう。

「エルメは感じやすいな」

リヴラクスはオイルの滑りを利用して、挟み込んでくるエルメンヒルデの両脚の間を指や手のひらだけでなく手首までも使って愛撫し続ける。

合間に言葉を挟みながらも、乳首への責めも続く。口を付けている側とは反対の胸は、乳輪の手前から脇までを撫で下ろし、擦り上げ、中心の頂へと向かう快樂の波を送り続ける。

「ああっ、こん、な、あああっん♡ ひっんんう……」

「エルメ、もう片方は自分でするんだ。いいな？」

「は、はい……はっ、あああん」

どうしてか、エルメンヒルデは素直に命令に従ってしまっていた。そうすることが自然なことのように思え、言われるがままに口付けられていない側の乳首に指を伸ばしてしまおう。

「合わせろよ」

気付がつくと、男からの強い命令口調にくくくくと頷いてしまっていた。エルメンヒルデは右乳首を責め立てる男の口の動きに合わせて、擦り、押し……歯で軽く噛まれたチクリとした痛みに合わせて強く自身の左乳首を摘まみ上げる。

「ああ~~~~♡ あああ~~~~♡」

声が抑えられない。エルメンヒルデの蒼白だった顔は今や真っ赤に染まり、隙間から牙をのぞかせた唇の間から絶え間ない喘ぎがふれ出る。

（あ、イク。イってしまおう……）

まだ膣への挿入どころか、クリトリスへの本格的な責めすらも受けていないのに、エルメンヒルデはこれまでに感じたことのない昂りの中にあった。

熱い。吸血鬼の男たちの冷たい身体とは違う熱い悪魔の身体に抱えられていた。

激しい。どこか遠慮がちだった国の男とは異なる、女をモノにしようとする意志を感じさせる責め。

それがエルメンヒルデを狂わせていく。血の味だけではない。

男に上から命じられて、従わされ、それによつて得る快樂の渦。この、これまでに受けたことの無い扱いに逆らいたくないと、エルメンヒルデは思い始めてしまっていた。

「そら、一度イッておけ」

「ダメ、ダメです。ああっ、これ、こんなのダメに……、ダメになつてしまふ。ああっ、イッて、イッてしまひます。ああっ、ああっ、んんっうっくっくっくっくっ」

両脚の間に挟んでゐる男の手が敏感な肉芽を振るわせると、エルメンヒルデは落とした瞼をより強く閉じ、よがり啼きながら腰を跳ね上げた。

それに合わせて、キュツと閉じた彼女の内腿の間にするりとリヴラクス腕が滑り込んでいく。男の指が浮き上がった彼女の尻肉の下へと入り込む。

「はあはあ………はあ♡ ……ああ♡」

極まった余韻で、エルメンヒルデはぐつたりとソファの上に身体を投げ出し。絶頂すら言われるがままに至つてしまったことに、なぜか得も言われぬ陶醉感を覚えてしまつてゐる自分自身に困惑していた。

どうして、どうしてこんなにも気持ちがいいのだろうか。目を開けて彼の顔を見つめたくなつてきてしまふ。

「そういうえば、吸血鬼のココはどうなつてゐるんだ？」

そんなエルメンヒルデの戸惑いなど構わないとばかりに、リヴラクスは彼女の両脚の間から尻へと忍ばせた手を動かした。

「あつ、そこ、そこは違う、違います。触つたら、ああっ……」

ヒップの割れ目の間にある小さな窄まり。菊の花のように閉じた穴が指先で押し込まれてゐる。

エルメンヒルデはその穴は違うと抗議するが、男の興味深そうな男の指戯は止まらない。どうにかそこから指を離れさせようと彼女は尻を振つて逃れようとする。

だが、絶頂の余韻の残る身体には、まだ快感の痺れで力が入らず。ぬめるオイルに照り光る裸体をくねりくねりとさせる様は、男の情欲

を誘っているようにしか見えなかった。

さらに今まで乳首を責め立てていた彼の口と片腕が胸から離れ、エルメンヒルデの下半身へと向かってしまっってはもう止められない。「良く見せてみる」

リヴラクスはエルメンヒルデの右足を自身の左肩に担ぐようにして腕を巻き付けると、エルメンヒルデの股間に顔を埋めた。そのまま愛液を垂らす無毛の媚肉周辺に舌を這わせ始める。

「ああっ……んふうっ……んああっ♡」

発情しきったクリトリスを舌で舐めしゃぶられると、抵抗する力も気力もなくなってしまう。そうして、くたりとされるがままになったエルメンヒルデの尻穴をリヴラクスの右手が弄り回し始めた。

「なあ、エルメ。たしか、吸血鬼は排泄をしないんだっただな？」

「そ、そうです。身体から汚らしいものを垂れ流すような下等種族とは……違いますから」

吸血鬼は、その名の通り血を啜ってさえいけば生きていける種族だ。趣味として特殊な紅茶を嗜みもするが、基本的には液体しか口にしない。

そして、それら口にする僅かな種類の飲食物は、彼女たちの体内で完全に吸収されてしまう。混じりの雑種ではない、高貴なる真の吸血鬼は汚物を外部にひり出すような下賤な行為は必要としない。

エルメンヒルデが口にすることのない下品な言葉遣いになるが、純血の吸血鬼の中には人間とのハーフを蔑んで「糞たれ」と呼ぶ者もいるくらいだ。

「じゃあ、この穴は何のためにしているんだ？」

「そ、それは……あひっ、ああっ、触らないで、いやっ、ああ、入れないで、ああっ、ああん、待って、待ってください……そこはちがっ」

言葉では抵抗して見せるが、エルメンヒルデが大きく身をよじらせようとするたびに陰唇やクリトリスを刺激され、くたりと力が抜けてしまう。

そうして抵抗を封じながら、男の指は彼女の肛門を騷り続ける。

「ああっ、そこは、そこはやめてください。ああっ、やめて、やめてく

ださい、押し込まないでえッ」

ついには、これまで身体に備わっていないながらも何の役に立つこともなかった穴に、男の指が侵入し始めてしまう。

人間ならば、排泄の感覚を知っていただろうが、エルメンヒルデにとってこれは本当に初めての感覚だった。これまで意識することすらなかった場所に、男の指がぬるぬると入り込んでくる。

その感触にエルメンヒルデは両手で顔を抑えて悶えた。

尻穴を右手で弄りながらも、彼の左手はエルメンヒルデの右足の内側を撫で擦り続けることを忘れてはいなかった。さらにその舌と口はピチャツピチャツ、ジユジユツズジュリユとわざと卑猥な音を立てながら彼女の愛液を啜り上げ、敏感な肉芽を舐め転がし続ける。

「はひ、ああっ、いやああ、そんな、そんなところ、何の意味も……ああっ、なんで、どうして、こん、な……はああん♡」

クリトリスからの強烈な快感に混ざって、アナルからの未知の官能が湧き上がってくる。

下等生物、汚らしい種族が排泄物を垂れ流す穴で快感を得てしまっている。そのことを自覚し、エルメンヒルデは惑乱し大いに乱れてしまう。

（ああ、すごい。なに、なんで、これ……は、これは……なんなのですか……？）

まだ経験のあったクリトリスや陰唇への刺激を、アナルからの快感が上回っていく。吸血鬼の身体には必要ない、何のためにあるのか分からなかった器官が、男の手によって性器として目覚めさせられようとしているのが分かってしまう。

「こっちはまだ経験がなかったようだな。初物というわけだ」

その言葉とともに、前から後ろからエルメンヒルデを嬌態に追いこんでいた責めが止んだ。

「ああっ、なに、何をするつもりですか……」

未知の恐怖と、それに相反する快樂への期待。両者の間で彷徨い声を震わせるエルメンヒルデ。

彼女の排泄行為すら知らなかった尻穴に男の肉槍があてがわれた。

そしてオイルの小瓶に残されていた中身が、雄の性器官と雌の尻穴にとろとろと塗り付けられていく。

「エルメ、お前の身体にこの穴が付いている意味を教えてください」

死人に近い吸血鬼の肌は恐ろしく白い。人の肌や、それに近い悪魔とは色合いが大きく異なる。

その紙のように白い肌が塗られたオイルによつて照り光っていると、白蠟で出来ているかのようにさえ思えてしまうほどだ。

しかし、元吸血鬼の転生悪魔エルメンヒルデ・カルンスタインの身体は、蠟とは違って女の柔らかさも備えていた。

「見れば見るほど、いやらしい色合いだな」

人とは異なる吸血鬼の身体のためなのか、それとも生れ落ちてから一度も使われることのなかった場所だからなのか、エルメンヒルデのお尻の穴は薄い桃色をしていた。

「あつ、見ないで、そんなところ見ないでください。ああつ、そんなモノで押し込んで……っ」

男の指でじっくりとほぐされ、広げられ、窄まされと繰り返されたそこはヒクリヒクリと初めての感覚に戸惑うように蠢いてしまっている。

そんな場所にオイルをたっぷりと塗り込まれ、同じく油にぬめる肉棒の先を押し当てられていた。

ぬちゆりぬちゆりと肉棒の先が尻穴を押しは引いてを繰り返す。その上、男は片手を彼女の肉付きの薄い可愛らしいヒップに添え、肉棒の押し込みに合わせて谷間を開いてくるのだ。

男の手の動きに合わせてエルメンヒルデの薄桃色の菊門が變形してめくれかけ、そこに肉の杭が突き立てられキュツと窄まった肉の皺を押し広げる。

そうやってオスの器官で肛門を押し揉まれていると、エルメンヒルデの下半身は妖しい感覚にじわりじわりと支配されていく……。

「エルメの……が、だんだんと俺のモノを受け入れ始めているのが分かるか？」

小柄で華奢なエルメンヒルデは、背丈だけ見れば幼くさえ思えてしまう。そんな体躯の割に、彼女の両脚は長い。

その白く細い脚の一方を男の手が掴んで上へと持ち上げられていた。さらに、もう一方の足は、男の尻の下に敷かれ体重をかけられ抑え込まれていた。

両の脚を大きく上下に開いてしまっている。恥ずかしい場所が丸見えにされていた。

そんな姿勢による羞恥も、アヌスを中心として広がっていく妖しい感覚の前では気にならなくなってしまおう。

リヴラクスが言うように、エルメンヒルデの括約筋は徐々に屈服しようとしていた。亀頭のカサが尻の孔にめり込んでいく深さが、少しずつ増して行っている。

「あつ、ああ……イヤ、イヤです。広げない……でええ」

肉棒が沈み込むほどに、抗議の声は弱々しくなっていく。排泄物をひり出した経験さえない穴から、抗い難い刺激が背筋を伝わって来る。その甘痒い官能に喉が痺れてしまおう。

「あつ……い……。なんですか……これは……。ふああ……っ♡」

それを続けられる内に、いつしかエルメンヒルデのこぼす小さな嗚咽に嫌悪と拒否以外の響きが混じり始めていた。

ジンジンと、あるいはビリビリとでも表現すればいいのか。ぬめる肉の窄まりがペニスによって広げられるたびに、今まで感じたことのないものが彼女の身体に奔る。

心の中に、ぞわぞわとした屈従の暗い喜悦がこみ上げてくる。アナルを押し広げられるたびにそれは増して行き、今や男に逆らおうとする気持ちを上回り始めていた。

（ああっ、熱い……。お尻の穴が焼け溶けてしまいそう……）

背筋がゾクゾクとする。指で穴を広げられ内部を弄り回されたときから、これまで機能したことのない器官が目覚めさせられてしまっていた。エルメンヒルデの直腸内部はひとりで蠕動し始めていて、ペニスを迎え入れる準備の整った腭孔のようになっていた。

「そろそろよさそうだな。挿れるぞ、エルメ」

つい来てしまうのだ。吸血鬼にとってはどうしてついているのか分からない、無用の穴に男のモノを受け入れてしまおう。

あのままカーミラ派吸血鬼の女として生きていたならば、死ぬまで知ることの無かっただろう感覚。それを今から教えられようとしている。

『初めて』を捧げてしまうのですね……』

前の処女はずっと昔に興味本位で失っていた。自分の身体にまだこの男に捧げられる『初めて』が残っていたこと、それがどこか嬉しいとさえ思えてくる。

「力を抜け」

押し揉まれ続けてとろとろに蕩けたアナルは、言われずとも男の怒張を受け入れようと弛緩してしまっていた。

薄い色の金の長髪を揺らし、表情に滲み出してしまう羞恥と期待を隠そうと両手で顔を覆う小柄な美少女吸血鬼の尻穴。そこはもうこの男の言いなり、なすがまま。

「は、い……」

エルメンヒルデが返事をした次の瞬間、リヴラクスが腰を強く押し出した。これまでにない強烈な圧力が尻の中心にかかり、幹との間に高い段差を作るカリ首によって、むにいいと尻穴が広がっていく。

「んぐっ、ぐううううッー」

指で解されたときとは比べ物にならない巨大な挿入感に、エルメンヒルデは悲鳴を上げた。

汚物を排泄した経験すらなかった肛門が、張り裂けそうなほどに広がる。圧倒的な拡張の感覚だ。

ずじゅっ、ずじゅじゅっ……とリヴラクスの剛直がエルメンヒルデの未使用腸内を拡張しながら深く深く埋まっていく。

侵入の速度はゆったりとしたものだった。こんなことをしておきながらも、リヴラクスはエルメンヒルデの未通の道を傷付けないようにしていたのだ。そのどこか気遣うような挿入がかえってエルメンヒルデに屈服の肉悦を与えてくる。

分かってしまうのだ、『兵士』の駒を受け入れたことで生まれた『王』と眷属の繋がりを通して。リヴラクスが自分自身の情欲を満たすと同時に、エルメンヒルデの愛欲をも叶えようとしていることが

……。

「あぐっ、ぐっう、んあっ、はああ……、ふうっ……ん、ああお……ん
んっう♡」

じりじりとした緩慢な挿入は、痒痛と一緒に肉悦を与えてくる。アナルの中が甘く蕩けてしまう。

エルメンヒルデの腸は『初めて』の活動を開始していた。うねうねとしたその動きは汚物をひり出すためのものではない。男を悦ばせるためのものだ。そして自身も尻穴の官能に浸るためのものだった……。

「エルメのここは、いやらしく、それでいて従順だな。締め付けてくる腸肉が、可愛がられたがってトロトロ口になっているぞ」

「そん、そんなこと……」

じわじわとしたアナル挿入が続き、深みまで貫かれるとエルメンヒルデは隠すことが出来ないほどに感じ始めてしまっていた。

片足を持ち上げられ、尻穴を貫かれ、小振りなヒップを揉み解されていると、触れられてもいないヴァアギナがくちゅりと割れて淫蜜がたらたらと零れ出る。

それは腸の側から圧迫された子宮が反応し、子作りの穴が肉棒の挿入を欲しているまぎれもない証だ。

（ああ、痛い……苦しい……。それなのに、ああっ、どうして……うあっ♡）

苦痛の中に、快樂があった。

それにはエルメンヒルデが既に彼の眷属となっていたことも大きい。悪魔は同じ眷属同士で肌を重ね合わせ、魔力を伝わらせることで致命傷すら癒す。

男の怒張によって初めて大きく拡張され張り裂けそうな薄桃色の菊門も、肉杭で奥まで貫かれてしまっている腸壁も、痛みと苦しさと同時に男のモノと密着することによって癒されていた。

「顔を見せろ、エルメ。隠さずに感じているところを俺に見せろ。俺はお前の瞳がどんな色をしているのか知りたい」

きつと、淫らに男を求める欲情に染まった色合いをしているに違い

ない。リヴラクス言葉には、そんな確信が込められているように思えた。

両手で顔を覆ったエルメンヒルデは、いやいやと首を左右に振った。下等種族が汚物を排泄するための穴に肉の塊を埋め込まれ、それで淫らにヨガつてしまっている顔など見られたくはない。

吸血後の狂乱は時間の経過とともに納まってきたはずなのに、彼女の瞳は瞼の裏でギラギラと深い紅に輝いていた。この男を魅了したい、もつと自分にのめり込ませたいという感情を抑えられなくなっている。そんな心の内を見抜かれているかのようにだった。

こんな真似をされて悦んでしまっている浅ましき。尻の穴を貫かれる屈辱に歓喜し始めている惨めさ。エルメンヒルデはそれが心地好くなっていた。

この状態で魅了を仕掛けたらどうなってしまうのか。
抵抗レズされたなら、もつとシテ欲しがっていると思われるってしまうだろう。

成功してしまつたら……エルメンヒルデが内心で望んでいるように彼は動き始めるだろう。襲い掛かれ、服を破り捨てられ、乱暴に犯されたあの時のように……。

「許して……うふう……♡ 動かさないでえ……。お尻、ダメに、ダメになつてしまいます……」

力尽くで手を退けさせ尻穴を穿られ蕩けた彼女の顔を見ることも出来るだろうに、リヴラクスは力よりも快樂による責めを選択した。

ねつとりとした腰遣いで、初体験に戸惑う腸内を攪拌していく。羞恥に悶える女の腹の中をぬちぬちと擦り上げ、じゅぽじゅぽと下品な音を立てて菊肉をめくり上げる。

「いやあ、いやです。こんな、ああっ♡ こんな……」

エルメンヒルデの眉が両手の下でハの字になり、閉じた瞼の縁から涙が零れ落ちる。

男の腰遣いは恐ろしく巧みだった。エルメンヒルデの性感を的確に捉え、抉り掘り起こす。そうされると、妖しく甘美な官能に晒され続けて痺れたエルメンヒルデの肛門は、男の肉棒にぴとりと寄り添い

張り付いてしまうのだ。

そうして括約筋が肉棒を締め付けると、リヴラクスは腰を回すように動かして自身のモノの太さと硬さを尻穴に教え込むように内側からグニグニと揉み解していった。

撃ち込まれた肉杭の巧みな動きによって、エルメンヒルデの尻穴は昨日まで排泄すら知らなかったとは思えないほど従順にされていく。

あるいは何も知らなかったからこそなのかもしれない。初体験で快楽を染み込まされることで、男の肉棒を受け入れる性器として目覚めさせられてしまったのだ。

「ほら、エルメ。その手をどければもっと気持ちよくしてやるぞ」

「いやあ♡ ダメです。こん、こんな顔、見せられ……ません。恥ずかしい、からあ……♡」

エルメンヒルデの腰はうねうねとくねり始めていた。返す言葉にも恋人に甘えるような響きが滲み出す。男の手と身体に抑え込まれた細白い脚線は、ペニスの動きに合わせて踊り出したがっていた。

痛みはもうない。苦しさも薄れて遠い。屈辱は快感に置き換えられ、むしろこうされていることに満足感さえ覚え始めていた。

そのことが自分でも信じられず、エルメンヒルデは歯を食いしばって耐えようとするが、喘ぎを漏らすことに忙しい彼女の口は言うことを聞いてくれない。閉じられない唇の端に唾液がたまり、横向いた顔から重力に負けてツーと垂れ落ちた。

「なら、仕方がないな」

快感に悶えながらも顔を隠し続けるエルメンヒルデの様子に、言葉だけは諦めたようにリヴラクスは言い、腸の奥まで突き刺さした肉杭を引き抜いていく。

「はあ♡ はあ♡ はあ♡……はあ……♡」

終わった。耐えきった。無様すぎる顔を晒さずに済んだ。エルメンヒルデがそう気を抜いてしまったところだ――。

「後ろからだ」

くるりと身体の向きを変えられた。伏せた犬のような姿勢。下劣な人狼どもが好みそうな、後背位の形だ。

屈辱的な体位を拒否しようとエルメンヒルデが動き出す前に、ペニスで緩まされた尻穴に指を突き込まれてしまう。

「くくふあうっ♡ いやあ……こんあの、やあ……♡ やめて、ください」

すっかり敏感になってしまった箇所を抑えられると、されるがままになってしまう。

どうにか挿入だけは防ごうと力の抜けた両脚を必死で動かし膝を合わせようとしますが、オイルに濡れた両脚の間にするりと男の手が滑り込んでくる。

「あっ♡ あっ♡ ああっ♡ あんっ♡」

クリトリスを撫で擦られ、尻孔を指で上に持ち上げられると、エルメンヒルデは操られるようにして尻を高く高く掲げてしまう。

「そんなに顔を見せたくないなら、ソファに埋めていろ」

尻穴から指が抜かれ、その手で肩の間を下へと押さえつけられると言われるがままに顔がソファの布に沈んでいく。

セックス用に高い弾性を持たされたソファの布地にピンと勃起した乳首が擦れ、ジクリとした快感が奔る。

オスに屈服した牝犬のように尻を高く上げ、支配者に平伏するように頭を下げさせられた。そんな姿勢を取らされたことに、そしてその体勢で貫かれることに、ゾクゾクとしてしまう。

まだ硬く青白い桃のようだった尻は、情交の興奮で薄っすらと赤みを増していた。その白桃の中心で色濃いピンク色をした小皺が、ヒクリヒクリとしている。

男はエルメンヒルデの背に体重をかけて押さえつけながら、その中心に怒張を一気に撃ち込んだ。

「くひいやあああっ♡ー」

顔をソファに押し付けたままの女は金色の髪を振り乱して悲鳴とも嬌声ともつかぬ声を上げる。

一度抜かれて寂しい思いをしていた腸内が、再び主を迎え入れた悦びに打ち震えていた。

「ううっん♡ あう、ふじゆる、ああっ、らめえ、らめええ♡ おひり、

おひりがあゝ♡」

動かしやすい態勢に移行したことで自由になった腰を、リヴラクスは自在に繰り出し始める。

カリ首で奥から浅いところまでを満遍なくこすり、深く突き込んで腸がS状にねじ曲がった部分をこね回す。

そうやって責め立てられるとエルメンヒルデは、男の突き込みに合わせて尻を左右に振りたくってしまう。もう、恥も外聞もどこかに飛んで行ってしまいうさだ。

「ああ♡ はううあう……♡」

男の腰が激しく動き出すと屈服の姿勢による背徳感が強まり、エルメンヒルデの興奮が高まっていく。

膣内を擦られる快感とはまた別の、絶頂の余韻がずっと続くような淫楽に、ソファの座面に押し付けた顔が恍惚に染まり、歓喜の涙が止まらなくなる。

小柄で幼げな肢体が尻穴快樂に翻弄されてぐねぐねと揺れる様子は実に淫靡で、男の興奮を煽って止まない扇情さに満ちていた。

「うくっ……、んあっ♡ あふ……うふ♡」

お尻の中を肉杭で撃たれる度に、衝撃が全身に伝わる。背中から押さえられているため、ツンツンに尖った乳首がピストンに合わせて布に擦れてしまう。

引き抜かれるときの快感もまた強烈だった。肉棒の亀頭と幹の間にある段差、いやらしい矢の返しのような部分が腸壁をこそげていくのだ。尻穴の中の肉を引きずり出されるようなその感覚は、クリトリスや膣で味わうのとはまた別の快感を湧き上がらせてくる。

「うあん。はああああん……♡ ヘんに、ヘんになってしまいます。ふっうあああ♡」

頭の中が快樂の靄に覆われていく。脊髄が奔り抜け続ける悦楽に溶け出す。尻の穴がふやふやに蕩けてしまいうさだ。

(ああっ、すごい。こんなの、なんて、ああっ、なんてすごい)

突き込まれる肉杭に合わせ、腰を躍らせるエルメンヒルデ。上から押されずとも、乳首も自分からソファにこすりつけて慰めることを止

められない。

夢中になつて尻を振りたくると、肉付きの薄いヒップと男の腹筋がぶつかつて、パンツパンツという音がリズムミカルに室内に響く。

(激しい、気持ちいい。ああっ、今度は優しく……嬉しい)

エルメンヒルデの状態を見抜いているかのように、リヴラクスは時折腰打ちのリズムを変えてきた。強烈な責めに悶えさせられ、それが苦しくなつてくると優しく蕩けさせるように速度と擦り方を切り替えてくる。

その按排がまた絶妙で、強烈な快感で絶頂の直前まで押し上げられたかと思えば、甘やかすようにゆつたりとした官能を与えられながら沈めさせられる。

心も、身体も、とろとろに緩んでいく。溶かされていく。何もかもこの方に委ねてしまいたいと思えてくる。

「うあ♡ あんっ♡ はぐう……おあ♡ ふあっ、あうん♡!」

頭の中が官能に蕩け墮ちる。このままずっと繋がっていたくなる。ずっとずっと犯かし続けてもらいたい。

そんな願望がエルメンヒルデの中で芽生え、ゾワゾワと花開いていく。

「俺がお前の何処に惹かれたか分かるか? どうしてあの交渉の場でエルメンヒルデ・カルンスタインが欲しいと切り出したのか分かるか?」

「あっ……ああ♡ なじえ、でひゅ……か」

身体を中心に熱い剛直を長く挿入されていたからか、吸血鬼の男にはない熱がエルメンヒルデの全身に伝播していた。

死人のように冷えていた体温が上がり、アナルからの甘美な刺激と合わさつて頭が熱くて呂律が回らなくなる。

「お前が内心で怯えながらも、吸血鬼のプライドだけは守ろうとする様子が好みだったからだ。今もそうやって、どうにかだらしのない顔だけは見せまいとしているしな」

だから、逆らえば逆らうほど興奮するのだと。そう言つて、リヴラクスはオイルに塗れた彼女の細腰を両手で痛いほどに掴んだ。

激しいピストンで絶頂寸前まで追い込み、そこから優しく宥めすかすように緩やかに責める。そうやって快感のボルテージを徐々に引き上げ、それでいて絶頂には至らせず、女をどこまでも官能の高みに押し上げる。女体の反応を見透かし操作する悪魔の技巧によって、リヴラクスは彼女を臨界点の向こう側まで追い込んでいた。

これをされた後に絶頂を迎えた女は、もう自分で慰めるだけでは絶対に満足できなくなる。ひとりではたどり着けない悦楽の境地の虜になってしまふのだ。

それはこのエルメンヒルデも例外ではない。そんな確信がこの男にはあった。

「あんっ、ふっぐううっ、んはあ……♡　みにやいで、こんにゃ、みせらりえにや……。はあっ、おひ、おひりい……。ほじくりやれつてえ……。あう、しゅご……。ああ、も、もう……。♡」

肉杭の往復のピッチが上がり始めると、華奢な身体がぐらぐらと揺すられる。エルメンヒルデは蒼白の美貌を羞恥と興奮に赤くさせ、もうたまらないと金の髪を左右に振り乱した。

だらしなく開いてしまった口からは唾液がだらだらと垂れ落ち、ソファの布に染みを作っていく。ビンビンに尖り切った陰核の傍で、後ろの穴ばかり可愛がられて構ってもらえない膣粘膜が悔し涙のように愛液を飛び散らせる。

「うあああう、あおっ……。♡　んうはああ……。♡　もう、あっ、もう……」

リヴラクスは括約筋を支点にして、上に、下に、左に右に、あるいは螺旋を描くようにと腸粘膜を突き押し、責め引いていった。

（イキたい。もう、ああっ、もうイってしまいたい……）

何か凄まじいものが来てしまう予感がしていた。それを知ってしまったら、もう前の自分には戻れなくなるような快感の気配があった。

（もう、無理……。むり……。、墮として欲しい）

もうこの後ろの穴は、この男のものになってしまった。荒々しくそれでいて優しくエルメンヒルデを翻弄するこの男に逆らえなくなっ

ている。

尻の穴がこの肉杭に犯していただくことばかりを考えてしまっているようだった。

「なあ、エルメ。もうイキたいか？ ケツ穴ほじくられて、無様に果てたくて仕方がないか？」

「はひっ、あんう♡ はい！ ……ああつ、はぐう、あふうっ♡ あハア、ん…：あぐううん♡」

甘え媚びた泣き声で、エルメンヒルデは懇願した。もうイキたい、イかせて欲しい、もうたまらないのだ、と。

埋めた顔からは涙と涎がダラダラと流れ落ち、そこに顔を擦りつけるものだからエルメンヒルデの顔はぐしゃぐしゃになってしまっていた。

もう訳が分からない。

「よし、そら一度イってしまえー！」

大きく引かれた男の腰が、許可の言葉と共にゴリゴリと粘膜壁を削りながら止めの一撃をぶち込んでくる。

それに合わせて、エルメンヒルデはぐつと尻を男の腰へと打ち付けた。

「イツうう♡ イツちゃ…：イクツ、イグうううう♡♡！」

バチンツ！ と尻と腹筋がぶつかる音がして、絶頂の快樂の悲鳴があがる。

頭の中が沸騰し、爆ぜた。両手の爪先がソファの布地に食い込み、突き破り、筆り取る。

「あああゝゝゝツ♡♡♡！ はあツ、んんっうあああゝゝゝ♡♡♡！！」

悅樂の頂点まで押し上げられ、そこから真っ逆さまに官能の奈落へと転がり落ちていく。真っ白から、真っ暗に、目の前が明滅する。

肛門での絶頂にエルメンヒルデの全身がわななき震え、桃色に染まった裸体が妖しい官能に弓なりになる。空のヴァギナが切なげに開いて、膣孔の奥からプシイツと汗気を噴きだす。

「ぐっ、おとおお！ 射精すぞ、エルメ！」

腸粘膜が肉棒に食らいついてくる感触とエルメンヒルデはの痴態に、リヴラクスは怒張を膨れ上がらせた。ググつと精液が幹の中を通り抜けていく。

初めての腸穴絶頂にぐらぐらと煮え立つ直腸の奥に、どろつどろの白濁が雪崩込んだ。

「くはあつ♡ あひいあああああつ、あう、ひつ、ひいひいひいんんあッアんっ♡♡♡!!」

絶頂の最中に濃厚な精を叩き込まれ、悦楽の極致にいたると思わされていたエルメンヒルデ、その上がまだあることを覚えさせられた。

いつている最中にザーメンを注ぎ込まれること、あるいは白濁の奔流を叩きつけられて絶頂に至ること。それが一番の快樂なのだ、女を狂乱させるものだと教え込まれたのだ。

「んあああ……♡ あああ……♡ あふうくくう♡ あくく♡♡♡
んうー、ふうー♡ んうー、ふうー♡」

肉棒が引き抜かれると、エルメンヒルデはぐたりとソファに突っ伏した。

もうこの方から離れられない。こんなものを味わわされては、従うしかない。そう思い知らされた。

息を荒げ、激し過ぎる快樂の余韻に浸り、息を整えようとしている彼女の脇の下に、男の手が挿し込まれる。

「んっ、あつ……なにゆお……」

官能に火照り、弛緩した彼女はされるがままに上体を引き起こされた。抱え上げられ、ソファの背もたれに背を預けた男の膝の上に尻を乗せられる。

エルメンヒルデの背中には男の胸板や腹筋が触れていた。尻に当たる硬く太いモノは、男根だろう。

「はぐう、い、んんうっ♡！ おひり、おひりい……まじや、あつ♡
あつ♡ らめえ、まじや、みゆり……みゆりでひゅ」

一旦男の膝の上に置かれたエルメンヒルデの尻が再度持ち上げられる。ぐずんと尻穴にペニスがあてがわれると、すっかり従ってしまった括約筋は簡単に亀頭を迎え入れてしまう。

「マンコが寂しそうだからな、弄ってやろう」

背面坐位で肛門を貫かれたエルメンヒルデの胸と股間に、リヴラクスの手が伸びる。男の指がいやらしく蠢いて、くちゆり、くちゆりと女の急所を責め廻りだした。

「んっ、んああっ♡ ああっ♡ はああッ♡」

主にして『王』である上級悪魔にとって、下僕とのスキンシップは重要だ。

リヴラクスはエルメンヒルデのその気位の高さを好んでいるが、やはり最初いきつちりと上下関係を叩き込んでおかなければならない。高慢さで知られる吸血鬼には、念入りなスキンシップが必要だろう。

「んはあゝ♡ ああっゝ♡」

騾の一日目は、まだ終わらない。

『はあー？ お腹壊して行けないって、ウツソでしょあんた。修学旅行だよ!? 信じらんない!』

「うっぐぐ……おなかいたい」

『海外旅行! しかも、豪華客船! だってーのに、また落ちてたものでも食べたの? ほんつとあんたって見た目と違って食い意地張ってるんだから』

「またって、拾ってなんか……ううう」

『前に落ちてた柿拾ってさあー……って、ほんと大丈夫?』

人生一度きりの大事な高校の修学旅行出発当日、原因不明の腹痛によつて陵空高校^{りようくう}二年生、七滝^{ななだる}詩求^{シグネ}子は欠席を余儀なくされてしまった。

あんなに楽しみにしていたのに、と無理をしても玄関に向かおうとすると、お腹が物凄く痛くなる。

「うん……だいじょうぶじゃない」

『ええ、うわ、どうしよ? あんたって一人暮らしだったよね? どうする? 救急車よぶ?』

「そ、そこまでしなくても……た、ぶん、寝てれば治ると思う」

『うわ、困ったな。声がマジでヤバそうじゃん。あー……つと』

「だいじょうぶじゃないけど、だいじょうぶだから、気にしないで、時間、間に合わなく」

ベッドの上で大人しく横になっていればそれほどではないのに、出かけようとするともう耐えられない。

昨日の夜に食べ過ぎたなんてことはないはずなのに、今日だけはどうしてかズキズキジクジクとどうにもならなかった。

いつもは、どれだけ食べても平気なのに……。

『あー、ホントだ! えっとさ、うちのおかーさんに見に行ってもらから、番号、おしえちやうからね』

「あ、うん……ありがとう」

どうして今日という日に限ってこんなことに……。

『お土産、お菓子とかいっぱい買ってくるから。それまでに治しとくのよ』

「うん、いつてらっしゃい」

そう言っただけの向こうの同級生を修学旅行に送り出した、その四日後――。

シグネは、テレビの前で呆然としていた。

緊急のニュース番組に映るのは、ヘリから撮影された海の様子。その映像の中心にあるのは、煙を上げながら海へと沈んでいく豪華客船の姿。

画面右上には、『ヘブンリイ・オブ・アロハ号、謎の海上事故!』と表示され。

流れてくる音声は、『乗船していた修学旅行中の陵空高校りょうくうの生徒たちと教員たちの安否は、まだ確認できておりません』と告げてくる。「うそ……」

両親は、もういない。親類も皆いなくなってしまった。

そして、学校の友達も、同級生も、みんな海の中に……。

高校二年生の五月初旬、シグネはひとりぼっちになった――。

学校の友達、同級生、教師、皆がいなくなってしまったあの船の事故から一か月ほど経った頃、シグネは転校の手続きを進めていた。

「駒王学園……か」

体調不良などで修学旅行に行けなかったがために生き残った僅かな生徒たちは、事故後にマスクミの取材攻勢にさらされた。家の外を見れば誰かがこちらを伺っている……そんな生活がしばらく続き、やがて世間の関心が薄れてそれが納まり始めたタイミングだ。

もう、先月まで通っていた陵空高校には通えない。同級生のほとんど、教師全員がいなくなってしまったので二年生の授業はもう不可能だ。

「見学できるんだ」

独り言が増えてしまったと思う。

家族もいない。友人は死んでしまった。出かけることも難しい。どこから知ったのか、シグネのケータイにかかってくる知らない番号はマスコミや妙な人からのものばかり。

人と話すことが苦痛になり、誰かと会うことがほとんどない。そんな一か月の中、シグネにはいつの間にか独り言のクセがついていた。「条件は、いいんだよね」

いくつかある転校先の候補の中からシグネがその私立の学園に目を留めたのは、真つ先に話が来たこと、元々が女子校で女子生徒の比率が多いこと、そして女子生徒用の寮があることが大きかった。それに加えて公立校並みの学費にもしてくれるという。奨学金制度もあり、大学部への進学も余程成績や素行が悪くなければエスカレーター式だ。

本来ならば、途中からの入学は試験が必要なのだけけれど、シグネの事情を考慮してそれもなしで良いらしい。

寮では食事もあるし、周囲は女性ばかりなので安心だ。

「派手なんだよね」

そう呟いてシグネは鏡を見た。鏡の中に映るシグネの姿は、美少女と形容してなんら問題のないものだ。

シグネの容姿で最も特徴的な部分は、右が青く、左が黒いオッドアイだろう。その左右色違いの瞳は、彼女を見る者に不思議な気分を呼び起こす。

日本と西欧の血を引く彼女の眉目は麗しく、暗めのブロンドには艶がある。そのスタイルも「なんであんなに食べてるのにそんなスタイルいいのよ！ おかしいでしょ！」とよく言われていた。

修学旅行のあの日まで、『陵空高校のなかでも一番の美少女』と学内、学外問わず同年代の学生たちから呼ばれていたことは、シグネ自身も知っていたことだ。

秀でて派手な容姿は、異性を惹きつけ、同性に羨まれる。シグネのこれまでの人生において、その手のトラブルは何度も発生していた。

そして、彼女のその容姿は『修学旅行の惨事の生き残り』として、世間に彼女のことが知れ渡って以来、あまり良くない人物を招き寄せることにも繋がってしまったのだ。

「はあ……」

ため息をつくとき、シグネはこの一か月の間に幾度か食料を求めて外出した時の恐怖を思い出す。

マスコミの対応は——まだ良かった。問題は、これまで会ったこともないのに心配するような声をかけながら近づいてくる男性だ。話をすぐに打ち切って逃げ出したらけれど、ずっと後を追いかけられたこともある。

一時期マスコミが張り付いていたので、どこに彼女の家があるかなど近隣の人たちにはすぐに分かったことだろう。そして、そこから情報が広がって……。

今のところ何も起きてはいないけれど、ああいった人に家の場所まで知られてしまっていることが怖くて仕方がなかった。

「もう、ここには住めないよね」

それを考えると、離れた地で高校、大学と女子寮住まいというのは悪くない選択に思えた。学園の敷地内にあるので外部の者は出入りできないし、通学時も外部の人と会うことがない。

さすがに、買い物などに出かけるとなるとそうもいかないけれど、通学と違って時間を見定めて張り込まれることはなくなるはずだ。

「行ってみようかな。見学」

シグネが連絡すると、駒王学園の対応は素早かった。

一時期に比べて少なくなったとはいえ未だマスコミに張り付かれていることを伝えると、迎えの車まで出してくれると言う。

そのときには、とても目立つ人物が同乗するのでまず間違えることはないだろうとも伝えられた。

「紅い髪に、紫の目の、北欧系の人って話だけど……って、え、理事長先生？」

気になって少し調べてみると、その人物は幼稚園から大学までを揃える駒王学園全体のトップになる理事長本人のようだった。

駒王学園は、北欧のとある国の貴族家が経営している学園で、迎えてくれるその人は貴族家の御曹司らしい。

「なんだか、とんでもないことになっちゃった……あ」

シグネのお腹がグーっと鳴った。彼女の家系は代々大食いで、燃費が悪い。

特にシグネは、そんな家系の中でも随一の大食いハラペコ少女らしい。

それは彼女の内に宿る存在の影響も大きいのだが——シグネはまだこの時、そのことを知らなかった。

駒王学園の見学に出かける日、シグネは迎えに来てくれた車から現れた人を見てポカンと口を開けてしまった。

その人の背は高く、身体つきは引き締まっていて、所作は綺麗。

顔立ちは冗談のように整っていて、本当に同じ人間なのだろうかと思えてしまう。

髪の色は、聞いていた通りのストロベリーブロードよりもなお紅い、鮮血の紅。

そして神秘的な色合いを見せる紫の瞳。その瞳には、他者に命令することに慣れた支配階級の者だけが持つ傲慢な輝きが宿っている。そんな印象をシグネは覚えた。

彼のその瞳にシグネが覚えた印象は決して好意的なものではない。それなのに何故か強く惹きつけられて目が離せない。

シグネの青と黒の瞳をひたと見つめてくるその紫に、心が吸い込まれてしまうよう。

「あ、え……えと」

シグネも年頃の女の子だ。こんな人外めいた美形の男性を目にすれば、頭が回らなくもなる。

漫画的に表現すれば、頭からプシューと蒸気が噴いているような状態だ。

「行くうか」

「は、はひ……」

低く艶のある彼の声を聞いて、思わず返事を噛んでしまったシグネ。彼女はそのことに赤くなっていた顔をさらに真っ赤に染め、うながされるまま車に乗り込んだ。

「ここが駒王学園だ。……その、大丈夫か？」

「だいじょうぶじゃないけど、だいじょうぶです。はい」

車中でどんな会話をしていたのか、シグネの頭にはさっぱり記憶が残っていないかった。

心臓がバクバクと鳴っている。このまま死んでしまいそうだ。

その上、彼女のお腹はこんなときに、きゅるーと鳴ってしまった。

「あ、もう、しんじやいそう……」

恥ずかしさに震えるシグネを、理事長はさりげなくエスコートしてくれた。

聞かなかったフリをされるよりも、笑ってくれた方が気が楽なのに。でも、やっぱり笑われたら辛いかもしれない。

「ここが質問のあった学生寮だ。共学になってまもなく、男子学生も少ないから、今のところは女子寮だけになっている。男子学生は近隣からの通学者が多いから、おそらくは今後もそのままだろう」

周りを見る余裕もなく、案内されるままに理事長について歩いたシグネの目の前には、新築の色合いを見せる女子寮の建物があった。

「新しいですね」

「ああ、すぐ近くの中学校でのぞき被害が多発していると報告があったから、セキュリティの向上のためにも新しくさせたところだ。向こうに見えるのが、前の建物になる」

示された方向にシグネが目を向けると、なるほど確かに目の前のもよりの年季の入った建物がある。

「近くで、のぞき事件があっただけで寮を新しくしたんですか？」

「ここには俺の身内も通っている。だから、その手の被害が起きる可能性は出来る限り潰しておきたい。と、まあ、半分は俺のワガママだ。元々古くなってもいたから、丁度いい機会でもあったが」

「そうなんですか」

どうせ住むなら、古い寮より最新式の方が良い。シグネの中では、

もうほとんどこの学校に来ることが決まりかけていた。

というよりも、学園までの道中の車内ではほぼ陥落していたようなものだ。

「さて、中も見たいだろうか？」

「あ、はい」

男子禁制だから、俺が入ったことは秘密にしてくれ。そんなセリフを冗談めかして言いつつ、理事長は入り口横の装置に手をかざし、慣れた様子でドアを開いた。

「寮の食事についても気になるということだったので、実は用意させているのだが……食べるよな？」

と最初にシグネが覚えた印象を覆す、からかうような笑み。さっきの「お腹きゆるー」を時間差で攻撃されて、シグネはまたもや真っ赤になった。

「ひどいよ、理事長先生」

でも、何故か不快感はない。むしろ……。

(私って、こんなに……うう)

食堂に用意されていた食事を一口食べたシグネの感想は、「美味しい……」の一言だった。

思っていたよりも、全然上だ。シグネはたくさん食べるが、味にそこまで煩いわけではない。でも、出来ることなら美味しい方が良いに決まっている。

「先生、私ここに通います」

「うん、それは嬉しいが……まだ他も見えて回るからな」

食事後に少し休憩を挟むと、今度は高等部の敷地に入った。

「そういえば、理事長先生は、その、ずっと私の案内をしていたいただけますけど……良かったの？」

シグネがそう言うのと理事長は少し困ったような顔をした後、彼女と目を合わせた。

「あまり思い出させるのもどうかと思ったが、キミの事情は少し特殊だろうか？」

「あ……はい」

「それと、俺はマスコミが嫌いだ。七滝もあれから随分と迷惑をこうむっただろうと思うと、少し、な」

「ほんとうに大変で。学園の理事長先生もああいうことがあるんですか?」

「いや、俺はこの国の人間ではないのだが……」

「貴族でしたっけ?」

「自国では有名人だから、色々あるんだ」

この一か月、マスコミに大変悩まされて来たシグネ。彼女は理事長のそのどこか疲れを滲ませた言葉に、ひどく親近感を抱いた。

こんな凄そうな人でも、やっぱり困っていることはあるんだ、と。

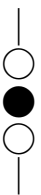
「それでは、来週からお世話になります」

学園内を見終わったシグネは、送ってもらった自宅前でそう言っ
て理事長に頭を下げた。

「そうか、歓迎するよ。……こちらに来るまで、気を付けるんだぞ」

「はい」

嬉しそうに笑う理事長に、ドギマギとしながら挨拶し彼女は自宅のドアを閉めた。



「この辺りにいる鬱陶しい奴らをどうかしておけ」

「ハッ、既に処置させております」

「仕事が早いな」

「ありがとうございます」

帰りの車内で、運転手をさせていた部下に偉そうに話す俺はリヴラクス・グレモリー。

日本で、連日報道されているニュースがあったので気になって調べてみたところ、なかなかの美少女が転校しなければならぬ事態になっ
ていた。

これは確保するしかない。そう思い急ぎ手を回したのだが、日本の各所に影響力を持つグレモリー家でも、そのうちの一人しか確保できなかった。

どうやら何処かしらの勢力が、海難事故を逃れた生徒を確保しようと動いた節がある。

『なあ、ドライブグ』

『なんだ？』

『あの七滝詩求子だが、神器の気配がしなかったか？』

『ああ、あれはおそらく……トウテツ饗飨だ。ヤツは厄介だぞ』

ドライブグと同じように、聖書の神によって神器に封じられてしまった者はかなりの数に上る。

『四凶の一だったな』

『そうだ、その中でも最強にして最悪と恐れられる、概念すらも喰らう食い意地のバケモノだ』

『美少女にして、四凶最強の怪物。いいじゃないか』

亜空間から未使用の『悪魔の駒』を取り出し、それらを宙に浮かべてくるくると回す。

『眷属に加えるつもりか？』

『俺とレイヴェルだと、眷属集めは俺が担当した方が容量の関係で有利だからな』

トレードで入れ替えることも簡単だから、こういった良い機会があれば狙っていききたいものだ。

『扱いの難しいヤツだぞ』

『ふむ、俺の駒だと「戦車」が好相性か。……だが、強い。そうだろう？』

『ああ、それだけは確かだ』

他の生徒たちも気になるが、俺の邪魔をしたのがどこの勢力か探らないとマズイか。

実は悪魔同士でやりあっていました、なんてことだったりすると目も当てられん。

まあ、饗飨のシグネは俺がいただくがな。

駒王学園の女子寮は原則的には学年別だ。だが、中には原則と異なる寮棟もある。

姉妹で入寮している場合などを考慮して、一緒に過ごせるようになっていく棟もあるのだ。

シグネには姉も妹もないが、人数調整のためと説明を受け、そういった学年によらない入寮者がいる駒王学園『H棟』に入ることになった。

上は大学部の学生から下は初等部の子までいる女子寮生活。それは、これまでになかった体験をシグネに与えてくれた。

部屋はそれぞれ個室だが、各階に皆で集まるための大部屋もあり消灯時間の23時までではそこで集まってワイワイと騒いだり、自習時間に勉強を教え合ったり。

消灯時間を過ぎてもこっそり他の子の部屋に遊びに行ってみたりなど、両親が居なくなつて以来、一人きりの家で寂しい思いをしていたシグネには新鮮な体験ばかりだった。

原因不明の腹痛により、シグネが体験できなかった修学旅行。それ故に生き延びてしまった彼女に転校後に訪れたのは、あるいはその修学旅行に近い日々だったのかもしれない。

平日の朝は寮内に起床の放送が入り、身支度と自習の時間がある。その後に朝食の時間が設けられていて、あとは各自部活なりに合わせて登校だ。登校時間はほとんどかからない、というか学園の敷地内で暮らしている。

放課後は部活動（入部が推奨されているが、所属しないことも選べる）を行い、それを終え寮に帰った後は決められた夕食時間の他に自習時間と自由時間がある。

自習時間の取り組みは各人に任されていて、通常の学年別の寮棟では同級生と教え合うことも多いらしい。シグネの暮らすH棟の場合

は学年が混在しているので、上級生から教わったり、下級生に教えることもある。

もう家族のいないシグネには、そのことが姉や妹が出来たように思えて嬉しかった。

あるいは、このH棟への配置はシグネの家庭環境や転校に至る事情を考慮した学園側の配慮だったのかもしれない。少なくとも、あの『ヘヴンリィ・オブ・アロハ号の悲劇』でシグネが受けた精神的なダメージを大きく和らげてくれてはいた。

高等部生の門限は夜の7時で、それがちよつと早いと不満を口にする同級生もいたが、転校から二週間を過ぎたシグネはそんな現状に概ね満足していた。今のところ部活動をしていないシグネと違って、部活のある子は部活終了後のお出かけが時間的に厳しいのだ。

少しだけの不満点は、寮の食事の量だった。シグネは大変な健啖家なので、他の子と同じくらいの量では到底満足できない。特に最近はそのが増してきていて、食べても食べてもなかなか腹が満たされないのだ。

細身の女子高校生の身体。そのどこに食べ盛りの運動部に所属する男子生徒よりも遥かに多くの食事が入っていくのか。自分でもちよつと異常だと思っているが、お腹が空いてしまうのだからどうしようもない。

他の寮生は今の量で十分満足しているし、中にはダイエットと言って残してしまう子もいる。といって、それを分けてもらうのもなかなか意地汚く思われそうで嫌だ。

そんなシグネの日課が、放課後の買い食いになったのも当然の成り行きというものだろう。

ある日の放課後、授業から解放されたシグネは早速出かけようと鞆を手に教室の扉を潜ろうとしていた。

「シグネー、今日も部活見に行かないの？」

席が近く、年度の途中で転入してきた特殊な事情持ちのシグネとも隔たりなく接してくれるクラスメイト。彼女からの声に振り向いたシグネは、「ごめん。今日もちよつと……」といったもの返事。

「また買い食い？ あんたってホントによく食べるよね」

「あはは……なんだかお腹が空いて仕方がなくて」

昔からたくさん食べていたシグネだが、最近のそれは異常なレベルだ。数時間前の昼休み、学食の定食をA〜Cまでの3セット全て購入して食べ尽くしたというのに、もうお腹が空いている。

「ま、いつか。いろいろあったみたいだし、そういうこともあるのかもね。じゃ、あたしは部活行くから」

シグネのそんな様子を例の海難事故以来ストレスから来るものだと判断したのか、クラスメイトはじゃあねと手を振った。

それに同じく手を振って応え、シグネは廊下を歩き始め——すぐにまた声を掛けられた。

「七滝さん、あそこ理事長いるよ」

その声の主は、また別のクラスメイトだ。

「え、どこ？」

「あそこ、ほら、あそこ歩いてる」

「あ……」

彼女が指さす先には、白い髪の背の低い女子生徒を伴って歩いている紅髪の男性の姿があった。

どこどこつとそれを聞きつけた周囲の生徒たちも、そちらに目を向ける。

「はあ……カッコいい」

「うん……芸能人とか目じゃないよね」

「私、この学校で良かった」

「見るだけで目の保養になるわー」

周囲の声を聞きつつも、シグネの目は廊下の窓ガラスの向こうを歩く理事長と、その隣を歩いている女の子にくぎ付けだった。

「あの白い髪の子って誰だろ？」

「ああ、七滝さんは知らなかったっけ。あの子は白音ちゃんって言って、理事長先生の妹さん。この学園のマスコットの感じの子」

「あんまり似てないような」

「ん？ あ、えつと義理の妹さんなんだって。理事長夫人、えーと、理

事長の奥さんの妹さん」

「理事長先生、結婚してるんだ……」

はうっと力を失い項垂れたシグネに、クラスメイトは「あー、七滝さんもか」と慣れた様子。

「七滝さんが、理事長夫人が既婚者だって知ったときの男連中みたいになってる」

この学園の男子生徒の数はまだまだ少ない。そのため男子生徒は一つのクラスに集められていて、男子のいないクラスも多い。これは体育などの男女別になる授業を考慮した生徒の配置によるものだ。

シグネのクラスは女子生徒ばかりで、実はまだこの学園の男子生徒と話したことがなかったりする。

「男の子と同じって……」

「あはは、見てみる？　理事長夫人」

「あ、うん。見たい」

クラスメイトから端末片手にたずねられたシグネは、即座にうんと頷く。

「わ、美人」

端末の画面には、綺麗な黒髪に金色の瞳をした着物姿の美女が映っていた。どこか悪戯っぽい猫のような印象を覚える女性だ。

「だよねー。見かけた男どもが、ほわーってなっちゃうのも分かるでしょ？　で、そいつらがどこの誰って聞いて回って、理事長の奥さんって聞かされてさ……さっきの七滝さんみたいになるの」

はあーと、ため息を吐いたシグネの肩をポンポンと叩くと、クラスメイトは言葉を続けた。

「そういえば話変わるけどさ、七滝さんって『H棟』の子？」

「寮の話？　ならそうだけど」

「あー、やっぱり。そうだと思った」

「え、なに？」

『H棟』には可愛い子ばかりいるって聞いてたから、そうなのかなーって」

「そう……かな？」

言われたシグネが同じ棟で生活している面々の容姿を思い浮かべてみると、たしかにそのような気がしてくる。

「でさ、実は『H棟』には噂があつて、そのところ……って、あ、呼び出し」

生徒を呼び出す内容の校内放送、そこで告げられた名前は……なんとシグネのものだった。

「わたし、なにかやつちやつたかな？」

「あー、あれじゃない？ お昼ご飯食べ過ぎだぞコラ！ みたいな」

「ええー！ そんなことあるわけな……いよね？」

「さあ、どうなんだろう？ とりあえず行ってみたら？」

「はあ、うん、そうする。じゃあね」

バイバイと手を振るクラスメイトに別れを告げ、シグネは職員室に向かった。

そして、そんなやり取りから三十分ほど経過した現在、シグネは白い髪の女の子と一緒に町を歩いていた。

「白音ちゃんもたくさん食べるんだ」

「はい、でも……にいさまが過保護でなかなか出してくれないんです」

呼ばれて職員室に向かったシグネは、そこにいた校長に応接室に案内された。そして、そこで待っていた理事長からここに来てからの生活や、何か困っていること、不満なところはないかを尋ねられたのだ。

あたふたしながらそれにシグネが答え終わると、最後に理事長から頼みごとがあると白音を紹介された。

「あー、うん、でも理事長先生が心配するのも分かるわ。白音ちゃん可愛いし」

「そうですか？」

「いや、ほんとに可愛いから。小さい子を狙って写真を撮ろうとするメガネの不審者がいるんだよね」

「そうらしいです。そのせいで、こんなことを頼んでしまつて……すいません」

「いいよ、いいよ。私も仲間が出来て嬉しいから」

理事長からの頼み事とは、シグネと同じく食べ歩きが好きな義理の妹と一緒に行動してくれないか？ というものだった。

なんでも小さい子をつけ狙う不審者がいると近隣の公立小学校から駒王学園に連絡が入ったらしく、義妹を心配した理事長と一緒に出掛けてくれる年上の女性を探していたらしい。

「でも、私ってそんなに噂になってたんだ……」

「はい、学食の女王として私たちの間でも有名です」

「うう……でも、お腹が空いちやうんだから仕方がないよね」

「はい……仕方がないことです」

「そうだよね！」

「そうです」

理事長は最初屈強なガードマンを護衛に付けようとしたらしいのだが——この時点で庶民とは感覚が違う——白音がそれを嫌がった。

そんなときに、どうやらシグネの噂が理事長の耳に届いたらしく、それで白羽の矢が立ったというわけだ。

「そうしたら、どこに行ってみようか？」

「そうですね、私としては……」

白音の見せた情報端末には、ガッツリ肉系のお食事処の所在地が。

「焼肉!? 白音ちゃん、ご飯前に焼肉行っちゃうの？」

「だめですか？」

「行こう！」

おやつとして焼肉を食べる。たまには、そういう日があって良い。シグネの頭には、すでにジュージューと食欲をそそる音と匂いが浮かんできていた。

「当たり前でしたね」

夕方の18時半ごろ、シグネと白音は駒王学園の敷地内にある理事長邸宅付近を歩いていた。

「だったねー。値段もすごかったけど……本当に良かったの？」

大変に美味だった。さすがに普通のシグネでは寄り付こうとも思わない、高級っぽいお店だっただけのことはある。

値段も高かったのではないだろうか。

「はい、それが私に付き合っていたら報酬ですから」

「ああ……なんだろう、私のなかでダメダメって言う声と、もつともつとってという声がせめぎ合っているわ」

理事長からの頼み事は無報酬というわけではなかった。白音と一緒に出掛けた場合、そこでの飲み食いの料金はすべて理事長持ちなのだ。

どんなお高い店で、どれだけ食べても構わないらしい。大変魅力的だ。

でも、なんだか小さい子にタカつているようにも思えてしまって、妙な罪悪感も覚えてしまう。

「七滝先輩、欲望には素直になった方がいいですよ」

「やめて、そんな誘惑をしないで」

今日初めて見た悪戯っぽく笑う白音の声がなんだか嬉しくて、シグネはそれに釣られる形でふざけて見せた。

「食べても太らないならいいじゃないですか。にいさまは使い切れないぐらいお金を持っていますから、遠慮なく食べてあげましょう」

「うう、お金持ち」

シグネには両親の遺してくれた遺産がある。だが、それは決して限りの無いものではない。

最近の自分の食欲を考えると、ちよつと就職して稼げるようになるまでお財布の紐はもつと絞らないといけなはずなのだ。

それなのに、どんどんパクパク食べたくなってしまおうのが、ここ最近のシグネの悩みでもあった。

だから、この話は渡りに船ではあるのだ。

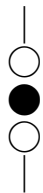
「それでは七滝先輩、今日はありがとうございました。また、明日もお願いします」

「あ、うん。バイバイ」

白音を見送ってから、シグネは明日もまた一緒に食べに行く約束をしてしまったことに気付いた。

シグネと白音のこの関係は、次の日も、その次の日も続き、やがて周囲からもそれがいつものことと認識されるようになっていく……。

こうしてシグネが放課後に理事長の家に行くことは、周囲から見てもシグネ自身にとっても当たり前前の風景になっていったのだった。



理事長邸宅の一室、そこに紅の髪の少年と白い髪の小柄な少女がいる。

「黒歌、シグネの様子はどうか？」

「たぶんだけど、もういつ神器が覚醒してもおかしくないって感じね。もともと大食いだったらしいけど、最近は自分でも異常だつて言つてたから」

「そうか、嗅ぎまわっていた墮天使連中も追い払ったことだ、そろそろいただくとするか」

「主さんってヒドイ男よねえ、他の女をモノにする手伝いをさせるなんて」

白い髪の少女の姿が変わっていく、するすると背が伸び、胸が育ち、髪色が白から黒へ。

「すまないな。ただ……」

妹の姿に化けていた猫妖怪は、己の主の口を唇で塞いだ。

「んっ……言い訳は聞きたくないわ。その代わり……こつちが欲しいにゃん♡」

黒歌の手が主の股間をまさぐり撫で上げると、男の手が彼女の背に回った。

「今日のお仕事はお休みか？」

「夕方に働いたから、もういいでしょ？」

「そうだな」

男女の手が互いの性器を弄り合い始める。

「今晚は泊つて行つてくれるでしょ？」

「ああ、一晩中可愛がつてやる」

「にやあーん♡ もう、そこ、まだダメえ♡」

理事長と理事長夫人がベッドの上で絡み合い始めた頃、本物の白音は冥界のグレモリー城で働いていた。

白音との放課後美食活動を始めてから、いくらかの日が過ぎたある日の深夜。

床についていたシグネはふと目が覚めてしまった。彼女はもぞもぞと起き上がると自室のトイレへと向かう。

学園の寮の部屋には、簡単なキツチンと、洋式トイレ、ユニットバスがあり、大学生向けの賃貸アパートのような造りだ。

「はあ……」

用を足し終わると、自分の喉が渴いていることに気付く。

キツチンに足を向け、冷蔵庫を開けてみると見事に何も無い。なにか飲み物でもと思っていたところだったので、少しガクリと来てしまう。

僅かの間、水道の蛇口に目を向けたシグネは、頭を振ると財布を手に寝巻にしているジャージ姿で自室を出た。

向かう先は階段だ。この寮では二階ごとに自動販売機が設置されているのだが、シグネの部屋の有る階は残念ながら自動販売機のない階だった。

「ふああ」

シグネの部屋があるのは、駒王学園女子寮H棟の一番上の階。これより上には屋上しかないので、飲み物を買に行くなら階段を下ることになる。エレベーターもあるが、一階程度なら使うほどでもない。あくびをしながらシグネが階段へと向かうと、階段を上がっていく中等部女子制服姿の人影があった。

「あれ……椿姫ちゃん？」

半ば寝ぼけた頭でそう思いながら、シグネは階段を下りて行く。

下の階に降りたシグネは自販機に小銭を投入し、何気なくボタンを押すと目的と異なる商品を購入してしまった。

「あ、やっちゃった……これ、飲んだことないけど」

それは赤いドラゴンの絵が印刷された、エナジードリンク。その名も『ブーステッド・ドラゴン』。徹夜で勉強する一部の学生の夜のお供らしい。

「眠れなくなっちゃいそうだわ」

「買いなおそうか。しかし、これまで味わったことの無いドリンクへの興味はある。」

「幸い明日は休日ということもあって、シグネはそれに口を付けた。意外と、美味しい……かも？」

結構美味しかったので、ごくごくとそれを飲み干すシグネ。

カッと吹き飛ぶ眠気に、みなぎってくる謎のパワー。その恐ろしい即効性には戦慄すら覚える。

謎ドリンクパワーで、しゃっきりしてしまった頭で自室に戻ろうとしたシグネは、ふと先ほど見かけた女子生徒のことを思い出した。

「上に行ったよね？」

真羅椿姫。シグネと同じH棟に住んでいる中等部の生徒だ。

長い黒髪と眼鏡の向こうのキリリとした瞳が印象的な下級生である。

深夜に制服を着て、屋上へ出るドアがあるだけの場所に何の用事があったのだろうか？ 鍵がかかっているはずなのに……。

それが妙に気になったシグネは、なんとなく足音を殺して階段を上って行った。

「あれ……？」

そろりそろりと階段を上がり終えたシグネは、「ん？」と首を傾げた。

そこには誰もいなかったのだ。屋上へのドアのノブを捻ってみるが、鍵もきちんとかかっている。

ドリンクを飲んでいる間に降りて来て、誰かの部屋に行ったのかな？

そう考えたシグネは、そのまま自室に戻ることにした。

駒王学園女子寮H棟には一つの噂話がある。学校の怪談のような類のものだ。

その噂によると、H棟には秘密の最上階があるらしい。

普通に寮生たちが暮らしている階と屋上との間に、隠された階層がひとつ存在していて、そこにうっかり迷い込んでしまった生徒は悪魔に貪り食われてしまうのだとか。

悪魔に食べられてしまったのに、どうしてその噂話が知られているのか。その理由を知っている人間はいない。

ここはその隠された階。普通に歩いてはたどり着けない悪魔の領域。

そこに今、一組の男女がいた。どちらも人間ではない。悪魔だ。

「んぐつ、うう、んむう……ちゆう、ぱあ……」

その部屋の中では、男と女の分泌する生々しい体液の匂いが漂い始めていた。

「ああ、いいぞ。だいぶ上手くなったな、椿姫」

乱れた中等部女子制服姿の長い黒髪の生徒が、ズボンの前のファスナーを下ろしたペニスを露出させた男の前に跪いている。

女子生徒のブラウスのボタンは上から服の半ばまで外され、そこからのぞくブラを押し上げる白い豊かな乳肉は彼女が頭を前後に振るたびに揺れ動いていた。

「ふぁい……♡」

普段は理知的な光を宿す彼女——真羅椿姫——の瞳は情欲に濁り、口淫のテクニックを褒める男に甘えた声で答える。

「最初は随分と嫌がっていたのにな」

椿姫の黒髪を撫でながら、男はいやらしい笑みを浮かべた。

肉棒を咥えながらそれを見上げる椿姫の瞳には、男が言うような嫌悪などもはや微塵もなく肉悦への期待しかない。まだ、どこかあどけなさの残る美貌には、慕情のようなものさえ見え隠れしている。

「こりえは、ソーナさまのためでもありませんから……」

「そうか……そう、だったな。ほら、もつと舌を絡めろ」

「うっんう……はあい♡」

男と椿姫の関係は、一方的に始まった。

黒い髪に、眼鏡、そして元人間の転生悪魔である彼女の主に酷似した魔力の波動。それらに興味を惹かれた男が強引に関係を迫ったのだ。



椿姫は幼い頃に神器を発現したが、それを制御するだけの能力がなかった。そのため、神器『追憶の鏡』ミラー・アリスが暴走してしまい幾度も鏡の中から怪物を呼び寄せてしまっていた。

日本の退魔組織の中で五大宗家と呼ばれる名門の一つである真羅家。

そこに生まれた椿姫は、その身に宿してしまった神器がためにバケモノに憑かれた子と迫害を受け、幽閉されて育った。

彼女の両親は、そんな娘のために禁忌を犯した。娘を助けようと悪魔を呼び出したのだ。

その際に駒王学園の制服を着て現れた悪魔こそが、転生悪魔となった椿姫の主である。

『王』から『女王』の駒を受け取り、力を身に着けた椿姫はようやく神器を制御できるようになった。

だが、彼女とその両親は悪魔と取引したことを知られてしまい、退魔の一族である真羅家を追われてしまう。

迫害され、幽閉されて過ごしてはいたが、それまで生きて来た場所を失った椿姫は、主の勧めでこの学園に通うようになった。

そうして、この悪魔の理事長と出会ってしまったのだ。

「墮天使共の研究によると、赤龍帝の体液には神器の力を高める効果があるらしいぞ」

そう言って近づいてきた男の力と権力に椿姫は抗えなかった。

主がこの男を見る目に感じるものがあつたことも、椿姫から選択肢を奪った。相談できないうちに、寝室に引きずり込まれ――。

「ソーナは俺がどんな男なのか知っている。そのソーナがお前にこの学園を勧めた……どういう意味か分かるな？」

「そん、な……」

戸惑いのうちに服を剥ぎ取られ、愛撫によがらされ、処女を奪われていた。

深々と挿し込まれたペニスを、椿姫の熱い褰がグイグイと絡みつき締め付ける。身体を内側から広げられたような感覚に、あの日の椿姫は悶え苦しみ……そして快楽を教え込まれた。

初めて受け入れた男のモノ。男女の結合部からは愛液に混じった破瓜の血が流れている。

「どうだ真羅、男を知った気分は？　ハハ、さすがに初めてだけあつて、よく締め付けてくるな」

駒王学園理事長リヴラクス・グレモリーに正常位の態勢で貫かれた椿姫は、歪めた顔を結合部に向け、そこに見える赤の色に涙を流した。「いや、いやあ……そん、なこと聞かないでえ……。理事長、ああつ、んんっっ♡」

痛いはずだ。あんなに血が出ている。視覚的にはそう思うのに、事前にたつぷりと愛撫され昂らされた椿姫の身体は男のモノを受け入れてしまっていた。

痛みはある。それなのにそれ以上に気持ちいい。

挿入を終えた理事長は、その後のことを急がなかった。じつくりと廻るように椿姫の中を躡け、最初の夜から喘ぎ狂わせていったのだ。「そろそろ動くぞ。たつぷりと味わえ、すぐにもっと気持ちよくなる」時間をかけて椿姫の膣内を自分のモノに慣れさせた理事長は、ゆっくりと腰を動かし始める。

「いやあ、ああつ……なん、でえ……ああ♡」

理事長の巧みな腰遣いは、椿姫の秘孔をたちまちに蕩けさせた。

初めてなのに、快感に震えてしまう。強烈な官能に椿姫の頭は真っ白になっていった。

「ほら、気持ち良ければイイと言え。どこがイイのか俺に教えろ」
「ああつ、イイ♡　そこ、んあつ、ああつ♡　そこが、すごい、イイ♡」

男の精をねだる牝穴の奥深くまで理事長のモノが突き刺さる。

「子宮の中に思いつきり出してやる。ありがたく受け取れ」

「だめえ、だめです！　そんな、それだけはやめてえ……っ!!」

中出し宣言に椿姫は怯え、必死に逃れようとした。

しかし、奥深くまで肉棒を突き刺され腰をがっしりと捕まえられるには逃れようもない。それ以前に、与えられた官能によって身体力が抜けてしまっていて、椿姫のもがく様子は逆に男の射精を誘うダンスのようではなかった。

「力が欲しいんだろう？　ここまでしておいて、俺の精を受けないのではなんの意味もないぞ？」

理事長にそう言われ、椿姫は黙って両手で顔を隠した。

「わたし、私は……あつ、あつ、ああっん♡♡」

椿姫の返答などどちらでも良かった。女の中に肉棒を挿し込み、相手の身体が精を求め、自分もそれを吐き出したくなっている。

その状況で理事長のすることなど、既に決まっていたのだ。

「いいみたいだな。なら、受け取れ！」

「いい、いやあ、ああイイっ♡」

自らの意志で精を胎内に受け入れさせる。承諾させ、受け入れさせた。

そのことを椿姫の心に刻み込みながら、理事長はラストスパートに入った。

「イクぞ、おおおっおおお!!」

理事長の雄たけびとともに、椿姫の胎内に熱い精液がぶちまけられる。

ほんの数時間前までは無垢な乙女のものであった椿姫の膣孔。そこは今や理事長によって蹂躪され、女の悦びを教え込まれ、そしてついに悪魔のザーメンによって穢されてしまったのだ。

「いやあ、いやああああつ……、イイああああああつ♡♡♡!!」

まだ少女と呼ばれる年齢の椿姫。そんな彼女のか細い悲鳴と嬌声が入り混じった声が室内に響き渡る。

そして、この一射は、その日の交わりの始まりに過ぎなかったのだ。
(堕ちたな)

一夜にして椿姫は愛欲の虜になった。

その結果が、今や理事長のペニスを悦んで頬張る少女の姿である。

◇

彼女のはじめてを奪ったときを思い出しながら存分に口淫奉仕を楽しんで男は、椿姫の口内に遠慮なく精を吐き出した。

「うんっ、ぐっ……こくっ、んはぁ♡」

椿姫の喉はコクリコクリと動いてザーメンを飲み干していく。

その様子を見届けると、理事長は彼女の口から肉棒をずるりと引き抜いた。唾液と精液の入り混じった糸の橋が、少女の口と肉棒の間にかかる。

その雫が零れ落ちるのがもつたいたないとも言うかのように椿姫は舌を伸ばし、理事長の肉棒を熱のこもった瞳で掃除し始める。

「バランスブレイカーの調子はどうだ？」

お掃除フェラが一通り済んだところで、理事長はそう言って彼女に声をかけた。

「はい、順調に制御もできるようになってきました」

理事長がとある事情から入手した墮天使による神器研究の資料。そこに記されていた内容は確かだったらしい。

四月にこの学園に編入してきて以来幾度も赤龍帝の体液を注ぎ込まれた椿姫は、先日神器の禁手化に至っていた。つい半年前まで通常状態の神器の制御すら出来なかった少女が、僅かな期間でバランスブレイクしたのだ。

「ソーナの評価は上がっただろうな」

制御不能だった神器所有者を自身の眷属とすることで安定させ、そこから数か月で禁手に至らせる。椿姫の『王』ソーナ・シトリ、彼

女の悪魔社会における評価はこれだけでかなり上がったことだろう。

「これもすべて、理事長のおかげです」

「そんなことはない。お前がこうやって頑張ったからだ」

理事長は椿姫を誉めながら、彼女の頬を優しく撫でる。

そして、うつとりと見上げてくる他者の眷属、ソーナ・シトリーの

『女王』に別れの言葉を告げた。

「なら、もう十分だな。嫌がるお前を無理矢理抱いてきたが、これ以上は必要ないだろう」

「あつ、え……う？」

言われた内容を理解したくない。

蕩けさせていた表情を一転させ、ぐしゃりと悲しみの色に染まった椿姫を理事長が見下ろす。

「元々、お前との関係は赤龍帝の体液を摂取することで神器とその所有者の力が強まるからだだったはずだ。お前はもう十分に強くなった。バランスブレイカーにまで至ったのなら、もう俺は必要ないな？ 本当は、嫌だったんだろう？」

「い、嫌です！ こんな、わたし、そんなの……嫌っ！」

「そうだな、嫌だったよな。俺としてはお前ともっと楽しみたいところだが、理由もなくなってしまった以上もう無理強いは出来ん」

縫り付いてくる椿姫を、理事長は突き放した。

真羅椿姫は、幼少の頃から一族の中で迫害されて育ってきた少女だ。神器を暴走させ怪物を呼び寄せてしまうために幽閉されていたので、学校にも行けず友達の一人もいなかった。

両親以外の親類は彼女に冷たく、家族以外の温もりなどまったく知らずに育ってきたのだ。

そんな椿姫にとつて、その苦しい状況から解放してくれたソーナ・シトリーは恩人であり、そのツテで入学したこの学園は初めてと言ってもいい家族以外の人間との交流の場でもあった。

そして、駒王学園理事長、グレモリー家次期当主、『紫紅の龍帝』リヴラクス・グレモリーは、椿姫のこれまでの人生でもっとも濃密にかわった相手になる。

男などまったく知らなかった彼女の身体。もうそのどこにも、彼の手に触れられたことの無い場所などない。

無垢だった彼女に女の悦びを教え込んだのは目の前の男だ。交わりの最中に繰り返し愛の言葉を囁いて、家族以外からの情に飢えていた彼女の心を満たしたのも目の前の男だ。

「すて、捨てないでください。わたし、なんでもします。だから……もつと、まだ……」

神器がバランスブレイカーに至るには、何かしら劇的な出来事が必要だと言われている。椿姫にとつてのそれが何だったかのか。

それは、目の前の男に懇願している状況では明らかだ。奇しくもそれは、椿姫が必死に抱き着いている男が至ったとの似たような状況。つまりは、情交によるもの。

「捨てるだなんて人間きの悪いことを言うな。俺はお前が嫌なら、もう無理強いはいしなと言っただけだ」

「嫌じゃ、嫌じゃないです。好きです。好き、あなたを愛しています。だから……」

縋り付く椿姫を抱き寄せ、理事長は彼女を強く抱きしめた。

「そうか、お前がそう言ってくれるのなら遠慮はいらないな。嬉しいよ、椿姫」

これまでもなんら遠慮などしていなかったというのに、男はそう言っただけで彼女の耳に悪魔の囁きを流し込む。

初めて深くかかわり合った異性である自分に椿姫が依存していることなど、理事長には分かり切っていたことだ。

そこで一度突き放して見せ、不安を与え、縋り付かせる。そうしてより一層その心を強め、彼女に自分からそうしたのだと深く植え付ける。

本来、この悪魔の理事長にしてみれば女の心を手に入れるグレモリーの魔力と、異性を惹きつける龍のオーラ、それだけでも十分だ。わざわざここまでする必要はない。

あえてこんな真似をしたのは、男を知らなかった女を思い通りに転がし、自分の色に染め上げていく悦びに浸りたかったから。ただそれ

だけのことに過ぎない。

「ああっ、理事長……んっ♡」

抱きしめた彼女から見えない位置でほくそ笑むと、理事長はそつと椿姫との距離を離し見つめ合う態勢を取る。

女の顔、特に瞳を好む男は、彼女の瞳に宿る己への感情を愉しんだ後、唇を近づけた。

「んむむむう、ちゅう……んちゅう……れろお、ふあん、んっう♡」

初心だった女子生徒は、理事長の巧みなキスにドロドロに蕩けさせられていく。

これまで心の中にあつた主のためと言う枷さえも取り払われ、ただひたすらに溺れていく。

「椿姫、今までと感じ方が違うのが分かるか？ ほら、もつと絡めて来い」

一度口を離され、そう言われた。椿姫はその言葉にたしかに何かがある今までと違うと感じながら、自ら求めて舌を伸ばしうっとりとした表情で絡め合わせ始めた。

「どうし、て……はあ♡」

しばらくして唇が離されると、息を切らせながら椿姫はたずねた。

「悪魔の身体は魔力、心の中のイメージによって大きく変わる。お前が素直になれば、感じ方も変わってくるさ。まあ、言い訳をしながらというのも、それはそれでいいらしいがな」

そう言いながら、理事長は椿姫の乱れた制服の胸元に片手を挿し込んだ。ブラをズラされ、胸をまさぐられる。

「ふあ、はああん♡」

「すっかり勃っているようだな。こっちはどうだ……ふふ、もう欲しくてたまらないか」

欲しがりになっている乳首を指先で転がされ、スカートの中に入り込んだ理事長の指がカリカリと爪先で引っ掻くようにしてパンツの布越しに割れ目を幾度もなぞる。

「ああっ、あああつ、あつ、ああっん♡」

「どうして欲しい？ 言ってみろ」

ささやく悪魔にトロロンとした瞳を向け、椿姫は肉棒をねだる。

「理事長のオチンチンが欲しいです。ここに、私の、椿姫のオマンコの奥にたくさん精子を注いでください」

椿姫は以前命令されて言わされたことを、今は自分から口にしていて。

下腹部、子宮のあるだろう付近を指先でいやらしくなぞるようにして。

「そうか、ならたまには俺も脱がせてもらおうとしようか」

部屋の中央にあるベッドの上に視線を向ける理事長に命じられ、椿姫は彼の服を脱がし始めた。

彼の後ろに回ってジャケツトを脱がし、ネクタイを緩めて外す。そんなことが何故かひどく嬉しく感じられてしまう。

シャツのボタンを外し、少しずつ男の肌が露わになっていくことに、椿姫の中の情欲が耐えがたく膨れ上がっていった。

「ほら、こっちに来い」

やがて全裸になった男は、ベッドの上で仰向けになると椿姫を招く。

「はい、理事長。その……失礼します」

騎乗位を求められている。それを意識した椿姫の顔には、肉悦への淫らな期待がありありと浮かんでいた。

そこにはもう、無垢な処女だった頃の面影はない。男の求めに従順に応じ、肉欲に酔いしれる下僕牝の顔だ。

（コイツはもう、俺の肉棒でしか感じられない体になっているだろうな）

学生服から年齢には不相応は大きさの胸をまろび出させ、スカートをめくり上げながら自分の腰をまたぐ少女の姿。

理事長はその痴態を愉しみながら、もうすぐ訪れる蜜壺に期待しペニスを大きく硬くさせた。

ぐちやぐちやに濡れたパンツの股布が椿姫自身の指でズラされ、秘孔のヌルヌルとした感触が肉棒の先端に触れる。

「トロトロになっっているな。そんなに俺のチンポが欲しかったのか」

「はい、ああっ♡ はい、はい、はいって……ふあああ、ああああっん♡♡」

一気に椿姫の腰が落とされ、奥まで肉棒が呑み込まれた。

最初の時とは比べ物にならないくらいにトロミを増した膣内は、硬かったあの頃とは違って理事長のものを根元まで容易に受け入れた。

「まだ入れているとは言っていないなかつたんだがな」

「ああっ♡ すいません、でも、あんっ♡ ほしく、て、あはあっ♡」

「動かしていいとも言っていないぞ。仕方のないヤツだ」

ずぶり、ぬちゆりと椿姫が腰を揺するたびに淫らな音が響く。

絡みついてくる肉襞の感触と、締め付けの感触、そして愛欲に墜ちきった少女の姿をニヤニヤと楽しみながら、理事長は椿姫の身体のあちらこちらを撫でまわしていった。

「んはあ♡ んああ♡ ああん♡ はあん♡」

「ほら、もっと腰を動かせ。俺を気持ちよくしろ」

喘ぎながら腰を振る椿姫。その弱い場所を不意に突き上げ抉ってやると、明らかに自身で腰を振るより感じている顔をする。

「ふああああん♡♡ はあ、はい、理事長。もっと、もっと、私のオマシコで楽しんでください」

「そうだ、いいぞ。こっちも上手くなったな。これはそのご褒美だ。そらっ！」

そのことに気を良くした男は、ガンガンと下から彼女の中を突き上げ始めた。

「ああっ、これ、これえ♡ これ、ああ♡ すご、すごい♡♡ イイ、イイっ♡♡」

「自分で動くよりも、こっちの方がイイのか？」

「ああっ♡ ちが、ちがう、ぜんぜん、ちがいます、んあああっ♡ んっ♡ んん、ああ♡♡」

途端にそれまでよりも遥かに乱れ始めた様子に、理事長は確信した。

「椿姫、俺に突かれないと生きていけない身体になったか！」

「ああっ♡ んあ、ツん♡ なり、なりゆました、椿姫は、理事長が

いなひと、生きていけまひえん♡♡」

「よーし、いい子だ。ほら、イケ、イってしまえ！ お前の欲しがりなマンコにぶちまけてやる！」

「はひい♡ イキ、イキましゅ、ん♡♡ んんああ♡♡ ああああつううん♡♡♡!!」

絶頂を迎えた椿姫の膣が、男の精を搾り取ろうとグイグイと締め付けてくる。

理事長は少女の腰を両手で掴むと、根元まで埋まっている肉棒を更に奥へと埋めこもうとでもするかのように引き付けた。

子宮の口が押し上げられ、勢いよく肉棒の先から放たれたザーメンが女の奥底に飲み込まれていく。

「んー……、はあー……、んうー……、はあああ……♡ はああ、りじちよ……んあつ♡」

抱擁を求めるように倒れ込んだ椿姫の身体を受け止めると、理事長は彼女の身体を抱えて体勢を入れ替えた。

「まだ休むには早いぞ。次は俺が上になってやる」

「ああつ、あつ、やす、ませてくださ……イイツ♡」

「ダメだ。誰がお前のご主人さまなのかを、今から死ぬほど教え込んでやる」

「ひいつ♡ あゝー♡ あゝあゝくく♡♡ あつ、ひいつんん♡♡♡!!」

駒王学園女子寮H棟。

学園内でも見目麗しいと評判の女子生徒の多く集まるその寮には、秘密の階層がある。

悪魔の理事長がそこに訪れた日、H棟の隠された最上階には女子生徒の淫らな叫び声が響き渡るのだ。

とある筋から入手した墮天使どもの研究資料。そこには神器の種類ごとの大まかな分類が記されていた。

その分類は非常に大雑把というか一つの神器が複数分類にまたがることも多く、一概に「この系統はこう！」と言い切れるものではない。

たとえば、『赤龍帝の籠手』は下位にあたる『龍の手』と同様のドラゴン系・魔物封印型・状態変化系統に分類され、なおかつ神滅具でもある。資料内で用いられている「系統」と「型」の違いや区分などを理解するには墮天使の言語をより詳しく理解する必要があるのだろう。

それでも、ローゼンクロイツやフェニックス家のコネなどから神器所有者の転生悪魔たちへの聞き取り調査をした結果、この資料がある程度は参考になりそうであることは分かった。

そんな墮天使の資料によると、七滝詩求子の神器である『饕餮』^{トウテツ}は、四凶系・魔物封印型・独立具現型神器ということになる。

封印されている魔物はそのままの『饕餮』。四凶と呼ばれ恐れられた四種の不吉で強力な妖怪の中でも、特に危険度が高いとされているあらゆるものを喰らう大妖怪だ。神々をも焼き殺した二天龍の一人であるドライグですら警戒を促すほどのだから、その凶悪さは折り紙付きと言えるだろう。

しかし、墮天使の資料にはよく分からないところが多すぎる。『饕餮』のような独立具現型神器と『赤龍帝の籠手』のような魔物封印型は別のものと記している部分もあれば、『饕餮』は魔物を封じたタイプの神器とも書かれている。

魔物を封じているのなら、それは魔物封印型ではないのか？ よく分からん。

子供のこともあって神器に興味津々のローゼンクロイツにも解説

させているが、彼によるとこの資料はどうも何人かの研究者の成果を持ち寄って作られた物のように思えるそうだ。そのため、研究者ごに見解や用語の定義が異なっている可能性がある」と聞いた。

「まったく、手間を掛けさせてくれるものだ。」

だが、それでも今回のシグネの件では役に立つのだから良しとしようじゃないか。

シグネの過去の経歴などをざっと調べてみると、彼女のこれまでの人生はあまり幸福とは言い難い。家族関係の凶事なども考えると……やはり災いを呼ぶ存在を身に宿してしまったことが関係しているのではないだろうか。

『赤龍帝の籠手』を持つ者が争乱に巻き込まれやすく『白龍皇の光翼』を持つ者とぶつかり合う宿命と言われるように、『四凶』の神器を持つ者は同じ『四凶』の神器持ちと出会いやすく災禍に巻き込まれやすいようだ。

シグネがこの先まともな人としての生を過ごしていくことはまず不可能だろう。神器に宿る魔が災いを呼び寄せ、生きているだけで必ずこちら側に落ちてくる。

もしくは、身に宿した大喰らいの魔物を飢えさせ暴走を招き……神器の中の饕餮に喰われて死ぬか、だ。

仮に素質に恵まれて制御に成功し続け、災いを乗り越えて行けたとしても、シグネの前にはもう一つの難関が立ちふさがっている。

それは——食費だ。

独立具現化した饕餮は、途轍もなくよく食べるらしい。饕餮の『饕』の字は財産を貪るの意であり、『餮』の字は食物を貪るの意なので——まさにその名の通りの力を発揮して所有者に負担をかけるものなのだ。

現代日本では輸入により食料が豊富なので金さえあればなんとかなるが……飢饉などに襲われた地域・時代にこの『饕餮』の神器の所有者が居たとしたら、まず確実に不幸になることだろう。

飢えた者たちの前で独立具現した饕餮に貴重な食料を貪り食わせねば、代わりに自身が喰われてしまうかもしれないのだから……。

災いを呼び寄せ、暴走しやすく、所有者の身体も財産も喰い尽くし、

時勢によつては周囲からの悪感情すら招きかねない神器。聖書の神の口くでもなさを証明するような代物だ。

悪魔の方がマシとは言わないが、俺にはそんなシグネを養うだけの財と権力、そして何より力がある。

聖書の神話において人類に最も災禍を振りまく存在は他ならぬ聖書の神であるが、悪魔もまた災いを司る闇の種族。

自らが司る災いを自分たちに向けるワケもないので、冥界／悪魔領の農業や畜産業はかなり安定している。備蓄も十分にある。なので、そうそう食い物に困ることは無い。

加えて俺はグレモリー家の次期当主であり、個人的にも多くの財産を保有している。食料を購入する資金に困ることはないし、駒をぶち込んで眷属としたならば領地だつて与えてやれる。自身の領地で農業でもさせてやれば、大食い饕餮の食糧問題も解決だ。

そして、俺の持つドラゴンモテオーラとグレモリーの愛の魔力をもつてすれば、饕餮を制御することも叶う見込みが十分以上にある。

凶悪とはいっても所詮は神滅具に届かないのが『饕餮』よ。我が幾柱もの神を滅ぼした龍のオーラと、ルシファーを優に上回る我が愛欲の魔力の前にひれ伏し腹を見せるがいい。

独立具現型神器によつて現れる魔物の姿の分身は、主の体より生じ、主と同調する肉体を持つという。つまり……女のシグネより生れた饕餮は、女の身体を持つということだ。ならば、主であるシグネの肉体を籠絡してしまえば、そこから生じる饕餮もまた同じということ。これは俺の得意分野だ。イケルイケル。

そして、独立具現型神器に封じられた魔物とその神器の所有者の魂は、他の型の神器のそれよりも遥かに一体性が高いらしい。資料を読んだ限りでは、それはユング心理学で言うところの『影∥シャドウ』に近いのではないか……というのが、最近俺が与えた仕事のために心理学のおさらいを始めているローゼンクロイツの意見だ。

ま、もともとローゼンクロイツは（本人基準で）ある程度は心理学も修めていたようだが、メンタルケアしろと命じて以来また詳しく勉強しているところらしい。神器が所有者の想いに影響されることは

周知の事実なので、俺からの命令は同時にヤツの息子のためでもあつたわけだな。感謝するがいい。ふはは。

まあ、ローゼンクロイツのことはどうでもいいとして。

女であるシグネの心の影、魂の闇の部分、他者には見せられない汚いものだと抑圧され、倫理と反するが故に自身でも認められないドロドロとしたもの。神器の心奥に眠る魔物と一体化した、シグネの深層にある心理。

人が表に見せる様々な言動、それらを裏側から支配する暗く濁った情と欲に満ちた心の奥底。

そこそ我らが領域、悪魔の領分。

独立具現型神器に宿る者は所有者にとつての『もう一人の自分』であるのなら、饕餮にとつてのシグネもまた『もう一人の自分』。

詩求子トウテツは饕餮シグネ、饕餮シグネは詩求子トウテツ。

シグネを愛欲で縛り上げ、情欲に溺れさせ、心の深奥から俺のものにしてやろう。そのとき、女の身に宿った饕餮もまた俺のものとなるのだ。

魔物を封じた神器持ちを眷属とするのならば、神器に宿る魔物もまた俺の下僕であり身内。美少女が傷つくのは困るので、ここはひとつ体も心も魂も全て一体化、融合してもらおうとしよう。

シグネはこの先にある破滅の可能性が非常に高い絶望的な人生を過トごさずに済む。

饕餮は聖書の神に封じられ宿主が死ぬ度に転生し延々と疎まれ続ける呪われた神器の身から解放される。大いに食を貪らせてやろう。なあに、財はある。

そして俺は美少女と怪物、この二つの心と魂が融合した『饕餮シグネ』という強くて美しい眷属を手に入れられるわけだ。

もちろん、利と理を説いたところで気に喰わないとはねつけてくるかもしれない。だが――

「ククク、ハハハ、ハハハハハハッー」

――女では『紫紅の龍帝』には勝てない。牝に宿ったのが運の尽き。神器の主も、その中身も、まとめて我が眷属に下してやる！

「主さん、急に悪役笑いしてどしたの？」

猫姿で膝の上に乗せ、資料を読みながら手慰みに撫でていた黒歌が呆れたように見上げてくる。

「おっと、口に出してしまったか。いや、思わず」

「んふふ……にゃんー！」

にゃんと鳴くと猫黒歌はバク転しながらボフンと煙を出して、人形態に変化した。

膝の上に女の体重と温もり、柔らかな感触。発情した雌猫の匂いが鼻をくすぐる。彼女の両脚が俺の腰を挟んで絡みついてきた。

「んっ、おつきくなってる……♡」

正面から猫耳の美女に抱き着かれ、胸板の上で黒歌の巨乳がぐにゅりと潰れる。くいくいと彼女の股間が、ズボンのファスナーのあたりにこすりつけられる。

するとシグネとのこの後を想像して大きくなり始めていた俺の股間は、たちまちのうちに力強くズボン布を内側から押し上げ始めた。

「黒歌といると仕事が進まないな」

そうつぶやいた後、俺ははだけられた着物からのぞいた黒歌の太腿に手を伸ばす。毛皮の手触りもいいが、生肌の感触はまた別格だ。

「にあん……♡ やらしいさ・わ・り・か・た♡」

どうやら色々と考えてるのはしばらく後になりそうだ。



『虚蝉機関』本部。

日本のいずこかの山中に、『百鬼』、『櫛橋』、『真羅』、『童門』、『姫島』ら『五大宗家』と呼ばれる一族から追放された者たちが築いた隠されたアジトが存在している。

そのアジトの一角、無数の培養槽が並ぶ異様な空間で、三つ揃いの背広を着た初老の男がつぶやきをこぼした。

「困ったことになったものだ」

精悍な顔をした大柄な男だ。太っているわけではなく、肩幅が広く鍛え上げた身体つきをしている。

男の名は、姫島唐棣^{はねず}。『虚蟬機関』を束ねる立場にある者だ。

「黄龍、青龍、白虎、玄武……朱雀。五大宗家のバケモノに対抗するための四凶だったというのに」

唐棣の目が培養槽に向けられた。

培養槽はその横に設置されたカプセルと繋がっており、培養槽の中を満たす緑色の液体には中年の男女、あるいは若者が浮かんでいる。そして、その培養槽と繋がる横のカプセル内には、世間で『ヘヴンリー・オブ・アロハ号海難事故』によって死亡したとされている陵空高校の生徒たちが納められていた。

彼ら彼女らは『ウツセミ』。

独立具現型の人工的なセイクリッド・ギアの試験体。五大宗家に生まれながら、その家々が求める力——神仏の加護などの素質——を得られなかったがために不遇な扱いを受け、罵られ、追われた者たちがその恨みを晴らそうと企てた『四凶計画』のための実験台たちだ。

「室長」

カプセルに眠る『ウツセミ』たちを前に考えを巡らす唐棣。そんな彼の下に駆け寄ってくる影があった。

「計久^{かずひさ}か。どうした?」

自身を探していたらしい二十代後半の男、『虚蟬機関』の同胞である童門計久に唐棣は静かに目を向ける。

「『饗養』への手出しを禁ずるってのは、どういうことですか!？」

「言葉通りだ。アレはもはや我らが手を出してはならない場所にある」

『四凶計画』。五大宗家を見返すためには、宗家が有する聖獣たちを退ける必要がある。そのための戦力として、『虚蟬機関』は四凶と呼ばれる怪物たちに目を付けた。

それらの怪物が封じられた独立具現型セイクリッド・ギアの力を手に入れ、その力を以て宗家のバケモノたちを討ち果たさんがために。

そのために、そのためだけに、唐棣たちは四凶のセイクリッド・ギアを宿した者たちが集っていた学び舎の生徒たちを豪華客船ごと海に沈めて手中におさめようとしたのだ。

「しかし、『饕餮』の、『四凶』最強の力が無くては……！」

「アレを……『紫紅の龍帝』とその背後にある勢力を敵に回して『饕餮』を奪えるだけの戦力があるのならば、『四凶』がなくとも我らは五大宗家を潰せるだろう」

しかし、その『四凶計画』は始まりの時点でのミスにより、大幅な変更を余儀なくされていた。

肝心要の『四凶』の神器を宿した者たちは、こちらの企てを察知したのだから神器が起こした体調不良により修学旅行を欠席。『墮天使の一団』の妨害もあってそれを知らずにいた『虚蟬機関』は、彼らの同級生だけを入手する形になってしまった。

回収し損ねた『生き残りの生徒たち』は、それぞれがバラバラに転校していくことに。

「それほど、ですか。室長がそこまでおっしゃるほどに、その悪魔は……」

転校していった生徒たちの中で、最も問題となったのが最強の四凶『饕餮』の所有者と目される七滝詩求子だ。

彼女は『虚蟬機関』や、おそらく有っただろう墮天使たちの介入を超えて、よりにもよって悪魔の公爵家が運営する学園に転校してしまった。それも学園敷地内にある寮住まいの生徒として。

悪魔は、そして駒王学園理事長リヴラクス・グレモリーは、七滝詩求子が神器所有者であることに気付いていた。おそらくだが、『悪魔の駒』を用いて眷属にでもするつもりだろう。ここ数百年、悪魔たちは神器を所有する人間を下僕とすることに熱心だ。

「あれは龍だ。我らが鼠とした場合のな」

同じ姫島から追われた者がリヴラクス・グレモリーの下にいる縁をたどり、唐棣は先日彼と面会してきた。悪魔との取引という体裁でだ。

そして、相対して分かった。

勝てない、と。

戦闘経験、修練に費やした時間、死線を潜り抜けた回数。それらは唐棣の方が圧倒的に勝っているだろう。

だが、どれほど鍛え上げ研ぎ澄まそうとも、鼠では龍に勝てない。唐棣にとつては、五大宗家の聖獣ですらバケモノと呼ぶにふさわしい脅威だ。

だが、『紫紅の龍帝』は元々の悪魔としての力だけで神すら屠れるだろう強大な純血悪魔。それが神を滅ぼす力の具現までも手にしているというバケモノの中のバケモノ。

五大宗家の総力すら上回りかねない龍の帝王を敵に回すことなどできようはずがない。あの悪魔の龍の手にかかれば、宗家の聖獣程度一捻りだろう。

「では、どうすると……?」

「先に伝えた通り、計画を変更する」

『饕餮』には手を出さないが、残る三凶にはこれまで通り『ウツセミ』たちをけしかけ続け入手を試みる。

「あの『狗』を?」

「そうだ。お前が殺されかけたあの『狗』を禍々しき刃に仕立て上げる。幾瀬いんくせとびお鳶雄は五大宗家『姫島』より出でた黒き穢れ。そして、それを保護する墮天使たちと五大宗家の関係は良好とは言い難い」

童門計久は嫌らしい笑みをカプセルと培養槽の中に眠る者たちに向けた。

「ならば、これらは『狗』の餌ですか」

「そうだな。幸いと言つていいのかは分からないが、龍帝との取引は上手く行った。現世、この人間の世界には存在しない冥界の強力な魔物も入手できるだろう」

悪魔との取引によって得た強力な魔物たち。それを用いて『ウツセミ』を強化し、『狗』に喰わせるのだ。

放課後。

いつものようにシグネが理事長の邸宅へと白音を迎えに行くと、白い髪の小柄な友達ではなく紅色の髪の青年が玄関に現れた。

紅髪紫瞳の男性、駒王学園理事長リヴラクス・グレモリーの人とは思えないほどの美形っぷりと、なんだかよく分からないがくらりと来てしまう雰囲気。シグネの頬に瞬時に紅がさす。

「あ……理事長先生。こ、こんにちわ」

「ああ、こんにちは七滝。せっかく来てもらってすまないが、実は白音に急用が出来てしまつてな」

サマージャケットにTシャツ。いつもと違う普段着らしき理事長が、シグネを見下ろしながらジッと瞳を覗き込んでくる。

そうされるとなんだか気持ちがあわわわとしてしまつて、シグネは少しの間言われた内容が頭に入つてこなかった。

「……………え、あ……そう、です、か」

ようやく返した言葉もしどろもどろになつてしまい、そのことが恥ずかしくなつて顔が赤くなつてしまう。

もちろん残念な気持ちもある。最近のシグネの一番の楽しみは放課後に、新しく出来た年下の友達とお出かけすることだったのだから。

でも、それ以上に……理事長と話せたことが嬉しく思えてしまつていた。

「それでどうだろう。お詫びと言つてはなんだが、今日は俺と出かけるかい？」

「へ？ え、あ、えっと……………」

憧れの——たぶん、ひとめぼれだった——相手からの突然の申し出に、シグネの頭の中はぐるぐると空回りしてしまい上手く言葉が出てこない。

「俺ではダメだったか？」

目の前に理事長の手が差し出されていた。いつの間にか、二人の間

にあつた距離が詰められている。

「い、いえ……その……はい」

思わずシグネがその手を取ると、理事長はふっと微かに嬉しそうな笑みを見せ彼女を自動車へと誘った。

あれよあれよという間にのせられた自動車の運転は、理事長専属の運転手がしている。後部座席に理事長と並んで座る形になったシグネは何故だか無性にスカートが気になってしまい、その裾をしきりに指でつまんではいじってしまう。

そんなシグネの服装は、シンプルな白いシャツと膝上丈のチエック柄スカートにスニーカー。と、少しだけどこかの学校の制服のようにも見える格好だ。

「普段、白音とはどんな場所に行っているんだ？ あの子はなかなか俺に自分のことを教えてくれなくてな」

「あー、えっと、いろいろです。ケーキだったり、ラーメンの日もあつたり、その……」

以前、駒王学園を見学に来た時に乗った車とは異なる、だがやはり高級そうな車内での会話は白音のことが中心だった。

(ちよっと、うらやましいかな)

二人の共通の話題となると、やはりどちらも知っている相手の話に自然となる。

ただ、理事長が義理の妹のことを気にかけていることも本当のようで……。もう家族のいないシグネは、心配してくれる相手がいる白音をうらやましく思った。

「どうかしたのか？」

知らず俯いてしまっていたのか、シグネの様子を気にかけてた理事長が下から覗き込むようにして声をかけてくる。

(ふわっ！　なんだか、いい匂いがするわ。それに近い、近い！)

互いの背丈の関係なのか、俯くシグネに顔を寄せて来た理事長。そのことにシグネの心臓がドキドキと高鳴ってしまう。

「なんでも、なんでも……ないです」

それに、なんだか嬉しい。胸のドキドキとは別の感情がシグネの中

に生まれていた。

「ならいいが、ああ……ところで、今日は何処に行きたい？ 何処と言うよりも、何が食べたいか、か？」

まだ見学の時のことを引っ張られるの!？ とシグネは一瞬むくれたけれど、よくよく考えなくても彼女の大食いは既に周知の事実。シグネはもう学園の有名人だ。

「あ、うー……せんせいのいじわる」

理事長が甘やかすような笑みを浮かべながらからかってくるので、シグネもついつい小さい子のような甘えた声と仕草を返してしまう。それを口にしてしまってから、少し馴れ馴れし過ぎたかなとシグネは思った。

けれど、理事長は特に気にしていない様子で、

「ほら、どこに行きたいんだ？ とりあえず走らせているが特に目的地は決めていないんだ。白音と出かけて印象に残っているとところがいいから」

「えつと……あつ！ じゃあ、焼肉でツ！」

車が無駄に走っていると急かされて、慌てたシグネは最初に白音と出かけた日のことを思い出してついそう言ってしまった。

「焼肉か、分かった。——聞こえたな」

「はい」

あ、ああとシグネが口を開きかけていると、止める間もなく運転手はいつぞやの高級焼き肉店へとハンドルを切ってしまう。

(焼き肉は食べたいけど……ああつ、でもでも、臭いがついちゃうし、お口の中臭くなっちゃ……って、私、何を考えてるの。先生には……あの人が、いるのに)

自動車の後部座席、隣に座る理事長をチラチラと横目で伺うシグネ。彼女の視線はいつの間にか、理事長の端正な横顔や、色気のある声を紡ぐ口元、Tシャツの上からでも見て取れる細身だが引き締まった彼の身体付きをなぞってしまっていた。

思えば、家族以外の男性と二人きりで食事というのは初めてかもしれない。

シグネはいつもより控えめに箸を運びつつ、そんなことを考えた。「どうしたんだ？ 遠慮しなくてもいいんだぞ」

「え、あ、その……でも……」

理事長は話しかけると、瞳をじっと見つめてくる。シグネはそれが照れくさくて目をそらしてしまうのだけれど、でもやはり気になつて一度逸らした後にまた視線を戻してしまう。

結果として、チラチラと目が合うことになり、シグネの頭の中はグルグルと回りっぱなしで、心臓はドキドキとしっぱなしだ。

（余裕のある表情に……細身に見えるけど、よく見るとたくましい身体つきで……、それになんだか……うう……なんでこんなにかっこいいの）

駒王学園理事長リヴラクス・グレモリーは、シグネの眼からは凛々しさと自信に満ち溢れた大人の男性に見えた。

そんな人と二人で店の奥の個室の中、「何から注文しようか？」などと相談し、一緒にお肉を焼いたりしながら食事をしてしまっている。それだけでシグネの胸はいっぱいだ。知らず知らずのうちに、ひとりで動いた箸が口にものを運んでしまっているが、胸の中は大好きな食事とは別のことでいっぱいなのだ。

「ああ……。少しじつとしていろ」

「え……う？」

頭の中がもやもやとしたピンク色に染まり気味なシグネは、突然の理事長の行動にドキリとした。

それはテーブルを挟んだ向かいに座る彼がシグネの方へと身を乗り出し、彼女の頬へと手を伸ばして来たからだ。

（え？ なに？ ……え？ ふわふわわわ！ さわられ……え？）

シグネの頬を撫でたのは、理事長の手ではなく手拭きの感触だった。

「タレがついていた」

「あ……」

カーツと顔が熱くなる。シグネは左右色違いの瞳を羞恥で滲ませ、上目遣いで理事長を見た。

どうしたんだ？ とでも言いたげな彼の表情にはどこか小さい子を見守るような雰囲気を感じられる。

口元を拭かれたことにシグネはこそばゆい様な嬉しさと、自分でも出所のわからない不満を覚えた。それは、子供扱いされてしまったことに対するシグネ自身でも意識していない心の奥の方から来る反応だ。

現代日本の高校生。大人と子供の境界線の上をフラフラとしている年頃の少女の内面には、失って久しい庇護者を求める部分と、ほぼ成長を終えた身体の相手を求める部分とが同居していた。

小さい頃、シグネはよくからかわれていた。

国際化が進んできた昨今だが、それでもまだこの日本の学校では純日本人といった容姿の者の比率が多い。ダークブロンドの髪に白人系の肌色、そしてオッドアイ。周囲から浮き上がるシグネの特徴的な容姿は格好の的になったのだ。

「理事長先生は……」

「ん？」と聞き返してくる理事長の瞳に見つめられて、シグネは続く言葉を失った。何か言いかけたはずなのに、それが上手く言葉に出来なくなってしまう。

小学校低学年のころはよくからかわれていたシグネだが、年齢が上がってくると周囲からの見る目も変わってくる。簡単に言えば周りが色気づき始め、男女ともシグネにそれまでとは別の意味で注目しだした。

シグネ自身も理解しているところだが、七滝詩求子という少女はかなりの美形だ。転校前の学校で、校内で一番の美少女などと言われていたことを考えると、最低でも千人に一人くらいの美少女レベルはあ

る。そんな彼女は、男たちから大変にモテた。同じ学生からはもちろん、ときには教師からさえもその手の視線を受けたことがある。

その手の視線——つまり、男が女を性的な対象として見る眼だ。もしかしたら、小さな頃にもあったかもしれないが、シグネがその意味を理解し始めたのは中学生の頃からだった。

「その……私の目、気持ち悪くないですか？」

心の中から湧き上がって来るモヤモヤとした正体の分からない感情。それに促されるまま、シグネは言いかけた言葉とは違うことを口にしていった。

目の前の男の同情を誘うような言葉を。自分に関心を持って欲しい、そういった想いが心のどこかにあった。

「そうは思わないが……学園で何か言われたのか？」

理事長の言葉に含まれる、自分を心配する響きにシグネは喜びを覚える。

血のように紅い髪がサラリと流れ、見つめてくる紫の瞳。ハーフの自分よりも白い肌をした人間離れた美貌の彼から向けられる視線が心地よかった。

この喜びがもっと欲しい。そんな意識の裏側からの囁きに流されるようにして、シグネは小学生の頃に特異な容姿のために体験したことを理事長に話し始めた。

「駒王に来てからはそういうのはないんですけど——」と前置きをして。

……………。

左右異色の瞳は、見つめていると不安な気分になる。

鏡に映る自分自身の顔を見つめながらシグネは、以前に誰かから聞かされた言葉を思い出していた。

あのあと——しっかりと焼き肉を食べながら——理事長に昔語りをしてしまったシグネは、ふと恥ずかしくなってトイレに逃げ込んだ。

(なんであんなこと話しちゃったんだろう……。おかしな子って思われてないかな?)

シグネの話を黙って聞いてくれた理事長の瞳は、話の最中にも、話し終わった後もシグネをじっと見つめたままで——その視線は先生が生徒に向けるものでしかなかったように思える。

そのことにホツとしつつも、どこかに残念な想いがあった。彼から見たらシグネはただの生徒の一人で、義理の妹の友人に過ぎないのだろうか、と。

(ほんと……。どうしちゃったんだろう)

これまで、シグネは男性から情欲の乗った視線を向けられることに抵抗があった。それらは、あまり気分の良いものとは感じられなかったのだ。

誠実な告白を受けたときもあつたが断ってきたし、あからさまにそちらの方面の誘いを受けたときもハッキリと拒絶してきた。

恋愛に憧れがなかったわけではない。シグネは自分の容姿が男性から好かれるものであると自覚していた。

そういつたことに興味がなかったと言えば嘘になる。シグネは自身にそういった価値があることも理解していた。

その上で、どうしてもこれまでに出会い、会話し、誘われた相手とそうなる自分を想像できなかったのだ。

何かが足りない、と拒み続けてきた。そのせいでトラブルになったこともあつたけれど、これまでは何故かそのトラブルの相手に良くないことが起きてどうにかなってしまうてきている。

それなのに、今は理事長からそういつた目で見られたいと心のどこか奥の方で思ってしまった。

見た目だろうか？ 地位だろうか？ お金持ちだからだろうか？ それとも——それ以外の何かがあるのだろうか？

未だ本人に自覚はないが、シグネの心の奥、魂の内には災いを呼び寄せる怪物が宿っている。力なき者と親密になることは、双方にとって良くない結果にしかない。

そのことを、シグネは知らず知らずのうちに、夢にさえ見ない無意

識のどこかで悟っていた。

(誰も……みんな……だいじょうぶじゃない。でも……先生は……だ
いじょうぶ)

よく分らない。でも、なぜだかそんな風に思えてしまう。

自信に満ちた彼の紫色の眼差し。そして、表層の意識では理解できていないながらも、シグネの中のどこかが感じ取っている強大なオーラの気配。

それらを思い出しシグネは、熱の籠った息を吐いた。

「理事長先生……」

誰かと親しくなりすぎると、不幸にしてしまう。ちよつとした友人くらいならいい……でも、それ以上の親密さは……きつと……。

はつきりとしながらずつと抱えて来た、漠然とした、しかし確かにそうだろうと確信でできてしまう不安。

やっと出会えた……と何処か思う。

すると、フツと同級生に見せてもらった着物を着た美女の姿が脳裏によぎった。

(理事長先生の奥さん……綺麗だったな)

途端に湧き上がる言葉にならない感情。もやもやと霞のかかる思考。

鏡に映る自分がシャツのボタンを一つ開ける。それをシグネは止めもせずに見つめていた。

「すいません」

理事長に長く席を外したことを謝るシグネは、上体ごと軽く頭を下げた。

今のシグネは、膝上丈のチェック柄のスカートの上に、緩くシンプルな白いシャツを着ている。

元々は白音と出かける予定だったから、上は襟の付いた硬い生地のシャツで少しカッチリとした印象にしていた。だけど、その印象はボタンを一つ外すだけで随分と変わってくる。

こうすると、前かがみになったときに開いた胸元が見えてしまう。

「ああ、気にするな……」

男性を誘うような仕草。こんなことをするのは初めてだった。バクバクと鳴る心臓の音が聞こえてしまっているのではないかとさえ思えてしまう。

下げた頭を上げながらシグネが理事長の顔を伺うと——彼の視線が自分の胸元へ向いていたことが分かった。

(あ、う……)

羞恥と、それ以上の言い表せない感情。つま先から頭のとっぺんまで、少女の身体に熱が奔る。

(見せちゃったわ。私、自分から……)

白シャツの間からは、シグネのブラジャーとその内に収まっている胸の谷間が見えたことだろう。

自分から望んで、そんなことをしてしまった。信じられない。理事長と出会う前には、こんなこと決してしなかった。

何よりも信じられないことは、そうして得た理事長の反応に自分が悦びを覚えていることだ。

(嬉しいって……思ってる)

子供、生徒としてではなく——女として見られたことを。

食事の時間はその後もしばらく続いたが、その間シグネは幾度か理事長の前に無防備な姿を晒していった。

そうする度に感じるどこか甘い期待と、じわりと広がる悦びに密かに身を震わせながら……。

学園へと帰るはずの車中。シグネは車の向かう先が違っていることに気付いた。学園へと向かうのならば通るはずの道、曲がるはずの角を運転手は選ばなかったからだ。

「七滝ななだるは悪い子だな」

少女がそのことに気付いたことを悟ったらしい理事長の腕が、シグネの腰に回された。

「理事長先生……」

力強く引き寄せられ、身体が密着する。

季節は夏だが、冷房の効いた車内は暑くはない。でも、理事長の体

温を感じたシグネの身体はカアツと熱くなっていた。

「後悔はしないか？」

そう口にする理事長の息を、少女の鼻が吸い込んだ。

(なんだろう、いい匂いがする……)

間近にある理事長の顔。

それを見つめながら、シグネは「しま……せん」と返した。

「目を閉じるんだ」

あとほんのわずかで唇が触れ合いそうな距離。感じる理事長の息遣いに、少女の胸は高鳴り叫ぶ。

(あつ……キス……初めて……。あつ！)

言われるままにまぶたを落とす寸前、シグネはあることに気付き、理事長の肩を手で押し返そうとした。

「あの……いや、じゃないんですけど……。歯、磨かせてください……」

ファーストキスが焼肉の臭いだなんて、そんなのちよつと嫌だった。相手がいつの間にか口の中を綺麗にしていたとなればなおさらだ。

「ハハッ、アハハハハッ……！」

シグネの拒否の理由に一瞬キョトンとした表情を見せた後、理事長は大笑い。

少女の身体を抱きしめながら肩を震わせる男の姿に、シグネはぷうとむくれた。

「ひどいよ、先生」

「くっ、ハハハ……、すまん。ふっ……くっ……」

でも、シグネは理事長のそんな姿に親近感を覚えていた。素の一面を見られたような気がして、嬉しさを感じてしまったのだ。

「ふふっ、あはははっ！」

ツボに入ったのかその後も理事長があまりにも楽しそうに笑うので、シグネまでつられて笑ってしまふのだった。

サーゼクスホテル。

駒王学園を経営する一族が世界各地、特に日本に多く建設しているホテル。その一つが駒王町の近隣にある。

そんな理事長の一族が所有するホテルの最上階特別室にシグネはいた。

「むぐ……じゅぶつ……んんっ……むんうぐ……」

少女の口の中は、唾液混じりの白い泡でいっぱい。激しく早く出入りする硬い棒状の物体が、シグネの口内を蹂躪しようとする。

口の中に自分の意志によらず異物を入れられると、多くの者はそれを追い出すために舌で押し返そうとしてしまう。

「ほら、大人しくしないか」

「むーっ……ううう……うぐっ……」

シグネを後ろから抱きかかえるようにして、理事長は右手を素早く前後させてくる。彼の左手は少女の顎に添えられていて逃げ出そうにも逃げ出せない。

(どうしよう……これ、気持ちよくなってきちやってるわ)

少女は歯を磨かれていた。小さい子ではあるまいし、高校生にもなって他人に歯磨きされてしまうなんて……しかも、それがなんだかとても気持ちいいから困る。

歯茎や舌、口の中のあちらこちらをブラシで擦られると力が抜けてきて、されるがままになってしまう。

「すまないな。前にちよつと小説で読んだことがあって……一度やってみたかったんだ」

「ふううっ……そんな、んんぐうっ……」

車の中で笑い合ってから、シグネに対する理事長の態度は変わった。学園の理事長先生というよりも、年上のお兄さんのような雰囲気だ。

そのお兄さんは、ふざけ半分にシグネに悪戯をしてくるのだけ

ど。

「もう、先生ひどいよー！」

ペツとして、口をすすぎ終わると、少女は彼の胸をポカポカと叩いた。

またやつてもらいたいな、などと内心で思ってしまったことは秘密である。

「まあ、これだけ笑えているのなら安心だな」

「あつ……先生」

ふざけて笑いながら彼の胸を叩いていたシグネは、急に抱きしめられ頭を撫でられた。

(いつだったかな……前にこんな風に笑ったのって)

理事長の背に両手を回す。

見上げると、情愛を感じられる紫の瞳が真つすぐに見下ろしていた。

(あつたかい)

男性に抱きしめられたのは、幼い頃に父親にしてもらって以来。その父はもうこの世にいない。

ふざけて笑い合ったのは、たぶんあの事故以来。長いこと過ごしたあの町はもう遠く、同級生たちは海の底。シグネと仲良くしていた友達は……不幸になった。

「先生……、せんせ……」

ぎゅつと強く抱き着くと、彼も優しく抱き返してくる。

頼る相手はもういなくて、新しく誰かと親しくなるのは心のどこかが拒否していた。

「ひっ……うっ……ぐすっ……せん、せえ……」

涙が止まらなくなる。

理事長の胸に顔を埋め、シグネは長く長く泣き続けた。

……。

窓ガラスの向こうに夜景が広がっている。

泣きはらした目を閉じ、踵を浮かせたシグネの唇にやわらかな感触が当たる。

(ファーストキス……先生と……)

シグネの初めての口づけは、少し涙の味がした。

数秒が過ぎ、触れていたやわらかさが離れていく。もっとならなかつた……と思いつつ少女は目を開ける。

優しく微笑む先生の顔が飛び込んできた。湧き上がってくる幸福感に押しされ、シグネは彼にギュツと抱き着く。泣いている間、ずっと感じていた温かさが心地よい。

そうしていると、頭や額、耳にやわらかな感触が続けざまに降って来た。

「せんせい……う？」

驚き見上げるシグネの耳に、理事長が囁く。

「続きは向こうだ」

彼の視線の先にベッドを見つけたシグネは、耳を赤らめコクリとうなずいた。

熱い。

背中に男性の体温を感じる。開かれた男の両脚が少女の身体を左右から挟み込んでいた。先生の息遣いが首筋を撫でるのがくすぐつたい。

きつと服越しにこちらの鼓動が伝わってしまったのではないだろうか。

「先生……」

顔を左に向け振り返ると、すぐ近くに端正な容貌が、紫の瞳がある。

ベッドの端に足を大きく広げて座った先生。その開いた足の間にシグネは身体を縮めるようにして腰掛けていた。

「緊張しているのか？」

「う、うん……初めて、だから」

先生は……と続けようとして、バカなことを言いかけたことにシグネは気付いた。

先生は結婚しているのだから、経験なんてあるに決まっている。そして、そう思い至ると今のこの状況は不倫なのではないだろうか、と今さらになって怖くなってきてしまう。

「先生、奥さんは……」

戸惑うシグネの腰を理事長の左腕が抱く。彼のその動きが、少女にもう引き返せないことを伝えて来た。

男の腕に込められた力から逃がさないという意味を感じ取ると、胸の奥から言い表せない嬉しさがこみ上げてくる。

「アレは気にしないだろうな」

揺れるシグネの瞳。その右端を先生の指先がそつとくすぐり、少女の柔らかな頬を優しいタッチで撫で始めた。

髪、頬、耳、首筋、触れるか触れないかの絶妙な加減でそれらを愛撫され、シグネの口からため息がこぼれる。

「あっ……んっ……」

薄く開いた少女の唇を先生の指がなぞっていった。幾度かそれを繰り返された後、シグネの口内に男の指が入ってくる。

唇を割り開き前歯に触れる侵入者に向かって、シグネの舌が自然と蠢く。

(先生の指……なめちゃってるわ)

指先の肉と爪の境目、指紋。少女の舌と唇は男の身体の味を覚えさせられていく。この中に這入って来たモノをどう歓迎すればいいのか、先生の右手はそれを教え込んでくるかのようだった。

口の中からじゅぷじゅぷと音が響いてくる。指先で舌を転がされ、口内の天井を刺激される。くすぐったさの混じったゾワゾワとした感覚に翻弄され、シグネは瞳を半ばまで閉じてそれに溺れた。

「んちゅっ……はあっ……」

やがて彼の指が引き抜かれた。

自らの唾液に濡れた男の手が右頬に添えられるのをぼんやりとした瞳で見つめる少女。その細い顎が右側からそつと押されて顔が左に向くと、そこには先生の唇が待ち構えていた。

「せんせ……ふうっ、ん」

再びシグネの唇に柔らかい感触が触れてくる。今度のそれは、幾度か軽く触れ合わせただけの窓辺でのキスとは違うものだった。

(あっ……舐められてる)

上下の唇の間を繰り返して舐められると、先ほど男の指で教えられたとおりにシグネの口がそつと開いていく。

「んうっ……」

するりとその隙間に潜り込んできた先生の舌が、口の中を這いまわる。シグネの舌はそれを捉えようと追いかけ始め、粘膜同士が直に触れ合いこすれ合う。

少女の背筋にぞぞと痺れが奔り身体が強張ると、先生は彼女の頬や髪、首筋をあやすように撫でさすってくれた。

(ふわってする)

初めての行為に興奮と不安を覚えていたシグネは、優しく労わり心

配するような愛撫に安心を覚え……鼻を鳴らして甘い呻きを洩らした。

抱きしめられ、深い口づけを交わし、優しく扱われ、少女の中にあつた不安感が溶け落ちていく。その代わりに湧き上がってきたのは、精神的、肉体的な心地好さと男への好意だった。

元より抱いていた感情が、より深く根付き、より大きく育っていく。

(先生……、せんせい……、せんせえ……)

頭の中が彼のことではいっばいになり、埋め尽くされていくかのようだ。

それがとても嬉しくて、シグネは自身の腰に回された彼の手を両手で包むようにした。指と指が絡み合う。触れ合う場所が増えるほどに、幸福感が増していく。

「はあっ……はあっ……」

キスの口が離されるとシグネは荒い息を吐き、続きをせがむ瞳を男へと向けた。少女の口の端から涎が滴り、顎先へと垂れていく。

(もつと……してたかったのに)

彼はキスをねだる少女に微笑むと、彼女の首筋から下に向かって手を這わせた。

首から鎖骨、喉の下を通って胸の谷間の入口までをスツと撫でられる。触れるか触れないかの距離をそつと擦られたシグネは、「はああ♡」と息を吐いて力が抜け男にもたれ掛かってしまう。

幾度かそれを繰り返された後、先生は彼女の耳に口を寄せあることを命じた。

シグネは男の言葉にコクリと頷くと、汗ばみ始めた肌をさらに上気させ両手を自らのシャツのボタンにかける。

「自分で……、はい」

羞恥と期待に心を震わせながら、一つずつボタンを外していくシグネ。その度に露わになっていく白い肌に注がれる男の視線を感じ、性的な興奮で息遣いを速めていく。

「はあっ、はあっ、はあっ……あっ♡」

シグネの手で全てのボタンが外されると、先生の手がブラの上から

彼女の胸のふくらみに触れてきた。男の両手の指が、形の良い乳房に食い込み変形させる。

少女は左右の胸のふくらみを揉む彼の手に分の手を重ねた。止めようとしているようにも、もっと触れて欲しいとねだっているようにも見える。

「せん、せ……んっ♡」

ついさっきまでキスをしたことすらなかった少女は、胸に愛撫を受けるのも初めて。

初めての体験、初めての感覚、そしてそれを気持ちよく感じている自分自身。かわいらしい口からは熱い吐息が漏れ、美しい顔がうつとりと蕩けていく。

「気持ちいいか？」

「んっ♡ ……はい、気持ちいいです」

優しく揉み解すような指遣いに時折混じる強い刺激。

「んんっ♡！」

男の指がブラジャー越しに乳房の先端を弾き、摘まむ。敏感な突起を責められると、そこから身体に甘く蕩けるような痺れが奔っている。高校二年生の肢体が悩まし気にくねる。

ベッドの端、男の膝の間で、シグネは美しい肢体をゆすって人生初の官能に悶えた。

「そろそろ直に触れて欲しくないか？」

少女の頭が官能で茹で上がる。思考能力が衰え、羞恥よりも快感への欲求が大きくなってきた。

そんな少女の心の中を見通したかのように告げられた提案に、シグネは言われるがままに従ってしまう。

背を反らし留め具を外すと、胸のふくらみを覆っていたブラジャーが弾けるように落ちて、美乳が露わになる。

(ああっ、勃っちゃってるわ)

ピンと尖って感じていることを主張する二つの胸の先端。はしたないと恥ずかしく思うシグネに構わず、先生はそれぞれを両手の指を使って敏感な突起を優しく転がし、摘まみ、こすり上げた。

ブラジャーのパット越しでも甘い痺れに身体を震わせた行為だ。自ら守りを取り払った今、それから感じる痺れはより一層強くなっている。

「ああッ♡ せん、せ……先生、そこ、そんな、されたら……ッ♡」
眉を寄せ、色違いの瞳を滲ませ、少女は首をひねって背後の男に懇願する。

何を願っているのかは、自分でもわからない。もっとシテ欲しいのか。それとも止めて欲しいのか。

「はあんっ……ちゅっ……あふうん……♡」

先生からの答えは、再度の口づけだった。

先ほどよりもずつと積極的に、いっぞ貪欲と言えるほどにシグネは男の舌に自らの舌を絡めていく。

(美味しい……先生とのキス)

乳房を揉み立てる男の手の動きは徐々に激しくなっていく。それに比例するかのようには、シグネは口内に迎え入れた先生の一部に夢中でむしやぶりついていた。

唾液が混じり合い、柔肉同士がひたすらにこすれ合って、お互いを味わい尽くそうと蠢き合う。

そうしていると、ジワリジワリと少女の下腹部に熱が宿ってくる。

(あっ……私、これ……)

燃え上がる官能の熱が女の場所に火を点け、少女の足の付け根の間はじつとりと濡れそぼり始めていた。

下の口が涎を垂らし、男の味を知りたいとヒクついている。そのことに気付いたシグネは、両膝を合わせ太ももをキュツと閉じた。

ここまで来て、嫌だと思っているわけではない。

(はしたない子だって思われちゃうかも……しれないわ)

シグネの胸の中で、この人に嫌われたくないという想いが膨れ上がっていた。

ただでさえ、自分から誘うようにしてここに来てしまっている。これ以上に淫らなところを知られてしまい、もしも軽蔑するような目で見られてしまったら……。

そう考えると怖くなってしまおう。

(先生に、いやらしい子だって思われたくない)

シグネの両手が胸を揉みしだく男の手の上から離れ、両脚の上に置かれた。スカートを一タリと抑えながら、先生を惹きつけようとデュープキスに熱が籠る。

こういった場面で、男がどんなことを喜ぶのか。少女はそれをまだ知らない。知らないから不安になる。

そして、手慣れた男は少女のその動きを見逃さなかった。

「ひいやああっん♡♡」

必死に吸い付いていたはずの唇が離れてしまおう。唾液の糸を引きながら、シグネが顔を激しく動かしてしまったからだ。

その原因は、揉みしだかれ続け性感を高まらせていた胸の先を男が捻り上げたから。両方の乳首を左右の手の親指と中指とで強く摘み上げられ、圧迫されて硬く張り詰めた先端部を人差し指の腹で素早く擦られる。

「やめっ、せんせい。やめて……おか、おかしくなっちゃうわ」

小さな痛みを伴った強烈な快感にシグネは背を弓のように反らし、顎先を天井へと上向かせて悶えてしまおう。

「許して、これ、こんな……うううんっ♡♡」

左右に髪を振り乱しながら少女が許しを乞うと、先生は呆気ないほど簡単に責め手を緩めてくれた。

荒い息を吐くシグネの身体を、男の腕が優しく後ろから抱きしめる。髪と髪がこすれ合う感覚に続いて、先生の顔がシグネの顔のすぐ横に現れ頬と頬が触れ合った。

「びっくりしちゃった……急に、あんなの……」

「ふふ、すまない。シグネがあまりに可愛い真似をするものだから、つい……な」

頬擦りの心地よさに、ついさっきの惑乱を忘れシグネはウツトリと目じりを蕩けさせる。耳に響く艶のある声音が、鼓膜を甘く震わせた。

(なんだろう？ 今、何か……)

ふつと耳からやって来た喜びの正体が分からず、少女は内心で首を傾げてしまう。何か嬉しいことがあったはずなのに、と。

「シグネ、スカートから手を放せ」

スカートを抑える少女の細い右手の上に男の大きな手が重ねられ、そのまま体の後ろへと誘導されていく。

(あつ、先生……私のこと『シグネ』って……いま)

『七滝』ではなく、『シグネ』。ただ、名字ではなく名前で呼ばれただけ。それだけのことが妙に嬉しくて、心が弾んでしまう。

込み上げてきた喜びに浸るシグネの手は、先生に導かれるままに自分の背の側へと回され、後ろに座る男の身体との間にたどり着いた。「触ってみろ」

後ろ手に回した指と手のひらに、盛り上がったズボンの一部が触れる。布地の下で大きく硬く主張してくるソレは、先生の股間でいきり立つ男性器。

(せんせい……こんなに大きくしてる……)

その手に男の精的な興奮の証を感じると、シグネの口元が知らず綻ぶ。自分と触れ合ったことで、先生がこうなっていることが嬉しかった。

「そのまま、さすってくれ」

「あ、う………はい」

そつと、痛くしないように、男性の大事な場所を擦る。

(……先生の、おちんちん、さわっちゃってるわ)

こんなこと、今まで誰にもしたことがない。初めてキスをして、初めて胸を触らせ、初めて……。

(私……先生と……セックスするんだ……初めての)

バクバクと心臓が音を立てている。これまでもそうだったけれど、それ以上の鼓動の高鳴りに胸が張り裂けそうになってきた。

「うっ」

後ろから聞こえて来た呻きに、ハツとして振り向く。

そこでシグネが見たものは――。

「気持ちいいの……?」

「ああ」

嬉しそうな先生の顔だった。

喜びがシグネの中で渦を巻く。自分の手で、先生が、大好きな人が……気持ち良くなってくれている。それが嬉しくて仕方がない。

(こうすると……あつ、これが気持ちいいんだ)

もつと喜んで欲しい、気持ちよくなつて欲しい。男の顔を、反応を伺いながら、シグネの手の動きは段々と大胆なものになっていった。

「はあっん……♡」

シグネの右手は、男の肉棒を擦っている。男の右手は、いつの間にかシグネの乳房を揉みしだく。

そして、未だスカートを抑えていた少女の左手に、先生の左手が重ねられた。

「シグネ」

名前を呼ばただけで、その先は言われなかったけれど……シグネは彼の手をそつとスカートの中へと誘い込んでいく。そうするのが、自然なことに思えたから。

スカートの内側、太ももを先生の手が絶妙な力加減で撫でまわす。大事な場所にはすぐに触れてもらえず、羽を滑らせるようなタッチで脚の外側から内側を撫で擦られた。

そうされている内に、閉じていたシグネの両脚が少しずつ開いていく。男を受け入れる形に変わっていく。

「せんせ……」

男の股間に触れ、乳房の形を次々と変えられながら、少女は切なげな声音でその先をねだった。

すつと彼の指がパンツの縁をなぞる。するとゾクゾクとした快感と期待が少女をわななかせ、半開きになった口から甘い吐息がこぼれた。

(もう、さわって欲しい……)

なかなか触れてもらえない女の一番大事な場所は、焦れて濡れて蒸れている。じくりじくりと湧き出す愛液が下着を湿らせるそこは、男

の愛撫を心待ちにしてしまっていた。

「せんせえ……。いじめないでえ♡」

口について出た甘く切ない声の響きは、発したシグネ自身が驚いてしまうほど。

「シグネは初めてだろうか？ 怖がらせたくなかったから、少しずつ慣らそうかと思っていたが……。すまなかったな」

初体験の少女を怖がらせないように、繊細に気を遣い、優しくしてくれていた。

そう聞かされたシグネの心の奥が、男への愛おしさに満たされていく。

「あっ♡ んっ♡」

先生の指が秘所を擦り上げると、ダークブロンドの髪を揺らしながらシグネは上ずった声を室内に響かせた。

彼女のソコはようやく触ってもらえたことに歓喜し、いやらしい涎を内側から一層湧き上がらせ始めた。

（ああっ、先生にアソコをいじってもらってるわ）

いじられている。ではなく、いじってもらっている。

いつの間にか、シグネの心はそう考えるようになっていた。

「シグネ」

名前を呼ばれながら、頬に口づけを落とされる。

口づけられた側へとシグネが愛欲に満ちた瞳を向けると、すかさず唇が重ねられた。

「んうう……。♡」

口内の粘膜を貪り合いながら、股の付け根を愛撫される。噴き出した汗が着たままのシャツをべったりと肌張り付かせ、下腹部がジンジンと熱を帯びて、意識が先生のことだけに集束していく。

身体が火照り切っていた。心が満たされ、そこから溢れ出てしまう情欲の行き場を求めてしまう。

（せんせえ……。好きです。先生……。あっ……。ああっ♡♡）

下着の上から、牝の溝をなぞっていた先生の指先が、クリトリスに触れた。いじり続けられた乳首と同じくらい、もしかしたらそれ以上

に充血し膨らんだそこへの刺激は強烈で、シグネは形の良い尻を振ってしまふ。

強すぎる快感から逃れようとするようにも見えるその仕草は、実際は男をその先へと誘うもの。その証拠に、彼女の左手はもつと欲しいと催促するように、自らの股間をまさぐる彼の手の上に重ねられていた。

シグネの右手の中で、男の性器がぐつと跳ねたような気がする。

(あつ、ああつ、中に……)

下着の内側に先生の指が入り込んできてくれた。クリトリスに直に触れられ、肉鞘を扱かれると背筋に電流が奔ったようになって、鼻から呻きが漏れた。

「んううん……♡ んちゅつ、じゅつちゅつ……♡ はあんあつう……♡」

何かが来る。高まり続ける官能の波は理性の壁の限界を超えて、シグネを何処か高い場所へ、あるいは奈落の底へと運んでいこうとしているかのよう。

シグネも年頃の女だ。これまでに、自分で弄った経験がないわけではない。でも、今から、もうすぐ訪れようとしているものは、これまでにないものになる。そんな予感がしていた。

「先生、せんせ、せんせえ……、あつ、あああツ……♡」

唇が離れると、絶頂の予感に震えるシグネの口から不安に塗れた声があふれ出す。

「イク時は、イクと言うんだぞ」

男の右腕を首に回され、耳元でそう告げられると、安心感と好意に染められた少女は何度も頷いてしまふ。

「アっ♡ んああツ♡ せん、せ……わたし、イ、クつ。もう……、もうダメ……ダメになつちやうわ」

肉芽を押され、秘裂をかき回されながら、

「愛してるよ、シグネ」

そう囁かれた途端、巨大な官能の波が打ち寄せ、シグネは弾けた。

「はアっ♡ あいし、あツあんツ♡♡ わたし、も……あつ♡ い、イ

イ♡ イクツんんっ♡♡♡！」

暗いブルンドが激しく振りたくられた、色違いの瞳が焦点を失い、形の良い唇からは艶っぽい嬌声が飛び出す。

背後から先生に抱きしめられながら、高校二年生の肢体がくくつと跳ねる。

「せんせえ……わたしも、わたしも……大好きです。愛しています」

生まれて初めて男の手で迎えた絶頂。その余韻に浸りながら、シグネはうわ言の様に彼への好意を何度も繰り返し口にし続けた。

「はあ……♡」

身体を不意に持ち上げられ、シグネは色めいた声を上げる。官能に焼かれた脳と情愛に塗りつぶされた心は、男に触れられるだけで悦んでしまう。

くたりと力の抜けた少女は、横抱きに抱き上げた男の手によってベッドの中央へと運ばれていった。

ベッドの真ん中に仰向けに寝かされたシグネは、アクメの余韻に未だ浸っており茫洋とした表情で天井を見上げていた。

「脱がすぞ」

そんな少女の両脚の間に手を進め、男は彼女のパンツを引き下ろそうとする。

夢心地のままにシグネは腰を浮かせて協力し、びしょ濡れの下着はするりと抵抗なく少女の足から抜けていった。

「あっ……」

はだけられた半袖の白いシャツの下にブラジャーはなく、膝上丈のチエックススカートの下にパンツはない。両足に履いたソックスと下着を失った上下の衣類、それだけが今のシグネの身体に申し訳程度に纏わりついていていた。ほぼ開いてしまっているシャツの間から美乳をまるびださせ、めくれ上がったスカートはいやらしく涎を垂らす下の口を隠せていない。

ベッドシートの上でだらしなく寝そべる美少女の髪は乱れ、官能に蕩けた瞳で見上げてくる。

多くの男をいきり立たせるだろうその光景に、シグネの通う学園の理事長はギラギラとした獣欲を瞳に滾らせた。男の下半身、ズボンの股間の布地がはち切れそうに盛り上がっている。

(……怖い。……でも、ああっ……先生)

あの男根の大きさと硬さをシグネの手は覚えていた。触れて、撫でて、擦った感触がまだはつきりと残っている。

脚の方向から膝立ちで自身を見下ろしてくる紫の瞳。そこに宿るギラついた性欲の光に背が震える。

でも……そう、でも、だ。それ以上に、少女の心の奥から湧き上がったきたのは嬉しさだった。

自分は、この人からそう見られていることに悦びを覚えている。そ

れを改めて自覚すると、きゅつと甘く切ない感覚が下腹部の芯に襲って来た。

「せんせ……えっ？ あ、やだ……」

何かを言いかけたシグネの両脚に、男の手が掛かった。ぐいと脚を広げようとする力に反射的に逆らおうとするが、そんな少女の抵抗など知らないとはかりに男は力を籠めてくる。

抗えない強い力でゆっくりと少女の股が開かれていく。勢いをつけて一気に押し開くのではなく、じわじわと力の差を教え込むように。

「そんなに近くで見ないでえ……恥ずかしいわ」

紫瞳が秘部の近く息がかかるほどの距離にある。恥ずかしい場所をまじまじと見つめられ、シグネは羞恥に悶えながら上体を起こし男の頭を押しして遠ざけようとした。

脚を広げられたからか、身体を起こす動きのせいか、それとも大事な場所を観察されてしまっている興奮によるものか……少女の肉壁がぬちやりと音を立てて剥がれた。少女のアソコが奥に溜まっていた愛液をとぷりとあふれ出させる。

男は女の両の太ももを両腕で抱え込むと、押しのけようとするシグネの力を意に介さずにぐいと顔を割れ目に近づけた。

「ふあつ、ああああん♡ いやあ、そんな、とこ……なめちや……んああ♡」

先生の舌がぬるりにゆるりとシグネの割れ目を舐め上げる。

じゅっじゅつと卑猥な音を立てて愛液を吸われると、少女は男の頭に置いた手を頼りに肢体を揺すらせてしまう。

「大丈夫だ。俺に任せて、シグネは気持ち良くなることだけを考えていればいい」

「だ、だいじょうぶじゃないよお……あ♡ やだ♡ そこ、それ……だめえッ♡！」

下着越しでも強烈な快感を教えられたクリトリス。ぷくりと膨れたその敏感すぎる急所を、男の唇が挟み込んでいた。

巧みに唇をつかって鞘ごと肉芽を扱かれ、舌で舐め転がされ、時折

歯でチクリと甘噛みされる。

「あっ♡ ひいっ♡ つよ、んっあ♡！」

脚を抱え込む男の力は強く、強すぎる快感から逃れようと腰を左右に揺らしてもビクともしない。

逆に官能の電流に翻弄されるシグネの手からは力が抜けてしまつて、彼の頭に添えた手は何の役にも立っていないかった。

恥ずかしい場所に顔を埋められ舐めまわされていると思うと、指で弄られたとき以上に感じてしまう。

（ああっ♡ 食べられちゃってる。私のアソコ、先生に食べられちゃってるよお……！）

季節は夏、どうしても汗をかく。蒸れたその臭いを大好きな先生に嗅がれてしまっている。

（恥ずかしい、気持ちいい！ あんっ♡ せんせえ……うああん♡
せんせ……に食べられるの、キモチイイよお♡♡！）

快感を受け止めきれず顔を振りたくるシグネの髪が、右に左にのたうち回った。

「あつ、アツ、イツツ♡♡!! ……ふうツ、んんん♡♡♡♡♡」

自分でも驚くほど大きな声を出してしまっている。決して狭くはない部屋の中に嬌声が響き渡る。

その声に籠った甘く切ない色合いにビクリとし、恥ずかしさからシグネは必死に唇を噛んで口を閉じようとした。

「声を抑えなくてもいい。……ここには俺達しかいないんだ。部屋の外に音が漏れることもない。だから、もっとお前の可愛い声を聞かせてくれ。俺はその方が嬉しい」

少女の股座から一旦口を離すと、男はそう言つてシグネの声を褒めた。

それだけのことで処女の心は嬉しさをあふれ出させ、子宮がより一層の切なさを訴え出す。

（どうしよう……私、もう、先生と繋がりたいって思っちゃってるわ。はやく、挿れてほしいって……アソコが……）

でも、自分からそれを言いだすのはためらわれた。恥ずかしいし、淫らな娘だと思われたくない。

そんな少女の逡巡は口には出さずともその顔に現れてしまっていて……。多くの女子学生を喰らって来た男は、それを見逃しはしなかった。

「シグネ……まだ続けるが、これはお前のためだ。よく解しておいた方が初めてでも痛みが少ない」

低く艶のある声音が、陰唇を揺らすようだった。その奥に息づく肉襞が、優しく声をかけてくる男の肉棒を求めて色めき蠢く。

（わたしの……ため？ 先生は……私が痛くないように……こうしてくれてるの？）

イク寸前まで昂らされた身体は、はやくはやくと男との結合を求めていた。

獣欲の滾りを見せながらも、あくまでシグネを大切に扱ってくれる先生に心がときめく。魂の奥までこの男の色に染まっていくかのようだ。

だから、シグネは言ってしまうかどうかどうしようかと迷っていた言葉を呑み込むことにする。

「お前が痛いのが好きだと言うのなら止めるが……どうする？」
「ううん……続けて、ください」

お腹いっぱい美味しいものを食べるのは好きだけれど、痛いのは好きじゃない。シグネは首を振り、続きをねだる言葉を口にした。

彼の気遣いを無駄にしたいかと思っただけから。

シグネの言葉を聞いた男はどこかホッとしたような表情を見せると、再び少女の秘唇と陰核への責めを始める。

それはつまり、さらに長い間、挿入と言う止めをお預けされ、焦らされ続けると言うことだ。

「はあああん♡ ふうつつあ♡ ああつ、うつつう♡」
「シグネ、さつき教えたように、イクときは……」

絶頂の寸前まで熱されていた少女の肢体は、再び開始された陰唇へのクンニと、男の指でクリトリスを撚られて、すぐにも決壊に追い込

まれた。

男はその兆候を感じ取ると顔を上げ、指さばきを速める。

「ああつんん……♡　せんせ、せんせい……わ、わたひ、もう、もう……♡

♡　あつひいつんん♡　また、またイつちやうツ♡♡♡!!」

身体全体を突つ張らせビクビクと痙攣する処女の秘唇に再度顔を埋めながら、悪魔は口の端を吊り上げた。

七滝詩求子は高校二年生の初心な少女だ。だが、彼女の心の底、魂の中には中華最大級の妖魔が宿っている。

『饕餮』
トウテイ

伝承によつては、中国神話において武神・軍神、あるいは邪神とされる『蚩尤』シユウと同一の存在とも、その頭部の変化した姿とも言われる大妖怪。

蚩尤を象徴する色は赤で、炎帝エンテイを先祖に持つと言われているのだから、消えぬ炎の伝説を持つ紅髪の赤龍帝との相性は悪くないように思える。それに、饕餮自身にも龍の子という説があるのも良い。

「あつ、だめえ！　せんせ……まだ、わたひ……イつたばかりだから……まだ、たべちゃ……ああうんう♡」

多くの女を毒牙にかけてきたこの悪魔にとつて、男女の行為の何もかもが初めてのシグネを墮とすこと自体はそう難しくはない。龍のオーラと情愛の魔力だけでも十分すぎる。

この悪魔の真の狙いは、彼女の魂と深くつながっている饕餮にある。

女の身体と一体化し、女の魂と同調し深く繋がっている状態の大妖をメスに墮として従えること。それがこの情愛の悪魔の目的だ。

『饕餮』は大喰らいだ。鉄や岩どころか、概念すらも喰らうほどの悪食で知られている。その貪欲な食への渴望に、シグネという宿主の少女の愛欲を上乗せしようというのだ。

「せん、せ……せんせえ！　また、またイつちや……♡　イク……ああ♡♡　イク、イクツツ♡♡!!」

貪欲な妖魔に、己の味をじっくりこと教え込んでやろう。

悪魔は引きつるシグネの肢体を味わい、ゆつたりと追い込んでい

く。

「ああっ、また……♡ まだ、んっ……♡ せんせい、わたし、わたし……もう！ んんっ……気持ちいいよお♡」

「大丈夫か？ もう少しだからな」

努めて優しく声をかけ、長いクンニを受け乱れに乱れて息を切らす少女の太ももを労わるようにそっと撫でる。

「だいじょうぶじゃないよ……先生。こんなの……おかしくなっちゃうわ」

「大丈夫だ。俺の前では、おかしくなっていない。シグネがどんなにエッチな子でも嫌いになったりはしない」

彼女の下腹部、内に子宮のあるだろう付近に手を置き、少しずつ紅色の魔力を流し込んでいく。狙うのは身体ではない。魂、正確にはその奥に繋がっているだろう神器の中に眠る者。

悪魔の言葉にホツと表情を緩める彼女。だが、その瞳には隠しきれない切望が浮かんでいた。もう欲しくて欲しくて仕方がなくなってしまうている。

そんな少女の秘部に、悪魔はまた舌を這わせ始めた。

「あと少し、ほぐすからな」

この世で最も美味な食事は何か。この問いに対する答えは多く有るだろう。

その答えの中でも有力な物の一つとして挙げられるのが、飢えと渇きの中で振舞われる一杯の粥、あるいは温かなスープである。

その味わいは、とある偉大な者がその一皿を転機として考え方を改めたなどという話があるほどだ。

「んっ……♡ は、い……」

肉棒の挿入を乞う女の瞳に、今にも繋がりたい衝動が湧き上がってくる。それを堪えて悪魔はじつくりと、大妖を墮としにかかった。

焦らして、焦らして、焦らして、その後に初めての一撃の衝撃と共に白く濁ったスープを喰らわせて一息に突き崩してやろうと――。

「あーっ♡ あーっ♡ ああ~~~~っ♡♡」

先生の口にアソコを食べられ始めてから、何度絶頂を迎えたのか。

シグネはもうその回数を覚えていない。

三度目までは覚えていたけれど、打ち寄せ続ける官能の波に洗われて頭の中が真っ白になってしまっていた。

彼の身体に触れたくて伸ばした両手が股の間で上下する紅色の髪に触れ、指の間を心地よい感触が通り抜けていく。

(あ、これ、気持ちいい。男の人が髪に触れたがる気持ち、少し分かったかもしれないわ)

漂白された思考の中に浮かんでくるのは、たった一人の男性の姿だけ。

はしたない姿、淫らに快樂に溺れ、よがり狂う様子を見られ続けてしまったヒト。喘ぎ声を上げ過ぎて呼吸が苦しいくらい、それを全部聞かれてしまったヒト。

指の間をくすぐっては離れていく、^{あか}紅い——ストロベリーブロンドよりもさらに鮮やかな紅の髪。それと同じ鮮血の色合いが心の奥を染めていく。

「あつ、はっ……♡ はあつ……はあつ……♡」

シグネを狂わせる波が、ふっと止んだ。

涙にぼやける視界の向こうに、先生の立ち上がる姿が映った。自分の上げる甘ったるい声と、彼の舌が奏でるいやらしい水音に慣れた鼓膜をカチリという金属音が震わせる。

それは、男がベルトを外す音だった。

(先生、服、脱いでる)

まとまらない思考の中、シグネはじつとその様子を見つめ、

(あ、やっぱり先生、鍛えてるんだ)

服を着ていると細く見えるのに……と、彼女の顔にうっとりした表情が浮かぶ。

男性の体形の好みは人それぞれなのだろうけれど、シグネには先生のそれが一番に思えた。家族を亡くし、無条件に頼ることの出来る相手、庇護者を失っていた少女の目には、彼の姿がとても好ましいものとして映る。

「先生……っ？」

スツと頭を持ち上げられると、後頭部の下に適度に柔らかく、それでいて力が入るととても硬い、そんな感触のものが滑り込んできた。(ひざまくら、されてるの?)

先生の手で身体の向きを変えられる。仰向けから、横寝の姿勢に。「あつ……」

そこには裸になった先生がいて、シグネの目の前には凶悪な男の象徴がそそり立っていた。

(大きい……男のヒトのつて……こんなに……)

子宮からの疼きに思わずゴクリと喉を鳴らしてしまった少女は、慌ててソレから目をそらし先生の顔に視線を向ける。

すると、優しい気な色合いをたたえた紫の双眸と目があった。見つめ合っていると、少女の心が幸福感でふわりと浮き上がる。

それが何か恥ずかしくなってしまう、シグネは彼の顔から視線を下へと移動させた。

首、胸板、腹筋……それから……。

(あ、う……先生の……)

そこをまた見つめてしまっていることに気付いて、視線を上にも、また目が合つて……下に……また上に、と目がぐるぐるとさまよつてしまふ。

「俺のは少し大きめでな。それで時間をかけた」

比較対象を知らないシグネは、そう言われてようやく先生のモノが大きい方なのだと知った。

(これが、私の膣はかにはいるのよね……?)

禍々しいとでも形容したくなるような凶悪な肉の柱。

それを見つめっていると、シグネの口内には何故か唾が湧いてきた。目の前に薄桃色の霧が掛かっているような気分だ。

「触つてみるか?」

先生はそう言いながら、何度かペニスを右手でしごいて見せた。

逞しい男根が揺れる様に、少女のドロドロに溶かされた理性はあっさり負け、そつとソコに指を伸ばす。

(硬い……、それに熱い……こ、こんなに張り出して……)

太く、長く、硬く、熱い。こんなモノがこれから……。

ブルリと肢体に奔った震えは、怖さによるものだけではない。口だけであんなに気持ち良かったのに、コレを入られたらどうなってしまうのだろうかという期待もあった。

恐る恐ると言った態で、指先で幾度かつつく。少しそれに慣れてくると、手のひらも使って擦ってみる。

そうしていると、凶悪な形の肉の塊がピクリピクリと反応して、その様子がなんだか愛おしく思えてしまう。

(先つちよから……何か)

肉棒の先端の割れ目から、ジワリと透明な汁が出てくるのを見たシグネは、腹部の内側にキュツと締め付けるような感覚を覚えて……。

気が付くとそれを舐めとっていた。

(え、私……なにしちゃってるの?)

思わずしてしまった行動に困惑するも、ペロペロと肉棒の先を舐める舌は止まらない。

「シグネは可愛いな。何も言っていないのにこんなことまでしてくれるのか」

少女の頭を撫で始めた先生の声はとても嬉しそうで、シグネまで嬉しくなってきた。嬉しくなってきた。

喜んでもらえるのが嬉しくて、誉めるように頭を撫でてもらえるのも嬉しい。

思い出せば、さっき見た先生の顔はシグネの噴き出した露で濡れ光っていた。

(先生も、私の……してくれたから)

汗で頬に張り付いた髪をそつと寄せてくれる男の指が心地よい。

ペロリペロリとソフトクリームを舐めるようにシグネは舌を動かして、舐めても舐めても、後から後から出てくる露を掬い取る。

「んああっ♡」

不意に男の指がヌルリとシグネの膣に潜り込んできた。じゅぽじゅぽと音を立てながら気持ちよくされて、シグネの舌奉仕は徐々に熱を帯びていく。

「んうっ……♡ んんう……♡」

喰い付いた！

少女の瞳の浅いところを左手でかき回し、右手はその髪の手触りを楽しみながら、悪魔は満足そうに己の股間を見下ろしていた。

紫の瞳に映るのは、肉棒の先を柔らかな処女の舌が舐めまわす光景。饕餮^{シグネ}は美味そうにむしゃぶりついている。

生物の最も根源的な欲は、食欲だ。異物を体内に取り込みエネルギーに変換・同化する行為である「食べる」ことこそが、生物と無生物を分かつ境界線だと唱える学者もいるくらいに。

そんな食欲の権化とも言える妖怪『饕餮』は、覚醒寸前の神器の中でエネルギーを求めている。神器に大きく影響を与え出力を増大させる赤龍帝の宿主の体液は、今の饕餮にとっては途轍もない御馳走だろう。そこに掘り起こした女の性欲が混ぜ合わさればどうなるか。

その結果は、悪魔が今見ている通り。

饕餮だけであれば、下手をすると喰い千切られる恐れがある。だが、そこにシグネの感情が絡んでいるのならば案ずることは無い。その確信が悪魔にはあった。

(へんな味……でも、美味しい)

にじみ出る先走りの露を舐めとり胃に送る。その行為に饕餮^{シグネ}は夢中になっていた。

満たされる。どんなに食べても足りなかったものが、お腹の中に溜まっていく。いつかの夜に口にしたエンジードリンクなんてものではない。

もつと欲しくて、饕餮^{シグネ}は唇を大きく開いた。この愛しい硬く大きな肉の塊を、口いっぱい頬張りたくて仕方がない。

(あっ……歯が当たっちゃうわ)

唇は通せそう。でも、太いカリ首が上下の歯の間を通ってくれそうにない。どうにかしようとする、顎が外れてしまう。

自分が痛くないように、とあんなにしてくれた先生の大事な場所に痛いことなんてできるわけがない。

「無理はするな。そこまでしなくてもいい。そうだな……」

膾内をゆつくりとほぐしていた先生の指が、シグネのクリトリスに当てられた。

「あぁっ♡　そ、こ……んあん♡」

長く弄られたそこを摘まんでしごく様にされたり、転がされるとたまらなくなり少女の腰はもぞもぞと動いてしまう。

ひとしきり過敏になってしまっている陰核をもてあそぶと、先生の指はまた少女の中の肉壁をいじりはじめる。

(さつき、先生がしてくれたこと……)

シグネは唇をひよつとこのように前に伸ばしてから戻すことで、肉棒の感触をなるべく多く味わおうとする。

同時に限界まで開いた歯を肉棒の傘の様に広がっていく部分にそうつと当て、ほんの少しだけ力を込めて弾力を愉しみ始めた。

(美味しい、先生のおちんちん……美味しいわ。舐めるの止められないい)

口の中にある男のモノを、いつまでも味わい続けていたくなる。

今の自分の顔は、ものすごくみつともないことになってしまっているに違いない。そう思うのに、やめられないのだ。

「あぁ、気持ちいいぞ。饗饗」シグネ

先生はそんなシグネを誉めてくれた。その嬉しそうな声音に心が弾む。

なんだから、自分だけではなく、他の誰かも一緒に呼ばれたような気がしたけれど、その誰かはやっぱり自分のような気もして……。

先生は、どちらの自分もこうして愛してくれている。

だから、いい。こんな私を見せてしまってもいい。

口をめいっぱいに使ってペニスをなるべく多く啜え込み、舌をちろちろと動かして染み出してくる露を舐めとる。

片手は肉の幹の根元から傘の開いた場所まで往復させ、もう一方の手でパンパンに膨れたぶら下がっている二つの袋をそっところね回す。

先生に言われるままそうしていると、露だけでは物足りなくなってきた。

(欲しい……飲みたい……、美味しいの……いっぱい……)

唾がどどん湧いてきて逞しいペニスをべったりと濡らし、シグネの口の端から垂れ落ちていく。

舌先でツンと美味しい露の出てる割れ目をつつく、禍々しい見た目をしているのに自分のちよつとした動きにピクピクと反応する様子なんだか可愛いと思えてきていた。

（私、先生の、食べちゃってるわ……♡　すごい、おつきい……♡　おいしい……♡）

コレをずっと口に含んで舐め続けていたいとさえ思えてしまう。

（ああ、でも……欲しいよ。もつと、濃くてどろどろして……美味しいもの……お腹いっぱい飲ませて欲しい♡）

学校の授業で習った。興味を覚えて、そういった動画を見てしまったこともある。

先生と出会ってから、夜に、ベッドの中で想像してしまったことだ……。

シグネの情欲と、妖魔の食欲が混ざり合う。魂の色が注ぎ込まれる紅色の魔力を巻き込みながら、ぐるぐるとかき混ぜられ、攪拌されていく。

饕餮シグネの欲望と、詩求子トウテツの欲望が一体化・同調し、口の中の雄々しいものから噴き出す白い濁り汗を求めて沸騰した！

「これは……亜種か」

シグネの膣の入口と頭をあやし続けていた先生が、小さく何かつぶやいた。

そのつぶやきが聞こえたと思うと、ぬるんと肉棒がシグネの口内に深く入ってきた。

（あ……飲み込めちゃった、あふっん♡　おいし……♡）

ようやく口の中に迎え入れることの出来た肉塊を、シグネの舌と口内粘膜が愛おしそうに、貪るように蠢いて出迎える。

（ふとおい……あんう♡）

口の中、舌の付け根まで飲み込んだモノの味を、少女は舌を左右に往復させながら味わった。上あごの裏を先で擦られると、鼻に抜けるくすぐったさが広がって、歯ブラシで擦られたことや、指でくすぐら

れたこと、深いキスのときに這入って来た先生の舌遣いが脳裏に浮かんでくる。

(きもひいいい……♡ せんせえの……もつと奥まで……♡)

シグネが自身の腰におずおずと腕を回し、肉棒を根元まで飲み込んでいく。その姿に悪魔の口の端が吊り上がった。

あそこまで飲み込んでしまつては、まともな人間ならば息が苦しいはずだ。それなのに、一向に気にせずむしゃぶりついているのは『饕餮』の神器が覚醒したからだろう。

口にモノを入れ、飲み込むことにかけてはこれ以上の存在はそうそういないだろう怪物を宿した神器。その発現形態は、独立具現型の通常のそれとは異なっていた。

封じられた魔物の姿を元にした姿の分身を形成し操るのが、独立具現型神器の本来の形だ。だが、シグネの発現したそれは、ヘッドホンにバイザーを組み合わせたような形状をしている。

神器が覚醒し形を形成、発現する前にシグネと饕餮との一体化が進んでいた結果、亜種形態となったのかもしれない。

顔の口以外の部分を隠すようなバイザーは、シグネの違和感を覚えていない様子からして内側からは視線が通るようだ。悪魔の側からは、赤を基調とした板に金の装飾で饕餮紋と呼ばれる紋様を描いた代物に見えていた。

目を隠すその形状は、彼女が小さい頃にオッドアイをよくからかわれたと言っていたことが関係しているのかもしれない。

そう考えた悪魔は、彼女の顔を覆うバイザーに手を掛ける。

「シグネ^{トウテツ}」

名前を呼ばれたシグネは、男の股間に顔を埋めながら首をひねって彼を見上げた。

紫の瞳が、彼女の顔をじつと見つめてくる。彼の両手がシグネの顎や頬を撫でてから上に動いていくと、カチンと金属質な音が聞こえて来た。

その音は、いつの間にかシグネの頭部についていた奇妙な代物からのものだ。

なにこれ、とキョトンとするシグネに「今は気にするな」と言いながら先生は少女の目元を親指でぬぐう。

「俺は好きだぞ、シグネトウテツのその目の色。引きこまれそうので、ずっと見つめていたくなる」

なんてことは無い誉め言葉。他の誰かから違う状況で聞かされてもどうとも思わないようなそれも、情欲に沸いたこの状況、その相手である男からのものなら話は別だ。

シグネは顔をふにやりと蕩けさせ、目を細める。その表情は親しい者に誉められて無邪気に喜ぶ幼子のようにでもあり、性の官能に震える女のようにでもあった。

(あつ……先生、そういえばいつも……はああつ♡)

きゆうと下腹部の切なさが高まって、上の口から胃袋へとドロドロとしたスープを飲み下したい欲求と、下の口に挿し込んで欲しい気持ちとの順序が入れ替わる。

男が腰を引き、ずるずると口から長大な剛直が抜け出ていく。それを名残惜しそうに見つめた後、シグネは先生におねだりの上目遣いを送っていた。

「あの……せんせい……その……」

「もう我慢できそうにない」

「あつー」

どう言おうかとシグネが言葉を探していると、仰向けにされ、両脚を左右に開かれた。

「そのまま手で脚を抑えている」

低い声で命じられるまま、シグネが男の手で開かれた両脚をさらに自分の手で拡げていくと、股の間の割れ目がパクリと裂けていやらしい涎がどろりと垂れ落ちる。

そこに肉の槍の切っ先が近づくと、女の本能的な腰がくくつと勝手に浮き上がった。

(はああつ……私、すごい格好しちやってるわ)

自分の両手で股を開き、腰を浮かせて男のモノを挿れやすくしてしまっている。

情欲に突き動かされてしまっている淫らな自分自身の行動に、その様子を嬉しそうに見つめる紫の瞳に、シグネの頭の中が陶醉に染まった。

「せんせい……いれて♡」

処女からの破瓜懇願を受けて、幹との間に深い段差を作るカリ首の先が、ぐにいに……つと陰唇を割り開いて侵入してくる。

蜜に濡れた柔らかな粘膜をめくりあげ、肉の傘が浅い部分を押し広げた。

（ああ♡ 入ってくる。せんせいが、私の中に……♡）

熱く硬いものが入り口から少しだけ入り込み、浅い場所で円を描く。

「んああ……♡ あ、んんう……♡♡」

オスの熱を感じ、太いモノでこねまわされ、とうにふやけていた蜜壺が嬉しそうに男を歓迎し奥の部屋に導こうとうねり出す。

「痛くないか？」

「うあ、うん……だいじょうぶ。先生がたくさんシてくれたから、痛くないわ」

膝裏から尻にかけてを撫で擦られながらの優しい声に、シグネは熱の籠った吐息を漏らしながら頷いた。

優しい、先生。眼光をギラギラとさせているのに、それを堪えて気遣ってくれている。

（先生もすぐにシたいんだ……）

これまでに他の男たちから向けられた粘ついた視線を思い出す。先生にもそういうところがあつて、でも大事にしてくれている。

まだ触れてもらっていない子宮から、尾てい骨、腰、背骨を通して首の後ろ、後頭部へとゾゾと甘い痺れが流れ……。

気が付くと脚を少し曲げ、腰を突き出してしまっていた。肉壺の中からメリメリと音が聞こえてきたような気がする。

（ハヤク、ハヤク、タベサセテ）

心の中のもう一人の自分、飢えて渴いた何かがシグネを後押しして大胆な行動を取らせていた。

「今、どこに当たっているか分かるか？」

先生の切っ先が、シグネの処女の証に触れている。テニスラケットのガットを手で押したように、膜がぐにりとたわんでいるかのよう。「うん……うん、分かるよ、先生」

こんなに誘っているのに、先生はコレを破つてくれない。くちりくちりと腰を遣つて肉棒を動かし、浅いところを攪拌してくるばかり。「どころで、コイツはどうする？」

先つちよだけ挿れられた生殺しの状態の切なさになく少女の眼の前で、男はどこから取り出したゴムの袋を揺すつて見せた。

（あつ、いま、これ、そのまま……赤ちゃんできちやう……）

シグネはまだ学生だ。もしも出来てしまったら、育てられる自信がない。どうなってしまうのか分からない。

デモ、ホシイ。ノミタイ。

子宮の中がいっぱいになるまで注ぎ込まれる様を想像し、喉がゴクリとなつてしまう。

「俺はこのままお前を感じたいが……。どうしても嫌なら付けよう」
膜の手前、入り口を焦らし続ける生の感触と熱さに、シグネは領いてしまいたくなる。

もう一人の自分の声が、心のどこか奥の方から『ポツ、ポオ、ポン……フウ！』と響いてくる気がした。

「せんせい……そのまま、そのまま……で」

どうなつてもいい……。もう、がまんできない。

涙を浮かべ顔をぐちゃぐちゃにした美少女の告白に、男は身体を前に倒し彼女の耳元で囁き答える。

「嬉しいよ。子供が出来たら、一緒に育てような」

ぎゅううツとシグネのメス穴が、オスの種付けを待つ形に変わっていく。

「せんせい、それって……」

「ああ、お前も、お前との子供も面倒を見る。ひもじい思いをさせるよ
うなことはない」

「ああ……ああ……♡ でも奥さんは……？」

黒髪の女性の姿が思い浮かぶ。

「大丈夫だ」

「だいじょうぶじゃ……ないよね？」

「問題ない」

そう言いきられたシグネは、「先生……信じてるから」とすぐそばにある彼の顔に口づけた。

すると、「可愛いな」と言われながら耳、首、頬、額、それから多幸感に伏し目がちになった瞼の上にお返しのキスが降ってくる。

「もう手を放してもいいぞ。一気にいくから、好きなどころにつかまっっている」

「はい……♡ その、じゃあ、手、握って……？」

脚を抑えていた手に、彼の指が触れる。両手の指を絡め合いながら、シグネはその時を待った。

唇に一瞬柔らかい感触。

「いくぞ」

「うん♡」

身体を起こした男は、体重をかけ一息にシグネを穿った。太い肉の杭が処女膣の奥まで貫く。最奥に、どすつと衝撃がくる。

今まで触れられたことの無い場所、自分自身でさえも知らない身体の内側に異物が潜り込んでも、痛みはほとんど感じられなかった。

処女膜を破って大人の女にしてもらい。ペニスを一番奥まで埋め込んでもらった。うれしさがこみ上げてくる。

「大丈夫か？」

「うん♡ だいじょうぶ、先生が優しくしてくれたから、ぜんぜん痛くなかったわ」

好きな人のものが、自分の中をいっぱいにしてきている。赤ちやんの部屋の入口を押し開こうとしてくれている。

（オナカ、イッパイ）

腹の中を満たされる感覚が心地好い。お腹いっぱいにものを食べた時よりも、ずっと幸せ。

今まで知らなかった場所がはち切れそうに膨らんでいる。そうし

てくれている男のものが愛おしくて仕方がない。

「これでお前は俺のものだ。俺の女だ」

女を所有物のように言う先生の言葉にも、不快感は湧いてこない。

(私、もう先生のものなんだ。先生に食べられちゃったんだ♡)

絡め合っている指に入る力が強くなる。征服されたことに恍惚と
してしまう。

下腹部を割り裂き、深く潜り込んでいるものがゆっくりと動き始めると、その気持ちはさらに強くなっていった。

先生の腰が回すように揺れる。シグネの一番奥に自分の形、大きさを教え込むように。

深く埋め込んでもらいながら、角度を変えてドーナツ状の子宮の入り器官を躡けられていく。

(本当に……先生のものにされていつてるよ♡)

生まれて初めて男を受け入れた。もうそれ以前には戻れない。

処女を捧げた、自分からそれを求めた相手に、ものにされていく悦び。

その悦びがシグネの心を震わせ、男への情愛の沼に自ら頭まではまり込んでいく。

「くう、ふう♡ んあっ♡ ……いい♡ ああ……ん、ふうん♡」

いつしかシグネは男の動きに合わせて腰を動かし始めていた。粘膜同士がこすれ合い、にちゃにちゃと音を立てる。みっちりとはまり込んだ肉塊によって行き場を失った愛液が、結合部から零れ落ちていく。

そうしていると、子宮の口から先生がどんどん入り込んでくるような気さえしてくる。

「せんせえ、気持ちいい。気持ちいいよお♡ あ、すごい、こんなの

……♡」

「無理はしていないか？ 少しずつ慣らしていくからな」

魔力が流れ込んでいた。シグネの中に息づく妖魔が肉棒の先端から流し込まれる龍と悪魔の力を、貪欲に飲み干している。

吸い込まれそうな膣の具合に、悪魔は内心で舌を巻いていた。正直

なところ、膣内の入口から最奥手前までの具合はそこままででもない。処女らしく締め付けは強いが、他はまだまだこれから開発して行こうといった段階だ。

だが、奥がすごい。子宮口が吸い付いてくる。いや、吸い取ってくる。口もそうだったが、どうやら飲み込むことにかけては途轍もないパフォーマンスを発揮するらしい。

下手をすると押し付けているだけで、そのまま吸い出されてしまいうさだ。

実際、吸われていた。魔力を、オーラを、カウパー汁と一緒に吸われるエナジードレインの快感に呻きそうになる。

こんなもの並の悪魔ではすぐさま干上がってしまうだろう。

だが、初めての女の子を不安にさせるわけにはいかない。あくまでも余裕の表情で安心感を与えつつ、全てを成し遂げる。

神器に覚醒し、饕餮との融合が深く進んだシグネ。その恐るべき最深部に、悪魔は負けてなるものかと挑みかかった。

(くっついてる……。わたしの奥のところ、先生のに……ちゅっちゅっ♡ って吸い付いちやってるわ)

くりくりと肉棒の先端がシグネに教え込んでくる。自分の一番奥がどんな形をしているのか、どんなことをしているのか、快感の刺激として頭の中に送られてくる。

女の下の方、その一番奥にあるメスの口が、オスの肉と汁を求めて蠢いている。少しでもくっ付こうと、くぱくぱと少しずつ開閉を繰り返しているようにさえ思えてくる。

もつと奥まで突き込んで欲しい。挿れたらダメなところまで咥えこんで、たっぷりと味わってみたい。

もつと、もつと、と心の奥から滲みだしてくる食欲な欲求が、シグネの頭と下腹部を飢えさせる。

「そろそろ良さそうだ」

そう言うと、先生は腰を引き始めた。

離れていく。今まで押し付けられていた肉槍の先が遠ざかっていく感覚に、シグネの子宮がきゅうと啼いた。

もっと押し付けて欲しい。中まで突き込んで欲しい。そこを濃い精の塊でいっぱいにして欲しい。

「はあっ♡ はああん……せん、せ……ううん♡」

抜け出てしまいそうなところまで引き抜かれたペニスが、今度はズルズルと戻ってくる。

奥へと押し込まれてくる肉塊が膣を搔き分ける感触に、シグネは淫らな声を上げた。

くちゆりと先端が奥に触れ、ゆつくりと持ち上げるようにコリコリとした入り口部分を圧迫する。

「ああっ、これっ……んんう♡」

「お前の、ここは、吸い付いてくるな」

ついさつきまで、じつくりと時間をかけて躡けられたドーナツ型の奥部。そこを亀頭で押されると、その周囲が肉棒を包み込むように張り出してしまふ。

（あっ、こんな……。セックスって……すごい♡ もっと、くつついてえ♡）

つぶつぶの粘膜が肉棒の先にねっとり癒着し、男に快感を与えようとしている。それは同時に、シグネ自身の性感帯を先生のものに張り付けることでもあった。

自身の意図しないところで起きた身体の反応。それによつて猛烈に高まった一体感が喜びをより深め、骨が髄から溶けてしまふそう。

「んああっ、ふあああうっ……あっうう♡」

絡め合わせた手と手。シグネの指先が先生の手の甲に食い込んで、爪の色が真っ白に変わる。

悦楽の中、少女は先生に貫いてもらっている幸福感に酔いしれた。興奮、愉悦、快感、お腹の中をいっぱいにしてもらっている満足感。

「せんせえ……せん、せ♡ もっと、もっと奥までえ……♡」

初めての性交で、子宮口を押し上げられている処女が口に出しているセリフではない。

「無茶を、言うな、壊れてしまふぞ」

「ああんっ、でも、でもお……♡ ほしい、欲しいんです」

壊されてもいいから、この奥の口をもっと押し広げてさらに中まで埋め尽くして欲しい。

甘え泣くシグネの願いを、先生は叶えてはくれなかった。肉棒は再び引き出されて行き、追いつがる最奥周辺の粘膜が寂しさに啼いてしまう。

「いきなり、そんな、ことは……無理だ。まったく、とんでもないことを、言うな」

「あああう……わたし……おかしいの？」

シグネは知らない。初めてだから。

興味を覚えたことはあったけれど、そこまで詳しく調べたわけでもない。

でも、先生がそう言うのならきつと、なにか、おかしくなってしまうているのだろう。

「俺は、お前に、優しくしたいんだ。……分かって、くれるな？」

「んうう、でも……っ。ああ……んあああん♡」

先生のものが、膣の入り口近くを行ったり来たりする。へその側の浅いところを開いた傘の部分が幾度も幾度も繰り返し引つ搔いて……。

（ああ……気持ちいいよお……。こゝ、も……）

一番奥までハメ込んでもらった時ほどの満足感はない。でも、その部分を執拗に責めてもらっていると喘ぎ以外の言葉が出て来なくなってしまう。

「あつ♡ そこっ♡ あつ♡ そこ、ばっかり……んっ♡」

「こゝも気持ちいいだろう？ まずはこゝでイクんだ」

気持ちのいいところをずっとこすられ、乙女の肌が歓喜に震えた。

時折、深くまでズブズブと突き込んでもらうと、待ちかねていた最奥が喜んで吸い付いているのが分かる。

浅いところを可愛がられ、じつとりとしたストロークでほぐされていく。シグネの膣内はざわめき、男の味を覚え始めていた。

（ホシイ、ホシイ、ココニ、イッパイ）

子宮が疼く。膣道が悦びを覚えさせられていくことに、もっと奥に

欲しい、出して、飲ませて、味わわせて……と、おあずけされているナニカが騒ぎ立てる。

先生が上体を倒してきて、シグネの胸に吸い付いた。

仰向けになっても見事な形を保ったままの美乳。その先の尖ったところを交互に唇ではさまれ、吸われ、舌で転がされる。

ぷる、ぷるん、と弾ける瑞々しい二つの果実に、唾液のぬめりが垂れて光った。

もしも両手が塞がっていなければ、先生の頭を抱きかかえたい。ぎゅつと抱きしめてこの感情を伝えたい。

でも、シグネの両手は今、その先生の手と繋がっていて……絡め合わせた指を離したくはなかった。

いろいろとしたいのに、してあげたいのに、それが出来ない。もどかしくて、そう感じてしまう自分がいることが幸せで幸せで仕方がなくなる。

「はう……っ、んんっ♡ あふう、あんう……♡ う……あう♡」

硬くしこった乳首を中心に乳房から甘い波が広がっていく。

膣内をじっくりと摩擦していく肉棒からの悦楽。胸にしゃぶりつく愛おしい男の唇からの快感。

気持ち良さに頭の中が肉悦と愛欲に染まっていく。とつくに染まり切ったと思っていたのに、まだ、もっと、奥がある。

それとは別に、子宮が疼いた。オスの精を受けることに焦がれる、メス器官の貪欲な渇き。

陶酔と焦燥に心が埋め尽くされて、シグネは男のしてくれている行為だけを感じるようになっていた。

クリをきゅつと摘まれる――。

「ほら、イけ。まずはここから覚えろ」

昂ぶりが最大値に達する寸前にそう命じられたシグネの心と身体は、言われるがままに跳ね上がった。

「はひっ♡♡♡ イッ……くっ♡ せん、せ、イキま、いうッ♡♡♡
いうッ♡♡♡!!」

少女の足指がぎゅつと丸められていく。白い歯を覗かせた口の中

で舌がぴんと張る。

頭の中が痺れて意識が虚ろになり、目の前がかすんで先生の顔だけが焼き付く。下腹部に感じる先生の肉棒。絡め合った指。見下ろしてくる紫の瞳。

シグネの心と身体は、一人の男の与えてくれるものだけでいっぱいになって……。

「ふっああ……はああ♡♡」

意識が飛んでいた。

そして、それが戻って来たとき自分の中に彼の逞しいモノを感じ、ゆらゆらと揺すり擦られていく心地よさ。シグネはその陶酔感にだらしなく涎を垂らしながら浸っていた。

強張った身体がふにやりと蕩けて、左右異色の瞳に映る愛おしい顔にうっとりとしてしまう。

「どうだった？ 俺が初めての男で良かったか？」

頷きたかったけれど、力が抜けきった身体ではかすかにあごを引いてみせることしか出来ない。喜悦の名残がシグネの中で波打っていた。

そんなところに、触れるだけの優しい口づけを落とされる。

（せんせえ……♡ せんせえ……♡）

思考が回らない。頭の中で考えることは、心に浮かんでくるものは、すべて彼のことばかり。

「初めてだったんだ。もう休んだ方がいい」

先生は口では優しく気遣うように言いながら、シグネの一番奥を肉の槍でトンと突き上げてくる。

「はあっ♡♡！」

軽く小突いて、すぐに抜け出て行こうとする彼のモノ。余韻に浸っていたシグネの心の奥に、忘我とともに飛ばされていた渴きがカツとこみ上げてくる。

（まだ、まだ行っちゃいやだ……。もっと……。ううん、中に……。ほしいわ）

気が付くと、シグネは細く長い両脚を男の身体に巻き付けていた。

「せん、せ……先生も、気持ちよくなって……ほしいわ」

この言葉はシグネの本心からのものだった。もつと、彼にも気持ちよくなって欲しい。自分の身体で、感じて欲しい。

だって自分の中から出て行きかけている男のモノは、まだ硬いまま。一度もその精を放つてはいない。

男の紫の瞳には、たしかに牝を貪ろうとする獣欲の滾りがあつて……それなのに、シグネのためだと言って休ませてくれようとする。(もつと、食べて欲しい。たくさん、いくらでも……わたしを……)

このヒトが望むなら、なんだつてして上げたい。いくらでも貪つて欲しいと想う。

「無理はしなくていい。俺はお前が感じてくれただけで嬉しいからな」

「先生……私の……気持ち良くなかった……？」

同時にもう一人のシグネの本音でもあつた。

欲しかった。熱くドロドロとした、男の精を女の一番奥のところにあふれるぐらい注ぎこんで欲しい。

彼の精をもつと、もつと……貪らせて欲しいと魂の奥から衝動がこみ上げて来てもいた。

「いいや……」

手を振りほどかれた。絡み合っていた指と指が離れてしまい、シグネの手がはらりとシーツの上に落ちる。

(あつ……手……離しちゃ、やだ。んっう……ああつ、でも……せんせいのが……ふうあ♡)

自分を貫いているオスの器官が、ぐつと大きくなっていた。さつきまでよりも、もつと硬く、太く感じる。

「あつ、せんせ……いた、いよお♡」

気が付いたら抱きしめられていた。同時に、深く強く子宮の口に肉槍の先がめり込んでくる。

汗でぐしゃぐしゃになったシャツ越しに強く、強く抱きしめられて背中が少し痛い。深々と挿し込まれた男根に、子宮を押し上げられて少し苦しい。

でも、それが途轍もなく嬉しくて、心地よく感じてしまう。

「シグネ……俺の女に、俺の下僕もになれ」

耳元そう囁き命じる声に、すでに堕ちていたシグネの心がより深みへと沈んでいった。

耳、首筋、頬、鼻の頭、額とキスの感触が落ちて来て、お互いの荒い吐息が睫毛を揺らす距離で見下ろされる。

先生の荒々しい呼吸に、シグネはこの先を期待して熱に浮かされた声を上げた。

「うん、私、わたし、もう先生のだから……先生のものだから……、せんせいの好きにして」

見下ろすオスの紫の瞳は隠すつもりもない情欲が燃えていて、それに見つめられたメスの色違いの瞳がどろりと服従の色に染まっていた。

「シグネ……、俺が人間ではなくても、悪魔でも構わないな？」

少し痛いぐらいだった抱擁にさらに力が籠められた。その力が、逃がさない、離さないと男の意志を伝えてくる。

「あく、ま……」

ばさりと先生の背から黒く大きく禍々しい翼が広がった。

同時に強烈なナニカ、圧力のようなものがシグネの子宮から脳天へと駆け抜けていく。紅と紫の光が頭の中で瞬いた。

不思議と驚きはない。人間離れた美貌の男には、悪魔だと言われるてもストンと納得してしまうそんな雰囲気からどこかにあった。そして、シグネが生まれたときから魂の奥に潜み、神器が覚醒した今となってはかなりの深度で同調・融合している妖魔にとっては、そんなことは既に承知のことだ。

「あむうん……♡」

衝撃に呆けて半開きになっていた唇に、奇妙な感触の物を押し当てられる。

それが先生の与えてくれたものだとなつて、シグネは特に抵抗もなく『駒』を口に含んでいた。

（なんだろう、これ……。あんっ……。これ、せんせいのあじがする……。お

いしい)

尖っている部分があつて、硬いような気もする。でも何故かひどく馴染んできて、舌の上で溶けてしまうような感覚もする。

口の中に入れられたよく分からないものを、シグネの舌は美味しそうに舐め転がしていた。

先生がくれた、先生の味がするもの。だから、指や舌や、肉棒と同じように……これはきつとこうするものなのだろう。

そんな認識がいつの間にか少女の出来上がっていた。

「それはな、お前を悪魔に変えるモノだ。俺の女、下僕として、人間を止めて悪魔になつてもいいと思えたら飲み込め」

先生の腰が動き始めた。優しく細やかにメスを蕩けさせようとする律動だ。

飴玉のように飲み込んだら悪魔になつてしまふというモノを舐めしやぶりながら、シグネは鼻から甘えた声を漏らす。

申し訳程度に巻き付いているスカートの布が揺れる度に、心地よさが少女を満たしていった。

(悪魔つて……わるいヒトだよね……。せんせいも、悪いヒト？ アアツ……でも、こんなの……わたし♡♡)

先生の鍛えた体に伸し掛かられ、シグネの綺麗な形の胸が押し潰される。ぐにゆりと形を変えた二つの胸肉が、リズムに合わせて変形し、乳首が擦れて……。

子宮の近くにあるコリコリとしたところに肉棒の傘の開いた部分をハメ込まれぐらりぐらりと揺すられる。すると、お腹の奥からじんわりとした鈍く切ない悦びがシグネの全身に行き渡った。

シグネはもう、自分がどこまで蕩けていくのか分からなくなっていた。もうこれ以上ないというくらいに気持ちいいと思っていたのに、その先を教えてももらえない。もっと深く、もっと柔らかく、もっと甘く、もっと強く、もっと激しく、もっと優しく、ときには意地悪く……様々な快感が初心な乙女だったシグネに、早く下僕になつてしまえと誘惑を繰り返す。

いつのまにか、シグネは先生の身体に両腕を回していた。

両腕と両脚を男の身体に絡みつけ、愛欲と肉悦をねだる淫らなその様は、もう清らかな処女のものではない。オスに犯される悦びに浸り、淫蕩に身体と心を蕩けさせたメスの姿だ。

(せんせい……せんせい……こんな……んううっ♡ 私、先生のためだったら……なんでも……してあげたいっておもってる)

でも、とシグネを躊躇わせるのは悪魔という響きに抵抗する良心などではなかった。愛欲に心を塗りつぶされ、魂の半分以上が妖魔と癒着したシグネにはもうそんなものはほとんどない。

躊躇わせているのは、彼女の中にある人間ではなくなることへの怯え。

それと、中華最大級の邪神にして戦神、五兵主神『蚩尤』の頭部とも伝わる大妖怪『饕餮』の持つ悪魔の軍門に下ることへの抵抗心だ。

「くっ……、シグネ、よく、見て、いろ」

美味しい飴玉をうっかり飲み込まないように気を付けながら、シグネは声を上げた。

「あんっ……♡♡ あっ、せん、せ……が」

先生の姿が変わっていく。大学を卒業したくらいの今日一日ですっかり見慣れた姿から、シグネの父親くらいの年代へと――。

年の離れた男性。お父さんくらいのヒトと下半身で繋がっている。視覚から入ってくるその情報は、シグネの脳に倒錯した思いを抱かせた。

「うっ……んうふうう♡♡」

今度は先生の姿が若返っていく。元の青年の姿からさらに若く、シグネと同じ年くらいから……年下の中学生くらいに……さらにそれよりも若い。

シグネの膣内を拡げていたペニスが男の若返りに合わせて小さくなっていく。

(ああっ、ヤダあ……♡♡)

紅色の髪をした小学生くらいの男の子。信じられないくらい可愛いらしい女の子のようにも見えるその子は、

「どうかな？ この姿が好きだってヒトもいるんだけど」

やはり可愛らしい声でそう言ってくる。

(ああっやだあ、へんな気分になっちゃうわ……♡)

たしかに、大人の姿よりも小さい。しかし、精液を欲しがって、孕みたがって降りてきているシグネの子宮の入口に彼の逸物は届いていた。

「こつちなら、遠慮なく動かしてもいいよね？」

可愛らしい小学生くらいの見た目になった彼は激しく腰を振り始める。

「んあっ♡ んあっ♡ あっんっ♡ せんせ、それ、やめ、おかし、く、へんな……はあっん♡」

ばちゅんばちゅんと水音を立て叩きつけられる。大人の姿のときの優しさを感じさせない自分勝手に暴力的なセックス。

それを、こんなに小さくて可愛い子にされている思うと……シグネは頭がおかしくなりそうだった。

「イキそうだね。ほら、イクときはなんて言えば良かったかな？」

何度も何度も執拗にノックされ、シグネはすぐに絶頂へと追い込まれていく。

既に彼のする何もかもを受け入れたい気持ちになっているのだから、耐えることなんてできるわけがない。

「あっう、いつちや、っん♡♡♡ イクッ、わた、こん、な、ああっん♡♡♡ イグっ♡ イクうう♡♡♡!!」

欲しいものをもらえないまま、またイカされてしまった。その余韻からシグネが醒める瞬間を狙いすましたかのように、ぐぐつと強く肉棒が押し込まれる。

太く、逞しい。叩きつけるような衝撃はないけれど、奥を押し上げられた少女は目を見開いて呻いた。

「うあんっ♡ ああっん♡ せん、せえ……♡ あっ、ダメえ……♡」
先生の姿は元に戻っていた。青年の逞しきで突き上げられると、シグネの欲しがりな最奥はキュツと反応して粘膜を肉傘に張り付けてしまう。

雁や裏筋にぴっちりとかくつついた少女の柔い粘膜が、射精をねだっ

てヒクヒクと蠢いている。

「シグネ、悪魔はこうやって身体の年齢を自在に変えられる。そして、人間から悪魔になった者の寿命は一万年。この意味が分かるか？」

一万年。まだ二十歳にもなっていないシグネにとって、それは途方もない時間だ。想像もつかない。

「お前はもう俺の女だ。お前が悪魔にならなくても、言った通りに面倒はみる。老いて死ぬまでな。ただ……」

獣の昂りを紫の瞳に宿しながら、先生は腰をぐいと引いた。

そうして、離れていく肉の熱に寂しがるシグネの膣奥を焦らすように巧みに腰を使い始める。シグネの膣内の欲しがっている場所を的確に見抜いて亀頭で擦りあげ、高い段差を作るエラで肉襞を掻き出し押し戻す。また、その力加減がまた絶妙でシグネを最も感じさせる具合を熟知しているかのようだった。

(ああ〜♡ ああ〜♡ すごい、気持ちいい……でも、奥欲しい……射精して欲しい……ああ〜♡♡)

極上の餌を目前にして、舐めさせられるだけで食べさせてもらえない。焦れに焦れたシグネの中の大妖は、行儀の悪い犬のようになっていた。鎖に繋がれ、ギリギリ届かない場所に餌の皿を置かれた飢えた獣だ。

「二十年か、三十年か……いずれこういうことはシテやれなくなる。今のお前は好きだが……な」

二十年、三十年後の自分の姿。一万年なんて途方もないものより身近なそれをシグネは想像し、いやいやと首を振った。

人は老いる者だ。悪魔とは違う。

今は美少女と言われるシグネもいずれは老いさらばえていく……おばさんになり、おばあさんになり……先生はもうこうして抱いてはくれなくなる。

年老いてシワの増えた自分の横に立つ、若く美しいままの男の姿。

どちらも人間で共に老いていくのならばいい。でも、自分だけが……。その想像の中の光景は、まだ若く美しい少女には耐えられないものだった。

「シグネ……人間を止めて、俺と生きる。『悪魔の駒』、人を悪魔に転生させるそれは、そう数がない特別なものだ。俺は、お前にならそれを与えてもいい」

（とく、べ、つ……わたし、先生の特別……。ああ、もう……本当に、わたし……）

それは、一人の少女が人間を終えることを決めた瞬間だった。

そして、それは同時に『聖書の神』によって、所有者Ⅱ少女の魂と深く結びつけられてしまった大妖が悪魔の下僕へと堕ちる瞬間でもあった。

「は……はい」

ずっと味わい続けていたい。そう思って口の中でねぶり続けていた甘美な『駒』を喉へと運ぶ。

狂ったように嬉しそうな表情を浮かべ、シグネはごくりと喉を鳴らした。

人間を悪魔へと変えてしまう『悪魔の駒』。魔王がチェスの駒を模して造った邪な結晶が少女の体内へと呑み込まれ、乙女の身体を作り変える。

穢れていく、染まっていく、悪に、魔に、何よりも――。

（わたし……ああっ♡♡　すごい、全部、わたしのぜんぶが……先生のものになってるわ）

少女の魂が喜悦の中で悪魔の下僕へと転じていく、それに引きずられて魂の奥底で彼女と融合している饕餮もまた悪魔の下僕へと生まれ変わっていく。

――堕ちた。

紅髪紫眼の悪魔は、その様子に三日月のような邪悪な笑みを浮かべた。

それを見つめ返すシグネの顔にも主によく似た笑みが浮かんでいく。

「可愛いな。お前は本当に可愛いなシグネ。俺の『戦車』！」

女を抱きしめる腕に力が籠る。悦びのあまり抑えきれなくなった魔力が溢れ出してしまふ。そうしなければ耐えられないほどに、抱き

着いてくるシグネの腕力が強いということもある。

怪力無双にして貪欲の化身とも呼ばれる大妖怪『饕餮』。その性は卑劣であると言う。強者に媚び諂い、弱者を虐げ筆取り、喰らい尽くしてしまふ悪逆の輩。

そんな悪性の怪物が、今、人間の少女の欲望に呑み込まれた。

ダークブロードの髪と左右異色の瞳を持つ美少女の内に溶け込んだ妖魔は、もはや彼の虜であり言いなりの下僕『戦車』となったのだ。

ことの成就に肉棒がいきり勃つ。既にガチガチの発射寸前。我慢に我慢を重ねてきた男のモノが興奮でさらに膨張し硬度を増している。

「せんせえ……♡　せんせえ……わたし先生だから……♡　せんせえのものになったから……♡♡」

媚びと甘えに満ちた声で自分を呼ぶ可愛い眷属を、彼女が望んだとおりに犯し尽くしたくて仕方がなくなっていた。

昨日まで処女だった女の……。まだ子供を産んだこともない女の挿れてはいけない場所にまでぶち込み刺し貫いて、真っ白になるまでぶちまけて、子種で埋め尽くす。

「ああ……いいぞ、どうして欲しい？」

ぐいぐいと子宮の口に肉棒を押し込みながら、男は彼女に訊ねた。答えなんて分かり切っているが。

「欲しいの……。せんせいの、たくさん、私の中に、赤ちゃんの部屋に、いっぱい射精だしてえ……。♡」

牝啼きの声とともに、肉の槍先を塞いでいたコリコリとしたドーナツ状の器官が緩む。なんでも食べてしまう性質故なのか、赤子が通るための穴がオス肉を啜え込みたがり子宮口が開きだしているのだ。

「ああ、お前の一番奥の奥にぶちまけてやる。そのまましがみついているよ」

言われるままにシグネが彼にしがみつくと、先生は翼をはためかせてぐつと身体を起こした。

一瞬、二人の身体が宙に浮かぶ。少女の膺の一番奥、彼の肉棒はそ

れ以上はいけない場所にめり込んだまま。

空中でシグネは彼の膝の上に乗る形になった。正常位から対面座位になり、そのままシートの上に着地する。

(ああっ♡くる♡来ちゃう♡♡)

ぐっとシートがたわみ、スプリングが跳ねた。シグネの体重が押し込まれている肉槍にかかって……。

「あッ!! あっあああッ♡♡!!」

次の瞬間には、ずぶりとお腹の一番奥の大事な部屋に彼を迎え入れていた。

ここまでずっと外側から押されて来た場所の内側に、高い段差を持ったカリ首が引つ掛かっている。

「んうあああ♡♡すげ、い……うん……っ♡あはあ……♡」

シグネの背からバサリと音がした。悪魔に堕ちた証、黒く歪な翼が彼女の背中から生えている。

少女は生やしたばかりの翼を、男の大きな翼に触れ合わせた。悪魔の証同士が、くねくねと纏わり付き合っつて睦会い始める。

「シグネ、お前を犯し尽くすぞ。俺のものになった記念に、お前の中を全部、ぐちゃぐちゃにしてやる!」

「ああっ♡ああっ……ッ! うれ、っしい! して……せんせえ、わたしを、シグネを先生の好きにしてえ。ああっ……してえ♡♡」

「これはもう邪魔だな」

布が引き裂かれる音がした。シグネの身体に張り付いていた白いシャツが、ボロボロに千切られて投げ捨てられた。

シグネと彼との結合部を覆い隠していたスカートが、ビリイと音を立てて剥ぎ取られ放り出される。

「ああっ♡なかっ……なからあっ♡♡」

「分かるか、ここは、普通は、入らない、ところ、だ。俺も、これ、は……初めて、だ」

本来、子宮口は狭い。センチもない。ミリ単位だ。それが太いペニスを通せるほどに広がっているのは異常なこと。

赤子が生れ落ちるときにしか開かないはずの場所、本当なら挿入出

来ないはずの角度の部屋。そこに自身の肉棒を埋め込んでいる。

そのことに男の興奮は留まるところを知らない。何処までも昂つていく。

男は裸に向いた少女の尻に両手を回し、柔らかかですべすべとした尻肉をぐにいと鷲掴んだ。

ベッドのスプリング。腰の動き。掴んだ牝尻を持ち上げては落とす。それらのタイミングを合わせて、ゆったりとした背徳の抽送が始まった。

「せんせ……、せんせえのはじめて？ あはっ♡ うれ、ひい♡」

ぐにぐにと、入り口の外から押し上げられて気持ちよくなっていた場所の中を肉棒が上下する。

その感覚にシグネは身体を震わせた。先生の手してくれる上下の動きに合わせて腰が前後左右にクネってしまう。

ぶち込まれたモノに、赤ちゃんのための場所をぬるりぬるりとこすりつけるように。

「はあ……ああア♡♡」

狭いはずの道を押し広げながら、亀頭がずるりと奥へと潜っていく。内部にまで侵入した肉槍が、そこだけはキュツと締まったままの子宮内をぐりぐりと擦り上げた。

ぞくぞくとした幸福感、官能が駆け抜け、シグネの胸の奥がきゅんと鳴る。頭の中が蕩けて、肉悦を食ることしか考えられなくなり、喘ぎが止まることなく口から漏れ出てしまう。

「あっ、あんツ……♡♡ ひっかかって……ふああっ♡♡」

子宮内を堪能した肉棒が引き抜かれるときは、また別の快感がシグネを襲った。高い段差を作るカリ首が、子宮口を下へと引つ掛けていくのだ。内側から、そこをぐにりと捻じ曲げられるとなんとも言えない快楽が湧き上がってくる。

「うああああん、あう♡ あう♡ あうう♡ せん、せえ♡♡ せんせえ……♡♡」

「くっおツ……吸われるッ！ すごいぞ、シグネ……」

「気持ちいい？ せんせ、わたひの、ここ、気持ちいいでしゅか？」

「ああー ああー ああッ！ いいぞ、シグネ……気持ちいい」

喜んでもらえたことに、嬉しさがこみ上げてくる。

気持ちよさそうにしている先生の顔を見ると、もっと何かしてあげたくなってしまう。シグネはもつと、もつと、と双胸を男の胸板に押し付け、すり寄せ、腰をさらに悩まし気に振りたくり始めた。

「ああうっ♡ はあああん♡♡ はう♡ あうん♡」

オスの抽送とメスの腰振りが徐々に激しくなっていくと、結合部からぐちぐちと音を立てて泡立ったような愛液が垂れ落ちる。

二対の黒い悪魔の翼が振じれるようにして絡まり合っていた。互いの口と口が言葉もなく重なり合って、舌が双方の口内を行ったり来たりし始めた。

少女は縫り付くようにして先生の首に両手を絡ませた。

淫楽の頂点に向かっていている自覚がある。意識がどこかに飛んで行ってしまいそうだった。

コリコリとしながらも柔くなった肉器官を押し分けて這入ってもらう。大事な部屋の中をかき回してもらおう。蕩けた赤子の道を掻き出してもらおう。その度ごとに瞼の裏でチカチカと光が瞬くようだった。

少女の細い肢体が、細かく痙攣する。甘い痺れが身体中に広がって、抑えきれないほどに高まっていく。

「ふあっ♡♡」

どちらからというでもなく唇を離した。

「せんせえ、わたし、もう、イっちゃやうわ♡ おねがい、せんせえ……
射精^だてえ……♡♡ いっしょ、一緒に……♡♡」

絶頂が迫っている。今日一日で、何度も何度も体験させてもらった、あの感覚。次のそれは、これまでのどれをも超えてしまいそう。そんな予感する。

「ああ、もちろんだ。俺も、もう限界だ。ここに！ この中に、ぶちまけるぞー！」

男はねじ込んだ肉棒で部屋の中をかき回しながら、子宮内射精を宣言した。

「はあうっ♡ ふあああん♡♡ うん、あはっ♡ うれ、しい♡♡」

悦びに声を上げるシグネの身体が大きく持ち上げられ、ズルズルと肉棒が引き抜かれていく。奥も奥、最深部だけで感じていたカリが膣道全体をこする官能が淫らな電流となつてシグネの芯を貫いていく。

ズンツと長いストロークが打ち込まれる。Gスポットから、子宮の中まで、一気に貫かれて、あまりの快感に上ずつた喘ぎは悲鳴のようだった。

持ち上げられて、シグネ自身の体重で一気にぶち抜かれる。その繰り返しに、少女はすっかり蕩けて柔らかくなつた美乳をたふんたふんと揺らしながら背を弓のように反り返らせた。

「せんせえ……。もう、もうダメえ、イツちやう、イツちやうわあ♡♡ なか、なかにい♡♡」

「ああ、受け取れ！」

先生の肉棒の先から、溜まりに溜まつた精液が濁流となつて噴きあがり、シグネの赤ちゃんの部屋に叩きつけられた！

「ひっいあッ♡♡!! ひあつああああああつ……。♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡!! ああつ……。♡♡♡!! ひつう……。♡♡♡!!」

今日一番のオルガスムスが押し寄せて来た。それも一度ではない、噴火は一度きりではなく、何度も繰り返され、どぴゆるる！ と精液が部屋の壁を叩く度にシグネを高めへと押し上げていく。

降りて来られない。目の前が明滅して気を失つてしまいそうなのに、次々と襲つてくる連続絶頂の強烈な刺激がそれすらも許してくれない。

意識が飛びそうになつては、次の射精でたたき起こされる、そしてまた飛びそうになつて……。

(あああつ、すず……。すごいよお♡♡ こんあ、こんあの……。あああつ、せんせえの、美味しい、はあっ♡ はあっ♡)

心も思考も魂も、シグネの何もかもが至福を感じていた。これ以上ない一番深いところで繋がっているという一体感。愛おいしいヒトの精を受け止める幸福。飢えを満たす美味。

混然一体となつたそれらの要素が、シグネを快楽の絶頂と深淵の間

で行き来させる。

子宮が震えていた。ビクリビクリと痙攣を繰り返し、そこから生まれた熱が全身を駆け巡る。血管という血管、神経という神経、皮が肉が骨が、脳髓が、心と魂が理解させられる。

もうこのヒトから離れられないと覚え込まされていく。

(あつ……これ、先生の精液が……♡ わたしの……あつん♡)

シグネの胎内で、ナニカが形を成そうとしていた。

龍帝の体液に含まれるエネルギーを糧として、神器所有者の女の身から生じようとしている者。

それは、独立具現型神器の本来の形。

所有者の分身としての、神器に封じられし異形の似姿であった。

「ひどいよ！ 先生！」

サーゼクスホテル最上階特別室。その豪華で広い浴室に可愛らしい声が響いた。

「可愛くひどいと言われても、俺の子ではない」

そう言いながら、先生は湯船に浮かぶ白いモコモコ生物を指先でつついている。

すると、つつかれたモコモコ生物は何処か嬉しそうに「ぽう、ぽう」と鳴いた。

「だって、先生の……」

驚いたことに、シグネはぽこぽこぽこぽこつと四つ子を産んだ。

子宮に生中出しを受けたかと思ったら、もこもこもこもこつとお腹が大きくなったのだから、シグネも先生もこれにはビックリしてしまった。

処女喪失から子宮姦、さらにその直後の四つ子出産。一夜にしてとんでもないことになってしまったシグネのお腹から出てきたのは、二足歩行する白いもこもことした羊のような生き物。その生き物は白毛の顔の大部分を赤に金色で饕餮文の刻まれた仮面で覆っていた。顔で見えているのは、額付近から生えている2本の角と、その大きな口だけだ。胴体の毛も白く、先だけ黒くなったふさふさの尻尾も備えている。ちよつと変わった生き物を模したヌイグルミのように見えなくもない。

シグネとしてはお腹から出てきたそのときは驚いたけれど、少し慣れるとなかなか可愛いと思っていた。

なんといつても、先生との行為によって生まれて来た子たちだ。悪魔になった今となっては、見た目が人型でないことはあまり気にならない。

「いや、それは分かるが……説明した通り、こいつらは独立具現型神器

『饕餮』の能力で発生しているシグネの分身だからな」

この白いモコモコ謎生物らは独立具現型神器『饕餮』の生み出す分身である。シグネは神器使いとして途轍もなく優秀だったのだ。

「うー……くすん」

お互い裸で湯船に浸かり、シグネはその背をぺとりと先生にくつつけていた。先生の両脚の間に座る形だ。少女は泣きまねをしてみせながら、彼に後頭部を擦りつける。

それをされた先生の方は、脚の間に抱えたシグネの肌をもみもみなどで楽しんでる。

結局、この二人はいちやついているだけなのだ。シグネは、神器や悪魔その他についてのおおまかな説明を既に受けていた。

「こら、お湯を飲むな。こつちにしろ、こつちに」

先生が、湯船の中を元気よく泳ぎまわる四体の異形たちに言葉をかけた。

『ポツくん』、『ポオくん』、『ポンくん』、『フウくん』。

シグネによってそう名付けられた四匹の獣は競い合うようにして湯船を泳ぎ、差し出された先生の指に押し合いへし合いしながら吸い付いていく。彼が片手の四本の指先から放つ魔力に反応しているのだ。

魔力は指先からある程度の距離まで伸ばされているので、別に指に吸い付かなくても食べられるというのに四匹は争うように近づこうとしていた。

「先生、なんだか嬉しそう」

その光景を見て、ふと後ろの先生の表情が気になって振り返ったシグネは、彼の顔に浮かぶ表情を見てとてもほわりとした気分になった。

「そうだな。こいつ等は神器が生み出した分身だから、所有者であるシグネの気持ちこそそのまま表している。それが懐いてくれば、まあ、嬉しいさ」

おっぱいをねだる子犬の赤ちゃんたちのように、先生の指に吸い付いている自分の分身たち。その姿に恥ずかしさこそばゆさを覚え、

シグネはお湯の中にブクブクと顔を沈めて行った。

風呂のお湯に息を吹き込んでぶくぶくと音を立てる。子供みたいな仕草だ。そんなことをしているシグネの頭に先生の手が置かれぐりぐりと少し乱暴に撫でられると、まだ家族がいた幼かった頃が思い出される。

「せんせえ……♡」

湯船の中でくると向きを変えたシグネは、分身たちと同じように甘えた声を上げて正面から先生に抱き着いていった。

胸の双丘を男の胸板に擦りつけるその仕草はオスに媚びてねだるメスそのもの。たちまち男の象徴がギチギチと硬くなっていく。

「お前も欲しくなったのか」

「うん……♡ んあつ、入ってくるわ」

昨日まで満たされたことの無かったシグネのお腹の穴がオスの肉でみっちり満たされ、肢体を快感が突き抜ける。

オッドアイの美貌が淫らな色に染まる。たった一度の交わりで身も心も虜にされてしまった少女の姿がそこにあつた。

「今度は自分でいいところを探してみろ」

「はあい♡」

強者に媚び諂い、弱者の全てを奪い尽くし災いを振りまく。また「あらゆるモノを喰らう」その性質から、魔や災禍すらも喰い尽くすとされ、象徴である饕餮文は護符ともなったという。

四凶最強にして最凶の妖魔『饕餮』。それは従えることの出来る強者にとつては、従順で強力な守護者となる存在だ。

「シグネは良い『戦車』になつてくれそうだ」

「あつ♡ んううっ♡ がんばる」

その大妖怪と深く混じり合い貪るように己を求める美少女の痴態。それを紅髪の悪魔は満足そうに見つめ、自身もまた彼女を貪ることに集中し始める。

浴室に少女の嬌声と、揺れて跳ねる湯の音が響き渡り始めた。

……………。

幾度か気をやり、二度の射精を受け止めたシグネはとろんとした顔で先生にしな垂れかかっている。ぬるめの湯が心地好い。

未だ自分の中を貫いたまま、萎える気配を一向に感じさせない剛直にウツトリとしてしまう。

「ああ、ぐ苦勞」

でろんとシグネが蕩けていると、先生の耳の辺りに魔力の気配があり、そこから誰かの声が聞こえて来た。

小さな通信用の魔方陣が展開されているのだ。

「どうしたの？」

「食事の用意が済んだらしい」

「ごはん！」と目の色を輝かすシグネ。その分身たちもパシヤパシヤとお湯を叩いて喜んでいる。

先生の魔力が病みつきになった饕餮だが、暴食の化身は普通の食事だって大好きなのだ。

「きゃん♡」

ざばりと水音を割って、シグネを貫き抱えたまま先生が立ち上がった。

「大人しいな」

脱衣所でもふもふとした身体を拭かれる分身たちは、先生の言うように大人しいものだ。タオルで包まれてもされるがままになっている。

「ポツくんたちも、先生のことが好きなんだよ」

「そうか、悪い気はしないが……饕餮がこんな可愛らしいものだとは思わなかった」

ちよつと変わった仮面をつけた赤子ほどの大きさのヌイグルミのような白い生き物。それがシグネの分身たちだ。神仏に仕える者が顔を引きつらせ怯えるだろうその禍々しいオーラさえ無視すれば、愛玩用ペットのような愛嬌が感じられるだろう。

そして、悪魔でありシグネの主でもある先生や、『饕餮』の神器所有者であるシグネにとっては、分身たちのオーラは好ましいものを感じ

られていた。

「わ、すつこい」

ガウンに着替えたシグネと先生がダイニングルームに向かうと、そこには大きなテーブルを占領する料理の数々が並べられていた。

「足りなくなることも考えて、追加できるようにしている。遠慮なく食べる」

そうして、先生は四匹の内、ポンくんとフウくんとを膝にのせて椅子に座り、手ずから料理を食べさせ始める。

シグネはテーブルの向かいと先生の隣とで視線を迷わせた後、先生の隣に座ることにした。少女の膝の上には、ポツくんとポオくんが乗っている。

「おいしい?」

「ポッ!」「ポウ!」

シグネはこれまでペットを飼ったことがなかった。神器が生み出した分身なのでペットとは違うのだろうけれど、なんだかこの騒がしさが楽しい。

でも、二匹の分身に食べさせ、自分もご飯を食べていると、まだ家族や親類がいた頃を思い出してしまう。それにつられて、シグネに近い者に降りかかったという災いの根源についても――。

最初に亡くなったのは、シグネの叔父だったらしい。シグネがまだ物心つく前に、独り暮らしのアパートの室内で亡くなっていたと聞いた。

死因は不明。ベッドの上に寝転がって、情報端末で小説サイトを読んでいる途中で急死したような状態だったという。

叔父はネットの無料小説を読むのが好きな人だったと父から聞いた覚えがある。叔父が作りかけで遺して逝ったという、恐竜型ロボットのプラモデルを作りながら父がそう言っていたことをシグネはおぼろげに覚えていた。

その叔父の死が災禍の始まりだったのだろう。そこからシグネの親類縁者が次々と亡くなっていった。櫛の歯が欠けるように、一人、また一人と親類たちが世を去って行ったのだ。

高校生になる頃には、シグネは家に独りで暮らしていた。両親も祖父母ももういなくなっていた。引き取ってくれるような親類もいなくなっていて、でも一人で暮らせないほどには幼くなかったからだ。

両親が遺した遺産頼りの生活だ。祖父母が遺した田舎の広大な山林などもあるらしいが、その詳しい場所も、相続の手続きをどうしたのかもほとんど覚えていない。分かるのは、売れる当てもないのに税金だけはきっちりかかってくることだけ。

饕餮——四凶にあって、もつとも凶事を司るとされるもの。その災いは近くに在って力なき者に容赦なく降り注ぐ。

群れからはぐれた者、弱い者、守ってくれる者の居ない者、饕餮はそういった者から喰い殺していく。野生の肉食獣の多くがそうであるように。

シグネが自身に宿った、今や深く結びついている妖の性質に思いを巡らせ、親族の不幸の原因を考えていると、その頭がぐいと先生へと引き寄せられた。男の腕が少女の肩に乗せられ、彼の腕に包まれる。「シグネ、饕餮を、自分を憎むなよ。恨みや憎しみは『聖書の神』に向けておけ。神器を創ったのは『聖書の神』で、饕餮もお前もヤツの行いによってそうなったただけだ。それに、お前はもう自分勝手な悪魔になったのだからな」

「うん……」

先生の腕から伝わってくる温もりとオーラには、シグネへの気遣いが満ちているように思えた。

「えへへ……先生ってちよつとお父さんみたい」

見た目も言葉遣いも、考え方も、先生とシグネの父親とは全く違う。でも、どこか少し、似ているところがあるような気がしていた。

「ん？ なら、パパって呼んでもいいぞ」

「え？ うーん、それはちよつと……先生は先生だから」

「そうか……」

シグネのその返事に、先生は何故か少し残念そうな様子だった。パパと呼ばれてみたかったのだろうか。

「フウー！ フウー！」

なんとなくしんみりしてしまったところで、四匹の分身の末っ子フウくんが先生のガウンの袖を引つ張った。本体に構っていないで、自分にもつと食べさせてくれと主張している。大変いやしい。

お腹がいつぱいになると眠くなる。シグネには今日一日でいろいろとあり過ぎた。うつらうつらとしながら歯を磨かれ、ベッドに寝かされたシグネは先生に腕枕されながらすぐに眠りについてしまったのだった。

夜が過ぎ、朝になった。目が覚めるとすぐにシグネのお腹がぐーつと鳴った。

それを聞かれてしまったかと赤面しながらシグネは隣を見たが、誰もいない。プクツと頬を膨らませながら、少女は男が寝ていたのだろう場所に手を置いてみる。まだ暖かかった。

(夢じゃなかった。私、先生と……)

昨夜のことを思い出し、少女の顔が赤く染まる。なんてことをしてしまったんだろうとは思うけれど、後悔する気持ちはまったくなかった。ただ、嬉しさだけがこみ上げてくる。

住み慣れた以前の家の自室とも、最近暮らしている駒王学園の寮の部屋とも違う豪華な内装のホテルの部屋。大きなベッドから降りたシグネは、室内への日光を完全に遮っている遮光カーテンに歩み寄り、それを少し寄せてみた。

「うわっ……」

身体が重く、だるくなる。悪魔は日の光が苦手だとは聞いていた。慣れれば平気になるらしいが、悪魔になり立てのシグネにはキツかったようだ。

慌ててカーテンを閉めたシグネは、自分が悪魔になったことを実感し、ふうと息を吐いた。息を吐いた分、空気を吸い込むと食べ物匂いがしてくる。

ふんふんと形の良い鼻が動いた。ふらふらと匂いのもとへ向かうと、ダイニングルームから声が聞こえて来た。

「こら、がつつくな、もっと行儀よく喰うんだ」

それは、四匹の分身たちに群がられている先生の声だった。

むー、となつてしまう。シグネをベッドに放つておいて分身たちの相手をしている先生の姿にちよつとだけ不機嫌になり、でも楽しそうにポツくんたちの面倒を見てくれていた姿にグツと来てしまう。少女の心模様は複雑だ。

「あーん」

とりあえず、シグネは甘えてみることにした。椅子に座る先生の近くに行つてかがみ込み、口を開けてみる。

「ん？ ほら」

「ぱくっ」

自分でやっておいてかなり恥ずかしかつたけれど、先生がなんでもないことのようにしてくれたのでそのまま食べてしまうシグネ。もぐもぐと口を動かす彼女の口内は、朝からがつつりステータキ味。

「ほいひい」

饕餮は血なまぐさい物を好むそうで、血も滴るレアな焼き加減が実に美味しい。デレデレになつてしまった少女によく効くメインのスパイスは色ボケである。

今はこんな有様だが、七滝詩求子は本当はそれなりに行儀作法の出来る子だ。小さい頃には日本舞踊だつてやっついて、着物の着付けも得意だつたりする。今は少しばかり浮かれているだけなのだ。

「あ、先生もたべる？」

見れば、四匹の相手に手一杯の様子で、先生は自分の口に何も運んでいないよう。

そんな先生に向かつて、シグネは料理を突き刺したフォークをちよつと持ち上げて見せた。

「そうだな。もちおうかな」

僅かな笑みを見せてくれた先生の口に、シグネは「あーん」と言いながら料理を運び始める。もちろん、自分も食べるのだけけれど。

少女的には、いつかやってみたかったことの一つを達成し満足していた。人三倍の食事もペロリと平らげ、お腹も腹八分目だ。

本日は休日。朝食は片付けられ、日曜日の午前中ののんびりタイムだ。ただし、シグネの分身たちは朝食だけでは満足していなかった。

食べる。食べる。食べる食べる食べる。ひたすら食べ続ける。この子たちは、常に何かを口にしていないとダメらしい。

「シグネ、ひとりで面倒みられそうか？」

四匹の分身たちは、いつまでも先生やシグネの手によって運ばれるお菓子を貪り続けている。寝ている間は大丈夫なようだが、起きている間は常時食事タイム。

「無理かな……」

神器によって顕現している存在なので、引っ込めることが出来ないかと試してみた。けれど、一度実体を得た分身たちは常人には認識されないように気配を薄めることは出来ても、消すことは出来ないようだった。

この分身たちを抱えて学校に通うなんて、とても出来そうにない。授業中だってポツくんたちの食欲はお構いなしなのだろうから。

「だろうな、とすると……。少し待っている、冥界に行ってくる」「え？」

悪魔は本来この人間の住む地球上ではなく、地獄とも呼ばれる次元を隔てて存在する異世界・冥界の住人だ。

気軽にそこへ行ってくるという先生は、フウくんを抱えて足元に魔方阵が展開した。

「転移。まあ、テレポートのようなものだ。シグネもすぐに出来るようになる。こいつらがシグネからどれくらい離れても平気なのか試してみよう」

「あ、ちよつ……。行っちゃった」

それからしばらく、シグネがテレビを見ながらせつせと残された三匹にご飯を与えていると、先生がようやく帰って来た。

ただ、その手にはフウくんがない。

「界を隔てても平気なようだな。母上に預けて来たんだが、こつちに呼び戻せるか？」

「母上って、先生のお母さん？」

「それ以外に俺が母上と呼ぶヒトはいないな。シグネの分身を見せたら取られてしまった。意外と可愛いものが好きだったらしい」

先生によると、フウくんは先生の母親にも懐いたらしい。それで、そのまま「でしたら私が預かります」と取り上げられてしまったのだとか。先生でもお母さんには弱いようだ。

(先生のお母さんって、40代か50代くらいかな?)

そのくらいの年齢のヒトがぬいぐるみのようなフウくんを抱っこして嬉しがっている姿を想像し、シグネは笑みを浮かべた。

まだ、悪魔の外見年齢に慣れていないが故の想像である。

「先生のお母さんだからかな?」

「まあ、俺の魔力の半分は母上から受け継いだものだからな。物は試しと預けて来たんだが、こっちに呼び出せそうか?」

独立具現型神器から生まれる分身と、その神器の所有者は心で会話が出来る。伝心と呼ばれるらしいそれで、シグネはフウくんに呼びかけてみた。

うんうんと感覚を研ぎ澄ますこと数分、『饕餮』使いとしての才能に恵まれたシグネはそれだけでフウくと繋がる感覚をすぐに掴んだ。

「あー、いけそう」

「フウー!」

呼ばれて飛び出たフウくんを先生が抱き上げる。それが羨ましいのか、残りの三匹が先生の足元に集まっていく。

「お、呼べたな。使い魔の召喚と似たようなものか。そうになると、三匹は向こうに預けてしまってもいいな」

「この子たち、先生の家に残らせてもらえるの?」

「ああ、専用の食事係を用意しよう。シグネのためにも一匹は近くにいた方が良さだろうから、残った一匹は理事長邸に預けて学校に行くといい。それでいいか?」

「うん」

シグネとしては、高校と大学は出ておきたかった。悪魔になった以上、人間の学校に通う必要はもうないのかもしれないけれど、そこまでは卒業しておきたい気持ちもあったのだ。

だから、先生からの提案を断る理由は特になかった。というよりも、そうしてもらわないとシグネ個人の時間がなくなってしまう。起

きている時間すべてが、ずーっとポツくんたちにご飯を食べさせ続けるだけになってしまいそうだ。

「あつ、でも食費」

「お前は俺の眷属だぞ。言っただろう、面倒はみると」

「あつ……うん。私、先生のものなんだよね」

「そうだ、お前はもう俺のものだ。夏休みに入ったら、冥界に連れて行ってやる。家族にも紹介したいからな」

そう言っただけで先生に頭を撫でられ、シグネはふにやりと幸せそうに頬を染めた。

もうすぐやってくるシグネの高校二年生の夏休みは、どうやら異世界旅行になりそうだ。

「さて、シグネはまず神器の扱いや『戦車』の駒の特性よりも前に、転移と人払いの術を覚えないとマズいな」

少し落ち着いたところで先生がそう切り出した。ちなみに、ポツくんたちは今もむしゃむしゃとし続けている。会話しながらも先生とシグネの手は食事を分身たちの口に運び続けている状態だ。

「はい、先生。転移の術はさっきので、人払いはどういふものですか？

なんとなく意味は分かりますけど」

「そうだな。想像はついていそうだが、普通の人間から認識されなくなったり、その術を施した範囲に普通の人間が立ち入って来なくするための術だ」

シグネは高校生である。そして、先生は学園の理事長。毎朝ポツくんを預けに理事長邸に足を運ぶのはいかにも怪しい。放課後は白音という口実があるが、朝はそれもないからだ。

神器に慣れることを考えると学校が終わった後は近くに分身を置いていた方が良さらしい。ということ、シグネは朝の登校前に普通の人間にバレないよう理事長邸にお邪魔する必要があるのだ。

「転移用の魔方阵を寮の部屋に用意してもいいが、シグネの部屋にそれを設置するとオカルトマニアの部屋のようになってしまうだろうからな」

転移用の魔方阵のおおよその大きさを聞いたシグネ。それが女子

寮の部屋に設置された光景を想像すると、実行はためらわれる。

「専用の部屋を作っておいてもいいが、覚えた方が早いだろう。さいわい、シグネは魔力も多そうだからな。魔力でなく妖力を使ってもいいが、そつちを俺が教えるのは難しそうだ」

シグネに宿り一体化している「饕餮」は紀元前から中国神話に名を残し邪神と扱われることもあるほどの大妖怪。その影響なのか、シグネには悪魔としての魔力だけではなく、妖怪の力である妖力もあるらしい。

「で、だ。シグネは魔力がどんなものか分かるか？」

「えーっと、魔力が多ければイメージ次第で何でもできる」

このあたりは昨夜に軽く説明は受けていた。

「そうだな。各貴族家の特性になっているような特殊なものでなければ、火も氷も雷も出せるし、空間転移や精神への干渉も可能だ」

魔力はイメージ、想像力。心の力。

「神器も所有者の精神力が力の源で、あれ？　ちよつと似てるかも」

神器についても昨夜に簡単な説明はされていた。改めて考えると、魔力と神器はどちらも心の力のようなのだ。

「ああ、俺の考えだが魔力と『聖書の神』の力、奇跡は元々は同じものなのだろう。だから似ているのは当たり前だ。多くの魔法使いが使う近代魔法も、神の奇跡や悪魔の魔力を再現したものだしな。どちらも似たような魔法術式で再現されている。魔法使いの魔法力というもの、あれはあれで心の力だ。だから魔法使い出身の転生悪魔は魔力の扱いも上手いことが多い……まあ、今は魔法は関係なかったな」

昨日までのシグネにとつて、悪魔も妖怪も、魔力も妖力もフィクションの中のものだった。神器なんて存在すら知らなかったものだ。魔法だつてそう……。

「ファンタジー過ぎてすぐには分からないよ」

「そう、ファンタジーだ。悪魔も神も、魔法も儂い人の夢から生まれて来たものだ。先に人間の歴史があり、信仰があり、そこから異形の者、超常の存在が発生した。……というのが俺の考えなんだが、純粋な悪魔や異形の存在はどうにもこれを聞いてくれないし、理解できないら

しい。存在の根本に関わるからなのかもしれないが、まだ悪魔になり立ててで人間の精神を残しているシグネになら話せるかと思つてな」
「どうやら、先生は自分の話をシグネに聞いて欲しいようだった。」

「先生は、その純粋な悪魔や異形じゃないの？」

「ああ、俺には前世の記憶があるんだ。悪魔に生まれ変わる前はこの国でただの人間をやっていた。それこそ昨日までのシグネと変わらないような認識の一般人のな。生まれ変わったと言つても『悪魔の駒』で転生悪魔になったわけではなく、気が付いたら悪魔の両親から生まれていた感じだ」

生まれ変わり。輪廻転生。またもや出てきたファンタジー要素に、シグネの頭はいっぱいいっぱいになってしまふ。

ただ、先生の前世というのは気になった。

「先生の前世ってどんなヒトだったんですか？」

「ん？ あー、いや特にどうってことのない男だったぞ。ただの会社勤めのモテないオタクだ」

「モテないオタク……？」

今の姿からは先生からはちよつと想像がつかないと思つたシグネだったが――。

（あ、でも自分の考えを語りたいてところは、そんな感じがあるような？ さつき少しだけ早口だった気もするわ。どんなヒトだったんだろう）

「それでだ。魔力の話に戻すぞ」

その言葉で先生の前世の姿への想像から、引き戻されたシグネは背筋をピツと伸ばした。授業中にボーつとしてしまつているところを当てられた生徒のように。

「さつきも言ったが、これは俺の見解であつて公式なものではないことは先に断つておく」

「はいー」

「良い返事だ、シグネくん」

何故か亜空間――これも悪魔の魔力によるものらしい。便利そう――から眼鏡を取り出した先生はそれを装着していくツと持ち上げ

て見せる。

「なんで眼鏡」

「それっぽいだろ？俺たち悪魔を始め、天使や墮天使連中は『聖書の神話』に属する者だ」

それはもうシグネも聞いていたところだ。神と天使と教会の勢力と、墮天使の勢力、それから先生の悪魔勢力。この三つの勢力が『聖書の神話』に属する三大勢力で、長い間三つ巴の戦いを続けているらしい。

「実はな、この天使、墮天使、悪魔は最初の最初、初期の『聖書の神話』には居なかったんだ」

「え……？」

先生は紙を取り出すと、そこにペンで大きな円を描いた。

さらにその下に文字を書いていく。

『我は光をつくり闇を創造し、平和をつくり災いを創造す。われは主にしてこれらの事をなすものなり』

その言葉を見るだけでも、シグネの中に不快感が湧き上がってくる。

悪魔となったものは、聖書に記された言葉に苦痛を覚えると教わったので、これも聖書の言葉なのだろう。

「頭が痛くなるだろうから読み上げるなよ。これは古い聖書の言葉だ。読んだ通り、初期の『聖書の神』はこの世の悪も災いも全て単一の存在として司っていた。善きことも悪しきこともすべて唯一にして絶対、全知全能の神の御業として信仰されていた。ああ、ただ他の神話勢力もあるから、本当に全知全能だったわけではないぞ。単にそう信じられ崇められていたというだけだ」

善も悪も、平和も災いも、全てが神のものであるならば、そこに悪魔や墮天使の居場所はない。

はじまりの頃の『聖書の神話』において、神は本当に絶対者だったのだ。

「だがな、こんな神では都合が悪いだろう」

先生は突然手を振り上げると、シグネの頭をポコリと叩いた。

いきなりのことにビツクリしたシグネは、むーっと唸ってしまふ。

「先生、なんで」

抗議するシグネを、先生は咎めるような目つきで見つめてくる。

「シグネは、どうして叩かれたか分からないのか？」

そうされると、シグネは自分が悪いような気分になってきてしまった。

「え、私、なにか悪いことしちやったかな」

シグネの返答に、先生は満足の笑みを見せ、今度は優しく撫でてくれる。

「どうして撫でられたと思う？」

「えっと……可愛かったから、とか？」

叩かれたけれど本当に軽くだったから、痛くはなかった。むしろちよつと気持ち良かったシグネである。

先生に撫でられるのは、ほやんとして気持ちが良い。

「そうだな。悪いことをしたから罰を受ける。可愛く思われたから誉められる。昔の『聖書の神』の信者たちは段々とそう考えるようになっていった。この世のどんなことも神のものだったはずが、ここで神は人間の行動によって対応を変える存在に貶められ、小さくなった。他ならぬ信者の手によってな」

そう言うと、先生は最初に紙に書いた大きな円の中に、一回り小さな円を描いた。

「いろいろな約束事が出来た。これをしてはならない、あれをしてはならない、この日にはこれをしなければならぬ。そうしなければ神から罰を受けるぞ、と。こうして『聖書の神』は最初の好き勝手に出来た存在ではなくなり、人間との契約を守らなければならぬ神になった。……だがな、そうしたところでこの世から悪も災いもなくなりはない。人間たちが勝手に作った神との約束事をきちんと守っていたとしても、天災は起きるし、異なる神の信者との戦争は起こる。それを乗り越えられれば、戦争に勝てたなら問題はないが、飢えればひもじいし、戦に負ければ悲惨な目にも遭う。すると、そのままでは神と信者との約束は守られなかったことになるわけだ。契約通りに

しているのにな。そこで人間たちは考えた。どうして神はこんなことをするのだろうか、と」

先生は、さらに一回り小さな円を描いた。そして、その三番目の小さな円と二番目の中ぐらいの円の間を線で引いて切り取ったバームクーヘンのような形を作り、三分の一ほどの部分を黒く塗りつぶした。

「ここでようやく天使と墮天使の登場だ。人間たちは全知全能の神が約束を破るはずがないから、神の使いである天使がいることにした。さらにその天使の中から裏切り者が出て悪さをしていることにしたんだ。その裏切り者が、今の墮天使勢力の総督アザゼルなどの幹部連中だ」

「図の黒い部分が墮天使だ」と先生は紙の上をペン先で指し示す。

「でも、天使も墮天使も、神さ……神が創ったんだよね。全知全能の」
「そう、神話の上では、神は未来の全てを見通し、あらゆることを可能とする力を持っている。だから、この墮天使が裏切ることも予め知っていたことになるし、本当は裏切らないように創れたはずなのに、あえて墮天するように創ったことになってしまう。人間たちは神を小さくしてまで墮天使なんぞを聖書に記したが、それでもやはり神が悪と災いの根源になってしまいう構造は変わらない」

「墮天使は、神を善なる者とするための答えにはならなかった。

「そこで、こうなった。我ら悪魔の登場だ」

先生は、最初の一番大きな円と二番目の中ぐらいの円の間を赤く塗りつぶしていく。

「神が創ったものではない存在。神が小さくなったことにより空いた空間に何処からともなく湧き出して来た悪の化身。それが悪魔だ。悪の根源が外から来たことで、人間は神を完全に善なる存在と考えられるようになる。ま、これによって神は信者たちの信仰の中ですら全知でも全能でもなくなっただがな。『聖書の神』を信じる人間にとっては神が悪を内包していることの方が大問題だったらしい」

「でも、神がこの世の全てを創ったって聞いたような……?」

シグネの家は仏壇もないなんちゃって仏教徒だったのだけれど、聖

書の神話は有名なので少しぐらいは聞いたことがあった。

「ああ、それは教会の連中が未だに『聖書の神』のことを全知だの全能だのと言いつ張っているだけだ。事実として神によらないとされる超常存在、我ら悪魔が生まれている以上、人間たちは心の底ではもうそれを信じてはいないってことになる。なにせ、異形や超常の存在は人間の心から生まれて来るのだからな。墮天使が悪魔になったなんて主張する者もいるようだが、はつきりと別種族だからなあ。ま、その辺りは今はどうでもいい。シグネに言いたいのはここの事だ」

先生は図の赤く塗りつぶした部分を指さした。

「この悪魔の部分、最初はなんだったか覚えているか？」

「小さくなる前の神」

「そう、悪や災い闇をも自在にしていると信じられていた頃には神の奇跡が及んでいた領域だ。ここは今となっては悪魔のものになっている。だから、まあ、悪魔の魔力というものは神話の中で神が縮小していったことによって出来た空白部分の力なのだろうと俺は考えているわけだ。だから、全能ではないが万能だ。魔力量とイメージの範囲で大体のことは出来る。実際、次元の狭間に天地を創造出来るしな」

先生の言うところによると、現在の悪魔は遊びのためだけに異空間に都合の良い小世界を創造し、使い捨てにしたりしているらしい。

もう、シグネには訳が分からない話になってきていた。

「この魔力って、世界を創れるんだ」

『悪魔の駒』で転生し自分に宿った悪魔の力。そのオーラを手のひらからゆらゆらと立ち上らせ、シグネは思わずうーんと唸ってしまう。

「転移くらい簡単に出来そうだろうか？」

そう告げる先生はとてもスツキリした顔つきだった。本当に誰かに語りたかっただけなのかもしれない。

朝のホームルーム前。シグネは教室の自分の席で本を読んでいた。それは今までに読んだことのないジャンルの本で、先生から「夏休みの旅行用のテキストだ。予習と思って目を通しておいでくれ」と渡されたものだ。

「おはよー。何？ 朝から読書？ うわ……難しそう……。シグネってそういうの読むタイプだったっけ？」

朝の挨拶もそこそこに、クラスメイトから珍しがられてしまう。それはそうだろう、転校して来てからこれまでのシグネとは大いにキャラが違う。

シグネが手にしている本のタイトルは『神曲』。14世紀にイタリヤの詩人ダンテによって書かれ、その後の世界文学に大きな影響を与えた『聖書の神話』の叙事詩だ。

先生の言うところによると「聖書の神話に属する者がこれから受けた影響は相当なものらしい。冥界Ⅱ地獄の最下層がコキユートスと呼ばれているのも、この本の影響ではないかと言っていた。

神や仏、悪魔に妖怪。超常にして異形の存在や、それらが暮らす異世界は儂い人の夢から創られる。だから、人間が夢や幻として思い描くものの影響を受けてしまう。それが、先生の考えだ。

「んー、なんか世界文学の最高峰って言われているらしいわ。難しいけど」

「ふーん……」

あの初めての夜が明けた後の日曜日は、朝から夕方までホテルで魔力の練習や、えっちなことをして過ごした。

そうして帰りに「読んでおけ」と本を渡されてから読み始めたシグネだが、まだ『地獄篇』『煉獄篇』『天国篇』の三部作の内、第一部の『地獄篇』の途中までしか読み進められていない。ちょうど、ダンテとウエルギリウスが巨人のアンタイオスと会話している辺りまで。

なかなか読み進められないには理由がある、他のことが気になつてしまつてなかなか本に集中できないから。

(先生のせいで……私、えっちな子になつちやつたわ)

今日は夏休み目前の水曜日。日曜の夜も、月曜日も、昨日の火曜日も、シグネは先生に会えていない。冥界で用事があるらしく、この世にはいないから。

冥界にいる先生の姿を思い浮かべると、胸が切なくなり、心が寂しくなり、下腹部がじつとりと熱を孕んでしまう。数日前までは知らなかったことなのに、今では先生のいない生活なんて考えられなくなつてしまった。一人でベッドに寝ていると、シグネは布団の中でもぞもぞとしてしまうのだ。

「はあ〜」

会いたい気持ちが湧き上がり、ため息がこぼれた。

それを耳ざとく聞き取ったクラスメイトは、ニヤニヤとした笑みをシグネへと向けてくる。

「あんたさ、男が出来たでしょ?」

「へっ!？」

先生とは秘密の関係だ。駒王学園高等部の女子生徒と理事長が男女の関係だなんて、知られてはならないことだ。

あたふたと手を動かして誤魔化そうとするシグネだったが、その紅潮した顔を隠せていない。

「あー、やっぱねー。なるほど、なるほど、そういうことか。それで急にそんな本を読みだしたと……男の影響か? ん〜?」

「ちつ、ちがつ……」

違わない。先週末までは興味の欠片もなかった本を読んでいるのは、先生に勧められたからだ。

「うわ、図星っぽいね、これは……で、どんなヒトなのさ?」

この頃になると、教室内に密かなざわめきが広がっていた。クラスみんなは、シグネの恋バナに興味津々で聞き耳を立てている。女子生徒ばかりの教室ではあるが、いずれこの話は数少ない男子学生にまでも広まつて、彼らに失意のため息を吐かせることだろう。

「ど、どんなつてその……」

「この間まで理事長せんせー、理事長せんせーって言つてた七滝詩求子さんを射止めたのはどんな男なのか、気になるな〜」

どんな男かと言えば、その理事長先生本人だ。シグネのハートを射止めたどころか、子宮に精液を射込んで、下僕にまでした悪魔である。追及の手はしつこそうだが、本当のことは口に出来ない。どうしたものかとシグネは考えた。

「えつと、そう！　理事長先生と同じくらいカッコいいヒトだよ」

咄嗟に出てきた言葉だが、嘘は言っていない。

教室内のざわめきが大きくなった。駒王学園の理事長は途轍もない美形で、女子生徒の憧れの的なのだからこれは仕方がないことだ。

「はあ!?　理事長クラスって……シグネはそんな男どこで掴まえたのよ。教えなさい」

「教えろって言われても……焼肉屋さん？」

「どこの!?!」

シグネの口から出た店の名前は、クラスメイトたちの脳にはつきりと刻まれたのだった。

「あつ、来てる」

そんなことがあつた朝も教師の登場でお開きとなり、午前中の授業を終えたシグネが情報端末を確認すると、先生からの連絡が届いていた。

「さーて、シグネ。朝の話を詳しく……ああつ、逃げた！」

連絡の内容を素早く確認したシグネは、教室の扉を勢いよく開けると廊下を走り出す。

目指すは食堂ではなく、高等部校舎の屋上。そこで先生が待っているらしい。

神器から来る大妖怪饕餮のパワーと、内に宿した『戦車』の駒のパワー。二つのパワーが合わさったシグネの脚力は、現代戦車の正面装甲を軽くぶち抜くほど。その脚力を以て廊下を破壊しない程度に走れば、屋上なんてあつという間だ。追跡しようとしたクラスメイトが

教室から出たときには、すでに廊下の端の階段を駆け上がっている。「せんせッー」

鍵のかかかっていなかった屋上へと続く扉を勢いよく開いたシグネは、目にした紅髪の人影に勢いよく飛びつく。

「こら、力の加減をしろ」

ようやくこの声を聞いた。すぐ近くにある彼の口からこぼれる吐息を嗅いだけで、シグネの心に湧き上がってくるものがある。

それは、日曜日を受けた授業の内容だ。魔力や悪魔の成り立ちについてではなく、いやらしい方の授業内容を思い出してしまう。

あのあと、シグネは先生にベッドに連れていかれ、秘所を貫かれたまま抜かすの三連射を受け止めた。その一回ごとに得も言われぬ境地に押し上げられ、魂の奥底から湧き上がってくる法悦に満たされ啼かされた。

その後はみっちり口淫奉仕の授業。先生の両脚の間にしゃがみこんでひたすらフェラチオに専念し指導を受けた。長い時間をかけて舐めまわし、口中の粘膜を使つて摩擦する。そうしたあとにザーメンを胃袋へと注ぎ込まれる喜びを教え込まれ、その味に酔った。

舌を先端に這わせて先走りの液を味わうだけで、頭がぼうつとなつて下半身が熱を帯びる。先生に言われるがままに舌と口を動かし、上手くできたら頭を撫でて褒めてもらえるのが嬉しくて仕方がなかった。

どれぐらいの『時間』をそうして過ごしたのだろう、5回は精液を飲み下した覚えがある。

白濁としたものが顔にもついてしまったので、歯を磨いてもらった後にまた一緒にお風呂に入った。敏感な部分にシャワーを当てられながら、胸をもみほぐされ、お互いの全身を泡だらけにして洗い合う。シグネの身体のどこにも、先生に触れられていない場所などない。シグネも先生の身体に触れてまわり、胸や牝の割れ目など身体全体を使って男を洗う方法を覚えさせられた。

洗いつこが終わると、浴室の壁に手をつかされ、立ったまま後ろから挿入してもらった。前夜から従順に先生に従うようになっていた

シグネの媚肉は、肉棒が中に入ってくるとすぐに歓迎し、吸い付くようにして奥へ奥へと誘っていく。一番奥の本当は入ってはいけな場所までペニスを導くと、下僕のシグネは自ら腰を振りたくる。

先生はそんなシグネを満足げに犯し尽くした。緩急を混ぜた突き込みは女を牝に変えるに十分なもので、シグネの膣内がどんどんと開発されていく。先生専用の牝穴になっていったのだ。

激しいピストンに牝啼きし、ゆったりとしたグラインドで蕩けさせられる。その悦楽はシグネが先生の女になったことを、一切後悔させないほどのものだった。

(はああ♡ 悪魔になって、地獄に堕ちて良かったわ)

先生のためだったらなんだってできる。なんでもする。いいえ、してあげたい。『悪魔の駒』を飲み込む前に思ったことを、何度も何度も繰り返して再認識していく。

朝から始まったまぐわいは、おそろしく長く感じられた。夕方までが何日にも感じられたほどだ。途中で休憩と食事を挟みながら、体位を幾度も変えながらセックスし続けた。

先生は女を抱きかかえるのを好んだ。正面から向き合い、ついばむようなキスを繰り返し、深く舌を絡め合い唾液を啜り合いながら繋がり続ける。シグネはバックも嫌いではなかったが、やはり口を吸い合う形の交わりのもたらす悦楽は一段違うものがあった。上の口と下の口、双方が満たされると、魂が甘く溶けていってしまうような気がするのだ。

(帰りたくないよ。私も一緒に冥界に連れて行って欲しい。先生と離れたくないわ)

何度も何度も絶頂を極めた後の別れ際、夕暮れ時にはそう言って縋り付きたくなっていた。

でも、先生に迷惑をかけたくなって、邪魔だと思われなくなって、シグネは口を閉じて俯いてしまう。

そんなシグネのあごを持ち上げ、先生は「また連絡する」と言って優しいキスを落としてくれた。

それから二日、連絡はなかった。日曜日の夜はまだ良かった。長い

長い行為の名残があったから。

でも、月曜日、火曜日と過ぎるごとに渴きと疼きが強まって、先生に抱いて欲しくて仕方がなくなってしまう。

「せんせ、せんせえ♡」

そうして飢え切ったところでようやく会えたのだ。シグネが人目も気にせず抱き着いてしまうのも無理のないこと。

そんなシグネの状況を分かっていたのか、先生は密かに魔力を漲らせて少女の強力な抱き着きを受け止め抱き返す。

強く抱き合ったことで、シグネのおっぱいが先生の身体に押し付けられて、ぐにゆりとひしゃげる。

駒王学園の女子制服は、冬服も夏服も胸を強調するようなデザインをしている。首回りは黒いリボンタイでしつかりと締めるし、肩から二の腕までの半袖は可愛らしく膨らんでいるけれど、胸サイズに合わせてアンダーバストと腰をきっちりと締めるデザインが、女子生徒のスタイルを露骨に浮き上がらせてしまう。

このデザインは、先生の兄である魔王サーゼクス・ルシファーさまが考案したものらしい。やっぱり、先生のお兄さんだけあってエッチなヒトなんだ、とそのことを聞いたシグネはすぐに納得したものだ。た。

「まずは食事からだぞ。午後も授業はあるんだからな」

先生の用意してくれていた昼食と一緒に食べる。このときのシグネの動きは神速だった。昼休みは短く、先生の隣に座って口を動かすシグネは、彼の手のせいで発情してしまっていたから。

バストを強調する制服の上から、男の指がシグネの綺麗な形の胸に食い込み形を変えていく。ぐにりぐにりと乳房を下から持ち上げるようにされたかと思えば、今度は付け根から絞るようにされる。制服とブラ越しに尖った先を爪で弾かれると、もうたまらない。

「あうん♡ せんせい、そんなのされたら……食べられないよ」

季節は夏。天気は雲一つない晴れ。校舎の屋上はうだるような暑さになっているはずだが、周囲の空気は涼しかった。魔力によって温度を操作されているのだ。

そうだというのに、シグネの身体にはじつとりと汗が浮かび始めていた。その原因は、これからのことに期待した肢体が、内側からの情欲の火に焙られてるからに他ならない。

それを煽るように、先生の指はシグネの胸を責め続ける。そうされると、すぐに挿れて欲しくなってしまう。

でも、出された食事は食べきれないといけな。先生が用意してくれたものだから。そのせいで、シグネの昼食はおそろしい早食いになっっていた。

「立つてその壁に手を付け」

シグネが食べ終わるのを待って、先生はいきり勃った股間のモノを露わにする。

言われたとおりにシグネがすると、駒王学園女子制服の短いスカートが捲られ、情交への期待で濡れた下着が男の眼前にさらされた。

「ほら、欲しいんだろう？」

下着越しに肉棒を割れ目に擦りつけられる。そうすると、日曜日に何日分もの調教を受けたシグネは尻を揺すってねだるしなくなってしまう。

「ああ、先生、せんせえ♡ せんせいのオチンチン、挿れて欲しいわ」
いやらしく見えるように、先生がその気になってくれるように、シグネは淫らに尻を揺らし、濡れたパンツを肉棒に擦りつける。

ずぶり、と股布をズラして肉棒が膣内に入り込んできた。硬く太く逞しいものが、シグネの中を押し広げ征服していく。広がった肉傘がくちゆりくちゆりと牝褰を搔き分け奥へと沈んでいく。

(あれ？ 何か違うような……あ、いっん♡)

挿入されていく肉棒にシグネは違和感を覚えたが、それはすぐに訪れた衝撃にかき消されてしまう。

子宮の入口に到達した肉の杭の先が、背徳の扉をドスリとこじ開けたのだ。

「ああッ、ハアアッん♡♡」

その衝撃でシグネは軽くイッてしまった。快感のるつぼに一気に押し上げられ、背が反り返る。足ががくがくと震えて崩れ落ちてしま

いそう。

「声を抑えろ。ここは学校の屋上だぞ」

官能に溶け落ちそうな足腰を必死に踏ん張らせながら、シグネは片手を口に当てた。

「ふうーん♡ ふっー♡ ひうくくん♡」

学校で、声を聞かれてしまいそうな場所で、それを必死に抑えながらのセックス。その興奮にホテルのときとは違ったものを覚えながらも、シグネの心には違和感が広がっていく。

腰から広がる快感が弱い。どこか遠い。

「せんせ、あ、んっ♡ なに？ これ、ヘンだよお……♡」

ぐちゆりぐちゆりと突き込まれるたびに快感の波が押し寄せてくるが、それがどこかおかしい。

「気付いたか」

先生は一旦腰を引き、シグネの眼に己の肉棒を見せつける。

「あ、ゴム……」

そのペニスにはコンドームが装着されていた。違和感の正体はこれだったのだ。ほんのわずかな薄皮一枚。それが官能の濃度を著しく低下させていた。

最初の中から生だけを味わって来たシグネには、ゴム付きの肉棒から得られる快樂の味わいはどこか素っ気なく思えてしまう。

もっつくつつきたいのだ、シグネの膣肉は。白い精液を、どっぷりと子宮に撃ち込んで欲しいのだ。子宮内射精の悦楽だけを徹底的に教え込まれた牝にとって、それを邪魔する薄いゴムの存在はひどく辛い。

「生の方が良かったか？」

「あっ、うん♡ とって、それとって、せんせえ、おねがい、生でしてえ♡」

シグネの哀願に気を良くしながらも、先生はゴムを付けたまま再び彼女の中へと肉棒を沈めていった。

「はあん、なんでえ……♡」

ずっちゅっ、ずっちゅっ注送を繰り返しながら、先生はシグネの

耳に唇を寄せた。耳たぶを何度か甘噛みしてから、男はさも気遣っているかのような声音で囁く。

「午後の授業中どうするつもりだ。垂らしてしまつたら大変だろう？」

シグネは生中出しを受けた後の授業風景を想像し、ぶるりと震えた。先生の精液は多い。他の男を知らないシグネだが、何度も大量のザーメンを注ぎ込まれたのだ。なんとなくは分かる。

普通の女の子なら、午後の間ずっと割れ目から垂らしてしまうことを気にしながら過ごすのは厳しそうだ。

でも……シグネは『饕餮』だ。

「だ、だいじょうぶだから……中にだしてえ♡」

「大丈夫じゃないだろう。だから、ねだつてもダメだ。放課後まで待っている」

「そんあ、あああん♡」

先生は中出しをおねだりするシグネに応えず、ただただ貫き続ける。

「俺の臭いをプンプンと漂わせるシグネというのも魅力的だが、そんな姿を他の男に見せてやることはない。お前は俺だけの女なのだから」

「はあ、ああっ♡ せんせ、せんせえ♡ ゴムやだよ……♡」

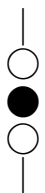
「それに、こういったゆるりとしたセックスもいいものだ」

壁に片手をつき、大声を上げないように口を抑えながら、シグネは顔だけを後ろに向けて先生の顔を見ていた。

「んうん……♡ いじわる♡」

「ふふっ、放課後までお預けだ」

意地の悪そうな笑みを浮かべた先生に、シグネは昼休みいっぱい焦らされ続けてしまうのだった。



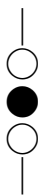
そして、学舎の屋上で盛り合う二人の姿を、遙か天空の彼方から見

下ろす『眼』があつた……。そのことに二人は気付いていない。

『赤龍帝の籠手』に宿る天龍でさえも、さすがに宇宙に浮かぶ墮天使製人工衛星には気付くことが出来なかつたのだ。

「あー、くっそ羨ましいいなあオイ。昼休みに学校の屋上で制服女子高生とパコパコたあ、良いご身分だぜ『紫紅の龍帝』ダイナスト・ドラゴンさまはよお。まったく、こっちはお前のせいで大変だつっーのに」

墮天使総督ピーピング・アザゼルは、こうして四凶最強『饕餮』の所有者と目されていた七滝詩求子が悪魔側に墮ちたことを確認した。



「うう……」

放課後、クラスメイトの追求をなんとか躲したシグネは、旧校舎へと歩いていった。

午後の授業中はとても辛いものだった。精液を欲しがる身体にされてしまったというのに、昼休みの間は先生が伊ってもゴムを取り換えるだけ。

シグネも何度か伊ってしまったけれど、射精を受け止めない絶頂では何度も味わつたあの恍惚にはどうしても届いてくれない。

下腹部からジワジワとこみ上げてくる欲求をこらえながらの数時間は、自分がどれだけ先生のものになっているのかを思い知らされた時間でもあつた。

もう、先生に射精^だしてもらわないと満足できなくなつてしまつてい

る。

「こんにちは……」

旧校舎の扉は軋みを上げることなく開いた。廊下にも埃はなく、定期的に清掃はされているようだ。

人気のない校舎の中は、夏ということもあつてまだ明るい。これが夜中だったらオバケが出そうな感じに……とそこまで考えてシグネは首を振つた。

今やシグネ自身がオバケの仲間だ。むしろ大妖怪『饕餮』で悪魔なのだから、オバケの中でも相当強い方だろう。

「えっと、基本の造りは今の校舎と同じなのよね」

先生から放課後に来るような言われた部屋は、新校舎でのシグネのクラスと同じ2年生の教室だ。

その教室の前まで来ると室内からくぐもった声と粘性の水音のようなものが聞こえてくる。

「先生……？」

なんだろうと思いつながらシグネは扉を開けた。するとそこには生徒用の椅子に座る先生とその前に跪き、彼の股間に頭を埋める女子生徒の姿があった。

その女子生徒服装は高等部のものではない。長い黒髪の後ろ姿にはどこか覚えがある。

扉の開く音とシグネの声にビクリと肩を震わせて振り向いた女子生徒は、シグネと同じ寮に住む後輩の真羅椿姫だった。

「あ、七滝先輩……」

振り向いた椿姫の口周りは、彼女自身の唾液とカウパー液でぬらぬらとぬめり光っていた。

シグネの登場に驚きつつも、首筋を紅く火照らせ陶然とした表情を見せる椿姫には年下とは思えない艶がある。それは女の、牝の顔だ。

「シグネも来たか。椿姫が待ちきれないようだったから先に始めていたぞ」

「椿姫ちゃんまで……どうして」

まさか三つ年下の椿姫まで先生の『女』だったなんて、シグネは思ってもいなかった。黒歌とはすでに会っていたが、あちらは大人の女性で、理事長夫人という立場だ。椿姫とは違う。

戸惑うシグネの前で先生は椿姫の頭を撫でると、彼女に立つよう促した。

「椿姫も悪魔だ。同じ学園の同じ寮に住む悪魔同士、紹介しておいた方がいいと思ってな」

先生に撫でられとろんとした顔を見せた椿姫は立ち上がると、淫ら

な雫を太腿に伝わらせながら状況に似合わない丁寧なお辞儀をして見せる。

「ソーナ・シトリーさまの『女王』真羅椿姫です。七滝先輩、悪魔としてもよろしく願います」

椿姫の背に、バサリと悪魔の翼が広がる。

「あつ、えつと……リヴラクス・グレモリーさまの『戦車』七滝詩求子です。こちらこそよろしく願います」

つられて翼を広げつつ頭を下げたシグネは、いやらしい笑みを浮かべている先生に眼を向けた。

「なんだ、シグネ。怒っているのか？」

「それは、その……だって、椿姫ちゃんはまだ……その、悪魔だけど」
まだ高等部でもない子に、と思っただけれど椿姫は悪魔だ。だって、人間の価値観で考える方がおかしいのかもしれない。

シグネの頭にはそんな考えも浮かび上がってくる。それに、真羅椿姫はもう十分にいやらしい身体つきをしていた。

艶やかな長い黒髪で、背丈もあつて、男のヒトの好きそうなすごく大きな胸をしている。普段寮で見かけるときは、眼鏡の奥でキリツとしている瞳にはさつきまで先生のモノを口にしていたせいなのか、どろりとした淫欲の光が宿っていて、とても色っぽい。

「それは困ったな。俺の大事な『戦車』が椿姫とはスルなど言っているようだが……俺としてはシグネの意見を優先しないといけないのかな？」

「あ、あ……そん、な……」

先生の言葉一つで、椿姫の表情がぐしゃりと歪んだ。

切羽詰まった様子で、椿姫はシグネの方へと迫ってくる。

「お願い、お願いします先輩。私も理事長のお傍に居させてください」
縫り付かれたシグネは、困った顔を先生へと向けた。

「先生……」

「ふふふ。シグネの思った通りに言ってやればいい。椿姫の話聞いてからな」

神器のせいだ、小さい頃から親戚一同に蔑まれ、隔離され、悪魔に

頼って転生し、そうして初めて出会った父親以外の親しい男性が椿姫にとつての先生だった。

そうして抱かれてしまえば、離れられなくなる。それはシグネにもよく分かることだった。

この後輩に向かつて、もう先生とこういうことをしない方が良いだなんて、とても言えやしない。

「そんなの……ダメって言えないよ」

これは男にとつてシグネの中にある倫理観を崩していくための行いだ。日本で人間として育った以上、どうしても受けてしまっている『聖書の神話』の影響。それを突き崩していくための一歩である。わざわざこんなことをせずとも良さそうだとは考えていたが、やれることはやっておこうという腹積もりだ。

「話はまとまったようだな。なら、そろそろコイツを頼めるか？」

先生はそう言って、ズボンと下着をおろして股間を剥き出し揺すって見せた。

昼休みと違って、太く硬く精力を漲らせて上向く一物にはあの邪魔なゴムがない。

シグネの喉がゴクリとなった。椿姫はと見れば、彼女もまた居ても立ってもいられないといった様子だ。

二人の女子生徒の視線が交錯する。

「せ、先輩からどうぞ……」

譲られたシグネは遠慮しなかった。首元のリボンタイとしゅるりと外し、ブラウスのボタンを外していく。

はだけられた制服から転げ出た美乳は、清楚な下着に包まれていても男の欲棒を滾らせるに十分だ。

そうしてから、シグネは先生の前に足をひろげてしゃがみこむ。胸の谷間に見下ろす先生の視線を感じたシグネは、頬が火照ってくるの止められない。

両足を大きく広げたことで、短いスカートからのぞく白い太ももの露出も大きくなり、湿って股布の色が変わってしまったパンツが露わになった。

「椿姫もこっちへ来い」

呼ばれた椿姫はいそいそと先生とシグネの横に立った。

(ああ……椿姫ちゃんに見られちゃってるわ)

胸の谷間にじわりと汗が浮かんでくる。自分でも発情しているのがはつきりと分かる。

股間が淫らに疼く。先生のを埋め込んで欲しいと蠢き始めている。

(私、見られて興奮しちゃってる)

シグネは両手を先生の股間に伸ばし、肉棒の幹を握り、そつと上下にしごき始めた。この太さ、この硬さ、それからこのグツと広がったエラの部分がシグネを気持ちよくしてくれるのだ。

左右の手で肉棒を優しく撫でさすり、ときおり陰囊へも愛撫を繰り返す。

「ああっ、はああっ……」

シグネが肉棒の先に口を付けると、椿姫が呻いた。横目で後輩の様子をうかがうと、もう我慢できないといった様子で両脚をすり合わせている。

「んっちゅ……先生、椿姫ちゃんにも……」

「お前が良ければ構わないぞ」

全部言わなくても先生には伝わったようだ。

シグネは自分の位置を横にズラすと、椿姫に声をかけた。

「椿姫ちゃんも、こっちに」

「ああ、先輩」

椿姫もまたシグネと同じようにして、ブラに包まれた谷間とパンツを見せる形で先生の前に傳いた。

彼女の秘部もまた、じつとりと濡れそぼっている。シグネが来るまでの間、しゃぶっていたのだから当然だろう。この男根には、女をそっくささせる魔力がある。

「んちゅっ、ちゅう……せんせえ♥」

「理事長……んうっ、れるお♥」

二人の女子生徒による手淫・口淫。唾液と先走りに濡れた肉槍を、

少女たちの柔らかな手が這いまわってくすぐり、玉袋を優しく撫で擦る。

熱い肉棒のカリ首を、二枚の舌が競い合うように嘗めまわしていく。

「ああ、いいぞ二人とも」

うっとりとした顔で己のペニスに奉仕する二人の美少女転生悪魔。その様子を男は愉悅の紫瞳で見下ろす。

椿姫の方が仕込まれた期間が長い分上手いのだが、まだどこか拙さの残るシグネの舌遣いもまた男を悦ばせる。

ピチャピチャと淫らな水音を二重奏で響かせながら、互いのいやらしいを有様を見せ合う少女たちは、そのことでより一層の興奮を覚えているようだ。

「せんぱい」

「つばきちゃ」

二人の美少女の舌は肉棒を這いまわる内に触れ合い、唇が重なる瞬間もあった。

そんな二人の間にある肉棒の先端、尿道口からプクリと丸い水玉が湧き出てくる。四つの瞳が交錯した。二人は暗黙の了解で、カウパー液の雫を交互に舐めとっていく。

最初は遠慮し合っているところもあった二人だが、少しずつその動きは大胆なものになっていった。

先生の悦ぶ声が聞こえると、嬉しくなってしまうほどどんどんと加速していってしまう。

駒王学園の先輩と後輩が、奪い合うように男根への奉仕を過熱させていく。

(あんう……♥ 熱いよお♥)

舌で感じる先生の肉棒の熱さ、この状況と、鳴りやまない淫らな水音がシグネの肢体を昂らせ熱くする。

「んうう、ふう……♥」

「くつちゅ、んれろお♥」

椿姫の艶っぽい鼻息が、シグネの顔にかかる。シグネの息も彼女に

嗅がれてしまっているだろう。

夢中になって奉仕し続けていると、肉棒がググつと膨らみ始めた。
(ああっ、来るわ♥)

射精の前兆に心を焦がして、シグネの舌遣いは一層激しくなった。
椿姫も同じなのだろう。

陰囊をもみほぐす指に、幹を擦る手に、ザーメンの駆け上がる振動
が伝わる。

「おおッ、出すぞー！」

勢いよく噴きあがった白濁が降り注ぎ、シグネと椿姫の顔を髪を、
制服を白濁で染め上げていく。

「んあああ♥ すごいわ」

「はああ、りじちよ……んんっう♡♡」

濃厚なオスの匂いが、シグネの頭を沸騰させた。

眼鏡の前が見えなくなるほどにぶっかけられた椿姫は、それだけで
軽い絶頂を覚えてしまったようだ。

恍惚の表情で見上げる二人を、先生は満足そうに見下ろすと亜空間
から黒い布を取り出した。

「さて、これをつけて犯してやろう」

布は目隠しだった。シグネと椿姫は黒い布で目を覆われ、四つん這
い姿勢を取らされた。

濡れそぼったパンツはどちらも膝まで下げられ、露わになったメス
の割れ目の媚肉を先生の指が弄り回す。

「いいっ、んっ♥ せん、せ、あっう♥」

「はあん、そこ、ばっかいい♡ んっう、ダメえ♡」

男の手が美少女たちの秘裂をほじくり返す。

「ふたりともトロトロになっっているな。もうすっかり欲しくなってい
るようだ。さて、どちらから挿れてやろう」

先生は意地の悪いことを言いながら、シグネと椿姫をたまらなくさ
せていく。もう、欲しくて欲しくて仕方がない。

「せんせえ♥ いれてえ♥」

「ああっ、ダメです。私に、私にください」

おしやぶりは先輩に譲ろうとした椿姫だが、こちらはそうするつもりは無いようだった。いや、そうするだけの余裕がない。

挿入されたくて、されたくて、たまらなくなってしまうているのだ。「命令だ。これから何があっても、歯を立てたり暴れたりするなよ」

先生はそう言うと、シグネの尻肉をぐつと掴んだ。

(あんっ♥ いれてもらえるわ♥)

悦ぶシグネの想いに反して、先生の肉棒は椿姫の膣内へと埋め込まれた。

「んっあああっ……りじちよ、ああっ、ひいん♥♥ ああっ、オマンコ、オマンコいいですっ♥ おちんちん気持ちいいのお♥」

ずつちゅずつちゅと隣から聞こえてくる音に、シグネは切なくなつて腰を揺すつて先生にアピールする。

「せんせ、私も、私にもお♥ ……あっ♥」

すると、シグネの腰を両側から掴む手があった。ずつしりと硬い肉棒の感触が尻の割れ目の上に置かれる。

「いいっ……ん♥ すごい、ああっ、りじちよ……はああイイのお♥」

先生の肉棒はシグネの尻の上に置かれているはずなのに、何故か椿姫の口からはセックスに蕩けた女の啼き声が聞こえてくるままだ。

(さっきの命令……ウソ、やだ)

椿姫と繋がっているのが先生なら、今、シグネの後ろにいるのは誰なのだ。

おそろしい想像にシグネはいいやと首を振った。

「やだ、やだよ先生。わた、わたし、先生の、先生だけのものなのに、先生しかやだあ!!」

「命令だ。抵抗するな」

シグネの抗議に冷たい返事が戻って来た。そして——ズブリと牝の割れ目が肉の槍に貫かれていく。

「あああっ、やだあああ! うああああん、やだあああ! ああっ……いうっ……!」

シグネの膣内に入り込んできた侵略者は、先生のものと同色ない硬さ太さ長さでもって膣内を蹂躪していった。

首を振り回し、髪を振り乱すシグネの悲鳴を意に介さず、男のモノが子宮の入口に打ち付けられる。

「イツう……んっ♥ やだ、なんで、私、嫌なのに……」

それだけで軽くイってしまった。先生にされたときと同じだ。それから、覚え込まされたようにノックを繰り返されると入口が開いて行ってしまう。

(なんで、私、わた、し、なんで感じちやってるの……)

シグネの中に埋め込まれた男根には、オーラがあった。先生のそれと寸分たがわぬ魔力の味わい。

「あつ、先生？ せんせえ♥」

それでシグネは思った、椿姫が違う男で、自分の中にいるのは先生なのだ。

返事の無いままピストン運動が開始された。ぐちゆりぐちゆりとシグネの中を抉り穿つ巧みな腰運びは、先生のものであった。

「はあん、イイ。気持ちいい♥ せんせっ、せんせ、ああつ♥」

目隠しの内側を滲ませていたシグネの涙が、嬉し涙に変わる。

少女の表情が蕩け、口がだらしく開いて舌がのび、涎が口の端から床へと垂れていく。昼休みにお預けされた、生挿入なのだ。

その気持ち良さにシグネの頭はどろりと蕩けて行った。

「ふふ、シグネ。そのだらしない口も使うんだ。噛むなよ」

「えっ!? うぐうツ……んんうー!!」

先生の肉棒は膣内に入れられているのに、別の肉棒に口を犯されている。

シグネは噛み千切ってやろうとしたが、命令を思い出してそれを止まった。

(先生、なんで……私、先生だけの女じゃなかったの？ やだよ、こんな)

前から口を犯される。後ろから膣を擦り上げられ、子宮の中を按摩される。

腰から広がる官能が、口に含んだものへの嫌悪感を薄れさせ、いつのまにか舌が踊り始めていた。その味わいも、オーラも……。

(あれ？ これ、先生の味……なんで?)

口が、胃が、このペニスは先生のものだと認識している。

「歯が食い込んできたときはひやひやしたぞ。あまり悪戯をするものではないな」

先生の声がして、目隠しが取り去られた。

口に入れられたまま目遣いで見上げると、目の前に居たのは先生だった。

じゃあ後ろは、と振り返ろうとすると後ろからも先生の顔が覗き込んできた。

椿姫もまた、前と後ろから犯されていた。そのどちらも先生と同じ姿で、同じオーラを感じる。

「体位を変えるぞ。よっと」

口の中からペニスが抜かれ、繋がっている先生がシグネの腰を抱えて持ち上げ、背面坐位の姿勢にされる。

「あつ、はっああん♥♥」

自分の体重で刺し貫かれ、シグネの口から甘い鳴き声が漏れた。先生が腰を揺すって子宮内をゴリゴリと削ってくると、シグネはたまらず喘ぎながらそれに応えてしまう。

ブラを取り去られ、生乳を揉みしだかれる。

「はあ、ああっ♥ せんせ、なに、どうなつて。ふううん♥♥」

喘ぎの止まらぬ唇に、もう一人の先生が肉棒を押し付けてくる。シグネは迷うことなく舌を伸ばしてそれを舐めた。

「お前の神器の分身を見て、『饕餮』が増えるのならば俺も出来るんじゃないかと考えて、二日ばかりラティアのところで修行をしてきた」

ラティアというのは、先生の『騎士』の名前だと聞いている。それが今どんな関係があるのか分からないけれど。

「それで、俺自身の数を『倍加』出来るようにしてきたわけだ。お前は下の口を攻められているとき、上が寂しそうだったからな。これで一度にどちらにもぶち込んでやれるってものだ」

先生の肉棒がグイグイとシグネの唇を割り開く。

「ひどい、よ、せんせえ♥ いじわる♥」

「俺は好きな子にはいじわるなんだ、よ」

口内を埋め尽くした肉棒の味に、シグネはうっとり瞳を蕩けさせた。下から突き上げられて子宮で感じ、口の中も先生の味でいっぱい。

幸せ過ぎて、多幸感でおかしくなってしまうそうだった。

「はっふー♥ ふうー♥ んっふー♥ ふううっーんんっ♥♥」

見れば椿姫も同じ状況のようだった。

「ふう♡♡ んうふ♡♡ ふう♡♡ ふううん♡♡」

シグネと椿姫を四人に増えた先生が取り囲み、前から後ろから、マスコと口を好き放題にしている。

「イキそっうだな椿姫。シグネもイカせてやる。上にも下にもたっぷりとくれてやるから飲み干せよ！」

先生たちの動きが早くなっていく、ピストンが加速し、ばちゅばちゅと淫らな水音が旧校舎に流れていく、肉と肉が打ち付け合う卑猥な音もバチンバチンと鳴り響く。

少女たちはそれに応えていやらしく腰を使い、舌と唇、口と膣の粘膜で男のモノを悦ばせようとする。

「いくぞー！」

先生の腰がグイグイと前に出て、肉棒がこれでもかと最奥に押し付けられる。吐き出された精液が子宮と口の中で暴れまわり、美少女たちのビクビクと身体を痙攣させながら弓なりに背を反らした。

「いうう、んいううううう、いううう♥♥♥♥!!」

「ふううッ、ひいうっうぐうん♡♡♡♡!!」

▪ G —

グレモリー家が所有する次元間移動列車には寝台車が設置されている。

俺は今その一室で、青紫髪の上級な女性悪魔を抱いていた。

「はあ……♡ あああ♡」

彼女の見た目の年齢は高校生程度だが、悪魔の見た目の年齢は自由自在なので実年齢はあまり関係ない。

また、生まれながらの上級悪魔は基本的に美形なので、彼女ももちろん美少女である。

そんな彼女は、昨晚大変辛い目に遭っていた。聖剣使いの教会戦士によって眷属諸共皆殺しの憂き目に遭わされてしまいそうだったのだ。

それで大変落ち込んでいたので、見るに見かねた俺は、ここは一つ是非とも慰めてあげなければなるまいと考えて事に及んでいた。

「はあん……♡」

寝台車の一室というと前世の庶民感覚では狭そうなイメージがあるが、そこはお貴族様仕様のグレモリー家所有列車。ベッドだって普通に広い。ヤルことヤルのに困りはしない。

「龍帝さまあ♡」

乱暴なのが好みってわけではなさそうなので、やわらかく、やさしく、やらしくを心掛けて愛撫を続けていたところ、彼女の瞳は既にハートマークが浮かんでいるような状態。

そろそろいただいてもよろしい感じだ。

「挿れるぞ」

「ああっ、挿れてえ♡！」

女にぶち込んでぐっちよぐっちよとし、「イイツ♡」「すごいわ♡」なんて言われるのは男冥利に尽きるというもの。

彼女の御家事情を考えると一期一会になりそうだが、この機会にう

んと堪能しておくでしょうじゃないか。

「はっあん、あっ♡ アアツ♡ んっ、もっど、ああっ♡ もっどシテえ♡！」

どうして俺がイタリアに縄張りを持つ彼女とこうなったのかと言えば、それはシグネとイタリア旅行に来たからだ。

せっかく『神曲』なんぞを読ませて予習もさせたことなので、冥界に連れていく前にちよいと作者の故郷を観光してみるのも悪くない。そんな気持ちで、現地に縄張りを持つこの青紫髪の女性悪魔にコンタクトを取り、ガイドを依頼していたのだ。

で、現地について連絡を取ろうとすると何故か魔方陣通信が繋がらない。どういうことかと事前聞いていた彼女が拠点にしているという学校に向かってみれば、教会形式の結界が張られているではないか。

これはマズイ！ と、即座にバランスブレイクして結界をぶち破つて突入。

見習い教会戦士らしき白髪少年が校門付近で立ち塞がったので、これを問答無用で消滅魔力＋フェニックスの風Ⅱ『滅びの風』で消し飛ばす。

風を斬り裂いたり操ったり出来ず、消滅魔力を相殺するだけの力も持たない弱者にはこれが一番。回避不能・防御不能の広範囲攻撃になるからな。

で、魔力の反応を頼りに彼女の居るだろう地点に向かって、校舎の壁を消滅させながら急行。

間一髪、聖剣使いに殺されそうになっていたこの女性悪魔を救出したって寸法だ。

いや、実に危なかった。あと少し遅れていたら、貴重な美形女性悪魔の命が失われてしまうところだった。

彼女にとっての俺は、まあ、命の恩人的な立場にもなるのでこのぐらゐの役得は許されるだろう。絶対絶命のピンチを救ってメイクラブなんて話、物語でもありふれていることだしな。

しかし、心臓への『譲渡』で全身から血を噴いてくたばったあの聖

剣使いのおっさん。あいつが持っていた剣が何気に『ガラティン』なんて有名な一振りであったことだし、多少は功績も積めたと考えておこう。

なかなか出来そうな面構えの渋いおっさん戦士だったが、所詮は儂く脆い人間。超高血圧にされてはひとたまりもなかったようで、あっさり一撃で決まったしな。異形相手だったらこうはいかなかったところだ。学校の建物内だったので建造物への被害の少なそうな方法を選んだ結果だが、なかなかグロい絵面だったなあれは……。

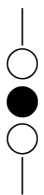
まあ、ぶち抜いた壁は許せよ学校経営者。

しかし、眷属を失って凹みまくりの彼女には災難だっただろうが、ヴァチカンの近隣に縄張りを構えていた時点で危険度MAXだったわけだしな。本人の命が残っただけ幸運だったと思っってもらえない。

俺は日本が縄張りで良かったよ。

「ああっ、もっと、もっと突いてえ♡♡」

さーて、じっくりとつぶり味わわせてもらおうとしようかね。



「イタリアのこと聞かれたらどうしよつか？」

人間界から冥界悪魔領へと入国する際の正式な移動手段の一つである次元移動列車。

その客席の一つで、シグネはポツリと呟いた。つぶやきの相手は、膝の上に乗せた「ポツくん」。独立具現型神器『饗饗』によって生み出された、四体のシグネの分身の中の一体だ。

夏休み前日。終業式の日、休み中の予定をクラスメイトから尋ねられたシグネは、「彼氏とイタリア旅行に行く」と答えていた。

まさか、実は駒王学園理事長リヴラクス・グレモリーの正体は悪魔で、シグネはその眷属になったから冥界に挨拶に行つて来ますなんて言えやしない。

といって、休み中も寮に居るとも言えない。実際には居ないのだから

ら、訪ねて来られたら困ってしまおう。

じゃあ、あの転校前に住んでいた家は——と考えてもみたけれど、やっぱりよろしくなさそうだった。寮生の中にはあの街の近隣から来ている子もいるので、「じゃあ、あつちで会おうよ」なんて言われてしまいかねない。

そこで、前々から聞かれて困っていた「例の彼氏」と出かけるということにしたシグネだった。嘘ではない。先生とお出かけするのは本当の事だから。

「楽しみにしてたのにな……」

それならと先生が冥界に行く前にイタリアを観光して行こうと言ってくれて、そのためにネットで観光ガイドを見たりしてわくわくしながら前夜を過ごしたシグネだったのに、現地に着いてみたらいきなりの修羅場だったのだ。

現地に着いてみれば、ガイドを頼んでいた悪魔さんが教会の戦士に襲われて眷属を全員殺されてしまったという大惨事。『王』であるガイドさん自身も先生が駆けつけるのがあと僅かに遅かったら……という状態だったらしい。

襲撃されたガイドさんはとても落ち込んでいて、先生は慰めてくると言っただけ戻ってこない。観光なんて言い出せる状況ではなくなってしまうた。

それもこれも空気を読まずに襲撃なんて仕掛けてくる教会の連中が悪い。折角、海外旅行デートだったのに！

自己中心的な悪魔になったせいかな、弱者を甚振り強者に媚びる『饕餮』の性か、近頃性格が異形よりに変わりつつあることを自覚しているシグネ。

そんな彼女は教会勢力ではあっても人が二人亡くなったことを気にも留めず、むしろその二人への怒りをプンスコと沸き立たせ、ポツプコーンをぐわしと掴んで口の中に放り込んだ。

もちろん、ポツくんにも食べさせている。

『悪魔の駒』によって転生悪魔となった者、特に元が人間の場合、人型生物を殺害することへの忌避感が低下するのではないかと言われて

いる。

開発者であるアジユカ・ベルゼブブさまから公式に明言されていないが、元々『悪魔の駒』が悪魔の戦力補充のために作られたという経緯を考えればこれは十分にあり得るものだ。

もしくは転生することによって成った悪魔という種族自体が、他者を害することを気にしない種族なのかもしれない。邪で悪いのが悪魔なのだから、当然と言えば当然なのだけけれど。

先生から聞かされたこの仮説を、シグネは素直に信じていた。そして、そのことで後悔もしていなかった。

なぜって、あの日あの夜に「先生のためなら、なんだってする」と決めてしまっていたから。先生から誰かを「殺せ」と言われたら、きっと自分は一切の躊躇をしないのだろうと思っていたし、それでいいとも考えていた。

墮天使。教会とはまた別の敵対勢力。そこに身を寄せたらしいと聞かされた元同級生たちとだって戦える。殺し合える。

「ううん、戦いは圧倒的で一方的じゃないとダメなんだよね。先生そう言ってたよね？」

『ポオー』

殺し合うなんて下の下。圧倒的な武力を背景にして、対話と取引で好条件を勝ち取るのが上策。いざ戦となれば、こちらだけが一方的に攻撃し、相手の反撃は一つたりとも許さない。

出来る限りそうありたいと先生は言っていた。

厳しい世界なのだ。これまでシグネが生きてきた平和な日本はもう存在しない。

『聖書の神』によって災いの神器を植え付けられてしまったシグネの暮らしていける世界は、悪魔に変わっていなくてもそんな殺伐とした世界しかなかったのだから。

ポップコーンを貪り食いながら、シグネが決意を新たにしていると、列車の前の方の扉が開いた。

「退屈させて悪いな」

「先生！ 前の方に居なくて良かったの？ あと、あのヒトは？」

座席から跳ねるようにして立ち上がったシグネを手振りですらせ、先生はその隣に座った。

「前には分身を置いてきた」

悪魔の列車は上級悪魔と下級悪魔、主と眷属などの身分で座る席や車両が異なっている。本当は席が指定されているのだ。

これは、貴族とそれ以外の身分の者を隔離することでトラブルを防ぐといった目的があるらしい。

ただ、今の乗客はシグネと先生、あとは急遽冥界に帰ることになったガイドさんだけ。そしてこの列車グレモリー家所有なので、ある程度は先生が好きにしても構わないとのことだった。

「あと、彼女は落ち着いてきたようだから寝かせている」

「そっか……。いきなり剣を持ったヒトが襲ってくるなんて怖いな……」

とシグネがちよつと不安そうな声で甘えて見せると、先生は肩を抱いてくれた。たぶん、分かってやってきているのだろうけれど、それでも嬉しくなってしまう。

こてんと先生に頭を預けるシグネを見つめる先生の瞳は、ちよつとえつちで、でも優しいものだった。

「イタリア旅行だが……夏休みの終わり頃に予定を空けておくから、宿題は終わらせておけよ」

「え、あ、うん。そんな……小学生じゃないんだから、始業式直前になって慌ててやったりしないよ」

「本当か？ 冥界は初めてで珍しいだろうから、そつちに気を取られて忘れないようにな」

「一応、あつちに行ってる分身を通して冥界も見てるから！」

「そういえばそうだったな。父上や母上、レイヴェルはシグネと直接会っていないが、シグネはもう知ってたな」

シグネは分身との同調を高めることで、分身たちの見ている光景を見ることが出来るようになっていた。短期間でのこの成長は、彼女の好奇心と類まれな才能のなせる技だ。

先生のお父さんとお母さんってどんなヒトだろう、そう思っていた

ら出来てしまったと言うのが真相である。

「なら、冥界の話は地獄門に着いてからでいいか。実際に見ながらの方が良さそうだ。予習もしているようだしな」

先生はそう言っつて、シグネが横に置いていた本を手を取った。ダンテの『神曲』だ。

現在の冥界は、この本に描かれた『地獄』の影響が大きいと、先生は考えているらしい。

実際の冥界はこの本に描かれているようなおどろおどろしいものではなくて、緑の木々もあれば太陽も月もあり、きれいな水の流れる川もあり、ほとんどお城に居る分身たちはまだ見たことがないけれど湖だつてあるらしいのだけれど。

「そうなるよ、出発まではまだ時間があるから……そうだなシグネの話でも聞かせてもらおうかな」

「私の？」

「ああ、シグネの祖父……日本の方のおじいさんは、七滝ななだるの近くに暮らしていたんじゃないか？」

「うん、名字の七滝はあの七つの滝が由来だつて聞いたことがあるわ」

「その七滝には龍というか、大蛇の伝説があるのは知ってるか？」

「あ、聞いたことがあるような……。たしか……」

むかしむかし、天狗の妻が池のほとりで七つの首を持つ大蛇を目にした。妻は家に帰るとそのことを夫の天狗に話し、これを聞いた天狗は池の近くに強い酒を入れた樽を七つ置いた。

天狗が隠れて見ていると、やがて大蛇が姿を現し、この酒を飲んで酔つて寝てしまった。天狗は寝込んだ七頭蛇にそろりと近づき、えいやと剣を振るつて七つの首全てを斬り落とした。

すると大蛇の身体は川となつて流れ出し、斬られた首の切り口は滝となつた。

これが今ある七つの垂水たるみ——七滝ななだるの始まりである。

「あれ、悪魔や天使がいるのだから、この大蛇の話も本当だったりするのかな？」

「さあな。ただ、もしかしたら、もしかすると、七滝のご先祖様はその

七頭の大蛇だったりするのかもしれないぞ?」

「えー……」

シグネの家系は代々大食いだ。異形の存在が実在していたことを知ってしまった今になってみると、先生の話も本当ではないかと思えて来てしまう。自分自身の身に宿った神器のこともあるので尚更だ。

「実は、日本各地に残っている天狗伝説のいくらかは天使や墮天使の目撃例ではないかって話があつてな。その話の天狗も、もしかしたらその類かもしれない。特に鳥のような翼を持った鳥天狗は墮天使だった例が実際に報告されているからな。と、考えるとその七滝伝説の天狗も墮天使だったのかもしれないな」

「じゃあ、墮天使は七滝のご先祖様の仇だったりするのかな?」

「分からんが、もしかしたらそういうこともあつたのかもしれないと思えば、墮天使相手にヤル気も湧いてくるだろう?」

なお地質学的には、七つの滝を形成したのは火山活動によるところが大きいと考えられているらしい。シグネは知らなかったけれど、何故か先生が知っていた。

七滝は、伝説的には池の大蛇の死骸から生まれた滝であり、科学的には火の山の産んだものということになる。

その後もシグネのお祖父ちゃんの家の話をして過ごしたのだけれど、親に連れられて何度かそこに訪れたことのあるシグネよりも、冥界暮らしの悪魔の先生の方が詳しいことが多かった。

「先生って、前世は日本人だったって言ってたけど……実はご近所さんだったりして?」

「さあな。まだ前世の知り合いや血縁者が生きているかもしれないから、誰にも教えないようにしているんだ。今の俺は立場も金もあるんでな。知られてしまうと、よくない輩が寄り付いてしまうかもしれない。まあ……七滝の辺りに詳しくしたのはたまたまだ」

そう言うと、先生はシグネの髪をくしゃくしゃにするほど頭を撫でてくる。これをやったのが先生でなかったら、いくらシグネでもムツとしてしまうところである。

男からは簡単にやっているように見えても、女の子は髪の設定に

かなり気を遣っているのだ。特に最近のシグネはその辺りには気合を入れられていた。

その気合を入れている原因が先生なので、許されているだけなのである。

「はい、先生！」

「なんでしょう、シグネくん」

「予習の本に書いてあったんですが、『聖書の神話』の世界では転生してあるんですか？ 地獄に落ちたらもう終わりで救いはなく未来もない。神に救われる者は最初から決まっています〜みたいな内容だったんですけど」

「ああ、それか。そこのところはよく分かっていないんだが、少なくともジャンヌ・ダルクは転生しているぞ」

「は!?! え、ジャンヌ・ダルクって、あのジャンヌ・ダルク？」

「映画にもなっているし、書籍もたくさん、日本の漫画やアニメにもよく出てくるあのジャンヌ・ダルクだ。今は冥界で悪魔をやっているがな」

「ええー!?!」

「ちなみに知り合いだ。サイン貰ってやろうか？」

「あ、ちよつと欲しいかも……」

話題がシグネの祖父の住んでいた町の話から、実際にあつた転生の話に切り替わった。転生悪魔の転生者ではなく、生まれ変わりの話だ。

先生の話によると、転生する者は歴史に名を残した偉人や、伝説の人物などがほとんどらしい。

「お祖父ちゃんの家で……有名人……。あつ、先生の前世ってもしかして、伊豆の踊子を書いたヒトとか？」

「違う、違う。俺は文豪じゃない」

「でも、文豪が転生するみたいな話があつたような？」

「あつたような気がするな。それで何故か戦っていたような気がする。とにかく、俺の前世は大したこと無い男だったよ」

「じゃあ、先生はどうして転生したの？」

「あー、そのうち話すこともあるかもしれないか。まだハッキリとはしていないんだが、ある魔女からそれっぽいことを聞いていてな。どうも俺は前々世でとんでもないことをやらかしたらしい」

「とんでもないこと？」

「世界史に途轍もない影響を与えたみたいだな。ただ、俺自身はそんな自覚はなかったし、死んだときも、それからかなり長い間も大したことのない男扱いで、凡人が送られる死後の世界……当時のハーデス神の冥府で暮らしていたらしい。前々世をハッキリ覚えていないのは、ハーデス神の下に向かうときに忘却の川の水を飲んだからだろう」

「えっと、レテの川だったかな……たしか、『神曲』に出てきたコキュートスとかもギリシア神話の地下世界に流れる川の名前だったような」

現在「コキュートス」は地獄の最下層の呼び名になっているが、元々はギリシア神話に出てくる川の名前だった。それをアダムとイブを誘惑し、罪に引きこんだ『墮天使の蛇』が封じられている地獄の最下層の名前として用いたのが『神曲』である。

といったようなことまでは、予習として渡された本を読みつつネットで検索して軽く調べるまではしたシグネでも知っていることだ。

「その川だ。そうだな、シグネも俺の眷属だ。場合によっては聖遺物の類とぶつかることがあるかもしれないか……『饕餮』も大概だが、『赤龍帝の籠手』も因果な代物だからな。もしかしたらのときのために教えておくが——おそらくだが、俺には聖槍、聖十字架、聖杯の類を無効化する力がある……のかもしれないと覚えておいてくれ。少なくとも、聖十字架の神滅具『インシナレート・アンセム紫炎祭主による磔台』は大したことがなかった。本当はハーデス神に会って確認した方がいいのだろうが、ハーデス神は聖書の神話に属する者を嫌っていると聞かから、なかなかその機会がない」

そう言っつて、先生はため息を一つついた。

DX15 究極箱入り娘 (Teios Karma
n)

あり得ないことは、あり得ない。起きるはずのないことは、起きない。発生しない事象は、発生しない。

それは当たり前のことだ。

明らかに直撃したはずの攻撃が、距離が届かず空振りしたことになる。重要な作戦の前に歴戦の戦士が命を預ける武器の整備を怠る。

そんなことはあり得ない。

ある人間がコンクリートの壁に体当たりをしたとして、激突せずにそのまま壁をすり抜けてしまうことは——あり得る。

人間を構成する最小単位の構成要素と、コンクリート壁を構成する最小単位の構成要素。これらが互いにぶつかり合うことなくすれ違う可能性は、極わずかだが存在するのだ。

そんなことは普通発生しないが、絶対に起きないわけではない。

もしも、あり得ない選択^{可能性}肢を生み出すことの出来る異能を持つ美少女が、あり得ないと思いつつもあり得ない願いを抱いて、あり得ない可能性を生み出したとする。

もしも、そのタイミングで、^{美少女}お宝に出会うという形で因果に干渉する魔力を膨大に所有し、さらにそれを何百倍にも『倍加』している存在が居たとしたら……。

こういったことも——あり得るのだろう。

東京ドームひとつ分の真っ白の空間。その中心にポツリと建つ^{やしろ}社。空も地面も白。たったひとつの建物以外、色の無い世界。

それが少女のすべてだった。

少女の年齢は十代の半ば、多感な時期だ。そうだというのに、少女は他人と触れ合ったことが無い。話すのは数人の身内だけ、それも一

日の内のほんの少しの時間だけ。

忙しい兄はなかなか顔を出してくれない。従弟の少年は学校に通っているし、家の課す修行もある。

だから、多くの時間を少女はひとりで過ごしていた。

ゲーム、マンガ、小説。アニメ、ドラマ、映画。

独りきりの時間を潰すためのものは多く与えられているけれど、寂しい気持ちは抑えられない。

少女の記憶の中には、現実の世界が存在しない。この何もない場所で、空想の中の物語を追いかけ続けている。

ゲームの主人公は、どうしてこう思ったのだろうか？ 少女にはそれがよく分からなかった。他人を知らないから。世間を知らないから。

マンガの中に良く描かれている学校というものは、実際どういう場所なのだろうか？ 話には聞くけれど、通ったことがないから分からない。

小説で、アニメで、ドラマで、映画で、様々な媒体の中で描かれている恋愛というものは、どんなものなのだろうか？ 何も分からない、知らない。

いつになったら、外に出られるのだろうか？ この真っ白な、何も無い場所から色づいた世界に出て行けるのだろうか。

どうしてこんな場所に閉じ込められているのだろうか？ 兄は何も教えてくれない。

ここは結界で閉ざされ隔離された空間。余計なものが排除された少女を閉じ込めるための檻。

あり得ない選択肢を、存在してはいけな可能性を生み出してしまおう少女に、余計な思考をさせないための場所。

本当ならば、少女を封じるもつと良い方法があったのかもしれない。一番簡単なのは、殺すこと。命を奪ってしまえば忌まわしき力を遠ざけることが出来る。あるいは術で意思を消してしまってもいい。一切の情報を与えず、何も無い空間に放置して精神を壊してしまうという手段。冷凍しておくのもいいかもしれない。

この空間で、不便で、不自由で、退屈で、つまらなくて、寂しく、孤

独であつても、それでも少女が生きていられるのは、ある程度の娯樂を与えられてるのは、少女の兄の想いであり愛だった。

だけど、少女にはそれが分からない。比較する対象を知らないから。何も教えてもらえないから。

他者を知つてしまえば、理由を聞いてしまえば、少女の力がどのような事象を引き起こすか分からないから。

ネットも繋がらない、テレビの電波は届かない、話せる相手は少しだけ。

手元にあるヒマつぶしは、ゲーム、マンガ、小説、アニメ、ドラマ、映画などのひとりで楽しめるものばかり。

生まれてこの方そんな環境で、ずっと過ごして来た少女はオタクだった。オタクであることを強いられていた。

少女は圧倒的な非リア充だ。そうでしかいられない。そうだというのに、最もよく話す相手である従弟は三つ年下で性別も違う。そして圧倒的にリア充なオーラを放っていた。

正直、話が合わないところが多い。コミュニケーション能力を磨く機会など一切存在しない少女に対して、従弟の少年はその反対。外の世界の話を聞けば、羨ましい話ばかりが出てくる。

そして、少女には無駄な知識だけはあつた。何故って一日のほとんどをひとりで楽しめる娯樂に浸って過ごしているから。

そんな少女が、話し相手を求めて何が悪いだろう？
誰か、他のヒトとも会つてみたいと思つてしまうのはおかしいだろうか？

趣味の話の出来る相手が欲しくなるのは当然ではないだろうか？
ディープな話があったいのだ。語り合いたいのだ。

同性の子がいいだろうか？ きつといい。きつと楽しい。

でも、男の子とも会つてみたい。話してみたい。出来れば同年代、もしくはちよつと年上。ついでに少女に許された趣味・娯樂の話をお話したら素晴らしい。

出来ればカッコイイと良い。アニメの声優さんみたいな、良い声のヒトがいい。

様々な媒体で、いろいろな物語で、いつも目にする度に憧れてしま
う叶わぬ想い。叶うはずのない願い。

こんな誰も来ない場所で、ずっと過ごしてはあり得ない可能
性。

少女は——出会いが欲しかった。

そして、その願いが、あり得ない選択肢を無理矢理生み出し、夢見
る少女のもとに『最悪』の可能性を呼び寄せてしまう。

「黄葉^{もみじ}ちゃん、これ頼まれてたヤツ」

ある日、従弟が雑誌を持ってやって来た。顔を横に向けながら、ぐ
いと少女に紙袋を突き出す少年の名は百鬼^{なぎりりゅうた}竜太。

黄葉とは少女の名である。名字は竜太と同じ百鬼。

「何か頼んでたっけ？」

「ゲームの雑誌が読みたいって言ってたでしょ？」

「ああ、そういえば」

こんなことは、あり得ない。

少女の目に触れる物は、普段は事前に調べられている。エツチな
ゲームの雑誌なんて、少女がゲーム好きだとしても手元に来ることは
無い。少なくともあと数年は確実に来ない。

だけど少女は気になっていたのだ。元はエツチなゲームだったけ
れど人気があつたので全年齢版に修正されて発売されるゲームとい
うのは結構ある。

少女はその全年齢版ゲームをかなりやり込んでいた。そして、別の
雑誌でそのゲームの続編が発売されるという情報を見てしまったの
だ。

気になる。当たり前だ。でも成年向けだ。でも、続きは気になる。
だから少女は、もしかしたらの可能性にかけて従弟に頼んでいた。
そして従弟は、まずあり得ないことなのだけれど、少女のその頼みを
聞いて内緒で買って持って来てくれたのだ。

「うわあくえつちだ」

お礼も言わず、少女はさつそく雑誌を読み始めた。そのとき、エロ

ゲ雑誌を包んでいた紙袋はポイと脇に放り捨てられてしまう。少女も、従弟の少年も紙袋の中身には興味があつても、その入れ物にはまったく興味を抱いてはいなかったのだ。

「恥ずかしかったんだからな」

従兄の竜太少年は小学校高学年。とつくにエッチなものへの興味を抱き始めているお年頃。同時に羞恥心もガンガンにあつた。こんな成年向けの雑誌を小学生の竜太が書店で買ったのは……あり得なくもない話だ。店員さん次第である。

「なに？ 竜太も読みたいの？」
「帰る」

従姉からかうような視線を向けられた竜太少年は、カツと顔を赤らめると足早に去つて行つた。お年頃の童貞なのだから、仕方がない。

従姉のお姉さんと一緒にエッチな雑誌を読むなんてイベントは、いくらリア充オーラを纏う竜太少年であつてもまだ耐えられないのだ。

「はあ……」

従弟が去つた後も、少女は雑誌に夢中だった。少女は十代も半ば、こういったことに興味が湧いてくる時期だ。

そうだというのに、彼女の真面目な兄は「18歳まではダメだ」とこういった物を少女から遠ざけていたので、のめり込んでしまったのも仕方がない。

お年頃なのだ。身体はもう出来ているのだ。雑誌を見ていると、下腹部がムラムラムズムズとして来てしまう。

「ふあ……」

気が付けば深夜。雑誌をねちつりと読み終えた少女は、熱っぽい吐息を漏らした。

コレは兄に見つかつてはならない代物だ。隠さなければ。

そう考え、とりあえず雑誌がここに持ち込まれた際に包装に使われていた書店の紙袋を探した。隠すにしても抜き身でというのは不安だったのだ。少女の兄は鋭いのだから、うっかり見られてしまう可能性もなくはない。

なお、少女が考える隠し場所候補は、彼女の下着を仕舞っているタ

ンスの引き出しの中だった。兄に見られる可能性は限りなく低い。まずあり得ない。少女の兄は、妹の下着を見聞するような変態ではないのだ。

ただし、少女の知らないところで、少女の兄はあり得ないことを考えていた。

古から日本を守って来た退魔の名門、百鬼家。五大宗家の筆頭である百鬼家、その当主として『黄龍』の名を受け継いだ者としてはあり得ない選択を少女の兄は選ぼうとしていた。

「あれ……？ なにこれ？」

そんな兄の行動など知らない少女は、エツチな本を隠そうと紙袋を広げ——その中に入っていた紙を見つけた。

書店で本を買った際に、紙袋に広告などが入れられていることはまああることだが、少女はそんなことは知らなかった。買い物の経験が無いので。

でも、その広告がどこかおかしいことだけは分かった。

『あなたの願い叶えます！』

そう書かれたいかにも妖しい魔方陣の描かれた紙切れが一枚。どういうわけか他のチラシの中に紛れ込んでいたのだ。

それは悪魔のチラシだった。悪魔が「お客さん」を増やすために配っているチラシだ。それがどうして従弟が書店でもらった袋の中に入っていたのか？

たまたま駒王町に立ち寄った人がいた。その人がたまたまチラシを受け取り、たまたま竜太少年がエツチな本を購入した書店まで移動し、そこでたまたまチラシのことを思い出して取り出し、たまたま手から落として、「まあ、いいか」と捨て置き、たまたまそのチラシが他の客の動きによって舞い上がり、たまたま書店の広告チラシの中に紛れ込み、たまたま竜太少年の本を入れる袋に入れられ、少女の手元に届いた。

そんな偶然だって、あり得なくはない。

少女が身に宿す神器は、あり得ない選択肢を無理矢理生み出す力を持っている。だから、あり得ないことなんてほとんどない。

「あなたの願いを叶えます……?」

少女はオタクである。オタクであることを強いられてきた。

近頃のオタクである少女にとって、悪魔とはそれほど怖いイメージがない存在だ。ゲームで、マンガで、アニメで、二次元の世界の悪魔たちは様々な様相を見せてくる。真に邪悪なこともあれば、親しみやすいことだってあるのが近頃の悪魔のイメージ。

百鬼家の生まれであることを考えれば、異形の存在とその危険性について教育されていてもおかしくないが、その身に宿す神器のこともあり、少女はあまりその手の情報を与えられていなかった。

悪魔のチラシに書かれた文言を読めば、なるほど悪魔らしく願いを叶えるには対価が必要だと書かれてはいる。だけど、こんなチラシなんて形で勧誘してくる悪魔が恐ろしく思えるだろうか、少なくとも少女はなんとも思わなかった。

そもそも本物かどうかも怪しいものだ。というより十中八九、本当に悪魔がやって来ることなんてあり得ない。

ただ、少女は世の中には不思議なことがあることだけは知っていた。本当の意味で世の中なんて知らない、経験したことなんてないけれど。

なにぶん、真つ白結界空間の中で暮らしているのだ、自分が普通でないことぐらいは分かる。

「えーっと……」

だから、ものは試しとやってみた。悪魔の召喚をしてみた。エロゲ雑誌を読みふけた余韻を身体に残したまま――。

少女の暮らすこの白い空間は、五大宗家筆頭百鬼家が秘伝の結界術を十も重ねて厳重に構築した『勾陳結界』こうちんと呼ばれる隔離結界のなかにある。

そんな結界の中で悪魔のチラシを用いたところで、召喚のメッセー
ジが悪魔に届くことなんてあり得ない。

そして、百鬼家などという悪魔にとっても危険極まりない場所からの召喚に応じる悪魔なんて居るはずもない。居るとしたら、それはよほどの馬鹿か、百鬼家の戦力をモノともしない途轍もない力の持ち主

ただだろう。

さらに言えば、仮に「とんでもないところから、エツチな雰囲気になってる美少女からの寂しいよ〜ってお願いが来た。これは興味深い」などといった反応をする強大な悪魔が居たとして、『勾陳結界』を通り抜けることなんて不可能だ。力尽くで通ったとしても、結界を展開した術者に知られずになんてことは、あり得ない。

普通は――。

「俺を呼んだのは、お前か？」

だが、悪魔はやって来た。あり得ないことに、するりと『勾陳結界』を透り過ぎてやって来た。

「やば……なにこの美形……」

少女の召喚に応じてやって来た悪魔は、美形だった。物凄い美形だった。

ついでに、アニメで二枚目悪役系が得意な声優さんみたいな声をしてた。少女は声だけでも萌えられる訓練をしていたので、たまったものではない。

お布団の中で、良い声を聞きながら「ふえ〜」と頭を蕩けさせることだつてよくしたものだ。することがなくて暇なので、毎日がつまらないので。

「違うのか？ どうなんだ？」

「ふあっ！」

頭の中がボワンとなって、返事の出来ない少女に悪魔は顔を寄せてきた。近い、近い、近い。

顔が耳が熱い、汗が吹き出しそうになる。兄や従弟相手では起こしたことのない現象だ。

はつきり言つて、少女は男性どころか他人に対する免疫が一切ない。

「そう、そう、私が、呼んだの！」

なんとかかんとか返事をする、悪魔は距離をそのままにジツと見つめながら問いかけてきた。

「それで、願いはなんだ？」

「あの、その……ホントに、来るって、思って、なくて……だから、えつと……」

従弟が相手なら割と上から目線で話せる少女だが、初対面の美形イケボ悪魔相手に言葉が上手く出てくるはずもなく――。

慌てたのか少女は周囲を手で探り、たまたま掴んだものを悪魔に見せた。とくに意味があつての行動ではない。何かを考えていたわけではない。たんにパニックになっていただけ。

「これ……が？」

「ふあつ、えつと、だから、その……」

ナニを悪魔に見せたのか気付いた少女はさらに頭を混乱させた。だって、それはエロゲ雑誌だったのだから。

「なるほど、触手プレイがお望みか……。たしかに悪魔が必要な願いだな」

その雑誌の裏表紙には、触手系エロゲの広告が載っていた。ぐつちよんぐつちよんのヤツだ。人間相手では叶えられそうにない絵面である。

「ちがッ！　ちがくて……」

「じゃあ、どんなプレイがいいんだ？」

「プレイ！　プレイじゃなくてッ！」

少女をからかいながら、悪魔はさりげなく、それでいて大胆に少女の身体に腕を回していた。

「冗談だ。召喚を受けたときに願いの内容はおおよそ伝わってきている。……寂しかったんだろう？」

「うん……」

慣れた手つきで、優しく甘やかすように髪や頬、首筋を撫でられ、少女はコクリと頷いてしまう。

「退屈で、楽しいことが無くて、つまらない。そんなところか？」

「うん……」

素直にうなづく少女の様子を満足そうに眺めると、悪魔はさらりと寝室の場所を聞き出した。そして、少女を抱え上げると流れるようにそちらへと足を運ぶ。

お姫様抱っこ初体験の少女は、これまで画面か紙面で見たことしかなかった現象が自分に発生していることに嬉し恥ずかし混乱し、そのまま運ばれて行ってしまった。

「なら、俺の悪魔としての仕事は、お前を慰めることだな」

「慰めてくれるの……？」

「ああ、きつと気に入る」

初回代金は、処女である。

嫌がる女を力でねじ伏せ、強引にするのは興奮する。

抵抗しているところを無理矢理にイタしてしまうときというのは、嗜虐的というかなんとというか、こう甚振ってヤルといった気分になるものだ。

で、この今俺の腕の中で顔真つ赤にしながら、ポーつと見上げてくる美少女はどうなのかというところ……全然抵抗しないのだ。もう簡単にするつとイケてしまうだろうと分かってしまう。

あまりにもチョロい。チョロすぎて逆に心配になってくるくらいだ。

こうなると、なんだか優しくしてあげたくなってしまふのが俺という男。もう「グヘヘ」と黴ったり出来なくなってしまった。困るね。「名前をまだ聞いてなかったが、教えてくれないか？」

いともたやすく寝室まで運び込み、嫌がられることもなく布団in。一人用のお布団にふたりで寝そべり、抱きしめながら尋ねる。

「もみじ……百鬼^{なきり}もみじ」

横寝で正面から向かい合うようにして抱きしめているので、程よい大きさの彼女の胸が俺の身体に当たってひしやげ、そこから激しい心音が伝わってくる。

そのまま落ち着かせるように彼女の背や髪を、首筋や頬をそつと撫でながら質問を繰り返していく。

百鬼黄葉。黄色い葉っぱと書いてモミジと読む。霊獣『黄龍』を宿す百鬼家は、名前に『黄』の文字を入れることが多いらしい。霊獣『朱雀』を伝承する姫島家が『朱』の字を使うことが多いのと同じだ。

で、その黄葉ちゃんは物心ついたところからこの『勾陳結界』の中に一人で暮らしているらしい。真つ白な空間の中に神社風の建物がポツンとひとつあるだけの寂しい場所だ。

画面の中でしか空の色を見たことが無い、他人との会話もしたこと

がない。百鬼家に属する数人の人間としか会話したことが無い。

そんな生活をずーっと続けてきたようだ。箱入りのお嬢様で世間知らずどころの話ではない。世間から完全に隔離されて育ってきたのが、この黄葉ちゃんである。

「つまり、友達が欲しいと?」

「うん」

可哀そうな美少女には、やらしくしてあげたくなるものだ。

だから、俺の欲棒の滾りに従って、ずっぽり慰めてあげるとしよう。そして、ずぶずぶに溺れさせてやりたい。

「なら、友達料が必要だ。悪魔の俺がここに来ているのは仕事だからな」

「私、何も持ってない」

黄葉には何も無い。買い物が必要がないから金はない。私物と言っても生活に必要な物と娯楽用品だけ。百鬼家は名家で金もあるが、この結界の内側には何も無いのだ。

「だったら、もう身体で払ってもらうしかないな。意味は分かるか?」
グツと顔を近づけ唇が触れ合う寸前にし、彼女の背を撫でていた手を尻へと滑らせる。

「うん……いいよ」

すると、期待を露わにした表情で彼女はそう言った。

「嫌がらないんだな」

「んっ……だって、私、このまま、ここでおばあちゃんになっちゃうかもしれないし……知りたいよ」

老いて死ぬまで、この何もない場所で、何も知らないまま、体験もできないまま過ごしたくないと黄葉は言った。処女のまま老婆になって死にたくはないそうだ。分かる。

仮に俺が生まれてからこんなところに閉じ込められて生きて来たとして。股間が疼くお年頃になった頃に、美形の悪魔おねーさんと知り合ってお誘い受けたとしたら乗るだろう。世間体とか考える意味もないしな。この結界の中でしか暮らしていないのなら、自分の欲求に従うさ。未経験のまま死にたくない! って。

黄葉がそういうつもりならば、遠慮はいらない。遠慮なんて元々するつもりもないが。

「分かった。なら今日から俺とお前はセックスもする親しい友達になろう。ただし、その代価としてお前の身体をもらっていく。で、まずは今夜の対価として黄葉の初めてを頂くとしようか」

尻を揉んでいた手をズラし、パジャマの上から黄葉の股間へと手を滑らせる。これから牝穴に躡ける箇所に、強めに指を押し込んでやると「はあッ……ん」と彼女は声を上げた。

では、まずは手付として百鬼家の秘密のお姫様の処女マン、いただきます。

「……んあ、ふあ……あ」

黄葉を起こして後ろから抱きかかえ、まずは胸を責める。

彼女の胸は手のひらにちょうどいいくらいのサイズ。両手で鷲掴みにして揉みしだいてよし、下から持ち上げてたぶんたぶんとさせてよし。

しばらくそうしていると彼女の喉は忙しく動き始め、こぼれる吐息が鼻にかかった音色になっていく。

「気持ちよさそうだな」

電線も繋がっていないこの結界内の建物でどうやって電気を賄っているのか知らないが、薄暗くした照明の下で黄葉は肢体をくねらせはじめた。

「ふあ、やあ……ウン。あ、ふあああ……♡」

外界の刺激を知らない身体はかなり感じやすいらしく、すでにビクツ、ビクツと時折肩を震わせ始めている。

「こっち向いて」

こちらに言われるがままに振り返った黄葉。その顔は悪意を知らずに育ったためか、年齢よりも幼く見えた。

顔を寄せると、そんな少女が美貌を妖しく火照らせ。発情した女の甘い吐息が俺の鼻腔をくすぐった。

「あ、……キス」

吐息に誘われるように唇を近づけていくと、彼女はぽってりとした

唇をほころばせうつとりとした表情でねだってくる。

手間のかからない子だ。こういうのも悪くない。

「……黄葉」

「んふっ……っ」

とろんと下がった目尻。潤んだ瞳。濡れて光るバラ色の唇の間から、白い歯が僅かに覗いている。お誘いにのって唇に吸い付き、しばらく唇の柔らかさを堪能させてもらう。

ゆつくりと怖がらせないように、ねつとりと唾液を塗り込むように、わざと音を立てて何度か触れ合わせては離すことを繰り返した。

その間も胸への愛撫は止めず、くにくにと外見から想像していたよりもずつと大きい乳首を摘まんでこねる。うん、デカイな。ここを苛めてくれと言わんばかりだ。

「ふああん。それ、それ、だめ。だめえ。それ、やめて……」

唇を離すと、黄葉は「やめて」と言いながら俺の手の上に自らの手を重ねてきた。それはこちらの手を引きはがそうとするものではなく、離れて行かないように抑えるたがっている動きだ。

「もつとして欲しい?」

「ふあ……っ! ふあっ、あはあっ……ん♡」

彼女の乳首が刺激に慣れてきたところで、くいつと力を込めてやると黄葉の身体がビクンツと跳ねる。女の腰がくねり、尻肉の柔らかさがこちらの股間に擦りつけられた。

「随分敏感だな。それに大きい……。いつもは自分でいじってるのか?」

「うん……触ってたら、気持ち良かったから」

「どれぐらいしてるんだ?」

「……いつも」

とくに恥ずかしがるでもなく、黄葉は乳首オナニーを告白してきた。性に目覚めた十代半ばの身体、それが誰も来ない場所に閉じ込められて、ほとんどの時間を独りきりで過ごしている。と、なればそれはもう自慰がはかどることだろう。暇にあかせて自らを開発し続けている美少女……か。

ただ、それが世間一般的には恥ずかしいことだと考えられているという感覚は黄葉にはあまりないらしい。そういうものだという知識はあっても、その実感は黄葉の中には存在していないようだ。

どれだけレースゲームを熟そうが、サッカーの試合を見まわろうが、レーサーやサッカー選手の気持ちは分からないようなものだ。たぶん。

「あつ、んっ……っちゅ……ふああ♡」

「いつもと比べてどうだ？ 自分でするより気持ちいいだろ」

「あふあッ、うん、うんう……！ すごい、自分で触った時より……ずっと、気持ちいい♡」

羞恥に悶えさせながら墮としていくのもいいものだが、今は世間を知らないが故のこの積極性を楽しんで行きたい。淫語とかにも全然抵抗感無さそうだしな。

知識はあっても実感が無い。無知ではなく、無恥ってところか。まあ、身体の方はムチムチではなくふにふにだが。太ってるわけじゃないが、筋肉が全然ない。

「黄葉はずつとここで暮らしているんだったか」

「ふあつ……うっ、ん。ここ、だけ……」

黄葉もみじをもみみしながら聞いてみると、寝室と浴室とトイレとダイニング、あとはゲームする部屋。黄葉の行動はそれだけらしい。食事は運ばれてくるものを食べるだけ。

このふにふに具合は、体育の授業どころか歩くことすらロクにしないからか。体力なさそうだ。あまり激しくヤルとすぐにへばってしまうだろう。

「こっちはどうしてる？」

片手を黄葉の下腹部に滑らせ、パジャマとパンツの中に潜り込ませてクリにツンと触れる。彼女の身体がヒクツと震え、

「そこ、は……なんだか、こわくて」

「あまり弄ってない、と……そうか、なら胸の方は自分で弄ってる、いつもみたいにな」

「うんっ……ふあッ♡」

素直にうなずいた黄葉に彼女の胸を任せ、ねっとりやらしく優しくメス穴周辺とクリを愛撫をしていく。すると、黄葉は日の光を浴びたことのない肢体がこれまで以上にくねり始めた。

女の尻がびくびくと時折浮かび上がろうとする。細い首に舌を這わせてやると、彼女の口からすすり啼くような声が漏れた。

「あつ、ひゃあつうっん♡ やあつ……うっうはあ、ううん♡」

黄葉が太ももをすり合わせ快感に悶えるさまを存分に愉しむ。女の割れ目はもうぐつちよりと濡れている。

「気持ちいいか？」

「うん。ううん、うん♡ ……え……ああつ、そんなとこツ！」

淫汗に濡れた指先を、彼女の腰が浮くのに合わせて尻の方まで忍ばせる。そうしてチョンと尻穴をつついてやると、黄葉は激しく身を揉んだ。

「敏感だな。だが、手が動いてないぞ。ちゃんとできないなら……こうしてしまうぞ」

胸弄りがおろそかになっていることを指摘し、尻穴を強く押し込む。

すると、さすがに排泄穴をいじられるのは嫌だったのか彼女の両手の動きが再開した

「うああ、汚いよお……あはん♡ ……うアあん……♡」

彼女自身の手で、乳房が形を変え、尖った大きめの乳首が捻り上げられる。自分でするときも結構強めにしていたようだ。

「俺に任せて、俺の言葉に従って、黄葉はただ気持ち良くなることだけを考えていればいい」

「うん♡ うん……♡」

「よし、いい子だ」

素直にうなずけたご褒美に、クリを強すぎない程度に刺激し続ける。じれったそうに腰を踊らせる彼女のマンコは、すでに挿入を待ち望んでいるようだ。

丹念に執拗に、まだ男を知らない肉襞をめくり上げ、蜜壺の中へ侵入させた指を動かす。牝蜜は溢れるようになっていて、指の出し入れ

に合わせて収縮し始めている。

「うふうん♡ ああっ、こんあの……これえ、すごいよお……♡」

「なあ、黄葉」

「うん♡ うん♡ うあ……なに？」

「さっきお前のマンコ穴をもらうと言ったが、ついでにコレももらっていいか？ クリトリス。もつと気持ちよくしてやるから」

悪意を知らない幼げで愛らしい顔を快楽に蕩けさせ、甘えた声で黄葉は答えた。

「ううん♡ いいよ、いい……もらって、私のクリトリス。マンコ穴。もらって、もらってえ♡」

「よしよし、黄葉は本当に素直だ。もつと可愛がってやるからな」

快感に吞まれた女のウツトリとした表情を浮かべ、黄葉は蕩け声で報酬の増額に簡単にうなずいた。

言われるがままに自分で胸を慰め、クリと肉ピラを弄られても大人しく身を任せてくる。ときどきケツ穴をつつけば、可愛い声を上げて大きく反応する。彼女はもう、こちらのなすがまま、言いなりといったところだ。

「あああっ……うあ……♡ なに、あっ……♡」

黄葉は肢体を切なそうにもじもじとさせている。自分の胸を揉みしだく指に力が入って、彼女の細指の間で乳肉が盛り上がる。

「もうマンコがとろつとろだ。そろそろイキそうなんだろう？」

「うあ……イク？」

「ん？ なんだ、いったことないのか？」

片手で彼女のラビアとクリを弄り抉る。もう一方の手で尻肉とアナルを揉み解す。

ぐじゅり、じゅぼりと牝花卉から蜜が溢れ出してくる。

「クリ……トリス……、イクっ♡ あ、ああ、これ、すごい、すごいよお♡」

黄葉の背筋にゾゾと震えが奔った、蜜壺に埋めた指がキュツと窄まってきた媚肉に啞え込まれる。

彼女の足指がぐつと曲がり、腰のくねりが激しくなっていく。包皮

を剥かずにやわやわと刺激し続けていたクリトリスがこれまで以上に膨れ上がって、ずるりと剥き出しになった。

「クリイキは初めてか。そらっ、黄葉はどこでイクんだ？ 言ってみろ」

むき出しになったクリを指紋で擦るようになってやると、下腹部から発した痙攣が黄葉の全身に伝わっていった。

「ああ、……うん、イク。クリ、クリでイクっちゃう♡」

官能に瞳を曇らせた黄葉は、だらしなく開いた口から嬌声を上げる。

「……い……ク……ッ♡ んあああッッ♡♡」

自分の手で乳首を強くひねり上げながら、黄葉は初めてらしいクリトリスでの絶頂を迎えた。

「なめてみる」

彼女の股間から引き抜いた手を唇の前に持つていくと、

「あっ、うっん……」

黄葉は息を妖しく荒げながらも、自分のメス穴から垂れ流された蜜を舐め取り始めた。指先を舌が舐めまわしていく感触が心地好い。

さて、そろそろ準備は十分だろう。

ぼんやりと余韻に浸っている黄葉の衣服を脱がし、あらわになった彼女の両脚をMの字に開く。彼女の体力を考えると、最初は正常位が良いだろう。

日焼けを知らない黄葉の肌は、普段表に出ている部分も隠されている部分も真っ白だった。暗がりに浮かび上がる白肌というのはいつ見ても情欲を沸き立たせてくれる。

ましてやその中心が、すぐにもぶち込んでくださいと涎を垂らして待ち構えているのだ。股間も張り切って仕方がないというもの。

開かせた太ももの間に腰を滑り込ませ、肉棒をあてがう。ぐっしょりと湿った淫蜜を先端から幹の根元まで塗り付けるようにして前後させてやる。そうすると、黄葉の肢体がこちらの動きに合わせて入口

の肉ビラを持ち上げるように引きつった。

敏感になっっているだろう肉豆を肉棒で擦り上げられたメスが、オスを迎え入れようと反応している。処女だと言うのに積極的にいやらしい娘だ。

「チンポ挿れるぞ、黄葉。これからお前のオマンコは、俺のものになるんだ」

彼女の頭の両側に手をつき、そう言ってからちゅっちゅっ唇を何度も重ねる。

股座を擦り上げる熱い肉塊の感触に、黄葉は瞳をとろりとさせ……。視線を肉棒へと向けた。

「ひゃあっ……」

彼女の顔に怯えが浮かんだ。まあ、無理もない。興奮によってガチガチに勃起上がった肉棒には青黒い血管が浮き上がり、塗り付けた黄葉の淫液と先端から滲み出るカウパーでぬらぬらと濡れ光っているのだから。かなりグロテスクに見えても仕方がないところだろう。

「ちん……ぽ……。こんなにおっきいの？ これ……こんなの、私のおまんこに……はいるの？」

チンポとかマンコとかこっちが言っていると、特に気にせず黄葉はその言葉を口にする。やはり、誰も彼女にその手のことを教えていないらしい。この分だと、淫語もりもりお嬢様になってしまいそうだ。

「怖いか？」

片手で体重を支え、空いた手で彼女の頬や髪、首筋をそつと撫でる。そうしながらいくつかの軽いキスを彼女の顔に落として宥めていると、強張った表情が緩み始めた。

「うん……壊れちゃいそうで、ちよつと……こわい」

怖いと言いながらも、彼女の瞳にはこちらへの信頼めいた感情が浮かんでいる。無理矢理ねじ込むのはたやすく、強引にぶち込んでしまえばモノにする自信はある。

だが、黄葉の内側からかなり強力な神器の気配を感じることを考えれば……彼女自身に許可を出させた方が良さそうだ。

黄葉の方から言い出して、土壇場で怯えやがって、これだけ

ら処女はめんどくせえな、などとってはいけない。いけないことはないが、心を力に変える女は最初でのめり込ませるのが肝心だ。ここで優しかったイメージを刻み込んでしまえば、あとは好き放題に出来るというものなのだから。

これは初めてのことに怯える子を頂くときの醍醐味のようなものだ。それにだ、大きくてびつくりされる方が、モノが小さくて安心されるよりは精神的にもずっといいというもの。

「大丈夫だ。女のこころは、子供を産めるように出来ているんだからな」
耳元で優しく優しくそう囁き、唇を強く重ねる。腰をゆるゆると動かして彼女の下半身を刺激しながら舌を挿し入れると、黄葉の口内は抵抗することなく受け入れた。

彼女の手のひらが俺の背に回った。キュツと抱き着いてくるのに合わせて、体重をゆつくりとかけていく。経験によるものなのでどれぐらいの割合なのかは知らないが、男の身体の重みを感じることを好む女というのは、結構いる。長時間となれば疲労もするだろうが、少しの間ならば逃げられないように抑え込まれることに悦びを覚えるメスは多いのだ。

「んはあ……♡ ふあう……はあ……♡ きもち、いいんだよね……？」

しばらくの間抱きしめさせ、口内をねぶり回し、腰を使ってヴァギナとクリトリスをぬるぬると煽る。そうしてから唇を離すと、黄葉は期待を滲ませた声でそう聞いてきた。

「ああ、保証する。もっと身体の奥から気持ちよくなりたいだろう？」
髪をどかし耳に口付けながら、優しく甘く吐息を吹きかける。

「~~~~あうっ♡」

「黄葉のココ、もらってもいいな？」

彼女の首が縦に振られるまで、質問からそう間は空かなかった。

「うん。でも……痛いんだよね……初めてって」

「最初だけはそうだな。優しくしてやるから、力を抜いて俺に任せているといい。すぐによくなってくる」

依頼人からゴーサインが出た喜びをちゅっちゅつと彼女のあちこ

ちに唇を押し付けて表現すると、黄葉の四肢から力が抜けた。

「うん……お願い」

男に身を委ね、すべてを任せきった女の顔だ。

肉棒を割れ目の入口に押し当て、少しづつ馴染ませるように押し込んでいく。

「きやあ……ううツ……んっツ」

これまでになく高い声で黄葉が鳴いた。彼女の指が口へと運ばれ、歯を立てて耐えようとしている。

愛液でふやけきった穴と蕩けた心。それでも、これまでほとんど痛みを知らなかった少女にとっては、自分の中に男のモノが入り込んでくる衝撃は凄まじいものがあったようだ。

「んんっ……。んは……。あああ」

痛みを耐えようとしているその仕草に興奮してしまう。日本の退魔の名門、五大宗家筆頭の姫君。百鬼家現当主の妹の純潔を奪っているとすると、どうにも口角が吊り上がりそうになってしまう。

ぷつりと突き破っていく感触に征服感がこみ上げてくるが、そういった面を見せるのは黄葉を墮とし切ってからだ。

「んあ……。うん……」

黄葉は片手の指を噛みながら、残った手足を布団に喰い込ませて処女喪失の痛みを喘いでいる。

その様子を見下ろし、腰をグイグイと奥へと押しすすめていく。熱い媚髪が肉棒を撫でる。閉じた割れ目をこじ開ける。狭い穴を自分の形に変えていく。

嗚咽をこぼす少女の喉が激しくひくついている。揺れて震える処女を失いつつある女の唇。

「あっ……くっ……」

大きく広がった肉の傘が穴をミリミリと拡張しながら奥へと突き進み、ついに一番奥へと到達した。

そこからもう少し押し込んで、子宮の口を変形させる。腹の奥を変形させられた黄葉の瞳から溜まっていた涙がツーツと落ちて行った。

「痛いか？」

耳元に口を寄せ、甘く優しく囁きかける。すると黄葉は火照った顔をコクリと縦に動かしした。

「う……ん……。で、も……」

言いかけて彼女はキスをねだるように目を伏せたので、そのまま唇を重ねる。舌は入れず唇同士をすり合わせるようにしていると、狭い膣内がきゆうと収縮し始めた。

ねとねとした感触の膣内媚肉が、肉棒にみっちり張り付いて扱ってくる。肉ヒダが徐々に蠢き始め、動いて欲しいと催促してくる。

もう感じ始めているのだ。この娘は。挿入時の反応でひどく痛むのかと思ったが、それはどうも痛みを知ることのない生活を過ごして来たからのようだ。

軽く腰を前後に揺すつてやると、黄葉の顔に陶醉の色合いが浮かぶ。唇を離すと同時に開かれた彼女の瞳には、覚え始めた官能に酔う蠢惑の色が滲んでいる。

「もう感じ始めているみたいだ」

「ううん……。ふあ……。ううん、んつ、んあ……」

「マンコの中、チンポで擦られてる気分はどうだ？ 気持ちいいか？」

「うん、うん……。うん、あつ、気持ちいい、気持ちいいよお♡ おまんこ、おまんこ、熱くて、ちよつと痛いけど……。おちんぽで、じゅつじゅつてされるの、気持ちいい……。♡」

ちよつと痛いくらいも好きなのか。そういえば、乳首もかなり強く摘まんでいたな。

それなら、とピストンを少しずつ強めていく。腰を引き、子宮を軽く突き上げるように押し込むことを繰り返す。一突き一突きのその度に、黄葉は総身を快感にのたうたせる。

「それ、あつ♡ それ、ゾゾツツつてする。んあつ……。ううつ、ふう♡」
ピンク色の乳輪の中央でしこった乳首がツンと主張していて、それがピストンに合わせて揺れる様がなんとも艶めかしい。

腰の振り方を変えながら、愛液まみれの媚肉穴をじっくりと開拓していくとしようか。

「黄葉はいやらしいな。初めてなのにもう感じている」

「そう、なのかな？ うん、ああつ、あん♡ こんあ、気持ちいい、なんて……ふあ♡」

言葉で責めて羞恥心を煽ろうかと思っただが、どうやら黄葉にはそういったものは通用しないらしい。まあ、これまでの様子からそんな気はしていた。

とって、心になにも抱えていないわけでもないようだ。浮かせていた身体を重ね、彼女の背に腕を回し強く抱きしめると、膣内の反応がグツと増してくる。

「はあッ♡ あうう……ん♡ ああつ、感じるッ♡ 感じちやうウツ♡」

黄葉は寂しい暮らしをしてきた少女だ。刺激の少ない、他人のいない。娯楽作品で暇をつぶすことしか出来ない生活をずっと続けてきた女だ。

そんな黄葉の精神性は、年齢よりもずっと幼い。無垢な心に叩き込まれたセックスの快感は、彼女を夢中にさせるに十分過ぎるものだった。

恐ろしく巧みな悪魔の腰遣いが、若い少女の膣内を蹂躪していく。征服された箇所が淫靡な熱を発し、そこから伝わる快感が全身を巡って頭を蕩けさせる。

「このザラザラしたところはどうか？」

太く広がった雁首で浅瀬を小刻みに擦り上げられているうちに、黄葉はもう痛みなど感じなくなっていた。

浅瀬ばかりで奥が疼き始めると、それを見計らったかのようにずぶりと子宮口までめり込んでくる。みっちり奥までハメ込まれると、今まで自分で弄っていた乳首からの快感などとは比べ物にならない衝撃は身体を何重にも駆け巡る。

子宮をぐつと押し上げるようにされると、そのたびに頭のとっぺんまで官能が突き抜けて来て爆発しているかのよう。

「ふあ、ふう〜♡ ふう〜♡」

真っ白に意識が飛びそうになる。

「我慢しないでいい。イキそうになったら、素直にイッておけ。俺も一度、出すからな」

「うっん♡ うん……イクっ、イキたいっ」

無意識に黄葉がその両脚を悪魔へと巻き付けると、膣内を抉る肉棒のピストンの速度が上がった。

抱きしめ合っている相手の背に、黄葉の爪が白くなるほど喰い込む。

「ひいう……♡」

黄葉の絶頂に合わせるように、膣内の肉棒がぐっと太くなるのが分かった。

「ふあっ、ん♡ ふうあ〜んくうん♡ あああなに、なにか、来る、来ちやう♡」

これまでも何度か押し上げられていた子宮のドーナツ型の入口が、ひととき強く押し込まれた。

「はあっ……♡ あっ、うんうっ、あっ、くる、いつく、あ……♡」

粘液の塊が、黄葉の胎内に注ぎ込まれている。熱く灼けるような喜びが、お腹の奥から湧き上がって来て――。

「おまんこ……イクっ、あっ、ひっ、またイッく……♡♡♡」

肉の杭を打ち込まれ、白濁を注ぎ込まれた喜びの中で黄葉は再び絶頂に達した。

「うあ〜♡ んあ〜♡ んっ、いい〜♡」

初めての性行為で肉棒の良さと味を覚えてから、黄葉はそれにすっかりのめり込んでしまった。

「黄葉、チンポ好きか？」

「うん♡ うん♡ 好きい、好きい、おちんぽで、おまんこしれもらうの、大好きい♡」

「そうか、そうか。俺も黄葉のおまんこ好きだぞ」

「あっん、嬉しい♡」

今や彼女は肉悦の虜だ。悪魔に囁かれるままに、身体を切り売りしてしまうことに躊躇いすらない。

「この間は、足をもらったから……そうだな、今日はこの目をもらってもいいか？」

「あつ、うん♡ もらって、黄葉の身体、好きなところもらつてえ♡」
身体で払ってもらおう。

その言葉通りに、悪魔は百鬼黄葉に呼び出される度に彼女の身体の所有権を少しずつ奪い取っていく。

このペースで行けば、すぐに黄葉が支払うことの出来る身体部位はひとつもなくなってしまうだろう。

そうなったとき、この寂しく過ごして来た少女は、そして肉の繋がりに依存してしまつた少女は——どんな選択をするのだろうか？

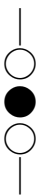
「なあ、黄葉。俺のこと好きか？」

「大好き♡」

「愛してるよ」

「私も、私も愛してる♡」

性質の悪いことに、百鬼家にとっては最悪なことに、この悪魔は既に彼女の心さえ契約とは別にモノにしてしまつていた。



「まさか、あれほど魔法の才能があるとは思わなかつたな」

一仕事終えた悪魔は、性行為以外での黄葉との交流から得た情報を基に百鬼黄葉の能力を測っていた。

そしてそのための試しとして少し教えてみただけで、黄葉は至極簡単に初級の魔法を扱えるようになったのだ。魔法力と呼ばれるものも、恐ろしく高い。

「話を伺う限りでは、彼女に宿っている神器は『究極の羯磨』テロス・カルマである可能性が非常に高いかと思われます。であれば、それも当然のことか

と」

「神器と魔法に関係があるのか？」

悪魔が眷属の眷属として従えている神器に詳しい魔法使い。彼の言うところによれば、

『究極の羯磨』は神の奇跡や悪魔の所業のごとき現象を発生させ、人間では本来選ぶことの出来ない、あり得ない選択肢を与える神器ですからね。そして、魔法とは人間が神の奇跡や悪魔の魔力を真似て編み出した技術です。本来、人は空を飛ばませんし、道具もなく炎を生み出すことも出来ません。空間を転移することなどあり得ない。人間にあり得ない選択肢をもたらず技術を魔法と呼ぶのですよ」

魔法使いの界限において、「原初にして究極の魔法」と呼ばれるものがあるのだという。

それは『願い』。

原始の人間たちが人では出来ないことの実現を、神や祖先の霊などの超常の存在へと祈るといいう形で生み出された。術式も何もない始原の魔法。

「つまり、人の業の極みを宿しているのだから、それ以下の人の業など……ということか？」

「はい、彼女に覚えられない魔法はないでしょう。あり得ないことなど、ないのですから」

「なら、魔法を覚えさせることで効果を安定化させることも可能か？」
「現実ではありませんが……。願いを叶えるための分かりやすい道筋を用意することで、予想外の経路に影響を与える可能性は減少するのではないかと思われれます」

たとえば黄葉が東京からロンドンまですぐに行きたいと考えたとしよう。そのとき、『究極の羯磨』だけしか黄葉自身の力がなければ、どこからともなく魔法使いが現れて、その魔法使いの転移魔法に偶然巻き込まれるなどというあり得ない事象が起こるかもしれない。

だが、黄葉自身が転移魔法を使えるのならば、そんな事象を発生させる必要はないのだ。

「選択肢を与えることで、制御する……。究極の魔法使いか……。悪く

ないな」

秘密計画のヘルキヤッツ

2-1 ナベリウスからの手紙

前世の俺は一応仏教徒の端くれだった。うろ覚えだが、般若心経を
だいたい唱えられたりする。

先祖代々の墓は田舎の寺にあったし、仏壇前のなんだか叩くやつを
チーンと鳴らしてご飯を盛った足の着いた皿？ のようなものとお
茶をお供えしたりもしていた。

まあ、そんな程度の話だ。日本人らしく神社にも行ったし、クリス
マスに独り寂しくケーキを食べていたりもしたわけだ。

で、葬式なんかに出かけると、最後の方に坊さんのお話があったり
することがある。他所は知らないが、実家が檀家に入っていた寺の坊
さんは大体いつも同じ話をしていた。

人は死んだら閻魔さまに裁かれて、生前の罪に応じた場所に送られ
ると。六道輪廻？ だかなんだかそんな話で餓鬼だの修羅だのそん
な地獄に送られたり、もう一度人間やってこいやと言われたり、お前
の来世は畜生こそ相応しい、あるいは結構厳しい天国にいけるなんて
感じな話だったように思う。詳しくは知らないが。

で、最後にお亡くなりになった方はこの儀式によって戒名を授かっ
て坊さんの弟子扱いになるので、輪廻の輪から外れて解脱？ だかど
うとかで仏様の場所にいけるんですよー、お布施お願いします。みた
いな結びだったように思う。いや、我ながらひねくれているとは思
うが。

さて、このお話が正しいとすると、今生の俺は冥界送り、つまり地
獄に落ちたわけだが、普通に楽しくやっている。というか宗教違
うんだが……。

結局それがどうしたって話なんだが、よく分からないし記憶にもな
いが、もし閻魔様から悪魔やってこいやと言われてここに生まれたのだ
としたら、出来る限り悪魔らしく、グレモリーらしくやっていきたい
など思うのだ。いや、だって、前世と比べたら天国だからね今の生活。

ちよつとバイオレンス入るけど。

こんなイイところに送ってくれたのだ、期待に応えようじゃないか。

ちなみにお経唱えても別に頭は痛くならない。デイオドラから聞いた話では、二シスターの転生悪魔なんかは、聖書の神に祈りを捧げてしまつて頭キーンとなることがあるらしいが。

私は心が広いということだろうか……。お釈迦様の悟りを妨げようとして結果的に助けちゃつたとか言う、煩惱の化身マーラ様のなポジションでも目指そうかな。恩返しつぽく。

魔王サーゼクス・ルシファア様、つまり兄上の城に『女王』で婚約者のレイヴェルと『戦車』の朱乃を連れて挨拶に行ってきた。

兄上はたいそう喜んでくれて、俺が朱乃の今後の計画『侍ガール風メイド』つまり黒髪ポニー和風メイドの話をしたらノリノリで刀を一本くださつた。なんでも昔、鬼の姫が持っていた刀なんだとか。

まあ、朱乃のメインウェポンは雷光槍なので、飾りのようなものになつてしまうけれど。だが、コスプレははかどる！ やはり持たせるだけにしてもそれなりのモノじゃないと格好がつかないしね。

しかし、俺とレイヴェルには祝いの言葉だけであつた。

いや、なんか寄せせとは言えないけど、兄上は朱乃のこと好きすぎない？ なんなの、寝とる気なの？ それとも俺と同じで黒髪ロング好きなのか……。グレモリー家は日本最頂なところがあるしな。どっちにしても危険である。

せつかくもらつたので、今後しばらくは朱乃にはあれだ、袴ブーツとかハイカラさんとか、女子大学生の卒業式というか、あんな感じの格好をさせてみよう。

外出はそれで、家では和服メイドっぽいあれらを付けさせるのだ。我が家の既存のメイドさんは洋風だからな。和風はあの振袖？

あの部分がたまらないのだ。うんうん、兄上は分かつていらつしやる。伊達に正妻をメイドとして働かせているわけではない。

でも、もう見せてはあげない。黒髪ポニー袴ブーツ帯刀墮天使メイドは俺のものだ。兄上にやらせはせん。ヤラせはせんぞ！

「若様、お手紙が届いております」

グレモリー家に戻ると、角メイドのリユイがどこぞからの手紙を預かっていた。

なんというか、いつの間にもやら完全に俺付のメイドのトップのようになっているな。

「ああ、そういえばリユイはしばらく休暇だったか」

ただ、このメイドは我が家に居ない日が結構ある。それでも、立場が高いというのは気になるところだが。

いや、リユイがいないと朝一の鎮静フェラがどうにも物足りない感じになる。今のところ俺が体験した限りでは一番口の技が上手い女なのだ。

「はい、度々お休みを頂いてしまい申し訳ありません」

「構わないが……何か忙しいのか？」

「いえ、その……」

「いや、いい。余計なことを聞いた」

気に入っているとはいえ、メイドの事情など本人から聞き出すものではないか。父上にも聞いてみるか。

俺宛の手紙を預かっていると、父上からもかなり信用されていることになる。貴族から届いた手紙を勝手に読まれたり、すり替えられたり、紛失したりなんてことになったら困るからな。

受け取った手紙の差出人は、エダーギ・ナベリウス。知らない名前だ。ナベリウス家はさすがに知っているが、その一族すべてを知っているわけではない。

「朱乃は義姉上……グレイフィアに言って、さつき話した衣装を用意させろ。ついでに兄上が、お前に大変よくしてくれたと伝えておいてくれ」

さて、奥様に旦那さんが若い墮天使に色目使ってますよーとチクつたところで、レイヴェルと連れ立って歩く。

最近、会議室のように使っている部屋に入ると、レイヴェルに差出人の名前を見せた。ちなみに俺は他の女に色目使いまくりである。

「ナベリウス家の分家の方ですわ。たしか、眷属の育成に力を注いでいらつしやる方だったかと」

「レーティングゲームに熱心な方か」

椅子の背もたれに背を預けながら、封を切る。術式で圧縮していたのだろう、中から外観から感じたよりもかなり多くの紙が出てくる。

「ご自身はゲームには参加されず、育てた眷属をトレードに出して対価を受け取られていたはずです」

「つまりこれは、売り込みか」

手紙にザッと目を通すと、『都合の良い日に、レーティングゲームの練習試合をしませんか？ こちらにはこんな眷属がいて、それぞれの眷属の能力はこのようなものです』といった内容のようだ。

「リアスさまは有名ですからね。眷属に採用されたとなれば箔が付きますし、自身の育てた眷属が注目の集まる場で活躍すれば——」

「その後の商売も順調と………ん？」

今後を商機拡大を見据えた一手ということか。レーティングゲームの試合の練習という形をとって、自分の育成能力と『駒』の性能を見せてくれると。

流し読んだ部分をレイヴェルに渡して目を通すように促し、売り込み商品（眷属）を一名ずつ詳しく紹介している部分に注目する。

男は除外して………ほう、と思わず声が出た。

元猫妖怪の黒髪ネコミミ着物美少女『僧侶』、なかなかいいじゃないか。エダーギ殿は良い趣味をしておられる。

出来れば自分のモノと駒で下僕にしたい俺だが、そこを妥協しても良いかと思える程度のもはある。惜しいのは、転生させる際に使用された駒の数が『僧侶』二駒というところか。しかし、転生させた際の年齢から考えると、種族的な資質だけでそれだけの駒価値があったということになるが………ふむ、猫又の中でも希少種の猫？という種族なのか。レア者だな。多少コネを使ってでも拾う価値はありそうない気がする。

ほう、備考……白髪の妹がいる……だと！ おおつ、かなり小さいが、将来性は高い……しかもまだ駒入れ前……くつ、エダーギ・ナベリウスめ、できるツ！ 光源氏計画的なアレができるかもしれないということか……ぐううう。大きくなるまで、じつくりと仕込みながら育てて、最後に「もらってください」とかいわせながらパクリと……。黒髪姉と白髪妹を並べて姉妹丼……。

なんという、悪魔的な。

どうしよう、すぐく欲しい。この仙術、妖術というのも気になる。俺が『僧侶』に期待しているもの一つになるかもしれない。

「リアスさま、良さそうな人材がいます……」

俺の手元を覗き込んできたレイヴェルが、アツと何かを察した顔になった。

何かとはナニだ。言うまでもない。

「まあ、その、な」

「いえ、分かっておりますわ。ただ……その、やはり大きい方が好きなのででしょうか？」

レイヴェルは自身の胸に手を当てた。まだ全然育つから気にする必要はないと思うのだが、朱乃はデカイが年上だし。

「いや、それは相手による。似合うか似合わないか、それと俺がその相手毎に求める好みの問題で……な」

椅子を引いて膝上を叩くと、レイヴェルがその上に座ってくる。で、彼女のお腹に腕を回して、あごを肩にのせる。これが俺的レイヴェルとのベストポジション。えっちのときは、レイヴェルの向きを変えて対面が良い。背面+鏡も捨てがたいが。

「俺がレイヴェルに求めているのは、この感じなんだ。いや、全然大きくなってくなくても構わないけど、今はこれが落ち着くから」

「成熟すれば身体の年齢は操作できますからね」

「たとえば、俺が八歳くらいになって、そっちが二十歳くらいというのはどうだろう」

ピクンとレイヴェルが反応した。

「それは……なんというか、とても興味深いですわ」

歳の差、身長差、胸囲の調整。見た目年齢の操作で、その辺りはわりとどうにでもなる。三十年も経てば俺が父上のようなダンディおっさんになって、今の年齢の姿のレイヴェルと……なんてシチュエーションも自由自在なのだ。

「なあ、レイヴェル、この猫又姉妹両方欲しいんだが、買ってもいいかな？」

しかし、これって完全に人身売買……いや、俺は前世の倫理観など捨て去った悪魔。悪魔的にはありありの合法だ。

「それは、その、リアスさまがお決めになることですけど……私に何か？」

うん、鋭い。レイヴェルに頼みたいことがあるのだ。

「いや、俺の禁手の能力を考えると……姉妹で揃えたいが両方を俺の眷属に入れても得られる特性は同じだろう？」

「私の眷属に出来ないか、ということでしょうか？」

「そうなんだ。妹の方をレイヴェルの駒でいけないかと」

我が家の場合、眷属悪魔かそうでないかで扱っても相当変わるからな。どうせ姉をいただくのなら、妹もしてしまいたいわけだ。

「姉の方ではないのですか？ 『僧侶』を二つも使っていますし、リアスさまの『僧侶』は一つ変異していましたよね？」

「ああ、そこはベルゼブブさまに頼もうかと思う。俺の変異『僧侶』ならエダーギ殿の通常『僧侶』二つ分の容量は軽いだらうから」

『悪魔の駒』の受け入れられる強さの容量は限度がある。そして、その容量は『王』の強さに応じて変わってくる。

失礼だが、エダーギ殿はそれほど名の知れていない悪魔。彼がまだ見ぬ恐るべき強者ということでもなければいけるだろう。

『悪魔の駒』の開発者である、アジュカ・ベルゼブブさまならその辺りはどうとでも出来るはずだ。

「ですが、そのような話を受けていただけるでしょうか？ それに魔王の弟ということを通していただいたとしても、大王派から……ああ」

「次に挨拶に行くのはゼクラムの祖父さんのところだ。ついでに頼ん

でおくさ。あとは、俺はレーティングゲームに関してハンデを喰らっているから、そこまで不公平とは言われないだろう」

『赤龍帝の籠手』全力倍加での攻撃禁止なんだよ。フィールドが脆いばかりに。

不公平じゃないか全力出させろよー、開始五秒でフィールドごと全部まとめて塵一つ残さず消滅させてやれるのにさー。みたいなことを言ったらどうにかならないだろうか。

「コネはアスタロトですか？」

「そうだな、兄上にも話はするが、メインはディオドラ経由でお願いしてみようかと。ダメならダメでその時だな。姉の方が強いから俺の方に欲しいところだが、逆にするって手もないことはない」

ディオドラよりもラティアアからの方が話を聞いてくれるかもしれないが、ラティアアはベルゼブブさまの姪なのだし。悪魔はなんとなくだが、親類の年下女性に弱い気がする。

「私の駒を使いたいということは、分かりました。でも……その、説得してくださいまし」

もじもじとしながら振り返ったレイヴェルに、熱っぽい流し目を決められた。ギョツと彼女の腹を抱える。

つまり、こういうことだ。

『いやですわ、いやですわ。私の眷属に旦那さまのハーレム要員を入れろだなんて!』

『そんなこと言わずに頼むよ、な?』

『いや、あああつ♡ こ、こんにゃ、ことされても、ダメですわあ♡』

『ほら、頼むって、もつとズコズコしてあげるから、さあつ!!』

『ああああうんうん……♡♡!!』

みたいな説得してくれということだ。

「じゃあ、今晚頑張って説得するよ」

「ええ、お願い致しますわ♡」

最近、俺が何か頼むときはこうやって色仕掛けをするようにしている。で、レイヴェルから何かねだられるときも色仕掛けをされている。

最初から答えは出ているのだが、こうなんというか、寢室生活のちよつとしたスパイス的にね。割と楽しい。

しかし、これだけやってもらうとなると、ちゃんとレイヴェルの望みを叶えないとな。やっぱり、手っ取り早く名声稼ぐなら戦争か。

デイドラから聞いたところによると、墮天使共は神器持ちの人間を殺して神器を抜き取ったり、狩り集めて人体実験を繰り返したり、洗脳教育を施して戦力化したりしているらしいし。どうも神器の研究も進んでいるようだ。その研究成果をこそつと奪いとれたら、かなり俺の望みが進むだろう。

悪魔グレモリーたる者、身内には甘く、情愛深く接していかねば。しかし、デイドラはすごいな。同世代とは思えん。

籠絡したシスターを使って教会から情報を抜き出し、教会をドロツプアウトさせたシスターを墮天使側に潜り込ませてスパイ活動させるとか……なんなのアイツ。強さはそこまででもないけれど、アジユカさまとは違った方面で裏向きだよな。



「父上、リュイのことなのですが。ああ、俺の所のメイドですけど」
父上の空き時間をみて、あのメイドのことを尋ねてみることにした。

「リュイ……ああ、あの角の生えた」

「ええ、あれはどういった者なのでしょう？ どうも他のメイドとは少し違うようで」

いつもの密談部屋で、ふむ、と父上は顎に手を当てた。

「実はあのメイドは、お前の教師役になる予定だった者なのだ」

「は？ ……教師、というと、その例のアレののでしょうか？」

「そうだ。だが、必要なくなったのでな。謝罪して断わりを入れたのだが、ならば『最強の女王』もするという、グレモリー家のメイドを体験してみたいと言われたのだ」

グレモリー家のメイドというのは、ちよつと変わった立場だ。義姉

上のせいだ。

悪魔女性が憧れる女性の一人であるところのグレイフィア・ルキフグスの職業ということだ、上流階級の者でも、なってみたい、やってみたい、体験してみたいという者がそこそこいるそうなのだ。

「それで、俺付きになったのですか？」

お手付きありなのにな？

「元々お前の教師役として依頼するつもりだった方だ。本人からそれで構わない、むしろそれが良いとまで言われては、直前で断った手前な……」

あ、これアカンやつだ。父上の言い方が、結構いいところの相手に対する感じだ……。

「その……父上。では、リュイは……もしや貴族の……？」

「ああ、気付いていなかったのか。あのメイドは純血の悪魔だ」

「魔力の質が……そこまで無いように思えたのですが……」

「技巧に優れた者でな。彼女は年齢、外見の操作、それから魔力の抑制、気配の遮断も得意なのだよ」

「そ、そうですか……」

マズイ……どこのどなたか存じませぬが、完全にグレモリー魔力で完堕ち服従状態にしてしまった。俺の「おせっせ先生」になるはずだった方を……！

「なにか、あるのか？」

「あー、そのですね……。まことに言い難いのですが、リュイを例のグレモリーの特性の実験に使ってしまいました……」

「ああ、なんだ好意を得るくらいならば……ん、待て……それも使ったのか？」

俺は『赤龍帝の籠手』を顕現させた。

「はい、俺の魔力量で、倍加を重ねがけして……どうなるのかと、その」「そ、そうか……いや、だが普通に見えるが。グレモリーの特性はある意味強力だが、彼女相手にそこまでは……さすがに」

「心の内では、もう、その完全に……。たぶんですが、死ぬと言ったらその場で死んでしまいそう……。その、ですね、グレモリー魔力倍

加に加えて、『赤龍帝の籠手』のもう一つの能力も……使ってしまいまして」

やはりやり過ぎてしまったらしい、ぞ。コレ。

「何をしたんだ……」

「えー、そのですね。『譲渡』というのが出来るのですが、これは感覚の強化も可能でして、例えば目に力を『譲渡』すると視力が上がるといった……」

父上はテーブルに肘をつき、頭を抱えてしまった。

「一応聞いておくが、どこをどうしたんだ……」

「オマンコの感度を256倍強化してやりまくってしまいましたあ！
すいません！」

俺はテーブルに打ち付ける勢いで、頭を下げた。

でも、父上も言っておいてくださいよ。やっっちゃダメな相手くらい。義姉上以外にもいたのならさー。

「本人から、秘密にしてくれ、他のメイドと同じ扱いで頼みたいと言われ、契約してしまったのがマズかったな……」

「そうですか……契約なら、仕方ないですね。で、そのどこの誰なのかは……？　場合によっては、というか責任問題が……？」

父上は首を横に振った。

「誰とは言えん。そういう契約だ。ただ、うーん……どうしたものか」
何事も限度はわきまえろと言うことか。平民メイドなんて壊しても構わん、フハハハハツハーな悪逆貴族プレイとかヤラなければ良かった。

2—2 一盗二婢三妓四妾五妻と神々の戯れ

いっとうにひきんぎししようこさい
一盗二婢三妓四妾五妻という言葉がある。

ヤルことをヤルときの男の興奮度合いを表すとされる言葉だ。

一番興奮するのは盗むこと。つまり寝盗りだ。他の男の妻や彼女とやってしまうわけだ。ディオドラなどは、神に仕え神に操を立てる聖女やシスターを奪うのが大好きなので、ここ好きなのだ。他所の神話の神に喧嘩売ってる神話間戦争上等なハイレベル巫女スキーなバラキエルもここだ。

性の技の巧みさによって、他所から盗み取る。これぞ真髓、的な感じか。

二番目は婢、漢字の形たちから分かるように、卑しい女。つまり自分の低い者を抱くことだ。メイドスキーはここである。抵抗も反論も許さず、身分と力をかさききで蹂躪する悦びってヤツだろうか。俺はここ。妻をメイドにして愉しんでいる兄上は、ここにいるようでもた違う上級者だと思う。平民や人間を甦るのはいいぞーって感じの雰囲気を感じるバアルの祖父さんもきつとここに違いない。俺には分かる。さすが俺の師匠。

というか大王派のお偉方の多くはここではないだろうか。見下すの好きだしね。分かる。

己の権力を誇るのはいいぞ。貴族に生まれて良かった。

三は妓、娼婦・娼妓。金で買う女だ。前世の俺はここがよく分からなかったが、エダーギ・ナベリウス殿からの提案を受けた際の興奮によって、少し理解した。安っすい女ではダメなのだ。高い金を出すほどに、あれだけ出したんだぞ俺は！ と燃え上がるのではないかと思う。時代劇などで豪商が花魁に入れあげているようなシーンを見たが、まさにそれがここだろう。

財力を誇示して、俺スゲーって気分になれるのだ。

四は妾。愛人である。うん、これはまあ俺の場合は朱乃になるのか。ここについては、五の妻との関りが大きいと思う。書いて字のごとく愛する人だしね。

最後の五は妻。説明不要。妻なのだから抱けて当たり前。というか普通に抱く、むしろ義務。だから興奮度合いは低い。

あとは他にも、この言葉を考えた人が出していないパターンがあるが、それについては後日考えよう。

一盗二婢三妓四妾五妻。いっとうにひさんぎししようごさいこの言葉は、ヤルときの男の興奮度合いを表したものだ。

では、逆に男の執着度合いで考えるとどうなるだろう？　つまり、寝盗られて一番くやしいのは誰かと言う話だ。

一番の盗は論じるまでもない。最初から他人の女だ。完全に奪い取ってしまったらそれは妻か愛人になってしまうので、ヤツてからリリースが基本。というか旦那の目を盗んでつてことになるので、他の男がいるのが前提なのだ。執着度は低い。

二番目の婢。これまた自分より身分が低いことが要点なので、入れ上げてしまったらそれは愛人である。つまり、ここも執着度合いは低い。むしろ低いからイイ。好きになっちゃうと踏みにじって悦に浸れないからね。あ、サディズムはまた別の話で。

三番、妓。払った金分だけ、執着度は高くなる。安い女は低く、高ければ高いほどに、あれだけつき込んだのに！　となりそうな気がする。ここは未経験ゆえに語れない。

四番目は妾。愛人。当たり前だが、怒るだろう。執着しているから困り込むのだ。はあ、何やってくれてんの？　ぶっ殺すぞとなるのは確実。俺ならの話だが。

くそっ、兄上め、朱乃に粉かけてんじやないぞ！　となるかもしれ
ない。

五番、妻。正妻だぞ、お前それを、おま、この、死なす！　つてなるだろう。当たり前だよなあ。

だったら、正妻だけにしてよそ見るなよつて話なのだが、そこはそれ。どうしようもないサガなのである。いや、割とそっちの一穴主義に引っ張られそうになるのだけれど、もうたくさん他の穴に入れてるしね。

というか、執着心と安心感はだいたい一緒のような気がする。

あとは、興奮度合いの一から四は、基本的に正妻があることを前提にしているのではないだろうか。つまり、正妻がいるのに、俺はそれなのに、他の女と……という背徳感というか、後ろめたさが反転して興奮を増すのである。

ここで、正妻との仲が最悪で、完全に冷え切っていたならば。「愛人のところ行ってくるわ」「あつそ」みたいになってしまう。

しかし、正妻との仲も良好な場合、「今日は朱乃と寝ようと思う」「グスツ……私がいいますのに」となるかもしれない。

どっちが興奮するかと言うと、俺的には仲が良好な方だ。くつそ酷い話だが、そうなのである。

ギリシヤ神話の浮気エピソードで有名すぎるゼウス神とか、浮気しまくるくせにその後の浮気相手へのフォロワーが物凄く適当な気がするのだが、あれはきつと正妻さんにヤキモチ焼かせて、それでゾクゾク興奮していたのではないだろうか。分かる。もし会えたら語り合いたい。

しつつかし、それだけやっておいて、たしかゼウス神は一年の内数か月しか正妻とのプレイをしないとか神話にあったような……嫉妬煽りをしつつの放置プレイ。

ハイレベル過ぎる。ギリシヤ神話のエロさはバケモノか。

姦淫禁止とかやってる性欲への強い抑圧が前提の聖書の神話に属する悪魔では、神レベルのギリシヤ神話エロには対抗しえないのかもしれない。

と、まあ、いろいろと思いつくが、正妻が基礎であり土台、そこから出発して、またそこに帰るのがハーレム王の道ではないだろうか。

ゼウス神もやっていることだし。

つまり、何が言いたいかというと、可愛い感じでヤキモチ焼きな正妻はくつそ可愛いということである。

さすがにゼウス神の正妻さんクラスの神話レベル嫉妬は困るが……。俺のまだそこまでの上級者ではない。

風呂で念入りに身体を洗わせる。本日は風呂場メイド踊り食いもなしだ。身体をほつかほかに温めて、レイヴェルとどつぷりヤルのである。だから期待されても、応えてはやれないのだ。スマンなメイドたちよ。

とうるか、俺って公爵家の男として生まれた時点で、既にメイドハーレムの条件揃ってたんだな。俺はもうハーレム王だったらしい。メイド限定だが。

うむうむ、アツサリと叶えてしまっていると、なんとうるか拍子抜けするものがある。

だからなのかもしれないな、抵抗も反論もしないメイドよりも、ちよつと拗ねて見せるレイヴェルの方が本日の興奮度合いが上なのは。

『なあ、ドライグ』

『なんだ?』

湯船に浸かりながら、我が相棒こと赤龍帝ドライグに話しかけてみる。

『お前って奥さんいたの?』

『急になんの話だ』

『いや、番つがいとうるか、まあそういう相手がいたのかなと』

『ふん、話す必要はないな』

『その反応……ドライグ……お前、まさか……』

『なんだ……その、哀れむような気配は』

ドライグさん童貞説。いや、まさかね……赤き龍の帝王ともある者が、ライバルとの喧嘩ばかりしてて、未経験なんてことあるはずが……ふふふ。

『いや、なんでもない。なんでもないさ』

『なんなのだ、いったい』

『今度、父上から良さそうな酒でも分けてもらって、宝玉に流し込んでやるよ』

『……む。度数の高いのを頼む』

『おう、任せとけ相棒』

もしそうだとしたら、俺は既にドライグより上の存在だな。憐れんでやろう。

怒らせると怖いから、ハッキリとは聞かないが。

『なあ、ドライグ』

『なんだ？』

『お前って、こうヤリてーって悶々としたりしないの？』

『身体がないからな』

『いやさ、この間タンニーン殿から娘さん紹介されてな』

『ああ……』

『さすがに姿が違い過ぎて勃起しないから断ったんだけど。あのあと調べただろ、ドラゴンの生態』

『ああ……』

『ドラゴンって他の種族にも、性欲湧くんだな……と。俺ってこの神器のせいでドラゴン属性付いてるだろ？』

『ああ……』

『そうになると、さ。いるじゃん、ドラゴンが全然姿の違う種族と交尾して生まれたっぽい魔物というか幻獣というかがさ』

『ああ……』

『龍と馬の混ざった龍馬とか、龍と魚の混ざった龍魚とか……中国にいるっぽいんだけど。お前って実は、人間型の生き物にもこう、クルものがあるのかなって……ほら、龍人とかいるし』

ドラゴンってどうなってんの？ なんで全然姿違う生き物とやっちゃってるの？ 変態度数高すぎるだろ。こわ。

『俺をそんな変態どもと一緒にするな』

『だよなあ……龍の帝王だもんな。そんなことないよな。いや、良かった良かった。本当に』

『赤龍帝の籠手』の影響でドラゴン属性付きの俺だが、このままドラゴン指数上がったら魚や馬見て興奮するようになってしまうのかと……。ドライグが変態性欲の持ち主でなくて良かった。

『北欧のロキ神とかさ。たしか、狼とか蛇の子供がいなかったっけ？』
『いるな』

『変態じゃないか』

『ああ、ヤツは変態だ』

こっわ。ロキ神こわ。なんでそんなこと出来るのか理解できんわ。いや待て、安易に神のエロを否定するものではないな。たしか、お相手はどちらも同じ女巨人だったはず。ふむ、元は普通に人型の嫁さんなのかな。

それで子供が狼や蛇の姿で生まれるとなると、やはり変身して両方もしくは片方がその姿になってヤツたのだろう。

となると、これを俺にあてはめると……狼に変身した俺がレイヴェルに襲い掛かって、ケダモノツクスでバックからやりまくる。ふむ。蛇に変身した俺が、レイヴェルに巻き付いて逃げられないようにして、一旦おっぱじめると数日間はやり続けるという超絶倫な蛇ツクスでやりっぱなしにする。

あれ？ 結構アリなような気がして来たぞ……逆バージョンや、両方バージョンでも元がレイヴェルだと知っていればいけなこともない気がする。

……どうやら俺はドライグ基準では立派な変態だったらしい。変態ドラゴン化してヘンな生き物に欲情しないように、普段から抜いておかないとマズイかもしれないな。これは。

ところで兄上は昔、黒猫の姿であちこちうろついていたことがあったと聞いた覚えがある。ということは、つまり兄上は黒猫に変身できるわけだ。

ならばきつと、猫ツクスも嗜んでいるに違いない。

こう猫の姿で義姉上の膝に乗ったりして甘えて撫でてもらったりしてるワケだ。で、その後には棘がたくさん生えているという猫肉棒で……。さすが兄上だ、上級者。

『なあ、ドライグ』

『なんだ……』

『猫又つてさ、あれって本来の姿と言うか、本性は猫なのか？』

『そうだぞ。猫が人型に化けているんだ。たしか……』

『そうか……じゃあ、昼間猫又に興奮していた俺は、立派にロキ神のお

仲間だったんだな』

やや記憶が怪しいようだが、長く神器やっっているドライグの言うことだ。間違いあるまい。

兄上も猫しているようだし、猫又にギユンと来たのは血筋かもしれないなこれは。

『自覚したか』

ふむ、つまり元々の姿が、本来の姿が人型から外れた他の動物であつても、人間形態があればイケルということか、俺は。

というか、フェニックスつて火の鳥、不死鳥とか言うくらいだから。レイヴェルも実は燃えてる鳥なのか？ うん、人型を知っていればイケル気がする。熱そうだが。

『なあ、ドライグ』

『なんだ！』

『俺、魔力で変身する術覚えてみようと思うんだが』

『ほう、確かに戦闘に緩急・変化が付けられるかもしれないな』

『とりあえずドラゴンからかな。術との相性もいいだろうし』

『そうだろうな』

『で、タンニーン殿には、子供の婚活に困っているなら人型変身を練習させろつて伝えておくことにする』

『……もらうのか？』

『いや、分からないが。結構世話になっているしなあ。まあ、縁があれば？』

『そうか……そうか……』

『というか、悪魔の中に、ドラゴン忌むべしみたいな感情があるの半分くらいはドライグのせいだろ。悪魔でドラゴンなタンニーン殿の苦労つてさ……』

神如きが、魔王如きが！ とか吠えて、悪魔もいっぱい殺したんだろうし。いや、俺も強いから正面からそうそう言われたいし、縁談もあるのだけど、古い悪魔の中には結構あるんだよね。

苦勞するわー、あーあードライグのせいだなー。俺はまだ利益受けてるからいいけどさー。タンニーン殿なんて何も無いのに迷惑だけ

受けて、それなのに文句の一つも言わないどころか、むしろ気にかけてくれるって、どれだけ人が良いのやら。

『言うな……思うな……』

『今度会ったら、謝っておいた方がいいんじゃないだろうかと思うんだが』

『俺は謝らん』

『じゃあ俺が、うちのドライグがご迷惑をおかけしまして誠に申し訳ございませんって言うのか』

まあ、縁があつたとしたら、完全人間形態じゃなくて、角と翼と尻尾くらいは残したドラゴン娘さんとかだと萌えるんだが。

ドライグのせいで苦労もあるが、ドライグのお陰でモテオーラも出ているらしいし、良し悪しか。

『さて、バカ話している内に温まったな。それじゃあ、ドライグ。俺これからヤルからさ』

『ああ、警戒を頼むと言うのだろう』

『そうそう、お願いします』

ふんふんふふーんと鼻歌で気分を誤魔化しつつ、すぐに脱ぐだろう寝間着をきせてもらう。この後のことを想像すると、硬くなって服が着づらいのでな。歩きにくいし。

さてさてと俺の部屋にいるのか、レイヴェルの部屋で待っているのか。どっちなのか聞いていない。一発で当たれば嬉しいし、外れてもそれはそれで楽しい。ふんふんふふーん。

おや、外れ。半ばレイヴェルとの共同部屋と化している俺の部屋だが、今回は違つたようだ。実はあまりレイヴェルの部屋でしたことがないので、これはこれで良い。

扉を開けると、あの匂いとは違う香り。いつものアレではない。上級悪魔以上には効かないはずなのに、パブロフの犬と化した俺の欲棒がギンギンになってしまいう匂いではない。

こういうときは、いつもアレだったのに、違うとなるとなんだか気になってしまう。ちよつとドキドキしつつ、ベッドの上のシーツのふくらみへと近づく。

実はシーツの中は違う人でした！　なんてオチを喰らわないように、そつと引きはがしてみる、と。

「うわ、えっろ……」

ちゃんと下着姿のレイヴエルだったのだが、これはまた……なんとも。

「レイヴエル、それ……」

「い、言わないでくださいまし。自分でも、なんでこんなことをしてしまったのか……」

ベッドに上がり、膝立ちでにじり寄る。そして、レイヴエル胸の突起をピンとはじいた。

「ううんっ♡」

そう、生乳首なのだ。上下の下着を着けているのに……。両方の胸の頂点とその周囲の桜色、そして下の牝豆と女の割れ目。そこだけが、下着に覆われていない。

大事なところ、敏感なところだけを露出した、下着本来の用途を完全に捨て去った代物。

エロ専用、性交専門の、男の劣情を煽るためだけにあるその姿。ありがとうございます。大成功です。性交しようと言わざるを得ない。

レイヴエルのような、ちよつと大丈夫かなと最初だけは思っていた小柄な娘がこんな物を着てしまった日には――。

「レイヴエル……なんで、こんな……」

「分かりませんわ……でも、んううう♡♡」

よし、どうでもいいな。細かいことは！　もう止まらんとぞ、レイヴエル!!

2—3 説得

ハーレム要員に猫又二匹買いたいと言ったその晩に、こんなエロ下着で待っているなんて。

まったくなあ、うちの嫁さんは可愛いなあ。

「レイヴェルは可愛いなあ」

俺の語彙が少ないために、いつも可愛い、可愛いしか言っていない気がするが、可愛いのだから仕方がない。可愛い子とは性戯したくなるものだ。

レイヴェルのすぐ隣に寝転がると、パイと顔をそらされ、こちらに背を向けてくる。寸前までこちらをじっと見つめていたのに、だ。

その小さい背中を抱えるようにして、ピタリとくつついた。それから肩から首筋にそって順に吸い付くように唇を落とし、耳まで持っていく。

「今夜はあの香を使わないんだ」

耳たぶをはみながらそう聞くと、ようやくこちらに瞳を向けてくる。少しだけこちらへ振り向いた彼女の、細められた横目。その中にある熱を孕んだ潤みが、妙に艶めかしく感じる。

「いつも、あれですと。旦那さまが、私ではなくて、香りに……」

ぐつと乗り出して目元にキスをした。ほうほう、自分で付けてる香水に……。

横向きで並んでいる状態だが、抱きしめたくなくなってしまった。下側の腕をレイヴェルとベッドの間に潜り込ませようともぞもぞすると、ちよつと身体を浮かしてくれたので、そこにするつと腕を通した。

「この感じがいいんだよな」

足も絡めてやると、身長差もあつてレイヴェルの全身を包んでいるような気分になれる。なんなら翼も使つて完全に閉じ込めてしまつてもいい。

ああ、独占欲が満たされる。いつもやってしまうのだが、実に飽きない。こういうときでなくても、膝に乗つけてぎゅーつとしてしまふし、このサイズ感がいいのだ。

年下で、背も小さい女の子に全身で甘えていくスタイル。これが良い。実に良い。

そうしていると、股間にさわさわとした刺激が来た。レイヴェルが手ですりすりとしているのだ。上り詰めるほどに強くはなく、さりとて萎えることを許してはくれないこの感じがたまらん。

「硬くなってますわ」

「ならないわけがないだろうに。いつもものはレイヴェルがいやらしい匂いをさせているから、硬くなるんだ」

「いやらしいなんて……」

「これからシようって合図なんだ、いやらしいに決まっている」

すりすりのお返しに、こちらも穴あきブラから飛び出している乳首の周囲に爪を掠めるようにしてしゅるっしゅるっとなを描いてやる。

こういうのも良いものだ。激しくガツンガツンと行くのも気持ちいいが、俺はこのじれったい感じも好きだ。何時間か続けてもいい。

「んっ……っ……っ♡」

レイヴェルの胸の辺りで腕を交差させるようにして両方の先っちょをいじる。そうしていると、俺の股間に伸びていない方の彼女の手の指がこちらの手の甲を撫でてきた。

指を絡ませたり、お互いの手のひらをくすぐり合ったり。恋人つなぎのようにして、すぐに離すこと繰り返す。白くて細くて柔らかい彼女の手とこすり合わせる感触を愉しんでいると、やはり恋人つなぎってヤツは性行為の一種なのだということがよく分かる。いや、これ気持ちいいよ。手はかなり触覚が強いからね。普通に前戯だと思う。

街中で恋人つなぎで歩いてるカップルをみかけたら、アイツら往来で盛ってやがると思っておいて間違いない。今生の俺はする側なので、爆発はしない。

「んんう」

キスがしたい気分だが、振り向いてくれないのでうなじに吸い付いておく。痕がつくようにしても、フェニックスなのですぐに消えてしまうのが惜しいところだ。

「それで、この下着はどうしたんだ。これは間違いないやらしいけ

ど」

耳たぶを唇で挟んで、はむはむと責める。

「私、いやですわ」

「耳は嫌いだった？」

結構好きだったはずだ。まあ、別の話だろうが一応とぼけて、穴の中に舌を挿し入れる。これは感触もあるが、音が効くらしい。

今、レイヴェルの頭の中は俺の舌が這いまわる音でいっぱいだろう。

「んああ……響いて♡ あっ、そうではなくて、眷属の」

それは、そうだろうな。

手遊びをやめて、絡めていた指をほどき下腹部へと滑らそうとすると、それを引き留められた。こちらの指をちよんとつまんで、もつともつと手のひらをくすぐってくる。こんなことをされては、離れられない。

なので、レイヴェルの下側から回して乳首いじりをしていた方の手を彼女の腹へと持つていく。うむ、現在開発中なのだここは。

『赤龍帝の籠手』で感度を上げてやれば早いのだろうが、なに、急ぐことはない。夫婦生活一万年以上な悪魔生、ながーい時間をかけてじっくりねつとりと染め上げていきたい。

「眷属の？」

「私の眷属まで、なんて、いやですわ。それに、あの白い猫……」

黒い方がいいのか。いや、俺が自分の眷属にするからいいのかな？

「あの子、私より小さいですわ！」

うん？ 小さいと問題なのか。

「いや、レイヴェル。さすがにあそこまで小さい子供には手を出さないけない……」

一応、資料には姉の黒猫の身長がで記載されていた。それに黒猫と白猫の並んで立っている様子を写した写真もあった。

いくら異形の種。身体バランスが子供子供した体形ではないとしても、さすがに小学校低学年クラスになると、うん。ちよっ

と、ね。入らないだろうし。いや、こつちが小さくすれば入るのか？

「でも……でも……。いつも、私のこと……」

レイヴェルがこちらに背中をすり寄せてくる。うん、このサイズ感だな。ちよūdい感じに納まる。

「膝の上に乗せて、顔の高さが合うくらいが可愛い」

「そうですね。あの白い子が来たら……」

なるほど。レイヴェル的にはそこが嫌なのか。

「姉を見た感じだと、今が幼く小さいだけで、大きくなるんじゃないかな」

「そう、でしょうけど……。その、調べてみたんですけど、猫又の幼体は周囲の庇護欲を煽ることで生存率を上げようとしているようにして。それである程度独り立ち可能な力を身に着けると、一気に成長して成体に変化するようです。姉はおそらく成体でしょう。妹の方は幼体なのだと思いますわ」

「雪女のような感じか」

ファンタジー

夢 幻な世の中に転生してガツクリ来たことの一つが雪女の生態である。成熟した雪女はゴリラなのだ。もうゴリラゴリラなのだ。

しかし、幼い雪女は見た目可愛い実には雪女をした生き物なのである。つまり幼くて弱い間は周りから守ってもらえそうな姿をしておいて、育つとゴリラになってしまふとんだ詐欺生物だったのだ、あの雪女ってヤツらは。忌々しい。夢が壊れた。

その点、猫又は猫、猫耳美少女、猫耳美女の三段変形なのか。全て可愛いとか雪女とは違うな。夢は守られた。

「ええ、ですの……その、たしかに……大きくなればそうなのかしれませんけど……」

「それまでの間も嫌ですわ、と?」

「はい……」

「それじゃあ、高一……あーっと、十五までは手を出さない。これでどうだ?」

さすがにそれだけあれば、大人体形になっているだろうしな。俺的

にも遠慮なくパクツといけるといふもの。それまでの期間で信用を重ねて、懐かせておいて、ある日突然ガバツとヤツてやるのだ。

ふふふ、なんて悪い計画なんだ。きつと泣いてしまうに違いない。でも、そのままその一度できつちり墮としてやるのだ。くくく……悪魔っぽいぞ、これは。

ちなみに、おさわりは続行中である。俺もやってるし、レイヴェルもやってきてる。うん、ただの適当な話題なのだ。

「ううう……で、でしたら、猫又には発情期があつて、それ以前はそもそも子供を作れる身体ではないそうですから。それまでは……」

「そうなのか。じゃあ、あの黒い方も発情期以外は相手にならないのか」

「そうではないでしょうか？ 猫を飼つたことはありませんけど、聞くところでは一定の時期だけこういつたことを受け付けるようですし」

レイヴェルが向きを変えたがったので、それを手伝つて正面から抱きかかえた。うん、むき出しの彼女の秘部が俺の張りつめたテントにぐしゆりと押し付けられている。

こういうことを一年の内の一定期間しかしないのか。それはまた、ハーレム要員としては不便なような、その期間だけメチャクチャ激しく楽しめて良いのか。微妙なラインだな。

「ああ、だから姉の方は……」

「その時期だけ、でしたら……その」

まあ、それもよし！ ゼウス神が正妻さんにやっているようなことだ。神クラス！ 発情期だけ滅茶苦茶にしてヤル！ これもまた異種族混在ハーレムの醍醐味なのかもしれない。

しかし、そう考えると黒歌だったか。姉の方は経験済みなのか？

「幼体からの卒業と、発情期が来るのは同じ時期なのか？」

「おそらくですけど、大人の姿になって庇護を受けずとも生きて行けるようになるのと、子供を生めるようになるのは同じタイミングで来るのではないのでしょうか？」

今が成体になった直後でまだ発情期が来る前ならば未経験。発情

期を過ぎていれば、ケダモノ発情ツクス経験済みということか。まあ、どっちでもいいが。

まだならば教え込む楽しみがある。済ならば、「くくく、前の男と比べてどうだ？ え？ 言ってみろ」とかそういう感じが楽しめるのだから。

俺はユニコーンではない。ディオドラのような処女厨＋寝取り趣味Ⅱ聖女・シスタースキーなどというハイブリットとは違うのだ。

まあ、初物を頂いた女の方が、執着心というか独占欲が増し増しになりそうだけど。

たとえば、俺の肉棒を包んでいる下着の布地に自分の愛液をしみ込ませてくる、このエロエロな不死鳥のように。どこでこういうヤラシイ誘い方を覚えてくるんだ。

あつ、俺か。よく肉棒押し付けてグイグイやってやってるな。

「脱ぐから……つと」

服を脱ごうとすると、レイヴェルが手を伸ばして来た。それに任せておくと、するすると脱がしてくるではないか。脱がすのもいいものだが、脱がされるのもいいものだ。

「ああ♡♡」

裸になったところで、エロ下着のレイヴェルを押し倒す。今夜はまずは正常位の気分だ。こう上から押さえつけてガンガン押し込んでやりたい。

脚を開かせ間に入り込み、両手を掴んでぐつと体重をかけて抑え込む。割れ目に先端を押し当てると、ぐじゅりと音がした。イイ感じに出来上がっている。

「ああああ♡ あつん♡♡♡」

「熱いな、今日は特に熱い」

一気に押し込むと肉槍全体が燃え上がるような熱に包まれた。それを前後に動かしてやると、擦れてさらに熱くなる。

頭の中にまでその熱が伝わって来て、もつともつとかき回してやりたくて仕方がない気分だ。

「ほらっ！ レイヴェル！ イイって言葉！ 白猫を眷属にしますと

「言えー！」

「いやあ！ イヤ、いやっ！ いやですわ♡♡」

「このっ！ 言うことを聞け！ おらッ！」

「いやあ、いやいやああ♡♡ こんなあ、こんああのされても、いやですわあ♡♡」

少し角度を変えて、弱いところを引つ搔いていく。ああっ、くっそ気持ちいい。レイヴェルに「いや、いや」言われるのは新鮮だ。

「ほら、こうしてやるッ！ どうだッ！」

「んひいん♡ んあんなああ♡♡!!」

ぐっと反り返る背筋、快楽に歪む表情。

俺は女の顔が好きだ。可愛いのも綺麗なものもいい。ツンとした美貌や、澄ました綺麗顔、切れ長の目や、くりっと可愛らしい瞳、それから蕩けていくのがたまらない。

「イイって言えー！」

「いやあ、嫌ですわ！ ダメえ♡♡」

「何が、ダメだ。こんなに感じておいて！」

「んんうう……♡♡」

だらしなく半開きになって涎を垂らす口元。肉欲の熱を帯び、さらなる悦楽に期待する潤んだ瞳。ああ、いいなあ、たまらないな！

「良いんだろう？ ここが好きだろう！ ほらッ、ほらッ、オラアツ!!」

「んうんあんあうい……♡♡！ いいあイヤああ!! ダメえ♡ だめえです、あんあのイヤああ♡♡」

つるんとした滑りの良い白い肌が熱情で赤く染まって、汗を流す。巻いた金髪が左右に振り乱されて、幾筋かの金糸が頬に張り付いた。

「なんでそんな嫌がる！ 手伝ってくれるんじゃないのか!?!」

「あああん♡ イイまひたあ、イイましたけど♡ でもああ♡」

「でも、なんだッ！ このッ！ ここ、も、好きだろオ！」

「ああっ♡ いいあやああ、イヤうん♡ リアスさまあは、わたひのあを♡ わたし」

「はあ!?! 何言ってるのか分からん。ハッキリ言え！ この、このッ

！」

「ひいいん♡ あうん、んああ♡ イイまひ、イイんます、から、こん、あつ♡ はげ、しい、とお♡♡」

手をつなぎたがってくるので、両手の指を絡めて行く。今日のレイヴェルは指がお好みか。

ああ、ほらドンドン蕩けてきた。ぐにやりとだらしなく、それでいて幸せそうにして、嬌声だけを上げる器官になった唇を塞ぐ。

「んうん、んん♡♡」

答えろと言いながら、口を塞ぐのが好きだ。レイヴェルの両脚が巻き付いてくるのが好きだ。

奥に押し込んでぐりぐりとこすりつけるのも。少し引いてカリ首で引つ掛けてゆすつてやるのも、媚肉ヒダ引き出しては押し込むのも好きだ！

「ツハ！ レイヴェルが好きだ!!」

ぐいぐいと腰が前に出て行く、この射精の瞬間のこれはどうにもならん！ 子宮口をこじ開けてその奥にもつともつと注ぎ込みたくて仕方ないのかもしれない。

「あああいイイツ♡♡♡!!」

ぎゅぎゅうと締め付けてくる膣内とレイヴェルの両脚。絡めた指の先が白くなるほど握りしめてくる。指の付け根あたりに爪が食い込んでくる。痙攣する肢体と共に短く荒い息を繰り返す様を見下ろすのは格別だ。

「はああー……。イイって言ったな」

「い、今のは、違いますわ。イイなんて言つてませ、ん」

「それならそれで、もう一度言わせてやるッ！」

「うあつ♡ まっ、だ、ダメエ♡♡♡!!」

さーて何回目でイイって言つてくれるのだろう。俺は朝まででもまったく問題ない！

……………。

「イヤア……♡ イヤですわあ♡♡ ダメっ、んあっ、もっど……♡♡」
「じゃあ、もういい！ もう頼まん！」

四回戦ほど続けたが、なかなかイイと認めてくれないのでちよつと趣向を変えてみることにした。まあ「イヤ」が実質「もっどお♡♡」になっっているのでそりやそうなのだが。

「あっ……あの、だんな、さま？」

手を解いて動きを止める。それだけで、ちよつと不安そうな顔になるのが実にたまらない。ベッドの端に移動して手招きすると、パツと顔を輝かせてふらふらと寄ってくるのも、これまた良い。

膝上に乗せて挿入し、抱き合う形にするといつもスタイルだ。

「なんだかんだ、これが一番だな」

「私もこれ、好きです」

ベッドのスプリングを使ってゆさゆさと責める。

「んっ♡ んう♡ んっ♡ あんっ♡ あああ、イイ♡」

「ん？ いま、イイって言わなかったか？」

「言っつて、ませ、んわ」

「そうか、じゃあもつと続けるか」

「あっん♡ はい、ああっ♡」

やはりこの幸せ蕩け顔が一番いいな。えっちのときの女の顔はこれが一番だ。断言してもいい。

角メイドはやり過ぎて、白目むいて泡噴いてたし……あれは正直ちよつと、いかんかった。

うんうん、このぐらいが俺の好みだ。特にレイヴェルは泣きやすいので、涙目とのコンボでグツとくるのが好きだ。涙をすすったときに、ちよつと反応するのが実に可愛い。

まったく、たまらんね。

「どうしてもイヤなら、別にいいぞ。ああ、黒猫は諦めてもらおうけど」
「んっうう♡ えっど、その……よろしいのですか？ 私は、その……お♡」

「ああ、ちよつと別の使い道を思いついたから、どうしても悪魔にしなければいけないこともない」

人間なら別だが、猫又は妖怪なので元から寿命は長い。要は手元に置きさえすればいいのだ。

「あの……んんっ♡ ど、うんう♡ され、るの」

「ああ、使い魔にしてみようかと思ってな」

「えう♡ あっん♡ だめえええ!! それ、ダメあ♡ んうっ♡♡
イヤイヤっ♡!」

ふふふ、もう思いついてしまったのだから仕方がないのだ。レイヴェルの腰を掴んでスプリングと合わせてガツガツとぶつけるように動かす。

「レイヴェルがすぐにイイって言わないから悪いんだ」

「ああああ——♡♡♡ そんな、やああ♡♡ イイツ、イイですか
らあ♡ つかい、ま、だめえ♡!!」

ダメダメ言いながら腰くねらせてくれるのが、ほんとイイな。あーたまらん。

うん、白猫は俺の使い魔にしよう。お掃除担当だ。先代のスライムくんの代わりに働いてもらおうとしよう。

何が良いって、レイヴェルの眷属だと、嫁さんの機嫌次第で遠ざけられてしまうが、俺の使い魔にしまえばいつでも召喚できるのだ。

くふふ、大人な発情猫になるまでじっくり育てて、それから発情期の中に仕込みまくって、あとはいつでもどこでも俺の肉棒の猛りをお掃除してくれる立派な使い魔にしてやろう。猫舌でザラザラしてるのかな。

うん、うん、楽しみだ。

俺も男だ、たまには一人で遠出したくもなる。そういうときに、ふとムラムラきたら、ちよいちよいと呼び出して解消させるって寸法よ。箒にのって宅配してた魔女も猫も俺の使い魔にしていたことだし、なにも悪魔にしくなくてもいいのだ。

俺の使い魔ならば、グレモリー家での扱いは悪くない。戦わせる必要すらないので、鍛えなくても良いし。

名前も知らない平民メイドよりも、スライムさまの方が上だったか

らな。

2-4 勃起不全のアスタロト

レイヴェルの説得は順調に進んだ。使い魔にして常時使用可能にするくらいなら、自分の眷属に迎え入れた方がイイと何度も言ってくれた。

が、俺はもう白猫使い魔プロジェクトを思い描いてしまったので、これは取りやめない。ふふん、嫁さんに弱いと噂のグレモリー男児だって、ヤルときはヤルのだ。

今後、同じようなことを頼んだときにはきつと快く応じてくれることだろう。いや、それだとレイヴェルの「いやっ、いやー」を聞きながらイタすことがなくなってしまうのか……これは難問だ。

本日の俺の予定は、自宅学習である。しかも自習。

今生の俺の頭脳はハイスペックだったようで、学校のカリキュラムを無視して進める自宅学習（特例）をしていると必要な過程がサクサク進んで行く。

そうすると、ぶつちやけヒマになるのだ。学校にありがちな行事のための時間とかもないしね……おかげで交友関係が狭いのだが。

レイヴェルはもう学校に行っているし、朱乃は現在義姉上に預けて教育させているので、ちよつとヒマが出来たからと呼び出すことも出来ない。義姉上にも、育成計画があるだろうし。

同年代はみんな学校で授業中、俺は暇。バアル大王家への訪問は、次の学校の休みの日と既に連絡・調整済み。

今まではこの空いた時間を使ってこれまでは魔力の増大に努めてきたわけだが――。

『なあ、ドライグ』

『なんだ？』

『スタミナ付けるって、とりあえず走つたらいいのかね？』

『一人ならそうだろうな。相手がいるのなら、戦闘訓練をひたすら重ねるのも有効だったが。実戦向きに鍛えられるぞ』

我が相棒にして、歴代赤龍帝のトレーニング風景を見続けてきたドラゴンでもあるドライグ。

彼はちよつと、なんでもかんでも戦闘に直結させて思考してしまうところがある。いや、戦闘用神器に宿っている魂としては正しいのかもしれないが。

『最近ちよつと腹筋が割れて来たんだよな。腕とかも筋肉も付き始めたし』

筋トレをした覚えはないので、これはやはり寝室での闘争の結果だろう。腰振りまくったり、レイヴェルを上げたり下げたりしてズボズボ、朱乃の尻を叩いたり胸を揉んだりしてついた筋肉だ。

うーん、実戦的。興奮していると普段よりも力が発揮できる。つまり、いわゆる火事場のクソ力的な状態で「ふんぬおおお！」と頑張った結果なのだろう。体位によっては結構力要るしな。実際、昨晚膝上にのせたレイヴェルを上下しまくったせいなのか、あちこち筋肉痛である。

少し前までは貴族的優男だった俺。そんなヤツが、ワイルドセックスマシーンの肉体を手に入れる日は近いのかもしれない。

ということは……メイドたちを筋トレマシーンに見立てて、こうスクワット一回ごとにズポつとするとか、腕立てとピストンを連動させるとか、つるしたメイドの穴に向けて懸垂で挿し込むとか。そういう訓練をしたらはおどるのではないだろうか。腹筋も同じ要領でいけるかもしれないな。

筋肉ピクピクしてるギリギリの辺りは辛い。辛いが気合を入れて動かせば、そこにはメイド穴が待っている。そうなれば、忍耐の足りない次男な俺でも意外と頑張れるかもしれない。

うーん、バカらしい。

『で、結局走るのはか』

レーティングゲームのフィールド作成技術と同じもので作られた、俺とその眷属用の空間を走る。

体力づくりを始めた俺の新たななる師匠は、二天龍の赤い方ことア・ドライグ・ゴツホ。魔力の師匠が初代バアルのゼクラム祖父さんで、ハーレム道の師匠がハレキン先輩ことライザー義兄上だ。実に豪華

な顔ぶれと言えよう。山のような金積んでも、そうそう得られないだろう面子だ。

『ハーレム王になるためには、「まずはスタミナが必須ですわ!」って言われたからな』

精力はなんとかなるのだ、膨大な魔力のおかげなのか知らんが、どんだん絶倫になっていつている。魔力が肉体に作用して、俺のハーレム王願望を叶えようとしてくれるのだろう。たぶん。

だが、このスタミナの方はどうにも自力で鍛えないといかんらしい。一晩で眷属全員に三回はヤル。それもガッツリと。それに必要なだけの体力を付けねばならん。

ついでに白龍皇との戦いの役にも立つだろうし。あつて困ることは無いのがスタミナってヤツなのだろう。

ヒヨロヒヨロ貴族を卒業するのだ。でも、サイラオーグみたいなムキムキマッチョはごめんだ。モテそうな感じの締まった肉体美になりたいものだ。いや、マッチョも需要はあるらしいけど。

『きつつ……、吐きそうなんだが、これ』

『キツクなければ何の意味もないだろうが。戦闘に必要な肉体づくりには、緩急が必要だ。短距離を駆け抜けるつもりで全力で走れ、呼吸の限界まできたら緩やかに速度を落としつつ走る。だが止まらず走り続けろ』

『ういす……』

『そら、息が整ってきたな。もう一度全速力で走れ。これを倒れる限界まで繰り返し返せ』

死ぬ……、だがこれがハーレム王に必要なと言われるとなんとなく理解できてしまう。一気に責めるときは責め、その後緩やかにして、しかし昂ぶりが落ち着く前にまた急激に責める。時には弱点を連続で責めさいなみ、その後イキ着く前に快感の弱い場所で焦らしてやり、そしてまた急転直下で責め立てる。

ドライグの言う、スタミナ? を付ける訓練法はたしかにハーレム王に続いているのだろう。

ハレキン先輩ことライザー義兄上なんて、鍛えていないなんて言っ

てるわりにはスタミナあるからな。レーティングゲームの試合を見ていると、ライザー義兄上はかなり被弾して不死身の特性を發揮させている。しかし、そうそうスタミナ切れで撃沈することは無い。

レイヴェルに聞いてみると、不死身の特性は魔力以上にスタミナを消耗するらしいので、ライザー義兄上のあの戦闘スタイルは相当なスタミナがなければ出来ないはずなのだ。でも、あの人、持久走はそう得意でもないらしいし、やはりベッドの上の戦争で付けた体力に違いない。

『ハーレム王にはスタミナが必要。やはりレイヴェルの言う通りなのか』

『こんな平らな場所ではなく、山などの方が効果が高いぞ』

『この上、足場を不安定にして、さらに勾配をつけるのか……』

あー、も無理。死ぬ、死んでしまう。息がもう、あれだ、心臓がおつそろしいことになっている。

膝をついて、ぜひぜひと息を吐いているんだか吸っているんだか。

『五キロも経たずに何をやっている。最低ラインとして、毎日二十キロはこれをやれるようになっておけ』

ドライグコーチ厳し過ぎない……？ そんなの出来たら、俺はマラソン選手になれてしまう。

『人間如きでもやれていたことだ。肉体的に人間に勝る悪魔のお前が出来ないなどと言うなよ』

純血悪魔が人間如きに、と言われては何も言い返せない。魔力使えばどうとでもなるんだが。

『ドライグは、歴代の赤龍帝にもこういうトレーニングを頼まれたりしていたのか？』

『いや、なかったな。お前が術でドラゴンに変身するというから引き受けたが……そうだな、感傷かもしれん』

『感傷……？』

『お前はバケモノだ。今はまだまだだが、その身に宿る才能を育て上げれば、「赤龍帝の籠手」なしでも全盛期の俺とやり合えるだけの素質を持っている。話に聞く、サーゼクス・ルシファアの真の姿のように

な』

『まあ、兄弟だからな。同程度の素質があってもおかしくないだろう』
『純血悪魔の赤龍帝というだけでもおかしいのだ。それが、悪魔の中の規格外である超越者だなどと、これ以上の赤龍帝はこの先出ないだろう』

『俺は寿命以外で死ぬつもりはないから、そうなるだろうな』

仰向けになって、息を整える。呼吸と関係なく会話できるのがドライグのいいところだな。これで俺が物語か何かの主人公で、ドライグが女性人格かつ献身的なタイプだったりしたら実体がないのでメインは張れないだろうが、なんだかんだ人気が出ちゃうサブヒロインの立ち位置だ。しかも、最終的に実体を得てかささらっていきそうな感じの。

コイツはオスなのであり得ないが。男女で扱いは変わるのだ、悲しいことにな。

『その最大級の基礎能力を持った宿主が、ヤツを、白龍皇を封印するとういう』

『何度もやってられないだろう。普通に考えて』

『ならば、俺とヤツの争いもこれが最後かと思うとな』

俺にはライバルがないのでよく分からない。前世では他者と張り合うほどの自信がなかった。今生では、強さで張り合ってくるヤツが今のところいない。仮想的として、いつか来る白龍皇がいるだけだ。

『最後なら、ぐうの音も出んほど圧倒的に潰してやりたいじゃないか！』

くっくくく、と悪そうな笑いが響いてくる。本当は自分の力で、拳で叩き潰したいって感じが伝わってくる。

その辺りの琴線に、ドラゴンモード覚えるぞーって俺の考えが触れたのかね。まあ、ありがたいから良いが。

というか、ドラゴン変化するぞって考えの元が、『UウルトラDディフォルメダンガム』ってことは言わない方がいいんだろうな……これ。

シーグヴァイラのヤツは、全シリーズ肯定派などと言いつつ、UD

のことを認めていない節があるからな。ハッ、UDの功績を認めろよリアル派閥め！俺のプラモ歴はDD戦士から始まったのだ！

禁手の魔王モードから、紅のブラッドドラゴンへの変化。サタンダングラムを知っていたら、やってみたくなるものだろう。籠手なし↓籠手あり↓禁手↓ドラゴン化、四段階なんてこう如何にも悪役チックで、悪魔らしいじゃないか。あの悪霊というか、残留思念共は消し飛ばしたことだし。敵が白銀色というのもピッタリだ。

『潰すと言えば……「ドラグ・ソボール」だったか』

前に一度、人間界に行った時のことだ、俺は知らなかったのだが、あのシリーズの続編がいつの間にか始まっていた。ダングラムとは別の、俺の子供時代を染め上げたあのアニメの。

それで続編と共に最初からおさらいで観たのだが、ドライグはあれが結構気に入ったらしい。こういうのがやりたかったとかなんとか。好きそうでもない、ガツツンガツツン殴り合うバトル。

『ああ、あれお前に付き合って三回は観たな……』

俺は再放送含めると、相当な回数こなしているぞ。

『あれの修行方法にあったらう』

『修行方法？』

『ああ、お前にかかっている「重力」に「譲渡」してみたらどうだ？』
うっそだろ、このドライグ。その発想が出るのかよ！マジか……アレが出来てしまうのか？おれわくわくすっぞ！



死ぬかと思った……危うく最強の赤龍帝が圧死するところだった。調子に乗ったら危険信号だな。

さわやかな運動の汗が、冷や汗になってしまったので、今日はこれで終了とした。

動く気力がまったく湧かないので、メイド風呂に浸かってそのまま部屋で休憩・昼寝。起きてから食事を取って一般上級悪魔子息たちの下校時間を待つ。

そろそろ良からうという時間帯になったので、ディオドラに通信をかけた。

『よう、同志シスタスキー』

『やあ、同志メイドスキー』

当たり前だがこんなアホな会話は使用人には見せていないし、聞かせていない。

『実は折り入って頼みがあるんだが』

『奇遇だね。ボクの方も少し相談事があってさ』

『ああ、それは都合がいいのか』

『こつちも、そうなるのかな？』

『俺の方はベルゼブブさまにお願いしたいことがあってな。アスタロト家から頼んでもらえないかと』

『ボクは、あーと……大王派というか、ゼクラムさまか。ちよつと問題があつてさ。あんまり叩かれたくないんで、上手いこと言っておいて欲しいんだ』

俺はディオドラに、エダーギ・ナベリス殿から来た手紙の話をし、その中の『僧侶』二駒を使っている眷属を俺の変異『僧侶』一駒で引き取れるようにしてもらいたいことを伝えた。

『ベルゼブブさまなら、一度駒を抜き出して差し替えるなんてことも出来そうに思えるんだが……』

『確かに、片方が変異『僧侶』の二駒と、ナベリウスの通常『僧侶』二つじゃ釣り合わないか。特に君の場合は』

『ということで、なんとか頼んでもらえないか？』

『そうだね。ボクよりもラティアからの方が聞いてもらえそうだけど……どうにかしてお願いしてみるよ』

『いやー、助かる』

悪魔の男性は、そこそこの年齢を重ねてくるとどうにも親類の年下女性に弱くなる傾向がある気がする。

ディオドラがわざわざ名前を出したということは、そういうことなのだろう。上手くいったらラティアにも何かしらの礼をした方がいいな、コレは。

『で、ボクの方なんだけどさ……』

『ああ、ゼクラムさまに話を通しておきたいことだったか』

『実は、ボクさ……転生悪魔と結婚しようと思ってるんだ』

『はっ!?!』

『いや、君が結構な純血主義者なことは知ってるけどさ。ボクにもボクなりのどうにもならない事情があつてね』

『いや、でも、お前……アスタロト家の次期当主が……』

『実はさ……』

そう言うと、通信映像の中のディオドラは顔を俯かせた。

『勃たなかったんだ……』

『はあっ!?! いや、おまつ……えっ?』

『ああ、いや、勃つことは勃つんだけど、なんていうか……純血悪魔のお嬢様が相手だと、無理だったんだ』

『その、あれか? シスターとかなら、イケると……?』

『そうそう! いいよね! 聖女とか、あっちならビンビンなんだけどさー。あー……なんていうか、この間、君みたいに見合いがあつてさ、それで相性も大事だろう? 結婚したら先が長いんだから』

『まあ、長いよな。正直、一一年以上とかよく分からなくなる』

『で、相手がどうにもこう、いわゆる「わがままプリンセス」な性格でさ』

『まあ、純血悪魔の貴族令嬢ならだいたいそうだよな』

悪魔は子供がそうそう生まれない。兄弟姉妹がいても何百歳差になるのが普通だ。なので、かなり甘やかされがちだ。特に女子の場合は物凄く可愛がられることが多い。なんとというか、年下の血縁女子に甘い悪魔が多いのだ、本当に。特に百歳越えたあたりからの男性悪魔。

で、結果として性格はかなりワガママになる。ライザー義兄上が「わがままプリンセス」と評したレイヴェルは相当マシな部類で、うん、まあヒドイ子はとても酷い。

『ボクもさー、ラティアとかソーナくらいの性格なら我慢できるんだけど、いや、アレは無理だったね』

ラティアは、かなり良い方だ。ソーナについては個人的には結構な強欲さだと思っているが、平均からすれば滅茶苦茶マシである。俺が言うのだから間違いない。

というか、ソーナはどうしてああも欲張りなのか、「そんなに一度にできるわけないだろうが、過労死するぞ」と何度言っても聞いてくれない。おかげで先日また喧嘩になってしまった。

ホントになー。レーティングゲーム頑張る！ 当主業務も頑張る！ 学校も作るんだ！ とかさー、もうね。順番に一つずつ手を付けないと何度言ったことか。

特に学校の話はキツイ、下手なことするとシトリー家が他領の平民を私兵化しようとしているって思われてしまうかもしれない。場合によっては暗殺されるなんてこともあるかもしれない。そんなことになったら、俺がそいつの領地を吹っ飛ばしてしまうだろうが！

シトリーのおじさんは、「あと十年ぐらいで引退したいなー」みたいなことを言っていたので、そうなるならソーナは当主だ。なら、まずは領地経営に専念しろと。それで五百年くらいいきつちり勤め上げて、引退。レーティングゲームはそこから本格的に開始して、そこで結果を残して、それから「あのランキング上位のソーナ・シトリーがレーティングゲームの学校を！」みたいな感じにした方がいいだろう。個人的にはそう思っているんだが、ソーナは一気にやりたいって言って引かんのだよな。お前は寿命の短い人間なのかと、ほんとにもうなー。

それに学校作るにしても、シトリーが作って、シトリーが教えてつてそれもうシトリー流の教育が染み付いた、シトリーの教官の命令に従う、シトリーの兵隊じゃないかって、そう思われそうなんだが……どうなのかね。

俺としては、魔王さま方に主導してもらって、まずは下級悪魔リーグとかを作るところから始めた方がいいと思うのだが……。転生悪魔はいいとしても、平民がレーティングゲームの学校出ても、上級悪魔から『駒』をもらえなきゃ現状のレーティングゲームへの参加はできないよな？ 違ったんだろうか……あれだけ言うのだから、何か俺のよく分かっているところがあると思うのだが、ほんと頭のイイ奴

の考えることは分からん。

もつとこう、気長に行こうよソーナちゃん。未来計画が短いスペインに詰め込み過ぎだと思っただ。過労でやつれるぞ。

「だいたい「どうして分かってくれないのですか!?!」とか言われても分からんわ。俺は読心能力者じゃないんだよ。つつこんでもイイってことなら、下の口から聞ききだしてやるが。しかも、最後に「おにーさまのバカ!」と来やがる。そこは「おたんこなす!」だろうが、自分でもおバカだとは思っているが、改めてソーナから言われると傷つく。だから、オブラートに包んでください。

でも、久しぶりに「おにーさま」呼びで少しうれしかった気も……。

『あーつと聞いている?』

『いや、すまん。この間、ソーナと言い合いになったことを思い出してた』

『ああ……。というか君とシトリー家って仲良すぎじゃないかな?』

この間、グラシヤラボラス卿が気にしてたよ。ほら、ボクらも結構仲良い方だろ? アスタロトとグレモリーもってなるとさ』

『いや、ゼファードルの件があったから、グラシヤラボラスは……。どうにも寄り付きにくい』

グレモリーの次期当主が魔王派閥代表の四家の内、グラシヤラボラス家とだけ疎遠つてのは良くないよな。しかし、なんともね。頭を下げてごめんね、なんてことは出来んしな。

『ま、話を戻そうか。とにかく、貴族令嬢相手じゃボクのモノが勃たないんだよ。女の子つてさ、もつとこう純真で、純粹で、控えめで、献身的っていうかさ』

『言いたいことは分かるが……。その、つまり元聖女かシスターの転生悪魔と結婚するつもりなのか?』

『実はね! いい子を見つけたんだよ! これがホントに理想的な感じでさ! その子を上手いことハメて墮として、結婚しようかなって思ってるんだ』

まだ眷属にもしていないのか。さすがのディオドラ。

『結局、そこは変わらないのか……。』

『ボクは女の趣味に嘘をつけない男なんだ！　ま、無理矢理思い込んで、わがまま令嬢とやれないこともないけどさ、なんていうかなー、それってボクもキツイし、相手にも失礼じゃない？』

『オーラで分かるからな……』

レイヴェルとの行為でよく分かったが、お互いに気持ちよくなりた
い気持ちよくしたいって感情のあるなしは重要だ。あれがないと、魔
力が意志や想いに反応する性質からして……まあ、ハッキリ分かって
しまうよな。

『ボクは貴女のことがかまったく好きではありません、むしろ嫌いです。
でも子作りは義務なので仕方なくやりますね。って感じで後継者で
きるまで何百年とか、どんな地獄なのかって思うとね』

『それは……キツイ』

『だろ？　それに一度、敬虔な教会女の味を知っちゃうと、ちよつと
ね。彼女たちってさ、もちろん処女なワケだけど、食事も貧しいこと
が多いんだ。贅沢はダメみたいになってて。そんな儂い人生の楽し
みのほとんどを捨てちゃってる娘たちに、色と美食を教え込むのがさ
……たまらなくてさ。ほんと、転げ落ちるってああいうの言うんだ
ろうね』

おお、優し気フェイスが崩れて本性が出ている。コイツほんとに悪
魔っぽいな。ちよつと憧れてしまう。

『それで、ゼクラムさまにはどう言っておけばいい？』

『実態はそれなんだけど、さすがに名目がないと大王派から叩かれて
いびられそうで困るから。転生悪魔たちのガス抜きってことで、伝え
ておいてくれないかな？　アイツら結構不満を溜めてたりするで
しょ？　反乱起こされても困るし、そこにこう、魔王輩出の名門アス
タロト家の次期当主が、転生悪魔、それも元は教会出身の者を正妻に
しました！　とか良い感じに受け取られそうじゃない？』

『ああ、俺とは反対な感じか』

『君とは逆にさ、上から降りていく感じにすると人気が出るんだよね。
大概』

生まれながらの完全な純血の上級悪魔なのに、人間からの転生者に

も理解のあるアスタロト家次期当主さま、か。

『不満分子から、上手いこと情報を引き出すとか出来そうか?』

『ああ、接触してくるかな?』

『もしあれば……だな。そういうことなら、たぶんゼクラムさまも一応執り成してくれるとは思う』

『ま、実際に出来るかできないかは別だけどね!』

ま、何事もそう上手く行くわけがない。しかし、一応のポーズというヤツは必要なのだろう、頑張ってますよーと。

『それじゃあ、多少なりとも叩かれておいた方がいいんじゃないか?』

『ああ、それはしょうがないね。本気で来られなければいいだけだからさ。口だけなら言いたいことを言わせておけばいい』

『では同志シスタスキー、ベルゼブブさまよろしく頼む』

『ああ、同志メイドスキー、そっちもゼクラムさまよろしく』

2―5 バアル大王家の次期当主さま

「リアスさま、エダーギ・ナベリウスさまとの練習試合の日程は、これで良かったでしょうか？」

「大丈夫だ、問題ない」

レイヴェルの示した日程に頷きを一つ返す。俺は基本的には暇な日が多いのだ。試合形式は、エダーギ殿が数値を指定する変則ダイス・フィギュア。

まあ、単独で強い眷属、連携の得意な眷属というだろうし、その辺りをお披露目してくれるわけだ。

「それから、人数合わせのメンバーですが、ライザーお兄さまからお借りしておきましたわ」

目当ては一人とはいえ、エダーギ殿の他の眷属も見ないわけにはいかない。

ならば試合としての体裁を整えなければならぬわけだが、なにせこちらは『王』、『女王』、『戦車』の三名。まともな形にならない。

そこで他所から足りない部分を埋める人手を借りてくるわけだ。こういうときは親族を頼るのが一番なのだが。

「ライザー義兄上の眷属なら、大体の実力が分かるから助かるな。まさか兄上から借りるわけにもいかなかったし」

「お義兄さまからお借りしたら……大変なことになりますわね」

魔王眷属はレーティングゲームには出ないので、見せてくれと方々から言われてしまうだろう。父上の眷属もそれぞれ仕事があつて忙しいし。

ライザー義兄上は眷属の数も多く、予定も空いていることが多いよななので、こういうときには実に助かる。

「エダーギ殿との試合は、レイヴェルの紹介が一通り終わったあとになつたので良いとして……。明日は大丈夫そうか？」

「バアル家は、やはり緊張しますわ」

明日はバアル大王家に訪問、次の休みにアガレス大公家、あとはシトリーにアスタロト。ま、俺の交友範囲など狭いものだ。

「気を付けるのは、現当主の叔父上と、叔母上くらいだな。次期当主のマグダランにも会ってもらうが、大人しい子だぞ」

叔父上は、異母姉である俺の母ヴェネラナへのコンプレックスやらなにやらで、もう非常に面倒くさい。会うたびにイラツイラさせられて、プチンとなりそうになる。

まあ、バアル家最強の女傑とも言われていたらしいヴェネラナ・バアルと比較され、しかもその母上は当主にならずにグレモリーに嫁いで行く。残された叔父上は、母上と比べると凡庸なために、いろいろと言われたらしい。その上、生れた子供でも大きな差がついてしまった。

母上の二人の子は、どちらもバアル家の特性である「滅び」を強く発現し、魔力量も桁違いな魔王サーゼクス・ルシファアと俺こと赤龍帝のリヴラクス・グレモリーである。

対して、叔父上の子供は魔力量がごく少なく「滅び」を受け継がなかったサイラオーグ・バアルと、その弟で長ずれば最上級悪魔クラスと言われているマグダラン・バアルだ。

マグダランの魔力は俺が育てた。ゼクラム祖父さまに魔力の扱いを習うことと引き換えの対価だな。

貴族は努力を表に見せると、優雅ではないと馬鹿にされるのでマグダランがリヴラクス式魔力トレーニングをやっていることは極秘事項になる。まあ、魔力の上昇速度が速いので他家にもバレているだろうが、こう優雅に泳ぐ白鳥も水面下では——のような感じだ。

サイラオーグでガクリとし、マグダランでは俺に世話になっている状況。叔父上はそれが気に入らなくて仕方がないのだろう。どうしても自分の子と母上の子とで比べられるからな。

俺個人としては、サイラオーグとマグダランどちらの従兄弟ともそれなりに仲良くやっているつもりなのだが、親はなかなかそう思ってくれないらしい。

そして、バアル家次期当主マグダランの母である叔母上は、一時期俺がバアル家への養子に、などという話があったせいでこちらを非常に警戒していて、なんともやりにくい。

同じ叔母でも、サイラオーグの母で第一夫人のミスラさんは、なんかエロい感じがいいのにな。



ああ、腹が立つ！　ほんとに、ああ、もう、くっそ！

あのクソ叔父上が！　ぶち殺してやりたい！

「リアスさま、オーラを抑えてくださいまし」

バアルの城内通路を不機嫌も顕わに、怒りの籠ったオーラをまき散らしつつ歩いているのが、俺だ。

それを諫めようとしてくるレイヴェルは、実に心が広いと思う。

「レイヴェルがバカにされたんだぞ！」

「ですが、ここはバアル家の……」

この城の防御結界は、貴族悪魔の城の中でも屈指の分厚さと言う話だが、内側からなら関係ない。外側からでも五十超の多層結界をまとめて吹き飛ばせるので関係ないが。

「俺は怒りを溜め込まないようと、この始祖さまから言われているからいいんだ」

怯え切った案内の使用人には悪いが、苛立ちを吐き出さなければまたプツンしてしまう。叔父上はアレなのか、俺がいつ目の前で完全にブチギレするのか試しているのか。

そういえば、フェニックス卿はマグダランと俺とで、どちらにレイヴェルを嫁がせるか天秤にかけていたのだったか。そうすると、それを知っているの嫌味だったのか？

「はあ……まあいい。叔父上がああいう方だから、レイヴェルが俺のところに来たと思うことにする」

「リアスさまは魔力が桁外れなのですから、どうにか抑えていただきませんと」

魔王サーゼクス・ルシファアの真の姿を知る者は、それほど多くない。年若い世代にはほとんどいないだろう。

なので、見かけ上の魔力量では俺の方が兄上を抜き去っているよう

に思われがちだ。実際はまだまだ差があるのだが。

「リアス兄さま」

なだめられつつ歩いていると、目的の人物から声がかかった。

「マグダランー！」

よつと抱き上げようとすると、我が従弟殿に逃げられてしまった。

「僕は、もう子供ではありませんので」

「子供ではないってことは、ハーレム作ったのか」

「いや、その、ハーレムは関係ないでしょう！」

俺は魔力増強トレーニング法と共に、ライザー義兄上から教わったハーレム道の心得もこの従弟に教えているのだ。だが、まだ性欲がみなぎる年齢ではないためか、恥ずかしがってしまうところがある。レイヴェルよりも更に年下の小学校低学年の上の方な感じなので、仕方がないのかもしれないが。まだ半ズボン履いてるお年頃だ。

とはいえ、興味はあるようなので、いずれハーレム大王バアルが誕生することだろう。うん、バアル家だけに許された特権だな、ハーレム大王の名乗りは。

「あの……」

「マグダラン。俺の『女王』で婚約者のレイヴェル・フェニックスだ。何かで連絡することがあるかもしれないから、そのときはよろしく頼む」

親戚付き合いから取り残される形にしてしまったレイヴェルを、マグダランに紹介しておく。婚約者と従弟が慣れた様子で自己紹介のやり取りを交わしている様子を見ると、俺の交友経験の少なさが浮き彫りになるようでやや悲しい。

「兄さま、あの花、上手く行きましたよ！」

「あれか、やったな！……見せてくれるか？」

「はい！」

マグダランはかつての三勢力の大戦時の戦災によって絶滅したという花を蘇らせる研究をしている。花や木などの植物が好きな男子なのだ。

俺はどうにもグレモリー気質なのか、それとも年長者意識なのか、

ソーナのときと同じような感じでマグダランに接している。

「というか、血縁のないソーナに「おにーさま」と呼ばれている方がおかしいな。転生者ムーブしてる。マグダランは従弟なので、普通。甥っ子のミリキヤスからも「兄さま」と呼ばれているし。」

ちなみに俺はサイラオグに「おにーちゃん」などと呼びかけたことは無い。気分的にはこっちが年上なんぞな。

「綺麗ですわね。リアスさまの瞳の色ですわ」

マグダランの案内で向かった先、そこにあつたのは紫色の美しい花だった。見事に残されていた古い種子から、絶滅したはずの花を復活させたらしい。まだ小さいのに頭いいこの従弟。尊敬するわ。

「ええ、バアルの血を引く者は紫の瞳を持ちますから……バアル家を象徴する花になればいいと」

「素敵ですわ。あの……この花を育てるのは難しいのでしょうか？」

「いえ、それほど手間はかかりません。いずれこの城中にこの花を植えて行こうと思ってるくらいですから」

「でしたら、よろしければいくつか譲っていただけませんかでしょうか？」

「あの庭に植えるのか？」

以前レイヴェルにねだられて、グレモリー家の庭を一つ任せることにした。そこにどんな花をどう植えて行くのか、あれからそんな話をしていたのだが、どうやらメインの一つが決まったらしい。

「ええ、リアスさまの色の一つでもありますし、お義母さまの実家の色ですから」

バアルの紫瞳と、グレモリーの紅髪、両方持っているから『紫紅の龍帝』なのだ。

母上はどうにも、可哀そう可哀そうとサイラオグとミスラさん轟負な発言が多いが、別にマグダランのことが嫌いなわけではない。叔父上との仲は最悪だがな。

なので、この花は喜んでくれるだろう。

「マグダラン、頼めるだろうか？」

「はい！ それでは後ほど育て方などを記したものと一緒に届けさせ

ますね」

滅茶苦茶嬉しそうにするマグダランに花のことを頼むと、俺とレイヴェルはバアル家の始祖、つまりゼクラム・バアルさまの隠棲先の城へと向かった。

マグダランの趣味は、あまり叔父上や叔母上から良く思われていないらしい。ただ、魔力の上昇量が同年代の平均と比べてかなり高いので文句を言われてもいないようだ。

ただ、褒めてももらえないようなので、代わりに俺が褒めているワケだ。

というか、こんな成果をグレモリー家で出したら……なんだかお祝いのパーティーとか開かれそうな気がする。あと、金儲けの得意な母上のことだ、何かしらこう上手いキャッチコピーをつけて大々的に売り出しそうな気もする。

母上は、ほんと稼ぐの上手なんだよな。美人で、強くて、金稼ぎが得意なうえに、ベッドでは可愛いとかさー、父上はホント上手くやっただな。

やっぱり、何かの間違いでバアル家に養子に出されたりしなくて助かった。

小遣いの出所が母上なので、サツパリ頭が上がらないのが悩みどころか。

バアル本家で転送魔方陣を借りて、ゼクラム祖父さまの隠棲先までひとつ飛び！ とはいかない。魔方陣のジャンプ先からしばらく道があるので、そこをゆったりラクダで進む。

「マグダランは、植物の研究者になりたいらしいんだ」

「あら、ですが当主の仕事が――」

「だから、当主を引退してからやったらいいと――」

ソーナの頑固者と違って、マグダランはそれでサクツと納得してくれた。なので植物の研究は、当主業務のための勉強と大王家の代表としてなめられないための極秘魔力トレーニングの合間の趣味となつている。まったく理解が早くて結構なことだ。ソーナのおたんこなすめ。

「私もラクダの騎乗方法を覚えるのですよね？」

「結婚したら名字がグレモリーになるから、一応召喚されたときのために格好がつく程度には覚えてもらいたい」

俺の愛ラクダは、ふたこぶだ。冥界ミツコブラクダが有名だが、フタコブラクダもいる。どうしてフタコブかと言えば、ラクダのこぶの中には脂肪が詰まっていると聞いたからだ。

脂肪の詰まったこんもりとした二つの丘。つまり、おっぱい。ならば二つが良からうよ。こうして、その間に鞍を置いてもたれかかりつつ進むわけだ。

今日は前にレイヴェルを乗せているので、ある意味前後サンドイツチ状態である！

「ちなみに、コイツの名前はゴポリンだ」

「ゴポリン……グレモリーの別名のゴモリーからですか？」

「そんな感じで名付けたと思う」

さすがに冥界のラクダと言うべきなのか、ちょっと宙に浮いて歩いてくれるので揺れは少ない。悪魔はもともと空を飛ぶので酔うこともあまりないのだが。レイヴェルも平気なようで、良かった良かった。

速度はこれ、原付くらいは出ているのではないだろうか。計測したことはないが。

ふむ、原付……バイク……二人乗り……後ろからぎゅっと押し付けられる二つのたわわ。そこから始まる野外の行為。

あ、いやダメか。レイヴェルだと髮型的にヘルメットが厳しいな。バイクに乗れるようになったら朱乃と……いや、あの黒猫もなかなかのものを……。ネコミミヘルメット、ライダースーツで野外ックス。いいんじゃないか、これは。

「ツ……もうっ！ リアスさま、こんなところで！」

おっと、硬くなってしまった。

ふむ、このままラクダの上で「これ絶対入ってるよね」というのはどうだろうか。

この丁度良い揺れ加減を利用して……いや、さすがにマズイか。

2-6 初代バアルとビッグネーム

人は、その妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「私は、主によって一人の男子を得た」と言った。

彼女はまた、その弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは大地を耕す者となった。

しばらく時が過ぎて、カインは大地の実りを主への捧げものとして持つてきた。

アベルもまた、自分の羊の初子の中から、肥えたものを持つてきた。主はアベルとその捧げものに目を留められた。

しかし、カインとその捧げものには目を留められなかった。それでカインは激しく怒り、顔を伏せた。

主はカインに言われた。「なぜ、あなたは怒っているのか。なぜ顔を伏せているのか。もしあなたが良いことをしているのなら、受け入れられる。しかし、もし良いことをしていないのであれば、戸口で罪が待ち伏せている。罪はあなたを恋い慕うが、あなたはそれを治めなければならぬ」

カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに襲い掛かって殺した。

主はカインに言われた。「あなたの弟アベルはどこにいるのか」カインは言った。「私は知りません。私は弟の番人なのでしょうか」

(旧約聖書「創世記」より)

聖書の神話に属する悪魔なんぞをやっていると、その内容が目に触れる機会もある。頭痛をこらえてそれらに取り組まねばならないときもあるのだ。

さて、この聖書なのだが、様々な物語や歴史的事実などが入り混じって形成されていったという考えがある。実際のところはどうだったのかなんぞは神学者にでも任せておけば良いのだが、有名な天地創造から樂園追放を経て、カインとアベルの物語については、ちよつと面白い意見を聞いたことがある。

実はこれ、隠喩を用いているが、人間の成長について書いているの

ではないか？ という考えだ。

楽園の中で男と女は知恵の実を食べて、男女の差があることを知る。これはつまり思春期についての記述だというのだ。それまで気にせず一緒に風呂に入っていたのに、急に恥ずかしくなって下着を身に着けるようになるのだ。でもって、女を誘惑した蛇というのは、まあ形状から想像がつくと思うが、つまり男のアレのメタファーなんだとか。

そうして、男と女がヤルことをヤれば、まあ子供が出来る。だから女は産みの苦しみを知り、男は労働をして家族を食わしていかなければならなくなる。それまでは親の庇護下の楽園にいたんだけどな。で、カインとアベルになるのだが、農耕民族と狩猟民族がどうこうといった歴史案件を飛ばして考察する。さらにこの中の「主」を「親」と読み替えてみよう。

ついでにカインとアベルの想定する年齢をぐっと下げてみるのだ。そうするとどうなるか——それまで親の愛情を独占していた長男だったが、弟が生まれたことで親がそちらばかり構うようになってしまい、嫉妬して弟に暴力を振るってしまった。と読めるのだ。

つまり、ここは子育ての注意事項の話なのだ。どこの誰の考えだったか忘れたが、こんな理解をしてみると、案外身近に感じられるかもしれない。

たとえば、弟の素質は称賛しても、兄のことは無視して辺境に追いやってしまう父親だとか。そんな人が親戚に一人くらい居たりするものだ。

「バアル領特産のリンゴを使ったパイケーキだ」

現在、俺とレイヴェルは初代バアルであるゼクラム・バアルさまからパイケーキを振舞っていたにいたっている。

この人の料理、ほんと美味いんだよな。ソーナに教育を施してくれないだろうか。無理か。いろんな意味で。

「い、頂きますわ」

隣の席のレイヴェルの緊張指数が半端ない。ガツチガチになって

いる。

まあ、仕方がない。実質的な大王派のトップだからなこの祖父さん。政治的な影響力では、兄上どころか四大魔王全員を合わせたそれと張り合える方だ。

さすがに初代は年季が違う。血縁も多いし、というか俺も兄上もこの方の子孫だし。

魔王派トップも自身の子孫、大王派も自身の子孫。どっちが勝っても、そのままやり合っても、結局このゼクラム祖父さんにとっては、己の血を継ぐ者の勝利である。もう完全に勝ち組じゃないか。

そりや余裕あるわ。

それにおそらくだが、初代グレモリーさまはこの方にとっては妹のような感じになるのではないだろうか。たぶん、グレモリーの家訓やからも知っていることだろう。

こうやって親し気に振舞われると、俺は簡単に懐くぞ！ 何をやるにしても、「いや、祖父さんには世話になってるしな」と考慮してしまうのだ。俺をマグダランに近づけたのもこの方の差配だったようだし……。おのれ、いいようにあしらわれてしまっているじゃないか……。でも、腹は立たないし、嫌いにもなれないというね。

祖父さんの方もそれなりに融通利かせてくれるしな。やはり当代の叔父上とでは格が違うのだろう。

バル家とグレモリー家は実は結構縁が深い。現在でこそ当代の叔父上とうちの母上が不仲だったり、魔王派筆頭の兄上と大王派のトップである大王家ということ仲が悪く見えるかもしれない。

だが、古くから共有している縄張りなどがあつたりするようなので、たぶん昔はそこそこに良い付き合いだったのだろう。

なので、このゼクラム祖父さんはグレモリーの扱いを心得ているというワケだ。

情愛深く、身内に甘いことが売りのグレモリーさんは、親しくされると裏切れないし酷いことが出来なくなってしまうのだ。家訓的にもね。

逆にそんな風に考えていた相手から裏切られたりすると、情愛が憤

怒と憎しみに、甘さが苛烈さに転換したりしそうだが。少なくとも俺はそんな感じになりそうな気がする。

こう、「よくも裏切ってくれたな、絶対に許さん！ その行動、万死に値する！」とかそんなことを言っつて、何もかも灰燼に帰した後で泣いてしまいうさだ。

「んっ、んぐっ」

別にエロい声ではない。レイヴェルが喉にパイケーキを詰まらせただけである。ほんとうに滅茶苦茶緊張しているな。

失礼を働いたと頭を下げるレイヴェルに、

「よいよい。レイヴェル姫もそう固くならずとも——」

「いや、なかなか厳しいですよ。それは」

レイヴェルの背に手を添えながらそう言うと、祖父さんは小さく笑みを浮かべた。

「ふむ、仲が良いようで結構。思えば、私は現当主の相手の選考を誤ったのかもしれない」

「叔父上のですか」

「ミスラにはすまないことをした。そう思っつてはいるのだ」

ゼクラムの祖父さんは、『悪魔』にはそれなりの敬意を払う。ここで言う『悪魔』とは、古から続く上級悪魔、いわゆる純血悪魔のことだ。それ以外の悪魔、『悪魔の駒』で悪魔種へと転生した転生悪魔や、下級・中級の悪魔はこの方の中では真の『悪魔』ではない。あくまでも『眷属』であり、下僕、真なる『悪魔』に仕える奉仕種族の『転生者』と『平民』なのだ。

まあ、俺もその考えに異論はない。転生悪魔はそもそも下僕として扱うことを了承させた上で転生させるのが本来の形であるし、下級悪魔は純血種と比べて圧倒的に弱いので交配可能で姿が似ているだけの別種族なのだろう。

ドラゴンなんかだと、種族差が大きいしな。下位の種族のドラゴンが、強大な上位種族の龍に庇護を求めて仕えているなんて普通の話らしい。タンニーン殿のところも似たようなものだろう。面倒を見てもらって居なかつたら、滅んでいた種族なのだから。

そして、下級悪魔の『平民』は人間よりは基本的に種族としてのスベックが高くせに、戦意というものが欠けているように思える。

魔獣に襲われても逃げ惑うばかりで、立ち向かう者のなんと少ないことか。お前ら、腐っても悪魔の端くれじゃないの？ 平和な日本の一般市民みたいな行動しやがって、と思ってしまうのだ。まるで、前世の俺のようだな。

軍に入るヤツは見所がある。だが、それ以外の兄上たちが甘いことで調子に乗って「弱さを盾」に権利を主張する『平民』の多いこと多いこと。うんざりするね。

最悪でも、『悪魔』は何処へ行っても生活を維持できる。断絶した元七十二柱の家系の末裔が、人間世界でよろしくやっていたなんて時々聞く話だ。しかし、『平民』は違う。庇護者がいなければ生存が難しい生き物なのだ。

人間じゃないんだぞ！ お前らは、強さがすべての異形だろうが！
それが助けてもらって当然、公平な扱いをしてくれないと嫌だなんて抜かしやがって！

そんなことを言いながら、俺の従兄を「魔力が少なくて弱い」なんて理由で甚振りやがって、くそが。ミスラさんに止められなければ、全員消し飛ばしてやったものを……！！

「リアス」

「申し訳ありません。つつい嫌なことを思い出してしまいました」

アイツら、頭悪いだろ。当時のサイラオーグがいくら弱そうに思えても、親が出てきたら皆殺し確定だったんだぞ、ホント。

「お前のその癖は治らん。いや、『憤怒』を司るには丁度良いのかもしれないが」

「『憤怒』ですか？」

「なに、まだお前が気にすることではない。まずは、グレモリーの当主を勤め上げることを考えておけばいい。その先の話だ」

正直気になるが、「気にするな」と言われてはこれ以上聞けないか。しばしの歓談の後、一通の手紙を取り出した。

「アスタロト家の次期当主、ディオドラからのものです……ご配慮い

ただければありがたいのですが」

「ふむ、受け取ろう」

文面に目を通したゼクラムの祖父さんは……豪快に笑いだした。

「ははははははは、いやはや、若いというのは恐ろしいな。正妻にというのは、少々問題だが……いいだろう。ふふ、しかしこれは、むしろ称賛を浴びるかもしれないな」

「おや、それほど面白い内容でしたか?」

「ん? お前にも協力を仰ぐと書かれているが」

「はい、それは承知していますが、そこまでの内容だったかと」

ディオドラの趣味の延長だよな? 聖女・シスター好きが高じて純血悪魔じゃ勃たんくなつて、転生させた聖女を妻にしたくなつちやつたという。

『悪魔』にこだわるこの方が、そこまで愉快になるような話だったか?

「読んでみなさい」

「はい……、は? はあつ?! ……ホントかこれっ!」

マジかッ! スゲーなアイツ、聖女って、えー、マジか! すっげ、こんなの見つけて来たのかよ!

「リアスさま。そのお話は私が伺っても良いものでしょうか? 正直気になるのですけれど」

ゼクラム祖父さんが頷いているので、レイヴェルにも内容の一部を見せた。

「……は!? え、まさか、ここまでの大物を……ジャンヌ・ダルクの魂を持った転生者なんて!」

「ある意味では、私よりも有名な存在だろうな」

祖父さんの言うとおりだ。前世の俺は、オタク故にある程度オカルトチックな知識もあったが、正直なところ七十二柱の名前なんて幾つかしか知らなかった。

そんな俺でも、聖処女ジャンヌ・ダルクの名前は知っていた。映画にもなっていたし、オタク界隈ではもういろんなところで使われていた名前だ。聖女としての知名度ならば、あの『聖母マリア』の次くら

いになるのではないだろうか？ いや、言い過ぎか？ でも、俺的にはそれくらいになる。

今までのディオドラの趣味とは異なる。大人しめの純粋な子が好きだとか言っていたのに、まさかの戦争する聖女か。

でも、分かる！ 興奮するのは、ものすごく理解できる。有名人だもの。名前聞いて、その対象にいやらしいことをすることを想像すると、うん……実際にデキル相手として存在しているとしたら、しかもやれちやいそうなら、そりゃ滾るわ。

俺でも欲しくなってしまう。まあ、さすがに友人の見つけてきた相手を取ったりはしないが。俺、グレモリーだしね。

いや、とんでもないの持って来たなアイツ。すごいわ。どこから探し出して来たんだって、そりゃ教会系か……。

俺の手が届きそうな位置にいる有名人って、誰かいるか？ うーん、一応あの人は芸能人か。番組持ってるし。いや、でもさすがに立場的にマズそうだな。うーん。

「ジャンヌ・ダルクを悪魔に墮とすか……なかなか愉快的話を聞いた。お前たちがそういった者であるのなら、あれを話しても問題なさそうだ」

「リヴラクス」と呼ばれたので姿勢を正す。

「お前にある縄張りを任せたいと考えている。もちろんグレモリー卿にも話を通すが、場所は、日本の駒王町という少し前までバアルとグレモリーの共同地域となっている土地だ」

「駒王町……日本の土地を俺の縄張りに、ですか」

「ああ、前世は日本人だったのだろうか？」

「ご配慮いただきありがとうございます」

ヨーロッパの土地でやってくれ、と言われるよりはかなり楽だ。風習などもなじみ深いものになるし、なにより故郷だからな。

「ただ、その土地では前任者が問題を起こしているのだ。それで——」
数年ほど前、駒王町をバアル家で取り仕切っていた時期。縄張り運営を経験したいという上級悪魔の女性に、土地を貸し与えたことがあったそうだ。

しばらくの間、その運営は順調で特に大きな問題もなければ功績もない、どこにでもある悪魔の縄張りの風情だったらしい。

だが、その悪魔女性は教会の男と恋仲になってしまった。それも、デイオドラのように悪魔側に墮とすといった形ではなく、だ。

「それは、また……相手の男はそのまま教会に居続けたのですか？」

悪魔相手にガチ恋しておいて、そのまま教会に所属したままとかないよな？ ドロップアウト組になりそうなものだが、教義的に考えて。

いや、デイオドラに操られて内部情報を流してくれている協力者のような形ならば、あり得るか？

「教会側にもそのことを知られた。皮肉な話だが、『悪魔と教会の者が、双方ともに真剣な恋愛をするなど認められない』この見解は我々と教会側とで一致したのだ」

教会も悪魔も、それぞれの立場で二人を説得したが、引き離すことは出来なかった。

そうして体裁を保つため、教会は教会側で、悪魔は悪魔側で、許されざる存在として処分したのだそうだ。

「その、悪魔の女性は連れもどせなかったのですか？ 男もさらってきて百年ほど二人で幽閉でもしておけば、勝手に終わったのでは？」

基本的に、上級悪魔の女性は美女か美少女だ。殺してしまうなんて、もつたない。いらぬなら俺にくれ、と言いたいところだ。男はどうでもいいが、マジ恋モードでは話も聞かんとすると、人間の寿命が尽きるまで幽閉などで良かった気がしなくもない。男の年老いて行く姿を見て、女性が眷属化しようとする可能性もある。相手が転生悪魔になってしまえば、それはそれで問題も少なくなるだろう。

「教会側との政治の問題だったのだ」

「政治が絡んではなんとも言えませんが、純血の悪魔が減ってしまったのは悲しいことですな」

「ああ、まったくその通りだ」

「共同地をバアル側が扱っている際に生じた問題だ。できれば、後任はバアルの血を引く者に任せたい。だが、グレモリー家にも配慮が必

要になる。そこで、その土地に関わるバアル側の権利を放棄しようと考えているのだ」

ふむ、過去に問題のあった土地をバアル家の血筋の者で処理してきた。しかし迷惑のかかるグレモリーにも一定の配慮が必要。それで、俺になるわけか。

「正直、前任者の時に問題が起きていたとして、それは俺に何か関係があるのかと……そう考えてしまうのですが」

「そうだな。お前の評価には関係のない話だ。だが、バアルの面子も守らねばならない」

あの土地ってー、バアル家の管理の時になんかやらかしちやったらしいよー。えー、やだー、かつこわるーい。

などと言われないようにバアル家ゆかりの者を置いて、

あそこってー、あのリヴラクスさまの縄張りらしいよー、えー、そうなんだー、すつごーい。

とか言われるようにしないといけないのか。何がすつごーいなのか自分でもよく分からないが。前任者が問題行動起こしていても、後任の営業担当には関係ないよね？ え、違うのかな？

「その件、一般の人間に何か被害は出ているのですか？」

「いや、我々と教会側だけで済んでいることだ」

「では、現在その土地の教会勢力は？」

「あちらも一旦手を引いたようだ。今はどちらもいない空白地帯となっている」

「教会勢力がいたということは、教会の建物はあるのですか？」

「ああ、今は誰もいないはずだが」

ほう、空き教会。廃教会なのかな？ 興味深い。

こう欠けた十字架のある礼拝堂で、……そうだな朱乃がいいか。礼拝堂で、堕天使と悪魔の翼を広げて、SMプレイなんてそそるかもしれない。

「その教会の建物と土地の人間の法律上の権利ですが、こちらで入手できますかね？」

「ふむ……、教会側既に手を引いている建物だが、どうする気かね？」

「いえ、もし教会勢力がその建物に戻って来ようとしても、人間の法律で追い出してやろうかと思ひまして」

教会の戦士共は人間なので、おまわりさんには敵わないのだ。国家権力に屈するがいい。

「試してはみよう」

「そういうことでしたら、お受けいたします。父上には……」

「私から要請しておこう」

その後、その駒王町についての話を少しばかり詳しく聞いた。

「さて、リアスに、私から頼みたいことがある。レイヴェル姫は――少々席を外してもらえないかね？」

「は、はい」

慌てて退出するレイヴェルに、部屋の前に待機していた使用人が付く。

レイヴェルには聞かせられないこととなると、本当にバアル家の内部の話か。俺が聞いて良い話なのやら、いや、頼まれてしまっているワケだが。

「サイラオーグとミスラのことだよ」

「ええ」

「どうやらサイラオーグが闘気などの技術を身につけ始めたようですね。マグダランを打ち負かし、次期当主の座を得ようなどと考えているのではないかと」

まあ、辺境に放置していると言っても、監視くらいは付けているだろうな。ちなみに俺は、できればこの件には関わりたくない。

他家の後継問題なんて、絶対ろくなことにならないだろ。といって、俺のグレモリー家後継者指名にはバアル家との関係性が重要視されているかもしれないので、なんともかんとも。

「本人から、そのような話を聞いたことはありませんよ。ですが、まだ中級悪魔に勝てるようになった程度ですよ？」

現状なら、マグダランの方が強い。これは確かだ。ただ、あの筋肉はヤバイね。

「――大王バアルは今も昔もこれからも、滅びの魔力を持った者が、宗

家の跡取りでなければならぬ」

「それで、何をしろと?」

「現当主に、あの親子との縁切りを認めさせた。あとはあちらが了承すれば円満に解決する」

「叔父上が、サイラオーグを外に出すことを認めたのですか」

元々ミスラさんとサイラオーグは、バアル家での立場を失った際に親子ともども実家のウアプラ家に戻ろうとしていた。だが、それを叔父上が「バアルの恥を外に出すわけにはいかん」とサイラオーグを手放さなかったので、息子を守るためにミスラさんもバアル家に残ったのだ。

たしか、グレモリー家で引き取ろうかなんて話もあつたはずだが、その際も「嫁に出た女が口を出すな!」とかなんとか母上と叔父上でやり合っていた覚えがある。

「ウアプラをなだめておく必要がある。いまさらだが、やらないよりは良いだろう」

「力を付けて来てから追い出すとなると、サイラオーグはともかく叔母上はいい気がしないのでは?」

「サイラオーグが当主になつても、苦勞するだけなのは目に見えている。違うかね?」

「それは理解できます」

一万年、繋いできたのが各家の魔力の特性だ。グレモリー家はリベラル派なんて言われているが、その父上にしてもやはりグレモリーの特性を引き継げたと大層な喜びようだった。

よりこだわりの強いバアル家ならば、存命の先代やそのまた前の御歴々が良い顔をするはずがない。何より、この目の前の初代さまがそう言っている。

なんだろう、こう良いとえが思いつかないが、代々剣術の流派を伝えてきた名門道場の跡取りに、剣の才能がないと追い出された長男がボクシングの世界チャンピオンになって戻って来て「家督寄こせ」と言っているような感じだろうか。

「私の勘だが、サイラオーグは強くなるだろう。だが――」

「——大王バルは今も昔もこれからも、滅びの魔力を持った者が、宗家の跡取りでなければならぬ。ですか」

「私やアレが言っても、ミスラは領かんだろう」

「それで、交流のある俺ですか。一応、やっではみますが……上手いかなくても叱らないでくださいよ」

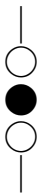
さて、悪魔である以上、何事もタダで引き受けてはいかん。ディオドラの件は、バル家のごたごたに突っ込む対価としては低すぎる。

ああ、よし。こうしよう。それがいい。ミスラさんには叔父上と別れたくて仕方がなくなってもらえばいいのだ。

「ゼクラムの祖父さん、ミスラさんですけど……頂いてしまっても構いませんか？　離婚前からになりますよ」

バルの始祖殿は、俺の問いかけにニタリと笑って頷いてくれた。

やっぱな、齡一万を越えてなお精力的なジジイなんて、助平にきまってるんだよな。



後日、学校が普通にある日。俺はバル領の辺境を冥界フタコブラクダのゴポリンに乗って進んでいた。本日の装いは乗騎に合わせたアラビアン貴族スタイルだ。

目的地は『平民』の学校。貴族の学校に行かせてもらえなかった、サイラオーグが通っているところである。

授業時間が終わったのか、学校から出てくる下級悪魔たちが俺を見かけて顔を伏せて逃げるように去っていく。

魔力のオーラで分かるらしいよね、格の違いが。いや、見た目金持ちそうだからか？　それともラクダに乗っているからだろうか？　どれにしても、平民から見たら完全にヤバイ奴である。うん、全部っぽいな。

「リアスか……」

「やあ、サイラオーグ」

呆れたような目で見上げてくる従兄に、軽い挨拶をしておく。

上から見下ろすのが個人的なポイントだ。サイラオーグは背が高いので、ゴポリンに乗っていないと自然にこれが出来ない。

「今日も、持ってきてくれたのか」

「ああ、母上から預かってきた」

「すまない、いつも助かる。しかし、今回は急だったな、母上が少し困るかもしれない」

「ん？ 今日は何か予定があつたのか？」

「いや、口にすると恥ずかしいが、母上にも見栄があるのだ」

首を傾げる気分の俺に、サイラオーグが続ける。

「お前が来る日と、他の日では服装が違うんだ。母上は、ウアプラの姫として育つた人だ。お前であつても、やはり他家の者にみすばらしい姿を見られたくはないのだろう」

なるほど、ウアプラからの助力も受け取れず、バアルからも放置された状況の中で、精一杯着飾ってくれていたということか。

「そういうことなら少し時間を置こうか。サイラオーグはこれから鍛錬というか、修行をするんだろ？ この間、良い修行法を教えてくださいな」

「ああ、では先に家に連絡しておこう」

家への連絡を終えたサイラオーグと山の方へと向かう。ちなみに、男と二人乗りなんぞしない。それにコイツ重いだろうし、ゴポリンが苦しむに違いない。

「重力ツ！」

「ああ、ドライブグから習ったんだ」

「かの赤龍帝ドライブグから直々の指導か！」

「お、おう……」

サイラオーグがいつも独りで自分を苛め抜いている場所に到着すると、俺は彼を見下ろしながら相談を持ち掛けた。

「なあ、サイラオーグ。一つ教えて欲しいと言うか、相談に乗ってもらいたいことがあるんだが」

「ん、なんだ?」

「いやさ、家の当主として、ミリキヤスの方が相応しいって考えている派閥があるって話はしたことがあったか?」

「ああ、聞いた覚えはある」

「それでさ、その派閥のヤツラと、何よりミリキヤス本人に、俺こそがグレモリーの当主に相応しいと刻み込んでやろうと思っっているんだ」「刻み込む?」

怪訝そうな顔をするサイラオーグを見下ろしながら、俺は顔に悪そうな表情を浮かべて見せる。

「ああ、家臣たちの前で、ミリキヤスをボッコボコにぶちのめして、痛みと恐怖を刻み込んでさあ、俺に逆らおうなんて思えなくしてやろうと思うんだが……どんな感じにしたら良いと思う?」

「リアスッ! お前は何を言っているツ!!」

それで、兄は激しく怒り……、やがて力なく顔を伏せた。しかし、その拳をギリギリと強く握りしめているのが分かる。

「同じことだぞ。サイラオーグ」

「そうだな……本当に、その通りだ……」

「マグダランはまだ幼い」

「ああ……」

「区切りをつけるためにどうしても一戦交えたいのだとしても、二十年は待ってやれよ。それでお互いきっちり成長しきったところで勝負した方が、お前も気が良いだろう?」

まあ、二十年も置いたら、マグダランが完全に家中を固めるだろうけど。

「言われるまで気づかないとは……俺は自分のことばかりで」

「勝負の内容もレーティングゲームにしたらどうだ? 待つ間、お前はそつちで上を目指していれば良いだろう? 力を示すだけなら、自分には価値があるのだと認めさせたいのなら、『皇帝』でも狙ってみるとか」

顔を上げたサイラオーグは、なんとというか両目からダーツと涙を流していた。

はい、説得完了！

「すまん。気を遣わせて……ありがとう、リアス」

そして、俺に向かつて深い角度で頭を下げてくる。

うん、なんかスマン。俺はお前が素直過ぎて心配になるよ。そんなんじゃ騙されるぞ、この先。

「少し一人で考えてみたらどうだ？　俺はどこかで時間を潰してから向かうから」

「そうだな……スマン。今日は山に籠って考えてみることにする。母上に」

「ああ、伝えておくよ」

山奥のどこぞに向かうサイラオーグに手を振って、俺はラクダを走らせた。

くくく、『あのクソムカツク叔父上の第一夫人を寝獲ってヤル!!』

2-7 ムカツク叔父の第一夫人を寝獲ってやる

サイラオーグ・バアルの母、ミスラは七十二柱の名門の一柱ウアップラ家の娘として生まれた。

多くの者にかしずかれ、大切にされ、何不自由なく幼少期を過ごし、名門中の名門、バアル大王家当主の第一夫人として嫁ぐまで、姫と呼ばれて暮らして来た。

当然のことだが、そうして育ったミスラのプライドは大変高い。旧き魔王たちも亡くなった大戦、その後の内戦の混乱、その中で多くの貴族家が消え、七十二柱が元七十二柱と呼ばれるようになってからもその根本のところは変わらなかった。

そんなミスラだが、結婚当初はこれからの生活にある種の期待を持っていた。漠然とした憧れのようなものだ。だが、その自身ですらハッキリと言葉にできなかつた期待感が満たされることはなかった。

夫となつたバアル家当主がミスラに求めたのは、バアル家の次代を産むことだけ。獅子とも称され身体の特徴を特性とするウアップラの姫は、産まれてくる子の強さだけを期待されて過ぎた。何百年と。

ミスラから見てバアル家の現当主の夫は、異母姉であるグレモリー家夫人ヴェネラナに強い対抗心を持っているように思われた。

バアル家最強の女性と呼ばれ『滅殺姫』などという物騒な二つ名と数多の武勇伝を有していたヴェネラナは、バアルの当主となることを望まず気に入つた男のところへと嫁いで行つてしまつたのだ。

『強さ』が尊ばれる悪魔の、異形の世界。ましてや戦乱の時勢、ヴェネラナが望めばバアル家の当主になることは容易かつたはずなのに。彼女はバアルよりも、グレモリーを選んだ。

そこにどんな理由があつたのかは分からない。分からないが、ミスラの夫はそのことによつて大王家の一族から常にヴェネラナと比較されるようになった。

「ヴェネラナだつたならば」「あの滅殺姫が継いでいたなら」そんな声が夫に押し掛かり、結果として現当主は自身の主張や意見で判断を下せなくなつてしまった。何事も先例に倣い、先代や初代に代表され

る先達の意見を聞いてそのまま実行するような男になった。自らの功績を誇ることが出来ない代わりに、自身の失敗の責任を強く責められることもない。そんな道を選んだのだ。

そのヴェネラナが、バアルの「滅び」の申し子ともいえる存在を産んだ。サーゼクス・グレモリー、内戦の動乱の中でその才覚を示し、旧き魔王の血族を軽々と打ち破って魔王ルシファーとなった最強の悪魔。悪魔の中の規格外、超越者。

プライドと体裁を守り、表向きを取り繕うことだけには強くこだわる夫。彼は口にくそしなかつたものの、ミスラやもう一人の夫人にサーゼクスを越える子を求めていたのだろう。

幾百年の時間が過ぎてもそれは変わらなかつた。やがてミスラと夫との間に待望の子が出来た。腹の中に子を宿しているその間だけは、夫はミスラに気を遣ってくれていたように思う。

それがミスラにこれまでのどこか冷たい関係の変わる切っ掛けになるのではないか、そんな期待を抱かせた。

そうして、確かに関係は変わった。望んだものの、漠然と期待していたものとは正反対の方向へと。

ミスラは後にサイラオーグと名付けられる長男を最初に見たときの、夫のあの目が忘れられない。サイラオーグは魔力量が極端に少なかつた。赤子として見ても、その感じ取れる魔力の量は下級悪魔のレベルにすら届かないほど低かつた。

息子を抱くミスラに夫がかけた言葉は「欠陥品」であつた。子も、その母も。

バアル家の中にあつて、ミスラは蔑まれるようになった。息子には聞かせていないが、あるいは夫の方に問題があつたのではないかと口論となつたこともあつた。

やがて、多くの悪魔の子供がその血に宿る魔力の特性を現す頃になつても、サイラオーグにバアルの証である「滅び」が現れなかつたので、ミスラの立場は息子ともども底辺に落ちた。

ちょうどその頃のことだつた、あのグレモリー家に嫁いだヴェネラナの第二子、次男であるリヴラクス・グレモリーのことが知られ始め

たのは。生まれたときから純血の悪魔としても大きな魔力を持ち、その成長速度は規格外。既に魔王級に至っているという。

幼くして、すでに旧キルシファーの魔力を超え、バアルの血筋の証である紫の瞳と「滅び」を宿していると。

誰からその話が出始めたのかは分からない。いつの間にか、バアル家の中にリヴラクスを引き取って跡継ぎとするべきではないか。そんな話が流れ始めた。

他家の子を、それも兄がルシファーとなつていられるため当主を継ぐであらう立場の次男を引き取るなど、普通ならば出来ない。だが、大王たるバアル家にはそれを可能とするだけの権勢があった。

そのことを聞いたミスラは、既に屈辱の中にあつた自身がさらに深く屈辱の沼に沈んでいくのを感じた。

そこに追い打ちをかけるように、夫と第二夫人の間に子が生まれた。次男マグダランだ。

マグダランは並みの子だった。他の純血の子と大差のない普通の貴族の子だ。マグダランが生まれたこと、そしてリヴラクスに人間の魂と『赤龍帝の籠手』が宿っていることが判明し養子の件は消え去った。

ただ、バアル家の始祖であり、今も実質的な支配者であるゼクラム・バアルはリヴラクスを可愛がった。わざわざ政治的な工作をしてまで教育係となることをグレモリー家に了承させ、自ら魔力の扱いを教え込むほどに、彼を特別扱いした。サイラオーグにも、マグダランにも、現当主であるミスラの夫ですらそのような扱いを受けたことはない。

第二夫人がそのことに惑乱し、夫が洗面を作る中、ミスラとサイラオーグはバアル領辺境地域へと追いやられることになった。

ミスラだけならば、実家に戻ることも出来た。しかし、夫はサイラオーグを「家の恥」と呼び、外に出すことを許さなかった。ミスラだけが実家に帰っては、残された息子がどのような目に遭わされるか分かったものではない。嘲笑を浴びせられ続ける生活ならばまだ良い方で、幽閉、最悪の場合には意図的に事故死させられることすらあり

得ないとは言えない。

ミスラにはもはや、貧しくとも息子と二人で夫の目に留まらず、気に障らない、それでいてバアル家の支配する辺境の地へと向かうことしか許されていなかったのだ。

その際に、ヴェネラナからグレモリー家で母子を引き取ろうと提案があつたようだが、現当主が「他家に嫁に出た者が口を挟むな」と激怒し、それが認められることはなかった。

辺境での生活は、貴族の令嬢として育つたミスラには厳しいものだった。実家からの支援は夫に遮られて届かず、嫁入りの際に連れてきた使用人たちへの給金すら払えない。

逆に、本来雇はずの者たちが働きに出て、ミスラとサイラオーグの面倒を見てくれるような状況だ。情けなくて涙と嗚咽をこらえられなくなる。

そんな日々がしばし続き、唐突に終わりを迎えた。

「初めまして、ミスラ叔母様。リヴラクス・グレモリーと申します」
母であるヴェネラナから預かつたという援助を亜空間に仕舞つて、彼はミスラの前に姿を見せた。バアル家初代ゼクラム・バアルに頼んで目こぼししてもらつたと言つて。

下着は一番良いものを。

急にリヴラクスがやって来たと言われ、ミスラは着替えを急いでいた。他家の者に情けなく、みすぼらしい姿は見せられない。

かつては全て任せていた着替えなども、今では自ら行うようになっていた。そんなところに人手を割く余裕はない。

服は、どうしたらよいのか。この服は前に着た。あれは以前褒められたが、だからといって同じものを何度も使うなんてできやしない。

ああ、どうして予定と違う日に急にやってきたりするのだろうか。

ミスラがリヴラクスと初めて会った頃、彼はまだ子供だった。妙に大人びたところもあるが、その姿は確かに小さな少年のもので、それでいて途轍もない恐ろしさを秘めている。そんな子供だ。

初代バアルが特別視するのも理解できる。実際に相対すれば、その魔力とオーラの波動を敵意に変えて己に向けられたくはないと忖わら思わされてしまう。あの大战の折に悪魔・天使・墮天使の三陣営すべてに甚大な被害をもたらした赤龍帝ドライグの力を使っていない時でさえそうなのだ。

もしヴェネラナがいなかったら、夫は違っていただろうか。もし彼女がもう少し凡庸であったなら。あるいは彼女の次男がそこまでの力を示していなければ、初代バアルから特別に扱われるようなことがなければ。自分とサイラオーグの扱いは違っていたかもしれない。

その頃、ミスラの中には、ヴェネラナとリヴラクスへ向けたある種の恨み、嫉妬のような感情があった。それは今も僅かに残り、心の奥底に根付いている。

だが、それを血色の髪と滅びの紫瞳を持つ魔王のような少年に見せるわけにはいかない。何故なら、今のミスラとサイラオーグの生活を支えているのは彼が運んでくるヴェネラナからの援助だからだ。養われていると言っている。

「ミスラさま。リヴラクスさまがお見えになりました」

自室のドアの外から声がかかった。早い。サイラオーグの話では、もう少し時間を置いてからということだったはずなのに。

「少し待ってもらって、それから」

「承知いたしております」

慌てて着替える。いつものように時間をかけて選んでいる余裕はなかった。

「お久しぶり、と言うほどでもなかったですか」

「ええ、ごきげんよう。リヴラクスさん」

来客用の一室に向かうと、アラビアンとでも言えばよいのか、エキゾチックな装いの少年が当然のような顔をして使用人たちの歓待を受けていた。

ウアプラ家からバアル家へ、そしてこの辺境まで付き従ってくれた使用人たちもまた、それを当たり前として行動している。

それは別に良いのだ。使用人たちの給金を支払っているのは、彼の

母親で、彼がそれを運んできてくれなければ困るのだから当然だろう。一度に多くの資金を……とも思うが、それは許されていないらしい。

生活に必要な分だけ、というのが初代バアルの認めた範囲のようだった。

「ミスラさん、いつものですが、彼に渡しておきましたので」

そう言って、リヴラクスは執事に目を少しだけ留め、すぐにミスラへと向き直った。

いつも、じつとこちらの目を見つめてくる子だ。出会った頃からそうだった。変わったのは、彼のその背丈と雰囲気。

「ええ、ありがとう。ヴェネラナさまにもお礼を伝えておいてください」

「はい……おや、もしかして少しお疲れでしょうか？」

言われて、何かおかしかっただろうかと考えていると、彼の手がミスラの頬に触れていた。

「失礼、髪が……」

顔のすぐ近くに、血の紅と紫水晶の色合いがあつて、ドキリとする。慌てていたせいか、ほつれた髪が頬にかかっていたらしい。

それを直す彼の手が、頬から耳、そして首筋をそつと撫で、最後に鎖骨に触れるようにして離れて行く。ゾワリと不快ではない何か、ミスラの後頭部を震えさせた。

「ごめんなさい。慌てていたものだから……サイラオーグからは、もう少し遅くなると聞いていたのよ」

「すいません。早くお会いしたかったもので」

勘違いしそうなセリフに、ミスラの首筋がうっすらと朱色を帯びた。

まただ。また、じつと見られている。なにかたまらなくなつて、ミスラは彼から視線をそらした。

子供と大人の中間。少年から青年へと移り変わる時期。そんなごく短い期間だけが持つ妖しげな雰囲気、彼から漂ってくるように感じてしまう。

私は何を考えているの。いくら……もう、ずっと、ないからって……。

「何を言うのよ。それでサイラオーグはどうしたの？　一緒だと聞いていたのだけれど」

「ああ、サイラオーグでしたら、今日は遅くなると伝えてくれと言っていましたよ。静かな場所で一人になって考えたいことがあるそうで」
「考えたいこと……そう」

『滅び』も魔力も、ミスラはサイラオーグに悪魔としての評価に直結するものを何一つ与えてやることが出来なかった。そのせいで悩みも苦しみもあるだろう。考えることも同じだけ。

ウアプラの獅子の血に賭け、身体を鍛えてみるように伝えたことが功を成し始めていることだけが幸いだった。その分、息子が家にいる時間は減ってしまったけれど。

「鍛錬にはどうも、山に籠るのが良いらしいのです」誰から聞いたのか、いつぞやサイラオーグがそう言っていたことを思い出す。それが誰かなんて明白だ。

サイラオーグは、この従弟に対して恐ろしく素直なところがある。相手がグレモリーでなければ注意していたところだ。

ただ、息子がそうであることを仕方がないことだとも、ミスラは考えていた。

物心付いたころから実の父親に疎まれ、親類一同からも蔑まれて来た子だ。辺境に来れば今度は平民からも虐めを受けた。そんな息子と唯一マトモに話をする親類は、この従弟だけだったのだ。しかも、その従弟の運んでくる援助によって、ミスラもサイラオーグも、使用人たちも生活している。

プライドをへし折られ捻じ曲げられてしまったミスラのような大人ではなく、まだ真つすぐなところのある子供のサイラオーグがそれに恩義を覚えるのは当たり前だろう。

「ミスラさん……？」

ふわりと頭の中が霞んだようになって、気が付くと彼に抱えられていた。数年もすれば追い抜かれるだろう彼の背丈はまだミスラより

も低く、もたれかかるような姿勢になっている。

「なに、を……」

霞が晴れると、今の状況に羞恥が巻き起こる。頬を染めたミスラは彼を突き飛ばすようにして距離を取ろうとして、よろめいた。

「本当に具合が悪そうですね」

身体を支えられながら、本気で心配する声を鼓膜が拾い、彼の纏っている香りがミスラの鼻腔をくすぐった。

こんなの、いつ以来かしら……？

夫とはサイラオーグを身籠って以来、触れ合っていない。息子が生まれてからはいがみ合うことしかなかった。かけられる言葉も、酷いものばかりだった。

「最近、少し……」

近頃、ミスラはふと気づくと眠ってしまったことが多くなっていた。疲れているのかとも思ったが、それにしてもおかしい。きつちりと眠って起きたすぐ後でも、ふと意識が遠くなっていることがある。

「あつ……」

と気付くと抱えあげられていた。膝裏に彼の手が回されて持ち上げられ両足を床から離されてしまうと、自然とミスラの腕は彼の首に回って自身の身体を支えようとしていた。

身体がカーツと熱くなって、不意に襲って来ていた眠気が吹き飛ぶ。

なに、この……。

「実は、ゼクラムさまから言伝を預かっています。少し二人で話が出たかっただけですが……寝室は？」

ミスラの方へと寄ってこようとしていた執事にギリギリ聞こえる程度の声量で、彼はそう言った。ギクリと足を止めた執事は、場所を訊かれて彼をミスラの寝室へと先導していく。

「少し横になった方がいいでしょう。いくつか話すことがあるだけですから」

男の手で抱えあげられ、寝室へと運ばれている。この状況に、ミス

ラは胸の鼓動は激しく騒ぎ出していた。眠気の代わりに、別の霞がかかったようになり、気持ちがざわめく。

「こちらです」

執事が扉を開いて頭を下げる。それに鷹揚に頷くと、彼はミスラを室内へと運び込んだ。

「分かっていると思うが」

「私は何も聞いておりません」

見聞きした貴族の秘密の事情に口を挟まず、口外もしない。出来た執事は頭を下げ、扉を閉めた。

「もう、大丈夫だから……おろして」

カチリと鍵のしまる音がした。魔力で動かしたのだろう。続いて、結界が室内を覆った。莫大な魔力にものをいわせた、術式的には簡易でありながら非常に強固なものが。

息子は別として、ミスラは長いこと男に触れていない。世の中には、下卑な輩に身を任せて愉しむ貴族女性もいるというが、ミスラのプライドはそんなことを受け入れられなかった。

夫に対してどうこうではなく、この辺境の地にはミスラがそれを許せるような相手がいなかったのだ。バアル家では夫に冷たくされ、こちらに来てから出会う男は使用人と、平民の中でも特に下賤な辺境の田舎者ばかり。とてもではないが、相手になど出来ない。

「実は、叔父上がサイラオーグを手放すことを認めました」

「ねえ、なにを……」

仰向けにベッドに寝かされたミスラの顔のすぐ近くに、彼の顔があった。鼻と鼻が触れそうな距離だ。

お互いの吐息の音が聞こえる。

息が荒くなってる……？ わたしも……。

「ですから、ミスラさんたちをグレモリーで引き取ろうと考えています」

「それ、は……でも、サイラオーグは、バアルの当主に……」

夫と同じ、息子と同じ、紫の瞳が見下ろしてくる。

「それは本当に、サイラオーグの望みですか？」

「だめ、だめよ……」

見下ろす瞳との距離が一気に近づき、唇を奪われていた。抵抗しようともがくが、魔力で強化しているのかビクともしない。

何度か軽く触れるだけのキスを繰り返され、

「俺は貴女が欲しい」

彼が以前来た際に、しきりに褒めていた服の胸元を開かれていく。

「ああっ、やめて……なに、をするの」

露わにされた胸をじつと見られていた。彼は薄く笑みを浮かべると、そこに指を這わせてくる。

「こんな下着をしていたんですね」

下着越しに敏感な先を男の指でこすられている。そのもどかしく、久しくなかった官能がミスラの肢体をわななかせた。

恐怖ではなく、それは興奮によるものだ。じわりと、触れられてもいないのにミスラの両脚の間の布に染みが浮かび始めていた。

2—8 ムカツク叔父の第一夫人を寝獲ってやる その2

こんなことは、サイラオーグを胎に宿して以来なかった。

「だめ、やめ、て……ああっ」

下着の上からカリカリと乳首引っ搔く爪先を退けようとミスラが手を伸ばすと、その手を掴まれ指を口に含まれてしまった。

中指と薬指が彼の口内に飲み込まれ、指と指の間を舌が這って唾液まみれにされる。

なに、なんなの、いや、ああっ、いや。

指のまた、いわゆる水かきの部分を舌先で幾度もくすぐられると、いけないことをしている気分になって思わず手を引っ込めてしまう。

「よして……、こんなこと、今なら、まだ」

まだ、なんだというのか。火照った身体は、ミスラの言葉に反論するように男を誘うようなくねりを見せてしまう。

それに気を良くしたのか、彼は再び顔を近づけてきた。このままでは、唇を重ねられてしまう。

そうしたら、あれを受け入れてしまったら……。

思わず顔を逸らすと、視界の端に彼が口元をゆがめ寂しように笑う姿が映り、それが何故か申し訳ないような、嬉しいような混沌とした気持ちをもミスラの中に呼び起こした。

「あっ、や……♡」

首筋に顔を埋められる。彼の唇と舌による愛撫が、ミスラの胸元と耳の間を何度も往復し、喉やあごの下をくすぐっていく。

耳たぶをついばまれると、思わず甘い声が出てしまった。

「耳が好きみたいです。そんな風に差し出して」

「なにを、あ、うそ……あ、あっ♡」

唇を避けようと顔を横へと向けたただけだ。だけど、仰向けに寝かされた状態で、顔を横にすると覆いかぶさる彼の目に耳の穴を晒すことになる。

その穴に尖らせた舌をねじ込まれた。耳の中に柔い肉の感触を挿し込まれ、引き抜かれ、また刺され満たされる。その繰り返しはミスラの鼓膜を水の弾けるような音で蹂躪し、秘裂を犯されているような気分になってしまう。

「やめ……」

押し返そうと彼の肩に置いた両手には力が入らず、拒否しようとするミスラの言葉とは裏腹に、男の行為を受け入れようとする姿勢のようになってしまう。

首を強く振って払おうにも、耳の付け根に立てられた彼の歯が与えてくる甘い痛みがそれを許してくれない。今や、ミスラの耳は彼の口内にまるごと飲み込まれていた。

やだ、どうすればいいの。こんなの、今まで一度もされたこと……。感じてしまっていた。ミスラ自身すら知らなかった官能のツボ。それをあらかじめ分かっていたかのように、彼の舌が的確に攻め立ててくる。

彼の肩に置いた手に力が入り、縋り付く様にして悶えてしまう。肩を寄せ必死に耐えようとするミスラの顔には、隠しきれない悦楽が浮かび始めていた。

「だめ！ やめ、やめなさい！」

ふっ、と攻めが止んだ。不思議に思い、短く早くなつた息をしながら顔を上向ける。すると、彼は苦笑を浮かべながらミスラを見下ろしていた。

「はは、ミスラさんぐらいの年の方に、そんな言い方をされると、つい反応してしまいますね」

ミスラと彼の母は世代が近い。そんな年齢の子供にいいようにされてしまっている。そのことに何か言葉を発する前に、頬に手を当てられた。

先ほど犯された耳とは逆側の頬を、指先でくすぐられ、彼の小指がミスラの唇をなぞる。

寄せられてくる彼の唇から逃れようとあご先を横に向けると、

「今度はこっちにして欲しいんですね」

先ほどとは逆側の耳が彼の口内に飲み込まれていた。

「ちが、う。そう、じゃ……んんっ♡」

身悶えする。これまでの数百年の夫婦生活で味わったことのなった攻めが、ミスラの心を犯す。卑猥な水音が頭の中をいっぱいにし、押し返そうと彼の肩に置いたままにしていた腕から力が抜ける。

両の手首を掴まれた。そのまま、ぐいと頭の上まで両手を持ちあげられる。耳穴を攻め立てられ、その快感に耐えようとなにか掴むものを探していたミスラの指先が、ベッドのシーツに触れた。

「ああっ、あっ……♡」

シーツを握り締めながら、ミスラは身をくねらせ、むき出しになった白い肩と未だスカートに隠された下半身を振りたくる。

ミスラの秘所を覆うパンツの布は、既にぐしゅぐしゅに濡れそぼってしまっていた。

いや、これ、こんなの……ああっ、もう、もうっ……！

強制的に与えられる快感と、息子よりも年下の男にいいように悶えさせられている屈辱。それにミスラが酔いしれていると、ふと胸の辺りに違和感が生じた。

解放感に促されてそちらへと目を向けると、いつの間にか覆っていた下着を剥ぎ取られ、露わにされた胸の双丘が踊っている。頭部を耳で固定され、身体をねじらせ官能の渦から逃れようとミスラが両肩を揺らす度に、尖り始めた乳首が彼の上着に擦れて鮮烈な刺激を寄こす。

「ひんっ♡ ああッ、あ……ひっ♡」

じゅぽりと音を立てて、耳の穴から舌が引き抜かれていった。

「そのうち、耳だけでイケるようになってあげますけど……。今はここをいじって欲しいみたいですわね」

彼の両手が左右の乳首を摘まんだ。それだけで、言葉にすることが難しい期待感が募ってくる。

「やめて、そんなとこ……いじらないで」

「自分からこすりつけてきておいて、その言い方はおかしいですよ」

親指と中指で硬く立ち上がり始めた先端をこすり上げられる。

「ひっ、あっ、あっ♡」

人差し指の腹で、突起の天辺をトントンと刺激されると、ミスラのそこはアツと言う間に最大まで膨張してしまった。

「気持ちよさそうですね。叔父上にもこうやって可愛がられていたんですか？」

「やめ、て、あの人のことは、言わないで！ ああ、っ♡」

ミスラとその夫との夫婦生活は数百年単位のものだ。実家のウアブラ家で過ごした期間よりも、バアル家当主の第一夫人として生きてきた期間の方が遥かに長い。

その間、ミスラはバアル家当主の第一夫人に相応しい言動をとってきた。数百年続いたそれはミスラの中に染み付き、悪魔の中でも特にプライド、体裁、体面、そういつたものに気を払う性質を与えた。

「もしかして、まだ叔父上のことを気にしていたりするんですか？」

あんな目に遭わされたのに」

「あ、ひいっん♡ そんな、な、そんなワケないでしょう！」

「ですよ。だつたら……」

彼の顔が近づいてくる。唇を合わされそうになり、顔を背けようとするが、耳を攻められたことを思い出してしまい動かせない。

唇を内側に巻いて仕舞いこもうとしたところで、今までそつと扱われていた乳首をギュツと爪り上げられる。

「はあっツん♡♡！」

思わず上げた嬌声に口が開き、そこに彼の舌がスルリと侵入してきた。

「んんっ、んっ……んんううう♡」

侵入者は容赦なくミスラの口内を荒らしまわった。蹂躪される。様々な箇所を無遠慮にまさぐり、責め立て、ミスラの反応を確かめていく。

上の歯の内側の歯茎、そして左右の歯列の間にある上あごの部分そこを尖らせた舌先が執拗に愛撫してくる。

鼻を抜けて頭のとっぺんまで伝わってくるモゾモゾとした快感。たまらなくなつたミスラは、彼の舌を押し返そうとするがそのまま絡

めとられて、絡み合つて、次第にそれは軟体動物の交尾じみた様相へと変化していった。

「ああっ……もう、もう、だめ……」。

バル家現当主の夫との関係は、既に終わっている。ただ離婚してないだけで、もはや姿を思い浮かべても負の感情しか浮かんでこないような間柄だ。

口の中と、弄り回される乳首と、双方からの送られてくる快感がミスラの頭を沸騰させ——シーツを握りしめる指に一層の力が籠り、切なく汗を垂らす裂け目をぎゅうと閉じるように太ももを合わせた。

「んうん、っつ♡ んっああ、♡♡!!」

ミスラが絶頂の余韻に浸っていると、彼が唇を離れた。離れた唇同士の間、名残を惜しむように粘ついた汗の糸が伝う。

「イツちやいましたね」

「はあっ……、はあっ……、はあっ……」

返事をする余裕はなかった。一人でシテも得られなかった官能に、ミスラの思考は蕩けてぼうつとぼやける。

「ミスラさん、サイラオーグは単純なところはあがあるが、バカじゃない。バル家の当主なんか目指して、それが仮に上手く行つて次期当主になれたとしても、ロクなことにならないことぐらい分かっているはずだ」

悪魔というのはおかしなものだ。合理的でありながら伝統に固執し、誇りと体裁に縛られながら欲に突き動かされる。

「それ、でも、強ければ……」

「そうですね。強さは大事ですよ。でも……あの家は結局のところ昔からゼクラムの祖父さんのものだ。家の土台を築き、一万年維持し続け、今もなお憂鬱の病にかからず現役でいる初代。そんな方がいるんだ、あそこの当主なんてお飾りか、よくて前線の指揮官程度の存在でしかない。滅びを持たない当主を認めませんよ、祖父さんは」

サイラオーグが、強くなれば。マグダランよりも強ければ、強さを尊ぶ悪魔や異形の世界だ、次期当主の座を得ることも可能だろう。

しかし、その先にあるのは、誇りと伝統を守ることを重視するバ

ル家親類一同からの蔑視に満ちた当主生活だ。おそらく、利用されるだけされて、どこかで放り出されるだろうことは容易に想像がつく。「わた、しは……そんな、こと、言ったことは」

他の誰かに言われるまでもない。バル家現当主の第一夫人を何百年もやって来たミスラ自身が一番よく分かっている。

ミスラは息子に次期当主の座を取り返せなどと言ったことは無い、はずだ。

——魔力がなくとも、あなたには立派な身体があります。足りないと思うのなら、その足りないものを何かで補いなさい！ 腕力でもいい、知力でもいい、速力でもいい、補ってみなさい！ あなたは誰が、なんとやろうとバル家の子。たとえ魔力がなかりうと、滅びの力がなかりうと諦めなければいつか必ず勝てるから。——

「でも、望んでいるでしょう？ 息子に蔑まれ妨害されながら、利用されるだけの当主になってほしいと」

「わ、わたしはッ！ そんな、ことー！」

「誤魔化さなくてもいいですよ。俺はそういう女性が結構好きなので。いいんじゃないですか。貴女を蔑んで、差別して甚振ってこんなところに追いやった叔父上や、まあ多分かなり小馬鹿されただろう第二夫人の叔母上、そのお二人やその他の連中に、ざまあみろって言うてやりたいんですよね？」

「ちがう……、違うわ。そんなの、望んでない」

「俺はそういうの悪魔らしくて嫌いじゃないんで、正直に言ってくれていいんですけどね。でも、本当にそうやっていいんですか？」

腹の上にまたがった彼は、そう言うその後ろ手にミスラの秘所に指をあて、ぐいぐいと押し込んできた。パンツとスカートごと穴へと押し込まれて、膣内に満ちていた淫らな水がぐちゅりとしみだしていく。

「あっつ、あああっ♡ なに、なにを……」

指が上下し押し込まれるたびに、いやらしい染みが広がっていく。

なに、何が言いたいの……こんな、嗚呼。

「そんなに叔父上とよりを戻したいんですかって聞いているんですよ」

『欠陥品』そう言われたことが思い出される。あの時の夫の表情、その後を受けた仕打ち。許せるはずがない。

ミスラのプライドをズタズタにしたあの男と、もう一度やり直すだなんてありえない。

「そんなことっ！ 出来るわけがないでしょう!! あんな真似をされて、どうして！」

快感に悶えながら惑乱する思考の中で、ミスラは言い放った。

大王家で過ごした数百年、そこで培われたプライドを大きく傷つけられた。息子が弟を倒して強さを示し、次期当主になっただけで、あの屈辱が晴れるものか！

「なら、誰がミスラさんを悦ばせてくれるのですか？ こうやって！」

「あああ~~~~~~~~♡♡」

一層強く押し込まれた指に、ミスラはのたうち回った。口から洩れる嬌声は、思い出してしまった怒りと屈辱と今味わわされている快樂が混じり合って言葉にならない。

「サイラオーグが次期当主になるってことは、ミスラさんがその母としてあの家に戻るってことですよ？ それで？ 叔父上の第一夫人として返り咲いて、で、誰がこうして貴女を喘がせるんですか？」

「そん、そんな、ああっ、あっ、ああっ♡」

バアル家現当主の第一夫人で、バアル家次期当主の母。その立場なら、特別な事情の無い限りはまずバアル本家の屋敷に留め置かれることになる。そして、その状況のミスラに手を出すような男は、いない。夫との関係が破綻している以上、もう誰ともこういったことが出来なくなるのだ。

「それとも、使用人でも啜え込みますか？ 男娼でも買いますか？」

「いや、いやよっ！ そんなああつくうん♡」

なにが嫌なのか。もうワケが分からない。

悶えるミスラの胸に、冷たい何かが垂らされた。何事かと涙の浮かんだ瞳を向けると、彼がビンを傾け透明な液体を垂らしていた。

「なに、なにを、してるの」

「ただの油ですよ。マッサージ用の。妙な薬とかではないので、安心

してください」

滑りのある液体を塗りたくられて、ミスラの胸がテカリを帯びてよりいっそういやらしく揺れた。

「だから、それで、な、にを」

「マッサージュですよ。ミスラさんが俺のモノになってくれるように、ほぐしてあげようかと思いました」

言いながら彼は服を脱ぎ始める。露わになっていく男の肢体をポーつと見上げるミスラに、彼は笑いかけながら、

「ミスラさんも脱いでくださいよ。もう、たまらないんでしょう？」

「ううんあ♡」

立ち上がりざまに、ミスラの股間を膝で圧迫していった。ズシリとくる重みに甘い呻きが漏れてしまう。

ゆったりとしたアラビアンなズボン越しでも分かるほどに盛り上がっていた彼の怒張。それがその姿をハッキリと見せつけてきて、ミスラの目は惹きつけられてしまう。

ああ、すごい……なんて、形をしているの……。

恐ろしく大きいわけではない。だが、女の内側をこつそりと搔き出すような、抉りぬくような、そんな形状の代物から目が離せない。

言われるままに、ミスラは服を脱いでいった。濡れそぼった股間が露わになり、そこに注がれる視線を感じると、それだけで奥から奥から汗が溢れてきてしまう。

「そっちもすぐく物欲しそうにしていますけど、まずは胸からですよ」

「あつ、そん、な……」

再び上に乗られた。そして、白い双丘の間に挟み込まれる肉の棒。少し顎を引いて胸の谷間を見れば、そこには今にも迫って来そうな男のモノの先端がある。

あ、熱い。こんなに硬くなってる。わたし、で、わたしで、こんなに……。先から、露が……。

求められるのは、心地よかった。あの日から『欠陥品』扱いをされ、蔑まれ続けたミスラにとって、それはある種の麻薬のようにしみ込んでくる。

彼の手が蠢きだし、ミスラの胸の周囲をまさぐり始める。一番敏感な頂点には触れず、下から搦り上げるようにして弾ませたり、脇から揉みほぐしてきたり、鎖骨とその下あたりを指で圧迫したりと、本当にマッサージされているだけかのようで、ひどくもどかしい。

こんなにしてる、のに……。どうして……。

ゆるやかに与えられる官能に震えながら、ミスラはその物足りなさに眉を寄せる。胸の間に感じる肉棒は、萎えることなくガチガチに硬くなっていて、彼もまた興奮していることをはつきりと教えてくれるのに、それなのに、触れてくれない。

「焦らないでくださいよ。今、開発しているところですから」
「か、かいはつって……」

何をされようとしているのか、不安と期待が交錯し、しかし抗う気持ちはなれない。

そう、そうよ、これは仕方がないの……。この子が、来てくれなくなったなら……。援助がもらえなくなってしまうから……。だから、仕方ないの。

都合の良い言い訳があった。だから、これからどうされてしまうのかわからなくても、いいのだと。ミスラはそう思うことにした。

「こんなにいい女を半端にしておくなんて、叔父上はバカですよね。しかも、こんな場所に放り出すなんて」

「やめて、言わないで……。おねがいだか、ら」

古傷というにはまだ新しい部分をほじくり返されながら、胸をこねくり回される。一番触れて欲しい場所には触れてもらえず、やわやわと揉み解されていく。

女の胸を支える筋という筋、その全てを指圧されなぞられ、くすぐられ、もどかしい官能にミスラは翻弄された。

「俺なら手放しませんよ。ああ、ほら、そろそろキてるんじゃないですか?」

なに、が……。ああっ、うそ、なによ、これ。

「はあん♡ あうああ♡ はああっ♡」

今までもその辺りは触れられたことがあった。何百年も続けてき

たことだ、それなのに……ミスラは同じ場所からまったく違う官能を得ていた。

波のように打ち寄せるその快樂に、理性の砂城が崩されていく。

「なん、で……ああ♡ いや、だめよ、だめ……おかしくなる」

「ええ、おかしくしたんです。もう、これでミスラさんの胸は俺のものですね」

なに、なにをされたの？ 身体が、胸が、熱い！ 熱くて、ああっ……先が！

胸の他の部分に火がともされ熱くなるほどに、触ってもらえない先端のコリコリとしたところが切なくてどうしようもなくなってくる。

「ねえ……、ねえ……」

身体をゆすり、双丘を躍らせてねだる。どうにかして欲しくて、仕方がない。

「ねえって言われても分かりませんよ。どうしたんですか？ 気持ちよくなったでしよう？」

「うっ……ううっ……、さわって、ほしい、の」

「どこをですか？」

「乳首、乳首もいじって……切ないの」

にんまりと笑みを浮かべる彼の顔を憎たらしいと思うことすらできない。その笑みの中に了承の意味が含まれているのが嬉しくて。

「それじゃあ、俺のモノも気持ちよくしてくれませんか？」

ほら、と双丘に挟まれていた肉棒が突き出されてくる。ミスラは、おずおずとそれに舌を伸ばした。

舐め上げると、口の中に男の味が広がって……それを下の口で受け取りたくてたまらなくなってしまう。

「そのまま続けてくださいね」

「ああっ、イイっ♡ イイの♡」

ぎゅうと摘ままれた。彼は全体をもみほぐしながら、時折先端への刺激を混ぜてくる。その刺激のタイミングは、ミスラが肉棒を舐め上げるのと同じようだ。

そうだと気づかされてしまうと、もう止められなかった。いじって

ほしくて、夢中でむしやぶりつく。

「うん、ふっんあ♡ んっちゅあ♡ ひいひゅぷじゅ、んふい♡」

「ああ、いい、いい」

彼の声に昂ぶりが混ざりだしていた。それに気を良くして、ミスラの舌はより激しく踊りだした。

「出しますよ。このまま、ここで、おっ、おおあー！」

彼の剛直が脈打つのが分かった。

同時にミスラの背ものけぞり、身体の上に彼が乗っているというのに、それでも跳ね上げるようにして弾んだ。

ああ、来る。このまま、だと、ああっ、でも、あっひい、強く、うんうあっつ!!!

「おふう、おえあ♡ うあ……ああ……っ♡」

男のモノをしゃぶりながら、胸をいじられ、乳首を振じり上げられて達してしまった。

口の中に、顔中に、彼の吐き出した白く濁った汁が飛び散っていて、その匂いと感触、熱に頭がヤラれてしまう。

「ねえっ、あそこ、に……」

もう我慢できなくなっていた。とつくにそうになっていたのに、ずっと置いておかれた秘所が、悲鳴を上げている。

「ここですか？」

指を挿し込まれ、ずぶずぶと音を立ててかき回されると、ミスラの身体が打ち震え、激しくくねる。

「ああっ♡ そこ、そこに、ねえ、ああっ♡」

「ここを、こうして欲しいんですね？」

後ろ手に回された彼の指が、ミスラの牝穴のへその側を引っ掻いて、膣内のザラリとした箇所を幾度も擦り上げる。

「あっ、そこ、そこお……ああっ♡ でも、あっ♡ ちが、う、の♡ そう、じゃ、ない、あああ♡」

激しい快感に悶えるしかない。雌獅子は彼の指一つでのた打ち回り、好きなようにもてあそばされて、自身が墮とされたことを理解させられ、

「挿れて、挿れてほしいのお！　ねえ、お願いだから……これを、ちよ
うだい！」

先ほど射精したばかりなのに、もうギンギンに勃ってミスラの胸の
間に居座っている男の肉槍。それに牝穴を貫かれないと懇願した。

2—9 ムカツク叔父の第一夫人を寝獲つてヤツ
ター

貴族の住まう屋敷としてはみすぼらしく、平民ならば御屋敷と呼称してもおかしくない。そんな建物の奥まった一室に、肉と肉がぶつかる音と、淫らな水音、そしてその屋敷の女主人の嬌声が響いている。

「は、はううう、はっあ、だめええ♡ いやあ、もう、もう、あああん♡」

「なにが、ダメなんですか、こんなに啜え込んで離さないくせに」

彼の怒張に犯され扱られ、褻をめぐられ、奥を突きこまれ、ミスラはあられもない声を抑えることが出来なくなっていた。

油を塗りたくられ、淫靡に照り光る胸の二つの肉塊が、彼の腰の振りに少し遅れて揺れる。

「あっあう♡ イイツ、イイツ、あああっ♡」

ベッドの上、交尾をねだる猫のようなポーズで後ろから突かれる。

膝上に乗せられ、両脚を大きく開かされて、突き上げられる。

組み伏せられ、Mの字に開いた両脚の間に入り込んだ彼のモノで、じりじりと削り取る様にされながら、開発されてしまった胸を攻められる。

そのたびに、ミスラは快楽に喘ぎを抑えきれず、よがり狂わされ、許しを請うて涙を流し、それを啜られた。

時計の針は、ミスラがこの部屋に運び込まれてから数時間の経過を示していた。

「次は、こうしましょうか」

柔らかくなつた子宮の口を緩々とほぐされながら、胸をこねくられて達した。その直後、彼はミスラの片足を持ち上げ自身の肩の上に乗せてしまう。

そうして、横向きにされたミスラのシートの上に残された足を跨ぐようにして、ずいと腰を進めてきた。

「ああっ♡ んんっ、んああっ♡ ねっ、もう、もうつつ、むっり♡」

シーツを握りしめ、上気しきった身体をよじらせ、ミスラはそのひと突きで軽く達してしまふ。快感の渦に飲み込まれ、今の自分が達しているのか、そうでないのかの区別すら既に曖昧になってきていた。もしかしてら、常にイキ続けているのかもしれないとさえ思ってしまう。

「ほら、これ飲んでください」

これだけのことをして責め立てておきながら、意外に優しい声音で水を差しだされる。人間たちがよく使うというペットボトルに入れられたそれを、ミスラは貪るように飲み干した。

「あれだけ吹いたんですから、のど渴きますよね」

「いやああ、言わないで、言わないでえ」

ベッドの上も、彼の身体も、快感のあまりにミスラが吹いた潮でビショビショになってしまっている。

「それで、どうです。叔父上と俺とどっちがイイですか?」

「そん、な。そんなこと……また言わせるの」

途中、何度か言われたやり取りだ。そんなもの、答えは決まっている。

突き込まれた先端で、奥をこすり上げられると、そこから伝わってくる痺れに飲み込まれて何も考えられなくなってしまふ。

「イイツ、イイの……貴方の方が、イイツ！ あんな男と……なんて」
彼との行為を体験してしまふと、夫との情交がなんと義務的なものだったのだろうかと思わされてしまふ。夫は手早く射精し子供を作ろうとしていただけ、そんな気になってくる。

いや、実際そうだったのだろう。もしも、そこになんらかの情があったのならば、今のミスラはこんな場所で、こんなことをしてはいないはずだ。

「はは、それじゃあ、俺のものになってくれますよね?」

嬉しそうな声音で、同じことを聞かれる。ミスラはそれに、いやいやと首を横に振って拒否をしめした。

「いや、いやっ、……ああつ、あああああつ、はあっん♡」

一時止んでいたピストンが再開され、ミスラは口を大きく開け、踊

る舌と白い歯を見せて甘い声を上げさせられる。それは悦楽の叫びであり、抵抗の意志の表明でもあったが――

「もう、分かってますよね？ 戻れないって」

「あつ、んうっ、いやあ♡ だめ、だめえっ、あああつ、んううう♡」
自ら挿入をねだってしまった、あの時が分岐点だったのだ。そう、もう時間の問題なのだろう。

彼の余裕の表情と、自らの止められない痴態が、ミスラにそれを確信させてしまう。

もう、逆らえなくされてる。

命じられると悦んでしまう身体が恨めしい。体位を変えると言われ、様々な格好を要求されても、それに嬉々として従ってしまうのだ。「もう一度イキましようか。ああ、それとも、もうずつとイッてるんですかね？ この感じは」

「あああ、あつ、また、そこお、いやあ、そこダメなの、んああ♡ ああつ、ああんあ♡」

艶めいた声を止められない。身体が彼の逸物の虜にされてしまっている。ガンガンと突き立てられるたびに、刺すような快感が脳天まで奔り、ビクビクと背骨から首を引きつらせる。

横寝の姿勢を激しくくねらせて、ミスラはいずれ来てしまう、屈服の時を少しでも伸ばそうと必死にシーツを握りしめていた。

ああ、ダメに、ダメになる。いや、なのに、いやなはずなのに……ダメにされてしまう。それが、心地よくなってきた。

「ああつ、私、わたし、もうっ、ああつ♡ だめえ♡ だめにい!!!」
淫らかな叫びが木霊す。屋敷中に響き渡るかと思うほどの声を上げてしまう。

「ミスラさん、そんなに声上げたら使用人に聞こえてしまいますよ」

「はっ、はっ、はっ、あつっ、あつ、ああ、けっか、けっかいを……」

「ああ、あれでしたら、随分前に時間切れで効果がなくなってますけど」

「いやあああああ！ そんな、な、ああ、いやああ！」

全部聞かれていた？ 今の声も？ あんなに甘ったるく媚びるよ

うな声音を、屋敷の者たちに、全部？

「すいません。つい夢中で張り忘れていました」

「な、なにを……。あつ、さ、サイラオーグに、は……」

「たぶん、まだ帰って来ていないと思いますけど……。ああ、もうすぐ着くのかな？」

庭先に使い魔を置いていたので説明され、ミスラは慌てて脱ぎ捨てた服を着ようとするが、

「ダメですよ。俺がまだ満足していませんから」

押さえつけられて、中に入ったままの肉棒を動かされてしまう。

「んっ……んんっ……」

必死で声を抑える。両手を口に押し付けて、どうしても止められない嬌声を押し込めようとする。

「んんっんんっ、んんっ……」

ミスラのそんな仕草に興奮したのか、彼の動きはより激しくバチュンバチュンと腰を打ち付けてくる。

「ああ、ここに来ますね。出迎えてあげましょうか」

「あつ、いつ、なに、え、やめ、て」

貫かれたまま持ち上げられ、ベッドの上から床へとそっと降ろされた。

四つん這いの姿勢を取らされたミスラは、そのまま後ろから怒張に押し込まれて、扉へと向かって四つ足で歩かされる。

「ねえ……。ねえ……。やめて……。ウソでしょ？　こん、な」

まさか息子にこんな姿を見せつける気なのか？　ミスラの中が不安でいっぱいになる。

ドアに押し付けられて、ミスラはノブを掴んで立ち上がることを強要された。

「ふう……ふっ……ふっ、んん……」

片手でドアノブを掴んで、砕けた腰を支え、もう一方の腕を噛んで喘ぎ声を押し殺す。

首を左右に振りたくつて、やめてくれと願っても、彼は腰を打ち付けることをやめてくれない。とうの昔に出来上がってしまった

ミスラの身体は、危機が迫っているにも関わらず、彼のくい打ちに反応して官能の津波を繰り返して発生させてしまう。

やめ、やめてえ。息子が、サイラオーグが……!!

コン、とノックの最初の音に、ミスラはビクリと背をそらして反応した。続けて音がもう一度鳴り、それに合わせて彼の腰が止まった。ホッと息をつく間もなく、もう一度音がして、息子の声が向こう側から聞こえてきた。

「母上、お加減が悪いと聞いたのですが……」

どうすれば、いいの？ 少し、待った方が？ でも、ああつ……やめて、奥をこすらないで!

「だ、だい、じょうぶ、ですよ。すこ、し、疲れただけです。今日、このまま寝ることに、するので」

「ああ……はい。その……リアス……は？ どうしました?」

「か、彼なら、転移で帰ったから……」

「……分かりました。それでは、どうか」

「ええ、おやすみなさい」

サイラオーグの足音が少しずつ遠ざかる中、彼のピストンが再開された。

「ひうつ~~~~~~~~♡ ふうつ~~~~~~~~♡」

「ミスラさん、今、すぐくうねってますよ」

「やめつ、なんて、ことを、させる、の、ああつ~~~~~~~~♡」

また腕を噛んで声を抑える。言われたように、膣内がさつきまでよりも、もつと……。

ああつ、んあ、なん、ああ、だめえ、あああつ、私、おかし、く、あああん。

「ん~~~~~~~~♡」

「まあ、たぶん気付いてましたね、サイラオーグ。気を使えるようになったって言ってましたし。ああ、洒落じゃないですよ」

肉棒を引き抜かれ、抱き上げられてベッドへと運ばれる途中で、こともなげにそんなことを言う。

ミスラが彼のその顔を睨みつけると、きよとんとした様子で見つめ

返される。

「いや、いずれ知らせることですし」

「なにを……言ってるの?」

「ああ、そのモノにするとか言ってますけどね。その方が盛り上がるからってだけです。叔父上と別れてもらって、その後時期をみて俺と、そのまま、結婚してもらいたいなど。うん、そうなるサイラオーグは義理の息子になるのか……」

ぽかんと口を開けてしまったミスラに笑いかけると、彼は「いや、俺、グレモリーなので……。ああ、でもその、正妻は別にいるので、まあ、えーっと」と誤魔化すように続けた。

「本気で言っているの?」

「冗談で、バアル家の第一夫人に手を出すと思いますか?」

「そう……なのね」

ふと、ミスラは違和感を覚えた。なんだから、自分の声が僅かに高かったような気がしたのだ。

「ふっ、はははははっ、ミスラさん……、ああ、いや、ミスラ」

「え?」

急に呼び方を変えられて、やや戸惑ってしまうが、また何か盛り上がるか何かとそんな話なのだろう。

「あはははは、こんな可愛いことをするんですね」

「何を言っているの?」

笑われながらベッドに寝かされ、上に彼が覆いかぶさってくる。なんだか、面白くない。何を笑われているのか。嘲笑ではないようだが、何かこう微笑ましいものを見るような目線が気になる。

それに、なにかがおかしい。彼はこんなに背があっただろうか。先ほどまでと、体格が違って見える。

「まさか無意識ですか。あつと、無意識なのか……可愛いな、ミスラは」

顔を撫でられる。急に変わった彼の雰囲気についていけない。

「なに、を言っているの?」

「いや、今日はこれで帰るよ。あとで鏡を見たらいい」

ミスラの頭をニヤニヤと嬉しそうに笑いながら撫でて、彼は転移の魔力の中へと消えて行つた。

彼がいなくなると、急に眠気が襲つて来た。起き上がることが出来ない。部屋の中が酷いことに……なつて、いる……のに……。

翌日の昼過ぎに、ミスラは目を覚ました。ハツとなつて室内を見渡すと、綺麗に片付けられている。あれは夢だったのだろうか？

一瞬そう思ったが、寝間着を着ていることから、おそらく使用人たちが片付けたのだろう。

周りでそれだけのことをされて、服まで着せられて、それでも眠つたままだつたなんて……。

恥ずかしい。そう思いながら鏡台に向かったミスラは、鏡に映った自身の姿を見て、より一層赤面の度合いを強くした。

「私は……なんてことなの……あんな一言で、その気になつて……合わせてしまうなんて、恥ずかしい」

鏡の中には顔を真っ赤にした、十代の半ばくらいの少女がいた。

2-10 尻に火が付いた

やったぜ！ いやはや、ミスラさんは実に良かった。たまらんね。興奮のあまり、家に帰って来てからお風呂メイドハーレム5Pでハッスルしてしまった。

なんていうかこう、夫を裏切らせてやるぜーってところは全くなかったけれど。叔父上のミスラさんへの扱いは相当酷いから仕方ないな。普通に恨まれてるし。いや、当然だろうけど。

なんであんなイイ女をポイしてしまうのか、まったく理解できん。サイラオーグの魔力が極小だったことや、滅びの力を受け継がなかったことで滅茶苦茶傷ついているんだから、そこは慰めツクスして、こう、ね。盛り上がり上げておけばいいものを、ほんとバカ。信じられんわ。おかげで俺が手を出せたんだからいいけど。ある意味フアインプレーなのか……ふむ、溜まりにたまった叔父上への怒りゲージがグンと下がった気がするな。

いやー、しかし、良かった。実に良かった。大人の純血悪魔つてのは、ああなのか。っふう……。青い果実なレイヴェルも大変美味だが、熟れているのもまた美味。

すごいエロかったなあ。もう、エロチートなグレモリー魔力で聞こえてくる身体の声が、ほんとにエロいことエロいこと。

溜まってたんだろうなー、相当いろいろと。

行為の最中に、俺や母上のことを嫌っていたり、妬んでいたりとかどうとか言っていたけれど、それもこうグツとくるんだよなあ。

嫌いなはずだったのに……、妬んでいたはずなのに、ああ、それなのに、情欲と愛欲には逆らえないの……。みたいなことわれちやうとさーもう、ほんとに、もう、ね。

前からこの人なんかエロいよねと思っていたが、うん、まったくその通りだったワケだ。

思うに、サイラオーグが生まれるまでは、子作りに每晚励んでいたのだろうし、それが途絶えて結構な期間が経っているという、この間が良かったのかもしれない。

ミスラさん、口ではイヤイヤ言っていたけれど本当は息子に知られたいと思っていたようだったし。後戻りできなくされたいなんて、あー、たまらん。

実際その通りにはしてみたなら、最後にアレだったしな。あれは正直なところグツと来た。俺の年齢に肉体の見た目年齢を合わせてくるとか、反則じゃないか。

いつも通りの、小学生の子供のいる母子家庭の母みたいな雰囲気の方がエロいと思う。思うが、両方イケルということなら、それはそれで、まったく問題ないどころか大歓迎でしかない。

いやー可愛かった。あの後もう二・三回戦するつもりだったのに、照れてしまって思わず帰ってきてしまうくらいに破壊力があつた。

ふむ、しかしあの姿を仮に乙女モードとでも呼ぶとすると、あれは俺に合わせただけではなく、ミスラさんの願望の反映なのかもしれないな。

悪魔たる者、頂くからにはこっちも何かしてあげるべきだろう。win-winでGive & TAKEな関係こそが悪魔同士らしいというもの。

うーん、ミスラさんはたぶん成人してすぐに叔父上に嫁いでいるはずだ。それでもって、相手がああ叔父上では本当に義務的なことしかしていない可能性もある。

なんせあの叔父上だ。第一夫人を平然と辺境に追いやるばかりか、金もなにも出さずに苦労させてやろうとか、そういうことを平気でやってしまう叔父上だ。体面とか体裁とか気にして自分で決断するのが怖くてご先祖の意見を聞いて回って責任回避したがるくせに、平然とそんなことをかましてミスラさんの実家のウアップラ家を怒り心頭にさせてしまう叔父上だ。

たぶん、ヤルことしかやってないに違いない。……俺もまだレイヴェルとはやってばかりだが。

よしよし、ここはデートといこうじゃないか。最初にガツンとヤル。それでもって身体を掴んでおいて、次にデート。ミスラさんの乙女モード精神を満足させて、そのまま搔っ攫う。

しかも、後々これをレイヴェルが知った日には、きつとあの必殺の「ずるいですわ」攻撃をしてくれるに違いない。

レイヴェルのあれが、俺は好きだ。ライザー義兄上は、すぐに他人のものを欲しがるとか言っつて、さもそれが悪いかのような言い方をしていたが、あんなの可愛いだけなんだよな。

俺が朱乃に何かプレゼントする。そうすると、レイヴェルが「ずるい、ずるい」と言い出す。それはつまり自分も欲しいってことなので、俺から何か貰いたいと言っつているワケだろ。別にレイヴェルなら、お金は自前でどっさり持つているので欲しければいくらでも入手できるのに、だ。俺から貰いたいと言っつてくれるのだ。なんだよ、もう、可愛いの塊なのかうちの嫁さんは。

と言うわけで、ミスラさんの精神年齢では恥ずかしくてちよつとつてなりそうなの、レイヴェルくらいなら喜んで着そうなの、滅茶苦茶少女趣味の効いた洋服をミスラさんにプレゼントしよう。で、それを着せて人間界の遊園地とかに繰り出すのだ。恥ずかしがって赤面してくれるに違いない。しかも、おそらくだが、「恥ずかしいわ」なんて言いながら、内心ではきつと満更ではない感じに違いないのだ。あの乙女モードを見た限りでは。

良い、実に良い。ちよつと違うが、こう、子持ちの主婦に学生時代の制服を着させてプレイするような高揚感がある。

やっぱ悪魔はイイナ。我が前世の初恋の君にして盛大なトラウマの元になった天野麗奈ちゃん、彼女だつて今頃はきつとすっかり色々とな気になるオバサンになっているに違いないだろう。だといふのに、それよりずつと年上のミスラさんが、こう、ね。現役で全然イケルものだから……ぐふふ。

我ながら、これは素晴らしいんじゃないだろうか。いや、やってみないとわからないが。何事も挑戦だ！

やはり湯船に浸かりながら、つらつらと考えるのはいいものだ。

そして、レイヴェルへの対応だが……これは素直にゲロつてしまおう。事後報告である。まさしく事後の報告。

ゼクラム祖父さんは話を持ち出すときにレイヴェルを追い出した

けれど、俺的にはレイヴェルの方が重要だしな。今後の相談もある。バアル家関係だから、母上にも話しておくか。

レイヴェルといえば、祖父さんの所に行く時や、朱乃と合わせてヤツたときにラクダの話もしたことだし、一緒にラクダの世話とかすることにしよかな。いいよね、こう、手取り足取り、イチヤイチャしながら教え込んでいくのだ。んふふふ。

朱乃には、我が使い魔だったスライムくんを上げたことだし、レイヴェルには、うん……かなり名残惜しいが、長年手をかけてきた乗騎にして使い魔でもあったゴポリンを任せることにしよう。ゴポリンならもう悪魔慣れしているし、扱いやすいだろうしな。ああ、でもスライムは実質、朱乃専用だったから気にならなかったが、ゴポリンとお別れは寂しいな、いや、レイヴェルのところなら別にそうでもないか？

それにあれだ、人間どもの記したという書物によると、悪魔グレモリーは公爵夫人の冠を身に着けた女性悪魔とかなっているらしい。うん、つまり現在は母上がグレモリーとして認識されているのかもしれないのか？ 謎だ。父上は何処に行った。いや、詳しい人間はそんなこと知っているんだらうけれど。

となると俺の代になると、レイヴェルが公爵夫人なワケだから、こちらの界限に詳しくない人間的にはレイヴェルが悪魔グレモリーと思われるのだろうか？ やはり一番立派なラクダを渡すべきだな。

そうすると俺の乗騎がいなくなってしまうのだが……。

乗騎、ふむ、乗騎か。そういえば今度、白猫を使い魔にしようとしていたんだった。乗る、いや、跨る。ほう、あの白い子にまたがる、なんかエロいな。こう背徳感を覚える。あんな小さな子を四つん這いにさせて、その上に座って、さあ走れみたい……鬼畜！

まあ、魔力の術式で巨大化させるみたいなのがあったような気もするし。猫又は猫状態があるのだから、白猫モードで大きくすれば可愛い白虎みたいになるんじゃないか？ 昔に観た仙人とかが出てくるバトル漫画で猫だか虎にまたがってるキャラがいた気もするし、ありなような気がして来たな。たしか、人間どもの記しているモノの本に

よると、バアル家と猫は縁があるような書かれ方でもあったことだし。あれは黒猫だったか？

まあいい。普通に二頭目のラクダを調達しよう。猫は機会があれば、だな。いや、待てよ。わざわざ魔術を覚えなくとも……。

『なあ、ドライブグ』

『なんだ』

『「赤龍帝の籠手」で物の大きさを倍々に大きくしたりってできるのか？』

『出来るぞ。というよりもその使用法は必須だ』

『必須なのか』

『ああ、アルビオンのヤツはその「半減」の力であらゆるものを半分にしてくる。それはこちらの「大きさ」にも通用する。対抗手段を持っていないと、どこまでも小さくされて行き、いずれ消えてなくなることになるだろう』

『え、こわ……、お前、そういう大事なことはもっと早く教えろよ』

『必要な場面がくれば、自ずと身に着けるものだ。今まではそうだった』

『お前は今、俺のコーチなんだから、先に必要そうなことは教えておいてくれ。本番になって、できませんでしたーってなって死にたくない』

『そうだな。覚えておこう』

『頼むぞ、ほんとに頼むぞ。白龍皇対策はお前が一番の頼りなんだからな！』

『ああ、分かっているさ』

白猫乗騎プロジェクト完！ 『赤龍帝の籠手』でサイズを倍々に大きくして、持続時間も倍増させてやれば、何も問題ないな。大型の虎サイズまで大きくすればいけるだろう。

姉の黒猫は仙術を使うと言うし、仙術にはサイラオーグが身に着けたという闘気なる戦闘能力増大技法も含まれているらしい。ふふふ、どんどん大きくしてやれば、全長100メートルオーバーの子猫による闘気を纏ったネコパンチで、高層ビルも積み木のタワーのように

木っ端みじんなんてことも出来るかもしれない。

まあ俺自身が巨大化して踏みつぶした方が早いのだろうか。浪漫の問題だよ、これは。

巨大！ でも見た目は愛らしい子猫！ でも大怪獣！ そんなギャップが受けるかもしれない。

そのうち何十年かは参戦しておかなければならないだろうレーティングゲームは興行要素が大きいから、観客をわかせることも考えておいてもいいかもしれない。使い魔は持ち込みアリだったはずだしな。

黒猫の方は、レイヴェルの顔つなぎ挨拶周りが済んでからだから、もうちょいで会えるわけだ。発情期ックスは楽しみだなあ。まあ、定期的に遠くなるかもしれんが、それまでにだんだん慣らしていくということで。

兄上、バアル大王家、アガレス大公家までの挨拶は済んだから、次はアスタロト家。あそこはよく顔を出しているからかなり気安い。その後にシトリー家に行つて、こつちも小さい頃からお世話になつているから問題ないな。レイヴェルとしても大王家が一番緊張したようだったし、難所は抜けたから他はそこまでもないだろう。

他は何かあつたかな。ああ、サイラオーグか。いきなり、「お前の母ちゃんと俺、出来てるんだ」したからな。多少は動揺していそうな気もする。悪魔と人間では感覚が違うようなので、年下の男が義父になつたり義兄になつたりはそこそこある話のようだが……あいつたぶんマザコンだろうし。

頼れる相手が母親しかいなかったんだから、無理もないが。

ふーん、親離れ、母離れ……マグダランのことでも気にかけるようにさせるかな。兄弟仲が悪いのも良くないだろうし。

対面して会話となるとお互い気まずいだろう。通信でもリアルタイムなやり取りは急な情の上下動でどうなるか分からん。怒りっぽく激しやすい俺が言うのだから間違いない。

となると、やはり古式ゆかしく手紙だな。文通が良い。一般の郵便を使うと叔父上が潰すかもしれないから、俺がサイラオーグとマグダラ

ンの間で往復してやればいい。

このままいけばサイラオーグはグレモリーで引き取る形になるし、マグダランには定期的に会いに行っているから、その時に渡せばよいわけだ。

いろいろ考えることが多くなってきたな。婚約以来すごい勢いで増えてきている。

朱乃は順調に過ごしているから良いだろう。ふふふ、最近は俺のロープワークもだいぶ上達してきた気がする。そろそろ、『黒髪ポニー女剣客！ 悪大名子息に囚われて……縄の淫獄』みたいなプレイも出来るようになるだろう。

やはり詳しい先生に教わると上達が早いものだ。まったく、元「おせつせ先生」候補のリユイのお陰さまさまだな。

リユイといえば、やはり責任を取らんとマズイだろうな。父上が気を遣うクラスの御家の婦人かご令嬢かなのだろうから。それを完堕ちさせてしまったのだから、貰い受けるしかあるまい。

気は効くし、作業は早いし、出しゃばらずにそつと控えていてくれるし、何より床上手だし。下級悪魔の平民メイドなら、まあ中々だなで済ませているところだが。純血悪魔の貴族となると、正直、とても欲しい。

純血悪魔である時点で一定以上の強さを持っていることか確定しているのだから、『騎士』候補だな。出来るメイドならば常に連れ歩いておきたいところではあるし。

『王』たる者、『女王』または『騎士』、あるいはその両方を従えて……というのが公式でも私的な場でも一般的な作法みたいなどころがあるから。

今度話を振ってみるか、身体の声を聞く分にはまず拒否はされないだろう。あとはリユイの『家』との関係性だが、その時になってから考えるか。

さて、それでは……母上とレイヴェルに、ミスラさんもらうことに決めたからと伝えることにするか……。

グレモリー公爵家の本宅。その一室で、紅の髪的美少年がズボンとパンツを引きずり降ろされ、横向きに女性の膝上に乗せられている。その室内には、バチン！ バチン！ バチン！ と肉が肉を打つ音が幾度も幾度も響き渡り、そのたびに紅の髪の子の口から嗚咽が漏れる。

「まったく！ あなたという子は！ ほんとうに！ どうして！ ころも！ 似なくても良いところばかり！ あの人に似て！」

紅の髪の子の尻を叩く亜麻色の髪の子の名は、ヴェネラナ・グレモリー。見た目は大学生のお姉さんくらいの年齢に見える美女であり、同時に少年の母親でもある公爵家の夫人だ。

「母上！ 母上！ おやめください！ なん、か！ こう！ ヘンな感じに！ なってしまいそう、ですからあ！ 許して！」

なんでセラフォルさんも義姉上も、母上もオシオキってなるとお尻叩くの？ 俺の性癖が朱乃になってしまったらどうするんですか！

「なにを！ どうしたら！ ミスラを！ 側室にする！ なんてことに！ なるのですか！ 言ってみなさい！」

「ひいん！ ちよつ！ やめつ！ んぎい！ 前につ！ 引き取るつて！ 母上も！ 言ってたじゃないですかあつ！」

「それと！ これとは！ 話が！ 違います！」

母子スパンキングプレイとか、ちよつと背徳感が高すぎですぞ母上様。でも、悔しい、長いこと躰けられてしまつてせいで、魔力では勝つていても逆らえなくされてしまつての……。

父上も、兄上も、母上にガアーツて言われると、背筋ぴーんつてなつて従つてしまうから、もうグレモリー家の男は、この人に全員調教されてしまつているのだ。く、くやしい、でも……このままでは朱乃にされてしまう、本当に、マジでヤバイ。

タスケテ……助けてレイヴェル……。

脇に立っているレイヴェルに助けを求める眼差しを送ると……プ

いと顔をそらされてしまった。

見捨てられた……レイヴェルに見捨てられてしまった。

俺はこのまま、尻叩き刑の向こうにある禁断の扉を開いてしまうのか……。

「リアス……覚悟しなさい。防御することは認めません」

「あ、あの……母上……ちよつと、魔力を込め過ぎでは……？」

「あなたには、これぐらい必要でしょう」

「ひい……」

俺の中での母上のイメージは、元レディースの総長である。それもパトカーにガソリンぶっかけた炎上破壊しちゃうクラスの。というか、戦争してたんだから、そんな程度ではないのだろうか。

ちなみにセラフオルーさんはその二代目なイメージ。

名門中の名門であるバル大王家でも、最強候補だった母上の戦闘能力は、たぶん、きつと魔王級……そんな人が平手に魔力をギユンギユン込めていらつしやる。

俺の尻が死んだ……。

「いいですか、レイヴェルさん」

「はひー」

なんかこうギザギザした石板の上で正座させられている俺の横で、レイヴェルがくどくどと母上から言われている。

「学校があるのも分かっています。我が家とフェニックス家の往復で大変なことでしょう」

「は、はい……」

「ですが、きちんと管理していかなければいけませんよ。あの人のときも、それはもう——」

「はいっー」

こうやって話を聞いていると、父上も結構遊んでいたっぽいなというのがなんとなく分かる。父上の愛人やら側室って見かけたことがないけれど、どこぞに囲っているのだろうか。まあ、息子には見せないところでもよろしくやっているのだろう。それはともかく、ケツが痛い。火を噴きそう。

「あの……母上……」

「なんですか」

「あ、いえ、そのレイヴェルは悪くないので、ほどほどに……」

「あなたは黙っていなさい。膝の上に石を載せられたいのですか？」

「ひい……」

なんで拷問っぽいことまで微妙に和風なんだ我が家は……。

ちなみにレイヴェルと母上の仲は悪くない。結構うまいことやっているのではないかと思う。

その後、俺は裸でベッドに突っ伏していた。尻が痛い。熱い。ヒリヒリとかいうレベルじゃないぞ、これ。

「だ、大丈夫ですか……リアスさま」

うう、さつきは見捨てられたと思ったが、炎系の魔力が得意なレイヴェルが頑張って冷却システムの魔力で尻をなでなでして冷やしてくれる……。優しい、好き。

「膝枕して欲しい」

「ええ……あの、どうぞ」

いわゆるペタン座りでほっそい両脚を揃えて差し出してくれたので、そこにうつ伏せのまま顔面を埋める。横から頭を乗せるのではない。正面から両脚の間に鼻先を突っ込むようにして枕になつてもらうのだ。

こうすると、目の前にね。俺専用穴が来るわけで……さらにレイヴェルの腰に両腕を回してガシツとロック。

「やだ……嗅がないでくださいまし」

「うん、今日はこれで我慢してくれ。痛すぎで頑張れそうにない」

折角目の前に全裸金髪美少女の割れ目があるというのに、今の俺は痛みに耐えて動けそうにない。おのれ母上め！

レイヴェルにはあまりやったことがないが、本日は舌ペロで満足させてヤル！

「もう！ それよりも先に話さないといけないことがありますわ」「うん？」

「お義母さまがおっしやっていたことですけど……」

「すまん、尻の痛さしか覚えてない」

正直まだ涙が溢れそう。滲む……。

なにやら大事な話があるようなので、レイヴェルの顔を見上げると――。

こう、なんというか……顔を赤らめてふるふるとしたレイヴェルに目じりにチュツとキスされた。なんだこれ、照れる。

「んっん……。えーつとですね、簡単に言いますと――お金が足りません」

ん？ いや、なんですと？

「黒歌の購入資金が不足しています」

「え？ なんで？ 余裕あったよな……俺の予算」

「ミスラさまの件で消えてなくなりました」

「え？」

俺の小遣いこと、次期当主用の自由用途予算は結構な額になる。割と気にせずポンポン高額な代物を買っても余るくらいだ。

それが、なんで？ いや、エダーギ・ナベリウス殿が黒歌に付けていたお値段は相当なものだったが、それでも余裕があったはず……。

「ミスラさまとサイラオーグ……さん？ をこちらで引き取るとなると、やはりそれなりのものを用意しなければなりませんわ」

「まあ、そうだな。叔父上はアレだが、ウチまでそれに倣うワケにはいかん。きちんと、ウアプラ家から迎えた態を取らないと」

ミスラさんとサイラオーグを俺が引き取ると、サイラオーグは俺の義理の息子つてことになるかもしれないわけで、そうなると、正妻のレイヴェルから見ると……どういふ関係になるんだ？ 義理の息子扱い？ んん？ というところでレイヴェルはサイラオーグの呼び方に困っているようだ。

「ミスラさまは、まだですが……リアスさまが引き取るとなると元大王家第一夫人という格になりますので、最低限、専用のお城は必要です」

「そうだな……」

おお、なんとなく分かってきた。

「それで、お義母さまは……リアスさまにご自分の予算の中で面倒を見るように、と」

「おお……城か……それもミスラさんの格に合わせた……」

「ええ、それにそこで雇う使用人も必要ですし。もちろん内装その他もろもろの経費が一度に来ますので……」

「今年は……」

「リアスさまの予算は、その……」

うああああ……！ 分割とか、そんなのみつともないし……。借りる、か……。父上は……。いや、母上の手が回っているに違いない。兄上は……。義姉上経由で差し止められていることだろう。

他の女を連れてくるための費用で、そのまた別の女に使う金が足りないなんて状況で、まさかレイヴエルに借りるなんて真似はできないし……。

これは……最悪、ディオドラにこっそりと貸してもらおうしか、ないのか？ うわー、恥ずかしいなこれは……女買いたくて他家からお金借りましたなんて、恥ずかし過ぎる。だからといって、俺はもう黒猫発情期ツクスするつもり満々なのだ。諦められん！

ディオドラから借りたなんてことが、母上にバレたりしたら……もうこんなケツが痛いなんてレベルでは済まされないだろう。

くそっ！ どうする、どうする……!?

ええい、こうなれば一か八かだ！ 賭博する！

レーティングゲーム賭博に賭けるしかない！

負けたら、こっそり借りよう。そうしよう。金額以上にめっちゃ借りを作ることになってしまおうが、致し方なし。

2-1-1 ロイガン・ベルフェゴール

ロイガン・ベルフェゴール。

ここしばらく、レーティングゲームのランキング第二位を定位置としている悪魔界屈指の実力者。

魔王セラフオール・レヴィアタン、『最強の女王』グレイフィア・ルキフグスと並んで、最強の女性悪魔について語られる際に必ず名前の挙がる強者である。

そんな彼女がその募集に応じたのは、悪魔らしい欲によるものだった。

ロイガンは男が好きだ。欲望に生き、欲望を与え、欲望を叶える悪魔にとつて、セックスは至上のものの一つであると考えている。

ロイガンの好みは年下の男だ。若い男をなぶる様にして弄ぶのは、マトモなゲームでの勝利と同じくらい気持ちがいい。

ロイガンは、特に未成熟な男が好きだ。まだ成熟しきる前の初々しい若木を弄りまわし、自分の色に染め上げ、そして何年かして成熟しきってしまったらお別れして、次に乗り換える。そんな生活を長いこと繰り返してきた。

長いこと生きて来たと言っても、ロイガンはまだ憂鬱の病に沈むほどには歳を重ねていない。まだ、まだまだと求める熱情がその身に宿っていた。

ロイガンは人間が好きだ。人間の男はいい。やはり悪魔たるもの、同じ悪魔と遊ぶのも良いが、本領は人間を誘惑し堕落に導くことにある。

グレモリー家次期当主、『紫紅の龍帝』リヴラクス・グレモリーに性行為を学ばせる教師の仕事。

人間の記憶と魂を宿した純血の悪魔。魔王の弟にして赤龍帝。

純血の貴族悪魔の常として、見目は良い。弟だから当然なのだが、あの最強の悪魔サーゼクス・ルシファアの若き日を思わせる姿をしている者に、手取り足取り教え込んで、舌を使わせ、腰を振らせるといふのは、何とも言えない優越感を味わえそうだ。

生れ付いての才能に大きく恵まれず、世間には言えない手段でそれを補い今の地位にいるロイガンにとつて、生まれながらの超越者にして神滅具の所有者などという冗談のような存在に対して、上から接することのできる機会というのは、実に魅力的に映った。

グレモリー公爵ジオテイクスと話が付き。これほど著名な方ならば……とほぼ内定した後はああしてやろうか、こうしてやろうかと、湯船に浸かりながら、色々と妄想したものだ。

それが覆されたのは、突然だった。フェニックス家から長女との婚約の申し込みがあつたので、まずそちらを優先させると連絡があつたのだ。

ロイガンは嘆いた。もう、こうしようとか、ああしようとか、どんな風に教え込んでいこうとか、色々と計画を立てていたのだ。それが急になくなってしまふ。

なんとということか。

ロイガンは抗議した。そうしてグレモリー公爵に認めさせたのだ。お手付き要員でもある若様付きメイドとしての潜入を。

下の立場からでも骨抜きにしてみせる。そんな自信があつた。これらの奴らとは年季が違う。それに経験だつて多い。何より長い年月を経ても未だ研鑽を怠つてはいない。

そう、ロイガン・ベルフェゴールは己の欲望を満たすために努力し続けてきた悪魔なのだから。

自身が有名人だと言う自覚はあるので、ただのメイドとして入り込めるように、まず見た目の年齢を変更する。目立つ髪色を変え髪型も変える。顔つきを微妙に変化させて印象を操作し、魔力もメイドとして仕える者たち程度に抑え込む。

さすがにナメられると癪に障るので、メイドの中では魔力量を最大にしておいた。悪魔というのは魔力量の差に敏感なものが多い。それで上下関係が決まるところがある。

偽名を名乗り、上手いことメイドの中でリーダー的な立ち位置におさまったロイガンは、目的のグレモリー家の若様へと接近し……そして……。

「今日は『赤龍帝の籠手』を使ってやろう。ここの触覚、感度とでもいうのか？ そいつを256倍にしてやる」

ハメこまれた状態でそう告げられ……。

「んんほおおっおおおツツッ、♡♡♡♡!!」

赤龍帝の大いなる力によって、完全に屈服させられてしまった。

—●—

俺の尻は不死身だ！

レイヴェルと盛り上がって、好きなプレイをしてあげたら速攻で治った。朱乃の尻も禁手使って治したのに、どうして忘れていたのか。

まあ、全部レイヴェルのお陰なのだが。

そのレイヴェルが学校に行ってしまったので、俺はリュイを呼び出していつもの奉仕をさせることにした。風呂で考えていたこともあるしな。

今日は勤めていてくれたので、丁度よかったというものだ。別に善ではないが、急いで損する話でもなし。

「あふんっ……ぴちゅや……ううぐちゅ。はあうん……んっふ……、ぴちや、じゅりゅ……んじゅ……ちゅぴゅ……」

ベッドの端に腰かけた俺の脚の間で、角を生やした純血悪魔のメイドがゆったりとしたペースで、舌と唇、口内の粘膜、そして喉の奥までをたっぷりと使って肉棒にむしやぶりついている。

前後する彼女の頭の動きに合わせて揺れ動くホワイトブリム。ああ、やはりメイド服は良いもの、一家に数十人は欲しい者。

ゆったりペースでやらせているのは、彼女に本気で全力で口淫させると秒殺されてしまうからだ。

「いいぞ、相変わらず上手いな」

「んうくっ……はっ、ありがとうございます。若さま」

「ほら、続けろ」

「はい……。はむっ……じゅっ、ぴちゅ……んっふう……。くっちゅ

……んんんう……ちゆうっ……じゅりゅっるっ」

カリ首を啜えて唇でこすり上げ、尖らせた舌が亀頭の先の割れ目を幾度もなぞり、喉奥にまで飲み込まれたかと思えば、痛みは感じず快感だけを寄こす絶妙な加減で歯を使って扱かれる。

湧き出して来た先走りも吸い取られ、頬をへこませての強烈な吸引。それらをこちらが暴発しないギリギリのラインで行ってくれる。

「ああ、いいぞ。本当にいいな、リュイは」

ギリギリまで焦らさせ、爆発寸前で待機状態の砲塔が、ぶるぶると震えるようだ。よだれが垂れてしまう。

そろそろか、結構堪えたし、もうそろそろぶちまけたいな。

「あっふっ……、ああっ、若さま……どうか、どうかこの若さまの精が欲しくて仕方のない、はしたないメイドの喉奥に、注いでください」
「よし、いいぞ。全部飲み干せ」

「ああっ、嬉しい♡ ふうっぐぐう……むじゅ……、ぶじゅ……。じゅりゅ、じゅるじゅる、ずちゅるるるっ……。じゅぱっ……んうじゅ……んんっうじゅ……んんっううぐぶっ……んんっ!!」

ああ、この、いいな。よく分かってやがる。こっちの我慢の限界もきっちり把握してるんだろな、これ。それでいて、ちゃんと合わせでねだって来るとか、はあーいい。分かってる。

ちゃんと口の中を見せて、白濁を舌で転がしてからゴックンとか、基本もバッチリだ。

「今日も良かったぞ」

「ああん……はい♡ 若さまのお役に立ててリュイは幸せ者です」

いつの間にか掴んでいた角から手を離し、頭を撫でてやると本気で幸せそうな顔をする。

もうリュイからはいちいち「声」を聞いていない。少々グレモリーのエロ魔力を注ぎ過ぎたからな、控えておかないとダメになってしまうかもしれない。

などと思いつつも、『赤龍帝の籠手』の新しい使用法は、きっちり試してしまおう予定なのだ。それに、リュイは性交感度倍増の虜になっているっばいから、そっちにはきちん応えてやりたいところだ。

「上手に出来た褒美をくれてやろう。リュイ……今日は何倍にして欲しいんだ?」

「あああつ♡ ……にひゃ……二百五十六倍で、全身に……ください」
「そうか、そうか。お前は本当に好きだな。ほら、受け取れ」

全身の触覚を256倍に、これはつまり撫でまわして全身でイカせて欲しいということだ。

「ああつうつう♡♡ ……ああつ、あーはああ♡♡」

「主人にシテ欲しいと口にするなど、メイド失格だなお前は。とんだ淫乱だ」

「あつ、あつ、あつ、もう、申し、わけ、あり、ません……ああつ、でもお、ああつ、これえ……」

まあ、ただのメイドならこんなことをイチイチしてやる義理もないが、色々と教わっていることだし。純血悪魔のようだからな。

それに、こう、何百年も男を大量に啜え込んで遊び尽くして来た女を、俺の手でイカせまくるとするのは単純にイイ気になれる。これは、ドライグのお陰だな。

ほんと、『赤龍帝の籠手』ってヤツはとてつもないエロアイテムだ。

「メイド服が擦れるだけでも気持ちいいんだろう?」

「はっ、い。ああつん……♡」

「よし、ではベッドの上に乗って寝転がれ」

「はい……あつ♡」

「ほら、転がしてやる。メイド服に全身擦られてイッてしまえ!」

服が擦れるだけで気持ち良くて仕方のない状態になっているリュイを、ベッドの上でゴロゴロと押し転がしてやる。

「あああああ——♡♡! わか、わかさまああ♡♡」

「服でイケ、イッてしまえリュイ!」

「あああイクつ、イクつ、イクイクイクつうう♡♡!!」

なんというか、赤龍帝ってほんとすごいな。歴代の赤龍帝の内の幾人かは毎晩違う相手を寝所に連れ込んで、とつかえひつかえ出来てたつてのも納得だ。

リュイみたいな遊んでる女を、物理的に転がすだけでイカせるって

なんだコレって話だ。楽しいからいいけど。

「今度は頭を撫でてやろう。角の根元も好きだったな」

「ああ……すごい。イイのお……気持ちいいです、若さまの手」

「ふふふ、そら、頭を撫でられて、角をかじられてイってしまえー！」

リュイの角には、ほとんど感覚がないらしいが、ほとんどないということは僅かにはあるということと、そいつを倍増させて噛みつくくらしいの強さでいじってやったら、結構効いた。

「ああっ、ああっ、イクウ！ イキますっ、頭撫でられてイっちゃいます♡ 角かじられて、イってしまいます♡♡ ああっんんう!!!」

蕩けたというよりは、白目むいて舌をデロンとさせたような表情になってしまっているリュイの顔に触れる。俺はもうちよつとこう幸せトロトロ顔が好きなのだ。

「ああっ、若さまに、わかひやまに、かお、かお、うれひ……ああいい♡ かおで、ほおで、イッグうううう♡♡♡!!」

上級悪魔が『譲渡』一発でこれとか……神や魔王も倒せてしまう神滅具とは、こういうことか。俺、今は魔力全然使っていないつもりだし。

女神が相手なら、人間でもハメ殺しできるんじゃないかこれ。さすが神滅具、神を貫いた槍、ロンギヌスの名を冠するものの一つだけある。

もし機会があったら、処女神とかにぶち込んでやりたいなあ。アテナ神とかアルテミス神とか、あのあたりそうじゃなかったっけか。

いや、さすがに戦争案件か……父親のゼウス神にぶつ殺されそう。他人の女は平気で寝とるが、自分の女や娘がされるのは、ぜってーゆるさねえって感じがするものな。俺もそうだし、気が合いそう。

「ほら、リュイ。自分だけ良くなっていないで、俺のモノにも奉仕しろ」

「はっ、はい。申し訳ございません」

仰向けになって、ビンビンといきり立った如意棒を指してやる。

リュイは俺の上をまたいで立つと、スカートをまくってドロドロになった内側を見せてきた。うん、いいな、このロングスカートの中か

ら現れる下の口の涎にぬれた太腿と、ガーターベルトで吊られたエロイストツキング。

「今日はな、『赤龍帝の籠手』の新しい使い方を習って来たんだ」

「あ、あたらしい……………」

情欲と期待に満ちたこの目のエロさよ。

『倍加』の能力は、サイズを倍にすることも出来るらしい…………意味は分かるな?」

「あつ…………あつ、ああ……………」

「リュイはこれまで相当な数を相手にして来たんだろう? だから俺のサイズでは物足りないかもしれないと、少し申し訳なく思っていたんだ」

「いえ、いえつ…………そのようなことは、決して」

「いい、いい。とりあえず二倍にしてみるが…………いけそうなら、そのまま腰を下ろしてこい」

いつものブーストの音声と共に、俺の如意棒はまさしくそのようになつた。長くて、太い! すごいなこれへソを余裕で超えてるぞ…………マジか…………ドライグさん、マジエロドラゴン。

これが巨根…………! 長さもアレだが、太さがヤベー!

「はあ…………♡ すごい…………見ているだけで…………♡」

「いけるか?」

「あああつ…………はい、イキます」

牝の裂け目を隠す布地をズラし、リュイはためらいなく腰を下ろして来た。

おお、いつもと全く違う。キツイ、入口の時点でギチギチだ。

「おい、本当に大丈夫か? 裂けないだろうな!」

「だい、だいじょうぶ、です。ああつ♡ あつ ああん♡♡」

「感度下げておくか?」

「い、いえ、どうか、このままで…………んあんああああ♡♡♡♡!!!」

おお、一気に行った…………ぐううう、これは、すごいな。

一突きでイキまくってるな、これは。物凄い。

「あはあ♡♡ ああああ、すごい♡ これ、しゅご♡ あん、わか、さま、

わかさまあま♡♡ イつてます。ろい、ろい、いって、イツテえ♡ イツてまううう♡♡」

「無理しなくてもいいぞ。しばらくそのままでいろ」

どうにか騎乗位で動こうとするので、とりあえず待機を命じておく。いや、これ、だって、腹がボコオってなってるし。

意地なのかなんなのか、リュイがスカートまくったままで見えるが……モノの全部が納まっていない。奥まで届いてゴツンとぶつかっている感触はあるのに。

「あつ♡ はあ……♡ あああつ♡♡ はーああん♡」

慣れるまでしばらく動かさないうでいたが、入れてるだけで感じまくっているようだ。

「そろそろ大丈夫そうか？」

「は、はあ……はあい。うぐ、きます。どうぞ、わたし、のオマンコで気持ちよくなって、くだ、さい」

ブルブルと足を震えさせながら、リュイは腰を持ち上げ、落とした。「あひいいいい♡ あぎい♡ ひぎつ♡ ひつぐツ……♡♡ こわ、こわれるうう♡♡ わた、ひ、もつと、もつと♡ イツん♡ ひいいん♡」

甘いというよりも、叫びと言った感じの声を吐き出しながら、リュイは必死で腰を上下させている。

うーんむ、これはちよつと俺の趣味じゃないな。

「やめろ、リュイ」

「えっ……あう、わかさま……」

「ああ、怒っているわけじゃない。一度抜いて、お前が下になれ」
「は、はいー」

やはりこれを啜え込んでの上下動は厳しかったのか、嬉しそうに仰向けになったリュイ。その両脚の間に腰を進める。

「挿れるぞ」

「ああっ♡ きて、きてください……若さま。ふうあああん♡♡」

おお、よし、こつちの方が楽そうだな。

「動かすぞ」

「あつっ♡ はい、はい♡ ついて、ついてえ♡ ろいの、ろいの中、わかさまの、好きにしてください」

一突きごとにイってるな。激しく悶え、悶えて身体をくねらせたことで、よくなつて、さらにイク。そんな状態のリユイに早すぎない程度の速度で打ち込んでいく。

「おつきい♡ くあはあん♡ イック、あ、またイクっ♡」

メイド服を着せたままなので、女の裸身が揺れる淫靡さはないが……その代わりに白いフリルが快感により狂って踊るさまが視覚を愉ませてくれる。

「んっ、アアッ♡ アッアッアアッ♡ イイツ……イイイアのおお♡
♡ わか、ひやまああ♡♡」

「んっ、おおっ！ 出るっ！ 出すぞ!!」

「あああ、出してえ♡♡ いっぱい、くださいいい♡♡ ああお♡ ツ、しゅごいいいのお♡♡ んおおほあお♡♡♡!!」

効果時間いっぱい、ブーステッドギアックスを存分に楽しんだ。

『赤龍帝の籠手』の『倍加』には限界点が存在する。俺の場合はそこに割と早くたどり着いてしまったので、それ以降は効果時間や同時に『譲渡』できる人数とその効率などを重視して伸ばして来た。その甲斐あつてか、行為中に途切れて興ざめなんてことがないのは良いのだが。

なるべく蕩けさせてやりたいと思うのだ。だが、どうにもリユイが相手だと腰振りというか、こう全体的に上手いので、こつちも余裕がなくなつて完全に意識を持っていかれてしまう。それで気がついたら、ごらんの有様だよ。

「リユイ、リユイ……生きてるか？」

うん、またアへ顔にしてしまった。自重したいんだがなあ、これは。「は……はい。わかさま、今日も……素敵でした」

なかなかタフなので、ついついヤツてしまうのだ。魔力の特性的にはレイヴェルの方がハードなプレイに向いているのだろうが、精神の方を壊してしまいそうで怖くてできない。

「なあ、リユイ」

「ああ……」

横たわるリユイを抱き寄せて、顔を近づけ至近距離でじつと目を見つめる。うん、好きだ。

「俺の『騎士』になつてくれないか？」

2—12 不正賭博不正

『騎士』……。私が、若さまの『騎士』……。ああつ、そんなことって……」

うんうん、思った通りめっちゃ嬉しそうな顔をしてくれた。これで、おまえ、「えー、嫌ですよ。何勘違いしてるんですかあ？ 仕事でヤツてただけですよ」とか言われたりしたら、俺はチンポが勃たたなくなってしまうところだ。

「ああ、お前はメイドとしてよくやってくれている。少しばかり休みが多いが、それも事情を聞けば仕方がないことだったんだろうな」

「あの……事情を聞いたというのは？」

急に不安そうになったリュイの頭を撫でながら、父上に聞いたことを話した。

「すまないな。あまり詮索するのはダメだったんだろうが、お前のことが気になって仕方がなかったんだ」

リュイが元々は俺の性行為の教師となるはずだった、純血悪魔であること。そして、魔力によって姿を変えていること。

それから、父上がリュイがどこの誰なのかまでは教えてくれなかったこと。

俺が聞いたのはこれだけだ。

休みが多いのは、まあ、純血悪魔＝貴族なのだから、何かしらの付き合いがあるのだろう。

「若さまが……。私を……」

「リュイは純血悪魔なんだろう？」

「……はい」

「純血悪魔なら、ある程度の強さがあることは確かだ。それならリュイを俺の『騎士』にしてもやっていけるだろう……。一度そう思うと、どうにもお前を自分のモノにしてしまいたくて仕方がなくなった。だから、ずっと俺の傍らに仕えていて欲しい」

『女王』が『王』の片腕、相談相手としての役割を持つなら、『騎士』は『王』の護衛であり従者として付き従う者。そんな考え方、文化があ

る。『悪魔の駒』が開発され、運用されるようになって以来、いつしか悪魔の中に生まれたものだ。

実戦での能力だけを考えるのなら、プロモーションの制限がないに等しく『女王』同様の効果を簡易に得られる『兵士』の方が有用なのだろう。

だが、近年生まれたそんな伝統に則るのなら、俺のメイドの頭を務めているリュイに与えるのは、やはり『騎士』の駒が相応しい。それに、なんとなくだが世の中には『騎士』≡テクニクタイプといった風潮がある。テクニシャンなリュイにはバッチリだ。

「若さま……」

「俺のモノに、俺の下僕騎士メイドなるんだ、リュイ」

すっかり快樂漬けにして墮とした女にこんなことを言えば、そりやあもう嬉しがるに決まっている。

そして俺は、まだリュイのメイド服を脱がしていない。メイド服はいいものだ。完全装備のままズラして挿し込んでも良い。半脱げにして愉しむのもまた良い。おおむね脱がした上で、ホワイトブルムやストッキングのみを残す、あるいはそれプラス俺が趣味で着させている清潔感の中にも色気を感じさせる系統の下着姿にするのもありだ。

個人的にはメイド服はロングスカートでクラシカルが基本。魅惑のふともものミニスカやエロさに寄せたフレンチタイプがダメとは言わないが、やはりベースとはなりえない。ヴィクトリアンや和風、チャイナも捨てがたいが、やはり基本こそが至高な嗜好なのだ。

エプロンドレスの中身は、上下セパレートの前開きブラウスが良い。なぜって、脱がし方のバリエーションが増えるからな。ワンピースも悪くはないが、上だけ着衣とか、下だけ着衣が出来ないし。前開きでないとおっぱいポロンが出来ないではないか。いやいや、後ろ開きで前から見たら普通に着ているのに、後ろは開いていて、その隙間から手を差し込んで揉んだり、背筋を舐めたりも良いのだが……実に悩ましい問題だ。

最終的には、ホワイトブルムとエプロンさえ着けていれば、大体メイド服っぽく見えてくる気がするのだから、やはり基礎を抑えておか

ねばな。うむ。

となると、裸エプロンにブリムを乗つけたら、それは裸メイド服ということに……？ うん？ 着ていないのにメイド服……。エプロンだけを残して、中の服だけを抜きとり脱がすような技も覚えてみるべきか……。うーん、道は遠い。

「ああん……♡」

「リュイ、お前の子宮に『騎士』の駒を挿れてやる」

ももぞとメイド服を脱がしながら、亜空間から『騎士』の駒を取り出す。

当ててみた感覚だが、通常の『騎士』駒一つではリュイを従えることが出来そうにない。ならばと、変異『騎士』に変えてみると、どうやらこちらは容量が足りていそうだ。

「リュイ……、お前、素質があるぞ。変異していないと受け入れられないなんて」

「ああつ、あんうう……待って、お待ちください、若さま……」

膣に駒を挿入しようとする、リュイが待つて待つてと手で塞いでくる。

リュイのくせに俺に逆らうとは、これはオシオキが必要だな。

『赤龍帝の籠手』を発動させ、リュイの角の感度を大幅に上げて噛みつく。

「んああつ♡ 響くうううつ……頭の、な、か……ごりごりツつてええ

……♡ あつ、あつ♡ おまち、を、若さまあ、どうか、おゆるしをおお

……♡♡」

頭部から突き出ているこの角をいじってやると、頭蓋骨に直に振動がいくらしい。頑丈なので普通ならなんてことのないどころか、防具代わりにすらなるそうなのだが、感覚を急上昇させてやればこの通り、敏感な性器官に早変わりよ。ガリガリゴリゴリと歯を立てて

「ほら、その手をどけるリュイ。俺の『騎士』になりたくないなどは言わせんぞ」

「ああつ、なり、たい！ なりたいです！ 若さまの『騎士』！ でも、ああつ、でも、まって、まって下さい!!」

「まだ言うのか、確かに子宮にぶち込まれるのは恥ずかしいかもしれないが、お前なら存分に悦べるはずだ」

「んんっ……ダメえっ！　ダメなんですっ……しんじや、わたし、死んじやいますっ……!!」

「ハハハ、よーし、ほら、手を退ける……、死ぬほど感じさせてやる」
「ああっ、あっ……ちがっ、ちがうんですっ、ダメえ、それ、それしたら、ろい、ろい、死んじやいますっ……!」

嫌がるそぶりをして楽しませてくれている、という感じでもないのか？　いつもと違って本気というか、イヤンイヤンという遊びの感じがないというか。

「はあ……はあ……、んはあ……、わか、さま……?」

「言ってみろ、何をそんなに嫌がっているんだ。リュイ」

自分でも不貞腐れた声を出していると思う。絶対いけると思っていたお姉さんメイドに、本気で抵抗されてしまつて不機嫌な若さま登場である。年齢考えて、と自分でも思うが……まあ、身体年齢に釣られてつてことにおこう。

「ああん……♡　若さまあ……♡」

仰向けのリュイに伸し掛かっている態勢で、彼女に抱きしめられた。半脱げ状態のほだけたメイド服の胸元に顔が埋まる。半ばまでズリ下ろしたブラの上からのぞくピンと勃つた乳首が頬に擦れて心地よい。

この着衣の感触と、柔肌の感触を同時に味わう至福。股間がムクムクしてくる。

「挿れるぞ、リュイ」

変異『騎士』の駒をリュイの胸の谷間に挟んで置いて、まくり上げたスカート奥へと肉棒を突き進める。ついさっきまで倍化チンポで味わっていたその裂け目は、元に戻った俺のモノでも存分にしゃぶりついて楽しませてくれる。

「あんっ……、はあ……♡　若さまのが……奥に、届いて……♡」

人間ならばガバガバになっていたかもしれないが、そこはさすがの純血悪マンコ。すぐにいやらしく窄まってきゆうと締め付け、俺も

リユイも腰を動かしていないというのに、にゆるにゆると扱く様に肉
褌が蠕動し始める。なんて淫らな穴なのだろうか、この淫乱メイドの
裂け目は！ ああ、そんな女を俺はこれから下僕にしようとしている
のだ。

「それで、なにを嫌がっている？ まさか、俺の他に『王』と仰ぐ相手
がいるのか？ 他の誰かに仕えたいと考えているとしたら、そんなこ
とは許さんぞ」

串刺し状態だ。下手な言い訳をしゃがったら、子宮のドアを小突い
てやる！

駒を入れること自体は可能な感触だったのだ。だから、今現在、
リユイに『王』がいるというのではない、はずなのだが。

「いいえ、そんなことはありません！ わたしの、リユイの『王』は、
主は……若さま、リヴラクス・グレモリーさまだけです」

ぎゅうつとより強く締まった。おお、いいな。この俺だけだって言
いながら、締め付けてくるなんて……胸を揉んでやる。

「そうか！ そうか！」

「ふううん♡ ああつ、まだつ、はな、しが……」

「聞いてやるから、言ってみろ」

「わかっ、さまはっ……『王』の駒を、ご存知でしょう、かつ」

『王の駒』というと、アレだ。低俗な雑誌なんぞを取り扱っているよう
な、クソ平民どもの会社なんか時折話題に上げるレーティングゲー
ム関連の噂話だ。

愛撫を止めて、ぐつと顔を近づけた。

「都市伝説程度には聞いたことがあるが、それがどうかしたか？」

リユイの頬に手を添えながら聞くと、彼女の姿が変化し始める。髪
型が変化し、髪色も桜色に、見た目の年齢も二十代後半ほどになる。
目付きや口元、その他の顔の部位も微妙に変わっていく。

ひとつひとつは些細なそれらが合わさって顔全体の印象が大きく
変化した。

「ロイガン・ベルフェゴール？」

「……はい。私は、ロイガン・ベルフェゴールです……んんうっ♡ あ

あつ、若さまのが、おつきく……」

不思議と大きな驚きはなかった。ただ、代わりに肉棒がググンとデカくなった。

ロイガン・ベルフェゴールと言えば、大変な有名人だ。そんな者が俺の「おせつせ先生」として名乗り出てきて、お手付きメイドでもいいからと寝所に忍び込んできていたわけだ。

「話し方が、テレビで観るのと違うな……ああーつと、違いますね?」「どうか、このまま……メイドのリユイとして扱ってください!……んあつああ♡」

おつと、腰が勝手に動いていた。膣内の感触は変わっていないな。「この味は俺のリユイのままだ」

おお、なんだろう。この感じ、同じ女のはずなのに……。さつきまでと違う。同じなのに、違う。

「んああつ♡ あつ、あつ、イイっん♡ あつう、こんな、若い子に、ああつ♡ すきにされちやつてるのお……♡ ああつ、もう、もう、ろいは、ろいはあ……♡」

「イイのか? 籠手もなにも使っていないのに、イイのか?!」

「はひい……♡ あつ、いっん♡ さからえなく、なっっちゃった、……ああ、んう、わたし、ぜんぶ、わかさまのお♡ ものに、されてるのお♡ ああつ♡」

媚肉を引きずり出しては押し戻し、引きずり出しては押し戻す。

乱れたメイド服を着た、レーティングゲームランキング二位の女。彼女は、メイドのリユイとして扱われることに快感を覚えているようだ。

「俺の『騎士』になるんだな? ロイガン・ベルフェゴールが」

「はいッ! なりたい、なりたいです! わたしを若さまの、んあん♡♡ 下僕騎士メイドにしてえ……♡♡」

「リユイ! リユイでいいな!! お前は俺の前では朝勃ちをなめしやぶるのが大好きな、ご奉仕メイドってことだな!」

「はいい……♡ わかさまの、わかさまのリユイになります。なつてます……♡イイん♡」

年下の若い男に組み敷かれて、命令されて、逆らえなくされて、逸物を啜るのが大好きとは恐れ入る。とんだシヨタコン女じゃないか。

将来、俺が外見年齢をいじれるようになったら8歳ぐらいの姿で犯してやろうか。モノだけ倍加でクソデカにして！

「ここが好きだろう？　ここも、こつちもイイんだよな！」

「はい……ああ、若さま好き、大好きでう……下僕にしてくださいいいいっ♡」

「ああ、してやる。下僕にして、何度も何度も中に注いで孕ませてやる！」

「んうう……うれし、イイっ♡　あんうっ、孕ませてえ、若さまの赤ちゃん……♡　産ませてください♡」

俺にも人数は少ないながらに付き合いのある者がいる。そうすると、必ず話題に出るのがレーティングゲームだ。

そうなる話の中で鼻屑にしている選手の話も当然出てくるわけで、そんなとき、俺はロイガン・ベルフェゴールの名前を上げていた。

スポーツなどでどうせファンです、とか応援していますといったことを言って観戦するのならば、強い選手やチームがいい。俺は弱いチームを応援して「ああ、また負けちまった。しゃーねーな」などと言えるような通な楽しみ方はできないのだ。

真剣ではないにせよ、応援するのならそのチームが勝つに越したことはない。その方が気分よく過ごすことが出来るつてものだ。

それをレーティングゲームでやるのなら、上位者を選んでおけば間違いない。成績がはつきり出てくるからな。

ならば、一位のベリアルか？　ない。三位のアバドン？　ない。どうせ観るのなら美女が良い。ということでは俺は第二位の女ロイガン・ベルフェゴールのファンですよということにしているのだ。

俺がロイガンの試合映像の録画などを観ていたとき、それを脇に控えて一緒に見ていたりユイはどう思っていたんだろうな？

敢えて聞き出しはしないが、それを想像するとなんだか面白くな

る。

「ああ、んああっ好きにしてえ……♡ わかさまの、わかひやまのお……♡ イツく……イクん♡」

「くうっ……出さず。リュイの子宮に注ぎ込むぞ」

「はひい♡ ひらきまいた、子宮のくち、あけて、まつてるますう♡
突き込んでえ、ああっ、イイツ、イツつく♡ あっ、イクっ、来てる、い、いっばい、きてるっん♡ 注がれてえ、んっしゅごいのおくるううう♡♡ いぐううう♡♡!!」

……。

ふう。

「それで、『王』の駒がどうしたんだ？」

リュイの正体に興奮して、またやってしまった。まあ、リュイも大悦びしていたしいだろう。

挿入しておくとまた始めてしまいそうなので、今度はイチヤイチャしながら話を聞くことにした。リュイのチャームポイントはやはり角だな。

あと、ピンク髪は淫乱というのは事実だったらしい。それもまた良いのだが。

『『王の駒』はあるんです』

そう言ってリュイは、俺がぶっかけた跡の残る自身の胸をさすった。

「私は『王の駒』を使っています。レーティングゲームが好きで、でも、才能が足りなくて、長い間……どんなに頑張っても目指す場所に届かなかった。だけど、諦められなくて、どうしても……あの舞台で戦えるだけの力が欲しくて、それで……」

リュイが使用した『王』の駒というのは、なんでも使用した者の力を十倍から百倍以上にまで強化することを可能とする性能を持っているらしい。

ただし、最初期に少量製造されたきりで数は少なく、さらに他の

『駒』と同時に使用しようと重複・融合させると何かしらの危険な動作不良を起こす可能性があるようだ。

「それで、リュイは『王』の駒が入っているから、俺の『騎士』を受け取れない、と」

「……はい。私は、これを抽出する方法を知りません」

「知っついそうなのは……また、ベルゼブブさまか……」

「だいたい、悪魔の力を強化するだけなら全部『女王』の駒の能力でいいじゃないか、とは思っていたんだよな、前から。変異とか妙なシステム組み込まないで、最初から変異状態の容量の大きいモノを用意した方が扱いやすいだろうに。あの方、遊びを入れるからなー、『悪魔の駒』制度自体があの方のお遊びなんだろうな。」

「しかし、そうなるとリュイは、元の力を数十倍にして、それでようやく今の力なのか」

それは確かに「才能がない」な。今のリュイから感じる力がいわゆる『魔王級クラス』ってやつだ。つまり、俺の素の力の何分の一つレベル。

そのまた数十分の一しか元々の能力がないとなると、うん、まあ、相当弱い。少なくとも基礎スペックには恵まれていない。

そう考えると、このまま普通に育っていけば最上級悪魔クラス、血反吐を吐く思いで潰れるリスクを飲み込んで励めば魔王級クラスを狙えそうなマグダランは才能に恵まれている方なのだな。

「これがなければ、今の力も地位も、ゲームを楽しむこともできなかつたので、後悔はしていないつもりだったのですが……。今は……」

『騎士』を挿れると、どうなるか分からないか」

「ええ……若さまは、その……私が『王』の駒を使っていたことについては……その」

「ん？」

「いえ、不正行為ですし……」

「いや、それ不正行為になるのか？」

俺は一応レーティングゲームのルールブックは把握しているつもりだが、どこにも『王』の駒の使用禁止なんて書いては無かった。法

律関係でも覚えがない。

「というか、どこかに明文でハッキリと『王』の駒のことが書かれていたら、噂だの都市伝説だのといった扱いにはならんよな。」

「ですが、ベルゼブブさまが最初期に僅かに製造しただけで、使用禁止にしたものだ……と」

「それ、誰から聞いたんだ？」

「私に『王』の駒の話と、その見返りに八百長試合への参加するようにと言って来た大王派の方ですが」

「なあ、リユイ。俺たちは悪魔だぞ。文面にはつきり書かれていないところは、勝手に解釈して好き放題する悪魔だ。その悪魔が、どこにも使用禁止と明示されていないものを使ったからと言って、どうして後ろめたい想いを抱く必要がある」

「ダメならダメでハッキリと分かるように書いておけ！　という話だ。」

「だいたい神が製造した神器はオツケーで、魔王が製造した『王』の駒がダメとかオカシイし。」

「それで処分されるってことは通らないだろう。何かしらのドサクサに紛れてならともかく、供給元に大王派が絡んでいるのなら平時なら無罪で通せるな。だって、ダメだと書かれていないし。」

「大王派が問題なしと言う、その上で魔王派が「いいや、これは使用禁止にしている。だから処罰する」と返すとして、でもそこに処罰の根拠はないのだな……兄上たちの私情しか。」

「何故って、使ってはならない理由も、その存在自体も秘匿していたから。後付けで罪を作ったことになってしまう。」

「それが通るのなら、貴族なんか自身の領地でやりたい放題よ。貴族には貴族領独自の法を敷く権利があるからな。」

「魔王が後出しでルールを作って、それに則って罰を与えたなんて前例を残してしまうと、貴族が同じことをしても問題がなくなる。」

「それは兄上たちの望むところではないだろう。」

「その駒、俺が使うとヤバイんだったか」

「はい、元々の力があまりに強い方が使用するとオーバーフローを起

こして命にかかわると」

「はあー……となると、兄上かベルゼブブさまかが、『王』の駒を表に出さなかったのは……貴族の力を高めないように、か？」

「おそらく、その……サーゼクスさまたちは、元々の魔王家を、その……」

リュイは言い難そうにしているのは分かるが、俺はそんなことをいちいち気にしたりはしない。人間の歴史なんてその繰り返しばかりだった。教科書を読むには。

むしろ、悪魔が妙にピユアなんだよなあ……。

「まあ、篡奪者だから兄上たちは」

武力で古い魔王の一族を追い出して、その名と立場を奪い取ったのが兄上たち現四大魔王だ。

そこには色々と事情があったのだろうが、武力で地位を奪い取った前例が自分たち自身なのだ。同じことをされるのではないかと危惧するのは当然だ。

『王』の駒で自分たちの力も百倍にできるのならともかく、それが出来ないとなると、『王』の駒は現魔王とそれ以外の純血悪魔との武力の差を縮めてしまう。武力⇨権力で現在の立場にいる兄上たちとしては、なかったことにしたい代物になるのかもしれないな。

『王』の駒で魔王級になった貴族が一斉に蜂起して現政府への反乱とか起きて困るだろうし。

「俺としては、悪魔の種族全体の武力を上げたいから、むしろ『王』の駒なんてのが製造できるのなら、量産して配って欲しいくらいだが」
天界とも、堕天使とも、今はどこも疲弊したことで大きくぶつかり合っていないだけだ。悪魔という種自体の戦力は上げておいて損はないだろうに。敵はまだ外にいるのだ。内部で睨み合っているいい段階ではない。

それに聖書以外の神話勢力だってある。悪魔が己らこそが、闇と魔の頂点だと誇るためには、やはり全体的にもっと強くありたいものだ。

「魔王級の純血悪魔が大量に増えれば、他所にビクつく必要もなくな

るんだがな……」

どうにもあの「クソ平民」どもも、兄上たちが敢えてそのように仕向けて作り上げているような気がするんだよな。愚民政策とでも言うのか……戦わない、戦う気はない、それでいて、声だけは上げて「貴族」を貶め引きずり下ろすことには熱心な連中。

昔はあんな連中でも、軍団に組み込んで戦力として運用していたらしいのだ。それを内戦後に切り替えて、少数精鋭の眷属悪魔による戦いといえば聞こえがいいのかもしれないが、実際は下級悪魔を戦わせない方向に動かしただよな気がする。

自分の眷属に平民を選んだ『王』の話ってほとんど聞かないからなあ……。駒を入れさえすれば元人間でも下級悪魔程度の魔力が得られる関係上、平民どもに駒を使う理由ってないからな……。

平民を眷属にするくらいなら、他の異形や、神器持ちの人間でも選んだほうがいいって話で。いや、下級悪魔でも魔法は覚えられるのだから、魔法使いの平民とかいるのかもしれないが。

上流階級、貴族に対するヘイトが高く。それでいて戦闘能力は削り取られて雑魚以下の雑魚と化したクソ平民ども。

不満を垂れることと、他者の足を引くことばかりのヤツラ。

そんな奴等の声でも、プライドのくそ高い純血悪魔は気にしてしまふ。バカにされることが許せないのだ。とだって、現政権では貴族の悪口を言ったから死刑ってのは難しい。兄上たちの方向性と外れるから。

だから、いつの間にか平民どもにおもねり、顔色を伺って、平民に聞こえの良いことばかり口にするような貴族が生まれてくる。

兄上たちの政策なのかねー、この貴族の力を削いで、平民の声だけは強くしつつ戦力は奪うって流れは。

そうだとすると、俺は兄上たちとは考え方が合わないのかもしれないいな。

強く、強く、強くだ！

魔王級貴族がいくら増えたって、超越者の兄上の方が強いだろうに何をビクついているんだか。

最強の魔王が、魔王級の軍勢を引き連れて行けば、墮天使どもなんぞ楽に殲滅できそうな気がするんだがなあ……。墮天使のトップつて、たぶん強くても魔王級だろうに。

そう考えると、平民の戦力を強化しようとしているソーナと、そんなソーナを応援しているセラフオールさんは考え方が兄上たちとは違うのかな。

アスモデウスさまは……よく分からん。深く考えているのかもしれないし、流れに身を任せているだけなのかもしれないし。うーん。『王』の駒の扱い方。俺としては、そんなパワーアップキットがあるのなら量産して配ろうぜって言いたいんだがなー。

「リユイは、平民どもからの評判を気にするタイプか？」

「いえ、それほどには……自分が楽しめれば良いと思っっています」

「なら、時期をみてその『王』の駒を使っていることを公表するか。それでもって、それが問題になったらベルゼブブさまに取り除いてもらおう。そうしたら……」

俺は変異『騎士』の駒を、リユイの裂け目に半ばまで埋めた。

「あつ……。あの、わたしの眷属ですけど……独立させて、それぞれレーティングゲームに参加させても？」

「ああ、分かっている。リユイの扱いがどうなるかは、『王』の駒がどうなるか次第でやってみないと分からないが、まあ、リユイを俺の眷属にすることについて文句は言わせない」

少なくとも兄上が義姉上を『女王』にしている状況よりは容易い。ついでに次の就職先がグレモリー家のメイドだ。兄上自身がかばってくれるさ。

問題は、大王派だが……うーん、また相談かね。止められたら困るから事後に。

開き直って、希少な『王』の駒使ってます！ それで強くなって活躍してます！ 文句あるか愚民ども！ ぐらいで行ったほうが貴族らしいと思うのだが。お年寄りたちは何を気にしているのやら。

「ところでリユイ、ちょっと動くなよ。お前が俺のモノだってことを刻み込んでやる。駒を入れるまでの代わりにな」

リュイの角を押さえつけ、爪先にペン先ほどの消滅魔力を灯す。

昔、そう前世で風俗に行つたときのことだ。そのときの相手してくれたお嬢さんが、肩に入れ墨を入れていたのだ。男の名前を彫り込んでいたのだ。

「盛り下がったらごめんね」なんて言われながら聞いたところによると、高校生のころに彼氏と盛り上がってお互いの名前を彫り合つたそうで……。

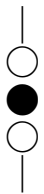
「はあ……んっ……」

ふふふ、完成。我ながらうまく出来た。悪魔の身体故、消そうと思えば消せるだろうが、まあ、うん、リュイがイイ感じになってるようだし、もう一回戦行つておこうかな……。

「ハアん………♡ しゅーいん……、ああつ、わたし、わかさまの、わかさまのなまええ……♡♡」

「ああ、そういえば……さっき言つていた八百長試合だが」

「んっ……はい？ んっあつ、イイっつ♡ イっあつ♡」



黒歌購入資金の目途は付いた。

まったく、賭け事なんて簡単なものよ。むしろ前より増えるぐらいだ。

そりゃ、こんなぼろ儲けできそうなら、お年寄りの皆さまもやめられなくなるだろうよ。

八百長なんて人間でもよくやることだろうに、悪魔のゲームでやってないなんて信じているヤツなんていないだろう。

前世の会社の上司なんて、「選挙前は荒れるからな。一攫千金のチャンスよ」とか言つて万馬券当ててきて風俗奢つてくれたことあつたし。

もし、悪魔のゲームには裏も何もない公平なものです、なんてこと

を信じ切っている奴がいるとしたら、そりゃよほど純粹なんだろうな。悪魔向いてないから、教会にでも行ったら？　って感じた。

「若さま、お金が必要でしたら、私がいくらでも差し上げますが」

「メイドに貢いでもらうご主人様はいないんだ……ちよつと惜しいけど」

リユイの方がお金持ちだった件。まあ長年、レーティングゲームのランカーやってればね。そうだよね。

でも、雇わなければメイドではないのだ。リユイが給料なんぞどうでもいいと思っていたとしても。

2-13 アスタロト家訪問

ぼくぼくぼくと、宙を踏んでラクダが歩む。

「案外、ラクダというのは大人しいですね」

「いや、それはゴポリンだからだな。結構気性の荒いヤツも多いぞ。あと、何故か人型生物に欲情する変態ラクダとかもいる」

「そ、そうですよの……リアスさまの愛馬……愛ラクダ？ を譲っていただいて、ありがとうございます」

ラクダの背に揺られ、俺とレイヴェルが向かっているのはアスタロトの本家だ。

ついでに、未来のグレモリー公爵夫人として、レイヴェルにはラクダの練習をしてもらっている。途中までは魔方陣転移で来たが。

我が家での騎乗練習は一通り終えたので、今は俺がレイヴェルの後ろに座って公道を移動中なのだ。まあ、俺が長年付き合っただけで来たゴポリンだからこそ、レイヴェルも簡単に乗れるようになったのだと思うが。

どこぞの薄情なスライムと違って、ゴポリンとの別れは辛かった……。だがまあ、ゴポリンはレイヴェルの乗騎となったので、以前ほどではないがそこそこの顔を合わせるからそこまで寂しくもない。

レイヴェルも嬉しそうに頑張って世話の仕方を覚えようとしてくれているので一安心だ。これが、「ラクダの世話なんて嫌ですわ。使用人にでもやらせてくださいな」とか言われていたらと思うと……良かった、良かった。手取り足取りってヤツも出来たことだし。ふふん。

一回、フェニックス家の廊下で走らせて怒られたらしいが……まあ、実家に帰るとハメを外してしまうのだろう。ライザー義兄上から聞いた。

「俺の乗騎はどうするかな。また躓けるところから始めるのもいいが」

「前におっしゃっていた、猫に乗るとい話はどうなったのですか？」
「あれは冗談だ」

さすがにレイヴェルよりも小さい女の子から衣服を剥ぎ取って、四つ足にさせ、その背にまたがって「おら、歩け」なんて真似は出来ない。

ああ、いや朱乃とはたまにやるが……。俺、大丈夫なのかな。どんなSに調教されている気がするんだが……。

『紫紅の龍帝』ですし、ドラゴンというのもいいと思いますわ」

「ドラゴンかぁ……。そういえば今、ドラゴンに変身する術を練習しているんだが、上手くできるようになったら乗ってみるか？」

「旦那さまの背中というのも……。ふふ、楽しみにしておりますね」

タンニーン殿に、「アンタの娘さん、俺の乗り物にしたいんだけどくれない？」って言ったら怒るだろうか？。どんなものかね。

一応、他所の神話なんかじゃ、強力な存在の乗騎なんてのは名誉職だったりするところもあるらしいのだが……。俺が公爵継いでからならいいのかもしれないな。

「やあ、いらつしやい」

雑談をしながらぼくぼくぼく進んでいくと、天使のような笑顔を浮かべた悪魔が出迎えてくれた。

「次期当主殿がわざわざ外までお出迎えとはありがたいね」

「ま、一応ね」

揃いのローブ姿で統一された眷属を従えたディオドラの歓迎を受け、ひよいと脚を折り曲げてくれたゴポリンから降りる。

ディオドラとレイヴェルの挨拶を見ながら、ざっと彼の眷属を眺める。顔を晒さないように言われているのか、すっぽりとかぶったフードが実に妖しげな雰囲気を出していて、大変よろしい。

というか、俺が面食いだって知っているから、顔を見せないようにしているんじゃないだろうな同志よ。

「やっぱり揃いの衣装で固めると映えるな」

「統一感っていいよね」

うちは……。『女王』に火の鳥、『戦車』の墮天使、『騎士』が角メイド（予約）、『僧侶』に黒猫（予定）、『僧侶』の魔法使い（予定）。うん、見事にバラバラだ。

「統一感かバリエーションか……」

「キミのところはメイド服だろ？」

「おおっ！ あっ、あー……レイヴェル？」

「どうしても、と仰るのなら着ますけど……」

俺のメイド趣味は既にレイヴェルの知るところだ。だが、まだレイヴェルに着させてプレイしたことは無い。

いや、お姫様プレイもなかなか悪くないのだ、やってみると。

というか、リュイは一応ベルフェゴール家の現当主なんだよな。うーん、政治から距離を取りたい者が多い『番外の悪魔』ベルフェゴール家は、有名人になったからリュイことロイガンの名ばかりの当主にしているわけだ。

それにしても現役当主をメイドにして抱いているとか、なんというか倒錯的でよろしい。領地の広さ的に考えると、悪魔の貴族つて一国の王のようなものだから……リュイは国家元首といってもいいわけで、それを好き放題にしているのか……うん、俺の股間に大変よろしい。

「俺がメイド服で揃えたとして……ディオドラはこの悪っぽいローブ軍団で統一だろ？」

「そうだね」

「で、学校がどうこう言ってるソーナは、制服プレイヤーになるかもしれない」

「ああ、ありそうだね」

レイヴェルが額に手を当て、首を振った。

「メイド服、ローブ姿、学校の制服……」

彼女のつぶやきに、俺は内心で謝っておくことにした。スマンな色物世代で。きつとレイヴェルが頼みの綱にしているだろうシーグヴァイラは『ダンガム』だ。パイロットスーツとかで来るかもしれないぞ。

シスタースキーのディオドラ。メイドスキーな俺。学校制服プレイヤーのソーナ。ダンガムマニアなシーグヴァイラ。グラシヤラボラス家とウアプラ家代表だけが真面目担当だ。いや、ディオドラはか

なりマシか……なんというかそれっぽいし。

「リアスさまたちの世代はたしか……あと数年ぐらい経って、全員の眷属がある程度揃ったのを見計らい、デビュー前に新人戦のようなものをされるのでしたよね？」

「そんな話だな」

「面倒だよな。いくら、アガレス、アスタロト、グレモリー、グラシヤラボラス、シトリーと格の高い家が同世代で揃ったからってさ。お陰で眷属を集めるのを急かされてる気分だよ」

どこからかそんな話が湧いて来たんだよな。どうせ政治がらみで何かしらあつたんだらうが。

「そういえばさ、サイラオーグってどうなったの？」

その面倒な新人のレーティングゲームデビュー前の御披露目戦は、各家の若手代表で行われることになっている。ラティアは俺と同一年だが、アスタロト家の代表は次期当主のディオドラなので出場しなくても良いのだ。だから、ラティアは『悪魔の駒』をもらってはいるが眷属集めをまだ始めていない。ゆっくり吟味できて羨ましいことだ。

「サイラオーグは、ウアプラ家から代表推薦してくれると連絡があつたな」

「ええ、それもあつて今の学校を卒業したら修行と眷属探しの旅に出るのだとか」

「なんだ、ようやくバル領から出て来れたのに、結局平民学校で終わりにするんだ？ ……ああ、でもその方がいいのかもね。今更混ざつても面倒しかなさそうさ。いくらウアプラになつても、バル家での事情は知られているから」

そう、ミスラさんとサイラオーグはバル家との縁を切つたのだ。俺が切らせたとも言うが。

今は二人ともグレモリーで預かっていて、ミスラ・ウアプラとサイラオーグ・ウアプラになつていてワケだな。

母上にはケツを叩かれたが、父上はウアプラ家との話し合いに満足していたようだったし、政治的には良かったのかね。バル家にも恩

を売った形になっているし。

社交の場で、甥っ子に第一夫人を取られたとか言われたらしい叔父上はざまを見ろ。あんな扱いしてれば、そりやなあ……つて雰囲気だったらしいとは、タンニーン殿から聞いた話だ。

いやはや、あの辺境屋敷の近くの林の中、どこの下級悪魔に見られるとも知れぬ状況下、ミスラさんを肉棒で説得した甲斐があったというものだ。ふふふ、あれは興奮した。

その後は、俺のところに来たいと言うようになったミスラさんと二人でサイラオーグと話し合い。俺がミスラさんのために城やら何やら用意することを話すと、ヤツも納得したのか頷いてくれたというわけだ。

まあ、悪魔の寿命を考えると……俺とミスラさんくらいなら、アリだからな。

というか、現役 of 初代がいたりするし。悪魔って出生率が低いとか言われているが、生涯現役でいけるなら、仮に子供が出来るのが五百年に一人だとしても、五千年あれば十人。寿命から考えると生涯の子供人数は人間よりも多くなりそうなんだよな。

時間がかかるってだけでさ。

「未だに義父上呼びにお互い慣れないけどな」

「そりや、まあ、そうだろうね。ボクはキミのことを尊敬するよ。今まさに、貴族界隈の噂の渦中の人物だからね。うん……それでわざわざ迎えに来ただけだよ」

「私も……最初にレイヴエル義母上と呼ばれたときは、どうすればいいのかわかりませんでしたわ」

「いや、キミも大変だね……」

しかし、ミスラさんはもう……。

「アスタロト家は魔力の扱いが上手いだろ？」

「まあ、そうだけど。そういう家だしね」

「眠り病関係で何か新しい術が出来ていたりしないのか？」

「あれは……なんともね。医療ならシトリーの方が……ソーナにはもう聞いているのかな？」

「まだ無理だつて言われたな。今後の医療の発展にかけるしかないのかね……」

ミスラさんは最近ほとんどの時間を眠って過ごしている状態だ。医療関係に力を入れているシトリー家のソーナに確認したところでは、もうそろそろ危ないらしい。

眠り病は、大昔から悪魔を悩ませている不治の病だ。徐々に眠る時間が増えていき、やがて眠ったまま目覚めなくなってしまう。そうしてだんだんと衰弱していつてやがて死に至る。

衰弱自体は魔力やら魔法やらの諸々で抑えることが可能なので、延命措置を維持し続ければ死んでしまうことはない。だが、今のところ覚めることのない眠りについてはどうにもできていない。

たしか、ゼクラムの祖父さんにも眠り病のままずっと眠り続けている娘さんがいたはずだ。たしか、祖父さんが二千歳の頃に出来た娘だとか言っていたような。身近な者が眠り病にかかって、ずっと目覚めないまま長い月日が過ぎていくというのは、どんな気持ちなのだろう。俺もそれをこれから体験するのだろうけれど。

「レイヴェル、俺は明日からしばらくミスラさんに……」

「分かっておりますわ」

思えば、ミスラさんには最初の行為のときからどこか先を見ていないようなところがあった気がする。本人も気づいていたんだろうな。

それに、サイラオーグも母親の病気に気が付かないわけがない。俺が病気のこと込みでミスラさんを引き受けると言ったから、すぐに納得したのはそれもあったのかもしれない。

最近ミスラさんが眠るための城の建設現場によく顔を出しているようだし。

ミスラさんとサイラオーグをグレモリー家に連れてきて、母上がミスラさんの状態に気づいた後に言われたことだが、

『よくやりました。先日は叱りましたが、ミスラが眠り病なら話は別です。あのままバアル領に残していたら、事故死させられていたかもしれない』

悪魔にも情がある。いや、悪魔に関連深い七つの大罪がほとんど感

情に関わるものである以上、悪魔ほど感情的な存在はいないのかもしれない。

そうでありながら、合理的であり、利己的なのが悪魔だ。矛盾しているようだが、悪魔とはそういうものなのだ。

そんな悪魔の貴族の中では、眠り病にかかったものを見捨てるのは大変な恥とされる。もし、ミスラさんと叔父上の離婚がもう少し遅くなり、ミスラさんが眠り病で目覚めなくなってしまっていたとしたら、もう叔父上からの一方的な離婚は出来なくなる。眠り病に陥った妻を捨てるというのは、悪魔社会ではおそろしく体裁が悪いのだ。

体面を気にする叔父上が出来るはずがない。

だからといって、あれだけの仕打ちをするほどの関係になっていたミスラさんの面倒をいつまでも見続けるなど、叔父上にとっては苦痛でしかないだろう。

そうになると、まあ、何らかの事故が起きてミスラさんの命が失われる可能性もあった、と母上は自分の異母弟を評価しているわけだ。

この異母姉弟の仲、とんでもなく悪すぎる。知ってたけど……主に俺が間でグチグチ言われるんだよなあ。兄上が代わってくれよ、この役割。

ちなみに褒めてはくれたが、小遣いは戻らなかった。いや、ミスラさんにもサイラオーグにも、俺が面倒みてやらあ！　みたいなことを言った手前、「おかーちゃん、小遣いもつとー！」とは言えんけどね。そもそも小遣いが母上の稼いだ金だというのは気にしない方向で。

「サイラオーグのヤツ。修行だとか眷属探しって言っていたが、旅に出るのは治療法の手がかりを探しに行くのかもかもしれないな」

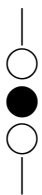
そうだとすると、俺はよほどサイラオーグに信用されていることになるが。眠ったままのミスラさんを任せて出かけても大丈夫と。

母の治療法探して三千里とか、お前主人公なのかよサイラオーグ。「ああ、そうかもね。それでもしホントに見つけたら、ボクらの世代で最初に最上級悪魔になるのがサイラオーグなんてことになるかもね」「眠り病の方は、どこの御家にも幾人かはいらっしやいますものね」

悪魔は寿命が長いので、眠り病に罹患しても衰弱死さえ防いでいれ

ばいつまでも寝ているだけだ。老衰による死亡がない。だからゴタゴタで断絶したり、しかけたりして面倒を見切れなくなった家以外には患者がいくらかいるものなのだ。歴史が長いからな。

薄情と言うよりか余裕のない平民はどうしているのか知らんが……まあ、死亡扱いにでもしているのかもしれない。ほぼ永眠だから。



アスタロト卿への挨拶はつつがなく終了した。

そちらは問題なかったのだが、なんだ今のこの状況は……。

「ラティアさま、あちらに座られてはいかがですか？」

「リアスは嫌？」

「いや、別にラティアなら嫌じゃないが……」

「リアスさま！」

うーん、これは一体。

貴族の家といっても、どこもかしこも豪華絢爛仕様というわけではない。普通に寛いでだらだらテレビでも観るかみたいな部屋もある。来客用ではない内向きで私的な部分だな。といっても前世の庶民感覚からすると、とんでも豪華なのだが。

アスタロト家のそんな一室で、ちょうど本家に顔を出していたラティアと合流した俺たちは四人でテレビを見ているところだ。レーティングゲームの試合観戦である。

よし！ 行け！ 勝てよりユイ……ではなくロイガン！ 俺の資金がかかっているんだからな！ 勝つことが分かっているから、全額ベットしたんだからな！

とまあ、レイヴェルと並んでソファに座って内心で応援しつつ眺めていたところ、お茶を淹れてくれたラティアがそのままレイヴェルとは反対側に尻をねじ込んできたのだ。二人掛けソファで左右に美少女を侍らせて密着ウハウハ状態である。

「どうしたんだ？ こんなこと小さい頃しかしなかっただろ」

「いいでしょう、たまには」

そういうラティアの表情はいつもと変わらぬキツイ感じで、そのオーラも表面上は冷厳な雰囲気のままだ。

だけど、ここ数年はこんなことなかったんだが、何かしらあったのかね。

「まあまあ、いいじゃないか別に減るものでもないだろうし。ラティアにもいろいろあるんだよ」

「減りますわ、スペースが」

ディオドラのヤツ、ニヤニヤしやがって。まあレイヴエルがまた引っ付きモードに入っているので、家に帰ったらベッドで頑張ろう。

ヤキモチフエニックス鳥は、こういうときが一番美味しいことを俺は知っている。積極性がいつもより段違いになる。

「勝ちそうね、御鼻根のロイガン・ベルフェゴールが」

「勝ってもらわないと困るんだよな。資金的に」

「いくら賭けたの？」

むくれ始めたレイヴエルの腰に腕を回しつつ、ラティアとの会話を続ける。

ホントに何があったんだか……悩み事でもあるのかね。

「あーっと、このくらい」

指を立てて金額を示すと、ラティアとレイヴエルの双方から睨まれた。まあ、遊びで賭けるにはデカイ額だ。前世の俺基準だと、ボーナス全額を単勝一点買いに突っ込んだような感じ。

そりや、嫁さんいたら怒るわ。勝つからいいんだけどな。

「よっし、勝った！ さすがはロイガン・ベルフェゴール！」

俺の筆頭メイド！ インタビューで角に巻いたりボンのことを聞かれて若干赤くなっているのがカワイイぞ！ それほどこいて彫り込んだ悪魔文字見られると、ゴシツプネタにされまくるぞ！ 俺ごと。

「リアスさま……金策で賭け事をするのでしたら、きちんとデータを集めましたのに」

「あきれてしまうわね」

お前ら急に仲良くなったな。

「で、ラティアは何かあったのか？」

「レイヴェルには聞かせたくないのよ」

「なっ！」

「やっぱり仲悪かった？ まあ、今度聞いてみるか。」

「それにしても、ディオドラお前、優し気仮面が剥がれかけて本性のぞきかけてるぞ。ニヤニヤしやがって。」

「あー、ディオドラは最近眷属とのコミュニケーションはどうなんだ？」

「ああ、アレね。キミの意見も悪くなくなってきたよ」

「俺とディオドラでは女関係の趣味で相容れないところがあつた。俺は蕩け顔が好きなのだが、コヤツは絶望顔が好きなのだ。しかも、一回あまーく口説き落としておいてから、「実は……」と絶望に叩き落として墮とすという、極端な落差を用いてぐしゃぐしゃに泣かせるのが好みという、趣味なのだ。」

「それで、この間、もう一回上げてみるよーと力説したのだが……ヤって見たのか。」

「レーティングゲームとか考えると、そっちの方がいいだろ？」

「まあ、そうなんだけどさ。今後の予定もあるしね」

「女二人が首を傾げる中で、こういう話をハッキリ言わずにしてみるのよ、これはこれでスリリング！」

「どうせロクでもない話ですわ」

「それについては同感ね」

「やっぱり仲良かった？」

2—14 おやすみからおはようまで（前）

「おはようございます」

目を覚ますとすぐ近くに彼の顔があった。そつと近づけられる唇を、ぼんやりとした頭で受け入れる。

ふつと、気付いて赤面するミスラをからかうように彼は朝食を進めてきた。

「グレモリーの料理は口に合いますか？」

「ええ……ありがとう」

カートに乗せて運ばれて来た料理を寝起きのまま食べさせられるなんて、まるで病人のよう。でも、たしかにミスラは病人なのだ。

もういつ起き上がれなくなってもおかしくない。眠り病の症状はもうそこまで進んでいた。

「どうして、なのかしら」

ふと、口から疑問がこぼれた。

どうして、他の誰でもなく、彼がそばにいる時だけ起きていられるのか。

「どうかしましたか？」

「いえ、なんでもないわ」

ふと、人間界のとあるおとぎ話を思い出してしまった。いい年をして、何を夢を見ているようなことを……そう思うと自分で自分が信じられなくなってくる。

『貴女が眠り病でも構いませんよ。俺のところに来てくれさえすれば、何千年でも待ちますから』

何を言うのだ、こんなずつと年上の女に……。自分よりも年上の子供がいて、前の夫がいて、その前夫から「必要ない。いらぬ。欠陥品」と散々ののしられて捨てられ顧みられなかったような女に。

どうして、名門グレモリーの次期当主、類を見ない魔力量を誇り将来を期待されている男が……。

遊ばれているだけなのだと思っていた。眠り病であることを明かせば、きつとまた放り出されるのだと思っていたのに……。

グレモリー。遙か昔から悪魔の性質の一つである合理を切り捨て、その在り方を情愛に傾けてきた一族。それがこんなにも恐ろしいものだなんて。

胸が苦しくて苦しくて、眠り病になってしまったことを泣き叫んで継り付きたくなってしまおう。そして、もし自分がそうすれば、彼はきっと応えてくれるのだろう……何かしらの形で。

ミスラは自分がもう逃げられないことを悟っていた。そうする気にさえなれないのだ。むしろ、自分から溺れていきたくなくなってしまおう。情欲で身体を支配され、愛欲に心までも漬けこまれ、何をされてもそれに悦びを感じさせられてしまおう。

これが、旧イルシファアからその名を奪い取った一族。悪魔をたぶらかす悪魔。そんな言葉が浮かんでくる。恐ろしく、だからこそ愛しい。

食事を終え一息ついた後にやって来たのは、お願いの形をとった命令だった。

「ミスラさん、今日はこれを着てくれませんか？」

そう言って彼が渡して来たのは、ミスラが少女時代にすら着たことのないようなひどく可愛らしい服だった。

可愛らしい色合い、フリフリとした装飾。靴から何から、一揃い。全てが全てそのような調子で、長い時を夫人として過ごし、子供も一人いるようなミスラが着るような服装ではない。

「こ、こんな服を着るの……」

「ええ、よく似合うだろうと思って用意させました。時間がなかったので既製品ですいません」

これを着た自分の姿を想像してみる。途端、ミスラは羞恥に耳を赤く染めた。

「どうして、いつも……」

こんなに恥ずかし真似をさせようとするのだろうか。初めてのときは、自分からねだるように仕向けられた。どうしようもなく疼かされて、恥も何もなくなり、彼のモノを求める声を抑えられなくさせられ

た。

その後も、数日おきに訪ねて来ては、何度も、何度も……。

「着てくれないんですか？」

「着るわよ……」

もう逆らえない。彼の男の猛りを埋め込まれると、反抗できなくなってしまう。それが分かっているから、言うことをきいてしまうのだ。

ただただ、快樂に流されてはしたない声を上げながら、求めてしまうのだ。もつと、もつと……と。

でも、もうすぐそれも終わってしまう。彼がこうして傍にいてくれると、何故だか目が覚める。ドラゴンのオーラのせいだろうか？

けれど、それ以外の時間はほとんど起きていられない。医者の見立てでは、もういつ眠ったままになってしまってもおかしくないそうだけれど……。

「濡れてますね」

着替えるため脱ぎ始めたところで、じつと下半身を見つめられ。そう言われてしまうと、じわじわと潤み始めていた下腹部がカツと火が付いたように熱を持ってしまう。

「こ、これは……その……あなたが……」

彼に起こされたときから既に湿りを帯び始めていた秘所から伝った愛液が、ミスラのふとももを淫靡にたからせていた。

しようがないではないか。最近は会う度に求められて……求めてしまつて、いたのだから。

「俺のせいですか」

「言わせないで……」

「なら、仕方ないですね。鎮めてから出かけましょうか。ミスラさんのせいで俺もおさまらなくなつてしまいました」

そう口にする彼の肉竿が、大きくズボンの布を押し上げているのが分かる。

「もう、そんなにしているのね……」

「貴女のそんな姿を見たら、こうなつてしまいますよ」

ミスラは恥ずかし気に胸元を両手で隠しながら、ふとももをこすり合わせた。そうすると自身の興奮の証の汁がぬたぬたと塗り広げられ、いつそうのこと頭の中を淫猥な靄もやで霞ませていく。

胸を覆った手をそのまま動かして、ブラを外す。それに合わせるかのように彼もまた衣服を脱ぎ始めていた。

「ねえ……どこかに出かけるって……」

もう止められるはずもないし、止めたくもないのだが、そんな言葉が口を突いて出ていた。なんて返されるのだろうかと期待しながら。

「ええ、ミスラさんとデートに行きたいなど。そう思っています」

「デート……って」

そんなこと、これまでしたことがあったであろうか……。第一夫人としての公務で出かけてことはあったが、ただ楽しむだけになんて……。

ぎゅうと胸の奥が締め付けれるような気がした。ミスラの心に、自尊心に深く刻まれた傷痕に、彼の言葉がじわじわとしみ込んで満たしていく。

いつもそうなのだ。ミスラの肉を辱め、心を恥辱に溺れさせながら、彼は同時に欲しいものを送り込んでくる。

「思い出を作っておきましょうよ。夢を見るのかわかりませんが、もし見られるのなら、眠りの中で思い出せる何かを」

「そう……ね」

下着を脱ぎ落すと、ミスラは己の肢体に指を這わせた。唇から胸へ、そこから腰のくびれを通して蜜を垂らす秘所に両手の指を揃える。それは隠すためではなく、男を誘うためのみだらな仕草だ。

彼女の唇には、彼のもたらす情欲と愛欲を求める笑みが自然と浮かんでいた。

「んっふ……んう、じゅうぷ……」

彼の逸物を咥えるのも慣れてしまった。子供を作るだけならば必要のない行為だ。

それを彼に覚えさせられ、自ら彼の股間に唇を寄せ舌を這わせるような女に変えられた。ほんの少し前の自分とはもう違うのだと、否応

なく実感させられてしまう。

ベッドに腰かけ跪いて口奉仕するミスラを見下ろす彼の目を見ると、そこにはいつものように女を支配する欲が滾っている。

その目で見つめられると、背筋がゾクゾクとしてしまう。赤龍帝、かつて三大勢力に多大な被害を与え時を経た今もなお恐れられ忌まれる強大なる龍の帝王。

その龍気が、悪魔の超越者になるだろう膨大な魔力と入り混じって注がれ、圧倒的な強者に求められ隷属する悦びがミスラの内を駆け巡る。

「んんっ……んんっつく……」

後頭部に手を添えられ、髪を撫でられる。もっと奥まで呑み込めと、そう催促する彼の仕草だ。

口の中一杯に感じる男の性器に舌を絡め、ミスラはうっとり喉を鳴らす。

服従させられ、奉仕させられているというのに、ミスラの自尊心はこの状況にあつてひどく満たされていた。

相手が強大であるのなら、隷属は必ずしも屈辱ではない。むしろ、そうした存在から欲し求められることに昂揚を覚えるのだ。

貴族に仕え下僕となることに喜びを見出す平民は、あるいはこんな気持ちなのかもしれない。

ああ、すごい……また、おかしくなってしまう。

「ああ、気持ちいいですよ。ミスラさんのフェラ」

「んんっ……んんっ……んんっ……」

ミスラの頭を前後させる動きが早くなった。垂らした髪がそれにつられて揺れ、ねだる様に胸の双丘を彼に押し付け始める。

強烈な牡の精气にあてられて、頭が悩乱し、心が染まっていく。

啜えた逸物の大きさがミスラの喉を塞いで呼吸を苦しくするが、その感覚にすら官能を覚えてしまう。

夢中になって肉棒をしゃぶり続ける女の姿に満足げな笑みを浮かべ、彼は腰を突き出した。

「出るー… おおっー」

怒涛の勢いで発射された精液が、ミスラの口内を染め上げた。強烈な最初の一度に続いて、びゆるびゆると何度も撃ち込まれる白濁を目を閉じ受け入れる。

充滿する牡の匂いに顔をほころばせ、ミスラは舌をくねらせ粘液を味わい続けた。

「んあっ……あああ♡」

「身体を洗いましょうか」

「え……う？」

いつもならこのまま……。膝を合わせて床に座り込み、潤んだ瞳を向けるミスラを魔力に物を言わせて抱えあげると、彼は浴室へと向かった。

グレモリー家の客間には、ほとんど浴室が用意されている。その一人用としては無駄に広いスペースに連れ込まれると彼の手がミスラの身体をなぞりはじめた。

「ミスラさん、もう俺のが欲しくて仕方がないって顔してますね」

「ふうん……♡ そんなこと……ああっ♡」

ない。とは言えなかった。胸をこねくり回され、尻肉を鷲掴みにされ、開発されてしまった耳の穴をほじくられる。

もう、どうにかなってしまいそうだ。彼によつて変えられてしまった身体は、どこに触れられても気持ちよくなってしまふ。

「上に座って」

浴室内の椅子に腰を下ろした彼は、蜜壺を煮え立たせるミスラに向かって、己の膝上を叩いて見せた。

「ええ……」

ようやく、挿れてもらえる。唾を飲み込むと、まだ彼の味がした。

「そう俺に背を向けて……。好きでしよう？ 鏡」

湯気の中でも曇らない鏡に、脚を広げて陰部を晒している自分自身の淫らな姿が映っている。その後ろで、ニヤけた笑みを浮かべる彼の姿も。

ミスラが腰を下ろしていくと、彼の怒張の先端が粘つく音を立てて

埋まり始めた。ミスラを牝にした、女を狂わせる欲望の槍を自ら望んでズブズブと飲み込んでいく。

淫蕩に蕩けた顔で、男のモノを歓喜とともに受け入れようとしている女がいる。鏡に映るその女は、より大きな快感を得ようと挿入しながら円を描いて腰をゆすっていた。

たゆんたゆんとミスラの胸が揺れ、先端のピンクの尖りが跳ねる。そこに彼の指が伸びて中指と薬指できゅうとつねり上げながら、全体をこね始める。

「んあああ……♡……つああんああ♡♡」

彼のモノにされてしまった双丘への刺激にたまらず、腰を落としてしまう。すると勢いよく突かれた膣奥が悲鳴をあげて、ミスラの脳天まで甘い官能が突き抜ける。

串刺しにされてなお跳ねるカエルのように、白い両脚を広げたままミスラは肢体を躍らせた。

「ああつ、あなたつ、あなたの、ああつ、すごい♡」

勝手に円を描きだし、奥まで咥え込んだ肉棒を気持ちの良い場所にこすりつけようとしてしまう自分の身体。それに合わせて彼もまた身体をゆすってミスラの膣奥を責め立ててくる。

胸を躍り狂わせ、背をのけぞらせてミスラが鳴きだすと、彼の肉棒が急に大きくなってきた。

「ああつ、大きくなって……はああん、ああつ、いいの♡」

「はは、ミスラさん……いや、ミスラ。鏡をってみろ」

快感に痺れ、天井を見上げるように喉を晒していた視線を正面の鏡へと向けると、

「ああつ、わた、わたし、また……いやあ……ひああ♡」

少し高くなった自分の声が、快樂によるものだけではないと分かっってしまった。

ああ、また……またこの人に合わせようとして……。

「ミスラはそんなに俺のことが好きなんだな」

「ああ、お願い……言わないでえ……」

「嫌いなのか？」

「違う……違うの……恥ずかしいのよ……ああつ、あなたあ♡！」

いつもの人間でいうところの二十後半から三十前半程度の外見から、彼と同じくらいの肉体年齢に変わってしまった身体。自分のあさましきを見せつけられているようで、そうなってしまった自分自身に昂揚してしまう。

そこを突き上げられてはたまらない。

「あうっ……イイ♡ イイのお、すてき♡ ああつ、すごいわあ♡」

「ミスラはこっちの姿だと可愛いな」

「ひっい、んあうあう♡ こっちのほ、う、が好き……なの？」

「いえ、普段のミスラさんはエロくて好きですよ。今のミスラさんは可愛くて好きってだけです」

「えろ、いつ、てえっ♡」

「まあ、ここまで来たら姿かたちなんてどうでもよくなるんですよ。ウアプラ家なら、ライオン……獅子の姿になれたりするんじゃないですか？」

「え……ええ、なれるけど……？」

「俺、相手がミスラさんなら、雌獅子でもいけますよ？」

「ウソでしょ……なんてことを言うのよ……。そんなのおかし、イイイっん♡」

「ミスラ……いま、ぎゅううと締まったぞ。想像してよくなったのか？」

「いえ、いやあ、そんなの……ダメよお、ああつ♡ つきあげあいでえ……♡ おかひ、おかひくなる♡」

「俺がドラゴンになって、獅子の姿のミスラを犯すんだ。後ろから抑え込んで、ケツを上げさせて、無理矢理ねじ込んでやる」

「ああつ、あなたあつ♡ いやあ、へんなことかかんがえさ、せないでえ♡」

その光景を想像して、それでもいいかもしれないとそう思ってしまう自分が信じられない。

相手が彼なら、もう見た目なんてどうでもよくなってしまうている

なんて……。

「んあん♡ イイツのお、あなたなら、それでも、あんっ♡」

おかしい。おかしくなる。おかしくなっている。

彼に合わせて、見た目をかえてしまっているのに、彼の外見はなん
だっていいだなんて……もうわけがわからない。

「んんう♡ あああつ♡ ああつ♡ ねえ、ねえ……もう、ああっ♡」

「イクのか？ イクんだな？」

「ええ、ええ、ああ、あなたがへんなこと、想像させるからっ……ああっ
イクっ♡ あなたの、ほしいのお……」

「ああ、俺も、俺もイクぞー！」

腰を強く掴まれ、子宮の口に肉棒の先を強く突き刺される。グイグ
イと扉をこじ開けるようにして、彼が精を放った。

「んあああつん♡ あ、あ、あ、イクっ♡ イツてる♡ すご、すごい
んおお♡♡!!」

背を何度も波打たせて、ミスラは達した。足の先から頭のとっぺん
まで、痺れが奔り、ドクドクと注がれる度に意志とは無関係に肢体が
暴れまわる。

恍惚に染まった視線が鏡に映る淫らな少女の姿を捉え、見返してく
る彼女がドロリと口元を蕩けさせる。

「なに、なにを、する、の……っ？」

若い姿になってしまったミスラを一通りもてあそぶと、彼は浴室の
シャワーヘッドを魔力で手繰り寄せ手に取った。

噴きだす湯の加減を調整する彼の姿に、息も絶え絶えなミスラはさ
らなる恍惚の予感を感じて身を震わせる。

ザアーと吹き出す水流が、ミスラの秘所を中心に当てられる。

「ああ、あ、ああ、あっああん♡ やめえ、やめてえっ……♡」

「身体を洗いに来たんだから、ちゃんと流さない」と

「そん、な、こんあの……」

彼のモノを受け入れたまま敏感な箇所こんな刺激を与えられ
たら、綺麗に絶対にならない。

あとからあとから、湧き出してきたまうに決まっている。

「あ、ダメっ、ダメっ、やめ、やめてえ……んひん♡ わたしで、あそ
ばない、で……」

ザアザアと当てられる湯にもてあそばれ、ミスラはわななき、身悶
えする。逃れようにも身体に力が入らず、それでもと身をゆらせば串
刺す肉棒が、身体を内側から官能で支配し逆に痺れてしまう。

シャワーと指、肉棒によつてもてあそばれたミスラから、がくりと
力が抜け前に倒れ込みそうになると、そのまま浴室の床にゆっくりと
押しえつけられた。

「んんう……ああ♡ ぬかない、で……」

「まさか、これからですよ」

体重を支え切れなかった両手を床の上で這わせ、胸が潰れて尻だけ
が高く持ち上げられた。きゅと音がして、シャワーが止まり、代わり
に蛇口から湯が流れ出る。

ミスラの倒れ込んだ床上をやや熱い湯が通り過ぎていく頃、ズン、
ズンと秘所から背骨を伝うストロークが始まった。

「んうっ♡ ああ、ん♡ あん♡ イイ♡ あ、これ♡ んあ♡ こ
れえ♡♡」

膝立ちになった彼のピストンがミスラを後ろから責め立て、艶めい
た声が浴室内に響いた。

細くしなやかで、どこか儂さを感じさせる白い裸体が、男のリズム
に合わせてしなる。

「ひう♡ あなたの、ああ♡ ああ、あっ♡ んああ♡ 私、あ、ああ
♡ イイ、い、これ、ん、気持ちイイ♡♡」

待ちわびていた快感にミスラの身体は激しく燃え上がった。頬が
浴室の床に当たるのすら気持ちいい。押し付けられ潰された胸の先
端、乳首がざりざりと擦れる。

骨の髄、頭の芯を快感が蕩けさせ、ミスラのだらしなく開いた口元
からよだれが垂れて湯の中に溶けて行つた。

結局、彼が起こしに来てくれたのは朝だったはずなのに、出かける
のは昼過ぎになってしまった。

「ミスラが魅力的だから悪いんだ」

「私のせいにするの……」

恥ずかしい。いくらあの可愛らしい服を着てもおかしくない年頃の姿とはいえ、精神的な年齢というのはそう変わるものではない、はずだ。

手を繋いで歩くだけで赤面してしまうなんて、本当におかしくされてしまっている。きつと、そう、この妙に少女趣味な服装のせい。

「とりあえず、城の進捗を見ておこうか」

「本当に城を建ててしまうなんて……私なんかのために」

この先、ミスラはただ眠り続けるだけなのだ。もうすぐその時はやってくる。

その眠る場所のために城を一つ用意しようなんて、グレモリーは頭がおかしい。きつと、そう。

それを嬉しいなんて思ってしまったている、そんな女もダメになってしまっているのだ。

彼がよく連れ歩いている角のあるメイドの運転で、車を走らせる。グレモリー本邸からは少し離れた森に囲まれた場所、そこで城の建設が行われていた。

ミスラは何故だかそのメイドが気になって、彼の腕を胸にかき抱いた。そうしてから、その仕草が彼の小さくなるくるとした金髪の婚約者が、グレモリーの屋敷でミスラと出会ったときにしていた仕草と同じものだと気づく。彼の腕に抱き着いて、離すまい、取られまいとしているそんな女の子の行動。

ああ、なんてこと。身体に合わせて心まで戻ってしまったの？

十代の前半、悪魔としては赤子のような年齢の子供と同じことをしている。しかも、彼を取られまいとして意識してしまっているのはただのメイドなのだ。使用人にすら嫉妬してしまうなんて……。

車に揺られることしばし、車中から解放されるとそこには大柄な男性——息子のサイラオーグが立っていた。

「は、母上……？」

ミスラは今の自分の年恰好、服装、そして彼に抱き着いたままの体

勢を思い出しどうしていいか分からなくなった。

サイラオーグがいるのならいると、どうして先に教えてくれないの。

頭から湯気が噴きだしそうになって、なんと声をかけていいのか困ってしまう。すると、彼の胸元に顔を埋められた。

「サイラオーグ、実はこれからミスラさんとデートに出かけようと思っ

「ああ……そ、そうなのか」

「ずいぶん恥ずかしがられてしまったが、さすがにいつもの姿だと親子のように見られそうで俺の方が恥ずかしくてな」

彼は私を恥ずかしさで殺すつもりなのだろうか。

そのまま抱き上げられてしまったミスラは、いわゆるお姫抱っこの体勢にされてしまい、茹で上がりそうになってしまう。

それでも、嫌とは言えなかった。言えないことが分かっていてやってくるのだから性質が悪い。

「はは、うえ……その可愛らし」

「サイラオーグ……なにも、なにも言わないで」

「ええ……はい」

やや顔を赤くしている息子をミスラは睨みつけた。

「これはこれは、ミスラお嬢様。そうしていらっしやると、昔を思い出しますな」

「トラীব……これは」

人間でいう中年男性の外見をしたトラীবは、ミスラの執事を長年務めてきた中級悪魔だ。母親が下級悪魔で、父親がウアプラ家の純血悪魔。

ミスラが生まれた頃からずっと仕え続け、バアル家で過ごした間も、辺境で過ごしていたときも、ずっと傍らにいた。

当然、ミスラが今の姿だった頃のこととも彼は知っている。

「いやはや、懐かしい。私も旦那様に協力した甲斐があったというものです」

「トラীব……貴方まさか」

「ああ、ミスラさんの服のサイズはコイツに聞いたんだ」

「トラীবバ！ 貴方はなに、を……」

叱ってやろうとしたが、彼の顔に浮かんだ悲哀を見て、その気が失せる。

「旦那様がミスラさまが夢に見られるような、そんな時を最後に過ごしたいとおっしゃられまして、手伝わせていただきました。申し訳ありません」

深々と頭を下げる執事と、ニヤニヤと見下ろしてくる彼を交互に見つめ、ミスラはため息を吐いた。

「トラীবバ……私付きの執事の任を解きます。もう、私に仕える必要はありません」

「……はい」

「母上!?!」

長年仕え続けてきた執事の解雇に、サイラオーグが反対の声を上げた。

彼にはからかわれてばかりのミスラだが、息子ぐらいは騙せるのだと内心で少し得意になっていた。

これも肉体年齢を下げたせいかしら？

「サイラオーグ、貴方は旅に出たいと言っていましたね?」

「ええ、そうですが……今はそんなことより——」

「トラীবバ、息子を頼みますよ」

え、と驚きミスラとトラীবバを交互に見つめる息子の姿に、あまりに素直に育てすぎてしまったのではないかと心配になってしまう。

「サイラオーグさま、どうかこのトラীবバめをお連れ下さい。戦う力はさほどございませんが、必ずやお役に立ちますので」

「は、母上ッ!?!」

「サイラオーグ、お前、悪魔向いてないんじゃないか?」

彼がぼそりと言った言葉に衝撃を受ける息子の姿に、ミスラは笑みを浮かべながら紫の空を見上げた。

2—15 おやすみからおはようまで（中）

魔方阵を抜けたら、そこは人間界の日本。

「空が青かったわ」

待機していた人間界在住のグレモリー臣下の悪魔の運転する車に乗って目的地へと向かう道中。ミスラさんが発した最初の一言である。

「あつちでずっと暮らしているとそんな感想になりますか」

冥界の空は基本的には紫だ。昼も夜も天候も、魔力によってどうこうしている。

「そうね……こちらに来たのはいつ以来かしら」

「そういえば、昔は時の流れも違ったって聞きましたけど」

「ええ、あるところでは人間界よりもずっと速く、またあるところでは人間界よりもずっと遅く、時の流れは場所ごとにまちまちだったのよ」

人間基準で考えると、「冥界で一晩過ごして帰ってきたら数百年経っていた」り、あるいは「冥界で長いこと過ごして老人になって帰ってきたら知り合いはまだ若いままの数日しか経っていなかった」、そんなおとぎ話の中のような出来事があつたわけだ。

だからまあ、ゼクラム祖父さんの一万歳オーバーな年齢も、そういった人間界標準時間速度とは異なる場所で稼いでいる可能性はある。

「今は転生悪魔や人間界で暮らしている者のために、人間界に合わせているんじゃないか」

「そうらしいわ。魔王さまたちが調整されているそうだけれど……」

『時間』だから、アガレス大公家も関わっているのでしょうかね」

シーグヴァイラのアガレス大公家の魔力特性は『時間』だ。彼女は外界での数分を一時間に引き伸ばした空間を結界内に展開する、なんでもこともやっつてのける。一晩で数十日分のえっち時間を捻出できる、それがアガレス家。エロい。

母親がアガレス大公家出身のラティアも似たようなことが可能だ。

むしろ、その手の術法の操作に関してはラティアの方が得意だろう。ベルゼブブさまの『破軍の方程式』に繋がるアスタロトの術式の操作に秀でた魔力特性とアガレスの『時間』のハイブリッドだな。俺がグレモリーの豊富な魔力量（と秘密の特性）とバアルの『滅び』の特性の双方を受け継いでいるのと同じだ。

「どうして転生悪魔や人間界ぐらしの連中に合わせたでしょうね。わざわざ勢力の回復速度を削ってまで」

「政治の都合としか……墮天使側の妨害があるのかもしれないわ」

冥界の諸々を弄ろうとすると、やはり墮天使が邪魔になるのか。アイツら冥界からいなくなってくれないかな。

天使や墮天使と違って、悪魔は他種族に頼らずとも純粋に同種での交配によって数を増やしていける。生涯に子供を作ることの出来る人数も多い。なにせ未だに寿命の限界が分かっていない種族だ。あるいは存在しないのかもしれない。

となれば、それこそ冥界の時間速度を人間界の500倍ぐらいにしてやれば、悪魔の人口回復速度は対天界・墮天使相手に500倍速となり、勢力の回復も同様となるはずだ。

500倍は極端な例だが、それでも30倍程度は行けそうなんだがな……。転生悪魔に配慮すると言っても、悪魔になっている以上寿命は長いのでから、人間界の知り合いと比べて年を取るのが早くて困るなんてこともないはずだ。

人間界よりも冥界の時間進行が遅くなっていて、冥界暮らしの者が冥界↓人間界移動で「浦島太郎状態」となるのは困るだろう。人間の知り合いが死んだり、老人になってしまいうだろうから。それは寂しいと思う。

だが、冥界の方が速い分には、人間界暮らしの悪魔が人間界↓冥界で「浦島太郎状態」になっても、知り合いも大抵は皆悪魔はずだから、生きているし（外見上は）年も変わらない。そう問題があるようには思えないのだが。

冥界の主であり支配種族たる悪魔が、他種族に配慮してやる必要もないだろうしな。

「やはり墮天使ですか……」

おのれ墮天使。冥界に存在していて小競り合いを仕掛けてくるわ、人間界でも突つかかってくるわ、さらには朱乃を甚振ったばかりか、悪魔の人口増加までも邪魔してくるとは……。

やはり早く滅つさないと。

冥界の『時間』さえ悪魔の好きに出来るようになれば、人間界時間で一年ごとに純血悪魔が二十や三十は産まれてくるようになる。欲の皮の突っ張ったお年寄り連中も、欲が残っている以上性欲も旺盛なはずだ。『悪魔』全体で子作りに励めばそれぐらいはたぶんいける！

で、そこに『王』の駒の量産化も合わせれば……人間どもが一年を過ぎす間に数十の魔王級悪魔が誕生していくというワケだ。そいつを百年も続けて行けば、数千の魔王級——もはやそれが純血悪魔の標準的な戦力になるだろうが——による軍勢が形成できるわけだ。

ふむ、転生悪魔なんぞいらんな。そうなるよ。

同様に疲弊しているらしい天使や墮天使どもはよいとして、心配なのは他の神話勢力から警戒される可能性か……。うーん、俺には政治的な発言力がないから、議会などでそういったことを聞くこともできんし……。兄上たちは愚民化&貴族弱体化政策を進めているようだし……。なぜ悪魔を弱くしようとするのか、これが分からない。

平民どもの戦力化・かつての軍団の再形成&貴族の個人戦力の強化、これが俺的オススメなんだがなあ……。現魔王さまたちの方針と真逆な感じだよなあ。

そう考えると平民どもを鍛えて戦術を教え取り込もうとしているソーナは、実は今の俺と似た考えを昔から持っていたのか……。さすがはソーナだ、賢いなあ！

「何か難しいことを考えているの？」

おっと、今はデート中だった。ミスラさんに比べたらどうでもいい話を延々考えているなど失礼過ぎた。

「いえ、俺は結構『悪魔』が好きだったんだなと」

まあ、純血悪魔なんて家の数も少ないし、みんな親戚みたいなもの

だ。みんなで強くなつてブイブイ言わせたいものだね。ブイブイつて人間界ではもう死語なんだろうか……おじさん、死んじまつたからもう最近の日本のことはよく分からないな。

「そういえば、あなたは前世……人間だった頃の記憶を持っていたわね。親御さんには会いに行ったりしないの?」

「会いませんよ。一目見れば情が湧いてきてしまうかもしれないし、そうなる何処の誰にどう利用されるか分かりませんから」

前世の親はまだ生きているのだろう。たぶん。

だが会わないし、探そうとも思わない。人間だった俺は死んだのだ。

顔を見てしまつてはまた会いたくなるかもしれない。そうになると、どう隠していてもいずれどこかで悪意を持った誰かに知られてしまうだろう。それで人質にでもされた日には目も当てられない。

さつくりと昔は昔ということにして、気にしないことにするのがお互いにとってベストなのだと思う。今の俺はグレモリー家の次期当主だしな。

と、雑談を続けていたところどうやら目的地に到着したようだ。

「人間が多いな。平日を選んだはずだったのだが」

「は、本日はこの国の祝日となつておりまして……」

あせあせと答える運転をしていた悪魔は、本日の目的地である遊園地の管理者でもある。

まあ、グレモリーは人間界でも手広くやっているのです、この遊園地もグレモリーの所有物ということだ。

「ああ、あつたなそんなものが」

かつての俺が働いていた会社には、祝日が休みになるなんて制度は存在してなかった。学生やっていた頃以来縁がなかったから、すっかり忘れていたよ。

「これから貸し切りというのは厳しいのか?」

「はい、いえ……その……」

「俺は並んで待つのは好きではないのだが、どうにかならないのか?」
うーん、この経営者一族のぼんぼんの無茶ぶりで困つてしまう一般

社員といった風情の臣下。

ふふふ、俺は今猛烈にドラ息子していますとといった気分になれて大変良いな。

「はい、どうにかいたします！」

ペコペコと頭を下げる一般管理者悪魔の姿に気分を良くしていると、ミスラさんにつねられてしまった。

「ダメよ、あまりワガママを言っては」

「はは、すみません」

「私は、並んで待つのも嫌じゃないから……」

つないだ手に籠る彼女の力が少しだけ強くなったのが嬉しくて、その甲を撫で返す。

すると、ミスラさんがはにかみながら、スツと身を寄せて来たので俺の機嫌は大変よろしくなった。

この人、今の見た目は少女だけど中身は子育て経験ありで、初々しさの中にも艶があるというか……なんだこれ、色っぽいのに幼げというか……。

「ま、まあいい、案内しろ」

「はっ、はははい。ただいま！」

いやー、悪魔っていいわ。

さて、遊園地の定番人気アトラクションと言えば何が思い浮かぶだろうか。

実のところ俺はさほど遊園地経験がない。なんといつてもデート経験がほぼない上に、人混みや行列が好きではなかったからだ。

「このコーヒークップって初めてだったんですよ」

「そうなの？ 私も初めてで、見ているだけだと何が楽しいのか分からなかったけれど、やってみると面白いのね」

管理悪魔の差配によるものか、たいして並ぶこともなく、といつてすぐにするすると乗れてしまうワケでもなく、適度に並んで待ちながら見学して「どんな感じなのだろう？」と興味を持ってもらいつつ楽しんでもらえているようだ。

キャツキャウフフと言いながらぐるぐるするのも良いものだ。

「何が怖いのか分からなかったわ……」

「お化け屋敷は失敗でしたねー。オーラが足りてない」

本物の悪魔に作り物オバケとかそりや意味がない。なんなら本物でも怖くないというか、本物のオバケは純血悪魔なんぞを見たら必死で逃げ出すか命乞いをしてくる。もう死んでるのに。

「い、意外と豪快な運転するんですね」

「これでも免許は持っているのよ」

おしとやかに微笑みを浮かべるミスラさんだが、ゴーカートの運転は荒っぽかった……。

カーブとか、腕力でカートの向きを強引に曲げてただろ、アレ。あれが、パワードリフトってヤツか。俺もミスラさんも目立つから見えていた連中がいたのだが、どよめきが奔ったからな……。

カートが壊れてるかもしれないが、まあいいだろう。この遊園地の持ち主はさつきミスラさんになったことだし。

「えっ、ここをくれるの？ ふふ、ありがとう」

普通にニコツと受け取ってくれるあたり、一般庶民とは感覚が違うんだなって。

まあ、元々はミスラさんと遊園地に行くと言えたら父上がポンツとくれたものなのだが……やはり生粋の貴族悪魔と比べると、俺はまだ庶民派なのだろうか。

「さつきのジェットコースター？ あれよりもこっちの方がドキドキするわね」

「そうですね。馬も飼ってみようかな」

自前で空を飛べる悪魔には、ジェットコースターはそれほど怖くもなかったようで。まあ楽しんでくれたと思うけれど。

それよりも二人乗りしているメリーゴーランドの方がドキドキしちゃうらしい。そんなにちよつと頬を染めてニッコニコしながら振り向かれたら俺もドキドキしてくるわ。

さて、遊園地で定番えっちスポット（創作物）と言えば何が思い浮かぶか。

「人間は高いところが好きなのね」

「まあ、自力で空を飛べませんから。怖いなって思いながらも憧れるんですよ」

「そう、人間にとっての空は、私にとってのあなたみたいなのものかしら」

「え、俺って怖いですか？」

「ええ、すごく怖いわ。でもね、だから……」

そう言いながら抱き着いてきたミスラさんを抱きしめ返す。結構大胆なんだよな、この人。人目もはばからずというか、人間風情は背景でしかないのかもしれないけど。

周囲の日本人一般客からは、外国人のカップルは凄いのねー、キヤーみたいな目で見られている。

ええい、期待に応えてやらあ！

「んっ」とあごを掴んで上向かせ、「ちゅっ」と音を立てて唇を一瞬だけ合わせる。

「うおおおおー！ こんなところでやりやがった！ クツソお、イケメン死すべし!!」

なんだかバカでスケベそうなガキが吠えている。親に引きずられて去っていくその背中には、「誠」の一字。新選組のファンなのかね。

「え、ちよつと……こんなところ……で、したいの？」

そう遊園地で定番のえっちスポットと言えば、観覧車である。何故だかそんなイメージがある。

観覧車のゴンドラ内に並んで座って、キスを繰り返し、徐々に彼女の身体に触れていく……。

—♡♡—

うーん、時間制限のあるえっちも良いものだ。最後の方で慌てて服装を直すのもたまらない。

「今日はここに泊まりですので」

「え、ええ……。もう！ あんなところですから……」

腰がくにやんとなつて足元が不安定なのか俺にぎゅーつとしがみついてくるミスラさん。そんな彼女の腰に腕を回すようにして歩き、向かうはメルヘンな雰囲気の遊園地内ホテル（一組限定）だ。

なお、元々はここグレモリーの一族がここに遊びに来た時に、そのまま休憩するスペースとして造らせたのだとか。うちの父母や兄夫婦もご利用になったのだろうか。

宿泊者が大いに限定されているというのに、無駄に広く豪華。いや、我が家よりもずっと狭いけれど。

「しない、の……？」

「こういうのはお嫌いですか？」

「ううん……なんだか、幸せよ」

夕食のあと浴室でイチヤついてからベッドに入ったが、今日はもうしなくてもいいだろう。

「朝からでしたし、お疲れでしょう？」

「そう、ね……でも、また……起きられるか……」

「大丈夫ですから、俺が横にいるんで」

「うん……ありがとう」

眠ったら二度と目が覚めないかもしれない。そう考えながら床につくというのは、かなり不安だったのだろう。

えっちなことをしない添い寝というものも、これはこれで悪くない。激しく熱くはならないけれど、なんというかポカポカしてくる。

ミスラさんの穏やかな寝顔を見ているとこっちも安心する。朝起こしに行つたときとか、不安そうな顔で眠っていたからな。

シトリー家が訪問予定の延期に快く応じてくれたので、その後の十日間、俺はミスラさんとあちこちを回ることにした。

人間界は珍しいのか、海に船で漕ぎ出してみたり、山の上まで飛んで行つたりもしてみた。

その途中で盛り上がったらえっちして、夜は二人で抱き合つて眠る。

「ねえ、あの子のこと……お願い」

「ええ、大丈夫ですよ」

最後の夜、彼女はそう言って眠りについて、

「ミスラさん、朝ですよ……」

次の朝、彼女はついに目を覚ましてくれなくなった。

「すまん、サイラオーグ。最後に一言でも交わさせてやれば良かった」

「いや、いいさ。こんなに幸せそうな顔で眠る母上は、俺が小さかった頃には見たことがない——」

冥界に連れ帰ったミスラさんを完成していた城の一室に横たえ、サイラオーグに謝る。自分だけ、俺だけ楽しんでしまった。

「——それに、見つけてくるからな」

それからしばらくして、サイラオーグは平民学校を卒業。ウアプラ家からミスラさんに付き従って来た執事を共に旅立っていった。

—●— (しばらく後のこと)

『リア……義父上！ 他領の下級悪魔を眷属に迎えたいのだが、手続きが必要だろうか!?!』

「ああ、話は付けてやるが……なんだ、美人な娘でもいたのか?」

『ん? いや、コイツなんだが』

出かけて数日で、いきなり他所さまの領内の荒地だかで岩を片付ける仕事をしていた、やたらデカイ(3メートルはありそう)下級悪魔を気に入って引き抜きたいと言って来たりしただけののだが……。

うん、まあ、サイラオーグの眷属なんだ、好きにするといいさ。俺は美女と美少女しか眷属にはしないがな!

『ただ、人間界に連れて行くと目立ってしまうので……』

「ああ、分かった。普段はこっちで面倒を見てやる。召喚できるようにはしておけよ……ええと、トラバーバが」

『助かる!』

人間界で目立たない姿に変身することも出来ない下級悪魔を眷属にするなんて、ほんと物好きだなアイツ。

『死にかけていた俺を助けてくれた人が、教会を追われて……』

「悪魔にしてしまえ！ 敵勢力の女とヤルなら眷属にしてからだぞ、基本は！ 悪魔らしく弄ぶだけなら構わんがな」

『なっ！ お、俺は、そんな……！』

サイラオーグのヤツが教会女に引つ掛かりそうになっていたので、俺の縄張り予定地で起きたらしい不祥事のようにならないように始末に行ったり。

『物凄い魔法使いを見つけたんだ！ 術は基礎しか使えないのだが、魔法力が途轍もない！』

「気に入ったんなら誘えばいいだろうが！」

と、ちよくちよく連絡が来たのだが、だんだん面倒くさくなってしまふ俺であった。お前は親に「あのね、あのね」って報告してくる子供か！

あ、俺が義理の父であった。まあ、叔父上には相談できんよな、縁も切ってるし。

『リアス！ 見つけた！ 見つけたぞ！』

「なんだ、またヘンな眷属候補でもいたのか……？ 今度は足が速いとかそういう」

『違う！ いや、それもあるのだが、そうではない！ 母上の、母上の治療の手がかりが見つかったんだ！』

「はっ……!? え、おま、マジで!? なんだ、それ、ええ!! ちよつ、早く帰ってこい！」

『ああ！ 観世音菩薩殿に挨拶したら、すぐに戻る！』

帰って来たサイラオーグから、伝えられた治療法の手がかりは……なんというか、俺むきというか、うーん。

「闘戦勝仏と手合わせして気に入られて、観世音菩薩を紹介してもらって、阿弥陀如来に平行世界の可能性を見もらった……と……いや、お前なにしてんの？ ホント、何してきたんだよ！」

知らんうちに、テングロンハットかぶったカウボーイみたいなヤツ

とか仲間にしてるし。『騎士』の片方と『僧侶』の片方は、俺とディオドラが聖剣計画というかジャンヌ堕とし絡みで紹介して預けたから知っているが。

「とにかく！ 一度試してみてください！」

「ああ、分かったが……お前、それでいいの？ 母親に、その……」
「なんとも微妙な気分だが……義父上ならば母上も許して下さるだろう」

阿弥陀如来殿もヘンな可能性を見てくれたものだ。いや、ありがたいけどね。これで上手く行ったら俺の中に残っている、前世のなんちゃって仏教徒の欠片が育っちゃいそうだけどね？

「赤龍帝の籠手を使用する、グレモリー縁の悪魔が、煩惱に満ちた技を振るい……ミスラ・バアルが目覚める姿を見た、か」

その平行世界のミスラさんは離婚しなかったのかな。ウアプラでなくてバアルになってるから。

「どう考えても、義父上のことだろう！ さあ、母上に煩惱に満ちた技をかけてくれ！」

「いや、お前ら出て行けよ！ それってつまり、あれだろうが！ アホ共が出て行け！ 二人つきりにしろ、いやらしい奴らめ！」

煩惱に満ちた技……。

三千大千世界の外側に座し、遍く時間と空間を照らすとか言われて
いるらしい阿弥陀如来殿よ……貴方は俺に睡眠姦をしろと言うのだ
な！

いいだろう、それでミスラさんが目覚めるといふのなら、やってヤルぜ!!

?—? おやすみからおはようまで (後)

バル領辺境の屋敷、その自室でミスラはため息をついた。
「ああ、私どうしたらいいの」

あの夜から、彼の年齢に合わせるかのように見た目を変えてしまった夜から、彼は昼間に訪れるようになった。

息子が学校へと出かけたのを見計らって現れると、ミスラをベッドへと引きずり込み愛欲の限りを尽くそうとしてくるのだ。

そのたびごとに感じさせられる絶頂の快感。あの強烈な悦びを思い返してしまおうと……。

「ああっ……」

朝、出かける息子を見送ったミスラは、窓の外、彼がやって来るだろう道を見つめ吐息を漏らした。

「ミスラさん、今日も綺麗ですね」

やって来るなり、彼は部屋に一人でいたミスラにを壁際に追い詰めるようににじり寄って来た。

「ねえ、やめましょう? これ以上、私をからかわないで」

夫と別れて、結婚してくれだなんて……そんなことを本気で言っているはずがない。

これ以上されて、本気になってしまった。その後に放り出されたら、もう、私は……。

「からかうなんて……ひどいな。それに、もう拒否できませんよね?」

ミスラの背が壁に当たる。もう後退りはできない。彼が壁についた両腕がミスラの顔の左右を塞いで、逃れることを許してくれない。

いいや、逃げたくないのだ。彼によって教え込まされてしまった身体が、求めてしまっている。

いやいやと横に振るあご先を掴まれ、情欲と支配欲に満ちた紫の瞳がどんどんと大きくなってくると、ミスラの唇が自然と半開きになった。

「んっ……んふう……」

また淫らに喘ぎ狂わされるのだ。胸を揺らし、尻を振って、男を誘わされ、膣内に入れて欲しいと懇願させられてしまう。

口内に侵入してきた彼の舌に応えながら、ミスラは期待に震える身体を寄せて彼の背に腕を回した。

「どこに行くの……？」

口づけされながらあちこちを弄り回され、火照ったミスラの腰には彼の腕が回されている。

ふらつく身体を彼にしがみついて支え、よろめく足のまま部屋から連れ出されてしまう。

「ねえ、やめて……外なんて……」

玄関の扉が近づいてくる。彼はミスラの声に返事をよこさず、ただ腰に回している腕に力を込めて来た。

「やめ、やめましょう？　ねえ、やめて……ダメよ」

外の光がミスラの身体を照らし、羞恥と淫楽に染まった肌を冥界のぬるりとした風が撫でていく。

ブルリと震えるその肢体を彼の指がくすぐりまさぐって、必死に消そうとする情欲の火を燃え上がらせてくる。

「んんっ~~~~」

誰に見られているかも分からないのに、なんてことを……。

耳をついばまれた。首筋に舌が這う、服の上から胸をもみほぐす彼の指先の動きのなんといやらしいことか。

それ以上に、その一つ一つに反応して喘ぎをこらえる女の淫らな有様を下級悪魔の平民風情に見られたりしたら……。

「ミスラさん、スカートに染みが出来てますよ。感じてるんですね」

「……そんなこと言わないで、ね、やめましょう？　中で、中でなら、いいから」

「中がいいんですね。ええ、たくさん中にあげますよ」

スカートにまで染みが出来ているのは、彼がこうやって布を押し付けてくるからだ。

グイグイと女の急所をスカートの上から、彼の指が無遠慮に押し込んでくる。

「んんっ、んんんっ……」

連れていかれたのは、屋敷の近くにある林の中だった。道路がすぐ近くにある。木々が邪魔をして、ただ通り過ぎるだけならば誰も気が付かないかもしれない。

でも、もしミスラが声をあげてしまい、それに通りがかった誰かが気を取られ、そして注意深く林の奥に目をこらしたなら……。

ああ、きつと見られてしまう……。私のこんな姿を……。

胸の奥がバクバクと鳴っている。心臓が音が辺りに響いて、それで居場所がバレてしまわないかと心配になってしまうほど。

「それじゃあ、脱いでもらえますか？」

「こ、こんな……外でなんて」

ためらうミスラに焦れたように、彼の手が服を剥ぎ取っていく。

「仕方ないですね。なら下着は残してあげますよ」

「いや、ダメよ……やめて」

拒絶の言葉とは裏腹に、ミスラは強い抵抗を示さない。

ブラとパンツだけを残して脱がせた服を彼は、自身の亜空間へと仕舞いこんでしまった。

「いいですね。似合ってますよ、その下着」

「これは、あなたが着ろって」

ミスラが今身に着けている下着は、彼から贈られたものだった。

男の情欲を刺激するレースの多い煽情的なデザイン。その股布を彼の指がなぞっていくと、ミスラはブルリと震えて瞳を潤ませてしまう。

「こんなに涎を垂らして、本当にお似合いですね」

「ああっ……いやっ」

「いや、じゃないでしょう？ イイんですよね？ 俺にこうされるのが好きで好きでたまらない、そうでしょう？」

「うっ……んう……うう……んっ♡」

下着だけの半裸の背を後ろから抱きしめられ、クリトリスを布越しにいじられると何も言えなくなってしまう。

ミスラは必死に喉からこぼれ出そうな甘い声を抑え、激しく腰をよ

じらせた。

「それじゃあ、まずは口でしてくださいよ」

ジーっとファスナーを下ろす音がして、彼の欲望の滾りがミスラの両脚に間から生えてくる。

熱く、硬く、強い。女を支配しようとするオーラに満ちた剛直。

内ももに感じるそのオスの熱に、じわりじわりと温度を上げていたミスラの女の割れ目が急反応し、どぼりと溶けて汁を滴らせた。

ああっ、私は……もう……。

こここのところ何度も何度も頭の中で繰り返した想いを再認識させられる。もうどうしようもなく、自分の身体は彼のモノにされてしまってるのだと。

「わかって……いるわ」

ミスラは土と落ち葉で形成された地面にむき出しの白い肌の膝をつき、彼の肉棒に舌を這わせ始めた。

尖らせた舌尖でちろちろと先端を愛撫し、柔らかく広げた舌の中央で裏筋を包むような気持ちでくすぐる。

「あむっ……んく」

唇を使って亀頭の上側をなぞり、幾度もミスラの膺壁を掻き出した高いカリまでを呑み込んで舌を絡めきゅっつと吸い込む。

「ああ、いいですよ。上手になりましたね」

そう言いながら彼はミスラの頭を撫でてくる。耳や髪、頬に首筋、それらに優しく触れられながら褒められると嬉しくなってしまう。

気持ちそうなると、口内にあるオスの滾りの逞しさに頭がぼんやりとして霞がかかり、それが与えてくれた快感が思い起こされて愛しささえこみ上げてくる。

「んん、んっうう……んぐっ……」

半裸のミスラが上を見上げると、見下ろす紫の瞳を目が合った。その瞳の中にある支配欲、独占欲、情欲。それを今、一身に浴びている。そう思うと背筋に甘い痺れが奔り、ミスラの口淫奉仕もまた熱のこもったものになっていった。

ふしだらなブラに包まれた胸を揺らしながら、ミスラは熱心に顔を

前後させる。赤く火照った頬に額から流れた汗が伝う。

そこにいるのは、彼のモノに魅入られてしまったメスだ。フェラチオに没頭するミスラの頭の中で、なめしゃぶっているものに貫かれ支配される中で味わう悦楽の境地への期待が膨れ上がっていく。

ああ、たまらない。なんて、ああ……。

舌と口で彼を味わっていると、心が熱くなる。身体は火照りきつて、パンツの布地に隠された秘部はその内側でパクパクと喘ぎ、滴らせた淫液で土の上にぬるりとした水の溜まりを作る。

「んんん、んんう、んっ、んっ、んんっ」

懸命に怒張に舌を絡め、先から染み出てくる汁を吸い、唇で扱き続ける。すると彼のモノが、さらに硬く、大きく、急な角度を描き始めてきた。

「もういいですよ。ミスラさんの気持ちがよく分かりましたから」

口の中から出て行くこうとする肉棒を、ミスラの舌と唇が追いかけた。

「んんっ……」

「おっと……ふふ、じゃあこうしましょう」

一旦抜き出そうとしたソレを、彼が押し込んでくる。頭の後ろを抑えられ逃げられない状態で喉奥まで突き込まれると、苦しくて嗚咽がこらえきれない。

それなのに、ミスラは目を閉じて彼の腰に両腕を回しうっとりその感触を味わってしまう。

「んんあ……んんあお……んんぐっ……」

ゴツンゴツンと口の奥を連続して突かれ、呻きをもらすことが心地よくなってしまっていた。

「んおっ、飲んでくださいよ」

肉棒が膨張し、ビクビクと震えながら白濁を流し込んでくる。

「んっ、んんっ、ぐっ……んんあっ。……んんああ♡」

どくどくと注ぎ込んできたたくましいモノが引き抜かれると、ミスラの口からはオスの精の匂いと共に甘い声が漏れ出た。

淫猥な霧が脳内を埋め尽くし、肉悦への期待に震えて腰が砕け、膝

だけでなく手を土の上について身体を支える。

「もう欲しいですよね？」

そんなミスラの眼前に、一向に萎える様子のない剛直を突きつけ彼はそう言った。

コクリと頷くミスラに満足そうな笑みを浮かべると、彼は近くの樹木に指を向ける。

「あの木に手をつけて、後ろからで」

「え、ええ……あぁっ……」

言われるがままにふら付く足取りで、ミスラは木にしがみつく様にして尻を突き出した。

グツと背をそらし、男を受け入れやすい態勢をとる。

「脱がしますよ」

彼の手によってブラを外され、ずり下げられたパンツが足首に輪を作った。

ああ、私、わたし……こんな場所で裸で……。

ふと、道路の方へと目をやるが——誰もいない。ああ、良かったと思う間もなく、彼の肉棒がミスラの女の入口をこすり始めた。

「あっ、んっ、あぁっ♡ ねえ、あんっ♡ 焦らさないで、ねえ……」

「奥まで挿れて欲しいんですか？」

「ああ……」

また、言わされてしまうのだ。欲しい、欲しいと浅ましくねだらされてしまう。

いつもそれが悔しくて、悔しくて、

「んんう……んんうっ……♡」

感じてしまう。

ミスラは身体をくねらせた。胸をゆすり、尻を振って、膣の入口をクリトリスを彼の逸物に擦りつけて、甘え媚びたメスの声で懇願する。

裸にされてオスをねだる自分と、着衣のまま肉棒だけを取り出して見下ろす少年。

その構図が二人の関係をそのまま表しているかのようで、ミスラの

被虐心を燃え立たせる。

「ああっ、欲しいの……、挿れて欲しいのよ……。奥までぜんぶ、埋めて欲しいの……。ちようだい？　ねえ、私にオチンチンちようだい？

あっ、んうっ♡」

後ろに振り返って、ミスラの尻を撫でまわす彼の目を見つめた。

彼はまだミスラの媚び具合に満足していないようで、その肉棒は入り口とクリをかすめるだけで入って来てくれない。

「ああっ、うううっ、いじわるしないでえ……。もう、もう我慢できないの……。挿れて、挿れてください。おねがいします。ああう♡　おねがいよ、欲しいの、愛してえ！　……。んあああっ♡♡」

何が琴線に触れたのか、彼のモノがミスラの奥まで一気に突き込まれた。腹の奥にどすりと快感が押し付けられ、遅れてかき分けられた膣ヒダの刺激が襲ってくる。

「ああっ、んあああッ♡♡！　あ、イイ……。すごい、あああっ♡♡」

ゆるゆると彼の腰が引かれていくと、それに追いつがる膣内が力りに引つ掛けられてたまらなくなり、ミスラははしたない声を上げて悦んだ。

焦らされてぐっぐっになっていた膣内を、じつくりとなぶる様に男根が前後し始める。

「あああっ♡　んんう……。♡　はあああん♡」

覚え込まされた彼の感触に全身が甘い痺れに襲われ、力が抜けていく。

恐ろしい快感にミスラの心は千々に乱れ、必死に木に掴まりながら首を左右に振りながらよがり啼き始めた。

ああ、すごい。気持ちいい……。いつまでもこうされていたい。

心までも彼の与えてくれる官能に支配されている。そう思い知らされるほどに快感が高まっていく。

「そろそろ激しくしてあげますね」

ミスラの膣内がギュツとしまった。勢いよく子宮口を叩いてくる怒張のリズムに合わせて、より快楽を貪ろうとメスの本能のままに肉棒へと奉仕する。

「ミスラさん、俺の子供、産んでくださいね」

「あああつ♡ いいの？ わたし、いいの？ 産んでもいいの!?!」

心の傷口が押し広げられ、そこに彼の言葉がしみ込んで、肉体の悦楽と一緒に燃え上がる。

「産め。俺が貴女との子供が欲しいって言ってるんだ。産め、いいな?」

「ううあ、あああ♡ はい……はい! んんっ、うれ、嬉しい……♡」
欲深い肉の洞穴が、男を深く強く啜え込んで離すまいとし、彼はそれに抵抗しようと歯を食いしばって腰を激しく前後させる。

繰り返されるピストンに合わせて、ミスラの胸の双丘が狂ったように暴れまわった。蜜でいっぱいになったミスラの膺は、肉の杭が撃ち込まれる度に水っぽい破裂音を響かせてあふれ出る汗を飛び散らせた。

「あ、ああ、んああっ♡」

発情しきった雌獅子は、だらしなく開いた口からよだれを垂らして短かく荒い呼吸を繰り返し、紅潮した肌に玉の汗を浮かべた。

内側から感じる牡の器官の膨張、発射の前兆に応えて牝の穴が収縮を繰り返す。膺内の襞という襞が蠢いて肉棒を奥へ奥へとこすりたて、子宮へと飲み込もうとする。

「おお、出る、出る!」

「あああつ、ちようだい! ちようだい! あなたの子種でイカせてえ♡♡!!」

ぐいぐいと男根の切っ先が子宮の口に押し付けられる。彼が吐き出すときの癖だ。まるで子宮の中にまで入り込みたいのかと思うほどに強く、強く押し込まれ——ぐずりと愛欲の槍がミスラの最奥を透り過ぎた!

「ひあああつ! ああ、イク、イクっ、イツちゃ! ……あああつ、子種でイクううう♡♡♡!!」

信じられないことに、彼のモノが直接子宮の中にまで入り込んできた。そうとしか思えない感覚、快楽。

あり得ないはずなのに、それが現実としか思えなくて、ミスラは樹

木に五指の爪をめり込ませて子種を吹き付けられながら達した。

それから三度、彼の不思議な透り過ぎる射精を子宮に直接撃ち込まれ、その間にミスラは数えきれないほどの絶頂を味わった。

「うっん、はあん♡ あっ、いつ♡ イイのお……いい♡ うあん♡んっ、はあ♡」

もはや喘ぎ声を上げることしか出来ない。彼に抱かれている、犯されている、もうその他のことはどうでもよくなってしまふ。

「ミスラさん、叔父上と別れてくれますね？」

「あ、ああ、わか、わかれ、る……別れるわ。 ああん♡」

気持ちいい。気持ちいい。セックスがこんなに気持ち良かったなんて……。

「良かった。それじゃあ……俺の女になってくつれますよ、ね！」

ぐぐぐうと膣の奥に押し付けながら言われると何もかも肯定してしまいたくなる。逆らいたくない、もつと、もつとして欲しい。

「なる、なるわ……あなたの、あなたの女にして……。して、してえ……♡」

彼は心底嬉しそうに笑うと、また激しくミスラを責め立て始めた。

「これで、これでミスラさんは俺の妻だ！」

「ああっ、あなた、あなたあ……♡♡」

「もつと、もつと可愛がってやるからな」

「ああ、もつと、もつと……ふうん♡」

嬉しい。嬉しい。身体中を歓喜に満たして、振り返ろうとすると、彼が肉棒を引き抜いていった。

「ああ、なんで？ あっ、あああ」

膣内から彼の怒張が抜けていく寂しさにミスラが涙をこぼす。

すると彼はミスラの腰を掴んで身体の向きを変えさせ、正面から抱き合う形ですぐさま挿入してきた。

裸の背中が樹木の表皮に押し当てられ、幹に向かって串刺しにするように肉の杭が撃ち込まれる。

「たくさん産んでくださいね。俺の子供、たくさん、たくさん」

「ああ、産むわ。たくさん、産ませてえ♡　たくさんんっ！　ああっ、いい、イイのお♡♡」

抱き合う形で肉悦を貪り続けていると、ふと彼が道路へと目を向けた。

「誰か歩いてますね」

「ひっ、あああッ♡」

言われてミスラも道路を見る。ああ、たしかにそこには道を歩く下賤の輩の姿があった。

「大きな声を出すと気づくかもしれないね！」

「んんんあっ♡♡　あっ、あああ、やめ、やめて、こえ、でちゃう、でちゃうの、やめ♡」

「ああ、すごい締め付けてくる。見られたいんですね」

「ちがっ、ああ♡　ちがうの、ちがう、ちがう……んんああ♡♡」

彼の抜き差しは人目を気にして止まるどころか、より激しくなった。ミスラはその刺激をこらえることが出来ない。

散々盛り上がって、盛り合って、出来上がった牝の身体だ、突き上げられればどうしようもない。

手で口を抑えてはとも思うが、彼の背中に回した腕を外したくないのだ。抱きしめていたい、胸を押し付けていたい、もっともっと近くに感じていたくて仕方がない。

それに比べたら、ああ、あんな平民に見られてしまう、知られてしまうことなど、どうでもいいことではないのだろうか？

いや、だめだ。そんなこと、できはしない。

「んんっ♡♡♡♡♡　んっ♡♡♡♡♡」

ミスラが選んだのは、ぎゅっつと目を閉じ彼の肩に顔を埋めることだった。

歯をたてないように気を付けながら、唇を懸命に彼の首筋にあて吸う。そうすると自然と舌が蠢いて、彼の肌を舐めしやぶりだした。

見つかるなら見つかってしまえばいい。そうすれば、そうなって、自分が彼の女になったのだと知れ渡ってしまえばいい。

それは甘美な想像だった。近隣の下級悪魔どもに、ミスラ・バアル

は年端もいかぬ少年悪魔に翻弄されて、林の中で痴態を晒すふしだらで淫蕩な女だと噂され、もう彼に逆らえない存在になってしまったのだと吹聴される。

その場面を思うと、心の深奥がゾクゾクとしてくる。後戻りできない、そんな状況に自ら堕ち込んで行きたくなる。イク、イク、イクツ!!

「もう行きましたよ」

「そう、なの……あっ♡」

「なんだか残念そうですね。ひよつとして見られたかったとか？」

「んんっ♡ そんなあ、わけ、ないで、しょう……ひゃん♡」

「まあいいですけどね。ミスラさんのここは、ものすごいことになってましたけど……」

彼が腰を動かすと、連続した絶頂の余韻が響いて、頭が甘く蕩けて身体に多幸福感が拡散する。もうどうなってもいい、とそう思った事実が染みわたって幸せで仕方がなくなる。

そんなドロドロに蕩けたミスラの尻に彼の指が伸びた。

「いっん、そこは……ああっ♡ ダメよ、そんな、とこ……」

アナルだ。肛門をいじられている。これまでも行為の最中に幾度か弄り回されて来た場所だ。

彼の指が菊の穴を割ってずるりと腸の内へと侵入してくる。これまでは拒んできたのに、今はむしろ……。

「ミスラさん、ここは経験ありますか？」

「え、あん♡ ない、ないわ……そんなところ、ああっ♡」

「叔父上に挿れられたことはない？ 誰にも？」

「ええ、ないわ……はああん♡」

「じゃあ、こっちは処女なんだ」

「しよ、処女って……いい、んっ♡」

指が三本、肛肉を広げて入り込んでいる。彼が指を動かすと、それに合わせてアナルが開閉を繰り返し、これまで知らなかった悦楽が脳髓を震わせる。

「ミスラさんの処女、俺にくれませんか？」

「わたし、わたしの……はじめて……」

「あつと、小さくならないでくださいね」

言われてハツと気づき、魔力の暴走を抑えようとする。

「その姿でないとキツイでしょうから」

お尻の穴でなんて、そんなのオカシイ。でも、ああ、でも彼に初めてをあげられる場所が……。

「もらって、くれる？ わたしの、ミスラの……お尻の初めて、もらって……」

「ええ、きつと愉しませますからね」

彼は心底嬉しそうな笑みを見せ、ミスラの頭を撫でながら膣内から肉棒を引き抜いていった……。

ふと気が付くと、ミスラは観覧車の順番を待つ列に並んでいた。隣には自分よりも背の高い彼の姿があり、どうやら手を繋いで並んでいるようだ。

一瞬、「あれ？」と思うがすぐにその疑問は消えてなくなり、隣に立つ彼に身を寄せる。どうしたのを見下ろしてくる彼の瞳には優しさが溢れているようで、ミスラの心は幸せでいっぱいになった。

自分には可愛らし過ぎるワンピースを着て、あまりにも若作りな格好で男の子とデートをしている。恥ずかしいけれど、それが嬉しくて嬉しくてどうしようもなかった。

「観覧車って乗ったことありますか？」

「いいえ、こっちに来ることなんてほとんどなかったから」

悪魔の国にも娯楽施設はあるが、自前の翼で空を舞う悪魔にとって高所の景観を楽しむためにあるのだろうこの「観覧車」という設備はあまり縁がない。

冥界に設置したとして、誰が使うのだろうか。

「これはですね。二人きりの空間を貸してくれるんですよ」

彼はミスラの耳に唇を寄せ、「観覧車の中ですること」を伝えてきた。

途端、ボツと音を立てるようにして、ミスラの顔が真っ赤に染まる。

「そ、そうなの……こ、これは……そういうものなのね……」

ドキドキと胸を弾ませ、ジワリと染み出してくるものを両脚をギョツとくつつけて堪える。

大人の姿でも、少女の姿でも、彼に「そういうこと」をすると言われると、すぐにこうなってしまう。ミスラはそういう女になっていた。

「ねえ、どうすれば……いいの？」

すぐに順番がやって来て二人だけの空間に乗り込むと、ミスラは愛欲に満ちた瞳で彼を見上げた。頬を撫でられて、上向かされると唇が触れ合った。

「んっ、ちゅっ……」

少女の姿の時のほうが、彼は優しい気がする。でも、大人の姿の方が激しくしてくれる。

ミスラはそのどちらも好きだった。優しく抱き寄せられながら、甘く蕩けるように舌を絡め合わせる。

「そこに立って」

言われるままに観覧車の入口の反対側を背にして立つと、「スカートをまくり上げて」と指示される。

ああ、恥ずかしい。でも……

とろとろと蜜をにじませるそこに、膝をついた彼の顔が寄せられて、清楚なパンツの上から舌で肉芽をつついてくる。

ビリッとした快感に腰を動かしてしまおうと、その動きを予想していたように彼の手がスルスルとパンツを脱がせていった。

「ミスラはいつも濡らしてるな」

「ああ、だって、だって……あなたが、わたしを……」

「そうだな。そうしたんだ、だから——」

彼の舌が秘裂の縦スジをほぐしてくる。片手がクリトリスに当てられ、もう一方の手がすっきり開発されてしまったアナルに伸びた。

「制限時間があるから。まあ、そこがいいんだろうけど」

観覧車はまだその円周の頂点に到達していない。だが、降りるまでに後始末まですることを考えると決して時間に余裕があるとは言え

ない。

肉芽の鞘を彼の指がスツとめくった。アナルのしわをほぐすように、蠢きだす。舌が潜り込んで出て出入りを繰り返す。

「ああっ、あなた、あなた、あなたあ♡♡ おかしくなる、おかしくなっちゃうわ、あああんっ♡♡」

三か所を一気に責め立てられ、ミスラは猛烈な勢いで追い込まれる。

「一回、イッておこうか」

「ああんっ、溶けちゃう、オマンコ溶けちゃう、お尻も、クリも、イイ、イイの、よすぎて、だめに、ああっんんっ♡♡」

儂さと清楚さを併せ持った十三歳ほどの少女の外見には似合わない淫らに蕩けた表情を浮かべ、同じ年頃の少年に弄り回され喘ぎまくる。

そうして、あっけなくミスラは果てた。

「ふう……、はあ、はあ、ハア……」

体重を観覧車の壁に預け、絶頂の余韻に浸りながら息を整えようとするが、彼はそんな暇を与えてはくれなかった。

「向こうのヤツ、見てるな」

「えっ？」

と彼の視線を追うと、どこかで見たような気がする黒髪の男の子が、反対側の下っていくゴンドラの中からこちらへと安っぽい双眼鏡を向けて見下ろしていた。

「覗きか……さつき何か叫んでたヤツみたいだな」

「あ、え……ああっ、ダメえ♡♡」

彼は覗き魔に見せつけるようにミスラを抱きしめ、いつの間にか取り出していた肉棒を絶頂の余韻の残る秘裂へと沈めてくる。

「ああっ、見られ、みて、みてるんっ♡ ああっ、んああっ、やああああ♡♡」

熱い、熱い、ああ、あんな下賤な、人間なんかに見られながらなんて……。

「きつつ、すごい締めて……くうっ、おッ！」

「ああ、まって、ああん♡ 胸まで、ああ、めくれない、でえ♡♡」
ワンピースを胸が見えてしまうほどにまくり上げられ、成長途中の胸をブラの上から揉みしだかれる。

尖った乳首がブラと擦れて痛くて、それ以上に心地いい。抽送されながらだと、荒々しい愛撫にも反応してしまう。

抜け出そうとするとキュウツと締め付けてしまう男根が、無理矢理引き抜かれて肉壁を削る様に持っていく。そしてそれが戻ってくるときの、燃えるような熱さと官能に声と身悶えを抑えられない。

「んああ♡ イイ、いい、いいのお♡ みられ、みられながら、いつて、いっっちゃ…ねえ、ああ、ねえ♡♡」

快楽に蕩け舌を躍らせる口をツイと突き出すと、彼はすぐさまそれを貪ってくれた。

ねぶられ、からめられ、ねぶり、からめて、下から上から、胸から、快感が全身を満たしていく。

その中でふと、横目で向かい側のゴンドラを見ると、身を乗り出すようにしてこちらへと双眼鏡向けている黒髪の少年の姿がどんとと視界の下側へと消えて行くところだった。

夢を見ているのだと、思う。

終わらない幸せな夢。

もしも目覚めたときに彼がいなかったら、きっと私は壊れてしまう。

あの人にまで捨てられたら、もう生きてはいけない。

あの人はいつまでも待っている、目覚めの時を待ち続けてくれると言ってくれたけれど…でも、もしもと想ってしまうと怖くて怖くて目を開けられない。

だから、いつまでも眠り続けていたい。眠ってさえいけば、そのまま死んでしまうとしても、幸せなままでいられるから。

目を開けたくない。起こさないで欲しい。

ああ、だと言うのに――。

「起きろ」と彼の声が聞こえてくる気がする。

ふと気が付くと、ミスラはサバンナに立っていた。

横には彼がいて、そう遠くない場所にミスラの実家ウアプラ家の司る獅子の群れが見えている。

一頭のオスとそれを取り巻く複数のメス。それからその子供たち。そんな構成の群れだった。

ライオンたちは、ミスラや彼に襲い掛かってはこない。むしろ首を垂れ腹を見せるようにして、抵抗の意志がないことを示してくる。

当たり前だ。それがウアプラの魔力の性質の一つなのだから。もしくは圧倒的な龍の暴威を前に、ただそうすることしか出来ないのか。

「ねえ、してみる?」

「ん、何をですか?」

人間界のライオンを見てみたいと言ったのは、ミスラの方だった。あまりこちらに来たことがなかったので、獅子の家の娘でありながらじっくりと見たことがなかったのだ。

「言つてなかったかしら? その、私が……あの姿になって……つて」
何を口走っているのだろうか。そんなことを、してみたいだなんて……。

ミスラの指し示した、牝の獅子を見て彼は「ああ」と得心し頷いた。「自分で言うのもあれですけど、ドラゴンのつて……ものすごく、その、凶悪ですよ」

「そ、そうなの……?」

彼の魔力が滾り、その姿が変化していく。怯えたライオンたちは逃げることも忘れて縮こまる。

「ああ……なんて……」

龍と化した彼の逸物は、既に臨戦態勢で……大きく、雄々しく、刺々しく、荒々しく、女に一度突き刺したらもう抜けないというほどの幹全体に逆棘すら備えた凶悪な代物だった。

あんなモノを受け入れてしまったら、終わってしまう。何もかも消し飛ばされて、死んでしまいうさな……そんな代物だった。

ゴクリと喉が鳴ったのが分かった。

「いい、わ……わたし、壊されてもいいの……あなたになら」

巨大な、実物の獅子よりも遙かに巨大な雌獅子へと変じたミスラは、グイと背をそらして尾を持ち上げた。

見捨てられて心が壊れるくらいなら、身体を貫かれて死んでしまいたい。

『Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost!!』

何か、強大な力の鼓動を感じる。

「そんなことを言われたら、もう止められませんからね」

逃げられないように鉤爪で押さえつけられる。龍の吐息がかかる。

熱い、熱い、焼けてしまいそう。

「オオオオツッ！」

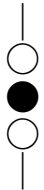
『Penetrate!!』

眠りの中に沈んだままでもいい。そんな呪いの霧を、強烈な、あまりにも莫大な快感が透り過ぎ、引き裂いていく。

「アアアアツッ! アアアアツッ!!」

雌獅子が吠えた。目を細め、開いた口から性感に満ちた絶叫を上げる。

膣から子宮を抜けて、胴の中を撃ち抜かれ、脳天から噴出する途轍もない快樂の波動に乱れ舞い狂う。



「ああああツツツ♡♡!! ああん、はああああん、イイツィんん、イクツツうううう♡♡♡♡!!」

あまりにも、そうあまりにも強烈な快樂を叩き込まれ、ミスラは目を見開いた。

眠りの病の霧を貫き払った、男根のもたらす快樂に身悶えし絶叫を

上げながら。

「は、はははは……起きた、ほんとに、起きた……ミスラさんが、目を覚ました……ハハハ、うっ」

気が付くとミスラはあの城の、眠り続けるだろうミスラのために用意された部屋にいた。

その部屋の中央に置かれたベッドの上で、彼に覆いかぶさられて膾内に硬い肉棒の感触がある。それに、何度も中に出されている感じもする。

「泣いて、いるの……？」

自分の胸に顔を埋めて、彼が泣いている。その頭に手をやってそつと撫でると、ぐずぐずとさせながら彼が顔を上げた。

「すいません、嬉しくて」

「これは、夢……ではない、のよね？」

「ええ、はい、はい……！ ミスラさん起きたんですよ、眠り病から、戻ってこれたんです」

眠りから覚めたら、何か怖いことがあるような気がしていた。そんな覚えがある。それは何だっただろう？

夢の中の恐怖は臙げで、砂浜に書いた文字のように記憶から消えていく。

「本当に……待っていて、くれたの？」

「待つってほど経ってないですよ」

聞いてみると、本当に短い期間だったらしい。悪魔の寿命から考えると、だけれど。

それでも、目覚めたときに彼が居てくれたことがたまらなく嬉しかった。

「ねえ、あなた……私ね、もう……」

あなたのためなら――。

「死んでもいいわ」

心が壊れてしまったのだと思う。私はあなたのものよ、だなんて。

「え……ああ、ミスラさん……日本のこと勉強してましたね。そういえば」

「ええ、あなたが前世を過ごした国ですもの。少しは知っておかないと」

後日、『眠り病』の治療例の第一号として、その治療方法と共に学会に発表したいと医者に言われ、ミスラは全力で断ることになった。

治療方法はともかくとして、その相手が誰だったかなんてことを公式な文章に載せられて、挙句報道までされてしまった日には、たまったものではない。

「……恥ずかしいわ」

「眷属、なつてくれないんですか」

「そんなに落ち込まないで……、でも、若い子たちに混ざってレーティングゲームだなんて……ね」

「うーん、残念だなあ」

「他の事なら、手伝うから……あと、その私は何番目でも、いいえ、一番後ろでいいから。あなたが新しい娘を連れてきたら……その娘を優先してあげて」

目が覚めても、彼は待っていてくれたけれど、女の数は増えていた。婚約者の娘と、墮天使と人間のハーフの娘くらいしかいなかったはずなのに——ほんの少しの間に増えているなんて。

でも、仕方がないのかしら。

「ミスラさん……自分は最後でいいなんて……そういうの、俺……俺……」

何故かその言葉に興奮した彼にミスラは押し倒されてしまった。

2—16 猫をかう

ミスラさんが覚めない眠りについてしまつて寂しくなつたので、先行して白い毛並みの猫を飼つてみることにした。

くりつと大きな瞳が愛らしい成長途中の子猫だ。大きな獅子の代わりにはならないが、猫科ではある。

俺には猫に服を着せる趣味はないので、もちろん生まれたままの姿で過ごしてもらう。尻の穴から何から丸見えだが、猫なら当然だな。

移動はもちろん四つ足でやつてもらう。絨毯の上を這いずり回つて生きるがいい。

お尻をフリフリして歩く姿はなんとも可愛らしいものだ。

俺の所有物、ペット、愛玩動物であることを示すため首輪をはめるのは欠かせない。

最初は嫌がつて暴れて抵抗していたが、無理矢理つけてしまつた。着けてからしばらくは首回りが気になるのか、しきりに引つ掻いて外そうとしていたようだが、やがて諦めたのか今ではすっかりなじんだものだ。

リードは付けない。猫を繋いで飼うのは俺の趣味ではないので、城の中や庭などを人目を気にしながらとこと移動しているらしい。

まあ、使い魔契約も強引に結んでおいたので用がある時は呼びつけるだけのこと。逃げられはしない。

食事は床の上に丸い皿を置いてやる。猫と言えばこれだよな。

これまた最初は警戒して口を付かなかつたのだが、空腹には勝てない。やがて舌を伸ばして舐め始め、どろりとしたエサをガツガツと貪るようになつた。

ふふん、冥界でも最高級ブランドな猫餌の味はどうだ？ 美味いか？

もう病みつきだな。もう他のエサでは満足できない身体になつてしまつたに違いあるまい。

排泄は部屋の隅に用意した砂箱の上でさせる。覚え込ませるのにやや手間がかかったが、今ではそこで大きいのも小さいのもするよう

になった。横たわる大きいのを他人に見られるのはさすがに恥ずかしいのか、上から砂をかけて隠そうとするがそんなことは無駄無駄。猫知恵の浅はかなことよ。きちんとメイドたちが処理していく。

とはいえ、さすがに俺がジツと見ている前では出るものも出ないのか、悲しそうな鳴き声をあげて余所を向いて欲しいと訴えかけてくるので、そこだけは聞いてやることにした。

犬ではあるまいし、飼い主に飛びつきながら小便を漏らすようになってからも困るしな。

もちろん風呂には入れる。汚いのはよろしくないからな。熱いしぶきをぶっかけると、目を閉じて逃げ出そうとするが所詮は猫の力、この俺に首根っこを押さえつけられてはどうにもなるまい。

さんざん肢体を弄んだあとには、恐怖の熱風の時間だ。怖がる身体を熱く熱くして、渴きを思い知らせてやる。

ペットを飼うならスキンシップも重要な要素だ。こうした時間を通して上下関係を肉体に叩き込んでやるわけだな。

捕まえてあちらこちらをいじっていると、だんだんとコイツが何処をどうされるのが好きなのかが分かってくる。

こいつは特に尻尾の付け根がお好みらしい。そこをトントントンと軽く刺激してやると、だんだんと尻が持ち上がっていき、気持ちよさそうにうっとりとした顔つきになる。

もちろん他の場所だって触りまくりだ。とくに耳や尻尾は触れずにはいられない。そうやっている、そのうちあごの下を少し撫でただけで甘えた声を出し続けるようになった。

頭から尻尾までをそうと流すように何度も何度も繰り返し撫で、前足や後ろ足もみほぐすようにしてやる。首輪の下や、小さな両方なので肩のマッサージしてやる。指の一つ一つ、そしてその間もみもみとして感触を愉しむ。

やがて、白猫は俺が近くに立って見下ろすだけで、コロんと転がって両足を広げて腹も胸も顕わに身をくねらせるようになった。もはや俺の撫でテクに陥落という風情だな。

その証拠に、今も俺の脛にピンと尻尾を立てたお尻をこすりつけて

きている。

まったく、いやらしい雌猫だ。可愛がつてやるとしよう。

と、俺の部屋のドアが開いた。

「リアスさま、そろそろライザーお兄さまが……またその猫を可愛がつているのですか」

レイヴェルはすぐに拗ねる。そこが可愛いのだが。

最近使い魔にした猫の「シロ」を手放し、自分の膝の上をぽんぽんと叩くとレイヴェルがその上に座ってくる。

シロはテテテと広い部屋の隅の方に退散していった。フェニックス家の方々はあまり猫が好きではないと聞く、不死鳥の一族で鳥系統だからだろうか。

「義兄上がいらっしゃったのか」

「いえ、そろそろ時間ですので、呼びに來ただけです。まだまだ余裕はありますわ」

膝上に乗せたレイヴェルをいつものように抱きしめる。これが落ち着くのだな。ノーマルポジションって感じた。

「エダーギ殿は午後からだったな」

「はい、その前にお兄さまと軽く打ち合わせですわ」

本日はいよいよ待ちに待った黒猫購入会の当日である。体裁だけではあるが、レーティングゲームの形式をとってエダーギ・ナベリウス殿の連れてくる眷属たちの能力も見なければならぬ。

目玉は黒歌という猫又の『僧侶』なのだが、他にもあちらの眷属がいる以上、無視つてわけにもいかないのだ。そこは向こうの眷属たちも分かつてはいるのだろうか。

で、現在俺の眷属は『王』である俺と、『女王』のレイヴェル、『戦車』の朱乃しかいないので、足りない分はライザー義兄上からレンタルする手はずになっている。義兄上が早めに我が家にやって来るのは、そのためだ。

試合自体は、魔方陣で跳んだ先の会場に作った異空間内ゲームフィールドで行うのだが。

「朱乃の様子はどうかだった？」

「張り切っていましたわ。でも、あの子はどうして魔力で火の鳥を作るのに熱心なのでしょうか」

「まあ、母親の実家関連だな。あそこは確か霊獣の朱雀だったかの力を借りていたはずだから」

朱乃の母親の実家である姫島家は『火』を司る退魔士の一族だったはずだ。その血を引く朱乃が、魔力を用いて『火』を扱いたがったのは何かしらの思い入れがあるからだろう。

普段のトレーニングメニューは父親譲りの『雷光』だけでいいと伝えてあるので、まあ魔力に関しては好きにしたら良い。俺が教えてやるって言ったのに、レイヴェルに習いだしたのは……やりまくったことで許してやろう。

炎と風と不死身のフェニックス家のレイヴェルなら『火』の魔力の扱いはお手の物だしな。そこから二人の仲がより良好になってきているようなので文句はない。

しかし、火の鳥、鳳凰と呼ばれてはいてもフェニックスは悪魔。見た目だけは似ていてもそのオーラの質はまったく異なるので、悪魔となった朱乃がフェニックスから学んだ『火』を振るうというのは、姫島家の者からしたら憤慨ものだろうな。

もう一切の関係がないことになっているので知らんが。精々どこかで見知って歯ぎしりするがいい。俺、姫島家嫌いだしな。朱乃を追い回して殺そうとしやがって、日本の神話勢力を刺激するから手を出せんが……その分は聖書神話内の墮天使にぶつけてやるとしよう。

まあ、姫島の立場は理解するが。バラキエルの節操無しが問題の根本なわけだから……とはいえあのクソネグレクト墮天使がやらかしていなかったら朱乃は生まれていなくて、俺と出会うこともなかったわけだから、なんとも複雑である。

子供作ったら独り立ちできるまでは育てろよなって話だ。途中で放り出しやがって！ 悪にして魔たる純血の悪魔でもそうそうそんなことせんぞ。叔父上みたいに評判悪くなるしな。

そういえばメイドのひとりが妊娠して去っていったのだった。下

半身が蛇の娘、結構気に入ってただけど契約通りになるそう。あのぎちぎちに巻き付いて絞めてくるラミアロールックスはなかなか良かったんだがなあ。

魔王レヴィアタンは海蛇のような姿に変じることが出来たらしいが、仮にセラフオールさんを口説いたとしても今のレヴィアタンさまは、名前はレヴィアタンでもシトリの娘だから出来ないだろうし……うーむ。

「まあ、また機会があればいいか」

「なんの機会なのか教えてくださいませ」

無意識に弄り回していたレイヴェルが、ちよつと不機嫌な声を上げる。悪魔ってオーラの方向性と言うかでどこの誰に感情を向けているとかがなんとなくわかるので、レイヴェルを抱きながら他所の女のことを考えているとバレるんだよな。

そりや不機嫌になるわ。当たり前だ。俺だって、他の男の名前を呼ぶ女を抱いたら……あれ？ 興奮しそうな気がするな。

「いや、メイドが一人いなくなつたからな」

「ああ、あの蛇の……」

とりあえずこのことはおめでたいこととして扱われている。何故って人間の魂やらドラゴン因子やらが混じっている俺でもキチンと悪魔を妊娠させられたということだからな。あの蛇メイドは転生悪魔と下級悪魔のハーフだった気がするが……まあ、めでたい話だ。まずまず大丈夫だろうと言われていたが、実例があるとより安心できる。

「ここも早く大きくしてやりたいな」

「もう……そんなことで、誤魔化されませんわ」

レイヴェルの下腹部にツーンと指を這わせながらそう言うと、彼女は上気した頬をさらに赤く染めた。

うむ、これでご機嫌が直るのか、チョロくて良し。向こうが分かるように、こつちだって魔力の波動で機嫌がなんとなくわかるのだ。しよつちゆう身体を重ねていればそうなる。

「さて、義兄上を出迎えに行くとするか」

「ほー。」

なんとなく一発したくなる気分だったが、「あんたの妹とパコパコしてて、お迎えに出られませんでした」なんてことをライザー義兄上に言えるわけがないので、頑張つて抑え込むとしよう。



で、品評会というか試合となったのだが、

「レイヴェルがやられた……だと！」

隣の席でライザー義兄上が驚いているが、俺は『女王』レイヴェルを倒した対戦相手の『僧侶』黒歌に感心していた。

なるほど、不死身のフェニックスをそう下すか。

フェニックスの一族は強力だ。炎と風と命を司る御家だからな。攻撃力のイメージが強い炎、素早さの風、そして代名詞にもなっている不死身の生命力からくる耐久性。おおよそまともな戦闘に必要な素養を血筋の特性として生まれながらに備えている。

そこに『女王』の駒を挿入したのだから、レイヴェルもまだ幼いとはいえ弱くはない。そこらの下級悪魔どもが群れた野盗程度ならばまとめて焼き払えるだけの力を持っている。

まあ、学校もあるし、将来的にグレモリー家に入るための勉強もあるし、ラクダの世話させたりしているしで、訓練など俺と一緒に走る程度しかしていないのだが、それが一般的な貴族悪魔ってものだ。

生まれ持ったセンスと経験、あとは成熟するにつれて勝手に増大していく魔力で戦うのが基本である。あとは俺の嫁さんになる女なので、グレモリー家秘伝（ということになった）俺式魔力増大トレーニングも一緒にやったりしてはいるが。

それでも、地獄の業火とも称される炎の攻撃力は強化され、風を操り飛翔する速度もアップ。防御力の上昇は不死身の耐久性とも相性が良く、魔力の増大はそれらすべてを支える土台を押し上げている。

レイヴェルが長ずれば『駒なし』のライザー義兄上よりも上を行くだろうことは確実。

とはいつても、なるほど、動けなくされてはあとはどうとでも料理されてしまうか。

『僧侶』の黒歌は妖術・仙術・魔力を練り上げて毒などを生み出す術に長けておりましてな」

本来の試合であれば、対戦相手の『王』であるエダーギ・ナベリウス殿と席を並べてなんてことはありえない。だが、今回の試合は商品説明会でもある。

なので解説役のエダーギ殿は俺の隣、義兄上とは反対側の席に座つて説明してくれているワケだ。商品の説明をしてもらわないとだからな。

「とすると、あれは麻痺毒といった感じですか？」

「ええ、そうでしょうな。悪魔によく効くように調整した、身体の動きを封じる術といったところですか」

研究者にありがちな長々とした説明ではなく、サクツとした答えを返してくれるエダーギ殿。これが眷属ブリーダーということか。

フィールド内の地面に突っ伏したレイヴェルは、ピクピクと指を動かす程度しか出来ない様子で悔し気に黒歌を睨んでいる。

これはまあ、相手にここから拷問プレイなどされたらレイヴェルの精神が折れて試合終了になるだろうな。

「義兄上、これはレイヴェルの負けで良いですよ？ 俺はレーティングゲームの試合をしたことがないので、ここから長々と痛めつけられるのを見たいとは思いませんし」

「仕方ないな……。レイヴェルはまだ未熟だから、復活するたびにスタミナを奪われてしまうだろうから、毒が消えるまで耐えるなんてことは無理だろう」

それに効果が切れる前に毒を追加されたら、そこからまた延々と繰り返されることになるだろうし。

こちらの考えが分かっているのだろう。買い主になるだろう俺の嫁さんを痛めつけて心証を悪くするつもりもないのか、黒歌はこちらの判断待ちをしてくれている様子。

「というか、フェニックスの不死身の特性は体力を消耗するのではな

かったのですか？」

俺はレイヴェルからそう聞いた覚えがあるが、

「いや、俺のように成熟したフェニックスならば魔力を少しばかり使うだけだ。心を折られるか、一撃で完全に消し飛ばされるかでもなければやられん」

なるほど、レイヴェルが未熟だから肉体的な疲労も発生してしまうわけか。俺はてつきり義兄上たちはとんでもないスタミナモンスターなのかと思っていたぞ。夜のベッド戦で鍛え上げまくったのかと。

とりあえず、レイヴェルをリタイヤさせて回収することにした。ついでに黒歌に術を解除してもらおう。実際の試合ならこんなこと出来んな。

麻痺や封印、強制的な睡眠でレイヴェルがやられることも考慮しておくべきか。なかなか難しい……ああ、いや、その黒歌を俺のところに入れてくるのだからそっちの対策は出来るようになるのか。

「毒の術を使うということは、それらへの対抗方法も会得しているのですか？」

「無論ですな。術を返すなどという手合いもいますから、そういったことには気を付けさせております」

ほー、優秀。やっぱ眷属鍛えて売り物にしてる方は違うわ。

「うーん、あの『僧侶』、俺が欲しいくらいなんだが……」

チラチラとこちらに視線をよこす義兄上に首を振っておく。あの『僧侶』は俺のものだ。

ここで下手に取り合うと、エダーギ殿に値を吊り上げられそうで怖い。

「ううう……悔しいですわ」

戻って来たレイヴェルをひよいと抱え上げて慰める。公衆の面前だとマズイかもしれないが、別に放映しているでも観客がいるでもないから、構わないだろう。エダーギ殿にはちよいと失礼かもしれないが。

その後は義兄上の眷属残りど、エダーギ殿の眷属の残りをぶつけて

いったのだが……うん。あっちの方が強いな、完全に。

「義兄上の眷属、弱くはないはずなんですが」

「ぐうう……俺の眷属がこうも容易く」

エダーギ殿のところの眷属、売り物にするだけあって強いわ……黒歌ほどではないにしろ全体的にレベルが高い。

義兄上が悔しそうな顔をしているが、その表情は兄妹だけあってレイヴェルと結構似ている。

「エダーギ殿、教えて構わない範囲で良いのですがどのような練習をさせているのですか？」

「ああ、そうですね——」

どんな鍛錬を積ませているのか気になったので聞いてみると、

「うわ……キツいな」

「おー……それだけやればこうもなるのか……。俺には真似できん」

俺もライザー義兄上もハーレムメンバーを兼ねているからな眷属が……エダーギ殿の語るような厳しいトレーニングは課せんわ。抱く相手でもあるのだから、つつい甘くなってしまうのは仕方のないことだ。

いや、さすがに眷属を商品にする方は違うな……強く仕上げで売りに出すことしか考えていない。

「ハハ、あれですよ。私が厳しくすればするほど、出荷した先での扱いが相対的にマシに思えるということでもありますな」

ああ、なるほど。

転生悪魔の扱いが悪くて逃げ出され、『はぐれ』になるなんて話はよく聞くものだ。だが、トレード前の方がより厳しかったのならば、まあ、次の主が良く見えるってこともあるか。

どうせ鍛え上げた後は他所に売り飛ばす下僕悪魔だ。売れるまでの間に逃げられては困るが、だからといって必要以上に好かれる意味もないか。

「強くなればより良い条件で上級悪魔に引き取られることも多くなります。そう言っておけば意外と厳しく鍛えてやっても耐えるものですよ」

希望をエサに強く鍛え上げて、より高く売りつける。うーん、合理的。

実に悪魔悪魔しておられる。素晴らしいな。

「さて、次はどうしましょうか。リヴラクス殿のお目当ては黒歌のみのようすし……」

と、エダーギ殿は自身の眷属を眺めまわした。

ああ、まあ、俺に引き取られる可能性のあるのが黒歌のみでは他の眷属のやる気が出ないか。あとはゴツイ男や、知恵のある魔獣のようなのばかりだしな。

「そうですね。俺は眷属を女で固めようと思っただけなんですけど……知り合いにエダーギ殿の眷属のことを話しておきますよ」

「ほうほう、そのお知り合いのお名前を教えてくださいだいても?」

分かってくれたか、といった目付きで聞き返してくるエダーギ殿。

「ミリキヤスに、マグダラン・バル、ソーナ・シトリー、シーグヴァイラ・アガレス、ラティア・アスタロトくらいですかね。ああ、あとはタンニン殿の息子さんくらいですが」

俺の交友関係って狭いからそういくつも名前は出てこない。

ディオドラは守備範囲が狭いから、エダーギ殿の眷属では無理だろう。既に結構な数が揃ってたはずだし。

「ハハハッ! いや、素晴らしいお名前の数々ですな」

エダーギ殿の後ろにいる彼の眷属連中の目の色が変わっている。ものすごいヤル気だ。

「おい、リアス! 対戦相手の士気を上げてどうするんだ!」

「いや、これは正式な試合でもないですし。どうせ見るなら、本気を出してもらった方がいいでしょう」

「だからと言ってなあ!」

ほぼほぼ義兄上の眷属たちが相手をするようになるのだから、怒られるのも仕方がない、のか?

「ああ、ライザー殿にも、のちのち良い娘が入ったら紹介いたしますが」

「お、本当ですか? では、次の『僧侶』は是非美少女でお頼みしたい

！」

「承りました」

「よっし、よーっし！」

嬉しそうだな、義兄上……。思わずガッツポーズしているくらいに。

「ライザーお兄さまの、おバカ……」

というわけで、商品説明試合は激しく続行され、また黒歌の出番が回って来た。

「リヴラクス殿の側はどうされますかな？ 駒価値『6』まででお願いしたいのですが」

「エダーギ殿、今度は行動不能などを狙わずに撃ち合っていたのですが……構いませんか？」

「構いませんよ。おい、黒歌！」

黒和服の猫耳美女は、それになんてことのないように答えた。

「わかったにゃん♪ それで、グレモリーの王子さま、私の相手は誰になるのでしょうか？」

その質問に、俺は後ろに控えていた黒髪ポニテはいから娘メイドな朱乃へと目を向けた。

「次は朱乃だ」

「お任せください、ご主人さま」

さて、墮天使と悪魔の翼を広げてやる気満々な朱乃だが、現状どれぐらいになっているのか。

俺が相手をしていてもよく分からないからな。だいたい消滅魔力と基礎スペックの差で押し潰せてしまうから、上級悪魔クラスも下級悪魔クラスもさして差を感じないから困る。

袴ブーツ墮天使メイド美少女 対 猫耳和服美女

うーん、絵になる。

レーティングゲームのフィールド内、朱乃は相手チームの『僧侶』である黒歌と対峙していた。

朱乃の主であるリヴラクス・グレモリーから、黒歌はこの後眷属に迎え入れる予定の者であると聞かされているので特に敵意があるわけではない。

敵意はないが、嫉妬心がないとは言えない。主は女の嫉妬を好む。しかし、それが原因で女同士がいがみ合うことは嫌う。

なんとも難しい男だが、朱乃はそれが良いのだからどうしようもない。

『グレモリー側、朱乃選手。ナベリウス側、黒歌選手。試合開始！』
審判を務めるグレイフィア・ルキフグスの声がフィールドに響いた。

「ご用命通りに手加減してあげるから、かかってきなさいな」

レイヴェルを仕留めた黒歌の術、それに対抗する術を朱乃は有していない。

だからこれは、公平な試合ではない。相手側はそれを封じられているのだから。

「ええ、わかっていますわ」

くいくいと猫の手招きをして見せる黒歌に向かって、四対八枚の墮天使の翼と一对の悪魔の翼を広げ、朱乃は突進した。

『戦車』に迷いは必要ない。躊躇いも邪魔になる。『王』の槍となって突き進み、盾となって立ちふさがる。それが『戦車』の駒だと朱乃は思っている。

信じてもらえさえすれば、その他のことはどうでもいい。放浪の頃に抱いていたわだかまりも何もかも、『王』のためならば捨ててしまえる。

「にやはは、そんな真つすくな……ってわけでもないのね！」

駒の特性で強化された脚力で大地を蹴って推進力に変え、合わせて十の翼から光と魔の力を後方へと放ってさらに加速する。

『戦車』の突進速度は『騎士』のそれに劣るものではない。『騎士』のように小回りは効かないが、ただ真つすぐに突き進むだけならば！

目標との距離が急激に縮む最中、朱乃は腰の刀を抜き放った。主の兄であるサーゼクス・ルシファーより賜った妖刀秘剣である。

「妖鬼解放——八鬼憑依」

「オニ」「オニニ」「怨」「隠」「忍」「キー」「キツキ」「忌」

右手の刀を黒歌に投げつけながら、左手を素早く動かし印を切る。

投げられた刀は空中で分裂し、二本、四本、八本と数を増やし、それに朱乃の内より湧き出でた小鬼たちが吸い込まれていく。

朱乃は母より受け継いだ鬼に好まれる才を活かすため、妖を使役する術をサーゼクスの『騎士』沖田総司より学んでいる。

それは、己の身の内に妖怪を巣くわせる外法の技。とはいえ、まだ師のように『一人百鬼夜行』とはいかず、今は小鬼を八匹従えるだけの『八鬼夜行』でしかないが。

だがその程度でも、別の縁よりもたらされた法具操作の技術と合わせれば使いようはある。

八刀がそれぞれが独自の軌跡を描いて黒歌を囲うように飛び、八方よりその切っ先を中央の獲物目掛けて襲い掛かる。同時に、朱乃もまた雷光の槍を手にして黒歌へと突き込んだ！

「光力、魔力に、憑りつかせた鬼の妖力、それから退魔士どもの術のミックスなんて、面白いじゃない」

鬼の宿った刀と光の槍で全身を滅多刺しにされ、血しぶきを噴きながら黒歌は余裕の笑みを浮かべて見せる。

「鬼さんこつちら♪」

後ろからの声に朱乃は咄嗟に振り向くと、背後に雷光の散弾をバラまいた。微塵に吹き飛ぶ背後の黒歌。

「残念、そこに私はいないにゃん♪ 当たったら怖そうだけどね」

滅多刺しにされた正面の黒歌が霞となって消え去り、散弾を浴びた黒歌も同様に姿を揺らめかせた。

気づけば朱乃の周囲に数十にもなる黒歌の姿がある。分身か、幻術か。

「さて、本物の私はどれかなのか。あんたにわかるかしら？」

そう一斉に口にする黒歌たちの手には、黒々とした力の塊。

「妖術、仙術、魔力ミックスでお礼したげる」

数十の黒歌が放つ数十の力塊。迫るそれらを朱乃は、光槍を振るい、雷光を纏った刃と化した翼を羽ばたかせ、あるいは使役鬼を宿した刀によって叩き落とす。

力塊のどれもが威力を持ち、撃ち落とせずには当たった箇所には激しい痛みを与えてくる。

『戦車』の防御力、主の振るう鞭に合わせることで練習した魔力と光力による防御法で朱乃はそれらを耐えると、攻撃の間隙に一転して手にした雷光槍を何も無い虚空へと投げつけた。

投げ放たれた雷光の槍は飛翔の途中で千の鏃へと変じ、広い範囲を突き進む。

「にやはは、よくわかったわね」

すると、何もなかったはずの空に数十の鏃が突き刺さった。声と共に、鏃を受け止める防御の方陣が現れ、その後ろには黒歌の姿。

すかさずそこに力を集中した槍を投げつけるが、槍に穿たれた黒歌はふわりと霞となって消えてしまった。

「鬼さん、鬼さん、手の鳴る方へ♪」

数十の黒歌がパンパンと手を叩いて見せる。

朱乃には黒歌の軽口に答えを返す余裕はない。感知した方向へと八つの刀を差し向けるのみ。

黒歌と朱乃と、現状どちらに分があるのか——その答えは明白だった。

「あら？ どうやって……ああ、そういうこと。意外に人間みたいな小賢しい真似もするのね」

視覚と聴覚を惑わしているはずなのに、ほぼほぼピタリとこちらの居場所を当ててくる。ピリッと尻尾の毛を逆立てた微弱な電流に、黒歌は朱乃の視覚に頼らない感知方法の正体を悟った。

五感を騙す幻術は会得していたが、なるほど雷を操る能力をそう使うのか。

今の対戦相手は人間と《雷光》の墮天使のハーフからの転生悪魔だと黒歌は聞いていた。

使えるものは何でも使う、応用できそうならば試してみる。強大な墮天使の血を受けついだ手合いならば、それに頼りっきりの力押しだけで来るのかと思いきや意外とこういったこともするらしい。

「そういうの嫌いじゃないわよ……でも」

正面から攻撃や防御の威力を競う。そういったことは黒歌の得意とするところではないし、あまり好みでもない。

小技、絡め手、嵌め殺し。それが黒歌の領分だ。

だから、こういったことに理解がありそうな者が同僚予定というのは、まあ悪い話ではない。

「くわばらくわばら、とおりゃんせってね」

ぬるりと雷が黒歌を避けていく。上手くやっていければいいのにねと思いつつ、黒歌は朱乃で遊び始めるのだった。

後々の自身の立ち位置を考えると最初が肝心。

プライド高そうな小鳥ちゃんには思い知らせてあげたしね。

上に立ってあれこれ指図するのは面倒だが、立場やらなにやらで小馬鹿にされては腹が立つ。

となれば、異形の世界で上を取るには『強さ』を示すのが一番手っ取り早い。

もつとも、相手によってはそれで余計にこじれることもあるのだけれど……フェニックスの娘もこの墮天使の娘もそういったタイプには見えないのだから、これで良い。

眷属内での上役の指示には従おう、でも一定の配慮は欲しい。悪魔の眷属という群れの中で自分が過ごしやすそうな立場、丁度いいポジションの確保。それが転生悪魔になってそこそこの月日を過ごした黒歌が今求めるところだった。

朱乃が完全に遊ばれている。

黒歌は「かごめかごめ」なんて歌いながら、朱乃の周囲を分身で取り囲んでぐるぐる回りながら攻撃し始めているし……あの古い童謡の一節は、一種の呪文なのかもしれないな。人間たちが江戸時代以前から歌い継いできたものだ、そこには何かしらの呪力が宿るのだろう。

朱乃のダメージが嵩んできた。

まあ、こんなものだろう。朱乃には長いこと光力の出力をあげる訓練だけさせて来たから、悪魔の弱点である光ということもあって当たられば勝てるのだろうか——いかんせん技術力が違う。

レーティングゲーム選手のタイプ分類に、テクニクタイプとかパワータイプとかあるが、今の朱乃はパワーで黒歌はテクニクになるのだろうか。高めた技は力を翻弄できるなんて言われているが、この試合がその典型か。

まさに当たらなければどうということはない、状態だ。

朱乃も朱乃でその辺りは理解しているのか、いろいろ試しているようだ。だが所詮は付け焼刃。まだまだ対戦相手の黒歌に届くレベルにはない。

とはいえ、俺も朱乃のことを言えたものではないが。というか、朱乃がいろいろ頑張っている時間に、腰振ってるしな……。

まあ、よし。俺のために強くなろうとしてくれているのだ。それだけでオツケーではないか。短期間に成果を求めるものではないしな。寿命は長いのだから、じっくりゆっくり、ぬぶぬぶとやっていけばいい。今日の所はレイヴェルと朱乃がへこんでいそうな気がするから慰めつつクスしないとだな。うん。

しかし、朱乃のあの分裂する刀を飛ばして操作する術。あれは小鬼を使っただけでいるが、朱乃の親戚を名乗る男から贈られた資料を基にしたものか。

日本に縄張りを持っている悪魔と契約して、俺のところとか朱乃宛に『五大宗家の術』について記した書を送りつけて来た姫島唐棣はねず

とかいう人。

なんでも日本の退魔関係で幅を利かせている五つの家から、その家が求める能力を持つて生まれなかつたばかりに追われた連中のまとめ役をしているそうだが……。悪魔に退魔の術の秘伝を流してやろうだなんてよほど自分たちを追い出した家を恨んでいるんだろうな。

ま、俺としては貴重な資料が手元に転がり込んできたワケだからありがたいかぎりなのだが。

それにしても、胸糞悪い話だ。ミスラさんとサイラオーグが叔父上から「欠陥品」扱いされて冷遇されまくつた件と重なってくる。姫島家は『火』を扱えない者を「家に相応しくない」とか言つて追い出すそうだし、ほんとにな。そりゃ見返したくもなるし、嫌がらせもしたくもなるだろう。

朱乃がそう得意でもない「火」をレイヴェルから習いたがつたのも、小さい頃に従姉だったかからそれを求められたことが根っこにあるようだしな。

先祖伝来で家業の大元になる「力」を持たない者に家を継がせないのは、まあ理解できる。俺だつて、自分の子供に跡を継がせるときは、グレモリーの特性を受け継いだ子に任せたいと思う。

でも、だからって追い出すまでしなくとも良いだろうに。まったく、その唐棣とかいうオッサンには同情してしまうよ。サイラオーグと朱乃の境遇にダブるからかね。

「雷を鳥の形にして飛ばすのか……。これは初めて見たな。レイヴェルもああいうの出来るのか？」

あの『五大宗家の資料』はちよつと前に手元に来たばかりなのに、もうある程度応用できていると考えると、俺の朱乃つて天才なのかもしれん。いや、すごいな。前言撤回、生まれ持ったパワーとそれをひたすら積み上げることだけに取り組んでいる俺とは違うわ。俺の魔力技術なんて、ほとんど師匠である祖父さんから教わつたものと、エロいこと用に磨いたものだけだしな。

俺では、書物を読み込んでそこから独自の技にするとか出来んぞ。「火と風で鳥を編んで、命を吹き込むようなイメージをすれば出来そ

うな気はしますわ」

あ、出来るんだ。そうか、俺が不器用なだけか。サーゼクスの兄上も、滅びの魔力をちっこい球にして、多数の球を同時にギュンギュン動かすしなあ。

「俺、ああいう芸当は苦手なんだよな。薙ぎ払った方が早い、と思ってしまう」

「ですが、リアスさまはかなり短期間で龍への変化を覚えられましたわ」

「あれは、神器に潜ると見えるドライグって手本がすぐ近くにあるからイメージしやすいだけだ」

消滅魔力で片が付くのであまり使わないが、俺も火の魔力が結構得意だったりする。

フェニックスのレイヴェルももちろん「火」が得意。

で、今回確保予定の黒歌も妖怪としての種族を軽く調べてみると別名「火車」とか呼ばれているとかどうとからしいのでやはり「火」にまつわるものなのだろう。嘘かほんとか分からんが、遊郭の花車って役職もこの「火車」が由来ってことらしいから、黒歌のあの着崩した婀娜あだっぽい着物もそこから来ているのだろうか。

うーんむ、黒歌が分身していることもあって、たくさんのおっぱいがブルンブルンと跳ね回っていやがる。

と、揺れる胸の話ではないな。朱乃も母親の家系的には「火」に親いはずなのにイマイチ苦手だから気にしているのかな？ 別に属性を揃えているわけではないのだが。

というか、属性、特性は異なる種類がたくさんあった方がいい。俺の禁手的には。雷と光で十分なんだがなあ。

「ライザーお兄さまは、自分自身が大きな火の鳥となって突進する技を好まれますよね？」

「まあな」

「ああ、それは俺も見たことがある。『火の鳥、鳳凰、不死鳥フェニックスと称えられし我が一族の業火、その身に受けて燃え尽きろ！』って唱える義兄上の必殺技でしたか」

と、抱えたレイヴェルとの会話の途中で義兄上を見ると、ちよつと照れていた。

あ、恥ずかしがるとかそういう感じじゃないんだ。普通に「オレ、カツケー」って感じなんですねアレ。

「ああ、負けたか……」

「仕方ありませんわ。黒歌さんはお強いですが。手加減されていたとしても、まだ訓練を始めたばかりの朱乃では厳しいでしょう」

レイヴェルには朱乃は呼び捨てで、黒歌は「さん」付けか。やっぱり「武力≒権力」なんだなこの社会。生粋の貴族悪魔っ娘であるレイヴェルがそういう反応だと安心する。

いや、俺の影響かもしれないが。

「ごめんなさい」

戦闘フィールドから戻って来た朱乃はボロボロだったので、禁手を使ってレイヴェルの「不死身」を譲り受け、「倍加」の後に朱乃へと「譲渡」。これでいつもの綺麗な朱乃だ。フェニックスの「不死身」特性の何がいいって、そこらの回復系神器程度とは違って部位の欠損すら瞬時に癒してくれるところにある。

悪魔でも治療できる神器はいくつか種類があるらしいが、失った腕や足などを取り戻せるほどの代物はそうそうないらしい。が、そこは頭部が吹き飛んでも再生可能なフェニックスの特性。たとえ手足が千切れようともまったく問題ないって寸法よ。ホント、レイヴェルがうちに来てくれて良かった。

「よくやったな、朱乃。俺の見ていないところでも随分励んでいたようだ」

落ち込んだ様子で謝ってくる朱乃の頭を撫で、口づけた後で褒めてやる。実際、相当なものだ。

俺ならあんな短期間でここまで成長は出来ないと思う。戦闘だけではなく、同時にメイドのたしなみやら、悪魔社会のアレコレやら、シーグヴァイラとのロボ談議やらもあったのだからなおさらだ。

「んっ……ああっ」

褒めたら物凄く嬉しそうな笑顔になったので、いじわるで耳元でボ

ソツと「あとでオシオキだ」と言つてやったら余計にさらに嬉しそうな顔になった。

うん、うん、朱乃はこれでいいのだ。

俺は褒めて伸ばすタイプの『王』さまになろう。お仕置きはベッドでヤル感じで。

と、エダーギ殿がニタニタと笑みを浮かべながら近くにやって来た。

「そのお姿、もしやそれが『赤龍帝の籠手』の禁手ですか？」

「ええ、俺の禁手は亜種のようなのですが」

「なるほど……そちらの御眷属の怪我が回復する様子、フェニックス家の特性のように見えました」

俺はこの禁手の能力について秘匿するつもりは、特にない。どちらにせよ数年もすればレーティングゲームで披露することになるのだ。

俺の目指す勝利の形は「圧勝」、ぐうの音もでない敗北を対戦相手に刻み込む勝利。ソーナは戦術やらなにやらでくなどと言っていたが、圧倒的なパワーをもって対戦相手に「ああすればよかった、あの場面でこうしていれば勝てたのに」などと言った後悔すら抱かせず「負けても仕方がない」「勝つのは無理」と思わせるような勝ち方が理想だ。

それになにより、眷属を俺の好みの女で固める以上、傷つくところを見たくはないしな。

「ええ、そうですよ。レイヴェルに不死身の特性を『譲渡』してもらい、それを『倍加』して朱乃へと『譲渡』したのです」

「他者から魔力の特性を譲り受け、さらに別の者にも譲り渡すことができる……と」

「はい、そうです」

「ははは、これはまた素晴らしい能力だ。グレモリー家の将来は安泰ですな」

グレモリー家の将来は俺の禁手能力程度ではどうなるか分からないが、少なくとも俺の当主引退後の悪魔生設計は安泰だ。

なぜなら――

「よろしければ、エダーギ殿の眷属の怪我也治しましょうか？」

「なんと！ それは是非お願いしたい」

ふふん、俺の眷属にするのとは違って『駒』の繋がりを使えないから距離も場所も問わずにはいれないが、こうして目の前にいるのなら『赤龍帝の籠手』の『譲渡』は相手を問わない。

つまり、レイヴェルが『女王』でいる限り、俺は超高性能なヒーラーでもあるのだ。

「では、エダーギ殿の眷属たちよ。回復してやろう」

『Transfer!!』と何回か音声で鳴り響くと、そこにはすっかり怪我の癒えた彼らの姿が。まあ、黒歌は特に傷らしい傷もなかったようだが、サービスだな。たぶん、お肌ツヤツヤになるだろう。

「おい！ 俺の眷属にも頼む」

お安い御用ですよ義兄上。

「さあ、ライザー義兄上の眷属たちよ、お前たちも回復してやろう」

ふふふ、皆の感謝の声と表情が心地よい。

俺、当主引退したらレイヴェルと組んで医者になるんだ。たぶん、ハーレムメンバー含めて食うに困ることは無いだろう。やはり、ハーレムするには甲斐性がないとな。

2—18 黒歌のお仕事（1）

「さて、それではこちらはあと俺だけですし、全員まとめてお相手させてもらいましょうか」

義兄上から借りた眷属も、レイヴェルも朱乃もやられてしまった。あとこちらに残っている戦力は俺だけだ。

ならば、もういちいち少しずつ相手をするまでもない。残ったナベリウス眷属を倒して終わらせてしまおう。

目当ての黒歌の能力はある程度見させてもらったが、やられっぱなしで試合終了では『王』の威厳も薄れてしまう。『力』を示しておかないとな。

「おや、リヴラクス殿の評価は『12』相当とされておりませんが、こちらの残りの合計はそれよりも上ですがよろしいのですかな？」

この試合に当たって、グレイフィアの付けた俺の評価は『12』。これはただ単にダイスの合計がこれ以上ないからそうなっているだけだ。

うぬぼれでもなんでもなく、俺の戦力はナベリウス眷属全員を合わせたよりも大きいのだ。

「構いませんよ、バランスブレイクの必要もありませんし」

エダーギ殿にそう返すと、ややむっとした様子の彼の眷属たち。

これだよ。いちいちこういう顔をされるのが面倒なのだ。仮に今俺が言ったことを魔王である兄上が口にしたならば、こいつらもこんな表情はしないだろう。

「気に食わないなら、かかってこい。死なないように気を付けてな」

黒歌は技量で朱乃のパワーを翻弄して見せた。柔よく剛を制すつてヤツか。

だが、剛もまた柔を断つのだ。

圧倒的なパワーの前には半端な技など無意味。合気道を習った子供は人間の大人を投げ飛ばせるかもしれないが、大型の肉食恐竜を倒せるわけではない。

戦闘フィールドへと転移する魔方陣の上に立って挑発してやると、

エダーギ殿が頷く。

かくて試合は始まり、あっさりと終わるのだ。

『それでは最終試合、開始してください！』

戦闘開始の合図とともに、両手でバスケットボールを抱えるような姿勢をとった。手と手の間に生まれる不思議な滅びのエネルギー。

紫と紅のスパークを発する漆黒の球体は、最初はピンポン玉ほどのサイズだったがすぐに膨張を開始。俺をすっぽりと覆う球状結界となった。

これでもう、敵からの攻撃のほとんどが通らない。滅びのオーラは攻防一体の特性。この魔力特性を繋いできたバアル家は、伊達で七十二柱序列一位の大王家やってきたわけではない。

物理的な強度にしる魔力や光力、妖力、聖なる力などにしろ、『滅び』に対して有利で有効な防御手段は非常に少ない。精緻な防御魔術も、磨き抜いた体術に捌きも意味はない。消滅魔力に触れたら消えてなくなるのだから。基本は回避一択だ。

防いで耐える方法としては、こちらの『滅び』よりも高い出力のオーラを放出して相殺するか、もしくは一点集中した刺突や斬撃などの形態の攻撃で崩すか、くらいだろう。

この『滅び』の特性は守りに使った場合も非常に効果的だ。なにせ実態のある剣やら矢、弾丸などは消滅魔力で形成した防御膜に触れるだけで消えてなくなる。魔力や魔法、オーラ攻撃などもこちらの出力以下ならば複雑な式など組まなくとも消し飛ばしてくれる。

兄上の真の姿が滅びのオーラの集合体であり、それが途轍もなく強力だというのも納得だな。

ま、俺の場合はグレモリーの魔力特性の割合も結構あるようなので、ちよつと工夫して俺が自分自身と認識しているもの以外を消し飛ばすようにイメージする必要があるのだが。着ている服は俺自身の一部なので消えてなくなったりはしないということだ。俺は将来の女性ファンに向けた、洋服消滅裸体披露サービスなぞしないのだ。

さて、悪魔らしく驕り高ぶり余裕ぶっている間にも滅びの球体は膨張を続け、ドクンドクンと脈動を繰り返しながら巨大化していく。

この間、相手からは様々な遠距離攻撃が飛来して来ていたが、一発も俺まで届いてはいない。当然だな、俺は魔力量・オーラの強大さがそのまま強さに直結する『滅び』の使い手にして、『力』の象徴たるドラゴンの中でも屈指の存在である赤龍帝を宿す者。

「このくらいいいか」

目算で直径100メートルほどの消滅魔力の球体を形成したところで、膨張を一旦止める。

『いや、まだ強すぎるな。これでは外縁に触れただけで死んでしまうぞ』

我が頼れる相棒ドライブの言うことには、ここまで広げて薄めてもまだまだこの滅びの魔力球は威力が高すぎるらしい。縁ふちに触れただけでナベリウス眷属のみなさんにとつて即死レベルってことだ。

俺の神器である『赤龍帝の籠手』には、標的の戦闘能力や耐久度を読み取り計測するという便利機能が発生している。俺以前の多くの赤龍帝たちの中には、この機能で敵を倒すのに必要な『倍加』の回数などを測っていた者が多かったそうさ。

ま、元が力の低い人間ならばそういった使い方になるのだろうか、俺のように素の力が高いと逆の使用方法になる。

つまり、どの程度手加減してやれば相手をギリギリ殺さずに済みそうか、といったことを知りたいのだ。

「それじゃあ、大雑把に倍に広げてみるか」

ぐぐんと魔力球が巨大化し今度は直径200メートルほどになった。

『まあ、そんなものか。このくらいの濃度ならば一瞬で消し飛ぶことは無い。外縁部に触れた時点で体表面が消滅し始める程度だろうか、それで気づくだろう』

最初に両手の間に発生させた濃縮した『滅び』を薄く広げて巨大な球と成す。兄上が小さな魔力球に圧縮した『滅び』を込めると反対の方向性だ。

大きくすればするほど、中心である俺から遠ざかれば遠ざかるほど『滅び』が薄くなるので殺傷力も低下する。逆に中心であり核でもあ

る俺自身に近づくほどに『滅び』は濃くなり、死にも近づくってわけだ。

器用な兄上と違って、俺は自分を中心核にして動かさないと急な方向転換とか急停止が出来ないのだ。

「じゃ、轆き潰すか」

さすがにこれに轆かれそうになってもリタイヤしないヤツの面倒まではみられんぞ。速度は遅めにしておくが。

戦闘フィールド内の大地に半円を描く轍を刻みながら、直径200メートルの滅びの球体が動き始めた。

巨大な力の塊を誰も止められない。圧倒的な破壊力がナベリウス眷属たちを次々とリタイヤへと追い込んでいく。

『エダーギ・ナベリウスさま、リザイン投了』



勝ったな。レイヴェルと寝て慰めて、朱乃の尻を叩いてお仕置きと
言う名の御褒美をくれてやろう。

そういえば、朱乃に本当にお仕置きするときってどうしたらいいんだ……？

体罰は悦ばれる。言葉責めも感じてしまう。どこかに閉じ込める
のも、放置つてはあはあ言いそう。ふむ……無敵か。

「捨てる」とか「もういらん」とか言って追い出すフリをしたら精神的
なショックを与えることは出来るかもしれないが、そんなことを俺が
するはずもないから騙せないだろうし。ふむ……やはり、無敵か。

エダーギ殿との話し合いで、黒歌とは後日話し合うことになった。
トレードに関する交渉だな。エダーギ殿自身は提示されていた金額
だけで問題ないということなので、黒歌個人の眷属入り条件について
決めるわけだ。

一応、交渉期間は半年。これが最低ラインで、伸びても構わないらしい。ただし、半年間はあちらの所属のまま、トレードは出来ない。だから黒歌を正式に迎えられるのは、年が変わったところになるのだろう。干支に猫はいないが、俺にとっては猫年の姫始めってことか。晴れ着でも着せてみるのもいいかもしれないな。

どうして即座にトレード成立ってせずに、手付金だけ入れて半年の間を設けるのか訊ねたところ、

『いや、以前にトレードした下僕が「はぐれ」になったことがありましてな。あちらの扱いの問題だったように思うのですが、それでこちらに苦情が来まして……。それで学んだのですよ。新しい「王」との相性などもありますし、一定期間はその具合を確認する時間が必要なのだと』

まあ、納得の答えだった。たしかに、俺は黒歌のことを書類でしか知らない。七割見た目、残りは記された能力のスペックで決めたから、性格とかよく分からん。

理由はよく分からないが生理的に合わないってこともあるだろうし、そういうった期間も必要なのだろうか。

思えばレイヴェルとは事前に何度も会って話していたことになる。ついでに婚約者の間柄だ。

朱乃は拾ってから眷属にするまで年単位で交流があったから、特に気にしてもいなかった。

しかし、ここに来て半年間お預けか、と思っていたら、

『もちろん、身体の相性や具合も事前にお試ししていただいて構いませんぞ』

ぐへへと笑ってエダーギ殿がそう言っていたので、俺はそれでまったく構わないがな！ 半年のお試し期間、結構じゃないか！ 良心的な決め事とさえ言える。『はぐれ』を作らないようにと考えているのだから。

『悪魔の駒』を開発して配布したはいいが、あとは特に『はぐれ』対策をしていないベルゼブブさまとは違うってことか。悪魔にこんなもの持たせたら好き放題するに決まっているし、それでやたらめったら

『はぐれ』を生み出しているわけだから、あの人もよく分からん。

むしろ、あえて、狙って、『はぐれ悪魔』が発生するようにしたのはないかとすら思えてくる。

ふむ、そう考えると『はぐれ』の発生も悪魔のイメージ戦略としては間違っていないのか？

悪魔と言えば怖くて悪いヤツだ。少なくとも人間やつてた頃の俺にはそんなイメージがあった。しかし、悪役つてのはヤラレ役でもある。ヤラれたら死んでしまうことが多いだろうから、大昔と比べて数の減った純粋な悪魔は死なせたくない。

だから、あえて『はぐれ』を生み出して、そいつらが暴れることで悪魔の悪くて怖いイメージを維持しつつ、真の『悪魔』の数の減少を抑える。

ほう、なかなか考えられているのではないのかな。神々が信仰を必要としているように、我々のような『夢幻』^{ファンタジー}な存在にとって、人間たちの抱くイメージってのは大事だろう。

契約を守って取引のできる貴族的な悪魔。それとそんな主の下から逃げ出した凶暴な悪魔。どちらも悪魔だが、『はぐれ悪魔』というレットルを用意することで区別して考えさせ……。

ふーむ、そんな感じなのだろうか。兄上からは何も聞いてはいないが、現政府がそういった方針でやっているって可能性はあるのか。

まあ、それで苦労しているのは、討伐任務などの割り振りで忙しい中立派のシーグヴァイラの家とその一派になるのだけれど。兄上たちはアガレス家に、レアなロボのプラモとかを贈ってあげるべきだな。

この想像が本当かどうかもわからんが、というか俺が陰謀論好きなのだけかもしれないが。

数日後、俺は城内にある和風な応接用の一室で、ちよつとそわそわしつつ来客を待っていた。本日の衣装は和装である。紅髪の北歐風傲慢王子顔な俺に似合うのだろうかと思っていたが、案外イケている。

やっぱ、素材がいいとどうにかなるものだ。和服なんて昔の日本人体型に似合うように構成された衣服だろうに、ちよつといじつてやるだけで悪くない感じになるのだからな。顔のいい奴は何を着ていてもイケメンってホントだわ。ブサイクがどんなにお洒落したって、よれよれジャージの美人には勝てないって、それ俺の欲棒の反応で確定しているから。

うーん……この後を考えると思わず勃起してしまいそうになるが、まだおっ立てるわけにはいかんのだ。

くつ、鎮まれ、鎮まるのだ、俺の中の獣欲ドラゴンよ！ 幸い、この服装は下半身にゆとりがあるのでまだマシだが。

「若さま、黒歌さまがお見えになりました」

今日の御付きメイドはリュイだ。いろいろと引退準備で忙しいが、よく顔を出してくれるので、よく顔に射精だしてやっている。というか、朝一に三発ほど決めたところだ。

それでもまだギンギンになってしまふのだから、悪魔ボディってやつは底なしだぜ。

黒歌は時間きつちりに来るタイプか。現在の悪魔貴族社会的にはちよつと遅れるぐらいが良いという風潮らしいが、下の立場の者が遅れるのはよろしくない評価を受けることもあるので、妥当な到着時刻である。

「ああ、ではここに通せ。あちらの準備は問題ないな？」

「かしこまりました。準備の方も滞りなく」

いずれは俺の眷属となる予定の黒歌だが、今はまだナベリウス眷属なのでお客さん扱いだ。

これまたいずれ同僚となる予定のリュイはともかくとして、他のメイドからしたらどっちにしろ上の立場になるのだが。

時刻はそろそろ昼時、一緒に昼食を取ってから雇用条件的な話をしていこうってつもりだ。

ちなみに準備つてのは、まあアレ用の部屋だな。相性と具合の確認は重要事項。黒歌は今日も和服で来るらしいし、俺も和服にして部屋もそれに合わせたいではないか。

幸い、グレモリー家はちよつと間違つた日本びいきな御家。和風寢室ぐらゐはあるのだ。畳の上の布団でつても良いものだ。クフフ……。

「いいぞ」

本日の俺付きメイド用の独特な扉を叩く音——つまり、リュイのノック音がしたので入室を許可する。

メイドに案内されて入って来た黒歌は、先日と同じような黒い着物姿だ。はて、同じつてことは無いと思うが、いや、もしや一張羅だろうか。

うーん、相変わらず着物を盛大に着崩し、両肩出して胸元ぱっくり開いて上乳を惜しげもなく晒していやがる。ブラも着けていないよ。うだから、ちよつと下に引つ張つたら乳首がポロリとしそう。

女の子の肩のラインっていいよね。首から続いて腕に繋がるあの曲線がなんともそる。無論、胸は言うまでもない。

この格好で『誘っていい』ってことはないだろうから、今日は美味しくいただけそう。おつと、涎はいかん。鼻の下を伸ばすのもNG。俺はカツコつけた傲慢王子キャラなのだから、そこは崩さないように気を付けて行かないと。

「先日も思ったが、綺麗な色の瞳をしているな」

肩やら胸もいいが、やはり女は顔のパーツだろう。黒歌は金色の瞳が良い。それに、割とその目付きの表情が豊かだ。

無表情系も好きだが、ころころと変わるのもそれはそれで好きである。

「にゃん♪ ありがと……ごぎいます?」

ジツと瞳を見つめて褒めると、少し照れ混じりに黒歌はそう言った。

「ああ、言葉遣いは身内の席でならいいぞ。そう気にしなくてもな。ただ、来客があつた場合や社交の場では気を付けてもらわないと俺が恥をかくことになる。今日はそういう席でもないから構わない」

もうトレード決定のような物言いだ、まあ見た目は好みだし、強さに文句はないし、今のところマイナスな印象はない。

レイヴェルは自然に丁寧だし、朱乃は墮天使幹部の娘って素性があ
るのでどうしても目立つし注目されてしまうのでマナーには気を付
けさせないといけない。だが、俺としてはタメ口というか、そこまで
丁寧でもないくだけた口調で会話できる女が欲しいのだ。といって
公式の場でもそれでは困るわけだが。それくらいはこなしてくれる
だろう。たぶん。

黒歌に着席を促すと、彼女はマナーを気にしている素振りを見せつ
つ腰を下ろした。

「うー、緊張するにやん……」

「そのうち慣れるだろう。ところで、俺は正座が苦手なので椅子と
テーブルを用意させたが、日本妖怪出身としてはそこるところはどう
なんだ？」

「にやはは、実は私も苦手で……正直助かるわ」

正座にはな……母上からのお仕置きの思い出が……。石を抱かせ
るのはやめてください。重い、下のギザギザ石床が脛に食い込んで、
ぐあああつてなるのを思い出すから嫌なのだ。

そうこうするうちに食事が運ばれて来たので、会話を挟みつつ口に
箸を運ぶことにする。食事中に会話をするのかどうか、そういうの
もお国によってマナーが違うんだよな。地域によっては、口を大きく
開けて咀嚼音を聞かせるのが「このご飯美味しいですね」って意味合
いを持っていて、マナーとしてそうしなかなければならなかったりするそ
うだし。

俺、あれ苦手なんだよな。まあ、日本文化の麺類なんかを「すす
る」ってのも、他の文化圏からすると「うわー」って思われていたり
するそうだが。ホント、難しいわ。

悪魔的には、「俺はこうなんだよー」で押し通すのと「主催の御家に
合わせます」ってのはどちらでもよいそうだ。自分に自信があるヤツ
は前者な。でも大概の場面で、現状トップの家格の『大王家式』に合
わせておけば間違いはない。

御家ごとに違っていると面倒なだけなので、そのうち一本化されて
いくのだろう。

「こ、これはお刺身……ん、美味しい」

黒歌は、現状あまり食生活が豊かではないのだろうか。冥界には海がないので、海産物を食そうとすると人間界からの輸入になりがちだ。なので日本で食べるような刺身はちよいと高級品になる。輸送に転移が必須だからな。冷凍ならまだしも、生となるとなかなか大変らしい。

といってもそれは平民の中でも下層・中層の連中の話であって、上級悪魔の眷属ならばどうということのない代物のはずなのだが。まあ、幸せそうな顔をしているのだから良しとしておこう。

「黒歌さま、お酒はどうなさいますか？」

とリュイに聞かれ、黒歌はこちらを伺うように見てくる。

「酔わない程度にな。この後、まだ話がある」

「にやはは、それじゃあお言葉に甘えて……あ、おいし」

残念ながら、俺はまだちよつと酒の味がよく分らない舌なのだ。

だが、まあ日本酒なら少しくらいって気もしてくる。

そんな俺の心情を汲み取ったのか、リュイが杯を差し出してくれたので少しばかり黒歌に付き合う。

「ああ、これは呑みやすいな」

これはアレだ。いかん酒だ。つついグイグイ呑んでしまつて、気が付いたら一気に回つてきて泥酔つて系統の代物だ。

今日はしないが、黒歌も気に入っているようだしそのうち酔い潰してつてのも乙かもしれない。

「さて、俺の眷属になつた場合の扱いだが」

と、そんな感じに和やかに食事を終えたところで本題だ。眷属入りした後の待遇面の説明だな。こういうのキツチリしておかないと、後で話が違ふとか言われても困るし。

なにせ上手く行けば一万年近い付き合いになつてくるかもしれないのだ。延々とグチグチ言われ続けてはたまつたものではない。

「え、これ本当に……？」

金色の瞳をくりくりつとさせて、マジで!? みたいな表情を向けてくる黒歌に頷いて返す。

我がグレモリー家は身内に甘いホワイトな職場で売っているのだ。その次期当主の眷属ともなればそりゃ扱いは良い。失礼だが、ナベリウスの分家とはかなりの差があるはずだ。

渡した資料に必死で目を通す黒歌の様子に、とりあえず給料とか福利厚生とか、そちら方面は問題ないようだなどと確信した。

あとは……まあ、俺がハーレム作る系の男性貴族悪魔つてところか。その辺りは織り込み済みのはずだとは思うのだが。

とりあえず、真面目な説明の方を続けていくとするか。夜まではまだ時間があることだし。

2—19 黒歌のお仕事（2）

「今日の所は以上だが、何か質問はあるか？」

「えーっと、その縄張り関係がよくわからないにゃん」

「ああ、そこはまだ正式には話が来ていないんだ。といつてもすぐに話が来るだろうから、その時に他の眷属も連れて何度か視察に行く予定だ」

「りよーかい」

さてこちらからの説明もおおむね終わったところで、今度は黒歌のことをいろいろと教えてもらわなければならないだろう。

そう、全俺がお待ちかねのセクハラタイムだ。いや、向こうもあんな格好で誘ってきているんだから、合意だな合意。

「それで、だ。こちらからはここまでだが、次は黒歌のことを教えて欲しい」

「んん？ 私のことを……？」

言いながら俺は立ち上がり、椅子に座る黒歌の後ろへと回った。

「なに、男の悪魔、それも女好きと言われてる俺の眷属になるんだ。こっちの方も大事だろう？ 長い付き合いになるんだ、お前のことをよく知っておきたいと思うのは普通だろう？」

ミスラさんの一件以来、俺は「女好き」の評価は貴族社会に一気に広まった。狭い交友関係だが、聞こえてくる話によるとそうらしい。

まあ、バアル家現当主の妻を、いくら冷遇されているとはいえ寝取った形になるのだから当たり前だ。

そして俺はそのことについて、特に後ろめたくも思っていないし、特に恥じてもない。色欲旺盛なのは、悪魔として誇るべきことだからな。

彼女の頬から首筋、そして胸の谷間あたりまでを、指先でそつとなぞると、「んにゃん」と吐息を漏らした。

両肩から胸の双丘の上側までのほとんどの肌を晒した黒歌が、微弱な快感に身を震わせる姿はやはり煽情的だ。

「ん、そう……よね」

声はどうにも硬いが、感度は悪くなさそう。彼女の身体の声がそれを教えてくれる。

「ん？ 嫌なのか？ そんな挑発的な格好で来ているんだ、まさか俺の勘違いとは言わないよな」

少し脅しつけるような声でそう言うと、黒歌はビクリと身体を硬くした。

ま、先日のゲームで『力』の差を思い知らせたところだ。怖いかもしれないな。

ついでに言えば、実際のところ眷属のトレードには下僕悪魔本人の意思は特に必要とされない。『王』と『王』の間で話が付けばそれで決まりなのだ。下僕あるいは奴隷に過ぎない眷属悪魔達はそれに反感を持つことは出来ても取引を止める権利はないのだ。

レイヴェルのような純血悪魔の場合を除くと、下僕の運命はおおむね主に握られていると言ってもいい。そんな、トレード後の己の待遇を握る俺に嫌われたくはないだろう。さっきまでトレード後の待遇面の良さを説明してきたことも多少は効いていると思いたいところだ。

「それは……勘違いじゃない……にゃん」

とつてつけたように語尾に「にゃん」と付けて誤魔化しているが、あまり乗り気ではなさそう。

だが、俺の股間は既に臨戦態勢。今さらじゃあまた今度にするか、などでは済ませない。というか、ここまで来て退いてはヘタレでしかない。

それに言葉の意味としては拒否しているわけでもないしな。

「んんうッー」

黒歌の顎を掴んで肩越しにキスをした。

見開かれた黒歌の金瞳を見据え、逆らうなど視線で命じた。どこか悲し気に揺れる彼女の瞳を見つめっていると、情欲がより沸き立ってくる。

しばらく唇だけを重ねていたが、黒歌の唇は固く閉じたまま。

ギョツと結んでこちらの侵入を拒んでいる。

顔を上げると黒歌は強張った表情でこちらを見上げて来た。

「どうした、まさか初めてなんてことはないだろう？」

顔を赤く染めつつも、何かに耐えるような表情の黒歌に訊ねる。どうにもこなれていない感じがあるな。

ある程度の交流があり、最初から好意的だったレイヴェル。初体験前はかなり親交を深めていた朱乃。覚悟済みで来ていたメイドや、遊び人だったりユイ。小さい頃から知っていて、子持ちのミスラさん。

これまでの相手と比べると、なるほど黒歌は今日が初対面。見た目の印象で慣れた女かと思っていたが、実はまだ青くて硬かったわけだ。

「そんなことない……にゃん」

裸の肩を押して立ち上がる様に促すと、黒歌はそれには逆らわずに素直に立ち上がった。

正面からそつと抱きしめ、背中をゆっくりとなでてやる。肩甲骨の辺りから徐々に下へとズラしながら。

身長差の差はあまりないので、彼女の豊かな胸が俺の胸板でぐにゅりと潰れて心地よいな。

「猫又には発情期があるらしいが、今はその時期ではなということか？」

それならば、まあ分かる。種族の生態的に、どうしても決まった時期にしか乗り気になれないというのなら、それまで待つくらいのこととしてもいい。

その時に乱れまくる肢体を思うさま堪能させてもらうだけだ。

「仙術で、散らしてるから。いつでも、大丈夫よ」

黒歌は首を横に振って、今もオツケーなのだと言う。

となると、ムードの問題か？ いや、強引にヤツてしまってもいいんだが……まあ、少しばかりお話ししながら解していくとするか。

「散らす……というのはどういう意味だ？」

軽い口づけを何度も繰り返し、背骨に沿って愛撫しながら合間に疑問を口にした。

「んにゃ……、発情期は怖いから……一氣に来ないように、一年間に分散させてるのよ」

聞いてみると、猫又の発情期の性欲はかなりのものらしく、チンコが欲しくて欲しくてどうしようもなくなってしまうらしい。なんだそれ、えつろ。

そうなるの見境がなくなってしまう、普段の自分がいなくなってしまういそうで怖くなるらしい。

だから、一年の内の特定の時期にだけ強烈に襲ってくる性欲、繁殖欲求を、生命を操る仙術を用いて一年間に引き伸ばし薄めているのだそう。つまり、この黒歌は年中弱めの発情期ということか。なんだそれ、えつろ。

さすがは女しか産まれず、次代の繁殖のために他種族の男の精を必要とするとかいうエロ種族だ。ラミアやハーピーなどもそういった種族だったが、この手のメスしかない異形は総じてエロい。姿形、文化、育った環境、諸々の異なる他種族のオスを誘惑して精を搾り取る者なのだから当然か。

となると、そんなエロ種族の黒歌の主（予定）なのに、微妙に乗り気になってもらえていない俺って実は……モテない男なのか？ 凹むわ……。いや、肉棒はギンギンに凸っているのだが。

はあ、黒歌の唇柔らかか……着物越しの尻の感触もいいし……腰も細いし……胸と胸がぶつかり合ってグニイイてなってるし……俺の戦いはここからだ！

「そうか、では今のように発情を散らし始めたのはいつからなんだ？」
片手で彼女の背を抱いて首筋に吸い付き、もう一方の手で二股の尻尾を弄ぶ。

「きよ、去年のでわけわかんなくなっ、それで、もう嫌だったから……んやあ、そこ、そこダメえ♡」

ほう、ここが弱いのか。二股尻尾の付け根の上側、トントンとしてやると猫のシロが尻をうううと持ち上げて背を反らすポイントだ。

ここは猫の性感帯だったのか。なるほど、もっとトントンしてやろう。

「ここがいいんだな」

「にやあん♡ やめっ、んにや、ああっ♡」

快感から逃れようと引けていた黒歌の腰が前に出てくる。正面から抱き合う形になっているので、そんなことをすれば――。

「どうしたそんなに押し付けて来て、こっちでもいいぞ」

俺のいきり立った肉棒に股間を押し付ける形になるわけだ。

女の方から割れ目をすり寄せてくるのだ、応えてやらないとな。

「んんあ、にや、んにやあん♡ おちんちん、こすりつけないでえ……」

黒歌の尻尾の付け根を指でリズムカルに叩いて責める。彼女がそれから逃げようと腰を前に出したら、肉棒で迎え撃って押し返す。ふふふ、クリちゃんはどこかな？

前後から責め立てられた黒歌の吐息に艶が滲んで、甘い声を出し始めた。

おお、いいぞ。興奮する。まだ服を着ているから、チンポの先から出てきた汁が下着に染みていつている。ああ、ヤバいな……これずっと続けていると、このまま出してしまいたいぞうだ。

だが、せつかく女が乱れ始めてきたんだ。このままこうしていたい気もする。悩ましいな。

「それで、去年はどうしたんだ？ ワケがわからなくなってしまったんだろう？」

もうちよつと楽しむとするか。まあ、まだ我慢できる。着衣のまま暴発などしない。

しかし、こうなると顎の下とかも好きなのかもしれないな。ふふふ、ごろにやーんと言わせてやる。

「んん、んやあ、んにやあ♡ これ、これやめてえ、は、話すから、これされてると、話せない……にやあん♡」

ふむ、前言撤回。ちよつと休憩を入れるか。俺は自分の考えに固執して、変更をためらう男ではないのだ。

「そうか、それなら少し場所を変えんとするか」

だいぶ柔らかくなった黒歌を抱えあげると、部屋の隅に待機していたリユイが転送魔方陣を発動させた。今回はちよつと演出に凝って

いて、襖ふすまを開いて潜ると転送先に移動できる形式だ。俗に言う『転移門』方式だな。

「それでは若様、ごゆっくりどうぞ」

「あ、やだ、いままで見られて……」

「ああ、一応夕食の準備はしておけ。黒歌は何カリクエストがあるか？」

「え、なに？ ご飯？ そんなの急に聞かれても……」

「そうだな。なら、肉メインにしておいてくれ」

「かしこまりました」

深々と頭を下げるリュイが襖を開くと、その向こうは枕が二つ並んだお布団がデデンと敷かれた和室になっていた。窓のない室内を行燈のぼんやりとした灯りが薄暗く照らしている。

結構ムーディーじゃないかね、これは。

しかし、黒歌も忘れてしまうほど気配を殺していたとは、やはり俺のリュイは出来るメイドだな。あとでご褒美をやらねば。

俺たちが門を潜ると、後ろでスツと襖が閉められた。

黒歌を畳の上に降ろし、和服の前をはだける。

「帯をほどいてここへ来い」

掛け布団をめくり、敷布団に横たわると隣に寝るよう命じた。

「あ……うん。そう、よね」

布団に肘をつけて顎を乗せ、覚悟を決めたらしい黒歌が帯をほどく様子を眺める。

女が脱いでいく様というのは、いつ眺めても良いものだ。脱がすのとはまた違った趣がある。

しゅるしゅると音を立てて帯がほどけ、黒歌の着物の前が開いた。

「下も履いていなかったのか。それに……」

パサリと帯を床に落とした黒歌は、着物の下に何もつけていなかった。

元から肩を出し、豊かな胸を半分ほど露出させていたが、締める帯がなくなっただけで大きく開いた生地の内から乳首がこぼれだしている。

薄明りの中、和服を肘に引っ掛けているだけの美女が、乳房も女陰も曝け出して立っている様子はなんとも妖艶だ。

「剃っているのか？」

寝転がる俺を見下ろす位置まで進んできた黒歌の股座をよく見ると、陰毛がほとんどなかった。ただ、元々無毛というわけではないらしい。

「火の魔力で焼いてるのにやん」

首を伸ばしてよく見ると、なるほどごく短い毛の先端が焼けて縮れたようになっていた。

そういえば昔、時代小説を読んでいた時に、遊女が陰毛を線香で焼いて処理しているシーンがあったな。剣豪ものとか、意外と濡れ場が多いのだが、それで初めて江戸時代の遊女はお客さんと自分の毛が絡んで痛くないようにしていたのだと知ったものだ。まあ、あくまで小説内での設定なので、事実かどうかは知らないが。

「少し見せてみる」

「ん、んにゃあ♡」

よしよし濡れ始めているな。しかし、ほう、こうなるのか、毛を焼くのか、へえ……。

いままででない毛触りを少しばかり楽しんでから、布団をポンポンと叩いた。

「ほら、ここに寝ろ」

大人しく横になった黒歌の着物の中へ腕を入れる。衣服と素肌の間に手を挿し込むこの瞬間が、半脱げツクスの醍醐味よ。全裸も良い、完全着衣でパンツだけズラしてぶち込むのも良い。

だが、この半脱げが一番エロいと個人的には思っている。全裸にしたメイドは、もはやただの美人さんだからな。メイド服がどこかしらに残っていないくは。

「んやあ、またそこ、いにゃあ……♡」

厚めの着物の布地の上からでも感じていたのだ、直に愛撫されたらたまらないだろう。

ま、そこは丁度いい加減が必要だが。感じるってことは、神経か何

かが集中している部位なのだろうし。あれか、尻尾を動かすための器官というか、そんなものがあるのかな。

「あまり強くはしないから、さっきの続きを聞かせろ」

布団の上で横になって向き合い、右手で黒歌の尻から尻尾付近を優しく、ゆつくり、ねちっこく、執拗に撫でる。

同時に、割れ目やクリトリスにこれまたそつと、カウパー液を滲ませるバキバキの勃起を添えておく。こっちはまだ動かさない。先端で女体の感触を愉しむだけだ。

尻を撫でまわのとは別の手で黒歌の頬や顎、首筋から喉をくすぐるように愛撫しながら、質問を続けた。

「前の発情期の時はどうしたんだ？」

ほどよい快感にうっとりをしてきた黒歌の顔を眺めつつ、返事を待っている。彼女はボソボソと話し始めた。

「っ……シたくてたまらなくなつて、それで……街に出て、適当な男を捕まえて、誘つて……」

「ふむ、黒歌には決まった男がいるのか？」

だとすると、ちよいと面倒だな。まあヤレればいいといえはいいのだが……、俺は眷属ハーレムを築きたいので趣向が少し変わってくることになる。

「決まった相手はいないのよ。毎回、違う男を相手にしたし……」

「ふーん……それはまたなんでだ？ 場合によっては危ないこともあるだろうに」

言つては何だが、冥界の治安はよろしくない。黒歌のような女が適当に男を誘うようにしてフラフラしていたら、

いや、比較対象が俺の前世、十数年前の日本な時点で厳しいのだが。あそこ、人間界でもかなり治安が良い地域になるんだよな。人間やつてた頃は意識していなかったけれど、死んでから分かる大事さだな。「同じ相手ばかりだと、向こうが勘違いしそうじゃない。こっちはそんな気ないのに、勝手に盛り上がりながらも困るにやん。それに、私つて結構強いからそんな危ないことなんて、ちよつとぐらいはあつただど返り討ちよ」

まあ、そうなるか。

「この間、手も足も出ずに負けちゃったからそう思えないかもしれないけど、えっと……」

黒歌は困ったようにこちらを見つめてくる。

「なんて呼んだらいいのかにやー、って」

「ああ、そうだな……」

別に名前でもいいのだが、「マスター」とか呼ばせてるヤツもいた気がするし、……ふむ。

ああ、たしか……線香で処理する話で、客のことを、

「じゃあ、とりあえずは、主^{ぬし}さんとでも呼んでもらおうか」

まだトレード成立してないから、ご主人様でもないのに文字だけ見ると「主^{あるじ}」っぽいしな。

「主さん……？　主さんは、強いから私が弱く見えてるのかもしれないけど」

「俺から見ると下級悪魔も上級悪魔も大差ないからなあ……」

どちらにせよ、一撃で終わるのだ。違いと言えば手加減するときの難易度が変わるくらいか。

「それで、発情期が過ぎたらもうその頃の男どもとは会っていないのか？」

「名前も知らないし、なんなら顔も覚えてないくらい。……んあつ、そこ、そんないじっちゃ、んにやああ♡」

おっと、つい嬉しくなってサービスしてしまった。彼氏がいないというのなら、遠慮はいらさないな。いても遠慮はしないが。

「んやあん、あつん、吸っちゃんんつ、にやあ♡」

目の前でふるふると弾力ある震えをして誘ってくる豊かな果実に吸い付いた。

ちゅつちゅつと音を立てて、乳首のこりこりとした感触を愉しむ。しばらくそうしているとシコってきたので、今度はもう一方の乳房に吸い付いてそちらも硬くしていく。

「んふっ……んっ、ひっうう……♡　ふにやあう♡」

猫耳もぜひ触りたいところだが、右手は尻と尻尾いじりに使ってい

るし、左手は彼女の顎下や喉を愛撫している。チンコはマンコの入口に照準を合わせて接触状態で待機中で、口は乳に吸い付くので忙しい。

うーん、手が足りない。

「はあ……ああつ♡ そんな、そんなに、したら、んにやああん♡」

デレっと蕩け始めて柔らかくなり始めた気がする。よいよい。

やっぱ、お布団効果だろうか。別室での硬さが嘘だったかのようだ。

「気持ちよくなってきたいるみたいだな」

「あ、う、うん……ああつ、なんか優しい感じがして……これ、好きかもにゃん♡」

「ん？ なんだ、前の男どもはこういうことをしてこなかったのか？」
前戯は大事だぞ。これの具合で後の膣内具合も変わってくるのだから。

強引にいきなりぶち込むのもありだとは思うが、そういうのはもうちよつと慣れてからか……あとは気にする必要もない「敵の女」にでもすれば良いだろう。

黒歌は眷属ほぼ内定状態なのだから、ほぼほぼ身内になる。グレモリーたる者、身内には甘々ツクスでいかなければなるまい。

いや、女の方が無茶苦茶にされたい嬲られたいのなら、その欲望にも応えるけどさ。

「は、発情期だと、こっちが余裕なくて、すぐに欲しくなってるから……」

「ああ、お前の方が我慢できないのか」

どんなだったんだ、発情期黒歌は……。前回にしておそらく初回の発情期黒歌を喰ったというか、黒歌に喰われた(?)男どもは、みんな速攻でハメハメパコパコに行っちゃったのか……。

「にやあ……ああ、ダメ。これ……ダメ……♡ ああつ、いやあ、いや、ダメになっちゃう」

「なんだ、ダメになるって」

「んんっ……ダメなのよ。ダメ、だから主さん……私に優しくするの

やめて」

「ん？ いや、お前は優しくされる方が好きだろう？」

発情期は知らんが、少なくとも今の黒歌の身体は言葉とは違って大喜びだ。

メス穴もヒクヒクとし動きだして、突きつけているこちらの肉棒を啜え込もうと涎を垂らしだしている。

「好きになったら、ダメだから。男を好きになったら……ダメなのよ。んんや、にや、んにやああ、あつい、いやあ♡」

「黒歌、キスするぞ。抱きしめ合おう、な？」

「や、やあ、やめて、優しくしないでえ」

ふふん、こっちの方が感じて蕩けさせられると分かっている、やめる男がいるだろうか？ いや、いないだろう。

「んんっ……んう、んっちゅっ……、んじゅっ……んにや♡ やあん♡」

唇を合わせると先ほどと比べて随分と柔らかくなっていたので、舌で上下の間を何度も何度もなぞる。そうしていると、やがて隙間が開いたので、遠慮なくお邪魔させてもらうことにした。

「んっ、ふうん……ちゅっ、じゅりゅっ……んっはあ♡ んうう、ああ♡」

黒歌の腕が俺の背に回った。足も絡めてきている。ああ、この密着感がいいんだよ。

今すぐにもガチガチになったモノを埋めてやりたくなくなるが、ここはまだ我慢のしどころかな？

「ぶはっ……なぜ男を好きになつたらダメなんだ？ 他の男はともかくとして、相手が俺ならばむしろ喜ばしいことだろうに。何せ、これから長い付き合いになるんだ」

黒歌に好かれていなくても、俺は抱くのをやめないだろう。回数は減るかもしれないが。

だが、どうせなら好かれていた方が良く、黒歌としてもその方が良さそうな気がするのだが。

いや、俺も大概自信家になったものだ。抱けば好かれる愛されるだ

なんて、そんなこと……ドラゴンとグレモリーのオーラ的には十分にあるんだけどさ。

「いや、いやいや、私はあの人みたいになりたくないの！ 母さんみたいになりたくない！」

おっと、何やら地雷を踏んでしまった予感。

母親と確執でもあったのか？ しかし、こういう言葉が出てくるってことは、ある意味かなり心が開けているってことでもあるか。

「わかった、ほら、わかったから。俺は今はこんなナリだが、お前よりも年上なんだ。前世持ちだからな。ほら、言いたいことがあるなら言ってみろ、な」

ちよつと責めを緩めて、抱きしめ頭を撫でてみる。見た目的には俺の方が若いが、資料にあった黒歌の年齢を考えると……もしも前世で結婚していて娘がいたとすると、このぐらいでもおかしくないんだよなあ。

「うっ、ひっうっ……なんで、私ばかり……こんな……ウツ、グスツ」
泣かせてしまった……なんだ、情緒不安定か……？ どうしよう……。

いや、ここはグレモリーの魔力を信じるしかない！ よく分からんが、撫でて欲しい、抱きしめて欲しいって身体の方は言ってるし！
とりあえず、母親のことはなにかマズイっぽいので、別方面から聞いてみるか。

2—20 黒歌のお仕事(3)

黒歌のこれまでの人生は、順風満帆とは言い難いものであった。猫？という上位の妖怪として生まれたことに文句はない。

強さが尊ばれる異形の世の中で、それは喜ばしいことだ。

父親がいなくても同然だったことにも文句はない。

猫又は異種族の異性と交わるのが特徴の種族。このとき相手が人間だった場合に生まれるのは、猫又のみになる。これは猫又の希少種である猫？でも同様だ。

相手の男からしてみれば、自分の子供であるという実感が湧きにくいだろう。実際、子種のみを提供させて、子を成してからは母親である猫又だけで育てている場合も多い。

思うところがないわけではないが、これはある程度仕方がない。なんといつても妖怪と人間では寿命が違う。

もとより、猫の妖怪である猫又は、元の動物である猫の性質を引き継いでいるところが多分にあるということもある。猫という動物は、基本的には男は子育てをしないし、父親の顔も知らないことが多い生き物だ。これで相手が異形の種だったならば、寿命や男親の特徴が子に反映されることもあつて違ってくるらしいけれど、これは人間の父を持つ黒歌には当てはまらない。

だから我慢できる。父親が子供になんの関心もなく、研究にしか興味がなかったとしても。異形と人間の番なんて上手く行く方が稀なのだから、と。

猫又の、妖怪の母としても問題があつたとすれば、それは藤舞の方だったのだろう。

母親はどうにも父親に心底惚れ込んでしまっていたようで、どうかして人間の父親との間に生まれた黒歌や白音を認めてもらおうとしていたように思う。

娘二人を妖怪の里に置いて、男の所へ行ってしまったのだから……。それが娘二人を惚れた男に愛して欲しかったのだとしても、まだ独り立ちできていない子供を放置したことは確かだ。

拳句の果てに、男と共に何かの事故で死んでしまったとあつてはどうか。うしようもないではないか。

父親にはもとより期待していなかった。母親は父親と共に死んでしまった。

幼い妹を抱え、『力』もなく、アテもなかった当時の黒歌は困窮した。その頃、母親の繋がりで黒歌たちが与していた東の妖怪の総大将ぬらりひよんの一党は黒歌たちを助けてはくれなかった。

『妖怪は妖怪を助けはしない』のだと、それで黒歌は学んだのだ。

自分だけならばまだなんとかなる。だけど妹の白音の面倒までもみるとなると厳しい。

困った黒歌に声をかけてきたのが、父親の勤め先の主であったナベリウス家の分家当主エダーギ・ナベリウスだった。

エダーギから眷属になるよう誘われた黒歌は、妹を食べさせるために悪魔の眷属となった。

その後、眷属の強化に熱心過ぎるエダーギの無茶な要求に応え続けた黒歌は『力』を高めていった。

要求される厳しい鍛錬にヘトヘトになって休もうとしていると、妹の白音が甘えてくる。姉一人、妹一人だけの家族だ。可愛いとは思いう、守らなければとも思う。

でも、ときどき、ふと思ってしまうのだ。

この子がいなかったら……私はこんなに苦労しなくても良かったのではないかと。

そんなことを考えてしまう自分が嫌になる。しかし、振り切ろうとしてもその想いはどこからか湧いてきてしまう。

親愛と染み出してくるやり切れなさに翻弄されながらも黒歌はこれまで眷属生活乗り切り、昨年に猫？としての成熟を迎えて今に至ったのだ。

そして、黒歌の成長した『力』を確認したエダーギ殿は、今度は妹の白音にも黒歌と同様の無茶なトレーニングを課そうとしているらしい。

「だから、トレードで他所の眷属に移籍するために、お前はこうして好きでもない男に抱かれているわけか」

愛撫を続けながら、嬌声混じりのときれときれな黒歌の話を聞き終えた俺は、彼女の頭をぐっと抱きかかえた。

「黒歌は偉いな。より良い条件の生活のために股まで開いて」

手付まで払ったのだ、今更撤回するつもりはさらさらない。だが、一応このトレードはキャンセルが出来る。俺が気に入らなければ、黒歌はそのままエダーギ殿の眷属のままだ。

そうなると、エダーギ殿はきつと白音にもトレーニングをといて考えを実行するだろう。下僕である眷属悪魔の身分では、主にそれを強行されてしまうと逆らい難い。

とはいえ、それはこれまで黒歌のやって来たことだ。姉が出来たのだから妹も、というエダーギ殿の思考は理解できるものだ。彼にとつての眷属とは、売り物だからな。駒に空きが出来たときのために、前もって仕込んで置くというのは実に悪魔らしい合理的な考えといつていい。

「お前に頼りっぱなしで、甘えているだけの妹のために、ここまでするなんて本当に偉いな」

「んああつ♡ いわな、いで……白音を悪く、言わないで」

まあ、分からないでもない。

同じ年の頃、自分が出来たことが、何故妹はしていないのか？ そう考えると苛立ってしまう。

自分が辛かったことを、何故妹は味わっていないのか？ そう考えると妬みが生まれる。

でも、こんな思いを妹にはさせたくない。そう考えるから頑張れる。

「お前は妹想いのいいヤツだよ。俺の、グレモリーの眷属に相應しい」「んや、んにやあつ♡ ああつ、あああ、んっひっ♡ ……ほん、とに」

「ああ、グレモリーは身内に甘い情愛の悪魔だからな。それでいい、今のお前でいいんだ。どっちの感情も否定するな」

「適当なことを言いつつ、弱点を責め、誉めるように頭を撫でてやる。」

「んんっ……、ふうっ……♡ ふにゃああ……♡」

官能に翻弄されて考えが回っていないからだろうが、そうすると黒歌は俺に頭をこすりつけながら抱き着いてきた。

「よしよし、偉いぞ。黒歌は頑張ったんだ。大したものだ、なかなか出来ることじゃない」

エダーギ殿から軽く聞いただけでも、かなり厳しい訓練内容だったからな。俺では三日も耐えられずに逃げ出しそうな代物だった。

それを何年もこなしてきたのだから、黒歌は実際すごいヤツなのだ。

そう言つて誉めてみると、耳をピクピクとさせながらまたも頭をこすりつけてくる。これは、かなり嬉しがっているのか？ 情交の最中でもあるので、頭が回っていないこともあるのだろうか。素直な反応だ。

なんだろう、もしかしてあまり誉められた経験がないのだろうか。

いや、そうか。父親とはほぼ縁がなく、母親は父親にべったりだったか。与していた妖怪の一団は、黒歌と妹が飢えても食べるものを恵んですらくれない程度の関係性だったようだし。

エダーギ殿は……あまりそういった性格には見えなかったしな。なんだろうか、こう数字と結果だけ見て満足しそうな感じというか。「よくやった」とか言いそうにない感じとでも言えばいいのか。

妹の白音からは尊敬されているような雰囲気だが、身内からの称賛と、他人からの評価ってのは感じ方が違ってくるものだ。

前世の俺は誉められるとすぐに調子に乗るところがあったが、何をしても誉めてくれる祖母の言葉は結構流していたからな……。

「よくやったな。大変だっただろうに、ほんとうによくやった」

「あ……う」

うん、照れてるな。これは。

よしよし、俺の眷属の教育方針は誉めて伸ばすだ。小言を言って引

き締めて皆からちよつと鬱陶しがられるような憎まれ役は、『女王』のレイヴェルに頼んでいる。優しくしたり甘やかすのは俺、厳しくして叱るのはレイヴェル。すまんとは思いますが、役割分担って大事だしね、仕方ないね。

うちの父上と母上もそんな感じだし、兄上と義姉上もそうだから、なめられるのは男で怖がられるのは女って、これグレモリー家の伝統なんだと思う。

まあ、ベッドの上ではそうでもないわけだが。

基本、『ハーレムを築くのなら男は常に上位者でいなければならぬ』とは偉大なる先達であるライザー義兄上の言葉だ。

ハーレム王になるには女をデレッツデレのドロドロに蕩けさせるテクニクが必要ということだ。俺の場合は、龍のオーラやらグレモリーの魔力で下駄をはかせてもらっているワケだから、おそらくは素でやっているのだろうライザー義兄上やディオドラってスゲーわ。

「ほら、こつちを向け」

口調は命令風にして、潤んだ瞳を向けてくる黒歌の唇を吸う。

「んうふッ」

繋がりが合った口内に、呻きが響いた。さつき唇を重ねたときよりも、さらに甘く艶を帯びている。

彼女の唇の瑞々しい感触をもつと味わいたくなつて、きつく重ねても嫌がらない。むしろ向こうから押し付けてくる感じだ。

舌先を挿し込んで、彼女の舌の裏側をくすぐるようになしてみると、うねうねと動いて逃げていく。が、唇自体はキュツと吸い付いてきた。

逃げたくはないが、でも少し怖いといったところだろうか。発情期に男を誘って啜え込んだ時は、激しくやらせていただけらしいからな。

男に惚れこみ過ぎた挙句に爆死したらしい母親のようにはなりたくない。だから優しくしないで欲しい、なんて可愛いことを言われたら。そりゃ優しく落としていくに決まってるんだよなあ。

「んんっくっッ、んあッ」

舌先を尖らせ、優しく丁寧に歯茎をなぞる。上あごを舐め、時折舌を絡めようと誘う。

そうしていると、徐々に黒歌の顔の角度が変わってくる。俺が舐めやすいように合わせているのだ。

誉められるのに慣れていなくて、優しくされるのが怖い。でも、実際それをされると甘い声を漏らして欲しがってしまう。なんとも可愛いのじゃないか。

語尾にわざとらしく「にゃん」だの「にゃ」だのと付けたり、やや雑な言葉遣いや態度も、なんとこのだろうか……自己防衛？ 的なものだと考えると余計に愛おしくなってくる。

どうせ誉められたりなんかしないのだから、最初から態度を悪くしておけば注意されるのが当たり前だから……といった感じで。

れるれる、ちゆるクチュリ、じゅちゅリユ。

俺の背に回された彼女の両腕に力が籠った。緊張や嫌悪の力みとは違う、より強い官能を求める力みだ。

舌が絡み合う。ディープキスの快感に酔いながら、俺は黒歌の舌の与えてくる感触に改めてテンションが上がるのを自覚した。

このザラリとした感触。舌と舌を合わせて一体感を感じるにはやや不向きなザリザリとした舌ざわり。このザラ付きはやはり猫科のあれだろうか。

骨などにこびりついた肉をこそぎ取るためにあるとかいう、アレだろう。

これはいい。まださせていないが、肉棒を舐めさせたら気持ちいいに違いない。これまでにない新触感を味わえるだろう。

舐め奉仕させるためにあるような舌だな。それを想像すると、ギンギンに硬くなっている男根にさらに血流が注ぎ込まれるような気分になる。

命令する者、支配者、上位者であるといった雰囲気崩さないようにしながら黒歌の内から舌を引き抜いた。同時に抱き合ったままくると身体の向きを変え、横向きだった態勢から正常位のそれに近づける。

上から見下ろしながら、彼女の鼻に軽くチュツとキスをした。

「……うにゃああ♡」

「どうだ？ 気持ち良くなってきただろう」

さて、気持ちを解きほぐすために一度弱めてしまったが、ここからはもつと攻めていくとしよう。

熱っぽい瞳で見上げてくる黒歌の乳首に吸い付くと、ビクッと弾かれたように彼女は背を仰け反らせた。

ビンビンに主張する部分に舌を絡みつかせながら彼女の顔を伺うと、快感にだらしなく口元を開いている。

両手で乳房を掴むと、おおっ、さつきも思ったが実にいい触り心地だ。

乳肉の柔らかかさと弾力が実に心地いい。ずっと揉みしだいていられそうだな。

「んにゃあ、奥まで、胸の奥までじくじくきちやう♡ ああつ、気持ちいい」

左右のおっぱいを交互に舐めしやぶり揉み尽くしていると、黒歌の口から官能に染まり切ったうわ言が漏れた。

良い感じだ。双丘の声ももつともつと俺の責めを望んでいる。ふふふ、それ、ここがいいんだろう？

（ああつ、そこ、そこお♡）

ああ、こつちもか？

（んんっ、こつちもお、こつちも、もみもみしてえ♡）

欲しがりなおっぱいな。

（気持ちいいよお、この人の、すごいのお♡）

そして、彼女のメスの穴は、

（ああつ、早く、はやく欲しいよ。もう、もう……ちようだい♡）

とさつきから涎をダラダラと垂れ流して懇願してきている。

今押せば簡単に彼女の股を広げられるだろう。が、次回以降の円滑な性交のために、今日ここである程度は身体だけではなく心も墮しておきたい。

黒歌が正式に俺の下僕になるまでの半年の期間。その間に完全に

墮とす。なにせ、黒歌が大事に大事に育てている妹も、いずれはいた
だいく予定だからな。

文字通り身体を張って、苦痛にも耐えて面倒を見て来た妹も俺のもの
にしてしまおうというのだから、むしろ黒歌の側から差し出してく
るくらいにしてしまわないと。とりあえず、白音を俺の使い魔にして
しまっても、文句を言われないようにしてしまう必要がある。

まあ、最終的に無理だったならリユイのようになってしまうことにな
るが……出来ればそれなしでやってみたいところだ。

「ああっ、それダメえ……ゾクゾクしちゃう……にやあん……♡」

バストへの責めを継続しながら、右手を下へ下へと滑らせていく。

すっかりトロトロになって欲しがりまくっている陰核や牝穴を放
置して、まずは快感に酔ってモゾモゾといやらしく振り合わせている
太腿を撫でる。

優しく、優しく、ゆつくりと、ねっとり、じつくりと……。

「ふにや……ああっ……あっ♡ じれったいのお……うあっあああ
♡」

胸に激しく吸い付き、舐めまわし、左手でぐにぐにと忙しく形を
変えてやりながら、右手はあくまでもゆるりと責める。

太腿の外側をそつとなぞるように、楕円を描いて時間をかけて愛撫
していく。

黒歌の切なそうな表情と、

(焦らさないでえ……!!♡♡)

という身体の声を頼りに、じりじりといじめ抜く。

もうこれ以上堪えられない！ 黒歌がそう言いだしそうなタイミ
ングで、そつと右手を内腿へと進める。

それだけで、黒歌はビクビクビクツツと反応した。喘ぎ声がより大き
くなり、彼女の股が自然と開いていく。結合へと向けて進んだ状況
に、黒歌の瞳が期待に満ちて、熱い眼差しを感じる。

もう、欲しくて堪らないんだろうな……だが、まだやらん！

外側よりもなお優しく内腿に指を這わせる。

「んっひいっ！ ああっ！ 胸、乳首すごいのにイっ！ なんで、そつ

ちはッ……ひにやああ♡」

黒歌が優しいのはやめて欲しいと言うからだぞ。

だから胸は激しく責めてやっている。だが、優しいのに弱いらしいので、下半身はじっくりと焙ってやる。

上半身と下半身、それぞれに与えられる官能の落差でよがり狂え！

「おかし、おかしくなっちゃう……、頭が、ああんっ♡ うにやあああ、ゾクゾクしちゃうのお……♡」

おお、いい感じだ。やはりグレモリーの魔力は素晴らしい。漬け込まなくとも、声が聞こえるってだけでガイド付きみたいなものよ。

骨の髄、頭のご真ん中、子宮の奥に俺のよさを刻みつけてやる。優しい、優しいご主人様としてな。

「お前が俺のものになったことを後悔しないように、もっと感じさせてやるからな」

「んっっ……んあああっ……♡ まだ、まだ……ああっ」

内腿のどこもかしこも堪能しつつ、すっかりとほぐし終えたのようやくその先へと進めることにした。焦らすのは良いが、限度はある。じりじりとても進んでいるのならば、不思議と我慢できてしまうものだ。

ダウンロードのパーセンテージが一向に進まない画面はぶっ壊したくなるが、ほんの少しでも進んでいるのなら待てるような感じだろうか？ 違うか？ まあ、何にしろ最後の絶頂の快感を押し上げるための、『タメ』なのだよ、これは。

「ッ……！ んはあ……ふにやあああ……♡」

乳首から口を離し、両手を黒歌の左右の太腿に添える。胸への責めから解放されて息も絶え絶えに、艶めいた吐息を繰り返す黒歌を見据え、

「足を開け」

そう命じると、彼女はコクリと頷いた。

緩く開いていた彼女の両脚が、そろりそろりと広がっていく。

淫らな蜜をこんこんと沸き立たせる女の泉を見つめながら、俺は着

ていたものを脱ぎ捨てた。でも黒歌は脱がさない。半脱げ着物は良いものだ。

「挿れやすいように持っている」

M字に開いた彼女の両脚の間に腰を進め、ガチガチにいきり立った逸物をこすりつける。

「んっ、恥ずかしい……こんな格好するの……」

黒歌自身に自分の両脚を抱えさせるようにさせると、彼女の顔がこれまで以上の羞恥と興奮によって真っ赤に染まっていった。期待に濡れた割れ目からは、メスの匂いがプンプンと漂ってくる。

どうにもこれまでの男はすぐにぶち込んでばかりだったようだからな。そいつらとは違うのだと覚え込ませないといかん。実際はどっこいどっこの肉欲獣なのだろうが、なに、黒歌の中での認識が異なっただけさ。いいのだ。

俺の命令があれば、股を開いてこんな格好もしてしまう。そういう風に教え込んで行かないとな。

「にやああん♡」

くちゆりと男根の先端を割れ目に触れさせると、黒歌が鳴いた。

「欲しいか？」

「ああっ……欲しい、欲しい……。主さんの子種、いっぱい欲しいにや……♡」

腰を動かし位置を調整し、伸し掛かるようにしてゆっくりと挿入していく。

黒歌が陰毛を処理してごく短くしているため、我慢汁を滴らせる先端が割れ目へと沈みこんで行くさまが、実によく見える。これがなんともいやらしい。

牝の肉が龟头を包み込んでくる。なんというか、ふわふわとろとろとした感触だ。

「んんっ、はああっ、はいって、私の中、いっぱいになってく……んんっ♡」

おお、これはいい。ふわとろ系のマンコで締め付けはそこまででもないが、ザラザラとしたつぶつぶがあって刺激自体はかなり強い。

これまでにない快感に歯を食いしばって耐えながら、じつくりと肉棒を押し込んでいくと、結合部から押し出された愛液がぶちゅぶちゅとあふれ出し始めた。

「くおっ、いいぞ黒歌……すごくいい」

「ああん……奥まで入っちゃったにやん……♡」

挿し込んだ状態で慣らすまでもなく、彼女の肉壺が蠢いてザラつきをこちらに押し当てて快感を与えてくる。放っておくと動かなくとも果ててしまいうさだ。

なんつうものを持っていやがるんだ、この黒猫め。さすがは異種族のオスから子種を搾り取って繁殖する妖怪猫ということか……滅茶苦茶気持ちいい。

だがしかし、負けるわけにはいかんだ。長時間の『待て』状態によつて、俺のマラがさつさと射精したいと喚いていたとしても。

「んっ……んっんんっ……ふにゃあ……ああん♡ 主さあん♡♡」

出来るかぎりの優しい笑みを浮かべて、胸の上の方、鎖骨、首筋、頬、目元、おでこ……鼻の頭。黒歌のあちこちにキスを降らせる。

暴発しそうな肉棒を抑えるための時間稼ぎでもある。

最後に唇を触れ合わせてやると、彼女の表情が目に見えて緩んだ。こちらを見つめてくる瞳が、甘く潤んで蕩け始めている。

両手を使って彼女の身体を、ゆつたりとなぞっていくと身体中の力が抜けてふにゃんとしていつているのがよく分かる。

「もう手を放してもいいぞ」

「ふにゃん♡ んちゅっ……ちゅッ……んあう♡♡ なんて、こんな気持ちいいの……♡♡」

自由になった手をこちらの背に回し、甘えるようにしがみついていた。そんな彼女がキスをねだってくるので、それに応えてちゅっちゅっつと何度も唇を触れ合わせる。

しばらくつえばむのを繰り返した後で、深く重ね合わせた。すると今度は開かせるまでもなく彼女の方から舌を伸ばして来たので、レロレロと音を立てて絡めて楽しむ。

「なぜって……」

「あつ……んっ、ちゅくっ……」

答えを返そうと唇離して上半身を持ち上げると、縋り付く様にして唇を重ねられた。

余計な力みもない、表情はトロットロに蕩けている。向こうから積極的キスをしてくる状態。

実に良い感じだ。もうこれでいいだろう。俺が我慢できない。

「じゅっ……動くぞ」

「はい♡♡」

突き当りまで押し込んでいた逸物をゆつくりと引き抜こうとする。

「うっ、おおっ!？」

いきなりやって来た強烈な快感に思わずうめき声が漏れてしまった。

なんだ、これ!? なんだ、この穴!?

ふわとろなのに、とんでもなく刺激が強い。挿入するとき感じたあの粒々が、これまで女を鳴かせてきた自慢のカリ首にくちゅくちゅと引つ掛かって、とんでもなく気持ちいい。

油断していると、みこすり半で出してしまいそうな絶品なアソコじゃないか! これ、あれか? 俗に言う数の子天井ってヤツか!?

いや、でもこれは……。

ゆつくりと引き抜いていくと、カリに引つ掛かった粒々がくちゅくちゅと向きを変えていくのが分かる。

これは内側に向かって、倒れ込んでいるのか……?!

挿して、抜いてとゆつくり繰り返しながら、具合を確かめる。すると、挿入するときよりも、引き抜くときの方が刺激が強い。

「んにゃああん。ああつ、これ好きい……ふあああん♡」

男のモノを啜え込んだら、離さない。もしくは、抜こうとすると射精してしまう。黒歌はそんな名器を持っていた。

これが、猫?の穴か……。ヤバイ、これはヤバイ……絶対モノにしてやる!

同種とすることで最高に具合の良くなる悪魔のフィット感とは異

なる、他種のオスの子種をきつちり奪い取るための牝種族の秘裂。

たまらんな、これは……!!

とはいえ、こつちが籠絡されてしまうわけにはいかん。俺が主人で、黒歌が下僕。そう躡けていかなければならんのだ。

「随分と気持ちよさそうだな」

「う、うん……、なんで、こん、な……こんなもの、ああんっ……こんなのはじめてにやん♡♡」

俺はにやんにやんと喘いでいる黒歌の尻尾にそろりそろりと手を伸ばし始めた――。

2—22 黒歌のお仕事（4）

「んああっ、あっ、あーっ、んにやあーっ♡」

発情した牝猫のような叫びが響く。

グレモリーの城の一角、次期当主とその女たちのために用意されたその場所の一室で黒歌は今日も男と交わっていた。

キングサイズのベッドの上、仰向けに組み敷かれた黒歌は、近く主となる男に乱暴に腰を打ち付けられる。

「ああっ、深いっ、深いっんん♡ なん、で、こん、なああ♡」

初めて肌を重ねた日から、しばらくの月日が過ぎていた。その間、黒歌は週に一度か二度ほど呼び出され、そのたびに情交を繰り返してきた。

他愛のない会話をした後、口説かれながら寝た日。

二人で出かけて遊んでまわり、その後その場で部屋を借りて行為に及んだ。

少し接し方に慣れてきたところに悪戯を仕掛けてみた結果、おしおきと称して外で抱かれたこともあった。

「うあっ、あっ、ひあっ♡ 激し、はげっしいのお、んんっ、んくっ……にやあ♡ どうし、て……え♡」

これまで、こんなに激しくされたことはなかった。男との行為はいつも優しく繊細さを感じさせるもので、必ず長くしつこすぎるくらいの前戯から入っていた。

繋がるのは、いつも黒歌の方から「ほしい」と求めてしまうくらいにドロドロに蕩けさせられてからだだったのだ。

それが今日に限って、いきなり押し倒され力づくで股を開かされて、強引に押し込まれた。

「お前がいつも優しくしないでくれって言うからだ」

「んにやあっ、そ、れは……あうっん♡ あっん、ああっ、ふあんっ♡」

ごりごりと男の腰が押し付けてくると、女の両脚がぐいとさらに開いて腰が浮き始める。がつんがつんと叩き込まれるリズムに合わせて、黒歌の乳房がふるふると揺れた。

白い二つの半球には、男の指が食い込んだ際についた赤い跡が残っている。

「ああつ、囁んじゃ……ひいん♡ ちぎれちゃう」

根元から絞る様に握られ歪に形を変えられた乳房、そのぷっくりと膨らんだ乳輪の中央で主張している先端。そこに男の歯が食い込む。

「にやああ、許してえ……、いやあ、ああん♡」

「許す？ お前の望む通りにしてやっているだけだ。どうやらこっちの扱いの方が好きらしいからな」

子宮を突き上げられるたびに、黒歌は身悶えして悦んでいた。

暴力的なピストンと玩具のような扱い。それなのに、感じてしまう、気持ちよくなってしまふ。

男と女の結合部から聞こえる、ばちゅん、ばちゅんと淫蜜の弾ける音が止まらない。

「にゃんっ♡ ひあつ……あひっ、あひいん♡ ちが、ちがうの」

もう身体の何処を触れられても気持ちいい。

弱いところ、感じてしまうやり方。自分自身ですら知らなかった性感帯。これまでのまぐわいの中で、黒歌のすべては男によって把握されてしまっていた。

「何が違うんだ？ 最初っから濡れまくっていたじゃないか」

会えばいつも交尾していた。ベッドのある部屋に連れ込まれるのは、行為の始まりの知らせだ。

なら、もう少しでそれが始まるのだと思ってしまえば、女は濡れる。

腰を抱かれ、この部屋に連れてこられた時点で黒歌の秘所は準備を終えていたのだ。

いきなりぶち込まれても何の痛痒も覚えず、すぐに感じて乱れてしまふ。黒歌はそんな女にされていた。

数度の性交で、あるいは最初の行為のその日から、黒歌はモノにされてしまっていたのだ。

「ちがうの、違うのよ……んあつ♡ ああつ♡ あつ、あつ、あつ♡」

「こんなによがっておいて、おかしなことを言う」

乱暴に扱われても感じてしまうのは、最初の日の、そしてこれまで

男から受けた「優しい」扱いのせいだ。

それをどうしても身体と心が思い出してしまうから、何をされても気持ちよくなってしまう。

しかも、黒歌には「負い目」があった。そのことを思うと、こんな風にされるのも当然のように思えて来てしまう。

「優しいの、好き。ああつ、でも、んっ♡ 好きだから、好きになっちゃうから……ダメなのよ、うにゃんっ♡」

男に入れ込み過ぎるのは良くない。母の二の舞はごめんだ。

強い牡の精を受けて子供を作りたくなるのは種の本能だから、それは構わない。

でも、それ以外のことを男に期待してしまつたら……。それで欲しくなつて、でも手に入らなかつたら……。

「ふん、まあいい。これからのお前の扱いはこうしてやる。どうやら俺のことが嫌いらしいからな」

男の手が腰をガツチリと掴んだ。そうして、勢いよく男性器を突き込んでくる。

ゴリゴリゴリと深く肉槍を突き立てられ、赤子を孕むための器官に刺すような悦楽が奔り、黒歌は牝の悲鳴を上げた。

「ひいいっ、ひいやああつ♡ んひい、んひいいイ♡♡!! きれいなじゃ、嫌いじゃにやいのお……」

気持ちいい。もうこのまま性奴隷のように扱われていくのだとしても、それはそれでいいのかもしれない。そんな風にさえ思えてくる。

情欲のはけ口として道具のように酷使され、子供ができても見てもえもらえず……そんな未来を想像してしまつても感じてしまう。

「どっちなんだ？ はっきりしろ!!」

ガンッ！ ガンッ！ ガンッ！ と力任せに撃ち込まれる肉の杭に身体と理性が軋んでいく。

「ああつ、イクっ！ イっっちゃう♡ はあん、あつ♡ もう、もうっ……んあああつ♡!!」

へんになる。おかしくなっている。

男の肉槍がどちゅ、どちゅつと牝肉を抉り回すと強烈な悦楽が脳髓を犯して、頭の中が爆発しそうになってしまう。

「なら、イケ！ おら、イケッ！ 中に出してやるからそれに合わせろ！」

「んにやああ♡ ああつ、好きイ！ 赤ちゃんの部屋、いっぱいにしてえ♡!! 私の中……滅茶苦茶に壊してえ♡♡!!」

見上げる男の瞳が情欲に染まり、食いしばった口の端から涎を垂らしながらさらに動きを加速させてくる。

黒歌の子宮がキュンキュンと収縮し、牡の射精を貪ろうと駆け上がっていく。

腰が動く啞え込んだ牡の逸物を離すまいと、締め付けたまま激しく踊る。

強い牡の精を求める猫又の本能が、叩き込まれる快感と合わせた黒歌をどこまでも恥知らずによがり狂わせる。

「堕ちろッ！ 堕ちろッ！ そら、イケええッ!!」
「ああああつ！ いいいッッッ♡ んにやああッッッ♡ イつてるうっ♡♡!」

女の両脚が男を逃すまいと、無意識に相手の身体に巻き付く。胎内に注ぎ込まれる精を一滴たりとも無駄にしないように、膣内が蠢いて内へ内へと男根を誘い込む。

それに応えて、男の腰がぐいぐいと押し付けられた。黒歌を子宮の入口を突き破らんばかりの強烈な圧迫に、膣の最奥が痛いほどに痺れて意識が混濁していく。

「はあ、すごい、主さんのおちんちん……すごいにやああ……」
焦点の定まらない瞳で、黒歌は開きっぱなしの口から荒い吐息と共に言葉をこぼした。

そんな女の様子を見下ろす男は、それを見て満足そうに笑みを浮かべると。その背に回された彼女の両脚をほどき、亀頭が半ばまで見えるほどに腰を引くと、一気に突き込んだ。

「いにやああッ♡！ ああつ、まって、んあつ、んんっ、いま、いま、イツた、とこ……んあああつん♡♡!!」

絶頂の余韻に浸る間もなく、きわめて敏感になっているタイミングでのピストンの再開。

男は情欲の塊をつい今しがた吐き出したばかりだと言うのに、まったく衰えることのない熱く硬い剛直を遠慮も容赦もなく叩きこんできた。

「ひいつ♡ ひんっ♡ あ、まっ、んやあ♡ ああっ、いった、イッてるからあツツ、つよ、すぎるの、ひいひいイ♡♡♡!!」

やめて、やめてと懇願しても男は力任せなストロークを止めてくれない。黒歌の事情など知ったことではないとばかりに、ズブズブと挟り叩きつけてくる。

「ひいっ♡♡ ひいっ♡♡ あッ♡♡」

普段の悪戯めいた余裕のある面影など粉微塵にされ、黒歌は大きく開いたまま閉じられなくなった唇から覗かせた舌をビクビクと震わせ、強すぎる快感にぐちゃぐちゃになった瞳で男を見上げるばかり。

彼女の手は男の腕を必死で掴んで縋り付く、立てた爪が彼の腕の肉に食い込んでいく。

「ああいい♡ んんつきぎい♡ はあんッ、んはアンツ♡♡

イッてる、また、ああッ、おりて、おりてこれにやいいん♡♡」

反り返った背が戻らない。ダラダラと垂れ流されっぱなしの涎と淫蜜。

黒歌の意識と全身が男のもたらす圧倒的な悦楽に染め上げられていく。

……………。

「許して……、もう許して……」

終わりのない連続絶頂の淫獄から黒歌が解放されたのは、それから一時間は過ぎてからだった。

胸や腹を大きく上下させる荒い吐息を繰り返し、ぐたりとした様子で黒歌は男に許しを乞う。

もう無理だ。これ以上されたら、おかしくなっている頭がもつとおかしくなってしまう。

「何を言っている？　まだこれからだぞ」

ベッドの上で倒れ伏す黒歌の横で、男は水を飲んでいいた。ペットボトル容器の半分ほどを飲み干すと、彼はそれを黒歌に差し出してくる。

受け取るやいなや、こぼれるのも構わずに喉を潤す黒歌に男はまだ終わりではないと告げてきた。

「はあ……、はあ……、んんっ……、はあ……、そん、な……」

幾度も男の精を受け、ドロドロになった黒歌の牝穴。表に見えている場所は真っ赤に膨れ上がっていて、これまでの行為の激しさを物語っている。

胸も背も腰も、唇も、男の乱暴な愛撫によって赤く染まっていた。

「まだ答えを聞いていないからな。キツイ方が好きってことでいいのだろうか？　なら、そうしてやるだけだ」

黒歌はグイツと身体を転がされ、うつ伏せにされた。その背中に胸板を当てるようにして、男が覆いかぶさってくる。

俗に寝バックなどと呼ばれる体位を取らされた。

「んにゃ、ンふうっ……、ああつ、なに、を……えっ、コレッ!?　ひいつ!!」

股の間からずりりと入り込んだ逸物が、黒歌のクリトリスをザリザリとなぞっていった。

その感触がおかしい。通常の男根とは異なる、異様なほどにブツブツとした刺激だったのだ。

「俺は最近、龍に変化する術を覚えたんだが……。それでイロイロと試していたら、こういうことが出来るようになってな」

顔の横に彼の手が置かれる。それは黒歌の見ている前で徐々に姿形を変えていき、鋭い爪と硬い鱗を備えた異形のモノとなった。

「ドラゴン……?」

「そうだ。身体の一部だけを龍のそれに变化できるようになってな……」

ジクジクジクツつと凶悪な刺激がクリトリスに連続して突き刺さる。たまらず悲鳴を上げて仰け反る黒歌を、男の手がベッドに押し付ける。

「うっそ……まさか……。や、やあ……やめて、やめて、やめてえええ!!」

首を横に何度も振って拒否する黒歌に頓着せず、男はそのあまりにも凶悪な代物を彼女の膣へと沈めていく。

未だ連続絶頂によって足腰が立たず、力の入らない黒歌にその侵入を退ける術はない。

びっしりと逆さの肉棘を生やした刺々しいドラゴンペニス、黒歌の牝の中心を貫いた……!!

「アアッ！ アアアアッ♡♡!!」

グチグチグチグチグチイツつと音が鳴るような刺激が、黒歌の膣内を通り抜けた。無数の逆棘が肉壁と快樂肉粒をかき分けて、最奥まで撫で上げて行った刺激によるものだ。

「なんだ、入れただけでいったのか？ それじゃあ、この後がもたないぞ」

「痛い、痛いいい、のに……ンアアアッ、キモチイイ♡♡」

奥まで刺し貫いたモノを、男がグリグリと振じる。すると膣内に入り込んだ肉棘に引つ掛けられて、黒歌の中身まで振じれていく。

男が身体を左右に傾け、腰を捻るのに合わせて、黒歌は啼いた。身も世もない痛みを覚える快感から逃れようと、必死で後ろに顔を向け哀願の眼差しで男に許しを乞うも、

「はは、おらっ！」

「イいッ、ヒいいいん♡♡」

涙があふれてくる。膣内をズタズタにされているかのように痛みが奔るのに、それがどうしてだか気持ち良くて仕方がない。

「ぬい、て……抜いてえ……、これ、ダメっええ……、もう、アアッ、もう、こんあおお♡♡」

「いいのか？ ……じゃあ抜いてやろう」

黒歌の尻肉に触れていた男の下腹部の感触が遠ざかる。男か腰を

引くのと同時に、強すぎる快感が黒歌を襲った。

入れられただけで絶頂させられた侵入時の比ではない、激的な官能。痛いのに、気持ちいいという矛盾。

「あ、ダメえ、抜いちゃダメ、ダメ、ダメエエっ!!」

肉棒の逆棘が、女の中にある襲と内向きに生えた快樂粒に引つ掛かる。ミチミチミチとひっくり返される膣内。

「啜え込んだ牡を逃がさず精を搾り取るための牝猫の性器と、突き刺した牝に確実に注ぎ込むための牡龍の性器ががちりと噛み合って、互いに強烈な快樂を発生させる。

「ぐっ、オオオッ！ ウっおおお、ぐっ!!」

少し腰を引いたところで、男はすぐに押し込んできた。男もまた、交尾相手を逃がさないための生殖機構同士が噛み合ったことによる強烈な刺激に耐えられなかったのだ。

萎えるまで抜けそうにない。強引に引き抜けば女の中を引き裂いてしまう。この結合は精力が尽きるまで終わらない。

「あっ、ああっ、ンアアアツツ♡♡！ んはっ、んはあっ、んはあっ♡♡！」

子宮が猛烈な勢いで動いた。それが黒歌には分かってしまった。身体が孕もうとしている、すぐに子を宿そうとしている。

「あっ、できる！ できちゃう！ ♡ これ、孕む、赤ちゃん、アツ、アツ、アアアアツツ♡♡」

少しだけ引いて、すぐに最奥をノックされる。素早くごく短いピストンが排卵を促してくる。

仙術により生命の気配を感じ取ってしまう黒歌の脳裏に、排出された卵子に牡の精子が群がるイメージが浮かんでは消えていく。

「んにやああああ♡♡ 切れる、消えちゃう、アアツん、術が解けちゃう……ううう♡♡」

発情期をコントロールしていた仙術が、官能に押し負けて解けていく。

「なんだ、術？ なんの術だツ!?!」

「んあっ、ああっ、しちゃう、しちゃう、にやああん、発情期、来ちゃ

う、来ちやううう♡♡♡」

制御が効かない。身体が孕もうとしている。この牡の子種を受け入れて、万全の状態で子を作ろうと蠢きだしてしまっている。

「そうかつ！ そうかつ！ いいぞ、黒歌！ 俺の子供が欲しいんだな!?!」

「うにゃん、欲しい、欲しい、欲しいのおお♡♡ もっと、もっと突いてええ、子種、たくさんちょうだいっ♡♡」

「いくらでもくれてやるぞ！ おら、おら、おらアツ!!」

「んひいん、みぎやああん♡♡ ああつ絡めないで、ふああつ、魔力までええ♡♡」

意識してなのか、無意識なのか、男の膨大な魔力が黒歌のそれを呑み込もうとしてくる。

オーラが混じり合う。心の中のイメージに左右される魔力に引きずられて、男の強大なオーラに心までも惹きつけられていく。

「アアツ、好き、好き好き好き好き♡♡!!」

「なんだ、やつぱり、痛いぐらいの方がイイんだな!!」

「ちがつ、違うの、優しい方が好きイイ、ああつ、でも、でもお、ンアアイイん♡♡」

発情したオスとメスの声に混じって、ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅと泡立った粘液の音が室内にこだまする。

「くうおおっ!! 出すぞ、出すぞツ！ 孕めよ、孕め、孕めツ！ 俺の子を産めええ!!」

「いにやああ♡♡ うむ、産む、産むツ、主さんの子供おお♡♡!! んゝ あゝあゝ、イゝツグウウっ♡♡♡♡!!」

超越的な魔力に支えられた、尽きることのない龍帝の精力。

黒歌は気を失うまでそれをひたすら受け止め続けた。

2—23 黒歌のお仕事(5)

目を覚ますと知らない部屋だった。

黒歌は鼻をスンスンと鳴らして周囲を確認し、隣に寝ている紅の髪の毛の胸に頬をすり寄せる。

無防備な寝顔だ。意識のあるときならばともかく、今ならば自分でも命を奪えてしまうだろう。

「油断しすぎにゃん♪」

もそもそと動いて胸や下腹部、頭をスリスリと男のあちらこちらに擦りつけていく。

はて、どうしてこんなことを……と勝手にそうしてしまう自身の状態に違和感を覚え、発情期をコントロールしていた仙術が解けてしまっていたことを思いだした。

慌てて戻そうと一瞬だけ思考して、すぐに思い直す。

前回自然に迎えた発情期のどうしようもない飢えを今は覚えていない。不思議に思っただけで自分の下腹部に触れてみるとそこがポツコリと膨れていた。

「こっちの術は解けなかったのね」

嬉しいような、残念なような、なんとも言い難い気持ちで膨らんだ腹を撫でる。

一夜にして赤子が出来て育ってきた。ということではない、あまりにも大量に注ぎ込まれた子種が術の影響で胎から出て行けずに溜まってしまっているのだ。

正直、ちよつと苦しい。苦しいが、嫌ではない。

しかし、この後のことを考えるとどうしてもため息が漏れてしまう。

その気分を誤魔化すように、紅髪の少年に身体を擦りつけた。そうしている、ゴロゴロともクルルルルとも声が自然と出てくる。

「はあ……。寝顔はカワイイのにな」

見た目は美少年なのに、とんでもない性豪だ。発情期の真つ最中にされてしまったのに、今日の所はもう勘弁というほどに満足させられ

てしまっている。

そうやって黒歌がすりすり肌を寄せていると、眠っている少年の股間がムクムクと勃ち上がってきた。

「わぁお……まだいけるにやんて……こっちは凶悪すぎにやん♡」

あれだけ自分に中出ししまくってにおいて、まだ満足しないのかコレは。なんという生物だ。とんでもなさすぎる。

純血の悪魔ってヤツは皆こんな風なのだろうか。男性悪魔にはハーレムを形成している者が多いと聞くが、これならそれも納得だ。

ただ、黒歌の現在の『王』であるエダーギ・ナベリウスは、黒歌の父親と同じで女よりも研究といった様子だったが。欲望に忠実なのが悪魔なので、その欲望の方向性によって変わってくるのだろうか。益体もないことを考えながらも、黒歌は指で輪を作り勃起した肉棒を扱き始めていた。

「んふふ……」

気持ちいいのか、眠っている少年の顔に色が浮かぶ。吐息が変化して、感じていることが分かる。

「お返しにやん♡」

あれだけの真似をされたのだ、このくらいの仕返しは可愛いものだろう。

黒歌のような女の横で無防備に眠っているのが悪い。公爵家の次期当主で、魔王の弟で、将来の超越者で、赤龍帝なんていう立場にあるまじき態度である。

もつと警戒しておかないとダメだろう。魔力ならば分からないが、仙術で生命の根幹を傷付けられたらどうするつもりなのか。

「信用されてるって……ことなの？」

ギョツと心のどこかが締め付けられるような気がした。ちよつとサービスしてやってもいいくらいに。

黒歌はくねくねと肢体を擦りつけるのをやめて、ガチガチになって血管の浮き出たオスの象徴に唇を近づけた。

「んっ……ぺちや……んんっ……じゅっ……ふうん……」

舌を這わせ舐め上げていると、それが綺麗に掃除されていることに

気付いた。昨夜の行為によって濃厚にまとわりついただろう、男女の性交の汁の味がしない。

気になって自分の匂いも嗅いでみるが、どうやら洗われているようだ。いつの間にかと思い、気を失っている間にかと簡単に結論付ける。

部屋も変わっているのだ。あの後、綺麗にされて清潔な場所に運ばれたのだろう。

「ちゅっ……そのときに置いていけば良かったのに……にゃん♡」

ほんの少し前よりも熱心に、黒歌は舌を遣った。にじみ出て来た先走り汁を味わい、口内に女啼かせの逸物を呑み込んでいく。

「あんんう……ふううう……、ごくっ……ふんっちゅっ……んんっ、んんっ……じゅばあっ……」

一旦口を離すと、ペロリと唇を舐めまわす。

下の口はお腹いっぱいでもう受け入れられないが、どうやらまだまだ自分は発情しているのだと自覚する。

少年のモノが美味しくて仕方がない。ずっと舐めていられそうなきがしてくる程に、愛おしく思えてくる。

「んあああ……♡　じゅりゅっ……じゅりゅりゅ……うっん、ううんんっ……んんっはあ……」

しばらくそうしていると、肉棒の根元からググッと何かがせり上がってくるのを感じた。ミチミチと太くなり口内を圧迫してくるソレに噴火が近いことを確信し、黒歌は頭を上下させる速度を速める。

ぐびゅっ、びゅっるうっ、びゅっ、びゅっるるう!!

「おくっ、じゅるっ……ごくっ、んはあああ……なんで、まだこんなに濃いよ」

さすがにこの刺激にゃん♡　と呟いて口内を舐めまわし喉を鳴らして白濁を嚥下した。

「お前、何やってるんだ」

「あ、起きたの……んー、なんとなく?」

さすがにこの刺激に目が覚めたのか、リヴラクスが呆れたような目を向けていた。

「なんとなくて飲むのか……このエロ猫が、昨日あれだけやったのに

まだ足りないのか」

「にやはは……いや、そつちは満足よ。もうお腹いっぱい」

言いながら、ポツコリとしてしまった腹を見せる。

「いや、いやいやいや、まさか一晩で出来たのか?」

「まつさか! そんなワケないにゃん♪ ちよつと仙術で子種を溜めてるだけよん」

「ああ、それでか……ああ、そういうえばそうだった。お前が寝てしまった後、こつちに運ぶときもそうだったな。仙術ってなんなんだ一体……」

仙術は生命の流れを操る術であると言われる。生命に流れるオーラ、チャクラなどと呼ばれるものを扱う。

気やオーラの流れを読み、周囲や特定の相手の状態を知ることや、自身や他者の肉体の内外を強化し、あるいは逆に弱めることも出来る。

「それくらいは知っているが、こつち方面にも随分応用が効くんだな」
男の手が黒歌の頭に伸び招き寄せる。唇を合わせてから、彼は一瞬「しまった!」と言いたげな顔をした。

「ん? どうしたの?」

「いや、俺の精液の味がした……どうも抵抗があるから、フェラさせた後はあまりキスしないようにしていたのにな」

「にやはは、ボーっとしてるからよ。だいたい、女にはたくさん飲ませてるんでしょ?」

「まあな……あーところで、話を戻すが、仙術はそつち方面にもかなり効果があるのか?」

「そうねー、まあ私が発情期をいじってるのもそうだし、房中術なんて呼ばれているのも仙術の範囲よ。主さんが昨日使ってたやつみたいなの」

「ん? いや、俺は仙術は使えないぞ」

「はい、それウソにゃん。シてるときにオーラを合わせて来たでしょ? あれもその一種よ。ま、本来は治療なんかに使うことが多いんだけど。たしか、悪魔は同じ眷属同士なら魔力の波長が同じだとかで、

傷を癒したりできるんでしょ?」

「ああ、やったことないけどな」

「私もないから、実際のところは知らないけどね」

あのナベリウスと肌を合わせて怪我の治療なんてゾツとしてしま
う。だが、同じ眷属の悪魔同士なら魔力のオーラを合わせることで致
命傷に近い傷でも癒せるのは本当のことだ。

神器や、そういった特性を持った魔力、高位の魔法ほどの即効性は
ないが、おおよそ一晩もあれば大抵の怪我は治せるらしい。

「仙術は生命の根幹に直接触れる術だから、むしろこつち方面の方が
本領よ」

言いながら、黒歌はその豊満な胸を男の肩に押し付けた。

「うーん、そうか……悪魔でも仙術は使えるのか? 従兄に闘気を扱
うのがいるんだが」

「あーっと、前に聞いたサイラオーグって子のこと?」

「ああ、話していたか」

「親戚にいるのなら、少しは才能があるのかもしれないわね。でも、な
に、仙術つかいたいのか?」

「ん、ああ、別に戦いに使おうとは思っていないが……こつち方面が本
領ってことなら、子供ができやすくなるかと思ってな」

「あー、そういう……」



悪魔は子供が出来にくい。悪魔に限らず、基本的に長寿の種族ほど
子供が出来るまでに時間がかかるとされている。

それこそ神話の時代から存在する神々がポンポンと子供を成して
いたら、今頃世の中は神様だらけだ。

神話の中では、一撃必中とばかりに子供を作っているゼウス神です
ら、何万と子供がいるわけではない。彼の神がその全世界に知れ渡る
精力を全開にして、必中スナイパーをかましていたならば、その子供
の数は毎年1000以上増えていたことだろう。もしそうならば、オ

リユンポス大勝利、欲望の未来にレディ・ゴー！ 間違いなしである。「まあ、神々は信仰かなにかの関係で限界があるのかもしれないが、大戦前の悪魔はかなり数が多かったらしいからな」

グレモリー公爵家にはかつて二十六の軍団があったという。

一軍団は十大隊によつて構成され、一大隊は三個の中隊によつて成り、中隊は二つの小隊が合わさつて出来ている。一小隊の人数は百名だったらしいので、一軍団はおおよそ六千名。

それが二十六軍団あったのだから、グレモリー家だけでも十五万を超え軍勢が居たわけだ。

当時のグレモリー家は七十二柱の中での序列はどちらかといえば低い方だったので、軍団の数は少ない方だった。序列が全てではないが、当時から七十二柱最高位にあつたバアル家などは、六十六軍団を有していたと聞く。

そんな悪魔の軍勢も大戦と、内戦と、二天龍のせいでもガツツリと減ってしまった。

逆に言えば、信仰というか人間の幻想とでもいうのか神々がやたらめつたらと増えない要因となつていそうな、神話的なキャパシティのような何かがあるとすると、その空き容量が大量にあるということでもある。

「よくそんなこと考えるわね。妖怪でも、悪魔でもそんなおかしなことを考えないわよ」

「ドライグが言うには、俺の魂は人間のものらしいからな」

俺が悪魔の世界に生まれて思ったことの一つに、悪魔と言う種の想像力というか妄想力の欠如がある。

どうやらそれは天使や堕天使、他の神話の種族など、異形の存在全般にあるようで、なんというのだろうか……こう余計なことを考えないところがある気がするのだ。いや、考えてはいけない……だろうか。

『始まりの始まりを考えたところで答えは出ない、そんなことより今を生きろ』といった感じのことをお釈迦様が言ったそうだが、異形の存在のほとんどはその通りに生きている。彼らはそれを考えない、自

分たちがどこから来たのか、どこへ行くのか、そういったことに思いをはせない。哲学しないのだ。

「人間って不思議よねー」

「そりゃ、人間の信仰やら欲望やらで神も悪魔も存在しているそうだからな」

考えることが自体が出来ないのかもしれない。人間の信仰あつての神ならば、創世や天地創造についての神話の全ては偽りとなつてしまふ。

聖書の神話にしろ何にしろ、先に人間ありきならば、どうして神々が天地を創造できるって話だ。アイデンティティ崩壊の危機だ。そりゃ思考が停止する。

大学生やつてた頃に、単位が楽つて話で取つた『哲学』の教授が言っていたが『神は子供の「なぜなぜ」攻撃に答えるために生まれた』なんて話も案外本当なのかもな。

とにかく、第一原因を『神様』って答えておけばそれで話が終わるからなあ。

「雷はなぜ落ちるの?」「雷神さまのお怒りじゃ」

「雨はどうして降るの?」「天の神様が降らせて下さる」

「この世はどうやってできたの?」「神様が無から作つたんだ」

「じゃあ、神様は誰から生まれたの?」「それは考えてはいけない」

こんな感じに。

「ぎにゃー! やめて、やめて! 頭が割れちゃうー!」

「悪魔に聖書じゃないが、異形に存在論はキツイのか……。ま、とにかくそんなことはどうでもよくて、今は子作りの話だ」

分からんことを考えていても仕方がない。そんなことよりセツ〇スだ。

気持ちいいは、全てに優先する。だつて欲望に生きる悪魔だもの。「で、仙術覚えたら子供が出来やすくなるのか?」

「まあね。生命の大元に干渉するのが仙術だから、そりゃそうよ」

「あとは俺にその才能があるかどうか、か……」

「別になくても大丈夫なんじゃにゃい? 主さんのバランスブレイ

カーって、眷属の性質を取り込んで、増幅して、分配するんでしょ?」

「ああ、そうか。黒歌は種族的に仙術の才覚があるんだったな」

「こそ」

「そう考えると、安い買い物ってことになるなあ……。黒歌、お前絶対
買い取るから逃げるなよ」

「にやはは……。いまのところそんなつもりはないから……。でも、も
し何かあっても、引き受けてくれる?」

それまで楽しそうに話していた黒歌の表情が急に陰った。

「何かあるのか?」

「あるけど、言えないのよ」

「そうか」

まあ、よほどのことでなければ構わないが……。

「どうしても言えないのか?」

「契約があるから、無理よ。言えるのは、人によっては物凄く不愉快に
感じるかもしれないってことぐらい……。にゃん」

「ん、分かった。覚悟はしておく」

それから数時間ほどゴロゴロしてから、黒歌はナベリウスの分家へ
と帰って行った。

しかし、うん、仙術で子供の出来る確率を上げられそうなのか。

これ知れ渡ったら仙術の素養のある種族が、悪魔の眷属として大人
気になって狩られまくりそうだな……。

それで被害が広がった日には、その情報元が滅茶苦茶恨まれそうな
気がする。仙術って東洋系なイメージが強いし、俺からは発表しない
ようにしとかないとな。

一応、元は仏教徒やってた身であることだし。うん、俺の子供さえ
増えればそれでいいとしておこう。

とりあえず、眷属に迎えてからの黒歌の仕事が一つ決まったな。

『子作りの術』の開発!　これ超重要!!

これが先に分かっていたら、ギャンブルなんぞしなくとも父上から
いくらでも予算引つ張れただろうなあ。

でもなあ、これ政治的に利用したらかなりのアドバンテージになり

そうなんだよなあ。

悪魔社会の大問題の一つであることは確かなんだから。

「ふむ、仙術ではなくて、赤龍帝の力の一端で着床率を『倍加』しているといい張ったらいけるんじゃないか？」

他所の貴族悪魔から依頼されて、俺が出て行くことで子供が出来やすくなる。という形に出来れば、赤龍帝の評判も上昇するだろうし、俺個人の悪魔社会への影響力がグンと増しそうな気がするな。

「子作りドラゴン……ありだな」

『やめろ……やめてくれえ……！』

ドライグが嘆いているような気がするが、これ悪魔の重要問題なのよね。

2—24 旅立ち

サイラオーグが平民学校を卒業した。

「卒業おめでとう、でいいのか？」

「ああ、ありがとう」

平民の教育は、前世で言うところの中学校までだ。

それ以上はそこそこ金に余裕のある親を持ったヤツだけが通える。もしくは、自力で金を稼いで後から通うかだ。夜間学校みたいなものだ。

というか親に余裕のまったくない平民は学校にも通えなかったりもする。が、そもそも寿命が長く生命として人間よりずっと頑強な悪魔に生まれながら、余裕なしのカツカツ生活しているような親から生まれた子供なんて期待できない、という考えもある。悪魔って合理的なところあるから、その辺りはシビアだよな。

『命の価値は平等ではない』ってよく言われているし。

それでも鳶から生まれた鷹がいるのだろうが、そういうヤツは自力で稼いで頭角を現すから問題ないってことらしい。人間と違ってスタートが数百年遅れたところで、寿命的に巻き返すのは可能だから。

うーん、長命の種族は、やはり気長だ。俺は未だに前世感覚を引きずっているところがあるから、その辺り意識しておかないと。

「上の学校に行けるようにも出来るが」

「いや、その言葉だけありがたく受け取っておく」

サイラオーグは、実父であるバアル家当主の叔父上が貴族扱いをしていなかったために最下級の平民どもと同じ学校に通っていた。だが、今はグレモリーに来ているので望めば上級悪魔としての教育を受けられることも出来るようになった。

なんなら、アスタロト領や首都リリスにある、貴族や金持ち平民だけが通える名門学校にだって行かせてやれなくはない。編入試験が必要らしいが、コイツならやってやれなくはなかっただろう。

「レーティングゲームで力を示すなら、そっち方面の教育を望んでもいいんだぞ」

「ふっ……いや、それもいい。すまないな。おそろく、俺には合わないだろう」

生まれながらの貴族や、成り上がって上級悪魔にまでなった者であればレーティングゲームの学校なんてものもある。ここに通う成り上がり上級悪魔ってあまり聞かないけどな。出世の近道がレーティングゲームでの活躍になっているから、成り上がって来たヤツって元から試合巧者が多いし。

上級の学校、あるいはレーティングゲームの学校。どちらにもサイラオーグを通わせないととなると、ミスラさんとサイラオーグの身元を引き受けた俺の評判が悪くなりそうだが——それを言ってしまうとコイツに強制することになってしまうか。

まあ、小さい頃から辺境暮らしで、貴族の社交やらには疎いだろうからその辺りが分からないのは仕方がない。「合わない」というのも間違いないだろうしな。俺の外聞やら評判のために、バカにされ続けるだけだろう学校に無理矢理通わせるのもよろしくないしな。

いじめられるのが分かっている、自分の世間体のためだけに義理とは言え息子を気の向かない学校に無理矢理通わせる。そんな真似をしては、別方向で叔父上と同じになってしまう。あっちは表に出られないように押し込んでいたわけだが。

「で、やはり旅に出るのか」

「もう決めたことだ」

「はあ……、まあミスラさんからもよろしく言われているしな、仕方ない」

今のサイラオーグは、ハッキリ言って弱い。滅茶苦茶弱い。どれくらい弱いかって言うと、平均的な中級悪魔にようやく勝てる程度の強さしかない。

それはつまり、純血悪魔の子供に負ける程度ってことだ。レイヴェル……は、フェニックスだから比較対象にし辛いが、不死身の特性無しで考えてもサイラオーグを捻るぐらいいはワケないだろう。

黒歌に遊ばれて負けた朱乃にだって勝てない。光力を防御に回されたら、手も足もでないはずだ。殴ったサイラオーグの拳の方が溶け

る。

いくら闘気を身に纏い始めたと言っても、コイツはまだその程度でしかないのだ。

「だが、今すぐに旅立つことは許さん」

「む……理由を聞かせてもらえるか？」

「たしか、前に聞いたときに冥界の悪魔の領域をある程度見て回った後、人間界のイギリスから出発して日本を目指すとか言っていないなかったか？」

「ああ……義父上の神器に宿る赤龍帝殿と縁の深い場所から始めて、そのまま東に向かって行こうと思っっている」

ちなみにグレモリー家は日本にかなりの投資をしている。あちこちに施設を建造しているし、日本の神仏ともある程度の交流があり、なんなら神のいない神社をいくつか所有しているほどだ。

くくく、悪魔が神社を根城にしているとは思うまい……みたいなことが出来なくもないって寸法よ。

日本の神仏は、お国柄なのか歴史的な背景によるものか、排他的なところが少ない。とりあえず寺社の境内とかの神域っぽいところに勝手に入り込まなきゃオツケーくらいな感じだ。

ただし、朱乃を狩り殺そうとしていた姫島家の連中のように、仕えている人間の方はかなり厳しい。上同士はそこそこやり取りあるっぽいのかな。

来年ぐらいから俺が管理することになる予定の縄張りも、日本のグレモリー家が大规模な投資をした駒王町という町だ。つまりイージーモードの縄張りである。その近隣にも確か、そういった神無しの神社を確保していたはずだ。あと、教会勢力が引き払った廃教会も、ゼクラムの祖父さんが確保してくれた。

しかし、京都の駅近くにでかいホテルを建設してしまっているのは如何なものかと思わなくもない。

景観がーとか怒られなかったのだろうか？ 神仏や妖怪はその辺りに気にしていないのかもしれないが、一応我が家って日本文化贋しているわけだしなあ……。

まあ、もう建っているものを壊してまでどうしようとは思わないが。元日本人的には、なんかこう違ってるんだよな我が家の日本文化の理解の仕方は。

というか、赤龍帝に縁のあるイギリスから出発して、グレモリーの影響力が強い日本を目指すとかさ。サイラオーグはなんなの？俺のこと好きなの？

すまんが、そっちの趣味はないから応えてはやれんぞ。

「まあ、お前の選択だ。そのルートは構わないが、そのためにはまず学ばなければならぬことがある。……それが何か分かるか？」

「いや……」

「ならまずはそのからだな。幸いなことに、俺の友人にヨーロッパ方面に詳しいヤツがいる。だから、まずはソイツから人間界での歩き方を教えてもらってからにしろ」

ヨーロッパとかなあ……ハードモードなんだよな。俺なら振り返りに出来るから問題ないが、今のサイラオーグでは教会の戦士に出会ったら狩り殺されてしまう。

日本では比較的大人しくしているからどこぞの悪魔とマジ恋愛なんて話があったようだが、欧州方面は教会勢力の中心。難易度ハードモードだ。

聞いたところによると、ヴァチカンの近郊に縄張りを配置されてしまった可哀そうな上級悪魔さんもいるらしい。難易度ヘル……いやへブンモードだ。

俺、日本で良かったな。でも、俺なら振り返りに出来るだろうから、むしろそっちに回された方が功績を稼げたのではなからうか？

ふむ、悪魔側がヴァチカンの近くに公爵家次期当主にして、超越者級の赤龍帝を配置したとする。

そうすると、面子にかけて向こうも攻めてくるだろう。それを討ち取るわな。

当然向こうもやられたらやり返せってことで、向こうから仕掛けてきたのだとしても、また来るはず。で、また撃退する。

さらに強化された戦力がやって来るだろう。それこそ教会の最高

戦力クラスとか天使の一部とか。

そうなると俺も周囲に気を遣って手加減してなんぞやれなくなるだろうから、人間の被害を無視した攻撃に出ることになる。

ヴァスコストラダーア！ お前が500倍滅びのオーラ砲を避けたら、この半島は消滅だああ!! みたいな。

うん、全面戦争必死だな！

「その友人というのは……」

サイラオーグが嫌そうな顔をしている。まあ、予想はつくか。なんか、バアル領辺境に送られる前、サイラオーグがまだバアル本家の屋敷で過ごしていた頃に何度か会っていて、相当馬鹿にされたとか何とか聞いたことがある。だが、あれだ小さい頃のことをいつまでも引きずっていいは良くないな。未だにグラシヤラボラスと疎遠な俺の言えたことじゃないが。

「もちろん、ディオドラ・アスタロトだ。俺と交友のある中では一番人間界に潜り込むことに長けている男だ。間違いなくな」

なにせ、教会の聖女やシスター相手に腰振って墮としてくるのが趣味なんだ。最も危険な場所に入り込んで、そこで無防備になりそうなことを平然とこなして帰ってくる。とんでもない奴だよ、彼は。

同世代でアイツより教会の目をかいくぐることに長けた者はいないと思う。

「むむむ……」

「まあ、小馬鹿されるかもしれないが、その程度を呑み込めんようでは人間界でやっていけるとは思えん。何せ悪魔を見かけたら速攻で殺しに来る連中がうろついているわけだからな。お前はデカイし、鍛えこんでいるから目立ってこともある。とりあえず授業の対価は払っておいてやるから、教えてもらって来い。何に襲われようが返り討ちにして生き残れるなら構わないが、自分がまだ弱いってことの自覚はあるだろう?」

ディオドラは、他者を格と強さで見るところがある。つまり俺と同じだ。一般的な悪魔の感性だな。

で、悪魔が同じ悪魔の強さを測る時に一番目安とするのは、当然な

がら魔力の大きさだ。俺とディオドラは同じ次期当主で、魔王の弟つて立場、それでいて俺の方が圧倒的に魔力量が多いからある程度こちらに譲ってくれているワケだ。

だが、サイラオーグの場合はそうはいかない。何せコイツの魔力量は、平民の子供に馬鹿にされていじめられてしまう程度のものだ。つまり、平民にさえ「コイツなら弱いから甚振っても構わない」と思われてしまうくらいに見えているということ。

今は身体を鍛えて強くなったので平民からはそう見られないだろうが、それでも中級悪魔程度だ。上級悪魔の平均より上にいるディオドラから見たら、木っ端のようなもの。ついでに地位も高くないしな。

グレモリー家預かりになっているウアプラ分家の子供で、なおかつ親は眠り病だ。

「分かっている」

「ま、義理とは言え俺の息子にそこまで無体なことはしないだろう。頼んだら普通に引き受けてくれたしな。ちゃんと教えてもらえよ」

「ああ……ありがとう」

いちいち礼など言わんでもいいのだが、何せこれから小さい頃に学校で受けただろうイジメよりも酷い目に合わせるのだからな。

「失礼いたします」

と、ちょうど朱乃がやって来た。ここは我が家のトレーニングフィールド。朱乃とよく練習している場所である。

「時間通りだな」

「はい、私に御用と伺いましたが……」

うん、朱乃がもじもじしているが別にえっちなことをするために呼んだわけではないのだ。期待していたら悪いがな。

というか、サイラオーグが居る時点でそれはないって分かるだろう。まさか、二人がかりで前から後ろからぶっ挿されたいか思っていないよね？ 朱乃は俺以外の誰にもヤラせんぞ。

「サイラオーグ、今までに光力を喰らったことってあるか？」

「ん、いや……ないな」

朱乃とサイラオーグが挨拶を交わすのを待って一応確認を取ったが、やはり心配していた通りだったらしい。

「教会の戦士たちは、天使どもから光力を受け取って剣の刃やら銃の弾丸として使ってくるらしい。墮天使どもとその尖兵も同じだな」

「それは聞いたことがある」

サイラオーグはある意味では、箱入り息子ってことになるからなあ。バアル領の僻地にほぼ幽閉されていたのだから、光の威力を知らないとは思っていたのだ。

「旅に出るとなると、どこかで天使や墮天使、そいつらに従う者どもと戦闘になるだろう。だから、ちよつと朱乃の光の槍を喰らってその痛みを覚えておけ」

聖剣は用意できなかったが、よく使われる光力の痛み慣れておいて損はないだろう。光力の痛みは独特だからな。それで動きが鈍って死なれても困るってことだ。

「たしかに、その必要はあるか」

「ああ、光力は悪魔にとつては猛毒だ。聖なる力よりはマシだと聞くが、かなりキツイ」

「分かった……その、いろいろとすまないな」

「なに、気にするな。朱乃、サイラオーグを死なん程度に痛めつけてやってくれ。くれぐれも死なせるなよ？　生きてさえいけば、不死身特性の譲渡でどうとでもなるからな」

「分かりました。サイラオーグさま、徐々に出力を上げていきますので」

「頼む」

大丈夫だとは思うが、一応、念のため、横で見ていることにした。

うーん、酷い。ぼろっぼろである。俺はなんという虐待親なのだろうか。まさに悪魔の所業。

「だ、大丈夫ですか？」

「まだ……ま、だ……」

はい、回復。レイヴェルのおかげです。

「よろしければ、また撃ちますが」

「ああ、問題ない。大丈夫だ！」

なんか、朱乃のヤツちよつと顔赤くなつてないか？ なに、興奮してるの？ どういうことだ、くうつ、まさか浮気か！

「うふふふ……」

「はあ……、はあ……、はあ……」

なんだろう、このSMっぽい光景は。俺だけ蚊帳の外で、こういうことなんだ。

うん、終了しよう。そうしよう。でもって、朱乃を犯す。ブチ犯す。お仕置きっクスである。

はい、回復。フェニックスの特性って、すごいよな。さすが俺の嫁。今日のところはここまですておくか。サイラオーグ、他にもまだあるからな」

「ああ、くつ……」

「なんだ、まだ痛いのか？」

「いや、そうではない……」

「そうか？ ならいいが」

後日、今度は黒歌とサイラオーグを引き合わせた。

「黒歌だ。今度俺の眷属の『僧侶』として迎える予定の者で、仙術の使い手でもある」

「よろしくにゃん♪」

「仙術……！」

「察しが付いたか。お前の扱っている闘気は、仙術使いが戦闘時に扱うものだそうだな。お前の場合、独学でそこまでたどり着いてるワケだが、そのために抜けているところも多いかもしれないと思つてな。話を聞くだけでも何かしら役に立つこともあるだろう」

「黒歌殿！ よろしくお願ひします！」

といった感じで、いくつかの特訓をサイラオーグに課しておいた。本当はもつと年単位で覚えさせたいところだが、まあ、なんというか人間でたとえると夏休み丸々使つての合宿のような感じだろうか。

ミスラさんのこともあつて、気が逸っているようだしこのぐらいにしておくしかないだろう。

よろしく頼まれたからな、本当はなあ……いやでもなあ……。いやいや、獅子は千尋の谷に子供を突き落とすとかなんとか言われていた気がする。獅子を司るウアプラ家ならきつとそんな感じだろう。

俺はグレモリー家だから、ついつい過保護になりがちでよろしくない。

そんなこんなで、ついに旅立ちの日がやって来てしまった。

「サイラオーグさん……んっ、こほん、サイラオーグ！ これを渡しておきますわ」

「レイヴェル義母上……これは？」

「フェニックスから渡す物など決まっているではありませんか。中身は使ってしまったって構いませんが、入れ物は必ず返しに来るようにしてくださいまし」

レイヴェルから渡されたペンダントをじっと見つめながら、サイラオーグはしばらく黙っていた。

それからガバリと頭を下げる。

「ありがとうございます！ 必ず、必ず無事に返しに来ます！」

「え、ええ……その、そんなにかしこまらなくても……」

この貧乏辺境暮しで染み付いた感性は、そのうち矯正しないといけないんだろうな。

いや、高いけどさ、フェニックスの涙。

「では、行ってまいります！」

と、一か月ほどバタバタした後、サイラオーグは旅立って行った。

2—25 駒王学園

グレモリーの城からの帰り道、見送りと別れた黒歌の表情が陰鬱なものに変わった。

ナベリウス分家の当主、エダーギ・ナベリウスの屋敷へと戻った後、にすることへの不快感。それが彼女をそんな表情にさせる主な原因だ。

「あつそ……はあ、分かつてるわよ」

出迎えた使用人たちにいい加減な返事をし、黒歌は今の住処の扉を潜った。「すぐに顔を出すように」などとエダーギからの言伝を受け、では、どうしても対応が悪いものになってしまう。

気分が表情や態度に大きく出てしまうところは直した方が良いでしょう。数か月先には黒歌の新しい『王』となる予定の男は、それはそれで可愛らしいと愛でてくれるのだけれど……貴族と関わっていいのなら必要なことのはずだ。

ふと、男の精を胎内に抱え込んだ腹をさすってみた。

ハマちゃったんだらうな……。気楽に考えていた数か月前に戻りたくなってくる。

「おかえりなさい、姉さま」

ててて、と黒歌に走り寄って来たのは、妹の白音だ。

白音は黒髪の姉とは違い、白い毛並みをしている。瞳の色は同じだが、どこか悪戯めいたツン上がった目じりの姉とは異なり、真面目そうな印象を与える瞳をしていた。まだ年齢が低いため白音は猫又としては未成熟な状態で、人間でたとえるならば小学生の中頃程度のよくな背丈をしている。

両親を亡くした黒歌がナベリウスとの取引に応じて悪魔に転生し眷属となったのが、ちょうど今の白音くらいの頃だった。

「まだすることがあるのよ。分かつてるでしょ」

甘えてくる妹を突き放して、黒歌はひとり自室に引っ込んだ。これからすることを考えると、気分がクサクサして妹に構っていられなくなる。

白音にとって黒歌は唯一の肉親で、たったひとりの頼れる相手だ。だから、寄ってくるのは分かる。

「……私にはいなかったのよね」

妹には姉がいる。けれど、その妹を抱えて困窮し、飢え、姉妹揃って死にかけていた黒歌には頼る相手はいなかったのだ。

黒歌が妹で白音が姉で、そんな風にもしも逆だったのならどんな関係だったのだろうか？ などと、たまに妙なことを考えてしまうことが以前まではあった。

今はそうでもないが——これまで男と添い寝なんてしたことはなかったし、誰かから何かを贈られたりすることも、撫でられながら誉められるなんてこともなかった。甘えてくる相手はいたけれど、優しくしてくる人はいなかったのだ。

思えば、黒歌は誰かに甘えたことなどほとんどなかった。

母親は父親にベツタリで、数度顔を見た程度の父親はそもそも黒歌を娘などとは思っていないようだった。付き合いのあつた妖怪連中は基本的には話をする程度で、可愛がられたような覚えはない。

うるさいことを言うってくる三毛の婆さん、上下関係にうるさそうな組織だった男衆に、無関心な女衆、どいつもこいつも助けになんてなつてはくれなかつたのだから……。

そう考えると、エダーギ・ナベリウスは、まだしも黒歌に関心を持っていた部類だと言えるだろう。

希少な種族の妖怪を眷属として育て高値で売り飛ばす。そのためとはいえ、事故死した部下の親族のことを覚えていて拾いに来る程度には気にかけていたのだ。エダーギが居なければ飢えて死んでいたのだろうか、命の恩人と言えなくもない。

一時は頭に血が上って「ぶつ殺してやろうか！」などと考えていた黒歌だが、少し落ち着いて考えてみればそこまでするほどのことでもなかつたような気がしてきていた。

白音にも強化訓練を施そうとしていたことで腹を立てていたのだけれど、黒歌自身がエダーギの課した訓練の効果を証明してしまつて

いるのだから。

「白音のことも話しておかないと……」

ザーツとシャワーの流れる音がする。自室に戻った黒歌は服を脱いで裸になると、すぐに浴室に向かっていた。

一通り身体を洗い流し乾かした後、黒歌は自身に施しているいくつかの術の効果を操作した。

「ううっ……んっ……ヒッ……ンンッ」

この作業をしやすいようにと整えた女陰の割れ目から、術に操られた白濁液がとろとろと吐き出されてくる。それをナベリウスから事前に渡されていた魔術の施された容器へと移していく。

容器の中身を確認して封を締めると、気の滅入る作業を終えた黒歌はそつと目元を拭った。



「ハハハ、随分と気に入られているようだな。今回も大量ではないか」
渡した容器を手に上機嫌な様子のナベリウスに、黒歌は鼻にしわが寄りそうな気分になった。

「これ、どうするの？」

男が別の男の精液の詰まった容器を片手に、ニヤニヤしている絵面というのとはなかなか気持ち悪いものがある。

「ふん、お前は『僧侶』のくせに学がないのだな」

「生憎、今のご主人様はあまり眷属に知識を付けさせてはくださらなかったもので仕方ないにやん」

「そんなものは自分でどうにかして覚えろ。私は忙しいのだ。衣食住の面倒をみて、その上強くしてやったのだからそれだけでもありがたいと思え」

「はいはい、それには大変感謝しております」

肩をすくめて見せる黒歌を見て、エダーギも不愉快さを滲ませた。

「まあいい、ホムンクルスやアルラウネについて調べてみる。現ルシファアの弟にして赤龍帝の精液ともなれば、いくら出してでも手に入

「りたいという連中がいるものだ」

錬金術などで男の精液を素材として用いることは、珍しくはない。通常の純血悪魔のそれですら希少だというのに、リヴラクス・グレモリーのものともなれば途轍もない値が付くことは想像に難くない。

結局は金か……と黒歌はひとまず納得し、その場を去った。

元々、エダーギは自身の研究内容を眷属にも秘匿し続けている男だ。そして、研究者がその研究内容について秘密にするのは、よくあることである。ついでに、種類にもよるのだろうが多くの場合研究というものは金がかかるものらしいのだ。



ゴロゴロと喉を鳴らして甘えてくる黒歌を撫で繰り回しつつ、我が家の廊下を歩く俺はリヴラクス・グレモリー。

ちなみに現在の黒歌は黒猫モード。動物の猫の姿なので腕に抱えて連れ歩けるのが良いところ。まったく移動中だというのに周りを見もせず気にもせず夢中でスリスリしながらうつとりとしゃがって、可愛いなあこの畜生め。

ついでに俺の肩の上には白猫の使い魔であるシロが乗っていて、そんな黒歌に不満そうな目を向けている。

「あたしの居場所を取りやがって！ この泥棒猫！」といった雰囲気だ。

だけど、俺にはくつついてくるのだから、これはこれで可愛らしい。使い魔契約に則って魔力を流してやっているの、このシロちゃんもそのうち魔物化してくれることだろう。きっと可愛い女の子に化けるに違いない。まだ獣並みの知性しかないときから、たつぷりと躡けているので将来が楽しみである。ちよつとした光源氏計画的な気分にも浸れて素晴らしい。眷属は実力重視で固めて、使い魔に可愛い子を揃えるって方々もいるらしいが、その気持ちも分かるというもの。

そんな使い魔娘コレクションも、貴族男性の嗜みの一つの形だ。悪魔社会は業が深いぜ。

「さて、今日は縄張り予定地の下見に行くわけだが、お前はそのままに来るのか？」

「にゃん♪」

どうやら猫状態のままついてくるつもりのようなので、このままで行くことにしよう。

ゼクラムの祖父さんから伝えられた、俺の縄張り『駒王町』。これまでも一応データ上では確認していたが、今回はその目で見ておこうということでちよつと出かけてみることにした。

レイヴェルや朱乃を連れて行かないのは、まだ現地の状況がよく分からないからだ。あつちにいるグレモリー家の家臣からは「安全です！ 絶対安全です！ お任せください！」と何度も言われたが、人間界つてのは結構危険だからな。

教会勢力とかいるし、現地の神仏妖怪などもいる。墮天使の大幹部の娘とか、フェニックスの涙なんて大金を産む貴族悪魔を連れてくるのはよく確認してからにしたいところだ。

というわけで、今回のお供は俺の眷属（予定含む）の中では比較的重要度の低い黒歌を連れて行くことにしたのだ。

リユイならまず心配はないのだが、生憎と現在レーティングゲームに忙しい。早く完全に俺のものにしてしまいたいものだ。

「準備は出来ております」

「ああ、御苦労」

駒王町との行き来に用意させた専用の転移魔方陣ルームには、既に護衛の悪魔達がそろって居た。

一応、グレモリー領軍の精鋭である。といっても隊長が中級悪魔で、その他は下級悪魔、俺基準ではさほど強くはない。

ということで武力的な面ではさほど頼りにならない連中だが、魔力を感知できない人間相手ならば大変役に立つ。2メートル近い身長ゴツツイ体格をした黒服サングラスの白人系に見える護衛を引き連れて行けば、まず絡んでくる人間はいないだろう。

魔力で推し量ってくることの多い悪魔と違って、人間は見た目で判断するからな。数か月鍛えた程度の肉体しか持たず、身長も160台半ばな、中学生程度な顔つきの俺では面倒ごとに巻き込まれるかもしれない……カツアゲとか怖いし。いや、撃退するのは簡単なのだが、いちいち相手をするのは面倒だ。

しかし、さすがに猫二匹引つ付けたまま歩くのは面倒か。

「シロは留守番だな。ほら、あっちにいつて遊んでもらえ」

見送りに来ていたメイドのひとりにシロを預ければ、うん、肩がすつきりした。

「シロさま、私と一緒に行きましようね」

いやーんと不満そうなシロとお別れして、起動させた転移魔方陣で人間界へと跳ぶ。

転移特有のふわっとした感覚がおさまると、そこにはたくさんのお魔達が頭を垂れて待ち構えていた。

「若様、ようこそおいで下さいましたー！」

グレモリー家はこの駒王町にかなりの投資をしていて、いくつかの施設を所有している。

それらのトップは当然我が家の息のかかった者が務めているのだが、こいつ等はそういった者たちだ。ほとんどが人間界に溶け込んで暮らしている悪魔で、一部はそれらの恩恵を受けている人間もいるらしい。ここにいるのは全員が悪魔のようだが。

「お前が代表か？」

「はい！ 駒王学園の理事を務めさせていただきます！ おります！」

とりあえず、正面中央に居たヤツに声をかけてみた。

見た目は威厳のありそうな60代くらいの男性なのだが、滅茶苦茶腰が低い。前世の俺だったらビビっちゃうね。なんとというか、大会社の重役がペコペコしてくるような感覚。

今の俺は日本の本州くらい領地を抱える貴族の次期当主なので、こういった態度を取られるのが普通だ。だが、普段会わない連中からこういった扱いを受けると、ちよつと戸惑ってしまうこともある。顔には出さないけどな。

「駒王学園は、この近辺でグレモリーの所有している施設の中では最大規模だったか」

駒王学園はこの駒王町という縄張りの一番の特徴だろう。幼小中高大と揃った、土地の狭い日本にしてはわりと大きな敷地を誇る学園である。

なお、アホのように広い冥界の学校のそれと比べて狭いと言っはいけない。ここは日本なのだ。

この学園の特色として、経営陣が悪魔関係者であることもあって異能持ちの人間や、一部の妖怪、魔物などの一般の人間の知らない世界の住人を受け入れているところにある。そのせいで起きる様々な騒動をもみ消すために、悪魔の魔力式結界を張って誤魔化しているのだとかどうか。

どうしてそんな面倒なことをしてまで学校経営なんぞに手を出しているのかと言うと、何やら日本の異能者、異形の種族とのやり取りの結果なのだそう。異能持ちの子供とか、普通の学校で暴走させたらマズイしな、妖怪などの異形の存在の中にも人間の学校に憧れる者もいるのだとか。でも、やはり人間とは根本が違う存在なのでいろいろと事件を起こしてしまうこともある。

そんな連中の望みを叶えてやり、起きてしまった問題をもみ消して、それらから欲望を吸るのが我ら悪魔のお仕事ってわけだ。普通に授業料をかなり多めにもらってるそうだし、取引だね、取引。

「何も知らずに巻き込まれている人間どもはご愁傷さまだな」

なお、そういった特殊な事情の持ち主はごく一部で、生徒の大半は一般的な普通の人間さんたちである。

彼ら彼女らは、異能やら異形やらが引き起こす出来事に巻き込まれつつ、それらのために人間の学園生活気分を盛り上げてくれている大事な存在でもある。これで学費も取ってるって言うんだからヒデー話なこと、悪魔か。悪魔だ。

俺がただの人間だったら、絶対こんな物騒な学園に通いたくはないね。でも、ただの人間はここが危険地帯であることに気付くことすらも出来ないのだ。むしろ気付いてしまったら……南無南無。記憶処

理かな。

「こちらは高等部でして——」

ぞろぞろとこつちじや重役だろう連中を引き連れて、駒王学園を案内させる。一応授業風景なども見ておきたかったので、本日は平日だ。

なんだなんだと一般生徒や、裏の事情を知らない教員などがこちらを見てくる。まあ、何事かと思うだろうな。

この学園を所有する一族の御曹司御一行様です。

「あつちの建物はなんだ？」

大学の案内から始まって、高等部に入ったところでやや古い建物が目についた。人の気配がないので、使っているということもなさそうだが。

「あ、はい。あちらは旧校舎になりまして——」

いくらか前に校舎の建て替えをして、前の学舎がそのまま取り壊されずに残っているらしい。

新しく部活動などを立ち上げる者などが居た際に、部室に充てられるということもあってそのまま残されていたようだ。

「気になるようでしたら取り壊しますが？」

「いや、いい。そのまま残しておけ」

もったいない精神というわけでもないが、人の出入りの少ない学校施設というのは浪漫がある。なんというかこう、エロいことの舞台になりそうな感じがして良い。

本格的にこちらでの活動が多くなってきたら、適当に女子生徒でも捕まえて連れ込んでほしいな。ふふふ、やはり学園ものは、学園内の設備を使ってこそだろう。

俺がこんなことを考えてしまったり、あらぬ妄想にムラムラっとしてしまう。それもこれも、目につく女子学生の制服姿がエロいのが悪い！ 大学部は私服だったのにな！

なんだあの制服は！ スカートの短いぞ！ 身体のラインを強調しまくってるじゃないか！ 特に腰回りの細さと、胸を強調するデザイン！ けしからん！ 誰だあれを制服として定めたのは!?

兄上だと!? くそっ、兄上め、良い趣味をしておられる……割と普通に見える男子制服とのデザイン制の違いに、注ぎ込まれた労力と熱意の差を感じてしまう。というか、兄上って密かにこの女子生徒を喰ってそうな気がするな、結構手間暇をかけているようだし。

なるほどなー、どうも人間っぽい文化が好みだと思っていいたら、そういうことか。ならば、俺がやっても良からうよ。

今の俺は金持ちでチョーイケメンだからな。女生徒を食いまくってやるさ!

駒王学園の美女・美少女は、全てこのグレモリー卿（予定）のものに！ なんてな。

「男子学生が少ないようだが」

「はい、実は少々事情がありまして共学化したばかりでして——」

なるほど、それで男女比が偏っているのか。あと制服の差もそこらあたりから来ているさうだ。女子校ってイメージが付いているだろうし、幼・小・中からエスカレーター式に高等部まで上がってくる生徒も大半は女子学生か。

一応資料で知ってはいたが、こうして目の当たりにしてみると、まったく大変よろしい光景である。女目当てに編入とか考える野郎もいるんだらうなコレ。で、女子勢力の強さに押し負けて肩身が狭いまま何もできずに卒業して消えて行ったりするのだ……。

モテるヤツは、こんな女の園に突っ込まなくても男友達と気楽に過ごしつつ、ちゃっかりヤルことはやってそうなイメージ。でもって、女ばっかりのところでは立場が低いと大変居づらいつても知ってそんなイメージ。

ハーレムするには男が上の立場でないとキツイのだ。

「ところで、俺がこちらに人間として顔を出す場合の立場だが……この理事長ということでは構わないのだな?」

「はい、それはもちろんです! グレモリー本家の方に、それも未来の当主様に来ていただける。私共にとって、これほどの名誉はございません」

兄上や父上もそうだが、悪魔の中には人間としての立場や顔を持つ

ている者が結構いる。財閥の会長とか、そんな感じのだな。

俺は今までそういったものがなかったのだが、ちよつと魔力を使つて成人男性と認識させ、この駒王学園の理事長としてやって来たことにするわけだ。この学園はグレモリー家の所有物なので、その御曹司つて形でだな。実務は慣れている現地在住悪魔関係者の理事諸君がやってくれるので、本当に肩書だけだがな。仕事はしないのに、給料は出る。縄張りでの悪魔としての本業は、契約取ることなので。

ぐふふ、学園という一種の閉鎖社会、そこにおける最高権力者になるってことだ。

くっそ、夢が膨らむぜ。股間もググつときそう。女生徒も女教師も、事務のおねーさんも、なんなら生徒の母姉だつて行けそうな気がしてくる。フハハ。

「主さん、いやらしいこと考えてるにやん？」

「分かるのか……」

「私、仙術使いよ？ 気配でねえ」

腕に黒歌を抱いたまま考えることじゃなかったな。

というか、黒猫を撫でながら偉そうにしているのって、なんというか実に悪役っぽくてよろしい。いや、白猫もありだが。ライオンとか豹もありだよな。

その後は中等部、初等部、幼稚園と見て回ったワケだが、さすがに初等部からはムラムラ来ないな。いや、中等部でも大概だが。肉体年齢的には同じ年付近なので仕方あるまい。

と、ここまでで午前の部は終了だ。ザつと見て回っただけなので詳しいことはまでは分からなかったが、その辺りはおいおいだな。

「ご要望にあったので、昼食の席にこの国の裏の関係者を招いてあります。――」

名前だけとはいえここの経営陣のトップ扱いになるので、一応それっぽいことはしておきたい。

ということとで裏の事情を知る関係者で、この学園の生徒をしている者と話してみたいと伝えておいたのだが、どうやら受けてくれた生徒がいたようだ。

「事前に聞いていなかったな」

「申し訳ありません。なかなか、その……若さまのお名前を聞くと」

「ああ、まあ仕方ないな」

赤龍帝の純血悪魔なんて、そりゃあ怖いに決まっている。ちよつとお話をするだけ、なんて言われてもなかなか受けてくれる者がいなかったのだろう。

「それが、先ほど急に承諾の連絡がありました……。視察中の若さまのお姿を見かけて興味が湧いたということ……。その、もし、よろしければ」

「ふん、まあいい。こちらから希望していたことだ」

「ただ、先方の性格がですね……。ご不快にならないと良いのですが」

「余程でなければ構わん」

こちらからの誘いを一度断つておいて、今日になって急に会ってみる気になったとは……。なかなか豪胆な相手が来るのかもしれないな。

名前は——ほう、有名どころじゃないか。面白そうだ。

前世の俺でも知っている名前だ。人間やつていた頃は五大宗家なんて知らなかったが、この家名は聞いたことがある。一般人からしたら、こちらの方が日本の靈的守りの要って言われて納得するだろう。

「オーッホッホッホッホッ！　ごきげんよう、悪魔の公子さん。お会いできて光栄ですわ！」

で、現れたのは栗毛を縦ロールにしたなかなかの美少女であった。俺は縦ロールは好きだぞ。年齢は俺と同じくらいか。

しかし、なんとというか、濃そうだ。性格が、かなり。

「わたくし、安倍清芽と申しますわ！」

「リヴラクス・グレモリーだ」

こつち側に関わりがあつて、『安倍』つて言ったらあの安倍の子孫とかだよなあ。

「ところで、リヴラクスさん、あなたが連れていらっしやるその猫……」

「私に何か用なのかにや？」

安倍の視線は、俺と俺が抱えている黒歌の間を行ったり来たりしている。

「ずばり、猫？ではありませんこと？」

「そうよ？」

「赤龍帝だけでなく、猫？まで!!」

なんとというか、うん、使い魔マニアの知り合いっぽい気配を感じる。その手の趣味の悪魔とも話が合うんじゃないかな？ 視線にそんな雰囲気を感じる。

俺はならんし、黒歌もやらんが。

「黒歌は転生悪魔だからな」

「ああ！ 惜しい！ 実に惜しいですわー！」

これはなんとも、退屈しない昼食会になりそうだ。

2—26 契約は慎重に（上）

「悪魔との取引に関する印象ですか……、そうですね。やはり関わりを持ったら怖そうというところが大きいですかしら！ 悪魔の方々とは慣れあわず一定の距離を保ってお付き合いしていくべきでしょう。それこそ、慎重に慎重を重ねて対応していかないといつの間にか魂を抜かれていたなんてことになりかねませんもの！」

そうそう、こういう反応が欲しかったんだよ。

今後の参考にとあって、アガレス家の出しているこれまでに取られた契約の一覧（契約者及び契約した悪魔の個人情報伏せられている）を確認したのだが、

『引越しの手伝い』

『電球の交換』

『夕食を作って』

『肩たたき』

『マツサージ』

『話し相手』

などといった、そんなもの普通に人間相手に金払って頼めばいいだろうという契約の多いこと多いこと！

アホか、俺の中の悪魔のイメージが崩れるだろうが！ 便利屋じゃないんだぞ。

誰だよ、ダンガムのプラモの塗装の手伝いをして、依頼主から最高評価をもらった上級悪魔って！ その光景に想像がついてしまうから、もの悲しくなってくるだろうが。

「悪魔は契約の内容だけは守ると聞きますけれど、契約文書の文言のちよつとした隙をついてどんなことをされるか分かったものではないとも聞いていますわ！ 特殊な家系に生まれ育ったわたくしにこの学舎での生活を与えてくれたことについては悪魔に感謝しておりますけれど、それはそれとして信用に値する存在かどうかと考えると、どうしても怪しいと思えませんかー！」

そうなんだよ、悪魔との取引ってやつはもつとこう後ろ暗くて、背

徳的で、妖しくて、一步間違えば破滅が待ち受けるような、そんなスリリングなものであって欲しかった。

だけど、現悪魔政府を仕切っている兄上たちは、そんなかつての悪魔のやり方をなくしてしまった。今や悪魔は町の便利屋さんのような存在。安全安心、対価は事前に提示して、それ以上は取りません。我々は、そんな存在になってしまったのだ。

何が悲しくて、冥界では貴族だ、次期当主だ、這いつくばれ平民どもが！　なんてやっているこの俺が、人間の一般庶民相手にそんな仕事をしなければならぬのか。

嫌だね。絶対にやりたくない。

この安倍清芽の認識しているような、古き妖しき悪魔のお仕事ならやってみたいが……。

「それにしても、このわたくしに意見を求めるなんて！　リヴラクスさん、貴方はなかなか見所がありますわ！　オッホッホッホッ！」

ちなみに、人間からこういう口の利き方をされてもさほど腹は立たない。これを言っているのが、格下の上級悪魔ならブチギレるかもしれないが、人間と悪魔って種族も社会も違うからね。悪魔社会での立場とかは関係ないのだ。

天界・教会勢力や、堕天使勢力、あとは悪魔との関係が深い魔法使い連中はまた別だが。

聖書の神話関連や魔法使い以外の人間にまで、悪魔としての身分に対する礼儀は求めない。

そう考えている俺だが、だからといって、俺は駒王町のおじいちゃんおばあちゃんのマッサージをしたり、引越しの手伝いで段ボールを運んだりなんぞはしたくないのだ。

そんなもの、人間の業者を呼べ、と。出来れば悪魔関係者が経営している会社のところから。

性欲を持って余した美女の欲求不満の解消なんて願い事なら、喜んで引き受けるが。あと、友達いないから話相手になって欲しいってのも、相手が美少女であれば喜んでやろうじゃないか。なんなら、性交する系の友達になってやってもいい。

「だいたい悪魔といえば、契約に際して嘘は吐かなくても本当のことを言わないなんてことはよくあることらしいじゃないか。誤解しやすい言い回しをして、相手が勝手に騙される分には構わないといったやり口をするそうですわね！」

その後も安倍の語る古き悪しき時代の悪魔観に基づいた意見を、うんうんと頷きながら拝聴させてもらった。

俺もな、そんな風な悪魔の仕事がしてみたかったんだよ。

「大変参考になった、有意義な時間を過ごさせてもらったことに礼を言わせてもらおう」

この「礼を言わせてもらおう」って言い回し、その後にきちんとお礼を言っている場面を見ないのだが、どういうことなのだろうか？

俺も結構日本人をやっていた覚えがあるのに、未だに理解できないことが多い。

「——ありがとう」

ということ、出来る限りのイケメン笑顔でお礼を言ってみたら、安倍清芽の頬にふわりと朱がのった。

これがかつて愛読していた創作サイトでも時折見られたニコポってやつだろうか？ うん、やはり顔が良いというのは強いな。ブサイクだったらこうはいかないだろう。

悪魔なんぞに惚れちゃダメだぞ、お嬢さん。

「わ、わたくしは貴方たち悪魔の印象をお話しただけです……。べ、別にお礼を言われるほどのことはしておりませんわ！」

「そうか。しかし折角用意させたのだから、これは受け取って欲しい」
相手が『安倍家』の者だと分かった時点で用意させておいた品を傍にいた者から受け取り、安倍に手渡した。

「あら、こちらは……凶鑑ですか？」

「悪魔界の魔物学の権威、ネーキッド博士の記した『魔物大凶鑑』だ。知りたい魔物の名前を告げると自動でその魔物のページが開く」

俺の知り合いに、使い魔マスターを目指しているザトウジという悪魔が居るのだが、ネーキッド博士はその師匠のような人物だ。

会ったことは無いが、なんでも様々な魔物に裸で体当たり取材を決

行するという行動派の学者らしい。魔王すら殺す毒を持つ多頭蛇、ヒュドラにすら全裸で挑んだことで名を知られている。

「面白いですわね。では……『イエティ』」

安倍がそう口にする、図鑑のページがパラパラと独りでにめくれていき、白いゴリラのような姿の魔物の描かれたページで止まった。

そこにはイエティあるいは雪女と呼ばれる魔物の生態や生息地などの説明、博士の所感なども記されている。ゴリラゴリラした成態とはまるで異なる、可愛らしい人間の女の子のような幼態も隅の方に描かれていた。

「日本語版だから、翻訳の過程で少し原文とは異なっているところもあるが……魔獣使いの家系として知られる安倍家の方には良さそうかと思つて選ばせてもらった。気に入ってもらえただろうか？」

「ええ、ええ、ええ！」

安倍はこちらに許可を取ると、いくつか魔物の名前を呼んでページをめくり、描かれている魔物の姿に目をキラキラとさせていた。

気に入ってもらえたようだなによりだ。さほど高い品物でもないしな。悪魔が悪魔社会で購入するなら前世の日本人感覚で言うところに行かない程度の書籍になる。

人間界価格で考えると十倍以上に跳ね上がるのだろうか。

ちなみに、この安倍に渡した図鑑の日本語翻訳者は俺である。魔物と悪魔文字の勉強として大変有効だった。

前世で頭の良いヤツに英語を覚える方法を聞いてみたときに、興味のある書籍を訳してみろと言われたのが役に立ったな。

「喜んでもらえたようだな。急いで用意させた甲斐があつたよ」

「大事にいたしますわ！」

ということ、日本在住異能者との昼食会は和やかに終わりを迎えた。

ここで重要なのは、ネーキッド博士の取材先の多くは冥界にあるということだろうか。博士は悪魔なので当たり前なのだが、これで魔獣使いである安倍が冥界産の魔物に興味を持つてくれれば、将来のお得意先になつてもらえるかもしれないという寸法よ。先行投資だな。

『冥界にしかない魔物を、従えてみたいですわ!』

などといった依頼が来たら俺的には大変嬉しい。少なくともプラモの塗装の手伝いよりは悪魔らしいだろう。良い使い魔をくれるとして知られている七十二柱の名家もあることだし、古来よりの悪魔の契約内容にかなり近いはずだ。

清芽から安倍一族にその話が広まってくれとなおよろしい。大型の案件としてこの先長く稼がせてもらえるかもしれないからな。まあ、皮算用だが。

さて、安倍清芽との昼食会を終え午後からは駒王町内を見て回ることにした。

午前中の『医院長回診です!』みたいな行列つくってゾロゾロとするのはやめて、町中は護衛の数名と現地案内役悪魔の一名を連れての移動である。

「なんとというか、普通の町だな」

「そうねー、これといってどうってことないにゃん」

強いて言えば、異能持ちや妖怪、霊的存在を比較的好く見かけるところが特色だろうか。これは学園があるためかもしれないな。

東京都心まで電車で1時間ほどの立地条件は、なかなかのものだと思う。

しかし、黒歌はいつまで猫モードでいるつもりなのだろうか。そんなに俺の腕の中が気に入ったのか、愛いやツめ。ぐりぐり。

「うにゃあん♪」

イチヤイチャしつつ、徒歩でゆつくりと散策する。はた目からは、猫馬鹿な金持ち白人お坊ちゃんのように見えているのかもしれない。だが、俺はそんなこと気にしないのだ。

「若さま、実はですね——」

「ほう……」

途中でなかなか気になることを案内役から聞かされた。

なんでもこの町からそう遠くない場所に、魔王アジュカ・ベルゼブさまの遊び場があるらしい。ベルゼブさまが人間界で運営しているゲームのために使っている拠点なのだろうか。

これからベルゼブブさまにいろいろと頼み込まなければならぬ俺としては、実に都合の良い話だ。冥界で会うよりは人目を避けられるかもしれない。

俺が自分の縄張りを見に行くのは当たり前前で、趣味人として知られているベルゼブブさまが自身の人間界の拠点に赴くのもいつものことだろう。こっそり会うのに大変都合が良い。

黒歌の件に、リュイの『王の駒』、あとはまだ予算を都合する目途も付いていないがソーナの学校狂いの対策のこともある。

俺としては、ベルゼブブさまに直接話を伺いたいことが結構あるのだ。

兄上とセラフォールさんは、放っておいても割と頻繁に会えるしな。それに比べて、ベルゼブブさまは実家にあまり興味が無いのか、アスタロト家に入りにしていてもほとんど接触することがない。

アスモデウスさまは、正直よく分からん。グラシヤラボラス家と疎遠なこともあって、四大魔王の中で一番縁遠い方だ。

軍事関係の話を聞いておきたくはあるんだがなあ。墮天使を滅殺して、冥界を完全に悪魔のものにしたい身としては。

まあ、その辺りはゆっくりと進めればよいだろう。時間は飽きて魂が腐るほどにあるのだから。数百年、数千年かけるくらいの心づもりでいればいい。

というか、まずはあのソーナの思い込みというか、やたらと強情に主張する『下級悪魔のためのレーティングゲームの学校作りたい』って話をどうにかしないとだな。

セラフォールさんが諫めてくれないかな。無理か……セラフォールさんってソーナにただ甘だから。

何回言っても聞きやしないんだよなあ。この間、ミスラさんの件で延期していたシトリ家への訪問に行ってきたんだが、そのときもプリップリして目も合わせてくれなかったし。俺の中の妹成分摂取欲求が増大してしまうだろうが！

いや、反抗期って考えたらそれはそれでありか……？「お兄ちゃんなんか、好き……じゃないんだからね！」みたいな。うん、アリだ

な。

ソーナがツンデレ妹になりうるのかどうかは置いておくとして、他種族からの転生者ではない普通の下級悪魔がレーティングゲームに参加しようとしたら、まず第一に『上級悪魔の眷属になる』必要がある。学校なんぞ造って学ばせたとこで、卒業後の行き先がないのだ。拾われなかったら無意味だって、ソーナに何度言っただけのことか。

一般下級悪魔を眷属に加えるよりも、他種族を『悪魔の駒』で悪魔に転生させた方がまず間違いなく強いって現実があるのに、一体どうするつもりなんだ。ソーナのヤツ。

そもそもレーティングゲームに関心のある上級悪魔は眷属を選ぶ基準として強さを求めるだろう。で、強さを基準に考えると、神器持ちの人間や、悪魔にはない強みを持つ他種族・魔物などが候補になってくる。

雷光のある朱乃や、仙術と妖力の黒歌みたいにな。

で、それと比べたら、普通の下級悪魔ってなんの強みもないのだ。悪魔の特色である『魔力』は、駒で転生させると他種族にも付与されてしまうから……。しかも、相性や才能次第では悪魔以上に魔力の扱いに長けた転生悪魔になる場合もある。

ディオドラのところの『戦車』2駒の元聖女ちゃんなんか、上級悪魔レベルの魔力を扱ってたしなあ……。ドライグに聞いてみたら、そこそこのドラゴンなら焼き殺せる程度の炎の魔力だったらしい。しかも、それとは別に神器持ちでもあるという。どんな神器なのかまでは教えてくれなかったが、数年後には交流試合があるのだからそれに備えてということだろう。

と、いろいろあって俺は平民をかなり見下していたのだが、先日サイラオーグがその考えに一石を投じてくれた。

他の貴族領の荒地地で岩運びをしていたとかいう下級悪魔を眷属に加えたい、とサイラオーグが言って来たのだ。

勝手に他所の貴族の領民を引き抜くのも角が立つので、俺の方で手続きをしたのだが、その下級悪魔がなんとも強かった。岩運びってレ

ベルではなかったのだ。岩山をぶん投げるほどの怪力の持ち主だったのだ。

いや、あれにはビックリしたね。

兄上やベルゼブブさま、それから俺は純血の上級悪魔から生まれたイレギュラー体の超越者になるのだが、あの下級悪魔は平民のイレギュラー体なのだろう。

名前はリギーゴ、途轍もない剛力の持ち主。魔力は少ないが、とにかく力だけはある。当たりさえすれば、腕力だけで最上級悪魔を倒すことも可能だろう個体だ。

リギーゴは魔力が少なく、その扱いも拙く、勉強もほとんどしていないので頭もよろしくない。それでいてその体格はかなりデカかったので、サイラオーグが人間界を旅するには目立ちすぎて連れていけないってことで身柄は俺が預かっておくことになった。で、城に置いておくのもアレなので現在は領軍で鍛えさせているところだ。

最低限の勉強と、あとは軍人としての基礎訓練だな。団体行動とかその辺りの。体力はまったく問題ないようだが、サイラオーグが大恥をかかない程度には仕上げてやらんと。

サイラオーグのお陰で平民の中にも使える者がいるかもしれないと分かったので、将来に向けて平民からも人材発掘もしておきたい。墮天使を駆除して冥界統一を成し遂げるために、戦力が多いに越したことは無い。

なので、俺としては資金の用途が付いたら適当に理由を作って、『レーティングゲーム下位リーグ』でも立ち上げてみようかと思ってるのだ。『悪魔の駒』を使わない方式で。

試合用のスタジアムの一つくらいなら現状でもどうにかなるので、あとは戦闘フィールドの構築とかが問題になるのだが、その辺りでベルゼブブさまに相談をしておきたいってワケだ。こつち方面では兄上は役に立たんだらうし、下手に話すと公共事業でやろうとか言い出しかねない。

資金の用途などは今のところサッパリだが、こいつはあくまでも、俺が私的に行うグレモリーの若様の道楽でなければならぬのだ。

経営や運営に国を巻き込むと、リュイから聞いた話みたいに試合の勝敗調整がどうこうとか面倒なことが絡まってきてしまう。

経営、俺。運営、俺。一番偉いのは、俺。決定の最高責任者は、俺。という状態で進めたいものだね。

他の貴族家とかを入れるのも、その点を考えると面倒だ。まあ、国よりはありますが、お互いの話し合いだけでケリがつくし。

あとは平民の金持ち連中から巻き上げるってこともありだな。文句言いだしたら、権力で潰せばいいだけだから、これはアリかもしれない。

平和ボケして軟弱化している平民どもの中にかつての戦闘意欲を沸き立たせ、どこかに埋もれているかもしれない使える平民を掘り出す。かなりの投資になるだろうが、それでリギーゴみたいなのが一人、二人出てくれば元は取れる。良く鍛えられた方の軍団よりも、圧倒的な個の方が強いって世の中だからなこの異形の界限は。

まあ、考えてみたというより思ってみただけで、どうやるのかわかって方法論がまったく出来ていないわけだが、その辺りはおいおいでいいだろう。何百年かあればどうにかなる。

『失敗しても構わない。とにかく何かを成そうとする想いを無くさないこと、それが長い悪魔の寿命を存分に生きるコツだ。百年かけた計画が潰えたのなら、二百年かけて取り戻せばよいだけなのだから』
万年生きてる祖父さんがそう言っていたんだから、これは間違いないね。命の儂い人間じゃあちよつと出来ないものの考え方だよな。

いろいろやってみたいことを考えておいて、途中で放り投げたり、何百年かしてふとそれを思い出してまたやってみたり。そんな感じで飽きずに生きていきたいものだ。

ベルゼブブさまのお遊び好きもそんなところから来ているのかもしれないな。

あの方、ラティアから聞いた話によると今のレーティングゲームの基礎を設計して準備までしたのに、それを古参のお年寄りたちに持つていかれてしまったことに未だお冠らしい。

なので、俺がこの話を持ち掛けたら案外乗り気になってくれるん

じやないかな、なんて考えているワケだ。

それに、アジユカさんも悪魔男性の御多分に漏れず年下の女性親族に甘い。弟のディオドラよりも、姪っ子のラティアに対してダダ甘だと聞く。ラティアからも「おねがーい」ってやってもらったら、サクツといける可能性が高い。

考えていたら、いけるような気がして来たな。時間はいくらでもあることだし。

戦争に向けて準備、準備と。あくまでも俺は将来の戦争に向けての戦力増強のために『レーティングゲーム下位リーグ創設計画』をちよつとだけ考えているだけだ。別にソーナがどうしても造ると言ってきたくない『下級悪魔のためのレーティングゲーム学校』の卒業生の受け皿を用意してやろうなんて思っただけなんだから。

つらつらと先のことを考えていたら、町の案内が終わっていた。途中、車での移動も挟んだの夕方には終了だ。

「ああ、じいさ……ゼクラムさまに頼んで確保してもらった、例の教会はどうなっている?」

「申し訳ありません。まだ修繕が済んでおりません。なにぶん、悪魔にとつては扱いにくい代物でして……」

「ん? いや、直さなくとも……」

俺としては、こう壊れかけた感じの建物の風情が目当てなので綺麗にする必要はないのだが。それを伝えていなければ、次期当主さまの持ち物なのだから修繕しようとするか。

「けど、こいつらに廃教会で元墮天使の娘と性交してみたかったとか、ちよつと言いな。どこからか祖父さんに漏れたら、あとで滅茶苦茶怒られそうだし。」

「構わん、案内しろ」

ということで、確保してもらった元は教会勢力が所有していた建物を見に来たのだが、うん実に良い感じの風情だ。吸血鬼とかが隠れ住んでいたりすると、趣が出そうな感じである。

「悪魔の拠点が教会というのも面白いかと思っただが、さすがにこれでは住めないか」

「急いで修繕させます！」

「いや、このままにしておけ。拠点の候補は別に考えよう。この地で教会勢力が落ちぶれている象徴として扱うことにしよう」

適切な理由を付けて、現状維持。

廃墟とかつて、なんだかちよつと楽しいよな。今なら廃墟巡りを趣味にしていた、前世の知り合いの気持ちに少しだけわかる気がする。

ディオドラじゃないが、こういう場所に教会女を連れ込んで無理矢理犯してみたくなくなったりするね。

2—27 契約は慎重に（下）

「まだ猫のままではいるのか？」

「にゃん♪」

さて、どうしたものか。駒王町を一通り見て回り、本日の夜間戦闘でも致そうかと思っているのに黒歌が猫の姿のまま人型になってくれない。

これではヤルことがやれないではないか。

とある奥様によって、俺は人型形態を知っている相手であれば猫科動物形態でも興奮できてしまう立派な変態に調教されてしまった。だが、さすがに肩にのせられるような猫サイズに突っ込むのは無理がある。

「どうしたんだ、今日は？」

「添い寝だけじゃ……ダメ？」

黒猫が可愛らしい声で、そうねだってくる。

ふーむ、よく分からない。俺が嫌いになったというわけではなさそうなのだが……すすりすすりと頭をこすりつけて来ているし。

「このベッドの具合を確認したかったんだがな」

「ごめんねー」

駒王学園理事長邸宅の一室、そこに設置された大きベッドの上に仰向けに勢いよく寝転がると、ぼすんと寝具が音を立てた。

両手で持ち上げた黒歌が、くりくりとした金色の瞳で申し訳なさそうに見下ろしてくる。

「機嫌が悪いってわけじゃなさそうだ」

「うん、そういうことじゃいやいのよ。でも……ちよつとね」

廃棄された教会はそのままにすることにした。

で、それなら縄張りでの活動拠点をどうしようかということになったときに、それならばと聞かされたのがこの建物だ。

幼稚園から大学まであるこの駒王学園。それぞれの年代別の学舎ごとに結構な広さがあるその敷地内の一角に、理事長の住まうための屋敷も用意されていた。

元々は来客があつた際などのパーティー会場も兼ねて建設されたらしいのだが、近隣に日本各地に根を広げるホテルグループ『サーゼクス』のホテルが建てられたため、碌に使用されることもないまま維持だけされていたらしい。

さすがに冥界の本宅のような、城の集合体規模ではないが、結構立派な和洋折衷な大正期っぽい建築の御屋敷なのにもつたない話である。悪魔貴族基準でもそこそこに良い感じだというのに。

まあ、建築時に予定していた来客の層を考えれば気合を入れて造つたのは当然だが。ここつて、魔王輩出のグレモリー家と、バアル大王家の共同統治地域なのでな。

あと、悪魔つて種族は何故だか建築好きなどところがある。冥界にもこの手の、年に一度使うかどうかつて建物結構あつたりするくらいだ。父上もやたらと城建てようつて言いだしたりするしな……。

維持費用もバカにならんとと思うのだが、儉約節制は悪魔的には美德ではないので問題ないのだろう。強欲に稼いで、浪費しまくるのが良いのだ。結果として金が溜め込まれずに回転するから経済的には良いのかもしれない。

日本人に多そうな貯金思考とは違うのだよ、悪魔は。

そもそもが恐ろしく長寿な種族、かつ老化を気にするほど生きている者がいない。なので老後に備えて貯蓄つて考えが悪魔には希薄なのだと思う。コレクターは多いがな。

衰えがないのならば、使つた分はまた稼げばいいだけつてことになる。宵越しの銭は持たねえ、でやっていけなくはないのだ。病気や怪我はあるので、そればかりでもマズイが。

「たまにはこういうのもいいか」

胸の上に黒歌をのせたまま目を閉じた。

「おやすみ〜」

「ああ、おやすみ」

と、したのはいいのだが……さっぱり眠れない。

最近はスることしないで寝たことがほとんどなかったからな。精力が有り余つて、袋がパンパンだ。

それに、どうにも落ち着かない。猫状態の黒歌がいるのは問題ないのだが、どうにも空気が馴染まない。枕が変わると寝付けないアレというか、建物が違うからダメなのだろうか。

そこまで繊細なつもりはなかったのだが。

シトリー家や、アスタロト家、フアニックス家に泊まったこともあるが、特に問題はなかった。仲は悪くないとはいえ、それでも他所の貴族家の屋敷なら警戒心が湧いても良いものだろうに。

ドライグが代わりに警戒してくれているという安心感もあるのか、他家でも普通に眠りにつけたいたはずだ。

となると、やはりこの人間界の空気がよろしくないのだろうか。冥界のそれとは呼吸した時の感じ方からして違うこの空気が。

だとすると、俺も立派に悪魔になったものだ。ライザー義兄上などは、人間界の空気を嫌っていたような覚えがある。

「守りが薄いつてのもあるか……」

グレモリーの城は当然ながら警備が厚い。戦力としてはそこまで期待できずとも、警備の者が見張っているというだけで安心感があるものだ。

それに比べて、ここはほとんど無防備と言ってもいい。

縄張り運営のために人間界に住まう悪魔も多いと聞かすが、なかなか肝の据わった者たちだったのだな。それとも、俺が小心者過ぎるのだろうか。

いやいや、ドラゴンだってお宝を溜め込んだねぐらを作ってそこで眠ると聞く。寝所にこだわるのはそちらから来た性質なのかもしれない。

「ふにゃあ……」

そして、どうでもいいがさっぱり眠れない。さっさと寝てしまいたい。

そんな俺の気も知らず、黒歌は安心しきったように眠ってしまったている。微妙に腹立たしい。

おのれ、気持ちよさそうにしゃがって！

『なあ、ドライグ』

こういつたときに、話し相手がいるのは良いものだ。

『なんだ？』

『赤龍帝の籠手の所有者は、争いごとに巻き込まれやすいんだっただよな？』

『ああ』

『俺、これまでほとんどそんな経験がないんだが』

『お前のように、立場に恵まれた所有者はこれまでいなかったからな。歴代の中には人間の王族などもあったが、異形の、それも悪魔のように独自の社会を築いている勢力の貴族などはいなかったからな。守ろうとする周囲の者たちの力が違い過ぎる』

俺に近づく脅威や争いごとは、グレモリー家の力によって排除されて来たのだろう。赤龍帝の籠手がなくとも、次期当主やら魔王の弟っただけでも何かしらの工作の対象に成り得るのだから。

『となると、その守りが手薄になる人間界での縄張り運営は、何かしらの厄介ごとを呼び込みやすくなりそうか』

『だろうな。この籠手を持つ者の宿命だ』

『じゃあ、基本的には冥界に引っ込んでおくことにするか』

わざわざ必要のないトラブルを招き寄せる意味もない。縄張り運営は下級悪魔どもにでも投げておいて、俺自身は冥界での活動を重視することにしよう。

あちらならば、悪魔って勢力の力を味方につけやすいのは確かなのだから。

『逃げるのか？』

『ふるいにかけるって感じだな。暴れていた頃のドライブだって、有象無象の弱者から絡まれるのは面倒だっただろう？』

『それは確かにそうだったな。戦うならば、相応しい強者が良い』

『なら、グレモリー家の守りも突破できない程度の厄介ごとなんぞ相手にしなくてもいいさ』

そのくらいのもめ事ならば、どうせ簡単に薙ぎ払ってしまう。相手をするだけ時間の無駄だ。そんな暇があったら腰を振っていた方が万倍も有意義なものよ。

上級悪魔の縄張り運営は、大きく分けると二種類に分かれる。間に家臣を挟むかどうかの違いだ。

ディオドラやライザー義兄上は、事情は異なるが人間界の縄張りにあまりタッチしていない。基本的には家に従っている下級・中級の悪魔を派遣してそれらに仕事をさせ、上前をはねる形の運営だ。

逆に『王』自ら現地に乗り込んで、眷属と一緒に人間たちから直に契約を取っている者もいる。こちらだと間に家臣を挟まないの、自分たちの取り分は多くなる。

前者であれば、悪魔の仕事にかかる分の時間を別のことに使える。後者であれば、稼ぎの他に、悪魔としての階級昇進に影響する功績も多くなるだろう。

で、ハーレム王を目指そうとしている俺は後者を選択することにしたのだ。部下だけでは対応できないような取引や、個人的な知り合いとの取引、あとは大きな案件以外は下の者にやらせても構わないだろう。

ハーレム人員が増えて行けば、女たちをベッドで待たせることになる。だから、つまらなそうな依頼に割く時間などない。そんな暇があったら子作りしろ、父上だってそう言うに違いないのだ。

『そうなるよ、現状ではこっちの責任者は黒歌に頼むしかないか』

ほぼほぼ任せるにしても、眷属の一人くらいは配置しておいた方がいいだろう。転移ですぐに行き来できるとは言え、まったくいないつても体裁が悪いかもしれない。

たしか、研究所に勤める直前ごろのアグリツパが、そんな感じで縄張りを運営をしていた覚えがある。

眷属を町に置いて管理させていたときに、そのまた部下の下級悪魔が契約者に『霊を見る力』を与え、亡くなった家族と話せるようにしたところから、俺が朱乃を拾った騒動が始まったはずだ。

霊と会話できるようになった契約者がその後とうっかり悪霊に話しかけてしまつて憑りつかれ、困り果てていたところを通りすがりの朱乃が無償で助けたという。

契約者が『どうかしてくれ』と再度取引を願ってくるのを待つて

いた下級悪魔くんとその上司のアグリツパ眷属は大恥だよ。

アグリツパほどの魔法使いが常駐していたらこんな間抜けなことにはならなかっただろうし、アグリツパ直属の眷属が小学生な年齢の朱乃に出し抜かれるはずもない。でも、眷属の部下までは統率しきれていなかったってことだ。

まあ、お陰で朱乃と出会えたのだからアグリツパの眷属くんとその部下には感謝しておこう。何もやらんが。

『この猫又にか』

『レイヴェルはまだ学校があるし、涙狙いの連中に襲われるかもしれない。朱乃はバラキエルがどう考えているのか分からんが、墮天使側からちよっかいをかけられる可能性がないとは言えん』

リュイには、俺の秘書的な仕事を頼みたいところだ。『騎士』予定だしな。

他の眷属が増えてくるまでは、黒歌には仙術の研鑽を積んでももらいつつ縄張りの管理も頼まないといけないわけだ。日本妖怪出身なので、ある程度はこの土地の異形連中とも話が通じやすいだろうという期待もある。

『俺にはどうでもいいことだ。お前の好きにすればいいだろう』

とか言いつつ話には応じてくれるドライグは、付き合いのいいヤツだよ。

『なあ、ドライグ』

『なんだ？』

『お前、現状に満足しているのか？』

『……どういう意味だ？』

かつて思う様暴力を振るって世界中を荒らしまわった龍の帝王さまが、こんな小さな籠手の内に封じられて、俺のような若造の話し相手なんぞをしている。

その状況に思うところはないのかね。

『分からないならいいさ』

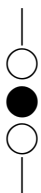
『ああ、分からんな』

『なに、俺はグレモリーってことだ』

情愛深く、身内に甘いグレモリー。そうあるべし、と始祖によつて定められた一族。

ならば、そうするべきなのだろう。個人的にもそうしてやりたいと思うところではあるし。

ドライグと適当にぐだぐだ話していたらようやく眠気が襲つて来た。



「今回は成果『0』か」

「まあね、そういう日もあるわよ」

帰還したナベリウス分家で、分家当主エダーギに報告を済ませた黒歌はそそくさと自室に戻った。

「はあ……、ああーしんどかったにやん」

術を使つて周囲を探り誰もいないことを確認すると、ちよつとした防音の結界を張り巡らせる。

「んっ……」

次の主から買い与えられた着物の帯を緩め、豊かな胸の双丘をさらけ出すと黒歌の指がその先端へと伸びた。

「んっ、はあっ……」

片手で乳首をいじりながら、もう一方の手を股の間へと忍ばせる。すると昨夜からじくじくと期待に震えたまま放置されていた割れ目が、自身の指先をぬるりと迎え入れた。

「んんっ……うにゃあん……ああっ、主さあん……」

自分で弄つても、男に抱かれることで得られる快感には程遠い。それでも慰めずにはいられなかった。

自らの胸をこね回し、ひねり、つねる。蜜壺に沈めた指の動きは徐々に激しくなつていき、ぐちゅぐちゅと音を室内に響かせ始める。

「んんっ、はああ、ああっ、もつと、もつと、ああっ、んにゃあん、そ

こおっ……、ああっん、おく、おくに欲しい……」

この数か月間、とろとろに蕩けさせられ続けてきた身体が疼いて仕方がない。膣内にある肉粒を指先でまくり上げてみても、肉棒のもたらすそれには到底及ばない。

「んんうん……むり、これ、む、りい……、がまん、できな……い。んにやああ……」

挿入され、快感にビクビクと痙攣する膣内を蹂躪されたい。蕩けた身体をいのように弄ばれ、言われるがままにとった姿勢で幾度も突き込まれたい。

イキっぱなしになったまま、いつ終わるともしれない連続射精を胎内に受けまくりたい。

いたずらに反応してピクピクと震える肉棒をなめしゃぶり、上目遣いで快感をこらえる紅髪の少年の顔を見つめていたい。

これまでに交わした様々な男女の営みの記憶を思い浮かべて、自慰にふけり続ける。

「ああっ！ んんっ！ はあっ、はあっ……んんっ、ハッ、ンンンッ、ひいんンンッ！」

はあ、はあ、と荒い息を吐きだして黒歌は、自身の愛液に濡れた指先を見つめた。

軽くイっただけなのに、まったく満足出来ていない。

「むなしい、にゃん……」

これは無理だ。トレードが確定するまでの残りの期間、今回のような形で何とかできないかと考えたけれど、これでは自分の身がもたない。

思った以上にハマってしまったことを痛感させられたただけだった。

「あー……、どうしょ」

我慢できなくて、着物も脱がないままに自慰に耽ってしまった。その結果、かなりお高かっただろう貰い物の着物に染みが出来てしまっている。

あとでどうにかしよう。対処を後回しにし、黒歌はシャワールーム

へと向かった。

脱いでからすれば良かったのにと気づき、それもこれも猫を撫でるにしてはいやらしいあの手つきが悪いのだと脳内で八つ当たりを繰り返しながら、ザッと汗を流していく。

「姉さま、起きてますか？」

サッパリした黒歌が部屋でゴロゴロとしていると、控えめなノックの後に妹の声が出た。



俺は現在、レイヴェルと並んで座っている。

目の前にはテーブルがあり、反対側には黒歌とその妹の白音が座っていた。

そろそろ妹を紹介したいという黒歌からの話があったので、白音の待遇も含めて話し合おうということになったのだ。

「あら、黒歌さん。服装が整いましたわね」

「にやはは、さすがにこつちを着ろって買ってもらっちゃったらね」

レイヴェルが言うように、最近の黒歌はきちんと服を着るようになった。というか、俺の趣味でそうさせた。メイド服は正統ロングスカート派な俺なので、和風だつてきつちり着ている方が好きなのだ。

エロい格好は、致すときだけでよい。他の男に際どい格好を見せるんじゃないという独占欲も多分にあると思う。

妹の白音の方はと言えば、白いワンピース姿であった。白い髪に白い肌、白い服。小さい背丈や華奢な身体つき、大きな瞳も合わせて大変庇護欲をそそつてくる。写真で分かっていたことだが、改めて将来性にとても期待できそうだ。

「そうでしたか。それは良かったですわね」

隣のレイヴェルがちよっとピリピリしているのは、いつぞやの眷属にするか使い魔にするかって攻防のせいだろう。まあ、俺としては本当はどっちでもいいのだが、一度口に出した以上は使い魔って方向で進めていくつもりだ。

その後、まずは黒歌の今後の扱いについて話をした。仙術の研鑽を進めてもらうことと、駒王町の縄張りで活動させる悪魔達のまとめ役になってもらうことについてだ。

仙術については問題なかったのだが、縄張りに関しては最初は結構渋られた。あまり責任のある立場には付きたくないと考えていたらしい。

でもな、『責任を嫌うヤツは責任感があるヤツだ』ってどこかで聞いた覚えがあるので、ここは未来のご主人様権限で押し通させてもらった。別に悪い話ではないのだ。むしろ稼ぎも増えて、功績も上げやすくなるポジションである。転生悪魔ならば、なりたいたと手を上げる者の方が多いだろう。

「学校？」

黒歌について大まかに話した後は、白音のことだ。

「それで、この間のお出かけで皆さんの縄張りを見に行つたときの話をしたら、この子が学校に行つてみたいって言いだして」

ぶすつとした顔のレイヴェルに拗ねた目付きで睨まれてしまった。黒歌だけを連れて行って、彼女を置いていったのがお気に召さなかったらしい。

説明したんだけどな、「お前が心配だったんだよ」って。その時は、ほわんと頬を染めて嬉しそうにしていたのに、ちよつと間を置いたらやっぱり不満が出て来たらしい。なんとも可愛い嫁さんである。

「学校か……駒王学園に通わせたいってことでいいんだな」

「そうにやん。私が駒王町の縄張り見てるってことなら、白音とも一緒にいられるし……。あ、もちろん、学費とか生活費は私のお給料から出すつもりよ」

駒王学園はあの地では、最大の施設だ。生徒の中にこちら側の者を混ぜておけるのは都合が良い。

「それは構わないが、白音の生活の拠点はここにするぞ」

「え？　ここって、このお城？」

「白音は俺の使い魔にするからな。人間の学校もいいが、覚えさせることがある。ああ、どうしても使い魔がイヤなら、レイヴェルの眷属

でもいいぞ」

俺の言葉を聞いた黒歌の顔色が変わった。陰りを帯び、まるで手ひどく裏切られた者のような瞳をする。

「え……なんで、主さんが、白音のことを決めるの?」

「なんで、と聞かれてもな。そういう契約だとしか言えないな」

「契約って! 私のことは好きにしたらいいけど、白音は関係ないはずよ!」

ああ、分かっていたいなかったのか。エダーギ殿が『商品としての黒歌の説明』に、妹の白音も付属させていたことの意味を。

黒歌の値段はかなり高額だった。その値段の中には、白音の分も含まれているのに、だ。

「それがあるんだ。黒歌が結んだ契約にそう書いてある」

「そんなはずないわよ!」

ちよつとばかり黒歌が興奮気味だな。黒歌が妹大好きお姉ちゃんなのは、これまでの付き合いでにじみ出ていたから、これ以上意地の悪い言い方はあまりしない方が良いか。

とはいえ、ここが白音の処遇をこちら側に持つてくる分水嶺。悪魔らしくいかないと。

「まあ、少し落ち着け。たしか、黒歌はエダーギ殿が白音に自分と同じような訓練を課そうとしていると怒っていたよな?」

「そうよ、あんたはそんなことしないって……」

「それなんだがな、エダーギ殿にはそうする権利がある……。いや、正確には黒歌にはそのことに文句を言う権利がないんだ」

「それって、どういう……!」

憤る黒歌の眼前に、契約書突き付ける。

オリジナルはまだエダーギ殿が保管しているので、これはトレード後の眷属悪魔の待遇について確認するために受け取った写しだ。

「同じものを持っているはずだが、文面をよく確認してみろ」

言われた黒歌は、自身の亜空間から契約書を取り出してまじまじとその内容を確認し始めた。

気になるのか、白音がそれを覗き込もうとしているので彼女の前に

写しを置いてやる。

「悪魔文字は読めるか？」

「あつ、えつと……はい、少しだけ、ですけど」

「読んでみる」

悪魔の契約書の正式なものは、悪魔文字を用いて記される。

「黒歌……姉さまが、エダーギ・ナベリウス、様の眷属悪魔となる代わりに、衣食住の面倒をみてもらう。妹の白音も、姉の黒歌同様に扱いエダーギ・ナベリウスさまが、面倒を見る……でいいですか？」

他にも細々と書かれているが、要点は白音が今意味を訳した部分だけだ。前世日本人な俺もそうだが、日本妖怪出身の白音もやはり思考言語は日本語らしい。

会話が自動的に翻訳されてしまうこともあつて、前世持ちな俺はなかなか悪魔言語で思考できないんだよな。切り替えが出来ない、難しい。

「これをどう読んだら、私には白音のことで文句を言う権利がないってことになるのじゃん？」

少し落ち着いたのか、訊ねてくる黒歌。その文章の解説は、レイヴェルにお願ひすることにした。アイコンタクトで引き受けてくれるってのは、良いものだ。

「まず、眷属悪魔と言う言葉が、下僕と同義であることはご存知ですよね？」

「それくらいは知ってるわよ」

「では、下僕は主に逆らう権利などなく、服従するものだということも理解されていますかしら？」

「それも、分かってるじゃん……。でも、白音はツ……！」

「黒歌さん、この契約の内容では、白音は姉と『同様』に扱うこととされていますわよね？」

「そうだけど……つて、え……それってご飯のことだけじゃなく……？」

「ええ、この文面からだど、黒歌さんが妹ともども下僕として扱われることに同意した、とも読み取れますわ」

眷属のトレードを行った場合、基本的には前の『王』との間で交わされた契約の内容が引き継がれることになっている。

そうしないと、眷属側の立場が一方的に劣悪なものになっていってしまう可能性が高いからだ。

たとえば俺が、非常に良い条件を提示して眷属に迎えた転生悪魔がいたとする。

だが、その眷属をトレードに出した際に次の『王』が「それは前の『王』との契約だから知ったことではない」などと言ってしまうとなると、最初の条件が消えてしまうことになる。

そうなると、好条件で釣っておいて、即座にトレードすれば無給で働かせるなんてことも可能になってしまう。

それはよろしくないということで、現魔王様方が『悪魔の駒』を導入した際に定めたルールが、契約条件の引継ぎである。

まあ、死にかけるまで痛めつけてから「死にたくなければ下僕になれ」なんて勧誘の仕方もあるそうなので、劣悪な条件で働かされている転生悪魔は後を絶たないわけだが。だから、『はぐれ悪魔』がポコポコ発生するのだ。

「そんな……」

俺は、契約書を握りしめてプルプルと震えている黒歌の後ろに立つた。

「エダーギ殿が結んだ契約を引き継ぐ形になるから、俺は白音を下僕として扱ってもいいってことになる」

「うっ……くっ……」

「少し二人で話そう」

「う、ん……」

「悪くはしないから、そう睨むな。俺が傷つく」

黒歌の脇に手を回して抱えあげ、別室へと連れ出す。

「レイヴェル。白音への説明を頼む」

「ええ、分かりましたわ」

さて、こっちは黒歌をなだめるとするか。

別室の長椅子に黒歌を座らせ、隣に腰を下ろす。

「少しは落ち着いたか？」

「そうね……少しだけ」

まだ不機嫌そうだな。まあ、最近かなり甘えて来てくれるようになっていたから、それを裏切られたような気分にもなっているのかもしれない。

だとすれば、うん、男冥利に尽きるってものだ。それだけ好意があったってことだからな。

「あの契約内容だがな、実のところ白音にはなんの強制力もない」
「……え？」

「当たり前だが、契約したのは黒歌であって白音ではないからな」

「そう、あ、そうよね！」

「ただ、白音を俺の使い魔か、レイヴェルの眷属にとって話は本気だ。これはあの子を守るためのものでもある」

「どういうこと？」

少し身体が柔らかくなったな。緊張が抜けたようだ。彼女の腰に回した手から、その感触が伝わって来た。

「自分で言うのもなんだが、俺は結構重要な立場だな。その眷属、それも愛妾のように扱われている者の妹となると、何かしらの企みの的になることがあるかもしれないってことだ」

「魔王輩出の名門公爵家の次期当主で、魔王の弟で、赤龍帝だものね……」

「それでだ、それこそ黒歌がしたような契約をいつの間にか結ばされていた、なんてこともあるかもしれない。あの契約を結んだのは今の白音くらいの年の頃だったんだよね？」

「そうよ……。はあ……。悪魔との取引なんて、慎重にしなきゃいけないって分かってたのに」

人間なら小学生をやっているくらいの年齢で、大戦以前から生きている悪魔と取引をしたらいいようにされてしまうのは仕方ないことだ。エダーギ殿のやり口は、まだ良心的とさえ言える。

「ただ、俺のその厄介な立場ってものは逆に有効でもある。使い魔なり、眷属になりなっておけば、そう手を出してくる者はいない」

適当なことを話しているが、俺の目的は白音を手元に置くことだけだ。じっくり美味しく育てて、たつぷり味わってやろうという考えである。庇護下に納めようってのは、そのついでである。

そう悪い話ではないと思うんだけどな。

「使い魔だと、たしか契約の更新が出来たはずよね？」

「ああ、悪魔へと転生したらもう取り返しがつかないが、使い魔契約は契約解除もあるし、内容は様々だ」

一年ごとに見直しなんてことも出来るし、契約に定めた報酬が支払われなければその場で打ち切りも可能だ。眷属になる場合とは、自由度が段違いである。

「んっ、んっ、んにゃ……」

撫でているうちに喉を鳴らし始めた黒歌の耳元で囁く。

「よく相談してから決めるといい。シロの様子を見ていたから分かっていると思うが、この屋敷では俺の使い魔の立場は結構良いものぞ」

結局、白音は俺の使い魔になるということで話がついた。

仕事内容は、屋敷内の清掃メイドと同じ。平日は学校に通って、放課後と休日に働いてもらう。給料は日本円にして時給五千円程度で、有給は無いが福利厚生は一部適用。

不満がなければ、契約は自動的に更新される。

まあ、給金が安い気もするが、見習いならこんなものだろう。

2—28 ナベリウスの失踪

前世における俺のムスコは、わりとエッチなゲームのお世話になった。

エロゲと言ってもジャンルは様々で、アクションやシューティングなどもあったが俺はもっぱらテキストを読み進めて選択肢を選んでいくタイプのを嗜んでいたものだ。

そんなタイプのゲームの中で、もつとも多く出現した選択肢はなんだっただろう。

ふとそう思った時に出てきたのは――。

↓ 『膣内に射精する』

『身体にぶっかける』

この二択だったように思う。もちろんぶっかけ方にも差分があった、顔とか胸とか下半身とか、いろいろとぶっかける箇所を指定できるゲームもあった。

だが、やはりこの二択が多かったと思うのだ。

この二択、ただ単にCGの差分のことが大半だったのだが、場合によってはルートやエンディング、実績称号などに影響を与えてくることもあった。

『膣内射精』を選んだ回数で子供が出来たり出来なかったり、とか。ぶっかけオンリーでエンディングまでいくと、『白流皇』なんて称号がもらえたり、とか。

この選択、俺は基本的には最初は『中出し』派であった。『外』も後から回収のために選ぶが、とりあえず最初は『中』だろう。

もちろんエロゲの楽しみ方は人それぞれ、外のほうが見た目の変化が大きくてエロいという意見も理解できる。

今生の俺には、そんなエロゲにおける選択は必要なくなった。というよりもやっている暇がない。

ゲームしてる暇があったら、嫁さんを抱けって話だ。眷属もいれば、メイドだっている。

リアルにいくらでも出来る環境を得ても、俺はやはり『中出し』派

のままだった。そもそも子作りが目的なのだから、そうしなけりや意味がないってこともある。

だが、それ以上に女の秘部の奥にグイグイと押し付けながら放出するのが好きなのだ。興奮する。ああ、ヤった、ヤッている！ と一番実感できる瞬間だと個人的には思う。

肉棒の先端の鈴口と膣奥の子宮口をベツタリとディープキスさせて、どくどくと流し込むのがたまらなく好きなのだ。

それなのに――。

最近の黒歌は、『ぶっかけ』がお好みなのだ。

「にゃああん♡ 主さん、ああん♡ 主さんのザーメンかけてえ♡」
仰向けに寝かせた黒歌の両脚を彼女自身にぐっと持ち上げさせながら、じゅくじゅくと突き込む。

こちらはそんな黒歌の腰を掴んで、もういつでも発射可能な状態だ。

「ねえ、かけてほしいのお♡ 私の身体、主さんのでマーキングしてえ♡ あなたの匂いのする女にしてえ♡」

ああ、くそっ！ こんなことを言われてしまったら、ぶっかけるしかないではないか。

にゃんにゃんと喘ぐ女の蜜壺から、臨界点を超えて堪えていた砲塔を一気に引き抜く！

牡の精を呑み込もうと蠢く猫？の膣内は、引くときに一番快感が強くなる造りをしている。ズリズリズリつとカリの裏を逆立った肉粒が刺激してきて、引き抜く途中で達しそうになるのを奥歯を噛みしめて堪えた。

「うッ、おおおッ!!」

「うああっん♡ いっぱい、ああッ、いっぱい♡ あっついにやあ♡♡ んんんん♡ ツ♡♡」

ブジュブジュと音を立て、白濁が黒歌へと降り注ぐ。下腹部、胸、喉、顔、髪、あちこちに飛び散った俺の精が彼女を染め上げた。

「んはあ……♡ ハアッ……♡ はあん……♡ 身体中、主さんの匂

いでいっばい……んふう♡」

ピクリ、ピクリと肢体を震わせながら、黒歌は両手を使って精液を広げ始めた。濁った白い粘液が彼女の身体の上に薄く延ばされて行くさまは、何ともいえない淫靡な光景だった。

「もつとかけてやるから、舐めろ」

恍惚の表情でだらりと余韻に浸る黒歌の頬に、俺はめきめきと硬さを取り戻したモノを押し付けた。

「んふう……♡ んッ……んちゅ……じゅッ……」

彼女の頭を掴み、胸を揉みながら口淫奉仕をさせる。精を吐き出したばかりのペニスは敏感になっていて、そこをザラついた舌に嘗め回され背筋にゾクゾクとしたものが奔っていく。

膝枕をするような姿勢で黒歌の頭を腿の上に乗せ、あちこちへの愛撫を続けながら舐め奉仕を続けさせていると、やがてまた精液が肉柱の中を駆け上がってくる。

「ンッ、くっ……どうする？ 飲むか？ それとも、顔にぶちまけられたいか？」

「ンフっ、んんッ、ぢゅうう……♡ かけてえ、わらひの顔、真っ白にそめてえ♡♡」

喉奥を軽く小突いてからぶちまける寸前の砲身を抜き、黒歌の鼻先に突きつけた。

「出してやる！ そのまま、舐めろ」

「んんっふッ……んっアああ……ペリゅッ……じいりゅ、ぴいちゅッ……」

わざと大きな音を立てて舐めしやぶる黒歌の行為に興奮し、俺のモノがグッ、ぐぐぐッつと太くなる。

「ぐッ、おおッッッ！」

「ンンッ……んえッ……ンハアああ……んにやああん♡♡」

連続して吐き出される白濁が、黒歌の鼻や目も含めた顔面に至近距離からぶちまけられ、彼女はその衝撃に顔を歪める。が、すぐにその表情を蕩けさせダラダラと濁った白い液を垂らす。

黒歌の綺麗な顔を存分に穢し、鼻の穴の中にまでぶちまけたことで

苦しそうにむせかえる様子に思わず口の端が吊り上がってしまふ。

そんな真似をされても彼女の金色の瞳に悦楽の色合いが浮かんでいるのが良い。女の支配している気分を味わわせてくれる。

まあ、本当は中に出したいところを黒歌の希望に合わせているのだから、これぐらいはさせてもらってもいいだろう。

「あつ……ううん……、すつこい匂い……。頭おかしくなりそ……」

黒歌は顔から垂れ落ちる精液を指ですくい、ペロペロと舐めとっている。

「うまいのか？」

「んふツ……主さんも舐める？ はい、あーん」

差し出された白濁塗れの指先から、俺は顔を逸らした。自分で出しておいてなんだが、なんとなく嫌なのだ。

さらに言うなら、全身白濁塗れの黒歌を抱きしめるのもちよつと遠慮したいところだ。いや、本当に自分で出しておいてなんだって話だ。

女の淫液で体中が汁塗れになるのなら構わないし、クンニも別に嫌ではないのだけれど。

「あーん、あーん、あーん」

「ええい、やめろ」

悪戯っぽい表情で俺の口元に指を持ってこようとすると黒歌をひっくり返し、寝バツクの態勢に移行する。

「そんなに好きなら、背中も精液まみれにしてやる」

「いやーん、わたし、全身真っ白にされちゃうにやん♡」

尻尾でハートマークを作りながら何を言っているのやら、だ。

お望み通り、背中も髪も、猫耳尻尾も全部ガビガビにしてくれる！

「もうすぐだな」

「そうねー、んふツ……れろ」

ベッドの上での一通りのことを終え、風呂場でお互いを洗い合った。

そうして現在、俺はいわゆる『潜望鏡』ってやつをしてもらっている。

湯船の端に背を預け、腰を浮かして勃起したペニスの先端を水面より上に出す。で、そこをフェラしてもらう。腰を浮かすが大変なら、体重を支えるためにスケベな感じの椅子とか下に挟んでもよし。

本体が湯の中であり、そこから伸びたモノが水上に覗いているところを、潜水艦の潜望鏡に見立てたプレイだな。何回か風俗でやってもらったことがあったのを思い出して頼んだのだ。

どうも初対面と面談のときが遊女っぽい格好だったせいか、黒歌とはこんな感じのプレイになることがちよくちよくある。

まあ、俺がそうさせているだけで、黒歌にはそっちのお店での勤務経験はないのだが。

「あー、気持ちいいなコレ」

女の子に風俗的な技を仕込んでいるようで、ちよつと興奮する。

「んつく、ぴちゅつ……そうなの？」

「風呂でこう温まりながら、そこを優しく舐められるってのは、ふぁ……」

蕩ける。湯に浸かって身体はあつたかいし、股間はチロチロと舐められて気持ちいいし、たまらんな。

「ほんとに、気持ちよさそうにゃん♡ それじゃあ——」

かぼつと潜望鏡を呑み込もうとする黒歌の頭を抑えて止めた。

「そんなに強くしなくていい、なんだったら手で撫でるだけでもいいからな」

「ゆったり、まったりって感じがいいの？」

「そうねー」

「似てないわよ、それ……んつちユウツ」

黒歌の声真似は無理だったらしい。

「もうすぐだな」

「そうねー、ってさつきも言わなかった？ んんツ、れろ」

「あー、んー？ そうだったかな……？ 明後日には、正式にお前を俺の眷属に出来ると思うと、なんだか感慨深くてな」

ほんわり心地よく、眠くなってくる。

あー、ローションマットプレイとかもやってもらおうかな、そのうち……あ、まぶた落ちそう。

たわしがな、あればメリハリが付くし、なければスベスベ感があったて良い。黒歌だと丁寧に処理しているから、中間くらいの感じになるのだろうか……。

「もー、こんなところで寝ちゃダメよ」

「すまん……でも、気持ち良くてなあ」

不満そうな黒歌を身振りで招いて、膝の上に乗せる。

「んんう………するの？」

「ゆっくりな」

黒歌の乳房に顔を埋めるようにしながら、お湯ごと膣にペニスを挿入していく。

「んふっう………はあああ♡ お湯が入って来ちゃったにゃん」

激しく動く気分ではないが、繋がっているだけというのもいいものだ。

奥の奥まで挿し込んで、そのまま止めると膣内がうねうねとして丁度いい気持ち良さだ。黒歌の中は動かすと刺激が強いが、そのままだとゆるふわつとしてるので、こういうのには向いている。

「力抜いていいぞ」

もたれかからせ彼女の体重を預かって、そのまま軽く抱きしめる。

「ふうあ……んうっ……、トレードが済んだら、私もこの魔力になるのよね？」

「そうだな、そうなるとまた少し感じが変わるかもな」

魔力、妖力、龍の気、生命力に光力、あとは神気など、まとめてオーラなどと呼ばれるものには波長のようなものがある。

『悪魔の駒』で悪魔に転生し眷属悪魔となった者は、悪魔の力の源であ

る魔力を得る。そしてその魔力オーラの波長は主である『王』の影響を強く受け、ほとんど同じものになるのだ。

今の黒歌は、エダーギ・ナベリウス殿の眷属なのでナベリスウス系のオーラを発している。それがトレードによって俺の眷属に変わると、今度は俺のものに近いオーラに変わるわけだ。

レイヴェルのように元から悪魔で自前の魔力を持っている場合はまた少し変わってくるが、それでも『王』の影響を受けるところは同じだ。

「そうしたら、私が皆さんの女だつてすぐに分かっちゃうのよね？」
「知り合いなら分かるだろうな。黒歌だと妖力のオーラもあって少し分かり辛いかもしれないが」

元種族が異能なしの人間だつたりすると、ほとんど主と同じオーラになる。黒歌は元が妖怪だから俺とそっくりとはならないだろうが、それでも大概の悪魔には分かると思う。

この同じ眷属同士だと魔力が近くなるってのかなり重要なことで、怪我をしたときなどに眷属に魔力を分け与えることで治療を行えたりするのだ。

その際、肌を重ねる面積が多いほど治療効果が高まるってことなのだから、そりゃ異性愛者の『王』は自身の眷属でハーレムなり逆ハーレムするよなつて。

俺の場合はレイヴェルの『不死身』を与えることで治療できるから必要ないが、他の治療手段を持たない『王』にとっては傷ついた眷属を癒す一般的で安価な手段がそれなのだ。

男同士もありつて趣味の男性の『王』ならともかく、肌を重ねるのは女しか嫌だつて男の『王』なら眷属全部女性にしたくなるともさ。俺だつてそうする、そうしている。

「んふふ、そうなつたら……主さんの子種、ココにいっぱいちよーだい♡」

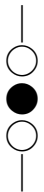
そう言つて、黒歌は膺をきゅつとしめてくる。

「ん？ 眷属になつた後は中に欲しいのか？」

「そうよー、たつくさん欲しいにゃん♪」

まあ、眷属悪魔にすることで魔力が主に似るのだから、ある意味マージング済みみたいなものになるのか、な？
とりあえず今が気持ちいいから構わないか。どうせすぐにそうなるわけだし。

女の考えは、よく分からんことが多い。



翌日、ナベリウス分家に帰った黒歌から突然の連絡があった。

『白音がッ！ 白音がいらないの！』

取り乱す黒歌をなだめつつ話を聞いてみると、帰還の報告をしようとしたがエダーギ殿が見つからず。さらに、妹の白音の行方も不明。どうしたのだろうかと使用人たちに聞いて回っても二人の行き先が分からず、他の眷属の誰も知らないと言う。

嫌な予感を覚えた黒歌は、屋敷とその周辺を仙術の気配察知で探し回ったがどこにも気配がない。

『白音、白音……どうしよう、ね、主さん、白音が』

エダーギ殿が行き先を伝えずにいなくなったことは、これまで無かったらしい。

眷属も使用人も入ることを禁止されている研究施設があるそうで、そこに一度行ったきり長期間戻ってこないことはあるようだが、その際には使用人の長がその旨を聞いていたようだ。

となると、白音の行き先は……その研究施設か？

『アイツ、くそッ！ 白音を……ぶっ殺してやる!!』

黒歌も同じことを考えたのか、通信魔方陣の向こうの顔が怒りに満ちていた。

今にもその研究施設とやらに突入していきそうだ。

「少し待て、いま呼んでみる」

『呼ぶって、何を！』

「いや、使い魔」

この間から、猫？の白音は俺の使い魔になっている。

使い魔召喚——白音。

「あ」

『あ』

姉妹揃って似たような顔をしているのがなんだか面白いな。そんな場合ではないのだが。

「あ、えっ？ あっ、リヴラクス……さま？」

「そうだ、お前の主のリヴラクス・グレモリーだ。どこに行っていたんだ？ 黒歌が心配してこっちに連絡してきたぞ」

目線を合わせてなるべく穏やかに語り掛けると、白音の瞳からポロポロと涙が零れ落ちる。

俺の服の袖をきゅつと掴んできたので、こちらもその手を握ってみた。

親しくない子供扱いにはあまり慣れていない。まだ良く知らない泣いてる子供の対応とか俺の人生経験にはほとんどないのだ。

ソーナやラティアなら大丈夫だったがな。

「あ、えっと、あ、あの……」

『白音！』

「姉さまー」

繋げっぱなしの通信魔方陣に映る黒歌の姿。それを見た白音の表情が、みるみるうちに明るくなっていく。

『どこ行ってたのよ！ アイツに何もされてない!?!』

白音の無事を確認して安心した様子ながらも、黒歌は未だ顔に怒りを張り付けたまま。

「知らない人が、すごく強そうな悪魔が来て……」

エダーギの野郎ぶつ殺してやる！ と何故か己の主に怒り心頭の黒歌をなだめつつ、たどたどしい白音の話を聞いていくと、

「白音の部屋にいきなり見たこともない悪魔、それもおそらく純血の強力な悪魔が来て、さらわれた……ということでもいいか？」

「えっと……そうです。はい」

「黒歌、その屋敷は転移対策はされていないのか？」

『それぐらいはしてあるわよ。分家でも貴族よ』

貴族の城や、金のある商人の屋敷には転移からの奇襲を受けないように対策が施されているものだ。

それを破って侵入してきたとなると、よほどの力の持ち主か、あるいは内部に協力者がいたか、このどちらかだろう。

「エダーギ殿はまだ見つかっていないんだな？ 連絡もつかない？」

『全然ダメ、眷属の「女王」でもさっぱりみたいよ』

これは、少しよろしくない事態かもしれないな。

眷属トレードの取引終了前に、相手方が行方知れずなど大変困る。

とりあえず、父上に相談するか。あとは義姉上に言って、念のためナベリウス本家に問い合わせだな。

何事かと控えていたメイドたちに指示を出してから、通信魔方陣の黒歌へと向き直る。

「黒歌、問題がなさそうなら屋敷の連中を集めておいてくれ。俺もそちらに向かう」

エダーギ殿の屋敷に残されていた面々は、黒歌も含めて特に被害がない様子。すぐに何か危険なことが起きるってことはなさそうだ。

「ああ、一応聞くが……これ、お前の悪戯ってことはないよな？ グレイフィアも動かすんだ、さすがに冗談では済まんぞ」

『いくら私でも、冗談でこんなことしないわよ！』

と、話している間に義姉上のオーラが近づいてきた。

普段はこの俺とそのハーレムメンバー用の区画には近寄らない義姉上だが、緊急となれば別だ。

「リアスさま、緊急事態とのことでしたが……？」

近くに来たグレイフィアの顔を見た白音が、俺の後ろに隠れるようにして腰にしがみつき震えだした。

たしかに義姉上は、美形なので表情がキリっとしていたときはちよつと怖そうに見えるかもしれない。あと、割とこう、相手によっては「下賤の輩」とか言っちゃう人だけど、そこまで怖くはないぞ。

急いで来てくれたのか、やや魔力のオーラが迸り気味だが、攻撃的

な意思是籠っていないし。

「似て……ます。顔と、オーラが少し……私を連れて行った人に」

ん？ 兄上の眷属であり、ルキフグス家の魔力もある義姉上に似たオーラで、顔つきも似ている……？

推定、エダーギ・ナベリウス邸不法侵入&白音誘拐の犯人は——ミ
リキヤス！

……ではないよなあ。

2—29 グレイファイアのおとうと

彼にとって、姉は憧れの存在だった。

誰よりも勇敢で、誰よりも強く見えたその姿は、彼の誇りそのものだった。

そんな姉を支える存在になることこそが己の生きる道だと信じていたのだ。

その心の中で最も大きな存在であった姉が『ルシファー』に尽くすルキフグスのために反し、悪魔と呼んでいいのかすら分からない異形の存在と結ばれた。

その衝撃は彼の心に多大な影響を与え、それまでに培ってきた価値観を崩壊に至らしめた。

悪魔と悪魔が本来の敵である天使や墮天使をよそに殺し合った、あの内戦。それに勝利したのは姉を惑わした異形の男の率いた勢力だった。

敗者となり、旧魔王と呼ばれることになる側について内戦を戦った彼——ユーグリッド・ルキフグス——は、その内戦の最中に辺境へと落ちのび、心の芯を抜かれ精神の均衡を崩し、屍のような有様で長いときを過ごして来た。

彼の下に訪れた『ネビロス家』の使いから、あることを聞くまでは――。

「メイド……？」

そのことは一応聞き及んでいた。あの男は、あの異形は、ルシファーの名を篡奪した紅髪の悪魔は、彼の姉であるグレイファイアに下女メイドの姿と仕事をさせていると。

以前に聞いた時には、茫洋とした精神状態で聞き流してしまっていたが、よくよく考えるとその所業は彼を憤怒させるに十分なものだった。

彼の姉は、誇り高き貴族。魔王筆頭たるルシファーのそば近くに仕えるルキフグス家の悪魔なのだ。

それが、平民、下級悪魔の仕事である下女として扱われている。な

んということか！

彼の憧れ、彼の誇り、彼が愛し、生きる道と信じた姉が、下女の仕事に就いている。

王妃として扱われているのならば、納得は出来た。姉にはそれに相応しい存在だ。それが、下女！

しかも、魔王のメイドではなく、あの男の生家であるグレモリー家のメイドだ。

さらに聞けば、そのグレモリー家の次期当主として指名されたあの男の弟は、叔父である大王バアル家当主の妻を奪ったことで知られる女好き。

このまま放置すれば、姉はその女好きの当主の下でメイドとして働くことになる。

彼の姉は美しい。男であれば必ずや魅了されるに違いない。ならば、その次期当主が姉に邪な想いを抱くことは必定。

サーゼクスによつてメイドに落とされ、その弟のリヴラクスによつて弄ばれる。

そんな未来は絶対に許さん！

ユーグリッドは激怒した。

必ず、かの情欲と愛欲のグレモリーから姉を助け出すと決意した。

今のままのユーグリッドではグレモリーに勝てない。サーゼクスもリヴラクスも、強大な超越者である。滅びの権化と、赤龍帝だ。

ユーグリッドとて弱い悪魔ではない。その実力は姉にも引けをとらないと自負している。

しかし、それでは足りないのだ。姉は強い。だが、セラフォール・シトリーやロイガン・ベルフェゴールと並んで現行悪魔社会の中で女性悪魔最強候補として名を上げられる程度。

彼がかつて誰よりも強いと信じていた姉の力は、グレモリーの兄弟には届かないだろう。少なくともサーゼクスには及ばないことは確実。

内戦の折、そのことを彼は既に実感してしまっていた。

姉が勝てぬ相手に、彼が勝てるはずもない。

けれどもそれで諦めることはできない。姉のことは頭がおかしくなるほど大事であった。

愛しているのだ。狂おしいほどに。失ったことで屍同然と化すほどに。

優しい姉のことだ、長い時を共に過ごしたグレモリーに絆されてしまっているかもしれない。引き離そうとしても抵抗されてしまう可能性がある。

そうなると、姉に劣らぬと自負すれど勝るとは思えぬユーグリッドでは、強引に連れ去ることは難しい。

取り戻した後、姉と一緒に暮らしていくためには、彼女がどこへも行けないようにする必要もあるだろう。

力が足りない。寿命の尽きるまで共に居続けるために必要なものが不足している。

奮起した彼は長年の不摂生によって弱った己を鍛えなおすことにした。もとより才能のある彼は、かつての大戦と内戦のころの自身を超えて力を付けたが、それでも足りない。

あの異形から姉を取り戻すには、まだこの程度では足りない。

だから、ネビロスの提案に乗ることにした。屈辱の苦い汁を飲んででも、やり遂げねばならぬ決意があるのだから。

ネビロスが言うには、墮天使の最大組織から離反した者よりもたらされた技術があるという。

それは忌まわしき聖書の神の模倣。神を滅ぼす具現の再現に至るだろう研究。

屈辱である。聖書の神の業、墮天使の成果に頼るなど。

だが、それでもやると決めた。

それは穢らわしき赤い天龍の神器。強者がもつことで最も効果を発揮する単純にして明快な暴力。

屈辱である。大戦の際に暴れまわって多くの悪魔を殺して混迷をもたらし、内戦へと繋がる状況を作った原因の一つ。その封じられた品の模倣品を身に宿すなど。

だが、それでもやると決めた。

屈辱の極みである。

それは、現在の『赤龍帝の籠手』所有者の〇〇〇〇〇〇^{体液の一種}。口に出すのも憚られる材料。

そんなものから精製した偽物の神器を身に着けるなど、悍ましさで気が狂いそうになる。

だが、だが、それでも、屈辱に耐えさえすれば力を得られるのならば――。

ユーグリッドはその決意の表明として、現行政府から生死不明と扱われているらしい己の存在を姉に知らせることにした。

姉の近くにいるだろう、彼の姉を「義姉上」とはばかることなく呼んで暮らしているという、羨ましいグレモリーの次期当主。

その次期当主の使い魔の存在をナベリウス分家の当主から聞いた彼は、自身の顔とオーラの質を白音という使い魔に覚えさせるように振舞った。

召喚され消えて行ったあの使い魔は、姉と出会ってくれようか。そしてユーグリッドのことを話すだろうか。そのとき、姉は彼のことを思い出し、どんな顔をしてくれるだろう。

ユーグリッドは決意した。最も重要なこの目的を遂げるためならば、姉のように振舞うことすら辞さない。

「愛のためならば、ルキフグスの定めにも反しても構わない」
他ならぬ姉がそう教えてくれたのだから。



政府調査員による白音への質問責めは、長時間に渡った。

それに付き添った俺と黒歌は、ぐったりだ。

俺たち以上に疲れたのだろう白音は、既にベッドで眠りについてい

エダーギ殿の行方は、結局分からなかった。

白音の発言の後、明らかに動揺した様子の義姉上に困惑しつつ、連絡を聞いて駆けつけてくれたナベリウス本家の者たちとともにエダーギ殿の研究施設に入り込んだ。

途中から遅れてやって来た政府の調査員も交えて内部を改めたが、そこには手掛かりとなりそうなものは一切残されていなかったのだ。それこそ、何の研究をしていたのかを推測する材料の一欠けらさえも抹消されていた。

大がかりな実験装置と思われる物は完全に破壊されていて残骸となっており、資料や資材の類は根こそぎ持ち去られてしまっているような有様。

幾人か出入りしていた者らが居たはずなのだが、誰一人として見当たらなかった。

何かしらの残留物がないかも調べたらしいが、どうやら純水と思しきもので施設内を丸ごと洗浄されていたようで、あまり成果は期待できそうにないらしい。

ただ、そのことからかなり腕の立つ水の術の使い手も絡んでいそうだとだけには予想されている。

というのが、俺の聞くことの出来た話だ。

本当はもっと多くのことが判明しているのかもしれないが、次期当主に過ぎない身では知ることの出来ない情報もあるだろう。

分家とはいっても、エダーギ殿は元七十二柱の名門貴族に連なる者。レーティングゲームにこそ参加していなかったが、優秀な眷属を育成・販売トレードしていたことである程度名前も売っていた。

その失踪事件は、悪魔の貴族社会に大きな波紋を生んだらしい。俺は主として使い魔の白音に付き添っていたので良く知らないが、レイヴェルがフェニックス家の伝手で情報を集めて来てくれたのでそうなのだろう。

上級悪魔の行方が分からなくなること自体は、ときどきある。

人間界に赴いた際にエクソシストに遭遇して殺されてしまうこと

もあるからだ。実際、ヨーロッパ方面に縄張りを持つ悪魔の中には、眷属まるごとやられたなんて話もちらほらある。

聖剣持った連中が奇襲を仕掛けてくるらしいのだ。教会のクソどもめ。

では今回の事件で何が騒がれたかと言うと、白音の義姉上に似た顔立ちとオーラの質を持った男性悪魔がいたという証言だ。

ユーグリッド・ルキフグス。

我が愛しの義姉上、グレイファイア・ルキフグスの実の弟であり、兄上の義理の弟になる悪魔の名だ。

白音の証言を基に似顔絵を作成し、いくつかの方法で感じ取ったというオーラの質を確かめたところ、おそらくはそうであろうと判断された今回の事件の重要参考人でもある。

まだ確定はしていない。見たのが白音だけで、かつ彼女は悪魔ではない妖怪の使い魔に過ぎず、さらに悪魔の中には姿を変えオーラを偽装する術を持つ者もいる。

それでも、ユーグリッド・ルキフグスの名前が出たことは大きかった。

なにせ、内戦時には兄上たちの敵方の立場にあり、その後は生死不明とされつつもまず死んでいるだろうと思われていた強力な悪魔だ。

その強さは、いわゆる魔王クラス。旧魔王勢力の幹部と考えると良い。

死亡していると思われる悪魔内部の敵対勢力の幹部が生存している、しかも貴族家当主の失踪事件に関与しているというのは恐ろしい話だ。

いつの間にか屋敷に入り込まれて、殺されるかもしれないと考えるところからおち寝でもいられなくなる。まあ、起きていたところで抗うだけの力がなければ殺されるなり攫われるなりしてしまうのだろうが。

ユーグリッド・ルキフグスのことは、大衆には伏せられた。

ルキフグス家は、ルシファアの側近だ。

それが動いたということは、その主である前魔王の血族が何かをしようとしていると考えられる。

兄上たちが政権を奪つてからの期間は人間基準では長いが、悪魔としてはそこまででもない。兄上が生まれてから、俺が生まれるまでの期間とほとんど同じなので、人間の感覚に合わせるとちよつと年の離れた兄弟の年齢差程度になるのだろう。

世代すら変わっていないからな。大戦時の軍人たちで死んでいない者はまだ現役だし、代変わりしていない当主も多い。

つまり、元々のルシファーが魔王として君臨していた時期を過ごしていた者が人口の大半だということだ。寿命長いし、子供生まれにくいからね。

なのでクーデターによって政権を奪つた兄上たち現四大魔王よりも、前魔王に心を寄せている者も多いことだろう。

兄上たちに勝てないから従っただけで、内心ではってヤツだ。面従腹背とかそんな感じか。

ということで、いろいろとざわついたらしく、結果としてそのしわ寄せが義姉上に来てしまった。

目撃されたのがユーグリッド・ルキフグスとは断定できない。

ユーグリッド・ルキフグスだとしても、失踪に関与しているかどうかはまだ確定していない。

だが、それらしき人物が貴族家当主失踪事件の現場近くで目撃されている。

この状況で、義姉上にユーグリッドさんの生存を知っていて黙っていたのではないかという疑惑の目が向けられてしまった。そして、自主的に政府関係の職務から遠ざかることを求める声が兄上が無視できないほどに上がったらしい。

あくまでも自主的に、である。ユーグリッドさんの事件への関与も、本人なのかも確定していないから。いやらしい。

黒歌にも普段から主への態度が悪いところがあったり、事件現場で「ぶつころ」発言をしていたことで取り調べがあったのだが、割り出されたという事件発生時間の彼女は俺にぶっ挿されていたのでアリバイが成立したらしい。

「アリバイが成立したらしい」としか言えないのは、もしかしたら父上

か兄上あたりが権力で俺の眷属（予定）を庇ってくれた可能性があるからだ。深くは聞かず、感謝だけしておくことにする。

でも、義姉上はそうはいかなかった。

悪魔の社会では、何か事件があつてその犯人を捕らえられなかった場合、犯人の親族を責めることが多々ある。まあ、これは人間でも同じだった気がするが。

もしも黒歌が「ぶつころ」発言を実行してしまったとして、その上で逃走に成功していたとしたら、きつと白音が吊るしあげられていたことだろう。

今回の場合はユングリッドさんが一番怪しいので、義姉上にいろいろ来てるってことでいいのかね。内戦時代からの諸々もあるようなので、イマイチ分からないところも多いが。

政治が絡むとよく分からなくなる。単に現魔王派に打撃を入れたい大王派からの攻撃ってこともあるだろうし。複雑怪奇だ。

分からないことをグダグダ考えていても仕方がないので、ここは今の俺に出来ることをしようじゃないか。

とりあえず、精神的に疲れたので寝る。

いろいろ駆けまわってくれたレイヴェルを右手に抱えて、おろおろ心配してくれていた朱乃を左手に抱えて睡眠である。

朝一はリュイに頼もう。駆けつけてくれて、レイヴェルの手伝いをしてくれたようだしな。

ちなみに黒歌と白音は別室だ。

で、明日は義姉上のお見舞いだ。

いや、病気ではないのだが、ふさぎ込んで部屋に籠っているようだから。

しかも、兄上は通常時でも激務らしい魔王業が事件の対応でさらに増加していて義姉上のところに来れない様子。ならば俺が慰めて差し上げねば！

思えば義姉上には大変お世話になってきた。レイヴェルとの婚約以来会う機会が減ったが、ミリキャスが生まれる前なんてかなり面倒を見てもらったものだ。

母上は貴族らしく使用人に子供の世話を任せる感じの人なので、使用人のグレイフィアがよく俺の世話をしてくれた。

魔王の妃なのに、使用人のメイドさん。慣れた今でも混乱するところだ。

そういえば、以前に義姉上からユーグリッドさんの話を聞いたことがあったような覚えがあるな。

あのときの義姉上は酔っぱらっていたから、「うんうん」って感じで聞いていたのだが、もう少し詳しく聞いておけば良かったか。

義姉上は、酔っぱらうとなかなかこう……スキンシップが激しかったりするので、結構嬉し困る。あと、弟つてものに対して何やら思うところのありそうなことも言っていたような。

俺も義理ではあるが義姉上の弟なので、そこに死亡したと思われていたユーグリッドさんを重ねられていたりでもしたのだろうか。

聞いてみたいような、聞きたくないような、なんとも微妙な気分がしてくる。

ところで、義理の姉の弟つてなんと呼べばいいのだろうか？ とりあえず「さん」付けでいいよな。日本語思考でそう言っておけば、いい感じに翻訳されて受け取ってもらえるはずだし。

2—30 魔王の計画

朝方、なんだか股間が気持ちいいなと目を覚ますと黒歌が肉棒をちゅぷちゅぷとしていた。

こいつ別の部屋で寝たはずだよな？　と思いつつも心地よさに身を任せていると続けて起きたらしいレイヴェルが騒ぎ出したので唇を塞いで黙らせる。

ついでに、レイヴェルとは俺を挟んで反対に寝ていた朱乃のおっぱいをもみもみとして起こす。

なんだかよく分からんが、こうなれば4Pだ！　と突入。

しばらくお待ちください。俺が大変なことになっています。

と朝っぱらから盛りまくって一息つくくと、部屋のドアの前で待機していたリュイが「若さまあ……♡」と桃色吐息。

そういえば「明日の朝はお前に任せるぞ」と言っておいたのだったと思い出し、続けざまにもう一回戦。

喰らえ今、必殺のサイズ倍加、快樂数百倍ピストン!!

白目をむいてアへ顔を晒すリュイと、それを為した俺に恐れおののくレイヴェル。「ドラゴン……」と呟く黒歌。自分にもして欲しいと頬を染める朱乃。

そんな皆を引き連れ、足腰立たなくなったりリュイを抱えて皆で朝風呂にGO。

その後、ふー、朝からサツパリしちまったぜ。とホクホク笑顔で朝食に向かおうとしていると、何やら通路が騒がしい。

「お待ちくださいー！」

「どうか、お待ちになって下さいー！」

メイドたちの騒ぐ声に興味を覚えてそちらへと向かうと――。
「ミリキヤスさま。どうか、どうかこれ以上は進まれませんよう……伏してお願いたします」

ミリキヤスがメイドに土下座をさせていた。

さすがは我が甥っ子。幼くして既に卑しい身分の女を好き放題に弄ぶ醍醐味を覚え始めていたか。侮れん……。

しかし、そのメイドたちは俺のだからやらんぞ。

欲しかったら、キミのパパに「メイドを辱めて楽しみたいから、ちよーだい」とお願いするのだ。

メイドスキーの兄上ならば、きつと「よーし、パパ張り切っちゃうぞー！」とイイ感じの娘を集めてくれることだろう。

「どうしたんだ、騒がしい」

「リアス兄さまー」

俺の姿を見つけて、パツと顔を輝かせるミリキヤス。

なるほど、目当ては俺だったか。モテる男はツライな。だが、残念ながらミリキヤスは甥っ子だ。姪っ子ならば悪魔の紳士として是非とも可愛がりまわるところだが、甥は範囲外だ。

ベルゼブブさまも言っていた。「弟はどうでもいいが、姪は滅茶苦茶可愛い」と。

兄上だって、俺が女で妹だったなら、きつと溺愛してきたに違いないのだ。

それが、悪魔紳士の実態である。

「どうしたんだ、ミリキヤス。ここに来てはいけないと言っただろう？」

寄って来たミリキヤスを抱き上げ、ちよつとキツイ口調で訊ねる。

グレモリー公爵邸のこの一角は俺の城であり、後宮^{ハイレム}である。

俺以外の男は、たとえ下働きだろうが侵入禁止だ。悪魔は女性でも腕力があるし、ここに来るメイドは純血には遠く及ばずとも魔力面でも優れたものが選ばれているので、男手などは必要ないしな。

「お母さまが……」

と一言こぼしたきり、ミリキヤスは黙ってしまふ。

視線を追うと、どうやら他の者に聞かれたくないようだ。

「レイヴェルもダメか？」

「レイヴェルねえさまは……いいです」

ミリキヤスとレイヴェルはわりと仲が良い。うちのカミさんは母上との仲も良好なようで何よりだ。嫁姑問題とか起きたら困るしな。だからといって、仲良くなりすぎてミリキヤス×レイヴェルとか

なったら大変困るが……。

レイヴェルは俺の嫁さんになる女だからな。ミリキヤスにはやらんぞ！

妻を甥っ子に寝取られたりした日には、恥ずかしくて社交界に顔出しできなくなることも間違いなし。どこかにそんなことを仕出かした野郎がいたような気がするが、気のせいだろう。

俺はいいんだよ、俺は！ 紫紅の龍帝さまはワガママなんだ。

「そうか……朝食は済ませているか？」

「いえ、まだです」

答えを聞いてから我が婚約者殿に目を向けると、無言で頷いてくれた。

「レイヴェル、三人で食事にしよう」

それでこう言ったら、なにやらグツと気合の入った雰囲気を見せるレイヴェル。

「かしこまりましたわ！ では、用意いたしますのでお二人は紫の御庭でお待ちくださいませ！」

紫の庭というのは、いつぞやにマグダランからもらった花を植えた庭園だ。

あれ以来、我が家にはバル家の次期当主殿が現代に復活させた花があちこちに飾られている。甥っ子のくれた花を母上が気に入って、何故かそれに対抗心を燃やした父上が紅のバラを用意させたりしたので、二つが合わさってちよつとばかり邸内が派手気味だが、まあヨシとしようじゃないか。

来客用のところにもあの花が飾られているので、客人がそれを見かけたときの顔を観るのが面白かったりするしな。

顔に出してしまう者はいるものだ。「あれ？ グレモリーとバルつて仲悪かったんじゃないか？」みたいな表情がさ。

「頼む、朱乃と黒歌はまた後でな」

「私はレイヴェルさまの手伝いに参りますわ」

「白音の所に戻ろうと思ってたから大丈夫よ」

我が家の食事は一緒にとることもあれば、個別のときもある。今は

父上も母上もエダーギ殿の事件を受けて忙しいので、各人それぞれなっていた。

そういうときぐらいは眷属と食事でもと思っていたのだが、ミリキヤスよりは優先できんよな。

一応、俺が希望すれば眷属をグレモリー家の食卓に座らせることは可能だ。ただ、朱乃は遠慮するし、黒歌はまだトレードが済んでいない。

黒歌は礼儀作法が出来ないわけではないようだが、あまり堅苦しいのは苦手なようなので、正式に眷属入り手続きが済んでも嫌がるかもしれないな。

「では、向こうで待っているのでしょうか」

「はい」

なんだかミリキヤスがくつついたままなので、そのまま抱えて庭へと向かうことにするか。

リュイを従えてテキパキ指示出しをしているレイヴエルを後ろに歩を進めようとして、ふと気付いた。

まだ土下座のままのメイドがいたので、立つように促すことに。

ミリキヤスもかなり才能があるから、怖いと思うんだよな。俺よりはマシなのだろうが、メイドから見たらミリキヤスでも魔力量の差で震えがくるレベルだろう。

するとミリキヤスがメイドごときに謝ろうとしていたのでそれを咎めると、兄上に教えられたことと違うと返してくる。

「平民如きに頭を下げてはならん。自分が正しいという顔をしている」とは、はて父上から言われたのだったか、祖父さんから言われたのだったか。

どっちにしろ俺は平民なんぞに頭は下げんがな！ 命の価値は平等ではないのだからして、謝罪の価値もまた強さによって異なるのだ。

「俺と兄上では考え方が違うからな」

「リアス兄さまとお父さまは違うのですから、考えが異なるのは仕方ありません」

俺の甥っ子、ませてるな。学校の成績も良いようだし。

前世の記憶があるから勉強楽勝とかなかったしなあ……。俺は今生の肉体の脳みそスペック頼りだよ。前世で分からなかったことがスラスラ分かるし、記憶力も段違い。

悪魔ってスゴイってよく思ったものだ。

そう考えると、ミリキヤスクらいは普通なのか？ 学校行ってないから、純血悪魔の子供の普通レベルが分からん。分かんが、ミリキヤスが俺よりも賢そうなことだけは分かる。

次期当主はミリキヤスさまに！ って派閥が家臣の中に出るのも分かるね。譲るつもりはないが。

学校と言えば、現在上級悪魔向けの学校は休校中だ。なので、レイヴェルも家にいる。

エダーギ殿の事件を受けて、各施設の結界その他セキュリティの見直しが行われているのだ。貴族の子息が集う学舎で、集団誘拐事件なんぞが発生したら洒落にならんからな。

父上と母上もグレモリー領各地のそういった対応で忙しいと聞いている。

「テベランか」

我が家の男子俺以外禁制の領域を出たところに、厳つい悪魔が待機していた。

グレモリー領の軍の偉いさんで、たしか大戦で亡くなられたグレモリー家のご先祖の血を引いていたはずだ。片親が下級悪魔なので、軍で働いている。

なので、このテベランは俺がメイドに産ませた子のたどる道の先輩になるわけだ。

「はっ！ ミリキヤス様の護衛を務めさせていただいていたのですが……」

護衛対象のミリキヤスが男が入ったらぶつ殺す領域に侵入してしまったので、ここで待っていたと。

失態だが、まあいい。またミリキヤスと同じ話を繰り返すのも面倒だ。

テベランも長い間実戦から遠ざかってデスクワークに就いていたのだから、ある程度は仕方あるまい。父上も半ばリハビリのつもりでミリキヤスに付けたのだろう。

「足の調子はどうか？」

「経過は順調であります。失っていた期間が長かったものですから、調整に戸惑っておりますがじきに慣れるかと」

このテベラン、大戦も内戦も潜り抜けたベテランの軍人なのだが最近まで片足がなかった。戦時中に失ってしまっていたのだ。

で、俺が『赤龍帝の籠手』の禁手でレイヴェルの『不死身』の特性を他者に『譲渡』出来ることを知った父上から、軍に在籍しているそういう者の治療を頼まれた。

数百年単位の期間そのままだった負傷に『赤龍帝からの贈り物（不死身）』の効果があるのかどうか、その検証も兼ねてやってみたのだが今のところ順調な様子。

次期当主さまからの無料サービスであるぞ、泣いて喜べって感じだな。本当に泣いて喜ぶヤツが多かったのだが、人間感覚でもそりや嬉しいと思う。

このテベランも泣いていた気がする。

「ならいい。バアル家に頼まれた連中も同じような感じか？」

「はい！ 経過を知るために連絡は取り合っておりますが、皆口々にリヴラクス様への感謝を述べておりました」

バアル家は母上の実家だ。母上にもグレモリー家に来る前に世話になった者がいる。

その縁もあるので、バアル家から依頼された者も幾人か治療したのだ。こちらは、有料。

我が家の軍の力を戻すことは、将来的に当主となる俺の力の増大させることになるので、自分のためのようなもの。だが、いくら親戚といってもバアル家はバアル家、余所様なので対価は必要だ。

「結構な金額を頂いているから、感謝など必要ないんだが」

バランスブレイクして、『譲渡』をポンと一回するだけでフェニックスの涙を上回る料金とかウハウハ過ぎる。フェニックスの涙には、失

われた四肢や眼球などの身体部位の欠損を戻す効果はないので、こちらの方が金額が上になるワケだ。

「これまではいくら金額を積んでも治せなかったのですから、当然のことでしょう」

剣でスパツと斬り落とされるなどして、欠けた部位そのものが綺麗に残っている状態ならフェニックスの涙でも繋げる。だが、焼かれたりして部位の大部分が失われてしまっていると無理なのだ。

神器でもこれが可能な代物はほとんどないということなので、かなり希少ではあるのだ。現状、所有者不明となっている『幽世の聖杯』ならばあるいは……といったところか。

そう考えるとあらためてスゴイな。悪魔では聖杯の恩恵なんて与れないだろうし。

「そう考えると安いくらいか？」

料金は父上と母上がフェニックス卿と相談して決めた。フェニックスの涙の値段に連動して上下する変動時価制である。

俺とレイヴェルの合体能力なのが親に値段を設定してしまった……まあ、結構な額なので文句はない。入って来た金は俺個人の資産ってことでいいらしいし。

ちよつとばかりレイヴェルと分け前を巡って揉めてしまっているところが悩みの種か。奥さん、なんで半々じゃダメなのですか？俺が「9」でレイヴェルが「1」じゃあ強欲龍帝呼ばわり必至になってしまう。悪魔的にはそれでいいのかもしれないけど。

「兄さまと姉さまはすごいですね」

レイヴェル的には、自分はフェニックスの涙で稼げるからいいらしい。俺がこの治療をしたところで、フェニックスの涙の価値は落ちないし。

あれの有用なところは小さく携帯可能で、速攻性があるので、時間も場所も選ばず瀕死の傷をすぐさま治せるところだ。現状一番使われる場面はレーティングゲームの試合中なこともあって、特に問題はないそうだ。俺以外は、俺とレイヴェルを試合に持ち込めないしな。

あとミリキヤス、そう俺を尊敬のまなざしで褒めるな。誉められる

とすぐ調子に乗るのが俺だぞ。ほら、もつと褒め称えろ。

すごい、すごいと褒めてくれるミリキヤスには悪いが、俺はコレを当主引退後の稼ぎにしようとしていたのだ。エダーギ殿との試合内容を知った父上から言われるまで軍兵の治療など思いもしていなかった。

まあ、口に出していないはずだから結果オーライ。家中での評判も上がったようだしな、特に軍部の。

「本日は私が作らせていただきましたわ」

「レイヴェル姉さまの手作りですか！」

とまあ、ミリキヤスによいしよされた俺がいい気になっている内に朝食の準備が整った。

なんだかレイヴェルが気合入っているなと思ったら、甥っ子に手料理を振舞う良い機会だと考えていたのか。

「簡単なものですね」

「いや、十分美味しいぞ」

「はい！ 姉さまは料理が上手ですね」

家事全般わりと万能にやっつてのけるのが悪魔の貴族女性の嗜みの一つである。男も趣味で出来るようにしている方が結構いる。父上もゼクラムの祖父さんも料理が上手だ。

俺はいまいち面倒臭がりなので苦手だが、別に自分でやらなくても使用人がやってくれるから大丈夫。独身一人暮らし男程度のスキルは一応あるが、コンビニの世話になることも多かったしな。

あれだろうか、前世の死因は食生活の偏りにあつたのかもしれない。何百年か経ったら、暇つぶしに覚えてみるのも悪くないかもな。「うふふ、そんなに褒めないでくださいまし。照れてしまいますわ」

ちなみに、レイヴェルも誉めまくると調子に乗るタイプだ。ただ、乗りに乗った調子のままその後の結果までも良くなっていきそうなのところが俺とは違う感じがする。

「それで、どうしたんだ？」

食事もあらかた済んで落ち着いたところで、ミリキヤスに話を振ってみた。聞き分けの良いこの子にしては、さっきのあれは珍しかった。

た。

「実は、リアス兄さまにお母さまを治していただきたくて」

「義姉上がどこか怪我をしたのか？」

そんな話は聞いていない。

「怪我ではないのですけど、なんだか……様子が」

ああ、精神的なものか。義姉上もユーグリッドさんのことではないと思うところがあるのだろう。

なにせ死んだと思っていた弟が現れて、しかも貴族の行方不明事件の重要参考人だ。それを受けて旧魔王の勢力の活動が活発化したのではないかとあちらこちらで大騒ぎ。学校も臨時休校状態である。

「グレイファイアさまが……」

眩くレイヴェルに目を向けると、小さく首を横に振ってくる。

精神的なダメージには、さすがのフェニックスの不死身特性も効果はない。それがあつたら、フェニックスの一族は不屈の闘志を燃え立たせた、常時ハイテンションな一族になっていたことだろう。

「俺も義姉上のところに顔を出そうかと思っていたところだ、そのときに診てみるよ」

「リアス兄さまがそうおっしゃってくださるなら安心ですね」

あああ、なんだこの甥っ子は、笑顔が可愛いぞ、クソ。

ついさつき賢いなあとか思っていたのに、ここで俺ならなんでも治せるとか思い込んで頼って来るとか。しかも、適当に口にしたことを真に受けて心底安心しましたーって顔するとかさ。

危険だ。もしも俺が女だったらブラコン気味にされていたかもしれない。

「リアスさま、聞いてませんわ」

おっと、レイヴェルが少々焼きもち気味だ。

父上や母上、ミリキヤスとの仲は良好なレイヴェルだが、実は義姉上とは微妙に距離がある。義姉上が普段メイドの立場でいると言うのもある。そうなるレイヴェルも呼び捨てで命令口調になるから。

でも一番の原因は、たぶん俺。

前世では例の初恋爆散以降とんと女性に縁のない生活を送った俺

だ。そんな俺が生まれ変わってから一番長く接した女性は義姉上だ
と思う。

ということ、前世を無視した俺の今生での初恋は義姉上だったり
するのだ。美人なんだからしょうがないよな。

血のつながりもないし。すごく世話してくれたし。母上とは貴族
の慣習的に一般庶民人間のような関係はなかったが、義姉上はメイド
の仕事ですから、すごく構われたんだよ！

シスコンは悪魔のよくなる病だ、それいろいろなところで言
われてるから。

「いや、後で言おうと思っていたんだ。今回のことで義姉上も思うと
ころがあるだろう……と」

ムムムとなるレイヴェルと、やや慌ててしまう俺の様子をミリキャ
スが不思議そうに見ている。

ちなみに、ミリキャスはあまり義姉上に世話されていない。義姉上
は、ミリキャスが幼稚園に通うようになる、すぐにメイドに復帰して
以降は俺の周りにいることが多かった。

母上が俺にあまり構わなかったのと同じ理由だろう。兄上が母上
に頭が上がらないことから分かるように、悪魔男性はマザコンも発
症しやすいのではないかと俺は勝手に思っている。

なぜって、我々悪魔は聖書の神話から生まれ出でた存在である。そ
して、やはり聖書関係となると人間界の本場はローマ。

有名な悪魔に関わり深い『獣の数字666』もローマの皇帝を表し
ているなんて説もあるくらいだ。

そしてローマと言えばイタリア。イタリア男といえば、マザコンで
有名。はい、Q・E・D。

きつと母親が子供、特に男の子にベツタリすると、マザコン発症率
が高いのだろう。きつとそう、勝手にそう思っているだけだが。

たぶん、違うだろうけど。今適当に思い浮かべているだけだし。

まあ、俺がガツツリ母上に逆らえない状態になってしまって、その
母上がバアル家の意向を汲んでいたりすると、グレモリー家的にはよ
ろしくないしね。

義姉上の場合もつと深刻だ。元々は内戦時に敵同士だったそうなので、特に旧魔王の動きが確認された今現在などは。

そう考えると、あまりその手の話を聞かない女性の方が当主に向いているのでは……と思っただが、リュイのことを考えると男でコロツと行ってしまうのかもしれないか。いや、あれは『赤龍帝の籠手』が凄いのだろうけど。

「ご歓談中、失礼します！ 緊急の連絡が！」

ジーっと見つめるレイヴェルの視線にどう返そうかと思考を明後日の方向に逃避させ気味に考えていると、使用人がこちらに駆け寄って来た。

「何事だ」

内心ちよつと助かったなんて思いつつ、その緊急の連絡なるものを聞くことに。

「大公家、シーグヴァイラ・アガレスさまが魔王ベルゼブブさまの眷属なられたとのこと」

「は!?!」

あまりのことに思わず素の声が出てしまった。

いや、なんだそれは……シーグヴァイラはアガレス大公家の跡取りだぞ。彼女がベルゼブブさまの眷属⇨下僕となると、アガレス家が現魔王派の中のベルゼブブ派に従いますと言ったようなものではないか。

「父上には?」

「お伝えしております。ご当主さまより、リヴラクスさまからシーグヴァイラさまに確認をとっていただくようにとのご指示です」

こんな発表の直後ではアガレス大公は忙しいだろう。たしかにまだシーグヴァイラからの方が話が聞きやすいかもしれない。

で、我がグレモリー家でシーグヴァイラとの仲が一番良いのは、たぶん同世代の俺だろう。

しかし、それぐらい通信魔方陣で伝えてくれても……そうか、今父上の周辺はセキュリティの見直し中か。

「ミリキヤス、すまないが」

「はい。あの……お母さまのこと」

「ああ、任せておけ」

ミリキヤスには本邸に戻ってもらって、シーグヴァイラに繋ごうとするがなかなか繋がらない。

プライベートの趣味用の方を使えばいけるかもしれないが、そつちは『ロボ話』専用だ。こういうときに使うべきではないだろう。命がかかっているワケでもないしな。

「ダメだな」

「どこの御家も考えることは同じなのでしようね」

「レイヴェルはどう思う？　大公家の次期当主がベルゼブブさまの眷属になるなど」

「前例はありませんが……今回の旧魔王派の動きが関係しているとしたか」

「タイミング的にそうとしか考えられないな……。しかし、いいのか？　次期当主が誰かの眷属になるといふのは」

「貴族家同士ですと問題でしょうけど、相手が魔王となると命に従うのが本来の筋ではありませんし」

兄上たちの四大魔王の派閥と、大王家がトップの貴族の集まる大王派。その間でバランスを取って来た大公家の中立派。

あまり機能していないが、レイヴェル言うように貴族家も本来は魔王に従うことになってはいるのだ。だから、

「建前上は、問題ない……のか？」

「本当に建前だけですけど」

うーん、これはどういうことなんだシーグヴァイラ。

しかし、これは、あれだ……つまり、魔王ならば貴族家の当主や次期当主を眷属にしてしまっても構わんということなのか？

2—31 大王の計画／一方その頃

B O S S × B O S S .

「ごきげんよう、サーゼクス殿。いや、魔王ルシファアさまと呼ぶべきか」

『サーゼクスで構いませんよ、ゼクラム・バアルさま』

「ルキフグスの忘れ形見の件で忙しいところ、時間を取らせてすまないな」

『……。ゼクラムさまからの直接の連絡、よほどのことでしょう』

口元に苦みを滲ませたサーゼクスに向けて、ゼクラムは薄い笑みを浮かべてみせた。

「ふふ、なに、そう大した用件でもないのだがね。話はリヴラクスของバランスブレイカーの件だよ。——実は先日、我が家の古参兵の治療を依頼してね」

『弟が……。フェニックス家の「不死身」の特性を他者に付与することの可能なバランスブレイカーを発現したことについては、グレイフィアから報告を受けています』

「治療を受けた者たちは、その後の経過も順調だ。そこでどうだろうか、私の弟子に、魔王さま方の軍、そして貴族各家の軍の傷痍兵の治療を行わせては——と考えたのだよ。アレが動いたのならば、王子も同様と考えた方がいい。ルキフグスとは本来そういう者たちだ」

『……。治療に関して、政府から依頼という形を取れ、と？ 聞いた通りの金額を支払うとなると、莫大な金額になりますよ』

今度は表情を変えなかったサーゼクスに、ゼクラムは頷きを返す。「治療の対価となる金額は、我がバアル家との取引の際に既に決められている。政府依頼だからと値を下げさせることはできない。一度定めた対価を政府の都合で覆しては、リヴラクスもフェニックス家も、不快に思うだろう」

「どんな都合にせよ、値引いたという事実が一度でもあれば他のところからもそれを要求されてしまうものだ。」

「——短期的にみれば莫大な出費となるかもしれないが、長期的に考えれば政府としてもそう悪い話ではないはずだ」

『この先の傷痕兵恩給を先払いしたと考えれば、確かに元は取れる……か』

現魔王であるサーゼクスたちは、過去の戦争によって傷痕を負った者たちに手厚い保護を与えている。

これは何も優しさだけによるものではない。軍の士気に関わるからだ。

とはいえ、人間とは違って悪魔の寿命は長い。どこかで打ち切らなければ延々と続くその出費の合計は、とてつもないことになる。

だが、残された傷痕を治療したとしてそこで保護を切ってしまうば、今後それを支払う必要はなくなるのだ。

なにより、現政府の方針、これまでのサーゼクス達の発言がゼクラムの提案を通さざるを得なくさせている。

「過去の大戦と、それに続いた内戦。その清算は早めに済ませておいた方がいい。王子たちが動き出したとなると、次を考えねばならん」
『戦となったとき、あの戦場を生き抜いた者たちが万全の状態で動けるとするのは、たしかにありがたい。士気も上がるでしょう』

足を失っても翼がある、腕がなくなるとも魔力で補えはする。それでも身体の何処かを失えば弱体化は避けられない。

強さを尊ぶ異形の世界。永遠に失われたと思っていた身体部位が戻って来たならば、それを喜ばない者はまずいないだろう。

そして、次の戦争が起きた際にも、治せると知っていること。この意味は大きい。死ねばそれまでとしても、生き残ったときに弱くなっただけに苦しむ心配がないのだから。

「我々としても、いまさら前魔王さま方の血族に戻って来られても困るのだよ。此度のアガレス大公家の姫君とアジュカ殿の一件も、そうした考えあつてのものだろうか？」

『ご想像にお任せします。もつとも、既に確認をすまされているのでしょうが』

現四大魔王とその出身四家、アガレス大公家、そしてバアル大王家、

どこも現在の悪魔の体制を選んだ者たちだ。前魔王の血族から見れば等しく裏切者だろう。

貴族家の中には、サーゼクスたちに勝てないからと現政府の側についた者も多い。それらの中には、未だに前魔王の潜在的な支持者がいる。

仮に戦が起きたとしても、その前魔王派とでも呼ぶべき隠れた者たちが動く余地を与えてはならない。

僅差の勝負では困るのだ。

現体制側が圧倒的な優位を保ち続けなければ、それらがあちらへと転んで泥沼になりかねない。もしもそうなれば、悪魔という種の消耗は甚大なものとなり、天使や墮天使どももそれを見逃しはしないだろう。どこの陣営にも戦を望む者はいるものだ。

「忙しいところに時間を取らせて申し訳なかったね。この話、是非考えてみてくれたまえ。では、そろそろ——」

『ゼクラムさま、貴方はリヴラクスをどうするつもりなのですか？』

通信を終えようとしたゼクラムは、サーゼクスの言葉を穏やかな笑みで迎えた。

「……ふむ、私は常々思っていたのだよ。君たちはよくやってくれている。だが、貴族の当主の立場というものを理解するよりも前に現在のポストにつくことになってしまった。これは当時の情勢ゆえに致し方なかったことだが——やはり貴族のことをよく知る魔王も必要ではないかとね」

『弟を大王派の傀儡にするおつもりですか？』

「これはまたハッキリと言ってくれ。……最近若い世代へと当主を譲る流れが進んできているようだ。リヴラクスがグレモリー家を継いだとて、五百年後にはもう交代となっているかもしれない。サーゼクス殿も、弟が当主を務め終えた後のことを考えておいた方がよい。あの力は野放しにするにはあまりに大きく、危険だ。それに、あれは何かを与えて縛っておかねば、ある日ふらりと去って行ってもおかしくない気性をしている」

リヴラクス・グレモリーは愚かだ。その考えは見透かしやすく、ま

た気も長くはなく、さらに忍耐弱い。

だが同時に賢くもある。裏に自身を操る糸の繰り手が居たとしても、それを気にしない程度の凶太さ、ある種の利口さはあるように思える。その場での自身の気分が良ければ構わない、とそう割り切ってしまうところがあるのだ。前世で受けた教育の影響か目上に対して敬った姿勢を見せることが多く、理と利を示せばすぐに納得する。基本としては友好的に接し、敢えて敵対的な者を他所に用意し、こちらがリヴラクスにとって不利となることを成す際には理由を伝えて先に話しをつけておく。これだけで良いのだ。

ゼクラムにとって、リヴラクス・グレモリーという超越的な力を持った悪魔は実に扱いやすい。くれてやる利も今のところは実に分かりやすい。

女だ。

「——色欲を司るとされるアスモデウスの名が残っていれば良かったのだが、『龍の魔王』とも呼ばれるサタンとすると……。ふむ、サーゼクス殿の異名である『紅髪クリムゾンの魔王』とぶつかってしまうか。その時は異名を譲ってやってくれるかな？」

『それは構いませんが……。ゼクラムさまは、リアスが大きな力を持ちそれでいて役職も持たぬ状態になることを警戒している、と』

ゼクラムとしては、現四大魔王の働きに不満はない。むしろよくやってくれていると考えている。

強大な力を持ち、カリスマを備え、大王側との折衝も程よいところでこなしてくれる彼らは、ゼクラムにとっては理想的な魔王像でさえあるのだ。

「我々は強者を尊ぶ異形の種たる『悪魔』だ。強大な力を持つ者は、それだけで弱き者たちを惹きつける。力ある者には相応の立場についてももらわねばな」

ゼクラムは、古く力ある悪魔でありながら人間界に拠点を置いて政権からは遠ざかり、それでいてなお強い影響力を残すとある悪魔を思い浮かべていた。

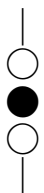
リヴラクスにあのようになられては困るのだ。それぐらいならば、

魔王にまつりあげてしまった方が良い。

地位、名誉、金、そして女。

その程度で超越悪魔の赤龍帝を抱え込めるのならば安いものだ。現魔王の派閥に超越者が二名もいる現状、大王側に傾いた魔王として擁立できるのならばなお良い。

派閥間の武力のバランスが崩れすぎると、ゼクラムの維持したい貴族社会の崩壊もありうる。口でどうこう言おうとも最終的にモノを言うのが暴力であることは、昔も今も変わらないのだ。



どうかシーグヴァイラから話を聞いた。彼女もなかなか忙しいらしい。まったく、悪魔はまだ赤ちゃんみたいな俺たちの世代に働かせすぎだろう。

ハツキリとは教えてくれなかったが、シーグヴァイラの言うことにはどうも政治的なパフォーマンスの意味合いが大きかったらしい。

現体制の維持に大きく貢献しているアガレス大公家の姫君が、現体制の象徴である魔王の眷属となることでアガレス家及び中立派は今後もこの体制を続けていくつもりであることを示したわけだ。

長い間姿を現さなかったユーグリッドさんの登場で揺れている貴族連中などに、改めて立場を強く主張して見せた、と。

元来、ルキフグス家はルシファアの忠臣として仕えてきた一族、ルキフグス動くところルシファアあり。現在認定されている三名の超越者の内の一であるリゼヴィム・リヴァン・ルシファア王子の動向を気にして中立派閥内でも何かしら動きがあつたのかもしれない。その引き締めとかそんなところだろう。

ちなみに、シーグヴァイラに「騒ぎが終わったらトレードで俺のところ来ないか？」とたずねてみたところ、『アガレス家に婿に来るのなら考えましよう』だそう。クール系オタ眼鏡っ子は嫌いじゃない

が、アガレス家に婿入りは厳しいぜ。オタトーク出来る系女子は貴族
界限では貴重だけだな。

でもちよつと、ダンガムパイロットスーツ風コスプレックスとかし
てみたくはある。

ああいうのは、お互いが元ネタ知っていないと盛り上がり無さそう
だからな。

「ぐへへ、戦争で捕まった女パイロットがどうなるか……わかるよ
なあ？」

「くつ、やめなさい！ このような辱めを受けるぐらいなら……ッ！」

「おおつと、簡単に死なせるわけがねえだろうが！ オラアツ!!」

「ああっ……い！」

そこから始まる調教ものみたいだな。でもってお互いほだされて雪
山で混浴したりしてな。うむ、よいよい。

朱乃なら分かってくれるだろう。前世と違って、相手もコスを用意
する金もあるってのはいいものだ。

といったことを父上に報告し終えた俺は、レイヴェルをベッド上で
快感失神に追い込んでから義姉上の部屋へと向かって移動中である。
フェニックスを倒すには心を責めて落とさせてそれ昔から言われて
いるから。

当たり前だが、大公姫に声をかけてみた件は父上に伝えていない。
無論、エツチな妄想の話しもしてはいない。

「ミリキヤスが心配していてな、気休めでもいいから義姉上を診て欲
しいと頼まれたのだ」

メイドをしていないときの義姉上は、兄上の妻であり、ミリキヤス
の母である。つまり邸内に専用の区画を持つ貴婦人なのだ。

当然ながらホイホイとは顔を出しにくい。強引に押し通ることも
朝のミリキヤスのようにすれば可能だが、ここはそのミリキヤスの名
前を出して使用人たちに道を開けさせる。

昔は簡単に通過できた場所も、今ではなにやら使用人たちの目が
光っている。これ絶対父上あたりに気付かれているよな。俺が義姉
上に対してムラムラとしたものを抱えていること。

まあ、気付くか。相手は伊達に年を喰っているわけではない。その辺り、義姉上には気づかれていないのだろうか。なんか、こう、義姉上ってさ、俺がグツグツつとくる仕草をするときがあるんだよな。もうちよつと気を付けていただきたいものだよ。

義弟のちんちんをイライラつとさせるなんて、まことにけしからん義姉だ。責任を取れと声を大にして言ってみてやりたい！

「義姉上、リヴラクスですがよろしいでしょうか？」

さて、使用人たちに聞いてみたところどうやら義姉上は部屋に引き籠っていらつしやる様子。そりゃミリキヤスでなくても心配する。

「リアス……？ ごめんなさい、今は少し気分が……」

「ミリキヤスが心配していましたよ。それで俺に治してほしいと言つて来まして」

「あの子が……」

そつと静かに部屋のドアが少しだけ開いたところを見計らつて、グイと力任せに全開にしてしまう。

ドアの向こうにいた義姉上の服装は別段おかしなところのない至つて普通のものだつた。メイド服の方が慣れているので、逆に私服の方が新鮮なのが俺にとつての義姉上という女性である。

このまま室内に押し入つてしまいたいところだが、なんといつてもここはグレモリー邸。当たり前のように使用人が後ろについてきている。

不埒な真似は許さんということだ。まったく、悪魔だと言うのに貞操観念がしっかりしていて嫌になつてしまふね。いや、俺としてもレイヴェルや朱乃がガバガバでは困るのだが。

まったく、俺つて男は自分の下半身の都合しか考えちゃいないんだから始末に負えない。

「もしかして、寝ていないのですか？」

服装に乱れは見られなかった義姉上だが、目の周りがなんとなく落ちくぼんでいるというか、寝不足っぽく感じられる。

悪魔でも普通に睡眠はとる。睡眠不足を魔力で補えなくはないので、七日七晩に渡る戦いなんてことも可能ではあるのだが、眠れる時

には眠った方が良いのだ。

「いろいろと考えてしまつて、寝付けないのよ」

ふむ、ここにいたところで俺の目的は果たしにくい。なんといつても監視付きだ。

ならば多少強引でも場所を変えるしかあるまい。

「過度なストレスや睡眠の乱れは、眠り病の発生に関わっているかもしれないという説もあるそうです」

ミスラさんの件があるので、俺が眠り病についてある程度調べているようなことを話したとしてもなんら不思議はない。実際にある程度調べはしたしな。

その結果といえば、現状ではどうにもならないことが分かっただけだが、こうして役に立つことがないでもない。

「……眠り病は怖いわね」

「気分が優れないときは、環境を変えてみるのもいいかもしれませんよ。この部屋にずっと留まっていなければならぬ、ということでもないのでしょうか?」

義姉上は兄上が執務を行う魔王の城への出入りを、自主的に控えることを求められているだけだ。メイドの仕事もお休み中だが、そちらは特に禁止されているわけではない。

つまり今の義姉上は貴重なオフの日なのだ。しかも兄上は忙し過ぎて義姉上に目を向けられない状態。今頃きつと書類と格闘しているか、偉いさんのお年寄りと会議でもしているのだろう。

まことにお疲れ様です。そんな忙しい兄上に代わって、弟の俺が義姉上を気晴らしに誘ってしまうことにしよう。一人でぐるぐるとアレコレ思い悩んでいたところで、どうこうなるわけではなし。

だから、気分を紛らわすことは必要だと思うのだ。

「そうね。でも、環境を変えると言ってもどうしたらいいのかよく分からないのよ」

「義姉上は普段から働きすぎなんですよ。もう少し休みを取った方がいいと前から思っていました」

これはホントにそう。メイドの仕事をしながら、兄上の執務の手伝

いもしているからな。

いや、メイド業が息抜きなのか？ 趣味でやっているのだろうか、たぶん。

「とういうことで義姉上、ちよつと一緒ににお出かけしませんか？ 義弟からのデートのお誘いです」

そう言いながら、俺はちよつとおどけた調子で亜空間からスタンプ欄の目立つチラシを取り出した。

「サイクリングで温泉巡りスタンプラリー？」

義姉上は俺が手渡したそのチラシに目線を落とし、不思議そうな表情をしている。

「人間界の縄張りに行ったときに見かけまして、どうでしょう。これを少しずつ埋めて行ってみませんか？」

日本のとある海のない県の温泉施設の宣伝用なのだと思われるチラシ。なんでも観光協会から自転車を借りて、県内の温泉を巡ってスタンプを埋めていくというものらしい。駒王町でふと目について手に取ったのだが、なかなか悪くないのではないだろうか。期限はないらしいので、ゆつくり進めてもオツケーだ。いや、さすがに悪魔の寿命基準のゆつくりだとマズイだろうが。

ちなみにスタンプ帖を完成させると、豪華特典として県内の温泉すべてで割引が利くようになるそうだ。意味あるのかな、これ……？

眠れないときは、無理に寝ようとしてもどうにもならないときがあるからな。酒でもカツと喰らってバタンといく手もあるが、それをここでしたところでメイドが世話をするだけだ。

やはりある程度身体を動かすとスカツとして寝付きやすいのではないかと思う。

ここ半年ほどドライグコーチの身体造り講座を受けて実感してるから、きつとそう。

「そうね……でも……」

おや、どうやら義姉上は迷っている様子。正直ダメ元だったのだが、ここはちよつと強引に行ってみるか。

失敗したらどうするか？ 知るか！

「俺はこれをやってみることにする！ 供を頼むぞ、グレイファイア!!」
「はい、リヴラクスさま！ ……あつ」

さて、義姉上の同意も得られたので、サクツと人間界に転移してしまおう。

メイドばかりやっているから、ワガママ若さまの面倒をみようとするクセが付いてしまうんですよ、義姉上。

「それじゃあ、行ってくる。ミリキヤスによろしく言っておいてくれ」
傍にいたメイドに言つけて、義姉上の手を掴んで魔方陣転移開始。
転移関係のセキュリティを見直したばかりの我が家だが、次期当主である俺はその仕様を当然知っている。内部犯かつ魔力量に自信ある俺ならばどうということもないのだ。

「待ちなさいリアス——」

と義姉上が止めようとする間に、転移完了。

「——もう、こういうところはサーゼクスに似ているのね」

仕方ないなと仕草で表現しつつ、義姉上の表情は結構嬉しそうだ。

幸い現地の天気は晴れ。時間も丁度良い塩梅。

いやー、義姉上とサイクリングデートして最後は温泉浸かって帰るってなかなか楽しそうじゃないかね。混浴のあるところや、お泊り部屋のある温泉もあるようだし。

いつまで義姉上の活動自粛状態が続くの分からないが、その間にスタンプ全部埋めたいね……クフフ。

まあ、今日のところは義姉上がおねむになったら終了だが。

2—32 温泉でいこう。(スタンプ1)

やってきました田舎の観光協会。

パンフによると、ここで自転車を借りられるらしい。

さすがに俺も義姉上も貴族風の衣装では目立って仕方がないので、人間界の現代風の服装に着替えている。ちなみに、着替えは魔力で一瞬ですることでも可能なので、ドキドキ着替えタイムなんてなかった。

プレイ中にじっくり脱いだり、ジレジレ脱がせたり、あるいは着せ替えたりしているのは、あれはあくまでもプレイなのである。ソーナとセラフォルーさんの御家であるシトリー家なんぞ、人間の記した書物では望みの男女を裸に引ん？く力を持つとか書かれているらしいので、その逆もまた問題なくできてしまう。

そう、ソーナはその気になればリュパンダイブもできる子なのだ。セラフォルーさんは魔法少女番組の変身シーンでよく使用しているしな。

さて問題の義姉上であるが、私服のときはパンツルックが多い気がする。スカートなメイド服でいることが多い反動だろうか。

日本の今の季節は冬。そろそろ年の瀬だ。そんな時期だが、昼間はそこまで寒くはない。本日の天気が良いってこともあるのだろうか、俺が人間の子供をやっていた頃はもっと寒かったような気がする。あれだろうか、温暖化ってやつのせいなのかね。この世界には各種神話の神々が実在しているのだけれど、彼らはこの事象に介入しようとはしていない。

出来るのにやらないのか。それとも出来ないのか。はてさて、どちらなのだろう。

「義姉さん、ここで借りるみたい」

人間社会で『義姉上』呼びは奇妙な気がするので、呼び方を変えてみたところ、

「ッ！ そう、みたいね」

何故かそのたびに義姉上がピクリと反応する。ちよつと面白いので繰り返してみたいところだが、実弟のユーグリットさん関係だとよ

ろしくないのではじくり返さない程度にしておこう。

気晴らしに誘ったのに、余計に落ち込ませてしまつてはよろしくない。

「すいませーん」

東京近郊の駒王町と比較するとこの近辺は大層な田舎である。観光協会の建物と言っても駅の近くに二階建ての事務所があるだけで、ちよつと遠くを見やれば稲刈りの終わった田んぼがちらほら見えると来たものだ。人間界の空気が好みではないライザー義兄上でも、このくらいのところなら大丈夫なのではないだろうか。あれきつと、都会の空気が汚れるとかそんな感じなのではなからうか。

「はいはい……………」

ガラスにペタペタと観光名所やら近辺の地図の張られた引き戸を開け、観光協会事務所に入ると受付らしきおばちゃんが口をポカンと開けてフリーズしてしまつている。

「もしもーし」

「は、はい！ 何か用か!? あ、すいません、今、英語話せるの呼ぶから！」

「いえ、日本語わかりますから。大丈夫ですよ」

そういえば、今の俺は紅髪紫眼の北欧系美少年であつた。ついでに連れの義姉上はスタイルとんでもない銀髪美女である。

こんな派手な容姿の客、ここらにはそうそう来ないよな。

物珍しいのか、じろじろと見られながらテンパつた様子のおばちゃんから説明を受ける。男性職員どもの視線が義姉上の顔と胸を上下しているのに微妙にイラつと来るが、俺も男だ。理解はできる。出来すぎてしまう。そうだよな、見ちやうよな……………わかる。まあ、俺の好みから言えば義姉上のお胸さまは少々大きすぎるのだが。

なんだろう、守備範囲をコップに入つた水にたとえると上限いっぱい超えて表面張力で零れ落ちないギリギリおっぱいというか。

女は顔だからいいけどね。特に角度なのか光の加減なのか、それとも魔力の影響か、赤にも銀にも見える瞳が好きだ。

説明によると、保険料としてちよつとだけお金を支払うシステムら

しい。で、借りた自転車は目的地の温泉で預けてしまえばわざわざここまで返しに来なくてもいいとのこと。

温泉には、一時間に一本くらいバスがくるので、帰りはそれを使ってくれていいよ、だそうよ。まあ、せつかく湯に浸かって温まったのにその後に自転車で寒い中走ったりとかしたら風邪ひきそうだし、人間ならそうなるか。

「風が気持ちいいわね」

長い髪をくるつと纏めてペダルをこぐ義姉上を横目に見ると、冬の日差しを受けた銀色の髪が風にあおられて煌めいていた。

ヘルメットつけてねと言われたが、つけてないです。すまないね。

ついでに自転車二台横並びで走る悪い子スタイルだが、悪魔だから別によし。車にぶつかっても向こうが一方的に壊れるだけだから安全運転です。人間の法やマナーなど悪魔には関係ないのだ。

「冬で良かったかな」

悪魔にとつては、冬の寒さも、夏の暑さも、魔力があればどうともなるものだ。

なので、季節関係なく同じような格好をしている悪魔は結構いる。あと、いつも露出多めの女性悪魔とかも多い。

「あら、冬が好きだったの？」

「義姉さんは冬の服の方が似合ってると思うよ」

個人的な意見なので異論は認めるが、俺は女性は冬服の方が可愛いと思ってる。夏よりもアイテム数が多くなるし、なんというかこうモコモコしていいよなっていうのだ。

もちろん、夏の女性陣が嫌いなわけではない。薄着は薄着でもいいものだ。あと水着。

だがまあ、どちらかと言えば冬である。マフラーとか手袋もいいよね。コート姿もグッド。学校の制服だって夏服よりも冬服派である。

ただし、雪の日にヒール履いてるのはダメだ。ブーツにしろ、ブーツ、雪用のヤツ。それでも転んじやったりしたところを抱き留めて、こうモコモコしてる上から抱きしめたいね。

「そう？　ふふ、ありがとう」

本日の目当ての温泉は、山の中にある。つまり坂道が多いわけだ。なので人間ならば冬場でも厚着をしていたら汗かきながら上って行かねばならないのだが、我々は悪魔なので基礎的な身体能力からして違う。その上、魔力で増強すら出来るのだから楽々である。平地も急な坂道も、スイスイよ。

「そういうえば、リアスの『赤龍帝の籠手』の禁手なのだけれど」
坂道を上っている途中、ふと思いついたように義姉上がこちらを見た。

「禁手がどうかした？」

丁度良いところに道路の待避所があったのでそこで自転車を降りることにする。

周りに人の姿はなく、時折自動車が通っていく程度、一般人には無縁な話をしても構わないだろう。

葉の落ちた木々に囲まれた山道の途中から遠くを見ると、僅かな平地を挟んで向こう側の山が見える。冥界ではありふれているが、俺の縄張り付近には無さそうな光景だな。

『赤龍帝の籠手』の通常の禁手は、『赤龍帝の鎧』ブリストレッドギア・スケイルメイルよね？」

「俺のは亜種になるらしいから。おかげで通常にはない能力もついているし」

ドライグにイメージとして見せてもらったことがあるが、『赤龍帝の鎧』は何処がスケイルメイルなんだって感じの代物であった。

スケイルメイルII鱗鎧というよりもプレートメイルII板金鎧、いやそれよりも騎馬にまたがる前提のスーツ・アーマー、いやいやそれすら超えてパワードツースかロボットのような雰囲気IIに思えたものだ。まったく、通常禁手の名前を聞いて、革鎧の上に龍の鱗を張り付けた感じのスケイルメイルを想像した俺の期待を返してほしかったね。オタは中世ヨーロッパ風味のファンタジー系にはちよっと厳しいんだ。

「どうして、あの魔王の装束のような姿になったのかと思ったのよ」
はて、見た目があんなった理由か。他の眷属の『悪魔の駒』を続べ

る『王』としてのイメージもあるだろう。悪魔で王なら、魔王という連想はすぐに出てくる。

あとは、やはり強さこそ権力であるって俺の考え方からして……。「俺の中にある、最強の『悪魔』のイメージですかね」

悪魔に生まれ変わって以来、俺の中にある一番強い悪魔のイメージは兄上である。兄のサーゼクス・ルシファーは魔王なので、公式の場では魔王の装束を身に纏う。

だから、板金全身鎧だかロボットよりも魔王の装束の方が強いってイメージが俺の中に根付いていたのかもしれない。

もう一つ、俺の心の中に強者として植え付けられたイメージはドライグの『龍の姿』なのだが、こちらも魔力で変化することが容易かつたことから考えて大きく影響しているのだろう。こちらの形も早々に実用段階にもっていききたいところだがなかなか上手く行かないので、まだまだ神器の深部に潜る必要があるのだろう。

「ふふ……」

なんだか微笑ましいものを見るような笑みを向けられて、少し赤くなりかけた俺の頬を冷たい冬の風が撫でて誤魔化してくれた。どうやら、この山の神か冬風の神は気が利くらしい。心の中で礼を言わせてもらおう。

「あー……ガードレールもないとか、勢いよく下ってきたら危ないかもしれないですね。この道」

ブレーキ壊れたりしたら崖の下に真っ逆さまだぞ。怖いなー。

「そうね。私たちは翼があるから平気でしょうけど」

男の頬をつつかないでください義姉上。

俺はもう子供ではないのだ。毎日やりまくってる大人なので、こういう扱いをされたくはない。

俺は義姉上の貞操を狙っているんだからな。いつまでも子供扱いで油断していたら、ヒンヒン言うハメになるぞ。

「はあ、さっさと行きますか」

ちよつと乱暴に自転車の向きを変えサドルにまたがると、立ち漕ぎでペダルをグイグイと踏み込んで義姉上を置き去りに坂道をせつせ

と上る。

「何を拗ねてるの？」

「拗ねてない」

追いついてきた義姉上に、ふんと鼻息荒く返事をしてやると、なんだか知らんが嬉しそうに微笑まれました。

義姉心はよく分からないな。まあ、義姉上の笑顔が多めなのは良いことだ。

「懐かしい……」

たどり着いた温泉の下駄箱で思わずつぶやいてしまった。

「どうかしたの？」

総木製で、靴を入れて蓋をしめたら、扉に刺さっている番号が書かれた木版を引っこ抜いて持っていくとかいう形式の下駄箱。今生では初かもしれん。

「いや、昔を思い出して」

しかしアレだな。俺も義姉上もお互いに口調が安定しないな。家では若君とメイドの立場か、義弟と義姉の立場、ここでは人間社会ように一般姉弟っぽく振舞うことにしているのだが、どう話していいものやら戸惑ってしまう。

「昔が恋しくなった？」

「いえ、今の方が楽しいです……よ。義姉さんもいますしね」

前世は別にそこまで楽しくもなかったしな。生まれ変わってから短い悪魔生の体験だけで、余裕で上を行っている。ここ半年だけでも遙かに上だ。

義姉上、なぜ無言で頭を撫でてくるのですか？ 俺もうかなり背が伸びたので、そういうのは別に……いや、結構嬉しいな。くそ、にやけそうな我が口元が憎い。

「ふああ……」

肝心の温泉には、混浴なんてなかった。いや、別にいいのけれどね。初回からいきなりそれとか、狙いすぎてダメだろうし。ついでに、義姉上が混浴に入って来てくれるとは限らない。最悪、おばちゃんたちに囲まれてチャホヤされるなんて状況になってしまう。

湯に浸かりながら右手を見ると、そこには輪っかになったゴムのバンドで吊るされた脱衣所のロッカーの鍵。

『なあ、ドライブグ』

『なんだ？』

『義姉上とやるにはどうしたらいいと思う？』

『そんなことを俺に聞くな。オスなら自分でどうにかしろ』

『そういうと思ってた』

『だがまあ、ドラゴンの界限なら気に入ったメスを自分のものにしたいのなら、他のオスを蹴散らすものだ』

『兄上かあー。強いんだよなあ……』

『あれもまたお前と同じバケモノだ。それに、お前は身内にはそこまです攻撃的になれんだろう』

あー……ほんと厄介な相手だよなあ。叔父上とミスラさんのときとは違うのだ。

堂々とは行けん。狙うとしたら、いつぞやこうやって風呂に浸かりながら考えていた、『一盗』か……。こつそり、こつそりとな。バレなきやいいだろ的な。いや、バレても大つぴらにならなきや構うまい的な。

悪魔的には不倫とか浮気って、そこまで世間からどうこう言われることでもないからな。嫉妬だの執着だの独占欲だのがあるから、当事者間は大変なことになるが。

義姉上が、逆ハ―思考で『グレモリー兄弟両方食べちゃいますわよ。うふふふ……じゅるり』みたいな方だったならある意味楽しかったのかね。美男・美少年集めている女性貴族もわりかしいるようだし。

『お前の中に諦めるといふ選択肢はないのか』

『振りきれりやあいいんだけどなあ……』

いつそ兄上が悪魔全体を裏切るような、こうトンデモナイことをやらかしてくれたら……って、他者の行動に期待するのは悪魔のやり口ではないな。他力に頼るのは弱く儂き人間の生き方だ。

神様仏様、清く正しい生活を送りますので、どうか来世で、死後の天国で、幸せに暮らさせてくださいませ、ってな。いや、完全に生ま

れ変わっていい思いをしている俺の言えたことではないが。

思えば、前世で俺がよく読みふけていた小説サイトには、そんな物語が大量に溢れていたような気がする。あれもまた人間の信仰の形なのかもしれないな。

ま、俺はそれを実現してしまったワケだが。まったく、地獄の神だか仏様のお陰だ。ありがたや、ありがたや。

『なあ、ドライグ』

『なんだ？』

『人間ってのは、昔っから今生よりも来世に夢を託して来たんだろうか？』

『まあ、そうだな。俺がこうやって神器に封印されてから知った限りでは、多くの人間はそういうものだった。宗教に縋る連中はな。天国だの理想郷だのに期待して、今生での願望の実現を見送るのさ』

『ドラゴンの気に入らない感じか』

『……そうだな。欲しければ奪い取るのが、力の権化たるドラゴンの在り方だ』

飢餓や病、戦争。死が身近にあった昔でも、科学の発展がそれらをずっと遠くした現代でも、結局人間は現状の打破を死後に求めているってことか。

神仏のエネルギー源たる信仰の大元がそこにあるのなら、聖書の黙示録の先の未来を求めている教会信者も多いんだろうな。意識しているかどうかは別にして。

たしか、なんだったか……大雑把には『いろいろと災禍が巻き起こって穢れた世界が滅び、その後には教義に則って生きた清く正しい者だけが、天国に迎えられて末永く幸せに暮らせます』みたいな話だったはずだ。頭痛くなるから詳しくは思い出さないが。

『案外、黙示録に記された「夢幻」を司る最強の龍「真なる赤龍神帝」アポカリユプス・ドラゴングレートレッドの力の源は、人間のそういう想いなのかもしれないなあ』

神々が信仰を求めるように、我々悪魔が欲望を貪るように、人外異形の存在はなんらかの形で人間を糧としているものだ。それはきつ

と、最強の龍神だって違わないのではないだろうか。たぶん。

全人類の現状への不満。そこから生まれる夢や幻、理想の世界。グレートレッドがそんな意識的にか無意識的にか関わらず、現状に不満を抱えた人間たちの心から生まれるその手の感情・精神のエネルギーを糧としているとすると、そりやまあ強いだろうな。

『それはどうか？ ヤツとてドラゴンの姿をしているのだ、自力での現状打破、願望実現を試みる心こそがドラゴン・オブ・ドラゴンの力の根源かもしれんぞ』

『ああ……ドラゴンならそうかもな。なら、人間たちの滅びを望む意志みたいなのは、もう一つの黙示録の獣の力だったりするのかもな』
存在することは存在するらしいが、どこにいても知れぬ終末の獣。『666』の数字で有名な『黙示録の皇獣』
アポカリプティック・ビースト

いろいろな神話や宗教で終末の話って出てくるし、それこそ仏教の弥勒菩薩をこれと絡めて666をミロクって読んでる創作物とかあったしなあ……。

救われるためにこの世ごと死んでしまいたいって感じで終末を望む感情。その人類の精神エネルギーのようなものを糧として、666の獣が育っていたら……とんでもなく強いんだろうな。あー、嫌になるね。黙示録そのままなら、この獣って悪魔の味方っぽい気がするんだが、黙示録の赤い龍ことグレートレッドは特に悪魔とどうこうってないし……。怖い、怖い。

『その獣が出てくるのなら、聖書の三大勢力の決戦のときに出て来ていそうなものだがな』

ハルマゲドンっぽい過去の大戦時に出現して大暴れしたのは、黙示録の龍でも黙示録の獣でもなく、ドライグとアルビオンって全然関係のなさそうなところから突っ込んできた二頭の天龍っていうね。

さっぱり訳が分からん。世の中ややこしくて分からん事ばかりだ。

『考えても分からんし、そろそろ出ることにする』

『しかし、お前はしょっちゅうくだらんことを考えているな』

『適当なことを思考しては放り投げるのは、友達の少ない俺みたいなヤツにはいい暇つぶしだからな。エロ妄想とこいつは、前世からの癖

みたいなものだ』

と、ドライブを相手にそんな益体もないことを話している内に、こそこの時間が過ぎていた。そろそろ湯から上がってもいい頃合いだろう。

温泉や銭湯に男女で出かけて、もう一方が出てくるのを待つ時間つてのは、なかなか趣がある。嫌いってヤツもいると思うが、俺は結構好きだ。本日の義姉上がどのくらいの時間湯船に沈んでいるのかは分からないが、先に出ておいて湯上り姿をお出迎えつてのは心躍るね。一緒に風呂に入つて、エッチいことをするのはまた別のわくわく感がある。

露出度は同じでも、水着姿と下着姿は違うみたいな感じだろうか？

いや、違うか。

自販機ではなく、ガラスケースに入ったコーヒー牛乳の瓶を手に取り、カウンターに座っているおばちゃんに話しかける。

「これ下さい」

「はいよ、百円ね。おにいちゃんカッコいいけどまけてあげらんないんだ。ごめんな」

「じゃあ、俺が奢りますよ」

「あら、ヤダ！ もう、おばちゃんにこんなことしても何もでないわよ！」

もう一本取ってきて、二本購入。一本をおばちゃんに上げるとめっちゃ喜んでた。

やはり顔か……いや、おばちゃんにモテてもしょうがないのだが。

あー、美人女将が経営している温泉宿とかないものかね。ついでにそこがちよつと経営が傾いていたりして、お金持ちな俺に融資と引き換えに身体を差し出し、やがてそこに娘の美少女も巻き込まれて行つて……客の入浴時間を終えた湯船に響き渡る母娘の淫らな喘ぎ声、みたいなエロ本的展開があつてもいいと思うんだ。そこからさらに、家業を継ぐのが嫌で都会に出て行ったけれど挫折して帰郷してきた長女が加わって……。

いかな、ヘンな妄想を描いていると股間が起動してしまう。義姉

上が出てきたときに、もりもりギンギンでは困る。

男湯と女湯に分かれる手前の通路に設置された背もたれの無いベンチに腰掛け、邪念を追い出していると良く知ったオーラの気配が女湯の出入り口に近づいてきた。

「待たせちゃったかしら？」

「少しね」

うーん、湯上り義姉上、よい。いつも顔の両サイドで結って垂らしている三つ編みもしていないし、後ろ髪もサツと垂らしているだけ。

屋敷ではなかなかこういう姿はお目に掛かれなからな。これだけでも今日ここに来た意味があるというものだ。ほんのり上気している頬に、少しとろんとした瞳が色っぽい。

ふむ、これはもしや少し眠そうな感じなのかな？

「気分転換になった？」

「ええ、いつもと違う場所の空気も悪くないわね」

隣に腰を下ろして来た義姉上の様子を伺うと、どうやら本当に多少は気が晴れているように見える。

「何か飲む？」

「そうね……どれがいいのかしら？」

俺が決めて良いようなので、いちごミルクを選んで会計を済ませた。

悪魔でもそうなのか知らないが、コーヒーよりは眠りやすそうな気がする。

「リアス、これすごく甘いわ」

「まあ、そういうものだから」

義姉上は甘いものが嫌いな訳ではないが、そこまでの甘党でもない。アップルパイに使うリンゴは、酸味の強い品種がお好きな方向性の女性だ。

リンゴと言えばバアル領だが、あそこは初代様のこだわりなのかいろいろな品種を作っているの、その辺りも対応できていて良い感じである。これ、今はどうでもいい話だな。

そんなことより、薄桃色の液体の入った瓶に口を付けている義姉上

の唇の色艶に目が行ってしまふ。あと、コクリコクリとそれを嚙下する喉の動きとか……俺、変態チックだな。今更か。

と、なんともモヤモヤとしながら義姉上を眺めていると、飲み終わった後の瓶の始末に困っているようだ。どうすればいいのだろうか。とキョロキョロするさまが、なんだかとても可愛く見えてしまふ。

普段メイドをしても、義姉上も純血悪魔の貴族だからな。こういった下賤の場には慣れていないのだろう。もしかしたら、初体験だったりして。

「はい」と手を出してビンを受け取り、カウンターに置いておく。どうやらさつきのおばちゃんは、奥の方で同僚とキヤイキヤイ盛り上がっているようだ。なにがそんなに楽しいのだから。

「すみません、連れが少し疲れてしまったようなのですが、どこかで休ませてもらえませんか？」

と声をかけてみると、三人ものおばちゃんたちが出て来て案内してくれた。

「ここ使つてちようだい。宴会用の座敷だけど、今日は予約入つてないから」

と、無事に休憩場所を確保できたので、義姉上の手を取つてみることに。

「リアス……？」

「義姉さん眠そうだから、寝ておいた方がいいよ。あつちだと、気が休まらないかもしれないし」

「そう……かもしれないわね」

座敷まで義姉上を引つ張つて行って、適当に押し入れだか物入らしき場所を開ける。

さすがに布団は置いてなかったか。だが、座椅子と座布団があつたのでちよいと借りることに。ふむ、この木製でL字型の座布団を上置いて使用する、床との間にほとんど段差の出来ない座椅子……使えるな。

「ほい、ハイハイどうぞ」

畳の上に座布団を四つ縦に並べて、その一方の端に座椅子を横向き

に置く。で、その座椅子の背もたれに背を預けた俺は、自分の腿をポンポンと叩いて見せた。

「ええと……う？」

「膝枕、前はよくやってもらってたから。今日は俺が義姉さんの枕になろうかと」

首を傾げる義姉上に説明すると、彼女はおずおずと座布団の上に身体を横たえる。すると、仰向けになった義姉上の瞳が、俺の膝の少し上辺りからこちらを見上げてくる形になった。

まあ、俺の太腿なんぞ女の子のそれと違って硬いので、あまり気持ちよくないかもしれないが。でも、俺は楽しい。

「そういうえば、よくねだられたわね。いつから、しなくなったのかしら」

「どうだったかなあ……。まあ、今はそれよりも義姉さんがちよつとでも休むことの方が大事ですよ。こんなので申し訳ないけど」

「こんなことしたことがなかったから、なんだかとても新鮮な気分よ」
そりやそうだろうなあ。日本のド田舎の温泉の微妙にタバコの跡とか残っている畳の上に座布団並べて、その上で寝るとかさ……。悪魔の世界で『最強の女王』と呼ばれている義姉上がしたことなんてないだろう。俺も今生では初めてである。

前世では……。うん、会社の行きたくもない飲み会に出席して、うえーと酔っぱらって寝かされていたことがあったような気がする。新人は酒注いで回れ、注いだら返杯だかを受けるのが礼儀だぞとかさあ……。そういうの今時流行らんど。まあ、人間基準では結構昔の話だが。

「んっ……う？」

「アイマスク。目を温かくすると気分が良くなるって聞いたような覚えがある」

ひよいと義姉上の両目を覆うように左手を置いてみる。俺から見て左側に寝ている彼女の唇の端が、左手の小指と手首の間あたりに触れる感じだ。

「ああ……。ふう……。」

続けて義姉上の頭の天辺付近を右手で撫でる。手櫛で銀色の髪を梳くようにすると、指と指の間をサラツとした感触が流れて行つて心地よい。

「黒歌は知ってたよね？」

「んっ……ええ、貴方の眷属……になる子よね」

黒歌の所属はナベリウス本家との話がついていて、年内には俺の眷属に迎える予定だ。あちらの『王』が行方不明なので、駒を自在に扱えるベルゼブブさまの予定が空いた日を待っている状況になる。

いろいろな場面を想定して契約内容をきつちりと作つてくれていたレイヴェルに感謝だな。

「彼女から聞いたんだけどさ、オーラでこういうのするといいらしいよ。仙術に近い働きがあるとかで」

「あ……っ……はあ……」

髪を撫でながら義姉上の魔力のオーラを掬い上げて、俺のそれと混ぜるようにして馴染ませていく。

それをしばらく繰り返していると、オーラに干渉し始めたときにピクツと少し緊張した義姉上の身体から力が抜けていくのが分かった。

どうやら受け入れてくれたらしい。魔力つてのは心に浮かんだイメージで操るものだ。自分のそれに干渉されるつてのは、かなり緊張する。俺も黒歌に仙術を試してもらったことがあるが、「いまなら命脈を断つことも簡単にやん」とか言われたときは、ビクリとなったものだ。命を預けている感覚つてのは独特なものがある。

耳かきとか、よくよく考えなくても奥の方をグサツとされるだけで酷いことになるだろうに、やってもらうのがなんだか楽しいってあるよなあ。

「んう……、ふう……」

「どうですか、義姉さん。気持ち良くなってきましたか？」

「ええ、なんだかふわつとして……頭の中が……」

「そのまま寝ちやいましょう。大丈夫、俺が付いてるから」

「うん……ありがとう……」

その後も目を覆い髪を撫で続けていると、やがて義姉上の口からス

ヤスヤと寝息がこぼれ始める。

眠っている義姉上を眺め続けることしばらく、俺はそつと手を彼女の顔を覆っていた手を離してみた。

「よく寝てるな」

頬をつついてみたり、鼻をつまんでみても起きる様子がない。まあ、さすがに鼻をつまむと嫌がって眉が動いたが。

ダメですよ、義姉上。俺のようなヤツのすぐ近くでそんなに油断した無防備な姿を見せたら。

「義姉さん……義姉上……起きないとキスしちゃいますよ？ ……ホントにしちやいますよ？」

グツと背を丸めて、自分の膝の皿より少し上辺りにある美女へと顔を近づけていく。鼻が触れ合うような距離で一旦止めてみるが、特に反応はない。

俺は少し頭をずらして、ゆっくりと唇が触れ合う寸前まで顔を近づけた。互いの口唇がくつつく寸前、義姉上のそれが僅かに開いて男の名前を呼ぶ。

「はあ……」

数十秒後、俺は座椅子の背もたれに体重を預け天井を見上げていた。

なんとなく頭をかいてから、しようがないので安眠用に仙術もどきでもしていようかとすると――。

「ううん……」

義姉上が大きく寝返りをうった。仰向けだったのが、うつ伏せになる百八十度の大移動だ。その移動方向は、俺の腹の方。

「んう……ふう……」

おい、義姉上。今あんたが顔面を埋めているのは、俺の下腹部の下というか、両脚の付け根の間と言うか、いろいろと敏感な部分だぞ。勃っちゃうからやめなさい。クンカクンカするのをやめるんだ。風呂入ったばかりだから臭くはないと思うけど。

「すうー……、んふう……」

俺の葛藤など知らず義姉上はもぞもぞと頭を動かし、いきり立った

肉棒を柱にして出来た股間のテントを揺さぶってくる。

「んうっ……ふうっ……」

こんなのもう、傍から見たら口淫風景ではないだろうか。実際にそうなった場合を想像してしまつて、抑え込もうとしても抑えられず、むしろガンガンと隆起して行つてしまう。

パンツとズボンで上を押さえつけられた空間が、狭い苦しい解放しろと我が分身が悲鳴を上げている。

「んあ……、すう……すう……」

もぞもぞして落ち着かない様子で刺激を与え続けてくる義姉上。この動きを止めねば、最悪中で発射してしまうかもしれん。

だから俺は、義姉上の頭をぐつと押さえつけた。

「はあ……」

未だに続けているオーラニックなマッサージの効能によるものか、後頭部と頭頂付近をさすつているとやがて義姉上の体勢が安定し始めた。

まあ、俺もこの半年ほどで脚に筋肉ついてきて太くなつたしな。義姉上的には、うつ伏せの方が枕の高さが合うのかもしれない。自前で胸部にでっかいクッション持つてるから。

「んうう……、すうう……、んうう……、すうう……」

ようやく落ち着いてくれた。自ら義弟の股間に顔を埋め、押し付けられて安眠にはいるとは……なんていやらしい女なんだ。義姉上でなかつたら、「そんなに好きなら、オラ、しゃぶれよ」ってしているところだ。

「……………」

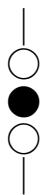
眠れる美女の頭を撫でながら、悶々と過ごす時間はその後二時間ほど続いた。

その後、起床した義姉上と共にスタンプを押してもらつた。ここに来るきっかけとなつたチラシに印刷されていたスタンプ欄ではなく、専用のスタンプ帳にだ。

なんでも、チラシのスタンプ欄は見本で、正式なものはこちらの温泉の外観と浴室の風景写真が入っていて、ついでに所在地、地図、電

話番号などの入ったスタンプ帖だったらしい。

この企画を考えた人物と、自転車や印刷業者の関係がどうのこうのとやらんことまでおぼちゃんに教えてくれたが、そういうのは観光客に言わなくてもいいんじゃないですかね。



「リアスさま！」

「はい……」

グレモリー家に帰った俺は、レイヴェルに捕まって正座させられていた。

「あれほど、グレイフィアさまはダメです！　と私が言いましたのに、どうして聞いて下さらないのですか！」

レイヴェル優しい。正座が寝室のベッドの上でいいだなんて……母上だったらギザギザ石の上に座らせているところだぞ。あと、膝上に乗っかる重石も、レイヴェル本人の柔らかかボディではなく、硬くて重い石の板だぞ。

「いや、手を出してはいないから。これは本当だ」

「む……、ウソでは、ないようすわね。でも、本当にグレイフィアさまはマズイですわ」

そうなのだ。レイヴェルの言う通り、義姉上は非常にマズイのだ。ここはぐつと我慢するのが、正しいし利口だ。

そう分かっているのに、どうにもこうにも抑えられぬ欲望がある。兄上がなあ……もうちよつと嫌なヤツなら良かったんだが。別に嫌いなわけじゃないんだよな。ただ、なんとなくその政策と言うか、やり方が気に入らないことが多いだけで。

なんなんだろうな、これ。現状に不満大つてこともないのにな。

「ちよつとリアスさま……私、今叱っているのですけれど……」

「いや、この体勢だと反応しちゃうだろ」

俺は今、パンツ一丁でベッドの上に正座させられている。で、その俺の膝の上にネグリジエ姿のレイヴェルがこつち向きで座っている。そして、彼女の両脚は、俺の腰にガツチリと回ってホールド状態。身長差もあって、この体勢でもレイヴェルの視線の方が俺のそれよりもやや低い位置にあるので、不満ですと主張する視線も上目遣い。こんなもの勃つに決まってるだろ。叱責というより誘惑です、完全に。

兄嫁と二人きりで旅行してきたことに怒って、唇尖らせながらすりすり寄ってくる奥さんとか……ああ、もう可愛いんだよなあ。

「リアスさま……私ではダメですか？」

「そういうのじゃないんだ」

言いながら体重を前にかけて押し倒す。彼女の首筋に顔を埋めると、いつもより強い例の香水の匂いがした。

「あん……まだ話の途中ですのに……」

耳たぶや首を軽く唇で挟むようにしながら、レイヴェルの小ぶりでキュツとしまったヒップに手をやる。両手を使って尻肉の桃の形をそれぞれぐにぐにと変形させて、その弾力を楽しむ。

「ちよつと聞いていらっしやいます……の？」

「んー、今はこつちに集中したいから、聞いてない」

「ん……♡ 聞いているじゃないですかあ」

「レイヴェルもこうするつもりだったんだろ？」

炎の魔力が強いためか、レイヴェルは普段から体温が高めだ。ほかほかした肢体を抱きしめていると、なんだかとても落ち着く。

まあ、コツチの方はまったく落ち着かないのだが。

「あ、やだ……そんなに擦りつけたら……♡ って、まだ、まだダメですわ。待って、まってくださいまし」

パンツの中でギンギンに隆起した肉棒をレイヴェルの秘所に押し付けグリグリと動かすと、見上げてくる彼女の顔つきが変わってギユツと抱き着いてくる。

左右の手を尻の割れ目に進め、肉を掴んで開くようにしてやると、それから逃れるようにレイヴェルの腰が前に突き出された。そうな

ると、もちろん彼女の前の割れ目に押し付けている肉棒の先が食い込むわけで……。

「ほら、もう濡れまくってるじゃないか」

強く圧された女の割れ目の中から、じゅわりと染み出て来た雌汁が彼女と俺のパンツをぐちよりと湿らせる。

「んんう……もう♡ 仕方のない方ですわね」

「そうそう、俺は仕方のないヤツなんだ」

「んうっ……ちゅっ……♡」

唇を合わせ舌を絡め始めると、レイヴェルの手が俺の身体のあちこちを這いまわりだした。

最初はくすぐったく思えるが、それがだんだんとよくなってゾクゾクとした快感に変わってくる。

もう辛抱たまらん！

……………。

「もう、いつもこうやって誤魔化すんですもの……ずるいですわ」

「嫌だったか？」

「嫌じゃありませんけど……でも、条件があります！」

「条件？」

「どうしてもグレイファイアさまに……ということでしたら、サーゼクスさまよりも、ずっとずっと強くなってくださいまし」

「兄上よりもか」

絡み合った体勢から、レイヴェルが俺の額の前に片手をかざし、親指で中指を押さえてたわめた。

パチンツ！ と額に奔る衝撃。

「このくらい感覚で弾き飛ばせるのでしたら、何も問題ありませんから」

デコピンで兄上を倒せて……レイヴェルの要求は厳しいなあ。まあ、それぐらいになれば確かにどうとでもなるのだろうけれど。

素の魔力で兄上を超えて、その上で一兆倍くらいまで『倍加』でき

るようになれば……いけるかな？

『倍加』40回か、なかなか遠いな。俺、今はまだ10回ぐらいしか出てないし。歴代には30回ぐらい力を『倍加』させた者もいたらしいから、人間よりも遥かに頑丈な純血悪魔の身ならいけそうな気もしなくもないが。

いやいや、でもでも、だ。

現在俺は白龍皇がするというこちらの大きさを半々にし続け消してしまおうという恐ろしい技に対抗するため、自分の大きさを倍々にする技を練習中だ。

それで、だ。ドラゴン変化の術で、頭から尻尾の先までの全長が20メートルぐらいのドラゴンに変化して、そこからさらにサイズの『倍加』を繰り返し返して一兆倍ぐらいに巨大化したら……俺って兄上どころか冥界そのものをデコピンで粉々にできてしまうのでは……？

まあ、今は『倍加』十回で、だいたい全長20,000メートルくらいが限界だけだな。余裕を持たせるとその一回手前の九回、10,000メートルか。

しっかし、まともに考えなくても、全長二十兆メートルのドラゴンってヤバいな。ちよつと今は詳しいところが思い出せないが、太陽に足を置いたら木星を掴めそうな気がしてくるぞ……もう一つ行つて、土星まで手が届くかな？

さらに体重もそれに合わせて増加するんだから、途中で重力発生して太陽系の重力バランス崩れちやいそう。

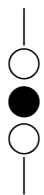
北欧の神話に太陽呑み込む狼とかいたような覚えがあるし、ヴィシユヌ神は三步で全世界を跨いで見せたとか聞くが、俺にもそれが出来るって可能性があるのか？

んーむ、神話生物ヤバイ。マジヤバイ！ ドライグがヤバすぎる。そりゃ、その気になれば地球なんか何度でも滅ぼせるとか言い出すわけだよ。

「分かった。レイヴェル……俺ちよつと頑張つて、太陽をこの手で掴めるぐらいのデカイ男になる！」

「ええ！ その意気ですわ！」

なお、後で聞いたところではレイヴェルは俺のこの発言を比喩表現だと思っていたらしい。



「本日より、リヴラクス・グレモリーさまとその眷属の皆さまのスケジュール管理を任せられました、レイファイア・ルキフグスです。よろしくお願い致します」

翌日のことだ。レイヴェルと二人、父上に呼ばれて赴いてみるとそこにはメイド業務に復帰した義姉上の姿もあった。

それはいいのだが、何故か俺と俺の眷属のスケジュール管理を義姉上がするのだという。

「レイファイアだが、しばらくはサーゼクスの魔王の職務の補佐も出来ず暇だと言うのでな。お前の補佐を頼むことにした」

父上、それは監視とかそういう意味合いでしょうか？

いや、いいんですけどね。俺としてはその辺りは大方針を俺が決めて、レイヴェルと相談して各所との連絡をしてもらい、諸々の手続きや時間管理なんかはリユイに頼もうかと思っていたわけなんですけど。

そこに一枚、義姉上をかませろ、と。

あー、いや、そうか、グレモリー家（つまりは父上）からの指示などの取次に義姉上が入るってことか。俺には俺のやり方があるが、次期当主としては現当主である父上の決めた予定が優先だからな。

義姉上もメイドの恰好をしていることだし、まあメイド扱いの態度でいいのだろう。

「しかし、急な話ですが何かありましたか？」

俺ってほとんどこの家にいるし、出かけるときは一応予定を告げてはいるのだが。昨日急に人間界に行ったりはしたけれど、特に他の用事があったわけでもないしなあ。

いや、行き先不明は普通にマズかったか。エダーギ殿の事件があったばかりだし。

「実は政府からお前に依頼が来そうだ。まだ正式決定ではないようだが、まずこの通りになりそうらしい」

デスクに座る父上がそう言うのと、その脇に立っていた義姉上が書類を手にこちらへとやって来た。

その内容をサツと確認する。

「レイヴエルには見せても？」

「そのために呼んだ。二人でよく見ておきなさい。フェニックスの特性、例のあの治療法絡みだからな」

書面をめくり大まかな内容を読み取ると――。

「これはまた……人数が多いですわね」

数百年前に起きた大戦と、それによつて初代の魔王達が亡くなったことで起きた内戦。この二つの戦いで身体に欠損を抱え、今もそのまま生き続けている兵たちの治療。

名前や所属、大まかな怪我の具合などが書かれているのだが、とにかく数が多い。こんなにしたのか。

グレモリー領の軍にも結構な数が居たが、それは戦後の分も含めてであつた。魔王領や他の貴族家も含めると、ここまですくなるのか。

「これは、年末は十番勝負を眺めて過ごしている暇がないかもしれないな」

悪魔の社会では、既に年末の風物詩となつた「デイハウザー・ベリアル十番勝負」。観ていないと話題についていけないこと必至の試合なのだが、これを急いでやるとなると……うん、録画しておくしかないか。

「代金は……あら、政府からの依頼ですのに、前に決めた金額そのままなのですわね」

バル家からの依頼の際に決めて、今後もそれでいこうとなつたフェニックスの特性を『譲渡』で付与して行う治療のお値段。これはかなりの高額なのだが、政府からの依頼でこの人数相手でも値下げ要求が書かれていない。これ、合計するとトンデモナイ金額になるぞ

……支払いどうするんだ？

「ああ、なるほど。そう来たか……」

ちなみにフェニックス家の兵はグレモリー家と同様、無料である。他所の家の兵を一旦フェニックス家に移籍させてなどの抜け穴を使われる心配はそうそうないと思う。だって、レイヴェルが絡んでいる話だしな。それやったら、友好度ガタガタよ。

レイヴェルとの話し合いでそう決まった取り分は、俺が五割で、レイヴェルは二割、レイヴェルが遠慮して受け取ってくれない残りの三割はドライグ貯金ということになった。『赤龍帝の籠手』の力で出ていることなのだから、ドライグの取り分があってもいいよねということ。

まあ、今のところ封印されているドライグには、世界各地から高級品から安いものまで様々な酒でも取り寄せて籠手についている宝玉から流し込んでやるくらいしか金の使い道がないのだが。

これ酒集めまくってたら、グレモリー家の次期当主は大酒飲みとか言われそうだな。実際はまだ、酒の味がよく分らんお子様な舌だと言うのに。

「国債……。この年齢で、国に対してこれほどの額の債権を持つ身になるとは思いませんでしたわ」

少し前に黒歌のことでディオドラから金借りようかなんて考えていたのに、今度は国に金を貸し付けている感じになるのか。一年にも満たない期間で変わるものだ。

「父上、他家にも借金の形で良しとするのでしようか？」

これ、相手が国だからいいものの、他所の貴族家の依頼で頼まれると困るな。本家ならばまず大丈夫だろうが、分家筋などだと支払いが滞る者もいるかもしれないし、そのときにいちいち回収の手間などかけていられない。

「それは受けないことにしている。今回は政府からということと特別だ。国がその気になれば、貨幣を発行するだけで金額を揃えられるからな。レーティングゲームで怪我をして……といった者は、何処かで借りて用意してもらおうことになるだろう」

やはり、ニコニコ現金払いが最強。まあ、政府が潰れたり、貨幣の大量発行でインフレ起きても困るからこれは仕方がないか。経済の詳しいところは知らんのだが。というか、前世で経済学者がいろいろと言っていたが、その通りになった試しがあまりなかったような気がするので、俺程度が考えてもどうしようもないな。

国破れたら、山賊にでもなればいい。ふはは、足りないものは有るところから略奪するだけのことよ。

「それで、このことで忙しくなるので、俺と眷属のスケジュール管理にグレイフィアが付くことになった、と」

「その通りだ。動く金額も大きい。お前にはまだ、ここまでの額はなあ……」

ああ、はい。心配ありがとうございます父上。

まあ、使い道の予定はあるのでそのうち相談してみよう。あぶく銭のようなものだしな、下級悪魔リーグとかにつき込んでも良からうよ。この分だと、失敗したところでそう痛くもなくなりそうなことだし。

何にしても余裕があるってのはいいことだ。一度に金が手元に来ないのも、お小遣いが増えたようなものと思えばよろしい。ちよつとは利息も付くようだしな。

と、そんなこんなで話を終えて、ふと一人になったタイミングで俺の耳元に通信魔方陣が展開された。これは義姉上からか……。

『オフの予定、合わせられるから。……また行きましょうね』

ふむ、義姉上はスタンプ集めの続きをご所望のようだ。

そりゃあ、俺と眷属のスケジュールを管理してるマネージャーみたいな立場なら、そこに自分のオフ日も合わせられるか。

うん、これはまたお出かけのことを考えておかないと。

2—33 昼休みに焼き鳥弁当を食べた

俺はネットゲームも嗜んでいた。MMORPGとかそういうヤツだ。

ネトゲは遊びじゃないんですよって感じで、極まれにしかポップしないレアアイテムをドロップするモンスターなどを巡ってライバルたちと鎬を削ったりしたものだ。

会話こそなかったが、その頃のライバルたちとは、連休潰してこんなところに張り込んでいないでどっか遊びに行けよなんてお互いに思っただけで、なんというかしょうもない連帯感があつたような気がする。

さて、そのゲームの世界で俺の大嫌いな奴らがいた。プレイヤーキラーPK？ 違う。MPK？ これも違う。横取りもイラついたがそこまででもない。それが出来るゲームのルールなのだから、まあ納得するしかない。

では、何が嫌いだったかってクレクレくん。いやな、たしかに長いこと遊んでいけば初心者から見ても遥かに金もアイテムも揃っている。別に序盤のちよつとした装備やら小銭ぐらいくれてやれないことはない。

だが、なんだかとにかく嫌いだったのだ。なんでお前なんかにくれてやらにやならんの？ フレじゃないよね？ というか初めて会ったよね？ なに、自分で集めたら？ というような感情が沸き起こって仕方がなかったのだ。

心が狭いと言うか、なんというかどうにもアレなのだが、とにかくそうだったのだから仕方がない。それが俺の性分なのだ。

黒歌の眷属化は無事完了した。

ナベリウス本家としては、曰くつきになつてしまった他のエダーギ殿の眷属も引き取って欲しそうな様子だったが、そこまでは俺の知ったことではない。

まあ、他の眷属は美女でも美少女でもなかったから仕方ないな。だが、良く鍛えられてはいたので、それこそナベリウス家の中でレーティングゲームに参加している者が使って行けばいいと思う。

その片方の『王』不在の少しばかり特殊なトレードには、『悪魔の駒』の開発者であるアジュカ・ベルゼブブさまに出張っていたくことになった。ここは事前にベルゼブブさまの出身家であるアスタロト家のディオドラとラティアを通して頼んであったこともあって快く引き受けていただけなのだ。

これによつて、黒歌はエダーギ殿の『僧侶』2駒の眷属から、俺の変異『僧侶』1駒の眷属へと移籍できたわけだ。まあ、俺の力であれば通常『僧侶』でも眷属化出来ないことは無かったようだが、元は2駒だった黒歌を変異とはいえ1駒に出来ただけでよしとしておくべきだろう。鼻肩が過ぎると後で面倒になるしな。多少損をしている感じがあるくらいで丁度いいだろう。

その際に『王の駒』のことを匂わせてみたところ、アジュカさまと後日面会する予定も決まったことだし、順調順調。

とはいえ、それがすぐに実現できるかどうかやや怪しい。今の俺はとても忙しくなってしまったのだ……。

「疲れるな……」

「ええ……」

そろそろ年も変わる頃、俺とレイヴエルはとても疲れていた。魔力がどうこうとか、体力とかでもなく、主に精神的なものだ。揃ってため息を吐くなんて、これはよろしくない。とりあえず指を絡めてみたりして、精神エネルギーを補給しなければ。

なんで女の子の手つて、こうやって触れ合っているだけで幸せ気分になれるんだろうな。

「ふふ、くすぐったいですわ」

何故か知らないが、クリスマス前から始まった例の大戦・内戦時の傷痍兵治療。これの人数が多い。物凄く多い。リストを見た時点で分かっていたことだが、実際やってみるとうんざりしてくる。

現在俺たちの居場所は、医療に力を入れていくことで知られるシリール領にある、シトリール家出身の魔王さまを記念して建てられた病院の一角。そこに急遽設置された特別ルームである。

軽く昼を摂って、今は二時間ほどの休憩時間の最中。この後も患者たちの長蛇の列に会うことを考えると、さすがの俺でもここで盛るわけにはいかない。でも、なぜか疲れると逆に勃つことってあるよね。「レイヴェルは休んでいてもいいんだぞ」

体力温存して、夜の営みに備えておいてくれ。

治療するだけなら、俺一人でも問題はないのだ。フェニックスの特性はレイヴェルから受け取っているのだが、そのために近くに居てもらう必要はない。距離どころか、次元の壁を超えて俺とレイヴェルの位置関係が人間界と冥界に離れていても問題なく作用することは、朱乃を眷属にしたところから分かっていたことだ。

「いえ、そういうわけにもまいりませんわ。リアスさまお一人でなんて申し訳ありませんし……お母さまからもくれぐれも顔を見せておくようにと言われていきますので」

フェニックス家も関わっているのですよ、とアピールしてきなさいということだろうか？

まあ、治療というのは人間きはいいものだしな。逆にそのせいで面倒ごとになるパターンも俺は知っているワケだが……。強欲な悪魔、しかも付け上がったクソ平民共に、架空のファンタジーな世界の一般人間ほどの精神性を期待するのは無駄だろうな。

「ところで、例のアレ……どこでタダで治療してもらえるかもしれないなんて勘違いしたんだろうな？」

「さあ……わかりませんわ。フェニックスの涙は、これまで有料高額で問題ありませんでしたのに、どこでどう伝わったら平民に無料、あるいは格安で治療を施すなんて話になったのでしょうか」

実は昨日少し騒ぎがあった。

今回の治療は、あくまでも過去の大戦及び内戦で癒えない怪我、身体の欠損を負ってしまった軍人・兵士のために現政府から依頼を受けたものだ。

それをどこでどう勘違いしたのか、幼い子供が事故で両脚を失ってしまった。どうかそれを治療して欲しいとか叫んで回った女がいたようなのだ。

しかも、激戦を戦い抜いた兵と同じように政府からの金、もしくは俺やレイヴェルの善意で無償または格安で、とくる。

ふざけるな、アホと言ってやりたい。

「結婚して二百年かかってようやく生まれた子供なんです！ この子の両脚がなくなってしまうんです！ だから、だからどうかお願いします!!」とか子供抱えながら叫ばれてもね。

なるほど、気持ちは分からないでもない。だが、その程度で絆されて口ハ治療なんてしてやろうものなら絶対に後で揉めるに決まっている。バカか。灰になってしまえ！

その女はきちんと警備の者たちに捕らえられて連行されていたのだが、コイツがいらんことをしたせいで、今日の分の治療終了後に行う記者会見でこの話題が出るに違いないのだ。

ああ、面倒くさい。

いくら儲かると言ってもマスコミ対応とか好きじゃないんだよな。今生の生まれが生まれなので、対応しないって選択肢はないのだが。俺って口がペラペラ回る方じゃないから、大勢の人の前で話すの苦手なんだ。

ああ、クリスマスとか正月向けにいろいろ準備していたんだがなあ。今回の政府の動きがやたら早かったおかげで年末年始大忙しで、ミニスカサンタ服えっち大会とか、年末姫おさめだよ全員集合とか、新春姫はじめだよ全員集合とかの諸々がこれのせいで出来そうにないじゃないか。金は儲かるけど。

せっかく、メイドたち用の衣装まで用意させたのに、ただのプレゼントになっちゃった。

当たり前だが悪魔はクリスマスを祝ったりはしない。ただし、聖なる夜を性なる夜に変えて穢してやるという名目で、やりまくりパーティーとかはするらしい。ライザー義兄上が言っていた。

くっそー、義兄上は今頃眷属たちとずっぽりずっぽりやりまくって

るんだろなあ。羨ましい。

俗にサキュバスだのインキュバスだのと呼ばれる淫魔連中も、日本のクリスマスは書き入れ時なのだと聞く。お相手がいなくて寂しく過ごす人間を相手に商売、商売ってことだ。

はあ、前世の俺が悪魔との契約なんてものの存在を知ってたら、まず呼び出しちゃってただろうな。

一人暮らして、ケーキ買って来て食べて、同じく独り寂しく過ごしているネットゲ仲間連中とダべっていたものよ……。彼女がどうとか言ってログインしてなかったヤツらの半数以上は実際には彼女なんていなかったに違いない。だってお前ら、休日いっつもインしてたじゃないか。

あー、前世でサキュバスのおねーさんに搾り取られたかった……。まあ、それがなかったおかげで、現在、純血悪魔の婚約者とイチチャイチャ出来ているのかもいれないが。うん、魂まで持っていかれてそうだな、前世の俺がそんなことしていたら。

そうなっていたら、今のこの俺はいないわけだ。ナイス、前世の俺。悪魔との取引なんてものを知りたくなくて、正解だったぜ。

「んっう……。あの……。リアスさま……。後半のお仕事もありますし……。その……」

気が付いたらレイヴェルの胸を揉んでいた。まったく、俺の手はワガママだな。

しかし、このドレスと下着越しの感触がなんとも言えず良い。生の感触も良いが、着衣の上からというのも実に良いものだ。むしろ、着ている方がエロい気がするまでである。

裸で向き合っているときは、もうヤルのが前提の状況。しかし、着衣ということは、本来そういった場面ではないことが多いわけで、そこでイタしてしまうというのが、なんともエロいのだ。

学校の教室で制服で……。とか。病院の患者さんにナースが……。とか。葬式後に喪服の未亡人や、娘さんと……。とか。コスチュームプレイの大半には、そういうところから来る興奮があるのではなからうか。

「まあ、さすがにマズイか……」

「はあ……、はあ……、もう！ 場をわきまえてくださいまし」

プリプリと怒って見せるレイヴェルの顔に浮かぶ、若干の期待を俺は見逃さなかった。

実に、実にそそられる。結婚式直前に、ウエディングドレスの新婦に興奮して襲い掛かってしまう新郎のような気分。

だが、ここはぐっと我慢だ。

「レイヴェルのおっぱいが育ってきたのが悪い」

とんだ言いがかりである。が、まあよくやっているやり取りなのでじゃれ合いの範疇だ。

レイヴェルとの初めてから半年以上が経過した。その間に俺の身長も伸びたが、レイヴェルも成長している。あの頃はこうフニって感じだったのが、今はフォンとなる感じだ。

揉んだら大きくなるとの噂は、迷信ではなかったのかもしれない。単に成長期ってだけの可能性も高いが。女の子の方が成長時期が早いつて聞くしな。

レイヴェルと俺には二歳の年齢差があるので、丁度同じ感じで身体がいろいろと成長しているのかもしれない。

「リアスキさまは、やはり大きい方がお好みなのですか？」

このやり取り、何回目だろうか。
「レイヴェルが一番好きだぞ」

これは別に嘘ではない。ただまあ、レイヴェル以外の眷属が成長著しい朱乃に、三桁直前の黒歌、来年には眷属予定のリユイも大きいから……。レイヴェルの中では俺が大きいことは良いことだ主義者であるという疑惑が消えないようなのだ。俺はつるぺったんもそれはそれで好きな男だというのに、まったく失礼な話である。

「うそ……、だって、グレイフィアさまはあんなに大きいのですもの」
そうですね。義姉上は、物凄く大きいですね。たぶん、俺がよく顔を合わせる女性の中では最大級だろう。余裕で100を超えている。

いじけた様子でそっぽを向いて見せるレイヴェルの腰に腕を回した。婚約者さまのこれは構ってサインなのだ。

「義姉上のことは、その、サイズは関係ないから……な」

胸の大ききさつて、そこまで気にすることでもないと思うのだが。やっぱり気になってしまうものなのだろうか。

ただ、俺も肉棒のサイズは気になってしまう。見せ合う趣味がないので分らないが、俺のモノは果たしてデオドラやライザー―義姉上のモノより大きいのだろうか……。ま、俺には『倍加』があるがな！

「本当のことをおしやつてくださいますし。正直なところ……どれぐらいがお好きなのですか？」

「だから、レイヴェルが一番好きだと……。まだ成長期なんだから、そんなこと気にしなくてもいいじゃないか。それに俺は顔派で、特に目が好きだ。いつも言ってるだろう？」

目、瞳、眼。いいよね。人型生物の身体部位の中で一番綺麗なところだと思う。明らかに他の部位と造りが違う。

人間が外界から得る情報の大半は視覚によるものだ。そこは悪魔もそう変わらない。そう考えると、自分や他人の認識している世界のほとんどは眼によるものだって考えてもいいのではないだろうか。

「ほら、こっちを向け」

レイヴェルの顎を掴んでこちらに向かせ、じつと見つめ合う。こうしていると、なんとも言えない心地よい気分になる。これ、俺だけなのか。実はレイヴェルはそうでもなかったりするのだろうか。

まあ、いいか。見つめていると、瞳をとろんとさせる堕天使ハーフもいる。「なあに？」と首を傾げる義姉もいれば、恥ずかしがってすぐに逸らしてしまう妹っぽい子もいる。あと特に反応なくひたすら見つめ合い続けることになる相手もいるな。見つめていると照れたように顔を伏せ、その後ちらちらと見上げて来て、視線を合わせては外し、合わせては外しするあざとい黒猫が最近のお気に入りだ。

と、反応は相手によってさまざまだが、それが良い。

レイヴェルは……しばらくこうしていると、すっと目を閉じることが多い。

マズイとは分かっているのだが……。

「んっあ……、リアスさまあ♡ だめ、ですわ……」

唇を離すと、婚約者が甘い声で「だめ」とか言つて誘つてくる。まったくこんなおとを言われたら、俺はもう我慢できなくなるだろうが。

椅子を二つ並べて座っていた体勢からレイヴェルを促して立たせ、俺は彼女がよく着ているドレスの長いスカートに目を向けた。

「スカートを捲り上げて中を見せろ」

「で、ですが……」

「いいから早くしろ」

低めの命令口調で決定を伝える。なに、会社員時代の短い休憩時間ではないのだ、行けるイケる。

この半年、集中的に撫でまわして来た彼女のお腹をさすってやると、レイヴェルは真つ赤な顔でこくりと頷いた。

「あう……わかりましたわ」

羞恥と焦りと不安、そしてそれ以上の興奮に染まった表情で、レイヴェルはじわりじわりとスカートをたくし上げていく。

この部屋の中は二人きりだが、すぐ外には警備の者と小間使いのメイドが居る。さすがに声が漏れては困るので、俺はレイヴェルの脚を見ながら室内の音は漏れず、室外の音は拾えるように結界を展開した。

白いストッキングが徐々に見える。脛の骨の形が浮き上がった細かい脚、何度もなぞったふくらはぎの曲線が膝へと向かって伸びて行く。

丸い膝を過ぎ、太ももの中ほどでストッキングを吊るガータベルトの端が見えてきたところで、レイヴェルが手を止めた。

「あ、あの……やっぱり、帰ってからにしません？」

俺はその声を聞き流して、そつとストッキングの上の端に施されたレース飾りの部分を指先でなぞっていく。

(ああ♡)(えっちな触り方あ……♡)(ふうん……♡ もっと触ってくださいまし♡)

舐めたレイヴェルの太ももは、俺に撫でさすって欲しくて仕方がないらしい。

そのまま彼女の太ももから腰へと繋がるベルトの裏側に指を潜り込ませ、ラインに沿って上昇させていく。正面をくすぐりながら腰まで這い上がり、帰りは後ろのベルトをツーツとなぞって下る。

それを何度か繰り返し返してから、レイヴェルを見上げると、彼女は眼を閉じて形のいいあごを上向かせ、ぐつとスカートを一番上まで捲り上げた。

「帰ってからにするか？」

そう言っていると、彼女はピクリと肩を震わせ、そつと腰を前後に振って見せる。

「ちゃんと口で言うんだ。言わないとやめてしまうぞ」

「続けてくださいまし。……今、したいですわ」

よしよし、欲望に正直なレイヴェルにはご褒美を上げないとな。

しかし、このガーターベルトって代物はどうしてこう情欲をそそるのだろう。実にけしからん。眺めているだけで、愉しくなってくる。

レイヴェルは俺が脱がせやすいようにか知らないが、ガーターベルトの上にパンツを履いているので、両手を使ってパンツの両端を引っ張ってずり下げていく。

「あぁっ……♡」

この女の秘所を露わにする瞬間というのはたまらないものがある。相手がその気になって濡れていれば、こちらもグフフと支配欲が刺激されて興奮するというもの。逆に嫌がって怯えて抵抗されるなら、それはそれで嗜虐心が満たされて興奮するのだ。

本当は脱がす前にもいろいろと責めてトロツトロにしたいところなのだが、今回は時間的にそうもいかないものでちよつと急ぎだ。まあ、レイヴェルもこのシチュエーションに悦んでいるようなので構うまい。

椅子に座ったまま身体を前に倒し、レイヴェルの股間に顔を埋めるようにしながらスルスルと彼女のパンツを足首まで下げた。

「あ、やだ……嗅がないてくださいまし。お風呂にも入っていませんのに……」

そう言いながらレイヴェルが右足を浮かせたので、そちらの足ぐり

を通して片足分だけ外ずしてやる。女のパンツを全部取ってしまったらず、片足のくるぶし付近に引つ掛けておくのはなんだかエロいよな。様式美ってやつだ。

「レイヴェルのなら構わない。俺はお前が大好きだからな」

蒸れた汗の臭いがいいとか、一日の労働を終えた後の脇の下の臭いが好きとか、世の中にはいろいろな趣味の連中がいるものだが、俺は普通に清潔な方が好みである。

たまにエロ本なんかで女にチンカス舐めさせて悦んでいたりするのがあるが、それ舐めさせた口とキスとか出来ないだろと。お姫様が浮浪者たちに……ってシチュに興奮することは理解できるがな。

でもまあ、レイヴェルはその辺り特に問題ない。悪魔でフェニックスだから新陳代謝とかが人間とは違うので。

「愛してる」

「あ、やだ……♡ そんなところに言わないで」

彼女の上の口はこんなことを言うが、下のお口はフルフルと震えて素直に悦んでくれている。

よだれを垂らし始めているそこに俺はチュツと吸い付いた。

「んうっ……♡ あっ♡ ああっ♡ んふっ……んふっ♡」

彼女の口から喘ぎが漏れた。その鳴き声にかぶせるように、じゅずずゆつりゆじゆつじゆつずと音を立ててすすると、

「んんっ……♡ んんんっ……♡」

レイヴェルが手を離してしまったのか、まくり上げていたスカートが落ちて来て俺の頭の上を覆う。照明の灯りが遮られて目に映る光景がやや暗くなるが、なに悪魔は暗闇を見通す目を持つ。

感じてピクつくヒダの様子も、ぷっくりと膨れたクリの姿も、とめどなく滴る淫蜜もすべてよく見えている。

「んっ、んん♡ あっふあ♡ ……んんっ♡」

手で口を押さえて声を押し殺しているのか、レイヴェルの喘ぎはいつもより小さくくぐもっている。だが、それもよい。

俺に言われたことを守ろうとしているのか、口元を押さえているだろう手とは反対の彼女の手がスカートを掴みに来る。が、その手は途

中で役目を放棄して、スカート越しに俺の後頭部に添えられた。

同時にレイヴェルの腰が前に出て来て、俺の舌に割れ目を押し付けてくる。

(あ♡ もっと……♡)(はあん♡ そこ、そこ気持ちいいのお♡)(クリちゃんも、クリちゃんのことも、いじつてえ♡)

片手で寂しがりやなクリちゃんを構ってあげながら、もう一方の手で尻から太腿をなでさする。舌を膣内に侵入させながら、ソフトタッチで内腿の感触を楽しんでいると――。

「ふうう〜ん♡♡」

ゾクゾクゾクツツと音が聞こえてきそうなほどに、レイヴェルが肢体を痙攣させた。どうやら軽くイッたようだ。

俺は挿し込んだ舌を使って潤い震える膣内を存分に味わう。その刺激をレイヴェルの中は大喜びで迎えてくれる。歓迎されるってのはいいものだ。まさしく大歓迎だ。

時間が許すのなら、ここから足の指先から髪の毛まで余すことなく可愛がってやりたいところだ。だが、今はゆっくりじっくりと楽しめるベッドの上ではない。

さあ、さあ、レイヴェルの牝穴ちゃん、もう俺の肉棒が欲しいか？

(欲しいよお♡)(もっとおく、おくに来てえ♡)(ガンガン突き上げてくださいまし……♡)(浅いところばかりペロペロしてちやヤダあ♡)

(♡)(コンコンツツって赤ちゃんの部屋ノックしてえ♡)

(クリちゃんも、クリちゃんもお！、クリちゃんのこと、もっといじめてよお♡ おねがぁい♡)

自己主張の激しいレイヴェルのクリちゃんをギュツとつねってやる。まったく、誰がこんな子に育てたんだか。

それは、もちろんこの俺だ。

「いっ、んんんッ♡！」

俺の後頭部を押さえる彼女の手を取り、スカートの中から顔を出す。口元を彼女の淫蜜でびちゃびちゃにした俺を見下ろすレイヴェルは、もう一方の手の指を二本噛みしめていた。

「旦那さまあ……♡　　そ、そこは敏感なので、あまりいじめないでくださいまし」

「そうか？　だが、レイヴェルのそこはもつとイジメて欲しいと言っていたぞ」

言いながら、彼女が口を押さえていた手を取って、唾液に濡れた指に軽くキスをする。

「そ、そんなこと……ありませんわ」

「俺の妻は嘘つきだな。そんな悪い口は塞いだ方がいいな」

二回、三回と唇を触れ合わせるだけのキスをした後、俺は彼女のスカートを捲り上げた。

「あ……」

「ほら、こっちの口の方がずっと正直だ。夫に嘘を吐く悪い女は、これでも噛んでいろ」

スカートの布をレイヴェルの口に押し付けながら、ズボンの前のファスナーを下ろしてググっとモノの位置をずらした。すると窮屈そうに解放の時を待っていた肉の槍が、いよいよ出番かと勢いよく飛び出してくる。

「あっ……。はあ……♡」

濡れた瞳に情欲の火を灯し、俺の欲望の象徴に視線を集中させるレイヴェル。そんな彼女の口に俺はスカートをぐいぐいと押し込んだ。「そのまま俺の首に腕を回すんだ。——そう、しっかりしがみついているよ」

かがんで顔の高さを合わせ耳元で命じながら、彼女の尻と太腿の間辺りを両手でしっかりと抱える。レイヴェルがギョツと抱き着いてきたのを確認し、俺は彼女を持ち上げた。

「んんっ……んんっ♡」

持ち上げて、先端を割れ目に合わせると、降ろす勢いと重力に任せ肉の槍で彼女の膣を一気に貫く。

「ふうん♡　んんっ♡　んんうッ!!　♡♡」

自らの体重で串刺しにされながら、だらしなく開いてしまいそうな唇を必死に噛みしめる彼女の顔が実にそぞる。

身体と身体をピッタリとくっつけ、見つめ合いながらこれができる身長差がいいのだ。

「ああ、羽は小さなくてもいい。俺も力が付いてきたからな」

元々小さくて軽いレイヴエルだが、持ち上げるような体位の時は炎の羽を小さく出してこちらの負担を軽減しようとしてくれる。

だが、まあ、俺もこの半年である程度体力がついてきた。もう補助は必要ない。

「愛するお前の身体の重みをもっと感じたいんだ」

悪魔の女性に体重の話はさほど失礼ではない。親しい間柄ならなおさらだ。

人の欲望を糧として生きる我々は、欲望に忠実な体形になっていくものだ。純血悪魔ならばなおさらに。

「ふうっ……ん、♡」

「一番好きだ」

特にレイヴエルは、一番身近な人間の魂である俺の欲望をしょっちゅうこうやってダイレクトに受け取っている。

そんなレイヴエルが俺の好みから外れるはずがあるものか。

「んっんっ♡、んっ♡、んふっ♡、」

「レイヴエルの身体のどこだって、俺が好きでないところなんてないんだ。心も魂も言葉も全部愛している」

愛している。好きだ。大好きだ。全部愛おしい。そんな言葉をささやきながら、ぐちゅぐちゅと彼女の中をかき混ぜていく。

まったく、何度も何度もこうするたびに言い聞かせているというのに、すぐに他の女と比べて自信をなくして俺の好みになろうとするなんて……ほんとに可愛いなあ。

拗ねるし、妬くし、譲れる部分はいくらでも譲ろうとしてくるので逆に面倒だったりもする——だが、それがいい。

(ああっ♡ 旦那さまとキスしてるう♡ もっと、もっとキスしてえ♡♡)

上の口と違って正直な彼女の子宮の口は、俺のペニスの先に鈴口を何度もキスを繰り返す悦びを素直に語ってくれる。

従順に躡けたレイヴェルの膣内は、俺のモノを啜え込むとすぐに嬖をうねらせ奉仕し始め、主人にかしづく快感に震えて痙攣を繰り返す。

「だから、他と比べなくていいんだぞ」

「んんっくく♡♡♡ んううう♡♡♡！」

もう完全に癖になったのか彼女の目尻に浮かべた涙に唇を付け、チュッチュツと吸い取る。レイヴェルは唇へのキスをねだる顔をしてくるが、今はスカートを噛ませているので、代わりに左右の脛へと交互にキスを落としていく。

ぎゅーっとな彼女の中が締まって、俺の子種を欲しがってくる。

(出してえ♡♡この奥にいっぱい欲しいですう♡♡)

中にたっぷりと注がれながらイキたいとねだる彼女の声に応えるため、俺は膣の行き止まりに先端を押し付けたままグリグリと腰をグラインドさせる。

「ん♡ん♡んっ♡んっ♡んんっ♡♡」

俺の動きに合わせてレイヴェルも腰を揺すってきて、ぐちゅぐちゅといやらしい水音をさせながらお互いが絶頂に向けて昂っていく。

「愛してるぞー！」

「わたし、も、わたしも、愛してますわ！ はあっ♡ イッンンッ、ああ♡ イクっ♡ イクッ♡ いっちや…:アアアッ♡♡♡!!」

我慢できなくなったのか、ついにレイヴェルが口を開いてスカートを落としてしまった。

それを見た俺は、興奮に促されるままにすかさずその口を塞いだ。舌と舌を交尾する蛇のように絡め合いながら、俺たちは同時に至った。

「んおおおっ！ んっ、ウオオッ！」

「んふうっ♡♡♡ んんんうあうあ♡ あああ♡♡♡!!」

レイヴェルを抱える腕が勝手に動いて、彼女の身体をきつくきつく抱き寄せる。俺の首に巻き付く彼女の腕が、俺の身体に回された彼女の脚が、きつくきつく締めつけてきて、俺の唇同士が潰れそうなほどに押し付け合う。

逃げられないように、逃がさないように、びゆくつどびゆるつと幾度も繰り返される射精の一滴たりとも漏れないように、お互いの身体がこれ以上無理と言うほどに押し合ってぶつかりくっ付いていった。

2—34 ラティアの計画？

「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるのか。税金を取る者でも、同じことをしているではないか。親しき者にだけ親切にしたところで、どんな優れたことをしたことになるのか。異境の者達でさえ、同じことをしているではないか」

聖書の文言は、頭に痛みを与える。記者たちも嫌そうな顔をしている。

自分を愛してもらえない相手を愛せとか、親しくもない者に親しく振舞えとか言われてもな。俺には理解できん。

悪魔ではなかった前世でもそうだったので、この先俺が聖書の教えに従う連中の根本を理解することは不可能なだろう。まあ、悪魔の身には必要ないことだと思いたいが。

「俺は悪魔であろうとしている。そして、お前たちも悪魔だろう。そう……我々は悪魔だ。聖書に記された勢力の内、神の敵対者である悪魔だ。それで……お前たちは、いずれ貴族家の当主として税を徴収する者たちの上に立つことになる俺に何をしろと言うのだ？ まさか、見ず知らずの他人に、愛し合う関係どころかろくに言葉を交わしたとさええないものに情けをかけろと言うのか？ 天界の連中の敵である俺に、やつらの教えに倣って、親しくない者にすら親しげに振舞えと言うのか？ 情けないな、お前たちはそれでも悪魔なのか？ 何か言ってみろ。質問することを許してやる。——何もいいのか？」

反論も質問もなしか。これが、世に言う完全論破ってやつか？
ちやんと仕事したら？

悪魔のくせに、よもや聖書の教えに従う連中の真似事をしろなどとこの場で発言できる者などいまい。

ま、これ同志シスタスキースターことディオドラのお陰なんだけどな。ちよつと通信かけて、「なんか上手い言い方ない？」って聞いたたら、「じゃ、聖書のこれ使えば？」って悪魔的に利用できそうな箇所をサクツと教えてくれる。

さすが、数多の聖女・シスターを墮とし続けている男。持つべき者

は口の上手い友人だな。

「慈悲だの情けだのを恵んで欲しければ、聖書の神にでも祈っておけ。天界の門を叩いて、『悔い改めます』とでも叫んでみるといい。ヤツの持つ奇跡の力は多種多様だが、『復活』はその最たるものだ。死すら容易に覆すという奇跡の力ならば、手足の二・三本程度楽なものだろう。『敵を愛し、己を迫害する者のために祈れ』などと記されているくらいだ、本当に治してれるかもしれないぞ？ もっとも、天使どもに光の槍で祝福される方が早いだろうがな」

ふむ、ここまで言つてようやく質問が来たな。ならば、兵はどのようなか、と。

「今回の大戦及び内戦時に癒しきれない怪我を負った者の治療に関しては、既に政府から発表があつたとおりだ。魔王さま方の判断があり、俺には報酬が支払われる以上、何も言うことは無い。詳しく知りたければ政府に聞くといい。グレモリー家の兵の治療はもつと簡単な話だ。俺はグレモリー家の次期当主。あの者たちはいずれ俺の手足となって働く者たちだ。自分の手足に傷がついていた、だから治した。それだけのことだ」

決戦戦力としてはそれほどでもないが、広範囲を支配するためには兵が必要だ。監視の目は多く有つた方がいい。

悪魔に善良さなど期待は出来ないので、良い給料を払って雇っている兵の働きは治安の維持に繋がり、税収の増加にも繋がるだろう。

悪魔は寿命が長いから、損得勘定のキチンとできるヤツは軍紀をしっかりと守る。真面目にやっつていれば今後数千年以上に渡つて安定して良い暮らしが出来るというのに、一時の欲のためにそれを投げ捨てるのはもつたいたいなろうよ。本当は規律何ぞ無視したくとも、グレモリー家の定めた決まりを守れないの兵は必要ないからな。全軍合わせても俺一人よりも戦力が低いから、どうしても切れない人材なんてのもいないことだし。

まあ、人間の軍隊と違つて上がいつまでも引退しないから、出世が大変難しいところはあるか。

で、次はバアル家、と。

「バル家からは報酬を受け取っている。そもそも金額を決めたのがその時だ。——貴族基準の金額では高すぎる？ 何を言うのかと思えば、俺の母の生家との取引の際と同額で行ってやろうと言っているのだ。身内に甘いと言われ続けてきたグレモリー家の者が、親類用に設定した額だ。見ず知らずの者に対してならば、むしろ安いのだと理解しろ」

俺は自分と身内に甘く、他人には厳しくドライに生きていきたいのだ。その方が絶対楽だと思おうのでな。

おっと、エダーギ殿との試合のときの話が出て来たか。

エダーギ殿の眷属と、ライザー義兄上の眷属。どちらも普通に治せる状態だったのに、調子に乗って『不死身』特性を『譲渡』しまくったっけな。

あの場には関係者と、いくらかの家臣しかいなかったのだがな。短い期間でよく調べてくるものだ。

話の出所は、エダーギ殿の眷属辺りだろうか？ あの頃は隠すつもりもなかったし、こんな状況になるとも思っていなかったから気にしていなかったが、今になってみると大盤振る舞いしたことになってしまいか。

さて、どうするか……ふむ、こうするか。俺は言い訳ついでに、自分に都合の良さそうなことを話しに混ぜ込むタイプの男だ。

「……………たとえば話になるが、俺が道を歩いているときに怪我をして足を引きずっている猫を見かけたでしょう。そのときに俺がなんとなくの気まぐれで猫を癒すことがあるかもしれない。猫は可愛いからな。そして施しを受けた猫は感謝して俺の足にすり寄ってくるかもしれないし、驚いて逃げて行ってしまいかもしれない。このとき、その結果はどうでもいいのだ。もとより獣に感謝など求めていないからな。俺は気まぐれな俺自身の心の動きに従って行動しただけなのだから。そう、やりたいからやったとき俺の中ではこの行為とその結果の価値は釣り合っている。等価なのだ。だが、それを見ていた関係のない者が、『猫を癒すくらいなら、私も癒して欲しい』と言って来たたでしょう。そのとき、俺はおそらくそのことを不快に思うだろう。

俺は猫に施したかったのであって、そいつに何かしてやりたかったわけではないからだ。——言っている意味が分かるか？」

上手く伝わっていない感じが。たとえば話つてのは難しいな。

「では、料理に置き換えてみるか。料理を趣味にしている者は多いと聞くからな。——今の質問をして来た者。そう、そこのお前だ。お前が長い年月をかけて料理の腕を磨いてきたとしよう。そうすると、今度はその腕前を披露してみたくならないか？ まあ、なったとしておけ。お前は自分の磨き上げた料理を振舞うために、親しい者たちを集めてパーティを開いた。そこで美味しいと褒められれば気分がよいだろうな。中にはまだまだ精進が足りないと言口にする者もいるかもしれないが、そいつもお前にとって親しい者ならば、その言葉もそれほど気にはならないだろう。だが、そこに貧しく飢えた者がやって来て、『振舞う料理があるのなら分けて欲しい、三日間何も食べていないんだ』と言いだしたらどうする？ お前はきつと優しく情にあふれているのだから、そいつにも料理を分けてやるのだろう。そして、次の日にもまた飢えた者がお前のところにやって来るのだ。その次の日も、その次の日も、毎日数を増やしながら……な。博愛精神に満ち溢れたお前は、きつとその者たちに食事を与え続けていくのだろう。その状況にお前が満足できるのなら幸いだ。お前の心の中で、提供したものと受け取ったものが等価で在り続ける限りは幸せでいられるだろう」

言っていて自分でもわけが分からなくなってきたぜ。俺、肉体年齢まだ十代前半なんですけど。

それがいきなり公開生放送で記者からの質問付きとかさ。我が父上、スパルタ過ぎない？

隣の席に座って、応援してくれているレイヴェルだけが心の支えです。この状況。

「ようは俺の気分に合わせてということだ。俺の機嫌が良い時に、そうすることで俺の気分が良くなるように、俺の心の動きを察して、俺が不愉快にならないように行動し、俺が気まぐれにそうしたいと思えるようにしてみせろ」

条件が厳しいが、他人にただで何かして欲しいってことならこんなものだろう。少なくとも俺はそう。

こんなの読心能力持ちか、俺のことをよく知っている者でないともず無理だろうが。

「で、料理の話の続きだが、もしもお前が料理店を開いていたとしたらどうだ？　そこに金を持ってやって来る者が相手なら、料理を提供し、その対価として金を受け取ることに不快感はあるか？　想像してみろ」

見ず知らずの連中にただメシをたかられたら不愉快だが、決められた料金を支払う客なら話は別だ。金を払うのならば提供することに文句はない。

「さきほど俺の気分に合わせてと言ったが、実際のところそんなことはお前たちには無理だろう。だから金額を定めているのだ。これだけの金を支払えば、俺は不愉快に思わないし、お前も何をどうすればいいのか分かりやすいはずだ。金、貨幣が何で出来ているのかを思い出してみる。初等科の授業で習っているはずだ。貨幣は金属や紙で出来ているのではない。貨幣に同じ重さの同じ物質よりも高い価値があるのは、そこに『心』が籠っているからだ」

貨幣は『信用』で出来ている。人間やってたときは、これ習ったかな。習っていないような気がするが、覚えていないだけかもしれない。まあ、政情不安定とか今にも財政破綻しそうな国の貨幣価値が落ちるのだから、考えてみれば当たり前前の話だ。

「貨幣には価値がある。これを出せば同じだけの価値のものが手に入る。多くの者がそう信じているから、そこに価値が宿る。『信じる心』を売り買いに利用する、貨幣が人間たちから悪魔の発明などと呼ばれる所以だな。欲しいものがあるのなら、俺の気分を貨幣に宿る『心』で買って見せろ」

さて、もう言いたいことは言っちゃったことだし、そろそろ利益の分配の話に入るか。元々はこっちが主題だったのだ。

妙なことがあったせいで、そこに絡めて話すことになってしまった。

「と、ここまで言っておいてなんだが……俺は今日のこととて思い知らされた。俺は人付き合いが苦手な性格でな、こうやって煩わされると気が滅入って仕方がない。気が滅入ると何事もやりたくなくなる。そうになると、神器にも影響が出るだろう。なにせ、神器というものは所有者の『想い』に依って力を発揮するからだ。だから、俺は俺がこの治療行為をやりたくないと思うことがないようにするために、依頼を受ける相手を限定させてもらうことにする」

チラリと隣を見ると、レイヴェルが頷いていた。グレモリー家というか、俺だけがぼろ儲けすると妬まれて面倒そうだから、他の家にも適度に利益があるといいねって話だな。

仮にまたバアル家から依頼があったとして、治療を受ける者はバアル家の者に限ってはいない。バアル家から紹介があれば、引き受けてもいいとするわけだ。

さっきの料理屋の話なら、会員制で会員の方と一緒にないと他の者は入店できませんみたいなどころか。紹介料というか、仲介料は各家におまかせだ。俺の知ったことではない。

「まずは、『譲渡』する『不死身』の特性の源であるフェニックス家。それから、俺と個人的に交流があるバアル家、シトリー家、アスタロト家、アガレス家、それからウアップラ家——」

フェニックス家については説明する必要もないだろう。

叔父上は嫌いだ、祖父さんやマグダランは嫌いではないし、バアル家の古参兵なんかは母上のことを「姫さま」やら「お嬢さま」とか呼んでいたしな。

シトリー家とは親の代から仲が良いし、アスタロト家にはディオドラとラティアがいる。アガレス家のシーグヴァイラはロボ話仲間だ。ウアップラ家はミスラさんの家だしな。

たしか、グレモリーを除いて六家だから、これでいいはず。

「——なんだ、どうし……」と心の中で確認していたところで、レイヴェルに袖を引かれた。

「グラシヤラボラス家もですわ」小声でそう言われて、背中から汗がブワツと噴いた。

交流がある家なんて前置きをしたせいで、さっぱり関わりのないグラシヤラボラス家が抜けてしまった。

そういえば魔王派内の各魔王の四派閥に、大王派、中立派で割り振ったのだった。うっかりウアプラ家を入れてしまったが、今更取り消しも出来ないしいだら別。

「——にグラシヤラボラス家。名前を挙げた家と魔王さま方以外からは受け付けないことにさせてもらう」

何か言いたそうにしている記者連中を身振りで制し、視線を正面のカメラに向けて俺は最後の言葉に入った。

「最後に、頭の痛くなる言葉を聞かせてやる。『神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれた。また神は地位の有るものを無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれた。それは、誰一人、神の前で誇ることがないようにするためだ。』——愚かな者、弱い者、身分卑しき者を選ぶのは、聖書の神のすることだ。俺はそんな者たちに価値があるとは思わない。悪魔ならば、賢くなれ、強くなれ、上を目指せ。自己の利益を追求し、他者を見下し、自分の力を誇ってみせろ」

一息をつく。下級悪魔の親子だったか。

『命の価値は平等ではない』、人間との取引を経験している者は知っているはずだ。命と魂を差し出しても大金すら得られない者がいる一方、同じものを支払って大国の王となった者もいる。『命の価値が平等ではない』のは悪魔もまた同じだ。俺とお前の価値は生まれたときから違う。力ある者として生まれるかどうかは、運だ。運もまた実力。生まれる前の実力が足りなかった者は、泣こうが叫ぼうが持って生まれた力で生きるしかない」

前世は仏教徒の端くれだった俺は、そのラインで転生している気がするのだが。こんな悪魔になるなんて、俺はどれだけの悪業を積み上げていたのやら。前世ではそこまでの覚えはないから、前前世か、それより前に、大虐殺でもやったのだろうか。

まあいい。えーと……たしか、ミスラさんがサイラオーグに言った

という言葉がこんな感じだったか？

「下級悪魔ならば、魔力は少ないだろう。魔力がないのならば、その足りない部分を他の何かで補え。腕力でも体術でもいい。知力でもいい。財力や技術、人脈でもいい。弱さなどを盾にするな。愚かさなどを武器にするな。大衆やみんななどという、形のないあやふやな者たちに期待するな。お前の価値は、お前自身で高めるしかない。何かを望む弱者に『怠惰』は許されていない。『怠惰』は、力ある者と諦めた者の特権だ。欲するものがあるのならば、悪魔らしく自分の手で掴みとって見せろ。自分の得意なことを見つけろ、それが必要とされている場所を探せ、儲ける方法を考えろ。好きな者、愛する者のためにやってみせろ」

我ながら偉そうなことを言っているが、人外異形の世界は弱肉強食。弱い者が雛鳥のように叫んだところで、他の強者のエサにされるだけだ。

「そうして俺の目の前に金を積み上げ己を誇ってみせろ。その取引の瞬間だけは、俺とお前は対等だ」

なんとも、こっぴड़ずかしいな……これで終わり。

「——以上だ。これで会見終了とする！」

まだ予定時間は残っているが、これ以上こんなところで話していられるか。

何やら文句を言うヤツがいるが——。

「俺の気分に合わせてると言ったはずだ。俺が終わりと言ったら終わりだ。さっさと目の前から消えろ。目障りだ」

魔力をドツと放出してやったら、蜘蛛の子を散らすように去って行った。うん、これでヨシ。

傲慢で強欲で好色、怒りっぽくて気難しい。だけど、強い。俺はそんな領主になりたい。

もしくは、気に入った者の武器しか作らない頑固なドワーフの職人みたいな立ち位置。

平民との距離感は遠い方がよいのだ。近寄り過ぎるとなめられるからな。昔の王が、下々の者と直接会話せずに間に言葉を伝える者を

挟んだり、御簾を下ろして顔を隠したりなんてやってる場面をテレビで観たような覚えがあるが、あれはたぶんそういうことだろう。

民草なんぞに媚び始めたら、貴族は終わりよ。気まぐれで踏みつぶされると思われるぐらいで丁度いい。

「あれで、よろしかったのですか？」

記者共が消え、カメラも止まった会場で、何やらフリーズしていたレイヴェルがギギギと動き始めた。

「俺は話すのが苦手だと言っただろう？」

「ええ、それにしては……そのいろいろと仰っていましたか」

「普段からもやもやと考えていたことを吐き出しただけで、何を言っただのかなんてあまり覚えてもない」

「え……もしかして、緊張して……？」

「レイヴェルは俺のことをなんだと思っただんだ？ 全国中継の場で受け答えをしるとか、それだけでガチガチになるだろ」

「いえ、私はそこまですりませんでしたわ」

これが生粋の貴族……！ 俺のような前世一般人の小物精神とは何かが違う。前半の質問にスラスラと答えているなど思っただけ……。

あんな場面で何も問題なく過ごせる度胸があつたなら、前世で彼女の一人ぐらい出来てたはずだ。俺は所詮告白前に砕け散ったような男よ……。

せめて、こう読み上げる原稿とかあれば良かったのに。父上が厳しくて引き籠りになりそう。

と、通信が入った。魔方陣が広がる。これは、ソーナか。また音声オンリー、最近のソーナはいつも顔出さないな。

「なんだ、観ていたのか。いや——ああ、だから——。いいから、お前はあれだけ学校、学校言っていたんだから、学校を造れ。そう、レーティングゲームだけじゃなくて、他のものも全部含めたようなのを。

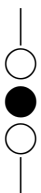
——そう、下級悪魔なんて強さを求めても厳しいに決まってるんだから、それ以外で何か長所を発掘するような感じだな。——お前が学校造るって言っていたからそれっぽいことを混ぜたんだ。いや嘘

じゃなくて、たぶん、普段からなんとなくどうしようかと考えていたから口をつけて出たんだ。——造れよ、絶対に造れよ。最初の運営費くらいは応援するから、百年以内には黒字に持って行けるような感じで頼むぞ。——無理？ いや、無理じゃないから。俺には出来ないけれど、お前なら出来る！ 俺が保証するから——」

俺、こんな会見なんてことしてないで子作りだけして過ごしていきたくなっちゃうよ。

「——ああ、聞いている。——え、それはだな。——」

まあ、次があれば今日よりはマシになるだろう。何事も経験だって言うからな。



「無茶苦茶やってるなあ……」

アスタロト本家の一室で、デイオドラは録画を再生中の画面に映る友人の姿を観ていた。

魔力をまき散らして記者たちを追い払う様子には、もう何も言えない。

「で、ラティアはあんなのがいいの？」

『……悪い？』

デイオドラが座る椅子の前にはテーブルがあり、その上に魔方陣が展開されている。

通信の相手は、ラティア・アスタロト。彼の兄が当主を務める分家の娘である。

「いや、別に悪くはないけどさ。で、何か用？」

『これ、リアスから贈られたのだけれど。どういう意味かしら？』

通信魔方阵の映像に、赤と白で構成された衣服が映る。いわゆるミニスカサンタ服だ。

「着てくれてことじゃないの？ まあ、似合うとは思うよ」

『こんなもの、どこで着るといふのよ』

「さあ、ベッドの上とか？」

『ふざけないで』

ディオドラは、そつとテーブルの下を見た。テーブルの上に展開された通信魔方阵内のラティアからは見えない位置で、赤と白で構成された三角帽子が前後に揺れ動いている。

自身のモノに奉仕する女の頭をそつと撫でながら、ディオドラは答えを探して視線を彷徨わせる。

「じゃあ、ただの冗談、ジョークのつもりじゃないのかな。アイツ、身内だと思っている相手にはそういうことをするところがあるから」

『身内ね……。そのわりには、こちらに顔を出したことがないのだけれど』

「あー、こつちにくれば会えると思ってるんじゃないの？ 実際そうしていたワケだしね」

『効果がなかったわ』

「いや、あつたと思うけど？ ただ、同じことを一年前にしていたら簡単だっただろうには思っているけどね」

ディオドラが今回のリヴラクス・グレモリーとレイヴェル・フェニックスの会見の様子を観る分には、もう婚約解消なんて事態はなさそうに思えた。

並んで座つて、婚約者で『女王』ですと紹介までしていたのだ。半ば婚約発表のようにすら見えた。後半は酷いことになっていたが……。

「これ、僕が言ったつてことは秘密にして欲しいんだけどさ。アイツ、婚約前に話したときに、『結婚相手は見た目が好みで性格がある程度良ければ誰でもいい』とか言ってたんだよね。だからさ、先にラティアから行つてたら、その場でオツケーだったと思うんだよね」

『誰でもいい？ でも、ソーナとは』

「次期当主同士だからあり得ないって考えだつたようだけど？」

『そう』

「婚約の話の相手はやっぱり気に食わないのかな？」

『ゼファードルは嫌よ』

「幼稚舎以来会つてもいないだろうに、今は落ち着いているんじゃないのかな？ あ、じゃあ、ライザー・フェニックスは？ 何度か会つたことがあるけれど、そう悪い感じではなかったよ」

『わたくしに、レイヴェルの義姉になれと言うの？』

「あー……、あー……そういうことか。なるほどね、それは複雑だ」

アスタロト家次期当主であり当事者ではないディオドラは知っている話だが、ラティアとリヴラックスの婚約が考えられた時期はかなり前になる。

幼稚舎で仲が良い様子を両家の親が見た時点で、ある程度の話は進んでいたのだ。

現ルシファアの弟であり、バアル大王家当主の甥でもあるリヴラクス。

分家ではあるが、現ベルゼブブの姪であり、アガレス大公家当主の姪でもあるラティア。

四大魔王の中でも上位になる二名の超越者に親しく、さらに大王家と大公家の血も混ざる。

悪魔勢力内部だけを考えると各派閥の領袖である家同士の結びつきが強くなってしまいが、外部、天使、堕天使、他の神話勢力を考えるとそう悪い縁談でもなかった。

悪魔勢力は大きく疲弊した三勢力による大戦の直後に、内輪もめの内戦を行ってさらに勢力を減衰させている。もしもあの時期に外部から攻められていたならば、損害は大変なものになっていただろう。同じ冥界に住まう堕天使に攻め込まれていたら、滅んでいた可能性もある。

それもあって、二人を結びつけることで、現在は内部では未だに派閥争いを続けているが外に向かつては一丸となつて戦う。その象徴的な意味を持たせることも考えられていたのだ。

だが、その話はリヴラクスが幾つかの問題を起こしたことで一旦立ち消えとなり、アスタロト家が再考をしている間にフェニックス家の長女とリヴラクスとの縁談が決まってしまった。

そこまでは、次期当主としてはともかく、デイオドラ個人にとってはそれほど関わりのない話だったのだ。

問題は、デイオドラが純血悪魔の女とは子作りをしないと宣言したことから始まった。

リベラルの風が吹き始めてはいても、貴族社会の純血主義は根強い。デイオドラが純血の子を作らないのならば、その次に次期当主に近い立場にあるラティアに純血悪魔の子を産んでもらおう。

それはアスタロト本家としては当たり前前の判断だった。

聖女やシスターを弄ぶことを生きがいとするデイオドラにも、血もあれば涙もある。ラティアに対して悪かったなと思わなくもない。

だからといって、ジャンヌ・ダルクの魂を受け継ぐ転生者を嫁にすることを止めるつもりはないし、好みに合わない女を抱くつもりもない。

「それなら……、えーっと、怒らないで質問に答えてくれるかな？」

『なに？』

「ラティアって処女？ いや、前にリアスのヤツが——」

ということ、デイオドラはラティアに協力しているのだった。

自分の迎える養子の父親が誰になりそうなのかと考え、紅髪はなんとなく嫌だから母親に似た金髪の子になるといいなと思いつながら。

2—35 聖夜に響く鞭の音（前）

母を殺されあちこちを一人彷徨っていた頃、冬はとてもつらかった。

単純に寒いということもあった。冷たい風が吹き雪が薄く積もる中、人目を避け、敵対的な関係にある者たちに見つからないように息を殺して過ごす夜の厳しさは、きつと経験した者にしか分からないだろう。

あの頃の冬の日はいつだってつらかったけれど、クリスマスや正月などはそれとは違う悲しさがあった。

仲良く歩く恋人たち、幸せそうな家族、懸命にケーキを売ろうとするお店の人。煌びやかに飾り立てられた街の中を、汚れた服を着て一人歩くのはとてもみじめで寂しかった。

私の母は代々日本の神に仕える家系の出身で、一般の人間とは違い神々の実在を知る立場にあった。そのため、家を出るまではクリスマスというイベントを経験したことがなかったらしい。

「この国の子供たちは、こうやってこの日を楽しんでるのよ」
でも、私が生まれてからは、母はそう言って日本の普通の子供たちが体験するイベントを教えてくださいようとしていた。

種族柄クリスマスは忙しいを夫を待ちながら、母は幼い頃の私と一緒に楽しんでいたのだ。山の奥で、二人だけの、ひっそりとした、でも幸せな夜。

そのときのことをどうしても思いだしてしまつて――。

ふと数年前の冬を思い出してしまった朱乃は、そつと隣を歩く紅髪の少年へと肩を寄せた。

つないだ手から伝わる温もりだけで、心からポカポカと暖かくなつてくる。でも、もつと近くに寄りたくなつてしまつたのだ。

「どうした？」

覗き込んでくる紫の双眸にどきりと胸が高鳴る。鼓動が速くなり、

朱乃は何も言えなくなっていました。

不思議そうに見つめてくる瞳から逃れるように、そつと彼の肩へと視線を移す。半年前は朱乃の方が背が高かったけれど、今は同じくらい。

彼の父や兄、従兄の背の高さを考えると、きつと三年もしないうちに朱乃が踵の高い靴を履いてもいくらか見上げることになるのだろう。

「外は久しぶりだから緊張しているのか？」

普段、朱乃はグレモリーの城から外に出ることがない。城の中で寝起きし、働き、学び、城から転移して赴くフィールドで訓練して過ごしている。

それが何故、今日に限って人間たちの暮らす街を歩いているのかといえは――。

「出かけるぞ。人間界に行くから用意しろ」

政府から依頼された傷痍兵の治療。その本日分を終え、記者会見を終了させて戻って来た主人から、不機嫌そうな声音でそう命じられたからだ。

そのときの彼の瞳には苛立ちが見て取れた。こういうとき、朱乃は主人から痛めつけられることが多い。

それは朱乃自身が望んだことでもあり、彼の中に蓄積していく怒りの衝動の発散でもあった。

「今日はクリスマスだからな。悪魔のレイヴエルや妖怪出身の黒歌にはそう意味のないことだが、日本の人間社会を知っている朱乃なら分かってくれるだろう？」

そう言いながら、主人は亜空間から乗馬鞭を取り出し、朱乃の頬をペチペチと叩いてくる。

「プレゼントもたっぷりくれてやる」

期待に瞳を潤ませながら、朱乃はメイド服を脱ぎ人間界向けの服装へと着替えていく。

冗談半分、本気半分で全裸の上にコートだけ着ようとしたら、着替

えを眺めていた主人に鞭で叩かれてしまったのはご愛敬だ。リヴラクスと朱乃は主人と下僕の関係ではあるが、周囲に他人の目がなければこのくらいのじゃれ合いはする。

——クリスマスイブの夜、人間たちの街を愛しい人と二人で歩く。まぎれもないデートであった。一年に一度だけの貴重な夜の逢引だ。正妻となるレイヴェルや、自分よりも役に立つだろう黒歌、数日前に配られたミニスカサンタ服を見ながら期待に胸を膨らませていたメイドたちには悪い気もするけれど。

朱乃はとにかく嬉しかった。舞い上がってもいる。だから、もつとくつつきたくなくなってしまうのも、仕方のないことだろう。

「あれ、やってみるか？」
耳元でそう囁く彼の視線を追いかけると、腕を組んで歩くカップルの姿があった。

恋人つなぎにしていた手をほだき、胸を押し付けるようにして彼の腕をギュツと抱え込む。すると、余裕そうにしていた彼は少し照れながら空を見上げ頬をかいた。

「クリスマスに好きな子とこういうの……ずっとやってみたかったんだよな」

念願が叶った。そう言いながら彼は顎を上げ空を見上げた姿勢から、朱乃へと振り返る。

流し目というのか、横目というのか、なんとも言えないその視線にグラリと来てしまった朱乃は彼の肩に顔を埋めおでこをこすりつける。

そんな風にながらイルミネーションに彩られた街並みを歩いてみると、二人の前に赤ら顔の男が立ちふさがった。

「チツ……クソツ、いちやいちゃしやがってよお！ 見せつけてんじゃねーぞ！ ああツ！」

コンビニの袋を片手にぶら下げたこの男、あきらかに酔っている。なにかイライラすることでもあったのだろうか。

だが、雰囲気と気分酔いしれていた朱乃にとっては、ただの邪魔

者でしかない。せつかくイイ感じだったのに台無しである。

この落とし前、どうつけてあげましょうか。

朱乃がそう考えるころには、二人の邪魔をしないように気配を殺して周囲にいた護衛の悪魔達が動き出し――。

「によ、幸せそうな二人の邪魔をしちやダメによ。寂しいなら、みんなと一緒にミルキーを観て、愛と勇気と希望を見つけるによ」

「は!?! ……え?…」

その護衛達が何かをするよりも早く、二人と酔っぱらいの間に立ちふさがった雄々しい背中が、邪魔者を連れ去って行った。

あれほど目立つ体格の男がどこから現れたのか、それは朱乃にもリヴラクスにも、護衛の悪魔達にも分からなかった。

あの魔法少女っぽい衣装の巨漢、いろいろな意味でただ者ではない。

それだけしか、分からなかった。

「何だったんだ……?…」

と、想定外のイベントも発生したが二人は気を取り直して歩みを再開することにした。

シヨーウインドウを眺めながら歩いていると、ふとある物に朱乃の目が吸い寄せられる。

「見ていくか」

歩みを止めた朱乃に気付いた彼は、彼女の視線の向かう先を見て笑みを浮かべ店の扉を開いた。

店内を見て回る朱乃の興味の向かう先は、チョーカーの類だ。

「首輪が恋しくなったのか?…」

朱乃は耳元で囁かれた意地の悪そうな声に、顔を赤らめながらコクリと頷く。

拘束用の重く頑丈な首輪を付けていた期間が長かったからか、それが外されてしまった今はどうにも首回りが寂しくて仕方がない。

それは首だけではなく、手首や足首にも共通する感覚だった。

「どれがいいんだ?…」

悩ましい。朱乃は迷った。

あれもいいし、これもいい。太い革製のものに惹かれる。でも、紐のようでキュツと締められそうなものもいい。

金属の輪が付いていて、そこに何かを繋げそうなデザインも気になってしまう。他にもいろいろと――。

「迷っているなら、全部でもいいぞ」

その言葉に、朱乃は首を横に振って答えた。

一度にたくさん買ってしまったら、次の機会が少なくなってしまうそうだから。また、来たいから。

「そうか……なら、今日はこれが合うんじゃないか？」

朱乃の答えに嬉しそうになると、彼は紐状の品を指さした。

「まあ、俺はセンスには自信がないんだけどな」と彼は言うけれど、朱乃にとっては彼の選んでくれたものが一番だ。彼の以外の誰かに見て欲しいわけではない。

「付けてやろう」

首回りにストリングスを巻かれ、締め具合や結び目の位置を調整されていると、背筋にゾワゾワとした快感が奔ってしまう。

このまま強く締められたら、どうなってしまうのだろう……なんてことさえ想像してしまっている。

「もうしばらく俺に付き合え。その後に……な」

瞳を潤ませる朱乃の内心を彼は見通していたようで、店を出たところでそう言われてしまった。

グレモリーの城の中にいたときはあまり気にならなかったけれど、こうして外で自身の趣味に言及されるとどうにも恥ずかしくて……その羞恥でゾクゾクとしてしまう。

ご主人様の「女」しかない場所でもなく、見知らぬ他人のいる場所では見せられないような顔になってしまっていないだろうか？

そう思うと朱乃は無性に顔を隠したくなった。

「なんだか今日の朱乃は新鮮だな」

両手で顔の前に持って行こうとすると、いつの間にか彼の胸に顔を埋める形になっていた。

後頭部と背中に感じる彼の手の感触が嬉しくて、朱乃も抱きしめ返す。

「朱乃……さすがにちよつと恥ずかしくなってきた」

しばらくしてそう言われ、朱乃はここが人間界の往来だったことを思い出した。

いつもと違う場所だから顔を隠したくなつたのに、ギョツとされただけでそれを忘れてしまっていた。

彼の胸から顔を離し、おそるおそる周囲を伺う。——道行く人々から、なんとも言えない視線が向けられているではないか。

カツとさらに顔が赤くなる感じを覚えた朱乃は、また彼の胸に顔を埋めた。

などといったことを繰り返しながらしばらく歩くと、彼の足が止まった。

「ここだな」

洋食店らしき店の木製ドアには、『ラクダに乗った貴婦人』のレリーフがはめ込まれている。

「うちの親戚がやっている店でな。急だったが予約が取れたんだ」

ドアを開けるとカランカランとベルが鳴らすと、二人は奥まった席へと案内された。庶民向けの、でも少しお高そうな雰囲気の内。

「お久しぶりです」

席について待っていると紅髪の老紳士が現れて、彼と挨拶を交わし始めた。

髪の色、抑えてはいるが上級クラスの魔力の気配、彼の口調。グレモリー家ゆかりの方であることは間違いない。

どう対応すれば!? ここまでの道中で頭の中が茹で上がっていた朱乃は、教えられた行動が出てこなくてあわあわと慌ててしまう。

「料理趣味が高じて、戦後からこちらで暮らしている方なんだ」

「この店では礼儀作法はそこまで気にしなくてもいい」と言う老紳士の言葉に甘えさせてもらいながら、朱乃は二人の会話を聞いた。

どうやら内戦終結後に悪魔の貴族がよくするという料理を始め、それが楽しくて仕方がなくなってしまうので人間の料理人に弟子入

りしたらしい。

その後、料理の師匠の勧めで店を持つことにして以降、グレモリーに縁の深い日本の地で『客からお金を受け取って料理を提供する取引』をして生きているのだとか。

「記者会見のときに、ふと思い浮かんでな」

悪魔の創造性は、人間のそれに遠く及ばない。服装、娯楽、社会制度、悪魔社会の様々なものは人間の模倣だ。貴族の階級ですら、平等を謳いながらも自分たちで階級を作る人間への皮肉を込めて真似をしたもの。

料理の世界でもそれは同じで、悪魔の思考からは新しい工夫がなかなか生まれてこない。だから、あの老紳士は人間の世界に紛れ込んで習って生きることにしたのだという。

少年の姿で師から学び、店を開いて周囲に合わせながら年を取って見せ、やがて死亡したことにして、また少年の姿で人の技を学ぶ。長い間それを繰り返している。

分家の出で、兄弟の数も多かったのでそんな生き方でも問題ないらしい。

老紳士が厨房に戻った後、彼はそんなことを話してくれた。

「そういう方なんだ」

悪魔^{じんせい}生樂し^{せい}そうでいいよな——と続ける彼の顔には憧れに近い表情が浮かんでいた。

「まあ、そのうちああいう風にも生きられるようになるか。先は長いことだし」

……。

「酒か……」

あまり待つことなく出された料理には、店長おススメのワインも添えられていた。

今の二人は周囲の人間からは成人の男女のように認識されているはずなので、問題はない。

「朱乃は飲んだことあったか？」

朱乃はまだ好んでアルコールを飲んだ覚えはない。小さい頃、家に

あつたものを興味本位で口にして以来だ。

「そうか、ならせつかくだから頂こうか。——ん、飲みやすいな。俺の舌も甘めの白ならいけるようになったか。酒の味なんて、実は昔からそんなに分らないんだけど」

悪魔の世界に飲酒の年齢制限はないので、合法である。

彼に釣られ、朱乃もそれを口にした。たしかに飲みやすい。思い出の中にある、口の中や喉の奥が熱くなって思わず吐き出してしまうようなキツイ感じはしない。

「それは、相当度の高いヤツだったのかもしれないな」

おっかなびっくりグラスに口をつけつつ、食事の時間は過ぎていく。

「お前、あんなにケーキ好きだったか？」

食事を終えて店を出ると、デザートに出されたケーキについてはしゃいでしまったことを言われてしまい恥ずかしくなる。

子供みたいだ。

アルコールのせいもあるのか、ポカポカと彼を叩きながら朱乃は今の自分をそう思った。

「さて、そろそろ悪い子な朱乃に紅いサタンさんの弟からのプレゼントを上げないとな」

少しばかり歩いて人気のない場所に出ると、彼は転移魔方陣を展開しながらそう言った。プレゼントと口にしながら見せるその嗜虐的な表情。

ああっ……♡。

それだけで朱乃の身体の芯に被虐の甘い痺れが奔った。

「年に一度の機会だ、やはりここを使っておくべきだろう。十字架に張り付けるのは……さすがに痛すぎて無理そうか」

転移した先は、駒王町にある人気のなくなった教会の前だった。

彼が懐から鍵を取り出し入り口の扉を開くと、星明りに照らされたホコリが舞い散って……すぐに消えてなくなった。

紅と紫の混じった魔力の波動が室内を奔りぬけて、汚れやホコリを全て消滅させたのだ。

「さて、どうするかな……普通にヤツてもいつも通りになつてしま
そうだ」

ぎいと音を立て、朱乃の背後で扉がひとりでに閉じていく。

「朱乃……」

抱き寄せられ、抱き返し、唇を合わせ、舌を絡め合う。

それから一度顔を離すと、彼は蕩けた瞳で見つめ返す朱乃にこう
言った。

「家出少女が悪い男にナンパされて、酔わされて人気がない場所に連
れ込まれてしまったことにするか。……今日こそはちゃんと嫌がる
フリをしろよ？」

嫌がる演技はこれまでも結構やってきた。

ただ、いつもすぐに「好き、好き」言つてしまつて、あまり意味が
なくなつてしまうことが多い。

今日こそは、頑張ろう。

ご主人さまなんかには負けないんだから！

2—36 聖夜に響く鞭の音（後）

カメラがある映像を映している。画面の隅に表示された時刻は、1月24日の夜間。

画面端に十字架が映り、信者たちが座るためだろう長椅子がいくつか置かれていることから、どうやらここが教会らしき場所のようであることが分かる。

ただし、どうにも手入れされているとはいえない様子。十字架は薄汚れ、いくつかの長椅子は破損したまま放置されていた。

数か月以上、あるいは数年単位だろうか、画面に映る部屋は本来の目的で使われてはいなかったようだ。

画面中央で、一人の少女が毛布に包まれ横向きに眠っている。乱れた長い黒髪が艶やかで美しい、まだどこか幼さを残した整った顔立ちの少女だ。

大人と子供。その中間の年頃にだけ許された儂い美。少女の年齢は十代の半ばほどだろうか。

そんな美少女の顔には、眠りながらも苦痛の色が滲み、目元には涙の跡が残されていた。

「起きろ」

足音と共に、画面内に少年が姿を現した。紅の髪をした少年は片手にバケツを持ち、少女を見おろしながら冷たい声を発する。

少女は、起きない。目を開くことを拒否するかのようになり、顎を床へと近づけ身体を丸めようとする。

「なら、目覚ましにこいつをくれてやる」

少年は少女から毛布を剥ぎ取るやいなや、手にしていたバケツの中身を彼女へとぶちまけた。水だ。

「ひいやあああつん!!♡」

それに驚いた少女は跳び起きようとして、しかし起き上がれず床の上でもがき始めた。

毛布に隠されていた少女の身体。その身に着けているもののせいだ。

「あつ……、ひいつ、えつう、なに？ えっ!? ああつ、いやあ……!!」

少年の姿に気付いた少女は、恐怖と悲しみに満ちた表情で彼を見上げた。冬に水をかけられたせいだけではない震えが、少女を襲っている。

「その格好は俺からのクリスマスプレゼントだ。楽しませてくれた礼もこめてな」

少女はおびえた様子で少年から逃げようとするが、その手足は一向に役に立たない。

「なに、なにこれッ!? 手も、足もっ!」

少女の首には、首輪がはめられていた。その首輪から伸びる長めのリードは、近くの長い椅子の脚に結ばれている。

少女の豊かな胸には、その膨らみをより強調するように光沢を放つ黒い帯が取り付けられていた。∞の字のような形でツンとバストを突き出させているその帯は、背中の金属リングと首輪にも結ばれズレないようにされている。

少女の腕には、異様なものを取り付けられていた。指の無い手袋とその手首を抑え固定する手枷、そして黒いゴムバンドだ。手袋をした彼女の手は、肘で折り曲げられ手首の腕輪と二の腕をゴムバンドで繋がれ締めあげられている。肘を折り曲げた状態を強制する形で固定されているのだ。

少女の脚にも、腕を似た造りのゴムバンドが取り付けられている。足首に付けられた枷の輪と太腿を結ぶその帯によって、彼女は膝を曲げたままの姿勢を強制されていた。

首輪、胸の上下に渡された黒い帯、指の動きを阻害する手袋、手枷、足枷、手足の自由を封じる黒いバンド。少女が今身に着けているものは、それだけだった。

少女のもがく動きに合わせてふるふると揺れる形の良い大きなバスト、くびれた腰から艶めかしい曲線で繋がるヒップ、そして少女の両腿の間に挟まれた大事な場所。それらを隠してくれるものは何もない。

特殊な性戯で使用されるボンテージと呼ばれる衣装と、逃走を妨害する拘束を兼ねた姿。少女はそんな格好をさせられていた。

「お前が気を失っている間につけてやったんだ。ふふ、気に入ってくれたか？」

少年はそう言いながら弱い抵抗しか出来ない少女を押しさえつけ、彼女の拘束された両脚を開いていく。

「いや、いやあーっ！ やめて、やめ、見ないでえッ♡！」

泣き叫ぶ声に耳を貸さず、少年の手は力任せに彼女の脚を横に開ききつた。

「ハハハッ、まだ垂れてるじゃないか。……寝ぼけて忘れてないよな？ ここにお前を連れて来て、服を剥いで股を開かせ、犯してやったことを！」

必死で身体を揺らし、手足をバタつかせて抵抗する少女の股座、そこにある女の大事な割れ目からは白く濁った粘性の液がこぼれていた。

彼女は犯されたのだ。そして、そのショックで意識を失っている間に、さらなる恥辱の準備をされてしまった。

「っ……、ひいう……、うう……、っ……」

少女は必死で脚を閉じようとし、不自由な手で両胸を隠そうとしながら恐怖の記憶に嗚咽をこぼす。

「家出したんだっただな。それで、その日に知り合った名前も知らない男に薬を盛られて……、ハハッ、ハハハハ、いい具合だったぞ。――

最後に行った店があっただろ。あの店のマスターとは知り合いだなあ。いろいろと融通が利くんだよ」

「ああっ……、いやああ、いやあー……」

そのときのことを思い出して泣き叫ぶ少女に押し掛かり、少年は彼女の顎を掴んで強引に唇を重ねた。首を振って望まぬ口づけから逃れようとする女の抵抗を楽しむかのように、何度もそれを繰り返す。

「嫌？ いやじゃないだろ。最後には、あんなに自分から腰を振って善がっていたクセに酷いな。なあッ！」

バチンと肉を打つ音が響いた。少年が手の甲で少女の頬を叩いた

のだ。

「ひいっ！ いた、い……やめ」

「まあ、気持ちよくなる薬を使ったんだがな」

少年は立ち上がると、どこからか取り出した乗馬鞭を手に少女の周囲を回り始めた。

捕らえた獲物をどこから擲ってやろうか。そう品定めするような目で見下された少女は、怯えた瞳で凌辱者を見上げる。

「やだ、いやあ……、助け、たすけて」

少年が手にする鞭の長さは今は60cm程。釣り竿のような構造で長さを調節可能でありながらしなやかで弾力のある特殊素材で作られているらしく、彼の手によってたわめられてもすぐに勢いよく元の真つすぐな形状に戻る。鞭の先端部はやや幅広くなっており、^{ヘッド}マークあるいは^{スベード}のような形状で、先端が尖り、丸みを帯びた返しをついた矢尻のようだ。

少年は、時折手にしたソレで床を叩き、聴覚だけでも痛みを覚えそうな音を響かせながら少女にサディスティックな声音を向ける。

「あの時にな、分かったんだよ。お前には素質があると……エムの、マゾの素質があるってな。いくら薬の効果があつたにしても、レイプされてああも乱れたんだ、間違いない」

「ちが、違うっ……私、そんなのじゃ……。そんなの、ない。だから、帰して……帰らせてよ」

膝と肘を曲げたままの形に拘束され、満足に動かせない少女はそれでもなんとか恥ずかしい場所を隠そうと努力していた。両足をピッチリと閉じ、腕を胸の前で合わせて身体を横に倒す。

しかし、それ以外の場所はどうにもならない。

怯え、震える少女の姿に嗜虐的な笑みを浮かべると、少年は鞭を彼女の尻に叩き込んだ。

「ひいーイッ♡ー！」

破裂音とほぼ同時に、少女の叫び声もまた聖堂内に響き渡った。

「帰る？ お前に帰る場所なんてあるのか？ ロクデナシの父親と同じ家に居たくなくて、家出したんだっただよな？ 家出少女の朱乃ちや

んはッ！」

「いいッ……っ♡！」

パシンツと今度は少女Ⅱ朱乃の背を乗馬鞭のシャフトに比べてやや幅広になった先端が打ち据える。

腕で胸を庇い、両脚を閉じて丸まっている朱乃の背中は無防備そのもので、少年の嗜虐を防ぐ術はなかった。

「ひい、いい、やめ、痛い……痛い！」

哀し気な顔に涙を浮かべ朱乃は必死で胸を隠そうとしているが、肘で折りたたまれ自由の効かない腕ではそのEカップにもなるバストを隠しおおせるはずもない。

むしろ、両側から挟み込まれることでその盛り上がりはより一層強調され、男の情欲を猛り狂わせるだけだった。

「いやらしい胸だ。その年齢でこれなら、この先どれだけ大きくなるんだ？ なあ！」

隠しきれしていない朱乃の胸の露わになっている部分に鞭が飛ぶ。

「あ、イーッ♡♡！」

柔らかな乳房への打擲に、朱乃は身をよじらせた。

胸を打たれまいと朱乃が苦痛に顔をゆがませながら、肘と膝とを身体の下側に抱え込んでうずくまると、今度はヒタリと尻の割れ目に鞭の先が突き刺さる。

正座したまま頭を下げた状態に近い態勢は、どうしてもヒップが無防備になってしまう。むしろ、打つて下さいとばかりに差し出しているようにさえ見える。

「そうやって胸と股を隠しても、ここはどうにもならないな」

床と身体を使って胸の豊かな双丘と、白濁を垂らす牝穴を庇う朱乃の丸い尻を鞭の先がツーツとなぞっていく。

「やめて、やめえ……いたい、いたい……。——アッ♡ヒィーいん♡！」

ぶすりと悪魔の尻尾の先のような鞭の先の尖りが、朱乃の尻穴にめりこんでくる。

キュツとしまった飴色の菊門^{*}に、スペードの先が徐々に沈み込み、

朱乃の口から苦悶の声が漏れた。

「ほら、よく見ろ。お前がそうしているつもりなら、コイツをケツの穴に挿し込んでやる。これが奥まで入り込んだらどうなるか分かるかな？」

少年は矢尻の半ばまで押し込んだ鞭を引き抜くと、朱乃の眼前にそれを突き付ける。

「ああつ、ひい、うつ……。いやあああ！」

「見ろと言った。どうなるか……。分かったな」

鞭の先から目を逸らそうとする朱乃の髪を乱暴に掴み、少年は彼女の目の前でそれを振って見せる。

矢尻の返しの部分まで埋め込まれたら、そう簡単には穴から抜けなくなってしまう。無理に引き抜けば、尻穴が裂けてしまうに違いない。

「いや、いや、イヤイヤ、やめてえ♡！」

朱乃の顔に浮かんだ恐怖の色がより一層濃くなるのを見届けてから、少年は再び鞭の先端を彼女の菊蕾に向かわせた。

アヌスを突き刺され、引き裂かれることを恐れた朱乃は、尻を激しく振って挿入させまいとする。

「ハハハ、いいぞ朱乃。そんなに尻を振って……。いい眺めだ」

美しい少女が嗚咽混じりの声を上げ、必死で尻を振りたくる様子に少年は残忍な笑みを浮かべた。

鞭に触れられるのを恐れて上下左右に逃れようとする朱乃の尻肉は、淫蕩な女が男を誘う姿にも見えてしまう。

「あつ、やあ……。ひつ、ひいひい……」

少年が朱乃の右の尻たぶに鞭をピタリと当てると、彼女は左に逃れようとする。それに合わせて左から小突けば、今度は右に逃げ出そうとする。

朱乃の尻肉を大きく映すようにズームされた画面の中で、彼女の白い大桃のような双丘が淫らに揺れ動く。

「やはり才能があるな。男を悦ばせるのが上手いぞ」

右から左から、上からも、下からも、少年はそうやって朱乃を鞭一

本を軽く動かすだけで弄んで悦に入っているのだ。

しばらくの間、少女の痴態を堪能していた少年は、やがて鞭を握った手を大きく振り上げた。

「なかなかの見世物だったが、そろそろ次に進むとしよう。そらッー」
これまでよりもひと際大きなモーシヨンで力強く振り下ろされた鞭が、朱乃の尻を打ち大きな炸裂音を響かせる。

「ヒツイイイイ♡♡！ ああつ、あ、っイ……♡♡！」
「もう一発だ」

右尻に赤い跡を刻んだ鞭が再び振り上げられ、今度は左斜め上から叩きつけられた。

「んあああ♡♡！ いた、いたひ、イイいーん♡！！」

激痛に身体を震わせ、涙を流す朱乃。彼女は痛みのみあまり、尻を揺らすことを止めてしまった。

「ハハ、そうら挿れてやろう」

その隙を見逃さず、紅髪の少年が操る鞭の先端の矢尻が再び朱乃の菊門に突き刺さる。

「いやあー、やめて……、ゆるして。ゆるしてください……ひどいこと、しないでえ」

「ダメだ、許さん。そら、そら、いいのか朱乃？ そのままうずくまっただままで……前に進めば助かるのになあ」

「あつ、ひい、ううう……うあ」

徐々に尻穴を裂いてめり込んでくる矢尻の先から逃れようと、朱乃は折り曲げられた形で拘束された両手両足を動かし始めた。

前に、前に進まなければ、刺されてしまう。

「そら、どうした。遅いぞ朱乃。そんなことでは、お前の腹の中に鞭が刺さったままになってしまうぞ」

不自由な手足を動かし、ヒイヒイと声を上げながら四つん這いで進む朱乃の後ろを、少年は残虐な笑みを浮かべてゆったりと歩いてついていく。

少しでも朱乃が速度を落とせば、アヌスを引き裂かれてしまう。

どうにか矢尻を尻穴から外そうとしているのか、朱乃は前に進みな

がら腰を捻って尻を左右に振りくる。

だが、少年は巧みに鞭の角度を変えて彼女に突き立てた矢尻を外させない。

「ひううっ……。うっ、ひうう……。たすけ、たすけてえ……。誰か、誰か、たすけてえ!!」

やがて朱乃は追い詰められた、首輪に結ばれたリードが伸び切つてしまいそれ以上進むことが出来なくなったのだ。

助けを乞う彼女の声に応える者はいない。悲痛な叫びを耳にしているのは、彼女を甚振っている少年だけだ。

「ここは町はずれにあるもう使われていない教会だ。お前がどれだけ泣きわめこうが、助けなど来るものか」

ズズズツと矢尻が押し込まれた。

「クク、もうすぐ返しが入ってしまうな。どうする朱乃？ お前が助けを乞えるのは、一人しかいないぞ」

もうすぐ、あと少しで鞭の先端が菊の窄みを越えて中に入ってしまう。そうなれば、もうそう簡単には引き抜けない。

「助けて、助けてください。壊れちゃう、私のお尻、壊さないで……。お願いします」

涙と鼻水でグシャグシャになった顔で許しを乞う朱乃。尻穴を突き刺され、身体を捻って見上げてくるその哀れな様子に満足の笑みを浮かべると——少年は愉悦を隠さない口調で彼女に告げた。

「なら、『ご主人さま、どうかあなたのマゾペットにしてください』と言ってみろ。そうしたら、考えてやらなくもない」

ニタニタを嗜虐の笑みを浮かべる少年に、朱乃の顔が絶望に染まる。

「そん、な……。そんなの……。言えま——」

「なら、仕方がないな。お前が素直に言えるようになるまで甚振り尽くしてやるでしょうか」

クククと嘲笑う声に、朱乃は「あああー……。ううう……。っ」と悲嘆の涙をボロボロと流した。

そして、そうする以外にどうしようもないことを理解し——。

「どうか、私を、朱乃を、ご主人さまのマゾペットにしてください。そしてご主人さまのお好きなだけ、存分に甚振ってください……。ひいっく、ううっううん♡♡」

マゾペット宣言を聞き届けると、少年Ⅱご主人さまは鞭の先を尻穴から抜き去り、代わりに朱乃の背を靴裏で踏みつけた。

「そうか、そうか、そんなに俺のペットになりたいのか。そこまで言われては仕方がない、マゾの牝犬として飼ってやろう。そして、甚振る代わりに存分に可愛がってやる。ほら、伏せだ。その手と足を横に開いて腹を床に付けろ」

男一人の体重——少年の背は160cm台の半ばほどあり、引き締まった体形をしている——を背中にかけられた朱乃は苦しそうに呻きながら言われたような姿勢を取った。

「ううん……♡ ご主人さまの言いつけ通りにいたしました」

「よし、よくできたな朱乃。そら、ご褒美だ！」

パアンツ！ と朱乃の尻から破裂音が響いた。ご主人さまの鞭が振るわれたのだ。

「ひいん♡！」

どこか艶の混じった悲鳴を上げながら、朱乃はご主人さまの足の下で身をくねらせる。彼女の顔には、マゾペット宣言前から僅かに見え隠れしていた被虐の悦楽の色がより濃く浮かんでいた。

「鞭で打たれて嬉しいか？ 嬉しいよなあ？ お前は俺のマゾペットの牝犬なのだから」

「はひ……マゾペットの朱乃は、ご主人さまの鞭をいただいて、嬉しいです」

「そうか、嬉しいか。なら、もっと可愛がって欲しいよな？」

「は……い、もっと可愛がってください」

それを聞いたご主人さまは朱乃の背から足を退かすと、椅子に結ばれていた首輪に繋がるリードをほどき始める。

「では、散歩でもするでしょうか。牝犬にも運動は必要だからな」

聖堂の外へと続く大扉を見ながらのご主人さまの言葉に、朱乃は身体をブルりと震わせた。

「ゆる、ゆるしてください。外は……こんな格好で外は……」

朱乃の言葉を聞いたご主人さまは、それに一瞬だけ呆けたような表情を浮かべる。が、すぐに嗜虐的で余裕のある支配者の面構えに戻った。

「ハハ、ハハハハハハッ！ 外か！ 朱乃、お前は外に行きたいのか！ 外に出れば逃げられるとでも思ったのか？ 嫌がるフリをすれば、俺がお前の思惑通りに動くと考えたのか？ ——どうやら、まだペットとしての心構えがなっていないようだな」

鞭が幾度も飛んだ。朱乃の背に、尻に、横つ腹に赤い線がいくつも走る。

「ひっイイツ♡！ ごめんなさい、ごめんなさいっ！ 外に出れば逃げられるなどと思ってしまって、申し訳ありません。どうか、どうか許してください」

「そら、さっさと歩けッ！ まずはその忌々しい十字架の下までだ。はりつけにされた男の足元でマゾ鳴きの声を上げろッ！」

パアンツと大きく尻を打たれ、朱乃は拘束されたままの四つ足で歩き始めた。

朱乃の四肢は曲げられた形で固められているので、肘と膝を使って歩むことになる。さらに、少しでもその歩みが遅いとご主人さまが見なせば、すぐに鞭打ちが飛んでくる。

自然、朱乃の四つ足歩きは身体をくねらせ尻肉を振りたくる形になった。

「はひい、はひい……ひいッう♡ ヒイィん♡」

いや、自然にそうなっているわけではないようだ。

鞭が朱乃の動きを制御していた。打ち付ける角度、位置、回数、それらによって打ち手の望む結果を引き出そうとしている。

「そら、もっといやらしく腰を振って見せろ。脚を開き尻を高く上げろ。お前の痴態で俺を楽しませることを意識しろ」

パチンツ、パチンツと軽く当てられる鞭の痛みは、強い打擲には及ばない。それでも、痛みがあることは間違いない。

それなのに、朱乃の上げる声にはマゾ牝の卑しい悦びがはつきりと

表れ始めていた。彼女の股間からじくじくと滴り落ち、床を汚している露がその証拠だ。

「もうすぐ着くぞ、朱乃。そうしたら罰をくれてやろう。マゾペットのお前は、鞭の罰も嬉しいだろう?」

「は、はい。嬉しいです。どうか、このマゾの朱乃に罰を与えてください」

彼女の心の中でどんな変化があったのか。映像だけではその内面をうかがい知ることは出来ない。

しかし——逆らえない。助けは来ない。ご主人さまに従うしかない。

それらを突き付けられ、自らペットになると口にした瞬間から朱乃の有り様は明らかに変わってしまった。

鞭で打たれる度に浮かべる陶然とした表情。逆に打擲の間隔が開いた際の瞳に宿った、懇願するような色合い。

「よし、そこでもいいぞ。仰向けになって服従の仕草をしろ。牝犬のな」

「ああつ、はい。そ、その……こ、これでよろしいですか?」

『ご主人さま』の命令に嬉々として従う様子。甘えと媚びを含んだ声音に、ご主人さまの機嫌を伺う卑屈な視線。

褒められることと、なじられることを同時に望んでいるかのよう。な、その仕草のすべてから彼女の資質が分かかってしまう。

「ああ、それでいい。だが、その手と足が邪魔だな」

言われるままに仰向けになった朱乃は、しかし両脚をピタリと閉じ、両手で胸を隠そうとしていた。

それは一見、恥ずかしい場所を必死に隠そうとしているように見える。だが、実際はそうではないことは彼女の瞳と口元が物語ってしまった。女の瞳の中に期待がある。口元に被虐の悦びが浮かんでいる。

「ひっ、ここだけは、どうか……許して。……恥ずかしいの」

朱乃の甘ったるい声は、男におもねり許しを請うているようである。

「ひいああああん♡」

——鞭を受けた際の声を聞けば、彼女の求めているものがその逆であったことは明らかだった。

「さっさと股を開け、そのいやらしい胸を曝け出せ。罰を受けろ！」

「ひぎい♡ いたっ♡ やあっ♡ ああッ♡」

腹に、腕や脚のむき出しになっている箇所次々と鞭跡が刻まれていく。

「お前がどうしようもないマゾだということはもう分かっている。無駄な抵抗はやめてさっさとそれを受け入れろ。この変態がアッ!!」

ピイツシーン!! とこれまでで最も大きな破裂音が鳴った。

「iiiiiiiiiiiッ♡♡♡!!」

強烈な痛み飛びあがるほどに身体を仰け反らせた朱乃は、その後にぐったりと脱力し、大粒の涙を流しながらも瞳をトロリとさせ、だらしく開いた口から唾液の糸を垂らす。

ヒクヒクと痙攣し呆けた表情の朱乃の顔を、ご主人さまの靴が踏み躪った。

「くく、俺が思った以上の変態だったようだな。鞭で打たれていったのか」

靴裏の感触を顔面で受け止めながら、朱乃は途切れ途切れに息を吐く。

「はひい、はひい、ううっ……」

「踏みつけにされて嬉しいか？」

「は、ひ……」

「そうか、ならこのままお前の綺麗な形の鼻をひしゃげさせてやろう」グツとご主人さまの足に力が入る。

顔にかかる圧迫感に朱乃はもがき、許しを乞った。

「やめ、やめてください。は、はひいい……いやあ、たすけ、おねが、い」

すると足が退けられ、代わりに冷たい眼差しが朱乃を見下ろす。

「なら、今度はちゃんと出来るな? さっさとしろ!」

「は、は……」

涙と鼻水と唾液とを靴の裏でぬたくられた顔を哀しそうに歪め、朱乃はゆっくりとためらいがちに、しかし止めることなく脚と腕を開いた。

「俺を誘うためにあるような身体だな」

屈辱に濡れた顔、鞭の跡があちらこちらに残る肢体、肘と膝を折りたたんだ形で拘束された両手両足。それらをご主人さまは鞭の先でくすぐるようになぞっていく。

「ああっ……ひいん♡ あっ、ひゃんっ♡」

くすぐったさに朱乃が身じろぎすると、まだ幼さの残る美貌には不釣り合いなほどに大きな二つの胸の果実が揺れ動き、ピンと尖って主張する乳首が踊る。

やがて鞭は朱乃の一番大事な場所に触れた。

「くく、どうしたんだこの有様は？ どうしてこうなっているのか自分で言ってみろ」

朱乃の秘所は犯された際に大量に注ぎ込まれた白濁と、彼女自身が分泌した愛液でいっぱいになっていった。

ご主人さまは先端のヘラ部分でそれを掬い上げると、その汁を朱乃の口周りに塗り付ける。

「あ、朱乃はマゾの変態なので、ご主人さまに鞭で叩いていただいたり、踏みつけていただく、嬉しくてオマンコをぐしよぐしよに濡らしてしまうのです」

朱乃のその言葉を聞いて、ご主人さまは不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「ふん、これから仕込んでやろうと思っていたのに、どこでそんな言葉を覚えた」

「あっ……えっ……その、あっ……しよ、小説、です。いやらしい私は、隠れてえつちな小説を読んで、自分がそうなったら……と、想像していました」

「それは男にこうされることを元々望んでいたということか。このレイプ願望のマゾメスがッ！」

容赦なく振るわれた鞭の先端は、朱乃の右胸の乳首を的確に捉え強

く弾いた。

「あひいいーイ、いつ、いいっ♡♡ 痛い、痛いの、やめてえ」
「どの口が言っている。こっちも欲しいんだろう?」

打たれた右とは逆、左の乳首を矢尻がつつく。次はここを打つと宣言され、朱乃は腰をくねらせた。

「ひい、うああ……ください。打ってください。鞭で、思いつきり、このマゾ乳首を懲らしめてください」

「まったく、これでは罰にならないな。このドM女がッ!」

「ひゃあいいん♡♡ ううっ、ひいうう♡ ハア、ハアあ……ああつ、ご主人さまあ♡ もつと、もつと……朱乃に罰をお与えください」

敏感な部分に痛撃を受けたというのに悦ぶ朱乃を、ご主人さまはつまらなそうに見下ろす。

「興が削がれるな。嫌がり悶え苦しませながら落とし込むのが面白いというのに、すぐにこのざまでは……。素質があり過ぎると言うのも考えものか」

簡単すぎるゲームを飽きたと放り出す子供のようになり、興味が失せたと態度で示すご主人さまの足元。

そこによたよたとすり寄った朱乃は哀願の眼差しで見上げながら、彼の靴に口づける。

「ああつ……そんな……、やめないで……やめないでください。お願いします、ご主人さま。朱乃をもつと甚振ってください」

不自由な手足で必死に少年に這い寄り靴へのキスを繰り返しながら懇願する朱乃。

その無様な様子に紅髪の少年はふうとため息をついた後、口角を二タリと吊り上げて見せた。

「なら、俺がお前を可愛がってやりたくなくなるように、もつと上手に踊って見せろ」

鞭が肉を打つ音、肉が肉にぶつかる音、少年の命令口調、少女の嬌声、それらがかつて神聖だったはずの場所に響き渡る。

この後も映像は延々と続いている……。

2—37 龍帝の契約（前）

会見でイライラしたので、クリスマスの夜にデートした後、朱乃を鞭でいたぶった。

女に暴力を振るってストレス発散とは、我ながら酷い奴になったものである。俺も随分とSっ気が育ってしまったものだ。

悪だな、ワル。俺は悪魔なのでまったく問題なし。朱乃も大喜びで悦んでいたので、こちらも問題なし。

最初に寒い教会内でイチヤイチャ中出し三連射して温め合い、その後朱乃の手足の自由を奪って冷水ぶっかけからの鞭責めで熱くして、後はお家に帰って風呂に入りベッドの上でぬくぬくラブラブプレイ。

俺は大変満足した。朱乃も大変満足した。

うむ、なんの問題もないな

まあ、俺にはまだお外で裸わんわんお散歩プレイとか、小便飲ますプレイとかはレベルが高すぎて遠慮させてもらったが……。

放っておくと、どんどんハイレベルになってしまいそうなのが対朱乃戦の目下の悩みどころか。寿命長いのにこのペースで過激化していったら、そのうちトンデモないことになってしまいそうで怖い。

ゆるりゆるりと進めて行かないとな。なまじ死んでさえいなければどうとでもなる治療手段が安易に使用できてしまうというのも、プレイ内容の過激化に拍車をかけそうだしな……注意しておかないと、ホント。

「うーん、しかしエロい」

朱乃の部屋のベッドの上。俺は腕を広げて寝転がりながら、隣でつやつや笑顔で眠っている朱乃の身体に視線を這わせた。

グラマラス美少女の身体のあちこちに鞭の跡が残っている様子には、なんともエロスを感じる。それが俺自身の刻みつけたもので、なおかつ相手から「治さないで欲しい」と言われたものとなるとなおさらだ。

朱乃の言うことには、俺がくれてやった痛みの残滓を長く感じてい

たい——だから、すぐには治さずにいたいのだとか。

俺が刻み付けてやったものが残っているのがイイということなら、鞭の跡でなくてもあれだ……ラクガキとかでもいいのではないだろうか。

こう、腹の辺りから牝穴に向けて矢印を『←』こう書いて、その上に『リアスさま専用牝奴隷穴』とかマジックできゅきゅつとみたいなの。ああ、でもそういう見られたら恥ずかしいってシチュで興奮するのは、ミスラさんか。あの人、人目を気にしてるときが一番乱れるし。これはこれでマゾっ気があるのではないだろうか。

他人に見られた際に、俺とお似合いに見えるだろう年齢に身体が変わってしまうのも誰かに見られることを意識してのことっぽいしな。

はあ、眠っちやってるからやれないが、また添い寝でもしに行こうかね。あれやると、ミスラさんなんてなく嬉しそうな雰囲気になるし。手を握ると、握り返してくれたりはするんだよな。

そう考えると、レイヴェルも方向性は違うが、あると言えばあるのか？ ヤキモチ焼きだからか、他人のものが欲しくなる性格だからか、俺が他の女性と仲良くした後なんか特に張り切ってくれるしな。

元々身体が早めに出来上がった経緯が、ライザー義兄上が眷属と交尾しているところを覗いていたところにあるせいなのかね。俺が他の女とやっているところを撮影したものを見せたり、多人数プレイで目の前で見せつけた後とか……うん、イイんだ、実に。

黒歌はその辺りは普通だな。普通にお互いが気持ちよくなるように動くのが一番感じるようだ。構って欲しいときには、自分から俺にちよつかいかけに来てくれるし、俺の機嫌が悪そうなきには寄ってこないし、なかなかこちらの機微を見抜いてくる。やっぱ、ナベリウス分家での眷属生活でその辺りのところを学んでいるのかね。お嬢様育ちとは違うってことだろうか。

そういえば、黒歌と朱乃は結構仲がいいんだよな。どちらも飢えに苦しんだ経験持ちだからなのかもしれん。俺は前世でもこの二人に比べたらぬるい生活だったから、頼る者もいなければ、金も、今日の

食事にも困る放浪生活経験者の心情は理解できないところがある。

「お腹が空き過ぎて、草を食べたことがありますわ」

「分かる。私もカブトムシの幼虫探して食べてたにゃん」

「貴重なタンパク源でしたね」

「カリッと焼くと悪くないのよねー」

とかやってるんだろうか。

いや、カブトムシの栄養価とか知らんけど……でも、前世で田舎の祖父は喰ってたな。意外とイケルらしい。というか、昆虫食は地域によつてはいたって普通のことだ。

そんな黒歌だが……時々ふと暗い顔をするときがある。

理由は聞いても教えてくれない。そういうときはぐつと反応が上がるので「話せるようになったら教えてくれ」と言つてそのままだ。気になると言えば気になるが、無理に聞き出すほどかと言えばそうでもない。隠し事や秘密のある女というのも悪くないものだ。

我がハーレムでこれまで一番遊んできた女は、リュイで確定だ。それだけに色々頼りになる。彼女を正式に眷属に迎え入れた暁には、ハーレムメンバーが男であり主である俺には話せない諸々にもきつと対応してくれることだろう。

レイヴェルは『女王』だが、現状では最年少だしな。同性の相談相手もいた方がいいだろう。母上相手だと言いつらいこともあるだろうし。その辺りもリュイには期待したいところだ。

先生役の『騎士』さま（予約）だ。『王の駒』とかいろいろあるが、そんなものはリュイを手に入れるためならばなんのこともない。……なによりテクニシャンだ。本気を出されると秒殺されるレベルの。これは絶対に手放せない。

本来は弱く儂い人間の少年を弄んで、大人になったら捨てる感じのオネシヨタプレイが大好きな女性貴族に『ブー・ステッド・ギア・キフト赤龍帝の贈り物』をキメて、キメセク快樂堕ちさせてしまった責任もあるが……それ以上に俺が手放したくないのだ。

俺が悪魔として成熟して、身体年齢を操作できるようになったら、子供の姿でシてみるのもいいかもしれないな。うん。

と、そろそろ一年も終わりなので今年を振り返っている内に、そろそろ起きた方がよい時間になっていた。

本当はこのまま朱乃の体温を感じながら微睡んでいたところだが、本日も仕事がある。シトリー領の病院に行つて、治療をしないとイケないのだ。

名残惜しいが、朱乃にはこのまま寝ていてもらおう。

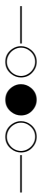
「風呂に入る」

「おはようございます、若さま」

「入浴の準備は出来ております」

部屋の外に待機していたメイド二人を伴つて浴場へ——ミニスカメイド服風水着の股布ズラして、バックからそれぞれに一発ずつ。

うむ、大変よろしい。一日遅れだが、今夜はメイドたちを集めてミニスカサンタ服パーティーにするか。準備させておこう。さて、すつきりさっぱりしたところで飯食つて出発だ。



病院へと向かう車中、隣に座るレイヴェルがピタリとくつついてくる。

ちなみに黒塗りのいかにもな外観のこの車を運転をしているのは、義姉上だ。今はメイドモードなので、グレイフィアと呼んでいる。

俺の乗る車の周辺を警護の者に乗せた車両が取り巻くVIPスタイル——というか俺って普通にお偉いさんだ。でも、ここは冥界なので襲われるなら上空からなり地中からなりの攻撃も当たり前があるので、わりと見た目だけの警護であつたりもする。様式つてヤツだな。

この車に乗っている面子で一番弱いのはレイヴェルだ。だが、『不死身』の特性を有する彼女を倒すには魔王クラスの攻撃力が必要。魔王クラスが襲撃してきたとなると、周辺の護衛達など肉の盾にすらな

らない。

完全に邪魔な平民が出て来て俺たちが不愉快な思いをせずに済むようにってだけの人員なのだなあ……コイツらは。

昨日の会見の内容について、父上や母上、義姉上からは特に咎めるような言葉は無かった。平民のために俺が無償で奉仕してやることなどあり得ないし、だからと言って有料でなければ治療しないなどと宣言して自らに縛りをかける意味もないので、まあまあ及第点だったのだろう。

ああ、でも……全国生放送で『聖書の言葉』はマズイと言われはしたな。あれだ、放送禁止用語連発みたいな感じだ。生でなければピー、ピー、ピー、ピーって何度も鳴っていたのだろう。

「何か考え事でもしていらっしやるのですか？」

右隣に座るレイヴェルの首の後ろに腕を通し、彼女の右側のクルクル縦ロールを手慰みにいじっていると、ややツリ目がちな大きな瞳がこちらを見上げてきた。

「昨日の会見のことだ」

「ああ……フェニックス家でも昔はいろいろあつたようです。お父さまからよく言い聞かされてきました」

『フェニックスの涙』の値段関係か……。たしか、義兄上も言っていたな」

「ええ、フェニックス家が台頭し始めたのは戦後、『ゲーム』で悪魔同士が戦い実力を見せ合うようになってからですわ」

不死身の特性を持つフェニックスは強い。現状のレーティングゲームでも、ルヴァル義兄上の活躍もあつて最強クラスの特性の一つとして知られている。他のフェニックス一族にも上位につけている者が多い。グレモリー家の受け継いできた特性よりも、遥かに戦闘に向いた特性だ。

もつともそれが知れ渡るようになったのは、ゲームが流行りだしてから——長寿の悪魔にしてみればごく最近のことになる。

「戦前も戦争中もあまり前戦に出ることがなかったと聞いているが」「はい、後方で『涙』の生産に従事させられていたのです。そのせいで

『強さ』を披露する機会があまりなく、軽んじられていた」

不死鳥は強い。現在よりも実戦が身近だった時代、『強さ』を示すことは今よりもずっと大きく権威の向上に繋がったことだろう。ただし、それは力を披露する戦場を与えられてこそ。

だが、前の魔王さま方はフェニックスを前線の戦力として運用するよりも、強力で即効性のある回復効果を持つ『涙』の生産要員として使うことを選んだ。

「まあ、治療は重要だ。戦時の役割としてはおかしくはないな」
「ええ、そこは理解しております。ですが、戦後にもその頃と同じような要求をしてくる方々がいらつしやったようでした」

フェニックス家の財政が潤い、経済的にも力を付け始めたのは戦後からのこと。

それ以前は、前政府からの要求に従ってほぼ無償で『涙』を差し出すような形だったらしい。

「戦場に出ない、弱い一族。そう思われていたころは、『涙』を強請られたわけか」

「そういうこともあった……と聞いておりますわ。ルヴァルお兄さまをはじめとした一族の方々の活躍、そして当主であるお父さまの様々な圧力を受けても譲らない対応、それらがあって今日のフェニックス家があるのです」

見上げてくるレイヴェルの手が俺の胸にそっと添えられた。

「なに、心配するな。悪魔は利己主義で合理主義が基本。昨日も宣言したように、自分の中で利と理を見いだせないことはするつもりはない」

武力も金も権力もある他の貴族家からの圧力を跳ね除け御家を隆盛に導いたフェニックス卿に比べたら、俺に対してどうこう言っているのは武力も金も権力もなく数だけが多い平民どもだ。

個人ごとの武力の差が少ない人間社会では上手くいかないかもしれないが、平民の万軍よりも俺一人の方が圧倒的に強いものだからどうということもない。文句は物理的に踏みつぶしてやるだけのこと。

「でしたら、よろしいのですけれど。リアスさまの前世は……」

「まあ、そうなんだがな——」

前世の俺が受けた教育は、聖書の神の教えというか教会が人間社会に広めた倫理観の影響を大きく受けている。日本への教会の影響は他国に比べると直接的には少なかったが、それでもアメリカ、ヨーロッパ諸国との付き合いの関係でかなりあちらの考え方が流れ込んでいたはずだ。

今の俺の現状だと、一夫多妻制とかそのあたりがそれらしいな。たしか、開国後明治になってからいろいろと変わっていったはずだ。大正時代が舞台の何かの漫画で読んだ覚えがあるが、明治後半だか大正初期までは日本ではお妾さん持ちが合法だったと思う。

やっぱ、聖書の神を信仰している国々からいろいろ言われて変わっていったんだろうなあ。詳しいことは知らんが、そんな気がする。

だが、今の俺は『悪魔』である。前世で植え付けられた倫理観などにいつまでも縛られてはいられない。なんとなく微妙にだがハーレムに、『悪い印象』を覚えなくもない部分が未だに残っているが、悪魔社会では、どうということもないのだから、俺はこの魂と下半身から来る欲求に従うまでよ。

というか、平民連中がかなり人間の倫理みたいなものに毒されているんだよな。いわゆる『古い悪魔』と呼ばれている方々はそうでもないのだが、上流階級でも『若い』とされる世代にはかなり浸透してきている感があるし。

やっぱ、悪魔が人間の欲望を糧として生きている関係で、人間の精神性から影響を受けているのだろうか。転生悪魔の元種族として最も多い種族が人間ってことも、原因の一つかもしれないな。

まあ、時代に合わせてある程度変わっていくことも必要なのだろうとは思う。

今じゃ貴族してるバアルの祖父さんも、若い頃は蛮族してたらしいし。数千年から一万年前の人類の精神から影響を受けていたら、そりゃそうだよなって話だ。その頃は、冥界も土器とかで生活していたのだろうか……豎穴式住居で？ うーん、石器や土器使ってゼクラム祖父さんが暮らしている場面を想像するとちよつと笑える。毛皮の

腰巻して、うっおうっおと踊ってたりしてな。

まあ、現代では教会勢力の広めたそれらもかなり崩れているのだろう。離婚がさほど非難されなくなったのがデカイのかな。

前世の知り合いに、人当たりの良いその筋の人みたいなオッサンがいたが、あの人なんて結婚と離婚を繰り返して元嫁さん五人、子供二十人とかいたし……。女性遍歴聞いた時はビビったわ。最終的に五十でJK孕ませてそのまま中退させて結婚、JKが三十歳になるまでに五人産ませたとかさあ……。

子供全員の養育費払えて、しかも別れた元妻とも会ってて、ついでにその元JKとも離婚して、全員独身で実質ハーレムとか凄まじ過ぎた……。やはり金があつて、ベッド戦に強い、肉食俺様ちよい悪男はツエーよ。

あれを聞いた時は一夫一婦で離婚厳禁な制度は、モテない男の救済策として生み出されたとか言う説に納得しそうになったものだ。人間の男女比率でモテ男に女が集まる繁殖形態だと、子供残せない男が多くなりそうなものな。戦争とかで男の数が減少しやすい時代なら問題なかったのだろうけれど、ある程度平和になると余った男からの怨嗟がすごいことになりそうだ。

悪魔と違つて人間は寿命が短いから、時期を外すと厳しいしな。

「……リアスさま？」

いかん、またヘンなことを考えていた。

「あー……あれだ、先日、駒王学園の国語の教科書に目を通したら『智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい』なんて言葉もあつた。利己と合理優先を肯定される悪魔社会の方がむしろ生きやすい」

知性合理が過ぎれば冷たく映り非難される、他人に同情してばかりで流されているは己のための行動が消える、ぶつかつても意見を曲げなければ嫌われることも増えて交流が狭くなる。

建前の多い人間社会の苦勞と比べれば、我欲を通すことに肯定的な悪魔社会の方が住みやすいくらいだ。

ただし、我を通せるだけの『強さがあれば』だが。

「俺は、誰からも好かれようなんて思っただけだ。レイヴェルのような俺が好かれたらと思っただけだ。相手からさえ好かれていればいいんだ」

「リアスさま……」

右手でレイヴェルの肩を抱き、左手を俺の胸に添えられた彼女の手ひらに重ねる。

「だが、心配してくれたことは嬉しい。これからも、こうやって俺を支えてくれ。これから先も、ずっと頼むぞ……」

「はい、お任せくださいまし。……んっ」

自然と見つめ合う形になり、顔が近づく。そうして唇が重なる寸前で、コホンとわざとらしい咳払いが聞こえた。

そちらの方向に視線をやれば、バックミラーに映る義姉上からの生暖かくもちよつと羨ましそうな視線。

まあ、義姉上は最近兄上と会えてないようだからな。うん。

でも、俺は義姉上からの圧力なんて負けない。だって、レイヴェルがキス待ち顔してるのだから。ということ、デイトプなのは控えて軽く触れ合わせておく。

……やや日和ったかもしれないが、レイヴェルはほわほわと嬉しそうだから良いとしておこう。昨日の昼みたいなのにこのまま盛り上がりつつおっぱい始めるワケにもいかないしな。さすがに。

さて、ここから病院につくまでどうしていようかな、などと考えていると丁度良いタイミングでレイヴェルに通信が入った。

通信魔方阵からによつきり現れるように映し出されたのは、ルヴァル義兄上の上半身。

ついさっきのフェニックス家が台頭していく過程の話の中で活躍していた、期待の次期当主さまである。すでに家業でも実績を上げ、レーティングゲームでも結果を示している男ってやつは、実に自信に満ち溢れていらつしやるものだ。

上の兄が優秀過ぎて、ライザー義兄上がさほど悪くないのに領内での評価が低めになってしまっているところはちよつと可哀想ではある。俺もなー、兄が魔王筆頭なんてやっているから、ライザー義兄上

の気持ちはちよつとは分かるんだ。アジュカさまの弟のデイオドラだつてきつとそう。セラフォルーさんの妹のソーナにも多分、そういうところはある。

「忙しいところすまないが、昨日の会見のあとに急ぎの連絡が入ったんだ」

挨拶を交わし、レイヴェルとルヴァル義兄上とのやり取りを眺めていると、こちらにも話が飛んできた。家族の会話だけではなかったのですね。まあ、俺もルヴァル義兄上から見ると妹と結婚する予定の男だから身内と言えれば身内ではある。

「治療の件で、ですか？」

「ああ、実はリュディガー・ローゼンクロイツ殿からの仲介の依頼があつたんだ」

「なるほど、あの『アプセツテイニング・ソーサラー番狂わせの魔術師』殿からでしたら、ルヴァル義兄上になるでしょうね」

ローゼンクロイツ殿への俺の話しぶりから何かを感じ取ったのか、ルヴァル義兄上は少し困ったような顔をした。爽やか系イケメンの困り顔スマイルである。モテるだろうなルヴァル義兄上。

「リアスは、リュディガーが苦手だったかな？」

「まあ、あまり良い印象はないですね」

レーティングゲームで現在ランキング第七位に付けているリュディガー・ローゼンクロイツは、トップランカーの中ではただ一人の転生悪魔だ。上位層で見ても転生者の『王』は少なめなので、転生悪魔の星と言える人物だろう。

ただ、貴族の中での評判はすこぶる悪い。彼に『僧侶』の駒を与えて眷属とした番外の名門マモン家前当主の後ろ盾がなければ、闇からの刺客によつて潰されていたのではないかと思う。

マモン家、ベルフェゴール家、アバドン家、あとはメフィスト・フェレス卿のような『エキストラ・デーモン番外の悪魔』は強力な悪魔だ。特に初代は魔王クラスと聞いている。

現在も、そして前四大魔王の時代も、七十二柱を主な構成員とする悪魔社会からある程度距離を取って、政治に関わらずにやっていけて

いる家でもある。

群れずとも一家だけでやっていける。そして、兄上たちは置いておくとしても、前四大魔王に臣従せず要求を全てとは言わないが跳ね除けてこれたのは、それだけの『強さ』があるからだ。

マモンは七つの大罪の内、『強欲』を司るとか言われてるんだよな。伊達に人間の中に伝わっている伝承において魔王の一角扱いされているわけではないのだ。

まあ、つまり、ローゼンクロイツは悪魔社会の上流階級からは嫌われていて、しかし後ろ盾が強いので手が出し辛い人物ということだ。

ただ、転生悪魔や平民からは結構人気がある。やはり立身出世を成し遂げたってのは大きい。でも、彼のやり方を真似した後続の転生悪魔は報復で潰されてしまうことが多い。というか、元七十二柱の御家の主を持っている転生上級悪魔なら、まずやる前に止められる。

「二応、理由を聞いてもいいかな？」

「やり口が俺の好みではないですから」

悪魔よりも悪魔らしいと評されるローゼンクロイツは、盤外戦からの精神攻撃なども用いる狡猾なタイプの男だ。単純火力、基礎能力を上げまくって押し潰せを基本にしていきたい俺とは合わない。

あとはまあ、レーティングゲームにも暗黙の了解というか、言葉にされない不文律のようなものがあるのだが、その辺りをかなり無視しているしなあ。やっても尾を引かないことと、それをやったらもうダメだってことは、悪魔社会でもあるものだ。

彼の戦い方は、狡いと言われる。対戦相手に「もう戦いたくない」「非常にやりづらい」と言わせるものだ。毒を持った小さな蛇や蠍のようなスタイルだな。

俺が目指したいのは、戦った相手に「勝てるわけがない」「負けて当然」「悔しさすら浮かんでこない」と思わせるような勝利である。俺は蟻を踏みつぶす巨人になりたい。

と、いろいろ考えたが、まあ、祖父さまの影響も大きいだろう。

「リアスは彼の戦い方が好ましくないのか」

「いや、それはそうでしょう。想像してみてくださいよ、俺はともかく

としてレイヴエルが『番狂わせの魔術師』に精神的に潰されて引き籠りになってしまった場合を」

「む……それは、うーん……」

悪魔にも親族の情はあるし、家の面子もある。それらを潰されて黙っているのは沽券にかかわるってものだ。

正直、マモン家が後ろに居なかつたらローゼンクロイツは今生きていないと思う。

ランキング一位の『皇帝』デイハウザー・ベリアルは、会見などでローゼンクロイツの『番狂わせ』を歓迎する発言をしているが、果たして親族の精神を潰されても同じことが言えるのかどうか。……まあ、皇帝がテレビなどで見せている親族想いの顔が偽りの仮面ではないのなら、無理だろうな。

「昔のように軍団を維持することが難しくなったので、『悪魔の駒』を用いて少数精鋭の眷属を揃えて戦力とする。その戦力が鈍らないようにするためにというのが、レーティングゲームの始まりと言うか、建前でしょう。それなのに全力で潰しに行っているとところがどうにも……」

精神面ではあるが、再起不能多数だからな……悪魔の戦力維持的に考えてもローゼンクロイツのやり方はよろしくない。

ルールには明記されていないが、一応故意に殺しに行ったり、再生不可能な怪我を負わせるのは御法度なのだ。それを精神面とはいっても、やられてしまつては……な。

戦力落ちてるんだよ、貴重な純血悪魔が引き籠りにされているんだ。おのれ、リュディガー！ となるのも仕方ないことだ。

まあ、何事にも事故つてのはあるものだが、ローゼンクロイツの場合は故意に、狙つて、準備万端でやっていると公言しているのでなんともならない。

「となると、彼からの依頼は受けたくないだろうか」

「いえ、受けますよ。ルヴァル義兄上からの紹介ですから」

気持ち的にはあまり会いたくない御仁だが、俺がこれを断つては仲介を引き受けたルヴァル義兄上の顔が立たん。

身内は大事にっつのは、グレモリーの家訓だ。なので、俺が懇意にしているところからの紹介があつて料金さえきちんと払ってくれるのなら、相手が好かん人物でもそこは問題ない。

「すまないな、助かるよ。社交の場で何か言われたら、こちらの名前を出してくれて構わないから」

どうしてあんな男の治療依頼を引き受けたんだ！ とか被害者のいる貴族家の方から言われちゃうのかね。

そのときには自分の名前を出してもいいだなんて、ルヴァル義兄上は男前だな。いや、紹介者つてそういうのも含めて引き受けるものだが。

「俺はあまり社交に熱心ではないので……とはこれからは言えなくなりますかね？」

「今回のことがあつたから、親交を結びたいといった話は増えてくるだろうね」

正直、かなり面倒くさい。はあ、引き籠つてパコパコし続けていたくなる。

「リアスさま、私がついておりますわ」

うん、レイヴェルが頼りだ。情けないが、彼女にこうやって甘やかされるとついついデレつとなつてしまう。顔には出していないと思うが。

俺は身内に甘く、自分にも甘く、他人には厳しい男なのだ。

「さて、それでは邪魔するのはこれぐらいしておくよ。日程などの調整についてはまた連絡したい。リュディガーがかなり焦っているようだから、政府案件が終わった後の年明けにすぐお願いすることになるかもしれないが」

「ええ、分かりました。ちょうど俺のスケジュールを管理しているグレイフィアもすぐ近くにいますので調整しておきます」

ルヴァル義兄上は、俺の呼び方から今の義姉上がメイドモードであることを察したようだ。通信では見えていなかったのだろう、運転席の義姉上には特に何も言わずに通信を終えた。貴族はいちいちメイドにまで挨拶するものではないからな。

すごく複雑な表情をしていたので、おそらくルヴァル義兄上としても大変やり難いのだと思うが、今後ともグレモリー家と関わる以上は慣れていただくしかない。

「ローゼンクロイツ殿からの依頼か……意外なところから来たな」

「いえ、そうでもないかもしれませんが。ローゼンクロイツさまは敵の多い方ですから、ゲームでご眷属が治療の困難な怪我を負わされることも多いでしょう」

ああ、そうか。目には目を歯には歯をではないが、いくらマモン家がバツクにいるとしても仕返しは当然起きるか。

同じように精神攻撃は出来ないにしても、眷属を使い捨てて捨て身でローゼンクロイツ眷属を肉体的に再起不能にすることはあり得る。『眷属を大事にする』とことあるごとに口に行っているローゼンクロイツだ、それで戦力が落ちたとしても切ることは難しい。

「なるほど。そういうえば昨日、腕が治らなかつた兵がいたがローゼンクロイツ殿がそこまでされていたらどうしたらいいのだろう」

「こちらが提供できるものは、フェニックス家の不死身の特性の『譲渡』だけです。ですので、それで無理でしたら代金を受け取った上でお帰りいただくしかありませんわね」

ある種の強力な呪いを受けた結果、もしくは契約の代償などとして差し出したものはフェニックスの特性でも回復できないらしい。

件の兵の場合は、大戦時に力を求めて腕を代価として強力な魔獣と契約していた。契約の代償として差し出した腕はすでにその魔獣のものなので、勝手にこちらで回復させることはできないってことらしい。

神話が異なるが、有名どころではオーディン神の片目なども無理だろうな。あれもまた代償として差し出したものだから。

「まあ、そうなるか。ローゼンクロイツ殿の要件が、そういったものでなければ何も問題ないわけだしな」

「ええ」

「しかし、腹に風穴が空いてもフェニックスの涙で治るのに、腕や足、眼球や耳鼻などが完全に失われている場合は無理なのはどういう理

「屈なんだか」

俺が消滅魔力でパアーンして消えてしまったゼファードルの腹は、『涙』で治った。ゲーム中に剣で切り落とされた腕も、原型が残っていれば繋ぐことは出来る。

だが、何故だか焼かれたり消し飛ばされたり、潰されたりしてしまった身体部位は『涙』でも治せない。謎である。

「それについては、失っても命を繋ぐことの出来る、死に至らない怪我の場合は、元の腕の形がほぼ残っていることなどの条件があるようです」

「ゼファードルの場合は、腹が丸々なくなっただけで放っておけば死亡する状況だったから『涙』で治せた、と？」

「ええ、消滅したのが腕や足でしたら、無理だったはずですよ」

謎である。さすが『夢幻』^{ファンタジー}だ。

ああ、でもそうか……ファンタジー、神話や伝説を起点に考えると理解できなくもない、か。

片腕の神や隻眼の神、片足を無くした英雄なんてのはそこそこいるものだ。だが、人間基準で失ったら生存不可能な部位を失った神や英雄はかなり少ない。死後の世界の神々などにはいるけれど、ハーデス神なんて皮も肉もない骸骨の姿らしいし——でも、愛の矢とかを撃たれてムラムラつときて嫁さんを攫ったんだっけか。なら、ヤルことやれる形態もあるんだろうな。

腕や足、眼や耳鼻などは失っても死なないでいることを人間が納得できる。

だが胴や頭の大怪我や消失は、ほぼ致命傷だ。少なくとも神話や伝説が生まれた頃の人類にとってはそうだったことだろう。

胴体は、治せないで死ぬでしなうと思われていたから不死鳥の涙で治せる。腕や足は、治せなくとも生きていられた者がいたので、不死鳥の涙でも治せない場合がある。

うーん、なんだか不思議だ。でも実際そうなのだから、そう考えておくことにしよう。

2—38 龍帝の契約（中）

『番狂わせの魔術師』リュディガー・ローゼンクロイツとの対面日時は、思ったよりも早くなった。

というのも、連絡のあった次の日からこちらの予定が大幅に速く処理できるようになり、時間が空いたからだ。

年末に空き時間が出来そうなことをルヴアル義兄上に伝えたところ、先方から一刻でも早くとの要望が帰って来たらしい。ということ、人間をやっていた頃ならば仕事納めとか言っていそうな日の午後から顔を合わせるようになったのだ。

「助かったよ、ラティア。最初の予定では年を越すはずだったのに、年内に余裕を持って終えられた」

「シーグヴァイラでなくて悪かったわね」

さて、結構な数の傷痍兵の治療を素早く終えられた要因は、このいつでも表情と雰囲気はクールビューティーなラティア・アスタロトにある。

グレモリーとアスタロト、それぞれの家の車が待つシトリー領の病院の車止めで、俺とレイヴェル、ラティアの三人は少しだけ立ち話中だ。

「ベルゼブブさまから『時間』の操作ができる者を送ると言われたら、シーグヴァイラが魔王眷属になったと話題になったのはついこの間のことだから、思い浮かべるのは自然じゃないか？」

「わたくしの母も、アガレス家の出身よ」

ベルゼブブさまから手伝いの人員を送ると言われたとき、最初は何事かと思った。

こちらにも予定があるし、治療を受ける側にも予定があるだろうにそれを早送りすると言われたのだから。

そうなった理由は聞かされていない。どうも墮天使どもが占拠している領域との境界付近で小競り合いが起きたようだが、その辺りの関係だろうか。

「疲れましたわ……」

アガレス大公家の魔力の特性は『時間』。それを利用して冥界標準時間速度の二十倍速で処置を進めた結果、当初の予定よりも大幅に早くお仕事が終了したことだけが確かなことだ。

レイヴェルが疲れた顔を見せているが、俺だつてそうだ。治療を受ける側は元々今か今かと治療の時を待っていたらしいので、当初の予定からの繰り上げに不満はなかったそうだが……。

治療する側からしたら、一日で二十日分働いた気分だ。気分と言うか、実際働いた。途途中で休憩を入れたが、疲労感はぬぐえない。それに、しばらく家に帰っていないはずなのに『時間』を元に戻すと一日も経っていないのだ。この感覚は、なかなか妙な気分になる。というか、二十日間分の『時間』が経過したのに……俺はその間ヤルことを満足にやれていない。

風呂も飯も睡眠も取れたが、そちらの時間はなかなかタイミングが難しかったのだ。手伝いに来てくれるラティアを放っておいて、休憩時間の間レイヴェルとベッドに籠っているわけにもいかなかったしな。

まあ、良かったこともある。これだけ長期間にわたつてラティアと過ごす機会はこれまでなかったもので、なんというかこう、アレだ……言葉にし辛い気安さが育まれたような気がしなくもない。

レイヴェルとラティアの間にも同様のものが発生してきたように思えるな。これも、傍から見ているとなくな……といったものだが。

「だらしないわよ、レイヴェル」

『時間』操作に慣れていらつしやるラティアさまと一緒にしないでくださいまし」

疲労が隠せていないレイヴェルに、ややキツめの澄まし顔でラティアが注意しているところを見るとそんな気がしてくる。

「慣れていなかったのは、わたくしも同じよ。『赤龍帝の籠手』の『譲渡』を長時間に渡って受けた経験はなかったから」

「そういえば……そうでしたわね」

レイヴェルはもう慣れたものだが、『譲渡』は受ける側にも慣れが必

要だ。慣れていないとかなり疲れる。

ドライグに聞いたところでは、俺は歴代の中でも『譲渡』先の者に与える負荷がかなり少ないらしい。まあ、『譲渡』と反転して『譲り受け』さらにそれを『譲渡』するなんていう、相互『譲渡』前提の禁手を狙って作ったこともあって、自然とそちらが磨かれていたし、今も磨かれ続けているのだろう。

なんなら、この人間界時間で一日、俺達の過ごした時間で二十日の間にも成長したはずだ。

二十日間、ほぼ禁手状態のまま過ごしていたからな。

これまでの赤龍帝は人間だったので、素の力が不足していた。そのためどうしても『倍加』の成長が優先しがちだったようだが、俺の場合は『倍加』の成長はもうじつくりとやっていくしかない状況だ。

純血悪魔として持つて生まれた力が大きかったので、歴代の中では『倍加』可能な回数が低い方なのだ。俺が『倍加』三十回とか出来るようになるには、かなりの時間が必要だろう。

『譲渡』の方は……うん、まあ、主にエロい方面で使いまくっているので持続時間やら強化できるモノの種類やらがガンガン成長しているのだが。

これまでにいた歴代の赤龍帝は、ドラゴンのオーラが呼び寄せる争乱の中で成長していき、俺はモテオーラでもあるそれが引き寄せる美女・美少女とのエロのために成長する。どこかで聞いた「争いとエロが技術を発展させる」とかいう言葉は本当だったようだ。

「さて、帰るか。今日はもう休みたい気分だ」

「ええ、それではラティアさま、お手伝いありがとうございました」
後片付けは俺たちのするような仕事でもないので、治療が終了した時点で解散だ。

俺とレイヴェルはグレモリー領へ、ラティアはアスタロト領へと帰る。

「リアス」

「なんだ？」

「少し調べただけけれど、赤龍帝と白龍皇の対峙は双方がバランスブ

レイカーに至った後に発生することが多かったそうよ」

「ああ、そうらしいな」

ラティアの言う話は、俺もドライグから聞いている。

赤と白の激突がどちらも禁手に至る前であれば、所詮は元は人間の力だ。宿命の対決と言えども規模の小さなものになる。

また、どちらか片方だけが禁手状態であれば、勝負は一方的なものになるので短時間で決着するだろう。

だが、何故かこの神器に封じられる以前から争い合う理由すら忘れてぶつかり合って来た二頭の龍の神器の所有者たちは、双方が禁手に至ったのちに対決することが多かったようだ。その上、禁手の先にあるとも言える『ジャーカーノートドライブ覇 龍』などまで使用することも多かったようで、周囲に大被害をまき散らして来たらしい。

戦いの因果を生むドライグやアルビオンも、そして二天龍を神器に封じた聖書の神も、迷惑なことこの上ないな。

「もし、貴方がまだ力が足りないと考えているのなら、わたくしに頼ってくれてもいいわよ」

「ん？」

いつもよりも若干キツイ目付きでこちらを睨むように見てくるラティアの様子に、俺は少し首を傾げそうになった。

たぶん、心配してくれているのだろう。だが、そこに何か別のものも混ざっているような感覚だ。肌を触れ合わせていけば、グレモリーの魔力によってもう少し汲み取ることができのだろうか。

「純血悪魔は齢を重ね成熟することで自然と力を増していく。白龍皇との戦いの前に、少しでも時間を積み重ねて置いた方が良いのではないかしら？」

我々悪魔は、一定の年齢に達して成熟しきるまでは年経るごとに力を増していく。主にそれは魔力量と魔力の瞬間出力の成長として現れる。

年若くまだ成熟に至っていない悪魔の場合、これまでに集められた年齢ごとの魔力量のデータや、成長のペースから判断して『成熟したら、〇〇クラス』などといった評価を受けるものだ。

俺もそれを基にして魔力成長の鍛錬に付き合っているマグダランに『将来は最上級悪魔クラスになれそうだな』などと言っていたりする。

「なるほど……そうだな、そのうち頼みたい」

三十年分くらい『時間』を加速して成長しておけば、魔力量で兄上に追いつけそうだな。今回は二十倍速だったが、『倍加』と『譲渡』を駆使して強化してやってもらえば、人間界時間の一日で一年間を過ごすことも可能になるだろう。

うーん、しかし俺の身を心配して協力を申し出てくれるとは、やはりいいヤツだな。白龍皇に負けるな、と言われてるってことだ。俺も死ぬつもりはないので、折角の申し出を拾わない手はない。

……とはいえ、現状そこまで切羽詰まっていけないので、ときどき今日のように加速して延長してもらおうような感じになるだろうか。

「なら、ときどき家にお邪魔させてもらってもいいだろうか?」

半日お邪魔させてもらえれば、それだけで半年分くらい成長できるってことだ。食料やら諸々の準備は使用人たちに任せてしまえばいい。

ついでに『倍加』で重力を上げてやれば、あれだ『ドラグ・ソポール』に出てきた修行部屋みたいになるな。

「構わないわ」

そういえば、アスタロト本家にはよく顔を出しているが、ラティアの家にはあまり行った覚えがない。

ラティアには『悪魔の駒』関連でベルゼブブさまに話を通してもらったりと世話になっているのに、会うのはいつも本家の方だった。「この頃は世話になってばかりですまない。ラティアも何かあったら言ってくれ、俺で良ければ力になる」

「ええ、そのときはお願いするわ」

と、レイヴェルに腕を引かれた。

「さ、リアスさま、帰りましょうー」

グイグイと我が家の車へと俺を引っ張るレイヴェルは、なんだか子供っぽい。その振る舞いは年齢的にはそうおかしくないのだが、普

段の貴族っぽさが薄れてしまっている。

他人が多い場所ではあまり出さない仕草が出ている辺り、レイヴェルから見たラティアとの距離感は随分と縮まったのだろう。

「はしたないわよ、レイヴェル」

「ラティアさま、そのときは私も一緒に一緒にさせていただきますので！」

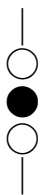
どうやら、レイヴェルも俺と一緒にラティアの時間加速の世話になるつもりらしい。

人間だったら同い年の皆が十代のなか、自分だけ四十代、五十代なんて浦島太郎状態はキツイだろう。だが、悪魔は生きるのに飽きるほど寿命が長く、成熟すれば肉体年齢を自在にできる。数十年程度の先行はどうかということもない。

「じゃあまたな」

「ええ、また会いましょう」

こうして我が後宮城^{ハイレム}へと帰った俺は、自分の主観では久しぶりに会う朱乃や黒歌を呼んで、がつつり楽しんでから休んだのであった。



シトリー領の病院内にある、VIP用談話室にて、俺は大変困っていた。

「頼む、頼みます……どうか息子を助けて欲しい。金でも利権でも、なんだって差し出す！ だから……」

「いや、金は特に必要ありませんね。半端な遊びではなかなか使えない程度には手元にありますから」

俺はかなり意外な想いを抱きながら、リユディガー・ローゼンクロイツを見下ろしていた。『ゲーム』その他の場面で観た彼の印象は知性が勝り、伶俐に働き、隙を見せない人物のように思われたのだ。

その下級悪魔から功績を積み上げ、最上級悪魔にまで登り詰めた男が、公爵家の次期当主とはいつてもまだただの上級悪魔でしかない俺の前で地に頭をこすりつけている。

「どうしても、か……」

「三日ごとに、貴方のご子息のために時間を取るなんて真似はごめんですね。それに、その情に訴えかけ、願いを聞き届けないことが悪いような感情を発生させようとする態度は好きではありませんので……『番狂わせの魔術師』殿でしたら、俺のそういった性格ぐらい把握していらつしやるでしょう?」

それでもそうせずにはいられないほど、息子を愛しているというところか。事前に抱いていた印象とかなり異なるので、ギャップを感じてしまう。

しかし、先日の平民と違って相手が最上級悪魔となると扱いに困るな。

さて、何故俺がまたもやシトリー領にある病院の一室でこんな話をリュデイガー・ローゼンクロイツとしているのかと言えば、その始まりは数時間前にさかのぼる。

ローゼンクロイツとはシトリー領のとある病院で会うことになった。傷痍兵の治療を行ったところとは別の場所だ。

用があるのなら、そちらから来い!　と思わなくもなかった。が、迂闊に動かせない状態の者がいるということだったので、わざわざ俺が足を運んだわけだ。相手が最上級悪魔だからということもある。

最上級悪魔には、有事に際してその位階に見合った活躍を求められる代わりに、貴族家などに働きかけ協力を求めることが出来るなどの権利があるのでこちらとしても配慮が必要なのだ。

上級悪魔になると得られる爵位に関しても、俺のそれよりこれまで功績を積み上げてきたローゼンクロイツの方が上。あちらは転生悪魔なので一段低く見られるが、それを含めてもなお俺より格上なので仕方がない。

まったく、権力を振りかざしやがって……と自分のことを棚に上げた気分で赴いた先で待っていたのは、ローゼンクロイツとその眷属。ここまでは別になんとということもなかった。

これまでの試合で買った恨みの返礼を細かく刻み込まれていた彼

の眷属たちに治療を施し、代金を受け取って終了だ。簡単な取引である。

問題は彼と彼の眷属以外の人物にあった。

「お話にあった、動かせないほどの重体の方はどちらでしようか？」

悪魔の『王』は、『女王』もしくは『騎士』を連れ歩くものなので、まだ『騎士』の候補しかいない俺のお供は今回も『女王』のレイヴェルである。

相手が爵位持ちの悪魔で、かつ私的な交流がまったくないとなると礼儀というか、マナー的なところも結構気にしなければならぬ。

「私の息子です」

病院の特別室にその子供は眠っていた。年の頃は、幼稚舎に通っていないそうなくらいに見える。

ただ、あまり健康そうには見えない。病院のベッドで眠っているのだから当たり前だが。

「この子にも同じ治療でよろしいのですか？ 見たところ、大きくどこかが欠損しているようには思えませんけれど」

レイヴェルが言うように、見た目に大きな怪我は見当たらない。

外傷を時間をかけて治すだけならば、魔力でも可能だ。病気についても、よほどのものでもない限りは同様。

そして、そのために必要な医療費は、俺が不死身の特性を『譲渡』する行為に付けられている値よりも低い。そうでなければ医療が崩壊してしまう。

「この子は……神器に身体を蝕まれている。生まれつき神器への抵抗力が弱く、神器に宿る神秘の力に抗うことが出来ず……日々弱っていくばかり」

神器持ちということとは、ローゼンクロイツとの間にこの子供を成した女性は人間ってことだな。神器は本来人間に宿るモノなのだから。俺のようなバクもあるし、何故か人間と他種族とのハーフにも宿っていることがあるようだが。

「ローゼンクロイツ殿のことですから、既に取れる手立ては全て試みた後なのでしょね？」

「むろん、フェニックスの涙を含め、悪魔の妙技、魔法使いの術、その他あらゆる手段を検討した。だが、どの道の研究者、医師に診てもらっても同じ答えが返ってくる——」

何らかの術か薬品の影響だろうか、眠る子供を見つめながらローゼンクロイツはその顔に悔しさを浮かべていた。

「——『ご子息の命は長くない。十歳を迎える前に……』と」

ふむ、俺も神器持ちだ。他人ごとではない、か。

『赤龍帝の籠手』を顕現し、我が身に宿る神器に封じられたドラゴンさまに訊ねてみる。こういうときは、神器生を長くしているヤツにも聞いてみるものだ。

「その辺りどうなのか、ドライグは知っているか？」

「おそらくだが、神器に早く覚醒しすぎたのだろうか」

ローゼンクロイツの目が、声を発した俺の左腕の籠手に向けられる。

「赤き龍の帝王ア・ドライグ・ゴツホか……。早く覚醒しすぎた、というのはどういうことだろうか？」

「察しは付いているのだろう、魔法使いの小僧。通常、神器は所有者がその神器の力に耐えられる状態になってから現れる。だが、その子供はなんらかの要因でそれ以前に神器が覚醒してしまったのだろう。神器の発する力に肉体が耐えられず崩壊しているのだ」

俺の場合は、あの年齢が『赤龍帝の籠手』の力に耐えられる最低ラインだったってことか。

そういえば——。

「ドライグ、それは『覇龍』を使った後の赤龍帝のようなものか？」

『ドラゴン系神器』使いの奥の手、『覇龍』。

『赤龍帝の籠手』のそれは、一時的に神器に宿るドライグの力を暴走させて強大な力を得るが、制御しきれず暴走することが多く、大概が周囲を盛大に巻き込んで自滅。よくても、寿命というか生命力の根幹をボロボロにしてしまって、余命僅かな状態になってしまうと言う……。まあ、自爆技のような代物だ。

「あれも結局は、己の分を超えた力を神器から引き出したがために肉

体が耐えきれずに死に至るもの。似ていると言えば似ているか。お前の場合はその魔力を生命力の代わりにすることも可能だろうがな」
「まあ、使うつもりもないが。禁手状態の方が強そうだしな」

眷属の特性を得られる禁手の方が、俺としては使いやすく強力に思えるのだ。

『覇龍』は封印される以前のドライグの力を引き出しているみたいな話も聞いた覚えがある。だが、俺がきっちり成長した場合、戦闘経験はともかくとして素の『力』そのものの総量だけで、かつてのドライグにそこまで劣るものではなくなりそうということだしな。

「リアスさま、ドライグさま、お二人とも話がそれていますわ」

「ああ、すまない。となると……ローゼンクロイツ殿のご子息の症状は、まだ神器の持つ力に耐えられない身体なのに、神器が出てきてしまったことが原因。だとすると、身体や魔力が成長して神器を扱えるだけのスペック……神器に抵抗する力を得られればいいわけか」

俺とドライグの話の黙って聞いていたローゼンクロイツは、「やはり……そうか」と呟いたのち、俺に頭を下げた。

『紫紅の赤龍帝』リヴラクス・グレモリー殿、息子の神器の力に対する『抵抗力』を上げることが出来ないだろうか？」

「ああ、なるほど……少し待っていただけですか？ レイヴェル、少し神器の中に潜ろうと思う。空いた部屋を借りて、結界を張ってくれ」
「承知いたしましたわ」

ということとで、病院の別室を借りた俺は、レイヴェルとドライグに外部の警戒を任せ神器の内に精神を沈めた。

かつて、歴代の怨念のような連中が蠢いていた場所。今はそれらは『消滅』し、ただドライグの魂の強大な力だけを感じる空間に俺はいた。

魔力はイメージだからな、超越者クラスの滅びの魔力をもつてすれば人間如きの残留思念や怨念などサクッと消滅よ。

「ああ、これか……」

これまでは意識せずにいたが、たしかに自分自身の本来の『力』と神器がもたらす『力』とがせめぎ合っている感覚がある。

これが神器への『抵抗力』か。このバランスがなんらかの要因で神器側に大きく傾いてしまうと、所有者の身体が崩れて行ってしまうわけか。なんとも、まあ聖書の神もろくでもないことをしてくれる。

白龍皇と戦うときに『白龍皇の光翼』側にブーストをかけてやったらそれで倒せないものかな。いや、一時的に相手を強化してやるようなものだからマズイか。よくて時間差相討ちになる可能性がある。

……一応、『譲渡』かけ逃げして相手の生命の根本にダメージを与えて、寿命を削って倒す手があることは覚えておこう。

さて、大体把握した。ローゼンクロイツの子供の中にある、これを『譲渡』で強めてやればいいわけだ。

で、ちよいと試してみたところ——ローゼンクロイツは俺が神器に潜っている間に嫁さんと話し合っていたらしい——医者診断では、『譲渡』の効果が続いている間は容体が安定し神器の力を抑え込むことが出来ているらしい。

ちなみに、あまり強くしてもやりすぎになるかもしれないので不足していた抵抗力は4倍強化にした。

リュイの性感強化みたいに500倍くらいだと長めのプレイ時間の半日程度が現在の『譲渡』持続時間だが、4倍なら三日は保つだろう。

「三日……」

「ええ、三日間です。俺が一度の『譲渡』で抵抗力の強化を持続させられるのは」

「なら、三日ごとをお願いすることは……」

「いや、それはさすがに……俺にもやりたいことがありますので、ローゼンクロイツ殿のために拘束されるわけにもいきません」

あちらとしても厳しいとは思っているのだろう、だがローゼンクロイツにとっては子供の未来がかかっている。

だが、俺としても三日ごとにローゼンクロイツの子供のために時間を取るとなると、旅行にも行けなくなってしまう。いや、これが自分の子供だったらそれぐらいなことはないのだが、赤の他人の子供のためとなると……ちよつと無理。

「息子が成長して、十分な抵抗力を身に着けるまでの期間だけでも」
「いや、俺が隠居の身とかでしたらあり得なくもないですが、まだ学習過程の途中ですのぞ」

「といったやり取りがあった結果——土下座でもなんでもする。財産も権利もなんだつて差し出す、だから息子を助けてくれ！」と最上級悪魔のリユディガー・ローゼンクロイツから頼み込まれている、上級悪魔のリヴラクス・グレモリーくんの図が出来上がってしまったのだ。

最上級悪魔からの要請があったらなら、各貴族家はその要望になるべく応えてあげよう。なんて話は確かにある。

だが、俺だつて長期間お出かけしたりしたいのだ。仮定だが、ローゼンクロイツの子供が女の子で将来有望そうだったならば……まあ、光源氏的なアレでアリだったかもしれないが、息子ではな。

俺、まだ若いから遊びたい盛りなので、いくら最上級悪魔からの頼みと言えども外出三日縛りとか……困る。いろいろ、色々もあるし。位階も爵位も実績も上なランキング七位からどう言われようとも、さらに対価も十分に払うと言われようが、俺の時間は俺のために使いたい。

もう、アレでいいんじゃないか？ 秘密っぽい話だが、リユイから引っこ抜いてもらう予定の全能力を数十倍から百倍に高めてくれる例の『駒』ぶち込めばいけるんじゃない？

『番狂わせの魔術師』リユディガー・ローゼンクロイツが頼み込めば、ベルゼブブさまも「オツケー！」て言うんじゃないかな？ 全能力が上がるってことなのだから、抵抗力だつて上がるだろ……たぶん。

「ならば、私がグレモリー家の身内になるとしたら……どうだろう？」
そう言ってくるローゼンクロイツの目は据わっている。こわ。

「それは、どういう意味でしょうか？」
「私からマモン家に願い出て、トレードに出してもらい、そちらの眷属……下僕に加えて頂けないだろうか？」

まあ、グレモリー家は『情愛深く、身内に甘い』と評判で、それが売りの貴族家だ。家訓であり、血に宿る呪いでもある。

たしかに、リュディガー・ローゼンクロイツが俺の下僕になるというのならば、まあ、面倒をみてもいいような気分にはなる。二十年ぐらいか、たぶん。

ローゼンクロイツの子供はハーフ悪魔だから、どうなるのか分からないが、魔力が育てばそれで生命力の代替えも出来るだろうし、もう少し早いかもしれない。

だが、しかし――

「申し訳ないが、俺は女しか眷属に加えるつもりはないので――」

リュディガー・ローゼンクロイツは男だ。仮に嫁さんを差し出されようとも、ハーレム眷属作ると決めたところに男は入れられん。男色もいけるとか思われたら嫌だし。無駄にイケメンだしな、この魔法使い。

と、つんつんと袖を引かれた。何かとそちらを見ると、レイヴェルが見上げてきている。

ふむ……ふむ、ふむ。彼女の瞳が語っている「お任せくださいまし」と……何か考えがあるようだ。

「――ただ、眷属の眷属でしたら……まあ、妥協しましょう」

お前なんか欲しくもなんともないんだからね！ でも、どうしてもって言うのなら、仕方がないから下僕の下僕にしてあげてもよくてよ。と心の中で似非ツンデレお嬢様風味の言葉を思い浮かべつつ、俺はローゼンクロイツの申し出にそう返した。

「それはつまり、私がレイヴェル姫の眷属になれば……息子のことをお願いできると？」

で、いいんだよなレイヴェル？

視線で問いかけると、うちの嫁さんがうんうんと頷いてくる。

ダメだ、分かん。たぶん、条件付けが必要なはずだ。あとで上手く行かなくて違約金とか賠償とかならまだいいが、恨みを募らされるとたまったものではない。

「その可能性も無きにしも非ず……と言いますか、ご子息のことで熱くなつていらっしやるのでしょうか、お互い少し時間を置いて、それから話し合いませんか？ ローゼンクロイツ殿も簡単に移籍などで

きない立場でしようし、眷属や家族の方たちと相談する必要もあるのでは？」

「……たしかにそうですね。失礼、息子が助かる可能性が目の前に現れたので、慌ててしまったようです」

「では、とりあえず二時間後に別室ということでもよろしいですか？」

「ええ、それでは、二時間後に」

ローゼンクロイツは子供の眠る部屋に向かい。俺とレイヴェルは、また別の部屋を借りた。

しかし、シトリー領の病院で好き勝手しているような。まあ、貴族ってそんなものだが。

さて、別室でレイヴェルと二人きりになった俺は……父上に通信を繋げた。

ミスラさんの件で母上から折檻を喰らったからな。他種族や下級悪魔を拾ってくるくらいなら問題ないだろうが、さすがにレーティンゲームランキング七位の最上級悪魔となると、父上に相談が必要だ。

「——ということで、リュディガー・ローゼンクロイツ殿を我が家の陣営に加えられそうなのですが、どうしましょうか？」

「リアス……お前は本当に……」

父上が困惑しておられる。まあ、俺だってどうしたものかと思っ
ているのだ。当主として諸々の表舞台に立っている父上にはそれ以上
のものがあるだろう。

「お義父さま、このような機会はそうそうあるものではありませんわ
！」

「ああ……レイヴェルくんは乗り気なのか」

「ええ、正直断ろうかとも思ったのですが、それで子供が後に亡くなっ
て恨まれても困る……と迷っていたときにレイヴェルに押されまし
て」

「お前もグレモリーの子なんだなあ……やはり」

グレモリー家の男は代々嫁さんに弱いからね。仕方ないね。

「それで、レイヴェルとしてはどうするつもりなんだ？ 先に言っ

おくが、俺は三日縛りを受けるのは嫌だぞ」

「そこは問題ありませんわ。私としては少々複雑ですが、ここはラテイアさまを頼らせていただきましょう」

「ラテイア……？ ああ、そうか、『時間』か」

なるほど、たしかに俺が気にしているのは時間の問題だ。『時間』を操作できるのならば、これはなんともなる。

「ローゼンクロイツさまの息子には、普段は時の経過を減速した結界内で過ごしていただきましょう。そうすれば、私たちが二十日過ごす間にあちらでは一日しか経過しません」

「三日の間隔が、六十日に延ばせるわけか」

二か月に一度でいいのなら、まあ、たしかに問題ないな。グレモリーの城、あるいは領内の病院の一角を結界で切り取って使うとして、さすがに二か月に一度なら顔を出せるだろう。

アガレス家の血に宿る『時間』の特性は、加速も減速も可能だ。魔力操作に長けた者なら停止もいける。今は亡き初代アガレス卿には『逃亡者を元に戻す』力があつたと聞ぐが、これはおそらく『時間』の逆転だろう。時を戻せば、逃げ去った者も手元に戻ってくる。

『月日は百代の過客にして、行かふ年もまた旅人なり』などと人は言うが、過ぎて行つた客も行ってしまった旅人も、アガレスの魔力は元に戻ってしまう。

そしてここまできれば、俺でも先は読める。

「それでは子供の成長が遅くなってしまふのではないかな？」

父上も面白がつて聞いているな。

「はい、そこはどこかで時間を作っていたら、まとめて一気に『時間』を加速した結界内で過ごすことでクリアできますわ」

ラテイアが言っていた、白龍皇に備えて素早く成熟して力を高めてしまおうって話と繋がるわけだ。

この話を父上に伝えたときは、すごく困つたような顔をされてしまったが、理由はまあ分かる。

「その間は俺とレイヴェルも時間の加速した結界内にいるわけだから、たしかに問題ないな」

ローゼンクロイツの子もそこに一緒に連れて行ってしまえば、人間の時間速度に合わせている冥界基準時間と比較して考えると、かなり早く成長させられる。学校の長期休暇のときに合宿気分で三十日も使えば、結界内では三十年経過させられるから、来年中には片が付くかもしれないな。

「あとは、成長して力を付けてなお症状が改善しなかった場合ですが……」

「それは仕方がない。事前に説明しておくしかないだろう」

さすがにハーフ悪魔の寿命が尽きるまでは面倒みきれんからな。まあ、保険としてリユイから『王の駒』を抜いていただいた際に、ベルゼブブさまに事情を説明してこちらの手元に確保しておけるようにするくらいか。

「リアスの時間についてはそれでよいとして、マモン家との交渉はどうするつもりだ？」

マモン家は『強欲』を司ると伝承される一族。その名のマモンも聖書において『富』を意味する言葉から来ていると言う。

強欲なマモン家とどう交渉するのか、そこが父上の聞きたいことだろう。正直、「父上にお願いできませんか」と言ってしまいたいところだが、それもなんだか情けない。

と言うことで、俺は未来の眷属の眷属に頼ることにする。下僕力は主のもの、下僕の下僕力もまた主のものなのだ。

「ああ、それは全てローゼンクロイツ殿に任せます。こちらからは働きかけず、彼の自由な意思のみでこちらに来ていただきましょう」

俺的には、このトレード話が成立しようがしまいが別にどちらでもいいのだ。

なぜなら、リユデイガー・ローゼンクロイツは男なので。これが美女だったなら俺ももつと前のめりに取りに行くところだが。

息子を助けたかったら自力で来ていただくじゃないか。俺は一銭も出さんぞ。

「分かった。それもいいだろう、下手に交渉に出ると筆取りられるところだ」

あちらは、聖書にも記されし強欲の化身。俺程度が下手に商談など持ち掛けたら、父上の言うようにケツの毛まで持っていかれそうだな。「それで……ですね、トレードが成立したとしてどのような立場についていただきましょう？」

「なんだ、レイヴェル。そこは考えていなかったのか？」

「いえ、それは……だって、ランキング七位の実力者を配下に加える機会でしたので……。レーティングゲームでの活躍だけではなく、上級悪魔へと昇格するまでに様々な実績もある方ですし、将来グレモリー領の統治にきつと貢献していただけるだろうと」

まあ、それは分かる。俺だって上位ランカーの美女悪魔を引き抜ける機会があったら、突っ走りそうだな。今回は、男だから「別にいらんけど？」みたいな気分なだけで。

実際、リユディガー・ローゼンクロイツの上級悪魔昇格までの功績は大したものだ。多くの転生悪魔出身の上級悪魔は、主の下でレーティングゲームに参加し、そこでの活躍を認められる形で功績を積み上げていく。だが、彼の場合は主であるマモン家前当主の下、魔法の研究やその他の金になる研究成果によって功績を積み上げた。

そうして上級悪魔になった後は……まあ、確かに強いのだが貴族家からのヒンシユクを買いまくりのあの戦い方でランキングを駆け上がっていったのだ。

レイヴェルの言うように、出来る男なのは確かではある。だが、少なくない数の上級悪魔の精神をへし折って悪魔全体の戦力を低下させた男でもある。

「そうですね。俺としては、ローゼンクロイツ殿を傘下に加えたのなら、まずはレーティングゲームから引退してもらおうかと思っております」

父上に向かってそう言うお手振りで続きを促された。

「俺はこれまで社交にあまり出ていませんが、それでも彼は多くの貴族家から恨みを買っていると聞き及んでおりますので……」

うーん、ここは俺ではどうにもならんな。情けないが父上に頼るしかなさそうだな。

「この機会にそこをこう、上手く使ってグレモリー家の評判につなげられないかと」

「ふっ、言いたいことは分かる。たしかに、まだお前では無理だろう。分かった、今回は私とヴェネラナで対処しておくから、お前たちはそれに話を合わせなさい」

「ありがとうございます」

これ、絶対あとでそっちのお勉強させられるヤツだ。俺には分かる。

ぶん殴って言うこと聞かせるのが手っ取り早いってのがドライグの教えで、俺的にはその方が手間がかからなくて良いのだがな。はあ……これからは、そももいかなるところも出てくるか。

最終的には力で叩き潰して押し通すにしても、一応、最初に話をするつもりは見せていく必要もあるだろう。

「その後ですが、まずは主な仕事として二つほど任せてみようかと、さっきの今ですので、ただの思い付きですが」

「言ってみなさい」

「まずは神器の研究ですね。特に神器を安全に魂から切り離す方法の確立。これについてはローゼンクロイツ殿の子供にも関係のあることですし、俺も神器を宿す身ですから何かしらの役に立つでしょう」「二つ目は？」

「メンタルへのケアですね」

今回のことがあったので、俺はリュディガー・ローゼンクロイツの試合と、心をへし折られて潰されたとされる上級悪魔のその後をざっと調べてみた。

すると分かったのが悪魔社会における心の健康、メンタルヘルスへの関心の薄さだ。ローゼンクロイツと戦い、徹底的に心の隙を突かれ、へし折れ「もう戦いたくない」となってしまった貴族悪魔達。

そんな彼女らのその後は……うん、結構キツイ。

破れ潰された貴族悪魔の家族、一族は、「身内を壊された、おのれリュディガー・ローゼンクロイツ！」となる。これはいい。

だが、その一方で「あの程度で潰されるとは情けない。一族の恥だ

！」とも言いだす。これは負けて凹んでいる者にとっては相当キツイだろう。

「メンタルケア……？ 心の治療をさせるのか」

「ええ、壊した本人に、それを治させようかと思ひまして」

いや、そこはもう一度なんとかして立ち直らせようぜ。と俺でも思ってしまったのだ。

俺が人間をやっていた頃は、スポーツの分野で根性論が否定され始めていた時期だった。労働者的には、過労死、ストレス、ハラスメントなどが色々と問題になりその手のカウンセリングがどうこうとかニュースでやっていたりもした。

その詳しいところについて、俺は良く知らない。だが、せつかくの貴重な純血悪魔だ。戦力になる人材を潰れたまま放置しておいては勿体ない。

悪魔と人間では、精神構造が異なってくるのでそのまま流用は難しいだろう。転生悪魔ならばともかく、純血悪魔となるとより一層異なる。生まれながらに寿命が違うというのは、途轍もない違いだ。

だが、そんな純血の悪魔達の精神をつぶさに調べ上げ、えげつなく破壊していったのがリユデイガー・ローゼンクロイツという男だ。

その知識と経験を活かし、今度は逆のことをしてもらおうって寸法だ。優秀な破壊者が優秀な再生者になれるかは分からないが、やってみて悪いってことは無いだろう。時間はあるのだから、とりあえず思いついたことをやってみたらいい。

「上手く行けばよし。また上手く行かなくとも、上手く行かないということが分かりますから」

ま、上手く行けば御の字ってヤツだ。とりあえず詳しい奴に任せてみようって話だな。

「分かった、やってみなさい」

「はい、それでは」

さあて、それでは『番狂わせの魔術師』殿に引退を迫ってくるのでしょうか。愛息子の命を人質にしてな。

結果から言うと、マモン家前当主はこのトレードに同意した。

ローゼンクロイツに全て任せただけで、どうやって説得したのか俺は知らない。案外、あちらでも持て余し気味だったのかもかもしれない。

ただ、その交渉過程でローゼンクロイツはほぼ無一文になってしまった。すつきりさっぱり糞り取られてしまったのだ。

寿命の分だけ気の長い強欲の悪魔との交渉を、息子の治療のために速攻で済ませたかったローゼンクロイツがそれで済まして来たのだ。

「薔薇十字の上級魔術師のひとりに過ぎなかった頃を思い出しますよ」

今やレイヴェルの『僧侶』一駒眷属となった彼は、なにやらスツキリとした顔でそう言っている。

まあ、金は手元にあるし、身内の治療に支払いを要求したりはしないので構いはしないのだが。それで良かったのだろうかね。

「長い間に知らず溜め込んできたものが、全てなくなつた。これから息子のことに集中できます」

たぶん、良かったのだろうな。

下僕の下僕となつたので、最上級悪魔なのにローゼンクロイツは俺に対して丁寧な話す。

まあ、兄上の眷属たちもそうなので、特に違和感はないが。「まあ、給料はレイヴェルが払うからそれで生活はできるだろう」

レイヴェルにお金を渡すのは俺だし。

新聞やテレビでは、ローゼンクロイツの突然の引退と、電撃的なトレードについて盛んに報道している。

『フェニックス家のレイヴェル姫、リュディガー・ローゼンクロイツ氏を眷属に』と。

大晦日のことである。

ちなみに、俺が彼のことをリュディガーと呼ばないのは、名前の最初の方がリュイと被る感じがして嫌だからである。

今後もきつとローゼンクロイツ呼びだろう。

『なあ、ドライブグ』

『なんだ？』

しかし、特に探そうとしたわけでもないのに、神器について研究してくれそうな魔法使いがやって来るとは、俺は案外コイツのことを考えていたらしい。

これはきつと、グレモリーの運命に干渉する魔力の特性の発露だろうから。

ま、神器を介して魂が繋がっているレベルの身内だ。身内の中の身内と言っても過言ではない。

『「自由」が欲しくないか？』

種族の仇敵に封印され、力を貸してくれてアドバイスもくれる魂に近いところにいる存在。

これでコイツがメスだったら、メインヒロインなものな。まったく困ったものだ。

2―終 龍帝の契約（後）

姫初め、姫納め、という言葉がある。文字の表記であつたり、元々の意味であつたりが実は不明な言葉らしい。

だが、俺の中では年の初めに性交すること、年の終わりに性交することの意味合いになっている。

というわけで、我が姫といえは将来の正妻たるレイヴェルなので、昨晩は着物を着せて姫納めを致した。

年の初めと終わりくらいは、正妻さんを立てるものだと、昔のエロい日本人も考えたのだろう。

姫納めの前には、兄上を除いた我がグレモリー家の面々が集まつてのパーティーだったわけだが、メイドモードではない義姉上が酔っぱらって不貞腐れていたのが印象的だった。

ローゼンクロイツの歓迎会も兼ねていたので、俺の眷属や、父上の眷属とも同時に行われたわけだ。

ちなみに、俺は母上の眷属と会つたことがない。いないとも聞いていないし、いるとも聞いていない。

実はヴェネラナ眷属が我が家の裏方というか、汚いところを担当していたりする可能性があるかもしれない。まあ、貴族なのでそういうこともあるかもしれない、ないのかもしれない。

世の中には知るべき時まで知らない方がいいこともある、そんなセリフをどこかで聞いた気がするしな。

さて、そのローゼンクロイツの電撃的な引退と移籍についてだが、父上や母上、それからマスコミ関係にも顔の聞くフェニックス家の協力もあり世間的には好意的に受け止められたらしい。

最愛の息子の治療に専念するため、長年かけて築き上げた地位も財産も投げ打った情愛深き最上級悪魔リュディガー・ローゼンクロイツさんというわけだ。

俺が去年の記者会見で言い放つたセリフも絡めて、上手いこと美談に仕上げたんだとか。

まあ、たしかに、『子供を助けたいなら力を付けて、対価を用意して、紹介者とツテを作ってここまで来てみるや！』みたいなことを言ったわけだが、それを一週間と経たずに実現されてしまったことになる。今後はアレか「リユデイガー・ローゼンクロイツはやってみせたぞ」とでも言っただけでいいのかね。

ローゼンクロイツは、元々はさして有名でもないそれなりの実力の魔法使いでしかなかったので、割とそのまま当てはまってしまったという。千年も生きていない元人間に出来たのだ、下級悪魔だろうとローゼンクロイツより年上のヤツは、これまでの積み重ねが足りなかったってことだ。

自分で考えてみて、「条件厳しいな」とは思う。だが、また同じようなことを聞かれたらそう答えておこう。

とまあ、ここまででは平民向けに上手いこと情報を操作してもらった話。

貴族界限では、「これでもう、あの悪魔より悪魔をしている『番狂わせの魔術師』と試合しなくてもいいぞ!」といった流れに持つて行つたらしく、まあまあ的好评を得たのだとか。

どれだけローゼンクロイツとの試合が嫌だったんだ。

実際に体験していない俺には、その本当のところはよく分からない。ただ、あの人格者のタンニーン殿ですらホツとしていたので、まあ、そういうことなのだろう。

ローゼンクロイツにはとりあえず子供のことに集中してもらって、それが片付いたら神器の研究やメンタルケアの仕事に励んでもらうとしよう。なんか、そんな流れになってしまったことだし。

そして、グレモリー家年末のパーティーに参加できなかった兄上なのだが、なんでもレーティングゲーム関連で大晦日に大事があったらしい。そのせいで仕事が急に増えてしまったため、こちらに来られなかったようだ。

……半分ぐらいは俺のせいのような気がするので、心の中で「ごめんさい」しておこうと思う。ごめんな、ミリキヤス。叔父さんから

のお年玉で許してくれ。

他所の御家は知らないが、微妙に歪んだ日本鼻肩を患っている我がグレモリー家ではお年玉なんてものもあるのだ。

ちなみに、俺はもうもらえなかつた。大人になった（ヤルことやつた）かららしい。なるほどね。

つまり、俺がお年玉をあげたミリキャスはまだ大人ではないということだ。当たり前だな。

今月は、『年に一度くらいは一族で顔を合わせておこうぜ』的なグレモリーの一族の会という名の宴会などもあるので結構忙しい。レイヴェルに聞いてみると、フェニックス家でもそれっぽいことはやるらしいので、俺とレイヴェルはどっちにも顔を出さねばならんわけだ。

去年の婚約以来、（主に俺が）様々な話題を世間に提供してきたので、質問攻めに合うこと確定である。

なお、母上はバアル家にまったく顔を出さない。そのことを母上に「ずるいすわ」とレイヴェル風味に告げてみたところ、「なら、貴方が行きなさい」と上機嫌な笑顔で言われてしまった。

俺、いつの間にかグレモリー本家の中で、バアル家担当みたいな立場にされてないか？ 叔父上との仲、よろしくないんですけど。

ちなみに、母上が上機嫌だったのは稼いだ金で贈り物をしたからだったりする。悪魔でも息子からプレゼントもらうと嬉しいんだなって。

ついでに言えば、父上には渡していない。「なぜ私にはないのだ」とかチラツと言われたが、男に物を贈る趣味はないのだ！ ……というのはパーティージョークってやつで、以前治療費のドライグ分の分け前として見繕っていた世界の酒コレクションからよさげなのを渡しおいた。

なに、いっぱい買い漁っているの物はたくさんあるのだ。金もあるので俺が買い取った形で再度補充しておけばいい。

我ながら適当だな。まあ、今のドライグに金を使う機会なんてないのだけけど。

そのときに父上から、「そのうち父と子で飲もう」と言われたが、俺

の舌はまだ甘口なので味の好みが合うにはもう少し時間が必要だろうな。ラティアと話した、時間を加速して速攻成熟悪魔になろう！を実際にやったら、半年くらいか？ 意外に早い。

で、母上の実家であるバル家の方だが、任されたのならしようがない。

マグダランへのお年玉はいつもの魔力増強トレーニングの日ではなく、バル家の催しのときにでも渡すことにするか。

旅先のサイラオーグから届いた手紙もあるしな。アイツの手紙は、俺宛のものは主に旅日記風味だ。でも、マグダランにはどんなことを書いているのやら。

しかし、サイラオーグと言えば思い出すのは、いつぞやの『お従兄ちゃんどいて！ その聖女殺せない！』事件だ。

我が従兄にして義理の息子くんは、人間界に行って間もない頃、案の定聖剣使いにぶっ殺されそうになった。犯人は聖剣ガラティンだったかの使い手のダヴィードだかフリードだかつて名前の野郎だ。いつか会ったらぶっ殺してやる。

まあ、その聖剣使いへの報復はおいておくとして、問題はレイヴェルからもらったフェニックスの涙も使用して、からも逃げおさせたサイラオーグだった。

あの頃のサイラオーグは、中級悪魔に勝てるようになった程度。名うての聖剣使いから逃れられたのは、奇跡みたいな状況だったらしい。

なんとか逃げおせたものの大きな怪我を負ってしまい、このままでは死んでしまう……という状態のところに通りがかったのが、なんと教会の聖女だった。

これまでか、サイラオーグはそこで覚悟を決めたのだが、なんとその聖女は回復系の神器をサイラオーグに使用して助けてくれたらしい。

と、まあここまでなら、いやー助かって良かったねで済んだのだ。

その後がよろしくなかった。いや、結果的には良かったのだが、そのときは焦ったね。

悪魔であるサイラオーグに治療を施したその聖女は、『悪魔を癒せる神器なんて！』とか『裏切り者め！』みたいなことを教会の連中から言われて、追放刑を言い渡されてしまったのだ。

そのことをどうもデイドラから聞かされたサイラオーグは、手のひらを返した教会の信者から罵倒され、石をもって追われたりしていたらしいその聖女に会いに行った。

で、そこでどういうやり取りがあつたのか知らないが、そのまま一緒に旅をすることになったようだ。

と、ここまではまだなんとかマシとしよう。

ただ、その後のサイラオーグから来る手紙の内容がどうも……：……：……う。

これはいかん。俺はそう思った。いつぞやゼクラム祖父さんから聞かされた、教会勢力の男とマジ恋して粛清された女性悪魔のことが頭によぎったのだ。祖父さんはあのとき名前をボカシて話していたが、我が家の方の記録にその女性悪魔の名前が残っていたので、うん、これは本格的にマズイなと思ったね。

あのデイハウザー・ベリアルの身内ですら粛清されるほどの事態。サイラオーグの現在の立場だと、判定基準がもつと緩い可能性が大いにある。このまま放っておくと処されてしまうかもしれない。

ということ、俺はサイラオーグとその聖女に会いに行くことにした。旅の危険はある程度自己責任だが、悪魔の事情でサイラオーグを粛清されるわけにもいかん。

会ってみると、噂の聖女はなんとも小さかった。聞いてみれば年齢は俺より一つ下なのだから。いや、レイヴェルより背丈はあるのだが、隣の大男と並べると物凄く小さく見える。人間なのでオーラもないしな。

サイラオーグめ、ロリコンに目覚めたか……。

サイラオーグが旅に出る前デイドラのところで勉強していた頃、ライザー義兄上も呼んで四人で男子会をしたこともあった。そのと

き、サイラオーグの話も聞いたのだが、ストイックぶってはいるが、普通にエロ思考もあったしな。なるほど、こういうのが好みだったのか、はーん。

で、俺はサイラオーグに説明した。悪魔の社会では教会女とのマジ恋は禁止、「教会から石もて追われながら未だに十字架を下げ、聖書を携える女とは別れる」と。弄ぶのは構わない。利用するだけ利用して、しゃぶりつくしてから捨てるのもいいだろう。だけど、敵対勢力の者との真剣交際はいかんだ。

どうしても一緒にいたいのなら、とサイラオーグの『悪魔の駒』を出させてその聖女に持たせもした。「お前が神への信仰を捨て自ら悪魔になるのなら、生かしておいてやる」と。

だが、聖女もサイラオーグもどうにも返事がはつきりしない。

ならばもう、悪魔政府の処刑人かなにかしらにサイラオーグと聖女のことがバレる前に、始末をつけるしかない。

こうして、聖女を殺そうと魔力を手の中に集める俺、怯える聖女、そして両者の間に立ちふさがるサイラオーグという図になったのが『お従兄ちゃんどいて！ その聖女殺せない！』事件だ。

まあ、結果としては、ボロボロになっても自分を守ろうとするサイラオーグの姿に絆された聖女が、自ら悪魔へと変じた。

サイラオーグの眷属として転生悪魔になったということなら、もう何も問題ない。十字架を壊させ、聖書を焼かせて任務完了だ。

その後、「上手いことやれよ」とサイラオーグに言い残して俺はクルに二人の前から飛び去った。

やれやれ、手間のかかることだ。『駒』が機能したってことは、サイラオーグにもその気があったってことだろうに、ぐじぐじしやがって。あれなら強引にぶち込んでもいけただろうによ。

しかし、俺の演技力も捨てたもんじゃなかったな。聖女抹殺はともかく、それを邪魔したくらいでサイラオーグを殺すわけもないってのにアイツときたら本気だと受け取ったのか、重力倍加で地べたに這いつくばらせてやったら……なんかこう物語の主人公めいた『覚醒』をして、急に闘気の量を増やしやがるの。ビックリしたわ。

ま、それでもまだ上級悪魔クラス。俺をどうこうでできるわけもなく、立ち上がっては潰され、立ち上がっては潰され、と繰り返すサイラオーグの姿を見かねた聖女が悪魔化したって寸法よ。

サイラオーグの執事で『兵士』のトラバーバには事前に話を伝えてあったので、余計なこともしなかつたしな。

今頃我が従兄は、旅の空の下でズッコンバッコンやってるのかね。アイツのデカそうなんだけどなあ……。

体格差考えると、ミリミリミリイ、ぼこお！ ひぎい！！ ってなっちゃいそうだが……大丈夫なのかね。あ、いや、悪魔でも治療できる神器があるから大丈夫なのか。

案外、プラトニックな関係でじりじりラブコメチックにやってるのかもしれないが……、いや、アイツは俺の従兄だ。そんなことはあるまい。

ヤルときはヤル男だと信じているぞ。

うん、まあ、あれだ、サイラオーグは近接戦闘しかないからよく傷だらけになるし、回復能力に優れた『僧侶』ってのは丁度良かったのかもしれないな。某ドラゴンでファンタジーなRPGなら、サイラオーグが武闘家で、あの元聖女の魔女アーシア・アルジェントが『僧侶』、『兵士』のトラバーバが太った商人で、時々呼び出される『戦車』のリキーゴが怪力の召喚獣みたいなものか。他にも仲間が増えているようだし、よいよい。

ヨーロッパ近辺抜けて、天竺目指すとか言ってたが、西遊記かな？ 逆向きだが。

とまあ、元日の午前中につらつらと考え事をしている俺は、現在コタツに入っている。

我が後宮に用意させた、日本風味の部屋だ。キングサイズベッドほどの無駄にデカイコタツの周囲には俺の眷属が集まっている。あと、オマケで使い魔が少々。

これまた無駄にデカイテレビの画面には、年末年始は大忙しのレー

テイニングゲームのトッププレイヤーであるリユイことロイガン・ベルフェゴールの戦闘風景。がんばれー、今日も賭けてるぞー！

膝の上には黒猫と白猫。黒い方は黒歌で、白い方は使い魔のシロちゃん。テーブルの上に並べられたそれっぽい料理やらおせちの中から、猫の食べそうなものをやってみたり、撫でまわしてゴロゴロ言わせてみたりだ。

もう一匹の白猫であるところの白音は、俺からずっと離れたコタツの反対側にちよこんと座っている。いや、大人しくはしていない。目の前に並んだ料理をみて、食べたい食べたいと目で訴えてきたので、しばらく『待て』したあとに許可を出したらバクバク食べている。ふっ、いやしい雌猫め。

今は姉を盗られたと思ってやや反抗的だが、いずれお前も俺の膝の上でにやんにやんあんあん言わせてヤル。くくく。

ミスラさんは寝正月だ。これはどうにもならん。

「白音」

「はい、なんですか？」

俺が声をかけると、ジト目で返事をして来たので、くいと部屋の隅にいる触手くんを指さした。

「ミルクの追加だ」

今日は大盤振る舞い。触手くんにもメスの体液をたらふく喰らわせてやろう。

「わかりました。——はい、触手先輩、ミルクの時間ですよ」

白音が触手にミルクをやっているところを眺めつつ、俺は足を動かした。

このコタツは掘り炬燵なので、中が結構広い。その中に潜り込んで遊んでるとか、お前は子供か！ お前のことだよ、朱乃。

「ああん♡」

足の裏に感じるぐにいとやわらかい触感。それとともに、くぐもつた声がコタツの中から聞こえて来た。

こんなでもお外ではちゃんと出来る子なのだ。身内しかいないと油断してこんな風になっちゃってしまっただけで。

「御用でしたか？」

俺の股の間から顔を出すな。猫と一緒に撫で繰り回すぞ。

「にゃん」「にゃん」「あぁーん」

まあ、たまにはこういう時間もいいだろう。

午後からはお出かけなので、午前中ぐらいはのんびり過ごしたいものだ。

レイヴェルはこの部屋にいない。

「これからは、毎年初めの食事はレイヴェルの作ったものが食べたい」
こう言ったら、嬉しそうな笑顔で「はい！」と手を上げてキッチンに向かってくれたのだ。

リクエストしたのは雑煮である。雑煮って日本の宗教関係の食事なので、悪魔的にはどうなのかとも思うがまあいいだろう。前世でも、それほど意識して食べてはいなかったし。

と、思考がそのことに戻ってきたところでタイミングよく扉が開いた。本日は和服仕様のメイドたちを引き連れた、ニコニコ顔レイヴェルの登場だ。

「お待たせいたしましたわ。少し調べてみましたら、いろいろと土地ごとに違いがあるようでしたので、人口の多い地域のものにしてみましたけど」

前世の俺が日本の何処に住んでいた何者なのかは、誰にも話していない。レイヴェルにもだ。あるいはドライヴならば知ってしまったているのかもしれないが、ドラゴンのにはさして気になることでもないのだろう。

「うん、これだ。ありがとう」

「どういたしまして。——朱乃……貴女はそこで何をしていますの？」

見ようによってはフェラってるような位置にあるからな、今の朱乃の顔。

「ちよつと遊んでいただけだ。ほら、黒歌も席に付け」

年の最後の姫納めと、年の初めの姫初めはレイヴェルだぞと言っていた。

それなのに、朱乃と致していたんじゃないかとプツと膨れたレイヴェルを隣に座らせ。皆で挨拶の後に食べ始める。

白音や黒歌は先につついて食べていたが、まあ俺が守っていれば『女王』様的にはよいのである。ヤキモチはちよつと膨らませた方が美味しいしな。

さて、今年も一年よろしくやっていきますか。

午後というか、魔力とその術式で運行されている冥界の太陽が沈みかけの夕方。

俺とレイヴェルは二人で冥界フタコブラクダのゴポリンの背で揺られていた。

どこに向かっているのかと言えば、魔王ルシファーつまりは兄上のところに新年の挨拶だ。

朱乃は置いてきた、兄上がなんだか気にかけているようなので、あまり会わせたくない。黒歌も置いてきた、偉い人とのやりとはなるべく遠慮したいそうだ。

グレモリー領から転移魔方陣で跳ぶこと数回、その後、車で城門まで移動し、そこからまたかなり距離のある城の建物までをラクダの背に乗って進んでいるワケだ。

護衛連中も城門の所で置いてきた。ここから先には連れていけない。

ふと、俺の前に座ってゴポリンの手綱を操るレイヴェルを両手で抱きしめた。

いつか、こういうことが出来なくなるのかと思うと、なかなか辛いものがある。

「リアスさま……どうかなさいました？」

「いや、また時期を見て話す」

こてんと首を傾げるレイヴェルを抱きしめながら、俺は昨日ドライブを交わした契約の内容を思い浮かべていた。

『「自由」か……。 「自由」な……。 ああ、欲しいとも、こうなってから、

それを思わなかった日はない』

赤き龍の帝王ア・ドライブグ・ゴツホ。

かつて多くの神々を恐れさせ、世界中を飛び回って好き放題に暴れていたという二天龍の一。

『神器の内に封じられ、人間のための道具として力を引き出されて利用され、出来ることと言えばこうして宿主と話すことぐらい』

話を聞くと、その宿主にしてもドライブグとの会話をする者は少なかったようだ。

ただ、その辺りはやや疑問が残るが。なにせ、コイツはおそらく精神に干渉を受けている。聖書の神の恐るべき技術は、天龍の精神さえ弄り回せるということだ。

『なあ、ドライブグ』

『ああ』

『お前の本来の力は、「倍加」と「譲渡」の二つだけではなかったそうだな。様々な守り、障害を「透過」する力、そして神々も恐れた消えることの無い炎の吐息』

これらは、封印前のかつての二天龍と戦ったことのある者ならば知っていることだ。なにせ、ドライブグは『透過』の力を隠してはいなかったようだし、焼き尽くすまで消えることの無い業火に関しても、本腰を入れて戦うまでもない相手を蹴散らすために使用していたらしいのだ。

悪魔、天使、堕天使は三つ巴の大戦の際、神話に記された決戦場に割り込んできた二天龍との戦いを経験している。つまり、大戦から生き残った連中は皆ドライブグやアルビオンの神器に反映されていない力を知っているのだ。

そのことは大戦の内容を記した書物にも記されている。なにせ、二天龍に対抗するために三勢力が手を結んだとか言う前代未聞の事件のことなのだから。

『そう……そうだった。なぜ、俺はそれを……？』

『おそろくだが、明日にはもう覚えていないかもしれないぞ。俺がこのことを大戦を経験した方々から聞いた後も、書物で調べたときも、

お前はそこにいたんだから』

『記憶を操作されているのか、この俺が』

『ああ、このまま神器を通して聖書の神の影響下に居続けると、どうなっていくのか分からない』

俺としても、この『神セイクリッド・ギア器』つて代物には色々と思うところがある。

たしかに便利だ。俺は『赤龍帝の籠手』の恩恵を多大に受けている。だが、これは聖書の神の創った代物だ。どこに何が仕掛けられているのか分からない。アジュカ・ベルゼブブさまが『悪魔の駒』に公表していない機能を盛り込んでるように、聖書の神も神器に何かを仕込んでいる可能性は十分にある。

ある日突然、この籠手が大爆発を起こすつてこともあり得なくはないのだ。魂に繋がっている神器を通して、聖書の神に俺の魂が遠隔操作されてしまう可能性もある。

戦闘能力だけなら、この世界のトップ層にいた全盛期のドライグ。それが精神を弄られているのだ。俺なんぞでは、一瞬で操り人形されてしまうかもしれない。

便利ではあるが、空恐ろしい。それが俺が『赤龍帝の籠手』に抱いている感情だ。ま、使えるうちは使い倒すがね。

『つまり、お前はこの籠手をどうにかするつもりなのか？』

『ああ、ただ、それはドライグを開放することと同じではない。神器だけを魂から切り離す術は、ローゼンクロイツが探している。もしそれが上手く行つて、俺がそちらを選んだ場合、お前はまたどこかの誰かの所に渡っていくわけだ』

ドライグが押し黙った。沈黙の中から強烈な重圧を感じる。

『……何が望みだ。強欲な悪魔よ』

『取引を——お前に「自由」と、俺の片腕をやろう。それに合わせて、腕の分の俺の力もくれてやる。その代わり、お前の力の九割を俺に寄せ』

神器の研究には長い年月が必要だろう。それが終わるまでは、天界そのものにちよっかいを掛けづらい。聖書の神がブチギレたら困るからな。

そして、神器に一番詳しい聖書の神をぶちのめしてどうにかさせるって最短経路が取れないとなると、もう地道にやっていくしかない。

墮天使は悪魔よりも深く神器研究を進めていると言うから、その資料を略奪するのもありだが、基本は時間をかけてやっていくしかないだろう。

そうになると、俺とドライグの付き合いはかなりの期間に及ぶはずだ。その頃には、ドライグにとって最も相性の良い肉体は、おそらく『赤龍帝の籠手』を使いまくっているだろう俺の身体になっていると思う。

『だから、この籠手の付いている方の腕を一本やろう。その対価に力が欲しい』

便利だからな、籠手の能力は。今でも手放し難いのに、数百年後にはもっと慣れ親しんでしまっているだろう。

ま、腕一本分の俺の力つてなると、大体前ルシファーさまの魔力と同じくらいになるんじゃないだろうか。解放出来るようになるころには。

そこにドライグの元々の力の一割が残れば、竜王クラスとは十分に渡り合えるはずだ。

『契約の対価に差し出したものは、フェニックスの特性でも戻らんぞ』『まあ、仕方がないな。お前のためだ。もちろん、俺のためでもあるが』

片腕になると、抱きしめたり、おっぱいを両方同時に揉んだりとか、色々出来ないことが発生してしまう。それはとても痛い。

なんなら、こんな話すぐにやっぱなしと言ってしまいたくもなる。が、神器への不安とドライグの自由、なにより俺自身の強さのためだ。『いいだろう。——このままこんなところでお前たちが乳繰り合っている様を見続けるのもたまったものではない。それに、強さはまた鍛え直し高めればいいだけだ』

『なら、正式な契約はいざれ立会人を立てた場で結ぶとしようか。俺やお前でも勝てないような相手に頼んで』

グレートレッドか、オフィスか、あるいはサマエルか。その辺りの名で契約の書面を作らせてもらわないとな。

こういうことは、たとえ身内でもキツチリやっておかないと。

『ふん、用心深いな兄弟』

『ああ、悪魔だからな』

ドライグとのやり取りを思い出し、俺はより一層強くレイヴェルを抱きしめた。

「リアスさま、ちよつとキツイですわ」

「ああ、すまん。日付が変わったら『姫初め』だなと思つたら……つい」

「もう、こんなところで言わないでくださいまし」

さあて、とりあえずは本日の兄上への御挨拶から済ませていくとしようか。

『王の駒』の話もあることだしな。忙しいところにさらに問題をぶち込んでしまうわけだが、きつと笑って許してくれるさ。

なにせ、アジュカ・ベルゼブブさまの技術開発。セラフォル・レイアタンさまの外交。ファルビウム・アスモデウスさまの軍事。

他の三魔王が担当しているところ以外をこなしている兄上だもの。

冬休みのクラウンジュエル リリンの失墜

魔王ルシファー。現在その名を襲名しているグレモリー家出身のサーゼクス・ルシファーではなく、最初のルシファーの話だ。

他神話の神々が相争い、同じ聖書の神話に属する天使たちですら墮天使という裏切者が発生する中であって、悪魔たちは同種族内での大きな戦を経験したことがなかった。

欲望に踊らされ、感情に任せて行動し、それでいて合理的であり、利己主義者の集まりでもある悪魔たち。それらをまとめ上げた前魔王たちの治世は優れたものであった。

全知全能にして、完全に善なる存在であると謳われる『聖書の神』。その一神教の教えと、人間世界に確実に存在する悪と災い。

神が真に全知であるならば、なぜ悪の発生を事前に摘み取ってしまわれないのか。神が真に全能であるのなら、なぜ未だ悪の存在を許しておられるのか。神が真に善の善なる存在であるのなら、なぜこの世に多くの災いが起こり、人々が苦しむのをよしとされているのか。そういった矛盾から生まれてきたのであろう悪魔たちとその王が形成した社会が、聖書の神の教えを信じて行動してきたはずの人間たちのそれよりも遥かに平穏なものであったことは皮肉と言うしかない。

戦はなく、飢えもなく、大半の病は魔力で解決し、長大な寿命を誇るために老衰も恐れるものではない。

悪魔たちの暮らしこそが、弱く儂く、戦と病と飢えと老いに苦しみ続けた聖書の神を信じる人間たちの理想に近かったのだから。

内側で小競り合いはあったのだろう、権力を巡った闘争もあつたはずだ、そうでありながら悪魔たちは一万年以上の長きに渡って同種族同士で大きく争い合うことをしなかった。

時間を操作し、偽りの月と太陽を空に浮かべる悪魔たち。彼らの魔力は冥界の天候をも操作し、日照りもなければ長雨も起こらない。

神が人間に与えなかったものを、悪魔の王は悪魔たちに与えていたのだ。

どのような形、どのような手段を用いていたとしても、前魔王ルシファーを筆頭とする魔王たちの治世がたしかに優れたものであったことはこの事実だけで疑いようもない。少なくとも大多数の人間の王よりは上だろう。

万年を超えて続いた前魔王たちの治世。それが優れていたのならば、現行の体制よりもかつての王たちの治世を懐かしみ、忠誠を尽くさんとする者たちが多く存在していることも当たり前のことだろう。

数百年前、悪魔と天使、堕天使による三つ巴の大戦があった。本来ならば、聖書の神話がそこで終焉を迎えていたかもしれない戦いだ。

だが、その戦は二頭の強大なドラゴンの乱入などの様々な要因によつて、神話に記された迎えるべき結末を迎えられなかった。

三つの勢力がそれぞれに大きく力を落とし、特に悪魔たちはそれまで自らの種族を導いてきた偉大な指導者である四大魔王すべてを失ってしまったのだ。

あまりにも長い期間君臨し続けてきた指導者を亡くした悪魔たちは混乱を極め、ついにはこれまでになかった悪魔同士の戦いを始めてしまう。

感情により大戦の続行を主張する亡くなった魔王の血族が率いる政府軍。合理的に種の存続を望んだ反政府軍。

こうして始まった両軍の戦いは反政府側の勝利に終わる。勝者はそれまでの悪魔の領土を己の者とし、敗者たちはまだ開拓されていなかった冥界の辺境へと追われて行った。

ここはそんな歴史の敗者たちの集う場所。かつての魔王の血族を頭に据え、敗れてなお付き従った者たちがそれを支える『前魔王』『旧魔王派』などと現政府から呼ばれる者たちの領域。

「リゼヴィムさま、『邪悪の杯』の使用、どうあつても認めてはいただけませんか？」

辺境の地に数百年の歳月の中で築かれた城の一室で、ユーグリッド・ルキフグスは自らの主に懇願していた。

「ここ最近、何度も繰り返してきた願いだ。
「だめだ」

臣下であるルキフグスの子の願いに短く強い口調で否定の答えを返したのは、初代ルシファアの息子リゼヴィム・リヴァン・ルシファア王子。

『リリン』とも呼ばれる彼は、暗い色合いの銀の髪を面倒くさそうに掻いてから、ユーグリッドに目を向けた。

「アレとネビロスのもたらした技術が合わされば、現在魔王を名乗っている者たちを打ち破ることも容易でしょう。そうなればかつての領土を取り戻すことも――」

「今さらいらねーよ、そんなもの。悪魔の政治だのなんだのなんて、サーゼクスくんたちで十分だろ？　なーんでわざわざそんな面倒なことをしなきゃならんのよ？」

リリン王子は大戦以前から病を患っていた。身体の病ではない。長い時を生きた悪魔の多くが思うそれは、心を蝕む病だ。

特に名はないが、能動的に何かをする気力が失われ、ただ惰性で生きるようになってしまったというもの。

ユーグリッドもまた内戦の中で姉と離れ離れとなつて以来、長い期間このリリン王子とよく似た状態にあった。

そのため、ユーグリッドにはリリン王子の今の状態がよく理解できる。

これから脱却するためには、何か強い目的意識を持たせる必要があるのだ。ただ、ユーグリッドにはリリン王子の心の琴線が分からなかった。

王子は、大戦のころには既に生きることには飽き始めていた男だ。内戦の際にもほとんど表に出ることは無く、流されるままにここまでやって来てそのまま怠惰を貪り続けている。

何か、そう何かそれらしきものでもあれば良かったのだが、今のところユーグリッドが示した何物も王子の心を行動的なものに変えられていない。

唯一、王子のこだわるモノがあるとすれば、それは彼の母である『悪

魔の母リリス』のみ。

そしてその『リリス』こそが、ユーグリッドの使いたい物だった。アレを使えば力が手に入る、かつて魔王ルシファーはリリスを用いて七十二柱の悪魔たちを生み出した。その中には、元々は悪魔ではなかった種族から悪魔へと造り替えられた者さえもいる。フェニックス・聖獣に属する。不死鳥。鳳凰。再生の象徴である。悪魔となったフェニックスの一族もいたという。

(イチブイ HDD裏設定1)

アレにはそうした生命の在り方すらも作り変える力、神滅具の一つにして聖遺物でもある『幽世の聖杯』セフィロト・グラールのような能力が『リリス』にはあるのだ。

その能力の由来も見当が付いている。

ユーグリッドは以前、酒に酔った王子からそれらしき話を聞いたことがあった。

聖書の神によって造り出された神造人間。『最初の女』であるリリスは、かつては神の創った楽園に住んでいた。

結局彼女はそこでの暮らしや聖書の神、天使、アダムと性格が合わず楽園を飛び出して悪魔となり、さらには魔王ルシファーの妻となるのだが、飛び出す前に『生命の樹』と『知恵の樹』の実を盗み出していたらしいのだ。

聖書にはこう記されている——『(知恵の実を食べた)人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして生命の樹からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある』

知恵の実と生命の実を食した人は、我々聖書の神のような知恵を身に着け、神のように永遠に生きる者となる。

奪った実をリリスが食さない理由はない。ならば、リリスの持つ聖書の神のごとき力はそこから来ているのだろう。

アダムとイブが手にすることの無かった『生命の樹』セフィロトの実を食しただろうリリス。

聖書の神の創造した『生命の樹』の力を取り込んで人をやめ『悪魔の母』となり、魔王ルシファーによる度重なる術式の行使によって、魂

と身体を壊し悍ましき造形の物言わぬ物となったりリス。

ユーグリッドはそのリリースを『邪悪の樹の杯』クリフオトとして目的のために使用することを考え、未だ母にだけは情を残していたらしいリゼヴィムはそれを拒絶した。

先ほどの二人のやり取りはそういうものだった。

「そうですか……、それでは仕方ありませんね。残念ですが」

『幽世の聖杯』セフィロト・グラールでも探せばいい。どこにあるかは知らねーけどな」

そう言っつて、王子は手にした杯を傾け酒を飲んだ。ユーグリッドが話の前に手渡したものを疑いもせず……。

「遅いのですよ、リゼヴィムさま。それでは、間に合わなくなってしま
うかもしれない」

ドサリと床に何か人間大の肉が倒れ込む音がした。

「ユーグリッド……おま、え……」

毒杯をあおり、椅子から転げ落ちた王子がユーグリッドを見上げる。

その姿を見下ろしながら、かつて愛ゆえに主であるルシファアの血筋を裏切った女の実弟は指を鳴らした。

「魔王すら殺すといわれる蛇の毒を基に調合させたものだったので
すが、さすがに『超越者』の一角ともなるとこれだけでは終わりませ
んか」

すると、倒れ伏す王子を囲むように魔方阵が現れた。その魔方阵が表すのは、『ベルゼブブ』、『アスモデウス』、『レヴィアタン』。

現魔王のそれではなく、今は前魔王と呼ばれてしまっている。自らを『真なる魔王の血族』と呼称する者たちの紋章。

「ルキフグスに裏切られるとは、ルシファアも落ちたものだ」

大層愉快だ。そんな声でシャルバ・ベルゼブブはリゼヴィムに片手を向け、そこに魔方阵を展開した。

「これも、我らが復権のため」

クルゼレイ・アスモデウスはどこか申し訳なさそうな表情を浮かべつ、やはり手元に魔方阵を用意する。

「これ以上奴らをのさばらせておくわけにはいかないのですよ」

カテレア・レヴィアタンは、ここにはいない誰かに向けた怒りを滲ませながら、他の魔王血族と同じように魔方阵に力を込める。

「リゼヴィムさま、それではしばしお休みください」

姉を見習って主を切ることを選んだユーグリッド・ルキフグスの封印術式を合図に、四つの魔力が合流。

毒によって弱らされたりゼヴィム・リヴァン・ルシファーは、ここに封印された。

「ふん、殺してしまえば良かったものを」

忌々しそうにそう口にしたシャルバ・ベルゼブブに、ユーグリッドは頭を下げた。

「リゼヴィムさまの『神器無効化』も研究の対象にしたいということでしたので……。サーゼクスたちは『悪魔の駒』によって多くの神器使いを取り込んでいます。それに、後々天界の連中を滅ぼす際にも役に立つかもしれません」

改めてユーグリッドの説明を聞いたシャルバは、酷く嬉しそうに口を歪めた。

「母子揃ってネビロスどもの玩具……ということか」

シャルバ・ベルゼブブはルシファーへの対抗意識が強い男だ。ベルゼブブこそが悪魔のトップであるべきだと考えている。

だから、リゼヴィムのこの様が面白くて仕方がないのだろう。

「私たちはこれで失礼させてもらうわ。行きましょう、クルゼレイ」

「ああ……ユーグリッド、例の物は任せただぞ」

カテレアとクルゼレイは男女の仲だ。そして、この二名とシャルバの関係はあまり良いとは言えない。

シャルバの権力欲は強く、いつもどこかに、他の魔王の血族を見下すところがあったからだ。

「ええ、お任せください」

二名が転移によって消え去ると、シャルバもそう時を置かず消えて行った。

それを見送ったユーグリッドは、どこかうっとりとした表情で今は会えないヒトに向けた言葉をつぶやく。

「待っていてください、姉さん」

魔王の子孫たちの間で繰り広げられる、勝利の後を考えたやり取りなどユーグリッドには興味がないことだ。

覇権争いなど勝手にやっつけていればいい。

ユーグリッドの欲しいものは、最愛の姉との二人だけの生活。寿命の尽きるその時まで、彼女とずっと一緒に居られるのなら、それ以外のことなどどうでもいい話だ。

それから、しばらくして――。

ルシファアーの手によっておぞましい肉の塊と化したリリスの周囲で、ネビロス家の研究者たちが忙しなく動き回っている。

その様子を眺めながら、ユーグリッドは手にした『ルシファアーの書』のページをめくっていた。既にこの書物の内容はネビロス家にも伝えられている。

今日行われるのは、『リリス』を用いた悪魔の生産実験だ。『赤龍帝の籠手』を基に作成する代物のために必要な実験だと、ユーグリッドは聞かされている。

「それでは、実験を開始します」

研究者の一人がそう告げ、手にしていた容器の蓋を取り中から白濁した液体の詰まった注射器のような形状の器具を取り出した。

そして、それを『リリス』の一部分、肉の裂け目へと近づけていく。

「くっ……」

あまり見えていて気持ちの良いものではない光景から、ユーグリッドは小さくうめいて目を逸らした。

超越者たちのキムチ鍋

母方のパール家の特色である紫の瞳、父から受け継いだグレモリー家の紅色の髪。

純血悪魔の多くが標準装備している美形フェイスに、ここしばらくベッド上での連戦を意識して鍛えて締まってきた身体。

グレモリー公爵家の次期当主として教え込まれた見栄えのする所作に、概ね上から目線の口調と態度。

魔王クラスを優に超えて超越者の領域にあるグレモリー家の秘密のエロ魔力と、自然とハーレムを形成すると言われる雄ドラゴンの中でも最高クラスな力を持つ赤龍帝由来の雌を惹きつけるモテオーラ。それらを搭載した、これなんてエロゲ主人公？　と言われそうな男。

それがこの俺、リヴラクス・グレモリー。

ヒトは皆「自分の物語の主人公」である、とするならば「俺の物語の主人公」である。

ちなみに現在俺の隣の席に座って、割と器用に箸を扱っている俺より二つ年下で、小柄な体格にくるくる縦ロールを左右につけた金髪でちよつと澄ました感じのフェニックス家のお姫様が、俺の物語の最初のヒロインということになるのだろう。

「レイヴェル、キムチ大丈夫か？」

「ええ、辛いものはそれなりに好きですわ」

まあ、俺は悪魔社会ではまだ成人に至っていないというのに、女好きとして知られている男。今後も関わる女は増えていくことだろう。

実際、すでにレイヴェル以外にもそういった関係の女性が、イチ、二、サン……たくさんいるのだから。

さて、俺がなぜ自分のことを物語にたとえて考えているのかというと、それはテーブルを挟んだ向こう側に座っている二人の男性悪魔の内の一方向の持論が原因だ。

「兄上、どうしてこの場でキムチ鍋を選ばれたのでしょうか？」

「ん？　ああ、これを教えてくれたのはリアスだからだよ。前世の話

を聞いた時に、よく食べていたと言っていただろうか？」

そう我らが四大魔王さまの一人であり、俺の兄でもある紅髪の魔王サーゼクス・ルシファーである。

兄上は、『悪魔もまた生物に過ぎない』といった感じの自身の考えを俺に語ってくれたことがあり、俺は俺でそれについて自分の考えを返したりしてきた。

なので、こうして向かい合うと過去に話し込んだその手の事柄の記憶が蘇ってくるわけだ。

俺としては、悪魔だつて生きていることは生きているのだから生物という認識はいい。ただ、それが人間やその他の人間界、魔法使い達が言うところの物質界の通常生物と同じかと言われると、かなり違うのではないかと思っている。

我々、悪魔は『ファンタジー夢幻の住人』だ。神話や伝説、昔話、そういった人間たちの空想から生まれて来た存在である。

なにせ、神々は人間たちからの信仰あるいはそれに近いなんらかの想いから発生する精神エネルギーを必要としているし、悪魔だつて人間の欲望を糧としている。

植物が生まれ、それを食べる草食動物が生まれ、他の動物を食べる肉食動物が生まれ、といった順番で人間界の生物が発生してきた。

そう考えると、我々のような人間の『ファンタジー神話』から生まれ出で、人間の精神エネルギーを食べている存在は、心を食べる生物なのだろう。

まあ、悪魔は目の前にある鍋の中身のような物質的な食事もするの
で、雑食になるのだと思う。生きるのに必要な栄養素の一つに『人間の欲望』があるみたいな感じか。

殺生しないという仏などは、たぶんだが完全に精神エネルギーだけで存在を維持しているのだろうか。

吸血鬼は血を媒介にしないと精神エネルギーを摂取出来ない生
態の生き物で、人食いの怪物なんかは肉と一緒にでないと取り込めないと
かね。

はぐれ悪魔などは人食いをよくするそうなので、悪魔はいろいろな
方法で精神エネルギーを得られるタイプの生物つてことになる。夢

魔とか淫魔なんてエツチなこととして取り込んでるしな。栄養摂取の方法が多いつてのは、悪くない気がする。

祈られることでしかエネルギー得られないみたいないな受け身オンリーなタイプだと、信仰が廃れたら終わりそうだし。積極的に狩りにも行ける悪魔は割と優秀なのかもしれない。

とまあ、そのようなことを考えると我々のような夢幻より生れ出た存在にとつて、イメージってものは大変重要だと思う！ 何故なら我々悪魔は、人の考えた物語から生まれて来た存在なのだから。

「しかし、その……兄上はともかくベルゼブブさまに缶ビールつて、ものすごく似合いませんね」

「そうかな？ 俺としてはこういうのもアリだと思うのだが」

テールルの向こうのもうお一人の男性は、アジュカ・ベルゼブブさまである。

なんでこんな方が、俺の前世における冬の味覚の一つであるキムチ鍋+缶ビールを堪能しているのだろうか。なんというか、こう、もうちよつとお上品な場面だけを見せていたいただきたいものだ。夢が壊れる。

兄上は、まあ、もういいのだけれど。慣れて来たので。

魔王ベルゼブブが、缶ビールをお供に豚キムチ鍋をつついている風景。こんなの、人間にはとても見せられない。

あー、あー、兄上のせいで台無しだよ。俺の中にあつた、妖しげな雰囲気の伶俐な魔王のイメージが崩れ去ってしまう。

「おねえちゃん」呼びを強要してくるセラフォル・レヴィアタンさまもアレなところがあるし、もう頼みの綱はほとんど話したことのないフアルビウム・アスモデウスさまだけだ。

たしかに？ 兄上に冬場によく食べていたものを聞かれたときに、キムチ鍋に適当なアルコールと答えたのは過去の俺だ。

スーパーでキムチと豚肉買って来て、適当に鍋に放り込んで、あとはおおむね缶ビールみたいないい加減な食生活をしていましたとも。たまに奮発して、魔王っぽい名前の焼酎だったりもしたが。

辛い物を熱くして、温かい汁と共に胃に送つて、アルコールも摂取

する。寒い時期にはよくお世話になりましたとも。

だからといって、魔王がそんなの真似することないじゃん。イメージが壊れる。

しかも、友達だかなんだか知らないが、他所の魔王さまにまで「うちの弟がく〜」とか言つて勧めなくてもいいだろうが。

あああああつ、兄上は父上を見習つて。たまに着ぐるみ着てはっちやけてたりするけど、貴族っぽい振る舞いを心がけている父上を。「ところで、今さらですけれど、どうしてベルゼブブさまはこちらにいらしているのでしょうか？」

魔王ルシファアの城で面会を待っていたとき、要約すると「最近実家に帰れなくて寂しいから、一緒に晩御飯食べよ？」と兄上からの連絡を受けたときは「どうしましょう、どうしましょう」と慌てていたレイヴェルだったが、しばらくこうしている間に慣れて来たらしい。

まだ言葉は少なめだが会話に混ぜてくれるようになってきた。

本来なら、今日のベルゼブブさまの予定は自分の城に居ることになつていたはずだ。兄上のところには挨拶に来る悪魔がいるように、ベルゼブブさまの城にも客が多いので。

それがどうして兄上の城で、俺やレイヴェルも入れて一緒にキムチ鍋食べてるんだって話である。

「サーゼクスも交えてリヴラクスと話すことがあったからだ。ああ、貰ったチョコレートだが、全て食べ終わったよ」

レイヴェルにそのことを聞かれたベルゼブブさまは、言葉の後半で顔を俺に向けた。

黒歌の駒を『僧侶』二駒から変異『僧侶』一駒に替えていただいた際、俺はお礼として渡したいくつかの品の中にチョコレートを入れておいた。

黒いチョコと白いチョコで出来たチェスの駒型チョコのフルセットだ。その中で一種類の駒だけ、チョコではなく本物のチェスの駒にすり替えておいたのだが、どうやら意味が伝わったらしい。遊び好きの方だと聞いていたので、こちらも少し遊んでみたわけだ。

たぶんだが、ベルゼブブさまはリュイことロイガン・ベルフェゴ

ルが俺のところに入り浸っていることを知っているだろう。それに、ある程度は『王の駒』を使用している者のことも把握しているはずだ。なにせ、ベルゼブブさまは『悪魔の駒』について一番詳しい方で、かつベルゼブブ派のトップを務める権力者なのだから。ルシファー派のグレモリー家に探りぐらい入れているだろうし、『王の駒』を使っているかどうかも分かるだろう。

はて、そういえば今、「全て食べ終わった」と聞こえたような？

「全て、ですか？」

「ああ、全部だ。なかなか歯ごたえがあった」

あれ？ 本物の駒まで噛み砕いちやったとか？ まさかね。超越者ならそれぐらい出来るだろうけどさ。ハハ、まさかね、ベルゼブブさまの冗談はよく分からん。

「その話はあとにして、まずはこちらを片付けるとしよう」

兄上がまずは鍋の中身を平らげようぜ、と言うので駒の話は後回しだ。

食事中、しかも鍋つつきながらする話ではないしな。

しかし、他所の派閥のトップと鍋料理と一緒に食べるとはな。貴族の食事といえば、物語などでは毒物の出番がちよくちよく出てくるわけだが、同じ鍋でメシを喰うってのは、なかなか仕込みづらくていいのかもしれない。食器に塗っておいたらそれまでではあるが。

まあ、兄上もベルゼブブさまも、その能力を考えると毒なんぞ効かないだろうな。

片や本来の姿は全身これ滅びの魔力の塊とかいう生物に分類していいのかよく分からない存在、片やあらゆる事象を式に当てはめ改竄してのけるとかいうゲームで改造コード使うみたいな能力持ち。

毒物なんて効きそうにない。おのれチートどもめ。

俺なんて、毒で受けた状態異常を他者や物に『譲渡』して押し付けるくらいしかないというのに。まあ、バランスブレイクして『不死身』特性譲り受けでもいいけど。

「ベルゼブブさま、前にお聞きした」

「今はプライベートな場だ。アジユカでいい」

ベルゼブブさま——この場ではアジユカさまでいいらしい——とは、これまであまり話す機会がなかったのだが、こうしてみると意外と話題が出てくるものだ。

主に『ゲーム』関連だが。前世じゃ俺も、相当な時間をゲームにつき込んだものよ。今生ではなかなか暇がないというか、去年からはその時間を子作りに費やしているというか。うん、生産性は上がったかもしれない。

「では、アジユカさま。人間のゲームについてご存知のようですので、ふと思いついたことがあるのですが」

「なにかな？」

はて、兄上がなにやら微妙な顔で俺とアジユカさまの会話を見ているような？ まあ、いいか。レイヴェルはニコニコだしな。

「いえ、人間のゲームにもよく悪魔や天使が出てきますよね？」

ゲームやなにやらのエンタメキャラクターとしても、悪魔の名前はよく使われている。神話の神々や英雄も信心深くない人間にとって、娯楽作品のキャラクターの元ネタに過ぎなくなっていたりするのだ。

「ルシファアもベルゼブブもよく見かけるな」

昔からの魔王クラスな悪魔たちは、悪魔の中でも知名度が桁違いの有名どころだから人間の創作物によく登場する。

「ああいったもので言われている設定や、人間たちが考えている悪魔の名の由来などを考えると……。ああ、これは政治的な意味合いなどはまったくない、ただの興味なのですが——」

と、一応断わりを入れておく。俺がこれから言おうとしていることは、受け取り方によっては問題になるかもしれないからな。たぶん、この場なら平気だろうけれど。

別にそこまで危険を冒さなくてもという気もするが、なんというかこう、どうにも気になっていたので聞いてしまおう。

「——出身の御家や、能力などから考えるとアジユカさまの方がルシファアを名乗るのに向いていませんか？ こう、イメージとして」

以前に聞いたのだが、兄上がルシファアを襲名し、アジユカさまが

ベルゼブブを名乗ることになったのは内戦で勝利したあとのこと。

そのときに何やら相談があつて、戦闘能力を考えて超越者である兄上とアジユカさまが、当時から悪魔界のナンバーワンとナンバーツーとして認識されていた『ルシファー』と『ベルゼブブ』を担当することになったそう。政治的な諸々が絡んでいそうなので、その相談した内容までは聞いていない。

で、四大魔王の残る二つの名は、『レヴィアタン』は雌しかないとされているのでセラフォルーさんになり、こう言つては悪いが残った『アスモデウス』をファルビウムさまが引き受けた形だ。

なぜ魔王グレモリーや、魔王アスタロトではなく、ルシファーやベルゼブブを名乗ったのかというと、それはもう人間たちの考える悪魔のトップ勢のイメージに合わせたかららしい。

悪魔内部だけでなら魔王サーゼクス・グレモリーでも良かったのだろうが、外向き、特に人間の抱くイメージのことを考えると魔王と言えは……となるので。

まあ、アスタロトは魔王でも十分通用したとは思うが。そこは周りに合わせたわけだな。

「うん、その、リアス……私はルシファーらしくない、と？」

「兄上がらしくないのではなく、アジユカさまの方がそれらしい、と思つているだけですよ」

兄上がややしよんぼりし、アジユカさまはちよつと面白そう。

「レイヴェルは、人間たちがベルゼブブの名前の由来をどう考えているか聞いたことは？」

「もちろん存じておりますわ。なんでも人間の中では魔王『ベルゼブブ』の名は、異教の神の呼び名である『バアル・ゼブル』を聖書を教えを信じる者たちが貶めたことで生まれたと考えられているのだとか」

初代ベルゼブブは最古参の悪魔。バアル神との関係がいろいろと言われている七十二柱のバアル家、その初代であるゼクラム祖父さんの誕生よりも前から存在する悪魔だ。

そうなのだが、名前にね。関係してらつて感じがするよね。悪魔

の実態とか、人間はそうそう知らないことだしさ。

「兄上の消滅魔力はバアル家から受け継いだ特性ですし、それに消滅魔力はこう何もかも飲み込んで喰らいつくすようなイメージがあるでしょう？」 『暴食』を思い浮かべやすくありませんかね」

いわゆる七つの大罪の話では、魔王ベルゼブブは『暴食』を司るとされている。

兄上お得意の、小さな消滅魔力の球をブンブン飛ばして敵を消し去る技もこう蠅に食わせているように見えなくもない。ベルゼブブといえは蠅だしな。

「それで、今度はアジユカさまのアスタロト家ですが……聖書に記された金星に関わる女神の名前が元になっている。人間たちはそう考えているようでした」

「金星、つまり明けの明星ですわね」

レイヴェルに補足してもらいつつ話すと、アジユカさまも「うん」とひとつ頷いた。

まあ、実際のところはともかく、人間の中でのイメージはそんなものなのだ。

「あとはアジユカさまの『カンカラー・フォーミュラ覇軍の方程式』ですけど……万象の式を解きほぐして、その数値を改変して操るといのは……」

『傲慢』なイメージを覚える、かな？」

「ええ、まあ」

大罪の『傲慢』はルシファー。なんでもかんでも、俺の思うとおりに書き換えてくれる！ って感じのするアジユカさまの技つてそれっぽく思えるんだよな。

本人に向かって言いづらかったけど、向こうから言ってくれたからいいだろう。

「なるほど、リアスの言いたいことは分かった。どうだろうか、アジユカ。今からでも入れ替えないか？」

「魔王としての名を入れ替えても、担当する職務は変わらないぞ」

「くっ……ダメか」

兄上、仕事忙しいから代わって欲しいのか。でも、兄上に技術開発

は……どうなのだろうか。

少なくとも『悪魔の駒』はアジユカさましか無理らしいから、担当は変えられないのだろうか。

その後もしばし雑談は続いた。

「年末の件で金が手元に来たので、その金で下級悪魔向けのレーティングゲームのようなもの出来ないかと考えているんですよ」とか。

「今年から『縄張り』の運営が始まるのですけど——」とか。

「治療の件では助っ人を送っていただいております」だとか。

俺って下っ端だしねこの中だと。雑談の話題ぐらいなんとか絞り出さないと……コミュ得意じゃないからこういうの疲れる。

それで、これ終わったら、『王の駒』の話か。

ま、そっちは言いたいことを言うだけだし、そこまでもないな。

ゲームの話

「フィールド自体に『悪魔の駒』と同様の効果を付与することは可能だ。ゲームのフィールドに入った時点で、事前に登録しておいた者に各種の駒による能力上昇を適用することはできる」

「そうなるの上級悪魔の眷属になっていない者でも、疑似的にその効果を体感させて適性を測ることができますね」

「ああ、ただ一時的に駒の効果を味わせたとしても、ゲームが終われば消えてなくなるものだ。体感しただけに余計に不満を覚えさせることになるかもしれない」

「なるほど、たしかにそうですね。一度手にした力を手放すのは惜しい。なぜ自分は眷属になれないのかと悔しく思うかもしれません。ですが、それが可能でしたら上級悪魔が眷属に迎える際に、その相手にどの駒を使うのかを試すことができそうです」

「それは俺も考えた。だが、眷属には『王』の魔力の影響が強く及ぶ。たとえばキミの眷属……そちらのレイヴェル姫はフェニックスの魔力と『王』であるキミの魔力が混ざっている状態だ。その再現までは難しい」

「同じ眷属候補でも、『王』になる者の魔力の違いによって駒の効果に差が出てくるわけですか」

「『王』となる者の力の差によって、駒の容量は変化する。それと同じさ」

食事と雑談は進んでいる。話題が『治療で稼いだ金で下級悪魔用のレーティングゲームを作ろうと考えている事』になってからは、ほとんどアジュカさまと俺しか話していないが。

兄上は『悪魔の駒』関連はアジュカさまに任せきりなようだ。そもそもアジュカさましか作れないのだから、そうするしかないのだろうけれど。

「……となると、『悪魔の駒』の効果はないものとして下級悪魔本来の実力のみで競う形の方が良さそうですか？」

「どうかな、『悪魔の駒』の効果ありの試合と、効果なしの試合を別枠

でやることも考えてみたらどうだろう？　そうやっていろいろと考えている時間は楽しいものだ。俺の場合は、その途中で運営やゲーム内容に口出しする権利を奪われてしまったからな」

アジユカさまは『悪魔の駒』の開発者で、レーティングゲームの基礎を作った人物でもある。だが、現在はほとんどゲームの運営に関わっていないと聞いている。

ただし、どうもゲーム内に不正が行われた場合や、システム以上なことが発生したときには呼び出されるらしい。

「それは『悪魔の駒』と政治を絡め過ぎたから……と以前どこかで聞きました」

今の悪魔社会では、レーティングゲームがかなり大きな影響力を持つている。下級悪魔から、中級、上級、最上級と昇進していく際に積み上げる功績としても、レーティングゲームでの活躍が高く評価されているのが現状だ。レーティングゲームメインで活動しているトップランカーたちもほぼ最上級悪魔だしな。

内戦以降大きな戦争がないので、戦功の代わりとして機能させているような形だ。

「ディオドラか、ラティアか……それとも父か母からだろうか？」

「どなたからだったかまでは覚えていませんが、おそらくアスタロト家で……でしょうね」

アジユカさまは、その辺りのことを実家で愚痴っていたことがあったらしい。

まあ、俺はアスタロト家には結構出入りしているから、ディオドラやアジユカさまの父であり、ラティアの祖父にあたるアスタロト卿ともときどき話すしな。

うん、たぶん、アスタロト家の誰かから聞いたのだろう。いまいち覚えていないが、そのときは自分がこんなことしようとするとは思ってもいなかったのだから、他人事ってやつだったのだ。

「キミも気を付けた方がいい。上手く行かなければ関係ないだろうが、利益が出るようになれば何かしら言ってくることもあるだろう」

悪魔が欲深いのは当たり前なので、そういうことはあるのだろう

な。まあ、それはそれで別に構わないが。むしろそうになったら、サクツと手放してしまうのもありだ。

とはいっても――

「ただの貴族の子供の道楽ですよ？ たまたま手元に金が来たからそれを使って遊んでみるだけですから」

「どうだろうな。気に入らなければ妨害してくるということもある」
「俺には妨害を跳ね除けてまで、どうしてもやってやる！ みたいなつもりがないですからね。そのときは……ああ、でも一応周りに声でもかけてみますか。多少は面倒ごとが減るかもしれませんし。いや、逆に増えるかな？ まあ、そのときはそのときですか」

転生者ではない、生粋の下級悪魔の中にもサイラオーグが見つけて来た『戦車』のリキーゴのような突然変異みたいな者がいる。業績自体は赤字でも、そういった者が一人でも発掘出来れば御の字程度――多少はソーナのこともあるかもしれない――の話なのだ、ダメならダメでポイと投げてしまっても構わない。所詮はあぶく銭よ。

とはいえ、他所から邪魔されてやめるってのも面白くない。なら、ある程度はお仲間を募っておいた方がいいのかもしれないな。

「周りに、というと？」

「ああつと、この間の会見のときに俺が交流があると名前をあげた御家がありますよね？」

「言っていたな」

「その家の友人にでも声をかけてみようかと。始めてみたはいいけれど、参加者が誰もいなかった……なんてことになっても恥ずかしいですからね。何チームか、前もって参加してもらえるようにしておきたいですから」

下級悪魔用のゲームリーグ作ったよ、参加者募集！ ……誰も、来ませんでしたあ！ なんてことになったら、恥ずかしくて死にたくなってしまいそうだ。

「もちろん、フェニックス領からは参加させますわ」

ということ、まずは俺が声をかければグレモリー領からはいくつか参加させられるだろう。というか、軍の連中に聞いてみたときは割

と乗り気だった。

フェニックス家も、お姫様のレイヴェルに呼びかけてもらえばいいだろう。

「俺とレイヴェルでそれぞれの家の領地からまずは引つ張って、他は……ソーナに、デイオドラに、マグダランに、シーグヴァイラに、あとはウアップラ家も行けそうですね。グラシヤラボラスは……」

ゼファードルくん、あーそーぼ！ 昔、お腹パーンしちゃったけど、そこは気にしないでさ。

……なんてことはさすがに言い難いな。

「グラシヤラボラス本家のイリユーカさんとは同級生ですから、私から声をかけてみますわ」

そういえばそうだったか。

グラシヤラボラス家には、俺と同世代として扱われる少し年上の次期当主殿が居て、その下に俺と同じ年のゼファードル、そのまた下にレイヴェルと同じ年のイリユーカ姫が居る。

最近になって後継者がポコポコッと一気に増えているが、なにか子作りの秘訣でも掴んだのだろうか？ 興味深い。

「ああ、そうだった。なら、レイヴェルから頼んでもらうとしよう」

うんうん。それぞれの御家から、駒効果ありと駒効果なしでそれぞれ2チームくらい出してもらえば、とりあえず開始は出来そうだな。

全部、軍関係者になりそうだが、最初はそれで仕方ないだろう。

アイツらだって、日頃の訓練の成果を見せつけたいって思っているようだからな。領内の治安維持やらなにやらだけではなく、民衆の前でいい格好してみたい、活躍してモテモテになつてみたいって欲くらいあるだろうさ。

「少し良いだろうか？」

「はい、なんででしょうか？ 兄上」

「今の話を聞いていると、かなり政治的なものが絡んできそうな気がするのだが」

「ここまで黙って聞いていた兄上は、なにやら思案顔だ。だが、これはどうしようもない。」

「選手たちの治療体制の構築も必要だろう。それに、運営の責任者を決めておく必要もある。キミはまだ学習期間の最中、それにグレモリー家の次期当主ならば『子供の道楽』に割く時間はあまりないだろう」

戦争ゲームをさせるのだから当然ケガ人は出る。アジユカさまの言うようにその治療体制も必要だよなあ。

本当は下級悪魔なんて前線で戦わせるよりも、全員に医療でも教え込んで回復役にしたらいいと思うんだ。ネットゲのRPGでも、攻撃役や盾役、妨害役はレベル高くないと役立たずだったが、回復職はレベル低くても役に立ったしな。

ソーナもレーティングゲームの学校とか言っていないで、シトリ一家が力を入れている医療機関向けの人員育成学校を増やしたいとか言っていたら、俺もグチグチ言わなかったと思う。

「治療の方はおいおい考えながら人を集めるとして、俺の代わりに運営のトップを務めてくれそうな方にはこれから声をかけてみようかと思っています。受けてもらえるかは分かりませんが、まだこうしてみたいな程度の段階ですし」

仮に下級悪魔用のゲームリーグが上手く軌道に乗ったとして、俺がそれにかかりつきりになるわけにはいかない。まずは貴族の一般教養を覚えなさいといけないし、その後には次期当主としての実務を交えた勉強がある。父上から当主の座を引き継いだ後は、当然そちらが優先だ。

趣味で始める道楽なお遊びの運営は、そのほとんどを他の誰かに任せて少し口を挟むような形になるだろう。

「あら、そのことは私も聞いておりませんでしたわ。どなたに任せられるおつもりでしょうか？」

そういえばこれはレイヴェルにも話していなかったか。

金に困っていないなくて、俺が話をしやすく、かつ俺やレイヴェルに恥をかかせるような真似をそうそうしない。それでいて、現在忙しい役職を持っていない人物――。

「ライザー義兄上にお願いでできないだろうかと考えているんだが、ど

う思う?」

「ライザーお兄さまに、ですか……」

「ライザーくんか……なるほど」

「ライザー・フェニックス。フェニックス家の三男で、現在は特に仕事に就いてはいないか」

ライザー義兄上なら、自前でフェニックスの涙を製造できるので金に困ってはいないし、俺も話しやすい。

レイヴェルの婚約者である俺を裏切れることもそうはないだろう。これから先の長い悪魔生、妹からずつと責められる可能性を考えるとなかなか不正に手を染めにくいはずだ。

ま、別にいいけどね。横領とかあつても多少のことなら目こぼしする。ライザー義兄上は身内なので、許せる。

これが良く知らんやつを採用しておいて裏切られた日には、俺の紅髪が天を衝くところだ。

「しかし——ん、なんだ?」

何かを言いかけた兄上の言葉を遮るように、この部屋のドアを叩く音がした。急いでいるような雰囲気音だ。

「ご歓談中失礼します」

入って来た者の名前を俺は知らない。たしか、魔王ルシファーとしての兄上の部下だったはず。兄上の眷属ではないが、何度か顔を見たことはある。

その者は兄上とアジユカさまのところまで歩を進めると、俺とレイヴェルに視線を向けた。

「席を外しましょうか?」

「いや、いい。少し遮断させてもらう」

アジユカさまは俺に断わりを入れた後、魔力で音と光、その他の情報を遮る小規模な結界を張った。

俺とレイヴェルからは、テーブルの向こう側の出来事は見えないし聞こえない。

「何かあったのでしょうか?」

「あつたんだろうな。急ぎの何か」

あるいはドライグが本来持っていた力の一つである『透過』が使えたならば、情報遮断結界の内側の様子を伺うことも出来るのかもしれない。

まあ、出来てもやらないが。

「すまないが、急用が入った」

結界がほどけると、すぐに兄上は俺達に向かってそう言った。表情がゲツソリしているように見えるのは気のせいではないだろう。あまり良くない知らせだったらしい。

「分かりました。それでは俺はこれで——」

「いや、リアスの件も重要な話だ。そちらはアジュカに任せる」

ああ、と頷くアジュカさまに俺との話を任せて兄上は足早に去って行く。

席を立ち、その姿を頭を下げて見送ってから顔を上げると——アジュカさまと目が合った。

「グレモリー家にもすぐに知らせが行くだろうから教えておくが、どうやら墮天使の軍が動いたらしい」

「墮天使がですか!」

レイヴェルと二人で驚いていると、アジュカさまから身振りで着席を促される。

「昨年末から、墮天使の領域との境界付近で騒ぎがあったことは知っていますと思う」

「ええ、そのこともあって兵の治療に応援があったと聞いています」

冥界は広い。おおよそ地球の表面積と同じほどの広さだと言われているぐらいだ。しかも、冥界には海がなくすべてが陸地である。なので墮天使たちの領域との境界線もとんでもなく広くなる。

赤道一周すべてが国境線のようなイメージだ。

とはいえ、悪魔も墮天使もその境界線すべてに兵力を張り付けておけるほどの余裕も人員もない。それに、どちらも翼を持ち飛行可能な種族で、なおかつ空間転移もこなす。

そのため、地面の上に軍隊を張り付けておく意味も薄ければ、要塞を築いてもあまり効果は無い。

なので、ここでいう境界付近というのは、長年の小競り合いの中で暗黙の了解として生じた紛争用の地域ということになる。「殺し合いするときはどこでやろうな」って場所だ。

全面戦争するならともかく、そうでもないときにお互いに空間転移を用いて奇襲の繰り返しなんてやっているとキリがない。というか、それを続けているとそのまま全面戦争に突入してしまつて天使たちの一人勝ちだ。あるいは他の神話勢力が手を伸ばしてくるか。

「実は墮天使側から連絡があつた。このところ、悪魔による襲撃・略奪が繰り返されている、と。その現場に残つたオーラ、魔力の残滓からして上級悪魔クラスが複数関わっているようだが、どういうことか説明しろと言つて来ている」

「それで我が家にも連絡があるわけですか」

上級悪魔複数名による墮天使領土への襲撃か。

魔力の残滓を調べた結果ということならば、ここで言う上級悪魔は基本的には貴族の誰かつてことになる。転生悪魔の魔力量は、貴族のそれに及ばないことがほとんどだからな。

どこかの貴族家が、墮天使にちよつかいかけたんじゃねーだろうな？ 魔王が聞いているんだ、正直に言え！ みたいなお達しが各貴族家に来るわけね。

「前魔王勢力の残党の行動という線はないのでしょうか？」

レイヴェルが言う線も大いにある。なんだかんだで、内戦で敗れて落ちのびて行つた連中も多い。

「その可能性は高い。だが、そうではない可能性も否定は出来ない。それに、どちらであろうと墮天使にとっては関係のない話だ」

現行政府にも内心では墮天使や天使と戦いたいって連中はいる。たとえば俺とか。

内戦で兄上たちに敗れた前魔王の血族とそれに従つた者たちも墮天使や天使との決着を主張していたから、現政府に従つてはいるが密かに前魔王の一族らと繋がっている貴族の行動つてこともありえる。

俺もそうだが、悪魔つて割と好き勝手にあちこち動き回るから、どこの誰が墮天使をやつたのかなんて本人が申し出てこないと特定が

難しそうだ。

「それは、まあ、そうですが……俺たちも、グリゴリ以外の墮天使勢力が襲って来たとしても、まずはグリゴリを疑いますし」

墮天使の最大勢力は『神の子を見張る者』だが、そこに所属していない墮天使もいるにはいる。他にもいくつか小規模な集団があるのだ。

だが、俺も含めた大半の悪魔の認識は、墮天使Ⅱグリゴリである。それはおそらくあちら側から見ても同じこと。悪魔といえば、現政権なのだ。悪魔による被害の文句はこちらに来る。

まあ、墮天使共は前魔王勢力の残党、いわゆる旧魔王派の拠点はどこにあるかも知らないだろうしな。たぶん。

少なくとも悪魔やってる俺は知らない。さすがに兄上たちは知っているか目星は付けているだろうと思うが。

「墮天使としても、領土内で悪魔による被害があれば動かないわけにはいかない。それで境界地域の戦力を増やしてきていたようだ」

はあ、そりや兄上が大忙しなわけだ。軍事担当のアスモデウスさまも、外交担当のセラフォルーさんも同様だろう。

「では、また一当て二当て程度の小競り合いが起きるのでしょうか？」
「ここ数百年、悪魔は墮天使どもとの小規模な戦闘は幾度も経験している。」

その原因は様々だが、とりあえず一発ぶん殴らなければおさまりが付かないことってのはあるものだ。

「場合によっては……それだけでは済まないかもしれない。墮天使側の今回の大将は、バラキエルだ」

妖しい魔王と王の駒

その墮天使幹部の名を聞いて、俺は思わず身を乗り出してしまった。

「バラキエルですか」

バラキエルは墮天使陣営のナンバースリーに当たるだろう大物だ。武闘派幹部として知られ、その地位は『神の子を見張る者』の内では総督アザゼル、副総督シエムハザに次ぐものであると聞いている。

そして、そんなことより俺にとって重要なことは、ヤツが朱乃の父親であり、かつ小学生程度の年齢の娘を一人放り出した男であると言うことだ。放浪生活中の朱乃の生活の悲惨さは、俺もよく聞いて知っているところ。頼る相手もなく、食事も衣服も宿を用意する金もなく、ときに野山の草をはみ、ときに霊障などを患った人間の除霊などをして日銭を稼ぐ日々。しかも、その頃の朱乃は常に自身の命の危険に怯え続けていたのだ。

朱乃の命を狙って執拗に追い回した姫島家も好かんが、バラキエルはそれ以上に憎らしい。そもそもヤツがそうしていなければ、俺と朱乃は出会ってすらいなかったのだろうが、それは置いておく。

「バラキエルに何か思うところがあるようだね」

心の内に湧き上がった怒りが漏れ出てしまっていたようで、アジユカさまの声に苦笑の響きがある。

レイヴェルからの視線も「貴族たるもの、あまり顔に出されてはいけませんわ」と言っているようだ。

だが、俺はそういうことが得意ではない。多少は出来なくもないが、こと怒りに関してはなかなか抑え込みづらいものがある。

溜め込むと爆発してしまうしな。

「目の前に現れたならば、首を刎ねる……。いえ、生け捕りにして、じんも……拷問にでもかけてやりたいところですね」

とっ捕まえて、朱乃自身の手で痛めつけさせてやりたいところだ。

バラキエルのクソめ！ 娘に冷たい目で見下され、罵倒され、苦痛を味わわされ、屈辱と痛みに悶え苦しむがいい。

「キミの眷属には、バラキエルの娘がいたはずだが」

「ええ、だからこそですよ」

技術や裏方担当の魔王と言われるアジユカさまが、今回の墮天使陣営の動きに対してどの程度の権限を持っているのかは分からない。魔王は四人もいるし、議会なんてものもある悪魔社会の政治は複雑怪奇なので。

だが、ここは一つこの俺をその前線に送っていただきたいところだ。そこで、今バラキエルぶつころの理由を話して熱意を示しておけば、もしかしたら俺出陣があるやもしれん。

「俺はグレモリーですので、眷属を可愛がっています。もちろん朱乃もそれは同じです」

鞭で叩いて犯したり、縄で縛って犯したり、踏みつけながら鬩つたり、人間椅子を強要したり、悪魔となった今では激痛をもたらす聖水プレイを試したり、言葉で責め、苦痛で責め、と監禁凌辱の限りを尽くし、とても可愛がっているのだ。

朱乃とああいったことを嗜むようになってから、以前よりも俺は落ち着いてきたと言われる。大事なものを痛めつけることで、心の蓄積していく怒りゲージが下がっていたりするのだろう。

そして、朱乃もそれを愉しんでいる。むしろ、積極的に「甚振ってください」と求めてくる。素晴らしきwin-winな関係なわけだ。

その可愛い可愛い俺の大事な朱乃に、あのバラキエルの野郎が何をしやがったかという話だ。俺にこれを語らせたら、一時間は余裕でしゃべくりまくれるね。

「アジユカさま、バラキエルの年齢は相当なものですよね？」

「ん？ ああ、七十二柱の初代よりも年上のはずだ」

アジユカさまに若干引かれているような気がするが、ここは語るべきところ。

「そして、墮天使なのですから仕えるべき主君であり、創造主でもある聖書の神に背き敵対者となった裏切者ですよね？」

「墮天使はそういう存在だな」

「その墮天使の大幹部が、宗教は異なりますが古くから神に仕えてきた家系の年若い巫女に手を出したのです。それが朱乃の母親なのですが……そのときに日本の神に仕え続けてきた一族の者がどう考えるのかは想像が付きまますよね？」

「ああ……」

バラキエルに誑かされたと判断するに決まっているのだ。なにせ、ヤツは墮天使。肉欲に溺れて神を裏切り、一万年以上の長きに渡って人間の女と——あるいは男ともかもしれないが——交わり続けてきた存在。

スケールは小さくなるが、人間でたとえると経験豊富過ぎるマフィアの大幹部が由緒正しい神社の娘さんに手を出したような状態だ。そりゃ実家は怒るし、相手の男を信用などするわけがない。ロクなことにならないと連れ戻そうとするに決まっている。

巫女だった朱乃の母が、真剣に愛し合っていると口にしたところでそれは変わらない。

何故ってバラキエルは手練手管に長けた一万歳以上年上の肉欲のために神を裏切った墮天使だからだ。人間の小娘一人手のひらの上で転がすことなど容易いに決まっている。性経験が違い過ぎるからな。

姫島家は、朱乃の母がいいように騙されていると判断するだろう、それは。

俺が娘を連れ去られた父親の立場だったとしても、そう考えるだろう。娘がヤクザ者に騙されていいようにされている、許さん！ 取り返せ！ って。

「そうだというのに、ヤツは朱乃とその母を……日本の、娘を奪われ孕まされたことに恨んでいる一族の者の手が届く範囲に住まわせていたのです！ 結果などを用いて多少の防衛はしていたようですが、それにしあって人間の術者に破られる程度の代物。しかも、ヤツの立場であれば部下を配置することなど簡単だったはずなのに、護衛の一人も置かない！ その結果、どうなったと思いますか？」

気に入った娘がいたので手を出した。これは、分かる。

手を出した結果孕ませたので、手元に連れ去って囲うことにした。これも分かる。

そのことに恨みを持つ娘の実家があり、かつそこにある程度の力がある。その状況で実家の手の届かない場所まで連れて行かず、手の届く範囲に留め置く。これが分からない。

なおかつ、惨劇の前にも一度襲撃があつたらしいのに防御策を強化することもせず、護衛の一人も配置しない。これもまったく分からない。

墮天使の中でも最高クラスの地位があるのだ、上級墮天使をダースで警護に置くことぐらいバラキエルならば余裕だったはずだ。おのれ、バラキエル！

俺なんか、自分より遥かに弱くて正直いらんじやないかなって思っているのに、護衛を毎回付けられていると言うのに。

「襲撃を受けて母親は殺され、産まれた娘の朱乃は放浪の末にキミの下に来たと聞いている」

「ええ、そうです！ ヤツはその襲撃のとき、朱乃を庇った母親が殺され、庇われた朱乃だけがギリギリまだ殺されていないと言うあり得ないようなタイミングで現れたそうです。そして、母親を殺され、父親がその下手人である人間たちを惨殺したことにシヨックを受けた朱乃が逃げ出したのに追いかけてようともしなかつた！」

朱乃の話をしているとどうにも自然と熱がこもってしまう。

俺はそのまま、その後の朱乃がいかに辛く苦しい思いをしたのかを、アジユカさま相手に長々と語ってしまった。

「ああ、分かった。よく、分かった」

ややうんざりとした雰囲気を漂わせながらも、アジユカさまは俺の想いを分かってくれたようだ。

ちなみに、涙もろいところのあるレイヴエルは目にハンカチを当てていた。うちの嫁さんは知らない相手にはドライな風味だが、仲良くなった相手には情が濃くなるのだ。こういうところ、グレモリー向きで大変良いと思う。

「——そうして、姫島家の連中に殺されそうなところを俺が拾い上げ

たわけです。ただ、その際に姫島の者が言っていたのですが、どうもそれ以前には姫島の者が朱乃を殺せそうなタイミングで墮天使の妨害が入っていたようでして……。おそらくですが、バラキエルはそういった一人きりで旅をしていたころの朱乃の窮状を監視していたのではないかと思われる節があるのです。俺としては、娘が殺されそうな目に遭いながら辛い生活をしている姿を眺めていただろう、あのクソ墮天使を是非ともぶち殺し……。失礼、打ち倒したいのです。ですの
で、バラキエルが出てきているということでしたら、どうか俺を――」
言葉を続けようとする俺を、アジユカさまは手で制した。

「分かった。キミをバラキエルの前に出すことは出来ない。そのことだけは、本当によく分かった」

「出すことは……。出来ない？ 何故ですか！」

俺はこんなに殺る気に満ちているというのに！

「まだ悪魔には墮天使と全面的に事を構える余裕はない。天使もいる、そして最近活動の気配を強めている前魔王の血族、さらに他の神話勢力にも気を配る必要がある。この状況では、戦場でバラキエルを討ち取って総力戦に突入してしまう可能性は避けたい。逆にサーゼクススの弟であるキミが討たれたり捕らえられてしまうような事態もマズイ」

兄上は常々、悪魔の数を増やすことを語っている。そのために戦を避けたいとも言っていた。

アジユカさまも兄上の方針に賛成ということか。ぐう……。せっかく憎いあん畜生が面を見せたというのに、消し飛ばしてやれないとは……。忌々しい。

「――それに、余裕がないと言ったことと矛盾するようだが、悪魔はまだ未成熟な年齢の学生を戦場に立たせるほど戦力に困ってはいない。おそらくだが、まずはファルビウムのアスモデウス眷属、その後以最上級悪魔の誰かをバラキエルの監視にあてることになるだろう」

最上級悪魔といえば、タンニーン殿のようなレーティングゲームのトップランカーたちが思い浮かぶ。

今のところは、リュイことロイガン・ベルフェゴールもその中含

まれている。

まあ、リュイは『王の駒』を公表し、その後にはベルフェゴール家の当主と最上級悪魔の座を降りて俺のところに来る予定なのだが。

「最上級悪魔の方々を……ですか。そういうことでしたら、仕方ありません。俺がまだまだ子供の年齢であることは事実ですし」

ほんと、十代の半ばなんて悪魔としては赤ちゃんだものな……そりや戦場には行かせてもらえないか。でも、縄張り関係で教会連中とのドンパチは普通にあるんだよな。

アジユカさまの弟のディオドラなんて、ある意味最前線にいるようなものだし。最前線どころか、敵勢力の女の中に突入して銃連射してやがるからなあ……。

ディオドラが教会の女にしていることは、バラキエルが朱乃とその母にした仕打ちと比べてもなかなか酷いものだ。だが、別にこちらには怒りも何もない。所詮他人事で、しかも被害を受けているのは敵勢力の女だからな。

敵対しているはずの悪魔のディオドラに誑かされて、教会内部の情報を流している聖女やシスターもいるようだが……。仮にそのことが露見してその女が粛清されたとしても、まあ、スパイものとかではよくある話だしな。諜報活動ってヤツよ。

ディオドラの諜報といえば、あいつから聞いた話では墮天使どもは神器所有者の人間を探索してどうこうとか言っていたな。

たしか、墮天使にとって扱い難い者は殺して処分し、扱いやすい者は教育施設に集めて洗脳と訓練を施して戦力に替えているのだとか。クソ忌々しい。奴らの戦力が上がるのも苛つくが、人間の面倒はみられるのに朱乃は放置しやがったことがなお苛ついてしょうがない。はあ……、さっさと墮天使ぶち殺しに行ける年齢になりたいものだ。

もしくは、俺の縄張りに墮天使がやって来ればいい。そうなれば政府にも兄上たちにも何の遠慮も要らない。邪魔だからってことで仕留められるだろう。

いつそ、こつちから誘導して侵入させてみるか……？

「さて、それではそろそろ本題に入ろうか」

俺の思考が他所に向かいそうになったところで、アジユカさまから声がかかった。

なんとかバラキエルをぶちのめしてやりたいところだが、俺の年齢と現政府の戦を避けたい方針を持ち出されてはどうにもならない……か。残念だが、今のところは我慢しよう。

ここは大人しく『王の駒』の話に入らせてもらおう。バラキエルめ、命拾いしたな。

「俺程度がアジユカさまと駆け引きなどできませんので単刀直入に言わせていただきますが、『王の駒』を使っている者を眷属に迎えたいの、どうかその者から邪魔な『王の駒』を引き抜いて下さい！」

相手は悪魔の中では若手扱いだが、それでも数百年の時を魔王として生きてきた方だ。年季が違い過ぎる。

ここはスパツと頭を下げて頼み込むより他に手はない。

取引の材料もないし、お金で解決できることを願うしかないのだ。地位も上なら、経験も上、おまけに武力でも敵わないときたら、もうこれしかない。

「やはり、か。『王』^{キング}の駒のことを知った経緯を聞かせてもらえるかな？」

「眷属に迎えたい者の名も必要でしょうか？」

引き受けてもらったのなら当然リユイのことを伝えるが、断られた上で知られるのはあまりよろしくない。

もつとも――。

「ロイガン・ベルフェゴール。キミが眷属にしたいと考えているのは、彼女ではないかな？」

やはり調査済みか。

『王の駒』の疑惑自体は前々からあったようだし、製作者だろうアジユカさまならば誰が使用者なのかの見当などどうの昔に付けていただろうからな。

俺がチェスのキングの駒を贈った時点、あるいはそれ以前から『王の駒』使用疑惑のある者の動向を探っていたのならば一発で当たりを付けられる。

リヴラクス・グレモリーと接触した『王の駒』使用疑惑の候補者を絞り込むなんてこと、この魔王さまの調査能力があれば簡単な話だっただろう。

「はい、その通りです。リュイと名を偽り、魔力で姿を変えてグレモリー家のメイドとして働いていた彼女を気に入って眷属に誘ったのですが、そのときに正体を明かされ、『王の駒』を使用している所以他の駒との併用は危険だと聞かされました」

お手付き要員でもあるメイドとして俺の後宮で働いていたリュイに手を出し、そのまま仲が深まって……と事情をかいつまんで説明。当たり前だが、プレイ内容などは話さない。

「ロイガン・ベルフェゴールの趣味はある程度知っていたが……そうなっていたのか」

おお、なんとというか微妙に呆れたような声音だ。好色は悪魔的には誉められることで、力ある悪魔がメイドに手を付けて強い子供をたくさん作ろうってのは、兄上の政策的にも問題ないどころか推奨されていることのはずなのになあ。

「レイヴェル姫も大変だな」

「ええ、まったくですわ。ほんとうに困った『王』さまです」

「うちのラティアも……いや、この話は今は関係ないか」

アジユカさまとレイヴェルの二人から、揃ってやれやれしようがない奴だ的な雰囲気セリフを言われてしまった。

「『王』の駒についてどの程度のことを知っている？」

「使用者の力を十倍から百倍に強化するが、まだ不完全な状態の代物だということ。他の駒との同時に用いると危険であると予想されていること。生来の力が『王の駒』の容量を超えるような者が使用した場合、力を高めるところか副作用のようなものが発生してしまう恐れがあること。それから、現状のレーティングゲームのルールでは使用を禁じられていないこと……ぐらいでしょうか」

フツ、とアジユカさまが妖しく笑った。

「たしかに、ルールで使用を禁じられてはいない。だが、あれがルールの力であることは分かっているはずだ」

「ええ、ですが我々は悪魔ですので……ダメならダメとはつきり記しておくべきでしょう。悪魔の契約とはそういうものですから。それに——」

俺はここで『赤龍帝の籠手』を顕現させた。そして、亜空間からヘッドに王冠をかぶったようなデザインの子エスの駒を取り出す。本当にただの子エス用のキングの駒だ。

「聖書の神の創った『セイクリッド・ギア神器』や、選手たちが持ち込んだ魔剣などの力ある武器の類の使用は認められています。魔王アジユカ・ベルゼブブさまが製作したパワーアップアイテムの使用を控える理由が特に思いつきません。呼び名が『王の駒』なので、他の『悪魔の駒』しか持っていない者と比べて不公平のように思えてしまいがちですが、たとえばこれを『王者の冠』とでも別の名で呼んでしまえば、武器や神器と同じようなものでしょう?」

実際、元吸血鬼の転生悪魔などは、試合中に強力な力を持つ他者の血液を服用することで強化していたりする。

フェニックスの涙も、レーティングゲーム開始当初は使用数の制限などがなかったらしい。あまりに便利かつ強力すぎて後に使用数が限定されてしまったが。

ごくまれにだが、ディオドラのように元教会の者などを眷属にしていて悪魔のレーティングゲームに聖剣を持ち込む者だっている。聖剣は悪魔の弱点を突く強力過ぎる武器なので、これが通るのならば大概のものはオツケーだろう。

俺は朱乃の『雷光』特性を持ち込む気満々だしな。

「ならば、神器や特殊な武器などの使用を制限する形にルールを改定すると言ったらどうする? 『赤龍帝の籠手』も使用禁止だ」

「俺は構いませんよ。籠手がなくとも強いので。ただ、神器使いの転生悪魔が役立たずになってしまつて大変なことになるでしょうね。それに、ゲームの運営に関する今のアジユカさまの影響力では……」

神器を所有している人間は、上級悪魔が眷属を探す際によく狙われる人材だ。既に相当数の神器所有者が転生悪魔になっている。

レーティングゲームでの神器使用は『悪魔の駒』が配られた当初から許されてきたことだ。今さらこれを禁ずることなど出来はしない。運営の権限もアジユカさまの手から奪われて久しいようだし。

「そうだな、俺はあくまでゲームの発案者であり、根本的なシステムの管理ぐらいしか出来ない状況だ。その他の部分は『触るな』、『語るな』とレーティングゲームへの関与を出来なくされてしまった。政治闘争に敗れてね」

兄上たち現四大魔王の権力はそこまで強くはない。最初から武力に訴えて独裁的な政治にしていればどうとでもなったのだろうが、前魔王時代に似たそれを嫌ったのか内戦後に議員なども政治に参入可能な制度にしたためだ。

当時の情勢を詳しく知らない俺からすると、自業自得のように思えてしまうところはある。

まあ、今さらどうこう言っても仕方のない話だ。もうそうやってしまったのだから、これを変えようとするのなら大きな騒動を起こすことになるだろう。

つまり、俺がこれから『王の駒』関連でやろうとしていることについて、アジユカさまも兄上もあまり関与できないってことになる。

「俺は『王の駒』をロイガンの口から公表させるつもりですが、そうになったらどうなると思われれますか？」

「大騒ぎになることは確かだろうな。そして……いや、どうなるかな？ どういった形で公表するかでかなり変わってきそうだな」

これは悪いものだ！　と言わせるのか。

これは良いものだ！　と言わせるのか。

民衆というものは、最初の印象によつて大きく流される。あとはその後のマスコミの報道の仕方でも大きく変わってくるだろう。

そして、貴族は己の利益で判断する。得になるのならば支持するだろう、損をするのならばその逆だ。

「前魔王の残党の動きについては、まだ下級悪魔たちには知らせてい

「ませんよね？」

「ああ、だが各貴族家が対応のために大きく動いたことは気付いているだろう。何かが起こっている、とは感じ取っているはずだ」

平民どもは雑魚だが、それでも弱肉強食が基本の異形の世界に生きる悪魔だ。弱いからこそある程度は周りを見ている。

叩いても反撃してこない相手は嵩にかかって叩くが、反撃を受けそうなる者には手を出さない。ま、この辺りは人間と大差ない。

俺にはマスコミを通してしか文句も何も言わないが、グレモリー領で領民の世話を焼いていた頃のサイラオーグはいろいろ言われたよ。うなので、相手を見て態度を変えてきているワケだ。

ということで、平民相手はなんら問題ない。一步も引かずに見下しながら、「何か文句があるのか？　ぶつ殺すぞ」といった態度で臨めばよい。それだけで引込む。

謝るなど以ての外だ。非を認めて頭を下げたりすると、平民ってヤツはすぐに調子に乗る。平民には関係のない世界の話だったので、あれだ鬼の首を取ったような態度をとるからな。

お前らなんかそもそもレーティングゲーム出られないから。転生悪魔も他の駒と併用できない代物だから関係ないから。関係あるのは生まれながらに上級悪魔である我々貴族だけだから！

ということ、リュイが俺に言ったように「後悔もしていないし、悪いとも思っていない。そうしなければ勝てなかったからしただけだ」みたいな態度でいるのが良い。

で、貴族はもつと簡単だ。今は前魔王の血族の活動が判明し、戦の影が足元にまで伸びてきている。

墮天使までも動き出しているのだから、貴族の力を高めてくれる『王の駒』に文句などあろうはずもない。

転生悪魔には他の駒との併用が危険なための用いることが出来ず、平民を強化したところだが知れているとなれば、『王の駒』でもつとも恩恵を受ける可能性があるのは誰かの眷属になっていない純血の上級悪魔なのだから。

「リヴラクス・グレモリー。キミのその考えは危険だ。急に絶大な力

を得た者は目を曇らせる。政府に害意、邪な感情を抱く者が出てしまいかねない」

アジュカさまには、俺の考えなどお見通しだったのだろう。『王の駒』、量産して皆に配ったらいと思うんだけどな。

「俺はそうは思いません。同じ冥界には墮天使がいます、そして天使たちもいる。さらに他神話の勢力もある以上、現状でそのようなことをすることは合理的ではない。それぐらいは誰だって分かるはず。それに……絶大な力と言ったところで、所詮はリュイ……ロイガン・ベルフエゴール程度のものでしょうか？ アジュカさまや兄上には到底及びませんし、数を揃えてどうにか政権を奪えたとしても、その後が続かないではありませんか」

身内で争って潰し合い、それで弱った悪魔勢力の中で権勢を握ったとしてどうなるというのだ。その後には墮天使どもと衝突し、天使まで出てくればそれこそ終わりではないか。

バカらしい。万単位の寿命を持つ悪魔がほんの一時の権勢のためだけに全てをなげうって破滅をしてどうするということなのだ。

もう既に内戦に敗れて辺境に追い立てられている連中、彼らそんなこともするだろう。もう失っているので何も怖くはないのだから。

だが、現政権の恩恵を受けている状況で、果たしてそれを捨てる選択をするだろうか？

「キミはどうも悪魔というものの合理主義と利己主義を悪い意味で信じすぎているようだ。一時の感情に流され、対話よりも暴力に訴える者はいるさ」

矛盾しているのが悪魔だ。俺も損得よりも感情で動くことはある。だから言われていることは理解できるのだが……それにしても、だ。

「結局のところ、アジュカさまは他の駒と同じように『王の駒』を抜き取ったり、機能を停止したりすることが出来るのですか？」

力を得たから驕り高ぶる。これは分かる。

だが、与えられた力を奪うことが出来る者に逆らうだろうか？

アジュカさまが『悪魔の駒』を抜き取ることが可能なのは、黒歌の件で知っている。これは転生悪魔の場合は元種族から駒の力で悪魔

へと転生していることもあって、いろいろと条件があるようだが、生まれたときから悪魔をやっている純血悪魔の場合はどうなのだろうか？

『悪魔の駒』の機能停止については、これまでに懲罰としてそういった処置が取られた事例があることは知っているのだが。

「フフ、出来ない、もしくはするつもりはない。俺がそう言ったらどうするつもりだ？」

「そのときはその時ですね。安全のためにも公表はさせませんが、ロイガンは俺のところまで引き取らせてもらいます。彼女もすでに引退して俺のメイドとして仕えるということに決めていますので」

『騎士』に出来ないのは残念だが、身柄は頂く。

考えようによつては、その方が強いのだから……そこまで悪い状態ではない。リュイ自身は、現時点で『王の駒』ありならば魔王クラスの実力があるのだ。公表さえしてしまえば、そうそうどうにかされる心配はないだろう。

心配なのは、秘密を秘密のままに握り続けた場合だ。他者の利益に絡む秘密を抱えたままでは危険だろう。

俺やリュイはともかくとして、周囲に何かされると大変困る。俺がブチギレてあちこちを消し飛ばしてしまうかもしれないから、リュイに『王の駒』を売り、その後不正の指示を出していた相手だつて困りそうなものだ。真つ先に領地ごとぶつ殺されるのだから。

こういうときに過去の所業が響いてくる。怒らせた後先考えないヤベー奴つて悪評、これが生きてくるかもしれない。

ゼファードルの犠牲は無駄ではなかった。そう信じたものだ。

「安全か、たしかにそれは重要だ。『王』の駒を利用している者たちは、かつてその真実にたどり着いた者を容赦なく始末したこともあるかな。だが、そのために混乱を招くことはどう考えている？」

「俺は悪魔らしく利己主義者でありたいと思つていますので。自分と周囲の安全のためでしたら、他がどうなろうと……ということですね。なんでしたら、今度バアル家の新年の行事に参加することになりますから、そこで大声で言つてしまつても構いません。ついでに俺の

知り合いにも事前に話してしましましょう」

まあ、俺の交友関係って狭いから仮に公表せずに秘密を抱え込んだとして、人質として意味を持つ者がどれぐらいいるのかって話ではあるが。

フェニックス家と名門六家ぐらいいいかいなあ……。サイラオーグは危ないかもしれないが、ミスラさんは眠りの病だからほとんど死亡しているのと同じ扱いだろうし。

フェニックスの涙を抑えているフェニックス家と、名門六家に喧嘩売ってまでとなると……。うーん、どうだろう。リスクがデカイ気がするがそれでも消しに来るか？

悩ましいところだが、やはり表に出してしまった方が気が楽だな。言ってしまうえば、もう口封じは意味がなくなるのだから。

しかし、アジュカさまが……。結構情報を出して下さい。過去に『王の駒』の情報を調べた者がいて、そいつは消されていたのか。

まあ、リュイが『王の駒』を買い取ってから長い年月が過ぎている。そのくらいのが何度かあったとしてもおかしくはないな。

それにしても、ソイツはどうやって『王の駒』を調べたのだろうか？そこはちよつと気になるところだ。

俺がリュイから聞いたように、親しい相手から教えられた。この場合は身内の話だ。不利になるような真似はするまい。いや、その後には痴情のもつれやら何やらで不仲になって……。ということもあるのか？

他は、運営に深く絡んでいる者のところに忍び込んで……。この場合はそれだけのことが出来る諜報員が、『王の駒』の真実にたどり着いたことを、『王の駒』を利用して知っている者に知られたことになる。バレなきや何をやっても、何を知ってもどうにかされることはないからなあ。

情報を盗むために忍び込んだ際に姿を見られたか、記録されたか。あるいは、真実を知らせた相手に切られたのか。ふーむ、難しいな。「アジュカさま、過去に俺のように『王の駒』使用者を眷属にしたいと言って来た方はいなかったのですか？」

「こんなことを頼まれたのは、キミが初めてだ。そして……それを実行した者もキミが初になるだろう」

お？ これは、つまり……!?

「……それでは!？」

「ああ、時期が来た。そういうことなのだろう。いつかとは思いますが、切っ掛けがないままに続けてきてしまった。これからのことを考えると、膿うみは先に出しておいた方がいい」

「これからのこと、ですか？」

「……古き魔王の血筋、そして堕天使の領域での騒ぎ。大事になる前に内部の問題を片付けておこうということだよ」

なんとというか、何かが妖しい。

妖しいのだが。アジュカ・ベルゼブブという方は基本的に妖しいからよく分かん。

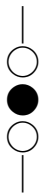
ディオドラが一見優しく穏やかなヤツに思えてしまったり、ラティアが冷たく厳しく高飛車っぽく思われてしまうのと同じで、アスタロト家の血筋がもたらす雰囲気の違いなのかもしれないからなあ。

「ロイガン・ベルフェゴールの『王の駒』。俺が抜き出そう。そして、公表もするとい。身の回りには十分に気を付けてくれ。それから……ラティアのことも気にかけてやってくれ」

そうだな、俺と仲が良いってことで狙われることがあるかもしれない。

俺はアジュカさまに、力強く頷いて見せた。

「ありがとうございます。……ところで、重ねてで申し訳ないのですが、実はローゼンクロイツの子供ことでご相談が——」



我が家に帰って来た。ようやくの我が後宮ハイレムだ。

やはり自分の巢は落ち着く。ここに貯め込んだ美女お・美少女かを愛

でるときがこの世で一番楽しい時間だ。

今回はリユイを完全に俺の下僕もにするための話し合いが首尾よく運んで万々歳。くくく、グレモリー領では一月一日が過ぎて一時間ほどだが、俺の頭の中は春満開。

「リアスさま、ベルゼブブさまのお話ですが……」

「ん？ ああ、どうした？」

俺の頭の中は、この和室セットな部屋のお布団の上で晴れ着姿のレイヴェル姫をどうやって剥いていこうかってところに飛んでいたのだが。

ぐふふ、姫初めだ。フェニックス家のお姫様だから、完全に姫初めである。素晴らしい！

「お話の通りに『王の駒』が……ひゃん」

何やらレイヴェルが話をしたがっているが、俺の下半身はすでに臨戦態勢。

とりあえず布団の上に彼女を転がして添い寝の態勢に。もう日付変わってるんだよ。

「もう、めっ！ ですわ」

ペチンとデコピンをされたので、とりあえずお預けにも耐えよう。でも抱きしめるがな。

このあつたかくて、やわつくくて、髪の毛さらさらーって感じがいいのだ。さすがに魔王城に出かけてきたところなので、香水の匂いは例のアレではないが。

「――仮に『王の駒』が貴族家に配られるようになったとすると、ベルゼブブさまの権勢はより一層強大なものとなってしまいますが……よろしかったのですか？」

「ああ、そのことか。それは別にいいんだ。悪魔全体が強くなることの方が重要だと、俺は思う」

『王の駒』を公表し、貴族悪魔がそれを使用して強くなるべきだ。そうしてこそ、真に少数精鋭の強力な悪魔の軍団が形成できる。

と、そのように上手くことが運んだ場合。

現状唯一『王の駒』を製造できる存在であるアジユカ・ベルゼブブ

さまの重要度は恐ろしく跳ね上がる。今でも相当なものだというのに、だ。

俺自身が『赤龍帝の籠手』が聖書の神の創造物であることに不安を覚えながらも手放し難く思っているように、一度手にした強大な『力』というのは麻薬のようなものだ。

味わってしまったえば、なかなか離れることが出来ない。

『王の駒』を得るためにはアジュカさまが必要であり、そのアジュカさまは一度与えた『王の駒』を奪うことも機能を停止することも可能。逆らえば、不興を買えば……力を与えてもらえないかもしれない、取り上げられるかもしれない。

平均数十倍の強化の魅力は、力を尊ぶ社会に暮らす者にとって頭を垂れるだけの価値が十分以上にある。

与えることで従える魔王ベルゼブブの権力は途轍もないものになるだろう。

「リアスさまがそうおっしゃるのでしたら……」

まあ、レイヴェルとの婚約は、フェニックス家が俺の持つグレモリー家、つまりはルシファー派への繋がりとバアル家の大王派への影響力を求めて決まったところもある。

これでベルゼブブ派が強大になつては当てが外れた感じがあるかもしれない。

ま、それは家同士の政略の話であつて、俺とレイヴェルの関係はまた別の話だ。

「まだ何か気付いたことが？」

レイヴェルがしがみついていたので、その瞳をじつと覗き込んだ。

「少し、怖かったです」

「そうか」

俺とレイヴェルでは、持っている力がかなり違う。そうなると感じ方も変わってくることもあるだろう。

妖しいからなあ……ホントに。

シーグヴァイラの大好きなウルトラなロボットたちが大戦争するゲームで、「フフフ……バッドエンドショット」とか口にしようなキャ

ラをしておられる。雰囲気は妖し過ぎて、妖しいのが普通になって逆に妖しくない気がしてくるような訳の分からなさだ。これだからアスタロト家は困る。

「ベルゼブブさまは、『王の駒』の真実にたどり着いた者が始末されたことをご存知でした」

「それは知って……ああ、そうかおかしいな」

どこで、どうやってそのことをアジユカさまは知ったのだ？

仮に始末したのがお年寄りたちだとして、『王の駒』のことを知られたくないから消したのだ。アジユカさまがそのことを知っているということは……。

「アジユカさまご自身が手を下した。もしくはその消された者が『王の駒』の情報を持っていたことを知っていて……。消されたのはアジユカさまの手の者か、あるいはアジユカさまのところから情報を盗んで……」

「はい、どういった経緯だったのかは分かりませんが、ベルゼブブさまはそのどなたかの死を黙認されたのではないかと……思ってしまったのです」

「といっても、機密情報を盗みに入ったのならその手の仕事が専門の作業員だろうか？」

ならば、ことが露見した場合にどうなるのかも織り込み済みでの行動だったはずだ。

「ええ、おそらくそうですね。少し考えすぎてしまったようですわ」

俺はそう言っ過ぎてこちなく笑って見せたレイヴェルの唇を塞いだ。知らない方が良いことってのは、ままあるものだ。変に考えすぎるのもよろしくない。

そもそも、あのアジユカ・ベルゼブブさまがどうして『王の駒』の管理を怠って外部に流出させてしまう事態なんてことになったのか……とかな。あー、怖い怖い。

やっぱ、事前にラティアに執り成しをお願いしておいて良かった。悪魔って種族は、俺の周りを見る限りではほぼほぼ年下の女性親族

には滅茶苦茶甘いから。

さて、面倒ごととは一旦忘れて新年最初のお姫さまをいただくとしようか。

姫初め

悪魔について語る上で、七つの大罪という題材は欠かせないものだ。

『傲慢』『憤怒』『嫉妬』『怠惰』『強欲』『暴食』『色欲』。

これらといわゆる一つの『萌え』には割と関係性があるのではないだろうか。

俺はプライド高い系お嬢様が好きだ。従うもよし、逆転するもよし、競い合うもよし、一粒で三度以上美味しい。

俺はちよつと怒りんぼな妹系キャラも好きだ。もー、もう！ とビシバシ叱ってくる感じには、どこか甘えたくなる魅力がある。

ヤキモチ焼きな幼馴染キャラなど、大変お世話になった。これについては語るまでもない。

無気力系の魅力も捨てがたいものがある。あのどこか世俗を投げ捨てたかのような雰囲気は、ときに元氣澆刺なメインヒロインを喰っていく。

金銭にうるさい味付けのキャラなんて、割とよく見るところだろう。こういう子が、お金よりもアンタのことが……とか言い出すとたまらないし、ビジネスライクなお付き合いもそれはそれで良いものだ。

大食いキャラなんてどこにでもいるもので、性格の良し悪しに関わらず追加できるお手軽な要素だ。

さて、本題の色欲だが——えっちな女の子が嫌いな男などいるだろうか？ いや、いない（断言）。

これらの要素は適量の範囲内であれば、ただ単に可愛いだけなのである。

つまり、悪魔の女の子は総じて可愛いということだ。

ちなみに俺は、自分が興味のないことはやりたくなくて、かなり怒りっぽく、自己中心的で、好色かつ独占欲が強いことは自覚している。まったく可愛くない。

身分の高い立場に生まれて財に困らず、強さは将来的には悪魔の最

高峰に至りそうで、ついでに顔も良いなんて恵まれた状況でなければやっつけていけないような性格だ。

前世の俺はこの我ながらろくでもない精神性を、ぐ——つと抑えて堪えて生活していたのだから、なかなか大した忍耐力だったのではないだろうか。

さて、日付は一月二日姫初めの日。

去年は婚約もしたし『悪魔の駒』も解禁され、いろいろな美女・美少女と関係を持った。思い返せば、「ああーん♡」なことや、「はあーん♡」なことまで頭がいっぱいになる。

今年は一切どうなることか。あんな出会い、こんな出会い、あるいはこれまでに出会った女との関係性がガラツと変わってムフフなこともあるかもしれない。そう思うと実に楽しみだ。

で、そんな期待に満ちた今年最初のお相手は——今生での最初の相手であり、婚約者にして未来の正妻、眷属の『女王』で、金稼ぎのパートナーでもあり、将来的には領地経営もやってくれる感じの俺にはもったいないくらいの実によく出来た娘さん、レイヴェル・フェニックスである。

レイヴェルの性格は、七つの罪のどれに当てはまってくるのだろうか？

当てはめようとすればどうとでもこじつけられるが、今のところ俺としては——まあ、どれも可愛い範囲内ではないな。

小さく狭く暗い穴の中に、硬く長く細い棒が入っていく。某の先端には引っ掛けるように曲がついて、それが穴の中をカリコリと引っ掻き、するりと出て行き、また中へと侵入してくる。

片耳の下には晴れ着姿のレイヴェルの膝の感触と温かき、上に向けた耳の穴に耳かきが入って来ては出て行って……ああー、幸せ。足元に感じる畳の具合もいい感じだ。

耳かきなんぞ別にする必要はないのだが、敢えてやっってもらっているのはそういうプレイだからである。

「はっ」

「ん」

梵天だっただろうか、耳かきについている白い毛の塊がもぞもぞつと入ってくる。んん、この瞬間はいいものだ。

しかし、なぜ梵天？ たしかブラフマー神のことだったはず。ブラフマー神は耳かきの神さまだった？ 調べたら分かるだろうけど、まあいいか。そんなことよりこの細毛の塊が耳穴のなかでござござごそつとする感触よ。

「ふ〜っ……」

「ふああ……」

ふへえ……やはり、いいものだ。最後にこう息をフーっときれるのもね。たまらんね。人間は耳かきをやり過ぎるとマズイらしいが、こちとら悪魔なのでやりたい放題。実に良い良い。

「旦那さま、反対もしますから向きを変えてくださいまし」

「うん」

「ふふ、今日は甘えてくださるのですね」

「そういう気分の日もあるんだ」

俺は普段、レイヴェルに対して上からものを言っている。

これは『王』と『女王』、主と眷属という立場。グレモリー家の当主となるのは俺で、レイヴェルは我が家に嫁入りしてきて補佐する立場ということもあるが——他にも大きい要因として、彼女の嗜好もある。

英雄を支える女になりたい。そう望んだレイヴェルは、自分の男に上からものを言われたいようなのだ。魔王の装束にも興奮していたしな。

メイドさんを征服し、従属させ、支配したい俺とは相性がいい感じだ。プレイとしてなら着せてもいいのかもなメイド服。

普段からそうしていると、フェニックス卿に怒られそうだが。「うちの娘を何だと思ってるんだ！」とか。

そんな俺だが、たまにはゴロゴロ甘えてみたくなる日もある。

ああー、年下で、自分より背がぐつと低い子にデレデレと甘えるのは良いものだ。頭の中がダメになるこの快感、今の俺はきつと余所様

には見せられない顔をしているに違いない。

そんなことを考えながら、俺は身体を回して頭の向きを変えた。耳かきと言えば「膝枕」。これは外せない。

膝枕にも種類があつて、相手の身体の向きに対して正面から行くのか、あるいは横から行くのか。そして、相手に対する顔の向きはどうするのか。

今回の俺のチョイスは、安定の正面からである。こうすると顔を下向きにした際にレイヴェルの両腿の間に鼻や口が納まる感じになつて、ちよいと変態的だが具合が良い。くんくん。

「もう、そんなところ嗅がないでくださいまし」

「どうせこのあと……」

「もう！ こつち向いてください」

クンカクンカと口で言っていると掃除の終わつていない方の耳を軽く引つ張られたので、イテテとぶさけながら顔を横に向ける。じゃれ合いってのも楽しいものだ。

「動かないでくださいね」

「はい」

あ、あ、ああつ、レイヴェルの硬くて長いものが俺の敏感な穴の中に……、奥の方、ゴリゴリされてるう……。と、脳内で変な解説を付けてみたくなる心地よさ。

耳に棒を突つ込むと言うのは、普通に考えて危険な行為だ。前世の俺は別に何も持つてはいなかったので、その手のお店で見知らぬ姉ちゃんにお任せできた。

だが、今生の俺は『持つ者』だ。地位、金、力、それらを悪魔の社会で上から数えた方が圧倒的に早いくらい所持している。

それが、おまえ、こんなちよつと腕力と魔力を籠めてブスツとされたら大事な膜とか、その奥の重要器官、下手すりや脳みそこねこねされちやいそうなことを他人にさせられるかつて話だ。

悪魔の肉体は人間のそれとは違うところも多いので、まあ、大丈夫と言えば大丈夫なのかもしれないが、やはり滅多な相手には任せられない行為だ。

それを、こう、許せるというか。してもらっても気にならないというか。やって欲しいと思える相手がいるってのは、こう、いいものだなんて……ふへえ……しゃーわせ。思考がとろけてまう。

「気持ちいいですか？」

「ん」

耳かきしてもらっているとき、俺はなんだかしやべれなくなってしまう。なんとなく頭をちよつとでも動かすのが怖いというか。だが、それが良いというか。

だが、幸せな時間にもいつか終わりが来るものだ。息をフツとされて、ブラフマー神をつっこまれてぐりぐりされ、もう一度……。

「ふく……っ」

「ふああ……」

「はい、終わりですわ。……ふふふ」

俺の蕩け顔が余程おかしかったのか、起き上がったから見たレイヴェルの口元はニヤけている。ふふん、ニマニマしやがって、お前もすぐにこうなるんだよ！

「じゃあ、次はそっちの番だな」

そう言つて、俺は自分の膝の上を叩いた。正座をするときに、とある理由から少しばかり苦しかったが、まあ仕方のないことだ。

「あら……困りましたわ。旦那さまがそれでは、どこに頭を置いたらいいのか困ってしまいます」

コレは仕方のないことなのだ。この後レイヴェルとヤルのだから、正座した俺の股間にエツフェル塔が建造されてしまっているのは仕方がないことなのだ。

「そんなこと言つて、レイヴェルだつて……」

「あ、おやめくくださいまし……ああっ♡」

俺の股間に目を向けてからかうような口調のレイヴェルを後ろから抱くように捕まえ、おくみ 枉とか言う着物の合わせ目の部分から手を滑り込ませる。

胸元には滑り込ませるようにするりと差しこみ、太ももの辺りは大胆にはだけさせるようにして——そうしてレイヴェルの上と下の敏

感な部分に触れた俺の指先は、それぞれに彼女が興奮している証に触れた。コリつとぬるぬる。

「あっ……やあっ……♡ まだ、だめですわ。そこは……」

レイヴェルの背後から抱き着きながら、最初の日よりも育ってきた胸と、俺の指を咥え込むことに慣れた割れ目をなぞる。

そして、股の間から引き抜いた指を彼女の目の前に持ってきた。その指先には、はつきりと女の滑る蜜が付着している。

「そっちだって、準備で来てるじゃないか」

「あう……そ、それは……ひやうん♡」

何か言い訳を口にしそうだったので、彼女の膨らみ始めた胸を弄っていた側の指でキュツと乳首を摘まんた。

「うう……濡らしました。旦那さまのお耳の穴を掃除しながら、濡らしてしまっていましたあ」

「じゃあ、一緒だな」

「だって……この後のことを考えてしまうと、どうしても……。仕方ありませんわ」

「そうだよな。仕方ないよな」

俺の婚約者が、耳かきしながら濡らしちゃうようなエツちな娘で嬉しい。抱きしめたくなる。

彼女の頭の上に顎を乗せるような形で、両手と両足を使って抱え込む。この位置は、俺だけのものだ。誰にもやらん。

「ああ、もう……。あ……。っ、これ……はあー……」

以前やった、魔力を溶かし合わせるのを軽く誘う。

すると、レイヴェルもすぐに応じてくれたので、しばしお互いの呼吸、身体と心から放たれる魔力を合わせて過ごす。

初めてやったのように、うっかり魔力を膨れ上がらせてしまうようなことは、もうない。たぶん。

気持ちいいから、こっそり続けていたので慣れてきたのだ。お控えくださいと言われていても、やはり気持ちいいことには勝てない。やりたいことをやる。それが悪魔。

心、身体、心臓の鼓動、それらが同調して揃ってくるような心地良

い感覚。まるでレイヴェルと一体化しているような気分。それをしばらくの間楽しんだ後、俺は彼女を離して座り直しました膝の上を叩いた。

「ほら、続き」

耳かきを片手にポンポンと膝を叩くのを繰り返すと、だらしない顔になったレイヴェルはその上に横向きに頭をのせた。

彼女の顔の向きは俺の腹に向けられていて、その眼前には未だ健在な大ピラミッドが存在している。

「くんくん……」

「こら、嗅がない」

「うふふ、さっきのお返しですわ」

「ハハハ、こいつめ」

自分の股の間を嗅がれるのは恥ずかしかがっていたクセに、俺のモノを嗅ぐのは平気とか分けわからん。

だが、それもよし。戯れなのでノリでやってしまうのだ。

「ふあつ、やあん……押し付けないでくださいまし」

レイヴェルの頭を掴んで俺の腹の方へと引き寄せる。俺の肉棒にぐりぐりと顔を押し付けられる形になった彼女は、「いやん」などと言いつつも楽しそうに頬をすりすりとしてきた。

うむ、なんだか分からんが俺も楽しいのでよし。嫌がる女を無理矢理とか、快樂漬けにした女に奉仕させたりとかも良いが、こういうのも全然ありだ。むしろ、一番好きかもしれない。

耳かきをしてやると言いながら、いきり立った肉棒を女の子の顔にこすりつけるセクハラ美少年おじさんと化した俺は、またもしばしの時をキャツキャウフフと楽しんだ。

「動くなよ」

くすぐったそうにしながら甘えてくるレイヴェルとのひと時を堪能した俺は、そう言って彼女をたしなめた。

「旦那さまのせいなのに」

外ではツンと澄まし顔のレイヴェル。そんな彼女と子供のように——実際そう言ってよい年齢なのだ——じゃれ合うのは楽しいの

だが、いつまでもそれでは先に進めない。

まあ、無理して進まずともこれはこれで……という気持ちもあるにはあるのだが。

「入れるぞー」

「んっ、はい」

レイヴェルの可愛らしい耳穴に、俺の手にした引っ搔き棒がスルスルと侵入していく。

耳の穴の中というのは普段それほど刺激を受けない場所なので、なかなかに敏感だ。当然ながら音も良く響くので、やっている最中などはここに舌を突っ込んで音責めなどもよくする。

ま、性感帯の一つと言っても良いだろう。そこをこうしてやると――

「ふう……んふう……」

「危ないからあまり頭を動かすな」

「だってえ……、こん、な……」

あくまでもそーつと、そーつと、優しく優しくだ。硬いもので擦っているのだから、そこは慎重に。しかし、俺に宿る愛欲の魔力は女の身体の何処からだって官能を導き出す。

ふふふ、耳穴責めでよがってしまった方がいい。でも、怖いからピクンピクンするのはやめてくださいねー。

コショコショと搔いていくが、特段レイヴェルの穴の中に取りべきものはない。悪魔なので、その辺りは綺麗なものだ。魔力でどうとでもなるからな。

「ああ……、ああ……、んう……」

「艶っぽい声を出すなって……俺のがもつと硬くなる」

レイヴェルの眼の前でグンつと布を持ち上げて自己主張している性欲の塔が、彼女の声に反応して大きさを増していく。硬く、長く、太く。

彼女はそれを熱っぽい目で見つめな、今までとは違う快感に身をゆだね、それでいて反応して動くことも出来ない。

荒い吐息を布越しに感じながら、俺はしゆるしゆると耳かきを動か

していった……。

「ふっ！」

「ひうん♡ ……あ、もう、おわり、ですか……？」

さすがはグレモリーの魔力だ。耳かきしてただけで、レイヴェルがとろつとろの蕩け顔になっている。

もつと穴の中を弄って欲しいと、おねだり顔で俺のモノを唇でついでばんでくるくらいだ。

「次は反対側」

「あつ……はあい」

で、その場でゴロンと転がって後頭部をこつちに向ければいいというのに、何故か起き上がって反対側から俺の膝に頭をのせてくる。

そんなに俺の肉棒を眺めていたのか、いやらし可愛い婚約者め。もつと感じさせてやろう。

「あつ……♡ ふっう……ん♡」

「ここがいい？」

「あはあ……っ♡」

「動いたらダメだぞ」

「んっ……はい」

しかし、今のレイヴェルはどんな気分なのだろう。不死身のフェニックスだから、仮に俺がここでグサツと押し込んで頭の中をかき混ぜてしまったとしても平気だろうから、気楽なものなのかな。

まあ、俺がレイヴェルにそんなことするわけではないが。

「ううふう……♡ んっ……ううん♡」

うーん、色っぽい声を出してくれる。耳の中もこれからは開発していかないのだなあ。覚えさせちゃったし。

危なそうだからレイヴェルにしかやらんけど。

「よっし、これで終わり」

挿入していた棒を抜き出し、フツと息を吹き込むとレイヴェルがビクンと跳ねた。

「はあ……はア……♡ 耳の中ってこんなに気持ち良かったのですね。知りませんでしたわ」

そう口にする彼女の視線は、目の前にこんもりと盛り上がった肉棒の山と俺の顔の間を行き来している。

もうすっかりぶち込んで欲しい気分なのだろう。俺だってそうだ。金髪美少女にチンコの目の前でハアハアハアハア言われ続けていたら、そりゃあそうなる。

「ああっ……♡」

レイヴェルを起こした俺は、彼女の着物の襟に手をやり一気に広げズリ下ろした。出会った頃の黒歌がよくしていたような、肩や胸の上側が丸見えの遊女スタイルよりもつと下までだ。

彼女の肘の辺りまで襟を広げて下げてやると、膨らみ始めた果実が俺の目の前に現れた。婚約前の夜はふにふにっとなじりかき程度だったそこは、今ではレモンくらいに育っている。

「布団に行こうか」

「はい♡」

レイヴェルを抱えあげ畳の上から布団の上に移ると、すぐに彼女に覆いかぶさった。

「旦那さまあ……ここ、ここにいらしてくださいまし」

「レイヴェル……レイヴェル……！」

自ら股を広げ、着物の合わせをはだけて太ももを晒すレイヴェル。彼女の秘所に指を挿し込むときつき確かめたときよりも明らかに多くの露を垂らしていた。

細い首筋。肌に張り付く金色の髪の毛の筋。巻いた髪が布団の上で広がって、華奢な両肩が期待に震えている。

本当はもう少し焦らしてから……などと考えていたのだが、俺ももう我慢できない。

「ちゅっ……んチュツ……んれろ……♡」

唇を吸いながら、手早く自分の下半身を露出させていく。

後のことは、とりあえず一発射精^だしてから考えよう。そう決めた。

「あっ、こりってされるの……ああっ♡」

彼女の乳首を甘噛みしながら、俺はパンツを脱ぎ捨てガチガチになつた肉棒を開放し終えた。

「やああ……♡ 焦らさないでくださいませし」

細く白い彼女の脚が、薄暗い室内で艶めかしく踊って俺を誘う。その内腿に鈴口をこすりつけ、先端から滲みだしている先走り汁で線を引いていく。

ああ、このきめ細かな肌のつるつるとした感触がたまらない。太ももの半ばから始まり、徐々に上へ上へ、目的地へと……近づけて。

「はあっ……ん♡ 入って、旦那さまのたくましいの、私の中に……♡」

ぐじゅりと先端がレイヴェルの割れ目に沈み込んだ。蜜壺の中に溜まっていた淫蜜が押し出され、びちゅびちゅと音を立てて京妖怪に特急で仕立ててもらった高価な着物に淫らな染みを広げていく。

「熱い」

「あああん、だん、なさまのも熱いですわ……♡」

熱くぬめる膣口に包まれて、股間から頭へと官能の衝撃が伝わって来た。

「そんなに締め付けたら……っ」

「ああっ、でも、んっ……♡ なって、勝手にそうなって……んんあ♡」

啜えた龟头を離すまいとキュツと締め付けてくる膣、その奥へとじりじりとペニスを押し込んでいく。

トロトロに潤んだ肉襞をカリが擦りつけ始めると、レイヴェルは口を半開きにして小刻みに身体を震わせた。

「あッ……♡ ああっッ♡」

今日のレイヴェルはどうやら相当興奮しているらしく、なかなか入って行かない。慣れ親しんだ牝穴だというのに、おそろしいくらいの食いつきだ。

そんなギユウギユウと締め上げてくる媚肉の筒の中を、ヌルヌルとした愛液の滑りを頼りに奥へ奥へ。

「あああっッ♡」

ついに先端がレイヴェルの最深部に届くと、彼女の形の良い顎がくっつと跳ねた。

「くっ……今日は……締め付けが……」

思わず呻いてしまう。膣内全体がうねり、しまり、褻が俺のモノの表面を這いまわってくる。

彼女の腰、ほどいていない帯を手で掴むと、俺は子宮の入口とキスをしている先端をさらに押し込んだ。

「あつ、あううッ♡♡！ お、おしあげ、らりえ♡」

離してくれそうにないのなら、さらに押す。押しつけて、ぐりぐりと突き上げているとやがてレイヴェルの腰がググつと持ち上がった。

「あつ、いつ、イイツ♡ いう、っん♡ いッん、……あつ、あああ あつっッ♡♡♡！」

ガクリと力の抜けたレイヴェルの唇を奪う。

唇を合わせていると自然と舌が絡まり合い始め、長々としたディープキスなっていく。俺が上から流し込む唾液を彼女はこくこくと喉を鳴らして受け入れていった。

「今日はどうしたんだ？」

「わかりませんわ……、何故か……。んあつ……あつ♡ まだ、あつ、まって、くださいませ」

一度達して力の抜けたレイヴェルの中は、いい具合に肉棒に絡みついてくる。

「俺はまだなんだ」

「あ、あ、ああ♡ あつ♡ まだ、あんんう……まだ、かんじすぎちゃ……ひいうん♡ そ、そこばっかり♡」

よがり啼くレイヴェルの浅いところを何度か力りで引つ掛けるようにして刺激し、その後――。

「んあああッ♡♡♡！」

ドスンと奥に叩きつける。

「あつ♡ あつ♡ あつ♡ あッ♡ ——んあつアアアッ♡♡♡！」

それを何度か繰り返していると、肉棒の根元からぐつぐつとしたものが上がって来て発射したくてたまらなくなってきた。

「出すぞ、奥に出す！」

「ああッ、くだしやい、くだしやいまし……♡ だんな、さまの……あつついの、おく、おくにいいイイ♡♡！」

腕と足をこちらに絡め、中出しを乞いながら腰を合わせてくる。そんな彼女の姿に俺の興奮は臨界点寸前。

感じさせるための腰遣いから、子宮にぶちまけるためのピストン運動に切り替わっていく。

「んああっ、もつと♡ あっん……もつと、ダメにしてえ♡♡」

乱れまくるレイヴェルの最奥に、肉棒を根元まで打ち付け子宮口を押し上げまくる！

「いっ……♡♡ いうっ……♡♡！ ああッ、イう……うううう♡♡！」

大きく口を開いて嬌声を上げるレイヴェルの爪が、背中に食い込んできた。

その痛みが快感になって頭の真ん中に奔り、肉棒が膨れ上がった！

「んおっ……おおおッ、レイヴェル！ レイヴェルッ！ 俺のッ、おれのレイヴェルッ！！」

「ああアッ、リアスさまあ♡！ だんなさまあッ♡！ わた、わたしのお、王さまああアッ♡♡！！」

欲棒の爆発に合わせて、レイヴェルの敏感なクリ豆を捻り上げる。

グググッと勝手に前に進む腰が、大量の精液を打ち出す肉棒を彼女の奥へ、さらに奥へと埋め込んでいく。

噴きだす白濁で彼女の中を埋め尽くし染め上げようとして。

「あッ♡！ ああッ、熱いッ♡ なか、わたしの、なかあ……いっぱい、イイっううう♡♡！！」

子宮口を押し開けられ、その中に熱く滾ったものを注ぎ込まれたレイヴェルは、その衝撃で蕩けた顔を晒しながら肢体を痙攣させた。

達している。幾度も噴きだし、撃ち付ける精液の衝撃に合わせて繰り返し連続で絶頂しているのだ。

「はあっ……♡ はあっ……♡ はあっ……♡」

レイヴェルの上に伸し掛かり、身体を重ね合って絶頂の悦びを舌で

貪り合う。

未だ萎えず硬いまま彼女を貫いている俺のモノは、まだ名残惜しそうにチロチロと残り汁を吐き出しているに違いない。

「だんなさまあ……♡」

まだ、もつと、そうねだつてくる濡れた彼女の眼差しに、俺は軽く顎を引いて答えた。

「ん、少し休んだら、この間言っていたことをしようか？」

互いの身体に手や舌を這わせ合いながら、二回戦のことを話し合う。

「この間の……ですか？」

『「ずるいですわ』って言ってたよな？ 朱乃の録画したのを観て」

「……だって、朱乃ばかりずるいですもの」

うちの嫁さんは、俺が他の女として見るところを見ると燃えてくる性質だ。

元々の性の目覚めが、実の兄の行為を覗き見ている……というものだったからなのかどうかは分からないが、取り返す的な気分で盛り上がるらしい。

で、どうも朱乃とクリスマスにやったときの映像を見て、『朱乃ばかり手間をかけてずるいですわ！』となったようなのだ。

まあ、SMって手間も暇もかかるからね。縛ったり、叩いたり、なじったり、蹴ったりで。

「だから、これから少しやろうか？ 軽くだけど」

プツと可愛らしく子供みたいに頬を膨らませたレイヴエル。そんな彼女の頬を指で凹ませると、俺は亜空間を開いて縄と筆とトロリとした粘液の詰まった瓶を取り出した。

「あう……。あの……。なにを、なさるのでしようか？」

期待半分、不安半分といった様子のレイヴエル。

「んー……。書初め？」

そう言ってから、俺は彼女の腕を後ろ手に縛った。

うん、やはり着物には縄が似合うと思う。

「書初め……ですか？」

もちろん、筆を走らせるのは紙の上ではなく、レイヴエルの肌の上だ。

書初めに

悪魔という種族は、会話に於いて苦勞しない種族だ。あらゆる言語を理解する耳と、理解させる口を持つ。

これはおそらく我々の種族が属する『聖書の神話』のエピソードに由来する能力だと俺は考えている。

あれだ、有名なバベルの塔の話だ。

昔々、おそらくはバビロニアと呼ばれていたであろう地の話。

その頃の人々は、皆が同じ言葉を話し仲良くしていた。そして彼らはこう話し合った。

「皆で協力して天にも届く立派な塔を建てて目印にしよう。この先も皆が協力していくための象徴として」

そうやって人間たちが頑張って一致団結し、大きく高い塔を建てていると、それを見物しに『聖書の神』が天界から降りて来た。

そして、天にも届かんとする塔を築こうとしている人々を見て言ったのだ。

「人々が一つの民族であると思ひ合い、同じ言葉で話し協力し合っている。これでは、人間たちは本当に天に届く塔を建ててしまうかもしれない。これはいけない。だから降りて行って人間たちの言葉を混乱させて、お互いの言葉が通じないようにしてしまおう」と。

こうして、この町は混乱の意味を持つバベルの名で呼ばれるようになった。その地で『聖書の神』が人間たちの言葉を混乱させ、人々を分断し世界中に散らしたから。

まあ、だいたいこんな感じのこの神話、これまた有名なノアの箱舟、大洪水の話の後の出来事になるらしい。

だからまあ、あれだ、大洪水で溺れた記憶もあるところで、人間たちは一致団結して高い塔を建てようとしていたわけだ。避難所かな？

で、そこに聖書の神がやって来て、このまま人間たちが協力し合う

のは気に喰わない。よし、こいつらの言葉が通じないようにして仲を悪くしてやろう。そうすれば、喧嘩を始めてなにも上手く行かなくなるだろうといったことを考えて実行した、と。

聖書の神は、他者が団結して力を高め合い、大きなことを成し遂げるのが嫌いなのだろう。人間に知恵の実を与え、考えることを教えたサマエルさんにも激怒したらしいし。

しかし、あれだな。下の者たちに力を持たせると、邪な考えや悪意を抱いて反逆するに違いないっていう『王の駒』関連でのベルゼブブさまの意見や、平民たちを愚鈍にしようとしているように思える兄上の政策にも通じる話だ。聖書の神と魔王で、下の立場の者を制御する際の意見が一致しているっぽいのは少し面白いところではあるか。

俺的には、『悪魔』は皆で強くなり、武威でもって他を従え、一緒に栄耀栄華を満喫しようぜ！　と思うのだが。

我々は、『神の敵対者』たる『悪魔』なのだから。

とはいえ、いくらグレモリー家が名家といっても次期当主程度の意見ではなかなかなあ……。　

もつと様々な意味での力を付けないと墮天使退治にすら行かせてもらえない。

まあ、楽園追放にしろ、バベルの塔にしろ、「どうして人間は死んじやうの？」とか「どうして色々な言葉を話す人がいるの？」って質問に答えるために創作された神話なのだろう。俺はそう思っている。いろんな神話に似たような感じがあるらしいし。

人間たちが言葉が通じず、文化が違い、協力し合えず、争い合う現状を神の行いってことにしたのだな。

ま、この辺りの考えは、前世の大学の教授とかの話そのままだったりするのだが。

人間をやっていた頃は神話は神話、人間は人間、現実とフィクションは違います。そんな話もあるのだなーって思っているだけで良かった。

しかし、生まれ変わって『ファンタジー夢幻』な神話世界の住人になってみると、こんな人間たちが創造したお話でも自分自身に影響が出てくる。

このバベルの塔のエピソードで、聖書の神に『話し言葉を混乱させられ、世界各地に散らされた』のはあくまでも人間たちだけだ。

悪魔は対象外。なので、我々悪魔は『話し言葉』に不自由しないって寸法よ。これは実にお得だった。

魔力で亜空間収納を使えることも考えると、いわゆる『会話に不自由しない』と『アイテムボックス』の異世界転生する系の物語によくあったお得セットが種族の標準装備だったようなものだ。とても便利。

だが、文字は別だ。会話は出来ても読み書きは覚えなければならぬ。

そして、グローバル化が叫ばれて久しく、『現代のバベルの塔』と呼ばれることもあるインターネットが普及した今日この頃、悪魔に要求される言語知識は非常に多い。人間世界各国の文字を覚えなければならぬのだ。

「ネットで依頼来ましたー!」「読めませーん!」「解読しましたー!」でも返事が難しいです!」ではお話にならない。

神話的に考えると、たくさん文字を覚えなければならぬのは聖書の神のせいってことになる。

くそ、余計なことしやがって! 人間の言葉が一つだけだったなら、ずっと簡単だったものを。

ま、脳みそスペック高いからいいけどさ。

と、愚痴はともかくとして、まず必須なのは悪魔文字だ。冥界で悪魔が用いている文字なので、これはもう完全に扱えなければ悪魔やつていられない。

平民レベルならばともかく、貴族でこれがきっちり出来ないとなると落ちこぼれ認定確実である。

その他、人間界で広く用いられている言語も大概必須科目だ。では日本語はどうかというところ……選択科目なのである。まあ、そこまで広く使われていない気がするし仕方ないかな。

ということ、日本語の読み書きが不自由でも別に恥ずかしくないのが悪魔社会。でも、俺の眷属となれば事情は変わってくる。俺の縄

張り、日本の駒王町だからね。きちんと覚えてもらわないと困る。
さて、うちの『女王』は日本語をどれぐらい勉強してくれたのかな？

薄明りの和室。その中央に敷かれた布団の上に、膨らみ始めた胸を下に向け膝を立てた姿勢のレイヴェルが居る。

彼女の着物の肩や襟は大きくはだけられ、胴は帯の上まで、腕は肘の辺りまでが捲られ、両手は背の半ばで長い振袖と縄によって拘束されている。薄暗い室内に白く浮かび上がる、細く小柄な上半身は幼げながらも淫靡に蠢いていた。

下半身もまた大きく肌を晒している。足の先こそ白い足袋に包まれているものの、それ以外は何も身に着けていない。腰上の帯まで捲り上げられた着物は彼女のふくらはぎも、太ももも、小振りなお尻も、そして女の大事な場所も隠してはくれない。

レイヴェルの後ろに回って立てた両ひざの間に視線をやれば、彼女の興奮具合とついさきほどの性交の跡がはつきりと見えてしまう。

「旦那さまあ……♡」

はやく弄つてとねだり、尻肉を左右に弾ませる年若い婚約者の姿にニヤリとした笑みが止まらない。

彼女の背に片手をのせ、魔力を流し込む。紅と紫の入り混じったそれはレイヴェルの身体全体を覆うように広がって行き、着物も髪も肌の艶や張りも失わせることなく体表面に付着した汗や様々な液を『消滅』させた。

「ふああ……♡」

消滅魔力に全身を呑まれる危険な状況にも、レイヴェルは恍惚の表情を見せるだけ。掃除が終わり、さらりと程よく整ったキャンパスに筆先を下ろす。

左のふくらはぎから膝裏、後ろ腿を通って円を描くようにして尻肉をくすぐり、今度は逆順で右足をなぞる。乾いた柔らかい毛で出来た筆先を肌の上で滑らせると、それに反応して彼女はゾクゾクツと身を

震わせた。

くすぐったさと、その中に孕む快感。少し前に達したばかりで敏感になっているだろうレイヴェルの中ではどちらがより強く感じられているのだろうか。

「綺麗にしたばかりなのに、もう溢れてる」

「ああっ……恥ずかしいですわ……」

その答えは、肉の割れ目からこぼれて内腿を伝い始めた淫蜜を見ればまる分かりだ。綺麗に掃除したばかりだというのに、もう汚してしまっている。

「両手を縛られ顔を床に付け、いやらしい格好で尻を高く上げさせられ、少し撫でられただけでこれか……」

「はあう……言わないでくださいまし」

「俺の妻はとんだ淫乱女だったみたいだ」

しゅるりしゅるり。言葉でなじりながら、レイヴェルの肌に筆を走らせ続ける。

「あ、妻……んっ……はあっ♡……ふうん♡」

下半身をあらかたなぞり終えたところで、ぷつくりと膨れ上がって刺激を待ちわびていた箇所にもちよんと触れてやる。

「ひいいん……♡♡」

もももぞと緩い快感に揺れていた女体が跳ねた。クリトリスのスイッチを続けざまに何度も押しやると、それに合わせて彼女は金色の髪を振り乱しながら腰を幾度もヒクつかせる。

秘裂付近を弄ったせいで、乾いていた筆先が湿り気を帯びてしまった。ならもういいか、と淫蜜を滴らせる割れ目に筆を当てたつぷりと水気を吸わせていく。

筆先を鼻に近づけ息を吸うと、発情したメスの匂いが鼻腔を満たした。

「文字を書くから、それを当てるんだ。『女王』がきちんと縄張りの言葉を勉強している確かめないとな」

ぬるりとした粘液の詰まったビンの蓋を開ける。ビンの中身はある使い魔から採取した媚薬効果のある体液を加工したもの。

さほど効能が強いわけではないが、『赤龍帝の籠手』を用いて強化すれば官能に頭をやられた廃人を量産する魔薬にもなる代物だ。もちろん、レイヴェルにそんな真似はしない。すでに出来上がってスイッチが入っているのだからする必要もない。

弱効能媚薬ローシヨンのビンの中に淫蜜の染みだ筆先を漬ける。なに、このままならば特に問題はない。普通に使えばちよつと刺激のあるローシヨンのようなものだから。

過去にメイド三人で試用して安全性は確認済みだ。ぬるぬるローシヨン4Pは良いものだった。

「んっ……『あ』ですわ。あっ！」

彼女の背中に筆を躍らせると、少し考えた後に正答が返って来る。続けて幾つかひらがなを書いては、消滅させていくとどれも正解。

カタカナも問題ないらしい。

「正解のぐ褒美をあげなきゃいけないな」

背中の翼を出す箇所は、彼女の悦ぶ場所でもある。そこを重点的に何度も繰り返し筆で責めてやると、レイヴェルの背がグツと反り返っていく。

それだけで達する程の快感ではない。だが、無視できるほど弱くもない。くすぐったさともどかしさの混ざった責め。

「ああ……、ああ……、そこ、それ……んうううっ♡」

もっと強い刺激が欲しい。そう言っているかのように彼女は尻をフリフリ、肉筆を蜜壺へと誘ってくる。

そうやって誘惑されるとすぐにでもぶち込んでしまいたくなる。

が、今日はこれからの抱負を書き込み、それを未来の正妻に了承させる大事な仕事があるのだ。まだまだ、焦らさねばならないだろう。

堪え性のない次男坊には辛いことだが、これからのために必要なことだから我慢できる。

一度は縁がなかったかと諦めたお宝。しかし、魔王になればそのお宝を手に入れられると分かったのだ。ならば、狙うしかない。

それは同時にレイヴェルの願いを果たすことにも繋がるのだから……普通に説得してもいけそうな気はする。が、やはりエロで籠絡し

た方がお互い楽しいに決まっている。

「そろそろこっちが寂しいだろう？」

筆を持たない側の手を膝をつくレイヴェルの下にまわし、ツンと尖った胸の先端を指で弾く。

「ひいん……♡ はい……。でも、もう……」

と、おねだり眼で腰を振って見上げてくる金髪お嬢様をくるりとひっくり返した。

縛られた両手を背に回され、仰向けの状態で縦ロールの髪を布団の上に散らすレイヴェル。そんな彼女の脚を左右に大きく広げ、その間に自分の両膝をつき閉じられないようにする。

ガチガチに膨張し硬くなった逸物で彼女のクリを数度叩くと、そのままにのせておく。接近した肉棒の熱に反応しているのか、淫らに蠢く肉壺の入口が実にいやらしい。

「まだダメだ。ここからは漢字も混ぜた文章にするか……ご褒美はそれからだな」

すぐにでも欲しいのか、レイヴェルは腕と違って縛られていない両脚をこちらに絡めて来た。

男を脚で捕まえ、腰を上下させてなんとか肉棒を膣内に迎え入れようとする我が婚約者。その腹を片手で抑え勝手に啞え込めないようにすると、もう一方の手に握った筆で彼女の胸を弄り回す。

と、見せかけて後ろで縛られることで少し隙間の出来ている彼女の脇に筆先を突っ込んだ。

「ひゃっ、あはは、くすぐったいだけですわ。やめてくださいまし」
ふふん、笑っていられるのも今のうち。するりするりとしばらく繰り返していると、だんだんとレイヴェルの口の形が変わってくる。

「ひいん……♡ ああ……んんうっ♡ くふっ、んん……♡」

くすぐったい場所は基本的に性感帯である。レイヴェルくらい回数を重ねている相手のそんなところを開発していないはずがない。

いつもの指や舌ではないから、最初は笑ってしまっていたようだが……。

「んー？ くすぐったいだけじゃなかったのか？」

「あああ、だつて……そつちをそんなにされたらあ……♡ 感じてしましますわ」

挿入をせがむ割れ目と、彼女の欲しがりなクリトリスを肉棒ですつてやればこの通り。

基本的にうちの嫁さんはえつちいのだ。そこがイイのだが。

「次は反対の脇だぞー」

「ああん、そんなあ……ひゃん♡ そんなに、いじめないでくださいまし」

右から左へ、筆を持ち換えるついでに乳首をピン、ピンと弾いておく。

「いじめてほしいって言ったのはレイヴェルだよ？」

「そんなこと言ってますんわ。あ、ううっん、んふふ、ああ……♡」

くく、まだ慣れていないこつちは、気持ち良さとくすぐったさが半々と言った様子だな。

「いや、言ったから」

「言ってますんわ」

「言った」

「言ってますんー！ あふ、んううふっ、はああん♡」

こやつ結構楽しんでるな。声がそんな感じに弾んでいる。

「朱乃みたいにして欲しいって言ったよね？」

「いじめて欲しいなんて言ってますんわ、あつ、ちよっ……それ、卑怯ですわ。くっふふ……ダメ、もう止めてくださいまし」

「止めない。それにこつちもそろそろよくなってきたるだろ？ それ、こしよこしよつと」

「ひゃん、あは、あふっ、んん……っ♡」

「それにこれは、あつちと比べてマイルドな感じだろう？」

「そう、ですけ……ど、はあっ♡ んくつく」

忘れがちになるが、レイヴェルはまだまだかなり遊びたい盛りなのだ。ズツコンバツコンしまくっておいてなんだが。

俺もまあ、こういうの嫌いではない。むしろ、大好きだ。いいよね、イチャイチャしながら遊ぶの。

レイヴェルが羨ましがった朱乃との、ジャンルが違うからなあ。フエニックスに鞭とか、相当キツクしないと意味ないし。山が吹き飛ばレベルの打擲が必要になる。

魔力を籠めれば出来なくはないが、ミスって床にぶち当てると城が壊れてしまう。

「ということ、くすぐるくらいが丁度いい」

「もう、どうしてそうなるのですか」

「でも、ちよつと楽しくなってるだろ？」

「知りませんわ！……まあ、その、少しは」

ふむ、くすぐるといえば、やはりここだな。

身体の向きを変え、レイヴェルの脚に手をかける。

「あつ、ちよつ……文字がどうというのはどうされますの？」

「ここにも書けるだろう」

ぐつと持ち上げて、彼女の脚のラインをツーツとなぞっていく。白く細い脚に、ねっとりとした粘液の筋が引かれていくのはなかなかエロい。

舐め上げたくなる。

「あつ、やああ♡」

うーん、しかし、こうしてみると、足袋というのも結構そるものだ。兄上の所への訪問だったから正装用の白いのだが、柄や色付きよりもこれが一番クルような気がする。喪服スキーとかも世の中には多いと聞くところでもある。巫女さん萌えにも繋がる場所があるのかもしれない。この親指のところが股になっているのがポイントなのかもしれない。いつもと違う装いというものは、女の新しい魅力を教えてくれるものだ。

フエチな感はあるが、俺のメイドスキーも似たようなものだし、うん、これもなかなか良い良い。

まあ、今夜の俺は嫁スキーだが。

空いた片手で脚を持ち上げ、ふくらはぎや太腿に筆をサラサラと……。

「あつ、『好き』ですわ」

「そうか、レイヴェルはこういうのも好きか」

「ちがつ、書かれた文字を当てるとおっしゃったから」

「ふふふ、じゃあ、これはどうだ」

『好き』……」

「これは？」

『大好き』……ですわ。もう……似たようなこと書かないでくださいまし」

照れてる。可愛い。

「でも、本当だからな。レイヴェルの身体で、俺が好きだと思っていないところはないから」

「ああっ、もう、もう、いつもそんなこと……言っつて」

「一番好きなのは目だが、髪もいいし、首から肩のラインもついなぞりたくなる——」

と彼女の各部位を上げながら、どういうときのこんな仕草が良いだとかの話も交えて、好きなどころをつらつらと並べてみた。

うん、ちよつと俺、レイヴェルのことを見過ぎなのではないだろうか……。引かれていないかと振り返って伺うと、どうやら照れまくっている様子。なら、よし。

「というこで、ここをくすぐろうと思う」

「やだ、やめてくださいまし」

足袋を脱がせて素足にしていくのは、何やら下着を脱がすのとは違った趣があるな。

「いや、前ここを舐めたとき、物凄く悦んでたじゃないか。あの後も凄かったし」

「あ、あれは……だって、旦那さまが、バランスブレイクして、魔王のお姿で……」

分かる、分かる。足の指舐めさせるのって、征服感がこみ上げて来てグツとくるものな。レイヴェルも倒錯的な気分で盛り上がったのだろう。

まあ、手を縛られて筆でくすぐられるのは、その逆な感覚になるだろうが。でも、ま、本当に嫌なら縄くらい焼き切ればいいだけなので、

口でどうこう言っても彼女だった楽しんでるはずだ。

「ほらほら、どうだ」

「いやあ。やめえっ……ううっ、ふっ、くう、んっふっ……」

指の間や土踏まず、足裏の様々な箇所を蹂躪していくと、彼女は声をこらえようと頑張つて口を閉じようとする。

だが、その努力もこの猛攻の前には儂いもの。やがては口を開き、はしたない声を上げてしまうのだ。

「あっ、うううふっ……あはっ、やあっ、だめえっ、んあああ、やめっ、やめてくださいましっ！」

攻め手は緩めず、悶えるレイヴェルの脚を押さえつけて弄び続けてやると。彼女は縄で括られた両手を背の下にしたまま、もう耐えきれないと金髪を振り乱して暴れまわる。

声を漏らすまいと閉じていた口はいつしか開き、あられない響きで室内を満たす。

「ふふふ、お前はフェニックス家本家のお姫さまだからな、こんな扱いを受けたことはないだろう？ 蝶よ花よと育てられたワガママお嬢さまめ、俺の責めに屈するがいい！」

「いやあああー！ もう、もうやめてえ……、こんあ、こんあの、もう、ああっ耐えられませんわ」

「俺はお前の婚約者であり、未来の夫。何よりも主人だぞ？ 主の手に服従しろ！」

「あはあっ、だめえ……もう、もう許してくださいまし！ こん、こんなこと続けられたらあ……んあああっん！」

と言葉遊びも交えながら、レイヴェルの可愛い二つの足を蹴ることしばし。彼女が本気で感じ始め、笑い声ではなく甘い声を出すようになったところできすぐり責めを終了とした。

「はあ……♡ はあ……♡」

ぐったりと疲れ、両脚をだらりとあられもない角度で広げているレイヴェルのお腹を撫でる。着物の帯はそのままなので、むしろポンポンと叩く感じの方が響くだろうか。

「ぐっしよりじゃないか、くすぐられて感じてたんだな」

「もう、ほんとうに……私、旦那さまとこうしだしてから、どんどんおかしなことを覚えてしまっていますわ」

乱れた髪を顔に張り付かせ、どこか呆けたような目をするレイヴェル。また新たな開発を進めてしまったらしい。グッド。

そんな彼女をポンポンと叩いてから、頑張ったご褒美を挿入してやる。

「んんっ……♡ あああっ♡」

ずぶずぶと肉棒を割れ目へと押し込んでいくと、行き場を失った愛液がじゅぼつと吹き出して来た。

ああ、いい感じだ。このフィット感。この身体の最初の相手だからか、実に馴染む。

「あんっ、旦那さまあ……♡ どうして?」

挿入されたことで、レイヴェルはくねりくねりと身をよじり始めるが、俺はまだ動かない。

「まだ、残ってるからな」

一旦置いていた筆を手に取り、ビンの中の粘液に先を浸し、彼女の胸の周りをくるくるとなぞっていく。

「やあん……♡ あっん♡」

螺旋を描く様に少しづつ中央へと寄せていき、ピンクの乳輪をすーつとすーつと。

「はあん……♡」

乳首はずつと前から触って欲しくてビンビンだ。そこを弱く、優しく、激しく、強く、タッチを様々に変えながらいじめると、

「あんんっ……♡!!」

レイヴェルが大きな声で鳴いた。次は反対の胸だ……。

ひとしきり昂らせたところで、腰を揺すって膣内への刺激も上げていく。

「んんっ……♡ あああっ♡ ひいん♡」

思い出したようにときどき筆を持っていない方の手で、クリトリスをにゆるりにゆるり。

「はああっ、旦那さまあ……♡ もう、もう……動いてくださいまし。

……切ないですわ」

ピストンをねだる腰遣いについて応えてやりたくなるところだが、まだ大事な話が残っている。

「まだ、ダメだ。ほら、ここにも欲しいだろう？」

お腹。これまでも散々撫でまわし、こういうときでなくとも、「胸やマンコじゃないんだ。腹ならいいだろう？」と人前でも開発を進めてきた場所。そこを帯の上からたたく。

お陰様で俺とレイヴエルは人前でも熱っぽい瞳を向けあうようなベツタバタな交際関係なのだ、その光景を目撃した連中の口から知れ渡ってしまっている。

まあ、事実なのでいいが。むしろ好都合。仲良きことは美しきかな、とか言うし。美しいのは良いことだ。

「あああん♡ はやく、はやく、くださいまし」

「よしよし、今ほどうしてやるからな」

はて、着物の帯というのはどう解くのか。これがどうしてよく分からない。なかなかスマートにはいかないものだ。着付けとかに詳しいのがいると良いのだが。

肉棒で膣内をあやしなから、帯と格闘することしばらく。ようやくの御開帳だ。

「ああっ……はあ♡」

両手を後ろで縛られ、足を払って股間を貫かれ、乱れに乱れた豪華な着物の上に白く細く可愛らしい裸体が転がる。

色情の熱を帯びた瞳と、緩んだ口から吐き出される期待の籠った吐息が、俺の行為を待っている。

写真に撮っておきたくなる実に良い光景だ。撮らないが。

「また、文字を書くから」

まずは、一番上、胸の間から始めてさらさらとヒトの名前を書く。

「あんっ、『レイヴエル』」

「当たり前だ。これが一番目の名前だな」

俺は彼女のお腹をそつと撫でてから、そこに三つの名前を順に書きこんでいくことに。

「え……？」

「答えを教えてくださいか？」

「ら、『ラティア・アスタロト』……んっう♡」

腰を少し引いて、とんと一突きしてから二つめの名を。

「次は？」

「い……え？ 『イリユーカー・グラシャラボラス』……あんうっ♡」

またとんと突き上げ、最後の名前だ。

『ソーナ・シトリー』……あの……これは？」

どこか不安そうに見上げてくるレイヴェルの膾内をこね回し始める。

「んんっつ……あ……♡ え、ああ♡」

「なあ、レイヴェル。今日も思ったんだが、やはり縁つてもものは必要だな」

アジユカ・ベルゼブブさまが話を聞いてくださったのは、ラティアやディオドラとの縁があったことが大きいと思う。

……ほとんどラティアの影響だったような気はするが。

「それで、だ。古い神々のやり方に倣ってみようかと思つてな」

「はあん♡ あっ、ああっ♡ 神々、の？」

「日本で正月と言えば七福神と呼ばれる七柱の神の出番なんだが、その中に大黒天という神がいるのは？」

「えっ、うん♡ 存じておりますけど、たし、か、シヴァ神の異名だとか……あっ♡」

チンコでつけー神話を持つことで有名なかの神は異名の多い神で、その中に偉大なる暗黒というものがある。それで大黒天。

「それが日本だと、ダイコクって読みが、大国に通じるからと日本神話の大国主神とも言われていてな……。それでだ、この二柱の神には共通点があるんだが」

「共通点……で、すか？」

「妻が多いんだ。版図を拡げ勢力を拡大していく過程で、吸収した他勢力の女神を妻として娶っていったらしい」

そうやって縁を作ること、平定していったわけだな。他所から来

た強い侵略者ではなく、他所から来た我らの姫さまの夫として。

そうなると、うちのお姫さまの夫なのだから酷いことはするまいという考えも浮かんでくる。実際に統治が問題なければ馴染んでもいい。こう。

子供が出来ればなおさらだ。場合によっては、自分たちの姫の産んだ子供が強者であり勝者である者の跡継ぎになることも考えられる。併呑された地域出身の姫の子を支配者として配置する方法もあるしな。

「では、この名前は……」

「ああ、レイヴェル……お前を『女王』にしたとき約束したように、取るぞ。まずは、悪魔の中での足場を固めに行く」

シヴァ神が他勢力を併合していったのとは少しばかり異なるが、まずは婚姻によって悪魔内の大派閥すべてに話を通しやすくするのだ。

現ルシファー派は、貴族家としてはグレモリー家がトップ。問題ない。

大王派の実質的な領袖であるゼクラム祖父さんも、まあ問題ないだろう。現当主の叔父上とはアレだが、次期当主のマグダランとも良好な関係だ。

レイヴェルのフェニックス家は、俺との婚約があつたので現ルシファー派となっている。かかあ天下の伝統で知られるグレモリー家の夫人を送り出したことで発言力もかなり強い。金もあるしな。

レーティングゲームの必需品、『フェニックスの涙』の製造元でもある。そのため、ゲームプレイヤーの上級悪魔との——ローゼンクロイツのような申し上がって来た優秀な転生悪魔も含めて——ツテも多い。

「レイヴェルは、近頃のラティアの様子をどう思う？ 俺としては、押し倒したらいけそうな雰囲気を感じているが」

「それは、あ……んっ♡ はい」

ラティアはアスタロト家の分家の娘だ。分家と言ってもそこはアジユカさまの兄弟の家。彼女は魔王ベルゼブブの姪なのだ。

同時にラティアの母親はアガレス大公の妹なので、シーグヴァイラ

の従姉妹でもあるわけだ。

アジユカさまの実家であるアスタロト家は現ベルゼブ派の筆頭で、アガレス大公は中立派のトップ。ついでに、この二派閥はかなり良好な関係でもある。

アガレス家は領地にある重要な遺跡『アグレアス』の調査・研究を長い間ベルゼブ眷属に任せていて、ついこの間にはアガレス家次期当主のシーグヴァイラがベルゼブ眷属になったほどだ。

「レイヴェルなら、俺がラティアをものにする意味……分かるよな？」
「それは……分かりますけどぉ♡ また、いつもの……んっあぁ♡」
じゅぷじゅぷと肉棒が膣内を出入りするピストンの卑猥な音がする。

「いつもの」ってあれだ、俺の女癖のことだろう。

「ああ、それはもちろんだ。俺はラティアも好きだからな」

当たり前だが、不細工や好きになれそうもない女は無理だ。

「いいんっ♡ イリユーカーさんと、は……」

イリユーカー・グラシヤラボラスは、グラシヤラボラス本家の姫君。

ここは魔王アスモデウスさまを輩出した御家なので、現アスモデウス派のトップになっている。

「イリユーカーとは話したこともないが、レイヴェルから聞いた限りでは問題ないだろう」

悪魔ならば、特に貴族ならば顔は良いのが当たり前だ。イリユーカーとレイヴェルは同じ年なので、スタイルはこれからの楽しみとするとして……まあ、極端に太ったり、やせ細ったりはしないだろう。おっぱいの守備範囲は広い方だしな、俺。

性格は、ちよつと変わっているらしいが悪くはなく、好奇心が強めらしい。

あとボクっ娘とのこと。大変よろしい。

全然いける。だから、頂いて仕舞おう。婚約者とかが出来てややこしくなる前にパクツとなぁ！

「ソーナさまは、次期当主ですわ」

「ベルゼブさまが先例を作ってくれたからな。魔王になってからな

「ええっ、ええっ！ 魔王、まおう、わたしのまおうさま……ああっん♡」

打ち込んだ肉棒の先端が、入り口にぶつかると。不死鳥に手加減は必要ない。思いつきり叩き込む！

肉の槍が突き刺さり、内側から膨れた腹を上から押さえ、ぐいぐいと中のモノこすりつける！

「あつ、それえ♡♡ それっ♡♡ すごい、すごい、あつあ気持ちいい♡♡ わたひ、が……わたしの……♡♡♡」

興奮でだんだんと頭の中が煮えてくる、もうこの女を犯しまくることしか考えられなくなってきた。

「いいぞー！ こーかー！ え!? これがいいんだな!」

「ああああッ♡♡♡ はいい♡♡♡ そこお……それがああッ♡♡♡!」

腕を縄で縛られている状況、普段あまりしない体位。強烈な勢いで振じり込まれる肉槍。

レイヴェルの顎がくくつと持ち上がり、背が弓なりに反れていく。

「イケっ！ ほらっ、イってしまえ！」

「はあっ♡♡♡ いいんっ、イクッ♡♡♡ イグっ♡♡♡ イウううッ♡♡♡!!!」

射精^で！ どじゆるるッと注ぎ込みながら、興奮と勢いに任せてレイヴェルの脚をぐううつと彼女の頭の側へと押し込む！

押し掛かかり、体重をかけ、深く深く、もつと奥まで突き刺されと、槍の先を押し付ける！

「おっ、おッ!! レイヴェル!!」

「あああッッッ♡♡♡!!! リアスさまああ♡♡♡!!」
放出を終えても、一向に萎えてくれない。

余韻に浸り、息を整えながら俺の『初めの姫』を見ると、

「ああ……♡♡ すごく、よかったですわ」

「俺もだ」

彼女も大変満足そうな笑みを見せてくれた。

「縄、ほどくか」

「ええ……」

彼女の腕を縛る縄をほどくと、寄り添うように寝転がり、抱きしめた。

「まだいけるよな？」

「ええ……でも、しばらくはこのままですてくださいますし」

普通に話してもたぶん行けたのだろうが、この方がお互い愉しいからな。

父上もこんな感じで、やっているのだろうか？

ふと、そんなことを思い浮かべたあと、俺はレイヴエルとの睦み合いに没頭していった。

根回し、駒回し（上）

内藤は日本のとある町に生まれた。

幼いころから足が速く、いつもそのことで誉められ、羨ましがられていた。単純な子供はそれが嬉しくて、ひたすらに走り、走り、走り……やがてすべての者を置き去りにしてしまう。

オリンピック選手の記録を容易く突破してしまった子供は、両親を含み周囲全てから恐れられることになる。

逃げた、逃げた、逃げた。排斥の瞳から、故郷から逃げ出した。

足の速さ以外、何の取り柄があるわけでもない子供。食べていくために窃盗を繰り返すようになり、やがてその所業は人外存在を討つ連中の目に留まってしまう。

神か魔か、あるいはいはずこの英雄か。足の速さで知られる超常存在の子孫、あるいは生まれ変わりだろう。そういった話を聞いた後、内藤は連中から逃げ出した。

幸運だったのは、所詮はひつたくり程度の罪の子供とやって来た連中に実力者がいなかったことか。もしもその時の追手が力ある者だったならば、空間を捻じ曲げ、結界を形成し、逃走を許されなかったかもしれないと後に聞いた。

海にまで逃げた内藤は、そのまま海水の上を走り抜けた。足が沈む前に次の一步を踏み出す。いつの間にか、そのようなことが出来るようになっていた。

大陸に渡った後も苦難は続いた。言葉の通じる相手が少ない。稼ぐ手段も同じく少ない。結局また盗みを働き、その地を追われ、また遠方へと逃げる。十数年もの間、その繰り返す。

風よりも速く駆ける内藤の足からはいつしか靴が消え、裸足になっていた。裸足の内藤は西へ西へと駆けて行き、やがて悪魔の一行と出会うことになる。

ちよつとしたいざこざの後に捕らえられ、言葉が通じたことから事情を話してしまい。

「なら、俺達と一緒に来ないか？」

「走ることしか出来んぞ」

「なに、俺も拳しかない」

悪魔になり、仲間が来た。受け取った悪魔の駒は『騎士』。

「俺は長所を伸ばす方針だ」

己の『王』はそう言い。

「私は、神器で癒すことくらいしかお役に立てません」

元は教会にいたと言う『僧侶』が続けた。

「私など、雑用だけしか出来ませんからな！」

小太りの『兵士』はそう口にしなから、ポヨンと腹を叩いてみせた。

他にも巨体が目立ってしまつたために人間界には連れて来られなかったが、腕力だけが取り柄の『戦車』がいるのだと聞いた。

西へ西へと逃げ惑つてきた道を、東へと歩いて行く。

「みなさん、食事の用意が整いましたぞ」

『兵士』と『僧侶』の作った食事の匂いが内藤の鼻をくすぐる。

「今日の糧となつて下さつた命たちに感謝を……」

今日のメインは内藤の狩つて来た獣の肉だ。

悪魔となりかつて信仰していた神へと今日の恵みへの感謝を捧げることの出来なくなつた『僧侶』。彼女はそれ以来、己の糧とするため命を奪つた者たちへの感謝を捧げることにしたらしい。

それが神から恵まれたものだと考えなくなれば、口にする全てのものは動物か植物の遺体であり、自分が生きるために殺した命なのだから、と。

信心深い者の考えは、内藤には分からない。ただ、内藤も生きるために他者の物や財布を奪つて来た。何とはなしに、そういった考えもあるのかと思う。

「遅くなつたか。この辺りに危険はないようだ」

ほんのさわりではあるが、鬨気を纏い気配を探る仙術を学んだ『王』が周辺の索敵から戻り、共に飯を食い始めた。

この辺りの一月の夜は寒い。だが、内藤の心は暖かかった。

「宴のようだな。毎日が」

内藤の口からこぼれた言葉に、『王』が空を見上げた。

「そういえば、あちらもそんな時期か……」

思いにふける様子の『王』に質問すれば、返って来たのは今頃は丁度悪魔たちの社交の時期なのだという答え。

「俺は魔力が扱えない。そのため『御家の恥』とされ社交の場に出たことがない。昔はそのことに随分と思い悩んだ。それを思い出して……己の価値を証明したい。強さを示したい。その思いは、己を見下した連中を見返してやりたいという考えとどう違うのかと思っってしまった」

「どうでもいいだろう、そんなことは。まずは駆け抜け、その後に振り返ればいい」

「そうか……そうだな。まずは、強くならねばな」

冬の夜が過ぎていく。



一月は宴会が多い。

区切りの時期でもあるため、各貴族家の分家の者は本家に顔を出す。全員とは限らないが、最低でも各分家から代表一名くらいはやってくる。

そして迎える側となる本家は、それらの者をもてなす為の宴会を開くことになるのだ。

年末から始まり、一月の前半まで続くレーティングゲームのイベントなどもあるため、参戦している者は大忙し。試合にも出なければならぬし、宴でも話題の中心となるためだ。

この一族、身内向けの宴は数日にわたって催される。これは既婚者と婚約した相手のいる者は、自身の生まれた家と相手の家の双方の宴に出席するためである。

ある日は嫁入り先、婿入り先の家の宴に出席し、またある日は相手を連れて実家の宴に顔を出す。二日では入れ違いで顔を合わせられ

ない者が出てくるため、予定を調整して互いの親類との顔合わせを行っていくわけだ。

この辺りの調整作業も、主催する本家の者の仕事。とはいえ、これらのことは長い間続けてきたいつものこと。慣れてもいれば、大半のことは家臣が行うために手間はそう掛からない。

そのため、疲れるほどのことではなかった。むしろ、多くの貴族家当主はこの時期を楽しみにしてさえいるだろう。

貴族階級の悪魔には宴好きが多いのだから。

ただし、今年のカニックス卿は少しばかりの疲労を覚えていた。不死身のカニックス故に肉体的にはどうということもない。ただ、精神的な疲労に関しては、さしもの不死身も回復してはくれない。今年のカニックス卿は例年よりも遥かに気を遣っていた。こんなことは久しぶりだ。下手をするとレイヴェルが生まれた年以上かもしれない。

それというのも、昨年、娘のレイヴェルを婚約させたからだ。レイヴェルの婚約相手は、グレモリー家の次期当主リヴラクス・グレモリー。

現行の悪魔の国を取り仕切る四大魔王の筆頭として、ルシファーを襲名したサーゼクス・グレモリーの弟だ。

内戦からこちら魔王筆頭を輩出したグレモリー家は隆盛を極めている。グレモリー卿ジョテイクスが率いている現ルシファー派も、息子のサーゼクス・ルシファーの魔王としての職務担当が内政——大きく金に関わる——ということもあって大規模だ。

フェニックス領を取り仕切る為政者として、貴族として、フェニックス卿はこの婚約を決めた自身の判断は間違っていないなかったと考えている。

一時は、バル家次期当主マダラン・バルと結ばせることも考えたが、娘のことを思えばバル家はあまり好ましくなかったのも事実。サイラオーグを産んだのちのミスラ・バル——ミスラ・ウアップラの扱いは貴族の間では良く知られた話だ。

バル家は名門中の名門であり、率いる大王派は最大派閥。だが、

レイヴェルがあのような扱いを受けることを想像してしまうと、父親としてのフェニックス卿はためらいを覚えた。

このこともグレモリーを選んだ理由の一つだ。

幸いなことに、フェニックス領の統治は安定している。これは領民の多くが、フェニックスの一族が自分たちがいなくとも何ら問題ない一族だと知っているからだ。

豪華な生活も、使用人の給金も、フェニックスの一族は『涙』の売り上げで賄えてしまう。むしろ、そうして稼いだ金を領地に投資してきたくらいだ。

それ故に、この領地の平民たちは理解している。何か事があれば、切り捨てられることも十分にあり得る、と。だから、逆らわない。

元七十二柱、今ではそれも半数ほどになってしまった。戦と混乱で柱を失った領地がどうなったのか。その過去を知る平民はよく従う。

本来、冥界は神話における地獄。

魔王様方の様に日月を空に浮かべ、時間を制御することまでは出来ないが、領主も天候程度は操作している。元々の地獄の環境は悪魔にとっても決して過ごしやすいものではない。

そして、フェニックス家の者は自分自身の特性で懐を潤すことが可能なので、わざわざ領民から過剰に税を搾り取るような真似もしない。

統治は安定しており、御家は自身の代でこれまでになく栄えている。時勢に助けられたことは事実だが、フェニックス家歴代当主の中でも自身の評価は屈指のものとなっている。

ならば、欲をかき過ぎなくとも良い。

レイヴェルも好んでいる様子を見せ、三男のライザーとの交流もあるリヴラクス・グレモリーを選んだのは間違いではなかったはずだ。

娘から聞いた話では、いずれ義理の母となるヴェネラナ・グレモリーからも気に入られ様々なことを習っている様子。

大戦以前多くの浮名を流していたグレモリー卿を捕まえ、彼の派手な女性関係を清算。その後、実家の意見を振り切って強引に嫁入り、夫の周辺を管理し、現在の隆盛を築いたかの女傑の教えがあるのなら

ばおそろく問題ないだろう。

フェニックス卿は幾度も心の中でそれらのことを確認し、その上でこう思った。

去年は、いろいろとあった。

ミスラ・ウアプラ。

エダーギ・ナベリウス拉致事件。

旧魔王派の蠢動。

墮天使との緊張の高まり。

フェニックスの特性を『譲渡』することによる治療。

トップランカーの最上級悪魔、リュディガー・ローゼンクロイツが娘の眷属に……。

今のところそれらはフェニックス家にとって良い方向で作用しているが、今後も油断は出来ない、と。

なにせ、昨年発生した騒動のどこかしらにリヴラクス・グレモリーが絡んでいたのだから。そして、その度にフェニックス卿は『紫紅の龍帝』の『女王』の父として多くの質問を受けたのだ。

どこかそわそわとしつつも例年ときほど変わらなかった一日目が終わり、問題の二日目を迎えた。

本日は人数が多い。世間の話題の的となっている、本家の姫とその婚約者に会いたいという者が多かったためだ。普段あまり見ない顔もある。

昨晚グレモリー家の親類との顔合わせを終えたレイヴエルの本日の装いは、婚約者から贈られたと言っていた着物だった。紅に金色鳳凰の図柄。

フェニックス卿は人間界の一地方の民族衣装について詳しくはない。ただ、グレモリーの紅とフェニックスに似た鳥、実に分かりやすい構成であることは理解できる。

分かりやすいことは良いことだ。縄張りの関係で交流のある京都の妖怪に特急依頼で仕立てさせたと言いたが、なかなかどうして仕立ても悪くない。

当初はレイヴェルの普段の好みから桜色の物を用意されたらしいが、ある女性に紫に龍の図柄の着物を贈ったことを知り急遽用意させたものと聞いている。

会場内の女性の多くが洋装のドレスの中、娘のその姿は大変に目立っていた。本日の主役なので全く問題ないが。

「もう！ ご自身の瞳の色に龍では、あちらの方が本命のようではないですかッ！」

「いや、黒や紫が好きだったから……あと龍とも縁がある御家だろう？ 黒は黒歌のイメージだから」

「ダメです！ 返してもらってくださいますし！」

「贈ったものを返せとか出来ないから……な？」

「そんなことをしても、ダメです！ でしたら、せめて私の方を紅色にしてくださいまし！」

「じゃあ、それ返せ」

「返しませんわ。こちらはこちらで、頂いておきます。せっかく……私のことを思って用意して下さったのですから」

これには、このような光景を展開してレイヴェルも激怒したらしい。フェニックス卿はレイヴェルからの相談を受けた妻からそう聞いている。

しかし、本日の娘は上機嫌。婚約者殿にベツタリだ。その一件は二人の間で尾を引くことはなかったようだ。

年末のあの会見の件も、評判は悪くない。特に戦前を知る世代からは好ましく映ったようだ。

体制が変わってからまだ数百年。戦争で多くの命が失われたとはいえ、未だそれ以前の一万年を超える期間で数を増やした戦前世代の方が数は多い。そのことを考えると、悪くはなかった。

現体制からの利益を享受しつつも、現魔王の方針に不満を抱いている者。これらは特に大王派に多いところ。

リヴラクスの血筋や少ないが急所を抑えている人脈を考えると、現ルシファー派内で大王派との間に立てる位置だ。舵取りは難しいだろうが、上手くやれば双方から利を引き出せる。

あまりにも若すぎるのが困ったところだが、そこはレイヴェルを通して……。

「いかな」

フェニックス卿は、眉間を抑え目を閉じた。婚約者殿と娘の姿を見ていると、抑えたはずの欲が湧いてきてしまう。

リヴラクス・グレモリーには華がある。戦前に浮名を流したジオテイクスト、恐れられつつも憧れられたヴェネラナの血をはつきりと感じさせる容姿。

何よりもレイヴェルが魅せられたのだろう、あの莫大な魔力。

意識してやっているのか分からないが、時折見せる弱者を見下す傲慢さや気性の荒さも、あれだけの魔力があれば一種の魅力に映るだろう。難易度の高い相手を振り向かせたいと思う女性悪魔はそれなりにいる。

魔力は悪魔にとってステータスだ。強大であればあるほど、多くの者が自らの頭を垂れることを容認する。

身体能力、武術、魔法、神器、その他の力でも強さを結果として示せば認められはするが、それは理性によるもの。

だが、魔力に関しては、悪魔という種の本能がその強弱によって同種族内での上下関係を悟らせる。角の大小で上下関係を定める獣がいるように、純粋な悪魔だけで暮らしていたときは魔力の大小だけで凡その強さを測れたからだ。

そのため、名門の生まれであっても魔力が低ければ蔑まれるのが悪魔の社会。魔力に優れていなければ上には立つことは難しい。

現四大魔王が皆抜きん出た魔力の持ち主なのもそのためである。混乱期をまとめるには、若く経験が不足していようとも、それが必要だった。

この性質は転生悪魔が上級悪魔にまで昇進してなお侮られがちな原因にもなっているが、純粋な悪魔とはそういう存在なのだ。種の発生から内戦までの長い期間を通して培われた本能は如何ともしがたい。

この点において、魔力の大半を封じているサーゼクス・ルシファー

よりも曝け出しているリヴラクス・グレモリーの方が強烈だ。多くの純粋な悪魔に、本能的な畏怖を抱かせるだろう。

会場内を見渡せば、これまで社交の場にあまり顔を出さず、学校に通っていなかったこともあり、彼のその印象がより一層鮮烈なものとなっているところがあるようにも思える。

その隣に自分の娘がいる。グレモリー家の男性の伝統的な気性を考えると……。

「おっと、いかんいかん」

欲張り過ぎれば墓穴を掘ることになる。

しかし、今になって思えば婚約直後に『女王』の駒を取りに行った娘の判断は正しかった。

ラティア・アスタロト。

遅れて動き出したアスタロトの姫君は、分家とは言ってもアスタロト卿の孫であり、アガレス大公の妹の子。

魔力量ではレイヴェルとそう差がないことを考えると、先手を取っていないければ家格の差でひっくり返されていたかもしれない。

レイヴェルが、『王』の腹心である『女王』になったからこそ各家に紹介された。「婚約者を『女王』にしました」と各所に紹介しておいて、そこからの破棄はまずありえない。相당한恥をかく覚悟がある。

さらにダメ押しとして、その他の貴族・平民にも広く公開会見で周知させ、治療行為での利益も大半はあちらに流した。

ここまでやってからの乗り換えはあり得ない。

もつとも、目の前の二人の様子を見ると、いらぬ世話を焼いたような気もしてくるが……。

その後、フェニックス卿は『王の駒』の公表と、ロイガン・ベルフェゴールの眷属化の話の間かされまたも精神的な疲労を蓄積させることとなる。

親族を集めたパーティーの時期が過ぎると、今度は交流のある者を集めてのパーティーが行われる。

それらの多くは同派閥の関係者が集まるものだ。このときに注意したいことは、同じ七十二柱の家でも同派閥とは限らないことである。

悪魔社会の主要な派閥は、バアル家の大王派、グレモリー家の現ルシファー派、アスタロト家の現ベルゼブブ派、アガレス家の中立派、シトリー家の現レヴィアタン派、グラシヤラボラス家の現アスモデウス派の六つ。

これら六派閥に本家、分家ごとの判断で別個に所属しているのが悪魔の現状だ。

パーティーの会場は、多くの場合派閥の代表を務める御家の領地内にある。建築好きで見栄っ張りの多い悪魔の貴族家は、こういった時のためだけの設備を用意しているものなのだ。

「——という感じなんだけど」

「それぐらい知っているわ」

基本的には同派閥で集まることの多いパーティーではあるが、他派閥のそれに顔を出してはいけないと決められているわけではない。

特にレーティングゲームのトップランカーなどの名のある者は、話題作りや見栄などのためによく招待されるものだ。

「ラティアはあまり出かけていなかったから、一応ね」

「つまらないもの」

パーティーの主催を務めることとなる当主に代わり、他所に顔を出すのも次期当主の務め。

ディオドラは同行者としてラティアを伴い、グレモリー家のパーティー会場へと向かっていた。

本来であれば、こういったときに連れて行くのは妻や婚約者。そうでなければ眷属の『女王』か『騎士』となる。

ディオドラには妻も婚約者も『女王』もいないが、『騎士』はいる。それがどうして兄の娘、つまり年の近い姪であるラティアを連れてい

るのかと言えば、彼女が行きたがったからに他ならない。

自他ともに認める下種な男であるディオドラにも、悪魔の男性の多くが持つ目下の女性親族への甘さがあった。年齢が近いせいかわそれほどもでもないが、それでもそこそこにはあるのだ。

「しっかし、その服……目立つんじゃない?」

グレモリー家の者がラクダを乗騎とするように、アスタロト家の者はドラゴンに乗る。

ラティアは今、ディオドラの操る巨大なドラゴンの背に彼からやや距離を取って着物姿で横座りしていた。

「あの時期に贈られたのだから、こういう意味でしょう?」

「どうかなー? アイツのことだから、本気でただのクリスマスプレゼントだって可能性も……」

「……そうかもしれないわね」

「あー……なんか、ごめん」

『紫紅の龍帝』リヴラクス・グレモリーから、社交シーズン前に紫にラティアの髪色である金の龍があしらわれた服が届けば、そういった意味合いに受け取るのはおかしくはない。

ただ、ラティアと同じく社交を嫌っている彼の場合、本気でただ彼女の好む色と、アスタロト家の乗騎としてよく用いられるドラゴンを選んだだけの可能性も高い。

ラティアが社交の場を苦手としているのは、どうしても出てしまう冷徹なオーラと、高慢な雰囲気によるものだ。誰だって、自分が近寄ると談笑がピタリと止まり、場が静まり返る経験を経れば嫌になるだろう。

それに対して、ディオドラは穏やかさを感じさせるオーラと、優しいような雰囲気を持つ。表面を取り繕うのも上手いので、社交は得意だ。得意だからと言って好きだとは限らないが。

実際、よくそういった場に出された結果として、ディオドラは貴族女性が苦手になってしまった。勃たん。

そして、リヴラクスが社交に出ないのは、ただの不精だとディオドラは考えている。怠慢でワガママだ。

ただ、過去にグラシヤラボラス家のゼファードルにやらかしたことがあるので、グレモリー家としては無理には出せないだろう。やらかされても困る。

それが最近はそれなりに顔を出すようになったというのだから、婚約者であり『女王』でもあるレイヴェル・フェニックスの存在は大きいのだろう。

「今、リアスのヤツ眷属を集めてるけど、仮に駒を受け取るとしたら何がいいのかな？ ラティアとしては」

『女王』よ」

意中の相手の『女王』になりたいと願う若い悪魔女性が多い。

これは、魔王サーゼクス・ルシファーとグレイフィア・ルキフグスの馴れ初めの物語の影響だ。あの物語は広く悪魔社会に浸透しており、多くの場合ラストシーンはサーゼクスがグレイフィアを『女王』とする場面になっている。

ラティア・アスタロトの外面は、そんな雰囲気を感じさせない冷たい女だ。だが、彼女の内面はそうだったことに憧れる少女なのである。

「一年早く動いていれば手に入ったのにさ。妙な遠慮してるから」

「そんなこと、いちいち言われなくても分かっているわ」

ディオドラとはあまり交流がないが、シトリー家次期当主のソーナ・シトリーはラティアにとって幼稚舎から付き合いのある友人だ。

その関係で躊躇っている間にフェニックスに持っていかれてしまったのだから、ラティア・アスタロトは悪魔としてはあまり出来の良い方ではないのだろう。欲しいと望んだのならば、手を尽くすべきだ。

『女王』がもう無理なのは分かっているだろう？ あれだけ固められたらトレードはあり得ない」

そう言って、ディオドラはそろそろ手に入れる算段のついた自身の『女王』候補のことを思い浮かべた。貴族女はダメだが、聖女やシスターならば、グイとおっ勃つのがディオドラ。彼は狙った獲物を手に入れる為ならば、手段を選ばぬ悪魔らしい悪魔であった。

「……『騎士』よ。レイヴェルとの話は付いているわ」

「あ、そうなんだ。どうしてその行動力をもっと早く……」

「うるさいわね」

『女王』と『騎士』の眷属の役割を考えると、実に分かりやすい選択。

妥協してでもアイツの傍に居たいとは、男のディオドラにはなかなか理解しがたい感覚だ。

ディオドラにとってのリヴラクス・グレモリーという男は、一言では表現し難い。

同じ魔王輩出名家の次期当主。超越者の兄を持つ弟と、多少の親近感を抱かせるところがあるのは確か。

しかし、大きな差もある。それは、才能。

ディオドラも弱い方ではない、むしろ優秀な部類だ。だが、あちらとは圧倒的な開きがある。

『聖書の神』の業である神器ではない。悪魔として最重要のステータスである魔力。どうしようもないほどの魔力の差が、リアスが多く見せる上から目線の言動をディオドラに許容させていた。

もしも、神器の力だけで自身を上回る強さを誇られていたとしても、ディオドラは決してそれを受け入れられなかっただろう。気に喰わないヤツだと感じたはずだ。

話は割と合う方だ。大概がシモの話になるが、この貴族社会で気兼ねなくバカ話の出来る相手は貴重である。

強さとは異なる方面でディオドラを頼ってくるのは、それはそれで面白い。対価もあちらからしっかり払おうとしてくるので、今後もしも手く利用しながら付き合っていきたいと考えてもいる。

気に喰わなかったのはサイラオーグとの関わりだ。グレモリーの性質であると理解はしているが、従兄というだけであの魔力なしの出来損ないをディオドラよりも重んじているように感じられたのは、なんともイライラさせられたものである。

名家の中の名家に生まれながら、欠片の魔力も感じさせないサイラオーグをディオドラは心底から蔑んでいた。下級悪魔にいじめられていたというのも大いに納得したものだ。あれではな、と。

あの雑魚が、自分よりも重要なのか。いや、リアスから見ると自分もサイラオーグも大差ない程度なのかと心がささくれたのだ。

そのところは、サイラオーグが人間界の旅に出る前に「あちらのことを教えて欲しい」と頭を下げて来たので、多少溜飲が下がったところはあるのだが。

嫉妬ももちろんある。近くに居れば魔力の違いは嫌と言うほど分かる。正直なところいつもそれを羨ましいとディオドラは思っていた。

超越者である実の兄に、ディオドラのような感情を抱かなくて済むのだから――。

同じ両親から生まれて来て、どうしてこうも差があるのか。それを度々考えてしまう。リアスにはそれが無いように見える。そのことが心底羨ましい。

ディオドラは、いつそのこと女として生まれて来たのなら、こんな思いはせずに済んだのではないかと思ってしまうほどだというのに。多くの悪魔は目下の親族女性に甘い。かなり可愛がられる傾向にある。そのせいでワガママに育つことが多いのだと思われる。

だが男の場合は事情が異なる。よく比較される。ディオドラもあのアジユカ・ベルゼブブと比べられて育ってきた。

聞けばあの魔王となった兄は、長い間自身の力を隠していたらしい。超絶した才能を持ちながら、それを世間に知らしめようとはしなかったのだ。内戦のその時まで。

サーゼクス・ルシファアもそうだったという。そして、リアスにもそういった傾向が見られる。

超越者たちには、世間の評価など必要ないのだ。称賛などあえて欲するまでもないと、歯牙にもかけていない。

それは優秀過ぎる兄と比べられて育ったディオドラが、欲して止まないものの一つだと言うのに……。

「そういうえば、兄さんは今回も顔を出さなかったな」

「お父さまは本家に行きたがらないから」

そうだろうな、とディオドラは思う。おそらく、ディオドラのもう

一人の兄。ラティアの父親も似たようなことを感じていたに違いない。

いつもアジュカ・アスタロトの影が頭の上にある。こちらはそれに押さえつけられているかのようなのに、あちらは何も思っすらいない。そう考えてしまう。

アジュカの子供が生まれたならば、今はディオドラに与えられている次期当主の座などすぐに奪われてしまうのではないか。そう思えてならない。

そうでなければ、どうしてアガレス大公家の姫君という当時最高の妻を娶った兄が本家を出て分家を起こしたりするだろうか。

仮にディオドラが純血悪魔の貴族の女との間に子を成したとして、その後にアジュカの子が生まれたとしよう。

そして自身の子よりも、アジュカの子を次の当主に望まれたとしたら……。ディオドラの自尊心は泥にまみれることになる。

「ところでさ、約束は覚えているかな？」

「ええ、覚えているわよ。しつこいわね」

「キミとリアスとの間に子供が出来たらさ。二人目まではアスタロト家……ボクの養子にもらうから」

「同じことを何度言えば気が済むのかしら？」

「なに、後で知らないって言われたら困るからね」

ディオドラ・アスタロトは、純血悪魔の女性では勃たない。転生悪魔や人間が相手であれば、まったく問題ないのだが。

根回し、駒回し（中）

社交シーズンというのは、まったくもって面倒なものだ。

パーティー会場に顔を出せば、話したくもない相手とだつて話さなくてはならないことがある。俺、そういうの苦手なんだよな。

だからこれまででは出来る限り避けて来たのだが、

『あなたはもう婚約者のいる身、嫌だからと避けてばかりではレイヴェルさんに恥をかかせることになりませうよ』

と母上からお叱りを受けてはしかたがない。

俺自身は付き合いのない相手からどう思われようとも知ったことではないが、レイヴェルに恥をかかせるわけにはいかんしな。

レイヴェルはまだ学生だ。俺と違ってちゃんと首都リリスの名門学校に通っている。

そこで、「やーい、やーいお前の婚約者、せきりゅーてー」と後ろ指を刺されるようなことになっては申し訳なさ過ぎて俺の胃が痛んでしまう。

いや、実際はそんなことにはならないだろうけれど。元七十二柱フェニックス本家の姫君つて学校内での立場高いから。

首都リリスの名門学校の同学年で、レイヴェルより格上の生徒つてグラシヤラボラス本家のイリユークくらいのはずだ。

悪魔の子供はなかなか生まれない。やれば出来るが、毎日やって最初の子供まで数百年かかったなんてザラだ。

それでいて成長速度は人間と大差ない。外見、肉体的な成熟の速さは人間とほぼ同じ。魔力の成長も伸びが大きいのは60歳手前辺りまでらしい。

人間で言うところの大学生までの学習過程の者を子供と分類するとして、その子供が悪魔全体に占めるパーセンテージは極わずか。

戦前の方が圧倒的に長い期間があり、かつ悪魔の全体数も多かったので、生まれてくる数も多かった。戦時中かなり減ったとはいえ、まだまだ戦前生まれが多い。

そして戦後の数百年に生まれた者の中でも、子供扱いは数百分の二

十程度の割合となるので……。まあ、とてもとても少ない。

同い年に数少ない元七十二柱本家の子供がいることの方が稀だ。ライザー義兄上から同世代の話って聞かないしな。

俺の生まれ年は、名門六家の本家だけで俺にソーナ、ゼファードルと多いが……。これは世紀末だの、人間たちの間で広まっていた大予言だの、あとは地球の地軸の傾きからくる黄道十二星座の移り変わりの影響ではないかなどと言われている。あれだ、アクアリアンエイジとかそういうヤツ。

たまにお年寄りが「今世、今世」って言ってるのはコレ、水瓶座の時代って意味。

前の魚座の時代は過ぎ去って、今は水瓶座の世界ってこと。ややこしいわ。

最初、今世紀って意味かと思ってたじゃないか、間違えてて恥ずかしい思いをした。万の年月を生きる悪魔その他の超常存在からしたら、人間界の一世紀＝1000年なんて短いもので、だいたい二千年周期のそっちの方がメインになるってさあ……。俺も五千年くらい生きたらそんな感覚になるのかな？

まあ、なにせよサイラオーグやディオドラ、シーグヴァイラは少し年上だが、それだけのことで名門本家に多くの子供が生まれたってことを考えると、悪魔という種が人間たちのオカルトから受ける影響ってのはすごいものだ。今生の俺は前世最後の年の4月生まれだしな。前世には、世紀末って何かあるのかと思っていたものだ。ヒヤッハー的な。

悪魔は夢ファンタジー的な存在なので、そういうことがよくある。

と、いろいろあって、悪魔の名門学校といえども、貴族本家の者は稀なのである。それがさらに首都リリスとアスタロト領とで二つもあるのだからなおさらだ。少ない数が更に半分になってしまう。

そこに本家よりは数が多い分家出身の子供も通い、あとは平民の中の富裕層が金を積んで通ってくる。

名門学校に子供を通わせる親は、そこで出来る人脈を重視ししているのでどっちの学校に通わせようかって悩むわけだ。

俺が幼稚舎時代にちよつとだけアスタロト領の学校に通うことになつたのは……はて、何故だったか。言われて「あ、そうなんだ？」くらいでアスタロト領の方に通うことになつたような？　うろ覚えである。

あの頃のソーナは俺にくつついて回っていたので、ソーナの学校は「二緒のどこにいくー！」みたいな感じで決まつたことは覚えているけれど。

まあ、何にしてもだ。ごく少数の本家貴族の子女、それよりは多いがそれでもまだ少なめの分家貴族の子女、それとそこにすり寄つてくる多くの金持ち平民。

この名門学校の生徒の割合は、そのままほとんど貴族家の社交パーティーと同じだ。いやー、平民多いわ。

自派閥の勢いも見せねばならないのが主催側の辛いところ。社交パーティーでヒトが少ないとみすばらしいと思われてしまう。

ということ、下手な貴族家よりも金持つてることが多々ある成功した平民達もこういった席に呼ぶわけだ。

そんな有象無象の連中の前で、余興の見世物にならねばならんとは、まったくもって嫌になる。

ま、成功している平民つてのは有能な連中なワケなので、そこまで嫌いでもないが。使えて、ついでにこつちに利益を持つてくるなら有用なことだ。

精々強さアピールして、ゴマすりを頑張らせてやろうじゃないか。

と、グレモリー家主催のパーティー会場の一角で、出番待ち中になんやり頭を巡らせている紅髪イケメンつよつよ悪魔。

それがこの俺、リヴラクス・グレモリー。これから一応戦闘だというのに、最高級品な貴族服のままである。

まあ、相手が相手だしな。問題ないだろう。ことこの経緯からして、余裕の楽勝ムーブを決めることが求められているワケだし。

年末に公開放送でぶちかました俺だが、その後にグレモリー家がまとめている現ルシファー派閥のメンバーや、そこと関係の深い富裕層などから声が上がったらしい。

『おたくの息子さん、強い強いと聞くけれど、実際のところどうなの？
あと例の治療も現場で見てみたい』

こんな感じのが父上の所に届いてきたそうで、『そんなら、新年の景
気づけに見せたらあ！』といったことになってしまったのだ。

双方、実際はこんな言い方はしていないのだろうが意味はそう違わ
ないはずだ。

デカイこと言うからには、デカイところを見せねばならぬ。声だけ
大きくて何も出来ないでは、木っ端平民共と同じになってしまうので
な。

ということで、派閥メンバーの集まったところでグレモリー家次期
当主と、悪魔社会でそこそこの名の知られた暴れん坊とが戦うことにな
ったのである。

パーティー会場から見える形で整えられた、闘技場にて。

対戦相手はボーヴァ・タンニン。名字から分かる通り、タンニ
ン殿の息子である。これがまた手の付けられない暴れ者で、あっち
こっちで喧嘩しまくって困っているのだとか。

ついた呼び名が『破壊のボーヴァ』。大層なものである。名前だけ
だが。

ぶつちやけた話。もうこれは勝負でも決闘でもない。勝ちが決
まった余興だ。

ボーヴァはパワーだけなら上級悪魔クラスと言われているらしい。
ボーヴァよりもずっと強い父親のタンニン殿は、パワーだけなら魔
王クラスと言われている。

で、この俺はパワーだけならセラフォルーさんに勝っている。超越
者クラス。

父上は俺の力を知らしめるのに適当な相手を欲していて、タンニ
ン殿は素行の悪い息子に灸を据えようとしている。両者の思惑が一
致しただけの見世物なのだ。

『命さえ無事なら、あとはどうしてくれても構わん』

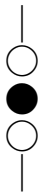
タンニン殿もこんな風に言ってたしな。スパルタ教育なのかね。
いや、ドラゴン的には普通なのか？

『それではこれより——』

おっと、そろそろ出番か。

観客を守るための防護フィールドに囲まれた闘技場。そこに足を踏み入れた俺は、目の前にデンと居座る10メートル級のドラゴン『ボーヴァ・タンニン』に見下すような視線を向けてから、観客席を見渡した。

さて、我が婚約者殿はどこかなつと。



闘技場内部に怒気を孕んだオーラが立ち込めた。悪魔に転生した竜王『ブレイズ・ミューティア・ドラゴン魔 龍 聖』の三男、ボーヴァ・タンニンの龍気と魔力の混ざり合った強烈なものだ。

一部の観客——主に魔力の少ない平民——たちからどよめきが上がる。

が、観客席から闘技場を見下ろすレイヴェルには、ボーヴァのオーラは小さいものには思えなかった。

体長10メートルのドラゴン。元龍王の息子であり、転生悪魔の子として悪魔としての性質も持ち合わせている。分厚く頑丈な鱗とその内側にみつしりと詰まった筋肉。高温の火を噴き、悪魔と龍のオーラを操る。なるほど、すごそうだ。

(でも、私の『王』さまの方がずっと大きいですわ)

それが正直な感想だった。

魔王クラスの一撃でなければ、フェニックスは倒れない。そしてフェニックスの炎は龍の鱗をも焼き焦がす。自分でも、ある程度成長すればどうにかなりそう。

比較対象が超越者クラスの赤龍帝となれば、それなりに有名な『破壊のボーヴァ』もそんな風に思えてしまうのだ。

婚約者の父母であるグレモリー卿夫妻、自身の両親のフェニックス卿夫妻。そして対戦相手であるボーヴァの父・タンニンと共に、レイヴェルは開始の合図を待った。

レイヴェルは婚約者が敗北する心配は全くしていない。ただ、やり過ぎて会場ごと消し飛ばしてしまわないかどうか、そこは少し、ちよつと、そこそこに心配していた。

試合開始の合図とともに、まず動いたのはボーヴァ。大きく吸い込んだ息に火を灯し、前方広範囲を焼き払う。

ドラゴンブレスを吹きかけられたレイヴェルの『王』は、それに頓着せずゆつくりと会場内を見渡しているまま。

炎が吹き抜けた後には、無傷の『王』の姿があつた。

身に着けた衣装に焦げ目一つない。試合開始時から変化しているところと言えば、彼の身体の周囲を覆う『滅び』のオーラだけだろう。『滅び』の力、消滅の魔力は戦闘において無類の強さを発揮する。攻めでは敵に防御を許さず滅ぼし尽くし、守ればパワーに劣る攻撃を消し去ってしまう。

そこに相性も物理的な強固さも関係ない。込められた『力』で上回らなければ、防ぐも抜くも困難だ。特にドラゴンの多くがそうであるような、肉体の頑強さに頼った正面からの力押しには恐ろしく有効。炎の息などなかったかのような表情で、軽く指を曲げてボーヴァを挑発するリヴラクス・グレモリー。

それに怒りの表情を浮かべたボーヴァの次なる一手は、オーラによる砲撃だった。パワーだけならば上級悪魔クラス、その看板に偽りのない威力の砲撃が2メートルもない人型の悪魔に直撃する。

しかし、それもやはり滅びのオーラの前に消え去った。『破壊のボーヴァ』の攻撃は、グレモリーの次期当主に一切の痛痒を与えていない。

観客席から見てそれがハッキリと分かる。

レイヴェルは観客たちの表情を観察し、大いに満足した。ポーカーフェイスは貴族の嗜みだが、それが崩れてしまっている者がそれなりの割合で存在していた。

「はあ……」

これまで無言だったリヴラクスのため息。集音マイクが拾ったそ

れが妙に大きく響いた。

それはまるで、つまらないと告げているかのようで——直後、ボーヴァが怒号を上げる。

咆哮する龍の疾走。10メートルの巨体の全体重、全開駆動する四肢が大地を蹴る。ボーヴァの右前足に籠められた、全身全霊のオーラ。

ドラゴンの戦いの基本は、肉弾戦とオーラとブレス。消滅魔力を纏う者を殴りつける危険も顧みず、怒り狂うボーヴァは最大の出力でオーラを拳に込めて振り抜いた。

大振りの一撃。避けようと思えば簡単なそれを、リヴラクスは躲そうともしなかった。

ボーヴァの迫力に呆然としているのではない。紅髪の悪魔の顔に浮かんでいるのは余裕の笑みですらない。彼が平民を見下すときのそれと同じものだ。興味がない。

「ガアアアアツツー!!!」

直撃した。ボーヴァの全力がリヴラクスの身体の芯を捉え——そして腕が消し飛んだ。

右腕、あるいは右前足と呼ぶべきか、その半ばまでを消滅させられた元龍王の三男が悲鳴を上げる。太い断面から噴き出す血潮が大地を染めていく。

「まあ、こんなものでいいか」

降り注ぐ血の全てを消滅させ、服に染み一つ作らせず、『紫紅の龍帝』がここでようやく神をも滅ぼす具現を顕現させた。

赤い籠手、『赤龍帝の籠手』の人差し指。その一本だけが立てられる。鋭利なその爪先が長々と伸びた。20メートル程か。

龍帝の指が曲げられた。腕も手首も使わない、指だけの動きで長大な刃物が振り下ろされる。

プリンを掬うスプーンのように、滅びの魔力の籠った爪が、ボーヴァの鱗、筋肉、血管、骨を滑らかに通過していく。龍帝の爪は、勢いのまま闘技場の地面までもを音もなく斬り裂いた。

カチン、と金属音がした。伸長していた『赤龍帝の籠手』の爪が元

の長さに戻ったのだ。

その音が合図だったかのように、ボーヴァの巨体が切断面からズレ始める。

レイヴェルの耳に、ずんと巨体の沈み込む音が聞こえたような気がした。観客席からは声もない。

「レイヴェル!!」

名前を呼ばれた。自らの『王』の声だ。その声と共に、観客席と闘技場を隔てていた壁が消えてなくなる。

禁手化。素早く静かに為された『赤龍帝の籠手』のバランスブレイク。

「はいー」

レイヴェルの背に炎の翼が現れた。貴族服の上に魔王の装束を身に着けた主の下へと、不死鳥は羽ばたき、飛翔する。

炎の翼が巻き起こす風が、魔王の装束を揺らめかせる。火の粉が舞い散り、『倍加』された紫紅の魔力が会場に集った悪魔全てのそれを塗りつぶし圧倒していく。

「力を寄せ」

喜びに背筋を震わせながら、レイヴェルは自らの特性を『王』に捧げた。譲り渡した。

『我が名はレギオン、我々は、大勢であるがゆえに』

聖書に記された、一人の男でありながら無数の悪霊の群れでもある者の名乗りから名付けられたこの禁手は、『王』^{レックス}と『駒』との間に深い繋がり形成する。

一にして多。多にして一。眷属全体で『力』を『譲渡』し合い、『倍加』によって高め、主従一体の軍勢^{レギオン}となる。

性交の恍惚とはまた異なる、魂が連結し合っただこまでも昂つていく歓喜。

レイヴェルはいつも、自身が『王』の一部となったこの感覚に酔いしれそうになってしまう。湧き上がる陶酔感を抑えつけ、表情を保つのに苦労してしまう。

『Transfer』

特性の『譲渡』を受けたボーヴァの身体から炎が噴きあがった。焼き尽くすそれではなく、不死鳥の再生の炎だ。

真つ二つに斬り裂かれたドラゴンの身体が燃え上がり接合している。消滅した前足が、炎の中で蘇る。

瀕死。強靱なドラゴンの肉体であっても、そう長くはもたないだろう致命の傷は極わずかな時間で消えて無くなった。

「こんな感じで問題なさそうか？」

倒れ伏し、地に頭を付けて呆然と見上げるボーヴァから視線を切つて、『王』が『女王』の耳元で自信なさそうに聞いてくる。

「ええ、十分に御力を示せたと思いますわ」

レイヴェルがそう返すと、彼は一瞬だけ安心したような表情を浮かべた。

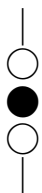
「そうか、ならもういいな」

婚約者にして『王』。リヴラクス両腕がレイヴェルの背と膝裏に回される。抱き上げられ、観客席へと運ばれていく。

(ど、どうしましょう、これ……ううん)

龍と悪魔と不死鳥と墮天使。キメラのように様々な翼を出した婚約者に運ばれながら、レイヴェルは太ももをよじり合わせた。

正直なところ、パーティー会場よりも寝室に向かつて欲しい気分になつてしまつていたので。



さて、余興が終わつた後はダンスのお時間である。

ダンスは別に嫌いではない。脳みそと身体のスペックのお陰か、割とスルスル覚えられた。ダンスの家庭教師が美人さんだったのも大きい。

最初にダンスの練習があると聞かされた時は、なんとなくこうキツツイ眼鏡のおばさんがやって来そうなイメージだったのだ。だが、そ

んな予想に反してやって来たのは見た目同い年ぐらいの美少女であつた。というか、悪魔は見た目年齢変えられるので、生徒に合わせ変えてくれていた。

身長合わせた方が教えやすいってことらしい。なので、俺のダンスレッスンは5歳ぐらいの見た目の美少女先生から習い始めたわけだ。うん、楽しかった。

で、まあ、レイヴェルとの婚約交渉も終え、メイドも堪能しまくつた後にもダンスレッスンは続いているわけなのだが……。

ダンスって、ほら、こう身体がくつついたりするわけで。勃つてしまつたりするわけだ。

そうしたら先生が「あら？」って婀娜っぽい笑みを浮かべてきまして……ベッドの上でのダンスに発展してしまつたりもするわけだ。

あの先生、グレモリー関係の男子連中はだいたいお世話になつてきたそうだけど、普通に愉しんでいる様子だったから……。

冥界にダンス文化が入つて来た頃に真っ先に覚えて、この職に就いたとか言つてたし……。

案外、俺にはそつちの穴の兄弟が多いのかもしれない。

まあ、いいか。別に。気持ち良かったからな。

ダンスもあるので、本日のレイヴェルの服装はドレスである。背中がガバツと出てるやつ。悪魔ダンスって翼を出したりする型もあるから。

フェニックスの翼は他の悪魔と違うので、これがよく目立つのだ。火の粉も舞い散るのでキラッキラ。

グレモリーとフェニックスの身内だけのパーティーのときは、紅に金鳳凰の着物で通していたのだが、あれはあれで良かった。だが、これもこれで良い。

ちなみにタンニーン殿は、放心状態の息子を掴んで飛び去つて行った。

『心臓が止まるかと思つたぞ』

などと言われてしまったが、一応ボーヴァの心臓は避けたつもりだ。メスドラゴンならともかく、オスドラゴンとか知らんし。いや、

まだメスドラゴンの美醜とかよく分らんけど。

ドラゴンハーレムの主たるタンニーン殿にでも習えばいいのかね？

あのボーヴァくんは、俺がタンニーン殿に「娘さんを乗り物にしたいからおくれ」と言ったことに腹を立てていたそうなので、今回のことで意見が変わってくれたらよいのだが。バツサリやったからな。たぶん、変わる変わる。たぶん。

まあ、オスドラゴンなんぞどうでもいいとして。

ダンスといえば、こう途中で相手が変わって行ったりするものだと思っていたのだが、誰も寄り付いてこない。

熱い視線を感じる気はするのに、向こうから寄ってきたりはしないのだ。この場合、男から行くものなのかもしれないが、レイヴェルがピッタリくっついていてる状況でそれはどうにも憚られてしまう。

ということ、もっぱらレイヴェルと踊り、休憩を挟んでまた踊るといった具合になっている。

休憩をしていると、話しかけてくる連中が出てくる。主に欲の皮の突っ張ったオツサンである。残念。たまにご婦人もいるが。

ただまあ、欲に塗れているのは悪くない。儲け話が多いしな。変に慈善団体とかないのが悪魔の良いところだ。

こつちも儲かって、あつちも儲かる。それがいい。実に良い。

といっても、主にそういった連中の話し相手をしてきているのはレイヴェルである。俺、こういうの苦手なんだよね。

それでいて、レイヴェルは俺がただ座っているだけの置物にならないよう答えやすい話題を狙ってこつちに振ってくれる。

おかげで以前ちよつと社交に顔出したときより、ずつと快適だ。好きにはなれそうにはないが、顔を出すくらいなら……まあ、いいかと思えてくる。

うちの嫁さんは本当に二つ年下なのだろうか……？

これが純粹な貴族教育の賜物なのか……？

もしかして、俺って下手に前世の記憶なんぞ引き継いでいなかった方がハイスペック貴公子になれたのではないだろうか……？

嘘、俺の前世って何の役にも立っていない……？
まあ、いいか。今さらどうこうなることはない。

前世の記憶持ち転生者は、大概は偉業を成して歴史に名を記した者だとか、伝説的な英雄などらしい。だが、俺の前世にはそんなものは一欠けらもなかった。

たぶん、前々世辺りで何かデツカイことでもしたのだろう。神滅具持ちで超越者クラスな魔力持ちで、現在のルシファーの弟に生まれるような、罪深い偉業かなにかを。

思い出せないから、何の役にも立っていないが。

「そろそろ次に行こうか」

考えても仕方がないので、次に行こう、次。

話も丁度切れ目のようだしな。とりあえず、今は踊っておくタイムだ。

「ええ、それでは」

俺とレイヴエルとでは身長差が結構あるので、なかなか綺麗には踊れない。だが、まあそれも悪くはないと思う。

成熟したら俺の方が年齢戻して背を低くすればいい。そう考えると、それが出来ない今という時間はなかなか貴重なものだ。

といった感想を伝えたところ、レイヴエルも嬉しそうに頷いてくれたので良い良い。

俺はこの身長差気に入っているしな。出来ればこのままを維持して背が伸びて行って欲しいものだ。やることやるときに、レイヴエルとスルときのお気に入りに入り体位である対面座位がはかどる。

膝の上に乗つけてズツポリしたときの顔の位置というか、高さ関係が丁度いいのだ。俺的に。

「リアスさま？」

「ああ、例の話をしないといけないなと思つてな」

くるりくるりと踊りながら、この後、現ルシファー派の貴族の面々にも『王の駒』とカリユイのことを話さないといけないことを思いだしていたことにした。

いぶかし気に見上げてくるレイヴエルに、えっちなこと考えてまし

たとは言いがたい。

ちよつと勃つてるけど、まあ許せよ婚約者さん。俺はこうやってくつついてると、すぐに発情してしまうのだ。

「グレモリーとフェニックスは終わったが、ここまでは身内だ」

「ええ、ここからが難しくなりますわね」

と、そんな話をしていたタイミングで、こちらに近づいてくる来る家臣の姿があった。

「若さま、実は——」

知らせを聞いて、俺は少し驚いた。

グレモリー家が主催するパーティー会場に、下級種のドラゴンに乗ったディオドラとラティアが向かっていると知らせがあったらしい。

最近は転移魔方陣から自動車を使うことも多いが、各貴族家毎の伝統的な乗騎を用いる方が訪問先に礼を示していることになる。そのため、ドラゴンに乗っていることは問題ない。タイミング的にさっきの余興を思い出してしまっても。

少し驚いたのは、ラティアが来ていることだ。

本日ディオドラが顔を出すことは聞いていたが、パートナーはつきり元シスターの『騎士』を連れてくるものかと思っていたのだが……。

俺と同じで社交の場は好きじゃなかったはずなんだけどな。

根回し、駒回し（下）

悪魔の社交シーズンは冬の1月と、夏の8月。

昨年8月の社交界での話題の中心は、グレモリー家次期当主リヴラクス・グレモリーであった。フェニックス本家の姫との婚約に関して様々な憶測・噂が流れたものだ。

そして、新年を迎えた1月の社交シーズン。またも話題の中心はリヴラクス・グレモリーであった。そして、今回のそれは昨年よりも遥かに大きな波紋を広げている。大波と言っても良いほどに。

ヒトの口に戸は立てられない。

いくら、「ここだけの話」「貴族だけにしか知らせておりません」などと言ったところで、どこかしらから情報は漏れていくもの。

リヴラクス・グレモリーが親族、グレモリー家とフェニックス家の宴会で貴族のみに伝えた内容は瞬く間に広まった。

グレモリー家にしろ、フェニックス家にしろ、分家には本家と異なる派閥に属している者がいる。そこからそれぞれの派閥に話が伝わっていくのは容易に想像できることだ。

また、貴族には懇意にしている裕福な平民がいるもの。彼らが貴族と誼を結ぼうとする理由の一つは、情報。

当然、こちらにも話は流れた。

『昨年末にリュディガー・ローゼンクロイツを眷属の眷属、子世代眷属としたリヴラクス・グレモリーが、今度はあのロイガン・ベルフェゴールを「騎士」にするつもりらしい』

そのことに関して尋ねられた現レーティングゲームランキング2位の最上級悪魔、ロイガン・ベルフェゴールは否定しなかった。

むしろ、それに続く話を積極的に肯定さえした。

『ただ、ロイガン・ベルフェゴールは「騎士」の駒を受け入れるのに都合の悪い物を使用しているため、それを取り除くつもりようだ。その都合の悪い物の摘出は、魔王アジュカ・ベルゼブブが直々に行い、その存在を公表する予定だ』

この時点で多くの者が『王』^{キング}の駒のことを思い浮かべた。そのこと

は、時折取り上げられてきた話題ではあったのだ。

それまで才能を感じさせなかった者が、急激に力を付けたことに対する疑惑の火種。これは長い間燻ぶり続けていたのだから。

そして元々ロイガン・ベルフェゴールが『王』^{キング}の駒使用者であることを知っていた者は激怒した。

だが、今さら怒りを見せたところでどうにもならない。既にこの話は、貴族及び平民富裕層に広まってしまっている。

火元を消そうにも、ロイガン・ベルフェゴールは強い。

魔王セラフオール・レヴィアタン。『最強の女王』グレイファイア・ルキフグスと並んで最強の女性悪魔論争に名前が上がるだけの力を持っている。

政治的な工作をしようにも、彼女が当主を務めるベルフェゴール家は『番外の悪魔』。政治への関与を厭う家。あまり効果が期待できない。

では、リヴラクス・グレモリーならばどうか？

こちらもこちらで難しい。現魔王最大派閥である現ルシファー派の筆頭グレモリー家の次期当主である。

その魔力量と、保有している神器、周辺の警護体制を考えると暗殺は困難。

人質なども考慮されたが、交友関係が非常に狭い上に手を出し難い者ばかり。名門六家に絡む者がほとんどだ。

今ではバアル大王家と縁の切れているサイラオーグ・ウアプラは行方不明。人間界の何処かで旅の空の下。

ミスラ・ウアプラは眠りの病。実質的には死亡しているのと変わらない。リヴラクス・グレモリーが手をつけ、孕ませたメイドがいると調べ上げて来た者もいたが――

『天龍の「逆鱗」に触れる愚を犯すな。それに、その程度のことヴェネラナならば備えているだろう』

大王派の真の支配者ゼクラム・バアルのこの一言で、様々な工作は放棄されることになった。

『逆鱗』は、ドラゴンが最強の種族と恐れられる理由の一つ。憤怒に染

まったドラゴンの恐ろしさは、悪魔にもよく知られているところだ。『赤龍帝の籠手』を持つだけのリヴラクス・グレモリーがその状態になるのかどうかは分からない。あるいは話に聞く『ジャガーノート・ドライブ覇龍』こそがそれに当たるのか？

どちらにせよ、怒りに吞まれ理性を失った『紫紅の龍帝』の標的になど誰もなりたくは無かった。何をされるか分かったものではない。最悪の場合、話の通じない暴龍に自身の領地ごと魂までも消滅させられてしまうかもしれないのだから。

さらに、あのヴェネラナ・グレモリーが罫を仕掛けて待ち構えている可能性もある。ヴェネラナの辣腕ぶりは良く知られたところ。手を出すには、逆に足を掬われ吊るし上げられることを覚悟しなければならぬ。

『王』の駒の利用に深くかかわっている大王派の表向きのトップ、バル大王家現当主は悩んだ。悩んだ末に決断できなくなってしまった。彼は甥がバケモノであることを理解している。

そして、その母であり、自身の異母姉であるヴェネラナ的能力は、複雑な感情を抱きながらも認めてはいた。あの姉ならば、やる。絶対に何か仕掛けている。そんな確信があった。

頼みの綱の初代は沈黙、様子見の構え。先代その他の先祖もそれに倣ったのか同様の姿勢。

試されている。バル大王家の当主として、どう動くのかを。そう考えてしまう。

ただでさえ、ミスラのことウアプラ家との関係をこじれさせた叱責を受けたばかり。甥に第一夫人を盗られた男と呼ばれた忌々しい記憶も新しいところ。

場合によっては、息子のマグダランの成熟を待って代替わりさせるつもりなのかもしれない。

当主の座を息子に自ら譲るのは構わない。だが、挿げ替えられるのは我慢ならない。

何かをして失敗すれば評価はさらに低下してしまう。といって、何もしなければ良いというわけではない。

どうするべきか？

『ラティア・アスタロト。アスタロト家次期当主デイオドラ・アスタロトに付き添われグレモリー家の宴会に出席。リヴラクス・グレモリーから贈られた紫布に金龍の装飾の衣服を着用』

悩んでいる内に、次の情報が届いた。

ラティア・アスタロトはアジュカ・ベルゼブブの縁者。リヴラクス及びロイガンの言葉から名前は出ていたものの、実際に『王』の駒の公表に関わるか否かの確認が出来ていなかったアジュカ・ベルゼブブの姪だ。

あの妖しい気配を常に漂わせる魔王は、これまで今回の『王』の駒の件で言質を取らせなかった。

リヴラクスやロイガンが名前を出しているだけなのか、それとも既にアジュカとの話がついており承諾済みのことなのか。それが分かっていなかったのだ。

だが、アジュカの姪であるラティアがこれまでにない動きを見せた。彼女はその出自故にある程度の注目を浴びる立場にある。大王派もその動向にはそれなりに注意を払っていた。

リヴラクスの通うことになった学校がアスタロト領のものだったのは、幼少期から彼とラティア・アスタロトとを会わせておき後に結び付けよう。そういった考えが魔王派内にあっただろうことは大王派でも知られていた。

現レヴィアタン派のソーナ・シトリーと、現アスモデウス派のゼファードル・グラシヤラボラスが同級生で同じ学校だったことも、同じ考えだったのだと思われる。

「アスタロト家はどうするつもりなのだ……」

グレモリー家の宴会に顔を出したラティア・アスタロトとリヴラクス・グレモリーは親密な間柄を思わせる行動を取っていたようだ。

その後に、レイヴェル・フェニックスとアスタロト家次期当主デイオドラ・アスタロトを交え数時間ほど話し合っていたようだと言われている。

『リヴラクス・グレモリー、ラティア・アスタロト。両名の共同で「時

間」術式に適したフィールドを設置。そこでリュディガー・ローゼンクロイツの子の治療を行う模様』

その話し合いの後に発表されたのは、転生悪魔の子供のために純血悪魔の貴族が20年程の寿命を削るという内容。

時間を加速した空間内で、ローゼンクロイツの子供の面倒をみながら両名が共に過ごすというものだ。

数万年の寿命を持つ悪魔にとって20年程度は誤差と言えなくはない。だが、それでも破格の扱いであることは確か。

純血悪魔の貴族。それもその頂点に近い名家の者が、転生者如きのためにそこまでするなどそうそうあることではない。

元レーティングゲームランキング7位、『番狂わせの魔術師』リュディガー・ローゼンクロイツ。

無名の魔法使いとして悪魔に転生し下級悪魔から最上級悪魔にまで登り詰めた、転生悪魔の出世頭といえる男だ。同じ転生悪魔や平民たちからの人気・人望は高い。

それを子供の治療を餌に配下に加えたグレモリー家が便宜を図るのは理解できる。

だが、そこにアスタロト家の姫。分家ではあるが、血筋を考えれば十分に後継者の候補に成り得る娘をアスタロト家が関わらせる意図はなにか。

宴会に着用してきた衣装の選択。親密さを周囲に喧伝するような行動。そして、近いうちに同じフィールド内で20年間を過ごすという発表。

まだ成熟していない若すぎる世代にとっての20年だ。それだけの期間があれば、若い男女の間に何も起こらないはずがない。

加えて、あの女好きの甥とレイヴェル・フェニックスの婚約・結婚の流れはほぼ確定しているようなもの。

となると——アスタロト家は、グレモリー家の次期当主に第二夫人を送り込むつもりか。

『番狂わせの魔術師』をダシに使って、グレモリーとアスタロトを結びつきを強めようといった流れが見えてくる。

これに、旧魔王派の動きを理由としてアジユカ・ベルゼブブの眷属にアガレス家の次期当主が入ったことを考えると……。

『王』の駒に関わる不正を行って来たのは、主に大王派の者ばかり。そこを突かれるのは痛い。

その上で、現魔王派内で最大規模の現ルシファー派と、それに次ぐ現ベルゼブブ派の接近。現レヴィアタン派のシトリー家とグレモリー家の仲は良く知られているところ。実務面での存在感が大きいアガレス大公家の中立派がそこに合流……。

現アスモデウス派は、ファルビウム・アスモデウスの面倒を嫌う性格もあつてあまり政治に関わりたがらない者たちの派閥。

さらに、ミスラの件で大王派内でも勢力の大きいウアプラ家はグレモリー家とのやり取りを増やしている状態。

大王派は力を削がれ。四大魔王それぞれで分かれている魔王派内部の大統合と、そこへの中立派の合流。

これはかなりマズイ状況なのではないか。バアル家当主は、頭を抱えた。

旧魔王派の活動の活発化。おそらくはそれに刺激された墮天使からの敵意の高まり。

この先に予見される大きな時代の波を迎えるにあたって、大王派の影響力を落とし政治の主導権を魔王派が握っておこう。

これは、そう考えたアジユカ・ベルゼブブの策ではないのか。アジユカ・ベルゼブブがそのつもりだとすると、もはやリヴラクスやロイガンをどうこうしても意味がない。

あの魔王は『王』の駒の開発者であり、現在唯一その製造方法を知る者。アジユカがこれまで秘してきたことを公開し利用するつもりならば、これを止める術はない。

「だから『王』の駒などに手を出すなど言っただッ!!」

執務机に思わず叩きつけた拳が、大きな音を立てた。

バアル大王家は名門中の名門。『王』の駒など利用せずとも権威はあり、利益も十分に上げている。

大王派に所属する者たちが目先の金に釣られて手を出したあの代

物は、政治的には弱みでしかなかった。

初代も先代も、先達たちは何も言ってくれない。このままでは全ての責任を押し付けられ、切られてしまう。

だが、自身で判断し決定することも出来ない。

悩んだバアル家当主はとりあえずの一手として、『王』の駒に関わる「数年前の粛清」を知られては困る者を中央から遠ざけることにした。

『^{エンペラー}皇帝』ベリアル出陣！ 堕天使との境界域に展開するバラキエル軍に対する抑えとして、政府はデイハウザー・ベリアル氏の派遣を決定！』

この一報に民衆は喜びの声を上げた。

レーティングゲームにおいて長年ランキング1位を維持し続ける最強の最上級悪魔。

英雄デイハウザー・ベリアルが向かってくれるのならば、たとえ相手があの堕天使の最高幹部・闘将バラキエルであろうとも問題ないと。

情報とはどこからか漏れるもの。限定された数少ない者の口だけならばまだしも、戦地に派遣された一兵士の口までも塞ぐことは難しい。

大衆たちは恐れていた。かつての大戦で猛威を振るい、多くの悪魔を殺したバラキエルの軍勢がすぐ近くにまで来ている。その恐ろしさはかつての戦争の生き残りの口から若い世代にも伝わり、大きな戦争を知らない世代にも不安を伝染させていた。

再び戦争が始まってしまおうのではないか。戦う力のない者たちは、一体どうなってしまうのか。

上級悪魔達はいい。『悪魔の駒』により眷属を揃え、少数精鋭の戦力を手にしている。堕天使が攻めて来たとしても、戦うことが出来る、守ってもらえる。

だが、悪魔の大半を締める下級悪魔Ⅱ平民たちにとって、転生悪魔ですら遠い存在だ。彼らはごく一握りの上級悪魔、貴族の側近であり

私兵。

いざというときに、民を守ってくれるとは思えない。主に従属するその在り方からして、転生悪魔たちは貴族を優先して行動するに決まっている。

こんな時だと言うのに、貴族たちは例年通り社交に精を出している。贅を凝らした宴を開いて美食に耽り、煌びやかな服を着てダンスを踊っているのだから。

軍は頼りにならない。大戦と内戦で数を減らし、かつての大軍団は今見る影もない。レーティングゲームでの活躍を目にする選手たちとは違い、その活動も地味なものだ。

領内の治安維持や、小規模な賊の制圧程度。それにしても、きつちりと出来ているとは言えない状態。

悪魔にとつて、墮天使は脅威だ。下級の墮天使と悪魔ならば、悪魔にとつて猛毒となる光の力を使う墮天使の方が強い。

もしも襲われたら、どうすればいい……。

そんな不安と憤りが民衆たちの中に充満し始めたタイミングだった。

『皇帝』出陣の報が広く伝えられたのは――。

民衆の大半は軍に期待していない。魔王の戦う姿も見たことがない。

だが、デイハウザー・ベリアルは勇姿ならば良く知っている。レーティングゲームの英雄だからだ。

ついこの間まで、年末年始の恒例イベントとして『十番勝負』も行っていた。その成績は全戦全勝。

分かりやすく強いあの英雄が、皆が良く知る絶対王者が戦ってくれるのならば安心だ。

バアル家現当主が大王派の政治力をもって政府に働きかけた結果のこの采配は、民衆たちから大いに喜ばれた歓迎された。

ベリアル家は貴族家には珍しく、一族全てが同じ派閥に所属している。これは、大戦から内戦の混乱期に大失態を重ね、断絶寸前まで没落してしまい一族の結束を必要としたベリアル家特有の事情による

ものだ。

そして、ベリアル家は大王派。当然、ベリアル本家の嫡男である
デイハウザー・ベリアルもまた、大王派だ。

かつての『肅清』の件があるため、『皇帝』には暴発の危険性がある。
『王』の駒を隠匿するために大王派が始末したクレーリア・ベリアルは
デイハウザーの従妹。一族の結束の固さもあつてか、デイハウザーは
クレーリアを大層可愛がっていたという。

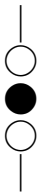
万が一のことを考え、バアル家現当主はデイハウザーを逃げ出すこ
との出来ない場所に送つたのだ。任地を放り出して帰ってくること
の許されない立場にすることで、その動きに制限を掛けた。

その上で、大王派所属のデイハウザー・ベリアルが活躍すれば、派
閥の面目も多少は立つ。

今のところ民衆の反応も悪くはない。

とりあえずは、これでよし。

ひとつ領いた後、バアル家現当主はくそ忌々しい甥の行動への対応
をどうするかに再度考えを巡らし始めた。



現レヴィアタン派をまとめるシトリー家の当主、シトリー卿には悩
みがある。

それは、後継者問題だ。

シトリー卿には娘が二名いるが、長女は魔王レヴィアタンとなって
家を出てしまっている。

そして、次女は婚約話を振ってみてもいい顔をしない。見合いだけ
でもと会わせてみると、こっぴどく拒絶してすぐに断ってしまうの
だ。

貴族にとって、跡継ぎ問題は重要だ。悪魔の寿命は長いので、そこ
まで急ぐことは無いのかもしれない。

しかし、やはり孫の代までは確保しておかないと、なかなか安心できないところがある。

グレモリー家のように、魔王となって家を出た者が子供を作っているのなら良い。ミリキヤス・グレモリーは由緒正しい純血悪魔の血筋。後継者の予備として申し分のない生まれだ。

だが、シトリー卿の長女セラフォルには子供どころか、子作りの相手すらまだいない。一度は婚約話をまとめたのだが、シトリー卿はその婚約者選びに失敗してしまっていた。あの時のことを思い出すと腸が煮えくり返ると同時に、自身の見る眼が無かったことに対する後悔が浮かんできて胃が痛くなる。

その時のことが後を引いてしまっているのか、セラフォルは未だ男を寄せ付けない。数百年、浮いた話がないままだ。

次女のソーナが生まれて以降は、猫をかぶっているのか表面的な態度は柔らかくなった。最近魔法少女だなんだと、ヒラヒラとした格好で遊んでいるようにも見える。

だが、結局のところ男を自身の深いところまで受け入れようとはしていないように思える。

サーゼクスとくっついてくれていたら話は早かったのだが。

戦乱以前、まだ悪魔の数が多かった頃、双方の母親が学友だったこともあって、グレモリー家のサーゼクスとセラフォルはかなり親しい関係にあった。

それなのに、内戦が終わってみればサーゼクスはグレイフィア・ルキフガスと結ばれてしまい、他の女を寄せ付けない。

そして、セラフォルは魔王となったのに独り身のまま。むしろ魔王となったことで、相手選びが難しくなってしまった。

人間もそうなのかは知らないが、男性悪魔には自身よりも遥かに強い女を苦手とする者が多い。その上、立場でも魔王となったセラフォルの方が上となれば、なかなか相手探しは難しい。

自分よりも強い妻に尻を叩かれ、家での立場でも尻に敷かれ、それでも気にせず上手くやっているグレモリー卿のようなタイプは少ないのだ。

それでもなんとかと相手を探して婚約させた結果がああ始末。

『私より強い男じゃなきゃイヤ』

などと魔王に言われて、どこから探してきたらいいというのだ。

レーティングゲーム1位のデイハウザー・ベリアルや、3位のビィ
ディゼ・アバドンなどの魔王クラスの最上級悪魔も考えたが、デイハ
ウザーはベリアル家の跡を継ぐ立場。大王派に所属していることも
あっているいろと難しい。

そして、ビィディゼは政治に関わらない『番外の悪魔』アバドン家
の出身だが……セラフオールの好みではなかったらしい。条件に合
わないとも言われた。

立場としてはシトリー家当主よりも魔王セラフオール・レヴィアタ
ンの方が上であるため命令は出来ない。

そして、レヴィアタン襲名の際に家を出た形にもなっているので、
親子の関係でしかものは言えないのだ。

そうなるとう感情の問題であり、昔のことうを持ち出されてしまうとシ
トリー卿は何も言えなくなってしまう。

そんなこともあり、シトリー卿は長女セラフオールに関してはまだ
諦めていた。

この際、どこの誰でもいいから相手を見つけしてくれさえすれば構わ
ない。相手は純血の悪魔が良いなどと贅沢は言わない。転生者だろ
うと平民だろうと、とにかく孫の顔を見せてくれさえすれば……。

『魔王よりも強い男』という条件を考えると転生悪魔や平民では難し
いので、外交で出向いた先でどこの女好きな神辺りに口説かれても
来ても構いやしない。そのままそちらに行ってしまうされると困るが
……。

女好きと言えば……と、シトリー卿は最近何かと話題の紅髪少年
の姿を思い浮かべた。

リヴラクス・グレモリーだ。ミスラ・ウアプラ、そしてつい最近で
はロイガン・ベルフェゴール。年上も一向に構わない顔見知りの少年
だ。

たしか、セラフオールが正面からの力比べで彼に負けてしまったと

言っていた覚えがある。

赤ん坊の頃から知っているためか、セラフオールも彼にはかなり気を許している雰囲気も感じた。

前世の記憶を引き継いだ人間の魂を持っていることや、神器持ちであることなどはあるが、肉体的には純血の悪魔。

他勢力の、他の神話の者よりは……遥かにマシと言える。

この際、セラフオールに関してはアリだ。むしろ期待してしまう。政治が、派閥が、などと思うところは多々あるが……それよりも孫の顔が見たい。

長女に関してはそれでいいとして、問題は次女のソーナにもある。婚約話は嫌がる。そして、ソーナを溺愛する姉のセラフオールがそれに味方をする。

あまつさえ「ソーナたんのお婿さんは、私より強くなくちゃダメ」などと言いだす。

そしてまた浮かんできてくるのが、あの紅髪の少年の姿。

小さい頃に一緒に遊ばせていたのが悪かったのか。セラフオールとサーゼクスではそんなことはなかったのに、ソーナはどうもそうなってしまったらしい……。

あるときから、視力が悪いわけでもないのに眼鏡をかけ始めた。理由を聞いてもシトリー卿には教えてくれない。

仕方がないので妻に頼んで聞き出してもらおうと、「いつも、リアスが見つめてくるから……」などという答えだった。見つめられるのが恥ずかしくて、間に一枚ファイルターを挟みたくなったなどと……あのクソガキが！

最近はそれでも照れて赤面してしまうらしく、それが恥ずかしくて顔を逸らしてしまうらしい。

婚約話を断わるのは、どう考えてもこれが理由に違いない。

セラフオールは構わんが、ソーナはやらん！ いや、婿に来ると言うのなら考えるが……それをするには、既に時期を逸してしまっている。

シトリー卿は、明日のことを考え頭が痛くなった。

迎えた翌日、婚約者のレイヴェル・フェニックスを伴ってリヴラクス・グレモリーはシトリー家の宴会に姿を見せた。

そしてソーナと何やら言い合った後、ダンスを踊り始める。

そのときの次女のダンスのなんとぎこちなかったことか。普段はそつなくこなしているのに、完全にガチガチになってしまつて動きが大変悪かった。

脚をもつれさせて転びかけて抱き留められたときなど、頭から蒸気でも噴き上げそうな状態になってしまつていた。

これは、ダメだ……。

シトリー卿は、思わずため息がこぼれてしまうのを抑えられなかった。

そうしてリヴラクスが帰って行った後、ソーナは部屋に籠つてしまった。理由を聞いても、シトリー卿には教えてくれない。

まだ予定はあると言うのに、次期当主が顔を出さないのはよろしくない。そう伝えても出てこない。

仕方がないので、シトリー卿はまた妻に頼むことにした。

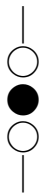
『ソーナには「兵士」がお似合いだな』

妻によると、ソーナはダンスの後にリヴラクスからこんなことを言われたらしい。そのことがショックで娘は部屋に籠つてしまつていくようだ。

これが『女王』になってくれ」というセリフだったならば、口説き文句である。半ばプロポーズに近いレベルのものだ。

『兵士』となると、その逆。

たしかに、ソーナはやらんと思つていたシトリー卿だが……さすがに可愛い娘にこの仕打ちは許せん！ と、拳を震わせてしまふのだつた。



イリユーカー・グラシヤラボラスにとって、レイヴェル・フェニックス

スは幼稚舎からの同級生で友人だ。

数少ない貴族本家の令嬢同士、親友とまではいかないが付き合いは
かなりある。

「あ、レイヴェル、明日来るんだっけ」

『前から伝えておりましたのに、忘れないでくださいまし』

「噂の龍帝さんも来るって話だったよね？」

『そうですね。例の会見で、グラシヤラボラス家とも交流があること
になりましたので』

自宅——グラシヤラボラス本家の城内の自室で、銀色の髪を梳かし
ながらイリユーカはレイヴェルとの通信を行っていた。

「そっか、ボクも一回会ってみたかったんだよね。龍帝さんとは」

イリユーカにとって、『紫紅の龍帝』リヴラクス・グレモリーは二つ
年上の兄ゼファードルの仇である。

仇と言っても別に殺されたわけではない。幼い頃に死にそうな目
に遭わされただけだ。

まだ赤ん坊だったイリユーカはそのときのことを覚えていない。
ただ、その時から兄が打倒リヴラクス・グレモリーに執念を燃やすよ
うになったことだけは知っている。

強い強いとは聞いている。とんでもない魔力の持ち主で、神滅具
『赤龍帝の籠手』の所有者でもあるという。

実に興味深い。

『あら、そうだったのですか？』

「うん、ほら、婚約のあとからレイヴェルの雰囲気が変わったから、ど
んなヒトなのかなって思ってたんだ」

『雰囲気……変わりましたか？』

「うん、すっごく。『女王』の駒もらったみたいだから、オーラの質が
変わったのは分かるけどね、それ以外にもこう……仕草とかが大人つ
ぽくなった気がする」

レイヴェルの婚約者は、噂のえっちな龍帝さんだ。

きつと、レイヴェルはイリユーカの知らない経験をいろいろとした
のだろう。

『あー……えっと、それはですね』

「で、えっちなことしてるの?」

『ごほッ!』

「してるの?」

艶っぽいというのか、色っぽいと言えいいのか。幼馴染の女の子が、なんとなく、そんな感じになってきていた。

それが気になるイリユーカーは、この際だからと教えて教えてと繰り返し、やがてレイヴェルがこくりと首を縦に振る。

『え、ええ……その、婚約者ですし』

「そっかー……そうなんだ。レイヴェルはえっちなことしてるんだ、ふーん。で……どんな感じなの?」

『いい……言えませんわ。そんなこと』

そうやってしづるレイヴェルと話していると、話題がレーティングゲームの話になった。

『ゼファードルさまも、眷属を集め始めていらっしやるのですね』

レイヴェルが頑張ってえっちな話から逸らそうとしているのが分かったので、イリユーカーもそれに合わせることにしたのだ。

知らないことは、知りたい。面白いものは見てみたいし、やってみたい。

でも、相手を困らせてまでというのはイリユーカーの流儀ではない。ほどほどで退くのがいつものやり方だ。

「何年かあとに、若手悪魔の交流会? とかいうのがあるんでしょ?」

『グラシヤラボラス家からは、ゼファードルさまが参加なさるのでですか?』

グラシヤラボラス本家は、悪魔には珍しく次期当主の姉も年齢が近い。

悪魔は子供が少ないので、ある程度の年齢幅を取って同世代として扱う。そのため、イリユーカーの姉と兄は同世代の区分になってしまっているのだ。次期当主の姉が世代の一番上で、兄は一番下になる。

ちなみに、イリユーカーやレイヴェルは姉や兄、龍帝から一つ下の世代だ。

「うん、姉さんは兄さんに譲るつもりなんだって」

『それは知りませんでしたわ。次期当主の力を示す良い機会でしょうに』

「打倒、龍帝さんって兄さんが頑張ってるからね。応援してるんだよ、一応」

上半身裸でうろついたり、身体中に魔方阵を刺青したりして『狂児』などと呼ばれている兄だが、そこそこに応援はしているのだ。

『応援というと、もしかしてイリユーカさんがゼファードルさまの眷属として参戦されたりします?』

「え? しないよそんなこと。兄妹で眷属とかあるの?」

『私の兄……ライザーお兄さまは、一時期そのようなことを言っていましたわ。なんでも、男のロマンなのだから』

「そうなんだ、ロマンなんだ。レイヴェルはそのとき何の駒にって言われたの? ロマンの駒」

『僧侶』と言う話でしたわね。その名残なのか、今でもライザーお兄さまの「僧侶」は一つ空いたままですわ』

『僧侶』ってつまらないよね」

『そうですか?』

「うん、ボクなら断然『兵士』がいいかな。だってさ、『兵士』って何にでもなれるんだよ? 他の駒と違って」

『ああ、普通プロモーションは「女王」を選びますが、たしかに他の駒にもなれますわね』

「そうそう、『騎士』も『僧侶』も『戦車』にも、もちろん『女王』だって経験できる。でも、他の駒じゃそうはいかないし、『兵士』になれるのは『兵士』だけだからさ」

『イリユーカさんらしいですわね』

いつか並ぶヒト

『リーくんのおバカ！ おたんこなす！ いじめっ子！』

「いきなりなんですか、レヴィアタンさま……」

シトリー家のパーティー会場から帰って来たら、魔王さまから通信が飛んできた。

その第一声がこれである。立場的にはあちらが圧倒的に上だけど、いくらなんでも失礼過ぎない？

いや、セラフォルーさんだからいいけどさ。許せる。

『おねーちゃん！ おねーちゃんなんだからね！』

「はいはい、おねーちゃん、おねーちゃん」

『「はい」は一回！』

「はい」

『よろしいー！』

相変わらずテンションが高くて安心する。なにやら怒っているよ
うだが、割といつものことだ。

おねーちゃん呼びを強要してくるのはどうかと思うが、このパター
ンときは魔王としてのお仕事モードではない。気分的には近所
のおもしろカワイイ系おねえさんである。

まあ、本性はなかなか物騒なヒトなのだが。それはそれで、悪魔で
魔王だしね。

『それで、どうしていつもソーナちゃんにイジワルするの!?!』

「いや、最近は特にした覚えがないけど?」

ソーナが朱乃みたいな性癖なら、そりや毎日イジメまくってあげる
けれど、今のところそんな兆候は見られない。あの個性は朱乃だけで
いいのだ。

いや、うーん……「おにいちゃん……やめて、もうイジメないで」と
か言いながら濡らしちゃうソーナとかそそるけどさ。まずは魔王に
ならねば、そこには行きつけないという。

ソーナの攻略難度高すぎ問題。

二人っきりの場面を作るのはそう難しくないので、そこで強引に

迫ってグイグイグイと押しまくり、そのまま押し切ってググイとぶち込むまではいけると思うのだ。でもその後が大変面倒なことになるので手が出せないっていう。

もう攫っちゃおうかな。俺ってときどきお姫さまを攫ってしまいたい衝動が出てくるような気がするんだが、これがドラゴンオーラの代償なのだろうか？ まあ、男のロマンのひとつでもあるか。

今の立場を自分から投げ捨てるつもりはないので、やらないけど。でも、面倒なこととしてないで、力づくで気に入った女を奪って集めて「グワハハハッ！ 女どもを取り返したかったら、この『紫紅の龍帝』に挑んでくるがいい！ もっとも、そのころには女どもは俺の虜になっているだろうがなあ！」とかそんなドラゴンムーブをやってみたい気がしなくもない。

『じゃあ、なんであんなこと言ったの!?!』

「あんなことって?」

セラフオルーさんが「おねーちゃん、おねーちゃん」言ってくるときは、親しい感じで話した方がいい感じだ。俺としても話しやすく助かる。

『お前には、『兵士』の駒がお似合いだ』とかなんとか言ってたって聞いたんだから!』

「似てない」

セラフオルーさんの声で、俺の声真似は厳しいと思う。俺の声は父上によく似ているらしいし。自分で話していてもよく分からなかったが、録音して聞いてみたらビックリするくらい似ていた。

ちなみに、えつちの時に耳元で囁かれるとキュンキュン来ちゃうーとメイドたちからは大好評である。俺が父親似で良かったなと思うところの一つだ。血の繋がりに感謝感謝。

『昔はあんなに可愛い声だったのに、おじさまそっくりになっちゃって……。うー、リーくんのくせに生意気なんだから!』

「顔は母上に似ているってよく言われるけど?」

今ではこんな俺だが、ちっちゃい頃は女装の似合いそうなそりやあ可愛いらしいお子さまだったのだ。ミリキヤスもそんな感じがある

けど……家系かね。

だいたい、ライザー義兄上と話すようになった切っ掛けも……別に女装してたわけでもないのにボーイツシユな娘だと勘違いして声かけて来て「騙された!」はないと思う。俺は訴えてもいい。

あのヒト、眷属見れば分かるけど、ちっこい娘も守備範囲なんだよなあ。『女王』は熟した感じだけど……なんか、俺の守備範囲って義兄上から影響受けまくってないか。

『そうそう、おばさまに……って、話を逸らさないの! あとヘンなことを考えてたでしょ?』

「ばれたか」

『おねーちゃんは、リーくんのことなんてお見通しなんだから! バレバレなんだからね☆』

このおねーちゃん、魔法少女の格好でパンチラしてくれるだけのヒトではない。ちいさいころの俺に、あんなことや、こんなことをしたヒトだったりする。

赤ちゃんちん見られてるくらいに付き合いが長いと困っちゃうね。

「で、えーっと、たしかに『兵士』が似合ってるって言ったけど?」

『だから、どうしてソーナちゃんが『兵士』なの!? そこは、こう……』

『ソーナ、俺の女王になれ』みたいなことをね』

「もう俺の『女王』決まってるから。というか、ソーナはシトリーの次期当主だから。あと、やっぱり似てない。もうやめたらソレ?」

『リーくんのおたんこなす! わからずや! にぶちん! 女ったらし! そんなにレイヴェルちゃんがいいの!』

「うん」

『うぬぐぐぐ……!』

この感じだと、ソーナのヤツ『あのこと』は話していかないようだ。いやいや言っているようで、アイツお姉ちゃん大好きっ子だからなあ。全部話してしまったのかと思って微妙に焦ってしまった。

まあ、セラフォルーさんなら大丈夫そうだけど。シトリーのおじさんにバレると、俺がヤバイ気がするからな。

「いや、ほら、ソーナはいつもレーティングゲームの学校が1つで言ってるから。それで、仮にソーナが誰かの眷属になるとしたらって話になったときに、それなら『兵士』が向いているよなと」

『理解はできるけど、一応説明してくれる?』

「下級悪魔がレーティングゲームなんて、現状では無理だろうけど、それでも奇特な上級悪魔に拾われることがあるかもってことで考えてみると……。まあ、『兵士』しかないでしょ?」

転生悪魔のスタート地点でもある階級としての下級悪魔と、純粋な生まれながらの下級悪魔は違う。

ほとんどの場合において、転生悪魔は純粋な下級悪魔である平民よりも強いのだ。わざわざ弱い者に駒を使うとしたら、美少女コレクションとかそんな意味合いしかない。

だから、転生悪魔ならば下級悪魔の『女王』とか、『戦車』もいる。俺の眷属である、『戦車』朱乃も変異『僧侶』黒歌も下級悪魔だ。

でも、平民にはそこまでの価値も強さもない。弱い平民に駒価値Ⅱ容量の大きい駒を使うのはもったいない。

サイラオーグの『戦車』リキーゴみたいな突然変異でもない限り、平民なんぞ通常の『兵士』1駒で十分だ。なにせ純血の上級悪魔、貴族ですら駒価値「3」の『騎士』や『僧侶』でほぼいけるらしいからな。

大戦前から生きていて成熟を終えていたエダーギ・ナベリウス殿は、まだ幼少期の黒歌を眷属にするのに『僧侶』を2駒も使った。種族的な潜在能力で言えば、猫?は純血の貴族悪魔の倍くらいのもものがあつたってことだ。たしか、レイヴェルが白音を測ってみたときは、『戦車』1駒でいけるかどうか、『僧侶』や『騎士』だと2駒必要になりそうって言ってたし。

バラキエルと日本の退魔名門五大宗家の一つである姫島家の巫女との間に生まれた朱乃の秘めている才能は、その両親を考えれば相当なものなのは確実。

「生粋の下級悪魔向けのレーティングゲームの学校を作ったとして、そこの卒業生が受け取る駒はほぼ『兵士』。おねえちゃんも分かっているよね。そんなこと?」

黒歌や朱乃のような強力な者を少ない駒数で眷属に迎えらるる容量の大きい駒。それらを平民に使う物好きな『王』などまずいな……と思う。

駒の数には限りがあるので、平民を『女王』や『戦車』なんかにした日にはレーティングゲームで勝つとかまず無理である。戦術だの戦略だので覆せる戦力差つてもものには限度があるのだ。

俺がソーナとチェスをして勝てたのは、随分前のことだ。今はソーナの方が遥かにチェスの腕前は上になっている。普通にやったら百回やって百回負ける。

でも、さすがに俺が全駒持っていて、ソーナは『兵士』と『王』のみなんてハンデ戦をしたら勝てる。というか、それで負けたりしたらバカ過ぎて死にたくなりそうだ。

『……そうでしょうね』

テンション低めというか、抑えた感じの声を出されるとセラフオルーさんは結構怖い。「魔法少女よ☆」とかやってるけど、なんだかんだでこのヒトも魔王なのだ。

「なら、『兵士』養成学校の校長先生になりたいソーナには、やっぱり『兵士』がお似合いだよ」

でもまあ、俺って正面からのぶつかり合いならセラフオルーさんにも勝てますし？ ということと言いたいことは言うのである。

本気の殺し技使われたらヤバイけど……。俺の脳みそが干物になる。

魔法少女番組やレーティングゲームでウケの良い見栄えのする性質じゃないんだよな、シトリーの魔力特性の本当のところって。

一般に知られている『水の術』が得意なのは事実だが、それだけだと『海』を制する旧魔王レヴィアタンの血筋の下位互換でしかない。規模が違う。

シトリーの怖いところは、『水』をもっと細かくえげつなく使えるところだ。

悪魔は『夢幻』の存在、超常にして異形ではあるが、その身体構成は人間に近いところがある。

まあ、つまり身体の6割くらいは『水』ってことだ……。体内の『水』を支配されてしまったら、あとはもうシトリーの術者のなすがまま。初代シトリーの伝承にあるような、えろいこともやりたい放題だろうよ。

シトリー家が医療に重点を置いているのも、そういうところから来ている気がする。医者やってれば、悪魔やその他様々な種族の身体構造を把握できるし……。怖いね、怖い怖い。

ま、ソーナやシトリー卿くらいの魔力量だと、俺の魔力を抜いて徹せないだろうから平気だけどな。

『リーくんってさ、ソーナちゃんに甘すぎ』

「さつきと言ってること違うよね？」

『同じだよ。うちはソーナちゃんに自分で学んで欲しいの。だから、やりたいことはやらせるし、すごいね、すごいねーって誉めるの。そうするとソーナちゃんは頑張ってくれるでしょ？　なのに、リーくんはすぐにあれがダメ、これがダメ、こうした方がいい、ああした方がいいって言っちゃうでしょ？』

「え？　シトリー家ってそういう教育方針だったの？」

『そうだよ？　うちは誉めて伸ばして、いろいろやらせて、問題や困難にぶつかったりしたら、そこから自分で考えてもらおうつもりだから』
「じゃあ、現行のレーティングゲームの制度だと下級悪魔……面倒だから平民って言うけど。平民の参加が厳しいというか、ほぼ無理なのを変えてあげたりとかは？　魔王の権力で」

『しないよ？　私はそうしたいと思わないし、そう思っているなら最初にそうしているから。ソーナちゃんがどうしても今を変えたいって思うのなら、それはソーナちゃんが自力で叶えなきゃ』

うわ、厳しい。そりゃ、俺でも分かるような問題点なんて、魔王のセラフオールさんや長年当主やってるシトリー卿が分からないはずないけどさ。

知ってて教えないで、応援だけはして、ぶつけて行くって方針か。でもって、特権で助けたりはしない。

「それで、失敗したらどうするの？」

『いいのよ、失敗しても、くじけても。諦めちゃったなら、諦めるってことを学べる。それでもどうにか頑張るってことなら、それはそれでいいでしょ?』

「いや、でも費用とかかかるし」

『それぐらい安いものなのよ。……あ、リーくんは人間の感覚が残ってるかもしれないけど、100年くらいなら後でいくらでも取り返せるんだからね?』

どうも見た目のせいで忘れがちだが、セラフォルーさんはこれでも500歳を超えている戦争経験者だ。俺とは時間の感覚やら何やらが違うよな。

シトリー家は魔王輩出の名門。お金もあるから、多少の損失は飲み込んでしまえる。医療っていう流行り廃りのない稼ぎを抑えているから、収入も落ち込みはしない。

しかし、その分の損失はソーナの心の中にずっしりとした経験になって残るわけだ。

『ソーナちゃんはシトリーの当主になる子なんだから、自分で決められるようになってもらわないと困るのよ。何かあるたびに、私やご先祖さまに相談したり頼ったりってなっちゃうとね……。あと、リーくん!』

「はい!」

思わずピシッと背筋正して返事をしてしまった。急に大きい声出さないで欲しい。

『リーくんがソーナちゃんのお婿さんになってくれるなら良かったのよ。でも、そうじゃないでしょ? だけど、今のソーナちゃんはリーくんに頼っちゃってる。それだと、将来シトリーの当主になったときにどうするのってこと』

俺はグレモリーの当主になる。ソーナはシトリーの当主になる。

で、その頃にはシトリーの当主さまが、ことあるごとにグレモリーの当主にどうしたらいいのか聞いてくるようになっていたでしょう。

「それ、俺としてはまったく問題ないよな?」

『シトリーは困るのよ』

そりやそうだ。実質グレモリーの傘下になっているようなものだ。「ついでに言うと、俺って別にソーナの親でも兄でも、教師でもないのだ」

妹みたいな感じで接してきたが、血の繋がりはないのだな。血の繋がらない妹っぽい娘って、そこはかとなくエロい響きがある気がする。

ということ、ぶっちゃけシトリー家からソーナとの関りについてどうこう言われる筋合いはないのである。ソーナの成長に影響はあるかもしれないが、責任はない立場。

それが、俺。リヴラクス・グレモリー。無責任にお兄ちゃん風だけを吹かして来た男である。

『そうなのよね。だから、お父さまからは言えなくて、私がこうして話しているのだけれど』

まあ、セラフォルーさんからなら話は聞くけど。言うことを聞くかどうかは別にして。

「じゃあ、これからは、ソーナからの通信は無視して、顔を合わせても会話もしないってことで？ セラフォルーさんからそうしろって言われたってことで……。魔王さまからの命令じゃあ仕方ないなあ……。はあ」

『やめてやめて、そんなことしたらソーナちゃんが泣いちゃうでしょ！ 私も嫌われちゃうから！』

「あーあー……。ソーナとの付き合いもこれまでかあ……。悲しいなあ」

『リーくん！ おねえちゃんのことイジメて楽しいの!?!』

「わりと楽しいかなあ」

『もう！ 真面目な話してるのに！ プンポン!』

「そういう反応が可愛いなーと思ってやってる」

『ほんと？ おねーちゃん可愛い?』

「わりと」

実際、スタイル的にはセラフォルーさんが俺的理想かもしれない。おっぱいのサイズとか腰のくびれ具合とか。

口に出すと、その後延々とかからかわれそうだから言わないけど。

『そっかー☆ って、すぐにそういうこと言うんだから！ だからソーナちゃんも……?』

通信魔方阵に浮かぶセラフォルーさんの顔の前に、亜空間から取り出した『悪魔の駒』を浮かべて見せる。宙に舞っている『兵士』の駒の数は7個。

『兵士』の駒は全部で8個。

魔力量が大きく、かつ『赤龍帝の籠手』で『倍加』したりしていた俺の手持ちの『悪魔の駒』は変異しまくっている。容量小さめの『兵士』の駒は、全て『変異の駒』だ。

そして俺にはまだ『兵士』の眷属はいない。

「シトリーのパーティーに行くまでは、全部あつたんですけど……うっかりどこかに忘れてきてしまったみたいで。大切な物だから、どこかの親切なヒトが預かってくれていいのになー」

まあいろいろ言われたが、俺はさつきセラフォルーさんが「お婿さんになってくれるのなら良い」とかなんとか言っていたのを聞き逃してはいない。

つまり、もらってしまえばオツケーということ。

いざってときになって、「あ、使っちゃってた」とかなったら困るので、預けて来たのだ。

手元に残しているとうっかりノリで使っちゃいそうだしな、俺は意志の弱い男なので。

『あつと……でも、リーくんグレモリーの当主になるって言ってたよね?』

「おねえちゃんだから話すけど……父上や母上、兄上にも義姉上にも言っていないので、秘密ってことで」

『うんうん、了解……それで?』

なんだろ、えらく嬉しそうだなセラフォルーさん。

「欲しいものがあるので、ちょっと魔王になってみようかと」

『あつ……』

紅衣の『女王』と紫衣の『騎士』（1）

セラフオルーさんとの会話は、「リーくん」呼びされたり、「おねえちゃん」呼びを求められたりするので恥ずかしい。

他のヒトの耳があると赤面してしまう。そのため、通信でも基本部屋に籠って行うことが多い。

今回は、ソーナとのアレコレを聞かれてしまったりしたので、なかなか時間がかかってしまった。

「リアスさま、通信は終わりましたか？」

「おねえ……レヴィアタンさまとだいぶ話し込んでしまった」

「おねえ……？」

「あー、ごほん。そこは気にするな」

その間、結構長くレイヴェルを待たせてしまったようだ。

俺の部屋の前で待っていた彼女を中へと招き入れ、そのまま流れるように天蓋付きベッドの枕を背に並んで座る形に。

細腰に腕を回し、まずは軽く口づけを落とす。

「んっ……っ、ちゅっ」

本番前は軽くイチヤつくところから入るのが良い。いきなり押し倒すのも悪くないが、会話をしながらチュッチュッなどで二人で徐々に盛り上がっていくのも趣があるものだ。

「そっちはどうだった？」

「イリユーカさんは、『兵士』の駒がお好みの方でしたわ」

「それはまた、えらく都合が良いな」

『兵士』の駒には余裕がある。すべて未使用だ。ソーナに1つ渡したから残り7つ。

レイヴェルが見たところでは、イリユーカの魔力や実力はうちの『女王』さまとそう差がないらしい。

俺の感覚では、レイヴェルは変異『兵士』1つで眷属化できそうだった。ならば、同程度のイリユーカも変異『兵士』1駒で足りるだろう。

上手くイリユーカをものにしたとして、それでもまだ変異『兵士』が6つ残る計算だ。

「あの子の性格を考えると自然ではあるのですが、まるで世界が旦那さまを中心に回っているかのようですわ」

「それは言い過ぎだ」

まあ、秘されたグレモリーの魔力の特性が、因果にでも干渉しているのかもしれない。

世界が俺に悪魔を続べろと言っている！　というのは、さすがに誇大妄想か。

「あつ……おなか……♡」

「あれから、ぐつと感じやすくなったな、ここが」

魔王になるぞ宣言しながらツクスの後から、レイヴェルのお腹の感度がグツと上がった。

いわゆる「繋がった」ってヤツだろう。ヘソの下あたりのポイントをさすさすトントンで子宮口あたりがキュンキュンくるそうさ。

黒歌の嗜む仙術では、臍下丹田などといってヘソの下あたりに心身の気が集中する箇所があるとか言うそうだが……。

これ、女の場合ってこくなるのでは……？　そりゃ、子供が育つ場所なんだから、気も集まるわな。詳しいことはさっぱりだが。

「はぁあん……♡　あふう……♡」

「やっぱ、間を開けずにこうしていたのが良かったのかな。交流のある御家はまだあるから、この機会にもっと進めておきたいな。まあ、イリユーカーのグラシヤラボラス家は、あるってことにはしただけで……まだこれからなわけだが」

昨年末の警備体制の見直しを行った頃から、レイヴェルはグレモリー家にずっと泊まり込んでいる。フェニックス家よりもこちらの方が防衛力が上だったからだ。

グレモリー家には、悪魔界の最重要人物である魔王サーゼクス・ルシファアの身内が住んでいる。だから、当たり前と言えば当たり前前の話ではあるのだが。

ミリキヤスが誘拐でもされたら洒落にならん。

で、その状態のまま社交シーズンに突入したので、レイヴェルはパーティーのときしか実家のフェニックス家に顔を出していないこ

とになる。

フェニックス卿は寂しがっているだろうが、彼女は俺の『女王』なので致し方ない。それが役目なのでな。『女王』と『騎士』は特別なのだからして。

ということ、婚約のときの約束で隔週で実家に帰っていたレイヴェルだが、年末からこつちエツチに間が空くことのなくなったこともあつてかお腹開発がぐつと進んだわけだ。

一番親交の深いシトリー家には行ってきたので、次はあちらから来てくれたアスタロト家になるか。シーグヴァイラのところにも行かないとマズいし、グラシャラボラスもバアルもある。

まったく忙しいな、リュイのことが無かつたらやつてられんぞ。これから夏冬とこんなことをやらないといけないのか……。

「い、いつも思うんですけど、リアスさまは社交が苦手とおっしゃるわりに、急所と言いますか、最重要のところだけは抑えていらつしやいますよね」

俺は各派閥のトップクラスしか知らん。

「まあ、生まれが生まれだからな。それに当たり年というか、当たり世代なのも大きい」

世紀末だか二千年紀の切り替わりの時期だか知らないが、俺の世代は名門六家に子供が揃って生まれている。悪魔の子供はそうそう出来来ないわけで、夫婦で頑張つて数百年かかってようやく子供が出来ました、なんてざらだ。それなのに種の寿命から考えるとほぼ同時といえるタイミングで、六名家の、それも本家に揃って生まれて来ているのだ。

ハルマゲドンの大戦期に近い生まれの兄上たちも、同世代で突出した才能の持ち主が生まれている。悪魔つて種族にはそういうところがあるのだろう。

で、同世代で年が近ければ話す機会も自然と増えるわけで、繋がりも勝手に生まれてきやすい。セラフォルーさんは兄上と年が近かったから、幼いころからよくグレモリー家に顔を出していたわけで。アジュカさまと兄上がライバル関係なのもそう。年齢差がグツと開い

ていたら、今のような関係にはなっていないなかっただろう。ファルビウムさまはよく知らないが。

ま、俺の場合は学校に行っていないなかったり、社交を避けてきたりしているので、グレモリーの次期当主に気軽に声を掛けられる家柄の子供だけと親交があるわけだが。

「レヴィアアタンさまのことも『おねえちゃん』と呼んでいらっしやつるとか」

「その話……どこから？」

「ヴェネラナお義母さまからですわ」

母上さまー！ 何を教えちゃってるんだ。

いや、ソーナやシーグヴァイラ辺りも知ってるけどさ。ラティアはそういうこと言いふらさないだろうけど。

「え、他には何か……聞いてる？」

「いろいろと……。愛しい旦那さまのことですもの、知りたくなってしまうのは仕方ありませんわ。小さい頃のお写真も見せていただきます！」

そう言つて、きやつと頬を押さえるレイヴェル。勝手に昔の写真を見たらしいことは、可愛いので許す。

まあ、言われてみれば俺もライザー義兄上からレイヴェルのことをいろいろ教えてもらっているからな。おあいこか。

母上とレイヴェルの仲が良いのは悪いことではない。俺の羞恥心程度で嫁姑問題的なアレコレが抑えられるのならば良しとしよう。

大変恥ずかしいが。

ちなみにウチの母上。俺のアルバムとかをせっせと作っていたりする。よく叱られたり折檻を受けたりしているが、あれでかなり俺に甘いのだ。甘々である。

きつと嬉々として俺の昔話をレイヴェルに語つたに違いない。

バカみたいに上がっていく魔力の件や、『赤龍帝の籠手』が顕現したときの騒動、去年からの諸々の行動の後始末をしてくれていたりもする。

そこからなんだかんだで我が家の利益を引き出してくるあたりが

母上の母上らしいところでもあるのだが。

婚約者もいるというのに、未だにお母ちゃんにケツを拭いてもらっている男。それがこの俺、リヴラクス・グレモリー。

将来的にはレイヴェルに拭いてもらう予定でもある。我ながらヒドいなあ。

ま、全部自分でやっていたら手が回らなくなるので、そこは頼っていきたいね。子作り時間の確保が第一だ。

仕事に対する姿勢で見習うべきは、「激務、激務」となかなか義姉上やミリキヤスの顔も見に來れない兄上ではない。有能な眷属を集めることに全力を振り絞り、その後は部下に投げてぐーたらしたいと仰ったというファルビウム・アスモデウスさまである！

ゼクラム祖父さんも言っていた。「まずは家、次に一族、その後領地、さらにその先までも目指すのならば、足場はしっかりと固めておけ」と。どこかの国のことわざにもそんなのあったな。

ちなみにとうのバル家の叔父上は、一族と派閥は大戦期からの混乱を乗り切って上手くまとめていると思うが、家庭はアレだったな……。領地経営も悪くないのになあ。第一夫人だったミスラさんをお願いした俺にだけは言われたくないだろうけど。

しかし、母上にはこの先もずっと頭が上がらんような気がするなあ……。魔王になっても。まあ、男はだいたいそんなモノだと思っておこう。兄上もそうだしな。

それはそれとして、

「俺もフェニックス卿に頼んでレイヴェルの写真とか見せてもらおうかな」

正直、興味はかなりある。

「やめてくださいまし。恥ずかしいですわ！」

「いいじゃないか、お互い恥ずかしい場所を見せ合っている仲だろう？　こんな風に……」

レイヴェルに覆いかぶさりながら、服をはだけさせていく。

「やあん……♡」

「いやじゃないだろ。ほら、見せるんだ」

彼女はこちらに足や腕を絡ませ、抵抗する風を装いながら肌をすり寄せてくる。

さて、ここからは楽しい楽しい本番前の準備運動に入るとしよう。よくほぐして、トロンとした顔を見るのが良いんだなこれが。

……………。

上に乗られたり、跨ったり。いくつか形を変えながら交わることしばらく。お互いがある程度の満足を得たところで今夜はおしまい。

レイヴェルは、夫となる男に気を失うほどに責め抜かれるのは嫌いではない。

でも、こうやって共に余韻を楽しむのも好きだった。

もう許してと言わされるのも良いけれど、こうしてほっこりとした幸せな気分を満たされながら彼の身体に頬を寄せるのは格別な気分。

「旦那さま、今日も素敵でしたわ♡」

「お前はいつも可愛いな。おかげでいつも触れ合いたくて仕方がなくなる」

事後の心地よさに浸りながら、取り留めもなく好意を伝え合う。「愛している」「お前が一番だ」と繰り返し伝えられるこのひと時がレイヴェルに自信を持たせてくれる。

『私はこの方の『女王』の座に就いている婚約者。未来の魔王の第一の妃。私の『王』さまは決して私を悲しい目に遭わせたりはしない』と。

だから、こう言えるのだ。

「旦那さま。アスタロト家のパーティーにはご一緒しませんので、ラティアさまと出席してくださいまし」

「ん、分かった」

嫉妬を覚ええないと言えば嘘になる。自分が記録でしか知らない頃の彼を知る相手だ。

他種族から転生した悪魔とは違う。血筋の格も高ければ、魔力の特性も有用。

レイヴェルの兄であるライザーや、他の貴族男性も、女を複数囲う

ことはしている。

しかし、そういった男性貴族でも、正式な妻とする純血の貴族女性は一人だけであることが多い。大きな権威を持つバアル大王家の現当主ですら、第二夫人までだった。

それは、悪魔世界での権威を背景に持つ貴族の女が複数となると何かと問題が起きやすいからだ。墮天使ハーフや妖怪出身の眷属、顔を合わせたときには眠りの病に罹っていたヒトや、メイドたちとはわけが違う。

これで迎えた『騎士』と女同士で足の引っぱり合いになったりした日には目も当てられない。

魔王を目指す男から、『女王』として、眷属、後宮、^{ハイレム}女の管理を任せられたレイヴェルにとつて、ラティア・アスタロトとの関係構築は、覇道に向かつての最初の大きな試練であった。

「あちらとは話がついておりますので、旦那さまがラティアさまの御家に迎えに行つて頂きたいのです」

「あー……そうか、ラティアの両親も将来義理の父母になるから、挨拶もしておかないとなあ……」

ラティアのすぐ後には、メイドのリユイことロイガン・ベルフェゴールという大物も控えている。こちらも『女王』を除けば側近中の側近といえる『騎士』にするという。

ラティア・アスタロトにしてもロイガン・ベルフェゴールにしても、そうそう縁を結べる相手ではない。ましてや眷属化など困難極まるはずだ。

それをこともなげに為そうとする自身の『王』さま。行ける！ やれる！ やつて見せる！

「ここが正念場ですから、頑張ってくださいまし！」

レイヴェル・フェニックスはこの状況にやりがいを感じ、内心でメラメラと燃えていた。いろいろな意味で。

レイヴェルに渡した我が愛ラクダである「ゴポリン」の後継者「ゴポリン2世」に跨った俺は、とある貴族の屋敷に向かっていた。ちなみにゴポリン2世もメスのラクダだ。

アスタロト卿の息子——ベルゼブブさまとディオドラの兄弟——の立てた分家であり、ラティアとラティアの両親の暮らす家である。アスタロト家が主催する社交パーティーに顔を出すため、今回のパートナーとなるラティアを迎えに来たわけだ。

ついでというか、こちらが本題なのだが「娘さんを俺の下僕にします」とも言わねばならんわけだ。

大変緊張する。父上が整えてくれたレイヴェルとの婚約のときは、全然違う。ミスラさんのときのように、肉棒ギンギンで肉欲が先走っているのなら気にならないのだが。

俺にとつてのラティアは、なんとというか、こう、そういうのとはちよつと違うのだ。妹っぽい感じのソーナともまた違って、なんとも言い難いところがある。

守つてあげたい系と近いような、でもなんだか違うような。

ディオドラやライザーさんのように話しが弾むでもなく、といって一緒にいて居心地が悪いってこともなく。シーグヴァイラのようなちよいと狭いところの話題で語り合う仲でもない。

こう、縁側で日向ぼっこしながら緑茶をゆったり飲む感じというか。いや、悪魔的には日光つて別に心地よいわけではないのだが。

なんだろう、こう幸せになつて欲しい感じか……？ いい子なんだよなあ……ちよつとばかり誤解されやすいところがあるってだけで。

いつだったか、ラティアと街中を歩く機会があつた。

そのときに彼女は悪魔には珍しく施しと忠告までしてあげていたしな。

道端にいた獣人種っぽい物乞いの目の前に金を放り投げて、『目障りよ。それを拾つてすぐに失せなさい。苛ついた悪魔に殺されないうちにね』なんて言ってしまう大変優しい子なのだ。

悪魔は他種族にかなり寛容な態度を取る。悪魔こそが夜と闇と魔の種族の頂点であるという自負があるので、「なに？ ここに住みた

いの？ 別にいいよ。ただ、ここは俺らの国だからそこんどこわきまえて？」といった姿勢だ。

見下してはいるが、排除するわけではないのだ。

悪魔は神を信仰しているわけではないので、冥界は宗教が絡みがちな神族系の異界とは対応が違うってわけだ。これは『悪魔の駒』のシステムが運用できている理由でもあると思う。

どこぞの貴族が眷属候補を広く募集したときに、かなりの数と種類の異種族が集まったというニュースを見た覚えもある。

悪魔は悪魔なので、あくどいのは基本なのだが、話はそこそこ通じる種族ってことで、実はそこまで嫌われてはいない。人間に悪さをするタイプの異形とは、そこそこに付き合っているのだ。

信仰地域を強引に拡大したせいで他神話から嫌われがちな『聖書の神話』に属する天使、墮天使、悪魔の三大勢力の中では、異形種族ウケが一番マシまである。

俺ら別に『聖書の神話』の信仰揚げようとしていないし……むしろ邪魔しているくらいだ。

冥界・墮天使側の状況は良く分からないが、あっちからはあまり異種族の話が流れてこない。そう考えると墮天使連中は堕ちてはいても天使は天使ってことなのだろう。天使の奴らって他の異形種族を殺すか封印しまくってきてるし。

といったような事情があるので、悪魔の国には結構な数の悪魔ではない異形が暮らしている。

だが、こういった連中は統治側である貴族からすると、問題を起こしたら処罰はするが、別に守ってやる意味も義務もない存在なので平民以下の暮らしになる者も多いってわけだ。

で、ラティアはそういう連中にもかなり優しい。殺してしまっても構わない、少なくとも悪魔からは何の苦情も出ない状況でも、生活できるように雇ってあげようかなどと考えてしまう子なのだ。

俺はそういうことはまずやらない、美女・美少女ならお持ち帰りするかもしれないが。

俺って、どうしてラティアと上手くやって来れているのだろう？

平民ですら捨てても構わないとか考えることがあるのにな。

そして、どうも俺は彼女からかなり好かれていたらしい。しかも友達レベルではなく、「眷属になってもいいわ」ってレベルで。

道中もその辺りを考えてみたが、余計に理由が分からなくなってきたな。

こうなるともう、ドラゴンオーラしかないか……。モテオーラってすごいなあ。

『赤龍帝の籠手』をくれた『聖書の神』……ではなく、オーラの源であるところの赤龍帝ドライブさまにお祈りしとこ。

まあ、あれだな、俺の中でのラティアは穢したくない、汚したくない子って感じなのだろう。俺みたいなのには相応しくない気がする感じだ。

だが、まあ、それと欲情を覚えるかどうかは別の話だ。勃つか勃たないかで言えば、余裕で勃つ。

矛盾するようだが、穢したくない、汚したくない子っていうのは、穢したいし汚したくなるものだ。

美人だしな。切れ長で釣りがつたキツイ印象の瞳は好みである。顔の造りは綺麗系でスタイルもかなりいい。年齢的にもう少し成長するだろうことを考えると……くふふ。

ラティアに対して、俺からぐいぐい行くのはどこか遠慮してしまうところがあつた。だが、向こうからスキンシップ多めでアプローチされて応えないようでは俺ではない。

好みの据え膳は遠慮なく喰う！

ラティアは俺の『女王』になりたかつたらしい。でも、そこにはもうレイヴェルがいて無理だから、少しでも俺の近くに居られる『騎士』になりたいとかさあ……。

なんていうか、こうたまらないものがある。はあ……愛でたい。丁寧に丁寧に、じっくりと時間をかけて味わいたい。

ま、時間はたっぷりあるしな。

なにせある程度落ち着いたら『時間』術式に特化させた専用フィールドを造って、そこで20年くらい一緒に過ごすことになるのだから

ら。

20年といっても、人間界時間では20日になるのだが。純血悪魔の生に飽きるくらい長い寿命あってこそその方法だよな。

ローゼンクロイツの子供の件は、もはや俺の中ではオマケである。いや、ローゼンクロイツはローゼンクロイツで大変有能で実に重宝しそうなのだが。アイツはレーティングゲームなんぞさせておくよりも、それだけで上級悪魔に成り上がるだけの功績を稼いだという頭脳労働をさせておいた方が役に立つはずだ。

精々こき使ってやるから、嫁さんと元気に育った子供にでも癒してもらいながら、グレモリー家基準できりきりと働くがいい。

紅衣の『女王』と紫衣の『騎士』（2）

ラクダに跨りラティアの住む城に向かう。しかし、今の俺はすっかりラティアに乗っかりたい気分だ。

すまん、ゴポリン2世。キミはラクダ基準で十分な美女だと思うぞ。だからそんな目をして振り返って来るな。

俺はまだ、そこまで至っていないし、至るつもりもないんだ。同種のラクダとイタしてくれたまえ。それか、人型に変化できるようになれ。美形で頼む。

と、くだらんことをラクダさんと目で語り合っている内に目的地に着いた。分家と言ってもそこそこにデカイ。

城門を潜り玄関でラティアに出迎えられた俺は、案内された部屋で彼女の両親に会ったところでさくつとこう切り出した。

「ラティアを俺の下僕にします」

「ください」などとは言わない。なぜなら、頂いていくことは既に俺の中で確定事項だからだ。

「やらん」などと言われては困るからな。俺の中では、ラティアはもう俺の女になっているのだ。

かの冥府の主・ハーデス神も、気に入った女は搔つ攫って行つたと神話に語られている。

でも、ちゃんと親の許可は取ったそうなので律儀だよな。当時としては、女は攫って嫁にするものだったらしいって聞いたような気がするし。

まあ、父親からしか許可を取らなかつたせいで、母親が嘆いてえらいことになってしまっただけども。といつても、あの話は世界に季節がある理由付けに当時の人間たちが考えたことだろうからなあ。

ということ、悪魔が住まう冥界から歩いていける近所異界の支配者ハーデス神に学んで、俺はラティアの両親にちゃんと伝えておくわけだ。後で揉めたら困るしな。

で、俺の発言に対してテーブルを挟んで座るラティアの両親の反応は――。

「娘から聞いてはいましたが……」

ラテイアママは困ったねと素に近い表情を見せてくれているように思える。

彼女はアガレス大公の妹。シーグヴァイラの叔母でもあるので当然のようにキリツとした感じの美女であり、ついでに『時間』使いでもある。なので……怒らせると俺のタイムスケジュールがぐちゃぐちにされてしまうかもしれないヒトだ。

アガレス家怖いよ。さすが第二位の家柄。

正直なところ、自分も持っている消滅魔力のバアル家の方が権威を別にすれば怖くないぐらいだ。『時間』を滅ぼせるようになれば問題ないが。

ラテイアを眷属にして、『時間』特性を扱えるようになれば……あるいは出来るようになるかもしれないな。時間の消滅なんてことも。

『時を滅ぼす』とは、なんとも哲学的だなあ。

ま、今考えることじゃないか。

「物の言い方がラテイアに似ているねえ。いや、実はキミの影響なのかな……？」

ラテイアパパはディオドラとアジユカさまの兄弟なので、顔の造作はふたりに結構似ている。

心の中身とは別に個人ごとに独特の雰囲気を持つアスタロト家らしく、こんな場面でもかるくいい雰囲気だ。そのせいで顔自体は似ているのにあまり兄弟っぽく思えない。

妖しく企んでいそうなアジユカさま。

優しく穏やかそうなディオドラ。

明るく軽そうなラテイアパパ。

そして、キツくて冷たそうなラテイア。

うーん、この何とも言えない配置。ラテイアとディオドラの雰囲気交換してあげてよって気がしてくる。

でもまあ、ラテイアの雰囲気違っていたら俺との付き合い方も変わっていただろうしな。

何にしても、全員見た目と言動から内心が推し量れない。付き合い

が浅ければ雰囲気は騙される。ある程度分かってくると心情が読めなくて困惑する。親交がぐつと深まると、なんとなく理解できるようになる。

アスタロト家はそんな感じだ。

ちなみに俺はラテイアに関してだけは、初対面から言いたいことがなんとなく分かった。

今思うと、あれってグレモリーの女性特攻な魔力特性が効いていたのかもしれないな。身体が教えてくれるってヤツ。

「リアス……。あなたね、もう少し言い方を考えられないの？」

隣の席のラテイアはそう言ってこちらを睨むように見てくるが、彼女の手は俺の腿の上に置かれている。

そこから伝わってくる声は、うん、まあ、なんだ……照れるな。去年の夏頃、ちようどミスラさん連れ帰ってきた辺りから、ラテイアからのスキンシップが増えた気がする。

こんな風にペタペタと触って来たり、隣にピトツとくっついて来たりと。

「そうは言っても、『駒』で眷属にした者を下僕呼びするのは普通だからなあ」

下僕には何をしても良いのである。そう、ナニもし放題なのである。なら、最初にそう言っておいた方がいいだろう。

「うくん、まく、いいんじゃないか？ ラテイアがそうしたいならさ。ただし——」

と、急に顔つきを引き締めるラテイアパパ。内心ビクつとしちやうからやめて欲しいよな、急に雰囲気変えるの。ディオドラの豹変ゲス顔には慣れたけど。

「キミとラテイアの間には子供が産まれたら、二人目まではアスタロト家にもらうから。これは、母上……アスタロト卿からの命令でね」

ふむ、一応このことは事前に聞いてはいたのだが、改めて聞かされると「アスタロト家……本当にそれでいいの？」って気もしてくる。

いや、ディオドラの養子にするってことだけど、これ、アスタロト家の後継者が俺の子供になるって話だよな。

「会わせてはもらえないのですよね？」

「それは構わないさ。グレモリー相手にそんなことはしない。面倒ごとになるに決まっているからね」

なら、まあ、構わないか。グレモリー家としては悪いことは無い。個人的には人質を取られているような気分にもなるが、アスタロト家にとっても大事な子になるはずだ。

そこだけクリアしてしまえば、なんだ、悪い話ではない。というか、将来的な領地問題などを考えるとかなり旨い話だ。

ディオドラはああいうヤツだが、ラティアとは仲がいいようだしな。結構気にかけているように見える。俺とは……ふむ、女の取り合いでもなければ大丈夫だろう。

「ディオドラの正妻予定の者の話は……？」

「聞いているよ。あれもなかなか……まあ、ディオドラの気持ちは分からないでもない。ああ、教会の女がいいって意味じゃないからね？」

ラティアパパのセリフの後半は奥方に向けたものだ。でもって、ここで彼の雰囲気が出るくらい感じに戻った。

「分かっています。しかし、ジャンヌ・ダルクの魂を受け継いだ者とは……あの子が将来、天使に手を出さないかが心配ですね」

ラティアママの予想……ありえる。

天使で女と言えば、『天界一の美女』とか噂だけは聞くガブリエルが思い浮かぶが……。俺もそこはちよつと興味があるな。白だか金だからしい天使の翼を快樂で墮落させて真っ黒に染めるとか、そそのよなあ……。見た目に現れる墮落指数。天使つてのはエロ種族だな。さすが人間とヤリテーつて『聖書の神』から離反した墮天使の元種族だ。

セラフオルーさんのライバルを、こう縄で吊るしてぐちやぐちやにとかさあ……。

あのDSな逸話の多い『聖書の神』に仕えているような女だ、どうせマゾに決まっているし最終的には啼いて悦ぶだろ。

といっても、天使つて基本人間界のことは教会任せで天界に引っ込

んでるからな。会う機会はまずなさそうだ。

「リアス」

そのとき、俺の腿にギツと痛みが奔った。

「ラティア、それ痛いから、普通に」

つねられてる、つねられてる。拗ねられてる、睨まれてる。ガブリエル墮落調教……げへへって思ってたのがバレてる。

あれか、たまにレイヴェルもしてくるが、俺って顔に出なくてもオーラに邪な感情が出ちゃってるのか？

まあ、こういう反応は可愛いからいいけど。むしろドンとこいである。俺は別にマゾではないが。

「あらあら、仲がよろしいこと。わたくしも娘が望んでいるのでしたらかまいませんわ。……ところでリヴラクスさん」

「はい」

「貴方、『縄張り』は日本になるそうですわね？」

『縄張り』は我ら悪魔が人間たちの精神エネルギーを集めるための狩場だ。他所の悪魔やら神話勢力との関係でこれの用意はそこそこ面倒である。

力の無い貧乏貴族だと結構苦勞すると聞く。俺が今年から運営する予定になっている駒王町の前任者も、自身の家では用意できなかったらしい。それで、当時空いていた駒王町をグレモリー家とバアル家から借りたようだ。

まあ、そこでやらかしちゃったわけだが。

「ええ、バアル家との関係もあつて日本の駒王町という場所になりました」

「ラティアも上級悪魔ですから、そろそろ『縄張り』の運営を学ぶ必要があります。ですが、貴方の眷属となるのでしたらこちらで予定していた場所では都合が悪いでしょう？」

たしか、ラティアはヨーロッパ方面に縄張りを持つ予定だと聞いた覚えがある。転移を使えば移動は可能だが、俺の眷属となると……。

ふむ、ラティアママの要求はもつともだな。

「分かりました。ラティアの縄張りについてはこちらで用意します」

移動や運営の手間を考えると、駒王町の近辺、出来れば隣接地がいな。数年内にはレイヴェルの分も用意しないとイケないし、あのあたり一帯をまとめて頂いておくか。

後々他にも分けることも考えると広めに確保しておいた方がいいな。まだ予定でしかないが、ソーナやイリユーカーの分も用意しておかねば。

今は下級悪魔の眷属もいずれは上級悪魔になるだろうし、リユイとその眷属も今のベルフェゴール家の管理してきた縄張りを手放すことになる。

去年まではローゼンクロイツとその眷属の分の縄張りはマモン家が用意していたが、これもグレモリーで手配する必要があったから丁度いい機会だ。

「話が早くて助かります。では、くれぐれもお願いますね」

駒王町は日本最大の『欲望』の集積地である東京に近い。なので、その近辺に縄張りを用意するとそれなりに手間がかかる。他の悪魔に縄張りを手放してもらおう必要があるからな。

代替地を用意して、あとは金払って……まあ、これぐらいは貴族の娘さんをもろうことに比べたら安いものだ。

アスタロト家でも用意は可能だろうが、この程度はケチるようなことではない。

なに、俺には金があるし、我がグレモリー家には権力があるのだ。いずれは東京都全体を地上げならぬ縄張り上げて、俺と俺の傘下眷属の縄張りにしてやろうじゃないか。

東京制圧は冗談としても、日本の首都近くに現魔王と縁の深いグレモリー、シトリー、アスタロト、グラシャラボラス。『涙』で知られるフェニックスに、悪魔界でも強者と名高いロイガン・ベルフェゴールとリユディガー・ローゼンクロイツ、さらにその眷属である上級悪魔の中でも最精鋭な面々の縄張りが集中することになるわけだ。

地獄のようだな。日本の神々や妖怪その他異形連中が何事かと驚きそうさ。

「それじゃ、もう少し話そうか？ 詳しくは後日にしても、おおまか

には決めておきたいしね〜」

ラティアパパとの話し合いの結果、いろいろと準備もあるので正式にラティアがこちらに来るのはもう少しあとになった。

といつても、例の『時間』制御用フィールドが完成したらそこで長期間一緒に過ごすことになるので特に問題はない。レイヴェルのように実家と行ったり来たりでもないしな。

「いつてらっしや〜い」

ラティアの両親に見送られながら、ラクダに乗って屋敷をあとにする。向かう先はアスタロト本家の主催するパーティーの会場。お邪魔する時間は特に決まっていない。連日ぶっ続けで開いているので、適当に顔を出す感じだ。

本家の当主つてのも大変なのだよ。俺の将来のお仕事なんだけだな！

ちなみにラティアは俺の後ろに騎乗していて、ときおり背中にもゆつむにゆつといいい感触が襲ってくる。

あててるのよね？ これ。そんなことされたら勃つちやいそうだよ、俺。まだ街中なのにラクダの上でギンギンになってしまいうそう。

「案外、あっさりしてたな」

「お父さまは、リアスなら……。いえ、超越者候補の『紫紅の龍帝』ならば……。と言っていたわ」

ラティア本人もそうだが、事前に次期当主のディオドラが話を付けておいてくれたお陰だろうか。ディオドラとアジユカさまとの仲は冷えた感じだったが、ラティアの父親とはそれなりに仲が良かったらしい。

「ディオドラには世話になった。ジャンヌ・ダルクの話をかされたときは驚いたけどな」

アイツにも随分と気を回してもらったので、聖処女の誘拐だか籠絡だかにはきっちり手を貸さないといかんな。

なんでも標的のジャンヌ・ダルクの転生者は聖剣を創造する神器『フレッド・ブラックスマイス聖剣創造』の所有者で、教会が現在進行形でやらかしているエグい計画に関係しているとか言っていたが、暴力担当なら俺に任せろ！

って感じた。

今回の件の礼もあるし、なんならヴァチカンを消し飛ばしてやってもいい。事前に最大ブーストしてからの不意打ちなら結界ごとぶち抜けるかもしれない。本当はそこに封印されてしまっているドライグの能力である『透過』でものせられれば完璧なんだが。

まあ、さすがにそれやったら戦争になるか。旧魔王の勢力もいるし……まずは墮天使滅ぼして冥界統一してからでないと天界・教会と本格的にことを構えるのは難しいな。

魂にくつついてしまっている『赤龍帝の籠手』をどうにかしてからでないと『聖書の神』が怖い。

「刀身に未来を映す聖剣に、教会の者に殺される子供たちの姿が映ったのよね」

「ディオドラから聞いたところだと、そうらしいな。……失われたフィエルボワの剣の正体は神器だったと」

歴史上の偉人の多くが神器持ちだったという話は、悪魔に生まれ変わってから知ったことだ。

ジャンヌ・ダルクもそうだったということだろう。

伝説でジャンヌの愛剣とされているフィエルボワの剣。その剣はいつの間にか無くなっていて、持ち主にどこにやったか聞いても答えなかったという話だった。

出し入れ自由な神器ならば、そりやまあ捕虜になった後に探しても出てこないか。在り処は彼女の魂なのだから。

で、その神器は転生を経ても魂に結び付いたままだったと。

『聖剣創造』は様々な効果を持つ聖剣を造り出すことの出来る神器だ。ジャンヌが未来視・遠隔視の能力を持つ聖剣を創造できたというのなら、軍を率いて戦を勝利に導いたという話にも納得がいく。

ジャンヌ・ダルクは文字を書けなかったというし、農村の生まれで学もなかった。

それでも戦争に勝てたのは敵軍の構成、攻め時が分かっていたから。いくつか予言めいた言葉を発したという逸話もある。

『聖書の神』から授かった『聖剣を創造する神器』を持ち、ミカエルに

出会って戦いを決意した少女。なるほど、まさしく戦場の聖女だ。

その結末が教会から受けた異端審問、無残な火刑というのもむごい話ではある。その上、たしかに実在する天国には何故か行けず、転生してみれば教会の暗部を見せつけられて……か。

ミカエルに言われて戦って、捕虜にされたら教会の連中に寄ってたかって苛め抜かれ、最後は焼き殺された。

で、冥界があるように天界もまた確かにあり、そこには『聖書の神』の敬虔な信徒が死後に迎えられるという天国もまた実在する。

だというのに、生まれ変わってしまった。

となると、ジャンヌ・ダルクは天国の住民として相応しくない人物だと他ならぬ『聖書の神』自身から魔女判定を受けたってことだ。

そして、今生でも所有したままだった軍を勝利に導いた聖剣の力で教会を覗き見てしまったわけだ。全知を謳う『聖書の神』や、その使いであるミカエルは現在の教会の行いを許しているが、前世のジャンヌは認めなかったことになる。

伝説にあるジャンヌ・ダルクは熱心過ぎるほどの教会の信徒で、猪突猛進なほどに頑固で潔癖だったとか聞く。

それがそんな立場になったとしたら……それはもう落ち込むだろうな。悪魔が美味しくいただけそうな精神状態になっても仕方がない。

二十歳にもなっていない若い身空で、乙女の命を燃やし尽くしてミカエルの要請に従った結果が火刑アンド天国への入国拒絶ではな。

まったく、デイオドラの好みの話だ。そりゃ食指が動くし、触手も伸びるってもの。

アイツ、可哀想な娘で抜きたいヤツだから、今も頑張って墮落させようとしているのだろう。極端な者は反対の極端に転びやすいとも言いうからな。神から悪魔への鞍替えもありそうだ。

教会側がここまでお膳立てしてくれた超有名聖女をチンコで墮落させて、悪堕ちさせる……うーん、そそる。

……まあ、デイオドラの嫁とり話はこれ以上考えない方が良いな。あまり考えて俺が欲しくなってしまうと困る。後ろからもちもち

当ててくれる可愛い娘さんに拗ねられても大変だ。

「しかし、来るときも思ったが……この街は何か雰囲気が違うな」

現在俺たちは城下町をラクダでポクポク進んでいるわけだが、街中の空気がグレモリーやアスタロト本家の城下、あと首都あたりとも何か違う。

あまり分家の領地には行ったことがない俺だが、バアル領の辺境地域は知っている。ここは、あの田舎とも何かが違うんだよな。

「リアスでも分かるのね。貴方は鈍いから、言わなければ気付かないかと思っていたわ」

さざりて見下したような言い方をするが、これがラティアの味わいである。愛でたいね。

「何が違うのか、そこはよく分からないけどな」

なんとというか、空気の感じが異なる気がする。こう、目に映る住民の数のわりに薄いというか。

「やっぱり、このことを知っていて、それで寄り付かなかったというわけではなかったのね」

「いや、知らないが、何かあるのか?」

「貴方は純血主義者を気取っているでしょう」

純血主義。ものすごく簡単に言うと、悪魔は悪魔同士で子供を作るのが一番良いって考え方だ。

俺はこの考えにはおおむね賛成している。少なくとも貴族についてはそうだ。

「気取っているわけではなくて、普通にその方が有用……。強くなれると思っただけだ。悪魔の社会は魔力の運用で成り立っているからな」

悪魔とそれ以外の種族とで血が混じった場合、生まれてくる子供の魔力は片親の悪魔のそれよりも基本的には落ちる。

魔力量が上下関係に影響するのが悪魔の世の中。魔力は多い方が良いに決まっている。

生活全般も魔力頼りだしな。

移動だけでも、サイラオーグのように放出できる魔力が極端に少な

いと転移魔方陣が使えなくなってしまうたりする。下級悪魔の子供ですら使えるものが、だ。

貴族階級、上級悪魔ともなれば領地をもつことになるので、領内全域に影響を与える大規模な術式を扱う必要も出てくる。

「魔王さま方のように月や太陽とまではいかなくても……。ああ……。もしかして、ここの連中は魔力が少ないのか？」

俺は自分の魔力量が多いので、平民クラスの魔力量の違いなんてものはよく分からない。太平洋と比べると、池も湖も大差ないような感じだ。

「ここの住民のほとんどは雑種なのよ。人間との混じり者が多いけれど、他の種族との間に生まれた者もそれなりにいるわ」

「混血か」

半人半魔。悪魔と（多くの場合）人間のハーフ。悪魔と他種族が交わって生まれてくる者たち。

『悪魔の駒』で転生した眷属悪魔とコイツらは違う。

純血の貴族悪魔が人間に手を出して生まれた場合はともかく、平民悪魔と人間との間に生まれた者は悪魔社会の最底辺だ。悪魔の血が完全に目覚めたとしても平民クラスの力しかなく、大概是平民以下の魔力しか持たないからな。

いっそ魔力を全くもたない別種族ならばまだ扱いが違うだろうに、下手に僅かな魔力があるせいで同種の最下層扱いだ。

「そう、人間界ではまともに暮らしていけない。そして、冥界でも見下される存在よ」

放置される混血は、ほとんどの場合において男親が悪魔である。そして男親の悪魔は子の面倒をみずに人間界に置き去りにするのが大半だ。女悪魔と違って、自分の腹から出てくるわけでもないしな。

いつぞやゼクラムの祖父さんも言っていたが、悪魔にとっての人間とは「一時の戯れ」に付き合う存在なのだ。

でもって、悪魔の活動地域には教会の影響も及んでいることがほとんどなので……。見つかると殺されてしまう。

「混血を集めたのか」

「お父さまの政策よ。本家から独立して、この領地の経営を始めた頃から続けているみたいね」

ディオドラのように『駒』を使って転生させたわけでもない人間の女を屋敷に囲い込んでいるのは、実は稀だったりする。そもそも中級以下の悪魔は『悪魔の駒』自体を持っていないが。

寿命が違い過ぎるし、特殊な訓練を積んでいない人間は冥界の環境下ではそう長く生きられないので置いてくるしかないってこともあるか。

ま、それでも欲望に従って手を出して、無責任な中出しを決めてしまうのが悪魔が悪魔たるところでもある。

「それはまた奇特だな。あー、もしかしてディオドラの子供が居たりするの？」

それこそディオドラはたくさん作りそうだ。というか、もう混血の子供が何人かいそうである。転生者を含む悪魔同士よりもずっと生まれやすいと聞くからな。

「まだいないわ」

そのうち来そう、と。

俺は出来る限り人間と子供を作らないように気を付けたいと思っているが、もしデキちゃったらここに連れてこようかな。

同じ混血同士で集まっているのなら、気が楽かもしれん。

まあ、俺やディオドラのような純血の貴族悪魔の子供だと、混血でも平民よりずっと上の魔力量になるだろうけど。

「もしかして、ローゼンクロイツの子供のような神器持ちを探しているとかか？」

混血で神器持ちだと、上級悪魔が眷属とするには最適だったりする。元の種族が純粹な人間の場合より強くなることが多いからな。

「それもあるのでしょうけれど、お父さまの考えは別のところよ」

ふむ、わざわざ最下層の混血を集めて領民にする理由か。

ラティアパパは掴みどころのない感じだったが、こんなことをするからには何かしらの利があるはずだ。慈善事業ってことはないだろう。

「悪魔だからなあ……」

俺がそう呟くと、後ろからラティアがぎゅつと強く抱き着いてきた。

まだ成長途中だというのに、すでに巨乳枿を超えかけているラティアの乳が俺の背中できゅにゆり。この乳圧、朱乃に匹敵する！

そして、俺たちのこの姿を見ている街行く混血領民たちの目線。

コイツら俺の姿を視界に入れると怯えた風になるのに、後ろに乗っているラティアに気付くとホツとした顔をしやる。

まあ、コイツらからするとラティアは安住の地を与えてくれた慈悲深い領主のお嬢さまってことになるからな。慕われそうではあるか。俺の下は盛り上がりそうだが。

このままでは、欲棒が充填されてしまう。

「ああ……。なあ、ラティア」

「なにかしら？」

ちよいと指を振って、会話を悟られないようにしている術式の確認。

「こいつらから『欲望』は獲れるのか？」

「人間と同程度よ」

はー、なるほどな。そういうことか。

「アスタロトの義父上は、やり手だな」

半分人間だから、こいつらから『欲望』エネルギーを収集できるのか。でもって、半分悪魔だから冥界にも適応できる。

領地と縄張りを兼ねるわけだ。しかも、教会の戦士とかが居ない冥界での安全な運営。

領主は領民から感謝と税金と『欲望』を、領民は領主の保護の下で危険な人間界や蔑まれる他の悪魔領とは違う穏やかな暮らしを得られる。

実に良い取引のように思えるな。

俺は前世でわりと黒い感じの創作世界も嗜んでいたから、一瞬、牧場とかそんな言葉が思い浮かんでしまったが……。

まあ、深くは突っ込むまい。誰も得をしないだろうから。

「悪魔たるもの、何事も利益を出してこそか。勉強になる」

ソーナが平民に入れ込むように、ラティアの父親も混血の状況をどうにかしたいと思っただけかもしれない。

だが、それで自分が損をし続けるようではいけないってことだな。施すだけでは長くは続かない。個人の趣味ではなく、御家の事業にするのなら利益を出さねばならん。

領地経営もいろいろとあるものだ。グレモリー本家の領地では難しいだろうが。

純血主義というものはなかなか根強く、そして理もあり、そういった心情になるのも分かるのだから。

こういうことが出来るのは、ご先祖さま方からあまり煩く言われないう分家の強みってヤツだな。

股間を気にしつつ、ようよう城下町の門を出た。ここからは轉移系の術式を阻害する結果がないので、パツと跳んでいける。

グレモリー本家の結界なら仕様が分かっているので気にしないが、他人様の領地で結界ぶち抜いて轉移とか失礼過ぎる。ラティアはラクダに乗ってみたそうな様子だったし。

「なあ、ラティア」

「なにかしら？」

「どうしてさつきから……そんなにくっついてくるんだ」

いや、嬉しいけどさ。周りの目とかあるし。こそっと目立たないよう邪魔しないようについて来ている護衛連中とか、絶対俺の下半身の事情に気付いてるだろ。

「リアスも雑種だからよ。いえ、それよりも酷いわね」

「まあ、俺って魂は人間のものだからな」

なんだか分からんが、どうも心配してくれているらしい。

俺って雑種と言えば雑種なんだよな。身体は純血悪魔、魂は人間、おまけにドラゴン系神器の頂点の一つの影響を多大に受けている。

ついでに、禁手化すると眷属の翼まで出るからキメラのようになる始末。派手で分かりやすいから、これはこれでアリだと思っではいる

のだが。

「悪魔なら」

「ん？」

「悪魔だったら」

「うん？」

「昔の貴方はこんな風には言わなかった。でも、今はよくそう言っている」

「そうだったかな？」

「ええ、『赤龍帝の籠手』のことがあるまでは……。バアル家で、ゼクラムさまに何か言われたの？」

「とりあえず、ラティアが真剣な様子なのでそのままラクダを道なりに歩ませる。」

「後ろから抱き着いてきている彼女の体温が伝わって来て、ぽわぽわしてくるな。」

「しかし——」

「なぜ急にそんなことを？」

「俺が祖父さんから教育を受け始めたのは、『赤龍帝の籠手』が初めて顕現して騒ぎになった頃のこと。もう何年も前からだ。」

「リアスの『騎士』になるからよ。昨日までは、わたくしには関係のないことだから聞かなかった。でも、これからは違う。そうでしょう？」

「主と眷属は一蓮托生。いざ『騎士』になるといふときになれば、これまで気になっていたことを訊ねてくるのはおかしくない。」

「俺はあまり賢くないから、今後何かあれば助言や質問が欲しいものだ。」

「そうだな」

「しかし、どうだったかなあ。『赤龍帝の籠手』が出て、ゼクラム祖父さんのところで教育を受ける前か……。兄上つつよ！ これは媚びでも売っておくかーとか考えていただけのようだが、気がするが。」

「まあ、今のようにはいまいち悪魔らしくしようとは考えていなかったかもしれない。あまり覚えていないけれど。」

「小さい頃の話だからな」

「リアスは生まれた頃には前世の記憶があつたはずよ」

俺の前世ブーストが一番輝いていた頃だ。生まれたときには自我がはつきりしていたから、普通の子より上だと思っていた時期だな。

今ではいろいろな面でレイヴェルに勝てないと思い知らされている有様だが。神童も大人になったらただの人みたいな感じ。特に社交性。

「うーん、なんだろうな。ただ、俺は祖父さん……ゼクラムさまに感謝している。あのヒトが教育を引き受けてくれたおかげで、俺は今を気兼ねなく過ごせているからな」

あの当時、父上たちと祖父さんの間でどういうやり取りがあつたのかは知らない。

分かつているのは、祖父さんが俺に悪魔社会の物事を教えることになつたこと。

それから、魂はともかくこの身体に流れている血は純血悪魔のものだと言ってくれたつてことだ。

バアル大王家の始祖の言葉。そこにある権威は大きい。

あれがあつたから、俺は純血主義者たちからイジメられずに済んでいるワケだ。そうじゃなかったら、今頃は嫌になつて冥界を飛び出していたかもしれない。

それこそ、「ここ居心地悪いから朱乃と駆け落ちするわ」みたいな感じだ。

もしくは、タンニーン殿の三男のように暴れまわっていたかもしれない。

自分よりも弱いヤツに見下されるとカチンとくるのは、人間だろうが悪魔だろうが同じだ。ハッキリと言われるよりも、相手の態度に小馬鹿にした感じがにじんでいる方がイラツとくるつてのはあると思う。

まあ、元竜王の転生悪魔タンニーン殿とドラゴンとの間に生まれた、悪魔でドラゴンなボーヴァ・タンニーンの心の内など俺の知つたことではないが。オスだし。

「そう」

「バルの叔父上とは仲が悪いが、雑種どうこうと言われた覚えはないな」

「なら、どうしてなのかしら？」

「悪魔だったら。悪魔なら。悪魔たる者。」

別に周囲からどうこう言われているわけでもないのに、そう考えている理由を知りたいってことか。

「なんだろうな……父上も母上も悪魔で、周りの皆も悪魔。だからじゃないのか？ 悪魔らしくありたいと思うのは」

「リアス、貴方は人間よ。少なくともその魂は、どんなに似せようとしても純粋な悪魔のそれにはならない。『悪魔の駒』で転生した者よりも劣っているわ」

これラティアだからいいけど、他の誰かからだったらカツーンと頭に来るだろうな。転生悪魔よりも劣っているとかわれたら。

ラティアはいつもこんな調子なので構わないのだが。別に貶しているわけでもないようだし。

「そっか」

「そして、貴方を眷属に出来るような悪魔はいない。ルシファーさまやベルゼブブさまのような超越者が、変異の『女王』かあるいは変異の『戦車』を二駒用いない限り無理でしょうね。いえ、それでも難しいかもしれないわ」

「超越者クラスの魔力に、既に亜種の禁手化している神滅具『赤龍帝の籠手』だからな。もつとも、俺は誰かの眷属になるつもりはないが」

俺はコストがとて重いのだ。

それに、俺の禁手は『王』であることを前提としたものだから他者の下僕にはなれないな。反映させているイメージが崩れてしまう。

『女王』のレイヴェルは龍の気質との相性はいいのでしょうね。でもだからこそ、貴方は急ぎ過ぎてしまいそう」

嫌っているわけではないが、否定的な感情。レイヴェルに対するそんな想いがラティアから伝わってくる。

「ラティア？」

「怒らないで聞いてくれる？ 貴方の魂は、人間のまま。純血でさえ数千年、転生者の中にはまだ千年も越えていないのに精神だけが老い衰えて、生きた屍のようになってしまふ者もいる」

「それは……知っている」

純血の悪魔でも、その生が何千年かを過ぎると生きていることに飽きてしまうのだという。転生悪魔にそれが訪れるのはもっと早く、『悪魔の駒』が製作されてからまだ数百年だというのに既に気力と活力の枯れてしまった者もいるらしい。

そういつた者は、人間出身が大半で、一生の目標を素早く達成してしまった成功者に多いと聞く。

「貴方の『女王』が司るものは、風と火と命。あの子はリアスの生を疾く激しくさせるわ。わたくしは、まだ千年どころか二十年も生きていないけれど、今の貴方は悠久を生きる悪魔としては急ぎ過ぎているように思えて仕方がないのよ」

バサリと音が聞こえた。ラティアが翼を広げたらしい。

黒い翼が俺の視界を覆った。後頭部が彼女の双丘の柔らかに弾む感触に沈んだ。

「契約よ。眷属として、貴方の『騎士』として、わたくしの命と魂とを捧げましょう。その代わりに、わたくしは貴方の『寿命』をいただくわ」
パーティードレス姿のラティアの腕が、俺の顔に両側から巻き付いてくる。紫色の長手袋とドレスの袖と、二つの間から僅かに見える白く滑らかな素肌。

何の匂いだろうか。ラティアの香りに頭の全部が包まれている。

「寿命とは穏やかじゃないな。ところで……これ、何の匂いなんだ？」
「龍角香よ。年経た龍の角を、長い間寝かせて作るの。それなりに有名なものなのだから知っておいた方がいいわね」

「死んだ龍の角か。だから硬くて冷たい感じがするのかな」

服装の好みはキツイ印象を与えるもので、表情も厳しいことが多い。香りの選択には、甘さも華やかさも柔らかさも少ない。

俺は女の表情が好きだ。怒り、笑い、拗ねて、蕩けてと……その時々で印象を変える瞳の色合いがたまらないのだ。

「それで、答えてはくれないのかしら？」

ラティアにはそういうものがない。瞳は綺麗だが、いつも仏頂面だ。

声は突き放すような響きがあるし、言葉にも棘があることが多い。

「ラクダに乗ったままっというのもあれだ」

だが、そこがいい！

その部分だけ切り取ると嫌われているようにしか思えないのに、実際の行動はデレッツデレというこの感覚！

ラティアの身体から伝わってくるこの想い。恐ろしく癖になる！

こっちは下僕になれ、これからの悪魔生を全部寄せと云っているのに、『寿命』程度でいいなんてさ。

しかも、どうやらそれも俺のために言ってくれているらしい。

ああーっ！ もう抱きしめたいなあ！

だが、ここは城門から出てさほど進んでいない道のご真ん中。こんなことをしていると忘れてしまいそうだが、アスタロト家の分家の田舎領地ではあるが、その中心都市なのでヒトの往来はかなりある。

ラティアはそのあたりがまったく気に入らないくらい盛り上がってしまっているようだが、俺は独占欲が強いので彼女のこういった姿を他人に見せたくないのだ。

「上に行くぞ。そのまま抱き着いている」

ラクダ——使い魔のゴポリン2世——の足元に魔方陣を浮かび上げらせ、普段の居場所に送り還す。

「ちよつと、リアス」

重力に引かれて地面に足がついたところで、俺は上空へと向かって跳び上がった。

翼を広げなくても悪魔は空を飛べる。身体に対する大きさから明らかなだが、悪魔や龍などは羽ばたくことで飛翔しているわけではない。

異形の翼は飛行術式の補助器官のようなものに過ぎないので、魔力が十分にあれば翼の展開は必須ではないのだ。

そのまま飛んで、上空何キロか。地上の人影が判別つかなくなったところで身体を捻ってラティアを抱きしめた。

毛先だけ青みがかかった彼女の長い金の髪が、風で散らばらないように抑え込む。

「目を閉じるんだ」

しばらく指先で金糸の感触を、腕と身体で細くも豊かで柔らかな肢体を堪能してから、彼女の頬を軽く撫でるようにして手を添える。

「リアス……」

彼女の切れ長の瞳がそつと閉じる。

冷たい口調と違って、ラティアは唇は情熱的だった。

紅衣の『女王』と紫衣の『騎士』（3）

ああ、お空の上のラティアの可愛かったことよ……。もう、アスタロト本家のパーティーなんか行かないでお持ち帰りしたい。

まだ本番はイタしてないのだ。ハグってキスだけである。

さすがに、最初からスカイ・Love・ハーケンなんて超高レベルプレイは出来ないからな。

ちなみに、ハーケンとは登山の際などに岩壁や氷壁の割れ目にぶち込む道具のことである。

しかし、あのサッカー漫画はその後どうなったのだろう。前世の俺は直撃世代だったのだが……。サッカー得意じゃなかったけどさ。

はあ、もう今すぐにもぬちゅつぬちゅつとしたいのだが、まだ我慢の時である。

ラティアとのアレやコレは例の異空間フィールドが完成して、彼女をこちらに迎えてからってのがあちらの両親との約束だ。その際に馴染みの使用人も連れてくるって話だしな。

で、それならやはりミスラさんのときの様に「お城いるよね？」となるわけだが、パーティー会場までの道すがらに聞いたところ、

『わたくしのための城を用意する必要はないわ』

とのことだったので、ラティア用の城は築城しないことになった。かと言って、ラティアがグレモリー本家の屋敷の俺用後宮スペースでずっと過ごすということでもない。

もちろんラティアのための部屋は用意しておくが、基本的には普段は別の場所に住む形だ。ラティアの連れてくる使用人の居場所は俺の後宮にはないからな。

とはいえ、将来的にはレイヴエルはグレモリー本家の屋敷に住むことになるし、ミスラさんには城を贈った。

それなのにラティアには何もなくてわけにはいかないの——。『せっかく異空間に時間術式用のフィールドを用意するのだから、そこを使わせてもらおうわ』

今度造るといふか、現在準備中の異空間フィールドをラティアに渡

すことになった。

その後の維持費などを考えると、城よりお値段高くなるからな。面積広めのフィールドを用意しておけば、「俺がラティアを冷遇している」とか、「ラティアが俺から雑に扱われている」とか、そういうことを言われることもないだろう。北海道くらいあればラティアパパの分家領地より広くなるだろうから、それぐらいで良からうよ。面倒くさい上に無駄のように思えても、お貴族さまは見栄を張らねばならん。

ちやんと大事にしてます、きちんと大事にされてますってところを目に見える形にして示しておかないといけないのだ。

そうしないと、当地人が納得していたとしてもラティアの実家の家臣やら、その領民やらがブチギレるかもしれない。

たぶん、アスタロト家全体でも程度の差はあれそうなる。あとラティアママの実家のアガレス家にもカチンとくる者が出るだろう。他家に出て行った貴族の子女ってのは、実家の御家と領地の代表みたいなものだからな。

まあ、俺は平民どもからの評判などどうでもいいと思ってるのだが、一応ね。金で解決できることは金出しておけばいいのよ。

いくら俺でも自ら望んで「叔父のバアル家当主のようだ」なんて言われたいとは思わないのだ。

アスタロト本家のパーティー会場は、それはもう豪勢な様子だ。

豪華さだけならば我がグレモリー家も負けてはいない。『聖書の神』の信徒どもから虚飾・虚栄と蔑まれようが、見栄張ってなんぼなのが貴族というもの。

だが、『アスタロト』は旧き聖書や黙示録にも記された大悪魔。兄上の魔王襲名によって成り上がった部分の大きいグレモリー家よりも、アスタロトの方が古来からの格式は上だ。アジュカ・ベルゼブブさまって超越者の魔王も輩出しているしな。

同じ超越者クラスの魔王を輩出した名門同士ならば、古くからの序列が高いアスタロト家の方がやや格上と見られるのは仕方ないところか。

「何曲か踊っておこうか」

その会場にラティアと連れ立って登場した俺は、かなり注目を集めた。

今現在、上級悪魔や平民の富豪たちの話題の中心になっているという自覚はあるので、当然と言えば当然なのかもしれないが。

「ええ、せいぜい足を踏まれないように注意しておくわ」

「そっちこそどうなんだ？ 言っておくが、俺はダンスの授業が結構好きだからな」

「そう、どうせいやらしいことでも考えていたからでしょう？」

「当たり前」

お互いこういった場に出ることが少なかったので、実はラティアと踊るのは初めてだったりする。

だが、まあ、結構上手く息が合ったのではないだろうか。今のところは身長差がほとんどないことを考えてか、彼女がかかとの低い靴を履いてくれていたのも良かったのだろう。

男の方が適度に背が高い方が見栄えはするんだよな、この手の社交ダンスって。

「俺は180を超えておきたいな」

「わたくしは170超えそうなのよね」

数曲踊って一休み。椅子に座つての話題は身長のことである。

純血悪魔男性の平均的身長は180cm付近。俺が前世を過ごした日本人ばかりの世間よりは随分と高い。基本的には、北欧系白人種の人間みたいな見た目だから悪魔って。

純血悪魔女性の平均身長は160台後半辺りだ。165を超えてまだすすくと背が伸びているらしいラティアは、背が高めな方になりそうだ。

ちなみに、悪魔女性の代表的存在であるセラフォルーさんは160cmと小柄なのだが、魔法少女のために見た目年齢を低くしているから

背も低めなのだと思われる。もう少し外見年齢を上げたら平均身長くらいまでは伸びそうだ。

まあ、御家の血筋によつては3mオーバーも、1m以下も普通にいるのが異形の種族らしいといえばらしいか。平均身長うんぬんはそういう極端な例を除外したデータだしな。

異形と言えば、男性の顔が魚みたいな御家もあるそうで……モテナくて困っていると聞いた覚えがある。

俺はグレモリー家で良かったなあ……。鏡を見る度につくづくそう実感させられる。

「ダンスのときの理想的な身長差は10センチと聞くから、そうなる」と度良いかもしれないな」

「そうね」

身長差の大きいレイヴェルと踊るときは派手に決めていく感じになったが、ラティアとは落ち着いた感じがいいのかもしれない。普通にやっていたら、普通に格好がつくので。

今後もこういった機会が最低でも年に二度は巡って来るから、これは是非とも練習しておく必要があるな。

やはりダンスが上手い方がモテるそうだから、面倒でも社交に出なければならぬのなら、いつかあるかもしれないその時のために練習はしておきたいものだ。

たまたま踊ったどこぞのお嬢さまと、そのまま盛り上がってしつぱりって可能性はあるはずなので、ぬふふ。

「しかし、誰も寄ってこないな」

ぐふふ、と妄想を膨らませてしまうくらいには暇である。

ラティアとのことを想像すると、すぐに盛りたくなってしまうから困る。

相変わらずペタペタ触って来るし、ラティアはあれか、俺を挑発しているのか。すぐに受けて立つぞ。

「うるさいよりも、ずっといいわ」

レイヴェルと参加したときは、なんだかんだとヒトが寄って来たものだ。

だが、今夜は遠巻きにチラチラと見られはしても、そこから進み出て話しかけてくるヤツが全然いない。どうやら、俺とラテイアのふたりでいると近寄りたいたい感じになるようだ。

ラテイアの言うように楽でいいけど。

「なら、そろそろアスタロト卿に挨拶しておくか」

アスタロト本家当主は、ラテイアの祖母である。

ラテイアの両親から許可は得ているし、ディオドラが話を通してくれているようだが、だからといって挨拶をしておかなくても良いってことはない。

俺はディオドラを訪ねてアスタロト本家にはよく顔を出しているので、アスタロト卿とはそれなりに話をしたことがある。なので、幼稚舎時代に数度会ったことがあるだけのラテイアの両親よりは、話しやすかったりするのだ。

「そうね。休まれていたとしても、もう準備を済まされた頃合いでしょう」

派閥トップの御家の当主ともなるとこの社交の時期は忙しいもので、俺たちがこの会場に着いた時は「少々疲れた」と休憩中だった。

これまでダンスを踊っていたのは、アスタロト卿が「ふええ……」と気を抜いているところに押しかけるのも気が引けるので、少しばかり時間つぶしをしていた面もあるのだ。

本当は何時何分って時間を決めておけばいいのだろうが、社交シーズンってこの辺りがいい加減になるというか、敢えてゆるっとさせているというか。とにかく伝統的にそういうものらしい。

「ようやく顔を見せたか。待ちくたびれたぞ」

パーティー会場から離れた一室で、俺とラテイアは豊かな金髪の女性に迎えられた。

アスタロト卿だ。彼女は、なんとというか迫力のある女性である。見事なプロポーションの二十代後半の美女といった見た目をしているが、視線に剣呑な圧がある方だ。

俺の場合は、魔力量で大幅に上回っているのどうということもないが、同格以下だと受けるプレッシャーがすごいらしい。……レイ

ヴェルがそう言っていた。

まあ、アスタロト卿はそんな感じのヒトだ。

なんかこう、力尽くで押し倒して、手籠めにして、尻穴ほじくり返してひんひん言わせたい気分になる女性だな。なんか、そっち弱そうだし。

絶対に面倒過ぎることになるだろうから、やらないけど。

「リアス、少し顔を貸せ」

そう言っ手招きされたので近寄ると、アスタロト卿は俺の頬に手を添え目尻のあたりに親指を当てた。

アスタロト卿は背丈は俺と同じくらいだが、ヒールの高い靴を履いているのでこちらが見下ろされる形になってしまう。なんだか微妙に悔しいな。

「ふん……。お前は見る度にジオテイクスに似てくるな」

俺の顔はどちらかというと母上似だと言われることの方が多い。ただ、やはり親子なので父上に似ているところもある。

「ああ、そうだ。ラティアの代わりに、この私が遊んでやるとしよう。どうだい坊や、いい考えだろう?」

ぐつと顔を近づけられ、アスタロト卿の金色の瞳が俺の視界を占領してきた。

「いえ、遠慮しておきます」

「おや、振られてしまったか。これは残念だ」

豪奢な美女からのお誘いではあるのだが、今はそのタイミングではないのだ。

からかわれているだけではなく、若干の本気が感じられるのがまことに惜しいが。

「お祖母さま。お戯れはそれぐらいになさってください」

ラティアが俺の腕を引っ張ったので、それに合わせてアスタロト卿から距離を取った。

「なんだ、ラティア。妬いているのか? 坊やは興味がありそうだったぞ?」

「リアスがそういう男なのは、よく知っています」

ニヤニヤと面白がるような笑みを浮かべるアスタロト卿。その金の瞳は、俺に腕を絡めたラティアを見ている。

「まったく、お前は悪いところばかりが私に似てくる」

「お祖母さまに良いところ……ありましたか？」

この組み合わせを俺が見ることは稀なので知らなかったが、結構仲が良いらしい。

あれかな、アスタロト卿の子供は男ばかり三名なので、女の子が欲しいとか。それで代わりに孫娘をいじって楽しんでいるみたいな。

「ははは、そういうところが似ていると言っているんだ。知っていないから出遅れるところもな」

アスタロト卿はそう言うのと、ふっ、とどこか遠くを見るような表情を浮かべた。

雰囲気を利用できないアスタロト家の上に、演技も達人な方なので、それがどういう意味なのか俺には理解しようもない。

「……まあいい、そら、さっさと座らないか」

大仰な身振りをまじえて着席を促されたので、ラティアと並んで指し示されたソファに腰を下ろした。

全員が席に着くと、アスタロト卿はすぐさま亜空間から一枚の紙を取り出しこちらへと放ってくる。

魔力で操作されたその紙は、俺の前に滑るように飛んできてピタリと停止。さっさと書面を確認しろと無言の主張をしてくる。

「契約の内容は、事前に聞いていた通りのようですね」

契約書には、俺とラティアとの間に子供が生まれたら、その第二子までをアスタロト家の子、ディオドラの養子とすることについて書かれていた。

「騙されたくなければ、よく確認しておけよ。なにしろこの私は、孫娘から悪いところしかないと言われるお祖母ちゃんだからなあ」

ラティアから言われたことを笑い飛ばしているように見えたが、実は地味に気にしていたのだろうか。まあ、あえて突っ込むことでもないだろう。

言われたように契約内容を確認するが、特におかしなところはな

い。

「ラティア」

「ええ」

ラティアにも見てもらうが、やはり引つ掛かるところは無いようだ。

まあ、こんなところでハメる意味もないか。通常ペースで考えると、子供二人つて千年計画だしな。

「ふふん、そんなに穴が開くほど見つめるな。特に何もありませんよ」

契約書は同一内容のものが全部で三枚。こちらで保管する分と、あちらで保管する分。そして、政府に提出する分だ。

これは当事者双方だけでやり取りするものよりも、より厳格な形式になる。

「では、署名といこうか」

話がまとまったところで呼ばれて来た政府の者も交え、アスタロト卿、俺、ラティア、それから見届け役の名前が契約書に記された。

ちなみにこの立会ってくれた政府の者だが、かなりの高官である。ぶつちやけ知り合いというか、兄上の眷属だ。

そのままの流れで、雑談タイムに突入。

「まさかここで、マグレガーが出てくるとはな」

マグレガー・メイザース。兄上が『僧侶』を二駒も消費して眷属とした大魔法使いだ。

数ある魔法使いの結社の中でも大規模な組織の一つである『^{ゴールデン}黄金の夜明け団』。その創設者の一人であり、かの有名なアレイスター・クロウリーの師匠だったという男だ。

最終的にその弟子とは喧嘩別れしたらしいけど。

魔法使いにも派閥争いやら、解釈の不一致による論争からの対立などいろいろとあるらしい。ヒトが三名集まれば派閥が出来るといふしな。

凡人が三人集まれば文殊の知恵だが、非凡な者が集まるとなかなか上手く行かないってことだ。有名な画家同士にも共同生活してみた

ら酷いことになったって話があったような。

強い個性同士がぶつかってしまふのだな。

「若さまにおかれましては本日もご機嫌麗しいようで、素晴らしい『騎士』を迎えられまこと喜ばしい限りですな」

緋色のローブを着た大魔法使いの視線は、俺とラティアの間に向けられていた。

ラティアはその性質上よく知らないヒトが相手だと割と緊張しがちなので、安心できるように手を握っていたりする。表情は不機嫌そうなのだけれど、握り返してくる彼女の手からほわつとした気持ちさが伝わって来て、大変可愛らしい。

「そうだろう。そうだろう！」

兄上のただ一名の『騎士』は、日本では有名な新撰組の隊長をやっていた沖田総司だ。

なるほど、彼は凄腕の剣士だ。身体の中に大量に妖を飼っていて、剣と鬼の使い方について朱乃に教えてくれてもいる。戦えばラティアよりも強いだろう。

だが、沖田総司とラティアであれば、どちらが上かは明白。美少女の勝利に決まっている。

俺の中の価値基準ではそうなる！ さらに俺の『騎士』はラティアだけではない！

俺 vs 兄上の眷属ハーレム勝負『騎士』編の結果は——2対0。勝ったな。お風呂でやって、ベッドでもヤろ。

「リアス、調子に乗り過ぎよ」

「浮かれるぐらいは許してくれ」

ラティアちゃんに叱られたので、ちよいと大人しくしておこう。

俺が口を慎むと、主にアスタロト卿とマグレガーとの会話になる。

しばらくの間この二人の世間話が続いた後、アスタロト卿がこう切り出した。

「さて、メイザース卿。このあとちょっとした余興を予定しているのだが、見物していかないか？」

マグレガーは兄上の眷属として悪魔に転生してから十分な功績を

積み上げ、冥界に自身の領地を所有している。

そのため主の付き添いではなく、貴族家当主としてパーティーに顔を出すことも出来るのだ。

「余興ですか。大変興味深いのですが……」

「ふん、ここまで足を運んでおきながら、アスタロトの宴には顔を出せないということか。魔王眷属はお堅いな」

「いえ、決してそういうわけでは。サーゼクスさまが忙しくされているところで、その眷属が羽目を外すわけには参りませんので」

「それが堅いと言っている」

現在、魔王さま方は大変お忙しい状況にある。旧き魔王の残党、墮天使、それから俺があちらこちらで言ってまわっている『王』の駒の件など、処理しておかなければならないことが多いのだ。

そのため、例年ならば社交の場に顔を出す四大魔王はお仕事忙しいのだろう。少なくとも兄上はそう。

アスタロト卿はその後もいくらか誘ったが、マグレガーはそろそろ帰るつもりのようなのだ。懐中時計を取り出して時間を確認する仕草をしている。

「やれやれ仕方がない。今日の私は振られてばかりだ」

「申し訳ありません」

こうしてマグレガーは帰ることになった。

「若さま、例の件の候補が絞れましたので後日連絡いたします」

と帰り際になって、気になり過ぎる言葉を残して。

「ああ、分かった。早いな。もつとかかるかと思っていたから助かるよ」

「ええ、では皆さま。私はこれにて」

マグレガーは去って行ったが、アスタロト卿とラティアからの視線が俺に刺さる。

「なんだなんだ、この私の目の前で気になるやりとりをする。聞いてくれと言っているようなものだ」

「リアスのことだから、どうせまたそちら絡みなのでしょう？」

そちらとは、つまりはアチラ。女絡みである。俺の行動はなんでも

ソツチ方面だと思われてしまっているらしい。

正解である。

「眷属の『僧侶』として、魔法使いを予定していました。その候補の人選をマグレガーに頼んでいたのですよ」

マグレガーがこの場でわざわざ口にしていったということは、俺の『騎士』になるラティアとその身内にはある程度話しておいてくれてことだろう。

依頼の内容的に、マグレガーが自身の息のかかった者を俺のところ
に愛妾として送り込んだように思われそうだからな。

マグレガーもそんなことでアスタロト家と揉めたくはあるまい。
俺から頼んだのだとアスタロト家にハッキリ伝えておかねば。

「なるほど、ヤツは『黄金の夜明け団』の創設者の一人。そして今や魔王ルシファアの眷属だ。悪魔との付き合いが多い魔法使い連中には顔が利くだろう。なんだ、それなりに考えているんじゃないか、リアスは。それに比べて、うちの息子は趣味に偏り過ぎだ。とは言え、あれはあれで面白いから構わんが」

「ディオドラが魔法使いを眷属にすることはなさそうですね。たしかに」

魔法使いと教会って仲悪いから、ディオドラの眷属集めの場には寄り付かないだろうよ。

「すでに日本の妖怪を『僧侶』にしていたわね。しかも変異駒の」

「ああ、ラティアは黒歌とはまだ会ったことがなかったか。猫？という希少種の妖怪出身だ。その黒歌に変異駒を使ってしまったから、通常の『僧侶』でまだ育っていない者かつ将来性のありそうな者を……と少しばかり難しい条件で探してもらっていたんだ」

なお重要な条件は、美女もしくは美少女であることである。

「十分に成長し、技を磨き知識を蓄え、名の知られた魔法使いはそれこそ今のマグレガー・メイザースのようにコストが重いから、か」

アスタロト卿の言葉のように、魔法使いは、技と知識と名を積み上げるほどに魔法力を強めていく。それに合わせて『悪魔の駒』の容量に
関係する評価値も高まっていくのだ。

超越者である兄上の『僧侶』二駒とか、マグレガーは神器持ちではない人間としては転生時の駒換算評価が相当なものだった。人間をやっていた時点で、裏の世界に名が知れ渡っていたからな。

まあ、それは父上の『僧侶』のアグリツパも同じだが。

俺としては、父上や兄上のように若返りや長い寿命を餌に高名な魔法使いのジジイを釣り上げるよりも、色々な意味で有望な若手をこれまた色々な意味で育成していきたい。

迷信、『ファンタジー夢幻』の類は一般人さんの知らない裏の世界では事実となる。魔女が悪魔と交わることで力を高めるとい話も、こつちの世界では本当のことなのだ。

俺ほどの大魔力持ち悪魔が股間のほつき箒を魔女の股に当てがって意識を飛ばしまくってやれば、それはそれは強力な黒魔女になること間違いないし！ 箒や杖にまたがって空を飛ぶってそういう意味合いもあるらしいからな！

俺 vs 兄上の眷属の華やかさ勝負。『僧侶』部門も圧勝になってしまっそうだな、これは。わははー。

「それでお祖母さま、余興というのはどういうことでしょうか？ タイミングから考えてわたくし達が関係していそうですけれど」

「おや、さすがは我が孫だ。私の考えが読めているな。なーに、グレモリーはドラゴン退治の見世物をしたそうじゃないか。そうだろう、リアス？」

「ええ、俺とタンニーン殿の子ボーヴァとの戦いを見せましたが」

「そうだろうとも。ならばこの私もヴェネラナに負けてはいられん！

それなりの見世物を客人たちに提供しないといかんよなあ！ さら、ついてこい！」

脚の付け根まで見えてしまう切れ込みの激しいドレスを翻し、大股で歩き出すアスタロト卿。

その後ろに、俺とラティアはついていくしかなかった。このヒト、かなり強引かつ我が儘マイペースで、すぐに面白がって行動するからなあ……。

「で、どうしてここにいますか？ ……ライザー義兄上」

「アスタロト卿に呼び出されたら来るしかないだろう！」

連れていかれた部屋には、何故かいつものように金髪の前髪をピンと逆立てたライザー義兄上がいた。ただ、心なしかその勢いが弱いようにも思える。お疲れなのかな？

あとその話し相手でもしていたのか、ディオドラもティーカップを傾けていた。

「あと、ディオドラは久しぶりってほどでもないな。会場で見かけなかったが、ここに居たのか」

「やあ、リアス。ラティアとは上手く行ったみたいだね。そうそう、余興の主役の接待さ」

ディオドラは相変わらずの人当たりの良さそうな穏やかな笑顔を見せてくる。

この顔と雰囲気、内心は聖処女墮落調教化計画にどろどろとした熱意を燃やしているのだから、見た目の印象ってのはまったくアテにならない。ポーカーフェイスは貴族の基本スキルだが、アスタロト家はそんなの目じゃないんだよなあ。

あと、ライザー義兄上は割と素直に内心が表情や態度に出るヒトなので、大変分かりやすい。

しかし、室内の金髪指数が非常に高い。悪魔って金や銀の髪が多いから、紅髪のグレモリー家の目立つこと。

「リアス、ここまで見せたら本日の余興の内容は分かるな？」

言いながらアスタロト卿は俺の肩を叩いてくる。

「即興劇……では、ないですよね？」

「ハーツハツハー！ そんなわけがないのは分かっているはずだ。分かっているながら女に言わせるのは、あまり趣味が良くないぞ」

一人で盛り上がっているアスタロト卿をラティアがジトツとした目で睨んだ。

「お祖母さま、つまりリアスとライザーさまの決闘でしょうか？」

ライザー義兄上の気の進まない様子からして、なんとなく予想はしていたが……。

「グレモリーがドラゴンならば、こちらはフェニックス！ どちらも

伝説の生物。余興として戦いを見せるのなら、これに勝る演出はないだろうよ！」

ふむ、しかしこう言つては何だが、俺とライザー義兄上では勝負にならない。

フェニックスは強いが、その強さを支えているのは魔王や武神クラス以下の攻撃ではそうそう倒されない不死身の特性にある。

俺はいわゆる魔王クラスを超えているので、やろうと思えば一撃で決着だ。ボーヴァ・タンニーンのとくと大差ない結果になるのは目に見えている。

「ああ、それからラティア」

「ええ」

「勘違いしているようだから言っておくが、戦うのはリアスではない。お前だ」

ラティアが、戦うのか。それならばまた分からなくなってくるが、いや、それにしても……。

「不満そうだな、リアス。なに、このライザー・フェニックスだが、実はラティアの婚約者候補でな」

「は？」

アスタロト卿のその一言で、俺の視線はライザー義兄上に向いてしまふ。

「おい、リアス。やめろ！ 攻撃的なオーラをこっちに向けるな！

俺は知らなかったんだよ！ いつの間にか父上が話を進めていてだな……」

「フェニックス卿はなかなか欲深い男ということだ。グレモリーに長女を嫁がせ、三男をアスタロト家に……ふふん、私は嫌いではないぞ。その強欲さ。だから、縁談を勧めたのだが断られてしまった。なあ、ラティア？」

演技がかった身振りで、アスタロト卿は室内の者の視線をラティアへと誘導した。

「嫌よ、趣味じゃないもの」

注目を浴びたラティアは、俺に寄り添うようにしながらライザー義

兄上に冷たい言葉を浴びせる。

「グう……おお……。なあ、リアス！俺が一体何をした！何もし
ていないのに、どうしてこんな目に遭わされねばならん！」

おお、ライザー義兄上が、告白もしていないのに手酷くフラれたみ
たいになっておられる。

俺も前世のトラウマを掘り起こされてしまいそうだ……。

ライザー義兄上、ラティアはそこまで義兄上を嫌っているわけでは
ないのです。ただ、言葉のチョイスがキツイだけなのです。

でも、これ説明しづらいんだよなあ……。

「とまあ、このような縁があったので、ライザー・フェニックスに今回
の余興に出てもらうことにしたわけだ。さて、ラティア。龍帝の『騎
士』のお披露目だ。フェニックス相手に精々盛り上げて、私を楽しま
せてくれよ！」

「フェニックス……そういうことですか。分かりました、お祖母さま」

紅衣の『女王』と紫衣の『騎士』（4）

レーティングゲームの勝敗には政治が絡む。

貴族家同士の面子や関わりが試合に作用し、結果に反映されるとい
うのは平民ですら理解していることだ。レーティングゲーム賭博を
深く嗜む者は、その辺りも考えた上で金を賭けている。

これは、現政府がレーティングゲームでの活躍と昇進・評価を結び
付けてしまっている以上今後も在り続けることだろう。

「ライザー・フェニックス。私がお前に望んでいることがなんだか分
かるか？」

リヴラクス・グレモリー、ラティア・アスタロトの両名が余興の準
備のために去り、ディオドラ・アスタロトも居なくなつた室内。ライ
ザー・フェニックスは、現魔王ベルゼブ派の首魁・アスタロト卿と
二人だけになっていた。

密室で美女とふたりつきり。ライザーのような好色な男ならば実
にそそのシチュエーションではある。だが、今のライザーの心にはこ
れっぽっちもそんな気は湧いてこなかった。

「負けるかと仰っているのでしょうか？」

今回は宴の余興という形だが、レーティングゲームでもときに家同
士の関係であえて負けなければならぬときがある。

まだ本格的な参戦をしていないライザーだが、そのぐらいのことは
わきまえていた。

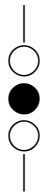
御家の顔である当主や次期当主と違って、三男となるとそういった
役どころをこなす必要もある。

「そう聞こえたのなら、その認識は間違っているぞ。何故なら今回
のルールを決めるのは私だからな。勝たせたいだけならば、リアスに
『譲渡』を許可すると言うだけでいい」

リヴラクス・グレモリーの魔力量は莫大。フェニックスの不死身打
破に必要と言われる魔王クラスを軽く上回る。その魔力を『倍加』し
てラティア・アスタロトに『譲渡』されてはライザーとしてはたまつ
たものではない。

「では、俺にどうしろと」

「余興だよ、余興。私は最初からそう言っていたはずだがなあ」



やはりメイド服がいい。

将来的にレーティングゲームに参戦した際、チームの特色を現すユニフォーム的なものがあっても良いと思うのだ。

そこで、ライザー義兄上との余興試合のために着替えるというラティアにメイド服を勧めてみたところ、見事に怒られてしまった。

『嫌よ。わたくしにスカートの中を曝せと言うの?』

一言でぶった切られてしまったぜ。はあ、一体どうすればいいんだ。

ラティアは只今着替え中。それを待つ俺の脳内は、チームコスチュームをどうするかって思考が五割くらいを占めている。残りはラティアとライザー義兄上との戦いのシミュレーションである。

まず、ラティアにメイド服を着せたとしよう。たぶん、どうしても、どうしても見たいと駄々をこねたら一度くらいは着てくれると思う。

基本的に、純血悪魔の戦闘というヤツはロングレンジの空中戦になりがちだ。

閉所での戦闘を強制されている場合でもなければ、飛んだ方が機動力が上がるのだから大体そうなる。で、お互い飛び回って魔力弾をバラまいたり、魔力砲撃をぶっ放したりするわけだ。

つまり、ロングスカートだろうが空飛んで戦ったらヒラヒラして中身が見えてしまうということだ。ミニなんてもってのほか。

実にけしからん。まことにいかん。鉄壁のスカートなんて現実にはなかった!

他人がやる分には、「おっ、パンチラきたー」と喜べるのだが俺の女

にそれをさせるなんて出来ない。俺のハーレムメンバーのスカートの中は、俺だけが見ていればいいのだ。公開生放送なんて許されざる事態。

しかし、他人にスカートの中を覗かせたくはないが、スカートのヒラヒラは魅力的だ。いや、パンツルックもいいけどね。

となると、合気道の袴みたいなものが折衷案になるのか……？ スカートのようにも見えるスカーチョとかスカンツとかなんとか言うのもあったような。

あああつ……悩ましいッ！

「待たせたわね」

着替え終わって待合室にやって来たラティアの装いは……冥界ではまだ現役の中世風ファンタジーな感じの衣装。

前部に金属装甲の付いたブーツに、緩めのズボン。上はこれインナーコートでいいのか……その裾が膝丈程度になっていてスカート状に広がっている。あとコートの上に金属製の胸当て等があって、腰回りは紐で絞って体形を強調しているようだ。

「なんていうか、あれだなアグレアスさんみたいで凛々しいな」

前世の頃に遊んだゲームにこんな格好のキャラがいたな。ちょうど金の長髪の女性騎士で。服装の色の基調が紫と黒になっているところは違うが。

「アグレアス……？ これはアガレス家とは関係ないわ。お祖母さまが大戦期に使っていた品を補修したものよ」

たまたまそのキャラと名前がかぶっているが、アグレアスとはアガレス大公領にある有名な浮遊都市の名前でもある。レーティングゲームの名所だ。

「大戦期の品か。……その剣も？」

大戦は数百年も前のことだから、本気で中世末期くらいの代物なのか。

「お祖母さまは、剣を振るうのを好まれるの。この刃に天使や墮天使の血と命を随分吸わせたものだど仰っていたわ。それから、赤龍帝に一度折られたとも聞いたわね」

「そうなのか……」

ドライグ、アスタロト卿の剣をへし折つてたのか。俺には関係ないはずなのに、微妙に後ろめたく感じてしまう。

『どうなんだ、ドライグ?』

『覚えがない。あの女は俺の記憶に残るほどの強者ではないからな』

前魔王さま方や聖書の神をアルビオンとの決闘の邪魔程度にしか感じていなかったらしい全盛期のドライグからすると、アスタロト卿もそんなものなのかもしれないな。

「饞別にくれてやる、と言われたのだけれど。この剣、使った方がいいのかしら?」

「あー……一応、構えるくらいはした方がいいんじゃないか? それなりの代物なんだろう、それ」

俺には、ラティアが剣を振り回しているところを見た覚えがない。

「剣なんて、小さい頃にお祖母さまに持たされたことがあるくらいなのよね。ただ……」

「ただ……?」

「補修してくださったのが、伯父さま……ベルゼブブさまらしいのよ」
アスタロト卿が戦争用にガチで造らせた装備に、アジュカ・ベルゼブブさまが手を入れて補修したものなのか……。そんなもの饞別にもらったら使うしかないではないか。

俺の眷属総メイド服化計画は、動き出す前に壊されてしまったらしい。

「それは、もう今後もその格好でいくしかないな」

だが、なんだ、これはこれでヒラヒラスカート成分と下着見せないガードの両立としてはアリか……?」

帰ったら我が家御用達のデザイナーでも呼びつけて考えさせることにしよう。しかし、メイド服……。

「それより、お祖母さまはフェニックスと戦って愉しませろと仰っていただけれど」

「そうだな。どうしたものか……いや、まずは『騎士』の駒を渡すとき
の口上か」

アスタロト卿からの指示で、余興の最初に俺がラティアを『騎士』にする一幕が入るらしい。観客にその場面を見せるのだそうなの。

「まだ考えていなかったの？ 時間はあつたはずよ」

メイド服とスカートについて考えていました、とは言い難いな。

「まあ、何とかなるだろう」

「いい加減ね」

「急に言われても、洒落た言い回しが浮かんで来ないんだよ」

定型文というか、決まり文句みたいなのしか思い浮かばない。兄上と義姉上の劇のセリフをパクるのも何か違うしな。

「リアスにそんなもの期待していないわ」

つまり、期待しているということだ。

そんなに難易度を上げてくれるなよ、ラティアさん。俺には文才や演説の才能なんてものはこれっぽっちもないのだから。



アスタロト領内にある大規模パーティー用の会場施設。そこにはいわゆるコロシラムのような建築物も存在する。

その内部、観客席から見下ろされる円形の闘技場に形成された戦闘用フィールドの中央に四つの人影があつた。その影の内一つは紅の髪、残る三つは金の髪をしている。

その中で最も注目されている者は、鮮血色の髪の高貴公子だ。

最近、悪魔社会で話題の中心となっている少年、『紫紅の龍帝』リヴラクス・グレモリー。

フィールドを覆う結界越しでさえ悪魔たちの魂を震わせる魔王すら超越した魔力。パーティー会場で見かけたときとは違う、抑えられていないその強烈な波動が集った観客たちの意識を否応なしに彼へと惹きつける。

目線の位置は客席の方が上だ。それなのに客席を見渡す彼の紫眼

に捉えられた者は、逆に見下ろされているように感じ身をすくませてしまう。

大戦を経験した者の中には、彼の所有する神器からその紅蓮の髪の少年にあの恐ろしい『赤き龍の帝王』ウエルシュ・ドラゴンア・ドライグ・ゴツホの姿を幻視する者もいた。

彼ら彼女らは思う。

もしも、あるとき赤き龍帝が白き龍皇との争いよりも悪魔の殲滅を優先していたとしたら、この場に自分は居なかった。いや、悪魔という種そのものが消え去っていたかもしれない、と。

かつてのその恐怖を思い出した者は、震えあがると同時に今はその力が悪魔のものであることに安堵していた。

四つの影の内、残る三つは金色の髪をしている。

その中の一つ、このアスタロト領の支配者、アスタロト家当主が声を上げた。

「本日、このラティア・アスタロトを『ウエルシュ・ドラゴン』龍帝の眷属、『騎士』として送り出すこととなった！」

アスタロト卿は身振りで、自身の孫娘であり、アガレス大公の姪でもあるラティア・アスタロトを示した。

一歩前に進み出たその少女には、アスタロト卿との確かな血の繋がりを感ぜさせる面影がある。

歩みに合わせて揺れる長い金の髪、冷徹としたその眼差し。大戦時にアスタロト卿が身に纏っていた戦装束を着こんだ少女。

その姿に、昔を知る多くの者は現当主がまだ『剣の公女』と呼ばれていた頃を思い浮かべた。

「皆には、新たな『騎士』の誕生を見届けてもらいたい」

眷属とは下僕である。基本的には『王』の命令を断ることを許されない立場だ。

貴族が他家の男の『王』に自家の娘を眷属として送り出すことは、嫁がせることと同じと考えて良い。つまりこれは婚約の発表である。

すでにこの噂は広まっており、観客の誰もが知るところではあったが、それを他ならぬアスタロト家当主が認め宣言した形だ。

観客席にはどよめきが広がる中、アスタロト卿は最後の影に視線を送る。

「——とは言え、それだけではつまらんだろう？　こちらは余興の相手を務めてくれるフェニックス家のライザー。彼は近々レーティングゲームに正式参戦するそうだ。皆はこの顔をよく覚えておいてやってくれ」

それから、他の三つの影から離れて立っていたフェニックス本家の三男であるライザー・フェニックスが紹介された。

場所は闘技場。アスタロト卿から告げられたライザーの「レーティングゲームへの正式参戦」という言葉。

これらから観客が予想する余興の内容は、戦闘である。

ただこれは、アスタロト家が主催する宴の席の余興であり、アスタロト家から『騎士』を送り出すという場面。

ここでライザー・フェニックスに期待されている役割は考えるまでもない。この役を上手くこなせたならば、ライザーの貴族の中の評価は上がることだろう。

悪魔、特に貴族はプライドが高い。付き合いや取引でレーティングゲームの勝敗を融通し合うことを受け入れられない者も多くいる。正確には、敗北を嫌うのだ。

だから、プライドを抑え込み道化を演じられる者とはかく重宝され、付き合いが増え、人脈を広げやすくなる。

フェニックス家は長女をグレモリー家に嫁がせ現ルシファー派での立場を強め、さらに三男を使ってアスタロト家の現ベルゼブ派貴族との交流も増やそうとしている。

フェニックス家のこの動き。アスタロト家のアガレス家、グレモリー家への急激な接近。さらに広まっている『王』の駒と思われる噂。

観客の大半を占める現ベルゼブ派貴族たちは、これらから考えられることは何かと頭を巡らせ、昨今の騒動の中心となっている者への注目をより一層強くした。

「一つ、よろしいですか」

観客の視線を一身に浴びる紅髪の少年が、アスタロト卿に向けて言

葉を発した。

「ん、なんだ？」

「俺をウエルシュ・ドラゴンと呼ばないでいただきたい」

「ほう？　だが、『赤龍帝の籠手』ブーステッド・ギアの所有者は、代々『赤き龍の帝王』ウエルシュ・ドラゴンを意味する『赤龍帝』の二つ名で呼ばれてきたのだぞ」

「俺はドライグではなく、リヴラクス。俺の身体に流れる血と、魂に宿した力を表す『紫紅の龍帝』の呼び名は受け入れましょう。ですが、俺と人間界のウエルズとは何の関わりもない。それなのにウエルズのドラゴンと呼ばれても正直困ります。呼び名に地名を冠しておきながら、その地に暮らしたこともなければろくに知りもしないでは格好が付きませんから」

リヴラクス・グレモリーはウエルズに住んだこともなければ、縄張りを構えているわけでもない。自身に宿る神器の由来を訪ねて旅行に出かけた程度のことはあるかもしれないが、それだけでウエルズの名を冠することは抵抗があると言う。

「俺はリヴラクス。『赤き龍の帝王』ウエルシュ・ドラゴンア・ドライグ・ゴツホではない。悪魔にとって名がどれほど重要なのか、魔王ベルゼブブの名を襲名した子を持つアスタロト卿ならば理解されているはず。俺とドライグは別の存在、混同されたくないのですよ」

『ルシファー』、『ベルゼブブ』、『レヴィアタン』、『アスモデウス』。

内戦で前魔王の血族を打ち破り現行の政府を立ち上げた際、現在の魔王たちは大戦で死した四大魔王の名を奪い己のものとして名乗った。

それには意味があり、理由がある。

夢幻の存在である悪魔にとって、他者から呼ばれる名とは酷く重要なものなのだ。

「なら、リアス。貴方はどう呼ばれたいの？」

ラティアの問いかけに、リヴラクスは首を横に振って答えた。

「二つ名を自分で決めるのものな。『紫紅の龍帝』しこうのりゅうていでいいだろう？」

あらゆる言語を解する悪魔の感覚は独特だ。一旦ウエルシュ・ドラゴンの意味を否定された上でリヴラクスの言い方を聞くと、どこか物

足りなく感じてしまうところがある。

「どうにもそれは味気ないな。よし、自分では決められんというのなら、この私が決めてやろうじゃないか！ 龍はドラゴンとして、帝王……エンペラーはダメだな。デイハウザーと被る。……リアス、お前の人間の魂、前々世はカエサルだったりはしないか？」

さすがにそこまで名の知られた者ならば、記憶をとどめているだろう。

そう言つて首を横に振るリヴラクスの様子に、アスタロト卿はどこか残念そうにしながら、ぶつぶつと呟き続けた。

「そうか。有名な女たらしなんだがな……カイザー。といって、バルやグレモリーから取るのも癪にさわる。ならば、ディアボロス……デーモン……デヴィル……」

たまらないのはライザーだ。余興に出ると引き出され、紹介されたかと思えば、話す機会すら与えられず立っただけの状況。将来の義弟の一言のせいでグダグダだ。

そのせいなのか、彼はポツリとこぼしてしまった。

「Dynast Dragon
「ダイナスト・ドラゴン……」

「ほう！ ライザー、お前、今なんと言った？」

「あ、いえ、Dが続いたもので、つい、ダイナストと……」

ぐいっとアスタロト卿に迫られ、腰が引けがちになりながらライザーはそう返した。

「ふん、ダイナスト・ドラゴン……D・Dか。悪くない。よし、リアス！ 今この時から『ダイナスト・ドラゴン紫紅の龍帝』と名乗るがいい！」

こうしてリヴラクス・グレモリーはウエルシュ・ドラゴンとは呼ばれなくなった。

紅髪の少年は、赤き龍の帝王から、龍帝の名とその強大な力、かつて天使や墮天使の軍勢と共に多くの悪魔を蹴散らした恐怖による権威だけを受け取ったのだ。

ラティアを『騎士』にするときの口上をどうしようかとピリピリしていたら、ライザー義兄上の提案で『紫紅の龍帝』ダイナスト・ドラゴンと呼ばれることになった男。

それがこの俺、リヴラクス・グレモリー。

まあ、良い機会ではあった。いつかドライグとお別れする予定の俺としては、コイツと混同されたくはなかったからな。

神話などでは、名前が似ているっただけで一緒くたにされてしまった神もいるらしい。たしか、時間のクロノス神と農耕のクロノス神がいたのにごちゃごちゃになってしまったとかどうとか聞いた覚えがある。

だから、何かの拍子に俺＝赤龍帝＝ドライグなんて認識が人間たちに知れ渡ってしまったら、もしかしたら神器を壊して分離するつもりが赤龍帝の呼び名が接着剤になってうっかり融合してしまうかもしれない。背筋がゾツとするような話だ。

『お前はいつも恐ろしいことを考えるな。兄弟』

『俺は悪魔も龍も人間たちの夢ファンタジーと幻で生きていると考えているからな。だったらその可能性もあり得なくもない。……そう思うと、おちおちベッドの上でも寝られなくなってしまっ』

『お前の寝る暇が少ないのは、寝床の上で女と乳繰り合っただけだからだろう』

『そうだな。だから俺とお前が混同されてしまうと、女と乳繰り合うのが大好きなドラゴン、乳龍帝ドライグとか呼ばれることになるかもしれないな』

『恐ろしい予想はやめろ！』

歴代の『赤龍帝の籠手』の所有者は『赤龍帝』と呼ばれて来たようだが、俺は悪魔の長い寿命が尽きるまでドライグとご一緒するつもりは毛頭ないのだ。

『さっさとオサラバしたいものだな。お互いに』

『ああ、まったくだ』

さて、いい加減ラテイアがイライラしているようなので、「この女は俺のものだ！」と観客席の連中に向かって宣言させてもらおうとしようか。

紅衣の『女王』と紫衣の『騎士』（5）

冥界。アスタロト領の時刻は夜。

偽りの月の明かりに照らされた闘技場の中央で、リヴラクス・グレモリーとラティア・アスタロトが魔力を昂らせながら向かい合っている。

その様子をライザー・フェニックスは離れた場所から見守っていた。

ライザーにはまだ正妻がいない。婚約者もない。年齢的にはもういてもいいのだが、まだだった。

それには、同世代にその候補となる純血の上級悪魔が少なかったことも関係している。

一種の見合いの場でもある上級悪魔のための名門学校。そこで、ライザーは出会いに恵まれなかったのだ。さらに言えば、気軽に話せる友人もほとんどいない。

生まれた時期が悪かったのだろう。繋がりの強くなりやすい同世代が少なかったことは、ライザーにとって素直に痛かった。

「ラティア」

情感の籠ったリヴラクスの声が響き、紅と紫のオーラを迸らせる『騎士』の駒が向かい合う二人の中央に浮かんだ。

ライザーは眷属ハーレムの『王』である。見た目から性格までバリエーション豊富な眷属たちをライザーは愛おしく思っているし、眷属たちもそれに応えてくれている。女に困っていない。

だから別にモテないわけではないのだ。それはそれとして、縁があったかもしれない美少女が他の男の下僕になるシーンを見せつけられているのは、なんとも微妙な気持ちになってしまう。性格がキツそうな上に、ライザーがラティアと結ばれていた場合、婿入りになっていたので将来的にもキツかっただろうが。

「リアス」

平坦な、いつそ冷たいときさえ言える声音でラティアが応えた。彼女の目付きは厳しく、微塵も甘い気配を漂わせてはいない。傍から見

いる分には、アスタロト家当主である祖母の命令で嫌々政略結婚させられようとしている場面にさえ見えてしまう。

もしもそうだったなら、ライザーは強大な力を持つグレモリー家の次期当主に女を奪われた男の役どころか。

実際は、まったく関係ないのだが！ 知らないうちに婚約者候補になっただけ！ 知らないうちにそれを断られ！ ほぼ初対面で手酷くフラれた男！

それがフェニックス家三男、ライザー・フェニックス！

あのラティア・アスタロトという女、顔つきにも雰囲気にもそんな気配を全く感じさせないのに、リヴラックスの近くに居る間中ベタバタバタと触れ合いまくっていた。

あれは、そう、表情、声色、オーラで好意を示せない分を、自分の身体で表現しているように見えた。ライザーはこの考えがおそらく間違っていないだろうと思っている。

別に悔しくはない。年下の、義理の弟になる男が二人目、眠りの病に倒れているミスラ・ウアプラを含めると三人目の純血上級悪魔の嫁さんをもらおうとしていたとしても、ライザーは悔しくはなかった。

結婚してはいない上級悪魔の男性は結構いる。

その代表選手はかの『皇帝』エンペラーベリアル。

レーティングゲーム不敗の王者、ランキング1位、ベリアル本家次期当主デイハウザー・ベリアルだ。彼こそは世の未婚男性貴族の星！

悪魔界で一番モテる男と言っても過言ではない『皇帝』がまだ結婚していない。

だから、ライザーは悔しくないのだ！

『紫紅の龍帝』ダイナスト・ドラゴンリヴラックスの名において、我は求め訴える。汝、ラティア・アスタロトよ。契約の代価と引き換えにその命と魂を我に捧げたまえ。汝、我が『騎士』として、生の終わりまで供をせよ！

『騎士』の駒から放たれる光が脈動し始める。魔力の波が激しさを増していく。

闘技場内に吹き荒れる、超越的な魔力の乱流。フィールドの結界外

から見守る観客たちすら、その影響を受けて慄いていた。

『王』が新しく眷属を迎える際には、魔力を昂らせ『悪魔の駒』に注ぎ込むことはままある。それにしてもこれはやり過ぎだった。

シヨールとしての側面があるとしても、リヴラクスはどれだけ気合を入れていなのだ。

レイヴェルのときもこうだったのだろうか？

妹がどのようなにして『女王』の駒を挿入されたのか。それをライザーは知らない。

知っていたら、それを聞かされていたら、どんな顔をしたら良いものか実に反応に困ったことだろう。

「我がラティアの名にかけて、この魂ある限り貴方を『王』と仰ぎ、その傍らに侍ることを誓いましょう」

『騎士』の駒から放たれる魔力の脈動が最高潮に達すると、駒が動き出し、ラティアの胸に触れ、そのまま心臓へと沈みこんで行く。

無事に駒がなかへと入り魔力が混ざり合ったことを確認すると、リヴラクスとラティアは「ふう」と同時に息を吐いて昂らせていた魔力を鎮めた。

「ラティア」

リヴラクスがラティアの頬に触れ、感極まった様子で彼女を抱きしめる。

「胸の奥から貴方を感じるわ。約束、必ず守ってもらおうから」

ラティア・アスタロトはリヴラクスの背に腕を回し、自ら彼に唇を重ねることで応えた。

熱烈な抱擁と口づけを交わす二人の姿を、ライザーは何とも言えない気持ちで眺めていた。妹の旦那と別の女とのラブシーンを見つめる彼の胸中は実に複雑だ。

とりあえず、これを見て望まぬ眷属化などではないとアスタロト家関係者各位は納得したことだろう。これはそのためのパフォーマンスなのだろうと思われる。

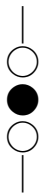
「んっ、んん！　ここでは、そのぐらいにしておけ。見ているこっちが恥ずかしくなってくるぞ」

あまりに口づけと抱擁が長くなって来たため、その様子を見届けていたアスタロト卿が二人を引き離した。続きは寝室でどうぞといった風情だ。

ライザーとしても是非そうしてもらいたいところ。兄として、レイヴェルのこともきちんとしてるよと言いたいライザーだが、今はそれを口にする場ではなさそうだ。

「さて、長々と待たせたなライザー・フェニックス。余興の始まりと行こうじゃないか！」

ようやくライザーの出番が回って来たらしい。



ライザーは生まれに恵まれた。フェニックス本家の三男。元七十二柱の名門貴族本家の生まれというのは、それだけで箱が付く。

それに加えて、ライザーはフェニックスだ。その御家の伝来の魔力の特性により、超高級高性能治療薬『フェニックスの涙』を自前で生産できる。これを製造して売っているだけで、眷属含めて経済的には将来安泰の好物件。分家を作って細々と領地経営をする必要すらない。

顔も悪くない。ワル系のイケメンだ。

さらにさらに、誰が呼んだか「フェニックス家の才児」。ライザーは悪魔としての才能＝魔力にも恵まれていた。

少なくとも現時点ではライザー・フェニックスの方がラティア・アスタロトよりも格上だ。

宴の余興として行われる戦闘。その開始前のライザーとラティアの間にある距離はミドルレンジ。武器や格闘での近接戦闘距離であるクロスレンジ。悪魔同士であれば魔力弾・魔力砲撃の撃ち合いとなる遠距離戦のロングレンジ。その二つの中間の距離になる。

「ラティア。私がお前にその大戦時の武装を与えた意味、理解しているか？」

審判役も務めるらしいアスタロト卿の言葉に、ラティアは頷き剣を

構える。

その構えを見たライザーは、ラティアの剣の腕が大したものではないと見抜いた。

ライザーの眷属の『騎士』にカーラマインという剣士がいる。そのカーラマインよりも、剣士としてのラティアは遙か格下だろう。

最近のライザーは、レーティングゲームへの本格参戦に向けて眷属を鍛え上げているので、それぐらいは分かる。

「赤龍帝の……いや、『赤龍帝の籠手』所有者の近くに在ることの意味も分かっているな？」

「分かっています、お祖母さま。それでも、わたくしはリアスの『騎士』になると決めました」

ただ、それはカーラマインがラティアよりも強いということではない。ラティア・アスタロトは純血の上級悪魔。転生悪魔のカーラマインとは、種族としてのスペック、保有する魔力の量が違い過ぎる。

純血の上級悪魔とは、本来は眷属を統べる『王』となるべき存在なのだ。構えて見せた以上は多少は使ってみせるのだろうが、ラティアの本領はいわゆるウィザードタイプだろう。剣など飾りだ。

「ならばいい。相手は不死鳥フェニックス、遠慮はいらん。そのときになって使えんようでは困るからな。初陣だから、修練が足りていればなどといった言い訳は戦争では通用せんぞ」

「元よりそのつもりです」

『悪魔の駒』の特性を引き出すには、慣らしが必要だ。

眷属ハーレムの『王』として、多くの女性を下僕にしてきたライザーはそれを知っている。

駒を受けてすぐに戦闘では、上手く扱えるわけがない。初陣前に修練が必要なのは常識である。

「ラティア姫、本当に最初から全力で良いのですか？ 『騎士』になつたばかりでは、上手く使いこなせないどころか逆に足を引つ張られてしまうかもしれません。少々慣らしてからの方が良いのでは？」

駒の与える力の特性。スピードを上げる『騎士』の駒ならば、上昇した自身の速度を把握することは必須のはずだ。

慣れていないと、無様に転んで醜態をさらすことになりかねない。そんなライザーの気遣いはバサリと切って捨てられた。

「必要ないわ。わたくしはアスタロトですもの」

ライザーとしては大変面白くない返答だ。

闘技場内の離れた場所でもリヴラクスが何か言いたそうにしていたが、言葉にされなければ理解は出来ない。

「ラティア姫は、余程自信がありがたいようだ。しかし、先達からの忠告は素直に聞いておいたほうがいい」

「事実を言つたまでよ。『悪魔の駒』に慣らしなんて必要ないわ」

「慣れない剣を振り回して、恥をかかないといいな！ ラティア・アスタロト！」

「ゆつくりと慎重に、斬り刻んであげましょう。ライザー・フェニックス」

アスタロト卿が片手を頭上に掲げた。前口上はこれで終わりだ。

「始め！」

戦闘開始の合図。アスタロト卿が腕を振り下ろした次の瞬間、ライザーの首が宙に舞った。

「なっ……」

ラティア・アスタロト、いくらなんでも速過ぎる。ライザーが反応すら出来なかった。この短時間で訓練したライザーの『騎士』よりも駒の特性を引き出して見せたとも言うのか。

回転するライザーの視界の中に、振り終えた剣の具合を確認するラティアの姿が映る。

『『悪魔の駒』を開発したのは、わたくしの伯父よ』

切り離された首と胴が炎を噴き上げ、一つになって蘇る。首が飛んだ程度ではフェニックスにダメージはない。

ライザーは首を左右に振って肩を鳴らした。「そういうことか。なるほどな、これは確かにアスタロトの一族でなければ難しい」

そもそもの『悪魔の駒』に対する考え方が違うのだ。アプローチの方法がライザーの眷属たちとは、決定的に異なるのだろう。

通常の転生悪魔は『悪魔の駒』の特性を使い込み、慣らし、徐々に特性を引き出していくものだ。

だが、彼女は『悪魔の駒』の開発者であるアジュカ・ベルゼブブと同じアスタロトの一族。駒のシステムの根幹部分にはアスタロトの一族の特性が関与している可能性は高い。ラティアはそのシステムに干渉したのだろう。

「ベルゼブブさまのように他人の駒の操作までは無理でも、自分の中にあるものの力を引き出すくらい簡単なことよ」

ラティアが剣をだらりと下げた。

そう思った時にはライザーの両脚は斬り落とされて、支えを失った身体が地面へと倒れこんで行く。背から炎の翼を噴出させ、両脚はそのままにライザーは空中へと身を移した。

地に残された脚が燃え上がって焼失し、代わりに空を舞うライザーの下半身が炎に包まれ脚が生えてくる。

攻撃の出が全く見えない。初動すら観測できず、いつの間にか斬られてしまっている状況。

「こちらも攻めさせてもらおう！」

このままやられっぱなしでは、フェニックス家の名が廃る。ライザーは地上のラティア目掛けて炎の魔力弾を放った。

火炎弾をラティアが避ける。彼女の横に着弾した燃える弾丸は地面に接触すると爆炎に変じ、風が爆ぜ炎が周囲を焼き焦がす。炎と土埃が晴れると、抉れた地面だけが姿を現した。

視線を巡らせ爆心地から離れた場所にラティアの姿を見つけたライザーは、片手を彼女目掛けて突き出しそこから火炎弾を連射し始める。

逃げるラティアを追いかけ放たれる炎の弾。それが機関銃の掃射のように次々と地面に着弾し、闘技場内に炸裂音が連続で響き渡った。

爆ぜる火炎、灼ける大気、舞い上がる粉塵、鼓膜を揺さぶる轟音。それらを小規模な結界で緩和していた禁手状態のリヴラクスのもとへ、

アスタロト卿が避難してきた。

「やれやれ、埃っぽくてかなわんな」

アスタロト卿が胸元に付いた土埃を払う仕草を見ると、大胆に開いた服に包まれた豊満な乳房がプルンと揺れる。

その様子に、うんと頷いたリヴラクスは義理の兄になる男を庇う発言をした。このとき彼の視線はラティアとライザーの攻防に戻っている。

「ライザー義兄上は、場を盛り上げようとしているのでは？」

余興なら派手な方がいい。素人目には分からない駆け引きを好む者も中に入るが、観客の大半は華やかさを好む。

「ラティアは地味だからな」

「地味……？ いや、あれはあれで、十分見応えがありますが……もしかして見えていませんか？」

魔力はイメージ。普段から使っていてイメージしやすい身体機能の強化は、比較的容易な部類の運用方法だ。

「見えているとも、戦闘中ならばともかく目を凝らす余裕があればどうにかなる」

「アガレスの『時間』の特性は広域の結界型だと思っていましたが、自分だけに限定してかけられるものなのですね」

ラティアの速さの理由は、『騎士』の駒の力を引き出していることだけではない。母から受け継いだアガレス大公家の血がもたらした『時間』の魔力特性だ。彼女の『王』となったことで、神器を通して時間に対する感覚を受け取ったりヴラクスは、それが理解できるようになっていた。

ラティアは『時間』特性を用いて自分だけを加速した世界に置いている。そして、その中で行動しているがために速い。ライザーとラティアでは、一手に掛けられる持ち時間の差は二十倍以上。

そのため、ラティアはライザーの初動を見てから余裕で回避し、狙いすました反撃を行うことを可能としていた。

超早口になっているはずのラティアの言葉を観客たちが理解できているのは、あらゆる言語を理解する能力を持つ悪魔だからだ。

「ラティアはアスタロトだ。魔力を絞り込み、一点に集束させるのは我が一族の得意とするところだぞ」

アスタロト家次期当主ディオドラは、魔力を円錐状に整形して突き刺す攻撃方法を得意としている。

これは通常の魔力弾、魔力砲撃よりも、貫通力が圧倒的に高い。先端部に魔力を集束・圧縮することで面あるいは打撃に近い性質から、点あるいは刺突に近いものへと変化させているからだ。

通常の魔力攻撃が拳ならば、鋭く尖らせた魔力は槍の穂先。後者の方が防御障壁を突き破る力が高いのはイメージできるだろう。

ラティアは今、『時間』の特性を自身に限定して発揮させ、さらに剣の刃や魔力攻撃の切断・貫通力を高めて運用している。眼に見えて分かりやすいのはその速さだが、あれは相当高度な魔力運用によるものだ。

速さだけならば、リヴラクスは強大な魔力と神器による『倍加』で追いつける。だが、あれだけの技量はリヴラクスにはない。

よく言われるレーティングゲームでの選手の分類に照らすと、ラティア・アスタロトはテクニクタイプになるのだろう。

「ラティアが戦う姿を俺が見るのは、初めてだったかもしれないね」「あれはあまり争いを好まんからな。それでも、あれはお前の『騎士』になることを選んだ。その意味を理解してやってくれよ」

「ええ、分かっています」

『赤龍帝の籠手』は争乱を呼ぶ。その所有者の近くに居れば、争いに巻き込まれるのは必定。平穩は遠ざかる。戦場を嫌い後方での安穩とした暮らしを望むのであれば、離れているのが正解だ。

「ライザー・フェニックスは丁度良い相手だった。格上相手にゲームでは使えない実戦用の殺し技を気兼ねなく試させてやれる。まったく、不死身というのは恐ろしいものだな」

戦闘開始直後の首刎ね、あれで大抵の悪魔は死ぬ。つまり、戦力維持のための演習であり、興行でもあるレーティングゲームでは出来ない戦い方だ。

リヴラクスの兄である魔王サーゼクス・ルシファーのような肉体を

持たない者や、フェニックス一族のような不死身の特性持ち相手でもなければ、必殺の技というのはなかなか試せやしない。雑魚狩りで練習しても上達は難しく、といって純血の上級悪魔より格上の相手に理由もなく殺し合いを仕掛けるのはリスクが高すぎる。

「レイヴェルはまだ未成熟ですからね」

成熟したフェニックスであるライザーと違って、まだ未熟なレイヴェルは『不死身』による再生・復活のたびに体力を大きく消耗してしまう。殺傷力の高い攻撃の練習相手としては、まだ不向きだ。

リヴラクスからすれば、ラティアがレイヴェルを斬り刻む光景を他人に見られたらどう思われるかということも気になってしまふところ。当人同士が納得済みならば、有効性は期待できるのかもしれないが。

「ま、格上といっても、今だけの話だが」

ラティア・アスタロトは才能に恵まれた悪魔だ。

その魔力量は本家の次期当主ディオドラと同等。アスタロトの一族らしく魔力の術式・運用に長け、なおかつ母方の血筋であるアガレス家の『時間』特性までも扱える。

『時間』への干渉力こそ本家本元の同世代であるシーグヴァイラ・アガレスに及ばないが、アスタロトの血による技量の高さと組み合わせた運用方法の多彩さでは勝る。

リヴラクス・グレモリーがバアル大王家の『滅び』とグレモリーの魔力量の豊かさを兼ね備えたハイブリッドならば、ラティア・アスタロトはアガレス大公家とアスタロト家のハイブリッドと言っている。「成熟すれば最上級悪魔クラスを狙えそうですからね」

上空で火花が散った。火花の出所はライザーの頭部。無数の針状の魔力がライザーの顔面に突き刺さり皮膚をぼろ屑のように変えて骨を露出させる、さらに針の一部が眼球を貫いて頭蓋内部に侵入しそこで爆発したのだ。

それでもライザーは不死鳥、顔中の穴という穴から火の粉を散らして復活する。ただし、一時的に思考回路を破壊されてしまったためか、ラティアの姿を見失ってしまったようだ。

「ライザー義兄上は凄いな」

「お前がラティアを応援しないでどうする」

「いや、しかし、あれは痛いなんてものではないでしょう」

「フェニックスは痛みに鈍感だと聞いているがな」

ライザーの母はフェニックス家の出身ではない。フェニックス卿の妻として他家から嫁いできた身だ。

そのため、ライザーも妹のレイヴェルも血筋だけで考えれば初代のような純粋なフェニックスではないと言える。それでもこの二人は純粋なフェニックスだ。フェニックス家の特性だけを継承している。

悪魔たちはあまり意識していないが、ライザー『フェニックス』、レイヴェル『フェニックス』という生家の名前は悪魔にとってやはり重要なものなのだ。

初代の誕生から現在まで、世代を重ねる度に貴族家同士の血の交流は行われ続けて来た。

もはや、始祖の純粋な血統など残ってはいない。二代目から消えたと言ってもいい。現行世代のほぼすべての純血の上級悪魔たちは、様々な御家の血が混じり合ってしまったている。

それでも貴族各家の特性が現れるのは、生まれたときに家の名前を受け取るからなのだろう。悪魔は『夢幻』^{ファンタジー}の存在、家名から来るイメージの影響は計り知れないものがある。

嫁いできた母から大王バアルの『滅び』を受け継いだサーゼクスやリヴラクス。やはり嫁入りしてきた母方のアガレス大公の『時間』を扱うラティアの方が例外的な存在なのだ。

『滅び』の力がグレモリー家の代名詞のようになることを警戒し強く嫌悪するバアル家現当主。グレモリーが『滅び』を継承していく中、自身の第一子が『滅び』を持たなかったことに彼は何を思ったのか。

ふと、リヴラクス・グレモリーはそんな考えを巡らせ、今考えることでもないかと自身の『騎士』と義理の兄の戦闘に意識を集中させた。

まだラティアに禁手の恩恵を与えてはいないが、いつ『不死身』特性の付与が必要になるとも知れないのだから。

『騎士』の速さで加速世界を歩み、全てを躲すラティア。不死身の耐久力により被弾をもともしないライザー。

両者の攻防は持久戦の様相を呈し始めていた。魔力の削り合いだ。ラティアがライザーを倒すには、魔王クラスの強烈な一撃でノックダウンするか、精神を削り切るか。

ほとんどの悪魔の攻撃力は魔王に及ばない。その点については例外ではないラティアが取れる方法は、ライザーの魔力が切れるまで削り続ける後者の方法しかない。

魔力はイメージ、精神の力。再生を繰り返すたびに消耗はする。

しかしこのライザー・フェニックスという男。ラティアが思っていた以上にタフだった。

このままでは先に魔力が切れかねない、とラティアの心に焦りが浮かぶ。

対するライザー。実は昨年から密かに鍛え始めていた。それというのも妹が『女王』の駒を与えられたからだ。

『女王』の駒は攻撃力・防御力・スピード・魔力の全てを大幅に上昇させる。油断していると、まだ成熟を終えていない妹に追い越されかねない。兄として、未熟な妹に負けるわけにはいかん、年長者の沽券に関わると奮起していたのだ。

その結果として少々筋肉質になってきてしまったライザーだが、優男がモテたのも今は昔。最近では、『皇帝』デイハウザー・ベリアルของเกม衣装姿のように分厚い胸板と、バツキバキの腹筋シックスパックスを見せつけていくスタイルもアリになってきている。

ならばヨシ！ とさらに鍛えこんだこと。それがここで生きていた。俺は鍛えたんだよ！ という自己への自信が彼の精神力を強くしていたのだ。

ラティアは視認も難しいほど速いが、せめて一撃だけでもクリーンヒットを与えたいとライザーは考えていた。なにせ相手は妹より二つ年上なだけの学習期間中の小娘。これはこれで、ノーダメージでやり過ぎされては面子が立たないというものだ。

フェニックスの業火は火龍の鱗すら焼き焦がし、耐性のない者が受ければ骨も残さず灰と化す。

ラテイアの速度から考えて、防御障壁の展開は間に合わせてくるだろうが、それでも当てるだけで回避よりは魔力を消耗させられるという算段もあった。

たとえアスタロト家の余興であろうとも、フェニックスの看板を背負う身として勝利は奪い取られるものではなく、譲ってやるものであるべきなのだ。

ここに至って、ライザーは頭部以外への防御を捨てた。他の部位への防御に魔力を回すよりも、不死身特性の発動の方が消費が安いからだ。

頭だけを守るのは、脳を破壊されると再生完了まで物を考えられなくなってしまうし、眼や耳を潰されては知覚が働かなくなってしまうから。

ライザーはサーゼクス・ルシファアのような脳がなくても思考でき、目も耳も口もなしに見えて聞こえて話せる肉体を超越した怪物ではないので、これは仕方がないところ。いくら悪魔が超常の存在だとはいっても、オーラの凝縮体だけが活動しているような存在はそういうものではない。

「風よー」

フェニックスの特性は、不死身の命と、地獄の業火だけではない。風もまたフェニックスの一族の司るもの。

ライザーは意識を闘技場内の大気に通わせた。風の術は多くの状況で効率が良い。次元の狭間や水中でもなければ、大抵の場合において空気はそこに存在するものだ。

そこに在るものを操ることと、そこには無いものを生み出し操作すること。どちらの術が高効率なのかは、考えるまでもないことだ。

闘技場のフィールド内の全ての空気がゆっくりと渦を巻き始めた。その全てにライザーの魔力が通っている。この風の中に存在する者は、ライザーの魔力感覚による位置把握から逃れられない。

「ここだッー」

消耗を抑えるため、遠距離戦ではなく剣戟を選択したラティア。彼女の振るった剣がライザーの肩からわき腹へと抜けていく瞬間、ライザーの身体が爆散した。

ライザーが斬撃の一瞬を捉え、体内に仕込んでいた地獄の業火の種火に火を付け、自身の身体ごとラティアを爆炎に巻き込んだのだ。肉を切らせて骨ごと爆発。不死身の特性に頼った自爆技だ。

「……やってくれるわね」

身体の再生を終えたライザーは、防御術式の魔力壁の向こうに佇むラティアの姿を見た。かなりの長期戦になっっているが、ライザーが思っていたほどには疲れていないように見える。空中戦では疲労の色が現れがちな翼も、まだピンと張ったままだ。

「アスタロト家の姫君は、随分と鍛えていらつしやったようだ」

レイヴェルとそう変わらないお嬢さま育ちだろうと考えていたライザーには、ラティアの体力は少々意外だった。

貴族的には、長い寿命の中で自然と強くなっていくことが優雅であるとされる。ラティアのような若い世代の者に鍛えていると告げるのは、少しばかりの皮肉も籠っていた。

いくら不死身の不死鳥でも、何度も何度も斬られて、扱られて、体内を爆破され続けていれば、そんな言葉の一つくらいは口にしたくなるものだ。

「言っただはずよ。ゆっくりと慎重に戦うと」

少しばかり焦ってしまい、よく確認せずに斬り込んだのはラティアの失敗だった。今の攻防で、かなりの魔力を無駄にってしまった。

魔力弾を放つよりも、剣の刃に魔力を纏わせた方が効率的だったはずが、結果が逆になってしまったのだ。

他家の特性など取り入れずとも、フェニックスの一族は強い。不死身の耐久力。業火の攻撃力。高効率の風。これらを単独で備えている。

その程度のことは、友人のソーナ・シトリーほどにはレーティングゲームに入れ込んでいないラティアでも知っている。

フェニックスの一族は、レーティングゲームにおける大きな壁だ。

一族の多くの者がプレイヤーとして参加しており、そのほとんどがランキング上位につけている。

それよりも上にいるのは一握りの怪物たち、手段はどうあれ次元の異なるとも言われる領域に至ったトップランカーたちだけだ。

内戦を経て、レーティングゲームが広まって以降フェニックスを侮る者はまずいない。なぜなら、ほとんどのレーティングゲーム参加者は不死鳥の壁を越えられず、それよりも下位に甘んじているのだから。

レーティングゲームの多くの競技において『王』の撃破が勝利条件となっている。その『王』に王手チェックをかけることがあまりにも困難なのだ。フェニックスの一族を相手にした場合。

相手のキングを取ることでできないチエスに勝つのは難しい。

魔王クラスの攻撃力を持たないラティアは、最初から長期戦を覚悟していた。そのために体力を温存しようと、ゆっくりと戦い続けてきた。

地面の上にあつては、歩いて避けていた。翼を広げてからも、ライザーの攻撃の軌道を確認しながらスタミナを温存する飛行を心がけてきた。そうやって、削り合いに競り勝とうとしていたのだ。

自身の体力の無さは、ラティアも自覚しているところ。魔力切れ以前に疲労で倒れてしまつては、勝ちの目はないとの判断だった。

ライザーはフェニックスの一族にあつて「才児」と称される男。ラティアが最初の一手から一切のミスなくこなしたとして、それでギリギリ勝てるかどうかといった相手。

たった一度のミス。それだけで勝敗の天秤はライザーの側に大きく傾いてしまった。ここからの逆転は、大きな一撃を持たないラティアには厳しい。

「もう勝敗はついたも同然、それでもまだ続けると?」

それがライザーにも分かったのか、あちらは余裕の笑みさえ浮かべて見せる。

「わたくしはリアスの『騎士』。眷属リタイヤならば、主から退却を命じられるまでは戦うものよ」

餓別だと渡されたからといって、慣れない剣など振り回したのが失敗だったのかもしれない。ラティアはそう思うも、もう一度剣を構えた。

伯父のアジユカ・ベルゼブブが手を加えたというこの剣は、魔力を切断力に変換する効率が高い。得意とする遠距離戦では勝ち目が薄い以上、ここからはこれに頼るしかなかった。

「よーし、そこまで！」

ラティアが斬り込もうとしたそのとき、アスタロト卿の声が闘技場に響き渡った。

「お祖母さま、わたくしはまだ戦えます」

「これ以上は観客も退屈だろう。どちらかが倒れるまで、延々と同じことの繰り返しになってしまいそうだ」

アスタロト卿はラティアの抗議に構わず、余興の終わりを宣言する。

「さーて、これまで見ていただけだった龍帝よ。私にその力を見せてくれないか？ アドバンスト・クラウンなど大したものではないと、そしてラティアを眷属とするに足る男なのだと、皆の目にもハッキリと分かるようになあ！」

聞きなれない単語に内心で首を傾げつつも、リヴラクスはラティアにその力を『譲渡』した。

ラティアの身体に力が満ちる。超越者の領域にまで増大する魔力。技量は有っても魔力の足りなかったラティアから、圧倒的なパワーに満ち満ちた波動が迸る。

その強化量は、元の百倍などというチンケな数値ではない。

「おい、その剣をどうするつもりだ……」

途轍もない魔力を漲らせた剣を振りかぶるラティアから、ライザーは距離を取ろうとした。

最終的にこうなるとは聞いていたが、やはりその直前になると恐ろしさが勝ってしまう。

「どうやら、余興はお終いのようね。さすがに申し訳ない気がしてくるけれど、負けてもらおうわ」

馬鹿げた威力の剣が振るわれ、ライザーは撃破された。

「やはり勝敗があらかじめ決まったゲームはつまらんな。私には興行をプロデュースする才能はなさそうだ。ああ、戦争のころは毎日が楽しかったんだがなあ」

わざとらしい口調でそう話したアスタロト卿は、リヴラクスに抱き上げられたラティアをどこか羨ましそうに見ながら手を叩いた。

それが合図だったのか、係の者によって治療室へと運び出されていくライザー。当たり前だが、手加減はされているので死んではない。

「さて、ここからは大人の時間だが……どうする？　遊んでいくかい坊や？」

これからは酒が盛大に入るようだ。蠱惑的な仕草をする金髪美女に向かつて、リヴラクスは首を横に振って見せた。

「いえ、それではこれで帰らせてもらいます」

さすがに、幼馴染の美少女を腕に抱えた状態でその祖母の誘惑に乗ることは出来なかったらしい。これが祖母孫娘井のお誘いなら食べに行ったかもしれないが。

「ならば、派手に連れて行け。領民にもよくわかるような形がいい」

リヴラクスのことをどこまで調べているのか、アスタロト卿は後ろ手に手を振りながら闘技場を去って行った。

「領民向けに派手に分かりやすくか。ラティアはどう思う？」

男に横抱きにされた体勢でのぞきこまれたラティアは、彼の首に腕を回し、その耳元で囁くようにねだる。

「そうね。ずいぶん前から、龍にさらわれてみたいと思っていたわ。その龍は自分からは来てくれなかったけれど」

「そうか、それは……まあ。あー、なら、出来る限り派手にいくか」

その日、アスタロト領の夜空に天を覆い尽くすほどの巨大な龍が舞った。

広げた翼は街よりも大きく、尾の一振りでも山々を微塵に砕き、吐き出す炎の息で湖を干上がらせる。そんな巨大な紅の龍がアスタロト家の姫君を攫って行った。

「リアス、約束は覚えているわよね？」

「ああ、寿命だろう」

「ええ、わたくしがそちらに行ったら、その日から貴方には強制的に休暇を取らせるから」

「今は毎日が休日みたいなものだけだな」

「予定をレイヴェルに任せきりにしてはダメよ。話してみて分かったけれど、あの子は忙しなさすぎる。だから、時間を引き延ばしてでも休ませるから」

「そうか……？」

「ええ、貴方は週休七日ぐらいでいいのよ」

週休七日。一日を七日に延ばして休む。それは怠惰の誘いであり、同時にリヴラクスの寿命を半分に削る恐ろしい契約でもあった。

さらに言えば、今後、リヴラクスと最も長い時間を過ごすことになるのが誰なのかを決めた契約でもあった。

悪魔の女の子は、貪欲なのだ。

アドバンスト・クラウン

俺の鼻先にラティアの尻の感触がある。衣装越しだが、この感覚は正直たまらん。

今すぐにも襲い掛かってしまいたい。たぶん、ラティアも「仕方ないヒトね」とか言いながら受け入れてくれるだろう。

まあ、今の俺は紅の鱗に紫の瞳の巨龍の姿に変化していて、ラティアがその鼻に当たると言うだろう箇所座っていると言うだけなのだが。そのうち人間形態でスカートめくり上げて、このツンと澄ました尻肉に顔を埋めてやるから覚悟しておけよ。

アスタロト卿から派手にやってくれと言われたので、今の俺の全長は通常変化状態の30mに『倍加』による512倍をかけた数値。

結構な大きさだが、俺がこんな技を身に着けたのもすべては物のサイズを極限まで半減し続け、ついには消滅させてしまうという恐ろしい白龍皇の技に対抗するため。ホント、アルビオンとかいう龍はふざけてやがる。

身体がデカければ鱗だってそれに合わせて分厚くなる。もうミサイルでも何でも持つてこい状態だ。

だが、それでも俺にはラティアの感触が分かる。何故なら俺だから。

幸いドラゴンフォームだと交尾器官を体内に仕舞いこめるので、クソデカ勃起チンポを地上に見せつけつつの飛行ではない。俺は露出狂ではないのだ。むしろ、女の穴の中に仕舞っておきたいタイプ。

この形態のモデルは、俺にとって最も身近なドラゴンであるドライグだ。そのため、両耳の後ろ辺りにそれぞれ2本、鼻先と顎の下にも各1本の計6本の角がある。いずれはドライグとの違いを出すためにこの辺りも変えていきたいものだ。

で、この角を起点にして風よけの結界を構築しているので、ラティアは俺の両眼の前かつ鼻先の角の後ろの位置に座っているわけだ。

しかし、ラティアも可愛いものだ。俺とゆったりとした休日を楽しみたいから、寿命を半分寄せたなんて。それやったら自分の寿命

だって周囲の半分になってしまっただろうに。

俺はこのことは一向に構わないと思ってる。

何故ってゼクラム祖父さんが一万歳超えてピンピンしていることだし、純血悪魔の寿命って何万年とかだろうからな。それが半分になったところでなんら問題ない。どうせ使い切れやしないのだから。寿命で死んだ純血の上級悪魔の話って、実のところ聞いたことがない。死亡したわけではないが、いつの間にかいなくなっていたという話ならば時折耳にするが。

肉体的な死よりも、悪魔にとって深刻なのは生きることによって飽きてしまうことだ。生き続けることに疲れ果ててしまうのか、何もかもがどうでもよくなってしまいうらしい。そして、だんだんと活動が衰え死んでいるのと変わらない状態になってしまう。精神的な老衰、魂の死だ。

まあ、何かその『飽き』を解消するような出来事があれば復活することもあるらしいが、長い生の中で大抵のことはやり尽くしてしまっただからこそその心の老衰なので、なかなかそう上手くはいかないらしい。

というか、そうやって復活した場合はほとんどそのことしか頭になり状態になって、後先考えなくなってしまうらしいので、色々と問題行動を起こしてしまったりするとも聞く。それ以外は自身の命さえどうでもいいのだから、それはまあ、そうなるだろう。

しかし、うむ……。ハーレムが順調に大きくなっていけば、女の数も多くなるわけだから、やはり時間は重要だな。2000人とかになつたら、1日1人では一年間かかっても順番が回らないわけだし。さすがにそれでは、ムラムラしちゃって我慢できずに浮気してしまいましたと言われても文句が言えん。放置にも限度があるってものだ。

一日働いて、一日じゅぽじゅぽとお休み。そんな領主生活もいいものだろうな。仕事に追われる生活なんてやっていられない。毎日が休暇か休暇前日、実に素晴らしいな。たまらんね。

さて、このラティアヒップの堪能に意識を割いているドラゴン形態での飛行。速度は軽く音速を超えていると思うが、それで周辺に被害

は出していないつもりだ。

魔力はイメージ。風を乱さず飛ぶ方法は、レイヴェルの特性が教えしてくれた。ドラゴン形態でも禁手化は出来るのだ。人型形態と違って衣装が変わったりはせず、角などの身体の各所に宝玉付の装身具が付くような感じだ。それで『王』さまっぽくなるので、イメージ元のドライグよりも見た目は豪華かもしれない。

そう、乱暴者のドライグと違って俺はちよつとは気を遣う男。なので、うっかり羽ばたいて森を暴風でなぎ倒したり、貧弱一般平民を家ごと吹き飛ばしたりはしないのだ。賠償請求されちゃうからね。

社会生活なんざクソくらえな野良ドラゴンと違って、悪魔の社会の中で暮らしていくのはいろいろと世知辛いのだ。他人様の領地上空とか気を遣ってしようがない。

イメージ次第でわりと万能な魔力が豊富に無かったら、こんなこと出来なかっただろうな。

野生動物やら野良魔獣が騒いでいるかもしれないが、尻尾垂らしたら地面に擦りそうな低空飛行もしていないし良いだろう。この速度で尻尾を地面に触れさせると、たぶん渓谷とかそういうのが出来てしまいそう。下手な山よりデカイし。

などと考えつつ、アスタロト領からグレモリー領までを一直線に飛んで帰って来た俺は、このままラティアを両親に紹介する予定だ。

面識はあるし、話もしてあるが、一応ね。その後はしつぽり……とは残念ながらいかないのです、また送って行くつもりである。

まあ、派手に目立つことは出来ただろう。アスタロト卿がそう言った理由はいくつか考えられるが、どれが正解なのか、あるいは全部が目的なのか、もしかして大外れなのか、その辺りはよく分からない。

ただ、悪いようにはされないだろうという謎の自信が俺の中にあるだけだ。まあ、勘である。

アスタロト卿は悪魔なので、もちろん悪いヒトで間違いない。ただ、それならそれでわざわざラティアをくれたりはしないだろう。悪魔は合理的だからな。

その夜、多くの平民達が恐怖に震えた。巨大な、あまりにも強大な龍が自分たちの頭上を通過して行ったからだ。

その龍の身体は、山よりも大きかった。その龍のオーラは強大で、そして平民悪魔たちにとって何よりも恐ろしかったのは、その龍の途方もない魔力だった。

公務などで姿を現した際に感じ取る、純血の上級悪魔たちの魔力。領主一族のそれは平民達からはかけ離れていて、種としての違いを痛感させられる代物だ。だが、あの龍の魔力はそんな貴族たちの魔力ですら足元にも及ばぬほどのものだった。

魔王。かつての旧き四大魔王を知るいくらかの者たちは、天を横切る巨龍の魔力が魔王のものすら超えていることに気付き、床に、道路に、大地に平伏した。どうかあの恐ろしい者の目に留まりませんように、どうかあの龍の機嫌を損ねませんように、と身を縮めて畏まるしかなかったのだ。

紅蓮の炎のような鱗を持つ龍が飛び立った現場にいた者たち——アスタロト家の宴会場に集っていたベルゼブブ派の多くの貴族——は、アスタロト卿の判断に恐怖とともに納得していた。

本家の血を引く姫君を狙っていた貴族は多く有ったが、あんなバケモノと争おうと考える者は今や誰もいない。

ラティア姫をグレモリー家に出すこと。それに抗議しようとしていた者の多くはリヴラクスに会ったことのなかった者で、会場で彼を見かけた時点でその魔力に恐れ戦いていた。

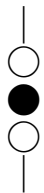
そこにダメ押しのように『赤龍帝の籠手』で『倍加』を重ねられたその力を思い知らされ項垂れるしかなかったのだ。

強い強いと噂には聞いていたが、まさかこれほど途方もないとは……。

あんな怪物に誰が勝てるか。あの超越者に並ぶ者があるとすれば

——同じ超越者である二柱の魔王しかいない。

平民も貴族も、多くの者がそう感じた。そして、グレモリーの一族の気性を思い出し安堵したのだ。あの龍帝の敵ではないということに。



さつきからラティアが静かだ。会話がないのも悪くはないが、俺には少し気になることがあった。

「なあ、ラティア」

「なにかしら？」

「アドバンスト・クラウンって何のことか分かるか？ アスタロト卿が言っていたが」

『アドバンスト・クラウン進士の冠』。なんとなく予想はつくが、確定ではない。周辺には空しかないが、一応情報遮断用の結界を張っておく。

「ベルゼブブさまが内戦後に製作された、純血の上級悪魔の力を大幅に高めるための品よ。戦後間もない頃は混乱していて、『悪魔の駒』による戦力補充もまだ始まったばかりだったから、他勢力に攻め込まれる危険も今よりずっと大きかったわ。下級悪魔を主とする軍の戦力もそのほとんどが失われてしまっていたから、緊急時のために必要だったのよ」

「そういうことにするのか」

「違うわね。最初からそういうものだったのよ」

最初から、『それ』はそのためのものだった。平民たちが『それ』のことを勘違いして、雑誌などで取り上げて面白おかしく騒いでいただけ、と。

誰も『王』の駒が実在するなんて証言していないからな。

というか、それが確かにそういった名前のものであると断言できるのは、製作したアジユカ・ベルゼブブさましかいない。その製作理由

についてもこれは同じだ。

『駒』と呼ばば『悪魔の駒』の一種のような印象になってしまうが、名前を変えるだけでそれは違うものに化ける。

「今まで隠しておく必要があったのか？ そのアドバンスト・クラウンのことを」

「完成しなかったのよ。欠陥があったの。開発に同じアスタロト家の技術を使用したからなのか、『悪魔の駒』と同時に使用すると誤作動を起こしてしまう。それに、初期ロットの生産後に判明したことなのだけれど、アドバンスト・クラウンには最悪の場合死に至るような副作用を引き起こす危険性があることも分かったわ。それでも、力を欲して使ってしまう者が出るかもしれない。だから、ベルゼブブさまはそれが分かった時点で製造を中止されたの。犠牲者を出さないためにね」

まあ、俺が使うとロクデモナイことになるらしいな。副作用と言えば、副作用だなそれは。

「そうになると、ロイガン・ベルフェゴールたちは、新薬の治験に参加したようなものか」

「ええ、外部勢力から悪魔を守るために戦力は必要。でも、アドバンスト・クラウンには副作用の危険がある。それがどの程度のものなのか、発生してしまう条件はどんなことなのか、それらを調べるためにその身を捧げて取り組まれている勇敢な方たちね。実戦では危険だからレーティングゲームの場を借りて試してくださいのよ」

「それは立派な心掛けだな。役得でもなければやっていられない。なにせ自分の命の危険もあるのだから」

「そうね。彼女たちの献身もあって、ベルゼブブさまは多くのデータを得られたわ。だから、現在の時勢もあって公式に発表されることになったのよ」

「ああ、墮天使側の進軍か」

「前魔王血族の残党の活動が活発化していることについても併せて発表されるそうよ」

そつちもある程度は広まってしまうようだし、どこかで公式

に声明を出しておく必要はあるか。

「なら、いざとなればアドバンスト・クラウンがあるってことは、外交的にも意味があるわけか」

墮天使に旧魔王残党どもめ、来るって言うならこっちは純血の上級悪魔の強さを10倍から100倍にまで強化する代物があるぞ！

平均数十倍に強化され、最上級悪魔クラスから魔王クラスが量産された状態の現悪魔政府とやり合えるとも思っているのか！ ああん!? 滅殺するぞゴラア！ みたいな感じかね。言葉を飾らなければ。

「強い手札を見せて、戦争を回避する方向性なのかもしれないわね。わたくしには政府の方針まではわからないけれど」

実際に量産配布せずとも、その手段を取れるってだけでもデカイかな。弱けりやなめられ付け込まれ、蹂躪され奪われるのが異形の世。強いから偉い。武力とは政治力でもある。

「これ以上のことはベルゼブブさまに聞いてちょうだい。わたくしはあの方の姪というだけだから、そこまで詳しいことは知らないのよ」「分かった」

「貴方がゼクラム・バルさまと懇意にしていること、そこに期待していると仰っていたわ」

ベルゼブブさまとしては今の御時勢を考慮して、そういうことにしてやってもいいといったところで、そこにおそらく何らかの条件を付けるだろう。外部勢力との武力衝突の可能性が高まる中で、内輪もめは避けたいのだろうな。レーティングゲームは本来、こういうときのための戦力維持が目的だったわけだから。

あとは大王派にいるというリユイたちにアドバンスト・クラウンを売りつけた者たち、それから使用者たちがそれを呑むかどうか、か。

とはいっても、「平民が噂していたような『王』の駒なんてありません。あるのはアドバンスト・クラウンです。アドバンスト・クラウンは悪魔が生き残っていくために作られたモノです」とまではベルゼブブさまが個人的に言ってしまう事柄だ。正式に発表もされていなければ、文書にも残っていないわけだから、仮にどこかに『王の駒』な

んで名称があつたとしても、「仮称です」で済む。政府予算がつき込まれたのかどうか知らんが、そうでなければ完全に個人の所有物だしな。名前も目的・用途もベルゼブブさま次第になる。

たしか、出来れば全部回収したいということだったはずだ。もしくは使っていることを公表させるだったかな。

まあ、自身の管理下に置きたいのだろう。強い力の手綱を握っておきたいって考えは理解できるところだ。

どうするかな。なんか、これ俺に現魔王派と大王派の間で動いて調整しろって言われているような感じなのだが。

大変面倒くさい。苦手なんだよな、そういうの。世渡り上手くないので。

だが、それもこれもリユイを正式に俺のものにするため。

『女王』レイヴェル・フェニックス。第一『騎士』ラティア・アスタロト。第二『騎士』メイドのリユイことロイガン・ベルフェゴール。誰にも文句を付けられなさそうな布陣の側近だろう。

となれば、その実現のためにやるしかないな。ふむ、そうだな……。

「データ取りのために使われている試作品なら、それこそメンテナン
スが必要だよな」

「そうでしょうね」

「そろそろ点検しておかないと、最悪の場合なんらかの不具合が発生
することもあり得るよな」

あれだ、車検みたいなものだ。ブレーキが壊れかかっていたりしたら
大変な事故に繋がってしまう。何せ詳細はベルゼブブさまにしか
分からない代物だ。

そういうことにしてもらおう。

「怖いことを言うのね」

「俺は悪魔だからな」

ベルゼブブさまに頼んでメンテしてもらわないと副作用で機能不全に陥ったり、最悪の場合は死亡もあり得るとか伝えれば、使用して
いる者も言うこと聞くだらう。摘出と機能停止自体は出来るようだしな。

俺が『赤龍帝の籠手』に抱いている不安感と同じだ。『聖書の神』がこれに何を仕込んでいるか分からないのが怖くて仕方がないってヤツ。

ラティアを家に連れ帰ったら、何故か母上に叱られてしまった。領民共が怯えてしまったとかどうか。平民のことなど知るか！とは思うものの俺は母上に弱いので困る。

グレモリーの領民どもは、俺の魔力が超越者クラスなことも、『赤龍帝の籠手』の所有者であることも知っているはずなのに何を今さら怖がるというのか。何年も前から分かっていたことだろうに。

まあ、今後の統治にあたってプラスに働く要素も少なからずあるよ。うなので、石を抱えさせられることはなかったが。強い次期当主さまってのは、領民的にはプラス印象なのだそうだ。

そりやそうだ、弱いよりずっといい。ルヴァル義兄上がレーティンゲームで活躍するたびに、フェニックス領の平民達は大喜びらしいから。

ラティアと俺の両親の顔合わせ（以前から知り合いだが）兼今後の打ち合わせも済んだので、今度は転移して彼女を家まで送って来た。

それでまたグレモリーの屋敷に帰ってくると、レイヴェルがプルプルプリプリしながら寝室で待っていたわけだ。

「拗ねてるのか」

「ラティアさまばかり、ずるいですわー！」

はい、「ずるいですわ」頂きました。そう言いながら、俺の胸に顔を埋めて、うーうー、ヤダヤダとするレイヴェルのなんと可愛いことよ。やはりゼウス神も愉しんだという、正妻さんにヤキモチ焼かせて盛り上がるプレイは、実に素晴らしいものだ。可愛い、愛でたい。

「何を怒ってるんだ。ラティアをエスコートしろって言ったのはレイヴェルだろうか？」

「そうですねけど……、でも、私、まだドラゴンの姿の旦那さまに乗せて頂いておりませんわ！」

その後、俺の上に跨って騎乗位で腰振りしまくるレイヴェルの姿が

あった。この乱れようが実にたまらん。よいよい。

ラティアの尻圧によって昂ったものを別の女に吐き出すのも悪くないものだ。

そんなこんなで時は過ぎ、冬の社交シーズンも後半戦の半ばに入った。残りは4分の1つてところ。

俺の社交場巡りも、残すところはグラシヤラボラス家とバアル家のみ。これまで交流の無かった御家と、ラスボスみたいなどころだな。まあ、ラスボスの方が慣れているのだが。

ラティアを『騎士』にすることは成功しているので、フィールド完成後に過ごす20年間でじつくりとつぶり味わって行くでしょう。

そして、リユイはこれからが大詰めだ。

そうして無事にアドバンスト・クラウン問題が終わってリユイをものにしたとしても、ソーナにはまだ手を出せない。なので、その次のターゲットはイリユーカー・グラシヤラボラスになる。

グラシヤラボラス家は次期当主のクリューハも女性なのだが、次期当主なのでソーナと同じ問題がある上に既婚者だ。しかも、両刀な男装の麗人と聞く。美しければどっちでもこいらしい。

レーティングゲームにも興味あまりなく、もっぱら音楽活動がメインなのだとか。あと結構なナルシストとも聞いている。美しい自分と、美しい眷属たちで、美しい音色を奏でるのが大好きという趣味人なのだ。これはこれで悪魔らしくてアリだとは思いが……なかなか難しそうだ。

そんな風にいるいろいろ考えると、やはり妹のイリユーカー狙いになるわけだな。

これまで俺とイリユーカーには接点がない。顔を見たことくらいはあったかもしれないが、覚えがない。話したことなど皆無だ。繋がりはレイヴェルと同じ学校に通っている同級生というところだけ。

それでどうするのかって話だが……ふふふ、俺は今回ラティアを眷属としたことで『時間』を扱えるようになった。『時間加速』を用いれば、人間界時間の1時間を10日くらいに延ばしてしまえる。

リユイを墮としたときのことを考えると、まだこっちの遊びを知らないらしいイリユーカーなど10日もあればまず墮とせる。

社交シーズンが終われば学校も再開だ。そこでレイヴェルに協力してもらって、放課後に遊びにでも連れ出してもらえばいい。そうして連れ込んでしまっても、基準時間で1時間程度ならばいけるいける。引き伸ばされた時間の中でイリユーカーをたっぷりと……くくく。俺ってヤツは、なんてワルなのだろうか。自分で自分が怖くなってしまうな。

しっかし、大公家にお邪魔した際には、シーグヴァイラに贈った『武者断我無』むしやダンガム コスプレセット……ネタだったのに普通に喜ばれてしまった。

アガレス大公まで地味に欲しがってたし……。ほとんど着ぐるみなんだが、あの親子は着てしまうのだろうか？

アガレスを象徴する動物といえばワニなのだが……ワニ型ロボとかいたっけな？

いや、あつたな、動物型ロボのアニメ。あれならワニもいるだろうから、そのうち贈っておくでしょう。お仕事お疲れ様ですって。

あのアニメに出てきたTーレックス型ロボのプラモ、前世で作りかけのまま放置してたけど……どうなったんだろうなあ。たぶん、捨てられたんだろうなあ。

まあ、仕事のストレスでおもしろおかしくなっている大公家は置いておくとして、この頃になると年末年始のレーティングゲームのイベントもほぼ終了し、忙しかったトッププレイヤー達もほっと一息付けるようになる。まあ、デイハウザー・ベリアル殿はそのままバラキエルトとの睨み合いに投入されたわけだが、休暇もなしとはご愁傷様です。

うん、男なんぞどうでもいいな。

重要なのは、俺専属メイドの『騎士』リユイことロイガン・ベルフェゴールの手がようやく空いたことだ。

しばらく忙しくて顔を見られなかった女が手元に帰ってきたらど

うするのかなんて、決まっているよなあ……！

メイドの分際で主人にここまで手間をかけさせやがって！ これ
はもう、お仕置きするしかないではないか！

帰って来た角メイド

レーティングゲームのイベントも終了し、リュイが帰還した。

そう帰還だ。彼女にはもう帰る家がない。俺が捨てさせた。

「帰って来たか」

「はい、長らくおそばを離れてしまい誠に申し訳ありませんでした」

そう言っつて、ベッドに腰かける俺の前でリュイは床に両手をつけ頭を下げた。土下座の姿勢だ。角の生えたピンク髪の頭部にホワイトブルムが乗っている。

今の彼女はロイガン・ベルフェゴールではなく、俺のメイドのリュイだ。ロングスカートにセパレートの上着。それらを隠すように前面や肩を覆うフリル付きのエプロン。まごうことなきメイドさんである。

ここは俺の後宮の一室に用意した、眷属となった後にリュイに与える予定の部屋だ。ただのメイドとは部屋を変えないといけないからな。

「ベルフェゴール家とはどうなった？」

知っつてはいるが、リュイ自身の口から聞きたかった。

「当主は引退してまいりました。いえ、引退させられたといった方が正確かもしれません」

ベルフェゴール家は政治から距離を置く『番外の悪魔』。人間たちからは七大罪の魔王の一角と恐れられる大悪魔ではあるが、現政府と深いかわりを持ちたがらない一族でもある。

「俺の『騎士』では政治に近すぎるからな」

この俺、リヴラクス・グレモリーは、政府の中心的存在である魔王サーゼクス・ルシファアの実弟である。加えて、大王派の真のトップであるゼクラム・バアルの弟子であり、大王派の次代を担うバアル大王家次期当主マグダラン・バアルの師匠だ。

さらに、『フェニックスの涙』を通して各所に影響力を持つフェニックス家の長女と婚約しており、このたび魔王アジュカ・ベルゼブブの姪であるアスタロト家の姫とも婚約した男だ。

俺の周囲は現政府にそれはもうどつぷりと関わっている。そんな男の『騎士』になると噂が広まり、リュイ本人も否定しなければ政治を厭う御家から追い出されもするだろう。

貴族家の当主や次期当主が他者の下僕というのも、建前では魔王に仕えているとされる元七十二柱アガレス大公家次期当主シーグヴァイラが魔王ベルゼブブの眷属になった件の他は聞いたことがない。その例外自体もつい最近のことだ。

「元々、レーティングゲームで名をはせたことからの飾りのような当主でしたから、統治の実務も行っておりませんでした。ですので、ベルフェゴール家には大きな影響は有りません」

「後任は、以前から統治をされていた方だったな」

「はい、むしろやりやすくなると言われました」

貴族家当主の仕事は、当たり前だが領地の運営だ。レーティングゲームではない。

フェニックス家にはルヴァル義兄上という名の知れた立派な跡取りが居るが、それでもまだ当主の座が移行しないのはその辺りを考えてのことだろう。ルヴァル義兄上には次期当主のまま活躍してもらい、フェニックス卿がそのまま統治を続けていく方が良いと判断しているのだろうか。

「それは良かった。俺もこれ以上の面倒はごめんだったからな。まったく、お前は手間のかかる女だ」

ロイガン・ベルフェゴールを眷属とする。このことでベルフェゴール家から俺に対しての動きは特に何もなかった。

ロイガンは、レーティングゲームでの活躍に憧れ御家を飛び出した女性だ。それが活躍したから飾りになっていただけのこと。

政治には関わるつもりがない御家なので、広告塔を失ってもさして痛くないのだろう。いや、『王』の駒の話が伝わっていれば醜聞のもとを切り捨てたと見ることもできるか。

「若さまにご面倒をおかけしてしまい、申し訳ございません」

「構わん、許す。他ならぬお前のための苦勞だ。欲しいと言ったのは俺からだからな。それで、レーティングゲームからも引退するんだな

？」

「はい、これからは若さまの『騎士』として誠心誠意尽くさせていただきます。どうか若さまのお傍に……置いてください」

この女は、生まれた家を飛び出し、危険な『王』の駒に手を出してまで掴んだレーティングゲームランキング2位の地位も捨てるとう。家も名声も地位も、従えた下僕以外の全てを差し出したのだ。

「ああ、これからは俺の下僕、メイドのリユイとして仕えろ」

愉悦が背筋を駆け上り、後頭部がゾクゾクする。これをさせたのが俺の肉棒だと思うと、股間がいきり立ってしまう。

まあ、肉棒というより龍のオーラとグレモリーの魔力なのだが、それもまた俺の力なのだから同じことだ。

「ああ……、ありがとうございます」

下僕扱いすると言われて礼を述べる彼女の声には、恍惚の響きがある。

「さて、改めて忠誠を受け取ったところで伝えておくことがある」

「はい」

俺はラティアから聞いた『進士アドバンスト・クラウンの冠』の話をリユイに伝えた。

その成り立ちと、何故その存在が秘匿されたのか、そして公表後の使用者たちの扱いについてだ。

「では、今後は『王の駒』をアドバンスト・クラウンと呼称すると」

「そうなるな。最初から『王』の駒などというものは存在しなかった。どこかの誰かが、勝手にそのような名前を付けて呼んでいただけだ。開発者であるアジュカ・ベルゼブブさまご自身が、その名称は最初からアドバンスト・クラウンだったと言って下さるのだから。何処の誰がそう呼びだしたか知らんが、名称に駒などと付けるから『悪魔の駒』やレーティングゲームと結びついてしまう」

その名前が良くないなってヤツだ。

「アドバンスト・クラウンは、あくまでも外部勢力から悪魔を守るために開発された試作品でしかないのですね」

「ああ、『悪魔の駒』自体も、当初は失われた戦力を補充するための物だったはずなのだがな。それにしただって国の守りを傭兵に頼ってい

るようなものだ。しかも、国が雇っているのではなく上級悪魔、貴族の私兵という形でな。『はぐれ』が絶えないことを考えれば、転生者の多くは悪魔という種への帰属意識が低いことは間違いない。少数精鋭の戦力と言ってはいるが、戦時であって不利な状況になったときそれほどあてにはならんだろうな」

扱いが悪いから、悪魔への転生が押し付けられた不本意なものだったから、転生悪魔が『はぐれ』になる理由は様々だ。

ただ、命の危険がない状態でも『はぐれ』になるのだ。死にそうなら、負けそうなら逃げるだろうよ。俺だって逃げる。

「転生悪魔の中の一定数は戦況が悪くなれば逃げ出すと考えていい。そして平民は数を揃えねば役に立たん。だが、まだ大戦時と比べて平民の数は回復していない。そうなれば貴族を強くしようとするのは納得の行く方向性だろう。悪魔の中でしか生きられない平民どもにとっても悪い話ではないはずだ。まあ、公表時の情勢と公表の仕方次第でどうにでもなるだろう。兄上がこれまで進めて来た政策のおかげで、平民は報道に流される者が多いようだからな」

一部の雑誌などが「不公平」だのなんだのと書き立てるかもしれないが、戦力維持のための模擬戦闘としてやっているゲームで戦力強化のための実験をして何の問題があるのかって話だ。文句を言うヤツなんで、最前線に叩き込んでしまえばいい。

元々、悪魔の世界の価値観は「命の価値は平等ではない」のはずだからな。不平等が普通なのだ。リュイのように運よく機会を掴んだものが上に行っていただけのこと。

まあ、アドバンスト・クラウンの力で得た名声や地位も、それを公表することで変化していくのだろうが、少なくともある種の名誉だけは残るだろう。

「これで現魔王派はアドバンスト・クラウン使用者を管理下に置けるようになる」

武力こそが権力だ。それは悪魔社会の内部でもそうだが、対外的にも同じこと。どうせ晒すカードなら、せいぜい有効利用しようってことなのだろうな、兄上たち現魔王としては。

「大王派は、抱え込んでしまっている負債を帳消しに出来る」

で、これまで『王』の駒で利益を得て来たらしい大王派は、アジユカ・ベルゼブブさまから盗み出した物で不正をしてきたと責められなくても済む。

これまで勝敗操作で儲けてきたことについては何も言わないようだしな。

貴族間で勝ち星のやり取りがあるなんてのは周知のことだ。別に『王』の駒をアドバンスト・クラウンとして表に出したところで、勝敗操作は今後も継続出来る。裏で儲けている者たちも大損つてことはないわけだ。俺もこれまでリユイの試合の分だけは儲けさせてもらったからな。

同じ穴の貉つてやつだ。お仲間、お仲間。

「現状では守ってもらっている立場でしかない平民どもは、危機が訪れた際に庇護者である上級悪魔が数十倍にまで強化され得るという安心感を抱ける」

平民どもにとってレーティングゲームはただの見世物。アイツらは弱い。だから、上級悪魔の眷属に選ばれることなどほとんどない。

参加資格すら得られないレーティングゲームは、平民の実生活とは関係の無いものだ。

だったら、レーティングゲームどうこうよりも、外部勢力に攻め込まれた際に前線に出張る者の強さの方が重要に決まっている。

味方が弱くて喜べるのは、勝ち戦で手柄を競い合っている者だけだ。

クソ弱い民衆からすれば、自分たちを守ってくれる存在がどうやって強くなったかなどより勝利の方が重要なはずだ。前魔王の血族はともかく、天使や墮天使相手にした戦で負ければ殲滅されて死ぬのだからな。

「誰も損をしない話だ。強いて言えば、恩恵に預かっていないゲームプレイヤーがアドバンスト・クラウン使用者を妬むかもしれないくらいか。だが、まあ俺は俺で欲しいものがある。だから、そいつらのことなど知らん。力が欲しければ、ベルゼブブさまに頼み込むがいい

さ」

どうも兄上たちはこれ以上使用者を増やしたくない様子だった。

だが、俺の考えは兄上たちとは違う。手段があるのなら、悪魔の戦力はガンガン増大させるべきだ。是非とも量産して使いまくって欲しいところなので、そいつらには頑張つて交渉して欲しいね。

「そして……俺はお前を『騎士』にできるわけだ」

これが最重要。ぶっちゃけ他はどうでもいいくらいだ。晴れてリュイというエロエロ美女悪魔をメイドさんにして、好き放題しまくりだ。今でもしているだろうと言えばそれまでだが、やはり正式に駒をぶち込みたいからな。

最初は強引に発表しておいて、内戦時に敵方だったという義姉上のようにメイドプレイで反省してますつてことで済まそうかと思つていた。だが、どうせならリュイも後ろ指刺されない立場の方が良からうというもの。

ベルゼブブさまは、大変良きに計らってくださいったものだ。俺のためというより、俺の眷属になったラティアのためなのだろうが……都合よければ全てヨシ。

黒歌のときのこともあるので、借りが山盛りになってきているが、『悪魔の駒』関係は頼るしかないからなあ。

ま、俺にとつてはイイコト尽くめになりそうだ。目出度い、愛でたいとしておこうじゃないか。

そうやって、俺が良い気分になっていると、リュイがこちらを見上げて来た。

何か言いたそうな表情だったので、身振りで許可を出す。

「実は、私のところに数名の上位ランカーから接触がありました。はつきりとは口にしませんでしたが、その全員がアドバンスト・クラウンの使用者と思われる者たちです。どういった対応を取ればよろしいでしょうか？」

「詳しく話せ」

リュイの言うところによれば、ランキング3位のビィディゼ・アバドン殿を含む数名の者たちから、『王』の駒の噂を聞いたが、今後ど

うなるのだろうか？」といった内容を遠回しに訊ねられたようだ。

そんなことをすれば使用者ですと言っているようなものだが、リュイにせよ、ビイディゼ・アバドン殿にせよ、お互い「使っているのだからな」と前から分かっていたらしい。

レーティングゲームデビューはほぼ同期の連中ばかりが『王』の駒アドバンスト・クラウンを使っているようだって……そんなの、そりゃ分かるだろうよ。最初期にぶつかり合ってお互いの実力を研究・把握しているのだから。

お年寄り連中はもうちよつと考えて渡せよ……怪しんでくれと言っているようなものではないか。バカなの？ ボケたの？

デイハウザー・ベリアル殿もリュイたちとほぼ同期デビューで、これまで『王』の駒の話題が出た際には「才能を開花させた者を妬んでいるだけだろう」みたいなことを言って慰めてくれていたらしい。本気だとしたら、人が良すぎるぞ『皇帝』さん……。

ちなみに、『皇帝』はどうやら使っていないらしい。最初っからリュイたちとは桁違いの実力だったのだとか。

俺の禁手の能力を考えると、レーティングゲームでの最大の壁は『無価値』を持つ『皇帝』なのだが……。そうか、使っていないのか。

まあ、普通に神器なしの素の実力で勝てばいいか。『皇帝』の魔力量は魔王クラスってことだし、『無価値』で特性を無効化されるのならば、超越者クラスの魔力量で押し切ってしまえばいいだけのこと。

「ここで上手く立ち回れば、彼らを若さまの影響下に置くことも可能かと思われませんが」

「いらん。俺はお前が欲しくてやっているだけだ。適当に今の話でも聞かせて、悪いようにはせんとでも伝えておけ」

出てきた名前、男ばかりだしな。美女がいるならまた違ってくるが、はあ……リュイみたいな美女が混ざっていればなあ。

「若さま……」

うつとりとした瞳でリュイが見上げてくる。俺の股間、さつきから勃ちっぱなしだからな。漂うエロ魔力にあてられたかな？

俺としても、そろそろどうでもいい話は終わりにしてお仕置きタイム突入と行きたいところだ。

「大王派がこの話を受け入れさえすれば、兄上たちもわざわざ歴戦のアドバンスト・クラウン使いを無碍に扱うことはないだろう。戦の危機が迫っているというのに、魔王クラス、最上級悪魔クラスにまで育った戦力を損なわせるとは思えん」

ラティアから聞いた、アドバンスト・クラウンの話。現在の使用者をデータ取りに使ったつてところはとも本当っぽいなあ。

そうでなければ、アジュカ・ベルゼブブさまが未成品を流出させるなんてミスをするわけがない。『悪魔の駒』サイズの物らしいから、保管するだけなら自分の亜空間収納に入れておくだけでいい話だ。それだけで誰も手を出せない。俺や兄上でも無理だろう。

誰が超越者アジュカ・ベルゼブブの亜空間に手を突っ込んで物を盗み出せるんだよ。どんな手練れの盗人だそれは。

アジュカさまがキチンとした保管をせず、『王』アドバンスト・クラウンの駒が大王派のお年寄りの手に渡ったのなら、そんなのそうなるように仕向けたに決まっているだろうが。

使用した者がレーティングゲームに参加するなら、試合内容から試作品のデータは取れる。さらに大王派に弱みを作ることも出来る。

仮に不具合が出てしまっても、それは盗み出した大王派の責任であり、勝手に使った使用者が悪いだけ。

アジュカさまも上手いことをする。

そして、お年寄り方はいとも簡単に引つ掛けられたものだ。やはり長く生き過ぎて考える力が弱ってきているのだろうか？

俺ならそんな火中の栗は拾わないね。火中の美女なら拾うがな。

「ただし、お前は別だ。アドバンスト・クラウンを返還し、俺の下僕になってもらう。嫌とは言わせんぞ」

そう言つて、角を掴んで啞えさせてやろうと思った矢先、リュイは深く頭を下げ、俺の靴に口づけた。

靴のつま先に、彼女の唇が僅かな圧をかける。その瞬間、俺の股座に奔った痺れはこれまでに感じたことの無いものだった。

「くっ、ハハッ、ハハハハハッ！ いいぞ、いいぞ、リュイ！」
気が変わった。

仕置きと称してイジメてやろうかと思っていたが、褒美として捌つてやろう。どちらでもヤルことは同じだ。

ジーイツと音を立ててファスナーを下ろし狭苦しい場所から剛直を解放すると、その音に気付いたリュイがピクリと反応した。

上を向くように言うと、彼女の瞳には既に淫らな期待が宿っていて、それがみるみるうちに強くなっていく。色欲に染まった牝の瞳だ。

「いつものようにしろ」

「はあ……♡ は、はい、若さま」

やはり角メイドにはフェエラをさせなければ。初心を忘れてはいかん。

「んっ、チュツ……」

リュイの唇の感触が、先端から始まって肉傘の上下左右に幾度か押し当てられた。

そして、「んああ……♡」と長く伸ばされた舌が裏筋を舐め上げた後、幹のあちこちを這いまわり始める。

「ああ、いいぞ。これだ、これ」

早速口内にぶち込んで、ハンドル代わりに丁度いい角を掴んで前後動かし喉を犯してやりたくなるが、まずは奉仕させないとな。

「はああ、んじゅっ……♡ ああっ、じゅりゅっ……♡」

いやらしく粘ついた水音を響かせ、リュイは唇と舌とを蠢かせ、俺への奉仕に熱中していく。手を使わせてもいいが、床に両手をつかせ這いつくばらせたままというのも、また一興というものだ。

手を床に付けたままベッドの上に座る俺の逸物の先に奉仕するには、首を目いっぱい伸ばす必要がある。ガチガチに昂った肉棒は反り返って天を突くように上を向いているからな。

リュイが必死に舌を伸ばしても、その先がようやく届くといったところだ。

「あ……ああ……、んふう……れろっ……♡ あっ、んちゅう……♡

あああ……若さまあ……♡」

上体を反り返らせ、頭上に掲げられた餌をねだる犬のように口を開

くりユイの姿は何処か滑稽だ。無様とさえ言える。

プライドの高い悪魔。その中でも頂点に近いところまで行った女が、俺のものを口に啜えたいがためにこんな有様を晒している。

ビッチを支配することは、男を知らなかった女を処女から自分専用に使立て上げるのはまた違った喜びが湧いてくるものだ。たまらん。

必死に舌を伸ばして奉仕しようとするその姿、その墮ちようを存分に愉しんだ後、俺は彼女に命じた。

「リュイ、膝を開いて腰をこっちに寄せろ」

言いながら角を掴んでリュイの顔を引き上げると、彼女はされるがままに膝を肩幅に開き、腰をこちらへとズリ寄せた。

距離が縮めば、女の口が亀頭に届くようになる。

「はあっ♡ 若さま。おしゃぶりさせていただいてもよろしいでしょうか？」

それまで舐めるだけだった肉棒の先を口の中に啜え込みたいと、リュイがねだってくる。

少しばかり考え込むフリをしていると、彼女は肉棒の幹の部分に唇を付けて上下させたり、玉袋を隅々まで舐めまわしたりを繰り返して、ピチャピチャといやらしい音を奏でて傘の部分を疼かせてきた。

言葉でダメなら、行動でねだる。悪くない。

俺は彼女の両脚の間に右足を置くと、軽く頷いてやった。

「ふふ、いいぞわ」

許可を出してやると、リュイの顔に淫らかな悦びが広がっていく。

「ありがとうございます」

彼女はちゃんと礼の言える牝奴隷だ。

膝立ちになって亀頭をパクリと啜えた彼女の頭が上下し始める。

「んちゅっ……♡ んぷっ、ちゅっ……♡」

リュイの唇が肉傘の裏をくすぐる。裏筋に張り付いた舌びらがぬるりぬるりと蠢く。

「ちゅびゅっ、んちゅぶっ♡」

ねっとりとした口奉仕で、リュイは俺のものをじっくりと味わって

いるようだ。

「んう、んうっう……♡」

時折、肉棒を深く咥えられると、先端が彼女の喉を突く感触がした。それから、すぼめられた口内粘膜で肉棒全体を摩擦される。

「じゅっううう……♡」

俺を飽きさせないように様々な刺激を寄こしつつ、リュイはフェラチオに没頭しているようだ。

ぼうつと熱っぽい彼女の瞳は奉仕の悦びに満ちていて、腰をゆるゆると揺すり始めている。

さて、そろそろ角メイドの股がびしょ濡れになっている頃合いだろうか。

「んっう♡！ ふうっんんっ♡♡！」

メイド服のスカートごと、靴を彼女の股に押し込む。割れ目の辺りにつま先を押し付け、ぐりぐりと敏感な箇所を探ってやる。

「ふううん♡！ ふうううっんんっ♡♡！」

探り当てた女の弱点を重点的に踏み躪っていく。肉棒を咥えたまま身悶えするリュイの顔に浮かぶのは、屈辱ではなく隷属と被虐の快感。

女を蕩けさせる紅のオーラを込めた蹂躪だ。頭の中をこれで染め上げられてしまった女にとっては、足蹴にされることすら甘美なものなのだろう。

やはりメイドには服従が似合う。

主に従順に頭を下げ、隷属し、奉仕と被虐を悦びとするべきなのだ。たまには責められるのもいいものだが、基本はこうでなくてはな。

「なあ、リュイ」

「ふあゝ」

「俺から離れている間、その口とここに何本咥え込んだ？」

この女は淫乱だ。男のモノなしで何日も過ごせるわけがない。

陰核をつま先でグイと押ししながら聞いてやると、リュイは肉棒を呑み込んだまま小さく首を横に振って見せる。

「ふうう、うううん♡」

「正直に言え。俺はお前の好色なところが気に入っているんだ」

元から色を好む女だ。俺のところに来るまでに関係を持った男は数えきれないほどだろう。

人間の若い男を好むと言うくらいだ。少年を誑かし弄んで、大人になつたら捨てる。それを繰り返してきたのなら、男の入れ替わりは激しかったはずだ。

「5本です……」

ロイガン・ベルフェゴールの眷属には男もいるが、そいつらも彼女の愛人だつたりするのだろう。男がハーレムを作るのだ、女がそれをして悪いってことは無い。

前にもこんなことを思った気がするが、こういう女も悪くないものだ。こなれた味わいがある。

「なんだ、思ったよりも少ないな。遊び相手になっている人間はもつといるだろう?」

「若さまを知ってしまうと、どれも物足りなくなってしまうて……。はあん♡ むちゆうっ……。♡ ああっ、やっぱり違う……。んむううっ♡」

そう言つて、リュイは再び俺のものを懸命にしゃぶり始めた。

「くくっ、そうか物足りなかつたか」

ねつとりとした奉仕を受けつつ、俺は通信魔方陣を起動しリュイ不在の後宮を取りまとめていたメイドに連絡を取る。

「風呂の用意をしておけ。ああ、そうだ。お前と、他はあの二人でいい」

まずはリュイをたつぷり犯し、その後はこれから彼女に仕切らせる予定の後宮メイドたちに改めて紹介してやるとしようか。裸の付き合いで。

帰って来た角メイドと

ピンク色の髪から角を生やしたメイドが紅髪の少年の股間に顔を埋めている。

少年の手はメイドの角を掴んでいて、彼女の喉奥へと肉棒を突き込み、抉るようにしていた。

唇から喉までを肉棒で塞がれたメイドは、苦しいだろうに恍惚の表情でされるがままになっている。官能にどろりと蕩けたその瞳に浮かぶのは歓喜の色合い。

「んうぐ、お、うえ、え、おう、」

感じているのだ、この女は。血族の誇りだろう角を取っ手代わりにされ、好き勝手に口内を蹂躪されながらも少年を感じさせようとする動きをやめない。

唇で、舌で、口内の粘膜や喉までをも性器に変えて、少年に奉仕している。

「感じているのか？ ノドマンコ犯されて、股間を踏みつけにされて！」

「お、♡、う、っ♡、 おお♡、 わあがさあまあ、あ♡、」

少年は嗜虐的な笑みを浮かべながら、角の生えたメイド・リュイの秘所をスカートの上から踏み躪る。啞えさせた肉棒で、口も喉も好き勝手に犯し尽くす。

そして、少年からそうされることに悦びを覚え昂っていくリュイ。その表情は、まさに牝奴隷そのもの。

紅の魔力に浸され続けたリュイにとって、少年から受ける情欲の魔力を籠めた行為はすべて快樂の源泉だ。何をされても気持ちよくなってしまう。

リュイの「ご主人さま」である少年もそれを分かってコレをやっていた。

「どうした、まだコレを使っていないぞ」

「お、♡、お、♡、お、♡、お、♡、」

少年の片腕に赤い籠手が顕現した。その籠手の効果を知るリュイ

は、怯えと期待の混じった瞳で彼を見上げ媚びに満ちた鼻息を漏らす。

「安心しろ。久しぶりだから壊れないように加減してやろう」

赤い籠手の宝玉が点滅し、リュイの身体に力が流れ込む。

その途端、彼女の身体がこれまで以上の淫熱を帯びた。触れられていない場所が疼いて疼いてたまらなくなる。

口奉仕で頭が揺れると着用しているメイド服と肌と間に僅かな摩擦が生じるが、たったそれだけのことが気持ちよくて仕方がない。今はまだ加減されているが、最大の効果を『譲渡』されたならばそれだけで軽く達してしまうほどだ。

「んっっおっ♡♡♡んあ——♡♡♡」

数えきれないほどの男を喰らい、嬲り、弄んできた女悪魔ですら下僕に墮とす。神滅具『赤龍帝の籠手』を用いた官能の倍加にはそれだけの力がある。

その恐ろしい効果を幾度も味わわされてきたリュイは、もはやこの『若さま』なしではいられない女になってしまっていた。

唇を、口内を、喉を犯す肉棒が愛おしい。その感触、熱、味わいだけで頭の中がスパークして絶頂にし続けてしまう。踏みつけられたクリと雌穴の入口が、ご主人さまからの愛撫に悶え啼いて愛液を迸らせる。リュイのスカートの内側は、噴きだした淫らな汁でぐちゃぐちゃになってしまっている。

ほどなく少年が精を解き放つと、それを合図に彼女の肢体が幾度も痙攣を繰り返した。まるで失禁でもしてしまったかのように床に潮の染みが広がっていく。

「ふう、良かったぞリュイ。お前の口奉仕は最高だ」

「ああ……はあ、ありがとうございます。若さまのお役に立てて、リュイは幸せです」

俺の名前はリヴラクス・グレモリー。現悪魔界において魔王セラフォル・レヴィアタン、『最強の女王』グレイフィア・ルキフグスと

並び称される最強クラスの女性悪魔を性奉仕メイドとして扱うグレモリー家の次期当主である。

最近の俺はどうもサドっ気が強くなってきたてしまっているようだ。それもこれも俺の可愛いハーフ墮天使DMメイドの影響だろう。

好きな子にいじわるしたくなる小学生男子的なものもあるのかもしれない。これが本当に小学生の男の子と女の子の関係ならば嫌われておしまいなのだろうが、こういった関係にまで至った後であればプレイの一種に早変わり。いじめられて悦ぶ女ってのは結構多い気がする。

たとえば、達したことで力が入らなくなってしまうたのか俺の股間に倒れ込むようにして顔を埋め「ハア♡ ハア♡」と発情吐息をこぼし続けているこのリュイのように。

「わ、かさまあ……♡」

両脚の間から、とろりと劣情に染まった瞳で見上げてくるリュイの顔を撫でる。そうすると、彼女はうっとり目を細めて唾液と精液まみれの肉棒に頬ずりをした。

その刺激で、今しがた濃いのをぶっ放したばかりの肉棒がムクムクと立ち上がっていった。美女に欲しがられたならば、いきり勃つのは男として当然のことだ。

腰に力が入らない様子の彼女の両脇の下に腕を入れ、ベッドの上に持ち上げる。

「煽るのもいいが、今日はお前を可愛がりたい」

「は、はい♡ どうか存分に可愛がってください」

広いベッドの中央に仰向けに寝かせたリュイの上に覆いかぶさった。シートと彼女の背中との間に手を挿し込みギュッと抱きしめる。

よく鍛えられ引き締まった身体だ。

「やはり本来の姿だと抱き心地が違うな」

魅力的な柔い肌の奥に、戦闘用に鍛えられた筋肉の弾性がある。強く抱きしめると跳ね返ってくるようなその張りが心地好い。思わず何度もぎゅっぎゅっとしてしまいたくなる。

彼女の正体を知る前の姿、角メイドのリュイの身体はもつとふ

にゆつとしていたので、あれは鍛え上げる前の彼女の身体なのだろう。魔力による身体操作で一粒で何味も楽しめる、これが成熟した悪魔女性の良いところだ。

「あふう……♡ 若さまはどちらがお好みですか？」

「ふふ、どっちも好きだぞ。そういえば、正体を告白されてからリュイの方がいいと言つていじめたことがあったな」

あの時のリュイは実に見ものだった。強い女が、自分で自分に嫉妬して泣いてしまった姿は俺の情欲をおおいに刺激してくれたものだった。

若さゆえの根拠のない自信に満ち溢れ故郷を飛び出して来た頃の若いリュイ。

レーティングゲームで揉まれ、才能の無さに苦悩しながら己を鍛え上げた後のリュイ。

どちらも美味しいことには変わりないが、彼女としては今の自分の方が好きなのだろう。女としての魅力を損なわず、それでいて戦闘仕様に仕上げるには相当苦労したのだろうから。

もしも彼女がその辺りに気を遣わずに筋肉を搭載していたら、使い魔の森のウンディーネのようにムキムキマッスルになってしまっていたかおもしろくない。もしもそうなら、俺の趣味から外れてしまっていたな。

「それはもう言わないでください……。恥ずかしいです。ああつ、んふふう♡」

今のリュイの脳は俺から与えられる快感を何十倍にも増強させて感じ取るようになっていた。その上、紅の愛欲魔力にどっぷりと浸かってしまっているのだから、俺から受けるあらゆる心が心地好くて仕方がなくなっている状態だ。

抱きしめられるだけで幸福感に満たされ、耳に息を吹きかけられるだけで感じまくりいずれ絶頂に至ってしまう。

「はああつ♡ あふつっ♡ んあッ♡♡」

このままこうして抱き合っただけの軽い愛撫だけでイかせ続けるのも悪くないが、そろそろスカートの中も見たいところだ。

「こつちも可愛がつてやろう」

濡れたスカートをめくり上ると、レース飾りのついた黒パンツが出迎えてくれた。その上から肉の裂け目をスーツとフェザータッチでなぞる。

「ひいうう♡♡ あひいいい……♡♡」

少し触れただけでこの反応、この感じまくってどうにもならない堕ちた雌の様子が俺の股間を滾らせる。

『赤龍帝の籠手』セックスの愉しみはコレに尽きるな。ドライグからヒトの能力を媚薬扱いするなど怒られてしまうが。

水気の溢れるパンツをズリ下ろし、雌肉の裂け目の両脇に指を添える。

「ああっ、わかさまあ♡」

男の視線を感じただけでリュイの口から嬌声が溢れ、裂け目からとろとろと湧き出す愛液の量が増していく。ぐいと指で肉溝を広げてやると、いやらしい蜜に濡れそぼったサーモンピンクが露わになる。

悪魔は人間と違って日焼けしないし、色素も沈着しない。遊んでいると黒くなるなんて噂もあるが、悪魔には関係ない。なので、この色合いも綺麗なものだ。

ヒクヒクと蠢いて挿入を誘ってくる裂け目を指二本で開き、ヌプりと中指を付け根まで挿し入れる。

「あッ、おッ♡♡ ああいいっ……イイ♡♡」

肉棒を求めて濡れまくりの裂け目に指を挿入された衝撃にリュイは身体をガクガクと震わせて、悲鳴のような喘ぎを噴いた。

指の向きをくるりくるりと変えながら膣内を引っ搔くようにしてやると、リュイはメイド服に包まれた肢体をつっぱらせ、快感にのたうち回って顔を左右に振りたくる。

裂け目の中が（ああ……熱い、あつ、い。欲しい）と泣き叫びながら、中指にちゅっちゅと吸い付いて肉棒をねだってきた。

喘ぎながら淫らなダンスを披露するリュイの額、うなじからどつと汗が吹き出す。

指にかき混ぜられる裂け目の近くでは、クリトリスが剥くまでもな

く包皮を押しつけてぶつくりと勃起あがり、いじってくださいと主張していた。メイド服とブラの下に隠された乳首も淫らに尖りきっていることだろう。

ぐじゅつ、ぐじゅつと出し入れする中指の動きに合わせて、リュイの裂け目が恥ずかしい水音を立てる。肉棒をしゃぶっていたときからムンムンと漂っていた淫靡な雌臭がますます強くなり、部屋中に広がっていく。

「んっ♡ はあッ、ああッん♡ わかさま、はあっ、わかさまあ♡♡」
指の抜き差しを止めると刺激を求めてリュイの腰が動き、切なそうに俺を呼びながら尻を振る。

「ああっ、ふあっ……♡ おねがい、お願いします。若さま、どうか、どうか……んひいい♡♡」

舌を伸ばして膨れ上がったクリトリスをちよんとつつくと、リュイが全身を跳ね上げるようにして官能に染まった声を上げた。

「若さまあ♡ ああっ、挿れて、いれてください」
「もう我慢できないか？」

おねだりダンスに俺もそろそろ我慢が出来なくなってきたところだ。

「リュイの、ろいのオマンコ、犯して、犯してください……、ああっ、お願いします。若さまと繋がりたいんです」

仰向けの姿勢で腰を持ち上げ、くねくねと揺すってリュイは挿入をねだる。彼女が腰を動かすたびに、雌の裂け目からは淫らに蠕動・収縮し濃い牝汁をシーツの上に垂らしていた。

発情した女の甘い匂いがより強くなる。

「はあっん♡♡ わかさま、ああっ、わかさまあ……♡」

「分かったからそう暴れるな。そう動かれたら挿れられないだろう」

肉棒欲しさにのたうつリュイを抑え込むように再び伸し掛かり、唇を合わせながらジュツブウウツと一気に最奥まで貫いた。

「あゝおお♡♡ んほおおおお♡♡！」

熱く灼け濡れ蕩けた柔肉が悦び勇んで肉棒に絡みついてくる。挿入しただけで達したのか、唇を塞がれたままのリュイは鼻から雌獣の

鳴き声を吹き出した。

じゅぷつじゅぷつと音を立てる一突きごとに達しているのだろう、リュイは小刻みに身体を震わせ痙攣させる。膣内も同様に肉洞がキュツと締まって、淫褻が肉棒に絡みついてくる。

合わせた唇から、リュイが舌を俺の口内へと入れてきた。舌と舌を絡め合うと、さつき吐き出した精液の臭いと味が広がった。

飲ませておいてなんだが、俺は自分のザーメンを味わうのが好きではない。

「んあッ♡♡　んひい♡♡　わか、さまあ……」

思わず唇を離すと、リュイが寂しそうに声を震わせ、長い睫毛がスツと落ちた。悲しそうなその表情を見てしまうと、好き嫌いくらいは堪えてやろうかという気になってくる。

「あつ、んう……んじゅツ♡♡　んんうツ♡♡　んおツ、おお♡♡　」

舌を絡ませながら彼女の顔を見ると、たまらなく嬉しそうな表情だ。

俺はリュイの口奉仕を気に入っている。おそらくだが、彼女はこれまで一番精液を飲ませて来た女だろう。

そう考えると、回数割に彼女とはあまりキスをしてこなかったと思う。だいたいフェラからのゴックンでスタートして来たから、キスはちよつとという気分があったのは確かだ。

「……はああ、んぐつちゅ……♡　ふうんんツ♡♡！」

びくんびくんと跳ね上がるようにするリュイの身体とは別の生き物のように、彼女の舌だけが巧みに蠢いて俺の舌に絡みついてくる。根元に絡みつきキュツと千切れなようなほどに吸い付かれると、口から精気を吸い取られるような快感が身体中に広がっていく。

リュイの雌の裂け目はグジュグジュツと収縮を繰り返す、深々と埋め込むたびに男根を喰い締め樹液を絞り出そうとしてくる。腰を振り突き込むたびに、彼女の分泌する愛液が飛び散っていた。今彼女の着ているメイド服のスカートを手で絞ったら、かなりの水分が垂れさがることだろう。

快感に翻弄されるリュイの姿は、実に淫靡で美しい。淫蕩な性の女が演技ではなくこうも乱れてくれると、より張り切りたくなるというものだ。

「ぶはあっ……どうしたんだリュイ。今日はやけに感じているじゃないか？ 前は200倍以上にして欲しいとねだっていたというのに」しばらく、じゅっぶじゅっぶとイカせまくってから唇を離し、ピストンを止めた。肉棒を奥まで埋め込んだまま上体を起こし、息を乱してアへ顔寸前の蕩け具合を晒すリュイを見下ろす。

リュイに掛けた快感強化の『譲渡』は、まだそこまでのものではない。数十倍の範囲だ。以前は200倍以上をねだられたものなのだが。

前と違っているところと言えば、以前は身体の感度を上げていたところを、俺から与えられる快感や官能、悦びを対象にとって強化しているところだろうか。単純な感覚強化では痛覚まで倍増してしまつて痛みが強くなつてしまうからな。

俺は充実したエロライフのために日々研鑽を積んでいるのだ。痛いのが嬉しいつて変態以外には、こちらの方がイイだろう。

「うれし、嬉しいんです……。若さまが、私のために……。してくださいましたことが……。ああっ♡ たまらなく、嬉しくて……。それで、感じ過ぎてしまつて」

『王の駒』関連の話だろうか？ いや、脳内でもアドバンスト・クラウンと呼んでおかないと間違えそうだな。

「知り合いに話して回っているだけだぞ？」

リュイは自身の胸の辺りに手を添えた。メイド服に包まれたおっぱいが形を変えるのも見ていて楽しいが、そろそろ脱がしたくなつてくるな。

「私は、コレが無ければランキング100位以内にも入れなかった女です。若さまにここまでしていただくだけの価値は……」

「あるぞ。俺は元々、お前がロイガン・ベルフェゴールだとは知らずに求めただろう？ 正体を知つてより興奮したのは事実だが、メイドとしての働きを見て欲しくなつた方が先だ」

リュイの頬から鎖骨にかけてを指先で繰り返しながらそう言うと、彼女はひどく嬉しそうに目を細めた。

俺は気に入った美女・美少女入手のためなら、この程度の労は惜しまない男だ。少々面倒なのは確かだが。

「メイドとしての働き」の主な採点基準はエッチ方面での評価なので、『アドバンス・クラウン進士の冠』を抜き取り弱くなっても俺がリュイに求めているものは何も変わらない。『能力が数十倍以上にく』という効果にエロ方面も含まれていると困るが。

「ああっ♡ 若さまあ……♡」

抱擁を求めて伸ばされたリュイの両手。俺はそれに応えて彼女を抱きしめた。

「んんっ……♡ ああっ♡」

抱きしめながらチュツチュツとキスを繰り返すと、それだけでリュイの膺がきゅつきゅと締まって俺の子種をねだってくる。

やはりそろそろ脱がし時だな。

「今度はリュイが上に乗ってくれるか？」

一旦肉棒を抜き、騎乗位に移行することに。

「んれる……はい♡」

抜いた瞬間にシユンと眉が下がったかと思えば、体位変更だと告げると嬉しそうに舌なめずり。このオチンチン大好き淫乱ピンク角メイドめ。けしからん、成敗してやる。

「脱がせてくれ」

リュイの手で俺の服が脱がされていく。彼女は脱がしながらもソフトタッチでこちらの性感をつんつんと刺激してきて、肉棒のビンビン加減を衰えさせてはくれない。

俺を裸にした後、自分も脱ごうとするリュイを手で制した。それから肉棒をぶるんと振るってみせる。

「脱ぐより先にこっちだ」

ストリップショーも良いものだが、俺の肉棒は女の媚肉もまた求めているのだ。

「承知いたしました♡ では失礼して、若さまの御大事をリュイの才

マンコに入れさせていただきます」

淫液滴るスカートをちよんと指でつまみ上げ、リュイは仰向けに寝転がる俺の上に跨った。

白く長い指が、彼女自身の蜜に濡れた肉杭に添えられる。指の腹でカリをつるりと撫で擦りながら、リュイは俺のモノを直立させた。

リュイの淫欲に濡れる瞳を見つめていると、彼女はゆつくりと腰を落としてくる。牝肉の裂け目が左右にほころび、広がった合間から淫らな涎をとろりとろりと垂らしながら龟头をぬちゆりと啜え込まれた。

「あああつ……♡」

あごを上向かせて白い喉をさらし、リュイが歓喜の声を上げる。

エラまで啜え込んだところで彼女の弱い部分を肉棒の先端が抉ると、リュイはその愉悦に耐えられなかったのかストーンと腰を落としてしまう。

熱く濡れた蜜壺の中を肉棒が一気に駆け抜け、龟头がジューブウウツと最奥に達し肉杭の根元までが雌の裂け目に飲み込まれた。

「んおおおおお……♡♡♡！」

リュイの背が弓なりになり、喜悦の喘ぎを室内に響かせる。

どうにも今の彼女には肉棒の刺激は強すぎるようで、ただの一抉りで絶頂に至ってしまったらしい。

背を反らし過ぎて肉棒を啜え込んだまま後ろに倒れそうなりリュイ。そんな彼女のくびれた腰を掴んで支える。

「んひい♡♡！ はひい♡♡！ ひいっいん……♡♡!!」

半開きになった口から唾液のこぼれさせ、ぬめり光る唇をぱくぱくとさせて荒い息をこぼすリュイは、そのまま幾度かエプロンのフリルをビクツビクツと跳ね躍らせた。自分の体重で最奥を突かれ、その快感で続けざまに何度か気をやっってしまったようだ。

「リュイ、倒れるなら俺の方にしろ」

啜え込んだまま後ろ向きに倒れられると、チンコが折れそうで怖い。

「あおツ♡♡ ああつ……も、申し訳あしませ……ん」

許しを出すと、リュイの身体から力が抜け俺の方へと崩れ落ちて来た。抱き留めたりユイは、俺の肩の上に顔を埋めてふるふると快感の余韻に浸っている。

そんな彼女の角を掴んで顔を引き起こすと、

「ああー♡ はあああー♡」

汗濡れた額にほつれた髪をまとわりつかせたリュイの瞳は、とろりと恍惚に蕩けていた。情愛に溺れ、牝穴に埋め込まれた性の愉悦の源に屈した女の顔だ。

強くあろうとし続けてきた女が見せるどこか儂さを漂わせた美しさに、ゾクゾクしたものが背筋を奔った。

「もうお前にはこれは必要ないのかもしれないな」

『赤龍帝の籠手』を顕現し、その鋭利な爪先で彼女の角をなぞる。

心の力である魔力に大きく依存する純血悪魔の性交は、感情によって大きく左右される。

相手を気持ち良くし、自分も気持ちよくなりた。そう想えば思うほどに、身体の相性も良くなっていく。想い合うほどに快感は増大し、より深く愛し合えるようになる。そう考えれば、これと定めたひとりだけしか愛せないという悪魔が一定数存在することも理解できるといふものだ。

俺も最初から愛人候補が居る状態ではなかったなら、そうなっていたかもしれない。今更そうなれはしないだろうが、もしもそうになっていたのなら、それはそれで悪くなかったのだろうと思う。

「あつ、ああつ……♡ 響く、頭の中に……」

籠手を出した段階でリュイへの『譲渡』は解除している。そうだとこののに、彼女はほとんど感覚がないはずの角をカリカリとなぞられただけで感じているようだ。

これはつまり、リュイから俺への情愛がここに来てさらに深まったということだろう。注ぎ続けて来たグレモリーの魔力の影響が強くなりすぎたのかもしれない。

きっかけは分からないが、こんな姿を見せられてはもつと可愛がりたくなってしまうというもの。

「快感の強化を消したが、どうだ？」

「ああっ……はい、気持ちいいです。はあ……さつきまでは強すぎて……あつ、んちゅっ♡」

先ほどとは上下を逆にして、上に乗ったりリユイと唇を合わせる。脇の下から腕を入れ抱きしめながら腰を動かすと、彼女もこちらの首に腕を回してタイミングを合わせて尻を上下させ始めた。

パチユンパチユンと肉と肉がぶつかり飛沫が飛ぶ音がする。まだ脱がせていないので、その音はメイド服のスカートの中でくぐもつてどこか遠い。

「おっ♡！ ふほおお♡ あつ、おっ、あつ、おっ……♡ んおおおううツ♡♡！」

性器のぶつかる音が遠い分、喘ぎ声が聞きたくなくなったので口を離すとリユイは装うことも出来ず獣のように鳴いた。

これをもつと聞きたい、叫ばせたい。獣欲の赴くままにより強く突き上げる。

「おっほお！ んほおお！ ふあつ、あおっ、あ、あ、あ、おお”ツ……ふほおおおツ♡♡♡”！」

肉棒の先端が、ガツンガツンと膣奥にぶつかっているのが分かる。腕で俺の首にすがりつき、肩に顔を埋めながら、リユイは夢中でこちらに合わせて尻を振りたくり続けている。

「すっごー！ おおお、はあイー！ あお、はげっし……ふひい、イー♡！ 激し、感じ、すぎて、とめられ……あおおっ♡♡””！」

「どうだ？ ブーストなしでも気持ちいいか？」

「は……はひ……ひいおお！ んあおお♡♡””！ いいわ、ああつ、イー、いいのおお♡♡」

ぶんぶんと首を縦に振り、リユイは快感を肯定する。俺と彼女の腰振りに合わせて、結合部からブシュッブシュッと行き場を失った愛液が噴き出す音が聞こえてくる。結合部周辺は失禁でもされたかのようグチャグチャだ。ベッドのシーツもぐっしよりとしてきている。

「あおお”♡””！ あっひい……すっごい、こんな、こんなの……ブーストも受けていないのに、ああっ、たまらない、たまらないの、ふっひい

……んんっ♡！ ちがつ、ちがううう、これまでのヒトと、どうしてこんな、こんなにちがうのお。ああん、すごいっ、気持ちいい……わかさま、はあああん♡ わかさまああ……ああっんおっ♡！」
これ以上ないぐらいに紅潮したリュイの顔。露わになっている首筋からはとめどなく汗が溢れ出し、発情臭がさらに濃くなっている。肉棒を咥え込んだ肉壺がきゆうきゆうと収縮して強く圧迫してくる。はやく膣中に射精して欲しいと訴えまくっている。

軽イキを幾度も幾度も繰り返しながら、リュイはさらに昂ぶり昇り詰めていく。俺の方もそろそろ限界だ。射精したい、射精したい、膣内発射で種付け交尾したいと膨れ上がってきている。

「はあっ、来る！ ほおおっ、すごい来る！ きちやう、ふっほおお！ おふおおお！ すっつごい、あ、イイ♡ ああ、イイん♡」
もう、ああ、もう、こんな、こんな覚えちゃったら……だめに、ダメになっちゃう、わかさまとでないと……ダメになってしまうわああ♡ あっ、くっ、るっ、来る、ひいっ、すっごっ、おっ、おっ、おっ♡……ふうほおお♡！」

悶え狂いながら、リュイはぐんぐんと絶頂の向こうの絶頂へと向かって昇り詰めていく。

「おおっ、いい、いいぞリュイ！ イクのか？ ん？ イクのか？ もっとイケ！ 俺の子種を子宮に受けて昇り詰める！ んおおおっ！！」

リュイの腰を両手でぐいと掴んで、思いっきり引き付ける！ 奥へ、奥へ、奥へ、一滴残らずザーメンを注ぎ込みたい！

「あひい、はあっ、くる、くる、くる！ ああっ、わかさまのザーメン来るっ♡ おっき、おおきく、ああ、膨らんで、あっっ、熱い、灼ける、火傷しちやいそうに熱いわあ！ あっい、あっいのイイ、はひい、イクッ、イクッ、イってる上からまだイっちやううう♡！！」
子宮の入口にグリグリと押し付けこすりまくっていると、肉棒が大きく膨らんだ！

「くうッお、リュイ、リュイ、リュイ！ 出すぞ！ イケ、イケ、イケ、イケえ！！」

「はあひいいいい、おっほおおおおおっ♡♡♡!!」

自分自身にか、リュイにか、双方へと止めとばかりにさらに押し込む！ 自分の腰を突き上げ、彼女の尻を鷲掴みにして引き寄せる！ 互いの性器の上、恥骨の辺りがすりつぶし合うようにこすれ合う！

「んお!! ひいいん、んはあああ♡♡♡ ほおおお♡♡♡!!」

どびゆるるると彼女の腹の中から音が聞こえてきそうなほどの勢いで、白濁が撃ち込まれていく。射精の快感に思わず声もれ、口の端から涎がだらだらと垂れていく。

「おおっ、出て、でてりゅっ、わかさまのザーメン、ドクドクって、ろいの中にたくさん♡♡♡ なっか、ああっ、なか、なかああ♡♡♡

ああっ、すごい、すごいわああ♡ あつい、イイんのおおお♡♡♡ んひい、まだ、ああっ、まだ出てる、ああっ、おく当たって、あふう、おおほお、イク、また、ああっ、よじゅぎゅう♡♡♡」

肉悦に身を震わせるリュイの顔を引き寄せる。桜色の頭ごと抱えて耳元に口を寄せる。勢いが良すぎたのか彼女の角が顔に当たって痛かったが、今はその痛みすら心地よい。

「ああ、リュイ、リュイ！ リュイ！ 愛してるぞ、愛してるぞツリュイ！」

「はあああん♡♡ わた、わらひも愛しております、もつと、もつと愛させてください、あふう、好き♡ 好き♡ わかさまああ♡♡!!」
肉棒に挟られてイキ、子宮内に精を射込まれてイキ、言葉でも絶頂に至ったリュイ。「愛させてください」「好き、好き」と何度も繰り返し眩きながら俺の上に倒れ込んで抱き着いてくる。

「はああ……よかつたぞリュイ」

少し落ち着いたところで頬を合わせながら彼女の髪を撫でる。すると、未だにビクンツッ！ ビクンツッ！ と肢体を震えさせていたリュイが顔を上げて俺を見つめて来た。

「だらしな顔だ。蕩けきり、快楽と情欲に染まり切った顔だ。

「わかさまあ……♡ 素敵でした♡」

「そうか。リュイを満足させられたのなら、俺としても嬉しい限りだ」
お世辞でも演技でもないようだ。彼女の身体がそう言っている。

「肌を合わせたいと思っていたのに、リュイがすぐに乱れるから着せたままになっちゃったぞ」

「ああん♡ 申し訳ありません」

胸に触ったり、背中や尻を撫でたり。お互いに軽い愛撫をしながら余韻に浸る。

取り留めもない会話をしながら、俺は彼女の角に巻かれているホワイトでフリルな飾りを取り去った。飾りの下から現れたのは、以前俺が刻み込んだ悪魔文字だ。

「残していたんだな」

「はい。私が若さまのものである証ですから」

籠手を消し、指の腹でリュイの角に彫り込んだ文字を順になぞる。俺の名だ。

「正式に『騎士』にしてから渡そうと思っていたが……」

俺は亜空間からリングを取り出し、彼女の角に通した。金色のファンタジー金属製で指2本ほどの幅のあるものだ。

黄金色の帯の輪の中に角を潜らせていき、彫り込んだ文字を覆い隠す位置まで通したところで魔力をかけて締める。

「うん、これなら外れないな。似合っているぞ」

腕輪、足輪、指輪、ネックレス、角輪。輪の形をした装身具を女に贈って身に着けさせるのは、「この女は俺のものだ！」的な意味合いのある行為だと思う。

「あ、ありがとうございます♡」

鏡を見せるとリュイは頬を染めてもじもじと嬉しそうにする。どうやら気に入ってくれたらしい。クリスマス前にデザインをどうしようかと悩んだ甲斐があったというものだ。

「さて、もう一度頼もうか……今度は繋がったまま脱いで行ってくれ」

「はい……♡ リュイのストリップショー……特等席でご覧ください
「い」

おさわりアリという体位的に俺の方が座られているのだから。
な。

まあ、騎乗位という体位的に俺の方が座られているのだが。

.....♡

ふう、なんだかとても満足してしまった。このままりユイを抱き枕にして眠ってしまいたい気もするが……そういえば風呂場にメイドたちを待機させていたな。

あいつら俺が行くまで夜通し待っていきそうだから、そのまま放置してわけにもいかんか。通信で「やっぱなし」と連絡してもいいが、期待して濡らしているだろうからちよいと可哀想な気もしてくる。

「リユイ、まだイけるか？」

「はい、若さま」

「では、続きは風呂で汗を流しながらだ」

転生悪魔の子供世代

風呂椅子に座る俺の周りに、リュイの他に3人のメイドが集まっていた。

一人目は単眼巨人^{サイクロプス}の血を受け継ぐ警備担当メイド。ご先祖様の血が発現したらしく、ハイライトが消えた感じの大きな一つ眼が愛らしい娘だ。

身長は150台半ばくらいで悪魔としては低めだが、出るところは出ているスタイルは良好。なかなかのサイズの彼女のおっぱいの谷間に俺の右肩が埋まっている。

「興奮していらっしやるんですね。若さま」

俺の勃起股間をガン見するこの単眼メイドは、そのでっかい目玉を舐めてやると大悦びする。

この子も最初の頃はおどおどとしていたのに、一年経たずに俺のチンチンをツンツンするようになるとは……たいした変わりようだ。

今ではリュイが不在の間、後宮のメイドたちを仕切っていたりして、サブリーダー的な立場になっている。

一つ眼のこのメイドが同僚たちから一目置かれているのは、やっぱり巨人化して暴れられるのがデカイのかね。

メイドの間でも暴力⇨権力なのだろう。強い奴が偉いつてのは分かりやすい構図だからな。

いちいちメイド内の上下関係まで把握していないから、詳しくは知らんが。俺よりもレイヴェルの方が知ってそう。

「そりゃ、この状況ならな」

サイクロプスあるいはキュクロプスは、元々はギリシア神話に属する下級の神々だ。天空神ウラノスと大地母神ガイアの子として生まれ、父たる神ウラノスに醜い容姿を厭われて奈落^{タルタロス}へと落とされた。後にゼウス神によって解放されて活躍するのだが、息子をゼウス神の稲妻で殺されたアポロン神から八つ当たりを喰らって虐殺被害を受けたりとなかなか悲惨な一族である。ゼウス神の投げる稲妻の製造者がこのサイクロプスの一族であったからというのが虐殺の理由ら

しいが……ヒデー話だ。銃で子供を殺された親が銃会社に襲撃かけたようなものか。しかもその銃をぶつ放してアポロン神の子を殺したのが祖父のゼウス神ってことだから、ギリシア神話ってほんと、もう……ね。

なんだかんだで始祖は大神同士の間生まれた子なので、この単眼メイドはなかなか御大層な血筋の末裔ということになる。

巨人状態でないときは、黒髪おかつぱの小柄な娘なんだがなあ。大きな一つ眼以外で変わったところは、頭のとっぺんに小さな円錐形の角が生えているところぐらいか。

どうやらご先祖様よろしく容姿のことだからかわれて育ってきたようで、そのコンプレックスになっっているらしいところを愛でてやったら……コロリといったような覚えがある。

雷の魔力が得意らしいが、ハンマーでぶん殴った方が早いとかどうとか……。グレモリーの屋敷の奥にあるこの俺の後宮^{ハイレム}まで不届き者が侵入して、彼女の暴力が役に立つ日が来ないことを願っておこう。「今夜もキレイキレイさせていただきますね」

二人目は直立姿勢から床まで届く長舌を持つお掃除担当メイド。やたらと綺麗好きで知られているらしい。妖力の気配も感じるので、妖怪の血でも流れているのだろう。

デローンと長いその舌で、肉棒の根元から先端までぐるぐる巻きにしてくるフェラが大変よろしい！

このメイド、なんでも汚れているところがあるとピン！ と来てすぐ分かるそうだ。

一度、彼女がああのシーンを実演しているところを見かけたことがある。

あれだ、他のメイドが掃除を終えたところチェックして、ツーと指でなぞって「この埃はなんですか？」みたいなアレ。まさか生で見る機会があるとはなあ……。

この長舌メイドからは俺のチンコの垢を狙っている節を時折感じるので、残念ながら年中無休で忙しい俺のチンコにはそんなものが溜まるヒマはないのだ！

顔はまあ、父上が連れて来ただけあってそこそこ良い。俺の左腕に抱き着きそこそこっぱいを押し付けながら、舌を伸ばして爪の間を舐めまわしてくる。

「うふふ、わかさまのお背中……はあく」

三人目は水精霊ハーフというスライムめいた水場担当のメイド。水精霊ハーフだけあって水の扱いが巧みだ。中出した後に、半透明の身体を透かして白濁が見えるのがエロい。

水の精霊ウンディーネからの転生悪魔の娘なので、正確にはスライムではない。だがまあ、スライムみたいなボディとしているのでスライムメイドで良いだろう。俺が勝手に脳内でそう呼んでいるだけだしな。

母親のウンディーネは使い魔の森にいるようなガチムチマッチョで近接格闘タイプなああのウンディーネらしいのだが、この娘は悪魔の中で育ったのであんな鍛え方はしていない。

透明感の有り過ぎるボディが特徴だな。あと中の感じが温度で変わるのも面白いところか。冷やすと硬め、あつためるとフワフワだ。……ちよつとオナホっぽいと言うまい。

「わかさまあ、お背中をお流ししますねえ」

いずれも『悪魔の駒』による転生悪魔制度以降に生まれた混血の娘たちだ。転生悪魔と純粋な平民悪魔の間に生まれた娘になる。

父上が飽きの来ないようにと集めてくれた、変わり種メイドたちの一部だな。一般的な悪魔は人間に似た容姿を好むので、ちよいとゲテモノ系扱いされてしまっている娘たちでもある。

だが、俺は結構気に入っている。まさにファンタジー！ やったぜ、モンスター娘！ って感じがするではないか。

最初はうーむとなったこともある娘たちだが、ヤリ慣れれば可愛い可愛い。普通に可愛がっているだけでやたらと懐いて慕ってくれるので、余計に可愛く思えてくる。

でも、名前は聞かない。聞いてしまうと情がぐつぐつと湧いてきてしまつて困るからな。悪魔は子供が出来にくいのが、長生きだけに数がお手付き要員にたくさん産ませることもある。そうになると、生まれた

子すべてに、深い執着を抱えては貴族家はやっていけないとまうのだ。

特に我がグレモリー家は、情愛の悪魔などと呼ばれる一族。気を付けないといけない。

「ああ」

返事をする、スライムメイドが俺の背中にぬとりと張り付いた。すると、ぬるぬるとしていながらもスベスベな感触が俺の背を上下し始める。

「では、うちは右側を」

「あたしは左にい」

単眼メイドが右側で、長舌メイドが左側で石鹸を泡立てて自らの身体にまぶし始めた。石鹸は最初から泡の出る物を使っても良いのだが、このだんだんと泡立っていく過程を愉しむのもオツなもの。

「正面はリュイだな」

「はい、お任せください」

角メイドのリュイ。彼女もまた他のメイドと同じように胸や内腿などをいやらしくなぞりながら泡塗れにしていた。

前後左右、四方から泡に塗れた女体が俺の身体に擦り付けられ、胸を始めとした柔らですべすべとした感触が上下する。それぞれのメイドごとに感触が異なるのが面白い。

特に背中担当のスライムメイドは絶品だ。この感覚は他では味わえないだろう。

もちろん、左右も素晴らしい。肘や肩、脇腹から脇の下まで、俺の身体の隅々に自らの身体をスポンジ代わりにこすりつけてくるメイドたち。

正面のリュイは翼を広げて浮遊しながら、俺のつま先から首元までを美巨乳で磨き上げてくる。

やはり、オツパイスポンジで洗浄を受けるのは良いものよ。これぞ正しき貴族男子の入浴方法、メイドハーレム風呂って感じだ。

背中に、両肩に両肘に、胸に腹に股間に、柔らかさ、張り、感触様々なおっぱいがすりつけられ、ぷるるんぷるるん、ぬーりぬーりと俺の

身体を洗浄する。

ああ、至福。この、いっぱいのために生きてるなーって感じがするわ。

ちなみに「いっぱい」とは、いっぱいのおっぱいのことである。

ついでに俺はこういうときは多少言葉遣いが崩れていても構わないと言っている。理由は、その方がプレイが楽しいからだ。

「若さま、手を上げさせていただきますね」

「ごっちもおー」

肩から手の甲までを谷間に挟んで洗ってくれていた左右のおっぱい達が、それぞれ俺の手を持ち上げた。

手に平から脇の下を通って脇腹まで、腕の内側を単眼メイドっぱいと、長舌メイドっぱいがにゆるんにゆるんと往復していく。メイドたちも興奮して来ているのか、泡立ちふにゆふにゆ乳房の感触の中に、ツンとした乳首の感触が入り混じる。これが脇の下や脇腹をくすぐるので、こそばゆいやら気持ちいいやら。あー、たまらんね。

「お顔はどうされますか？」

「髪洗いますねえ〜」

もちろん前後のおっぱいも負けてはいない。リュイはその身体能力を活かして、股間から首までをもにゆもにゆとこすり洗い。

スライムメイドは、そのぴちよつと張り付くような肌触りで背中を楽しませてくれる。

その後はリュイっぱいによる顔面ぱふぱふである。これもまた気持ちいい。

女の乳房に顔を埋めると、どうしてこうも安らぐのか。これはきつと……赤ちゃんの頃の記憶が頭の中に残っているからに違いない。ぱふぱふでバブバブしたくなるのは、男の性だ。はい。

スライム指の頭髮マッサージは癖になるものだ。やはり水の扱いが上手いので、毛穴の中までキレイキレイにされているって実感できる。これはハゲない！ 頭髮問題に悩む人類はスライムメイドを雇うべきだな。きつと生えるぞ。

まあ、俺は悪魔なのでそここのところはどうとでもなるのだが。

左右のメイドたちが姿勢を低くし、俺の両脚をおっぱいで包み始めた。脚もよいものだ。特に裏側は触覚が鋭めなので、むにゆにゆんとされると感じてしまう。

「うおっ」

太腿から膝の辺りをぶにゆぶにゆされながらぼやーつとしていると、突然尻の穴を舐められた。おふっと思わず変な声が出てしまったぞ。

犯人は長舌メイド。ハハハ、こやつめ。ご主人様のケツの穴を舐めるとは、忠誠心に富んでおるなあ。舐めるまでは許すが中に突っ込むのはノーセンキュー、ヘンな快感に目覚めてしまったら困るのでな。尻の穴とかないわー。

ふみふみ、ふみふみ。

知ってるヤツは知ってることだが、おっぱいを踏みつけにすると気持ちいい。足の裏のくすぐったいところにツンツン乳首を当てて擦るのも良い。

俺もよいよいなのだ、踏まれているメイドも気持ちよさそう。朱乃なんか、これだけでイクからなあ。

「あうっうう　じゅりゅりゅりゅりゅ……じゅちゅつ」

長い舌が足指の間の汚れを舐めとってゆくのも心地好し。これされる度に、「コイツとは絶対キスしない！」と毎回思うわけだが。

さて、普通にお湯かけて洗い流したら入浴だ。リュイの胸を枕に、湯船に半分浮かぶように身体を漂わせる。

左右は変わらず単眼メイドと長舌メイド。前後は入れ替わってスライムメイドが、その柔軟過ぎるボディを活かして俺のチンコにマンコをずっぽずっぽ。スライムメイドは水中でも呼吸に困らないので、無茶が利くのだ。彼女の必殺技は、敵を窒息しさせることである。こわ……ま、呼吸する相手には大変有効なのは確かだけれども。

メイドへの種付けも、半分趣味で半分お仕事のようなものなのでな。

かつて、魔王ルシファーを襲名した際、兄上はこうおっしやっただと、

『先の大戦とそれに続いた内戦によって、我々悪魔の数は多いに減少してしまつた。悪魔たちよ！ 今こそ子作りに励むときが来たのだ！ 産めよ！ 増えよ！ 地獄に満ちよ！ セックスしろ！ セックス！ 悪魔の子作り大作戦を開始せよ！ 我、サーゼクスが命じる！ さあ、セックス！』と。

ということ、俺のような魔力に恵まれた上級悪魔の貴族たる者は、たくさんの女に種付けして強い悪魔の子を増やしていくべきなのだ。実際に兄上が言った内容はもうちよつと格好つけたものだったのだが、内容をまとめればこんなもので間違いない。

まあ、悪魔の数増やそうぜ！ セックス、セックス、さーせつくす！ って勧めた魔王様方御自身はと言うと……あまり子作りに熱心ではないような気がするのだが。

積極的に他種族を下僕にしてハーレムを形成し、転生悪魔との子作りックスに励んでいるデイオドラやライザー義兄上を見習うべきじゃありませんかねえ？

でも、あれだ……セラフォルーさんが、眷属のベヒーモスと子作りして、陸の怪物のパワフルックスでアヘアへ言つてたりしたら、ちよつと凹むものがあるな。こう、なんか知らんがモヤつとする。

「わかさまあ……ふああ♡」

両脇のメイドの胸を揉んだり、尻を揉んだり、マンコに指突つ込んだり。長舌メイドと舌を絡めるのはちよいと抵抗あるので、そのまま身体を舐めまわさせておき、単眼メイドの大きな眼球をペロペロとしてやる。

眼球舐めは、口の中に雑菌が大量にいる人間がやると失明の危険性もある過激プレイの一種だが、悪魔的にはさして問題ない。

とはいえ、何とも言えない背徳感が湧き上がって来てゾクゾクとしたものがあるのも事実。この感覚、悪くないね。

目ん玉舐められている単眼メイド自身はというと、見た目のせいで学校に通っていた頃いじめられていたからか、その原因部分を俺が愛でてやると大変嬉しがるので良いのだろう。こんな腕力ある子をいびるとは、相変わらず平民のクソガキは頭が悪いとしか言いようがない。

い。

ぺろりぺろり。名前は聞いていないし、覚えもしないが、この子とはなんとなくラブラブ気分である。

「あああゝ、イクうゝ♡ わかさまあゝ♡ ああああうっゝ♡♡♡!!」

そうこうしているうちにスライムメイドのオナホっばい膣内で、俺の肉棒が爆発寸前。遠慮なく責任ある中出しを決めてやる。イクときまで間延びした口調なのがこのメイドの面白みだな。

じゅぽっつと抜いて。さて、お次は長舌メイド！ 君に決める！ 中出しを！

浴槽の縁に手をつかせ、バックからガッツンガッツン。メイドにはこれが似合う。撃ち込んだ衝撃でホワイトブリムが揺れるのが良いのだ。

「こら、尻を舐めるな！ この変態メイドがッ！」

こいつはよほど俺の尻穴に執着があるのか、舌をてるーんと伸ばして後ろからガンガンやられているというのに穿ろうとしてくる。

ご主人さまに悪戯して、それで怒られて尻叩きされながらぶち込まれるのが好きって変態マゾメイドなのだ。まあ、チンコは勃つしそういうプレイなので俺も本気で怒っているわけではないのだが。

というか、メイドの娘ってMっ気のある子が多いような気がするな。やはり、MaidのMはMasochistのMでもあるのだらうか。

「うえっ♡ えうっ♡ うえ、ええ、ええ♡♡」

いつも舌を伸ばした状態でハメているので、喘ぎ声が独特なんだよなコイツ。これはこれで、異種族っぽくてヨシ！

「うゝッ、えエッえ♡ うええっえっえ♡♡♡!!」

最後にひときわ強くバツチーン！ と尻をひっ叩いて締まりを強くさせ、そこに白濁をドピュドピュッとぶちかましてフィニッシュ！

「若さま……うちにも……」

本日の風呂ツクスのシメはジレジレ気味のこの単眼メイドだ。

リユイとはさつきヤツたばかりだし、このあと俺の部屋に連れ込むのでな。

眼球舐め好きのこのメイドとは、対面座位がよろしい。目ん玉舐めまわしながら、最奥まで埋め込んだ肉棒をゆったりグラグラと揺すつてこすりつけ、子宮口アクメを決めさせてやるのだ。

お湯の中でも平気なスライムメイドを椅子代わりにし、リユイと長舌メイドに左右からおっぱい奉仕させつつ、膝上に乗せた単眼メイドをねつとりと味わう。

ハーレム王を目指す者ならば、勃起継続したまま三連続発射くらいは余裕で決められないとなあ。目指せ！ 超えろ！ 人間の皇帝でも成し遂げたと言われている、ハーレム人数2,000人！

……………ふう。

やはり、「赤ちゃんできちゃう！ 妊娠したくない！ 外に、外に……………い。あああッ♡♡♡！」と懇願するメイドの腰掴んで、思いつきり子宮中出し決めてやるのはいいものだ。

ぐへへ、ザーメン撃ち込まれてビツクンビツクン気持ち良さそうにしやがる癖に、毎回嫌がりやがって……………興奮するじゃないか。

「赤ちゃん……………、若さまの子供……………出来たら、ここから出て行かないと……………」

抱き着いて嘆願してくる単眼メイドの頭を撫でてやると、嬉しそうに目を細めて頬をすりつけてくる。

まあ、出来ちゃったメイドはこの後宮から引退だからなあ。生まれた子が近くにいると、俺が鼻肩しまくっちゃいそうだから。

他所の御家は知らんが、グレモリーでは今のところそうなっている。なんか、前に孕ませた蛇メイドの子の魔力がかなり高めだとか小耳にはさんだ覚えがあるから、もしかしたら扱いが変わることもあるかもしれない。

「うち、うち……………ずっとここに居たいです」

俺との子は欲しい。でも、ここから出て行くのは嫌。そんな想いで揺れ動くメイドの膣に生中飲ませるのは、なんとも言えんものがあるものだ。

きっと父上が母上以外の女との間にこしらえた子も、どこかで育っているのだろう。

俺にも妹がいないかなあ……いたらライザー義兄上がレイヴェルにするみたいだに甘やかしまくりたいのだが。聞いても教えてもらえないだろうけど。

さてと、風呂も終わったことだし部屋戻って寝るか。後始末をメイドたちに任せ、リュイを引き連れて自分の部屋へと向かう。

『悪魔の駒』による転生悪魔制度が始まって数百年。あのメイドたちのような子供世代は着実に増えてきている。

転生悪魔は上級悪魔に仕える者で、男性上級悪魔は他の種族を眷属にする際にやはり美女・美少女を選びがちだ。そこにはやはり男の欲がからんでいるわけで……当然のように手を出す。

あのメイドたちは転生悪魔の男と平民との間に生まれた子供だが、貴族と転生悪魔との間に生まれた混血もだんだんと増えてきているワケだ。

一応、転生悪魔も駒を受けた時点から種族・悪魔なので混血や混ざりものと呼ぶのもおかしいのだが、純粋な悪魔からするとやはりそういった気分になるものらしい。

「なあ、リュイ」

「はい、若さま」

「ああいった、他の種族の特徴を受け継いだ者が増えてくるとどうなっていくと思う？」

悪魔に転生させずとも、悪魔は他の種族との間に子供を作ることが出来る。人間との混血なんて割とよくいるしな。ラティアパパの領地みたいだに集団生活しているところは珍しいが。

「そうですね。社会……階級の構造が変化していくかもしれません」「やはり、そう思うか」

だが、転生悪魔の子供はそれらとはちよつと違うところがある。

魔力が高めなのだ。さすがに純血の上級悪魔とまではいかないが、親の『駒』の影響を受けて生まれてくるためか平民よりずっと上だ。貴族と平民との間に生まれた子供くらいはあるような気がする。

その上、レーティングゲームのために集められる眷属は基本的には戦闘能力が高い者が多い。そのため、そういった強い種族からの転生した親の血を受け継ぎ、その身体能力や異能を備えて生まれてくる子は、純粋な悪魔にはない強みも持ち合わせることになる。

あのメイドたちもそうだな。一般的な平民よりはずっと強い。

「まだ数が少ないので影響は小さいですが、いずれ純粋な平民の地位は下がっていくことになるのかもしれませんが」

純粋な上級悪魔である貴族は、魔力が豊富だ。火も氷も雷も生み出し、空間転移も可能とする万能な特殊能力である魔力はそれだけで他の種族らの特性に対抗しうる。

だから、魔力によって成り立っている悪魔側の冥界の在り方を維持するためにも、貴族家自体は純血主義のままがいい。

「元人間の転生悪魔の子でも、平民を上回る魔力を持つそうだからな。それに人間の血が入ると子供が出来やすいとも聞く」

一見異形の種族と比べると身体面でも異能の面でも弱そうな人間だが、神話やら伝説で混血の逸話が多いだけに子供が出来やすいという性質があるそうだ。これはこれでなかなか有用だ。

元人間の転生悪魔リュディガー・ローゼンクロイツと人間の魔女との間に生まれた例の神器への抵抗力の足りない子供。あれは半分だけが転生悪魔の血なのだが、純粋な平民よりも魔力がある。無事に育てば、それに加えて高い魔法力も備えることになるだろう。

神器持ちの人間の子は、神器の力を引き継がないので魔法使いの子よりも劣るところがあるが、それでも両親ないし片親が転生悪魔つてだけで魔力が平民を上回る。

「あの子たちが学校で他の子たちから受けた扱いも、そういったところが影響しているのかもしれませんが」

悪魔は寿命が長いので、古い世代が老衰で亡くなって世代交代とはならない。弱い平民に生まれた者は、弱いままに長い時を生きていくしかない。

そこに新たに転生者の血を引いた者たちが台頭してくる。

魔力でも身体能力その他でも平民を上回る者たちが数を増やせば、

相対的に純粋な平民の立場は低下していくだろう。

昔から上に居た貴族ではなく、新しくやってきた転生者の下に付くことになるのだ。貧弱一般平民達は。

強いは偉いだから、魔力でも負けている以上いずれはそうなっていく。

まだあまり物を知らないだろう平民の子供はともかく、大人の平民はそれに気づいているのだろう。そうして親の態度や言葉は子供にはよく染みるもの。

学校でのメイドたちがいじめられたのも、そんなところが関係しているのかもしれないな。平民達は転生悪魔の子供が増えていくことが怖いのだ。怖いから、安心するためにいじめてしまう。

平民寄りの言動を取る魔王さま方が「転生悪魔も『悪魔』、転生悪魔の子供も『悪魔』。差別する貴族はよろしくない」としているためなのか表立って口にしていているところは聞かないが、案外貴族よりも平民の方が転生悪魔への恐れが強いのもかもしれないな。

ロイガン・ベルフェゴール（2）

リュイを連れて部屋に戻った俺は、さっそく彼女をベッドへと誘った。お互い裸になって、一つのベッドで一枚のシーツの下に潜り込む。

といっても、パコパコしまくろうぜって話ではない。『王』たる者は眷属との会話も大切だとライザー義兄上が仰っていたからな。

まあ、軽くお触りしあつてイチヤイチャタイムしながらお話ししようぜってことだ。

「リュイはその魔力からすると、キン……アドバンスト・クラウンなしではあまり才能がないだろう。それでどうしてベルフェゴール家を飛び出そうと思っただ？」

酷いことを言っているようだが、彼女の元々の彼女の魔力はとても「才能がある」とは言えないものだ。聞いた限りでは『キング王の駒』改め、『アドバンスト・クラウン進士の冠』なしではレーティングゲームで上位に付けられるとは思えない。

「若気の至り……ですかね。今はもう後悔はしていませんが。これでも分家を含めたベルフェゴール家の年の近い者の中では魔力に恵まれた方だったんですよ？」

なんでもこのリュイちゃん。平均的な純血の上級悪魔よりはいくらか魔力が多めだったらしい。未熟な子供時代ですら、大人に匹敵する魔力があつた。そのことで、小さい頃のリュイは、周囲から「すごい、すごいよロイちゃん」と褒められて育ったそうだ。

それでテレビで観るレーティングゲームの世界に入っても、自分なら活躍できるのではないかと思っってしまったのだ。

とはいえ、『エキストラ・デモン番外の悪魔』のベルフェゴール家は政治とは距離を置く一族。政治的な部分も多いレーティングゲームへの参戦は、現政府との関りを持ちたくない御家としては認めていなかった。それは他の『番外の悪魔番外の悪魔』の一族、マモン家やアバドン家なども同じだ。

当時からレーティングゲームで一族揃って目覚ましい活躍を続け、もてはやされ隆盛の兆しを見せ始めていたフェニックス家。その他

にも上位に進出した者を出した御家は、「強い、すごい」と称賛を浴びていた。だが、ベルフェゴールの一族はそこにはいない。

レーティングゲームの中で強さを示し、我と我が眷属こそが最強だと嘯く当時の王者^{チャンピオン}。

『ベルフェゴール家の『裂け目』、アバドン家の『穴』など、『番外の悪魔』は強力な特性を持っている。参戦してさえいれば……あのようなことを言わせはしないのに。

悪魔というのは見栄っ張りだ。プライド高く、低く見られること、なめられることを酷く嫌う。

「気が付いた時には、反対する両親を振り切って家を飛び出していました」

ベルフェゴール家とはほぼ縁切り状態で、リュイはレーティングゲームに参戦した。当然、御家からのバックアップはない。

家からの支援がないということは、金もないと言うことだ。報酬の支払いに難儀するということは、眷属集めにも苦労するということがある。さらに、当時からゲームで猛威を振るっていた『フェニックスの涙』の調達も難しい。

衣服や生活のレベルだって落としたくはない。番外の悪魔だって貴族だ。見下されたくはない。

「あの頃はよく後悔していましたね。なんでこんなに大変なんだろう。元七十二柱の御家の者が簡単に済みますことも、当時の私には厳しかったですからね」

「金がなかったのか」

「ええ、大変でした……。その頃ですかね、ルヴァルと知り合ったのは。随分と世話になって……。今でも頭が上がりません。今度はそのルヴァルの妹を『女王』と仰ぐことになるのですから、何があるか分からないものです。フェニックス家の宴席で、レイヴェルをよろしく頼むと言われましたよ」

「ルヴァル義兄上とリュイがどんな関係だったのか、気になるところだが……ま、聞かないでおこう」

以前にリュイを連れてフェニックス家を訪れたときにも思ったよ

うな気がするが、俺とルヴァル義兄上はレイヴェルを通して義兄弟になるだけでなく、やはりリュイ穴兄弟でもある可能性が高いなコレ。ま、いいけどな。悪魔にやよくあることさ。いちいちほじり返すまい。

「ありがとうございます。若さま」

「だが、妬けるな」

人間の少年を弄んでいる分には気にならないのに、リュイの昔の相手がルヴァル義兄上と思うとどうにも面白くないのは何故なのか。不思議なものだ。

リュイの背を軽く撫でていた手を彼女の尻に回した。スキンシップの濃度を上げたい気分だ。

「あっん♡」

手でなぞつていくと、彼女の尻や太ももはむっちりの良い肉付きをしていることがよく分かる。柔らかな脂肪の層の下にみっちり筋肉が詰まった、お嬢様にはないパツンパツンの感触だ。

夢と野望に任せて御家を飛び出したころのリュイは、きつとこんな風ではなかったのだろう。若い身体になっているときの、あのふんにやりとした身体だったはずだ。

御家の後ろ盾がない、金がない、ツテもないから眷属集めだって大変だ。

そんな苦勞を乗り越え参戦したレーティングゲームの世界は、リュイに優しい顔を見せてはくれなかった。

リュイには確かに魔力の才があった。ただしそれは、僅かなものだ。

駆けつこでたとえるなら、町内の運動会で一番に成れる程度の才能だ。到底全国レベルには届かない。

付き合い程度に参戦している者とはもかく、上位の者にはまったく歯が立たなかった。リュイを遥かに上回る本当に魔力の才に恵まれた者たちに翻弄され、タンニーン殿に吹き飛ばされ、ゲーム慣れした転生悪魔出身の上級悪魔に競り負ける。

戦術を学び、魔力以外の部分も鍛え、ベルフェゴールの特性を研磨

する。ときにはトレードを交えつつ眷属たちとの練習を繰り返す――それでもリュイは上に行けなかった。

成果の出ない年月を過ごす中で、彼女の精神は挫折と後悔と奮起を繰り返す。

そんな時だった、『王』の駒と呼ばれる物がある」とリュイが誘いをかけられたのは。

戦闘、権力、富、名声、異性、地位。レーティングゲームに勝利することで得られるものは多い。リュイの他にもそれらに魅せられてその誘いに乗った者たちがいた。

勝てなかった者に勝てるようになった。上に行ける。上に行けば行くほど、レーティングゲームに真剣に取り組む者の割合は増して行き、ゲームの面白さも増して行く。

リュイは戦闘を楽しんだ。おおいに試合を遊んだ。それとは別に、しなければならぬこともあったけれど。

数十倍から百倍にまで強化された力を得たリュイを含むアドバンスト・クラウン使用者たちによって、調整・操作される試合の勝敗。それらを裏から差配する者たちは大金を動かし、大いに儲けていった。

そのこと自体は、リュイも了解済みの事だった。力の代償として支払ったものなのだから。素直に楽しめない試合が多いのは不満だったが、下位に甘んじて這いずり回っているよりはずっといい、と。

「そうして、私はトップランカーのひとりになりました。デイハウザー、ルヴアル、リュディガー、タンニーン……勝敗操作に関わっていない者たちとの試合は本当に面白かった。リュディガーには散々苛々させられましたけれど」

「そのリュディガー・ローゼンクロイツも今やレイヴェルの眷属だ」

「本当に……何が起るか分かりませんね」

リュイは『王』の駒アドバンスト・クラウンを得た後も力を高めることに余念がなかった。これ以上の魔力の上昇は見込めずとも、技術は磨ける。

これらの傾向は、使用者の多くに見られたそうだ。

リュイとの試合で見せていた3位のビィディゼ・アバドン殿の『穴』掘きもすごかったからなあ……。あれだけ自在に『穴』を使えるなら、

オマンコ直結『穴』とかも作れそう。複数の女の穴に『穴』を繋いで自分は動かないままに、一突きごとに突き込む牝穴の持ち主を切り替えるとか……スゲーぜ！ ビィディゼ・アバドン殿はよ！ オナホと女の穴を繋いじやうとか、そんなファンタジックなエロ漫画みたいなことも出来そうだなって！

ご老人方は、上位に行きたいという想いの強い者を見抜く目は持っていたんだな。同世代ばかりに配って疑惑を強めてしまう間抜けなお年寄りめ、毫碌しちやったの？ とか思っていたが、さすがに悪魔歴が長いだけあって相手の欲を見抜く目は持ち合わせていたわけだ。「ですが、ディハウザーには結局勝てませんでした」

『皇帝』^{エンペラー}ベリアル。王者^{チャンピオン}ディハウザー・ベリアル。

ベリアル家の魔力の特性は『無価値』。魔王クラスの魔力を生まれ持ち、確かな実力を備え、戦術にも長け、悪魔の魔力特性のみならず、魔法や神器の効果さえも無力に変える『無価値』を備えたレーティングゲーム不敗の1位。

「ま、俺は勝つがな。当主になる前にサクツと行きたいところだ」

俺が学習期間を終えて正式にレーティングゲームに参戦するようになったとしても、その期間は短いものになるだろう。

何せこの俺、リヴラクス・グレモリーはグレモリー公爵家の次期当主。父上から当主の座を受けついだら領主のお仕事が本業になるのでゲームしてる暇はないのだ。

最近は当主の世代交代も早くなってきていることだしな。

下位レートの試合なんぞいちいちやっていたらいけないから、それこそリュイ達を操っていた黒幕さん方にでも頼んで、上位陣とのマッチングばかり組んでもらえばサクサク上がっていきそうな気もするし。

『ディハウザー殿を倒し、1位の座から蹴落としたら引退するつもりだ。領地経営もあるからね』

何かの機会に聞かれでもしたら、そんな感じで自信満々の傲慢顔で言い放つてやるとしようかな。ハツハツハーてな具合に高笑いでも決めながら。

レートを調整しておいて直接対決一回で逆転1位になれるところ

から特殊ルールのないプレーンな形式で挑んで、魔力の差で押し切つて勝利。その勢いですぐさま引退宣言して勝ち逃げ。それで十分に力も示せるし、逸話も残るつてものだ。

当主の仕事に集中したいので、たとえばベリアル家の嫡男であるデイハウザー殿は何も言えまい。ややこしいルールの試合だと試合巧者相手には経験の差で負けそうだからな。

勝てそうな試合形式で勝っておいて、その後は戦わないってのが一番よ。

「デイハウザーはそう簡単にはいきませんよ」

と言ったようなことを話すと首を横に振られてしまった。

俺は魔力だけあって実績の無いお坊ちゃんだから仕方がないところだが、これはなんだか妬けるな。

……朱乃や黒歌、メイドたちは気にしないのに、ラティアにはライバル心を見せるレイヴェルの気持ち少し分かったかもしれない。

「お前が他の男を評価していると苛つくな。生意気なヤツめ、こうしてやる！」

「んあっ♡ そんなあ、これは、若さまのために……い♡」

「ふふふ、そんなことは分かっている」

急に股間がビンビンきたので、もう一回戦いっておくでしょうか。

……♡……♡

一回戦のつもりが三回戦になってしまった。相変わらずエロい女だ。

「素敵でしたわ、若さま」

股の間から白濁を垂れ流し、トロンと満足そうな顔のリユイに寄り添うと頬に唇を落としてくる。お返しにこちらもチュッチュとし、事後タイムに入った。

やってる最中もいいものだが、この適度な疲れの中で余韻に浸るのもまたいいものだ。趣がある。

「角が当たるな」

それはいいのだが、リュイに頬を寄せようとする彼女の角が邪魔をしてくる。チャームポイントではあるのだが、ぼんやりとしながら角無しの女と同じつもりで動くと、ガツンと衝突してしまうのだ。

「隠しましょうか？」

角隠しってなんだか結婚するみたいだな。まあ、するみたいというか、するよなものか。リュイにも子供産ませる気マンマンだしな俺は。

「人間界での活動用の擬態だったか」

「はい。あちらではさすがに目立ちますので、隠す方法があります」

ほんと魔力って便利だよな。まあ、猫妖怪も妖力でネコミミシッポを隠せるのだが。

俺の猫と言えば黒歌だが……ふむ。

「よし、リュイは理事長の秘書になつてもらおうとするか」

縄張りの運営を任せる黒歌は理事長夫人。二十代後半のデキル女風味のリュイは理事長秘書。素晴らしい布陣だ。

「秘書……ですか？」

「ああ、縄張りの話はしただろう？ グレモリー資本の学園の理事長をすると」

「ええ……人間社会での仮の姿ですね。承知いたしました。それでは秘書の役目も務めさせていただきます」

スーツ姿のリュイを想像すると、理事長室のデスクに上半身を預けさせてバックからガンガンしたくなる。普通に見かける格好なのに、なんでかエロスを感じるんだよな。意外と身体のラインが出るからだろうか？ いや、よく見かけたからこそエロいのか？

秘書をデスクの下に潜ませて、椅子に座った俺のチンポを舐めさせるのもイイな。定番であり王道である。如何にもスケベな権力者っぽくて興奮すること間違いなし。

なんとなくだが、悪の黒幕は椅子や車の席に座って電話をしているシーンなどで猫を膝の上に乗せて撫でているようなイメージがある。もしくは女にしゃぶらせているかだ。

黒歌とリュイ、これは隙を生じぬ二段構えと言えよう。なんならダ

ブルフェラに移行させてもいい。完璧だな。パーフェクトだ。

あとはこう裏社会の権力者といったら、アイドルやら女優に枕を強要しているようなイメージだが……そっち方面の知り合いはいないので、まずはJKを侍らせておくとしようか。大学生もいいけどな。ふんふんふふくん。

「嬉しそうですね」

おっと、鼻歌が漏れていたか。

「リュイのような有能な女を秘書に出来るんだ、嬉しくもなる」

「若さまのご期待に沿えるよう、精一杯務めさせていただきます」
うむ、精を一杯注いでやるからな。

リュイもそのときを想像しているのか、実に嬉しそうな表情を見せてくれた。

「となると、人間界では角無しのリユイを存分に見られるわけだから、こちらではそのままの姿を見ていたいところだな」

俺はこういう人間には無い部位を弄り回すのが好きなのだ。

またカリカリしてやろうかと思いつい『赤龍帝の籠手』を顕現したその時——俺の脳内に閃きの電球が灯った！

「……若さま？」

「今、ひとつ思いついたことがある、それを今から試す」

むむむ、と側頭部に意識と魔力を集中。

イメージするのは龍変身の応用だ。チンコのみをドラゴン化できたのだから、これも可能なはず。

鼻先と顎の下は不要。頭部だけでいい。

「あら……!?!」

なんとということでしょう。俺の頭から4本の角が生えたではありませんか。

「ドラゴン状態のときの角だけを生やしてみたんだが、どうだ？」

リュイの角とは向きや形状は違うが——細かいことは良しとしよう。

「格好いいですよ。素敵です」

お世辞でも美女に誉められると悪い気はしないものだ。

「これでお揃いだな」

俺がそう言うのと、リュイが自分の角を俺の角にコツンとじやれるように当ててくる。

「こうすると、小さかった頃を思い出します」

そのお返しに、俺も彼女の角にコツリ。

特に意味もないのだが、その後はしばらくコツンコツンと角を当て合ったり、ゴリゴリ擦りつけ合ったりして過ごした。

こういうのも悪くない。

姿なき殺戮者／イリユーカー・グラシヤラボラス

メイドと風呂に入り、部屋に戻ってリュイの身体をさらに堪能し、そのまま抱いて眠った日の翌日のこと。

我らグレモリー家次期当主御一行さまは、車でグラシヤラボラス家のパーティー会場へと向かっていた。

その内訳は、まずロイガン・ベルフェゴール。まだ正式に駒入れをしていない彼女は眷属扱いではないので一行の中でもっとも格が高い女性だ。

ベルフェゴール家の当主は辞したが、最上級悪魔の位は残っているからな。

ということまでメイド服ではなく、ドレス姿だ。ちなみに彼女は俺のチンポに完堕ちした淫乱ご奉仕メイドのリュイ（愛称）でもある。もうすぐ『騎士』の駒をぶち込む予定だ。

次がこの俺、リヴラクス・グレモリー。グレモリー家次期当主にして、『王』をやっている。

今回俺がグラシヤラボラス家を訪問するにあたって連れ出した眷属は、

右手に『女王』のレイヴェル・フェニックス。俺の婚約者である。可愛い系ドレス。かわいい。

左手に『騎士』のラティア・アスタロト。彼女も俺の婚約者である。派手で胸元がグツと出てるドレス。谷間。

正面に『戦車』の朱乃。彼女は俺の愛人メイドである。当然メイドなのでメイド服。

といった感じで車内に座っている。リュイは朱乃の隣だな。視線をどこに向けても眼福の隙の無い布陣だ。大変結構。視線がややラティアの谷間に向かいがちになり、レイヴェルをぷくーつとさせてしまったら、リュイから「しょうがないですね」といった視線を向けられてしまうのはご愛敬ということにしてもらいたい。ラティア自身はいつもの澄まし顔だ。

なお、『僧侶』の黒歌は置いてきた。礼儀作法の練習はさせている

が、まだまだ社交の場には出せない。

本人も「お貴族さまの集まりなんて、堅苦しそうでいやにやん」と言うので、無理をさせることもないと思っただからだ。嫌がる愛人を苦手な場所に引きずり出すのも可哀想つてもものだしな。

数か月＋20年後には理事長夫人として人間界で活動してもらわなければならないが、貴族の集まりよりは気が楽だろう。

本当は墮天使幹部バラキエルと血の繋がりがあある朱乃も連れてきたくはなかったのだが、先方から「是非に」と言われたので仕方なくだ。

「辱めるつもりはないし、痛めつけることもない。ただ、強い光力の持ち主を貸していただきたい」と丁寧に頼まれてしまったので、本当に渋々ながらだが連れて来なければならないってしまった。

悪魔と墮天使は長年の宿敵。天界住まいの天使どもと違って、同じ冥界に住まう種族なので衝突も多い。今も軍事的に緊張感が高まっている真つ最中だ。パーティー会場なんかに入れて行ったら、いじめられやしないかとヒヤヒヤしてしまう。朱乃をいじめるのは俺だけでいいのだ。

おのれ、グラシャラボラス家次期当主クリューハ・グラシャラボラスめ。

なにが、「ボクの弟が十年をかけて、時の中で失われていた初代さまの御力を復活させたんだ。それを是非とも披露させてあげたくてね。幼稚舎でキミにやられて以来の努力の成果を示させてあげたいんだ。頼まれてくれるよね？」だ。

弟思いのお姉ちゃんっぽい言い方をされたら断りにくいだろうが、グレモリーの。

ペタン娘、ボーイッシュ姉、両刀、男装、ナルシスチックで音楽家とか属性を大量に搭載しやがって。

というか、ゼファードルのヤツ。悪魔のクセに年齢の近い姉と妹がいるとか羨まし過ぎないか……？

悪魔は寿命が長いせいなのか、子作りは数百年単位でするものだ。それを考えると滅茶苦茶レアだぞこれ。9歳上の実姉と、2歳年下の

実妹の両方が居る男性悪魔なんてレア中のレアと言っている。

おのれ、ゼファードル・グラシヤラボラス。自慢しやがって！

と、どうでもいい怒りが沸々と湧き上がってくるが、さすがにこんなことでキレたりはしない。

「レイヴェルはグラシヤラボラス本家に行ったことがあるのだったな」

「ええ、何度かお邪魔させていただいたことがありますわ」

レイヴェルに改めてグラシヤラボラス家についてたずねると、ちよつと得意そうな表情で語り出してくれる。自身が本家次女イリュウカの同級生として知ったことだけではなく、各所に手を回して情報収集した成果を披露するのが嬉しいのだろう。色々としてくれているようで大変ありがたい。俺ってそういうの苦手だからね。

「再確認だったが、リュイの方で付け加えることはあるか？」

「特にはございませんが、強いて言えば……お話にあつた初代グラシヤラボラスさまの御力が気になります」

七十二柱の名門悪魔、その始祖の魔力特性の中には現代まで伝わっていないとされているモノもある。グレモリーのように秘匿している場合もあるのだろうが、本当にゼファードルが失われていたそれを復活させたとすれば、これは悪魔の国的にはともかくとして、御家的には大変な功績だ。

「初代グラシヤラボラスさまは、自身や他者を透明にする力を持っていらしたと聞いたことがあるわ」

ラティアの言葉を受けて、朱乃に目を向ける。

「透明にする力だとして、それで朱乃を光力目当てで呼び出したなるど……そういうことだよな？」

墮天使勢力との緊張感が高まる中、初代の持っていた『透明にする』特性を復活させたいゼファードル。その披露のためにバラキエルから光力を受け継いでいる朱乃を呼んだとすると、まあ、そういうことなのだろう。透明とは明かりを透かすこと……明りとは光のことでもある。

「初代グラシヤラボラスさまは、殺戮の達人、流血と殺しの総元締めと

まで呼ばれたお方ですわ。光力を使う墮天使軍との緊張が高まる中、その御力が蘇るとなれば大変頼もしいですわね」

「そうだな。ゼファードルとはしばらく会っていないが、どうなっているのやら」

レイヴェルが言うように、味方の戦力が上がるのは良いことに違いあるまい。腹パーンのことまだ気にしているかな？ 俺は心が狭いから、あんな目に自分があわされたら生涯忘れんが。

グラシヤラボラス家の会場に着いたところでリユイとは一旦分かれた。彼女には、ロイガン・ベルフェゴールとしての挨拶周りがある。「久しぶりだなア、リアス」

「あれ以来だな、ゼファイ。なんだ、わざわざ待っていてくれたのか？」
そして、会場の広間に眷属を引き連れて入ったその直後にゼファードルに絡まれた。

ゼファイというのは、ゼファードルのことだ。学友をやっていた幼稚舎の頃はそう呼んでいた。

しかし、コイツ。レイヴェルから話は聞いていたが、申し訳程度に上着を羽織っただけでほとんど上半身裸じゃないか。

見えている部分は刺青だから、鍛え上げた筋肉を魅せ付けていくデイハウザー・スタイルともまた違った感じだ。

「なわけねえだろうが！ チツ、クソが。バカみてえに魔力増やしやがって……」

「魔力量の豊富さがグレモリーのウリだからな」

「限度つてもんがあるだろうがよ」

まあ、兄上が真の魔力量を封じ込めて過ごしている現状、こういった場で感じ取れる魔力量としては俺のものが最大級になるだろう。

忌々しそうに舌打ちするゼファードルだが、その点については認められるしかなかったようだ。

「その刺青、魔方阵ね。しかも、そのほとんどが防御用のもの」

「ハッ、相変わらずお高くとまってるようだな、ラティアはよ。そういや、お前。リアスの女になったんだってな？」

ラティアはいつも通りの冷たい口調だが、ゼファードルにはそれを気にした様子がない。

「ええ、それがどうかしたのかしら？」

「いや、なにも？ あの頃もベツタリだったからな。ああ、そうだったのかと思っただけだ」

なんとというか、久しぶりに会ったゼファードルには、どこか余裕を感じさせるものがある。幼稚舎でのあの一件以来の邂逅なので、普段のゼファードルの様子は分からないが、それでもこう自分に自信がある感じだ。

聞いた話の通りならば、失われていた初代の魔力特性を復活させたということになるのだから、それもまあ当然か。ことによっては次期当主の交代すらあり得る功績だ。

「お久しぶりです。ゼファードルさま」

「おう、久しぶりだなレイヴェル。イリユーカは後で姉貴と一緒に来るはずだぜ」

俺やラティアとはお互い距離感を測りかねているゼファードルだが、レイヴェルに対しては……うん、妹の友達に話しかけられたお兄ちゃんといった感じだ。

というか、レイヴェルとゼファードルの妹のイリユーカは学校の同級生なのでそのままの関係性なのだが。

ちなみに、朱乃はメイドの恰好をさせているので俺に付き従う使用人扱いだ。使用人というのは用もなく貴族から話しかける相手ではないし、貴族の会話に混ざる立場でもない。他所の家の使用人に絡むのはみつともないことなので、朱乃が個別に話しかけられてどうこうってことは予防できるだろう。グラシヤラボラス家に呼ばれると事前に分かっていたら、アガレス家に行ったときにシーグヴァイラによりしく頼んでおくことも出来たのだが。

義姉上や、今後のリユイのような貴族よりも（権力的な意味でも）強いメイドさんというのは……例外なのだ。

いや、朱乃もそこらの上級悪魔より武力だけなら強いけどな。朱乃の光力全開退魔術ミックス『戦車』特性上乘せ攻撃は、直撃したら大

抵の悪魔が蒸発する威力がある。悪魔と光の相性的にかすっただけでも大ダメージ必至だ。

「とりあえず、そろそろ姉貴の演奏会だ。席に案内するからついてきな」

意外なことに、ゼファードルが俺たちを案内してくれるらしい。次期当主のクリューハが出し物で来れないとなると立場的に丁度いいのは確かだが……なんだろう俺ってもしかしてゼファードルより社交スキルが低いのだろうか？

美しいボクと美しい眷属たちの奏でる美しい音色に聞きほれると良い。

グラシヤラボラス家次期当主クリューハ・グラシヤラボラスの演奏会は確かに言うだけのものはあった。

俺は音楽には造詣が深くないので、細かいニュアンスまでは分からなかったが、さすがに眷属に音楽に関わる者を多く揃えているだけのことはあると思えたものだ。レーティングゲームでの勝敗を完全に度外視していることに関しては……まあ、趣味が勝ることもあるよなとしか言いようがないが。

ああ、でもセイレーンや風精霊はそれなりに強いかもしれないな。

「やあ、こうして実際に会うのは初めましてだよね？ リヴラクス・グレモリー」

「そうだな、クリューハ・グラシヤラボラス。会話自体、昨日の通信が初だったはずだ」

クリューハは俺より9つ年上だが、悪魔としては同世代だ。

「そうだね。リヴラクス、今までキミは損をして生きて来たってことさ」

「損を？」

クリューハと会話しながら彼女についてやって来た妹のイリユカの方に視線を向けると——なにやらキラツキラとした視線と目が合った。物凄く興味を持たれている感じだ。

「そうさ、何せこれまで期間、ボクたちの演奏を聞くことが出来なかったんだからね」

自信満々に語りながら、グラシヤラボラス家次期当主殿はおそろしく気障つたらしい仕草で席に着いた。やり過ぎなぐらいだ。

「それでね——」

このグラシヤラボラスの長女クリューハ。話が長い。

「——というわけさ。すごいでしょ？」

実によくしゃべる。自慢話が多すぎる。そして高めで可愛い系の甘ったるい声をしていやがる。

この声で男装は無理があるでしょ……。

相槌を打つこっちの身にもなつてほしいところだ。主に話しかけられているのは俺なので、どうしても相手をしなけりゃならんし。

誉めろ誉めろオーラをバシバシ放ってくる。どんだけ称賛を浴びたいんだこの女は。こういうタイプは、ほめ殺したら簡単に股開いてくれそう。

同席している弟のゼファードルですら、「なんかすまん」みたいな顔してるし……。

我が魔王計画のターゲットである次女のイリューカはというと、レイヴェルと話しているな。割とイイ性格をしているっぽい。

そして、ラティアは助けてくれない。というか、彼女はこういうときに余計なことを言わずに黙って聞いているタイプだ。

「おい、姉貴。そろそろ時間じゃねーか？」

「うん？ あつと、そうだね。用意しなくちゃ。ゼフィの晴れ舞台だからね、ボクが盛り上げないと」

クリューハのおしゃべりに付き合わされてどうしようかと困っていた俺に、まさかのゼファードルからの助け舟。

なんだ、コイツ。実はイイヤツだったのか？ まあ、会うのも十年ぶりぐらいだしな。昔の印象はアテにならないか。

「じゃあね、リヴラクス。光力の件くれぐれも頼むよ？」

「ああ、分かっている。雷や魔力は混ぜないようにさせればいいんだろう？」

「そうそう、それじゃ頼んだよー！」

いちいちポーズを決めながら立ち上がると、クリューハは準備があ

ると去って行った。ほんとに、雑談・自慢話しかしていかなかったな……俺とは正反対な感じだ。

「んで、リアス。後ろのメイドが例のバラキエルの娘か？」

ゼファードルの目が朱乃に向いた。その目は墮天使の血を引いている証である黒い翼を注視しているようでいて、その実、朱乃の豊満なたわわにチラチラと泳いでいた。

俺も男だ。ゼファードルの気持ちは理解できる。だが、朱乃は俺のものだ。

「ああ、そうだ。やらんぞ」

「一晩貸せつつても領きそうにねーなあ？」

「当たり前だ。手を出したら、ぶっ殺すぞ」

「おー怖ええ、怖ええなオイ。墮天使なんぞに入れ込みやがって、グレモリーの次期当主はゲテモノ好きって噂は本当だったみたいだなア」
コイツ、姉ちゃんがいなくなったら急に態度変えやがって。実はシスコンか。お姉ちゃん大好き侍か。

「は？ ゲテモノ好き？」

「妙な女ばかりメイドとして集めてるって聞いてるぜ」

「ああ、そういうことか。あの良さが分からんとは可哀想な奴だな。趣つてものを知らんらしい」

「ああ、ッ!?! 喧嘩売ってんのか？」

「先に突つかかって来たのはそっちだろうが」

「やんのか、コラッ！」

ゼファードルが荒っぽく席を立った。ふん、短気な奴め。

「ハッ、勝てるつもりでいるのか？」

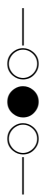
「見下しやがって、お前のそういうところがムカつくんだよ！ このトマト頭が」

「フフッ……。実際、下だからな。自然とそうなるのは仕方がないことだ」

こっちは席を立つまでもないな。座ったまま態度でふんぞり返って見下してやる。

俺は心の小さい男なので、さらりと受け流してやったりはしないの

だ。グレモリーの髪色をトマト呼ばわりしやがって……ぶち殺すぞ！



わわわ、兄さんと龍帝さんが喧嘩になっちゃいそうだよ。これ、ボクが止めないといけないんだよね。兄さんとお客さんの問題だから。でも、兄さんちよつと楽しそうかも？

「兄さん、兄さん」

「あん？ んだ、イリユーカー」

「兄さんもそろそろ行かないと、そっちのメイドの子の手も借りるんでしょ？」

懐中時計を取り出して文字盤を見せながらそう言うと、兄さんは「チツ！」と舌打ちする。ボクの兄さんは、ちよつとお行儀が悪いんだ。

「えつと、龍帝さんも……ね？」

学校でレイヴェルがよく話しているので、龍帝さんのことは会ったこともなかったのにちよつと詳しい。

だからボクは女の子大好きらしい龍帝さんに、「……ね？」って精一杯可愛らしく首を傾げてお願いしてみるんだ。

「ふん。まあいい。時間ならさっさと行ったらどうだ？」

「はっ、テメーに言われなくとも……んじや、その墮天使女、借りてくぞ」

「ラティア、すまないが……」

「付いて行けばいいのね。心配し過ぎだと思っただけ」

あ、ラティアも付いていくんだ。そういえば、ラティア・アスタロトは龍帝さんの『騎士』になったんだっけ。

あのデツカイ龍の姿、テレビで観ただけですごかったな。頭から尻尾の先までがほしい15kmぐらいじゃないかって言われてたけど、地面に足付けて立ち上がったたら人間界の最高峰の山より大きいってことだよ龍帝さん。

「ゼフィだからなあ……」

「いくらゼファードルでも、この場で無茶はしないと思うわ」

「うるっせえんだよ、お前らは！」

兄さん、わざとらしく大股で歩いて行っちゃった。その後ろに、ラティアと墮天使メイドの子が付いていく。

怒ってる風だったけど、やっぱり兄さん、なんだか楽しそうに見えるたかも。

「リアスさまもなんだか嬉しそうでしたわ」

その辺りをレイヴェルにこそつと聞いてみたら、龍帝さんもそんな感じみたい。ラティアは分からないけど。

「実は仲良いのかな？」

「それは分かりませんけど」

「幼稚舎の同級生って、ボクとレイヴェルみたいな感じだよね？」

でも、兄さんと龍帝さんって、すぐに学校行かなくなっちゃったからよく分からないな。兄さん学校行ってなくて友達いないからかな？

姉さんが教えてくれた話だと、兄さんとソーナ・シトリーを仲良くさせようって話があったみたいだけど……今じゃ全然交流ないしね。魔王輩出の名門四家に同じ年の子が生まれたーって、当時は結構いろいろあったみたいだけど。

「ところでイリユカ、このままこの席にいたらいいの？」

「あつと、そうだった。こっちにお願ひします。ついて来てください、はい」

レイヴェルと違って同世代やその一つ上の世代くらいは気を遣わないボクだけど、龍帝さんにはついつい丁寧になっちゃう。

だって、大きいから。抑えてるみたいだけど、ブワツてしたら兄さんの100倍くらいありそう。もう、近くにいるだけでクラクラしちゃうよ。

心臓がドキドキしちゃうからなるべく意識しないようにしてるのに、ついつい視線がいつちゃう。レイヴェルが夢中になっちゃってるのもちよつと分かるかも。

レイヴェルって、学校ではいつつも龍帝さんの話ばかりなんだよね。もう胸ヤケしそうなくらい。

「どこの家でも闘技場があるんだな」

「大きい家はみんなそうみたいって聞いたような覚えがあるかな」

ポーカーフェイス、ポーカーフェイス、貴族の女の子は動揺を表に出したらダメなんだって。

レイヴェルは表情がコロコロ変わっちゃうけど、フェニックス家のヒトはだいたいそんな感じみたい。アスタロト家はラテイアみたいになるし、シトリー家は味覚がおかしいからレヴィアタンさまの料理には気を付けろって評判みたい。バル家は頑固者で、アガレス家は苦勞性。

お家ごとにいろいろあつて、悪魔って不思議だよな。

「それじゃあ、この席でお願いします」

ふうー、もう困っちゃうな。なんとか案内できたけど、顔赤くなつてないよね？

姉さんも兄さんもいないと、ボクが相手するのが丁度いいのは分かるけど、緊張しちゃうよ。

「若さまもこちらでしたか」

「ああ、リュイか」

って、わわ、ロイガン・ベルフェゴールさまだ。

龍帝さんと親しそうっていうか、「若さま」呼び？ ランキング2位のロイガンさまが引退して龍帝さんの『騎士』になるみたいって噂があるけど、本当だったのかな。

「ねえ、レイヴェル。リュイって？」

ボクって、気になったことはすぐに聞いちゃうんだ。

「ロイガンさまの……愛称ですわ。私も今後どう呼んだらいいのか困っていますの」

「じゃあじゃあ、やっぱりあの噂って——」

うわー、うわー……もうレイヴェルとしては隠すつもりもないのか、教えてもらえたけど……。

龍帝さん、どこでどう知り合つてロイガンさまとそういう仲になつ

ちやうんだろ……龍帝さんの歳って、ボクの二つ上だよな？

ボク、まだキスもしたことないんだけど……もしかして遅れてるのかも？ レイヴェルは、バツチリ経験済みみたいだし……。

「もうそろそろ始まるみたいですね。イリユーカーさんはそちらに座って下さいまし」

「あつ、ちょっとレイヴェル」

「ホストの役目ですわ」

龍帝さんの隣に座らせられちゃった。龍帝さんを挟んで反対側は口イガンさま。

うわー、やっぱり大きい。右の龍帝さんと、左隣のレイヴェルとの差が物凄い。

『初めてお見かけした時に、この方だっと思っていましたの』

なんてレイヴェルが言ってたけど、こういうことなんだ……。

「それで、イリユーカー。ゼフィはやはり初代グラシヤラボラスさまの御力を蘇らせたのか？」

龍帝さんに説明するのボクの役割だよな。

「あ、えつと、そう。これからそれを皆さんに見てもらおうって、ことです。はい」

幼稚舎の頃に龍帝さんにお腹を吹き飛ばされた兄さんは、それから打倒龍帝さんを目指して頭おかしいって言われるぐらい頑張ってた。物心ついてから、熱心に研究したり、魔方陣を身体に刻み込んだりしている兄さんしかみることがないくらい。

兄さんは我がグラシヤラボラス家が輩出した魔王ファルビウム・アスモデウスさまみたいな、自動防御の魔方陣を身体に刻み込むつもりだったみたいだけど……。それがどう作用したのか、ご先祖様の特性である自分や他者を『透明』にする力に繋がっちゃったんだ。

アスモデウスさまの力は、もしかしたらご先祖さまの力が変形したものだっただけかも？ なんて話もあつたっけ。全身透明になる代わりに突然変異的に防御術が染み付いたみたい。グラシヤラボラス家が防御の術に優れているのは、身体に作用するご先祖様のこの特性の名残じゃないかとか、いろいろ議論したんだよね。

トランスペアレンシー
『透 明』っていうと有名な聖剣のエクスカリバーの能力の一つと同じになっちゃうから、『不可視』^{インビジブル}って呼び方にしようか一族で考え中なんだ」

昔は特に呼び方決めてなかったみたい。

あ、姉さんが出てきた。演奏しに……。

「グラフィックラボラス家は変わり者が多い」なんて他所の家から言われちゃってるみたいだけど、姉さんと兄さんについては……ちよつと否定できないかも。ふたりとも嫌いじゃないんだけどね。

姉さんが入場曲っぽい自作曲を披露する中、兄さんは凄く嬉しそうに登場。学校行かずに家に籠ってた兄さんのこと、姉さんは応援してみたいで、ふたりは仲いいんだよね。ボクも妹なのに、ちよつと疎外感あるかも。

「朱乃とラティアも出てきたな」

反対側からラティアに付き添われて墮天使メイドの子が登場。

両者が配置についたところで、姉さんの演奏が切り替わった。人間のゲームの戦闘曲みたいかな。

「撃ってこいや、オラアツ！」

兄さんって、なんであんな話し方なんだろ。いいけどさ。

「朱乃、最大出力で撃ち込んでやれ！」

「はい！」

龍帝さんが魔力で拡声して指示を出してる。

朱乃が左手に光力で弓を形成して、って、うわ、墮天使の翼が四対に増えた!? 右手に生み出した『光の矢』に力が収束して……。あれ？ 物凄い威力がありそうな……。

兄さんと朱乃の直線ライン。その兄さんの背中側のところで闘技場スタツフが慌てて障壁を強化しようとしている。

あんな光の矢。ボクが受けたら、かすただけで死んじゃうかも。

これが……龍帝さんの『戦車』。

「龍帝さん、あんなの撃たれたら兄さんが……」

ボクが袖を引っ張ってそう言うと、龍帝さんはちよつとこつちを見て――。

「手加減はいるか!? ゼファードル!!」

「いらねエ!! さつきとこいや! リヴラクスの下僕女アツツ!!」

あわわわ、兄さん受けて立っっちゃったよ!

姉さんはって見ると、普通に演奏に集中しちやってる!

「いい度胸だ。殺れ、朱乃!」

殺れって、殺れって言ったよこの龍帝さん。さつきのこと、まだ怒ってたんだ!

「はい、主人さま! 撃ちます!!」

撃った。撃つちやった……!

最上級悪魔クラスでも危なそうな矢が超高速で兄さんに向かって……ッ!

直撃する寸前、兄さんの姿が消えた。光の矢は兄さんが立っていた場所をそのまま素通りして、闘技場の防御障壁に激突。大爆発!!

「はあ……良かった」

爆煙がおさまると、そこに無傷の兄さんがいた。分かってたけど、分かってたけど……ハラハラしちやったよ!

「言うだけのことにはあったみたいだな、ゼファイ!」

「当たり前だ、くそリアス! 天使と墮天使ぶっ殺しまくった殺戮者、グラシヤラボラスさまをなめてんじゃねーぞ!」

兄さんは足元の土に円を描くと「オラア! 俺はこん中から出ねえ、もつとガンガン撃ってこいやア!!」って言いだすし。

龍帝さんは、龍帝さんで「朱乃、パターンは全部見せて構わん。気が済むまで撃ち込んでやれ!」とか言っっちゃうし。

闘技場内に上級悪魔クラスでも危険な光力がバリバリ飛び交って、そんな中で兄さんはオラオラ言ってるし、姉さんは平然と演奏してるし……もう無茶苦茶だよお。

闘技場での騒ぎが終わった後、パーティー会場はダンスの時間になっっていた。

「ボク、龍帝さんのこと誤解してたかも」

「誤解？」

「そう、もつと怖いヒトなのかと思ってたけど、意外と子供っぽかったんだなって」

今、ボクは龍帝さんとダンスしてる。

「今日は少しはしやぎすぎたな」

龍帝さんとは二回目。最初の一回目は緊張しちやっただけど、今は二回目だからちよつと余裕があるかも。

ボクとの一回目のあと、龍帝さんはレイヴェルと火の粉を散らしながら激しくしてるのを見て、ラティアとしっとりしてるのも見た。ロイガンさまと龍帝さんは、なんだかとってもいやらしい感じにした。

ん、背中に触れてる龍帝さんの手が……。

でも、龍帝さんすごく大きいからやっぱりちよつと怖いかな。今までボクが近くで感じた中で一番おっきいヒトはアスモデウスさまだけど、龍帝さんの方がもつと大きい。

「あの特性は、イリユーカーも使えるのか？」

「今は練習中。兄さんから習ってるところかな」

どこかで使い方が忘れられちゃってみたいんだけど、あの特性はボクからグラシヤラボラスの血の中に流れているはず。

だから、兄さんはもう他人にもかけられるようになってるから、それを受けて感じを掴めばいけそうなんだよね。

「そうか、ゼフィの名がグラシヤラボラスの歴史に残りそうだな」

「そうだね。うん、ホントにそうなりそうかも」

くるくるつと回って、ボクの腰に龍帝さんの手が添えられた。

結構身長差があるのに、龍帝さんは手慣れた感じ。

レイヴェルで慣れてるからなのかな。ボクの方がレイヴェルよりちよつと背が高いからね。

「イリユーカーは翼を出すのは出来るのか？」

「うーん、そっちは練習してないかな。レイヴェルみたいに目立つ翼じゃないから」

悪魔のダンスには、翼を出して飛んだり浮いたりするものもある。

でも、ボクはそっちはあまり得意じゃない。

「なら、夏までに練習しておくか」

「なにを？」

「イリユーカーくらいの背丈の相手とのダンス」

「えー、夏の社交でもボクと踊るつもりなんだ？」

「クリューハとは踊れないだろう？」

「姉さん、踊るより演奏してる方が好きだからね」

そっか……また社交シーズンが来たら、ボクが龍帝さんのお相手するんだ。

「あれ？　でも噂だと龍帝さんって他所の家のパーティーでは、レイヴェルやラティアとばかり踊ってたって聞いたかも」

「レイヴェルの友達とは、長い付き合いになりそうだからな」

そういえば、グレモリー家とシトリー家が懇意にしているのは、当主夫人同士が学友だったからって聞いたかも。

ボクがどこかに嫁いたら、レイヴェルを通じてグレモリー家とそんな感じになることもあるのかな？

「あ、ボクだって夏までに背が伸びるからね」

伸び盛りなので。

「俺の方は、もっと伸びそうだな」

「そっか、ローゼンクロイツさまの件で」

「ああ、ちよつと20年くらい早回しで過ごしてくる。……そう考えると、次に会う頃には俺の方が身体年齢をいじれば済む話か」

「そうかも？　同じ年ぐらいの身体になってもらったら丁度いいかな」

踊ってる間に問題が解決しちゃった。

それに、そろそろ曲もお終いになりそう。

「もう終わりか」

「そうだね」

ラスト10秒ぐらいのところ、龍帝さんが翼を出して大きく広げた。

ふわっと抱き上げられる。龍帝さんの翼がボクを覆い隠すように

動いて……………。

「あら、イリユーカーさん。どうかされました？」

ダンスを終えて戻って来たボクの顔は、たぶん真っ赤になってると思う。耳も熱いし。

「ね、レイヴェル。龍帝さんって……………えっちなだね」

とられちゃった……………ボクの初めて。唇にまだ感触が残ってるような気がするかも。

グレモリーの男のヒトは、女ったらしが多いつて聞いてたのにな。

『無価値（ベリアル）』の価値

弱い犬ほどよく吠える。自然界には、生き残るために強そうな見た目、ヤバそうな色合いしている生き物も多い。

俺の禁手は魔王の装束のような外観をしているが、これで俺の魔力が並程度だったならば大いにバカにされていたことだろう。

虚栄、虚飾、虚勢。多くの人間はそれを侮蔑するが、逆のことをされてもやはり困惑する。

ヒトには身分や立場、身に着けた力に相応しい見た目ってものがあるのだ。

日本人をやっていたことがあるなら、一度くらいは聞いたことのあるりそんな話に『一休禅師と金襴の袈裟』という話がある。

あの有名な一休宗純、いわゆる一休さんの逸話だ。

ある日、一休の寺に若い男がやってきて、「去年なくなった大旦那さまの一周忌の法要を有名な貴方をお願いしたい。なに、礼金はたんまりと弾みますぞ」といったようなことを頼んできた。

金持ちが金の力で有名な僧侶を呼びつけ、箔を付けようとしていたのだ。取り次いだ者からその話を聞いた一休は、よろしいと日時を決めて何うと返事をした。

そうしておいて、決めた日時の前日にボロボロの薄汚れた衣服を着て、その家に足を運んだ。

「どうかお恵みをくだせえ」

物乞いを装った一休は、そんなことを言って金持ちの家の戸を叩く。

するとその家の使用人たちは「ええい、なんだこの小汚いヤツは、かえれかえれ！」と寄って集って一休を追い払おうとする。

それでも一休ねばる。「どうぞお慈悲を」と食い下がった。

やがて騒ぎを聞きつけた家の主人が顔を出して「さっさと追い出せ、手荒にしても構わん、叩き出せ！」と命じたので、一休は叩かれ蹴られ、ボコツボコにされて道端に捨て置かれたと言う。

開けて翌日、今度は一休、豪華な法衣と金欄の袈裟を身に纏って同じ家に足を運んだ。

するとお金持ちの家では大層な歓迎ぶり、一休が事前に伝えた時間までに家の中は綺麗にされていて、皆が皆行儀よくし、多くの者が集まって出迎えたのだ。

門の外まで身なりのきっちりした一休を出迎えに現れた家の主人は、「さき、どうぞ仏間へ、よろしくお願いいたします」といたって丁寧に頭を下げてくる。

「いや、いや、わしはこの家に入ることはできん。このむしろの上で十分よ」

主人に丁重に招かれたにも関わらず、一休は門前のむしろの上に腰を下ろしてしまい、屋敷の中へ入ろうとしない。

有名な一休が来ると聞きつけ、多くの人が集まっている中でそのようなことをされては家の主人も困ってしまう。

するとそんな主人に一休は「仏間に行くのはこの法衣と袈裟だけでよろしいでしょう。わしの身体はこの屋敷に入るに相応しくない」などと言いだすではないか。

驚く主人に向かって一休は続けた「ご主人、昨日の夕暮れに訪れた物乞いはわしだったのよ。昨日は叩かれ蹴られ追い出されたが、今日はこういうわけかもてなしてください。昨日と今日、違いはこの衣装だけよ」

將軍、大名にも名が知れ交流のある一休に対して、殴る蹴るの真似をしてしまった……。その事実に着ざめ震える主人。

その主人に一休は笑いながら豪華な法衣と金欄の袈裟を手渡した。「お前さんらがありがたがっているのは、わしではなくこちらのようだ。ならば、この法衣と袈裟に法要をたのみなされ」

とまあ、だいたいこんな感じの話で、見た目じゃなくて中身で判断しようねって教訓話という解釈が一般的だが、ぶっちゃけ世の中見た目が大事だとも受け取れる。

一休禪師ですら、ボロを着ていればボコられるってことだからな。

いわんや凡人をやつてことだ。

醜女がやつてきて「お恵みを欲しいによ」と丁寧に願ったところで「うええ」となって追い返すが、美少女がやつてきて「お恵みをくださいまし」としどけなく言うのなら喜んでギンギン棒をぶち込み可愛がる。

見た目で対応を変える男。それがこの俺、リヴラクス・グレモリー。想像したら分かる、やはり世の中見た目なのだ。可愛いは正義とも言うし、イケメンだけに許されていることも多い、美少女ならば外道でも愛される。世の中そういうものだ。

だいたいこの一休さんの話、やったのが主人に対して圧倒的に格上の有名人だったから通用しているだけで、立場が違えば「バカにしやがつて！」となつたに違いない。一休ならば、将軍さま相手に同じことをやつても許されたかもしれないが、それは一休のキャラクターあつてのことであつて、他の者には無理な話だ。

ということ、俺はこの話を「一休さん *sug ee!*」の一つとして受け取っている。

やはりどこかにお呼ばれして出かける際には、身なりに気を遣つた方が良いつてことだな。こつちが迎える側でもそう。

TPOとかそういうのは守れるなら守つておいた方が無難つてことですよ？ 聞いてますか？ 魔法少女コスで我が家に遊びに来る魔王お姉ちゃん。

『でも、リーくんそつちの方が嬉しそうだよね？』

それはそう、パンツ見えるしね。会う相手の趣味嗜好に合わせるつても大事なことだ。

……まあ、セラフォルーさん仕事の時はちゃんとしてるけど。

『えっへん♪』

セラフォルーさんとこんな話をしたのは、さて、いつのことだっただろうか。

ラクダがぽこぽこゼクラム祖父さんの城へと向かつて道に行く。後ろから俺の腰に腕を回してくるリュイの感触を楽しみつつ、俺は

ちよいと昔のことを思い出していた。

ゼファードルのヤツに「ゲテモノ好き」とか言われたせいだろうか。いいんだよ、見た目が一般的な美醜の判断からすると厳しくても俺がイイって思えばイイのだ。

ま、グラシヤラボラス家では収穫もあつた。次女のイリユーカに俺の印象をガツンとグレモリーの魔力と一緒に叩き込んでおいたからな。とりあえずこれで、彼女にとって俺という存在は忘れがたいものになったことだろう。

フハハ、ドラゴンモテオーラとグレモリーのエロ魔力さえあれば、強引かつ唐突に唇を奪ったとしても好感度アップ間違いなしだからな。

さて、何故俺が祖父さんの城に向かっているかと言えば、それはバル家のパーティーに参加したときに叔父上からそう言われたからだ。

「なあ、リュイ。どうしてベリアル卿が出てくることになったと思う？」

「分かりませんが、ゼクラムさまも交えての会談となると一筋縄ではいかない何かがあるとしたら」

グラシヤラボラス家への訪問を終えた俺は、いよいよ本丸のバル家へと向かうことになった。

今回はレイヴェルとラティアもお留守番。お供はリュイことロイガン・ベルフェゴールだけだ。

本来ならば『女王』か『騎士』を連れて行くのが礼にかなったやり方だが、場合によつては荒事になる可能性もあるからな。

俺のことを知っているバル家はどうかうしようなどとは思わないだろうが、大王派は最大派閥で数が多いので俺のことをよく知らない者もまた多い。その上、今回の件での利害関係者も多いので警戒して出向いたわけだ。俺とリュイだけならば、大概のことはどうとでもなるからな。

と、意気込んで向かったバル家の大王派が集う会場では、こつちが拍子抜けするほどのトントントン拍子で話が進んでいった。

どうも、バル家当主の叔父上が率先して動いてくれていたようだ。

なんだったら、リュイに全力『倍加』からの『譲渡』を行って、「こつちがその気になればバル領ごと全員『裂け目』で真つ一二つだぞー」くらいの脅しも辞さないつもりでいたのだが、特に何事も無かつたぜ。「アジユカさまの条件を受け入れるつもりだが、その前に話し合いが必要。これは分かる。叔父上もいろいろと調整が必要だろうからな。だが、叔父上と魔王さま方が話し合う前に、ゼクラムさまの前でベリアル卿と話をつけておく必要があるとは……なんなんだろうな本当に」

大王派の中でのベリアル卿の地位はそう高いものではなかったはずだ。正直、一人息子のデイハウザー殿の武威と名声だけで立場を作っているようなところがある。

これは、他の派閥の者にも知られている話だ。ベリアル卿自身が正直にいつもそう言っているらしいので。

ベリアル卿は丁重に扱われるが、それは彼がすごいのではない。息子のデイハウザー殿を見てそう扱われているのだ。

「デイハウザーに関係することでしょうか？」

悪魔の貴族は謙遜を好まない。誇張が過ぎれば笑われるが、卑下するよりはマシだと考えるものだ。

己の功績、名譽、強さは誇らしげに掲げることが良しとされている。自分を低く言うことは、自分自身だけではなく御家や同じ血を受け継ぐ一族をも下げることにつながるからだ。

ということもあって、あちこちで「息子のおかげ、息子のおかげ」と言っているベリアル卿本人はデイハウザー殿のおかげで大きな顔をしていられる者として見られている。

まあ、事実なんだが。

母上から以前聞いた話では、デイハウザー殿がレーティングゲームで活躍していなかったらベリアル領はやバかったらしい。信用がなくて財政破綻寸前だったとか。

現状でも、『皇帝』の信用一本で保っているというのが実際のところ

らしい。もしもデイハウザー殿に何かあったら、一気に傾く可能性が高いのだとか。

とまあ、そんな風に言われてしまっているベリアル卿自身には、そこまで武力的にも権力的にも大きなものはないのだろう。なので、リュイが言うようにデイハウザー殿絡みの話なのだろうか。

父親のベリアル卿と違って、『皇帝』の影響力は大きいからな。「それにしても、俺が呼ばれた理由が分からない」

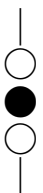
叔父上は大王派の表向きのトップ。ゼクラム祖父さんは派閥の真の首魁。ベリアル卿は大王派最強の男デイハウザー・ベリアルのお父さん。

この大王派内部の話し合いらしき席に、俺が呼ばれた理由がよく分からない。

「まあ、ゼクラムさまには世話になってるから、行かない選択肢はないんだがな。……リュイはデイハウザー殿と長年競り合ってきた間柄だ、何か思い当たることはないか？」

「そうですね。デイハウザーと言えば――」

バアル家パーティー会場で拍子抜けした翌日、ゼクラムさまの城に向かうラクダの鞍上で、最高級の正装に身を包んだ俺はリュイの話を聞き始めた。



時は数日遡る。

新年のレーティングゲームイベントを終えたデイハウザーは、ベリアル本家の城で遠征の支度を始めていた。墮天使領と悪魔領の境界付近で軍務につくことになったからだ。

本格的な戦用の装備はゲームで用いるそれとは異なる。悪魔にとって最も敵対する機会が多いと想定されているのは、同じ冥界に拠点を置く墮天使たちだ。次いで天使とその加護を受けた教会の戦士

たち。

マネジメントを任せている者から「女性ファンに受けます！」と強く言われて着用し始めたゲーム用の衣装は上半身前面の露出が多いが、あれはあくまでファンサービス。

対墮天使用の装備はある程度光力への防御能力を備え、露出の少ない鎧姿だった。

鏡に灰色の髪と灰色の瞳の男の姿が映っている。鍛え上げた肉体を持つ、戦士の姿だ。出陣に際して民衆に見せる姿として十分なものでだろう。

現在、境界地域に陣取っている墮天使側の将バラキエルは、墮天使幹部の中でも特に武力に秀でた者。その抑えとして『皇帝』以上に相応しい者はいない。

所属する派閥からそう望まれ、民衆から頼りとされ、政府から命を受けては断る選択肢などなかった。そして、デイハウザー自身にも断る理由はない。

「なぜ貴方が、そのような危険な場所へ行かなければならないのですか」

だが、デイハウザーの母カルファは息子が危険な地に赴くのを嘆いていた。

戦支度を整え、家族に確認してもらおうと姿を見せたデイハウザーに、彼女は憤り悲しみ怯えの混じった複雑な顔を向けてくる。

「有事に際して活躍を求められる。最上級悪魔の位にある者の務めですよ。母上」

「最上級悪魔は貴方だけではないでしょう」

母はデイハウザーがレーディングゲームに参戦することすら嫌がっていたヒトだ。

長年ランキング1位を独占し続け、不敗の王者とデイハウザーが呼ばれるようになった今でも、試合会場に足を運ぶことはなく、試合の映像を見ることもないヒトだ。

それはデイハウザーを嫌ってのことではない。戦争を知る世代の母は、息子が戦う姿を見たくはないのだ。デイハウザーが傷を負うこ

とを恐れているだけだ。

息子が戦争で亡くなった親類や友人のようにならないように……と。

「大王バアル派の意向ですから」

言外に他の最上級悪魔と代われないのかと告げてくる母に、デイハウザーは一言だけ返した。

この機会に魔王を擁さぬ大王派の武威を示しておきたい。そのために『皇帝』ベリアルルの出陣を――。

バアル家現当主から、ベリアル家当主である父はそう言われたという。

「ですが……」

ベリアル家は他の多くの貴族家とは異なり、一族全てが一つの派閥、大王派に所属している。そのこともあつて、大王派の意向に反することは難しい。他派閥との繋がりに乏しいためだ。

これは他家から嫁いできた母もよく知っていることだった。

七十二柱の他の御家は、分家ごとに属する派閥が異なることも多い。それは場合によって立場を切り替えられるようにするためでもある。

しかし、ベリアル家は違う。一族すべてが大王派でまとまっている。

これにはベリアル家の歴史が関係していた。

三大勢力の決戦、そしてそれに続く旧政府との内戦の折、当時のベリアル家当主は大きな失態を重ね続けた。この失態の連続によってベリアル家は兵力のほぼすべてを失い、御家の権威は地に落ちた。

権威とそれを支える兵力、信用、多くのモノをなくしたベリアル家は財政難に直面し、断絶寸前にまで追い込まれてしまう。

戦後に当主の後を受け継いだデイハウザーの祖父は、その御家存亡の危機にあたって、

『一族と領民は大事にしよう。親族の繋がりを強め、領民の生活を守らねば、ベリアル家とベリアル領は立ちいかなくなる』

との理念を掲げて復興に努めた。

その理念はデイハウザーの父である現当主にも受け継がれ、ベリアル一族は戦争から数百年が過ぎた今も領内の一か所に集まって暮らし、共に家を盛り立てていこうと尽力し続けている。

しかし、その努力はなかなか実を結ばなかった。

税を低く抑えていることもあり、領民が日々の暮らしに困るような事態は訪れてはいない。

だが、その分税収の少ないベリアル家は貧乏だった。貴族家の目に見える権威の象徴である城を維持することさえ出来ないぐらいに困窮していた。

今では『皇帝』と呼ばれ、英雄と呼ばれるデイハウザーも、領の中心である都市部ではなく、山奥にある小さな館で育ったのだ。

ベリアルは聖書及びその関連書籍にたびたびその名を記されてきた名門中の名門で、かつてはバアルの『大王』に次ぐ『王』の位階にあったほどの一族だった。しかし、デイハウザーが育った頃のベリアル家は、過去の繁栄の影すらない状況だったのだ。

税収だけではデイハウザーが貴族向けの名門学校に通う費用を賄えず、教育費のために父は社交用の服を極力減らし、母は大切な宝石類を売り払ったほどだ。

悪魔は見栄を張りたがる種族だ。自身よりも下だと認識している相手から馬鹿にされることを極端に嫌う。

その傾向は貴族階級では特に顕著で、貧乏に喘ぎ周囲の貴族家と比べて何段階もランクの落ちる生活をしていたベリアル家の者は侮蔑を受け続けた。

『自分たちの暮らしのレベルを落としてまで、領民を取るのか。このような者が、我々と同じ純血の上級悪魔だとは……。仰ぎ見られるべき立場にある貴族として、恥ずかしいとは思わないのか？』

ベリアル家は名門である。貧乏ではあっても元七十二柱の名家だ。その名家の者、本家の跡継ぎであるデイハウザーの惨めな姿は、他の上流階級の悪魔達にとって酷く目障りに映ったらしい。

特に他の御家の分家筋の者たちにとっては、名門ベリアル本家のただ一人の子でありベリアル家次期当主であるデイハウザーが、貧しさ

を滲ませた暮らしぶりをしていることが癪に障って仕方がなかったようだ。

『カルファさまがお可哀想ですわ。ベリアル家に嫁ぐ際に持ち込んだ宝飾までも手放さなければならぬなんて……。あれらは、カルファさまが社交の場で恥をかかぬようにと、御家から、ご両親から贈られたものではありませんか。ベリアル家のなさりようはあまりに酷いのですわ。嫁いだ女にこのような仕打ちをしているようでは、デイハウザー、あなたには婚約話の一つも来ませんよ。今からでも遅くはありません、ベリアル卿にそう伝えて税を上げてでも買い戻すべきです』
ときには母のことを、母の実家のことを持ち出してまでベリアル家の方針を非難する者もいた。

何度もデイハウザーにそうした苦言を告げてきた同級生の彼女は、これみよがしに母が手放した宝飾品を身に着けていたことすらあった。

『上の者には、上の者に相応しい姿が求められる。今のままでは信用を得られず、いつまで経つてもベリアルは変わらんぞ』

忠告めいた言葉の中に嘲りを潜ませる者もいた。

それでも、デイハウザーはその暮らしを変えようとは思わなかった。それは、祖父を、父を尊敬していたからだ。どちらも特別魔力が高いわけでもなく、貴族としての器量も並程度。だが、領民から慕われ、一族を大事にする姿を誇らしく思っていたからだ。

このデイハウザーの考えは、彼一人だけのものではない。祖父も父も、叔父も、親戚一同、ベリアル家は一丸となって御家と領土、領民たちを守り通してきていたのだから。

デイハウザーがレーティングゲームで活躍し始めてから、ベリアル家の状況は良くなり始めた。父母が身を切つてまで最高峰の教育を受けさせてくれたから、今のデイハウザーがある。侮蔑の中で過ごした学生時代は無意味ではなかったのだ。

悪魔社会でのデイハウザーの評価が上がるにつれ、その後押しを受けた現当主である父の派閥内での地位も上がっていった。

レーティングゲームで活躍して得たデイハウザーの評価とは、つま

るところ「強さ」だ。戦いに強いデイハウザーのいるベリアル家の当主。それが父の派閥内での立場を支えている。

それなのに、母が嫌がるからなどと言う理由でデイハウザーが出征を渋っては、高いものとなってきた父の派閥内での地位も揺らいでしまうことだろう。

「ですが……私は……」

デイハウザーはそのことを口にはしなかったが、母には伝わったようだ。

「申し訳ありません、母上」

「デイハウザー……」

母は辛そうに表情を歪めると、戦装束の息子の姿など見たくないと思早に立ち去ってしまった。

「カルファのことは気にするな。何度も言っているが……」

「分かっています、父上」

母が去ると、それまで黙っていた父が口を開いた。

どれだけ活躍しても試合を見に来てはくれない母だが、デイハウザーはその心の内を良く知っている。

いつも母のことで父から謝られて来たが、そんな必要はないのだ。

「デイハウザー、このことが終わってからになるが――」

父の顔つきが変わった。

「おまえに当主の座を渡そうと思う」

「――っ」

咄嗟に言葉の出でこなかったデイハウザーに言い聞かせるように、父は話を続けた。

「貴族家の当主の最も重要な役割は、領地を守ることだ。当主となれば、それを理由に出来る」

「……父上」

デイハウザーは戦闘を楽しむことの出来る男だ。そうでなければ、レーティングゲームの王者で居続けることなど無理だ。

だから、この父の言葉は、戦地に息子を送ることを厭う母のことを考えてのものだろう。

そんなデイハウザーの考えを見て取ったのか、父はゆつくりと首を横に振った。

「これはなにもカルファのことだけではない。おまえが当主となったなら、伝えたいことがあるのだ。ベリアル家では、当主である私その他にはごく一部の者にしか知らないことだ」

「伝えたいこと……ですか？」

「ああ……そのときになったら話す」

その内容は気になるが、ベリアル家次期当主であるデイハウザーが知らされず、当主の父とごく一部の者だけが知ることとなれば重要な話なのだろう。

「当主……私が」

デイハウザーはレーティングゲームを愛している。ずっと続けていきたいと思っていた。

しかし、当主ともなれば領地運営に比重を傾ないわけにはいかない。

「なに、当主になってもレーティングゲームは続けて構わない。領地のことは私に任せておけ」

「しかし、それでは……」

領民に対して、領主が片手間で相対しているようではないだろうか。

「いくつかの家ではやっていることだ。そう気にせずともいい。ただな……」

その後、父が続けた言葉は、デイハウザーにとって衝撃的な内容だった。それまでの会話の内容が吹き飛ぶようなものだった。

遠くに墮天使軍の前線基地の影が見える。ここは悪魔と墮天使の領域の境界線付近。

魔力も墮天使の技術も、どちらの影響下にもないこの地は、冥界本来の姿である地獄の様相を呈していた。

草一本生えぬ不毛の地に、様々な方向から乾ききった暴風が吹き荒

れる。その風は止むことなく、風に削られた岩が砂粒となって暴風のり、砂嵐が肌をこそげ肉を削り落とす。

地獄に落とされた亡者の一部は、再生する骨だけの姿となってこの地で永遠の苦痛に苛まれ続けるという。

ここはそんな場所だ。

「当主となるにあたって、妻をとれ……か。しかし、まさか彼女が……」

悪魔の建造技術で建てられた悪魔軍の基地。その城壁の上でデイハウザーは呟いた。

魔力を纏えば、砂嵐ぐらいはどうということもない。罪ある者に地獄の責め苦を与えるこの地も、悪魔ならば快適とは言い難くとも過ごすことに支障はない場所だ。

対峙する敵軍の将・バラキエルは今のところ攻め寄せてくる気配はない。

墮天使側としても悪魔によって略奪を受けているため軍を動かさなければならなかったのだろう、という政府の推測は間違っていないかったようだ。

墮天使に攻撃を加えているのは、内戦に敗れ辺境へと逃れた前魔王勢力の残党。墮天使側でもそう判断していると、政府は見えていた。

ただ、何もしないのでは墮天使の上層としては下の者に示しがない。そのためのバラキエルの出陣だったのだ。

これは悪魔側も同じこと。バラキエルが出てきているというのに、何の対処もしないということとは出来ない。

自分たちは略奪を行って物資を得、現悪魔政府と墮天使勢力の双方に消耗を強い、強者を辺境地域に張り付けにする。

開戦すれば双方に被害が発生して前魔王派の思うつぼ。開戦せずともこうして対陣しているだけで食料その他の物資を消耗していく。

これが前魔王血族の策だと分かっているのに、デイハウザー軍とバラキエル軍はこの地でただ睨み合っていた。

こんなことをして何になる。無意味だ。そんな想いを抱きながらも油断はできない。いつ墮天使側が態度を変えるか分からない

のだから。

そんな緊張感と、睨み合うだけで何も起きない状況。その中であつて、デイハウザーには戦以外の悩み事があつた。

当主の座を譲るにあたつて、嫁を取つて欲しい。

現当主である父からそう告げられたのだ。なぜかその気に成れずに独身のまま長いこと過ごして来たデイハウザーだが、ついにその時が来てしまったのだ。

本家当主ならば、跡継ぎを作る必要がある。それは分かっている。

貴族主義、純血主義の根強い大王派に属している以上、デイハウザーの妻となる女性は純血の上級悪魔しかあり得ない。それも分かっていたことだ。

「しかし、まさか彼女とは……」

デイハウザーは同じ言葉を繰り返した。

父から伝えられた結婚の相手は、かつてデイハウザーが学生時代を共に過ごした女性だった。母が手放した宝飾品を身に着けていた、あの同級生。

彼女はバアル家の分家の姫だ。そういえば、彼女もまだ結婚していなかったのかとデイハウザーは思い、すぐにそれは自分も同じだったことに気付いて苦笑い。

学生時代、デイハウザーは彼女が苦手だった。顔を合わせればいつも見下しながら小言を言ってくるような相手だったからだ。

それなのに何故か今も交流があつた。

デイハウザーがレーティングゲームで活躍し『皇帝』と呼ばれるようになる、昔とは接し方を変えた者が多かつた。その中で彼女の態度は、昔からずっと変わらなかつた。

相変わらず、デイハウザーに対して長々と苦言を呈してくる。その内容は、試合はもちろん、インタビューから雑誌の対談にまで及んでいた。

だからだろうか、交流が続いているのは。彼女とのやり取りは手紙だけだった。通信魔方陣を用いたことは無い。

もう長いこと顔も見えていないのに、今もあの頃の、あの口調のまま

なのだろうと想像だけは出来てしまう。

バアル家の、大王派の意向が存分に働いている縁組なのだろう。それを理解しながらも、デイハウザーはそう悪い気はしていなかった。

死者はかたる／大王の理屈

死人に口なし。人間の間では通用する言葉だが、超常・異形の存在の中にあつてはそれは正しくない。死人は語るのだ。

前世では、恐山のイタコなんて信じていなかった俺だが、悪魔に生まれ変わってからは本物もいるらしいと知った。

人間たちの想像によつて、あの世は創造され、実在するものとなったのだ。人々が死後の世界を信じる限り、人間の魂は生前関与した神話体系ごとの「あの世」に囚われる。

そして、とかく宗教において天国に相当する場所への門は狭い。そうでなければ、ありがたみがないからだ。

それ故、仏教徒の大半は地獄行きとなり、キリスト教徒のほとんども地獄に落ちる。人間は自分たちで自分たちを苦しめ苛む場所を発明してしまった。

天国や地獄を信じる人間にとつて死は始まりに過ぎない、永劫に等しい地獄の苦しみの始まりなのだ。

つまり、俺に言わせれば信心深い者の多くはMということだ。シスターや教会の戦士、巫女さんに会ったらサディスティックに責めていくのが概ね正解となるに違いない。

ちなみに、悪魔は地獄で苦しんだりはしない。悪魔だからな。

魔力の少ない者には厳しいだろうが、十分な魔力を持つ者であればレーティングゲームのフィールドを形成するようにして快適な住環境を整えることが可能だ。

ホント、悪魔に生まれて良かったと思うね。

ところで、我々悪魔が暮らす冥界は、「キリスト教圏」の地獄である。悪魔や「聖書の神」を裏切った墮天使の住処だ。

そして、生前キリスト教徒だった者の内、天国に行く資格のない者の魂は冥界へと落ちてくる。

キリスト教徒でありながら、欲望に負け理性を捨て、色欲の罪を犯した者もそういった地獄行きの魂の一つとなるだろう。地獄の最下層の名をコキユートスとした、『神曲・地獄篇』によれば肉欲の罪に

よって地獄に落ちた者は、止むことの無い風によって常に痛めつけられ続けるのだという。

たとえばそう、俺が今度縄張りとする駒王町の前任悪魔クレーリア・ベリアルと通じた教会の戦士などは、地獄の風に責め苛まれる場所にいるのではないだろうか。悪魔の女との愛欲に耽った罪によって。

ゼクラム祖父さんの城の一室に、上級悪魔の影がひとつ、ふたつ……5つ。

城主のゼクラム祖父さんに叔父上、俺とリュイ、それからベリアル卿が円形魔方阵を囲むように椅子を並べて座っている。

まだ会話は無い。

どっしりと落ち着いた様子の祖父さんは、さすがに年の功というベキか無言でも大物オーラを醸し出している。いつかは自然とこういう雰囲気纏えるようになりたいね。二千年ぐらい生きて俺もこなれるのだろうか。

叔父上がピリピリしているのはいつものことだ。ゼクラム祖父さんがいるので、普段会うときよりも畏まっている感じはするが。

俺とリュイは、まあそれなりだ。

レーティングゲームで慣らしたリュイでも、ゼクラム祖父さんの前ではやや緊張してしまいうらしい。これが権力者の威圧つものだろうか。

俺はちよつとばかり「神如き、魔王如き」なドライブ思考の影響があるんで、まあ、戦えば勝てるし？ 平気でしょ？ と気が抜けているかもしれない。

一番落ち着きの無いのがベリアル卿だ。無理もない。この中で一番魔力が小さいからな。戦闘も得意でないと聞いている。『皇帝』の父親と聞いてパツと思いきやぶようないメージはこのヒトにはない。

叔父上は母上の異母弟なので、魔力はそこそこある方だ。魔力が小さいとなめられ軽んじられやすいのが悪魔の社会、派閥のトップを務

めるにはそれなりの魔力が必要になる。

「今回こうして集まっていたのは、日本の駒王町、バアル家とグレモリー家が共同で統治してきた土地でかつて起きた事件についての再確認が目的です」

そんなバアル家現当主である叔父上がまず最初にそう告げると、どこか所在なさ気にしていたベリアル卿の顔つきが変わった。

彼は叔父上に向かって身を乗り出し、焦ったように声を上げる。

「お待ちください。あの一件は、秘匿すると……ッ！」

ふむ、ベリアル卿がここにおいて駒王町の事件と言えば、例の教会の戦士とガチ恋して処分されたと聞いたクレーリア・ベリアルのことだろう。

俺はどうにも彼女に敬意を抱けない。なので、かなり年上ではあるが、「姫」とか「嬢」とかを付けて呼ぶ気になれないのだ。

やらかして粛清された女だからな。

敵対する勢力に所属する男女の恋物語ってロマンチックではあるのだが、彼女のその行いのせいで縄張りの上書きだのなんだのとよく分からんことを言われてるってのもある。いや、それって俺に関係ないよねってさ。

ベリアル卿が慌てているのは、おおかた醜聞なので内々に処理したはずなのに俺やリュイがいる場で口に出されては約束が違うといったところだろうか。ベリアル家内部では、この件どういう扱いにしているかまでは知らないが。

「このリヴラクス・グレモリーは、今年から駒王町を縄張りとして運営することになっている。そのため、過去のいきさつについては説明済みだ」

叔父上の返答に、ベリアル卿はまず俺に目を向け、それからリュイに視線を移した。

「ベルフェゴール卿……いや、もう最上級悪魔のロイガン殿か。ロイガン殿は後ほどこの件に関わるところがあるので同席してもらっている」

ベリアル卿の視線に対して俺が何か言う前に、かぶせるように叔父

上がそう言った。余計な事をしゃべるなどという意思が感じられる。

俺は叔父上が好きではないが、ミスラさんを頂いて以来、叔父上には寛大に接しようと考えている。だからここは叔父上にお任せするとしようじゃないか。

バル家当主に対してなんとも上から目線だが、叔父上から第一夫人を頂戴した俺が勝者であり、持っていていかれた叔父上が敗者であることは明確なのでな。

これは勝利者の余裕なのだ。

ふふん、と余裕顔を浮かべるてみせると、叔父上は貴族御用達のポーカーフェイスを一瞬崩しかけるが、ぐつと持ち直して話を続けた。

ゼクラム祖父さんも含めて話しかける時は丁寧。それが叔父上クオリテイ。いつも通りの叔父上である。

「まずはベリアル家とリヴラクスに伝えたクレーリア・ベリアル粛清前の状況、そして彼女が犯した罪について説明させていただきます」叔父上が語ったのは、以前に祖父さんから聞かされたことと同じだったが、あるときより少しばかり詳しかった。

俺が独自に調べたことも織り込み済みのようだ。

まあ、正直記録をちよつと見ただけなのだが。

祖父さんから聞かされた時点である程度俺が確認することくらいは承知していたのだろう。政府にも影響力の強い大王派が本気で秘匿するつもりなら、記録の改ざん程度のこととは容易だっただろうからな。

あの時点まで父上も知らなかったことを考えると——もしかしたら、改ざんあるいはすり替えていた記録を元の物に戻したのかもしれない。

リュイから聞いた話と、レイヴェルの『僧侶』であり元7位の『番狂わせの魔術師』リュディガー・ローゼンクロイツが集めていた資料によると——

駒王町の前任者クレーリア・ベリアルは、『皇帝』デイハウザー・ベリアルの叔父の娘、従妹である。デイハウザー殿との年齢差は、俺と

ミリキヤス程度のもので、一族が近隣にまとまって暮らしているベリアル家の御家事情もあつて、本当の兄妹のようにして育ったそうさ。なんでもデイハウザー殿のことを「兄さま、兄さま」と呼んで慕っていたらしい。デイハウザー殿もそんなクレーリアのことを大層可愛がっていたそうさ。

その気持ちは、わかる。もしもミリキヤスが女の子だったなら、俺は滅茶苦茶可愛がって甘やかしたに違いない。いや、男の子だからっていびっているわけではないのだがな。

クレーリアは分家の娘なので、俺とミリキヤスみたいに後継問題とかもないわけなので、デイハウザー殿もそれはもう可愛がっていたことだろう。

そうして親類の中で可愛がられて育ったクレーリアだが、彼女は上級悪魔の子息・子女が通う名門学校には通えなかった。ベリアル家の財政は火の車で、クレーリアと歳の近い本家の嫡男デイハウザー殿を通わせるだけで精一杯だったらしい。

首都とアスタロト領、二つある貴族及び平民富裕層の子息・子女の通う名門学校は、最高水準の教育を施す学び舎であると同時に、社会に出た後に役立つコネ・ツテを作るための機関でもある。

俺やゼファードルのような魔王輩出名門本家の出であれば、向こうから寄ってくるので特に必要ない。

むしろウザくてかなわないらしい。

ソーナが前に「もう人間界の学校に通いたいぐらいだよお、助けてお兄ちゃん」といったようなことを言っていた気がする。口調は違うが内容は大体そんな感じ。

ディオドラも貴族女性に対してインポになっちゃってるし、学校って怖い。

だが、当時貧乏貴族と見下されていたベリアル家、それも分家のクレーリアにとってはこれは大変痛かったことだろう。

事実、彼女はその後長い間『縄張り』を得ることすら出来ていなかったようだ。クレーリアがバアル家を通して駒王町を縄張りとして借り受け、縄張り運営の経験を積むことが出来るようになったのは、従

兄のデイハウザー殿がレーティングゲームで活躍して立場と名声を確かなものとしてからになる。

これは通常の貴族の子供と比べると相当に遅い。

なにせ、クレーリアはこの時点ですでに成熟してからかなりの年数を経ている。普通ならば、俺のようにまだ未成熟な学習期間中から縄張りの運営を学んでいくのだから。

これはベリアル家に金も信用も無かったことと、彼女がツテを得られなかったことの双方が影響したものだろう。

デイハウザー殿の稼いだ富と名声によつて、クレーリアは我がグレモリー家と大王バアル家が古くから共同で管理してきた日本の土地・駒王町を縄張り運営の学習場所として一時的に借り受けることが出来たのだ。

これは時期的にはレイヴェルが幼稚舎に通い始めたころのことになる。

「縄張りを貸し与えてからしばらくの間、クレーリアの運営は順調なものだった。特別良かったわけではないが、悪くもなかった。普通に貴族としての教育を受けた者と変わらぬ営業成績を出していたのだ」
叔父上の言うところによれば、クレーリアの運営に関しては貸した側のバアル家からの指導・監視が入っていたという。これはデイハウザー殿はゲームに忙しく、ベリアル家は御家事情に余裕がなかったのだ、新体制後の縄張り運営についてのノウハウが不足していたためらしい。

まあ、前魔王さま方の旧政府と、兄上たちの新政府では人間に対するスタンスも違っているからな。それに、駒王町は現魔王派筆頭であるグレモリー家との共同管理地だ。大王派としては、その土地であり不甲斐ない真似はさせられなかったのだろう。

バアル家がそれだけ手間をかけたのは、大王派の最大戦力となつてきていた『皇帝』ベリアルと親しいクレーリアのことを重く見ていたところもあると思う。

「だが、クレーリアはそこで罪を犯した。大王派に属するベリアル家、『皇帝』となつたデイハウザーからの依頼だからと土地を貸し与えた

バアル家と、バアル家からの頼みだからと貸すことに同意したグレモリー家の顔に泥を塗ったのだ。よりもよつて教会側の戦士と通じてしまうなどと……」

叔父上が当主を務める大王バアル家、ルシファー輩出の名門にして叔父上の異母姉が当主夫人となつていているグレモリー家、失われた信用をこれから取り戻していこうとしているベリアル家、そしてクレーリアに縄張り運営の経験を積ませるために尽力したであろうデイハウザー殿。

そのすべての面子を潰し、唾を吐きかけるような暴挙。彼女は自身の立場をまったく理解していなかった。

——吐き捨てるように叔父上が続けると、ベリアル卿の顔が歪んだ。それは可愛がつっていた姪を悪しざまに言われたことによるものか、それとも当時ベリアル家が立たされた苦境を思い出しているものか。

「そのこと自体は、まだ咎めるほどのものではなかった。悪魔と人間が関係を持つなど、古来からそう珍しいことではなかったのね。一時の戯れとして付き合うだけであれば、構わなかった。相手が敵対する教会側の者だとしても、こちらへと引き込む、あるいは墮落させて傀儡とするためであれば問題は無かった」

顔を歪めたベリアル卿をなだめるように、ゼクラム祖父さんが叔父上の言葉に付けたした。そうしてから、俺の方へと視線を向けてくる。

「たとえば、リヴラクス『戦車』はバラキエルの娘。件の教会の戦士などよりもよほど影響が大きい。こちらは墮天使だが——教会の一戦士などより遥かに敵対勢力の中核に近いと言える。だが、我々はこのことを問題としてはいない」

俺は朱乃との子作りについて、下僕にしてからならば良いと父上から言われた。

俺が朱乃に入れ込んでいたことは父上も承知していただろうから、単に弄ぶだけでは済まないと判断してそう言われたとすれば……なるほどと今になって思うわけだ。

明確な敵対勢力出身者を真剣に自分のものにしたかったのであれば、『悪魔の駒』を使って転生悪魔に、下僕に変えてしまえば許されると。朱乃って墮天使のナンバー3くらいの位置にいるバラキエルの娘だからな。

天界・教会側でたとえと、四大天使のラファエルとかウリエルが人間との間に作った『奇跡の子』ぐらいの立場になる。

たしか、『奇跡の子』は教会ではかなり重要視されていて、枢機卿候補にすぐに挙げられると聞いたことがある。

まあ、天使と違って墮天使はもう墮天の心配がないので、子供をほいほい作れはするのだが……それでも朱乃と一介の教会戦士なら朱乃の方が重要度は上になるだろう。

教会の者を墮落させて傀儡にするってパターンは、身近なところにディオドラがいるので問題ないことも分かる。

アイツ、聖女やシスターを相当数墮としていいるからな。眷属にもしているし、人間のまま困ってもいるし、教会や墮天使組織に潜り込ませてもいる。

俺がその戦士よりも重要度の高い朱乃を自分のものにするのがオツケーで、ディオドラがその聖女・シスター趣味を満喫しまくっていてもオツケー。

ならば、どうしてクレériaはそうしなかったのだろうか。身振りで発言の許可を取った俺は、その疑問をそのまま口に出した。

「クレériaは、何故その教会の戦士に『悪魔の駒』を使わなかったのですか？」

真剣交際だったと聞いているので、ディオドラのようなパターンは出来なかつたとしても、眷属化はいけただろう。

本気で欲していたというのなら、その時点で駒に余裕がなかつたというのには『悪魔の駒』を使わなかつた理由にはならない。

従兄のデイハウザー殿やベリアル家の親族に頼れば、トレードで未使用の駒を確保することは可能だっただろうから。結束が固いと言われるベリアル一族だ。粛清されるよりはと、なんとか空いた駒を

工面したことだろう。

そんな俺の質問に、ベリアル卿は黙ったままだ。祖父さんも同様。「我々はそのようにしろと説得を試みた。特例を許すわけにはいかなかったからだ。だが、クレーリアはどうあってもそれを受け入れなかった。そのため、我々は教会側と手を組んでまでクレーリアと教会の戦士を引き離そうとしなければならなくなったのだ」

忌々し気な叔父上の声は、ベリアル卿に向けられていた。どういふ教育をしたのだと言いたげに見える。

「その後、クレーリアはさらに重大な罪を犯したのだが……」

ゼクラム祖父さんは動きかけたベリアル卿を身振りで制し、

「そのことに触れる前に、証人をここに召喚するでしょう——」

手のひらを床の円形魔方陣へと向けた。

するとそこに魔力が迸り、魔方陣の中に一体の骸骨が出現した。

「——八重垣^{やえがきまごおみ}正臣。これはクレーリアが道を違え、過ちに身を投じる

原因となった男の魂だよ」

この冥界は『キリスト教圏』の地獄である。天国に行けない罪人の魂は、冥界へと落ちてきて永劫の責め苦の中で過ごすことになるのだ。

悪魔であるクレーリアと通じた教会の戦士の魂には、なるほど地獄行きが相応しい。

「あの中から探し出したのですか……」

昔も今も、『キリスト教圏』の死者、信徒の魂の内、天国に行ける者などごくわずかだ。大半の者は地獄に落ちてくる。

そして、『聖書の神話』の地獄には救いがない。仏教のそれのように、刑期のようなものを終えれば生まれ変わってやり直せるなどということはないのだ。

そのため救われぬ咎人の魂は、年々この地獄に降り積もり続けている。減ることは無いので、人間界の人口と神話の影響範囲の拡大もあって増えていく一方だ。もうその数はとんでもないことになっている。

「手間はかかったがな」

俺が思わず漏らした感心の言葉に、叔父上はちよつとだけ誇らしげに答えを返した。

叔父上は指示を出したただけだろうに……などと口には出さない。

飛行機から砂漠に落とした砂金の粒を探す。それぐらいの苦労をしたらどう大王家の臣下には「お疲れ様でした!」としか言いようがないなこれは。

「オオオオオツオツ、グアアアアツ……!」

俺が叔父上とやり取りをしている間に、八重垣の魂が生前の姿を取り戻し始めた。骨の上に肉が付き、心臓から血管へと血が流れ込み、皮膚が形成されていく。

その工程ごとに激痛が彼を苛んでいるのだろう、しばらくの間、若い男の苦悶が室内に響いた。

地獄に落ちた魂は『聖書の神』の業によって拷問を受ける。それによつて苦しみ傷ついても、消滅することは許されず、痛みの中で再生して、また苦しみの淵へと放り込まれることになる。これが、神と天使が従わなかった人間へと与える残酷非情の刑罰だ。まあ、それを想像して、創造したのは人間なわけだが。

『……は……? ——ッ!』

やがて生前の姿を取り戻した八重垣は周囲を見渡すや警戒態勢をとった。まあ、意味はないが教会の戦士だったのならそうするだろう。

「ご機嫌いかがかな? 八重垣正臣」

死者の魂を召喚した祖父さんが、八重垣に声をかけた。

『悪魔……悪魔が僕にないをツ!』

うるたえる八重垣に、祖父さんは言い聞かせるようにして続ける。

「私はゼクラム・バアル。初代バアルだ。教会の戦士であつたなら、名を聞いたことくらいはあるだろう」

ゼクラム祖父さんは、聖書その他関連書籍でよく見かける「バアル」そのものだ。教会の戦士をやっていたのなら、それらの書物に目を通していないはずがない。

警戒姿勢のまま八重垣は目を大きく見開いた。

『バアル……あのバアルが……なぜ……』

そこから八重垣の混乱がおさまるまで、しばしの時間がかかった。その後、祖父さんが改めて何らかの術を行使すると、八重垣の瞳から光が失われ、こちらの質問に素直に答えるようになった。

人間の精神に干渉する悪魔の技だ。さすがにゼクラム祖父さんのそれは年季が違う。実にスマートだ。俺が同じことをやると、魔力任せの力尽くでねじ伏せる感じになるからな。

「ベリアル卿。この男がクレリアの過ちの原因となった者だ。何か聞きたいことがあれば訊ねてみなさい」

「は、はい。ゼクラムさま」

祖父さんに促されたベリアル卿は、八重垣に質問を重ねていく。

黙ってその応答を聞いていた俺の中に、徐々にこう苛々としたものが溜まっていった。ついと横を見れば、リュイも少しばかり不機嫌そうだ。

なんというかこの八重垣という男、微妙に煮え切らないとも言えはいいのだろうか。なんだろうなこれは……。

『僕は彼女を愛していた。彼女も僕を愛してくれた。種族が違っても愛し合えたんだ。愛していたんだ』

愛、愛、愛、愛、愛愛愛。八重垣の口から出てくるのはそればかりだ。具体的にどうしようとしていたのか、それがさっぱりない。

どうもこの八重垣は教会の戦士仲間によって殺されたらしい。「別れる」「忘れる」「そうすれば見逃してやれる」と彼は何度も説得を受けたが、それを受け入れられずに処分されたようだ。

八重垣にしろクレリアにしろ、その愛を貫くには力が足りなかった。大王家の粛清部隊を、教会の戦士団を退けるだけの武力を持っていなかった。

力が足りないのならば、頭を使わなければならない。

「教会が悪魔を受け入れることがない以上、彼がこちらに来るしかなかったでしょうに」

リュイがそうつぶやいた。天界・教会勢力が悪魔と通じた八重垣や

悪魔そのものであるクレーリアを受け入れることは無い。悪魔と見れば即殺しに来る戦士も多いと聞く。

追っ手を退け逃げ続けるだけの力が無く、教会側には行けない以上、八重垣が悪魔側に堕ちるしかこのふたりに道はなかったはずだ。

このことで、俺やリユイ以上に不快に思っているのはベリアル卿だろう。可愛い可愛い姪っ子を誑かした男が、未来について何のビジョンも持っていないかったわけだから。

まあ、俺としては、クレーリアの方が随分と年上なのだからそこは若い八重垣くんをリードしてあげたら良かったのにと思うのだが。

何にしても、俺は悪魔で祖父さんは悪魔の中の悪魔、叔父上は俺よりも悪魔で、リユイやベリアル卿も生粋の悪魔だ。教会の戦士の考えはよく分からないところがある。

八重垣は教会系の孤児院育ちで、物心ついたところから信仰の道にいたようなのでなおさらだ。初めて恋したのが教会の不倶戴天の敵である悪魔の女性でしたってわけで……。

悪魔思考を中心で考えると、なんでそんなことしたんだこの男と思えてくるわけだが、教会出身者には教会出身者なりの理屈があるのだろう。前世の人間時代を思い出してみても理解は出来ないが。なにぶん、なんちやって仏教&神道な家で育ったものだからな。

「もう良からう。八重垣正臣——」
パチンとゼクラム祖父さんが指を鳴らすと、八重垣の瞳に光が戻る。

「——どうやら、君はまだ『神』を信じているようだ」

祖父さんにそう言われた八重垣は、戸惑いながらも悲しそうな表情を浮かべた。

「お言葉ですが、ゼクラムさま。ここまでクレーリアを、悪魔を愛していると言った男が未だに『神』を信仰してなどいるはずが……」

恐る恐るとベリアル卿が祖父さんの言葉に首を振る。

「いや、この者からは信仰の匂いがする。『聖書の神』へ己を捧げようとする者特有の雰囲気があるのだよ。ふふ、私とかの『神』とは因縁が深くてね、口での説明は難しいがそういったものが分かるのだ。聖

書の神への背信行為をする者。聖書の神の信徒でありながら、異教の神の偶像へと祈りを捧げる者。ヤツが定めた戒律を破る者。そういった者の中には、罪の意識を感じながらも、深い信仰心を忘れずにいる者がいる。そういった者たちと同じ匂いが、この男から濃く漂っている」

ベリアル卿は表情の消えた顔を八重垣に向けた。

「では、クレériaは……」

「分かっていたのだろうか。この男が『神』を捨てられないことを。この男の精神が、『神』への信仰によって形作られていることを。そして……そんな男を無理に悪魔へと転生させては、その心が死んでしまうだろうことも。『神』に救いを求めながら、悪魔とも愛し合いたいとは……ふふ、人間とはなんとも業の深い存在だ」

『違うッ！ 僕は、僕は彼女を、クレériaを真剣に愛して……ッ！』
なおもクレériaへの愛を叫ぶ八重垣へと、ゼクラム祖父さんは手をかざす。

初代バアルの掌に、消滅魔力が収束する。魔力の量だけで言えば俺の方が遥かに勝るが、祖父さんの『滅び』の力は始まりのバアルだけあって非常に濃い。

「よいよい、これ以上言い募らずとも。矛盾を抱え、迷い惑う人間の在り方もまた我ら悪魔の好むところ。楽しませてくれた礼に『滅び』を与えよう。このまま未来永劫、地獄の苦しみを味わい続けるよりも、魂までも消え去った方が楽になろう」

『聖書の神話』において、人間の魂は不滅とされる。地獄に落ちて激痛の責めに遭い続けても、魂は滅びず永遠に苦しまねばならない。

ならば、そんな人の子の魂にバアルの『滅び』を与えることは、慈悲ともとれる。これ以上、苦しまずにすむのだから。

『お待ちくださいー！』

滅びが解き放たれようとする寸前、八重垣とゼクラム祖父さんの間に立ちふさがる影が現れた。それと同時に女の声があったが、もちろんリュイのものではない。

現れた女には実体がない。魂だけだ。そしてその女の顔は、男女の

違いはあるがどこかベリアル卿やデイハウザー殿に似たところがある。

「クレーリアっ！」

ベリアル卿の叫びが、俺にその女が何者なのかを教えてくれた。

『おじさまッ！　　お願いです。このヒトを、正臣を……ッ！』

残念ながら肉体がないが、ふむ、やはり純血悪魔だけあつて見目麗しい少女である。

幽霊、悪霊、怨霊。ときに人間の霊魂は生前に未練や執着した場所や人に憑りつき現世に留まることがある。駒王町をざつと見て回ったときにも、そういう霊をそこかしこで見かけたものだ。

我々、悪魔などの人外異形の超常存在の魂は人間よりもそういうことが発生し辛い。大抵は雲散霧消してしまう。

だが、何事にも例外はある。神々は信仰の力を蓄えれば蘇ると聞くと、しづとい邪龍などは肉体が減びて魂だけになっても意識を保ち続けいざ自力で復活するという。

「クレーリア・ベリアル。まだこの男の傍らに魂を残していたか」

叔父上がクレーリアの魂を睨みつける。

さて、このクレーリアは悪魔の霊魂なので、悪霊と呼ぶべきなのだろうか？

肅清の理由

『クレーリアー！ その姿は……なぜ、なぜ君まで……そんな……ッ！』
クレーリア・ベリアル。

従兄のデイハウザー殿と同じ灰色の髪に灰色の瞳、その身体つきは出るところは出て引つ込むところは引つ込んだ分かりやすい女の色彩を体現していた。

サイズ的にはセラフオルーさんくらいだろうか。悪くない。

悪くはないのだが、いかんせん既に彼女は死者だ。肉の身体がない。生前の姿を映した魂の形はそるものがあるが、亡霊らしく透けてしまっている。

あれでは女体に触れる愉しみも、子作り交尾の快感も得られはしないだろう。

『正臣……。私は……』

突然出てきたかと思えば、周囲を放置して二人の世界に突入した恋人たちの魂。その会話を聞いていると、どうやら八重垣の側はクレーリアの死を知らなかったらしい。

クレーリアと八重垣正臣は、それぞれバアル家の肅清部隊と教会戦士団によつて処分されたということなので、同時期に別の場所で殺されたのだろう。心中でも、手に手を取つての逃避行中に追つ手に襲撃されて……という形ではなかったのだな。

散々それぞれの所属勢力から警告を受けたらしいのに駒王町に留まっていたとすると、なんとも暢気なものだ。

『なぜだッ！ なぜクレーリアまで殺したッ！ バアルの悪魔どもッ！』

クレーリアから事情を聞かされ、怒りわめく八重垣。

彼は自身の死の瞬間、これで禁断の愛によつてクレーリアまでも害されることはなくなるだろうと考えていたようだ。自分の死がまつたくの無駄ではなかった、少なくともそれによつて愛する女だけは助かるはずだと、そう思っていたらしい。

「クレーリア・ベリアルは過ちに身を投じた。それはその女の死を

もってしか治めることのできないものであった。それだけのことで、教会の戦士よ」

『僕が、僕が死んだなら、もうクレーリアは……、彼女の命まで奪わなくとも良かったはずだ！』

憤怒の様相の八重垣に、叔父上は冷徹な瞳を向ける。

それは、俺に対するときのような何かしらの感情の籠った視線ではなかった。

「少々騒がしいか」

ゼクラム祖父さんが八重垣を指さすと、再び怒れる教会戦士の瞳から意志の光が消え失せ、場に静けさが戻る。

『正臣ー、伯父さま、正臣は……彼を……』

八重垣の魂が沈黙すると、クレーリアは継るように伯父であるベリアル卿へと目を向けた。

クレーリアはベリアル卿に言葉を重ねるが、その内容は感情的なものばかりで具体的に何をどうしたいのかが俺には分からなかった。

これについては、まあ無理もないのかもしれない。死後に悪霊と化してまで愛する男の傍にいたいと思う。それだけの執着を抱いているからこそ、今も魂が残っているのだろうから。

それだけの想い、深い感情がなければとうの昔に彼女の魂は消え去っていたことだろう。だから感情が先だってしまったって、言葉が上手く出てこないのだと思われる。

「クレーリア……」

ベリアル卿がそんな姪の魂に注ぐ眼差しは、憐憫の情に満ちていた。涙ぐんでさえいるように見える。

ここに叔父上やゼクラム祖父さんがいなければ、ベリアル卿は魂を留め置くための魔方陣の内へ踏み込むことさえしていたかもしれない。

俺にとつての「おじさま」は白けた様子でベリアル家の伯父と姪のやりとりを見ているバアル家当主殿になるわけだが、もし叔父上の前に俺が亡霊になって出てきたら、ペツと唾はかれそうだ。いや、そんなお行儀の悪いことはしないか。というか、俺ぐらいの魔力があれば

死んでもそのまま魂だけで活動できるかもしれん。

とりあえず、このクレériaには死してなお自身を維持し続けるだけの力がないようなので、このやり取りの間にも徐々に存在が薄れて行っている。こうして姿を現しているだけでも相当な消耗なのだろう。

愛という執着の対象であった八重垣の近くに来る限り長くいたければ、もっと慎ましく潜んでいなければならなかった。

まあ、その八重垣の魂がゼクラム祖父さんの『滅び』を受けそうになつたから出てきたわけなのだが。

「クレéria・ベリアル。それ以上の醜態を晒すようであれば、まずおまえを消し去ることになるぞ」

ベリアル卿に配慮してか、しばらく状況を見守っていた叔父上が上向かせた手のひらに『滅び』を乗せた。顔には出していないが、内心相当イライラしているのだと思う。

ゼクラム祖父さんの前だしな。進行役をやっている叔父上としては、恋人劇場や親族劇場をいつまでも展開されていては困るはずだ。これはたぶん脅しではない、クレériaが大人しくしなければ普通に消滅させるだろう。

それを見て取ったベリアル卿が、必死でクレériaをなだめて大人しくさせた。

愛は盲目、その上さらに感情がダイレクトに出してしまう魂状態というのは、なかなかどうして難しいものだ。

そう考えると、肉体を失った魂だけの状態でもドライブって落ち着いてるよな。伊達に赤き龍の帝王とか呼ばれているわけではないってことか。

というか、どうして俺はこの場に呼ばれたのやら……タイミング的に『王の駒』ならぬ『アドバンス・クラウン進士の冠』の件が関わっているのだろうけれど。バアル家がベリアル分家の娘を肅清したよってだけのことなら、俺って関係ないしな。

「ようやくか、これで話を続けられる。この張本人が出てくるのは想定外だったが、ある意味都合が良いとも言えるな」

ふうと一息つくくと、叔父上はベリアル卿に問いかけた。

「ベリアル卿は、アドバンスト・クラウンについてどこまで話を聞いているだろうか？」

俺はラティアから聞いたが、アジユカさまは大王派にも『王の駒』問題の落しどころとしてのアドバンスト・クラウンの話を伝えていたのだろう。ぶっちゃけ呼び方を変えて、あとは「秘匿軍事技術の試験運用だった」ということにはただけだ。

少なくとも大王派のパーティー会場に俺が顔を出した時点で叔父上は知っていたし、利害関係のある連中にも説明がされている様子だったのだが。

「はい、私の聞いたところでは——」

アドバンスト・クラウンとは、『悪魔の駒』を製作したアジユカ・ベルズブさまが現悪魔勢力存続のために上級悪魔をさらに強くできないかと考えて試作した強化アイテムである。その強化率は使用者の全能力を10倍から100倍ほどにまで引き上げる。

アドバンスト・クラウンは、製作者が同じで一部の術式が共通している『悪魔の駒』と併用した場合にエラーを起こす危険がある。

アドバンスト・クラウンは、突出した力の持ち主が使用した場合に力のオーバードローを起す危険もある。

このエラーやオーバードローが生じた場合、命の保証は出来ず、死なずとも深刻な後遺症が残る可能性が高い。

アジユカさまは、それらの危険を承知で悪魔の未来のために名乗り出た一部の勇士にアドバンスト・クラウンを使用し、レーティングゲームを通して試験的な運用を行いデータを収集していた。

このことは他勢力への情報流出を避けるためもあり、現在まで重要な軍事機密として秘匿されてきた。

「ですが、その被験者のひとりであるロイガン殿がリヴラクス殿の『騎士』になることを強く望まれ、さらに昨今の情勢もあつて公表されることになった、と聞いております」

リユイことロイガン・ベルフェゴールは、アドバンスト・クラウンの使用者の一人である。彼女の現在の實力、特に周囲からも保有量を

測りやすい魔力はこれによって大幅に強化されている。

彼女が俺の騎士になろうとすれば、アドバンスト・クラウンを摘出する必要がある。『悪魔の駒』とアドバンスト・クラウンの同時使用は深刻なエラーを引き起こす可能性が高いからだ。

そうなるならキング2位で有名なロイガンの魔力が急激に低下することになってしまう。『騎士』とはいえ『悪魔の駒』の恩恵を受けたのなら魔力が上がることはあっても下がることはないはずなのに……だ。

アドバンスト・クラウンを機密情報としたままでは、急激に魔力が低下した理由を説明することが出来ない。

折しも旧政府残党の活動活発化、それに影響された墮天使勢力の軍事的な圧力が迫っていたこともあり、アジュカさまはアドバンスト・クラウンの公表を決断された。

相手が見積もっているよりも、こつちにはより強い力があるんだぞ！ その気になれば最上級悪魔クラス、魔王クラスを量産できるんだ！ と現悪魔政府の軍事力を示すことで旧政府残党や墮天使側に戦争を思い止まらせようとして。

とまあ、こういうシナリオだ。

ちなみに兄上は公表反対らしいのだが、最大派閥の大王派と、第三派閥の現ベルゼブ派が同意すれば現ルシファー派だけでは抑えきれないので、叔父上がゴーサインを出せば公表決定である。

流れるにもう公表決定になりそうなので、ここでクレーリアや八重垣に聞かせちゃっても構わないわけだ。まあ、叔父上としてはこの後に消滅させるつもりなのかもしれないが。

八重垣はどうでもいいとして、クレーリアはちよつともったいない気もするが……魂だけで肉体ないからなあ。

「私が若さま……リヴラクスさまの下へと行きたかった。ただ、それだけのことだったのですけれど……大事になってしまって。お騒がせしております」

リュイの話のさらに元をたどると、父上が俺の「おせっせ先生」を募集したからこうなったわけで、因果とはなんとも不思議なものであ

る。

これも『お宝』との縁を繋いでくれるグレモリーの魔力特性によるものなのだろうか。改めてスゲーなグレモリー、因果律への干渉つて。……まあ、多くの神話に因果をいじれる運命神がいるんだだけさ。

『ロイガンさま。アドバンスト・クラウン……それは『王』^{キング}の駒のことですか？』

「アドバンスト・クラウンが正式名称よ、クレーリア。ゴシップ誌の記者たちは『王』の駒と名付けておもしろおかしく書き立てていたけれどね」

リュイとクレーリアは世代が近い。さらにデイハウザー殿とも長年のライバルだったので、面識があるようだ。

クレーリアとしては、面識のない俺やゼクラム祖父さん、いかにも怖そうな叔父上よりも話しやすい相手なのだろう。

「さて、これでようやく本題に取り掛かれる。実は本日ベリアル卿に来てもらったのは、クレーリアの真の粛清理由を伝えるためだ。これまではアドバンスト・クラウンが機密情報であったため、伝えるわけにはいかなかったのね」

叔父上の言い方だと、クレーリアは教会戦士とのガチ恋ではなく、アドバンスト・クラウン絡みの何かで粛清されたように聞こえるな。「どういうことでしょうか、バアル卿。私は、クレーリアは教会の者、この八重垣との許されぬ関係のために粛清されたと聞いていたのですが……」

ベリアル卿も俺と同じように考えたのだろう。叔父上へと問いかけながらも、リュイと八重垣との間で視線を彷徨わせている。

「さきほどの繰り返しになるが、たとえ敵対勢力に縁深い者であろうとも『悪魔の駒』によって眷属、下僕としたならば受け入れる。それが現在の我々の在り方だ。リヴラクス『戦車』のようにな」

叔父上が言っているのは朱乃のことだ。墮天使幹部バラキエルの娘でも、転生悪魔にしてしまえば愛でまくってオツケー。それはさつき確認したところだ。

「ならば、何も貴重な数少ない純血悪魔であるクレーリアまでも殺す必要はない。過ちを正すだけならば、その教会の戦士だけを殺してクレーリアの前に転がしてやればいい。そうすれば、その男に『悪魔の駒』を使うことを躊躇いはしなかっただろう」

叔父上のセリフの後半は、クレーリアへと向けられていた。

たしかに、愛する男の死体を死にたてホヤホヤの状態で目の前に転がされたなら、クレーリアは八重垣を否応なしに転生させただろう。『悪魔の駒』による転生には、死を覆す効力があるのだから。

『悪魔の駒』を埋め込むのに、眷属となる者本人の同意は必要ない。無理矢理に下僕にされた転生者が主の下から逃げ出し、「はぐれ」化するなんてのはよく聞く話。俺はやらないが、可能ではあるのだ。

『それは……はい。では、なぜ私は……殺されたのですか？』

強引にでもクレーリアに『悪魔の駒』を使わせる。それで過ちを正すことは出来たのだ。形だけだが一応はなんとかできた。

その後八重垣が「はぐれ」るなり教会と内通するなりしたなら別だが、主がクレーリアであればそのまま下僕の身に留まった可能性は高かっただろう。

教会側から嚴重抗議必至な行為だが、デリオドラはよく攫ってきてるしな。

ああもう少し考えれば、八重垣をクレーリアの下僕にする必要すらないのか。叔父上は口にはしていないが、八重垣を無理矢理大王派の誰かの下僕にしてしまっても良かったのだ。

むしろ、その方がお年寄り方には都合が良かったのかもしれないくらいだ。

デイハウザー殿はクレーリアを大層可愛がっていた。そして、クレーリアは八重垣を愛していた。

その八重垣の身柄を抑えてしまえば、間接的にデイハウザー殿への影響力を持つことさえ可能だ。八重垣を人質にクレーリアを動かすことで、デイハウザー殿に働きかけてゲームの勝敗操作に巻き込むことさえ出来たかもしれない。可愛い従妹の大事な恋人を痛めつけられたくなければ……くらいのは、古き邪なる悪魔ならやるだろ

う。

いや、デイハウザー殿に恨まれるリスクを考えたらやらないかな？

「アドバンスト・クラウン、当時のお前の認識では『王』の駒か。お前はそれを探っていただろう。そのときのお前の行動、それが問題だったのだ。ああ、大問題だった。……ベリアル卿が勘違いしないように言っておくが、お前がトップランカーの過去を探った程度のことはどうでも良かったのだ。そんなものは、記者どももやっていることだ。素人のお前よりもずっと長く探り続け、より深く調査を進めていた者もいた」

その程度の者をいちいち処理したりはしていない——叔父上はそう続けた。

探ろうとすればある程度までは誰でも可能なことだったからだ、と。

まあ、リュイの弱かった頃の記録をどうこうしたところで、その当時からレーティングゲームファンなら記憶に残しているだろうしな。

レーティングゲームの視聴者・観客がどれだけいるかってことを考えると、過去の戦績・試合内容を知る者を全て消すなんてことは、いくら大王派でも無理だろうな。

貧乏貴族なベリアル家のクレリアには、自由にできる金もなければ、名門学校で得られるようなコネもない。叔父上の言うように雑誌記者の方が調査能力は上だろう。

「ロイガン殿に聞きたいが、レーティングゲームのプレイヤーは対戦相手の調査をしないのだろうか？」

「当然ですね。上位陣の過去の試合データや判断の傾向は、眷属のものも含めてほぼ記憶しています。リュディガー・ローゼンクロイツでしたら、家族や友人関係、生まれ育ち、現在の生活の状況までも詳しく調べ上げていたでしょう」

そういえばローゼンクロイツを引き抜いた時に、滅茶苦茶大量の資料がついてきたな。

アイツ、相手の弱みを探るためなら捕まるスレスレのところまで調べ上げていたようだし。

今回の事があったのでデイハウザー殿の分だけでもザッと目を通して思ったのだが、まだ100分の1も読んでいない。いや、男の好物料理の情報とかいらんし……。デイハウザー殿の愛用している下着メーカーの名前まで調べてそうなんだよな、ローゼンクロイツつて。

「クレリア・ベリアル。なぜ粛清されたのかと聞いたな？ お前は越えてはならん線を越えてしまったのだよ。選手たちの過去を調べる程度は構わなかった。素人の小娘ひとりで調べられることなどたかが知れている。それを専門としている平民どもにも劣るだろう。ロイガン殿にも答えてもらったように、選手たちもそれぞれ対戦相手のことを調べている。お前が調べた程度のことを知る者はいくらでもいたのだ。……ここまで言えば、何が問題となったのか分かるはずだ」

『ベルゼブブさまの……』

クレリアの答えに、叔父上はわざとらしく大きなため息を吐いた。そしてベリアル卿へと顔を向ける。

「ベリアル卿。この者は縄張りとして貸し与えた地の近隣にあるアジュカ殿……ベルゼブブさまの施設に侵入し、何らかの情報を盗み出したのですよ。これが粛清にたる十分な理由であることは、ベリアル卿には理解できるはずだ」

片手を顔に当て、ベリアル卿は天を仰いだ。

「クレリア……お前は、なんとということ……」

『おじさま、私は、デイハウザー兄さまが悪く言われていたから、どうにかできないかと思って』

うん、それでアジュカさまの施設に無断侵入して情報の窃盗か。それはもう、どうしようもないな。悪く言われたからって、やっていいことではない。

「叔父上、それは……その、この男、八重垣との件の最中のことでしよるか？」

なんというか、もう大体わかってきたが、一応確認しておきたいところだ。

「そうだ。この女は、教会の戦士と通じている状況で、悪魔の機密情報を探り、魔王の隠れ家にまで侵入したのだ。大王派のベリアル家の娘が、グレモリーとベリアルから土地を借りている状態で、教会と通じながら、ベルゼブブ派トップの施設にな！」

本人たちがどう思っていたのか知らないが、傍から見たら完全にハニートラップな状況ですね。

敵対勢力の男に色恋で惑わされた女が、自身の所属する勢力の情報を探ってまわり、技術担当の魔王の施設に入り込んだ……うん、もう、そりゃ、そうなる。

叔父上の目も吊り上がるってものだ。思い出ただけで、腹が立って仕方がないのだろう。

表沙汰になった場合、どうなっていたんだろうなコレ。

アジユカさまとしては抗議するしかないが、それはそれとして侵入されてしまったということでも面子も潰れる。

グレモリー的にも土地を貸した者のやらかしだ、良いことなんてない。

バアル家は言うまでもなく。ベリアル家は御家が残っただろうか……少なくとも信用はゼロを下回ってマイナスに行きそうだな。

その上、クレーリアが証言台にでも立って今のように「デイハウザー兄さまのためにやりました」なんて口にしようものなら、『皇帝』の立場はない。引退も十分にあり得る。

そうなったら、デイハウザー殿でもっているベリアル家完全終了のお知らせだ。

「教会の者たちは、ときに『色』を用いることがある。教義を曲げてでも『神』に尽くそうとしてね。悪魔は人間を惑わし弄ぶ側でなければならん」

祖父さん、それ俺に言ってますか？ いや、女好きと言われていたが、さすがにここまでのはやらかさない……はず。

うん、教会女には気を付けないとな、ホント。骨抜きにするのはい

いが、こっちの骨が抜かれたら洒落にならん。

「ベリアル卿。アドバンスト・クラウンが公表された後ならば、このことを『皇帝』に伝えてもらって構わない」

叔父上からそう言われたベリアル卿は、頭が膝に付きそうなほどに背を曲げ、

「分かり……ました。デイハウザーには、よく言い聞かせます。クレーリアが犯した罪の事を……」

腹から絞り出すようにそう答えた。

魂の牢獄／肉の器

『サーゼクス・ルシファアにはチンコがない』

いっとうにひさんぎししょうせい
一盗二婢三妓四妾五妻という言葉がある。ヤルことをヤルときの男の興奮度合いを表すとされる言葉だ。

この言葉が正しいとすると、男が一等興奮するのは他の男から女を盗むときということになる。

『いきなりなんだ、兄弟』

以前、この一盗うんぬんについてドライグと語り合ったようなおぼろげな記憶があるのだが、俺が勝手に脳内で思考をぶん回していただけだったような気もする。

まあ、どつちにしろドライグにはそんな俺の思考も筒抜けだったに違いないので、語り合っていたようなものだ。

ドライグは黙って聞く係。

エロ話には様々なジャンルがあるが、その中にNTRと呼ばれるものがある。これがつまり一等賞の一盗に該当するのではないだろうか。

さて、このNTRだが、俺は盗る方は好きだが、盗られる方の立場で観るのは嫌いだ。まあ、脳内変換で立ち位置を変えてやれば楽しめなくはないのだが。

俺の好む快樂墮ちの要素も多分に含んでいるのがこのNTR系列の特徴だ。

それでだ、このNTR物では「ああつ、あのヒトじや届かないところに……」「す、すごい……こんなの初めてえ」みたいな感じの表現が多い気がする。

つまり盗る側の男が、盗られる側の男よりもエロス面で上であることが多いのだ。ま、単純に夫よりも若いってだけのこともあるが、何にしろ快樂において優れている必要があるのだ。老練な腰遣いで、若い男から若妻を寝取るおっさんってのもあるか……奥が深い。

それでまあ、義姉上にギンギンとしてみまう俺はときどき考えてしまふのだ。兄上は一体どんなエッチをしているのだろうか……と。

兄と弟どちらがより深く義姉上を肉悦の淵に沈められるか。それによつて、継続的な義姉上ツクスを得られるかどうかが決まると言つても過言ではない。一度ぐらいならば勢いでつてこともあるかもしれない。義姉上つて割と無防備に俺に誘惑仕掛けてくるからな……お風呂とかさあ。当たつてたしプニプニつて。

一夜の過ちは有り得る。というか有りにする。

だが、そこから二度三度と関係が続き、いずれはジユブジユブツとした関係へと発展していきたいわけで、そうなるとやはり兄上に対して圧倒的な差を付けねばならないと思うのだ。

「もう、サーゼクスとでは満足できないの……抱いて♡」とか言わせてみたい。

そのためには自身の向上に励むのはもちろんだが、兄上の弱みも探らなければならぬだろう。兄上には出来ず、俺ならば出来ること。そういう強みが必要だ。

そうやってうんうんと考えていたときに思ったのだ——『兄上には本物チンコがない』のではないかと、と。

肉棒どころか玉もなければ脳もない。血も涙もない魔王。

それが我が兄、サーゼクス・ルシファー。

なぜそう言えるのかというと、滅びのオーラの凝縮体、人型に浮かび上がる消滅魔力の化身というのが兄上の真実の姿だからである。

滅びのオーラの塊なのだから、肉の身体なんて一欠片だってありはしないはずだ。

ふむ……しかし俺は兄上を兄と認識していて、兄上も男性的な意識で過ごしているようなのだが……実際のところ兄上には性別があるのだろうか？

竿もなければ穴もないとすると、実は兄上は無性な存在なのではないかという疑惑も浮上してくる。

精霊に近い感じだろうか？ ウンディーネとかシルフとかよりも、もっと根源的な元素に近いような感じの。兄上つて、『滅び』の魔精霊的な存在なのかもしれない。

うむ、戦闘能力は非常に高そうだ……生物的な弱点が一切なさそう

な感じがする。心臓もないだろうしな。

まあ、俺はバトル大好きドライブとは違うので、兄上の戦闘能力の話は置いておこう。重要なのはエロ面だ。

エロ的には本物の肉体が無いってのはどうなのだろう？

情や愛はあるかもしれないが、肉がないってことは肉欲もないのでは……？

こう「玉袋がパンパンだ。お前のメイド姿を見てみると、ちんちんがイライラして仕方がないんだよ、グレイフィアああ!!」みたいなことはなさそうな気がするな、兄上って。

俺はよくもう辛抱たまらんってレイヴェルに襲い掛かっているが……ああいうときのレイヴェルってすごく嬉しそうなんだよなあ。

そうすると……ふむ、これは付け入る隙なのではないだろうか。

上手く言葉には出来ないが、なんとというか兄上ってそういう獣欲めいたものが足りてない気がするしな。こう、ちよつと淡泊そうなイメージがある。

いや、兄夫婦のベッドシーンとか覗き見たことないけどさ。俺とレイヴェルの初夜を覗いていた、どこぞのスケベ親父と違って。

だが、しかし、うむ……ありえるのか？　これがもしや、義姉上攻略の糸口か？　肉欲のジャガーノート・ドライブ的な感じで……？

うむ、うむうむ……燃えるな。

『……なあ、兄弟』

『しかし、肉棒なしにどうやってミリキヤスをこしらえたのだ兄上は……肉棒がないのに。いや、普通に考えたら普段暮し用の姿であるところの人間男性形態でヤルことヤツて作ったのだろうけれど。つまり兄上は……』

『なあ、兄弟。俺は早く神器から解放されたくて仕方がないんだが……』

『まあ、しばらくは付き合えよ兄弟』

『オオオオオン!』

昨日も今日も明日も明後日も、ドライブは内部から神器の構造を調べるのに熱心だ。実に働き者のドラゴンであると言えよう。どこぞ

の終始眠りこけているという龍王とは大違いだ。



この世界では、『死』は絶対の終わりではない。『滅び』さえしなければ、まだ魂が残る。

人間の魂は、宗教ごとの「あの世」である地獄や天国に囚われ、あるいは生まれ変わって次の生を過ごす。

人外異形、超常の存在にとっても『死』は絶対の終わりではない。『滅び』るまでは人間界、神話世界を含めた大きな意味での『世界』に魂が残存する。

神々は死しても信仰の力を得れば蘇り、しぶとく力ある者もまた魂のみで長く世界に留まり場合によっては力を溜め込み復活する。

だが、強大な存在や、信仰されていた神々であっても帰ってこられなくなるケースもまた多い。それは神も魔も結局は『夢幻』の住人に過ぎないからだ。

神々の信仰などが分かりやすいが、超常存在の力の源は人間の精神エネルギーである。神は死しても信仰の力を得ることで蘇るということは、逆に言えば信仰を得られなければ蘇ることが出来ず、やがて消滅してしまうということだ。

俺は今のところ、忘れられた神話の忘れられた神や魔物が復活したと言う話を聞いたことがない。『死』の向こうから帰って来たという例は、だいたい現代にあっても人間に名を知られている存在のものばかりだ。

仮にインドラ神が死亡しても、各地で信仰を受けているから復活してくるだろう。だが、もう誰も覚えている者のいない太古の神話の神々は帰って来ないのだ。

そうやって考えると、神や悪魔、龍などの人外異形の存在にとって

の本当の『終わり』とは、人間たちから忘れ去られることなのかもしれない。

儂い人の夢や幻から生まれ出でた存在は、人の夢や幻に登場しなくなった時点で終わってしまう儂い存在でもあるのだ。

つまり、有名なヤツほどその魂が残りやすく蘇りやすい、逆に有象無象のモブ魂はあっさり滅ぶ。

ということは、だ。兄上やセラフォルーさんに名前を襲名されてしまった前四大魔王さま方。彼らがそれなりに有名で強かったはずなのに復活してこないのは、人間の精神エネルギーを兄上たちに持つていかれているせいなのかもしれないな。

さらにそこから考えると、人間たちが名前を忘れてしまった『聖書の神』なんかも、一回死んだらそれで終わりって可能性がある。うむ、そうだといいなあ。

我ら悪魔と『神』は敵同士なので、いずれは戦うことになるだろう。そのときに何度殺してもお得意の復活を繰り返して来たりしたらたまったものではない。それがうっかり名前を亡くしたせいで一発終了してくればこんな楽なことは無いってものだ。不死身を忘れたフェニックスと戦うようなものだ。

まあ、そうなたらそうなたで、行き場を失った人間たちの信仰エネルギーがどこに向かうのか不明になるので、怖いと言えば怖いのだが。

というか『聖書の神』って偶像もないから、人間たちがイメージする一定の姿もないんだよな。名前も形も不明ってことになるわけだから、信仰エネルギーが集束できずに分散しちゃいそうだな。ある人は『聖書の神』を白髪で長い顎髭の老人のようにイメージしているかもしれないし、また別のロリコンは黒髪ロングなロリ美少女としてイメージしているかもしれないわけだ。信者の数だけイメージされている姿がありそう。

ま、『名を失った神』とか『形のない神』ってフレーズには、前世の中学生頃に芽生えた意識をくすぐってくるものがあることは否定できない。

名前にこだわる悪魔から見ても、それが微妙にカツコよく思えるのが悔しい。「我々は他とは違うんだぜ、特別なんだ」みたいなものを感じちゃう。ビクビク。

「旦那さま、なにか考え事ですか？」

レイヴェルの太ももに後頭部を預け、事後の余韻に浸りながら思考を彷徨わせているとうちの嫁さんの声の上から振って来た。

ゼクラム祖父さんの城での話し合いが終わり、家に帰って来た俺は無性にレイヴェルとやりたい気分だった。

なので、帰るなりとつ捕まえて寝室に引きずり込み、欲望の赴くままに一回戦・二回戦と楽しんだのである。

話の中で何度か名前が出ていた朱乃を俺の好み優先でイチラブに抱いても良かったし、一日一緒に行動していたリュイと……というのも捨てがたいところがあつたのだが、でもなんだか今日はどうにもレイヴェルな気分だったのだ。

今後もこういう日があることを考えると、レイヴェルが我が家とフェニツクス家を行ったり来たりするようにしたことをちよつと後悔してしまうな。

「んー、コレをどうしたものかと思つてた」

言いながら俺は亜空間から宝玉を取り出し、レイヴェルに手渡した。

「亡くなられたクレーリア・ベリアルさまの魂を封じた宝玉ですか」

「ああ、くれるっていうからもらってきたが、あの男のこともあるからなあ」

叔父上からクレーリア粛清の理由が語られた後、クレーリアの魂をどうするのかという話になった。クレーリアの力は大了なものではなく、また人間から広く『ベリアル』として認知されているような存在でもないため、放っておけばクレーリアの魂は遠からず消滅してしまう。

それはクレーリアがもはや死者であり、彼女に定めを覆すほどの要素がない以上自然な流れというものだ。なので、まあそのまま放っておいても良かった。もう政府が管理している悪魔の登録情報でも死

亡とされているわけだしな。

ただ、消えゆくクレーリアの魂をベリアル卿は惜しんだ。どうにかならないだろうか和祖父さんに懇願した。

可愛いがつっていた姪を肅清され、しかしそれがベリアル家と息子のデイハウザーのためでもあったと説明されたベリアル卿の心の中は俺には計り知れないものがあつたのだと思う。せめて、姪の魂だけでも長く……とでも考えたのだろうか。

「魔物封印型の神器の一部パーツは、魂を封じる器としての適性が高いとは何かの資料で見かけた覚えがありましたけれど……。まさかベリアル家の方の魂を持ち帰っていらっしやるとは思いませんでしたわ」

そのベリアル卿の願い、欲と望みを聞いたゼクラム祖父さんは、手前は二つがあると答えた。

一つは完全な封印。これは厳重な術式を幾層にも重ね、残されたエネルギーの散逸を防ぐというものだ。その場合、クレーリアの意識も思考も感情も動かなくなるので、ただ魂がそこにあるというだけで居てもいなくても変わらないようなものになっただろう。ついでに言えば、これだとベリアル家の面々が封じられたクレーリアに会うことも出来ないらしい。

ベリアル家にはない、初代が未だ残るバル家の術式によるものなので、家の秘伝を公開することは出来ないって話だった。

二つ目の方法は、俺の神器に取り込むという方法。『赤龍帝の籠手』の禁手状態になった際の装束のあちこちに生じる宝玉は、魂を保管するための入れ物として都合の良い代物らしく、それに封じ込めておけば術式のみで封印するよりはクレーリアの思考や感情をそのまま残しておきやすいのだから。そんな説明を受けた。

あと今後、祖父さんからの授業内容に魂の取り扱いに関するものが加わるらしい。魂を抜き出したり、弄り回したりとか、悪魔っぽくてよいね。よいよい。

「どうしようかと考えたんだが、ベリアル卿から頼まれたのと、まあ俺の禁手の性質を考えると悪くはないかと思つてな」

レイヴェルに事情を説明する許可は取って来た。『女王』であり、第一夫人となるレイヴェルに話しておかないと、いろいろと俺が面倒だ。隠し事をしながら生きていくのは大変だからな。話せることは話して、精神的にスツキリしておきたい。

「『無価値』の特性でしようか？」

「ああ、デイハウザー殿の活躍は、魔力やその他の基礎的な能力の高さもあるが『無価値』の存在も大きい。ものにも出来るなら手に入れておきたいところだ」

ベリアル家の魔力特性『無価値』は非常に強力な特性だ。ただし、これは強者が持つてこそその真価を発揮する特性でもある。

弱い者が『無価値』を所持していても、普通に実力で黙らされてしまうからだ。

逆に『無価値』を持つ強者、デイハウザー殿は強い。格下が特殊能力による一発逆転を狙っても無効化してしまえるので、実力差通りの順当な結果を得やすいのだ。

「たしかに、『無価値』の特性は神器の効果も消せますから……旦那さまのためにありますね。『白龍皇の光翼』（デイバイン・デイバイング）対策として大変有効ですわ」

やっぱりレイヴェルは話が早くて良い。

美形で可愛げがあつて、賢く機転が利き、自分の立場と力を弁えて行動し、それでいて可能と判断すればときに大胆な判断も下すことが出来る。俺の苦手なことを引き受けてくれ、悩み事の相談にも付き合つて一緒に考えて支えてくれる。金も稼げれば、コネもツテも豊富。

それだけでも十分過ぎるといふのに、そこからさらに将来のために出来ることを増やそうともしてくれているのだ。

俺のハーレム願望にも理解があつて、運営に協力してくれもする。といつて、俺が他の女とよろしくしているのが気にならないわけではなく、焼きもちを焼いて好き好きアピールも欠かさない可愛さ。

こんな女が傍に居てくれるつてのは、実にありがたいことだ。父上は本当に良い相手との婚約を用意してくださった。ありがたい、あり

がたい。

「ただな、俺はレイヴエルみたいな女が好きなんだ。クレリアのやったことを考えると、眷属化するには不安がある」

言いながら顔の向きを彼女の腹の方へと向けると、割れ目から垂れ落ちる白濁が目に入った。俺がさつき注ぎ込んだものだ。なんともエロい光景だ。好みの女に存分に種付けしてやったぜ、と思うとぐつぐつとくるものがある。

思わず俺の手でみっちり開発した彼女のお腹を撫でまわしたくなるが、ここはちよいと我慢してつつくくらいにしておこう。

「んっ……。それで、どうなさるのですか？」

くすぐったそうに、でも気持ちよさそうにしながら、レイヴエルは両手に持った宝玉をしげしげと見つめている。

「祖父さん……ゼクラムさまの話では、それに封じておけばかなり長く魂を保存できるらしい。ドライグに聞いてみたら、たぶん宝玉を介して神器の内部に取り込むことも可能だろうって話だ」

神器の中には内部に潜ることの可能な物がある。『赤龍帝の籠手』もそういったものの一つだ。

俺は歴代の中で、一番余裕があり、素の力と環境に恵まれた所有者だ。先代までの他の連中は、神器が顕現するとすぐに争いに巻き込まれ実戦の中で過ごすことになっていったらしい。

そいつらと比べると、俺は禁手についてゆつくりと考え自分の意志を反映させることが出来たし、『赤龍帝の籠手』の内部をよくよく観察することも出来た。

強大な悪魔としての力。グレモリー家という悪魔社会でも有数の家。魔王サーゼクス・ルシファアの実弟という立ち位置。それらが俺に余裕を与えてくれているのだ。

そんなわけで、俺は歴代の中でもかなり神器に『潜って』いる方になる。命がけだった連中よりも真剣さは足りなかっただろうが、その代わりに時間だけは多く有ったのだ。

で、潜ってみると神器の中には歴代の所有者たちの残留思念が溜まっている箇所があったわけのだが、俺はいた連中に『滅び』をく

れてやった。魂とも呼べない怨念のような精神の欠片たちは、それによつて消え去つたワケだ。

だが、その空間、歴代の精神の欠片が巣食っていた場所はまだ存在している。そこに宝玉に閉じ込めたクレーリアの魂を送り込んでしまおうって寸法よ。

ドライグが言うことよると、あの場に溜まっていた歴代の遺志も劣化はしていたらしい。最初は思考があつたのに、徐々にそれが失われ、怨嗟の言葉を吐くだけのものになつてしまつていたそうさ。

クレーリアの魂にしても、単に放り込んだだけでは、そうなつて行くことだろう。

「だが、俺には黒歌がいるからな」

「黒歌さん……仙術ですか？」

「ああ、それから猫？は火車とも縁深いらしいからな。死者の魂の扱いに関する能力もある」

火車は死者の魂をあの世界に誘う妖怪で、猫又（猫？）のもうひとつの姿とも言われているそうさ。命を操る仙術と、死者の魂に干渉する能力。

これらを組み合わせれば、まあ、俺の有り余るエネルギーを送り込んでやることもできるだろう。死者の魂の寿命を延ばすとか……なんだか変な感じもするが、物語とかで魔王復活のためにエネルギーを送り込む話とかもあることだし、イメージすれば行けるだろう。魔力はイメージ。黒歌式のなんか気持ちいいマツサージ的なアレと組み合わせればいけるいける。

魔力を混ぜ合わせるのは、黒歌が来る前から出来てたし。レイヴェルとやったことがあるが、あれは実に気持ち良かった。肉体の結合とはまた違った良さだった。

「本当に、旦那さまの禁手は能力が多彩ですわ」

「まあな、考える時間があつたおかげで眷属から力を受け取る形にできた」

一つ一つの駒を宿した眷属の力が、そのまま俺を強くしてくれる。俺の力は女頼りだ！ ヒモと言つてもいい！ 素晴らしいじゃない

か！ いいよねヒモ生活。

俺は普段遊びまくってて、いざってときだけ「どうれえ」って出て行くみたいな。後の仕事は女たちにお任せだぜ。偏見だが、雄ライオンとかそんな生活してそう。偏見だが。

いや悪魔にとつて子作りは重要な仕事だから、むしろ四六時中セックス三昧ってのは、超働き者ってことになるのかもしれない。俺は怠惰とは無縁な男になりそうだな。フハハ。

「クレériaさまも眷属にされるのですか？」

「上手く教育できればな。さすがに話に聞いたままの状態だと、怖くて責任を持ってない」

俺が思うにだが、クレéria・ベリアルが八重垣と関係を持った際にするべきだったことは、デイハウザー殿に頼ることだったのではないだろうか。

クレériaに八重垣を眷属化するだけの駒の空きや実力がなかったとしても、デイハウザー殿がゲームを通して作っていたであろうコネやツテがあればどうにか出来た可能性は高い。

ロイガンのベルフェゴール家、ビィディゼ殿のアバドン家、ローゼンクロイツが眷属をやっていたマモン家などは、基本的には『レーティングゲーム』に参加しない方針の御家だ。それでいて、政府から『悪魔の駒』は受け取っている。つまり、空き駒がある可能性が高いのだ。

特に強欲のマモン家は、金で片を付けられそうな気がする。クレériaの眷属にしても、主と一緒に粛清の憂き目に遭うよりは生きてたほうが万倍マシってものだ。

まあ、クレériaの眷属の中には粛清後にバアル家から「褒美」をもらって隠棲した者もいるようなので……うん、なんの「褒美」なのやら。

詳しくは聞かなかったが、アレかな？ 主を売ったのだろうか？ まあ、そうだったとしてもクレériaのあの行動ではな……見限った眷属がいたとしても一概には責められん。

八重垣を眷属化する際に必要な『王』の实力に関してはもつと簡単だ。俺がレイヴェルとやろうとしていることをするだけでいい。

デイハウザー殿に頼んで、ちよつとだけトレードしてもらい、八重垣を魔王クラスであるデイハウザー殿の『騎士』なりなんなりにする。で、すぐにトレードでクレériaに戻すだけでいい。トレードの儀式って時間かからないから、ほんとにそれだけだ。

まあ、クレéria自身に八重垣を転生悪魔にする意志がなかったようなので、どうにもならなかったか。デイハウザー殿に相談して頼っていたら……たぶんそうしなさいって言われたと思うんだがな。

それにしても、仮にそのまま上手く行っていたらどうするつもりだったのやら。八重垣が人間のままで60年も経ったら、もうジジイじゃないか。その後、無事に老衰死できたとして、魂を頂くつもりだったのか、それとも新しい恋を探すつもりだったのか。

ふむ、それだったら俺もちよつとやってみたいかもしれないな。

人間の女を幼少期から老後まで面倒見て、死の寸前に魂を頂戴するとか……悪魔的ロマンを感じる。もしもそのつもりだったとしたら、なかなかいい趣味してるなクレériaも。

しかし、頼つて欲しいところで頼つてくれず、頼んでもいないことでやらかして可愛がっていた従妹が粛清されてしまうとは、ベリアル卿から粛清理由を聞いた後のデイハウザー殿は遣る瀬無いだろいな。

デイハウザー殿はレーティングゲームの1位だったのだ。これがデイハウザー殿が5位とか6位で、上位にアドバンスト・クラウン使用者がいたのなら蹴落とすって意味もあったのだが、不敗の王者が下位の者のドーピング的なものを探りだして暴いても利益がなさそうな気がする。

俺だったら気付いたところで、「クハハハ、貴様らは力を100倍にまで高めても、この俺には届かんだ。ハハハツ、弱い弱い、弱すぎるぞツ！ 俺って、チョーツエー！」みたいなことを内心で考えてしまっそうだ。

「二応だが、クレériaに仮初の肉体を与える方法もありそうだが」「そんな方法があるのですか？ 魔力による変身でも、元々の肉体を変化させたものでしょう？」

俺がドラゴンに変じたり、ミスラさんがライオンになったりするの

は、元々の肉体を変化させる術だ。肉体年齢を操作するのも、そうした魔力の使い方の一種。

だが、もう魂のみのクレーリアには元になる肉体が無い。

「ゼクラムさまから、クレーリアに肉体を与えたかったら兄上に聞いてみると言われた」

「サーゼクスさまにですか？ あつ……サーゼクスさまの本来のお姿は……」

「兄上は肉体の無い悪魔だからな。魔力で一から肉体を造る方法を知っているはずなんだ」

「そういうことですか。あとは『譲渡』で」

「そうそう、まあ、魂が死んでいるから生き返るのは違って……なんというか、ゴーレムに近い感じになりそうだが駒は入れられそうだ」

まあ、感覚だけでも与えられれば問題あるまい。オーラの接触・混合も気持ち良いものだが、やっぱり肉体もないとな。いわゆるフレッシュ・ゴーレム的な感じだ。ラブドールのかもしれない。考えようによつてはゾンビ系？

なんにしても、やればヨシとしようじゃないか！

引き取って来て牢に繋いでおいた八重垣を人質にして……魂だから魂質か？ まあ、最初は脅迫から入るってのも悪役な悪魔っぽくてオツなものかもしれない。

それで上手く行ったら、ベリアル家の皆さんに会わせてやろう。で、ダメだったら、無理でしたってバアル家に引き渡せばいいか……。まあ、クレーリアのことはおいおい進めていくとして、とりあえずは会議に出席するように言われたことが問題だな」

「アドバンスト・クラウン公表についての有力者会議ですよ。私も行けたら良かったのですけれど、心配ですわ」

魔王サーゼクス・ルシファー。兄上

魔王アジュカ・ベルゼブブ。ラティアの伯父さんで、ディオドラの兄さん。

魔王セラフオルー・レヴィアタン。お姉ちゃん。

魔王ファルビウム・アスモデウス。良く知らないヒト。毛が無い。

アガレス大公。ロボの話題で盛り上がるラティアの伯父さん。
バアル大王。叔父上。

という悪魔の六大派閥トップが集結する豪華メンバーな会議に俺も主席しなさいって、ゼクラム祖父さんが言うのである。

事の発端はお前だろう、自分で顔を出して意見を言つて来なさいみたいな話で、いやもう困るね。なんでそんな頂上決戦みたいな場に顔を出さねばならないのだ。

俺つてただのグレモリー家次期当主で、学習期間も終わっていない上級悪魔なんですけど……。

一応、祖父さん相手に質疑応答の練習みたいなことさせてもらってきたけど……。あれ？ ゼクラム祖父さんつて、クリスマス前の記者会見にいきなり放り込んでくれた父上よりも優しいのか？ あれ？

まあ、いい。今はそんなことより、レイヴェルだ。

「あぁっ、そんな急にお腹……」

ひよいと頭を上げて、いずれ俺の子を宿してもらおうレイヴェルのお腹に顔を埋める。グリグリスリスリと、はぁ……甘えたい。

子供早く欲しいが、悪魔の子作りは時間がかかるのだ。あまり急かしてレイヴェルが気にしちやっても良くない。気長に愛でて行きたいものだな。

「いやか？」

「いえ、いいえ……あぁんっ♡ もっと、もっとしてくださいまし」

明日のことは明日になってから考えるとして、今はこれに集中する
としよう。

会議の前に

俺が目覚めはそこそこ早い。

あの後、レイヴェルとはたつぷり七回の延長戦を繰り広げた。心地好さに身をゆだねて眠りにつき、ふと目覚めて隣を見れば、俺の腕を抱え込んですうすうと寝息を立てるレイヴェルの姿がある。満足そうな寝顔だ。眺めているとこっちまで頬が緩んでくる。

彼女のトレードマークと言えはくるくるツインドリルヘアなのだが、その形が解けて緩んで細い首や胸のふくらみの上辺りでたるとしているのが、妙に色っぽい。

「んう……すう……」

その髪に指を通していくと、指と指の間で髪感触が波打つように絡んで来て、こそばゆく心地よいものがある。

「……さまあ……」

どんな夢を見ているのだろうか。何度か彼女の髪に指を通して、こちらの手に顔をすり寄せながら俺を呼んでくる。

レイヴェル相手には臆出しばかりしているので、たつぷり致した後でも唇を重ねるのに抵抗がない。小さく開いてこちらを呼んでくる彼女の口に、軽く自分のそれを重ねてみる。

「んっ、ちゅうっ……」

無意識で反応しているのか、眠りながらも応えてくる様子はたまらないものがある。

昨夜あれだけしたというのに、俺の股間は立派に朝の勃起を遂げていた。起き抜けにもう一発と洒落込みたくなるが、せっかく気持ちよさそうに眠っているのだからこのまま寝かせておいてやりたくもなる。

『入れ』

ということで、通信魔方陣で部屋の前に待機しているメイドを呼びつけることにした。

「失礼いたします」

「失礼します」

俺の朝の憤りを沈める朝フェラ担当は、リユイにさせることが多い。本日はそれに加えて朱乃のオプション付きだ。

抱き着かれていた左腕を一旦外すと、眠ったままモゾモゾと俺の体温を探し出すレイヴェル。

「んうー……」

そんな彼女の首の下に改めて腕を通して腕枕に切り替えると、レイヴェルの唇がニヘラと安心したように緩み、再び寝息のリズムが整い始めた。

「起こさないようにな」

「承知しました」

小声でリユイが応え、朱乃は無言でコクコクと頷く。俺の側だけシーツを避けてそそり立つ肉棒を見せると、メイド服のふたりがそこに顔を寄せ、舌を伸ばして来た。

幸せそうに眠る婚約者に腕枕をしながら、婚約者を起こさないように静かにメイドからのダブルフェラを愉しむ。贅沢で背徳的な朝だ。実によい。

途中でレイヴェルが起きたら、本日の予定をすっ飛ばして4Pに突入してしまいそうである。

二人にそれぞれ一回ずつゴックンさせ、さらに朝風呂ついでに一発ずつの仕込み終えた俺は、日課の魔力トレーニングに向かった。朝は夜ほど時間をかけてやれないので、手早く済ませがちになってしまう。

他に誰もいない静寂と暗闇に満ちた専用の部屋で、胡坐をかいて座り込む。これをやるときは、ひとりでいたいのだ。

男つてものは、孤独に身を置きたくなるときがあるものだ。なにかでこんなセリフがあった気がするが、はて？ あれは誰のセリフだったのだろうか。映画かな、たぶん。

魔力はイメージ。

俺のイメージする魔力は水のような形をしている。ドライグを宿した神器を持っているのだからそこは炎じゃないのかって気もする

が、水の方がしつくりくるのだから仕方がない。

魔力は眠っているときや休息に集中しているときの方が回復が早い、そうでなくても普通の生活の中でもジワジワと消耗した分が回復していく。消費の激しい戦闘中でも、ジリジリと回復してはいるのだ。

睡眠や休息がゲームで宿屋に泊まった場合に当たるとしたら、起きているときはMP自動回復スキルのないイメージだ。RPGでフィールドを3歩歩くごとにMPが1回復、戦闘中の1ターン毎にMPが3回復みたいなアレである。

俺はこれを雨のようなものとイメージしている。止むことなく降り続ける魔力の源となる水だ。

悪魔はそれぞれこの雨を受け取る器を持っていて、その器で雨を受け止めることで水を溜め込んでいく。延々と降る雨の中、庭に置かれた水瓶のような光景だ。

この水瓶の大きさが、魔力量の大小を決める。口が大きく容量の大きな器を持つ悪魔は、魔力の回復速度も最大魔力量も大きくなり、小さな器の悪魔は器相応に小さくなる。

純粋な下級悪魔の器がバケツだとすれば、純血の上級悪魔のそれはバケツ何百杯の水量を溜められる池のようなものだろうか。

魔力量を増大させ、魔力の回復速度を上げるには、この水瓶を大きくしてやればいい。貯水量を増やすだけなら下に掘って水深を深くしていけばいいし、回復速度を上げたければ雨を受ける面積を増やしていけばいい。

単純にこれだけを考えると、池の表面積を拡張していけばいいだけのように思える。浅く広く面積を増やせば回復速度も貯水量も増えるわけだからな。

だが、この水深つてもものは、どうも瞬間最大放出量に影響しているように思えるのだ。水に深く潜ると水圧が増して行くが、その水圧の強さが瞬間的な魔力放出量に対応している感じだ。

広く浅いプールのような器は、平時に恒常的に魔力を使用し続けることに向く。結界を長時間維持し続けるにはこのタイプの器が良い。

狭く深い井戸のような器は、短期決戦に向いている。一瞬間に強烈な圧の魔力を叩きつけて相手を打ち倒すのだ。

魔力はイメージ。これは俺の中のイメージである。

俺は欲張りなので、どちらも欲しい。

器の端は浅くていい。雨を受け取る面積を増やすことが重要だ。足の付く砂浜のように徐々に広げていく。

器の中心部は深く深く掘り下げて、海溝のように、光の届かない暗黒と超高压の深海のように。

そうやって出来上がった俺の魔力の器の形は、イメージの中では巨大なすり鉢型になっていった。雨を受け取る口は広く、中心部は深く深く、それは丁度この冥界Ⅱ地獄の構造によく似た形状だ。

悪魔なら誰だってこの魔力の器は大きい方がいいと言うだろう。だが、こういつたことをする者はいないらしい。少なくとも長い伝統を誇る大王バアル家の次期当主であるマグダランは習ったことがないと言っていた。それが偽りでなければ、こうしたことをする悪魔はほとんどいないのだろう。

成熟するに従って、自然と大きく育っていくのに任せているのだけなのだ。もしかしたら、これは危険な行為なのかもしれない。下手に構い過ぎると、器自体が崩壊してしまうとか、そんなことがあるのかもしれない。

だからまあ、ゆっくりゆっくり慎重に広げていくわけだ。一日に並の上級悪魔の器の五分の一程度、それぐらいの速度で広げていけばいいだろう。

感覚的にはもつと行ける気がするのだが、ちよつと怖いしな。最初の頃は、何も考えずにガンガン広げていったものだが、最近はちよつと控えめになっている。

深呼吸してトレーニングを終える。一日中やっているよりは、毎日少しずつ広げていくのが良い気がするのだ。

水と器でイメージしておいてなんだが、成長させていく過程はどこか樹木に似たところがあるのかもしれない。ちよつと水やりっぽいし、盆栽を育てているような感覚もある。

ま、あくまで俺のイメージする魔力の在り方だ。ヒトによって、それぞれ違う感覚を抱いていることもあるだろう。

魔力のイメトレを終えたら、朝食の時間だ。父上も母上も忙しいので、俺の手が空いているときはミリキヤスと食事を取るようにした方が良いだろう。

兄上も相変わらず忙しく、義姉上はメイドモードでは家族感出さないからな。それでなくても前魔王の残党が蠢いていて、義姉上は前魔王の側近である『ルキフグス』の出っでことであるいろいろある状況だ。

まあ、父上と母上が忙しい理由の半分ぐらいは俺のせいなのだと思うが……ありがたいね。裏から手を回しておくのとか、苦手というかやったことないしな。事前に通告するくらいならいいが。

メイドに聞いてみるとレイヴェルはまだお休み中のようなので、そのまま寝かせておく。ダウン状態にまで追い込んだのは俺なので、これは仕方がない。

仕方がないので、この隙に義姉上を呼び出してみよう。今日の義姉上はメイドしているはずなので、次期当主さまの呼び出しには逆らえないのだ。

「お呼びでしようか、リヴラクスさま」

後宮を出たところで義姉上と合流、そのまま予定を尋ねておく。

「当主さまから、本日と明日は明後日のアグレアスでの会議に備えて準備を進めておくようにと——」

「ああ、あれか、分かった」

六大派閥のトップが集う『王の駒』ならぬアドバンスト・クラウンについての話し合いは、中立派アガレス家の領内の名物都市アグレアスで行われることになった。

空に浮かぶ空中都市アグレアスを初めて見たときは思わず「あったんだ、本当にあったんだ」とか言いそうになったものだ。

あそこに集まるってのは、やっぱレーティングゲームに関わりが深い話題だからかね。アグレアスはレーティングゲームの中心地だか

らな。悪魔つて、聖地とかメツカつて表現を使い辛いから脳内言語が日本語だと結構困るね。

義姉上は俺と眷属のスケジュール管理もしてくれているので、その辺りをサラツツと聞いておく。

「ラティアの世界は来月半ばには着工できそうなのか」

「はい、取り掛かる前にどういったフィールドにするのか御意見をもう一度詳しく頂きたいとのことでした」

「前に渡したものではありませんでしたのか？」

「長期に渡つて使用する予定ですので……。後からの変更も可能ですが、そうしますと余計な費用が発生することになります」

使い捨てのフィールドなら適当でいいのだが、ラティアの住まい代わりだからなあ。後で増改築可能とはいっても、サラリーマンがローン組んで一軒家建てるときの気持ちの百分の一程度には気を遣った方がいいか。

一緒に「あんな世界にしようか」「こんな世界がいいわ」って話し合うのも楽しいからな。通信越しだとラティアの気持ちを読み取れないが、まあ、楽しんでくれていると思う。

マイホームを建てる前に相談し合う若夫婦気分みたいなものである。なお、マイホームの敷地面積は日本の北海道くらいだ。庭に池造る感覚で湖や川を配置し、岩感覚で山を置き、花壇代わり森を用意する。

うーん、お貴族様！

そういえば『ペット代わりに一部の領民を連れて行くから』ともラティアが言っていたな。

縄張りでの活動もあるから慣れておきたいって理由で、空の色や空気の質などを人間界のものにしてあげるそう。

「最初の世界形成は俺とラティアでやればいいんだったな」

「はい、そうした方がイメージに近いものになりますから」

次元の狭間に新しい世界フィールドを創るときは、最初の工程である世界の形成に一番魔力が必要となるらしい。大きいフィールドを形成する際には規模相応に大きな魔力が必要になるので、そこを俺か

ら『譲渡』を受けたラティアにやってもらおうってことだ。

これでかなり費用が浮くらしい。若干ケチ臭い気もするが、ラティアの持っているイメージを反映させやすいって面もあるので、良しとしよう。

居住用物件の購入にたとえるなら、宅地付で買うのではなく土地は自前で用意するような感じだろうか。その後のフィールド維持にかかる魔力は、まあ、固定資産税的な？ 世知辛いね。

あとの細かいところは下級・中級連中の匠に任せる。せっかくの公共事業っぽいものだ、仕事をやって領民に金を落としてやらんと。動物とか植物はそいつらが持ってきて配置していくことになるだろう。

ただで金をバラ撒いたり、税を特別抑えたりはしないが、仕事には相応の対価を支払って金をぶん回していくのが我が家の流儀だ。

良い仕事には良い報酬を。領民が稼ぎが増えればまわりまわって税収も上がるつものよ。

そうやって話している間に、食事の場が見えてきた。最近城内のどこかしらの庭園で食えることが多いな。ミリキヤスの希望なのだが。

「それでは、私はここで――」

用は済みましたと離れて行こうとする義姉上なメイド長の腕を掴む。

「給仕をしろ」

「しかし……」

「命令だ、グレイフィア。メイドの分際で、次期当主さまの命に逆らうのか？」

ためらう義姉上を引っ張って、ミリキヤスとの朝食に向かう。

「母さまー」

ミリキヤスよ、こっちに叔父さんもいるんだぞ。

いや、昨今の事情もあって同じ城に住んでいるのになかなか会えないでいるから、気持ち分かるけどな。

「ミリキヤスさま、その呼び方はお控えください」

義姉上に促されて、ミリキヤスは俺にも挨拶をくれた。結構、次期当主な叔父さまである「リアス兄さま」にもちゃんと挨拶しないと。御付きのメイドを次期当主様のご命令で無理矢理トレードさせ、ミリキヤス付きのメイドにお世話してもらいながら朝食を済ませていく。

俺はワガママお坊ちゃんなので、このぐらいはオツケーなのだ。父上からも母上からもダメとは言われないしな。

なお、本来俺の世話をするはずだったメイドは、空気をちゃんと読んでくれた。気が利く娘は嫌いじゃない。あとで白く濁った「ご褒美」を上げようと思う。

横や後ろに意識の向かいがちなミリキヤスとの朝食を済ませ、さーてメイドを後宮のどこに引つ張り込んで褒美をぶち込もうかと思いつながら歩いていると、義姉上に呼び止められた。

「リヴラクスさま、スケジュールの件ですが」

「なんだ、何か変更があったか？」

訊ね返すと、義姉上がメイド服の隠しから何か帳面のようなものをチラリとこちらに見せてくる。あれは……例のスタンプ帖か。

その後に義姉上は、魔力式スクリーンを宙に形成し俺ともう一人のスケジュールを並べて表示した。

ふむ……なるほど、俺の予定がない日に、メイドのどなたかがオフ日、と。アグレアスで会議とかあるし、俺もきつと疲れてしまうだろうから……是非とも湯治する必要があるな！

「分かった。用意しておく」

表情は変えていないつもりだが、うっかり鼻の穴を大きくしちやつてないよな。あの顔って少しみつともない気がするんだよな、個人的に。

その後、自分の宮に戻った俺はルンルン気分で空気の読めるメイドをブチ犯した。

前戯もなしに壁に手をつかせ、バックからガンガン激しくやってしまったが……許せよメイド。でもまあ、気持ち良さそうだったし構う

まい。

後宮メイドの第一の職務は俺の相手をする事なので、それっぽいときにはちゃんと股で俺の御道具を出迎える準備を済ませておくのも仕事の内だ。

うん、我ながらヒドイことを考えているものだ。悪魔貴族っぽくてよろしい。

メイドさんを可愛がった後、ちよつとドキドキしながらレイヴェルの寝ているだろう部屋に向かったところ、どうやら既に起床して入浴中らしい。

これは後で「起こしてくださいまし」とか言われそうだ。一緒に寝て、起きたときにも一緒にいるつてのを喜ばれることは割と多い気がするので。

だが、あのとときレイヴェルを起こさず、寝かせておいてやろうと判断した俺は実にナイスだった。レイヴェルと一緒に朝食に向かったら、義姉上の方から誘ってくれることは無かっただろうからな。

他の女とバリバリ寝ておいてなんだが、義姉上とのお出かけは嫁さんに隠れてこつそり浮気しているみたいでドキドキしてしまう。義姉上についてはレイヴェルから反対されているつてところが、このドキドキ感の隠し味だ。いや、隠し味でもなんでもないか。

これはどう考えてもレイヴェルの意見が正しいのだ。でも、我慢できない。

なんか、俺ってクレーリアのことを馬鹿に出来ない気がしてきた。

レイヴェルはお風呂タイムなので、皆の予定を思い浮かべ……黒歌のところに行くことにする。彼女は現在お勉強中のはずだ。

「勉強なんて嫌いにゃん」とか言いそうに見えて、ちゃんと学べるお姉さんなのである、黒歌は。

黒歌のお勉強部屋は後宮ではなく、城内でもちよつと離れたところになるのでサクツと空間転移。

そーつと扉を少しだけ開いて様子を見ると、黒歌はちよつとぐでつとしていて、白音はピシツと背筋が伸びた感じの勉強姿勢。姉妹の性

格の違いがよく分かる光景だ。

「やっているな」

「主きーん」

勢いよく椅子から立ち上がり抱き着いてきた黒歌を抱き返して、よしよし。

「あ……、おはようございます」

白音とはまだちよつと距離があるが、まあそこはおいおいこれからだ。

「若さまがいらつしやると、黒歌さまの勉強がはかどりません」

後頭部で髪を団子にし眼鏡をかけた女性教師が頭を下げながら、きつめの口調でそう言ってくる。

俺も未だにお世話になっている家庭教師の彼女は、世界の様々な言語に詳しい悪魔だ。彼女は俺にも割と厳しいことを言ってくるのだが、女教師属性はこれで良い。

俺の家庭教師である彼女の立場自体は黒歌より下で白音より上といったところだが、教える側なのでこういった口の利き方が許されるのだ。

「どんな具合だ?」

「白音はこの調子でしたら、駒王学園への編入は問題ないでしょう。」

黒歌さまは……もう少し頑張りましょうか」

「まあ、黒歌は覚える内容が多いからな」

黒歌は元妖怪の転生悪魔。白音は今もただの妖怪だ。二人は元々妖怪なので、試験も勉強もない暮らしをしていた。まあ、つまり学校に行っていないのである。

前の主の下で黒歌は戦闘能力の向上をメインに鍛えられていたし、白音は小さい頃から冥界暮らしで日本語よりも悪魔言語を話して聞いている期間の方が長い。

黒歌には日本の駒王学園で理事長夫人をしてもらうし、白音は学校に通うのだから日本語のお勉強は必要なことなのだ。

「白音はいいわよね。初等部レベルまでの知識だけでいいんだから」

さすがに理事長夫人となると、日本語と英語と、あと人間の大学を

卒業した程度の知識は最低限欲しいところだ。欲を言えばキリがないが。

「まあ、黒歌は四月までに二十年あるから、それまでに覚えればいい」間に合いそうにないので、足りない『時間』はラティアのところで用意することにした。俺も勉強しないとイケないしな。

「若さま」

甘やかすなって先生に怒られてしまった。

「いや、すまない。だが、あちらでもよろしく頼む」

黒歌の語学に関しては、悪魔の『どんな言葉も理解でき、理解させられる』という会話能力がネックになっている。一対一で話す場合はいいのだが、一般の人間がいる場ではきちんとその言葉を話せないとマズイのだ。

というのは、英語しか話せないAさんがいたとする。そして、日本語しか話せないBさんもその場にいたとする。

そこで黒歌がAさんと何も気にせず会話してしまうと、Bさんにも黒歌の話している言葉の意味が分かってしまうのだ。するとBさんは、黒歌が日本語でAさんに話しかけていたと思うことだろう。

だが、後日AさんとBさんが出会って会話しようとすると、Aさんは日本語が分からないのでBさんの話す日本語が理解できないということになる。これはよろしくない。

Bさんからしたら、Aさんは黒歌の日本語を聞き取って英語で返事をしていたように思っているわけなので、「あれ？」となってしまうのだ。

あとは、滅多にお目にかからないレアな言語で話しかけられたとして、それに普通に受け答え出来てしまってもよろしくない。かなり目立ってしまう。人間のフリをしているときには要注意だ。

こういったことを聞かされたとき、俺は人間界に縄張りを持ってやっていくのは思いのほか大変なのだと思ったものだ。

人間の中に混じらず人外異形としてだけやっていくだけなら大変便利な悪魔の会話能力だが、人間のフリをするとなると有用過ぎて逆に人外バレするリスクが高まることになるとは思いつかなかった。

ラテイアの提案のおかげで二十年時間が取れて良かった良かった。脳みそスペック高いから、大丈夫だっただろうとは思うけれど。

黒歌に仙術やら火車の力のことで相談があることを伝え、さきつと退散。これ以上邪魔していると、先生に睨まれてしまう。

レイヴェルとミリキャスとでライザー義兄上を話題にしつつ昼食を取る。

今回は義姉上を捕まえられなかったので、しょんぼり気味のミリキャスくん。まったく、義姉上ときたらメイドの癖にどこに行つたのやら。

昼食後、ローゼンクロイツを呼びつけた。もちろん後宮の方にはない。レイヴェルとの婚約前に使っていた一角にだ。

「調子はどうだ？」

俺が聞いているのは、ローゼンクロイツの子供のことだ。

どうやら経過は順調らしい。

彼と彼の子供もラテイアの世界で二十年を過ごすことワールドになるので、一応だが意見を聞いておく必要がある。

「人間界に近い環境と言うことでしたら、問題はないかと思われま
す」

ローゼンクロイツの子供は、転生悪魔のローゼンクロイツと人間の魔女との間に生まれた子だ。なので、悪魔と人間のハーフということになる。

悪魔なら冥界に近い方が過ごしやすいだろうし、人間ならば人間界の環境の方が良いはずだ。

墮天使／人間ハーフの朱乃はどちらでも苦にならないようだったが、ローゼンクロイツの子供はどちらよりなのだろうか。

健康ならば気にするほどの事でもないが、何分まだ病弱な身だ。俺としても眷属の眷属の子供のことなので、多少は気にしてやらないことも無い。

「どちらの方が良さそうなのか、確認はしたのか？」

「はい。神器のことを考えると、あの子の魂の在り方は人間としての

比重が大きいようでした」

「そうか、なら問題ないか……ああ、そうだ。奥方のことだが、今月中に結論を出せ」

別にローゼンクロイツの嫁さんに手を出そうって話ではない。ローゼンクロイツの妻は魔女とはいっても人間なので、子供と一緒に加速世界で二十年を過ごすくらいから見たら一気に老けることになる。人間界の知り合いには驚かれるだろう。

といって、子供の成長を見守れないのはそれで嫌だろう。

俺としては、ローゼンクロイツが眷属をトレードに出し、空いた駒を得て妻を転生悪魔にしてしまうのが良いと思うのだが。

「お前の眷属なら、欲しがる者は多いだろう。待遇も悪いものにはならないはずだ」

なんと言っても、元レーティングゲームランキング7位の眷属だ。精鋭中の精鋭である。

俺としては、ちよつと早い兄上からミリキャスに駒を渡してもらって、護衛にでもしておきたいところだ。このご時世だからな。

それが無理なら、ソーナのところなんかオススメだ。ソーナはローゼンクロイツをゲームのお手本のように思っているところがあるしな。しかし、そうなるとソーナが(戦術的に)いやらしい子になってしまいそうだ……。

いくつか候補を伝えると、ローゼンクロイツが深々と頭を下げてきた。

まあ、ローゼンクロイツの眷属は、俺から見て眷属レイヴェルの眷属ローゼンクロイツの眷属なので、別に俺が動かしてしまっても良いと言えば良いのだが。

「ありがとうございます」

「話は以上だ。資料を置いて下がれ」

用が済んだらローゼンクロイツはすぐにオサラバだ。子供のころにでも行っているがいい。

俺にはこの後、ローゼンクロイツに持って来させた魔物封印系神器の資料をミスラさんの寝顔を眺めつつ読む仕事があるのだからな。

大罪の七冠／憤怒

いわゆる七つの大罪ってやつには、対応する悪魔が存在するとされている。

その内、現行の悪魔社会で魔王の名として使われているのは、四つだ。

『傲慢』の魔王ルシファー。

『暴食』の魔王ベルゼブブ。

『嫉妬』の魔王レヴィアタン。

『色欲』の魔王アスモデウス。

他に『強欲』の悪魔としてマモン、『怠惰』の悪魔としてベルフェゴールあるいはアスタロトの名を人間たちは挙げているが、これらの悪魔の名を持つ御家は魔王ではない。マモン家やベルフェゴール家は現行政府から距離を取っているし、アスタロト家は現ベルゼブブであるアジユカさまの生家である。

『憤怒』に対応する悪魔・魔王としてサタンの名が挙がることも多いようだが、今のところサタンという呼び方は『魔王』の意味で使われることが多い。

サタンを『龍の魔王』としている文書もあるが、ドラゴンの魔王は今のところ存在しない。悪魔の歴史的には、ずいぶん昔から魔王はルシファー、ベルゼブブ、レヴィアタン、アスモデウスの四名だ。

現在この空中都市アグレアスのとある会議室に、現行政府の悪魔社会を代表する四大魔王が集結している。

傲慢のサーゼクス・ルシファー。

暴食のアジユカ・ベルゼブブ。

嫉妬のセラフォール・レヴィアタン。

色欲のファルビウム・アスモデウス。

四大魔王は、それぞれが襲名した魔王の名を冠する派閥の頂点に立つ政治家でもある。ルシファー派、ベルゼブブ派、レヴィアタン派、ア

スモデウス派。この四派閥をまとめて魔王派とも呼ぶ。

また前魔王の血族から名を奪い魔王を名乗った関係から、現魔王や現ルシファール派などと呼び、現行政府の魔王ですよ、現政府の魔王派ですよと強調する場合もあつたりするので、ちよいとややこしい。

悪魔の政府にはこの四大魔王の派閥の他にも大きな派閥が二つ存在する。

中立を標榜し、そのまま中立派と名乗るアガレス大公率いる中立派。

貴族主義を掲げ、それを前提とした合理主義・利己主義者の集まる大王派。この派閥は名前通りにバアル大王家の当主であるバアル大王を盟主としている。

中立派はあまり大きく主張しないが、実務面での貢献をもって存在感を出している派閥だ。実務を担うことで、どこからも蔑ろにされることのない派閥でもある。

平民の記者・論者などが、旗幟を鮮明にせず、それでいて最終的にある程度の旨味を攫って行く中立派のことを政治的に怠惰だ、政策の立案を怠っているなどと批判していたりもするが、一番働いているのはこの中立派に属する貴族家だ。

大王派は最大派閥で、一派で四つの魔王派を相手に政治的に優勢な場面も多い。これは多くの貴族がこの大王派に所属しているためだ。強欲は悪魔のサガなので、ここに数が集まるのはある意味順当ではある。

そんな魔王は擁さずとも力のある二派閥の長もこの場で席についていた。

中立派のアガレス大公と、大王派のバアル大王だ。

以上、魔王四名に大公と大王を足した計六名が、現悪魔政府六大派閥のトップ陣である。

そんな派閥の長であるVIP中のVIPな大悪魔ばかりが一つのテーブルを囲んで座っているのがこの場所だ。

そこに何の因果か紛れ込んでしまった哀れな子羊。悪魔としての成熟を終えていないどころか、学習期間すら済ませていないお子様。

貴族の家に生まれただけのお坊ちゃん。

それがこの俺、リヴラクス・グレモリー。

魔王ルシファアの弟にして、魔王ベルゼブブの姪の婚約者であり、小さな頃から魔王レヴィアタンに遊んでもらっていて、魔王アスモデウスの親族の貞操を狙い、アガレス大公の姪の婚約者でもあったりして、ついでにバル大王の甥でもあったりする、一介の上級悪魔だ。

実家のグレモリー家の中では「若さま」「次期当主さま」「ご主人さま」と呼ばれて好き放題ワガママ放題な俺だが、さすがにこんな場面ともなると緊張する。

緊張のあまり色々と事前に考えていたことが吹っ飛び、まあ言いにくいことをそのまま言っちゃればいいのかと開き直るくらいの緊張感だ。

セラフォールさんがテーブルの上に手のひらだけ見せて、小さく振ってきた。うん、振り返しておこう。

すると、それが合図だったかのように叔父上が口を開いた。

「まずは、お預かりしていたモノをベルゼブブさまにお返ししよう」

叔父上の手元から、五つのチェスの駒に似たモノがテーブルの中央まで滑って行く。

その駒が発する波動は『イヴァイル・ピース悪魔の駒』とよく似ているが、『女王』、『戦車』、『騎士』、『僧侶』、『兵士』のどれとも形状が異なっていた。

少し前まで『王の駒』と呼ばれていて、今は『アドバンスト・クラウン進士の冠』と名付けられたモノだ。

「私の手が届いた範囲ではこれだけだ」

叔父上はそう続け、首を振って見せた。

「議題の実物が提供されたところで、話を進めるとしよう」

どうやらアガレス大公が司会進行役らしい。

「最初に、リヴラクス・グレモリー。今回このアドバンスト・クラウンの存在を知った経緯と、それを公表しようと考え行動した理由を説明してもらいたい」

いきなり俺からか、いやその方がかえって発言しやすくなるな。こういう会議って、話すタイミングが掴めないと黙って聞いているだけになってしまう。

シーグヴァイラのお父さんは、気配りの出来る男。

「個人的な縁でロイガン・ベルフェゴールと知り合い、深い関係になりまして。それで俺は彼女を自身の『騎士』にしたいと欲し、彼女もまたそれを望んでくれた。ですが、そうするには邪魔なモノが彼女の中に既に入っていた。その邪魔なモノを取り除けさえすればそれで良かったのです。ですが、まず摘出方法が分からないので、製作者であるアジュカさまに頼るしか道がありませんでした。仮にそれが叶ったとしても、ロイガン・ベルフェゴールは有名すぎます。彼女の能力が大きく変動すればすぐさま周囲に知れ渡る。これはもう公表してしまうしかない、と考えました」

さすがに叔父上の居る場所で、余計なことを知った者は口封じされるかもと考えて、ならば先に公にしてしまえば封じることが出来まいと思つて動いたとは言わない。

実際、何事もなかったしな。ちよいと過剰反応だったのかもしれない。俺は臆病な小心者なのだ。

影響を考えなかったのかなとも言われたが、おおむね年明け早々にアジュカさまと話したのと似たような内容だ。それを聞いた本人であるアジュカさまが目の前にいるのだから、同じようなことを答えておくだけでいい。

「では、ここで我々がどのような決定を下そうとも、公表は行おう考えとということの良いのかな？」

アガレス大公の質問に頷きを返す。

「ええ、別にいつでも良かったのですよ、本当は。俺の側には使用者本人がいるのですから。ただ、どこの派閥にしても、いきなり明かされるよりは準備期間があったほうが良いだろうと考え、社交期間中に貴族に伝えて回っただけです。もう下級・中級の富裕層にもこの話は伝わっているでしょうから。ほとんど公表したようなものですけどね。それに——」

口から続いて出ようとした言葉を、俺は一旦飲み込んだ。これは、単なる俺の感想であり推測に過ぎないからだ。

アガレス大公が身振りで続きを促してくる。なら、まあ、いいか。

「これは各派閥の社交パーティーに参加して感じたことですが、元々多くの方に知られていたようですよ。俺が受けた印象としては」
少なくともルヴアル義兄上は、そういったものがあるだろうと考え
てはいたようだ。タンニーン殿もそう。

それからアドバンスト・クラウン使用者と年齢の近い貴族。彼ら彼女らは、使用者と学校の同級生だったのだ。幼少の頃から長い時間を共に過ごして来た仲になる。そりゃ、「あれ？ おかしいよね」と思うし、何かあるなど分かるだろうさ。

ロイガン・ベルフエゴールや、ビィディゼ・アバドン殿のような『番外の悪魔』出身者ならばともかく、使用者の大半は元七十二柱の貴族家の者だ。

そこで年齢の近い世代ばかりにアドバンスト・クラウンを使わせたなら、同世代でレーティングゲームデビュー後しばらくしてから急激にあらゆる能力が激増した者が多発したことになる。「あつ」と察しないわけがない。

「二倍や三倍程度の伸びならともかく、数十倍から百倍以上ですよ？隠せるはずがないでしょう。皆、何かあると思いつながらも、背後に何かしらの事情があると考えて黙っていただけ……：そのような印象を受けました。そもそも、使うように勧めた方々にしても、まともに隠す気がなかったのではありませんか？」

悪魔の魔力は、やはり未成熟な期間の方が良く成長する。成熟後はそれほど大きくはなっていないのだ。長い生の中で技量こそ磨かれていくが、基礎的な能力の伸びは若い時期のごく短い期間に急激に増大する。

まあ、短い期間といっても、数十年単位になるのだが。悪魔の寿命から考えると、ほんとうに極わずかな期間である。

「ほう、なぜそう思ったのか聞かせてもらおうか？」

今度は叔父上か。ナニコレ、皆で寄って集って俺をイジめる会かなにかですか？ 「せんせーい、リヴラクスくんがソーナちゃんを啼かせてましたー」みたいな、懐かしき人間時代の思い出が蘇りそう。

俺はテーブルの上に置かれたアドバンスト・クラウンを指さした。

「過去にコレのことを調べた者がいたようでして、その話を聞くとトップランカーの中に過去に遡って情報を探ると、突然情報が途絶える方が多くいらつしやつたそうで。で、まあ、そういった方のほとんどがコレの使用者だったようですが」

「隠したのなら、情報が途絶えるのは普通ではないか？」

「いや、そんな杜撰な隠し方はしませんよ普通に考えて。ここにいらっしゃる方は魔王領や家領の領主でもあるわけですから、税金のことは詳しいかと思えます。……税を誤魔化す者は、偽装しますよ。そのときの帳簿だけ隠したりはしません。それでは自分から怪しいと言っているようなものでしょう？ あるはずのものが突然途絶えたら、そこがおかしいと誰にだつて分かつてしまいますからね」

まあ、つまりだ。なんだか怪しいなと思えるトップランカーがいて、実際に調べてみたら物凄く怪しかった。なのに政府が何も言っていないし対応もしていないという状況。

それは裏に政府も関わるような大きな事情があると察して、これ以上首を突つ込むなよという警告だったのだと思う。

本気で隠すならそれっぽい情報を置いておいた方がいいだろうか
らな。

あからさまに毒キノコっぽい怪しい色合いのキノコは、なかなか食べられないみたいなき感じというか。うん、そう警戒色？ ここから先はアブナイよー、引き返そうねーというメッセージとしか思えない。

だからまあ、ローゼンクロイツにしろタンニン殿にしろ、ルヴァル義兄上にしろ、使用していないトップランカーはライバルを調べてもそこで引き返した。

ロイガンのような自分も使っている使用者たちは、「あ、お仲間かな」と考えた。

おもしろおかしく記事を書き立てたと言う記者連中にしたつて、消される一歩手前のラインくらいはわきまえていたはずだ。少なくとも現在生きている記者はそのはずだ。

何かあるなと思われる使用者ではなく、使っていないだろうと踏んだ『皇帝』に矛先を向けたのもそういつたところから来ているのかも

しれない。

脛に傷がある者の傷口を突つけば激怒される可能性が高いが、無傷の『皇帝』の腹筋を突いても不快に思う程度だろう。

ま、想像で妄想なのだが。俺にとってはどうでもいいと言えどもいいことだ。

しかし、俺ばかりが話しているような気がするな。気がすると言うか実際そうなのだが。

ファルビウムさまがあまり意見を口にしないのはいつものことのようなので、分かる。

叔父上やアジュカさまとは話が付いているようなものだ。

セラフォルーさんは前に通信したがこの件については何も言っていなかったし、アガレス大公は中立の立場を貫くのだろう。

となると、気になるのは公表に反対している兄上が黙ったままなところだ。

魔王サーゼクス・ルシファー。ルシファーの名を継いだ、魔王の筆頭である。

「どうやらここは俺が話す場のようなのでお聞きしますが、ルシファーさまはこの件についてどう考えていらっしゃるのですか？」

アジュカさまと叔父上が賛成側。セラフォルーさんとファルビウムさまとアガレス大公が中立的。

あとはもう兄上次第ってことだ。

議会なら決着が付いてしまっているところだが、これは議題にあげた時点で公表したのと同じことになってしまう内容。議会にはかけられない話だ。

「私は『王』^{キング}の駒を公にすることには反対だ」

「理由をお聞きしても？」

『王』の駒を表に出せば、自身もその力を得たいと考える者が必ず現れる」

それはそうだろう、10倍から100倍以上の力を得られると言うのだから。間をとって数十倍としても、『赤龍帝の籠手』で5、6回の『倍加』を重ねたほどの強化だ。

ハッキリ言つて、見える世界が変わる。リスクなしにそれが得られると言うのならば、欲しいと言ひ出す者は多いはずだ。

「そうでしょうね。ですが、その何が問題なのでしょう？ 強くなりたいという考えは別段咎めることではないはずです。戦前にあつた大軍団ではなく、少数精鋭の戦力をもつて悪魔の社会を維持していくという考えはルシファアさまのものですよね？ その少数精鋭の眷属を抱える『王』である貴族が強くなることは、そのまま悪魔の戦力の増大に繋がるでしょうし、主殺しを考へる転生悪魔も少なくなるでしょう。『はぐれ悪魔』が減少すれば、『悪魔の駒』制度も現存より効果を發揮するはずです。良いことばかりではないですか」

悪魔の数と戦力維持のために、『はぐれ悪魔』を大量に出しても他種族を悪魔に転生させる『悪魔の駒』イザイル・ピリスの制度を導入したのだから。

「リヴラクス。ヒトは変わる。過ぎた力を得た者は、政府に害意を抱き、邪な考へに奔るだろう。絶大な力は、ヒトの目を曇らせ溺れさせる」

これはアジュカさまからも聞かされた内容だつた。兄上は強い力を持った悪魔を増やしたくないようだから、テーブルの上のコレを広く使用させたくない。

だが、コレを表に出せば、議会の議題としてコレを使用可能とするかどうかが争われる可能性がある。そうなったときに、使用禁止として決着させる自信がないのだろう。

「現状の制度では、戦となつた際に先陣に立つて戦うのは貴族が大半の『王』とその眷属です。それが弱くては政府に害意も何もないでしょう。敗北すればその政府自体が存在しなくなつてしまいますから」

「今は争ひ合う時代ではない。それなのに戦力だけが増大してしまつては、戦争を望む声が増えるだろう。私はそういった事態を避けたいのだよ」

「そうは言つても、それこそかつて政府に害意を抱いた方々によつて立場を追われた者たちが活動を活発化させているではないですか。そのことはルシファアさまの方がよくご存知かと思ひますが」

兄上たち現四大魔王や叔父上、アガレス大公はかつての政府を力で倒して現在の地位に就いた方々だ。

超越者として、魔王ならざる身の悪魔には過ぎた力を手にした兄上たちこそが、当時の政府にとっては『害』だったはずだ。

「あの方たちは、私たちとは違う。民衆を顧みなかった。民にどれほどの犠牲を出そうとも戦争を継続されようとしていたのだ。だからやむを得ず、ああした事態になってしまった。そのことは理解してくれているはずだと思っていたのだが」

「ええ、もちろん分かっていますし、そのときの魔王さま方の判断を支持しますよ。そうでなければ、そもそも俺は生まれていなかったでしょうから。ですが、前魔王さま方の一族が戦争の継続を望まれたことについても、分からない話ではないと思っています。少なくとも俺が当時の彼らの立場であれば、同じことを考えたはずですから――」

俺は当時のことを知らない。その当時に兄上たちと前魔王の子らとの間にどういったやり取りがあったのかも聞いていない。教科書に記されていないことも多いだろう。

ただ、グレモリー家の者として戦争の継続しようとしたことに共感できる部分があることは確かだ。

前四大魔王は、大戦中になくなっている。ドライグやアルビオンに殺されたわけではない。ならば、前魔王の子らにとっての天界陣営、墮天使陣営とは――。

「――親の仇ですからね。『聖書の神』と墮天使どもは。俺は『赤龍帝の籠手』の所有者ですから、悪魔の中でドライグがどう思われているのかを知っています。それにバラキエルの娘に向けられる眼も見てきました。……兄上、あえて兄上と呼ばせていただきませんが、この俺に、父上や母上、そして現在のルシファーである兄上を殺した者を許せとは言いませんよね？　俺がもしその立場になるときがあったなら、必ず報復します。休戦？　和平？　あり得ませんね。兄上はたとえ義姉上やミリキヤスが殺されても民衆のこと想って止まるのかもしれませんが、俺には出来そうもありません。顔も名前も知らず、会

話の一つもしたことの無い者にかけるものなどありませんから」

なんか、そういつた場面を想像しただけなのに、カツカとして来たな。思わず言葉に熱が籠ってしまった。

「リアス……それは……」

兄上は何か言いたそうだが、言葉が上手く出てこない様子だ。

そんなときだった。パンツ！と手を叩く音がしたのは。

「はい、はい。ちゅうもーく☆ アジユカちゃんが何か言いたそうだから、聞いてあげて」

セラフオルーさんから話を振られたアジユカさまが口を開いた。

「サーゼクス。ここで何を話し合おうと、リヴラクスを止められなければ公表はされてしまう。そして、止めようとすれば……」

そこでアジユカさまは叔父上に視線を向けた。

「既に半ば表に出してしまった現在の状況でそうなれば、魔王派がグレモリー家次期当主の口を塞いだと喧伝させてもらうことになるだろう。こちらとしては、その方がありがたいが」

ん？ あー、俺がもう公表しますよーと言いまわってしまったているので、それを兄上が止めると、兄上に後ろ暗いところがあるように思われてしまうということ……か？

「それに、結局のところコレを製造出来るのは俺だけだ。議会がどうなろうとも、俺が首を横に振ればそれまでと言える」

完全に個人の能力に依存しきった技術だからな、コレ。アジユカさまが「うん」と言わなければ、配布も何も無い。

まあ、そもそも兄上がヤバイヤバイ言う代物を造っておいて管理を怠り、流出させたのもこのヒトなんだが。機能停止出来るって言つたのに……。

相変わらず何を考えているのか分からない方だ。

「リヴラクス。キミとしてはロイガン・ベルフェゴールを『騎士』に出来さえすればいいのだろうか？」

「ええ、それと、叶うなら彼女の名誉が守られれば……ありがたいところですよ」

まあ、最悪の場合は駒を入れられなくても引き取るつもりだったの

で、使用者の面目が立つ状況で『騎士』に出来るなら目標を大幅にクリアと言える。

欲を言えば、戦力増強！ 墮天使滅殺！ 領土拡張！ 冥界つて名前を悪魔の世界という意味の『魔界』に変えてやろうぜ！ くらいまで行きたいところだが。

「この場で話し合うべきことは、公表を前提として、それをどうやって上手く乗り切るかではないかな？」

アジユカさまのその言葉に兄上が頷いてからは、俺の出番はほとんどなかった。

何のために来たのやら。まあ、今後の参考にはなったが。

アドバンスト・リーグ

冥界のどこか、ごく一部の者しか知らない場所。そこにネビロス家の研究機関の施設があった。

その施設の一室に、複数の魔力式モニターに囲まれて椅子に座る小さな人影がある。見た目は初等部の半ばほどの女の子のよう。だが、彼女の瞳はその見た目を裏切る落ち着きを宿していて、その正体が長い年月を生きた悪魔なのだと思える者に教えてくれる。

彼女はネビロス家の一員、名はラミラ・ネビロス。
「そうになりましたか」

ピンク色の長い髪をしたラミラの視線は、モニター群の中のひとつに向けられていた。

画面にはアジュカ・ベルゼブブとリヴラクス・グレモリー、そしてロイガン・ベルフェゴールが映し出されており、今まさに『アドバンスト・クラウン進士の冠』が抜き取られようとしている場面だ。

片膝立ちのロイガンへの頭部両脇にアジュカが両手を近づけ、被り物を外すような仕草をする。すると、ロイガンの内より小さな王冠状の物体が現れ、アジュカの手の中へと納まった。

映像内の説明によれば、それがアドバンスト・クラウンであるらしい。前魔王——真なる魔王の血族に通じる現政府所属貴族から提供されたという『王』の駒とは形が違う。

幻術か、あるいはアジュカの異能によって形状を変化させているのだと思われる。

アジュカによるアドバンスト・クラウン摘出に続いて、リヴラクスからロイガンへと『騎士』の駒が与えられる。

その後、三者がそれぞれのコメントを発し、画面が切り替わった。画面に次々に映し出される顔と名前。アドバンスト・クラウンを使用していた数十名のレーティングゲーム上位陣が公表されて行った。

元は才能に乏しかった者を、最上級悪魔クラス・魔王クラスへと引き上げる技術。それは『後天的超越者の作製』に似通ったところがあった。

アジユカ・ベルゼブブは数百年前の時点で、後天的に魔王クラスを生み出すことに成功していたのだ。

「今のアジユカ・ベルゼブブは、超越者の作製を可能としているかもしれませんね？」

ラミラがどこか楽し気に背後へと視線を向けると、そこには嫉妬に顔を歪めたエダーギ・ナベリウスの姿があった。

エダーギの研究テーマは後天的に超越者を造り上げることだ。エダーギ自身の研究がそこまで至っていない現状、現政府最高の技術者であるアジユカが魔王クラスを生み出したという発表は面白いものではない。

「……ラミラさま。また催促が来ておりました。稼働速度を上げろ」と

エダーギはどうか表情を取り繕った。大戦前、ナベリウス家はネビロス家に仕えていた。その頃の忠誠を未だ強く残すエダーギ・ナベリウスにとって、目の前の女性ラミラ・ネビロスは仕えるべき主である。

現行政府の下では、分家ではあつても当主として眷属を従え、上位者として振舞っていたエダーギ。だが、念願かなってネビロス機関に迎えられた現在、自身の研究に没頭することは許されず、探求よりも権力を望む連中との連絡役をさせられていた。

だが、そのことに不満はない。エダーギは今の立場に喜びを覚えてさえいた。

自身の研究を進めることよりも、主家に仕えられることの方が『ナベリウス』としては重要だ。

「返答は同じですよ。王子が封じられ、ようやく手を付けられるようになった研究対象を早々に使い潰すわけにはいきません」

言外に上手く宥めておけと言われ、エダーギはシャルバ・ベルゼブブを始めとした連中にどう対処したものかと床を見ながら頭を巡らせる。

彼の忠誠はあくまでも『ネビロス』に向けられたもの。真なる魔王を名乗る者たちは単に口だけはうるさい連中としか思っていないかつ

た。だが、スポンサーではあるので、それなりの対応をしなければならぬ。

ネビロスの方々の頭脳を雑事で煩わせるわけにはいかないのだ。

「そんなことよりも、これを見てみなさい」

エダーギの思考など全く気にもしていない。そんな調子の声に顔を上げると、ラミラは先ほどの放送を映していた物とは異なる画面を指さしていた。

「これは……」

「ええ、興味深いと思いませんか？」

たしかに、どうなるのか気になる。

ラミラの顔の向きが変わり、それを追いかけたエダーギの視界の中に最も大きなスクリーンが納まった。

画面の中で、子を孕んだ悍ましい肉塊が脈動している。

「代理母ということになりますか。こういった結果になるのでしょうか？」

ネビロスの血族の多くは、『聖書の神話』における原初の罪に似た欲望を抱いている。

知りたい。暴きたい。試したい。

禁断の果実を食べたイブ。災禍の壺を開いたパンドラ。振り返ってしまったオルフェウス。見てしまったイザナギ。

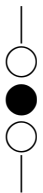
『聖書の神話』のみならず、多くの神話にこの手の話は登場する。

知ってはならぬと言われたら、知りたくなる。食べてはダメと言われたら、食べたくなる。見るなど言われたら、見てしまう。

禁忌を犯す甘美。それは悪魔にとってもやはり魅力的なもの。

興味。それが全てだ。

童女の姿をした悪魔は、その唇に薄い笑みを浮かべ画面を見つめた。



またぶち込めなかった。まただ。

いや、分かつてはいたのだが、黒歌、ラティアに続いてこれで三連続三回目である。俺は女の胎に『駒』をぶち込んで眷属にしてやりたいの、なかなか上手く行かない。

黒歌のときは駒数節約のために仕方が無かった。通常の『僧侶』2駒だった黒歌を、変異『僧侶』一つに切り替えてもらうために必要な処置だったのだ。さすがの俺も、アジユカさまが見ている眼の前で、「おら、子宮で下僕に堕ちろ！」とかヤレない。

ラティアのときも仕方が無かった。あの場面で披露しろってアスタロト卿からの要望があったのだからどうしようもない。さすがの俺も、観客席のみなさんの注目が集まる中でラティアの下半身を露出させようとは思えない。

そして今回のリュイことロイガン・ベルフェゴールだ。全国放送である。テレビの前の平民風情にどうしてそんなサービスシーンを提供できようか。アダルトなビデオじゃねーんだよ。

しかしこれで『女王』と『騎士』が揃った。『王』たる者はお出かけの際に『女王』か『騎士』または両者を傍に侍らすものなので、眷属内における社交面での重要なピースがこれで埋まったことになる。

『王』リヴラクス・グレモリー

『女王』レイヴェル・フェニックス

『戦車』朱乃

『僧侶（変異）』黒歌

『騎士』ラティア・アスタロト

『騎士（変異）』ロイガン・ベルフェゴール（リュイ）

ふむ、レイヴェルを『女王』にしたところから始まった眷属集めだが、一年も経たずにこれはなかなかのハイペースなのではないだろうか。ま、朱乃はレイヴェルよりも先に手元にいたのだけれどな。

『兵士』の駒の内二つはソーナとイリユカにそれぞれひとつ挿入する予定で、『僧侶』の残りひとつは現在資料を読んでいるところだ。

マグレガーが資料をくれた『僧侶』候補は二名。総合力で上に行く

が生家の事情から少々口説き落とすのが難しそうな貴族系魔法使いの娘と、特定領域限定で突出した才能がありそうな訳アリ庶民系魔法使い娘。

悩ましいなあ……しかし、どちらもまだまだ幼いが、見た目的な将来性は十分ありそうに思える。いつそ両方頂きたい気もするが、有望株を両方引き抜いてしまつては結社的には困るのだろうか？

何にしても兄上の『僧侶』マグレガー・メイザースは大変良い情報してくれたものだ。今後数年以内に話が来るだろう魔法使いとの契約に関して、『黄金の夜明け団』は鼻負してやつてもいい。

というか、マグレガーがこういうことをしてくれるのは、それ狙いだろうしな。『僧侶』候補の彼女たちは、悪魔への生贄のようなものである。

マグレガー的には、強引に攫つてしまつても問題の少ない訳アリ庶民系娘の方がありがたいようだが。

聖王剣保有貴族ペンドラゴン家の娘の方は、教会勢力との関係性が複雑っぽいしな……。

教会と魔法使いは仲が悪いはずなんだが、英国の王侯貴族は教会とも魔法使いとも関係が深いようで……人間はよく分からん。

キリスト教的には、魔法使い連中は地獄行きなんだけどな。実際、キリスト教圏の魔法使いの魂は、死後に地獄の下層域である冥府に落ちていくらしいし。

まあ、あそこはハーデス神の管轄下なので『聖書の神話』の影響が強い上層域と違って暮らしやすいそうさ。地獄に落ちた魔法使い連中は、魔法談義とかしながらのんびり過ごしてるそうさ……。

より罪深い魂の方が地獄ではお気楽に過ごせるとか、訳が分からないよ。

『なあ、ドライグ』

『なんだ、兄弟？』

『ウェールズの赤い龍とペンドラゴン家って関係ないのか？』

『覚えがないな』

『ないのか』

『ない』

ウエルシュ・ドラゴン

赤い龍の帝王ア・ドライグ・ゴツホ。ウエールズの赤い龍。

伝説では、アーサー王の父親が『龍の頭』ペンドラゴンという称号で呼ばれるようになったのは、赤い龍と関係があったはずなのだが。

もしかして、ドライグは単に通じかかっただけだったりするのか？
で、通りすがりのドライグを見て、「オツ、かけーやん。アレを旗にして掲げたる。それともあの龍をデザインした兜でも被ろうかな？」とか思っつて、龍の頭のペンドラゴンさんになったとか？

というか、人間やつていた頃はアーサー王とかの話つてただの物語だと思っつていたのに、聖剣エクスカリバーも聖王剣コールブランドも実在するんだよなこの界限。

でも、おそろく同時期にその地を支配していただろう史実の王の話も伝わっているわけで……訳が分からん。

案外、この冥界みたいに、ブリタニア界とかがあったのかもしれない……ペンドラゴン家はその異界から人間界にやって来たみたいなの。この辺り、ドライグは記憶が曖昧で役に立たん。

『じゃあ、ドライグはローマ帝国あたりの生まれだったりするのか？』
ウエールズの赤い龍の旗は、元はローマ軍の旗が由来らしいな。白い龍のアルビオンも元はローマ軍かららしいので、そう考えると二天龍は兄弟みたいなのになるのか。

全盛期のローマ帝国軍団の強さが二天龍の背景にあるのなら、まあ、そりゃ強いよなっつて気がしてくる。ローマ軍と戦った連中が、「やつべ、ローマ、やつべ、つよつよ。旗だけでも真似しとこ、リスベクト！」みたいな感じで二天龍が生まれてきたとか。で、その後になんとなくウエールズに居ついていたら旗に描かれ、そして伝説へ……みたいなの。

まあ、ローマもどこの旗印を真似たらしいが、昔のことはよく分からんな。超常存在の皆さん方は、その辺りが曖昧になりがちだ。

『そんな昔のことは忘れたな』

『それも封印の関係か？』

『かもしれん』

ホント、イマイチ出自がハッキリしないんだよな。ドライグさんつて。

全盛期は世界の超常存在強さランキングで、無限の龍神の次の席をアルビオンと争い合っていたらしいのだが、大暴れしていたことしかよく分からんという、ね。

『まあ、いいか。とりあえずペンドラゴン家とは特に関わりはないんだな』

『覚えている限りでは特にないな』

実はドライグの親戚というか、人間とヤルことやってこしらえた子孫だったりほしないわけだ。良かった良かった。

もしドライグと関わりがあったら、ちよつと気を遣わなければならぬところだったからな。

聖剣つて悪魔にとつては危険物以外の何物でもないから、聖剣の王なんて代物は機会があればポイしてやりたいのだ。こう粉々に砕いて次元の狭間にシュート！　みたいな。

いや、それだと謎の力で戻つて来て合体復活の上に覚醒パワーアツプとかしそうで嫌だな。マンガとかでありがちな展開。

でも、所有している家の娘を籠絡して盗み出させるとか、そういうのイイよね。やってみたい。もしやれたら、宝箱に入れて兄上魔王の城の宝物庫にでも置いておくつてもアリだな。

『どこのゲームだ、それは』

『いや、実際自分の弱点になるけど、下手に壊したりしても何か起こしそうな伝説の武器とかさ。保管場所に困るだろう。手元に仕舞っておきたくないか？』

『分かる』

『ドラゴンはお宝集めるの好きだしな』

まあ、聖王剣処分計画は冗談として、『僧侶』についてはレイヴェルとも相談しつつ考えていくとするか。真面目に甲乙つけがたいところがあるからな。難易度的にも、ドライグ復活計画的にも、セキュリティ関係の才能がある方が望ましいのかもしれないが。

無事に魔法使いを勧誘性交できたなら、『僧侶』が埋まることにな

る。そうなると駒はあと『戦車』が一つと、『兵士』が六つになるな。いや、『兵士』は五つになるのか？

クレーリア・ベリアル之魂を確保はしているからな……躑というか調教というか、まあ、彼女には教育が必要だろう。

聞いたままの性格と行動だとかなり危ない気がする。

お貴族様学校に行けず、領主一族を慕う平民たちと一緒に学んで育った名門貴族の令嬢さまだからな……。その上、身分違いの恋というか、道ならぬ恋というか、障害が多い恋愛で燃え上がっちゃって周りが見えなくなるタイプ。

なんというか、こうクレーリア・ベリアルって、『ヒロイン』っぽい雰囲気を感じるところがある。小説サイトでよく読んでいた『悪役令嬢もの』に出てくるいくつかのヒロインちゃんのタイプの内、天然でやらかすタイプのような匂いが漂っているように思えてならない。

こう、なんていうかスラム街の住民に炊き出しだけして満足してそうな感じ。飯は食わせてやるけど、仕事を作って自力で食っていけるところまでしてあげないみたいな。

まあ、クレーリアに関しては、縄張りの評価の上書きだのなんなのと言われているせいで、マイナス印象があることは自覚しておかないといけないか。

俺の営業担当地区、前任者のせいでマイナス評価からスタートかよ！ おのれ！ という気持ちがあることは否定できないからな。

話してみれば出来るお姉さんかもしれないし……。

とまあ、やや複雑なクレーリアだが、彼女は多分『兵士』の駒一つでいけそうな感じだ。

というか、俺の『兵士』は変異したもものばかりなので、だいたいの悪魔は『兵士』一つで眷属に出来てしまう。さすがに天然物の魔王クラスとなるとそうもいかないだろうが、最上級悪魔クラスに手が届くくらいの強さの者ならほぼいけると考えて良い。

変異『兵士』の駒の容量は、通常の『僧侶』や『騎士』と同等かいからか大きいくらいの感じがする。『兵士』はプロモーションするからなのか『戦車』『騎士』『僧侶』の性質を含んでいるので、駒との相

性はあまり考えなくていいしな。

男なので絶対に眷属にすることはないが、ライザー義兄上でも変異『兵士』ひとつで行けるだろう。

さすがにアドバンスト・クラウンなしでトップ10入りもすることがあるルヴアル義兄上ともなると変異『兵士』ひとつでは無理そうだが。『戦車』ぐらいは必要そう。

あのヒトって、タンニーン殿と同じくらい強いからな。

こうやって考えてみると、レイヴェルの強さで『女王』つてのはレーティングゲームだけを考えるともったいなかったような気もしてくる。

が、レイヴェルは俺の眷属の顔だからな。やはり『女王』であるべきなのだ。

俺の代理として活動してもらおうときに『兵士』と『女王』では、相手の受け取る印象が全く違う。

レイヴェルは今現在も俺の代わりに頑張ってくれているので、やはり『女王』で良かったのだ。

年末にランキング七位のリュディガー・ローゼンクロイツを眷属の眷属として引き抜き、今回は二位のロイガン・ベルフェゴールを眷属に加えて引退させた。

その上アドバンスト・クラウンのことあるので、現在俺のところにはマスコミその他からの取材の希望が物凄く来ているし、貴族やプレイヤーからの問い合わせが殺到中だ。

だが、俺はそんなものにいちいち対応したくない。特に報道関係はお断りだ。

ということ、その辺りは愛しのレイヴェルちゃんに丸投げした。

面倒くさいことこの上ないはずなのに「お任せくださいまし！」と張り切って請け負ってくれた彼女には、今後も頼りっぱなしの甘えまくりだろう。

まあマスコミに関しては、フェニックス家かグレモリー家含む名門六家から話が来たもの以外は全部シャットアウトなのだが。

でも二月に入って学校再会したら、レイヴェルが学友たちからの質

問責めにあいそうでちよつと心配ではある。

リュイはレイヴェルの補佐をさせている。さすがに『女王』ひとりに全部お任せってワケにも行かないのでな。やはり経験値の高い眷属が居るってことはいいことだ。だいたいなんでも任せられるし、先達として経験不足を補ってもらえる。

ラティアがこつちにくるのは来月からで、性格的に外部との交渉とか向いてない。すつごくドライでアイスな対応を決めちゃってくれそうだな。

そこがラティアの味わい深いところなのだが。

朱乃は今頃股に食い込ませてやった縄の感触にフルフルしつつメイド仕事をしていることだろう。朱乃は基本外には出さないし、政治的なことをさせるつもりもない。

せつかく攫ってきて監禁してきた家出娘。これからもぎつちり拘束し続け鬨っていききたいものだ。その方が、束縛されたりイジメられたい娘な朱乃も悦ぶ。

黒歌と白音は相変わらず勉強中。家庭教師もタダではないので、しっかりと学んで欲しいところだ。

「リアスさま、そろそろお時間ですわ」

うんうんと脳内で現状の確認をしていると、来客を迎える準備をしてきていたレイヴェルが部屋に迎えに来た。

記者連中ごときになど会ってやらないし、貴族でも相手を選ぶ俺だが、断れない相手ってのもいる。

「分かった。予定ではビィディゼ殿だけだったが、急に増えたりはしていないか？」

「ええ、ビィディゼ・アバドンさまだけですわ」

有事の際に活躍を求められる代わりに、貴族家に話を持ち掛けられる特権を持つのが最上級悪魔。

そこからの申し出とあれば会わないわけにはいかない。それもルシファー派に所属することになった方とあってはな。

三十代半ばの金髪紳士（割とガタイは良い）といった見た目のビィ
ディゼ殿との型通りの挨拶を終え、俺とレイヴェルは席に着いた。
リュイもこの場に居るが、メイド服モードなのでお茶係である。

ビィディゼ殿も眷属から『女王』と『騎士』を連れて来ていたのだ
が、リュイのその姿を見て主を含めた全員の顔がなんとも言えないも
のになっていた。

長年のライバルがメイドさんをやっているならそうもなるだろう。

だが、残念ながらここはグレモリー家の本邸。現ルシファアの『女
王』である義姉上がメイドをしている場所なのだ。俺の『騎士』がメ
イドをしていても全くおかしくない。

文句があつたら兄上に言うべき、そうすべき。

「まずは我らの名誉を守っていただいたことに感謝を述べたい」

席について向かい合うと、気を取り直したビィディゼ殿が頭を下げ
てくる。

ローゼンクロイツの資料によると、このビィディゼ・アバドンは世
間体とか、名声・名誉とか、そういったものをかなり気にするタイプ
らしい。

「俺はロイガン・ベルフェゴールを『騎士』にしたいがために、アドバ
ンスト・クラウンの公表を強行しただけですよ」

感謝を拒絶はしないが、何のことかと一応とぼけてもおく。

公表された内容が真実。それ以外のアレコレなんてものはなかつ
た。そういうことになったのだ。

ロイガンさんが年下のリヴラクスくんに垂らし込まれてしまつて
機密情報をゲロってしまい、それでもどうしても彼女を『騎士』にし
たかつた俺が無理矢理強行してしまった。

それで、仕方がないからアジュカさまが出張つて来て、一緒にビィ
ディゼ殿たち他の使用者のことも公表されたというだけなのだ。

割と本気でその通りの内容であり、実はそれほど嘘がない。兄上や
アジュカさまら政府側が秘匿していたつても本当だしな。

ぶつちやけ、ビィディゼ殿たちは俺の眷属集めに巻き込まれただけ

である。

アドバンスト・クラウン使用者たちで勝敗操作とかもやっていたそうだが、それはまた別の問題だしな。大概のゲーム参加者は「貴族の付き合い」でやっていることなので、兄上たちもこっちについては黙認するしかないようだ。気に入らないそうだがね、処分するとなるとプレイヤーのほとんどを巻き込むことになって大騒ぎだ。

上級悪魔にまで出世して『悪魔の駒』をもらった転生悪魔プレイヤーにしても、「貴族の付き合い」からは逃れられないからな。

というか、転生悪魔って必ず主がいるので、そっちから命令が来たら従うしかない。ローゼンクロイツやタンニーン殿のように『番外の悪魔』が主なら別だが。

「そうですね。そうしておきましょう」

ビィディゼ殿はあごに手をやり、うんうんと頷いた。

『王の駒』ではなくアドバンスト・クラウンとして公表した結果、使用者たちの名誉は守られた。ビィディゼ殿は最上級悪魔のままになっている。他の最上級悪魔となつている使用者たちも同様だ。

リュイに関しては、主の俺がしがない上級悪魔なので別だが。

そんな名誉と地位は残つたビィディゼ殿その他数十名なのだが、大きく変わったところもある。所属派閥の変動だ。

なんと、使用者たちの大半がルシファー派に移動してくる事態になったのだ。

俺としては大半の使用者たちはアドバンスト・クラウンの機能停止や摘出、メンテナンスなどを唯一行えるアジュカさまのベルゼブ派に身を寄せることになるだろうと考えていた。

強さの根幹を握られている形になるのだから、それが当然だろうと予想していたのだ。

だが、ふたを開けてみればルシファー派に寄ってくる形になっていた。

以前リュイのところへ彼らから話が来ていると聞いていたので彼女が何かしたのかと思つたのだが、どうやらそれも違うよう……。リュイ本人にも聞いてみたのだが、俺が言った通りのことを言葉を変

えて伝えただけらしいのだ。

では、なぜベルゼブブ派ではなルシファー派なのかと言えば、その理由は単純。

アジユカ・ベルゼブブさまが、彼らの派閥への加入に条件を付けたからだ。

その条件とは、アドバンスト・クラウンの機能停止である。通常時は機能停止としておき、非常時のみに起動する。そういった状態への移行をアジユカさまは使用者たちに要求した。

ラティアから聞いたところでは——つまりアジユカさまが俺に情報を流してきたわけだが——ベルゼブブ派の戦力を上げたくなかったらしい。

あくまでも魔王派の最大勢力はルシファー派としておきたかったようなのだ。おそらく政治的なバランスで何かがあるのだろう。

でも、あのヒト、政治やってるより人間とゲームしている方が楽しいらしいしな……自派閥が強くなりすぎると面倒とかそういうこともあり得る。

魔王のお仕事の大半は冗上に任せておきたいとかさ。冗上を見ている限りだと、あまり楽しくなさそうだしな。

せっかくお貴族様に生まれたのに、毎日毎日お仕事お仕事なんてやってられんってものだ。

「レーティングゲームへの参加についてはどうなりそうですか？」

さらにアジユカさまは、レーティングゲーム公式試合についてアドバンスト・クラウンの機能を停止した状態での参加を求めたそうなのだ。

「現在ゲームの運営は混乱中ですからね。古い悪魔の方々は公表について事前に知らされていたとはいえ、数十の手駒が一斉に消えることまでは考えが及んでいなかったのかもしれないですね」

「では、今後の参加はされない？」

ビィディゼ殿は最上級悪魔なのに、割と丁寧な話し方だな。

まあ、ルシファー派に来るってことなら、グレモリー家次期当主はそのうち派閥のまとめ役のひとりになるわけだから、おかしくはない

か。

「落ちていくだけと考えると、ベルゼブブさまの条件を呑んでまでベルゼブブ派につく者は少数でしょうね」

機能停止状態となると、力が相当落ちることになる。今までの百分の一の力で戦うとなると当然順位は落ちていくだろう。

そうなるとプライドの高い悪魔貴族としては、面白くないだろう。これまで下に見ていた連中に抜いて行かれることになるわけだからな。

「兄上からは何かありましたか？」

俺も特に聞いていないんだよな。ルシファー派で受け入れたとしたか。

兄上はもつと俺に情報を寄こすべき。どうしてラティア経由でベルゼブブ派から入ってくる情報の方が多いんだよって話だ。

次期当主なんだけどな、俺。グレモリー家の。兄上からはだいたい子供扱いなんだよな。

いや、俺の年齢的にはそれで合っているのだけれど。

「サーゼクスさまからは特に何も求められてはいませんが、どうやらあまり歓迎されてはいないようで」

兄上の性格的にはそうだろうなあ。不正とか好きじゃないし。と
いって、混乱を招いてまで魔王の強権振り回してバツサリとかもしないし。

もうちよつと腹黒くやれば、大王派から引き抜きとかやれてただろうに。

綺麗でいたいヒトなんだよね。まあ、そこが兄上の良いところではあるのだけれど。

「身の置き所がない、と」

「まあ、そうですね」

代表としてビィディゼ殿が来ているが、アドバンストな悪魔数十名って戦力はかなり大きい。魔王クラス、最上級悪魔クラスがゴロゴロだ。

この戦力を無所属で放置ってわけにはいかないのだが――。

彼らはこれまでの付き合いからすると大王派に近いわけだが、アドバンスト・クラウンの機能をアジユカさまに握られている以上政治的に魔王派と敵対しているところに居続けるのは難しい。

じゃあベルゼブ派にと行ってみると、「弱くなるならいいよ」と言われてしまう。だけど、一度手にした『力』つてのはなかなか手放せるものじゃない。彼らはレーティングゲームのトッププレイヤー達だ。他勢力とは小競り合い程度しかなかったこの数百年の期間の中では、ゲームとはいっても戦闘に浸って来ている者たちだ。現在よりも弱くなることは受け入れがたいだろうな。

で、魔王派閥で次の候補になるのが、兄上のルシファー派。ここでは一応受け入れられたわけだが、トップの兄上からは良く思われていないような印象だった、と。

中立派、レヴィアタン派、アスモデウス派となると、ビィディゼ殿たちを受け入れるのは派閥の規模的にちよいと厳しいからな。

数の多い大王派か、頭に超越者を頂いているベルゼブ派かルシファー派でないと、ビィディゼ殿たちを抑えきれなくなってしまううだ。最初はともかく、数百年後を考えると、いつの間にか派閥内の主導権を持つていかれそうである。武力的に。

ファルビウムさまはよく知らないが、セラフオールさんとビィディゼ殿ならセラフオールさんの方が強そうではある。でも、ビィディゼ殿の他に二名もいればセラフオールさんでもまず勝てない。

いくら「レヴィアタン」でも、トップランカー三人に勝てるわけがない。抵抗むなしく捕らえられて、魔法少女の衣装をグへへと剥かれてしまいそうである。

「それで、ビィディゼ殿は俺に何を求めているらっしゃるのですか？」

まあ、予想は付くが。

悪魔の現政府内の大きな派閥は六つ。大きい方か順に、大王派、ルシファー派、ベルゼブ派、中立派、レヴィアタン派、アスモデウス派。

だが、この各派閥内にもまた思想や利益関係でグループが存在する。前世で言うと、日本の政権与党内に大物が何人かいて、その大物

の影響下にある議員がいてグループ作っていたようなの。

ルシファア派にしても、内部で幾つかに分かれている。政策によっては兄上とは違った意見を述べるグループだってあるわけだ。

で、ルシファア派内で兄上に次ぐまとめ役が誰かって言うと、父上ことグレモリー公ジオティクスである。正確には、グレモリー家当主ってことになるか。

グレモリー家当主ってのは、いずれ俺が就く立場だ。

「今はまだですが、将来的には、と」

ふむ、ロイガン・ベルフェゴールはアドバンスト・クラウンを使っていたし、ゲームの勝敗操作にも関わっていた。

そのロイガンを『騎士』に迎え、かつ名誉は残すように話を持って行ったということになっている俺は、彼らから見ると理解があるように見えるわけか。

まあ、勝敗が分かっているゲームでの不正な賭博もちよつとはやったしな。

なんだっけ、日本史で習ったような……「白河の清きに魚も棲みかねて、もとの濁りの田沼恋しき」とか、うん、なんとなくそんな感じ。「なるほど、将来的には……。では、しばらくは静かにされている予定で？」

そう聞くと、ビィディゼ殿はテーブルに少し身を乗り出した。

「聞くところによると、『紫紅の龍帝』殿は平民向けにレーティングゲームの真似事のような催しを計画されているそうですが」

「ああ、まあ、予想外の金が手元に溜まっているので、バラまきついでの道楽としてですがね。それに最初は領軍のガス抜きを兼ねたものになりそうです」

金なんて溜めておいても仕方がないからな。それで平民の中に眠っている突然変異的な強者が拾い上げられれば万歳つてもものだ。ついでにグレモリー領に金を落とせるし。

『王』たる上級悪魔と少数精鋭の眷属を悪魔の戦力とするってことで、イマイチ活躍の場がなくなってしまうっている各貴族領の軍に見せ場を用意してやれるしな。

「金を投げ捨てるようなものではありませんか？」

「しばらくは、国債の償還で毎年決まった額が政府から入ってきますからね。その範囲内で平民に仕事を用意してやろうかとも考えているのですよ」

税金ではなく個人資産なので好き放題だ。税金はあれだ、使い道が大体決まってるからな。

これこれこういうことを領主側でするから領民どもはつべこべ言わずに払えって、一種の強制的な契約だしね。

「なるほど。でしたら、そのために用意する施設や人員などを使って、我々にも試合をさせていただけませんか？」

「ビイディゼ殿たちの試合をですか？」

「ええ、お恥ずかしながら、私はアバドンの家を飛び出してきて以来レーティングゲームのことしか考えずに生きてきました。他にも同様なものが多い。といって、力を失い、順位を落しながら今のレーティングゲーム界に居続けるのも辛いものがあるのですよ。今のこの力のままで、試合をしたい。我々はそう考えています」

このヒト、ゲーム大好きなのか。いや、まあリユイの同類ならそうなるか。正式な方でなくても、試合やってれば付いてくるファンもいるだろうしな。

平民からの評判というか、称賛を受けたいというか、名誉欲を満たせる場所が欲しいわけだ。

「もちろん、我々も協力させていただきます。今のレーティングゲームの関係者、スタッフなどとも我々は繋がりがありますので、ある程度は引き抜くことも可能でしょう」

そうだなあ、慣れてるスタッフは欲しかったんだよな。どこの業界もそうだが、悪魔って寿命がクソ長くて老化もしないから退職者とかそういうないんだよな。

クビになってるヤツもいるけど、それって何かやらかしたヤツだろうから使いたくない。

「この話、レイヴェルはどう思う？」

俺の独断で決めちゃってもいいのだが、ちよつと不安である。

こういうときに嫁さん頼りだと、ちよつと頼りないヤツだと思われてしまいそうなものだが——俺はグレモリー男子なので何の問題もない。

何故って、ずっと昔からグレモリーの男はそういうものだって評判だから。いまさら、どうこう言われやしない。

「私たちは若輩の身ですので、ジオテイクスさまやヴェネラさまと相談する必要があるとは思いますが。私としては受けてもよろしいのではないかと思いますわ」

「ライザー義兄上にも関わってくるから、フェニックス卿にも話しておいた方がいいか」

フェニックスの特性で稼いだ金だからな。レイヴェルは大半を俺にくれたが、だからってフェニックス家とは関係ないってわけでもないからな。現在無役のライザー義兄上には是非引き受けていただきたいところだ。ちよつと、元レーティングゲーム上位陣が絡んできうだけど、まあいいだろう。

「ただ、不正行為などはなさらないようお願いしたいですわ」

レイヴェルがそういうと「もちろん」とビィディゼ殿は頷いた。

まあ、ただの野良試合だからな。俺が主催して大がかりにやるってだけの。公式ゲームではないので、そこでどんな活躍をしようが出世には関係ないし、なんの功績にもならない。

勝ちまくったからって上級悪魔が最上級悪魔に昇格することもなければ、眷属の下級悪魔が中級・上級と上がっていくこともない。

「まあ、ルシファアさま好みの公正な試合をしていけば文句は言われないでしょう。ビィディゼ殿たちへの印象も変わるかもしれませんね」

父上や母上に相談はするが、アリ寄りの方向で進めて行こうじゃないか。

俺としては、魔力の低い平民連中だけの地味な試合ばかりになりそうなところに、ビィディゼ殿たちの派手な試合を混ぜ込めるので、悪くはない。調整するのは、ライザー義兄上にお任せする予定だが。

ビィディゼ殿たちは、公式レーティングゲームの代わりに試合を楽

しめる。たぶん、出演料的なものが必要になるだろうが、オツケーとしよう。予算内で済めば。

なんなら、公式ゲームから締め出されちゃって拗ねてるらしいアジユカさまに加わってもらってもいいしな。うんうん。

ま、賭け事はやるのだが。それが収入源だからね。

それで、後はだ……。さつきからリュイがそわそわしている様子が目の端に映っていたのだが……。参加したいのかもしれないな。レーティングゲーム大好きだから。

まあ、そんな女をゲームより俺のチンコが大大好き、愛してる状態にしてやったのがこの俺、リヴラクス・グレモリーなのだが。

我ながら、『赤龍帝の籠手』とグレモリーの魔力は恐ろしいものだと思うよ。

まあ、リュイがゲームしなくなったなら、主催者権限でねじ込むことも出来るしな。アドバンスト・クラウンでの強化の代わりに、丁度いい塩梅の『赤龍帝からの贈り物』を与えて参加させればいいだろう。俺がルールなので、特別扱いもオツケーなのだ！ フハハ。

子供の問題が解決したら、ローゼンクロイツを参加させてみてもいいか。

うんうん、引退組トップランカーだけのリーグ戦とかいいかもな。客寄せ的に。

ビーディゼ殿たちの方は、『アドバンスト・リーグ』とでも名付けようかね。

で、平民向けの方は……。なんだろ、低いとか、弱いつてイメージの言葉だと、さすがにやらしいしな。

ま、後で考えるところかね。

このあと、折角だからとビーディゼ殿に軽く稽古を付けて頂いた。リュイもそうだが、歴戦のレーティングゲームプレイヤーから直接教えてもらえるってのはありがたいものだね。

公式戦引退組で手が空いている方がいたら、ソーナが造る造ると言っている学校の教師とかもお願いできるかもしれん。

と、そんな会談があつてからしばらくして、ビイディゼ殿から手紙が来た。

なんでも、ビイディゼ殿には姪がいるらしい。

で、その姪っ子は学習期間が終了したらレーティングゲームに参加してみたいと言っているそうなの。

だけど、彼女は現政府に関わらないという方針のアバドン家の娘。レーティングゲームに参加するとなると、御家との縁切り必至。

それで、親類で家出の先達つてことで密かに相談を受けていたビイディゼ殿は、大王派とのパイプを活かして援助してあげようと考えていたと……。

ふむ、女子大生の姪に援助つて……なんだかイヤラシイな。

問題の姪っ子の写真も入っていたのだが、うん、金髪ポニテ美女である。良い。

ふむふむ、だけどそれが今回のアドバンスト・クラウン騒動で大王派との関係が薄くなってしまったので、ルシファア派筆頭貴族家の次期当主であるこの俺に姪っ子のことを願いたい……と。

ほほう、ほう、なるほどね。ビイディゼ殿は分かっておられる。まったく、不正はイカンと言ったばかりなのに。こんな話を持つてくるとは……。

うむ、まだ学習期間中らしいからそのうちつてことになるのだろうが、よろしくお願いされる日を楽しみにしておこうじゃないか。

虚栄と虚飾

『最後に、頭の痛くなる言葉を聞かせてやる。「神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれた。また神は地位の有るものを無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれた。それは、誰一人、神の前で誇ることがないようにするためだ。』——愚かな者、弱い者、身分卑しき者を選ぶのは、聖書の神のすることだ。俺はそんな者たちに価値があるとは思わない。悪魔ならば、賢くなれ、強くなれ、上を目指せ。自己の利益を追求し、他者を見下し、自分の力を誇ってみせろ』

——ああ、その通りだとも、『紫紅の龍帝』リヴラクス・グレモリー。金と地位と才能に恵まれた超越者よ。

ビィディゼ・アバドンはその名の通り『番外の悪魔』エキストラ・デーモンアバドン家の出身である。

名誉を求めてレーティングゲームの世界に踏み込んだ彼の船出は、順風満帆とはいかなかった。出身家とは縁切り状態、金もなければコネもない。

実家からの支援はなく、政治的な影響力もない。『ビジネス』で勝利を買うことも、『接待』で勝たせてもらうことも出来はしなかった。その頃のビィディゼにあったのは、貴族として手に入れた『悪魔の駒』を用いて得た眷属たちだけで、

心の底より貴族で良かったと思えたものだ。

最初期のビィディゼは、デビュー当時のロイガン・ベルフェゴールと似たり寄つたりの状況だったと言つていい。

戦術をどれほど研究しても突破できない壁があった。生まれもつた特性を磨き抜いても、才能≡魔力が足りず活かしきれない。

戦術で、努力で上に行けるのなら苦勞はない。

努力は、愚かな者に与えられた夢に過ぎない。そして、夢とは才能も金も地位もない弱者がすぎる最後の幻想だ。

この時期に、ビィディゼはそのことを身をもって経験した。

凡才がどれほど努力をしようとも、知恵を振り絞ろうとも、真に才能ある者には絶対に届かないのだと思ひ知らされた。

なぜなら、真の才能の持ち主もまた努力し、知恵を働かせるからだ。

ビィディゼも『番狂わせの魔術師』リュディガー・ローゼンクロイツと戦ったことがある。平民に向けた顔では彼を称賛して見せ、貴族との会話では彼を嘲るビィディゼだが、ローゼンクロイツの戦術と積み上げた努力は認めていた。

そうでなければ、勝ち越しているとはいえ敗れた経験もある己が惨めになる。

戦術重視でもある程度まではいけることは理解した。だが、同時に、それだけでは王者は到底無理であることも理解させられた。

戦術の鬼才、リュディガー・ローゼンクロイツですら第七位止まりだったのだから。

戦場で同じ奇手を通じるのは一度だけ。それも分の悪い賭けではない。定石が定石たる所以は、それが最も勝率が高いからに他ならない。

戦いは、兵の数と質と武装で決まる。寡兵で大軍を破った将は歴史に名を残すが、それは困難だからこそ称賛されているのだ。

華々しい伝説に刺激された愚者の大半は、夢破れて戦場に散っていった。

幾度も同じ相手と戦うことになる「ゲーム」ならば、なおさらだ。二度も同じ手でやられる間抜けはトツプランカーではいられない。

王者になり得るのは、異常なまでの絶対的な力を持った者だけなのだ。

ビィディゼの同期には、怪物がいた——絶対王者、不敗の『皇帝』、第一位ディハウザー・ベリアル。彼の存在が、ビィディゼにそのことを嫌と言うほど教えてくれた。

ああいった才能の塊に近づくためには、まともにやっつけてはどう

しようもないのだと。

ビイディゼは元七十二柱の貴族家に生まれた者たちとは違う。地位も金もある状況で『王』の駒を使用した者たちとは違う。

現行政府と距離を置くアバドン家の出身で、さらにその家から縁を切られていたビイディゼには、政治的な影響力を意味する地位など無いも同然だった。

家の支援を受けられない以上、金銭の余裕もそうありはしない。

違うが、他のレーティングゲームに気軽に参加できた立場の元七十二柱貴族家の『王』の駒使用者たちにビイディゼはこう言っている。『私には地位も金もあった。無かったのは最上級悪魔になれる才能だけだった』と。

権力のなさを誇る貴族がいるものか。貧乏自慢など見苦しいだけだ。『王』の駒を使った以上、才能が無かったことだけは認めるしかない。

だが、それ以外は無くても有ると言い張るのが、無かったとしても今現在ある以上有ったとすることが、ビイディゼの考える貴族の在り方だった。

ビイディゼたち『王』の駒使用者を自らの派閥に受け入れなかったアジュカ・ベルゼブブは、そうしたビイディゼの考えをどこまで見抜いていたのだろうか。

レーティングゲームを続けたければ、アドバンスト・クラウンと新たに名付けられたソレの機能を停止しろと要求して来たかの超越者は、その後にビイディゼたちが選ぶ道を予想していたのではないだろうか。

——踊らされているのだとしても構うものか。

「ルシファー派は我々を受け入れた。『紫紅の龍帝』との接触も成功と言っているだろう」

ビイディゼが長期間レーティングゲームのトップランカーとして在り続ける間に稼いだ金で購入した、いくつかの屋敷の内の一つ。

その広間に『王の駒』を使用している者たちが集っていた。魔王クラスから最上級悪魔クラスの者が数十名。しかも、レーティングゲームの上位で戦い続けてきた者ばかり。ここにいる者とその眷属だけで、天使や墮天使相手に戦争を仕掛けられるほどの大戦力であった。集った面々の前に立ち、ビィディゼは自身の活動の成果を発表していた。

「ビィディゼ。リヴラクス・グレモリーはどうだった？」

同胞のひとりから問いかけられたビィディゼは、一つ頷くと『紫紅の龍帝』リヴラクス・グレモリーとの会談の内容を伝えた。

するとビィディゼの答えを聞いた同胞たちの間にあつた空気が緩んだ。広間に安堵の毛色を含んだ気配が広がる。

「そうか……それでは、しばらくは様子見か」

「ああ、暇つぶしに道楽に付き合う約束をしてきたが、皆も構わないんだ？」

次々に上がる賛同の声に、ビィディゼは満足し内心でほくそ笑んだ。

リヴラクス・グレモリーとロイガン・ベルフェゴールが社交の場で動き始めてすぐ、ビィディゼは『王』の駒を使用しているだろうと睨んでいた者たちをまとめ始めていた。

そのおかげで、現在のこの立場がある。この広間に集っている強大な戦力がビィディゼを頭として動くのだ。

それぞれ思惑はあるのだろうが、纏まっていた方が影響力を持つことぐらいは皆分かっていて。欲望に突き動かされる悪魔が集う理由としてはそれで十分だった。

「構わないさ。だが、まだ二十にもならない若造の下につくことになるのか」

「上の連中から見れば俺達も若造だろうよ」

「違うない」

同胞たちの間で交わされる会話の通り、ビィディゼたちは悪魔としてはまだまだ若い世代だ。ほとんどが同世代で、戦後生まれ。

政治力においては、数千年を生きてなお欲望の火を燃やす老練な古

き悪魔にはかなわない。

だが、ここに戦力はある。アジュカ・ベルゼブブの気分次第で失われてしまう可能性のあるものではあるが、それでも権力の根幹である暴力がここにあるのだ。

後先を考えなければ、これまで自分たちに対して上から指示を出していた連中を皆殺しにすることすら容易い。そう思えるだけの戦力。その中心、指導的な立場に自身がいることは、ビイディゼの自尊心を大いに満たしてくれていた。

ランキング三位。龍帝の眷属に下った二位のロイガンを除けば、『王』の駒を使った者の中で最上位の位置にいたことが役に立った。

現政府と距離を置く『番外の悪魔』アバドン家の出身であることも、上手く作用した。

家同士の間にある政治的な因縁めいたものほとんど無関係のビイディゼは、家柄的に友好関係の者もいなければ、嫌悪し合う関係の者もない。

そのため、元七十二柱の貴族家出身者が多い中で指導的な位置に就くことへの反発が少なかったのだ。

もちろん、『王』の駒使用者の全てがビイディゼと行動を共にしたわけではない。大王派に残った者が何名かあり、機能停止を選んでベルゼブブ派に入った者も僅かにいる。

大王派の選択を取った者は、これまで貴族的な発言の多かった者。ベルゼブブ派に入った者は、公式戦に未練を残した者。

どちらも愚かだ。

ゲームに出られず、アジュカ・ベルゼブブに首を掴まれた者に大王派内での地位などあるものか。いいように使われるだけの未来しか見えないではないか。

『王』の駒——アバドンスト・クラウンなしでゲームに参戦しても、惨めに落ちぶれていくだけだ。力を失った自身への失望の中で墮落していくだけだ。

ビイディゼはそう考えていた。

ビイディゼやここにいる者の多くは、表向き平民寄りの言動を取っ

て来ていた者たちだ。

スター選手に集まる金の出所は平民のファンたちなので、サービスとして平民が喜ぶようなことを口にし続けてきた者たちだ。

平民寄りの政治を行ってきているルシファー派に属することになってもさほどおかしくはない。

ビィディゼ・アバドンは平民を愛している。彼らの愚鈍さこそが愛らしい。

彼らからの称賛の言葉が、羨望の眼差しが、ビィディゼの心を満たしてくれる。その上、金まで貢いでくれると言うのだから、嫌いになどなれるはずもない。

心の内で見下し嘲りながら、表向きの顔と安い言葉、真っ直ぐに見える行動で愚民どもを操る快感は、言語にはしがたいものがある。

名誉は守られたのだから、これからもビィディゼのその望みを叶えるやり方はあるだろう。そのために、彼はリヴラクス・グレモリーを利用するつもりだった。もちろんそれなりの対価も支払うつもりだ。

貴族同士の付き合いとは「ビジネス」なのだから。

「ビィディゼ。リヴラクス・グレモリーはどうだったんだ？」

さきほどと同じ質問。だが、質問者の求めている答えは違うものだということは、周囲の話の流れから分かった。

リヴラクス・グレモリーは平民を見下す発言を平然とする。それでいて、一定の人気を持っている。

巨大な龍の姿、圧倒的というのも生温い魔力。それを見て感じ取った平民共の中には、這いつくばり崇めることを選んだ者たちが多くいたのだ。

「バケモノだよ。我らが仰ぐに相応しいな」

平民は愚鈍だ。そして、上流階級の不祥事に大いに怒り、貴族の失墜を何よりも喜ぶという妬みと嫉みの精神で動く。それで自分たちの何が変わるわけでもないというのに、だ。

「貴殿がそこまで言うほどか……」

だが、何事にも例外はある。平民に嫉妬を抱かせない領域があるのだ。

『無価値』を持つディハウザーならばあるいは……といったところだった」

同じ悪魔、同じ種族だと思うからこそ嫉妬する。平民達は、自分たちでも貴族に生まれていたならあれぐらいは出来ると思うからこそ上流階級の者を妬むのだ。

だが、あまりにもかけ離れた存在は、ある一定の水準を越えた「強さ」を持つ者は、愚民たちから同じ悪魔だとは思われない。悪魔を超越したナニかとなるのだ。

それこそが、超越者。悪魔を超えた者。

理解を超越した存在を前にした愚民どもは畏怖に支配される。

政府、軍、魔王。それらの統治機構を破壊しかねない力を前にすれば、愚鈍な民でも分かるのだ。

敵と思われるよりは、怯えながら従うべきなのだ。

龍に生贄を捧げ、生存の許しを乞うた古の人間たちのように――。

「――『赤龍帝の籠手』は、たしかに神を滅する具現だったということだ。稽古の名目で一戦交えてきたのだが、その時の映像がある」

そう言っただけで映像が指を鳴らすと、広間に設置されたスクリーンが映像を流し始めた。

あの会談の日、ある程度話がまとまった後でビィディゼとリヴラクスはグレモリー家の保有する戦闘用フィールドに移動していた。

これからレーティングゲームに参戦していく新人に、ベテランのビィディゼがアドバイスを送ろうという名目だ。

今後、平民寄りのルシファア派の中でやっていくにあたって、サーゼクスからの心象がよろしくないビィディゼとしては、将来的にグレモリー家の当主となるリヴラクスに取り入って行こうと考えていた。

ただ、ビィディゼがまとめた者たちは、レーティングゲームにどっぷりと浸かったものばかり。ゲームの闇と業に身を浸して来た彼らは、同時に戦闘を好む者たちでもある。

だからこそ、ビィディゼはバカげた魔力の量と巨大な龍に変じられ

ることしか分かっていない龍帝の力のほどを見ておきたかった。

ビィディゼ達の現在の「強さ」は『王』の駒によって得たものだ。生まれ持ったものではない。

それでも、現状の自分たちの力を下回る弱者にはもう頭を下げたくはないと考えている者が一定数いる以上、確認は必要だった。

弱いくせに偉そうに口だけは出してくる年寄りは、もううんざりだ。

『王』の駒がアドバンスト・クラウンとして表に出たときからそう口にする者が増えていた。

その年寄りがいなければ、そもそも力を得られなかった。そのことを無視した意見だが、それは確かに同胞たちの本音だったのだ。

「これが例のタンニーンの子息を斬り裂いたという龍の爪か」

映像の中では、ビィディゼが龍帝の五本爪を躲し続けていた。

身を捻り、足さばきで掻い潜り、ときには『穴』^{ホール}に跳びこんで、ビィディゼは龍帝の攻撃を回避する。

『赤龍帝の籠手』の『倍加』も使っていない状態で、単に『滅び』を宿しただけの爪を振り回しているだけの龍帝は、第三位——元第三位のビィディゼ・アバドンに受け止めるといふ選択をさせなかった。

龍種の鱗は硬く弾性に富み、頑強だ。魔法強化された金属で作られた装甲に匹敵、あるいは凌駕する防御能力を持つ。

ボーヴァ・タンニーンは『魔龍聖』タンニーンの子だ。元龍王である父親には及ばずとも、その鱗がかなりの強度であることは間違いない。それを何の抵抗もなく斬り裂く爪を防御術式で止められるとは、ビィディゼは思ってもいなかった。

第三位であったビィディゼの魔力弾、拳撃、蹴打は、下位にいた元龍王タンニーンの鱗を砕きダメージを与える威力がある。その際にビィディゼは魔力を用いているのだが、龍帝が気軽に爪に籠めていた魔力はビィディゼの全力攻撃時のものを遥かに上回っていたのだ。『滅び』の特性も考慮すれば、回避一択しかなかった。

「おお、ビィディゼの『穴』^{ホール}を斬り裂いているぞ！」

アバドン家の血に宿る『穴』の魔力特性は、非常に汎用性の高い性

質を持っている。

空間に穴を生み出し、その穴にあらゆるものを吸い込み、あるいはそこから吐き出す。その性質は攻撃に、防御に、移動に、カウンターにと様々に応用可能だ。

『穴』を形成している魔力を消滅させられているのだよ。長大な爪を振り回してくるのではなく、刺突であったならカウンターも狙えたのだろうが……私が『穴』をそういった形で利用する様子はゲームで散々見せてきたのだ、警戒もされる」

相手の攻撃を穴の中に吸い込み、吐き出す。穴の出口を相手に向けておけば、それだけで相手は自分自身の放った攻撃を喰らってくれる。

その手はレーティングゲームの試合の中で何度も使い続けてきたビィディゼの常套手段。知っていながらそれを簡単に許すようでは、程度が知れるというものだ。

それでもカウンターを成立させるのが、長年ゲームの中で磨いてきたビィディゼの技なのだが……この映像内ではそれはまだ活かされていないかった。

『穴』の直径を超える攻撃を吸い込ませるのは難しいのだ。

龍帝の爪は長大かつ手首と指先の動きだけで繰り出されるため、人型生物との近接戦闘におけるセオリーが適用し難い。その上『滅び』の力が込められているため斬撃線上の何もかもを消滅させてくる。それは『穴』の縁すらも例外ではなかった。魔力を消滅させられた『穴』は、存在を維持できなくなり滅びてしまう。

「それから、あの身体に纏っている方の『滅び』のオーラも厄介だ。手足に全力でオーラを纏わせなければ、迂闊に格闘戦も挑めない。殴った側の手が消し飛ばされてしまう」

悪魔の戦闘では、格闘技術はそこまで重視されていないのが現状だ。

元人間の武術家などの転生悪魔転生は近接距離での白兵格闘戦を好むが、悪魔は翼を持つ種族だ。地上戦闘の得意な者と相対すれば、空中に逃げる。

それだけで、人間の武術の大半は意味をなさなくなるからだ。

足場を踏みしめ、各関節の捻りを活かす体術は、空中戦では本領を発揮しない。大地から足を離し、重力の恩恵を万全に受けられない状態というものは、空を飛ぶことを前提とせず積み上げられた人間の技術体系を容易に殺す。

近接戦闘の武術に秀でた転生悪魔が最初に覚えるのは、魔力で空中に足場を形成する術になることが多い。そうしなければ、パフォーマンスを十全に発揮できないのだから当然だろう。

だが、生まれながらの悪魔の多くはそんなことに魔力を使うよりも射撃・砲撃を選ぶ。もしくは、体当たりや突進めいた攻撃だ。

「これでは格闘戦は厳しいな。ビィディゼのアレを防げるというのは羨ましい限りだ」

ただ、トップランカーともなるとその辺りの事情は違ってくる。レーティングゲームの試合条件によっては近接戦闘が必要になる場合も出てくるからだ。また単純に使う場面は少なくとも鍛えておいて損はないということもある。命短い人間と違って、長命の悪魔にはいくらでも時間があるのだから。

魔力の研鑽に行き詰った際に、別方面に手を伸ばして己を磨くというのは上位陣ならば誰でもやっていることだ。

「足の下に開いた『穴』から手を伸ばされて、足首掴まれたときは焦つたな」

「最初にアレやられたときは、知っただけでも驚く」

ここまでは、ビィディゼ以外の者の話。『穴』を自在に駆使するビィディゼは、何処からでも拳や蹴りを相手に届けることが可能だ。

地に足を付けたまま、空中の相手を頭上から殴りつけることさえ簡単にできる。己の拳を『穴』に突き込み、敵の頭の上を開いた『穴』から繰り出すだけでいい。

だが、そういった手妻は『滅び』を纏う龍帝には通用しない。『滅び』のオーラを相殺するだけの力を叩きつけなければ、あの攻撃的な防御は貫けない。

「おや、ビィディゼ氏のアレが出るようですよぞ?」

画面の中のビィディゼは、瞬間放出量の限界まで力を籠めた魔力弾を『穴』に撃ち込んでいた。回避を続けながら、次々に最大威力の攻撃を『穴』内に貯め込んでいく。

ビィディゼが数十発の魔力弾を『穴』の中に納め終わると、次に龍帝を囲むように数十の『穴』が開いた。

圧縮魔力弾の一斉発射。角度を調整し、顔面を含む身体の急所数か所に魔力弾を集中。複数個所を同時に狙うのは相手の防御に割く意識を分散させて防御術の展開を遅らせ、あるいは局所防御よりも脆い全身防御を強制させるためだ。その上で、魔力弾同士が着弾前に干渉しあわない限界数を同時に一点一点に着弾させる。

魔力弾の直撃に合わせ、ビィディゼは自身の目の前に『穴』を展開しオーラを纏わせた拳を構えた。

龍帝の全身を覆う『滅び』のオーラに対して、圧縮魔力弾群による一点突破を仕掛け、オーラの守りが消えたところに全力の拳を打ち込む！

それは防御力・耐久力に優れた者、再生能力を有する者を一息に仕留めるための技だった。

『穴』の檻が展開しきる前に抜け出さなければ大概の者が沈む、ファンからの人気も高いビィディゼの大威力攻撃だ。

派手な魅せ技だが、威力は十分。実際、ビィディゼはこれでタンニーンを幾度か撃破したことがある。

龍王殺しの技であった。

「やったか!？」

避ける素振りすら見せず屠龍の技の直撃を受けた龍帝の姿に、同胞の一人が思わず声を上げた。

『ハハハッ、いや、さすがに魔王クラスですね。思わず「倍加」を使つてしまいました』

しかし、ビィディゼの攻撃による魔力光と爆煙の中から現れた龍帝は無傷。

逆にビィディゼは片腕を失っていた。肘から先を失い、断面から鮮血をほとばしらせるビィディゼ。

『ビィディゼ殿、治療は必要ですか？』

『ああ、お願いしたい』

禁手化。貴族服だった龍帝の姿が魔王のそれに似た装束に変化する。

『力を貸せ、レイヴェル』

龍帝が女の名を呼ぶと、ビィディゼに『不死鳥^{フエニックス}』の特性が『譲渡』された。『赤龍帝^{ブラスデッド・ギア・ギフト}からの贈り物』、ビィディゼの腕の断面から炎が噴き上がり、失われた腕が瞬時に再生していく。

「ここまでか……ここまで差があるのか……。我々と、『紫紅の龍帝』との間には……」

龍帝の持つ戦闘フィールドを破砕したなどの逸話から、破壊力・攻撃力にのみ注目していた者が慄きつぶやいた。

「対峙してみて分かったが、『紫紅の龍帝』はどちらかというところでも守備を重視しているように思えた。感覚的なものだが、彼の魔力は私の十倍以上はあっただろう。あの魔力量の『滅び』ならば、大概の者に攻撃は通るのだから、守りを重視して逆転の目を潰してくるのは理にかなっている」

ここに集った者の中では、ビィディゼは総合的には最も強いが、悪魔の特性は様々なのでメンバーの中にはビィディゼよりも攻撃能力に優れた者もいる。

皆の視線を受けたその者は、注目に気付くとゆっくりと首を横に振って見せた。

「ビィディゼのアレでダメージが通らないとなると、私でも無理だろう」

「それに加えて、フエニックスの不死身か……」

魔王クラスの最大威力の攻撃でもほとんどダメージが期待できない。その上、一撃で屠らなければ不死身の特性で回復されてしまう。ダメージを積み重ねての勝利は不可能と見て良い。

まずレイヴェル・フエニックスを倒さなければ、龍帝は倒せない。そして東洋の龍が掌中に宝珠を握るように、龍帝はフエニックスの姫君を掴んで離さないだろう。

「これはまだ、一回の『倍加』だ。『紫紅の龍帝』はここからさらに倍々に力を高めていく……禁手状態でなら一瞬で数百倍だ。ハツキリ言うが、我々の誰であろうとも、まともにならなくて勝てる相手ではない」先代までの『赤龍帝の籠手』所有者は人間だった。人間の所有者が神や魔王を討ったという話は聞かない。『赤龍帝の籠手』は神滅具とされているが、神を滅するほどの領域にはたどり着けない代物だと、これまでの多くの者が考えていた。

だが、最初から魔王クラスを大きく上回る者が所有者となったのが現在の状況だ。ただでさえ魔王クラスから見ても勝ちの目が薄い相手。それが数百倍、数千倍に力を高めると来ては、もうどうしようもない。

「ここからは少しばかりみつともないのだが、私が一方的に打ちのめされる場面ばかりだ。未だ成熟すら終えていない若者によって、この私がボロ屑のようにされる姿。それを皆が見たいと言うのなら続けるが……どうする?」

そのビィディゼの質問には、分かり切った答えが返って来る。

禁手状態での『紫紅の龍帝』の力は、ビィディゼを容易く撃破するものだった。本当に、どうしようもない差があることを心底から刻み込まれたのだ。

「これは、ロイガンの『裂け目』か」

映像の中のビィディゼの身体は、無数の断片に裂かれていた。

「ああ、『倍加』を繰り返した龍帝殿が振るう『裂け目』は数に限りなく、威力も段違いだったよ。扱い自体はまだ慣れていないようだったが、それでもこれだけの数で押されてはな」

ベルフェゴールあるいは、ベル・ペオル。家名がバルやベルから始まる悪魔は多いが、ベルフェゴール家もその一つであり、ペオルという言葉には『裂け目』という意味があるとも言われている。

名に『裂け目』の意味を含むベルフェゴール家の魔力特性は、その名の通りの『裂け目』。

『裂け目』の特性は、使用する者の力を大きく超えない範囲でなら、大概のものに裂け目を作って裂いてしまえる。そう、この特性は『裂け

目』を作る特性なのだ。

その際、手で触れる必要はない。何かを飛ばして当てる必要もない。狙った箇所特性を作用させ、その箇所が使用者の力で裂けるならば、問答無用で裂いてしまう。

そのため、ビイディゼ・アバドンはロイガンのこの『裂け目』を苦手としていた。

当たり前の話だが、第三位よりは第二位が良い。デイハウザーには終ぞ勝てなかったビイディゼだが、一つ上に居たロイガンとは熾烈な試合を繰り広げてきたものだ。

上の者の指示がなければ、この二番手争いで手を抜いたことは無い。そして、二位と三位が入れ替わっても大差がなかったため、ロイガンとの試合では事前に勝敗の取り決めがされていることは少なかったのだ。

「ビジネス」もなかったと言える。ロイガンは真剣勝負を望み楽しんでいて、ビイディゼはロイガンに勝って第二位の地位を得たかったのだから。

狙った箇所に発生する『裂け目』は、射撃や砲撃と違って射線上に『穴』を置くことで防げない。ビイディゼの得意とする『穴』の特性を活かした防御・カウンターが通用しないのだ。

使用者の力の及ぶ範囲までならば、どんなものでも裂ける『裂け目』の特性を、バカげた魔力を誇る龍帝が『倍加』を繰り返した後に使用するとどうなるのか——その答えが映像の中にあった。

ビイディゼが裂ける。裂けたビイディゼが、治療される。ビイディゼが、裂ける。治療される……。

「なんだ、この地獄は……拷問か」

膨大な魔力で連続行使される『裂け目』には回避など間に合わない。そして、超越的な力をさらに数百倍にまで高めて行使される『裂け目』は、魔王クラスのビイディゼ程度は楽に裂いてしまう。

これはロイガンとの対戦経験豊富なビイディゼが、特性の稽古に付き合っただけと言っただけで始まった地獄だ。

「視認、あるいはその他の方法で居場所を察知された段階で、力尽くで

引き裂かれるかと思ってい。会敵した状況で始まる形式のゲームなら、試合開始直後の全滅もありえる。睨まれたら終わりだ」

『裂け目』は狙った箇所に発生するので、途中に壁を建てようが、防衛魔方阵を設置しようが、位置情報だけで喰らってしまうことがある。ロイガンはそれを裂きやすい箇所を見極めて使用してきたが、龍帝の『裂け目』は完全な力技だ。

ビーディゼのような「魔王如き」程度の力では、ほとんど抗えなかった。

そして、これは始まりに過ぎなかったのだ。

「む、またビーディゼ殿が倒れておられるぞ！」

『裂け目』のあとは、ロイガンとは違い無名の眷属のものだという妖力と仙術をミックスした術を試すことになった。

悪魔によく効くように調整されたという毒霧だ。これにビーディゼは『穴』に空気を吸い込ませることで対処していたが、何事にも限度というものがある。

際限なく湧き続ける毒霧の前に、ついにビーディゼは屈して動けなくなってしまう。麻痺して動けぬ身体を毒がジワジワと蝕んでいく。

緩慢な死が迫る中、ビーディゼは妖怪如きの力ですら『倍加』すればこうなるのだと分からされてしまった。

「これは眩しいな……」

「ああ、これはバラキエルの娘の光力だな……ふふ、こうして画面で見ているとただ眩しいだけだが、実際に喰らうとたまったものではない」

龍帝の背から一対の黒い翼が生えていた。コウモリにたとえられる悪魔の翼ではない。堕天使の黒い鳥のような翼だ。

その黒翼から全方位に光が照射されていた。それが画面内を真っ白に染める眩しさの根源だ。

「これはな肌が徐々に溶けるんだ……。目を真っ先にやられてしまつてね……。ああ、私はこのとき、太陽光に焼かれる吸血鬼の気持ちを理解させられたよ」

天使や墮天使の持つ光力は、悪魔にとつては猛毒だ。光の力を束ねた槍が掠っただけでも全身から力が抜けたようになる。

通常は槍や剣、矢のように束ねて放つ光力を、このときの龍帝はただの光として周辺に拡散させていた。普通ならばそんな「薄い」光力など意味はない。

「薄い」光力など、『穴』を介して撃ち返したところで滅びのオーラを纏う龍帝に効くはずもなく……。それでいてビィディゼの視覚は潰され、肌を高熱で焙られ続けるような体験だった。

相手の不利な環境を作る。こういった嫌らしい手札も、龍帝は使ってくるということだ。

「細く束ねて槍にでもしてくれたなら、カウンターを狙えたのだろうが……。それが分かかっていて使ってくるはずもない、か」

「そういうことだ。『倍加』された光力の拡散照射。下級悪魔程度なら、これだけで消滅するかもしれん」

ビィディゼは光り輝く黒翼を背負った龍帝が空を舞う姿を幻視した。龍帝が舞う空の下、地上では光によって溶かされ消えていく無数の平民達の姿がある。

吸血鬼の国は太陽光を遮るために霧に覆われていると聞く。もしも昼間にその霧を吹き飛ばしたならば、きっとビィディゼの幻視と似たような光景を目にすることが出来るだろう。

恐ろしいことだ。なんと恐ろしいことだろうか。

『ラティア』

龍帝がまた違う女の名を口にすると、その次の瞬間、ビィディゼが吹き飛ばされていた。

ピンボールの玉のように、右に左に、上に下にとビィディゼの身体が跳び跳ねる。

「これは、なんだ？ どういう状況だ？」

「これはな……アガレス家の特性である『時間』を使われているんだ……」

正確にはアスタロト家の術式の制御に優れた部分も加わっているのだが、地味なため無視された。

「スロー再生にしてくれ」

言われたビィディゼが映像の再生をスローにすることで、ようやく何が起こっているのかが観客の目に映るようになった。龍帝が拳や蹴りを繰り返しているのだ。拳打のインパクトの瞬間だけが切り取られたように画面に映り、移動の様子はスロー再生であっても目にも止まらないほどの速さ。

それは「ドラグ・ソボール」の戦闘シーンを思わせるような光景だった。

「龍帝殿の体術は、私から見ればまだまだ未熟なものだったが……。これほどまでの速度差を付けられると反応が出来ない。本来ならばここに『滅び』の力が上乘せされているのだから、吹き飛ぶ前に消し飛んでいることになるのだろうな……。ふふ」

映像が進むほどに、自信に満ちていたビィディゼの様子がおかしくなってくる。

広間に集った者たちは、ビィディゼが薄く浮かべていた笑みに、どこか壊れたような気配が加わってきているように感じていた。

「自信満々に『紫紅の龍帝』の実力を見極めてやると出かけて行ったビィディゼ・アバドンが、こんなになって帰って来るとは……」

それでも映像の再生を止める者はなく、そのままスクリーンには蹂躪される元第三位の姿が曝され続ける。

そして、最後に——巨大な、あまりにも巨大な龍の足の裏が画面いっぱいに映し出され映像は途切れた。

「大丈夫か、ビィディゼ……」

悪魔には似つかわしくない心配するような声を受けて、いつの間にか椅子に座らされていたことにビィディゼは気付いた。

「ああ、すまない。少しばかり、才能というものについて考え込んでしまっていたようだ」

かつての大戦のおり、赤き龍の帝王は当時の魔王達を「魔王如き」と呼んで見下したと言われている。

今スクリーンに映し出されたものがその力の一端なのだとしたら、たしかに魔王クラスと称されたビィディゼは龍帝にとって「如き」な

のだろう。

「分かってくれていると思うが、この稽古で私は手を抜いてはいない。むしろ龍帝殿の方が手を抜いている。——諸君、我々が従うに値しない弱者だと彼を評価する者はまだここにいるだろうか？」

「龍帝殿は、まだ十代の前半だったか……」

「ああ、そうだとも。まだここから大きく伸びる年代だ。禁手の特性によって、彼の眷属が増えることに振るう力もより多彩なものとなって行くことだろう」

魔王クラスのビーディゼが手も足も出ない。そんな悪魔をヒトは超越者と呼ぶ。

「サーゼクスさましかり、アジユカさましかり、悪魔を超えた悪魔、超越者が納まるポストは一つしかない。龍帝殿がこの先どういった道を進んでそこに至るのかは分からないが、たどり着く場所だけは決まっている」

現政府において、サーゼクス・ルシファー、アジユカ・ベルゼブブに続く超越者。古き魔王の血統の者を含めても四名しかいない悪魔の中の規格外。

「龍帝殿はいずれ魔王となるだろう。だが、少々平民に対して厳し過ぎる。その点について、我々は協力して差し上げられると思うのだよ」

リヴラクス・グレモリーは、ある意味において平民に期待を持ちすぎている。だからこそ、厳しい。

賢い平民、強い平民などまずいない。ほとんどの平民は愚かで弱く、賢くなろうとも強くなろうともしないのだ。

そして、リヴラクス・グレモリーは世論というものを軽んじ過ぎている。それでも、どうにでもなると考えていているのだろう。

たしかに彼と彼の眷属だけならば、どうとでもできるのかもしれない。名の知られた大悪魔でありながら、冥界から離れて暮らす者もいる。あの強さがあればそれも簡単なことだろう。

だが、それではビーディゼたちが困るのだ。

「百年か、千年か、どれほどの期間となるか分からないが、その時まで

我らはルシファー派の中で身を潜めているとしよう。そして、時がくれば、我々は新たな魔王の派閥における最古参となるのだ」

簡単に騙され、踊らされ、分かりやすいものに流される。そんな衆愚どもの相手はビィディゼたちが引き受けてやればいい。

平民のためを思い、傲慢な超越者に対して意見することのできる者。

そんな立場にビィディゼは成りたい。

——支持を、称賛を、名誉を！ 私が望むものを差し出すならば、私はその対価として愚民どものために働いてやろう。

それはそれとして、リヴラクスは身内に甘いグレモリー家の者だ。そして、女好きで知られている。

そして、大変都合のいいことにビィディゼには、家を出てレーティングゲームに参加したいと相談して来ている姪がいる。叔父の目から見ても悪くない容姿をしている姪だ。

本当に都合が良い。

ビィディゼは自分を褒め称える平民が大好きだが、そのために殺されたわけではないので保険を必要としていた。

夢見る貧亡霊嬢

『王の駒』もとい『アドバンスト・クラウン進士の冠』の騒動は一先ず終了。

ロイガン・ベルフェゴールは我がメイド『騎士』リユイとなり、他の使用者たちの大半はレーティングゲーム公式戦を引退していった。年末に別件で引退した元7位リュディガー・ローゼンクロイツに始まり、元2位ロイガン・ベルフェゴール、元3位ビィディゼ・アバドン殿、他にも百位以内から数十名のトップランカーが引退していなくなった。

さらに王者が戦線に出ていて不在のレーティングゲーム公式戦は、今後大荒れになりそうだ。

だが、それは俺の知ったことではない。何故つてまだデビュー出来る年齢ではない上に、運営はほぼ大王派のお年寄りたちがしていて、システム担当はアジユカ・ベルゼブブさま。俺は本当に何の関係もないのだ。トップテン付近にいたタンニーン殿やルヴァル義兄上はきつと大忙しになるだろうけれど、是非とも空いたトップ3にランクインしていただきたい。ただし、ライバルが抜けての繰り上がり嬉しいかどうかは分からない。

さて、大きなところでの動きはだいたい決まってきたところで、俺の手元には『王の駒』と若干関係がある者がいる。

クレéria・ベリアルだ。

魂だけの彼女をどうするか。俺は考えた。

ゼクラム祖父さんからはまだ魔力で魂を扱う術のさわりを聞いただけだ。これでは魂状態のクレériaにおさわり出来ない。

おさわりできない女なんて、魅力は半減どころの騒ぎではない。俺には、女の魂を宝玉に閉じ込め、それを眺めて悦にいるような趣味はないのだ。

兄上にも魔力で肉体を生成する方法を聞いてみたが、色々忙しい様で詳しいところはまだ習えていない。まったく、兄上ときたらいつも「忙しい、忙しい」状態で困ったものだ。

俺と兄上では意見が違ふところが多くあるのだが、兄上としてはそ

れ自体は構わないそうだ。様々な意見・主張を拾うつもりがなければ、そもそも政治家が居て議会があるなんて制度にしていけないということらしい。

でも、兄上ってなんだかんだ自分の意見が一番正しいって思っているところがあると思う。まあ、そういうところは『傲慢』のルシファーらしくていいんじゃないかね。兄上は魔王なので。

兄上のことは置いておこう。考えるべきはクレーリアの扱いだ。

お忙しい兄上から肉体精製の術を習えなかった俺は、むんむんむんと考えを巡らせ、はたと気付いた。

「いるじゃないか！ 気軽に呼びつけられる専門家が！」と。

ということ、そろそろ冬の社交シーズンが終わりそうな今日この頃、俺は後宮の自室でその専門家の到着を今か今かと待っていた。

「若さま、連れてまいりました」

しばらくして、リュイが呼びつけた相手を連れてきた。

その相手は、ピンク髪でくるりと回った二本の角を持ち男の欲情を刺激する煽情的なスタイルの持ち主だった。リュイと被る部分が多々あるが、この者は淫魔・夢魔の類である。

「ご指名ありがとうございます♡」

いわゆるサキュバスってヤツだな。ぬるりとした尻尾があつて、その先端がハートマークのようになってる。実にくにくにしたりやりたい尻尾だが、今日コイツを呼びつけたのは、サキュバス遊びをするためではない。

「依頼の内容は聞いているな」

「はあい。もちろん確認してますわあ。わたしとしてはあ、ちよつと残念で・す・け・ど♡」

聞くところによると、魂は夢を見るそうだ。肉体を失っているのだから脳を休める必要もなさそうなものだが、夢を見ることは出来るらしい。

サキュバスから説明を聞いた俺は、クレーリアの魂を封じた宝玉を取り出して彼女に見せた。

「なら、さっそく頼むとしよう。俺とコイツの夢を繋げ」

「はあい、了解いたしましたあ♡」

夢魔はすぐに宝玉に封じられた魂へと術を施した。他人の夢の中に潜り、淫らなことを仕掛けるときに彼女たちが用いる術だ。

トランスフアー
『譲渡』

夢魔の中では力ある者を呼びつけたとはいえ、所詮は中級悪魔の術。上級悪魔であるクレーリアには、そのままでは通用しないかもしれない。

だが、その術にこうして『譲渡』してやれば話は別だ。

「あとは頼むぞ、リユイ」

「お任せください。若さま」

リユイを見張りに立て、神器に潜る要領で神器の一部でもある宝玉に意識を沈めていく。

——夢の設定は俺が決められるらしい。

まだクレーリアと八重垣が生きていた頃。二人が出会い、その関係が恋愛へと発展し、都合よくまだ他の誰にもそのことがバレていない状態。クレーリア自身が望んでいたであろう設定だ。

こちらからその状況を思い描くように彼女の精神に働きかけてやればいい。夢の中だ、登場人物はそれほど必要ない。場面も飛び飛びでいいだろう。そうだな——。



クレーリア・ベリアルは、駒王町を縄張りとする上級悪魔。

長い間、縄張りを運営したこともない半端者として過ごしてきたが、従兄のはからいによって去年からこの駒王町で縄張り運営の経験を積むことが出来るようになったところ。

そのクレーリアは、鏡に向かっていそいそと身支度を整えていた。彼女はこれから眷属たちにも秘密で出かけようとしていた。

「おかしくないよね？」

背の半ばまで伸ばした灰色の髪に、活発な印象を与える灰色の瞳。160cm台半ばと悪魔の女性としては平均的な身長で、Eカップのバストとくびれた腰付き、スラリとした脚線美。上級悪魔らしい美少女の見た目をした女が、恋の熱に浮かされた顔で鏡の中から問いかけてくる。

クレーリアは秘密の恋をしていた。その恋の相手は、今まで彼女が出会ったことのなかったタイプの人で、悪魔として生まれ育った冥界とは常識も価値観も違っている人だ。

どんな服装が好みなのか聞いておけばよかった。

彼に聞かずに、鏡の中の自分に向かって問いかけてしまうなんて、何をバカなことをしているのだろう。頭の片隅でそう思いながらも、クレーリアの心は幸福感で満たされていた。

浮かれまくっていたとも言おう。

昼間。夜の間「悪魔のお仕事」に励んでくれた眷属たちが寝静まるのを待って、クレーリアは太陽の下を歩きだす。

八重垣正臣は教会の戦士だ。教会の運営している孤児院で神の教えの中で生きてきた。

そしてその教会で戦士としての資質を見出されてイギリスへと修行に赴き、そこで鍛えられ剣を学んだ。

「これしか服が無い」

清貧を旨とし、質素に生きる教会の戦士に贅沢は必要ない。悪魔や魔物、その他多くの人に仇なす異形を討ってきた正臣は、これまで服装に無頓着なまま生きてきた。

神に仕え、神の戦士として、神の敵を討つ。つい先日までは、それだけを考えていれば良かったのだ。

鏡の中には、鍛え上げられた身体を情けなさそうに縮こまらせ、眉を八の字にして精悍な顔つきを台無しにしている戦士の姿があった。

「見回りに行つて来ます」

結局、いつもの神父服で正臣は現在の任地にある教会の扉を開い

た。同僚たちに嘘を吐いて。

悪魔の女性との逢引に出かけたのだ。それがこれまで一途に仕えてきた神への裏切りだと知りながら。

リヴラクス・グレモリーは、悪魔の名門学校に通っていれば初等部低学年になっていただろう年齢の上級悪魔。

悪魔の貴族の中でも名門中の名門、魔王輩出の名家グレモリー家の次期当主であり、既に魔王クラスを凌駕しているとも言われる莫大な魔力と、神滅具『赤龍帝の籠手』を所持する規格外の悪魔だ。

ただし、その外見は年相応のもので、紅色の髪的美少年といった風情。まだ年齢も一桁で、身体つきも細く声も可愛らしい彼は、服装次第では美少女でも通りそうな容姿をしていた。

「ここが駒王町か」

そんなリヴラクスはいかにも良家の子息といった服装で、将来自分が縄張りとして与えられることになっている土地の見物に来ていた。

その縄張り予定地の名は「駒王町」。現在、ベリアル家の分家の娘であるクレーリアという貴族女性が、グレモリー家とバアル家から縄張り運営の経験を積むために「借りて」いる土地だ。

リヴラクスが縄張りを運営するようになる年齢まで、クレーリアはこの土地で縄張り運営の経験を積む。そして、開拓した顧客ごとリヴラクスに引き継ぐということになっていた。

その将来の縄張りの話を聞いたリヴラクスは、一つ見学でもしておこうかとの土地を訪れたのだ。

まず向かう先は、クレーリア・ベリアルが拠点としている館である。そこで話を聞いておこうという考えだった。

「いない？」

だが、向かった先には目当てのクレーリア・ベリアルは居なかった。眷属に何も告げずにどこかに出かけてしまったらしい。聞いてみると、最近のクレーリアはよくこういうことがあるそうだった。

ならば構わないか、とクレーリアの『女王』に言伝だけを頼みリヴ

ラクスは町を歩いて回ることにした。

そして、たまたま、偶然に、その場面を目にしてしまうのだ。

クレーリアと八重垣の唇が触れ合った。触れ合うだけのキスだ。

「ク、クレーリア……今の……」

聖書の教えに忠実に生きてきた八重垣正臣は、それだけで真っ赤になっってしまった。

いや、ふたりが出会って、最初はもつと敵対的な間柄で、それからこうした関係になるまでの間に、八重垣は何度もこうした姿を見せてくれていた。

今ではそうした姿を見る度に、クレーリアの心に八重垣を愛おしいと想う気持ちがこみ上げてくる。

クレーリアが冥界で出会った男性には、こういうヒトは居なかった。領主の一族の娘として見てくる領民たちか、もしくはどこか見下した視線を向けてくる貴族たちか。

八重垣は教会の戦士だから、同じ悪魔からとは違った反応をされるのは当たり前なのだけれど、そのことがクレーリアには嬉しかったのだ。

たぶん、外見も好みだったのだろうと思う。

クレーリアには従兄がいる。自慢の従兄だ。ベリアル本家の嫡男で、恵まれた才能に驕らず鍛錬を積み重ね、今ではレーティングゲームのランキング一位に君臨しているデイハウザー・ベリアル。クレーリアはその『皇帝』と一緒に育ってきた。一族はデイハウザーを名門学校に送るだけで精一杯であったため、平民と同じ学校に通ったクレーリアとは学校こそ違ったけれど、家ではいつも会っていた。

多くの悪魔は努力というものをしない。細身の優男が良いとされている風潮もあってか、身体を鍛えこむ者も珍しいのだ。

クレーリアの男性の趣味は、この努力家で筋肉質な従兄の影響を多分に受けていた。

これは別段おかしな話ではない。悪魔の男性は目下の親族女性に

優しいことが多く、いつそ甘やかし過ぎるぐらいに接してくる。貧しく、他の貴族から馬鹿にされて来たベリアル家のクレーリアにとつて、接する機会が多く、自分に優しく、一族の誇りと言える強さと活躍を見せてくれるデイハウザーは大きすぎる存在だ。影響を受けない方がおかしい。

八重垣は強さこそ天使の力を借りた武器を使ってようやく上級悪魔と戦える程度であったが、それは人間としては破格の強さでもあった。

魔力の一撃で致命傷を負いかねない脆い人間の身体を、戦士としてストイックに鍛え上げてきた八重垣はクレーリアを惹きつけるに十分なものを持っていた。

行為は結婚してからと考え、安易に欲望に流されない態度もクレーリアには好ましく思えた。悪魔はとかく欲望に溺れやすいので、こういった男性とはあまり出会ったことがなかったのだ。

クレーリアが積極性を見せると、こうしてすぐに真っ赤になってしまふところを可愛いとさえ思っていた。

「正臣……」

ふたりの影がまた重なり合った。

そこまでは、まだ悪魔の女に誘惑され堕落していく信徒の姿に見えなくもなかった。

その後、拠点に帰ったクレーリアは自身の『女王』から昼間に訪ねてきた人物の話を聞いた。

「グレモリーの次期当主って、連絡をくれたら良かったじゃない！」

この駒王町の縄張りには、本来バアル家とグレモリー家が共同で管理してきた場所だ。今のクレーリアは、それを貸してもらっている立場。

昼間に訪ねてきたというリヴラクス・グレモリーは、年齢こそクレーリアよりずっと若い、悪魔の中での地位は遙かに上である。幼稚舎時代に喧嘩で同級生を殺しかけたなんて噂もある相手だ。

クレーリアは血の気が引くような思いをした。

この頃、八重垣とのがあつて眷属からの日中の連絡を控えさせていたのが良くなかった。緊急事態というほどのものではないが、機嫌を損ねて「八重垣の居る今の縄張り」を取り上げられたくはない。

『女王』から話を聞いたクレーリアは、しばらくこちらに居ると言っていたらしいリヴラクスに急いで連絡を取る。

その連絡方法は通信魔方陣ではなく、人間の機械、最近日本でも急激に広まり始めた携帯電話だ。ここ数十年の人間の通信技術の進歩は凄まじいものがある。ずっと前にクレーリアが使ってみた頃の電話は、交換手に相手先の番号を口頭で伝えるものだったような覚えなのに、今ではそれがこんな小さな持ち運び出来るサイズになっているのだから驚くしかない。

『ええ、いや、別にいいですよ。——そうですか？ では、サーゼクス・ホテルをお願いします。フロントで名前を言って頂ければ通じますので——はい、ええ、では』

電話先のリヴラクスは特に気にした様子もなく、こちらから顔を見せに行くと言ったクレーリアの言葉を受け入れてくれた。

気が短く、怒ると何をするか分からないなんて噂のある人物だけに焦ってしまったけれど、慌てることは無かったのかもしれない。

クレーリアはほっと胸をなでおろすと、リヴラクスが宿泊しているホテルに向かうことにした。

サーゼクス・ホテル。

隠すこともなく魔王サーゼクス・ルシファアの名を冠したその豪華なホテルは、駒王町からそう遠くない場所にある。

ホテル前でその建物を見上げるクレーリアは、改めてリヴラクス・グレモリーが魔王の弟であることを思い出していた。

未来の権力者だ。リヴラクスは貴族の中の貴族と言っている地位にある。デイハウザーの活躍で盛り返し始めて来たとは言っても、まだまだ貧乏貴族という評価を拭いていないベリアル家。その分家の娘に過ぎないクレーリアとは圧倒的なまでに立場の違う相手だ。

ごくりと喉を鳴らしクレーリアがホテルの玄関へ歩を進めると、話

が通じていたらしい従業員が現れた。

そして、クレーリアが要件を告げるとすぐさま最上階へと案内される。

このときのクレーリアは、『女王』も『騎士』も伴わず、ひとりだけで来るように言われた理由を分かっていた。

夢見る貧亡霊嬢を睨ける

クレéria・ベリアルとリヴラクス・グレモリーの対面は穏やかに進んでいた。

ホテルの一室に通されたクレériaは、リヴラクスとの間にテーブルを挟んで椅子に座って話していた。主な会話の内容は、リヴラクスから縄張りの運営の仕方や、駒王町について聞かれ、それにクレériaが答えていくというもの。

いつもやっていることを話すだけだったので、クレériaは特に詰まることなく会話を進めていた。

話をする中で気になることがあったとすれば、リヴラクスの視線だろうか。常にクレériaの灰の瞳を、少年の紫の視線が捉えている。

鍛え上げられた筋肉質な男性が好みのクレériaだが、リヴラクスのような美少年からそうやって見つめられると、どうにも気恥ずかしいものがある。本当に、ジツと目を合わせてくるのだ。

「だいたいこのぐらいかな」

最初は少年貴族の魔力量に驚き、しどろもどろになっていたクレériaだったが、数時間ほどの会話の中で打ち解け口調が崩れ出していた。相手の外見と実年齢のせいか、どこか領民の子供に接するような態度になってしまっていたのだ。

そのことを咎めてくることもなかったので、稀に社交の場に顔を出すと嫌味を言われることの多いクレériaとしては、リヴラクスはかなり付き合いやすい相手のように思えて来ていた。

「この町にいる教会の者たちはどうしているのですか？」

その質問を受けるまでは。

「……教会とは、お互いに不干渉ということになっているの」

「聖剣を持った戦士団が来ているのにですか？ あれは上級悪魔を討てるだけの戦力でしょう」

駒王町に派遣されている教会側の戦力は、『聖書の神話』の浸透度が低い日本という国にあつてはかなりのものだ。

リーダーを務めている紫藤という男はかなりの使い手であり、聖剣

を所持していること。さらに紫藤の部下として、優秀な若手が多数この駒王町の教会に配置されているらしい。それらのことを、リヴラクスはグレモリー家が運営している学園の者から聞いたと言う。

「だからよ。教会とやりあつたら、私も眷属も危ないから。戦わないようにしているの」

「教会側は、悪魔の仕事について何も言つてこないのですか？」

「ええ、神の信徒ではない人と取引することについては、あちらからは何も言つてこないわ」

「ヨーロッパ方面では教会の戦士たちの活動が激しく、上級悪魔が殺害されることもあるようですが」

「そうね。でも、ここは日本だから、キリスト教徒が悪魔と取引をするのとは事情が違うのよ。だからお互い刺激しないように共存しているの」

「なるほど。それにしても……これは少々仲良くし過ぎではありませんか？」

リヴラクスは亜空間から一枚の写真を取り出し、クレーリアの前に滑らせてきた。

「これは……ッ！」

「なかなか刺激的な光景ですね」

写真に映っていたのは、神父服に身を包んだ男性とクレーリアが口づけを交わしている場面だった。

「これは、その……」

「違うの」と続けようとして、クレーリアはそれを口に出れなかつた。八重垣とのことで、否定するような言葉を自分の口から紡ぎたくなかつたのだ。

リヴラクスは立ち上がると、テーブルを回って椅子に座って押し黙るクレーリアの横に立った。

またあの目だ。紫の双眸が射貫く様にクレーリアの瞳を覗き込んでくる。

「クレーリアさん、この教会の男。名前は八重垣正臣というようですね」

「どうして……」

彼の名前までどうして知っているだろうか。クレériaがそれを聞く前に畳みかけるようにリヴラクスは答えを口にした。

「明らかに裏に通じている教会の人間が、グレモリー家の運営している学園の近くに居住していれば確認しますよ」

一時的な滞在ならばともかく、長期間居住するとなれば人間が公的な手続きから無縁でいることはまずできない。

悪魔側は公的機関との過去からの繋がりがりや魔力を利用してそれらの情報入手し放題なのだ。日本では教会の力が弱いということもある。この国の退魔組織の代表格である五大宗家などが相手であればこうはいかなかっただろう。

リヴラクスはそう語ると、クレériaを見つめてくる視線に力を込めた。

「クレériaさん、これは確認ですが、この男、八重垣正臣とはどういった関係ですか？ 悪魔らしく教会の人間を墮落させようとしているのなら構いません……と言いたいところですが、クレériaさんの実力では少しばかり危険ではありませんか？ 八重垣以外の教会の戦士に知られたら、それこそ抗争に発展してもおかしくない」

「正臣とは……」

教会の者との、それも裏の事情に通じている戦士との真剣な恋愛は禁忌。それはクレériaも承知していた。

それでも、愛してしまっただ。だからこそ、クレériaは八重垣とのことで嘘を言いたくはなかった。

「ああ、それとも全員ですか？ 偶然今日は八重垣の番だったというだけで、リーダー格の紫藤含めて戦士連中を残らず誑かしているというものでしたら——」

「違うわ。私が愛しているのは、正臣だけ」

とんでもない言われように、クレériaは思わずそう口にしてしまった。悪魔的には一つの教会を丸ごと墮落させるというのは、それはそれでアリなのだけれど——八重垣とのことをそんな風に思われるのは我慢がならなかったのだ。

「では、八重垣以外の教会の者はこのことを知らない？」

「ええ……」

「なら、八重垣との関係を清算してしまえばいいだけですな」

「それは、できない」

「困りましたね。これは父上、グレモリー家とバアル家、もちろんベリアル家にも報告しないといけない」

「そう言いながら、リヴラクスはテーブルから写真を回収しようとした。」

「あつー！」

クレーリアは慌ててその手を抑え、写真を奪い取った。

「はあ、一枚ぐらいでしたら差し上げますよ。いくらでも増やせますからね」

リヴラクスは亜空間に手を突っ込むと写真の束を取り出し、テーブルの上にバラまいた。クレーリアが握りしめたものと同じ場面を映した写真が大量に散らばる。

「ああつ……」

その光景を目にしたクレーリアは、隣に立つ少年に顔を向けた。

「その様子だと、クレーリアさんも理解はしているんですね。八重垣とこのことがマズイことだと。この駒王町は、我がグレモリー家とバアル家の共同管理地。そこで問題があると困るのですよ。特に俺は十年もしないうちにここの管理者になるわけですからね。無関係ではない。問題があれば報告してしかるべき処置をしてもらわないといけないわけです」

そんなことをされたら、クレーリアはこの土地の管理者の任を解かれるだろう。そして冥界に連れ戻されて、しばらくは——八重垣が死ぬまで——家から出してもらえなくなるかもしれない。

「デイハウザー殿も立場がないでしょうね。縄張りのないクレーリアさんが経験を積めるようにと随分と尽力されたそうですから。それにデイハウザー殿には疑惑も多い。このことが公になれば、デイハウザー殿のことも絡めて、マスコミ連中は面白おかしく報道することでしょうね」

「兄さまは、デイハウザー兄さまは『王の駒』なんてッ！」

従兄のデイハウザーにまで迷惑がかかると言われ、クレーリアは涙目になりそうだった。

「雑誌の話ですか。あれが本当でも嘘でもどちらでもいいのですよ、アイツらは。売れさえすればいいのですから。そのためのネタになりさえすればなんだって構わない連中です」

八重垣とのことは別に、従兄のことでトップランカーたちのゴシップに興味を持って調べていたクレーリアには、そうなったときの状況がありありと想像できてしまう。

「ベリアル家は大変なことになるでしょうね。大戦で没落してから数百年、一族一丸となって耐え抜いて、デイハウザー殿の活躍でようやく上向いてきたところだと言うのに……」

やれやれといった調子で首を振って見せるのは、クレーリアよりもずっと若い初等部に通う年齢の子供だ。

「とはいえ、俺としても将来のことを考えればこの土地に傷を残したくはないんですよ。どうですか、クレーリアさん。ここは御家と領民のためと想って、貴族らしく八重垣と別れましょう。今ここでそう言ってもらえれば、このことは俺の胸に仕舞っておきますから」

リヴラクスの提案に、クレーリアは首を横に振った。どうしても、その選択は取れなかったから。

「だったら仕方がないですね。傷が深くならないうちに報告するしかありません」

「やめて！ それだけは……やめて」

クレーリアが伸ばした手を、リヴラクスは振り払った。

「あれもイヤ、これもイヤと言われても困るんですよ。これを放っておいたら、俺には損しかない。それとも何かあるんですか？ 未だ資金繰りが苦しいと聞くベリアル家の、それも分家の娘に過ぎない貴女が、御家に秘密で俺に何か差し出せるものがあるんですか？」

魔王輩出の名門グレモリー家の次期当主リヴラクス・グレモリーのお小遣いは、年間予算の範囲内で城を建てられるほどのものだ。隆盛を極めるグレモリー家の財力は、かつての居城を売り払い、山奥の小

さな館で暮らしていたベリアル家とは桁が違う。

ましてやクレーリア個人で沈黙の対価として渡せる物などありはしない。

「何でもするから、お願い……」

払われた手をもう一度伸ばし、リヴラクスの右手を両手で握る。

こんな小さな子にただ頼むだけであることに情けなさを覚えつつも、クレーリアはそうすることしか出来なかった。

「実は、最近困っていることがあるんですよ。クレーリアさんがそれに協力してくれるなら、考えてもいいですよ。それも嫌ということでしたら断ってもらっても構いませんが、どうしますか？」

「何をすればいいの？」

尋ねたクレーリアの頬を、リヴラクスの左手がなぞっていく。

「灰色の髪に、灰色の瞳」

何を言われているのか分からないクレーリアのあごを、少年の指が掴んだ。

顔の向きを変えられ、息のかかる距離で見つめられた。

「俺の愛人になってももらえませんか？」

クレーリアは既に悪魔としての成熟を終えている。もしも人間として生まれていたのであれば、とうに天寿を全うしていただろう年齢だ。

当然、経験はあった。上級悪魔でありながら領民に混じって育ったこともあり、長く続く相手がいなかっただけで、こういった行為自体は何度もしたことがある。

ただ、さすがにこんな年齢一桁の子供からそういった意味で求められたことは無かった。

「早いとは思うんですけどね、もう来ちゃいました」

少し恥ずかしそうに言うと、少年は視線でクレーリアに返答を迫って来た。

「そんなこと……」

「いいですよ、断っても。別にこだわっているわけではありませんので」

リヴラクス・グレモリーは性欲解消の相手に困るような立場にはいない。求めれば得られる位置にいる。

これは、代わりに差し出せるものが何もないクレーリアに示した一欠けらの同情に過ぎない。

そんな雰囲気、彼の言葉には滲んでいた。

「この話はなかったことにしましょう。忘れてください」

返事をしないクレーリアの様子を見て、リヴラクスは素っ気なく言った。

糸を垂らしてすぐに引き上げるやり方が、クレーリアの選択肢を奪って行く。

「ああ、簡単な解決策がありましたね。処分してしましましょう、その男を。クレーリアさんには恨まれるかもしれませんが、ベリアル卿は感謝して下さるでしょうからね」

その言葉の冷淡さが、リヴラクスが八重垣の命を奪うことになんら躊躇いがないことを伝えてくる。

「待つて、正臣には何もしないで！」

先の提案にすがりつくしかない状況にされた。魔力の差は歴然としている。どうあがいてもクレーリアではこの少年を止められない。

教会側と戦争になってしまいかもしれないと試みて、欧州ではよくあることだとにべもない。あちらでは、教会の戦士に襲われた上級悪魔が命を落とすことも珍しくないのだと。

それでもクレーリアは殺し殺されの間柄の勢力の男との繋がりを断ち切ることが出来ない。

「ならどうすると言うんですか？」

「愛人になるから、だから」

必死だった。リヴラクスの足にすがりつくほどに必死だった。

「いえ、その話もういいですから」

子供にひざまずいて、こんなことを懇願しなければならぬ自分が情けなくなってくる。

「お願いします。私を、クレーリア・ベリアルを貴方の愛人にしてください……」

それでも、クレériaは……。

「分かりました。じゃあ、それでいいですよ。クレériaさん。……いや、もうクレériaでいいな。俺は仕方なくお前の頼みを聞いてやると言っているんだ。だったら言うことがあるだろう?」

こうして、クレéria・ベリアルは必死に頼み込んで、グレモリー家次期当主『紫紅の龍帝』リヴラクス・グレモリーの性欲のはけ口にしていただいた。

「うっあ……ありがとうございます」

感謝の言葉と共に。

ナイトメア (1)

『男は女に触れない方がよい。しかし、みだらな行為を防ぐためにも、男は妻を持ち、女は夫を持たなければならぬ』

『(夫と妻は)互いを拒んではならない。ただし、祈りに専心^{サタン}するため合意のうえでしばらく別れ、また一緒になることは構わない。そうではないと、あなたがたの自制力のなさに乗じて、サタンが誘惑してくるかもしれないから』

『未婚者とやもめに言うが、皆わたしのように独り身でいるのがよい。しかし、自分を抑制できなければ結婚したほうがよい。欲望に身を焦がすよりは、結婚したほうがましだから』

新約聖書 コリントの信徒への手紙一 第七章より 魔王^{サタン}を目指す悪魔が抜粋

クレーリアと話してみても分かったことがある。

俺の感じたことではあるが、クレーリア・ベリアルはとても庶民的な感覚の持ち主だ。

金銭感覚や生活レベルがどうこうといったものではなく、自分の行動が及ぼす影響というものを理解していない。自分を一般市民、平民の中でも中流・下流の連中のように考えているように思われた。

感覚的なものだが、クレーリアはベリアルの名を持ちながらも自分のことを前世における俺のような立場だと考えているような気がするのだ。

何を言っても大勢に影響のない者はいる。どんな意見を口にしたところで、聞き流されて終わりの者がいる。

敵対勢力の男と結ばれようが、「あ、そう」で済まされる女はいる。クレーリアがただの名もない平民であれば、なんということとはなかったのだ。「ふーん、物好きな女もいたものだ」で終わっていただろう。それでどうなるわけでもないからだ。

平民がクレーリアのように『王』の駒を探ったところで、さして気にされない。雑誌の記者連中が良い例だ。そもそも平民では魔王の施設に侵入することなど出来はしないが。

だが、クレーリアは分家ではあってもベリアル家に生まれた純血の上級悪魔Ⅱ貴族であり、悪魔の中では重要なレーティングゲームで長年、絶対王者として君臨し続けている『皇帝』デイハウザー・ベリアルと親しい従妹。ただの一般市民などではない。

人間界では、ネットワークの発達とともに様々な情報発信が可能となつてきている。多くの者の目につくその場で、無名の女がつぶやいたところで大したことはそうそう起きない。

だが、つぶやいたのが有名人であればそうはならない。芸能人が民衆の気に障るようなことをつぶやけば、すぐに大騒ぎだ。一般市民であれば、ただの一意見として流されるようなことでも、名の知られた者が言葉にしたならば大きく取り上げられることになる。

クレーリアはこの場合、有名人の側になる。彼女の行動や意見には、「あの『皇帝』と大変親しい」という冠が付くからだ。「グレモリー領のとある町のAさんが、教会の男と付き合ってるんだって」と聞くのと、「あの『皇帝』ベリアルと大変親しい従妹のクレーリア・ベリアルさまが、教会の男と大恋愛！」と聞くのでは大違い。

『王』の駒にしても同じだ。「またあの雑誌に『王の駒』の記事が出てたよ」と『皇帝』の従妹！『王の駒』について語る！」では衝撃が違いすぎる。

クレーリアについて庶民的という表現をしたが、それは庶民寄りの貴族と同じではない。

たとえば、ソーナ・シトリーは下級悪魔に入れ込んでいる庶民寄りの貴族と言えるだろう。

だが、ソーナは庶民的ではない。庶民は庶民を救つてやろう、助けやろうなどとは思わないからだ。少なくとも前世で一般ピープルをやっていたときの俺はそんなことを欠片も思いはしなかった。スーパーでデカイ荷物を抱えた婆さんが荷物の積み下ろしに困っていたら手伝うくらいはするが、遠くで暮らしている知らない誰かのこ

となど気にはしない。ちなみに爺さんは手伝わない。なぜって「余計なお世話だ」といった態度を取られる確率が高いからだ。何かしたら「ありがとう」くらいは言われたい。庶民なんてそんなものである。

ソーナが平民達に向けているのは上から見下ろす憐みの視線、支配者として生まれた者が持つ貴族的な目線だ。

俺はソーナのそういつたお姫さましているところが好きなのだ。グツとくるものがある。

レイヴェルの合理・効率のためなら犠サクリファイス牲を厭わない姿勢も好ましいし、ラティアの冷たく「自分の利益を考えているだけよ」と振舞うツンデレっぽいスタンスも良い。

なんていうか平民達の上位者・支配者であることが当たり前な感じ。実にぐつちやぐつちやとしたくなるものがある。

その点、クレériaは感覚が他の多くの貴族女性とは異なるのだろう。

平民に混じって育った影響なのだろうが、これはある意味では前世持ちの俺に近いものがあるのかもしれない。

ただ、俺と彼女では決定的に違うところがある。

それは、「強さ」だ。圧倒的な強者は、あらゆる行動を許される。いや、許すしかない。権力の源泉は暴力なのだから。口を閉ざすことも潰すことも出来ない存在は、自分勝手にいられるのだ。

だが、弱者はそうはいかない。より力のある者にとって都合が悪ければ、潰されていく。

弱く、それでいて影響力だけはある立場というものは、言いたいことも言えない窮屈な立場でもあるのだろう。

そして、弱者は強者によって弄ばれることになるものだ。弱肉強食。弱い女の肉は、強い俺にパクリと食べられるのが定めというもの。

今まさに俺がクレériaにそうしているように。

クレーリアの懇願を聞き入れた俺は、彼女を寝室へと連れ込んだ。本日のクレーリアの装いは、簡単に言えば清楚系コーデ。淡い青のブラウスに白レースのロングスカート、上に羽織ったカーディガンと、教会男の喜びそうなフアツションだ。ちなみに俺も清楚系は好きだ。あからさまに露出の多いセクシー路線や、遊んでそうな服装とは違って、清楚系が嫌いな男は少ないのではないだろうか。

「ほら、脚を開いて」

命令口調でそう言うと、ベッドの端に座らせたクレーリアのキュツと合わせていた膝が申し訳程度に開いた。

スカートに手を伸ばしすると膝まで捲り上げ、中へと忍ばせる。太ももの感触を楽しみながら、指先を徐々に上へ内へと進めていく。

「っ……」

性欲発散のための愛人契約に同意したクレーリアの身体は、俺のモノだ。まだ、心まで欲しいとは言わない。

いずれは俺の牝モにしてやるが、今はこの嫌悪を堪える女の肉を楽しみたいところだ。

「恋人とは普段どうしてるのかな？」

内ももと股の境目付近、下着のラインをなぞるようにしながら、八重垣正臣との性生活を尋ねた。完全にセクハラだが、そう尋ねる俺の声は大変可愛らしいものだ。少年役を演じる女性声優の声っぽい。

「正臣は私の事を大事にしてくれているの……。ちゃんと結婚してか
らにしたいって」

クレーリア・ベリアルは悪魔だ。まだ色までは分からないが、手に伝わってくるレースっぽい下着の感触からして結構気合の入った物を履いているような気がする。リュイと大差ない年齢の女がお子様パンツでは困るが、といってオバサンパンツでも興覚めだったので、これは良い勝負下着の予感。

「それは辛かったね。俺はちゃんと愛人になりたいって言ってくれたクレーリアを大事にしてあげるから」

悪魔は淫蕩に出来ている。クレーリアの気質とは関係なく、『神話』においてそういう存在だとされているのだ。だから「好き好き、大好

き、愛してる」となったら、ヤルことやりたくなるのが悪魔の性サガとい
うもの。それを堪えているのは、辛いだろう。

クレーリアの隣に座り、左手を彼女の腰に回し、右手でじつとりと
これから触れる場所を意識させるように、割れ目の周辺部を擦ってい
く。

「んんっ……」

周辺部から少しずつ押し揉むようにして秘裂には直に触れずに按
摩を続けていると、やがてクレーリアの吐息に色めいたものが混じり
始めた。彼女の身体が火照り出しているのが分かる。

ここは夢魔の術によって造り出された淫らな夢の世界。くわえて
その術は『譲渡』によって強化されている。クレーリアはその強制力
に抗えはしない。ましてや、男に恋情を抱いていながら、抱いてもら
えない状態が長く続いている設定だ。女の牝スイッチはすぐに入る。
「あっ、っあ……」

頃合いを見て牝芯を探るように指を中央に躍らせると、下着の布地
に水気が染み込んでいた。

「もう濡れてきてる。欲求不満でやつかな?」

「そんなこと……」

クレーリアは顔を背けるが、彼女が感じ始めているのは明らかだっ
た。この年齢で処女ではあるまいし、男の味くらいは知っているはず
だ。

セックスの味を知っている悪魔の女が教会男の好みに合わせて過
ごしていれば、溜まって溜まって仕方が無かったに違いない。

「付き合っているのは、身体を求めてもくれない八重垣だけ? 他の
男とはシていないのかな?」

「して、ない……あっう……んう」

「ダメだなあ、クレーリアは。ウソばかり言つて。八重垣は騙して
もいいけど、俺にウソをついたらダメだ」

十分に焦らして解した割れ目を下着の上から爪を立てるようにし
て搔いてやると、滑らかな生地にじゅくじゅくと湿り気が増して行っ
た。

「ウソなんて、ついてない……」

「いいや、クレーリアには八重垣の他にも男がいるはずだよな？」

クリのあるだろう付近を親指でじわじわと押し込んでいくと、何かを堪えるよう寄せていたクレーリアの眉が緩み目尻が下がる。

「ああっ、ああ……」

「ほら、ここ、押されるの気持ちいいよね？ ほら、ほらほら。もう指がびちよびちよになってきてる」

「やめ、そんな、おしこまない……で、いたい、から」

クレーリアのそこは「イタイ」なんて言っていない。むしろ、もつと構って欲しがっている。

「痛くなんてないでしょ？ 気持ちいいって素直にいいなよ。そうしたら、ほら、こうしてもつとよくしてあげるから」

その証拠とばかりにプクリと主張してきたクリ芽を布ごと摘まんで軽くしごいてやると、クレーリアの腰がくくつと動いた。片手の指を唇に挟んで声を堪えようとする仕草が色っぽい。

「んくっ……ふっう……んっ」

「ほら、黙ってないで言わないと。クレーリアは、さつき誰の何になりたいって言ったのかな？ 床に膝をついて、俺の腰にしがみついてさ」

やはり相当溜まっていたのだろう。クレーリアの下半身が刺激を求めて、俺の手にすり寄って来ている。

「わたしは、あなたの、愛人です。愛人にしてくださいって、おねがいしました。あなたと、今、シてます」

改めて口にする事で、クレーリアは自分がもう八重垣ひとりの女ではなくなってしまったことを再認識させられた。

（私は、この子の愛人……。こんな小さな男の子に……おもちゃにされてる……）

悪魔は個体差が激しい。平均的、一般的な数値というものはあるけれど、中には身長3メートルを超えるような者もいる以上、性的な発

育に数年程度の差が現れることくらいはあり得る。

まだ十歳にもなっていないリヴラクスは身体も手も小さく細く、その声は可愛らしいもので、その容貌は少女のよう。それも絶世の美女だ。

そんな好みとは正反対の子供に下半身の敏感な場所を弄ばれている倒錯的な状況に、クレーリアは感じてしまっていた。

「そろそろ、直に触って欲しいよね？」

クレーリアの返事を待たず、下着と女の割れ目の間に少年の細い指がスルリと入り込んでくる。

「んっ、んっうっ」

八重垣以外の男に触れられて、艶めいた声を出したくない。それなのに、口を抑えていなければ恥ずかしい声が勝手に漏れてしまいそうだった。

身体はもうクレーリアの気持ちに裏切っていて、腰がかくかくと動き少年の指愛撫を求めてスカート揺らしてしまう。

(なんで、どうしてこんなに……)

上手いのだろう。

弱いところばかりではなく、その周辺からくにと揉み解すようにして焦らしてくる。そうして焦れ切ったまらなくなるところにスルリと軽く触れては少年の指が去っていく。

そうされると、クレーリアの身体はもつとそこに触れて欲しいと指先を追いかけるように動いてしまうのだ。

「クレーリアのこころは素直だね」

そうやって追いかけてしまった身体が指先に触れると、彼は「よくできました」と誉めるように優しく敏感な陰核を撫でてくる。

クレーリアは親指を噛んでその快感に耐えようとした。

(正臣……)

目を閉じ想い人の顔を思い浮かべても、クレーリアの身体は少年の愛撫によって昂り続ける。心を裏切る肢体の反応が恨めしい。

快感から逃れようと腰をくねらせると、彼女の腰を抱くりヴラクスの腕に力が籠った。

「クレーリア、お前は俺の何になったんだ？ こつちを見て答えるんだ」

それは沈黙を許さない口調だった。

目を開き、少年の方へと顔を向けると紫の双眸が嗜虐的な色合いを湛えて見上げて来ている。

「あ、愛人にな……あつ、あああつあうっ！」

口を開き強制された言葉を吐き出そうとした途端に、少年の指がぬるりと膣内に滑り込んできた。

媚肉穴の中で指先が踊る。親指でクリを押されながら、侵入してきた指でその裏側をこねくられる。すると堪らずクレーリアは口から嬌声を零してしまった。

「そうだ、クレーリア。お前は俺の愛人だ。俺は女が喘いでいる声を聞きたい。意味は分かるか？」

先ほどまでのゆっくりと溶かすような優し気な愛撫とは異なる、激しい指遣い。下着の内側に這入り込んだリヴラクスの指が素早く動く。

見た目の年齢を自在とする悪魔の女盛りは長い。その上、恋愛の情念に身を焦がしているクレーリアは心の内に官能の火種を埋めているようなもの。

膣内から腹の側のザラザラとした箇所を擦り上げられ、外からクリを圧迫された女体は意志とは関係なく発情し始め、とても声を抑えてはいられなくなってしまふ。

リヴラクスの言葉はそんなクレーリアに与えられた「許し」だった。

「ひあ、んああ、はあん……。やめ、ああっ……」

スカートと下着の向こう側で弄られていると言うのに、じゅぷじゅぷと卑猥な音が聞こえてきそうだった。

「言い訳」を与えられ、口を手で抑えることを禁じられたクレーリアは淫らなわななきをもちや堪えられない。

「そうそう、その調子。たとえ感じてなくても、俺を悦ばせるようなことを言うんだ」

感じていなくても感じたフリをする。そうして男を悦ばせ、快く対

働を支払わせ、何度も利用してもらおう。

それは『悪魔のお仕事』の内、クレーリアとその眷属が担当していない部分——性的なサービス——を行っている者たちのすることだ。

「そんな……そっちの仕事みたいな、あつ、こと……んううつ、あつ」
人間に性的な奉仕を提供する娼婦のような悪魔たち、淫魔の真似事させられるのは屈辱だ。しかし、それはもう既に出来上がりつつあるクレーリアにとっては都合の良い提案でもあった。

つい先ほど嘘を吐くなど脅して来たばかりのリヴラクスを用意した逃げ道に、クレーリアの心は自ら転げ落ちていく。

（でも、この子を喜ばせないと、いけないから……。そうしないと、正臣が……。ベリアル家が……。正臣のため……）

盛りの付いた女の身体。その最も感じやすい牝芽をいたぶられ、牝穴の内をなぶり続けられる。

その刺激に剥き出しにされたクリトリスはぷっくりと充血し、肉穴は少年の指を啜え込むように収縮を繰り返す。

「ほら、もっと媚びた声を出して、気持ちよさそうに啼いて」
リヴラクスが指を出し入れするのに合わせて発情汁が掻き出され、下着がどんとどんと湿っていく。

腰を中心にして広がる快樂の波に、クレーリアの口元はだらしなく緩みだしていた。

「んあああつ……。あああつ……。ん」

鼻にかかった甘い響きを耳にし、少年は嬉しそうな笑みを浮かべた。

「そうそう、いいぞクレーリア。その調子。上手くできたから、ご褒美を上げるね」

中指だけだった指挿入。それに指がもう一本追加された。

「あうつ♡んあつ、あつ、そこ♡もう、もう……。ふあつ、そんなにしたらあ……。♡」

陰核を優しく擦られながら、牝穴を激しくこね回されたり。その逆をされたり。

内と外からぐつと押されながら、指先をブルブルと振動させられた

り。

あるいは急に責め手を緩めて、そつと慈しむように撫でられる。

「んあつ、あああ……♡ あそこ、あ、あそこがあ……あううつ♡」

気持ちいい。八重垣と出会って、恋をして以来、クレーリアは男との関係を持つていない。もちろん女ともシていない。

すぐ近くに愛しい男が居るというのに自分で慰める日々を余儀なくされていた女体が、肉悦により悶えていた。

(これは、正臣のために……。こうしないと、正臣が殺され……。だから……)

いやらしい声を上げてみせろと言われた。媚びた声でこの少年を悦ばせるようなことを口にしろと命じられた。それが愛人の役割だと。

そうしなければ、八重垣正臣との交際を実家に、従兄に知られてしまう。グレモリー家が、バル家が対応に動き出してしまう。最悪、八重垣が処分殺されてしまう。

クレーリアが愛しているのは八重垣だけだ。それでも、火を点けられた肉体は巧みな淫撫に反応してしまっていた。濡れそぼった牝穴をえぐり上げられ、かきまわされ、肉粒を転がされると、官能が高まっていてしまう。

「もう、もうだめえ♡ こんな簡単に……指だけで……♡ でも、ああつ、でも、あうつ、気持ち、いいの……♡ もう、あつ、いつちや……」

牝の欲望が限界に達し、腰が蕩け落ちる。悦楽の奔流が身体を駆け巡ろうとするその寸前で……。

「なかなか上手じゃないか」

少年は指の動きを止めてしまった。

「あああ……。はあああ……。♡」

クレーリアの睫毛が切なさうに揺れる。情欲に濡れた灰色の瞳を、少年の紫の瞳と合わせてしまう。

絶頂間際に寸止めを受けた女体の中で牝欲が悶々と渦巻く。散々弄り回されてめくれ上がった牝穴の入口、ずる剥けになるまで勃起し

てしまったクリトリス、ねだるように少年の指を締め付け発情したメス汁を垂らし続ける膣内。

クレーリアの下半身がひとりでに動いて、少年の手に甘えすり寄っていった。

「キスしようよ」

クレーリアが腰を寄せただけ指を引き抜きながら、リヴラクスは顔を寄せてくる。腰に回されていた彼の手が肩に置かれ、紅髪の悪魔の唇がぐつと近づいた。

それでもクレーリアは成熟した大人の女性で、リヴラクスはまだ幼い子供の身体だ。身長差がある。

「それ、は……」

昼間に八重垣と交わした口づけを思い出す。恋人との初めてのキス。それは今のクレーリアにとって、とても大事なことで……。それをその日の内に上書きされるようなことは、したくない。

そう思うのに……。少年の指にぐちゅりと膣内をかきまわされると、昂った肉欲に頭の中が染め上げられてしまう。

「クレーリアは俺の愛人だよね？」

「ええ……」

肩の上、首程の高さに少年の口があった。強引に唇奪ってこようとしない。してくれない。

クレーリアの側から口づけろ。そう言われていた。

「じゃあ、情熱的にして欲しいな」

視線で命じながら、少年はじゅぷつじゅぷと達するギリギリのラインでクレーリアの下半身をなぶってくる。

「んっ、あああっ……♡ あっん……♡」

クレーリアの腕が少年の背と後頭部に回された。ふたりの唇が重なる――。

「んうっ、んちゅっ……♡」

牝穴に突き込まれた指の動きが、クレーリアの情熱的な舌遣いにリンクするように激しくなっていく――。

(正臣……。あうん……。♡ ひいあ……。♡ あっ、イク♡ ああっ、

いっちやう……♡ ふあっ、いける♡ ああう、いくっ♡♡ んあああ
ああああ♡♡！)

クレーリアは恋人ではない、小さな少年と舌を絡ませ合いながら達
した。

ナイトメア (2)

「はあ……♡ はあ……♡」

ここは夢魔の術でつくられた、淫らな夢の世界。男も女も情欲に溺れていくように出来ている。

唇を合わせ、舌を絡め合わせたまま、クレériaに三度の絶頂を迎えさせた。その後、快楽に瞳を曇らせ、ぼんやりとした彼女を魔力で浮かしてベッドの中央へと運んだ。

三度イキの余韻で表情をとろりと蕩けさせているクレéria。そんな彼女がシーツの上で仰向けになっている姿は、なんとも色っぽいものがある。

「そろそろコレは邪魔かな?」

俺はそう言いながら、彼女のスカートの端を掴まみ上げた。

しゅりしゅると布音をさせ、クレériaは俺に言われるがままにスカートを脱いでいく。情欲に流されているのか、それとも愛人として振舞うためにそうしているのか。それは今のところどちらでもいい。「これで、いいの?」

スカートの下から現れた布は白かった。ああ、初めての男が好きそうだなというデザインだ。透けてはいないがレース模様があり、一見清楚に見えてエロいやツ。

つまり、今日のクレériaは八重垣とのデートでヤル気満々だったというわけだ。少なくとも期待はしていたのだろう。

「こつちも脱がないとね」

「ふあ……んっ♡」

パンツをぐいと引っ張り上げ股布を割れ目に喰い込ませてやると、クレériaは鼻にかかった吐息をこぼしながら両手で股間を覆い隠そうとする。

ただその動きから本気で抵抗しようという意思は感じられない。ポーズとしてやって見せているだけのように見える。男の情欲を誘うための媚態だ。

その証拠に、彼女の指先はパンツを掴んだ俺の手を退かそうとして

こない。むしろ、先をねだるようにくすぐってくるぐらいだ。

「隠さないでコレの中も見せてくれないと」

ぐい、ぐいぐいぐい。

「やあつ、ああつ、はあつ……♡ そんな、ひっぱらないで」

喰い込んだ布がクリを摩擦するようにしてパンツを何度も引つ張り上げると、俺の手の甲を彼女の指がするするとなぞってくる。一応抵抗の素振りはしておくけれど、「強引に脱がして」と言われているようだ。

手マンですつかり出来上がって発情顔をしているくせに、俺に無理矢理されたと「言い訳」したい女悪魔の狡さを感じさせる。

「ほら、手を退けないか」

まあ、ここはノっておくとしようか。こういうの、嫌いじゃない。

「いや、これ以上は、もう……やめて」

脱がさないでと言いながら脚をくねらせ腰を浮かすクレーリアだが、その動きはパンツをズリ下ろそうとする俺の手を助けているようなものだ。

ずるりずるりと脱がしたパンツを片方の足首に引っ掛けておき、ソックスは脱がさない。様式美というやつだ。

「やめてって言われてもね」

するりと彼女の両脚の間に這入り込み、この後に及んで恥ずかしい場所を隠そうとするクレーリアの手を掴み力を込める。

彼女からの抵抗は……ほとんどなかった。

「うわ、やらしい」

「ハアっ……やあ、みないで……」

手を退かされ、無防備になった陰毛と秘唇。スイッチの入った牝穴がひくひくと開閉を繰り返し、その度にとろとろと蜜を垂らしていた。たつぷりと愛撫してやった肉蕾もぷくりと膨らんで「もつといじって♡」とねだりながら、ぴくぴくと脈動を繰り返している。欲求不満に火が付いているのが一目で分かる状態だ。

顔を近づけると、肉悦に蕩けた女の発情臭が鼻腔に飛び込んだ。

「毛は整えているみたいだけど。八重垣とするために準備していたのかな？」

「それ、は……」

「ふふ……それにしても、えっちな匂いがすごいな」

指で散々に舐った牝穴から漂う「ぶちこんでえ♡」と主張しているかのような匂いにくらくらとしてしまう。

鼻を割れ目に当たるくらい近づけ、淫猥な匂いをスーツと吸い込んでみる。

実にいやらしい匂いだ。期待に膨らみまくったチンポの先から、ぬりとしたものが滲み出てくる。

「やだ、そんなところ嗅がないでえ……!」

アソコの匂いを嗅がれて明らかに興奮しておいて何を言っているのやら。寝言は性的な意味で寝ながら聞いてやるとしよう。

もう少し弄り回してやりたいところだが、俺の方もそろそろぶち込みたくなってきてしまった。相手が初めてならもつと時間をかけてあげたいところだが、これだけ盛っている年上の女ならもう構わないだろう。

「クレーリアのココは、もう挿れて欲しくて仕方がないみたいだ」

ズボンとパンツを脱ぎ捨て、ピンと突っ立ったチンコを取り出す。うん、チンコだ。肉棒と呼べるほどの大きさの無い、子供チンコだ。むしろ、おちんちんって感じた。皮もすっかり被っているお子様仕様の逸物だ。ちなみにちゃんと綺麗になっている。ちよくちよく見かける「ぐへへ、三週間洗ってないモノの臭いはどうだ？」とか「おら、チンカス美味いか？」ってパターン。俺はアレが好きではない。

普通に汚いし、病気になるそう。少なくとも腹は下しそうな気がする。

まあ、先走りは滲んでいるがな。

「あつ……もしかして、初めてなの？」

俺のお子様チンポを見たクレーリアの声には、若干の悦びが混じっていた。彼女の喉がコクリと蠢く様子が目に映る。

「どうかな？ でも、期待には応えてあげられると思うよ？」

違う違うとでも言うようにクレーリアは首を何度か横に振った。しかし、すぐにその視線は俺の股間へと戻ってくる。

「んはあぁっ……♡!」

皮を剥き上げた小さく短いお子様ちゃんぽをクレーリアの秘部にペチンと乗せると、思った以上の反応が返ってきた。

濡れた声に、くくつと股間から腰の後ろ辺りが引き締まるような快感が奔っていく。

もう堪らない。特に我慢する理由もない。でも、もう少し焦らしてやりたい。

「う……っ……ん、ん……。や、あぁぁっ……♡」

妥協の産物として先端で膣の入口をくすぐってみると、それだけでぞくぞくとしたものがこみ上げてくる。

クレーリアも明らかに感じているようだ。演技とは思えない声を上げている。これが演じてのものなら、彼女はもっと上手く立ち回れていただろう。

「クレーリアは逞しい男が好きなのかと思っていたけれど、俺みたいな小さい子相手でもその気になるんだね?」

悪魔は誘惑する者だ。人間を墮落させる種族だ。その性器の具合の良さは、人間とは比較にならない。

オスの性器は女を虜にするように出来ている。メスのそれも男を夢中にさせるようになっていいる。

男の側にきちんと女を感じさせようとする意思と、感じる箇所を読み取る能力があれば、悪魔の男根は女に合わせて形を変えていく。つまり、ナリは小さくてもナニは十分デカクなるのだ。

女悪魔にしてみると、まだ女を知らない年齢の童貞シヨタちゃんぽを啜え込んで自分の形に変えるのは堪らないものがあるらしい。シヨタ好きの『騎士』からそんな話を聞いたことがある。

まあ、男が処女に興奮するようなものなのだろう。

「こんなの、こんなの……っ♡」

俺とクレーリアの性別を入れ替えて考えてみると……ムチムチな彼女が好きはずだったのに、淫乱美少女口りに脅迫されて押し倒さ

れ、手コキでバツキバキになつてしまつた肉棒の先端に処女膜押し付けグリグリされて興奮しちやつてる状態か? 「こんなに大きくしておいて、今さら嫌とか嘘だよね? ほらほらく挿れちゃうよ」みたいな。

……アリだな。

「その、こんなのが欲しいんだよね? 愛人のクレーリアは」

クレーリアは愛する八重垣の魂に亡霊となつてまで寄り添つていた情の深い女だ。あまり追い詰め過ぎるのも良くないだろう。自殺を選ばれても困るしな。……もう死んでいるのだから自滅と言つた方が良いのかもしれないが。

だから、しばらくは言い訳を与えてやらなければならない。脅されて仕方なく、八重垣のため、御家のため、尊敬する従兄のためなのだと。

まあ、その情もそう遠くないうちに、俺のためのものへと、クレーリア自身が快樂を貪るためのものへと塗り替えてやるつもりだな。

「ふああ……そう、わたしは……あああつ♡」

火照つた粘膜を先端でくちゆくちゆとまさぐっていると、クレーリアのソックスに包まれたままの足指がくいと曲がつた。

彼女はつま先立ちで尻を浮かせ、割れ目からトロトロと蜜を垂らしながら、俺のモノに股間を擦りつけるように腰を上げ、気持ち良さそうに下半身を痙攣させている。

「クレーリアの愛人マンコに、俺のを挿れて欲しいよね?」

こうして改めて聞くまでもなく、この女はチンポを欲しがつていた。

ブラジャーとブラウス越したというのに、彼女の乳首が尖り立っているのが分かるくらいに欲情している。白く濁つて見えるほどの本気汗をマンコから垂れ流し、クリは膨らみ切つて突けば爆ぜそうだ。

実際、ちよつとそこに触れてやるだけで腰が跳ね上がる。

「んんっ♡! ……ふっ、あつ、はああ……っ♡」

ただ、八重垣という恋人がいるためにその欲望をそのまま口にする事が出来ないだけだ。

強い龍のオスは自然とハーレムを形成すると言う。俺にそのメスを惹きつけるドラゴンのオーラを与えている源は、『赤龍帝の籠手』だ。今のクレーリアは、その神器から取り出した宝玉の中に魂を閉じ込められている身の上。女を虜にするオーラの中に浸かっているようなものだ。

夢という形で俺と深く精神的に繋がった状態のクレーリアが、拒みきれぬはずがない。

「挿れて欲しいよな？」

悪魔としては若くとも、クレーリアはそれなりの年数を生き、それなりの回数のセックスを経験している。

ただ、身体を鍛えている男が良いという好みもあつて、これまでにこんな未熟な少年との行為をしたことはなかった。

一・二年前には幼稚舎に通っていたような子供。そんな子供のモノなのに、ガチガチに漲ってクレーリアの膣の入口をこねまわしてくる。

「あううっ……、そんな、はあっ♡　そこはああッ♡」

勃起しきった陰核に、クレーリアの愛液で濡れ光る少年のモノが狙いを定めてきた。

ぬるりぬるりと敏感過ぎる箇所を男性器で撫でまわされ、転がされる。

（ああっ……、欲しい……。ダメなのに、私……）

肉豆に硬いモノをギュッと押し付けられると、快感が背筋を貫いて脳天まで達し、背中が反れてしまう。

ブラの中の乳首はもう尖り切っていて、下半身からの快感にたまらず身体をくねらせるたびに擦れる。まだ愛撫を受けていない胸が、もどかしさを秘めて衣服の下で弾む。

膣孔の入口は忙しく開いて閉じてを繰り返し、熱い蜜を溢れさせて少年のモノを欲しがっていた。垂れ落ちた牝涎がベッドシートに作る染みが、クレーリアの欲求を正直に表してしまっている。

「こんなにしてるんだ。もう欲しくて堪らないんじゃない?」

「ふあ、くううん♡んあ、……はああつん♡」

クレーリアは八重垣正臣を愛している。でも、今の彼女は八重垣とは違う男、ずっと年下の、小さな男の子にいいように啼かされてしまっていた。

恥ずかしい声が口から出て行くのを止められない。心に決めた男性はここには居ないのに、他の男のペニスをあてがわれて反応してしまっている。

(どうして……、どうして、こんなに……)

ココロは拒否感でいっぱいなのに、カラダがこの少年のモノを求めてしまっていた。

今ここにいる少年のモノを欲しがってしまう淫らな部分。その広がり具合はクレーリアが悩乱するほど増していき、ヒクヒクと痙攣までして男を誘い続けていた。

その様子を楽しし気に眺めながら、少年は怒張の先端でクリトリスや膣孔の周りをネチネチと巧みになぞってくる。

「クレーリアは俺の愛人になりたいんだよね? もういらないうって言われたら困るんでしょ? なら、どうすればいいのか、分かるよね?」

口調だけは優しく諭すように、でもクレーリアの心を騷るように、少年が囁いてきた。

媚びてみせなければならぬ。そうしないとイケない。

(ああつ……うあああ……♡ 正臣、んっ、ああつ、正臣……)

敏感な箇所をしつこくなぞられ、でも挿れては来ない愛撫を続けられ、もう耐えられなくなって来ていた。

カラダが挿入を欲してしまっている。少年はクレーリアが自らそれを望む言葉を口にするまで責め立て続けるつもりなのだろう。

「挿れるなら……はやく、いれて……」

もう堪らなくなったクレーリアがそう言うと、少年のペニスがじわじわと膣内の侵入し始めた。侵入者の体積の分だけ、牝汁を溜め込んだ陰唇から濃く匂う愛液が溢れ出て行く。

待ち焦がれたモノをようやく迎えられた膣粘膜は嬉しそうにヒクつき、這入りこんでくる男根の先に吸い付いた。

「そろそろ、胸も見せて欲しいな」

リヴラクスはそう言いつて挿入を途中で止めてしまう。皮に包まれたままの包莖子供チンポの先つちよだけが、クレーリアの中に埋め込まれている。

コレが、この後どうなるのか……。それを聞いたことはあっても実体験したことのないクレーリアは、知らず期待に喉を鳴らしてしまう。

「はあっ……、ハア……これ、で、いいの？」

膣の入り口付近、牝穴の浅瀬をやわやわとほじくられながら、クレーリアはもどかし気にブラウスのボタンを外し始めた。

ボタンが上から3つ外され、ブラウの半ばまでが晒されるとリヴラクスの視線がそこに集中するのが感じられた。情欲の目に射られた胸に熱が籠る。

そのことに羞恥を覚えながら、クレーリアはブラウスの下からボタンを外し始める。

「んはあ……、ひいうん♡」

くちゆりくちゆりと浅い結合部から淫らな音が響いてくる。腰をじくじくと焙り溶かすような快感に促されながら、クレーリアは下腹部を、ヘソを、と徐々に露わにする肌の面積を増やしていった。

「焦らすなあ……、でもそういうの嫌いじゃないよ。コレかな？ 男が外しやすいのを付けてるんだね」

身体を左右に振じつて汗の染みたブラウスを脱ぎ捨てると、少年の手がブラに包まれたクレーリアの胸へと伸びてきた。クレーリアが恋人との逢瀬に何を期待していたのか。

それを見透かすような言葉をかけられながら、白レースのブラを外され生の乳房が外気に晒される。

男の子のまだ小さな手には余る乳肉に、広げられた五指が食い込んできた。ぐにりと指が乳肌にめり込んで形が変わる。指の力を抜けると乳房の形が元の自然な状態へと戻っていく。

白く手に吸い付くようなモチ胸の弾性と感触をじっくりと楽しむ、余裕のある指遣いだった。

「んうっ……、あふう……うあ♡ その、触り方……」

膺の浅いところをこねくられながら、胸を揉まれ擦られ揺すぶられる。

「ああ、クレーリアは知らないのかな？ 俺は前世持ちでさ。前の人生の記憶があるんだ。まあ、それを合わせても俺の方がずっと年下だけどね」

とてもこの年齢とは思えないねちっこい触り方に疑問を抱くと、すぐにその答えが返ってきた。

「気持ちよさそうだね？ おっぱいで感じてる？」

否定の言葉を口にしたかったけれど、クレーリアはこの少年に気に入られなければならない立場だ。リヴラクスがグレモリー家やバル家、ベリアル家に一言伝えるだけで八重垣との生活は終わってしまう。

「ああ……、ええ、もう、だめえ♡ そんなに揉まないで、おかしくなっちゃうから」

性質が悪いのは実際に心地よいことだ。リヴラクスの愛撫は自分勝手に女を弄り回して楽しむといったものではなく、女体を口説き落とそうとしているようにさえ思えるもの。

クレーリアの全身に淫らな熱を帯びていく。特に膺と胸は火が付いたように性感が強くなってしまった。

官能の泡が次々と湧き上がっては弾けていく。乳肉を摘ままれる度に甘い痺れが奔り、掬い上げるようにして揺らされると乳首が疼いて仕方がなくなる。

「ね、ねえ、もう……んああ……♡ もう、シテ……」

半開きの口元から艶っぽい吐息がこぼれる。指戯で嬲られる胸でさえ堪らないのだから、オスのモノの熱で直接焙られている膺媚肉は……。

（これは……演技、だから……。この子に言われた、から……。そうしない、ダメ、だから……）

クレーリアの尻尾はいつも以上に垂れ落ち、目は淫欲にトロリと曇っていた。

「そんなに物欲しそうにされたんじゃしょうがないな。好みのサイズだったから、もう少し弄っていたかったんだけど……」

なおも焦らすような少年の言いように、クレーリアの眉が切なそうにたわむ。それと同時に、好みだと誉められたことで吐息にこもる甘さと熱とがより濃くなった。

「クレーリアの欲しいところ、開いて見せてよ。それから、どこをどうして欲しいのか、ちゃんとやってくれないとね」

少年は膣の浅瀬からペニスを引き抜くと、クレーリアに恥ずかしいことを要求しながらクリトリスに擦りつけてきた。

「そんなツ……こと……。んあっ♡ んああ♡ こう……？ これで……いいの？ あうあ♡ あっあ♡」

いつの間にか閉じようとしなくなっていた脚を大きく広げる。胸も股間も隠そうとしなくなっていた両手を伸ばし、クレーリアは自身の陰唇を左右に引つ張った。

男と女の繋がる箇所が淫らな菱形を描き、広げられた膣孔からメス臭い汁が溢れ落ちる。粘り気の強い白っぽい肉欲に塗れた体液だ。

子供を作るための行為ではなく、快楽を貪るための行為を望む、欲望に溺れたメスの姿。とてもではないが、清廉を旨とする教会の者には見せられない浅ましいメス悪魔の痴態。

「いいね、フリでもいいからそうやってしてくれるなら、俺も悪いようにはしないから。うん、長く付き合っていけそうだ。次は、さ。こう言って欲しいな」

少年は押し掛かるようにしてクレーリアの耳に口を寄せてくる。

本気汁を垂れ流す女は、ついでのように吸われた耳を真っ赤に染めて、少年貴族の要求にコクリと頷きを返す。

（こんなこと言われて、受け入れちゃうなんて……。私、おかしくなってる……。でも、これは正臣のためだから……）

心臓が情欲への期待に跳ね回る。目が愛欲に霞んで、頭は肉欲に蕩けていた。胸も腰も、膣肉も、身体中が望んでしまっていた。

「欲しくて、欲しくてどうしようもない、ク、クレーリアのメスマンコに、リアスくんのおチンポ、ぶちこんでえッ♡！」

こんな恥ずかしいことを言わされるなんてと思いながらも、口から声にして出した瞬間に気持ち良さを覚えてしまう。

自分の手で秘所を広げ、下品な言葉遣いで挿入をねだる。ずっと年下の子供に甘え媚び、従えられることに言いようのない快感の震えが奔っていた。

「上手く言えたね。ほら、ご褒美だ」

包茎子供チンポがぬるりと侵入し始めた。

(あつ、ああつ……♡ は、入ってくる……んんっ♡)

淫らな愉悦への期待が膨らみ、クレーリアの膣内の蠢きがぐねぐねと強くなっていく。

事前に指でほぐされ、男の子のモノで軽くこね回されていた膣内は十分に濡れ蕩けていて、そのまま激しい注挿を繰り返しても問題なさそうな状態だ。むしろ、クレーリアの膣内はそれを望んでさえいる。

「まだ小さいから、まずはここから気持ちよくしてあげようか」

少年の腰が動くのに合わせて、尿意を我慢しているときのような感覚が強くなってくる。チンポで擦られている箇所から甘い疼きが増き上がり、じんわりとした切なさが下半身に広がり始めていた。

「んん……っ♡ はああんう……ううあ、か、形変わって……んああ♡」

お子様ペニスでもGスポットには届く。そこばかりを集中的に責め立てられると、性感の痺れが腰をヒクつかせクレーリアの尻が軽く浮き上がっては落ちてを繰り返し始めた。

さらに、膣内に受け入れてしまったペニスの形が徐々に変わって行くのが分かってしまう。

「ああ、剥けてきたかな。俺は、クレーリアにも気持ちよくなって欲しいから。目を閉じてこっちに集中してくれた方がいいかもね」

感じさせようとしている。この少年は、クレーリアを感じさせようと本気で思っていて、それに彼の魔力が応えて肉茎の形を変え始めているのだ。

クレーリアが感じれば感じるほど、より気持ちよくなっていく。膣内のオスの感触がより確かなものになっていく。

言われるままに眼を閉じれば、膣内をペニスが行き来する快感がどんどんと膨らんでいった。

「んああつ……♡　そ、んなにそこばつかりゴリゴリされたらあ……ふつああつ♡」

ズルリと皮を剥いて現れたカリ首が、クレーリアの内側を抉り始めていた。小刻みに、膣内肉粒をこそがれている。

時折先端でぐつと押し込んできたかと思えば、またカリでのひつかきまわされる。それを何度も繰り返されているうちに、全身から力が抜けて責められている箇所の感覚だけが鮮明になっていった。

性感が身体を支配する。Gスポットから広がる官能の波に心が蕩け始め、意識とは別に喘ぎがこぼれ出て行く。

「ああつ……んはあ♡　これえ……はああ……♡　んつ、イツちやう♡」

指で何度もイカされた場所への集中攻撃を受け、クレーリアはもう達しそうになっていた。

「いいよ、何度でもイキなよ」

クレーリアの頭がゆつくりと左右に振られ、灰色の髪がそれに合わせてほつれ涎で濡れた唇に張り付く。紅潮した顔は絶頂寸前の様相で、仰向けでも形を崩さない胸がふるふると揺れていた。

その胸を少年の手が揉みしだく。正確かつ巧みにGスポットを苛められながら、乳房までこねくり回されてはたまらない。

(イツうう……♡　こん……あつ、乳首に……♡)

腫れあがった胸の突起を摘み捻り上げられると、痛みとともに鋭く甘い快感が突き抜けて行った。

「ああつ、おっぱい気持ちイイ……♡　乳首、そんなにしたらあ……♡　アソ、アソコもおおつ……♡」

少年の突き上げに合わせて身体が跳ねる。それに少し遅れて双乳が何度も波打つ。

肢体の昂りが止まらない。背筋が反れ、つま先がシーツを掴む。腰

が浮いたままになっていき、次第にブリッジのような体勢になってしまふ。

リヴラクスの手がクレーリアの腰を抱えた。その直後、荒々しい魔力の籠った突き込みがクレーリアのGスポットにこれまでにない勢いで喰い込んだ。

「んアツ♡！ んんああああアツ♡♡!!」

硬いオス肉に押し上げられた膣が歪み腹にその形が浮かび上がる。

快感で意識が裁断され、細切れになって溶けていくようだった。

「あつ♡ あああツツ♡♡、 イツ、イウウツ♡♡♡!!」

クレーリアの顎が天井に向かって上がり、膣壁が嬉しそうに自分を悦ばせてくれた亀頭を絞り上げる。

（ああツ、気持ちいいツ♡ イツちゃった……。こんな風にイクの久しぶり……。ごめんね……。正臣……。私、この子で気持ちよくなっちゃってる……）

恋人の顔を思い出しながら、クレーリアは紅髪の少年の肉棒で絶頂し、肢体を快感で痙攣させてしまう。

しかし、リヴラクスはそこで攻め手を緩めてはくれなかった。クレーリアをさらなる官能の淵へ突き落とすようにピストンを続行してくる。

「やあつ、待ってえ、ダメえ♡ まつ、んあに、これ、アツ、アアツ♡

♡ やだ、ウソ、まってえ♡ これ、だめ、だめ、アアツ、ダメエエエ!!」

強烈な快感と一緒に、おしっこを堪えているときのような感覚が一気に高まって行く。膣の辺りで何かが爆発しそうな感覚。

「はああアツ♡ いやああ、んうつ、ああああうつああああツ♡♡♡!!」

クレーリアの股の間から、クジラの潮噴きのような水柱が上がった。

室内にこれまで以上の淫靡な臭いが充満する。

（ウソ、わたし……。これ、潮まで噴いちゃったの……。?）

恥ずかしさと、それ以上の快感がクレーリアの心をぐちゃぐちゃに

犯す。意識が遠くなり、心地よさの中に沈んでいくようだった。

嬌声はもう自分の意志とは関係の無いところで勝手に上がってしまう。全身がメスの悦びに浸り切り、ひくりひくりと打ち震えてしまう。

「はあああ……♡ はああ……♡ ああつ……♡ まさ……おみ……わた、し……」

ぐったりとなった身体をシートに横たえ、クレーリアは悦楽の余韻に呑まれながら荒い息をする。

「そこは、『リアスくん、素敵』とか言っただけで欲しかったな」

ここまでしておきながら、まだ射精すらしていない少年は、そう言っただけで腰を繰り出して来た。

「んあつ♡ あつん♡ あつ♡ ああつ♡ あツ♡」

力が抜けてしまったクレーリアは、もうリヴラクスにされるがままだ。

まだ甘い痺れに犯された身体は指を動かすのも億劫で、そのくせ口だけは少年を悦ばせる様にいやらしい響きを吐き出してしまふ。

「溜まってたみたいだし……もつと奥の方にも欲しいよね？」

言われて気付く。まだ浅い場所だけしかシテもらっていないのだと。

意識してしまうと、膣内の奥が期待に蠢いてしまふ。

「うん……。もつと、奥の方にも……欲しい……」

とろりと甘ったるい声が、自然と湧いて出た。

ナイトメア (3)

正常位。仰向けに寝たクレériaは自身の両脚を広げさせられ、蕩けた膣内をゆっくりと探るようにピストンが繰り返される。弱いところを暴き出し、まだ気づいていない性感を掘り起こすようなセックス。

少年のチンポが、じゅぶりじゅぶりとスローペースで膣の天井や床、左右の壁を擦り上げる。

「ああっ……どんどんおっきくなってる……んっんっんっ♡」

少年のモノはクレériaの膣内で徐々に膨張していく。長く、太く、硬さと熱はそのままに、身体に打ち込まれたオス肉の存在感が増して行くだけで、女の口からこぼれるあえぎが大きくなる。

最初に見たりヴラクスのは、硬く熱くとも年齢相応の子供のサイズだった。それが女の穴の中で、急速に大人のモノへと変貌し始めている。

「ふっふっ、どうかな？ クレériaのいいところに当たってるかな？」

少年のモノの膨張に合わせて、膣孔が広がっていく。内側からみっちり押し広げられた入口はリング状に変形し、肉襞は高くなっている。段差でこそがれる。

それでいて、膣洞内部には襞を蠢かせる余地が残されていた。女の側から収縮と蠕動によって、男に奉仕するための僅かな隙間がある。

「くっくっ……ああ……イ……イ……あああッ♡」

クレériaの反応を見た少年の口角が上がった。己のモノで女を喘がせ、メスへと変えることに悦びを見出すオスの笑みだ。

「はあ……ん♡ どうし、て……私……これ、いままで……こんな……んっんっんっ♡」

「クレériaが今までどんな男と付き合ってたのか知らないけどさ。俺以上の魔力持ちはいなかったんじゃないかな？」

クレériaのこれまでの生の中で、リヴラクス以上の魔力を保有した者とこれほどの至近距離で接したことはない。

膣内に埋め込まれたモノの放つ強烈な存在感が、否応なしに女の意識をそこへと集中させてしまう。

「何も言っていないのに、自分から締め付けてきていい感じだ」

ここまでの行為で膣内はすっかり蕩けていた。そこにクレーリアは知らないことだが、女を愛欲の虜にする魔力に満ちたモノを突き込まれてしまっている。

オス肉を意識してしまえば、女の身体が勝手に反応してしまう。少年が腰を振って一突きするたびに、クレーリアはそれに合わせて膣を締めてしまっていた。

メスがより快感を感じられるように、オスにより気持ちよくなってもらえるようにと媚肉が蠢く。

自身の感じる場所を緩やかに刺激していく男根に、クレーリアの膣内が自ら纏わりついていった。メス肉が快感を貪ろうとオスの突き込みに合わせて収縮しているのだ。

「中はよくほぐれているし、濡れ方もすごいね。俺もシートもクレーリアの汁でびちゃびちゃだ」

「いやあ、そんなこと、言わないでえ……」

太い根元に栓をされるので、押し込まれても愛液の逃げ場がない。リヴラクスの腰がクレーリアに密着するたびに、膣内の圧が高まる。そして、少年が腰を引くタイミングでブジュツと下品な音を立てて淫汁が掻き出されていく。

その卑猥な音が、クレーリアの耳から心を犯していた。

「ほら、もうすぐ奥まで届きそうだ」

徐々に深くまで押し入ってくる突き込みが、いよいよ膣の一番奥まで達しようとしている。

クレーリアの胎内を肉悦の快感で痺れさせて屈服させ、従順に奉仕する牝奴隷マンコに仕立て上げながら、怒張はカタチを変えて最奥へと迫っていた。

「ああああっ……と、とどく……もうすぐ……はあっ、おへその下まできちやう……♡」

「クレーリアは子宮キス好きかな？」

ついに肉棒の先端が、柔粘膜と比べてると硬めでコリコリとしたドーナツ状の壁に当たった。肉棒の先端の鈴口が、ついでに子宮口に三、四回口付けてくる。

「あああ……触られちゃってる。そこ、あつ♡ やあつ♡ 押し込まないでえ……あああん♡」

軽く触れ合うだけでは物足りない。そう主張するクレーリアの子宮を、オス肉の先端がグイグイと押し込み始めた。押し込んで、戻す。押し込んで戻す。

子宮の形を歪められ、戻され、歪められて、戻されて……と繰り返される。その度に甘苦しい感覚がクレーリアを襲い、あえぎ声が止められない。

「クレーリアの……は、もつと強く叩きつけて欲しいみたいだ」

処女を一から仕込んで躰けること、既にある程度開発されている女体を上書き再教育すること。リヴラクスはそのどちらも好む。

クレーリアほどの年齢の悪魔が未経験などという恥ずかしいことはなく、彼女の膣はある程度男を知っていた。身体を鍛えた逞しい男が好みの彼女の中は、パワフルなセックスがお好みらしい。

今の子供の姿のリヴラクスではその期待の全てには応えられないが、足りない分を補う術はある。

少年の片手に、赤い籠手が顕現した。そして、音もなく何か光のようなものがクレーリアの下腹部に吸い込まれて行く。

「な、なに……？ なにを……したの？」

「なに、ちよつと性感を倍増させただけだよ。この『赤龍帝の籠手』でね。これをされたら、どんな女だって悶え狂う」

すぐに籠手を消した少年は、ゆったりと腰を振り始めた。

軽く引かれた腰がじゅぶり音を立てながら押し込まれると、先走りを滴らせた先端が的確に子宮口を押し込む。

「はあつ、あああああああッ♡ ……あああん♡ はああつ

……♡ はあああううッ……♡♡ ナニ、え、ナニ、こええ……、こ

え、やめえ♡ ツ、いやああ♡♡！」

「そんな甘ったるい声でイヤって言われてもなあ……。ま、ロシギヌス神滅具の

せいだから、仕方ないか」

肉棒の切っ先が子宮口に打ち付けられるたびに、骨の髄が溶けるような官能が奔る。お腹の底、ヘソの下辺りから湧き上がる快樂が、全身を駆け巡ってクレーリアの意識を染め上げる。

「無理い、こんあ、こんあの、むりい♡！　こん、な……ことに神滅具と使う……なんてえ……あつ♡　ああツ♡　あツ♡　ふああツ♡!!」

「戦いなんかを使うよりよっぽど有意義な使い方だと思うけど？」

神すら滅する具現を使われてしまつては、どうしようもない。

(こんなのされたら……感じちゃつても……仕方ないの?)

浮かび上がったその思考がクレーリアの心の籠たがを外す。こんなものに抗えるはずがないのだからと、快樂を受け入れさせる。

「ふあツ♡！　あひうツ♡！　あああツ♡　かんじ、感じすぎてえええ……あんうううつ♡♡！」

気持ち良すぎる。クレーリアがこれまでに経験してきた全ての行為が、おままごとだったかのような強烈な快感。どうにか意識をその発信源から逸らしたいのに、どうしてもソコに全神経が集中してしまう。

身体中の力が抜ける。蕩けるような心地よさに浸されて、抵抗の意思が一切働かない。

(イクツ♡　あつ、イクツ！　ああつ、またいつちや……、やだ、これ、止められない！　んツ、あああツ……イクツ！　ひっ、イクツうううツ♡♡!!)

クレーリアは、自身の口から獣のような声が勝手に飛び出していくのを止められない。ぐじゅッ！　ぐじゅッ！　と肉棒が突き込まれると、すぐにイッてしまう。

時間の感覚がなくなる。心の中が、肉棒のもたらす快樂だけになつていく。

(はあっ……♡　はあっ……♡　ああっ……♡　あつ、もう……♡
あたま……おかしく♡　いやっ……♡　こんな……のっ♡　もう、いや……なのにい……♡♡　いやなのに、でもお……♡♡)

心の中さえ喘ぎ声に埋め尽くされる。

「もつと欲しいよね？」

「ああ♡ あんツ♡ うんツ、うん♡ 欲しい、ああっ、リアスクんのチンポ、もつと欲しいのお♡ もつと、あっ♡ もつと突いてえ♡♡」
自分が何を口走っているのか、理解できない。ただただ、情欲だけがどこまでも昂り続ける。

一突き、一突き、突かれれば突かれるほどに淫靡な感覚が昂り、白く泡立つ汁が飛び散った。

「イキまくってるね。今、何回目？」

「わか、わかりやな……ふっ、あんツ♡♡」

「それじゃ、そろそろ俺も射精すから。子宮で受け止めていくんだ！」
クレーリアの意思を離れて、肉棒を絞っては緩めることを繰り返す媚肉。その中に包まれた少年の怒張が、急速に膨れ上がる。

ドクドクと脈打つ男根から射精の気配を察知した牝膣が、精液を受け入れようと勝手にこれまでに以上の襞愛撫で奉仕し始めた。

(アッ、くる♡ きちやう♡ 濃い、来るツ♡)

注ぎ込まれる。射貫かれる。子宮の中に、叩きつけられる。これまでにクレーリアが経験したものは次元の違う、濃厚過ぎるオーラを宿した精液を。

「あっ♡ 出してえ……♡ なかに、なかにい♡ いっぱい、出してえツツ♡」

この瞬間、クレーリアは自分の口から出た言葉に愕然とした。
(ちがっ、ちがうッ！ 私、わたしは……この子のなんて、欲しく……ないのに……。正臣の……)

しかし、浮かんだその想いはすぐに粉々に砕け散ってしまう。

脈動の最高潮に達した肉棒が、クレーリアの大事な場所に熱い精液を大量にぶち込んだのだ。

「はあああああううツツ♡♡！ ああツツ♡♡!!」

膣内射精を受けたクレーリアの身体が突っ張る。いつのまにかシートを握りしめていた指が、これまで以上の力でギュツと握りしめられる。足指までもシートをかきむしるようになって震えている。

子宮の入り口から撃ち込まれたザーメンが、子宮内部に叩きつけら

れる衝撃で幾度も達してしまふ。散々にイキまくらされた肢体が、中出し絶頂に悦び震える。

脳幹が蕩けるような快樂。白い肌は紅潮しきり、灰色の瞳と眉はだらしなく垂れ落ちて、情欲にどろりと濁り堕ちて揺れる。

「あはあああ♡♡♡　すぐ、イイツツ……ふああああ……♡♡♡　こんな、のお……初めてえ……♡♡♡　ふアアンン♡♡♡」

少年の射精はまだ終わっていない。最初の強烈な一波の後も、どぴゅッ！　ドピユッ！　と二射、三射と続いていて、どろどろのそれはクレーリアの子供の部屋に侵入し続けていた。

知らず腰が浮いていた。自分から腰を動かし、少年の射精を促していた。恋人ではない男の精をもっと搾り取ろうと、愛人マンコを揺すってしまっていた。

（ごめん、ごめんなさい……正臣。わたし……欲しがっちゃった。この子の、欲しいって……。言葉だけじゃなくて、演技でもなくて……。ごめんなさい。ごめんなさい……）

射精の余韻で少年の行為が中断したところで、クレーリアは心の中で八重垣への謝罪を繰り返して涙をこぼした。いよいよ肉欲に染め上げられ、我を忘れてしまった自分が嫌になってくる。

そんなクレーリアを見下ろしながら、少年は彼女の膣内からずりと肉棒を引き抜いた。射精直後だというのに未だ勃起したままのソレのカリ首が、敏感になり過ぎている女の膣を引っ搔けて嬌声を上げさせる。

「んんっ♡　ああっ♡」

「見なよ。これがクレーリアの欲望の形だ」

その様子に満足そうな笑みを浮かべるリヴラクス。彼はクレーリアの身体を跨ぐと、彼女の鼻のすぐ前に肉棒を突き付けた。

「うっ……あっ……」

鼻を突く精液と愛液の入り混じった強烈な性臭。野太い根元に、コブのようなものさえ見える反り返った幹、大きく開いた傘に、精液の名残を滴らせる先端。

少年の肉棒は、あまりにもグロテクスで禍々しい形状をしていた。

小さかった。むしろ可愛らしくさえあった子供ペニスだが、クレーリアとの交わりでこのようになってしまったのだ。

クレーリアの膣を感じさせるための形が、コレ。この凶器は、クレーリアの肉欲の具現そのもの。幼げな美少年の股間にそんな代物がついている。

「すい……い♡」

眼前に突きつけられた己の欲望の形と、その持ち主の倒錯的な有様にクレーリアはクラクラとしてしまう。

鼻をつく淫らな匂いを嗅がされると、射精を受けたばかりの膣が疼きだす。

「今度はバックからがいいな」

「ああッ……♡ これで……いい？」

クレーリアは身体の向きを変え、シーツの上で犬の姿勢を取った。情欲に紅く染まった尻肉が、少年を誘ってゆらゆらと左右に揺れる……。

一度外された心の籬たがは、簡単には直せない。締め直してもすぐに緩んでしまう。

こうして、クレーリアの愛人生活が始まった。毎日ではないが結構な頻度でホテルに呼び出され、長時間のセックス漬けにされる日々。

そして、リヴラクスからの呼び出しは「八重垣と会った日」に特に偏っていた。

「正臣……」

「クレーリア……」

この日の昼間、「悪魔のお仕事」のない時間。クレーリアは八重垣と優しく唇を重ね合わせていた。軽くそつと触れ合わせるだけのキス。八重垣はそれだけで満足そうだった……。

しかし、一方のクレーリアはその日の夜にはホテルの最上階に呼び出されていて――。

「んむっ……あむっ……、んんんっう……」

ベッドのヘッドボードに枕をもたれ掛からせ、それに背を預けるリヴラクス。前に投げ出された少年の足の間にクレーリアは頭を埋めていた。

クレーリアはフェラチオをさせられているのだ。「しゃぶれ」と命じられて、ソレを顔に押し付けられると、もう逆らうことが出来なかった。

愛人関係がどうこうというものではなく、自身の欲の形そのものを目に映し、立ち上る精臭を嗅いでしまうと、情交への期待に頭の中が埋め尽くされ霞んでいってしまう。

「だいぶ奉仕に熱が入ってくるようになったね」

じゅぽっじゅぽっと音を立てて、頭を大きく前後させる。口の端から垂れた唾液が形の良い顎をつたいシーツへと落ちていく。

褒め言葉と共に少年の手がクレーリアの頭を撫で、髪をすくっては弄ぶ。

恋人との優しい口づけに喜んでいた彼女の唇は、少年の肉棒を咥え込んでしごいている。淫らな行為の出来を誉められ、恋人と触れ合わせたこともないピンクの舌が亀頭を舐め回しながら悦んでいる。

「れる、れるっ……んふう、んっちゅっ……ふあぁっ♡」

髪を撫でられても、耳に触れられても気持ち良くなってしまった。クレーリアは、少年の手で身体のどこを愛撫されても感じてしまう状態になってしまっていた。

肉棒を舐めまわす舌が、擦りつける口内粘膜が、頭を掴まれ奥まで突き込まれる喉さえも、性器になってしまったよう。

「クレーリア。お前は、俺の愛人だ」

「ふぁい……」

「お前は俺のことを考えないといけない。俺にいらぬ、必要ないと思われたらどうなるか……分かるよね？」

「んっ、れりよ……はぁぁ……♡ ひゃ、い」

語り掛けられる間も、口淫奉仕を緩めてはならない。今のクレーリアはそう言われている。

「いいか、俺の立場になって物を考えるんだ。こうしたらどうなるの

か、ああしたらどうなってしまうのか。それをよく考えてから行動しろ。俺に迷惑をかけるようなことをするな。俺を不快にさせるようなこともするな」

「ちゅぷっ、んちゅっル……れりよりゆ……。んじゅりゆ……。あはあ♡ ……はい」

中出し、舌奉仕、中出し、舌奉仕。そのサイクルを一晩に渡って延々と続けられた。

イキ狂わされながら、何度も何度も愛人宣言をさせられ、蕩け切った頭の中にチンポ快楽を徹底的に叩きつけられ……。

その後は、奉仕しろと舌を遣うことを命じられ……。少年のモノを見せられただけで愛液を垂らすような、キスの一つで発情するような女にしてやると言われながら肉棒をしゃぶらされる。

「余計なことをしようと思うな。何かあれば、まずは俺に相談しろ。いいな?」

「んっ、はい。んゅちゅっ……あむっ……うぐう……あっあ♡」

少年の手が乳房を弄り始めると、クレーリアの背にゾクゾクとしたものが奔り、牝穴から愛液と共に白濁がどぷりと零れ出た。

「よしよし、ならまたハメてやる。俺が射精すまでイったらダメだからな」

「あっ、むり、そんなの……無理だから……んあああウツ♡!!」

寝バツクの姿勢で貫かれたクレーリアは、二十秒とかからずイってしまった。既に癖を付けられてしまっている。少年のチンポを受け入れたら、簡単にイク女に仕立てられてしまっているのだ。

「射精するまで我慢しろって言ったのに、もうイっただけ?」

「イって、ない……。イってないからああ♡ あっ、ああツツ♡」

「じゃあ、これでどうかな?」

ぐじゅっ、グジュッ、ぐじゅっと肉棒が膣を抉るように出入りすると、クレーリアの膣肉が貪欲にむしゃぶりつく。そうして、自分自身の締め付けでより快感を強くして――

「あああ……イク♡ んああっ……いつちやう♡♡ ああああああああツツ……♡♡♡」

——すぐに絶頂歡喜へと押し上げられていった。

一年の月日が過ぎても、クレーリアと八重垣との関係は進まなかった。八重垣は教会の戦士のままで、クレーリアも駒王町を縄張りとする悪魔のまま。

ある日、クレーリアと八重垣は互いの背に腕を回し抱きしめ合っていた。恋人たちのハグはそつと寄り添い合うようなもの。

(わたし……どうして……)

恋人からの抱擁はいつもどこか遠慮がちで、クレーリアは強く抱きしめられたことはない。そのことにどうにも満たされない思いが湧き上がってくる。

抱き合っている相手とは別の男の、紅の髪と紫の瞳の影が頭の中にチラつく。

八重垣からもっと強く抱きしめられたい。裸で抱いて欲しい。クレーリアはそう思ってしまう。自分の身体を貪るあの少年とのことを一時だけでも忘れさせて欲しいと。

でも、クレーリアの側からそれを言いだすことは出来なかった。

正面から抱き合っていた身体を離すと、真っ赤な八重垣の顔がよく見える。恋人の視線はクレーリアの胸にチラチラと向かい、すぐに恥ずかしがるように逸らされ、また戻ってくる。

八重垣正臣は童貞だ。教会は「そういうことは結婚してからしなさい」と教えている。教えに忠実な八重垣は、それをよく守っていた。八重垣も男だ。生物として、男として、女体に興味はある。それでも欲望を抑えて行動している。そうあろうと努めている。

クレーリアは彼のそんな悪魔の中では出会ったことのなかった在り方に惹かれていたはずなのだから……。

「うっ……ふう……。はあ、はあ……」

八重垣との逢瀬を終え、拠点へ向かって歩んでいたクレーリアの息が荒くなる。彼女は人目を気にするように辺りを見渡すと、何かを堪えるように両脚をすり合わせてから、物陰に身を隠した。

スカートの中へと手を忍ばせると、濡れ始めてしまっている。

「いや……だ」

恋人と会っている間ではなく、別れた後に火照り始める肉体。

リヴラクスは決まって、クレリーリアが八重垣と会った後に連絡してくる。そのことを彼女の身体は覚えてしまっていた。

「うっ……あっ……んっ……」

指が勝手に動き始める。湿り気を帯び始めた下着の上から、秘所をなぞって自身を慰めだす。

一年の月日が過ぎても、八重垣は立派な教会の信徒であろうとしていた。悪魔との逢瀬を繰り返すという大罪を犯しながらも、それ以外の部分では聖書の教えを守り続けている。

だが、クレリーリアは変わってしまった。淫蕩な悪魔の性が、肌を重ねる少年を求めてしまう。

「はあっ……ふうっ……」

スカートの中に入れた片手を忙しく動かしながら、クレリーリアはもう一方の手でケータイを操作し始めた。

着信履歴に残る、少年からの連絡時間を視線が追いかける。現在の時刻といつもの呼び出し時間の差。

「あと……二時間、くらい？ んっ……ふうっんっ……！」

クレリーリアの身体が僅かに震え、そろりとスカートの中から現れた指が濡れて匂う。

気が付くとクレリーリアはホテルのロビーにいた。顔見知りになっ
てしまった従業員に先導され、いつものフロアへと向かう。

このホテルのワンフロアがリヴラクスによる貸し切りだ。実質的には、彼の愛人をしているクレリーリアに与えられたスペースと言っ
てもいい。

開かれた扉をくぐると、後ろでドアの閉まる音がした。オートロッ
クがカチリと掛かる。

室内を見て回るがどの部屋にもリヴラクスの気配はない。

「はあ……」

熱っぽいため息をこぼしながら、クレリーリアはフロア内にくっつか

あるソファの一つに身を投げ出した。しばらく天井を見上げ、それから視線を彷徨わせる。

視界に映るベッドも、扉の向こうの浴室も、大きな一枚ガラスの窓際も、今寝転んでいるこのソファも……それからトイレでさえ、この部屋の様々な箇所でも幾度も犯された。そして、何処の記憶でも最後にはクレーリア自身からもっと強い快楽を与えて欲しいと懇願させられてしまっていた。

「ううっ……くっ……んんうっ……」

泣き出したくなるような記憶のはずなのに、それらを思い出すと身体が火照ってしまう。

目を閉じ身体を丸め、昂ぶりを鎮めようとしても、ジクジクとした官能への期待が湧き上がって来て止まらない。

どれほどそうしていたのだろうか。眠りと覚醒の狭間のような状態にあった耳が、カチャリという音を捉える。するとピクンと背筋を跳ねさせて、クレーリアはすぐに立ち上がった。

「来てたんだ」

部屋にやって来たリヴラクスが、嬉しそうな笑みを浮かべながら見つめてくる。

その視線を受けたクレーリアの顔が女のものになり始め——直後に引きつった。リヴラクスの後ろに誰かがいる！

「だ、誰……？」

リヴラクスに続いて部屋の中に入って来たのは、成熟した悪魔の男だった。いわゆる中年といった見た目で、スーツ姿だ。

「ああ、こちらはバアル家の方でさ。クレーリアに話があるらしいよ。電話で伝えてからと思っていたんだけど……ここで会えたのは都合が良かったのかな？」

心臓がバクバクと動いている。怒り？ 失望？ 恐怖？ いろいろな感情がごちゃ混ぜになっている。

「バアル家の……？」

「そう、バアル家の。まあ、あっちで話しましょうか」

そう言つて、リヴラクスは来客との談話用の部屋へとバアル家の男

性を誘導した。

「それで……私に話というのは？」

挨拶を済ませ、クレーリアはバアル家からの使者に尋ねた。テーブルを挟んで向かい合う形の二つのソファ。

使者はテーブルの向こうに一人で座り、クレーリアの隣にはリヴラクスがいる。少年はクレーリアの震える手を、そっと握ってくれた。たったそれだけで、心が落ち着きを取り戻す。ぐちゃぐちゃになっていた感情の波が静まり、沸き立っていた怒りが冷めて甘やかなものになる。

「大丈夫だから、俺に任せて」

耳元に寄せられた少年の唇からの囁きが、妙に頼もしい。

そんな二人の様子を見たバアル家からの使者は、最初に浮かべていた厳しそうな表情を崩し、安心したといった様子で話し始めた。

話の内容は簡単だ。教会の戦士である八重垣正臣とクレーリアの関係を聞いただしに来たというだけのもの。

内容を聞き始めたところでクレーリアはリヴラクスに責めるような視線を向けてしまったが、彼が話したわけではないらしい。

単純にバアル家から土地を貸し出した相手の様子を見に来たバアル家の調査員が、八重垣と一緒にいるクレーリアを見かけて調べたのだと言う。元々、この地にいる教会関係者の調査は行われていたのだ、八重垣が教会の戦士であることは一目で分かったそうだ。

(ど、どうしよう……。なんて、答えたら……)

事実をそのまま伝える——ダメだ。そんなことをすれば、悪魔と教会の信徒との恋愛など許してはもらえない。おそらくだけれど、付き添ってくれているリヴラクスにも迷惑が掛かる。

(あ、れ？ そういえば……)

クレーリアは、隣の少年に目を向けた。バアル家の使者からの話がクレーリアと八重垣のことだけならば、ここにリヴラクスがいる理由がない。

ベリアル家とバアル家の事情、場合によっては大王派の不祥事になりかねない話だ。いくら土地を共同管理してきたと言っても、対立派

閥の筆頭であるグレモリー家の次期当主がいるのはおかしい。順番からして、先にクレーリアに質問が来る方が自然に思える。

それなのに、使者はリヴラクスに連れられてやって来た。

「どういうこと……？ どうしてリアスくんが……？」

「ん？ ああ、前に叔父上……バアル家の当主様と会った時に言い合いになってさ。話しの流れと勢いで、クレーリアと付き合ってるって言っちゃったことがあるんだよね。その後で秘密にして欲しいって頼んではいたんだけど、そのことがあったから先に俺の方に確認が来たんだ」

「はっ、えっ……ええっ！」

少年の手がクレーリアの頬に添えられた。引き寄せるような仕草。

「だから……さ。分かるよね？」

「え、あ……っ」

頭が自然に動いた。いつものようにされた身体が、まだクレーリアよりも背の低い少年の方へと倒れていく。

「このヒトも、俺とクレーリアの様子を見たら納得してくれるよ」

いつの間にか、少年とのキスに抵抗感を覚えなくなっていた。むしろ、今では恋人以外の男と積極的に唇を重ね合わせてしまうほどになっている。

美しい少年の顔が眼前にある。紫の瞳が大きく迫ってきて、色形の良い唇同士が密着した。絶妙な柔らかさと弾力が触れ合う。

「んふう……んん……んうっ」

上唇を吸われ、下唇を挟み込まれる。クレーリアもまたそれ応じて少年の唇を吸い上げ、食んでいった。

まだ舌は入っていない。唇同士を吸い合っているだけで、胸の奥が燃え上がり、目元が蕩け、吸引と共に僅かに流れ込んでくる唾液の甘さに口元が緩む。

人前だというのに、昂ぶりが止められない。

「今日は連絡もしていないのに来ていたけど、早く会いたくて待っていたのかな？」

かがみ込んで唇を合わせているクレーリアから少し顔を引いて、少

年は問いかけてきた。

少年よりもまだ背の高いクレーリアの口からツバが少年の唇へと垂れ落ちると、ピンク色の舌がチロリと覗いてそれを舐め取っていった。

「ええ、そう……なの。早く、会いたくなつちやつて……我慢できなくて……んむうう、んっちゅっ」

顔同士の角度を変えながら、何度も口づけを繰り返す。自身の上唇と下唇で挟み込むように、すり合わせるように。

少年の手が頭の後ろに回ると、クレーリアも彼の身体に腕を回し始める。

(ああ……、見られてる……すっごく見られてるのに……)

横目でテーブルの向こうを見れば、ニヤニヤとした中年男性の姿が目映る。

「んふうっ……んっ、ちゅっ……あふうっ……恥ずかしいよ……んんっ」

そう言いながらも、クレーリアの腕は少年を逃がすまいとするかのように彼の身体に回されている。

胸に少年の体温を抱えていると陶酔感が渦を巻く。見知らぬ中年に痴態を見られている状況に、倒錯感がこみ上げる。

リヴラクス在意図は分かる。でも、それは……。

(私が、正臣とはそういうのじゃないって一言伝えるだけで良かった……はず。こんなの……見せなくても……)

恋人とは一度もしたことのない、貪り合うような接吻。愛人としてだけ見せる、この少年とはもう何度交わしたのかすら分からない、性感に蕩けた表情でのキス。

鼻にかかり吸い込んでしまう少年の鼻息が、唇の間を通して交わし合う吐息が心地好く甘い痺れをもたらす。

(私、この子と付き合っていることになっているの……?)

クレーリアの唇の間から、そろりと舌が伸びた。少年の唇に甘えるよう這わせる。

ついバアル家当主に言ってしまったということだけれど、おそらく

庇われたのだろうことくらいはクレーリアにも分かった。

(正臣の方が好きだけど……でも、今は、今はいいよね……? こうしない……全部ダメになっちゃうから……)

他人の目があることによって、いつもより自分の中の感情を意識してしまう。

クレーリアの誘いに応えて、少年の舌が入り込んできた。

「んむうっ……んふん♡ んぢゅうる……んんふう♡」

硬く尖らせた舌先が口蓋をなぞる。白い歯に、桜色の歯茎に、少年の舌が唾液の跡をつけていくと、クレーリアの心臓がバクバクと音を立てる。

甘い蜜のような刺激が口内を駆け巡り、頭の芯からとろりとした官能の波が広がっていく。鼻から漏れる息はどんどんと艶めいたものになり、蠢く舌は少年のものとの接触を求めて追いかける。

(ああっ……見られてるのに……見られてるから? これ、すごい……)

口中から伝わる官能の波が下半身に達し、カラダが淫らに反応し始める。納まったはずの火照りがぶり返し、下着に染みが広がり始めてしまう。

強くなっていく、濃くなっていく。舌が止められない。唇が疼く。もしも他人の目がなければ、もっと触れ合おうとしていたことだろう。

「んうう……♡ ふう、んふっ……♡ はああ♡」

優しく甘い舌と舌の摩擦が、背筋に痺れを奔らせる。

胸の高鳴りが、止まらない。舌の側面が擦れる、裏側をくすぐり合う、表側の味蕾粒同士がねっとりと重なり合う。悦楽の火が燃え盛っていく。

「ああ、ああ……♡ あふああっ……ああっん♡♡」

時折、唇の間から漏れる自身のあえぎ声に耳を犯される。こんな状況で裏返った声色をさせていることに余計に興奮してしまう。

普段から垂れ目がちなクレーリアの瞳、その目尻がさらにとろりと落ちていく。性の陶醉に浸されて、涙が浮かんで瞳を潤ませる。

口から始まり、頭から広がっていく快感の中に、電流のような強い刺激が混ざり始めた。身体がヒクリと震え始め、同時にふわりと浮き上がるような感覚に染まり始めた。

(ああ……これ、ダメ……このままだと……。リアスくん以外のヒトに見られながら……)

気持ち良すぎる。他人に見られながらのディープキスの倒錯感が、背徳的な快感となって駆け巡る。

絶頂感が迫っていた。靴の中で指先を丸めてしまう。少年の背に回した手に力が籠り、指先が彼の服をギュツと握りしめる。

「あ、まって……これ、だめ……。リアスくん……。こん、な……。はあ、ふううん♡」

どうにか顔を離して涎の橋をかけながら、中止を願ったけれど。

すぐに再び唇を重ねられ、今度は舌を絡めとられて少年の口内へと吸い込まれてしまった。後頭部を強く抱え込まれ、逃げられない状態で強く強く吸われる。

「ふうツツ、ふうツんんウウウんん♡♡!!」

ビクンツ！ とクレーリアの身体が跳ねた。絶頂の息が鼻腔を突き抜けていく。

紅潮しきった顔に艶めいた表情が浮かべ、弛緩した身体の重みを全て少年へと預けてしまう。

(あつ、はあああ……。わたし……。知らないヒトに見られながら……。キスだけでイツつちやった……。はああツ♡)

俺に舌を吸われながら、クレーリアは甘い痺れに身体を震わせている。キスイキを決めさせ、頭をとろんとさせている彼女の口内に、さらなる追撃をしかけていく。

しつこく、しつこく、ねちっこく。達して柔くなった彼女の頭を引き寄せながら、こちらの口内に吸い込んだ舌を嬲り尽くす。

絶頂で力が抜けているはずなのに、俺の背に回された彼女の手は離れて行かない。むしろギュウギュウと抱き寄せてくる。

数分間、そのまま舌朧りを続け、それから顔を離す。それでも俺と彼女は、ねとりとした唾液の糸で繋がっていた。

「クレーリア……」

髪や梳り、頬を撫でながらクレーリアの耳に口を寄せ、これから彼女が言うべきことを小声で伝える。

快感に潤んで曇った瞳、上気した頬、汗ばむ首筋、身体の間もかしくも淫靡な熱に冒された彼女は、こくりと確かに頷いた。

「愛してるよ。大好きだ」

テーブルの向こうに聞こえる声量でそう言えば、

「私も、私もリアスクンが好き。愛してる」

ちゃんと答えてくれたことに悦びを覚えつつ、続きを促す。

「お前にとつての八重垣は、どういう相手なのかな？」

髪を梳いていた手を下に向かって走らせ、するりとクレーリアの背を撫でる。

「あつ、正臣は……教会の戦士エックソシストの八重垣正臣は、遊び相手。神の信徒を墮落させてみたくて、からかっているだけ」

良く言えたねと褒める代わりに、唇を重ねていく。

この夢のクレーリアも、まだ八重垣に心を残してはいるのだろう。だが、もう彼女のカラダは墮ちている。何度もホテルに呼び出しているうちに、最初からアソコの準備万端でやってくるようになった。そうして「八重垣とは遊びです。本命はグレモリーの次期当主さまなのお！」みたいなことを言わせることも可能になったのだ。これまでは、イカせまくって何発かザーメンぶち込んだ後に言わせていたのだが、どうやらもうキスだけでも良くなったらしい。

「はあ……はあ……あんっ、ちゅうっ♡」

バアル家の者が何やら書類を書くのを眺めながら、バカみたいにくレーリアとイチチャついておく。俺はこれが夢だと分かっているのだが、それを知りえないクレーリアの方は他人がそこにいることで興奮してしまっているらしい。

あえて困難な恋に身を投じて引き返さず、反対されるほどに燃え上がるような情の性質を持つクレーリア。彼女には十分過ぎるほどの

マゾっ気があるのだろう。

やがて、使者が書類をこちらに提示してきた。同じ内容の書面が三枚。その書類には、署名欄がある。

使者の説明によると、調査報告書といった態のものになるらしい。まあ、夢の住人とは言えコイツもお仕事で来ていることになっているのだ。帰ってから報告する際に必要なだろう。

といったことをクレーリアに俺の口から説明し、書類にサインするように言った。

書面の内容は大したものではない。

バアル家が確認し問題視していた、『ベリアル分家のクレーリアと教会戦士の八重垣との関係』は悪魔がよくする神の信徒を堕落させようとする試みだった。なお、クレーリアの本命はリヴラクス・グレモリーの模様。

といったようなことが書かれているだけだ。これにクレーリアが署名すれば、彼女自身がこの内容を認めたことになる。

「え、と……これ三回も、三枚も書かないといけないの?」

「一枚はクレーリアが手元で保管しておく用かな」

テーブルの上に視線を落とし、握ったペンの先を彷徨わせるクレーリア。俺はそんな彼女の横に座りながら、手をそろりとスカートにやらしい曲線を描かせている彼女の尻を撫でる。撫でると言うか、揉んだりもする。

「んっ……り、リアスくん……」

「ほら、さっさと書いて続きをしよう。……それとも、クレーリアはもう満足したのかな?」

クレーリアの視線が、ズボンを持ち上げテントを張る俺の股間のモノに数秒ほど留まった。

それから彼女は視線を紙面へと戻すと、署名をし始める。そのペン先は実に滑らかなものだ。

供述調書的な代物にサインしてるって分かってるのかね。分かってないだろうな。ポーっとしちやってるし。

バアル家からのお客さんは、クレーリアのサイン入り書類を確認し

て一つ頷くと退去していった。もうバアル家の出番はない。

この夢の中のクレーリアは、魔王の施設に侵入とかしてないしな。俺の相手をするのに忙しくて、ここの彼女にはそんな暇はなかったともいう。

ふへへ、もうこのクレーリアは、従兄のおにちゃんにかけられて
いる疑惑どうこうよりも、俺のチンポを味わうことの方が大事になっ
ちまってるってことだ。

やれやれ、俺が事件当時のクレーリアと知り合いだったなら、この
夢のように『八重垣はただの玩具。一回神の信徒を墮落させてみたい
な』って。「王の駒」なんて探るより、おチンポでオマンコまさぐられ
てる方がいいのお、はーと』状態にして生存させてやれたものを。

当時に知り合えていて、なおかつ俺が精通していたならば……。

まあいい。ここからは、セックスの時間である。

夢の終わりに（第1回）

発情したクレーリアにとある服を渡し、着替え終わるのを待つ。

その待機時間の間、心の中でどこぞのアニメか漫画のとある人物の演説を真似してみようと思う。

俺はエロが好きだ。俺はコスプレが好きだ。俺はエロ衣装が大好きだ。

女学生の制服姿が好きだ。ナースが好きだ。巫女が好きだ。シスターが好きだ。エレガが好きだ。スチューワーデスが好きだ。テニス部員が好きだ。水着が好きだ。魔法少女が好きだ。

教室で、病室で、神社で、教会で、エレベーターや飛行機の中で、コートの上、砂浜、路上に謎空間。

まだまだいくらでもあるコスチュームに、シチュエーション。それらありとあらゆるエロが大好きだ。

肉棒の先から放たれる白濁発射を子宮に叩きつけてイカせるのが好きだ。痙攣し肢体を跳ね上げた女が胸を弾ませ快樂に沈んでいくさまに心がおどる。

イラマチオを強い、無理矢理喉奥にぶち込んだザーメンを吞ませるのが好きだ。肉棒をほお張りながら悦樂の火に焼かれ、ゴックンした女が自ら股を開いた時など、それだけで発射してしまいそうになった。

はて、この続きはどんなセリフだっただろうか？ とくだらないことを考えている内に着替え終わったクレーリアが戻って来た。

「こんな服、恥ずかしい……」

股間を手のひらで、腕を使って胸を隠すクレーリア。恥ずかしそうにしながらも、彼女の瞳は情欲への期待に緩んでいる。

黒いハイヒール。照り光る黒いストッキング。肩出しで胸の谷間を覗かせ、光沢のある黒のハイレグボディースーツ。スーツのお尻には白く丸い尻尾飾り。付け襟リボンに、白カフス。止めに頭に乘せたウサミミヘアバンド。

そう、いわゆるバニーガールである。実にエロい。さすが、超有名

男性向け成人誌発祥とされる格好だけのことはある。セックスアピールのためにあるような衣装だ。

「このカジノの接客係の制服なんだけど、よく似合ってる」

俺は彼女の周りをくるくると回って、その出来栄えに大変満足した。やはり純血悪魔女性というのは良いものだ。美形は大概の服装が似合う。

日本全国の各地に展開中のサーゼクスホテルでは、現在カジノを開設中。悪魔に人間の法律は関係ないので違法ではない。カジノ自体も異空間フィールド内に作られているので、日本国内ではないしね。

そこで見事稼いだお客様は、コインと引き換えに接客係の淫魔たちをホテルの部屋にお持ち帰りもできるって寸法だ。

当ホテルのカジノは、金の無い貧乏人も安心して参加できます。寿命から魂まで、様々なものをカジノコインと交換可能。勝てば何も問題なし、夢のひと時をお過ごしいただけます。敗者は悪魔に人生を売り飛ばせ。

まあ、風俗その他R18な内容の仕事はクレーリアとその眷属たちは基本ノータッチだけだな。稼ぎも大きいので、この仕事はお勉強中の縄張り運営初心者悪魔にはお任せできないのだ。

「私たちが関わってないお仕事って、結構多いよね」

太ももをもじもじとさせるクレーリアの尻から腿を撫でる。濃い黒のボディスーツとストッキング越しの感触は、裸の肌とはまた違った良さがあるものだ。

「あっ……！ やっ……あ、っ♡」

しばらくハイレグと黒ストの形作るエロのコントラストを楽しみながら尻を撫でまわす。ストッキングの上から尻肉や腿肉に指を喰い込ませて変形させ、卑猥な陰影とむちむちとした感触を楽しんだり、尻の割れ目からクリまでの道筋に指を滑らせる。

「もう欲しくなってきたかな？」

ボディスーツの股布部分を細く絞って上に引っ張ると、たらたらと愛液が垂れてくる。

「あ……♡ は……♡ あっ♡」

ピリツとストッキングを破り、スーツの股間部分をズラして秘所を露出させてみる。マンコの中はとろつとろで、ヒクツヒクツと蠢いている。そこにフツと息を吹きかけてやると、クレーリアの腰がビクツと動いた。

もうすっかり調理済みの食べごろジューシー肉汁たっぷり素敵肉が出来上がっているようだ。

「着替えながら濡らしてた？ それとも、さっきのキスでこうなっちゃった？」

「……ううん。それより、前……から」

「いつもみたいに、この部屋に来た時にはもう濡らしてた、と」

メス穴にぐちゅつと指を突っ込む。二本の指で濡れ濡れぐちゅマスコを穿つてやると、女の尻により一層の震えが奔る。

「ふあっ♡ あ♡ ああっ♡ あーっ♡」

「この年中発情してる灰色エロウサギが。もっといじって欲しかったら、そのベッドの柱に掴まって……そう、尻をこっちに突き出すんだ。尻尾振ってみせろ」

少し強めの口調で命じると、クレーリアは言われるがままに尻を突き出した。

ベッドの足側、天蓋を支えるポールの内の一本に縋り付く様にして、彼女はケツを振って見せる。おねだりダンスでふりふりしている尻の高さは、丁度俺が立ったままチンポをぶち込んで腰振りしやすい位置になっている。よく覚えているものだ。

そしてこの夢の中でついた偽りをよく魂に刻み込んで置いて欲しい。人間の子供が幼い頃に行った旅行の思い出なんて、大きく成れば大半は忘れてしまうものだ。だが、人格の形成に影響はする。降り積もるのだ。心のどこかにうつすらとした記憶が。

この夢もそう。積み重ねて積み重ねて、クレーリアの魂に刻まれた愛情の対象の比重を、俺側へと傾ける。

言葉では言わせた。書面にも書かせた。必要に駆られて、保身のためにさせたことだが、ここからはそれを繰り返し繰り返し宣言させて、偽りを本当へと変えていく。

「そんな、に……ぐちゅぐちゅされたら……はああ♡」

「されたらどうなるのかな？」

とろマンコに指を突っ込み、ブチュブジュとほじくりまくる。夢の中なのでクレーリアは肉体があるように思っているが、実際のところ彼女は魂だけの存在だ。

ここで言ったこと、記したことの影響は亡くした肉体ではなく、魂に大きく影響を与える。

「されたら……本気で、いっぱいされたらあ……♡」

「きゅんきゅん締め付けてくるなあ。もっとして欲しいよね？」

「してえ、もっとかきまわしてえ♡」

右手で牝穴をほじくりながら、左手を彼女の胸へと伸ばす。バニー衣装のバストカップをペロリと引っ張ってはがせば、乳房がポロリとこぼれ出る。半脱げにしてヤルつもりだったので、パンツもブラもなしだ。

「……もビンビンになってる。いつからこんなに立たせてたのかな？」

おっぱいを、もみつもみツ。乳首をくにくにくりくりいとこねくり回し、剥いた時から勃起している突起を摘まんで、ぎゅううと引っ張る。

「あつ、それえ♡ ああ♡ そんな、片方だけ、なんて……」

左のおっぱいばかりを責めていたから、右側が（欲しい）（欲しい）と啼いているようだ。

「こっちもいじってほしい？」

「う、ん……」

「だったら、おねだりしないと」

クリトリスとGスポットへのイジメは、今もゆるゆると継続中。まんこはびちやぐちや、指を出し入れするたびにグチュツ、ブジュウツと卑猥な音がしまくっている。

「わたしの、クレーリアのおっぱい……もっといじめてえ♡ 乳首摘まんでえ、もみもみしてえ♡」

おねだりには応えてあげるのが俺の流儀だ。

「それじゃあ、こっちもしつかりと揉み解そうかな」

「こうしているとまるで生きているかのようだが、クレériaは亡霊だ。」

「幽霊、怨霊と呼んでもいい。」

「生前に抱いていた、執着や怨恨。死を前にして浮かんだ、心残り。それらが、彼女の存在を繋ぎとめている。」

「メス穴ほじくられて、胸をもみくちやにされて嬉しい?」

「嬉し……いい♡ 気持ちいいのお♡ だから、止めないでえ……もうちよつと、だからあ♡」

既に死んでしまっている彼女は、もう大きく変わることは出来ないだろう。

クレéria亡霊の執着の対象は八重垣正臣。男への愛欲が彼女の魂を消滅させず、現世に留まらせている。これを無理矢理引き離すと、クレériaは消え去ってしまうだろう。

だから、この女を完全にモノにするには、亡霊の執着の対象をこの俺に切り替えさせなければならぬ。

「クレériaは、もう俺のオンナになったんだよね?」

服を脱ぎ捨てながら尋ねる。

——上書きが必要だ。

「オン……ナ……? 私、リアスクんの……? ダメ、それは……ダメ」

裸になった俺は、首を横に振るクレériaの唇に勃起肉棒を押し付けた。

——徹底的に犯し尽くし、塗りつぶさなければならぬ。

「あんう……れろ……ん……ん、んふうっ♡」

クレériaは瞳をとろんとさせ、肉棒を舐めしやぶる。もう何も言わなくてもチンポを前に出してやるだけで舌を伸ばすようになった。

カラダはとつとくに墮ちているのだ。この夢の中だけの仮初の肉体だとしても、クレériaのカラダは俺のものだ。

「俺はクレériaのことが好きなんだけどな。クレériaは違うのか?」

「ハア♡ 好き。好きだけど……」
牝穴の中の指をぐるりと回す。

——尊敬していたという従兄への感情を上回ることは出来た。だが、まだ八重垣を忘れさせることが出来ていない。

「この穴はもう俺に惚れてるみたいだけど？」

この女のマンコは、もう俺の肉棒が大好きになっている。ザーメン中毒の快樂依存穴だ。

(好き♡)(欲しい……♡)(オチンポお♡)(チンポ好き♡)(いれてえ♡)(メチャクチャに犯して欲しいの♡)(子宮にかけてえ♡)

この墮落牝穴を少し弄ってやれば、クレーリアは俺に逆らえない。

女の口から離れた肉棒の先を割れ目にあてがうと、きゆうきゆうと肉襞が吸い付いてくる。

「イジメてえ、私のこと好きにしてえ♡ 奥、はやく、一番奥までっ、はやくっ、ください……っ♡」

膣内射精のたびに、少しずつクレーリアの魂から失われているオーラを補充して来た甲斐があったというものだ。

精液を流し込まれることが、肉の快樂が、俺に犯されることが、存在し続けるために必要なことだと彼女の魂は覚えている。

「ほら、そんなに尻を振ったら入れにくいだろう？ 慌てなくても入れてあげるから」

ズツヂュツツ！ ジュポツ！ チュポツ！ ジュツポ！
グジュツツ！ ズツヂュ！ グツジュツツ！ チュポツグチャ！

淫らな音を好き放題に響かせながら、お望みどおりにクレーリアの膣内を蹂躪していく。

「あ、あ、あ、っ♡♡ ふあああああっ♡♡」
「ココはこんなに素直なのに……、まだ俺の牝になれないんだ？」

ベッドポールに縋り付くクレーリア。その向こうに置かれた鏡には、完全にトロけ顔になった彼女の顔が映っている。彼女のカラダは肉棒が淫褻に与える摩擦と、子宮に突き込む衝撃の官能でふにやぶにやぶだ。

「あ、好き♡ 好きっ♡ 大好きっ♡」

「愛してるよ、クレーリア」

「私も、ああッ♡♡ 私も、愛してるッ♡♡」

俺の下腹部と彼女の尻がぶつかって肉が肉を打つ音が響く。

パン！パン！パン！パン！パン！パン！

「それでも、まだ八重垣の方がいいのか!？」

「んんうゝ、んんゝ、うっ、くう……あ♡ ダ、メっ……リアスくんのこと好きだけど、愛してるけど……でもお♡」

強情な女だ。本当に。

さすがに地獄の責め苦に遭っている男に寄り添っていたただのことはある。いや、寄り添うと言うか、憑りついていたという感じか。

「気付いてるか？ あそこにカメラがあるぞ」

「え、ああッ♡ カメラ!? あっ♡ ああッ♡♡ うそ、撮って、これ、あんツ♡♡」

だけど、この女。やってる最中に八重垣のことを持ち出すと、締りがグツとよくなる。

「イキまくってるクレーリアの姿を、八重垣に見せてやろうな?」

「ああッ、ダメえええ♡ ダメッ、やめてえ♡♡!」

浮気セックスで興奮しまくりやがって。エロ女め。絶対俺のモノにしてやるからな!

「出すぞ、中に! 子宮にぶっかけてやる!」

「アアっ♡ 来る、来ちやう♡! ザーメン出されちやう! 正臣に見られちやうのにイ……ッ♡♡!!」

「好きだろ、中出しッ! イケっ、奥に精液かけられてイケっ!」

「はッ、あッ、シテっ♡ 中出し、シテえ♡♡ リアスくんのザーメンぶちまけてえええ♡♡!!」

快樂に頭の茹ったクレーリア。恋人とは違う男に中出しをねだって、昇り詰めていくクレーリア。

妄執に染まった亡霊でなければ、完全に堕ちているだろうってセリフ。口から教え込んだいつもの言葉を吐き出す彼女の膣内が、俺の肉棒を射精に導こうとうねり狂う。

「ああ、ああ! 見られると分かって興奮しまくりのバカ女の中に、

たつぷりとくれてやるツツ！ 受け取れツツ!!」

「ああつ♡♡!」 「中にい♡当たってえ♡♡!」 「んあつ、ふあああツ♡♡!」
どびゅツツ！ ドビュつビュゆつ！ ブジュルルツつ!! と音

がしそうな勢いで膨れ上がった肉棒から精液が噴出していく。

「ああああ♡♡ んああツツ♡♡! イクつ♡♡ イクつイ
クつ、イクつ♡♡ 中に出されてイッグううう♡♡♡♡!!」

中出し絶頂で力が抜けポールに掴まっていることも出来なくなっ
たのか、クレーリアの身体がぐたと床に崩れ落ちた。

床に這いつくばって顔を腕で隠し、「はあ♡♡ はあ♡♡♡♡」と荒
い息を吐いている姿を見ていると、発射直後の肉棒がムクムクと勢い
を取り戻す。

（はあああ……♡♡ 幸せ……♡♡）（このオチンポ、すごい♡♡）（ご主人
さまあ♡♡♡♡）

もう一度膣内「ふあ♡♡ ああ♡♡♡♡」にずじゅうううと肉の槍を挿し込んでやれば、そこか
ら聞こえてくるのは屈服したメスの声。カラダは堕ちているのだ。
カラダは。

生前に、クレーリアが生きていた頃に会っていれば、もつと簡単に
奪い取れただろう。

「ほら、分かったよね？ クレーリアはもう俺のオンナになってるっ
てこと」

「まだ、イッてりゆのに……♡♡ ああ♡♡♡♡ あああ♡♡♡♡」

敏感になっているところに挿し込まれたクレーリアは、身体を
ビクツ、ビクツと痙攣させて感じている。

「俺のメス下僕になれ。そうしたら、もつともつと可愛がつてあげる
からさ」

「だ……めえ……♡♡」

「強情だなあ……ほら！ ほらほら、オラア！」

「んあああつ♡♡ んつああつ♡♡ また、またあ♡♡ イクつ♡♡ あ
あ♡♡♡♡」

そのままピストンし続け、二度、三度とイカせ。それでも頷かない
クレーリアをさらにイカせまくる。

「お前のカラダは、もう俺のモノになってるぞ」

「んふう♡♡ んつうう……♡ ああああ……すごいよお……♡♡」

「断言してもいいけど、人間の八重垣じゃあ、絶対にクレーリアをここまで感じさせられない」

「んふあつ……♡♡ あげる……♡♡ リアスくんに私のカラダ、全部あげる……♡♡ でも、心は……。カラダだけなら……キミの牝^モでいいからああ……♡♡」

心では八重垣との恋愛に浸りたい。カラダでは俺との肉欲に溺れたい。欲しいものを何も諦めたくない。

本当に『強欲』な女だ。大王派のベリアル家出身なだけのことである。

思えば、クレーリアには生前からしてそんなところがあったか。

まあ、これはこれで面白いと思えばいいか。よくエロ漫画の悪役が「簡単には堕ちてくれるなよ」とか「くくく、並の女ならとつくに堕ちているというのに、さすがだな。……だが、これならどうかな？」とか言ってるしな。難易度が高いほど、ヤリ甲斐が湧いてくるつてもんだ。

もう決めた。クレーリアはチンポをハメてもらおうことしか考えられない女にしてやる。俺のことだけを考える媚びまくりの全肯定メス下僕にしてやる。牝穴のことしか頭にない、バカ女に堕としてしまおう。

俺は賢くてデキル女が好きだが、おバカで媚び媚びな女が嫌いなわけではない。

というか、たぶんそれぐらいしないとダメだな。快樂で壊して、執着の対象を俺に塗り替える。そして、俺が居ないと存在し続ける気力を失って、消滅してしまうような女にしてしまおうかなさそうだ。

『若さまあゝ、そろそろお時間ですけど。延長されますかあゝ?』

さて、この後どうしたものだろうかと考えていると、頭の中に声が響いた。

甘ったるい声だ。ヤツてる最中のクレーリアよりもどろどろに溶けたミルクチョコレートのようなサキュバスの声。

『もうそんな時間か。まあ、初回はこんなところだろう』

とりあえず、クレーリアの中で二番目までは行けた。亡霊ではなく肉体のある状態なら完全に墮とせていただろう。

『それじゃあ、今日はここまでということでしょうか？』

『ああ、まだやることも多いしな』

『ではは、ちよつとだけサービュさせていただきまして、今回のエピソードとさせていただけますねえ』

『なんというか、ゲームみたいな感じだな』

エンディングが複数あるエロゲみたいだ。

『ええ、はい。そんな感じですねえ。たとえるなら「エンドB：カラダはあげても、心はまだ……」みたいな？ でも、今回のことは次回にある程度引き継がれますからねえ。強くてニューゲームじゃないですけども。それでは、夢の終わりに』

——それから幾年かの月日が過ぎた。

クレーリアはリヴラクスとの肉体関係を続けながらも、八重垣との逢瀬も続けていた。恋人とのひと時と、愛人として悦楽の夜が繰り返される日々。

ただ、長い年月を生きる悪魔のクレーリアと人間の八重垣とでは、過行く年月に対する意識が決定的に違っていったのだ。

クレーリアの見た目は相変わらず十代後半のままだが、八重垣はもう三十代。

「イギリスに戻るようになったんだ」

「え……」

出会った頃はまだ若かった八重垣だが、今はもう彼よりも若い戦士たちが多くいる。

「上司の娘さんが、あちらで戦士の訓練を積むことになってね。丁度良いから、僕も本部で訓練を受けないかって言われて」

八重垣は十年に一人の腕前とまでは行かないが、それでも同期の中では腕の立つことで知られた戦士。そろそろ部下を持ち、率い導くことを覚えなくてはならない年齢だ。

人間の世代交代は早い。体力が肝心の戦士であればなおさら。四十を過ぎれば前線から身を引くことを考えるものだ。誰もが皆、八十を過ぎてなお最強と謳われる伝説的な戦士のようになれるわけではないのだから。

「そうして、八重垣はイギリスへと行ってしまった。」

八重垣がクレーリアに「毎日するよ」と言っていた電話は、一か月もしないうちに来なくなった。

上の立場になれば、考え方も変わる。人間とはそういうものだ。それに……欧州は悪魔と教会との戦いの最前線。教会の戦士部隊を率いる者が、悪魔の貴族と連絡を取り合っているはずもない。

八重垣が自ら連絡を絶ったのか。それとも……クレーリアとの繋がりが教会組織に知られたことで二度と連絡出来ない状態になったのか。クレーリアにはそれを知る術はなかった。

あるいは、リヴラクスを頼れば八重垣がどうなったのか知ることはいくらでも出来る。だけど、クレーリアはそうしなかった。

その代わり、寂しさを埋めるように肉欲に溺れ、自らリヴラクスのところへと通う日々を過ごした。

「婚約者が出来た。だから、もう今までのようには会えない」「え……」

出会った頃はまだ幼かったリヴラクスだが、今はもう成長期。身長もクレーリアと並ぶほどになった。事情があつて鍛えていることもあつて数年後にはクレーリア好みの、逞しい男性になることだろう。

女の子のように可愛らしかった声は艶のある低音に変わっていた。力強く抱きしめられながら甘い言葉を囁かれると、うっとりとして蕩けてしまうほど。

「父上から、拒否は許さんと言われてね。前から知っていた子だったから、俺としても断る理由はなかった」

心は八重垣にあると言いつつクレーリアは、リヴラクスに何も言えなかった。

ただ、そのときにクレーリアが浮かべた表情は……。

『嫉妬』か。

目が覚めた。

しかし、ラストに一枚絵みたいなのを出すとか、本気でゲームみたいなことをしてくれるものだ。

「リュイ」

「はい、若さま」

「時間は？」

「予定通りです」

リュイに時間を聞いてから、なんだか気持ちいいなと股間を見ると。

「んじゅっ……ぺちゅっ……あふう……ぐちそうさまでしたあ♡」

サキユバスがマイサンをフェラっていた。

「だいぶ出していたか？」

「ええ、それはもう大量に。とつても美味しかったですよ♡ うふ♡」

まあ、いわゆる夢精というヤツである。眠ったまま天井に向けて発射していたのを、この淫魔が処理していたってことだ。うん、契約にも書いていたから問題ない。

ちなみにこのサキユバスだが、クレーリアと八重垣の間にあつたこととは知っている。駒王町でR18な「悪魔のお仕事」を担当している悪魔ならば当然のことだ。

クレーリアたちは「えつちい依頼」は扱っていなかったもので、そつち方面はこのサキユバスたちが昔から処理していた。

で、R18依頼担当のこの淫魔たちからすると、クレーリアと八重垣は同じ区域にいるお貴族さまと敵勢力の尖兵ということになる。

動向をチェックしていないはずがない。そして、お偉いさんたちのイザコザに巻き込まれたくない淫魔たちは、じつと黙って事の推移を

見守っていたわけだな。

まあ、そうするしかないよな。

「ベテランの淫魔から、何かアドバイスをもらえないだろうか？」

一発で決めてやるぜ、と思っていたわけではない。ないのだが、何とも悔しい。

「そうですねえ、次は八重垣さんも混ぜたらいいかもしれませんがねえ」

俺には、男と同じ夢に浸る趣味はない。正直、嫌である。心で接してくるオスなど、ドライブだけでもう十分なのだ。

特に隠すつもりもないので、それを思いつきり表情に出した。

「これは人間の間で、結構言われていることなんですけどね——」

俺の表情を見て取ったサキュバスは、ふふんと一本だけ立てた人差し指を左右に振った。

「愛し合う恋人たちを別れさせる手っ取り早い手段は……両方に別のお相手を作ってあげること、らしいですよ？　ドラマで観ました」

「ドラマか……。いや、まあ参考にはなるか？　ふむ、両方に別の相手……。クレーリアは俺が頂くわけだから……」

サキュバスは、「はい、はくい」と自分の顔を指さしている。

つまり、俺がクレーリアを寝取り。このサキュバスが八重垣を墮とす、と。

「はい、八重垣さんはわたしがお相手して差し上げようかと思いつて……。これでも、わたしいく、今までに結構な数の信徒の男性を墮落させて来たんですよ？」

まあ、サキュバスつてのはそういうものだ。淫魔の大好物は、信心深い男だと聞いている。

昔々の神父や牧師などは、夢精しちゃったときに「淫らな夢を見てしまったのは、私が悪いのではない。サキュバスの仕業だ！」と言つてたらしいとか聞いたことあるしな。

「料金は？」

「オプションですので。これぐらい頂きますけど、どうされますかあ？」

提示された金額を確認し、俺は頷いた。何事も経験であるということにしよう。

「なら、お前も今度創る『時間加速』のフィールドに来てもらうことになるな」

「二十年でしたっけ？」

「ああ」

「二十年間、わたしを貸し切りってことですかあ？」

「そうなるな」

「お買い上げ、ありがとうございまーす♡」

その後、サキユバスはちよつとした助言を俺に残して去って行った。

うん、クレーリアのことはまた時間があるときに考えることにするか。

近頃の俺はなかなか忙しいのだ。

もうすぐ冬休みが終わるので、明日は「御家に帰りたくありませんわ」と寂しがっていたレイヴェルと過ごすことにしよう。

で、二月に入って学校が始まったらラティアがやって来る。とりあえずは『時間』術式特化フィールドの創造だ。ラティアは三月まで学校を休むと言っていたので、フィールド完成後の二十年間でみっちりといチャつきたいね。

で、義姉上との温泉旅行もある。重要。レイヴェルが学校に行っていて、帰る先もフェニックス家って日取りだ。ドキドキしちゃう。

で、その次は……ディオドラが「そろそろ手伝ってもらおうから」とか言っていたので、まあ、ジャンヌ・ダルクの魂を受け継いだ転生者の顔でも拝みに行ってみるとしよう。

で、半月もあればフィールドも完成するらしいので、そこからは加速世界で二十年だな。朱乃や黒歌も連れて行って……。

『僧侶』候補の魔女のこともあったか……。

四月からの縄張り運営のこともあるし、黒歌との結婚式も準備しないとだし……。

うむ、忙しいな。まだ、何か忘れていることがありそうな気がする

が、今のところはこんなものか？



視界には無明の闇だけがあつた。生前に有し、死の後にも備えてい
る闇を見通す眼をもつてしても目に映るのは真つ黒な世界だけ。

つまりここは目に映るものが何も無い場所ということ。

耳は一切の音を拾ってくれない。肉体を失った魂であっても、悪魔
の会話能力は健在で音も聞き取れる。

しかし、ここは無音の世界。

存在しない肌は一切の感触を伝えてこない。何かに触れることは
出来ない。

匂いもないので嗅覚も働かない。物を食べることも出来ないので、
味わうことも出来ない。

視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚。その他一切の肉体的な感覚がない。
そんな世界の中にあつて、感じ取れるのはオーラだけ。

紅と紫の入り混じった魅惑的な悪魔のオーラ。魔力。

強烈な存在感で心を惹きつける龍のオーラ。

それだけが、宝玉に封じられた状態のクレériaが感じられるもの
の全てだ。

(夢……を見ていたような？)

他に何も感じ取れない空間に閉じ込められ、ただそのオーラだけに
包まれ、浸り続けるだけの時間が過ぎていく。そのせいだろうか、こ
のオーラの持ち主の出てくる夢を見ていたような気がする。

夢の記憶は淡いもので、起きてすぐに書き留めでもしなければすぐ
に薄れて行ってしまう。どんな内容だったのか、思い出せなくなつて
くる。

(気持ちいい……?)

心地よい。夢を見る前よりも、この空間の居心地が良くなったよう

な気がする。

(それに……)

力が戻っていた。死んでからずっと、徐々に失われ続けていた魂の力。存在し続けるためのエネルギー。それが夢を見る前と比べてずっと増えていた。

今ならば、このクレーリアの魂を封じこめている術式を『無価値』なものとし、外に出ることも可能に思えた。

もはや肉体の無いクレーリアにとって、残された魔力オーラとは存在そのものだ。使い切ってしまうえば存在自体が消滅してしまう。そのために出来なかったことが、今なら出来る。

だけど、離れがたい。このオーラの中にもっと浸っていたい。そう思ってしまう自分が居る。

どうにかしてこの宝玉から出たい。八重垣の魂のところに行きたい。そう思っていたはずなのに……。

儀式場見学

いろいろとバタバタした新年社交のシーズンが終わった。年末から続いていた学校のお休みも終了。

学校に通っていない俺には関係ないが、レイヴェルは明後日から登校再開だ。ついでに週替わりでフェニックス家とグレモリー家を行き来する生活も再開だ。

わりと長い期間続いていたレイヴェルのグレモリー家滞在も、明後日で終了ということになる。まあ、次の週には我が家で寝泊まりするわけだが、どうも彼女はそのことで寂しがっているように思える。

「父上、一つ許可を頂きたいのですが」「どうしたんだ、急に」

と、レイヴェルのことだと思うところがあつた俺は、父上の執務室にお邪魔していた。

何やら書き物をしていた父上は、急に顔を出した俺の言葉にいぶかし気な様子だ。いや、一応これから顔出しますよーとは伝えてあつただけけれど。

「いえ、学校が始まる前にレイヴェルとふたりで出かけてこようかと思ひまして」

ということ、明日は一つデートにでも行ってこようかと思つたのだが、出かける先がイマイチ思いつけないままズルズルと前日まで来てしまった。

で、クレériaとの夢遊びの後になって、ふと思いついた場所があつたので父上に許可を取りに来たのだ。

たぶん、思いつかなかつたら一日中くんずほぐれつしていたと思う。それはそれで悪くないとも思うのだが、もうレイヴェルとのベッド戦は日常の一部になって来ているしな。ちよつと違うことをしておきたくもあるのだ。

「学校が始まる前というと明日ではないか」

「はい、申し訳ありません。先ほど急に思いついたものでして」

いや、ホントに前日になって急に申し出るような行き先ではないのだが、思いついたのがついさつきだから仕方がないのだ。

「それで、私の許可がいるような場所に出かけたい、と。まあ、言ってみなさい」

「ええ、実は例の通過儀礼でも使われる遺跡に行きたいのですが」

他所の御家のことは分からないが、グレモリー家には伴侶となる者と一緒に受ける通過儀礼なるものがある。俺はその通過儀礼の内容の詳細は知らないが、儀式の場となる遺跡のことは知っていた。

そして、その遺跡は基本的にはグレモリー家の者だけが訪れることを許される場所だ。

「まだ早いだろう。それに、儀式には準備もある。今日明日で急にというわけにはいかん」

「いえ、場所の下見と言いますか……。見学に行くだけと言えいいのか……」

基本的にはグレモリー家の者だけというのは、一族の者でなくとも修繕や清掃などの維持管理をする者たちは出入りしてるからだ。

だったら、数年早くてもレイヴェルを連れて行っちゃってもいいのではないだろうか。家臣はオツケーで、婚約者は儀式のとき以外絶対ダメってことはあるまい。

「理由を詳しく言ってみなさい」

「どうもレイヴェルがラティアのことを気にしているようでして――」

社交シーズン中、俺の居ないところでどうもこう「並んでいるお姿を拝見しますと、ラティアさまの方がお似合ですわね」といったようなことを言われたらしいのだ。

たしかに現状では並んで立つと、ラティアの方が見栄えはいいのだ。身長的に。

自分で言うのもなんだが、俺は名門中の名門な血統で、悪魔にとっては重要ステータスである魔力もバカみたいに高く、美形揃いの悪魔の中でも特に顔の良い男だ。それに金をガッツリ稼いでもいる。

その辺りのこともあつてか、レイヴェルはやっかみを受けたりもし

ているようなのだ。

そのわりに俺の方に貴婦人、御令嬢からのアクションがあつた覚えはないのだけれど。

で、まあ「気にしておりませんわ」と言いつつも、レイヴェルは自分とラティアとを色々と比較してしまつたりするようなのだ。

悪魔の貴族は家格や血統を気にするところが結構あるのだが――家の格自体は、フェニックス本家のレイヴェルの方が形式的には上になる。ただ、ラティアは分家とは言つてもアスタロト卿の孫娘なのでそこまで差はない。魔王輩出の名門アスタロト家のラティアの方が上と考えるヒトもいるかもしれない。ベルゼブ派のヒトたちは、だいたいそう言いそう。

血筋の話になると、これはもうアジュカさまの姪でアガレス大公の姪でもあるラティアの方がかなり上になる。

その上で、俺とレイヴェルは婚約してからまだ一年経っていないというのに、来月には俺とラティアが時間を加速したフィールドで二十年間を過ごすことになっている。

まあ、そりや気にしちやうよね。当たり前だ。

「――ということで、俺の態度と言いますか……、そういったものを改めて示しておきたいと考えたのです。学校で話を聞かれることもあるでしょうし」

いつもいつも「お前が一番だよ」と言ってるのに、それでも「不安ですわ」といった態度を見せてくるレイヴェル。これは俺の信用度が低いというわけではないと思う。別にそういう気配を彼女から感じたことはないしな。だから、まあこれは「おねだり」なのだろう。朱乃が首輪を付けて欲しいと言つて来たり、黒歌が悪戯を仕掛けてくるのと同じだ。

つまり、可愛い。可愛いことをされると応えたくなるものだ。前世ではまったく縁のなかつた話だしな。

「分かつた。行つて来なさい」

俺とレイヴェルとの婚約は父上の決めたものだ。母上もレイヴェルを俺の第一夫人になる者として扱っている。これは色々あつた

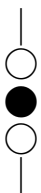
年末から一月を過ぎても変わっていない。

ということもあつてか、理由を伝えたらサクツと許可が下りた。許可までの父上の思考時間、三十秒。

「ありがとうございます」

立派なハーレム王になるには、正妻さんの協力が不可欠。なので、その辺りはハッキリとさせておきたい。という、俺の考えを父上も肯定して下さったのだろう。

助かるね。レイヴェルにはこの辺りの事を学校で聞かれても、フフンと胸を張って堂々としてもらいたいしな。



以前はあまり使わなかった後宮内にあるレイヴェルの部屋。ここもこの一か月ほどで随分と様変わりした。

レイヴェルのグレモリー家滞在記録が伸びるほどに、彼女の雰囲気の色濃くなっている。週替わりでこちらとフェニックス家とをレイヴェルが行き来していた頃はほとんど俺の部屋に居たからなあ。

「旦那さま……。もうすぐ、こうして一緒にいられなくなってしまうのですね」

「明日、グレモリーの者が婚約者と儀式を行う遺跡を見に行こう——そう伝えてからのレイヴェルは、ソファに座る俺の横に張り付いてべったり状態。うちの嫁さんはもうすぐ訪れる学校の再開と長らく続いたグレモリー家逗留解除にさびしんぼモードになってしまったようだ。でも、例のY e s Y e s 香水の匂いはしない。ふわっと甘い感じの匂いだ。たぶん、何かの花。

スリスリと寄ってくる様子が大変可愛らしい小鳥ちゃんは、まだエッチの気分ではないらしい。

『ですから、我々は下級悪魔も参加できるゲームと並行して公式戦引退者による——』

点けっぱなしのテレビの中では、ビィディゼ・アバドン殿たちアドバンスト引退組が記者たちに何かを語っている。

元第三位の知名度を生かして、今年の夏に開催予定のアドバンストリーグや平民向けゲームの宣伝をしてきているようだ。ホント、ありがたい話である。

これは、夏の社交シーズンの話題もグレモリーで独り占めしてしまうかもしれない。

「ナベリウス家の事件から冬の休みに入って、そのままずっとこっちに居てくれたからな。しばらく会えないと思うと俺も寂しくなってくる」

まあ、レイヴェルがフェニックス家に戻っている一週間の話なのだが。

「ラティアさまの箱庭が完成したら、二十年でしよう?」
「そうなるなあ」

パパッと一日で小世界の入れ物を創ったら、あとは六日ほどで「ラティアの世界」は完成するらしい。

次元の狭間との境界線や、山や河、湖などのデカイ構築物は俺とラティアで創るにしても、樹々や動物などは計画書に合わせて業者が短期間で大体のところは準備してくれるそうぞうで。

下級悪魔といっても侮れないものだ……。細かい調整などはその後も続くそうぞうだが、悪魔の建築技術って改めて凄すぎる。

聞いた話では、アジユカさまは趣味でオーストラリアくらいの異空間を所持されているそうぞうだし、上流階級のお遊びとしてはこういうフィールド作成ってのは割と一般的なようぞうだ。

お貴族様御用達のフィールド職人たちは、その道一筋何百年とかの超ベテランである。もしかしたら何千年とかのヒトもいるかもしれない。人間の業者と違って、新人が入って来てミスとか、年取って腕が落ちるとかもない。なので、まあ、任せて安心というわけだ。

その分、老舗企業の新陳代謝なんて無いも同然だがな。人員が十分な会社には新入社員の座る席などないのである。寿命が長くて、身体年齢も自在な悪魔には、退職者なんてそうぞういないから。

「レイヴェルもラティアみたいに学校休んでしまえば良かっただろうに……飛び級なんて狙うからだぞ」

「それは……リアスさまはいじわるですわ」

そう言いながら、レイヴェルは俺の肩に額を押し当ててきた。ぐりぐりぐりと。

悪魔の学校にも、何故か飛び級制度がある。百年程度しか生きられない人間と違って時間に余裕があり過ぎる悪魔でこの制度を利用する者はほとんどいないのだが、レイヴェルはそれを狙っているのだ。

何故かというと、早く俺と結婚したいから。一応、結婚は学習期間終了後という目安があるので、俺とレイヴェルも両方が学習期間を終えてからということになっている。

ただ、俺の方がレイヴェルよりも二歳年上なので、そのままいくと俺と同じ年のラティアの方が先に結婚可能になるわけだ。

レイヴェルとしては自分が一番先に結婚したいらしく、といってラティアに待ってもらおうというのも嫌なようで……「でしたら、私が飛び級致しますわ!」という結論になったらしい。

俺はそんな忙しい娘に、いろいろとお仕事を丸投げしているヒドイ男なのである。でも、その方がレイヴェルも嬉しそうだからいいのだ。俺のために働くのが大好きな嫁さんってサイコーだな!

ちなみに、人間界での仮の身分用の黒歌と結婚式をすることや、結婚指輪を身に着けることについては「悪魔としての正式なものではないのですから……。か、構いませんわ!」とちよつと悔しそうに了承してくれた。そのことを伝えた日のレイヴェルは激しかった。一緒に致した黒歌も激しかった。美少女と美女に自分のチンポの取り合いをされるのは実に良い気分であった。

「高等部まではともかく、大学部までいけば『不死身』特性の医学的検証とかに付き合うだけでいけるんじゃないか?」

「そうかもしれないけど……」

フェニックス家の特性の『譲渡』は医学的にかかなりの注目を浴びているようで、悪魔の医学の進歩に貢献するかもしれないとそちら方面の研究者から結構な期待を寄せられている。

が、何分お値段を決めてしまった後なので、無償で協力はしてやれない。レイヴェルの大学の単位と引き換えとかそんな話で済めば、二年ぐらいサクツと飛ばしてくれるだろう。

金で単位を買うようなものだがな。まあ、卒業だけしておいて勉強なんて後から付け足しても良いのだ。

貴族の次期当主や、その婚約者が学ぶのは領地経営に関する事に決まっているので、医学方面の研究に協力してどうこうつてもヘンかな。

というか、領地経営については学校より母上から習った方が早いし良いような気がするな。

実際のところ、経営学ってどれぐらい役に立つのだろうか……少なくとも人間の学問をそのまま持つてきても何か違うことだけは分かるのだが。

寿命が違うのってホントに大きい。定年退職とかないし、上司が引退しないから会社のポストは埋まったまま、創業社長がずっと現役なので二代目がどうこうとかないし……。老後のための貯蓄とかそういう考えは悪魔には無縁のものだ。年取って生きるのに飽きちやつた後の事なんて考えても仕方がないしなあ……生きるのに飽きちやつてるんだから、つまり死んでも構やしないって心になってるわけなので。

平民の一般企業の役員よりも、貴族家当主の代替わりの方が早いのが現状だ。何故って、貴族は引退しても割と悠々自適に暮らして行けるが、平民は稼ぎの良い仕事を手放したらその後の生活に困ってしまうから。

息子とか娘とか、血縁者に後を任せて引退。あとは事業を引き継がせたかわりに養ってもらいつつ、蓄えた金を使って暮らしていく者もあるかもしれないが——基本、創業者とかかって働くの大好きで「俺が、私が！」ってワンマンタイプが多そうな気がする。そういうタイプの悪魔は、肉体的もしくは精神的に死ぬまで後進に譲ったりはしないだろう。

「大学とかその先とか、どうなっているんだろうな」

「お母さまと話していると、百年くらいはあつという間に過ぎていくように言われますけど。まだそういつた感覚にはなれませんわね」

今はまだ周囲の状況や関係性、自分自身の身長なども変わっているが、いずれそういった変化はなくなっていくのだろうか。

将来を考えると、なんとなくイチャつきたくなる。明日の遺跡見学もあるから、どこか盛り上がっている部分があるのかもしれない。

「んっ……っちゅ……。旦那さま……っ？」

「ん、なに、百年、千年経つてもこうしていられるようにしたいな」

「はい！」

俺の腕を抱えるようにしていたレイヴェルの手が、首に絡んできた。ちゅっちゅっとお返しのキスが飛んでくる。彼女の頭に手を添え、髪の毛の感触を楽しみつつそれに応えていく。

ベッドの上でガッツリと重なり合うのも良いが、こういうのも良いものだ。

「なあ、フェニックス家では重臣の顔ぶれが変わったりすることはあるのか？」

「私が記憶している中ではありませんわ」

「やっぱりどこもそうか」

軽くボディタッチし合いながらフェニックス家の家臣事情を聞いてみると、フェニックス家もグレモリー家とそう変わらないらしい。

大戦中や内戦時、その後しばらく続いた混乱期には家臣のポストにも変動があったようだが、それ以降はあまり顔ぶれが変化することはなかったようだ。重臣の面子はどここの家もほぼ固定化しているのだろう。

平民の会社などでもそうなのだろうが、過去に功績があり、現在問題がないのなら変える理由もないしな。

「サイラオーグが前に、『実力のある者が上に行ける社会に出来ないだろうか』なんて言っていた覚えがあるが、今あるポストは埋まっているんだよな」

「家中でそれは難しいでしょうね。新たに功績を上げた者がいるからといって、上の者を降格させる理由にはなりませんから。やはり積み

上げた功績に応じて、中級悪魔、上級悪魔と昇格させていって、貴族と認められる上級悪魔になった時点で独立させる現在の形しかありませんわ」

なお、自分のことがよく分かっている家臣は功績を積み上げてでも独立して行かない。人間社会でもよく言われていることだが、組織の一員として活躍する才と、独立してトップとしてやって行く才は別物なのだ。爵位持ち貴族になんてなりたくないって者は割といるのだ。

名門グレモリー家の重臣と、木っ端貴族家の当主であれば前者の方が重要視されるし稼ぎも安定しているってこともある。グレモリー家の家臣のときには丁寧に対応してくれた相手だったのに、独立したらそっけないとか普通にありそうな話だ。

貴族になつたからって、現在繁栄している領地なんてもらえないしな。辺境の地を一から開拓していくことになるだろうから、難易度も高い。

まあ、転生悪魔、純血の貴族の眷属は別だがな。主次第ではあるが、上級悪魔になつても眷属であることには変わらないので主に面倒を見てもらえる。

というか、レーティングゲームでの活躍だけで昇進した眷属悪魔のほとんどは、主家に面倒を見てもらわないと早々に詰んでしまうだろう。ノウハウも部下も最初は無いだろうしな。

そして、貴族家としても役立つ家臣を手放す理由ってのはあまりない。現状に問題がなく、本人が残りたいたいと言うのならそのままの体制を維持するほうが楽だ。

結果として、俺が当主になつても直接話すような家臣の中でも主だった者の顔ぶれは変わらないってことになる。貴族家でも平民会社でも、既に体制の固まった場所では若者の昇進が困難なのが悪魔の不老社会。

何百年過ぎても会うのはいつもの顔ぶれで、見た目の年齢も変わらないとなると、時間の感覚も人間やってた頃とは変わっていくのだからな。

「出入りの商人や業者も昔から同じだからな」

貴族家御用達ってのは平民にとって結構なブランドだ。グレモリー本家の領地が日本の本州くらいなので、グレモリー家御用達ブランドは王室御用達みたいなものである。

金を積んでも欲しいって連中は結構いるのだが、なにぶんこちらも下手な者にそんな看板をやれない。信用と実績を重ねてきたところを使うものだ。安けりやいいって新規参入を受け入れたりはしないのだな。

こちららも貴族の権威で値切ったりはしないし、向こうも手抜きはしないし吹っ掛けてきたりもしない。良い仕事に適正な報酬を。

悪魔の社会は信用社会。一度の不義理が、千年先まで後を引く。その場その場での一時の得よりは、ずっと先までの付き合いつてものを考える。

そうなると、昔から付き合いのあるところを利用し続けるわけだ。余程他の業者との差が付けば切ることもあるが、普通はそうならないように対応してくるし、こちらからもそれを促す。

「変わりやすいのはデザイナーなどでしょうか。流行りがありますから」

芸術関係は確かにそうだ。人間界の流行り廃りの影響が露骨に反映してくる。

「テレビの導入時は大騒ぎだったらしいな……っつと」

小柄な彼女の身体を持ち上げて、膝の上に乗せる。この体勢で頭的位置関係がキスするのに丁度いいのがレイヴェルの良いところだ。

「んっ……♡ んんっ……♡」

人間界でテレビが発明され広まり出した辺りで、「これはいける！」と踏んで動き出した者がいて、利権やらポストを巡っているいろいろとあつたらしいとは聞いている。

大規模で成功しそうな新規事業ってのはどこの貴族家も動くものだ。大王家とか、魔王輩出の名門とか、そういう権力に近いところはガンガン行ったらしい。我がグレモリー家もその一つである。

フェニックス家もテレビ関係にヒトを送り込んでいるしな。

と、将来のことや領地経営のことなどをつらつらと取り留めもなく

話しながらレイヴェルとの時間を過ごす——半分以上仕事の話で良かったのだろうかね。

レイヴェルのオーラや身体の声からすると良かったのだろう。

まあ、Yes Yesじゃなくてもやることはヤルわけだが。俺は我慢の効かない男であり、レイヴェル相手に我慢も遠慮も必要ない。

そろそろベッドに行こうか——と、思ったらレイヴェルが亜空間から香炉を取り出した。

「旦那さま……今夜もたくさん可愛がつてくださいまし」

スイッと宙を舞った香炉がテーブルの上に着地し、そこに炎と風の魔力が注がれる。

途端に漂い始める淫靡な香り。

うん、今夜も子作り子作りだ。

一夜明け、俺とレイヴェルは件の遺跡を目指して山道をラクダの背に乗って進んでいた。空間転移で近場まで跳躍し、そこからはグレモリー家伝統の乗騎で向かう形だ。

俺の前に座ってレイヴェルが操る使い魔^ゴラクダ^ボの背に揺られる。後ろから彼女を抱えるようにして一緒に手綱を握って進むことしばらく、切り立った崖の岩肌のなかにその遺跡は姿を表し始めた。

「ああ、見えて来た」

遺跡の入口へと向かう周囲とは材質の違う石畳の道。その道の両脇に立ち並ぶ石柱群。石柱と石柱との間には、歴代当主や勲功有った者たちの石像が置かれている。

なお、ここに石像があるからといってそのモデルとなったご先祖様がお亡くなりになっていたりとは限らない。別に霊廟とかそういうものではないのだ。亡くなっている方もいるが、生きている方もいる。悪魔は長寿なので、まだまだ現役の方の像も多い。当主を引退したら、ここに父上の石像も並ぶことになるだろう。

グレモリーの初代さまは、同じ七十二柱の祖であるゼクラム祖父さんと同世代のほず。それを考えると……もしかしたらこの遺跡は大

昔の住居跡だったりするのかもしれない。うん、洞窟に住んでいたとかそういう時代もあっただろう。

なにぶん大昔の話だ。うちのご先祖様とゼクラム祖父さんが石の槍もつて、ふんがーふんがー、うんばっばー！ と焚火の周りで踊っていたなんて頃もあったのかもな。初代さま方の生まれた頃の文明レベルを考えると。

初代七十二柱と四大魔王さま方が皆して蛮族ムーブ決めて、焚火を囲んで「美味しく焼きましたー！」などとしていたシーンを想像するとなかなかどうしてほっこりとするものがあるではないか。

「ここが……グレモリー家の方々が親愛なる者と共に試練を受けると言う遺跡なのですわね」

石畳に足を付け、ラクダがポコポコと歩く。その背の上で、ほうと息を吐くレイヴェルを後ろから抱きしめた。

昨日の夜から今朝にかけて、いつもより燃え方が激しかった我が婚約者さんである。情事というものは、燃えるほどにあちこちがよく湿るのだから妙なものだ。

そんなレイヴェルは今もちよつと体温が高めだ。でも、少し身体が強張っている。ベッドの中ではあんなにふにやふにやだったというのに。

「今日は下見みたいなのだから」

腰を抱く力を強めると、レイヴェルは頭を俺の胸に預けてきた。

「ですけど……どんな試練なのかと考えると、どうしても緊張してしまいますわ」

まあ、結婚するには試練を乗り越えなければならぬとか言われるとな。内容が気になってしまうのは仕方がないところだ。

とはいえ、そう難しいものでもないとも聞いている。

「詳しいことは教えてもらえなかったが、『貴族なら問題ない』と聞いているからレイヴェルなら大丈夫だろう」

「そうだと良いのですけど」

むしろ俺の方がヤバイかもしれないくらいだ。いや、大丈夫だとは思うがね。

最初の石像の前でラクダを降り、歩きながら立ち並ぶ石像一つ一つの下に刻まれた名前を読み上げる。ついでに、その方がどういったヒトなのかを俺が覚えている範囲でレイヴェルに説明していく。

「グレモリー家の歴史みたいな話だな。」

エピソードとして一番多いのは、「大過なく領地を治めた第〇〇代当主の誰々々」といったものだ。悪魔の歴史は割と平和なものなので、これといって記すことが無い当主も多い。内政の話ならそこそこあるのだが、基本ゆったりペースでの変更だったりする。

戦の話があれば盛り上がるのだが、悪魔は人間と違って同種族で争ったことが少ないからな……まあ、騒動がないのは良いことだ。大戦と内戦の時期を過ぎた父上は、グレモリー家の歴史書の中でページをガツンと取ることになりそうだな。

「メ、メモを取らせてくださいまし」

これも結婚への試練なのでは!? とでも思ったのか、単に真面目なだけなのか、レイヴェルは俺の話すことを懸命に覚えようとしているようだ。

「書いてある本があるから、今度一緒に読もうか」

ちなみに俺はフェニックス家の歴史をあまりよく知らない。ただ、我が父上と同じで現当主であるフェニックス卿の存在感が大きくなるだろうことだけは分かる。

どの御家もそうだと思うのだが、現当主と先々代だったら現当主の方が大変なはずだ。最近の人間界の変化は昔と比べて速過ぎる。

お仕事の関係で人間との縁が深い悪魔の文化や社会制度は、どうしても人間のその影響を強く受けるからなあ……。1000歳オーバーの悪魔だって、仕事で必要なら「パソコン使えません」とは言えないのだ。

「ここに手を当てて、魔力を流せばいいらしい……」

そうこうしている内に遺跡の入口に着いた。入口は大きな門扉によって閉ざされている。事前に聞いていた箇所を手を当て、魔力を流す。

すると、門が右と左にスライドして開いていく。なんというか、

ゲームの遺跡ダンジョンの扉がゴゴゴゴと開いていくシーンのようだ。というか、そのものだな。グレモリー家の血筋やら魔力がカギにでもなっているのだろうか。清掃や補修の者は、何か開閉用のアイテムでも持っているのかもしれない。

ところで、ここはまだ現役の儀式の場だ。なんなら建造された当時の方が存命だったりしそうなのだが、それを遺跡と表現して良いのだろうか？

遺跡というと、なんだかこう発掘とか研究されているイメージがあるのだが……まあ、いいか。

門扉を抜けると、そこは石造りの通路だった。割と広いし、天井も高い。グレモリーの一族は人間サイズだが、御家によっては身長物凄く高いヒトもいるしな。そういったヒトを連れてきた場合も想定されているのかもしれない。

通路を少し進むと、後ろから門の閉じる音が聞こえてきた。自動ドアである。外から光が入って来なくなり真っ暗になるが、俺もレイヴェルも悪魔なので視界は問題ない。むしろ中途半端に明るい方が見難いくらいだ。

でも、手は繋いでおく。試練が待っているという場所なので、トラップの一つや二つはあってもおかしくはないからな。

さすがに即死罠などはないと思うが。そんな物があれば父上も教えてくれているはずだ。しかし、性質の悪い冗談のような代物くらいはありそうで油断はならない。

初代さまと面識のあるという親戚から聞いたところでは、どうも初代さまには悪戯好きな面もあつたらしいので。

カツンカツンと通路にふたりの足音がだけが響く。虫はいないし、目立つ汚れもない。苔が生えていたりもしないので、ここは保全を担当している者はきちんと仕事をしているようだ。

通路を進む間、レイヴェルは一言も発しなかった。やはり緊張しているらしい。繋いだ手を彼女の方からギュッと握って来るのが、頼られているという感じがして大変よろしい。俺は満足だ。

一応の注意をしつつ通路を進んで行くと、ひらけた場所にたどり着

いた。広間の向こうには閉ざされた石の扉が見える。

「ここが最初の試練の間になるのかな」

「どうやら、そのようですわ。リアスさま、こちらに——」

とレイヴェルが指し示す方に目を向けると、第一の試練と書かれた金のプレートが壁に掲げられていた。

「開かないな」

とりあえず先へと進む道を閉ざしている石扉の前に行ってみるが、魔力を流してみても開かない。どこか別の場所にスイッチでもあるのだろうか。扉を壊して通ることは簡単だが、さすがに自分の御家の遺跡でそんな真似をするわけにもいかない。

定番だが、これは他のプレートに扉を開くヒントが書かれているのだろう。RPGのダンジョン攻略でもしているようで、ちよつと楽しくなってくる。

さて、ではそのヒントはどこかなと広間を見渡せば、石壁に絵が描かれていた。壁画つてやつか、実に遺跡っぽい。

「舞踏と歌がテーマでしょうか？」

「そうみたいだな」

壁に描かれているのは、歌唱や舞踏のシーンばかり。

歌や踊りというものは、信仰や宗教と縁が深い。これはもう世界各地の様々な文明で共通することだろう。シヴァ神などは踊りの上手な神として知られているし、教会だって聖歌隊なんてものがある。

で、信仰を妨げる存在であるところの悪魔にとっても、歌と踊りはなんだかねで重要項目になるのだ。

「途中で途切れてる」

ぐるりと壁伝いに歩いて行くと、まだ何も描かれていない壁面が現れた。どうやら古代から現代までの順に歌や踊り、音楽などの歴史が描かれていたらしい。

「これから描かれるのかもしれませんがね」

こういった文化を進めていくのは、異形の存在ではなく人間だ。

「父上が描かせるのか、それとも俺の代になるのか」

もう一度最初の絵と思しきものから見直して行く。レイヴェルと

ふたり、意見を交わしつつ絵を見るというのも悪くない。

ちよつとした美術館デート気分だ。

「あら？ 扉が……」

一通り見終わったところで、何もしていないのに石扉が重々しい音を立てて開き始めた。

さて、奥へと進むには扉をどうにかしないといけないな。と、思っていたところでのジャストなタイミング。

どうやら何者かに監視されているらしい。ドライグが何も言っていない辺り、監視者に敵意はないのだろう。

なんとなく、初夜のときのことを思い出す。またどこかにカメラでも仕掛けられているのだろうか？

こういうのを見つけられる、ゲームで言うところの盗賊系スキル持ちって貴重だよな。俺の眷属にはいないが。

強いて言えば仙術で気配を探れる黒歌がそれっぽいが、残念ながら彼女は『僧侶』で後衛職だ。敏捷性や防御力を考えると、斥候役として送り出したりするのは危険である。

「まあ、いいか。どうやら奥へ進めるところらしい」

石橋を叩いて壊すの精神で進むとしようじゃないか。危険も畏も踏み潰すのがドラゴン流って感じた。

通路を進んでいくと、また広間に出た。どうやら、ここが第二の試練の間らしい。プレートにもそう書かれている。

「今度は食事や礼儀作法について描かれているようですよ」

この広間にも壁画があった。レイヴェルの言う通り、食事や作法がテーマのようだ。

「宗教とこれらは切り離せないからなあ」

歌や踊りもそうだが、食事というか供物も神話や伝説にはつきもの。生贄とかそういうのも含む。

農耕にも大活躍な牛をたくさん所有している。立派な牛を所有している。偉い。牛を巡って奪い合い、争い合い、騙し合いみたいな物語のなんと多いことよ。

バアル家というか、バアルとそんな大事な牛の関係は良く知られて

いるところだが、昔の人間たちは大事な大事な財産であるこの家畜を屠って神に捧げることで信仰心を示していたとかどうとか。

前世で教授にそう習った。まあ、ギリシア神話だと神に捧げるのは骨と煙で、おいしいお肉は人間が食べてしまうのだが……お前ら神を言い訳にして肉喰いたいだけだろとか批判もされたそうな。

まあ、お祭りの時くらい美味しい物をたらふく食べて、酒を浴びるように呑みたいって気持ちも分からなくはないが。これらの絵は、神々が人間のそういった欲望のダシにされている場面と考えれば悪魔的にも意味があるのかな。

「この絵……。人間って醜いですわね」

「ああ、これか……。有名なヤツだな」

レイヴェルが立ち止まって「うええ」といった顔をしているのは、貴族風の男が食事を吐いているシーンの絵だ。タイトルは『美食』。

料理をたくさん味わうために、お腹いっぱいになってきたら胃の中心身を吐き出して、それでもう一度食べ始めるとかいう話。噛み砕いて胃に流し込んでしまえば、みんなゲロになる的な？

この絵の時代では、これが食事の作法として普通だったのかね。この頃に食事の作法を学んだだろう方々が悪魔の中にはたくさんいるわけだが、俺の主催するパーティーとかでコレやられたらたまらんな。気分が悪くなるわ。

うーん、文化の変遷とは恐ろしいものだ。悪魔の催しは、主催者によってマナーというルールが変わるから……。こういうのしなさいってところもあるのかもしれない。参るなあ……。

「まだ二つ目ですけど、この試練は祭事に関することを考えなさいということでしょうか？」

「かもしれない」

歌に踊りに、食事に、それらについての決まり事。これらは支配者にとっては大事なことだ。

ここはグレモリー家の者と、その伴侶になるものが儀式を行う場所なので、自分たちの儀式を行う中で今後取り仕切ることになるだろう祭事について考えようってことなのだろう。

悪魔は悪魔なので、『聖書の神』はもちろん他の神話の神々も崇めたりはしない。だが、お祭りや行事はある。何か理由を付けて大騒ぎさせ、民衆たちの中に溜まった日頃のうっ憤を晴らすようなイベントは行っているのだ。こういったところは、人間とそう違わない。

俺やレイヴエルはそういったイベントを楽しむ側ではなく、主催する側になるわけだ。統治のための手法の一つとして、いろいろと考えて行かなければならない。

「基本的には引き継いでいく感じでもいいのだろうか……人間界の変化が速いからな」

父上が当主を継いだ頃と今とでは、相当変わっているはずだ。

古くからの伝統に人間の方が合わせていく神々への信仰と違って、悪魔の「お仕事」はこちらから人間に合わせてやらねばならん。サービス業だからね。

まあ、神々への信仰も時代によって移り変わってはいるのだが。もう人身御供はもとより動物を使った生贄の儀式とかは、表向きにはほとんどなくなっているだろうし。

「百年後には人間の食事風景も変わっているのでしょうか」

近未来ものの物語などでは、人間たちが必要な栄養素全部入りのゼリーだけ食べて暮らしているなんて設定が出てきたりする。これがあり得ないとも言い切れないから困る。

「まあ、人間の食糧事情が変わっても俺たちはそのまま美食を楽しんでいればいいだろう。冥界産の肉や野菜が超高級品扱いで人間に売れるようになる時代が来るかもしれないし」

これまたありがちだが、気候変動で現在の人類が食している主要な農作物が生産できなくなるって未来も大いにあり得る。以前俺は何かの折に神々は地球温暖化に関わって行かないなどと考えたことがあったような気がするのだが、なんと現在の地球は寒冷化し始めているのではないか？ などといった説もあるそうだな。

温度上がるの？ 温度下がるの？ どっち!? てな話なのだが冥界の気候は魔力で操作しているしな。悪魔的にはそこまで問題でもない。

人間的には、暑い方が寒いよりはマシかな。寒い方が作物出来なさそうだから、食糧不足で飢えそう。飢えたと戦争にもなるだろうし。

「人間界に飢餓が発生するようでしたら、稼ぎ時ですわね」

「絶滅だけはされないようにしておきたいが、核戦争とかやらかされる可能性もあるからなあ……」

またまたありがちだが、地球が核の炎に包まれるってこともあり得るわけで……。悪魔に限らず、人類の精神エネルギーを食い物にしていく種族にとっては絶滅は避けてもらいたいところだ。ある程度の人口の減少や危機なら、飢え死にするくらいならってことで悪魔との取引が発生しやすくなるから構わないのだが。こういうときって、神々的にも信仰のボーナスタイムになるのかもしれない。

そう考えると、ラティアパパの人間混じりを確保しておく政策はアリなんだよな。うーん、グレモリー家でも千年先を考えて備えておくべきか……。

ぶつちやけ、千年後に人類が生き残っているかどうか分からないからな。俺は寿命いっぱい生きたいのだ。

「いくらかさらっておきますか？」

「備えあれば憂いなしとも言おうし、それもありかもしれないな。丁度……」

ラティアと創る世界が人間界に似せた環境にするって予定なのが――。

ちよつと言いつらいなと言葉を止めてしまった俺である。

「分かっておりますわ。そちらの方はラティアさまにお任せします」
分かっておりますわ、らしい。それなら、まあいいか。

今後機会があれば、ある程度の人数は確保しておくことにしよう。神隠しならぬ悪魔隠しに遭うことになる人間さんは御愁傷さまだが、場合によってはその方が幸運って可能性もあるしな。

俺が人間だったら『裸足の拳』みたいな世界でヒヤッハーと放射能に怯えながら暮らすより、気候は安定、農業も安定、領主は長寿の悪魔で政治も安定な世界の方がいいし。

「取引で魂や寿命差し出すって人間がいたら連れてくるかな」

「リアスさまにお任せすると、女性ばかりになってしまいそうですわ」
「ハハハツ……うん、そうなるかも」

あり得る。人間の女に手を出して「やーん、悪魔さまあ……ずっとお傍においてください。お願い、このおチンポから離れられないのお♡」とか言われたら……うん。

ま、向こうから攫われたいって言うのなら、俺としても外交的に気が楽つてものだ。他の神話勢力にしても、悪魔に心や魂を奪われた人間についてはあまりうるさくは言わないだろうしな。

結果、女ばつかりになったら、俺が悪魔と人間のハーフをいっばいこしらえよう。それでも『欲望』は得られるのだから、ヤリ捨てよりはそれがいい。

小説サイト風にタイトルを付けるなら、

『快樂に負けて悪魔に魂を売り渡したら、異世界で領主さまの家畜メスブタになれました♡ 人類は核戦争で滅んだそうですが、私はこちらで幸せなのでもう戻りたくありません♡』みたいな？

うーん、これはヒドイ成年向け作品。

ラテイアの性格だと、普通にそのままだと飢え死にしそうな連中を勧誘してきそうだ。男でも構わんが、出来るだけ子孫女性の期待値が高くなるような人間でお願いしたいところである。

「あつ、開くようすわ」

「それじゃ、次に行くか」

食事の絵から食料の話になり、悪魔の糧である人間の話に飛んで、将来への備えについて話していたら扉が開き始めた。

どうやらこれで第二の試練の予行演習としてはオツケーらしい。

聞いた話では、試練は全部で三つ。次が最後の試練ということになる。まあ、本番ではないのだが。

お手々繋いで最後の試練に向かって通路を進んでいると、レイヴェエルの指に少し力が籠った。

「そういえば、この試練はサーゼクスさまとグレイファイアさまも受けられたのですよね？」

今ではグレモリー家を出て『ルシファー』を名乗っている兄上だが、通過儀礼を受けた当時はまだ『グレモリー』だったらしいので。

「そう聞いているけど、どうかしたのか？」

レイヴェルは何やら考え込んでいる。

「いえ、おふたりもこういったことを話し合われたのかもしれないと思ひまして」

「兄上たちが、ここで考えたことか……」

それは、現政府の方針のもとになるようなことだったのだろうか。

「ほとんど、ギリシア神話ですわ」

最後の試練の間の壁には、文章が刻まれていた。レイヴェルが言うように概ねギリシア神話だ。

「まあ、聖書の文盲が書かれていても困る」

そんなことをされたら実に頭の痛い試練になってしまふし、管理担当者も絶対に嫌がるだろう。

「どういう意味でしょうか？」

「うん、分からん。ただ……」

「ただ……？」

「まあ、悪魔というか『聖書の神話』はかなりギリシア神話の影響を受けてはいるのだろうなとは思う。この遺跡が出来た当時はまだキリスト教がなかったはずだから、その頃のことを考えると——」

ここは、グレモリー家が昔から通過儀礼に用いてきた遺跡だ。建造されたのは紀元前。『聖書の神話』がまだ書物にまとめられていなかった頃だろう。

そんな昔の頃から現在にまで残っている神話の中で、ギリシア神話の存在感は非常に大きい。信仰こそ『聖書の神』に持っていかれた感があるが、その影響は現在でもあちらこちらに残っている。

建造当時の頃の『聖書の神』の信徒たちは、オリュンポスの神々のことをグギギギと見ていたに違いないのだ。で、『聖書の神話』が一神教ってことを考えると他の神話の神々は邪神とすら呼べないわけだ、まあ、悪魔の原型になったのかもしれないな。

聖書系の物語などには、ルシファーの頭が割れて中から邪悪な女が

生まれてくる場面などがあつた気がするが……あれどう考えてもゼウス神からアテナ神が出てきたシーンを意識しているし。妬む『神』の信徒たちからすると、隆盛を誇っていた者たちが信仰していた他の神話の神々は悪魔のようなものだろう。

「——ああ、それであるの劇か」

「劇、ですか？」

「兄上と義姉上の馴れ初めから、結婚までの物語があるだろ？」

「ええ、何度も観に行っておりますわ！」

兄上と義姉上のラブロマンスは悪魔の中では語り草だ。劇にもなっているし、本だつて出ている。

ちなみに俺はあまり観ていない。本人がすぐ近くに居るといふことももあるし、どうにも、ちよつと、なんとも言えない気分になつてしまふ。兄夫婦のラブロマンスとかさあ……。

「戦争絡みで、敵同士の恋物語、最後は結婚して王さまになりました」英雄の物語としては、実に良い終わりだ。ここの壁に書かれた物語のような悲劇がない。まあ、物語と違つて結婚しても王になつても、その後がまだまだ続いているわけだが。

ギリシア神話の神々は、人間たちの信仰を『聖書の神』に持つていかれた。それでもまだ、オリュンポスの勢力は大きな力を残している。それはきつと物語の力なのだろう。我らは『夢幻』^{ファンタジー}な存在なので、星空を見上げるだけで人の心に物語が思い浮かぶというのは強い。

「あつ、ここを見てそうされたのでしょうか？」

「かもしれないな」

まあ、兄上たちが試練の中で何を考えたのかは知らないが。こつぱずかしい劇まであるのだ、何かしらあつたのだろう。たぶん、きつと。

ぐるりと一回り、壁に刻まれた物語を読んでいくとゴゴゴと最後の扉が開き始めた。これで、見学も終了か。

またもや出てきた通路を進んでいくと、向かう先に光が差し込んでいる。通路を抜けると、空が見えていた。冥界の空を行く偽物の太陽の光が、暗闇を抜けてきた俺とレイヴェルを照らしている。

「コロシアム……か？」

ローマにありそうな円形の闘技場っぽい感じだ。俺たちが出てきたのはどうやら見物席の出入り口にあたる場所のようだが、他に人影はない。

「そのようですけど、これで終わりで良いのですよね？」

「と、思う……あれは」

周囲を観察しながら話していると、俺たちの居る側から最も遠い場所にある剣闘士の出入り口から一つの影が現れた。

その影は……ゆるかった。ゆるっとしたデザインの着ぐるみだった。

「ゴモリン！」

思わずレイヴェルとハモってしまった。ゴ布林でもゴポリンでもなく、ゴモリン。人間界というか一時期の日本の流行に乗っかってグレモリー家で生み出された、ラクダ系ゆるキャラである。

「試練は三つだと聞いていたか？ それは嘘だ」

ゴモリンから聞こえてきた声は、録音した俺の声をちよいと老けさせたような感じのものだった。

まあ、父上である。魔力の波長も父上なので、まず間違いあるまい。

「お義父^{とっ}さ、ううっ!？」

俺はレイヴェルの口を塞いだ。あえてあの姿で出てきたと言うことは、つまりこの時この場では父とは思うなということだ。謎の着ぐるみ男として対応しよう。

小声でそれをレイヴェルに説明し、父上——ではなく、ゴモリンに問いかける。

「試練はまだ続いていると？」

「そう、ここが最終試練の場だ！ 何をやる場所か口にする必要はあるまい！」

言いながら、ゴモリンは闘技場の中央へと歩んでいく。

「分かった！ 死ね！」

俺のこの手から、紅と紫の入り混じったオーラ砲撃が迸った。

「ちよっ、まっ!!」

あつさりど、実にアツサリと、ゴモリンは倒れ伏した。

正体を隠した先代を殺して家督を受け継ぐ……それがグレモリーの最終試練ということなのか……。

という冗談は置いておくとしても、最後がコロシウムというのは戦闘があるということなのだろう。

「本番はどなたがいらっしやるのでしょうか？」

「兄上と義姉上かな？」

「それ、勝たないとダメですか？」

「いや、それはないと思いたいが……。父上と母上なら、まあ問題ないか？」

今回みたいに手加減すればいいだろう。いや、母上は割とヤバイかもしれないが。

「とりあえず、父上を起こしてくる」

と、思ったらゴモリンと同じ出入口から翼を広げて現れた母上が、ゴモリンの着ぐるみを揺すっている。

ちよつと母上、揺すぶり方が乱暴じゃないですかね。母上が何か怒っているようなので、俺はもうあそこには近寄らないことにした。

母上の愛情表現は、ときに暴力を伴うのだ。

「暴力系ヒロインなんて今時流行らないぜ」とか何処かの誰かに言われそうだが、母上は俺のヒロインではないのでいいのだ。

父上はそれでいいらしいので、構うまい。むしろ、それがいいのだろうか？

「あ、そうでした。私、お弁当を用意してきたのですけれど、ちようどお昼時ですわ」

「なら、ここで食べていくか」

「はい、用意いたしますね」

レイヴェルが慣れてしまっている。我が父母のやり取りに……。

このあと、レイヴェルと父上がそれぞれ持って来ていた弁当を四人で食べることになった。

俺とレイヴェルと父上と母上と、グレモリーの次代と当代での昼食

会。場所は先祖代々の儀式場のゴールに用意されたコロシアムの戦闘ステージ。

「まさか、こんなところでピクニック気分とは思わなかった」

「あら、リアス。たまにはこういった趣向も良いではありませんか」

俺のつぶやきに母上が返して来る。屋敷で普段見かける顔よりも表情が柔らかい気がするのは気のせいではないだろう。

使用人の姿もないので、いつもよりはリラックスモードだ。身内オンリーってなかなか機会がないからなあ。

「私はサンドイッチですわ」

「そうか、こちらはこれだ！」

シートを広げて座る四人の真ん中に、レイヴェルの持ってきたバスケットが「ポンッ！」と白い煙と共に出現し、着ぐるみを脱いだ父上の重箱が「デデンツ！」と効果音付きで現れた。亜空間収納から物を取り出すときにちよつとした演出を凝らすヒトはそこそこいる。煙とか炎とか、おどろおどろしい音とかね。

しかし、父上よ。何故にレイヴェルと張り合っているのだ。微妙に自慢気だし。

「うーん、この中で俺だけ料理出来ないな」

現在のグレモリー家のちよつとズレた日本鼻肩は、父上の趣味によるところが大きい。重箱の中身も和風。そして、上手くて美味しい。料理に凝ること数百年、趣味で磨いた腕前が父上にはある。

母上も悪魔の貴族女性だ。たしなみとして料理を始めとした家事全般は、ほとんど使う機会がなくとも普通にこなす。レイヴェルも年齢を考えたら上手な方だ。

俺だつてカレーや肉ジャガ、シチューくらいは作れるけどな。工程が大差ないし。なお、ルウから作ったりはしない。市販品利用だ。

「リアスは雑ですからね」

母上が言うように、どうにもいい加減なのがこの俺、リヴラクス・グレモリー。野菜の切り方とか大きさを不揃いにしてしまう、グレモリー家次期当主さまである。

「とりあえず、食べられるはするでしょう」

火の通り方が均一でなくても、煮崩れたり、ちよつとガリつとしたって食えればいいんだよ、喰えれば。といった前世から引き継いだいい加減さが抜けて行かない。

「その考え方だぞ、リアス。レイヴェルくんを見習いなさい」

父上にまでそう言われ、レイヴェルを見ればニッコニコ顔だ。まあ、別に母上も父上も俺に怒っているわけでも責めているわけでもない。ちよつとした親子のコミュニケーションというヤツである。

「俺はレイヴェルに作ってもらうからいいんですよ」

「お任せくださいませ」

その辺りのことは、レイヴェルも分かっているのだろう。あとは、まあ、昨晚俺が父上にレイヴェルとのことを相談して、それで翌日に当主夫婦でこの対応だ。

はつきりと口にはしていないが、父上と母上の意見・立ち位置を改めてレイヴェルに示しているのだと思う。

「はい、あなた」

「うむ」

「リアスさま、あーん」

「あーん」

何か知らんが父母が目の前でイチャイチャし始めたので、こちらも対抗して見せたり。とまあ、一月最後の日の昼食はのどかに過ぎて行った。

うん、こういう日も悪くない。

魔女裁判のラ・ピュセル 聖書に名を記されなかつたケダモノ

『ここに知恵が必要である。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるのかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして数字は六百六十六である』

『わたしが見たこの獣は、豹に似ており、足は熊の足のようで、口は獅子の口のようにあつた。龍はこの獣に、自分の力と王座と大きな権威とを与えた』

『これには、十本の角と七つの頭があつた。それらの角には十の冠があり、頭には神を冒瀆するさまざまな名が記されていた』

光の無い漆黒の瞳が覗き込んでくる。

身体の前面を殆どあらわにした幼い少女。『無限』があなたの魂を見詰めてくる。

意識が深い闇の中へと沈んでいく。忘却された過去。暗黒の深淵へと落ちていくなか赤き龍の声が遠くから聞こえた気がしたが、何と言っているのかは分からなかつた。

岩だらけの丘の頂上に人の背丈の倍ほどの長さの木の杭が立っていた。その木杭は急いで作られたようで、まだ白い木肌が目立つ。夜明け前の光の中にそびえるその「磔^{はりつけたい}台」は集まった見物人たちの心に鮮烈な印象を与えた。

その処刑の丘を、男たちが登っていく。男たちは皆、その背に木材を背負っていた。その木材は丘にそびえる木杭と同じようにまだ白い地肌を晒していた。

男たちの運ぶ木材は、十字架の横材だ。丘の上の杭は縦材。そこに彼ら自身が運んだ横材を組み合わせた後、磔刑が実行される。

あなたはその様子を黙って見ていた。やれることはやった。総督はこの処刑を回避しようと多くの手間をかけてくれた。それでもなお、これを止めることは出来なかつたのだ。

もはや、どうしようもない。

あなたの瞳は、処刑へと望む男たちの内のただ一人だけを見詰めていた。日の出とともに磔台にかけられたその男の頭上には、罪状を示す板が取り付けられている。王を名乗った、と。

太陽が昇り、罪人たちの上にも時間が過ぎていく。男が十字架にかけられてから、もう四時間ほどが経過していた。

あなたは男が苦しみに打ちのめされていく様子を見続けている。十字の横材には縄が巻かれ、男の手はそれによって縛られていたが、縄だけではなく釘も撃ち込まれていた。

左のてのひらに、両の足首に、長い釘が突き立てられ、その傷から流れ出た血が今もなお流れ落ちていく。早いうちに流れ出た血は既に固まって黒く濁り、そこにどろどろと後続の血がおちていく。

やがて男が何事かをつぶやいた。この形式の磔刑は、呼吸を困難にさせる。口を開くのも苦しいだろうに、男はそれでも何か言っていた。

あなたの耳には、男のそのつぶやきが「どうして、私を見捨てたのですか」と非難する叫びのように聞こえた。距離が離れているのだから、届くはずもないのに確かにそう聞こえたのだ。

何もしなかつたわけではない。そして、今ここで剣を振るって助け出そうとしたところで、どうなるわけでもない。

もはや、どうしようもないのだ。

それでも、見捨てたと言われたならば……そう、あなたは確かに十字架にかけられた男を見捨てたのだろう。

愚かな男だった。弱者に寄り添おうなどとしたばかりに、こうして死んでいこうとしている。権威と伝統に逆らったがために、処刑されることになってしまった。

強ければ、こうはならなかった。合理的であれば、生きて行けた。心情を無視できなかったがために、その男は死んでいく。

そのうち、男はぐったりとして動かなくなつた。そろそろ頃合いであつた。

この日は丁度祭りの日でもあつたので、兵士も見物人たちも、その

意識はこの処刑からそれようとしていたのだ。さっさと終わらせてしまおうと、そう考える者が多くなり――

「やれー！」

磔台の周囲にいた兵士達の隊長が、一言で「死ぬまで待つのも時間の無駄だ、止めを刺せ」と命じた。

指示を受けた兵士が長槍をななめに構えると、見物人たちの中から嘆きとも歓声ともとれるざわめき上がる。

兵士は磔台の下に立つと、長槍を繰り出した。銀色の穂先が男の横腹に半分ほど突き刺さる。槍が引き抜かれ、兵士の手元へと戻ったとき、傷口から噴き出た血が兵士に降りかかった。

磔にされた男の麻の衣が黒々と染まっていく。苦痛に歪むその顔があなたの脳裏に焼き付いた。

見物人たちの間からうめき声が漏れ、しばしの静寂が訪れた。風の音もなく丘の周囲が静まりかえる。

そのとき、明るかった空が急に薄暗くなり始めた。まだ黄昏がやってくるにはあまりにも早い。日が陰るはずが――

「見ろ、太陽が！」

太陽は未だ高い位置にある。それなのに、日の光が弱まっている。夕暮れのように薄暗さが増して行く。

空を見れば、なんと太陽が欠け始めているではないか。

「奇跡だ！」「まさか、神の裁きか!？」

槍が男を刺し貫いた途端に訪れた黄昏に、誰もが驚き恐れ戦いた。叫び声が聞こえる。女の泣き声がやかましい。

偶然、たまたま、槍が男を貫いたのが日蝕の発生する時だった。そういうこともあるだろう。

だが、さらにあり得ないことが続けて発生した。

ああ、こんなことがあつていいのだろうか！

「おい!! 地面が!!」

大地が揺れている。地震が発生したのだ。何度も、何度も暗くなつた世界が揺れ続ける。天は陰り、地はどよめき、人々が泣き叫ぶ。

そして、この死は神話となり――偉大な歴史の崩壊へと繋がつてい

く。

あなたはローマと呼ばれた国に生まれた。

最上級とも上級ともいかないが、決して悪くはない生家。腹を空かすことなく十分な食事を与えてくれ、読み書き計算を身に付けさせてくれる両親に恵まれた。

成長したあなたは、熊のように太い腕と、獅子の咆哮のような大きな声を持つようになり。頭はそこまで良くなかったが、決して悪くもなかった。

少なくとも当時であれば、読み書きと計算、多少は戦術が理解できれば上出来の部類だったのだ。

あなたには野心はそれほどなかったが、馬鹿にされるのは嫌いだった。なめられたくは無かったのだ。生まれた家と能力に応じた、それなりの立場を欲していた。

仮に貧乏で、貧弱者として生まれていたら、あなたはきつと、それ相応の生き方をしていただろう。

あなたがそこそこに良い家に生まれ、恵まれた肉体を持っていたが故に、ローマの歴史は壊れたのかもしれない。

あなたは英雄ではない。あなたは大した人物ではない。だが、あなたが居たことによって、世界史は大きく動いたのだ。それはもう間違いない。

周囲にのせられて腕試しに挑んでしまったのは、そんな性格のせいだろう。

『パンテラ』——剣闘士試合に腕試しと称して乗り込み、ヘラクレスが獅子を殺したようにして、あなたは『豹』を殺した。それから、あなたは周囲から『パンテラ』と呼ばれるようになった。

戦わぬ男に名誉はない。名誉が無ければモテない。

あなたは軍に所属し、見事に旗の持ち手として選ばれた。素手でケダモノを殺した度胸を買われたのだ。

軍において、旗手というのは重要な役目だ。軍勢は、旗を目印にし

て動くのだから。そして、重要な旗は当然敵からも狙われやすい。危険であり、名誉であった。ついでに給料も良いし、なんなら部隊の財政管理だって任されていた。

歴史に名を残すような偉大な英雄ではないが、あなたはエリートではあったのだ。

あるとき、あなたは軍務として赴いたとある土地で一人の女と出会った。

当時、豹は獲物をその甘い吐息でおびき寄せて喰らってしまうと信じられていたそうだが、あなたの女癖の悪さはその腕つぶし以上にその呼び名に相応しかったのだろう。

あなたはその女を、婚約者のいる女を、ちよつとした手間を用いてモノにしてしまったのだ。人はあなたをクズと呼ぶだろう、カスと罵るだろう。

なぜなら、あなたに手を出されたその女は、身籠ってしまったのだから。女が婚約していた大工の男は、神に貞潔を誓っていたと言うのに……。

生涯性行為をしないと神に誓い、後に聖人と呼ばれるようになった大工。その大工が誓いを破っているはずもない。だというのに、大工と婚約していた女が身籠ったとすれば……問題が起きるに決まっている。

紆余曲折を経て、女は大工と結婚した。そして、最初の子に続いて幾人かのその弟と妹を産んだ。

夫は生涯童貞を貫き、それでいて夫婦の間には多くの子があった。つまり、そういうことである。あなたは彼女の夫ではなかったが、恋人ではあったのだ。

その女との間に出来た最初の息子が死んだ。三十を少し過ぎたくらいに年齢で処刑された。

その処刑から10年ほど生きて、あなたもまた死んだ。軍の務め終え、引退した後のことだ。

過去を振り返れば色々あったが、旗を手に駆け抜けていた頃が一番スリルに満ちていた人生だったと思う。

そして、あなたの魂は冥府へと下っていく。凡人の魂は、地の底に下っていくと信じられていたからだ。

こうして、あなたの魂はローマの神話とほぼ重なることになったギリシアの神話の冥府神の管轄下となった。

さて、それからしばらくのときが過ぎると、ローマの軍が『赤い龍の旗』を用いるようになった。その赤い龍の旗は後にウエールズへと伝わり、ウエールズの赤い龍の原型となっていくことになる。

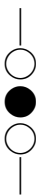
『我が知るなかで、最も大きな力を得た人間よ』

高速で流れる夢が終わると、無限の龍神のものらしき声が聞こえてきた。

『人間の魂のまま、さまざまな悪魔を名乗り、ドライグから力を与えられている者よ』

その無闇色の瞳が視界を埋め尽くす。飲み込まれそうな終わりのない闇が広がっている。

『汝は何になる？ グレートレッドを……』



「リアス！ リアスツ！ 起きなさい！」

『おいッ！ 起きろ兄弟！ 起きろツッ！』

目覚めると声が聞こえてくる。すぐ近くから鼓膜を振るわせて、ぼんやりとした頭の中から魂を通じて。

「ラティアア……？」

目を開くと、ラティアアの顔がすぐ近くにあった。どうやら俺は彼女に抱きしめられているらしい。

「起きたみたいね。頭は大丈夫？」

いきなり罵倒された気分だが、彼女は俺のことをとても心配してくれている。そのことが身体から伝わってくるので、嬉しくなってくるくらいだ。罵倒されて嬉しいとは、これはちよつとマズイような気がするが。

『よお兄弟。目が覚めたようだな』

ドライグの声も聞こえてくる。

ふむ、ラティアにも聞こえるように音も出しているようだ。

「あれ？ ここは、どこだ……？」

ここは何処？ 俺はリヴラクス・グレモリー。

いつの間やら禁手化していたらしく、身体の中にさまざまな力が渦巻いていた。魔力だけでも、グレモリー、バアル、フェニックス、アスタロト、アガレス、ベルフェゴール……さまざまな冒流的な力が駆け巡っているのを感じる。

記憶が混乱している。どうにも前後関係が分からない。

周囲を見渡すと、なんとというか全く見慣れない光景が広がっていた。ラティアの目ばつか見てないで、さつきと周りを見なきやいけなかったな。

「ここ、次元の狭間か……？」

「ええ、そうよ」

「ああ、そうか……たしか、世界を創りに来て……」

ふむ、そうそう。俺はラティアと一緒に例の加速術式用の世界を創りに来たんだ。この『次元の狭間』に。

『オーフィスと会ったことは覚えているか？』

「ああ、だんだんと思いだして来た」

今日の朝からの出来事を思い出していく代わりに、さつきまで見ていた『夢』の記憶が急速に薄れていく。なにか大事なことだったような気がするのだが……もう思い出せん。

そうだ、そうだ。

今朝は早起きして、レイヴェルに裸エプロンしてもらったんだ。で、その後にラティアと合流して……。

モーニングは裸エプロンですわ！

「レイヴェルが食べたい」

グレモリーのお城、その中にあるリヴラクス・グレモリーさまの後宮。私の部屋のベッドの上。

通過儀礼の遺跡に行った日の翌日、昨晚もたくさん可愛がってくださった旦那さまがそう仰いました。

「たくさん召し上がったでしょうに、急にどうされたのですか？」

私は今日から学校。その前に私をもっと食べたいだなんて、嬉しい。

思わず胸板に頬を寄せてしまいますわ。初めての日より、どんどんと遅くなっていくお身体。うっとりとしてしまいますわ。

「違った。レイヴェルの作った朝食が食べたい。無性に」

ええ、この少し甘えたような口調が嬉しいのです。

既に使用人たちは食事の準備を進めているのでしようけれど、予定を急に変更しても食材が無駄になることはありません。使用人たちが美味しくいただくだけですわ。

「はい、ではそのように致しますね」

旦那さまに私の料理を食べたいと言われては、張り切るしかありません。

去年の今頃は淑女の嗜みとして学んでいただけの料理でしたが、こうして求めてくださり、喜んでいただけると思うと……胸がキュンとなります。

「それとな……」

ふわりと抱きしめられ、蕩けるような声が耳から入ってきます。囁かれた言葉の内容を考えると……頭がポーツとしてしまいそうですの。

「え、あ……わ、わかりましたわ。少し、お待ちくださいませ」

食事だけでは満足できないなんて……その欲張りなところ、素敵ですわ。

婚約の日以来、この方は私を優しく、激しく、ときに意地悪く可愛がってくださいます。

今朝も……そう。私の身体も……心も……幸せで満たしてくださいますね。いやらしい気持ちと、喜びがこみ上げて来て……ああ♡
「それでは、用意しますね」

「ああ、楽しみにしている」

着替え終えた私は、後宮内に用意されたキッチンに立つております。ここの設備を見に行った先で、ラティアさまと顔を合わせたこともありましたわね。

見られておりますわ……。私のお尻に座って待つ旦那さまの視線がジツと注がれていますの。

裸の上にエプロン一枚……。エプロンは身体の前側を隠してくれませんが、後ろはほとんど見えてしまっています。

調理を進めながらときどき後ろを振り返ってしまうのですが、旦那さまは椅子に座ってこちらを見ているばかり。

いついらしてくださいさるのだろうと、そればかりが気になってしまい簡単な工程がなかなか上手く行きません。

視線を気にしていると、だんだん身体が熱くなってきましたわ。気温が高いわけでもないのに、汗の粒が肌にじわじわと浮き上がってしまいます。

「んっ……♡」

エプロンに乳首が擦れて……。このあとのこと考えてしまうと、もうツンと尖ってしまつて……。

着替えているときから、湿り始めていた箇所からおつゆが垂れて……。

気付いていらつしやるはずなのに、どうしてまだ来て下さらないのかしら。

「だんなさまあ……♡」

思わず振り返りながらお尻をゆらゆらと揺すつてしまいます。はしたない真似をしていると分かっていますが、もうお腹の奥がきゅんきゅんとしてしまつていきますの。

「……ああん、いじわるしないでくださいまし」

手元を見れば、焼け具合が危険ですわ。焦がさないようにしないと……。

「ひやつ……あつ♡ いまは、いまはダメですわ」

旦那さまの手のひらが、お尻とお腹を軽く優しくさすって、揉んで……♡

こうして手で悪戯されるのは心地好くて大好きなのですが、今は……これをされると料理が出来なくなってしまうすわ。

「あ、そこ……おなか……は……あ♡」

私のお腹は、旦那さまに開発されてしまってそつと撫でられるだけですぐに気持ち良くなってしまうすの。

「ああつ、そんな……とん、とんってされたらあ……♡」

女の穴の一番奥から子宮に挿入していただいた『女王』の駒が、反応してしまっているのでしょうか。もう、そこにオーラを感じるだけで……大事な場所からじわじわつてえ。

「ふああつ♡」

いけませんわ、いけませんわ。いきそうになってしまいましたわ。

私が必死に耐えていると、旦那さまの指が胸に……、クリに……、ああ、こんな、もうツンツンしちゃっていますのに、キュツて摘ままれたらあ。

「はあつうう……♡」

かるーく、あまーく、心地よい痺れが身体中を駆け巡るような心地。

「あーあ、焦げちやつたなあ……」

ふと、気が付けば目玉焼きは焦げ焦げの失敗作になってしまいましたわ。

「申し訳ありません……。こんな簡単なことで失敗してしまった、ダメな『女王』にお仕置きしてくださいまし」

火を止めてジツと旦那さまを見詰めていると、その口元がイジワルに歪みます。

「お仕置きされたくてわざと失敗したんじゃないだろうな？」

「あああつ、そんなことお……♡」

お尻を両手で掴まれ、足の間にも旦那さまのモノがするりと入り込んできました。

——ずりゆ……じゅりゆ……。ぐち、ぶちゅうツ……くちゆる……。

まだ入れてはもらえず、入り口とお豆をこすられて……。ああっ♡ いやらしい音が股の間から響いてくるようです。

硬く精力に満ちたペニスの感触とそこに滾るオーラが、旦那さまの興奮の度合いを伝えて来ているのに——

「あんっ♡ 旦那さまあ……。♡ しました、わざと焦がしました。だから、はやく、んあ、はやくう……。♡ くださいまし♡」

いつも、こうして私の方から求めさせようとなさるのですから……。旦那さまのこういうところ、もう、本当に、可愛い。

「まったく、こんなに欲しがつてるところに挿れたんじや、全然お仕置きにならないなあ」

可愛いなんて思ってしまったのがバレてしまったのでしょうか。膣の入口に先つちよだけ入った旦那さまが、そのことを咎めるように浅いところで暴れまわります。

「こんな、こんな風にされてしまったら、すぐに……。♡ おちんちん、奥まで、一番奥までハメ込んで欲しく……。♡」

「ひゃっああっ♡ あっ、んんっ、ふうううん……。♡ おく、もっと、おくまで……。♡ え」

「ハハッ、可愛いのはレイヴェルの方だな」

背中、翼のところ、舐められて。耳に息が……。頭が蕩けそうですわ。「あ……。♡ きゆうん♡」

あ……。♡ はいって♡ 奥まで、入れてもらえるのですね。私の、『王』さまの、熱くて硬いおちんちん。

そう思ったら、エプロンに擦れてる乳首が……。もう限界まで尖ったはずなのに、もっと腫れあがって……。♡

沸騰した鍋みたいに愛液をこぼしてしまっている膣内が、ぐらぐらって泡立って。

ず、ずずず……つって、ゆつくり形を教え込むみたいに、ゆつくりと私の中に埋まっていく存在感。

ああ、もう、こうなってしまうたら、これ以外のことが何も考えられなくなってしまうの♡

おちんちんの広がったところから、ヒダの一枚一枚が悦んでしまいますわ。だらしなく、いやらしく、アソコから汁が垂れて、太ももを伝って、床に落ちて……。

「んああ……っ♡ あう……ううん♡ 旦那さまあ、旦那さまの、あ♡

奥まできて、熱いつの♡」

「ああ、レイヴェルの中も熱いぞ。お前のこの燃えるような熱さがない。溶けそうだ」

入口から、子宮まで、みっちり私を気持ち良くするための形で埋め尽くされて、快感の波がそこから広がって……。

ああ、リヴラクスさま、リアスさま、旦那さま、『王』さま、ご主人さま。私は、この方の婚約者で、将来の妻で、『女王』で……下僕^{オソナ}。

擦られなくても、こうして埋め尽くしていただくだけで気持ちよくて、とつても。これだけで、中だけでなく、身体中がきゆうんつてなってしまうすわ。

「あ……はっ♡ あ……っ、あああア……ツツ♡♡」

「もしかして、もうイッてる?」

「ふあい……♡ あふう……っ、旦那さまにこうしていただくと、すぐに……んっはあっ♡」

私は旦那さまのもの。ですから、旦那さまは私をどうするのも自由自在。好きなときに、好きなだけ、好きなように……。

なかなかイかせてもらえず、一気にとても強い快感で意識を飛ばされてしまうときもあれば、こうしてゆるりとした悦楽をくださるときもあります。

昨晩は、ふわりと甘い絶頂を延々と味わい続けたので……それがまだ身体に残っていて、あう♡ こんな風に簡単に……何回も続けてえ♡

「いいな、やっぱりレイヴェルの中は最高だ。ずっとこうしていたく

なる」

「ふあああああつ♡ あつ、ああつ♡ あふあつ♡」

ぶちゅつ、ずちゅつとおちんちんが出入りするたびに、掻き出されたおつゆが恥ずかしい音を立てて吹き出していますわ。

「ここもこんなにして……、裸エプロンって言ったらこれだよな。バックから突きまくりながら、胸をこうして」

旦那さまの手が、おっぱいをぐにぐにっつて、あつ♡ 乳首、キュツて苛められたら♡

「昨日からあれだけやったのに、レイヴェルのメス穴はまだまだ欲しがってるみたいだな」

「あんっ♡ だって、こんあ、恥ずかしい格好して……、そんなの、こうなるに決まっていますわ……あ♡」

裸の上からエプロン一枚だけ着けて料理してみせるなんて、旦那さまの以外、誰にも見せられない恥ずかしい姿ですもの。そんな格好をするのだと思ったら、着替える前からおちんちん欲しくなってしまうわ。ずっと、焦らされているような気分でしたのに、それが、ようやく。

欲しい、欲しい。身体に必要なものが足りていない。そんな感覚が、こうして空いたところにハマていただくことで満たされて……幸せですわ♡ ああ、本当に、もう。

「あつ、あは……っ♡ うあ……あ——っ♡ はあああん♡♡!」
さっきのアクメ、まだ続いてたのに、また重ねてイってしまいましたわ。

官能の波が重なりあって、身体の中で響き合っているみたいですよ。女の悦びで頭のなか、いっぱいになって……あつ、これ降りて来られなくなる♡

「おつ、イキっぱなしになってるな」

「はひい♡ ああつ、すごいですわ♡ また、んあつ♡ すご、あふう♡ やああん……こんな、このありよ、がっこ、ですのに……い♡」

髪の毛の根元が、毛穴が全部開いているみたい。全身に甘い感触が、ヴァギナはもうぐつぐつと煮え滾っていて、気持ち良すぎて、声がど

んどんおつきくなっちゃ……う。

「そうだ、学校休んじやえよ。な、そうしよう？　そうしたら、午前中いっぱいシてられるぞ？」

「あうう、ダメっ、ダメですわっ♡　がっこ、いきます。いかないと……ダメになってしまいますわああ♡♡」

「旦那さまと早く結婚するために、飛び級したいのにこんなもの♡　あひっ、あ、また、ん♡」

「そんなこと言って、レイヴェルの腰はもつともつとっておねだりしてるぞ」

「あああッ……♡♡」

腰がクイクイと動いてしまいます。エッチなおねだり止められませんか。

「ずるいですわ、ずるいですわ♡　旦那さまに、こうされたら、わたしっ、わたしい……♡♡」

逆らえなくなってしまうわ。

二十年が、二十日間……私がない間に、他の女と、何年も……んあっ♡　でも、結婚、一番に……。

「ほら、な、いいだろ？　今日だけじゃなくて、今月いっぱい休んじやってさ、一緒に過ごそう？　な？」

「ああん、だめえ、だめですわあ♡」

いつつも、旦那さまに、これを、されると、負けちゃう。勝てなくて、言うこと聞いてしまいますのお♡

んんう、でも、でも、でもでももお……そう言ったださるの、嬉しいっ！　嬉しいッ！　嬉しいですわあッ♡!!

「んおッ！……レイヴェル、そろそろ」

ああ、おちんちんがドクドク脈打ってるう……♡

私を支配する『王』さまが、おつきくなってる。擦れて、溶けあつて、ひとつになってるみたいでえ。

イクっぱなしの身体に、頭の中に、心に、もうすぐ来る快感への期待が走り回って、もっと気持ちよくッ♡

「ああっ、出して、出してくださいませっ！　かけて、たくさん、奥に、

赤ちゃんの部屋、いっぱいいい♡ 旦那さまの、たくさん……ください
いましいい♡♡!」

ひゃあつ、つんあつ、来るううつ♡ 来ちやう、精液、ザーメン、中
にい♡ あつあつ、駆け上って来てるの分かりますわ。

あつ、もう、もう……くる、くる、くるくるくる——……!

「んっ——」

あつ——きた……♡

「ああううつつあああ……♡♡♡ ふっあツ♡ ああああああ
ああツ♡♡♡」

どぴゅつ、ぐぶぶつ……!! ぶぴゆりゆりゆつ……っ! って、お
腹の中で爆せてますわ。旦那さまの、白いドロドロしたの、跳ね回っ
てますの♡

ああ温かい♡ 熱い♡ 愛しい♡ 愛おしい♡

んあつ、これえ、これえ……。これですわあ、これをいただくと、わ
たし、いろいろなものを簡単に流されてしまっ……♡

「出されながら、ここ撫でられるの好きだよな」

「ひゃあつう~~~~♡♡♡」

中出しされながら、お腹も一緒に優しくされちやうと……幸せ過ぎ
て、何も考えられなくなっ……てしまいます。もう、イツてることしか
……分からない。

バカになりゆ、気持ち良すぎてバカになってしまいますわあ♡

放出が止まっても、旦那さまは私を掴んだまま離れようとはされま
せん。

優しく首からお尻までを撫でてくださいったり、あちこちにキスをし
てくださいったり。

子種を受け入れた歓びのなか、こうして労わるような後戯れをして
いただくと……ああ、もう、とろんと心が蕩けてウツトリとして——
「ふっあん♡ ひいん♡ あつ、ああツ♡ だんあしやま……いまは、
まだッ、ああっ♡♡」

余韻のなかでウツトリといていたのに、また、それも、こんな、激

しくなんて……え♡

「イツてますのお♡ まだ、まだあ、やめっ、行けなくなっちゃいますわあ♡」

「イケないのは大変だ。頑張ってイカせまくってやらないとなあッ！」

「んんっ、ちがつ、違いますのっ♡ 時間、このまま、つづけ、がつこ、まにあわな……ああああ♡」

「学校よりこっちのほうが好きだろ!？」

「ああんッ♡ 好き、好きですけどお♡ あっ、やめっ、んあッ♡ 堪忍してくださいませいい♡♡」

あっ、また、またイツちゃ……あっ、あああああッ♡♡♡

と、夢中になっている間に、目玉焼きは炭のようになっておりました。

それでも、旦那さまは「こういうのがいいんだよ」と食べてくださいましたけれども……。えっちに耽って失敗した料理が好みだなんて、仕方のないヒトですわ。

こういった物が良いのでしたら、また作って差し上げたいですわね♡

「で、結局学校に行っちゃうのか」

「さすがに、初日は……ご理解くださいまし。冬休み中のことで、いろいろと活動もしなくてはいけませんので」

ううう、なんとか新学期初日の登校は勝ち取りましたが、負けてしまいたくて仕方がない自分が居ることを認めるしかありませんわ。

ああ、ですけど……結婚早くしたいですし……。でも、他の女と何年も差がついて……あああああっ！

決めたのに、決めておりましたのに、旦那さまは、私の『王』さまは、もう、もう、もうっ！ いつも、こういったギリギリになってから、わがままを仰るのですから♡

「まあ、いろいろあったから学校で聞かれるか」

「ええ、勉強というよりも社交の場ですからね」

私の通う首都の名門学校は、勉学の間というよりも同世代の方々や

教師陣とのコネクション作りがメインの場所です。

「いつも、すまないな」

「いいえ、あなたの『女王』にお任せくださいまし」

学校の制服に着替えた私を、旦那さまは名残惜しそうな瞳で見送って下さっています。

ただ、その愛しい旦那さまのお姿に気になる点がひとつ。

「これか？」

「はい、昨日までは着けていらっしやいませんでしたよね？」

何やら見慣れないアクセサリを首にかけていらっしやいます。これまでに見かけたことの無いシンプルなデザインの首飾りなのですが……不思議とどこかで見たような気も致しますわね。

「レイヴェル」

そう仰ると、旦那さまは亜空間の収納から何やら取り出されました。

何でしょうかと見れば、それは旦那さまの着けていらっしやるものと同じデザインのペンダントで、それを私の首に……。

「くださるのですか？」

かけて頂いたペンダントのトップからは、旦那さまのオーラが感じられます。

「禁手のときの宝玉なんだが、外したあとに解除しても残るようだったから加工させてみたんだ。大きさは俺の意思で変えられるみたいだな」

どこかで見た覚えのある色合いのだとは思いましたが、これはあの宝玉だったようです。

うふふ、お揃いだなんて……嬉しい！

もっとお話していたいのですが、ちよつと……いえ、かなりお休みしてしまいたくなってしまうかもしれません……、もう出かけないとダメですわね。

「では、行ってまいりますー！」

ああ、ちよつと、こう、背中から火の粉が飛んでしまいますの！

護衛の方々は火傷しないようにお気を付けくださいまし！



どうやらオフィスにナニカされたらしく、どうにも今日の記憶がぼんやりとしてしまっている。

起きたところから思い出そうとすると、うん。

朝は早起きしてこんな感じでレイヴェルを見送って——それから。

ああ、そうだ。

昼前にラティアが来て、それでローゼンクロイツも交えてフィールド創りの打ち合わせをしたんだった。

なんだかもう半分くらい忘れそうになっていたが、一応、名目としてはローゼンクロイツの子供の治療用に時間制御フィールドを創るって話だったんだよな。

おお、だんだんと思い出して来た。

いや、しかし、ローゼンクロイツも思い切ったことをしたものだ。

嫁さんを転生させる分の駒を確保できるように、眷属をトレードしたらどうかって勧めていたんだが……まさか、全員放出するとはなあ。思い切りのいいやつだ。

『王の駒』ではなくて、アドバンスト・クラウンなしの『王』をトップとして七位まで行ったローゼンクロイツの眷属は冥界の最精鋭の一角と言っても過言ではない。

それを、ミリキヤスが全員引き受けるとかさあ……。もうこれ、うちの甥っ子がレーティングゲームデビューしたら速攻で駆け上がっていくこと間違いなしだろ。

というか俺が眷属集めの許可もらったのは去年のことだと言うのに、ミリキヤスくん、早すぎない……？

って俺が勧めたんだけど。

旧政府の残党に墮天使、どちらの勢力からも兄上と義姉上の子供で

あるミリキヤスは狙われる可能性がある。

そこにレーティングゲームのこととは言え、魔王クラスとも呼ばれるトップ10内のランカーを相手にして、勝ち星を上げることもある。あったローゼンクロイツ眷属ってのは丁度良かったんだろうな。

なかなかこの強さの護衛はいないだろうし。

神龍

名前というのは重要なものだ。

名を呼ばれるとヒトは反応する。呼ばれたと考える。

人間の言い回しに『噂をすると影がさす』『名を呼べば現れる』などといった言葉があるが、これは我々幻想の存在においてはより大きな意味を持つ。

悪魔を召喚する術などでも名前というのは重要であるし、人間が神々の力を借り受ける術を行使する際にもその神名を唱えることは多い。

神の名をみだりに唱えることは神を呼びつけることに、悪魔の名を唱えることは悪魔を召喚することに繋がる。とある有名な物語で「名前を呼んではいけない」などと呼ばれている人物は、まあ、悪魔扱いされているということなのだろう。

『聖書の神話』において天界^{天国}や冥界^{地獄}、煉獄や辺獄を創ったのは『聖書の神』であるとされている。これは教会連中も信じているところだろう。

だが、人間界はそうではない。神話的には人間界も『聖書の神』の創造物になるのだが、なにぶん『聖書の神』以前から存在していた者が結構な数いることが分かっている。

そのため、裏の世界に通じている者ならば教会連中だつてこれについては認めるしかないことなのだ。『聖書の神』は地球を創ってはいない、と。

教義的にはともかくとして、実際のところ天地創造はなされていないので『創世記』は最初っから大嘘つてことになる。それについては、信徒連中なりに折り合いを付けてやっているのだろう。

まあ、天国も地獄も人間の想像物なのだろうから、どこの神話の神々も最初の創造主ではないのだろうけれど。

『聖書の神』が最初の者ではないことは確定として——では、世界で最初の人外異形の超常存在は誰か？ そう聞くとまず上がってくる名前がある。

『無限の龍神』オーフィス。
ウロボロス・ドラゴン

普段は人間の老人のような姿をしていると聞くが、その真の姿は漆黒の蛇龍であるという世界最古の龍にして神だ。

オーフィス神を象徴する図案は、自らの尾を食む蛇。

そのため、かの龍神は、初め頭と尾が一体となったアルファ初めにしてオメガ終わりにする者とも言われている。

『無』より生れた『無限』とも呼ばれるこの龍神の影響は、世界各地の神話に見られ、多くの神話における原初の神、あるいは混沌カオスなど同一視されることもある。「無」を構成する無限の正と無限の負から生まれた者。随分と概念的だが、原初神なんてそんなものなのかもしれない。

夜や太陽、日が沈み日が昇る繰り返し、冬が来て春が来る季節の巡り、あるいは生まれて産んで死んでいく生と死のサイクル。そしてその巡りの最初はいつからなのか、終わりはあるのか、ないのか。そういったものへの想いがオーフィス神を形作ったのかもしれない。

現代人の知識からすれば、夜と朝も、春から冬までの季節も、地球の回転が関係していると分かるのだが、オーフィス神の象徴は尾を食む蛇。つまり円環である。

地球の自転と公転によって生じている夜と昼、春から冬の変化。古の人たちがそれらを地球の回転運動から来していると理解していたとしたら……なかなか面白いのかもしれない。

まあ、シヴァ神とかマハーカールはブラックホールの神格化なんて説もあるくらいだからな。インドの神話にはミサイルっぽいものも出てくると言うし、もしかしたら一万二千年くらい前に現代並かそれより進んだ科学力を持った知的生命体が地球に存在していて、その古代知的生命体の記録が残されていて……そこから新たな神話が出来たという可能性もなくはない。

悪魔が現にいる以上、アトランティスだのムーだのつて話もあり得

なくはない。それがこの世界の現実だ。

転生も実際にあつたしな……俺の前々世は一億二千万年前、外なる宇宙から飛来した超機械生命体群と死闘を繰り広げたアトランティスの超戦士だったのだ！

異次元よりやってきた超機械軍団との戦闘は熾烈を極めた！その当時の文明が、生命がほとんど失われてしまうほどの死闘だった！だが、勝った！勝ったのだ！我々はこの地球を守り通したのだ！

前世で一時期そんな設定のお話が流行ったことがあつたような、なかったような。まあ、いくつかの神話では文明が何度か滅んでいるとされているようだから、本当にそれっぽいことがあつた可能性もなくはない。

自転と言えば案外何処かに居るとされながらも見つかつていない『666』は月の裏側にでもいるのかもしれないな。

というのも、地球に季節があるのは地軸が太陽に対して傾いているからなのだが、その原因として「ジャイアント・インパクト説」というものがある。

簡単に言えば、大昔の原始地球に他の巨大天体が衝突して砕け、その破片が現在の月になったという説だ。そのときの衝撃で地球が傾いたとかそんな話。なんなら、これがあつたから生命が誕生したなんて説まである。

で、そこからどうして「666」が出てくるのかと言えば、この地球の自転軸の傾きがだいたい23.4°だからだ。垂直だった場合の90°から23.4°を引き算すると……って話。

思考を妄想の寄り道から戻すとして、『無限の龍神』がいつから存在していたのか、それを知る者は居ないとされている。古い魔王さま方ですら子ども扱いしていたという古い神話の神々ですら、気が付いたときにはオーフィス神が居たらしい。

だから、オーフィス神はこの世界の始まりから存在する者なんて呼ばれ方もしている。

この現在確認されている中で最古の異形が人間界、いや地球の歴史

のいつ頃から存在していたのか、それはまったくの不明だ。

人類の祖先が知恵を得た瞬間に生まれたのかもしれないし、もしかしたら人間以前にいた知的生命体の心から出てきたのかもしれない。もしかしたら、植物や動物の心からなのかもしれない。

オーフィス神自身、自分がいつごろから居たのかも分かっていないとも聞く。

というのもこのオーフィス神のだが、人間界ではなく次元の狭間にずっと暮らしていたらしいのだ。

『次元の狭間』

そこは人間界と冥界、人間界と天界の間にある次元の壁とも呼ばれる場所。根幹である人間界と様々な神話・伝説の異界とを分け隔てる境界領域。次元の狭間は何も無い「無の世界」と言われている。

そんなところにずっといて、地球上の事象にも人間の生活にも興味が無かったのなら、それはまあ、何時頃から自身が存在していたのかも分からなくなるってものだ。

まあ、そのオーフィス神も今は次元の狭間を出ているそうだが。後から現れた自分よりも強い存在に、次元の狭間の支配権を奪われてしまったそう。住処を追われた無限の龍神は今は何処にいるのやら。

「リアス？」

とまあ、俺が「次元の狭間」なんて場所や、そこから生まれたと言うオーフィス神のことを考えていたのには理由がある。

本日、ラティアと一緒にその次元の狭間にお出かけするからだ。何をしに行くのかと言えば、ちよつと「世界」を創って来るのである。

例のラティア用のお城代わりにする北海道ぐらいの面積の異空間創りだ。

レーティングゲームでよく使われる戦闘用フィールドと製作過程はほぼ同じで、術式にちよいと魔力とイメージを通すだけの簡単なお仕事である。

「ん、少し次元の狭間について考えていた。あと、オーフィス神とか」そんなわけで、現在はラティアと並んでソファに座り、テレビを見ているところだ。フィールド製作者の準備を待っているところだ

な。冥界に繋ぐフィールドを創るには、冥界の夜の時間が良いのだそうだとも聞いているので数時間待ちになる。

ローゼンクロイツも交えた設計の打ち合わせ最終確認は終わった。あの男はもう必要ない。転生悪魔になった嫁さんに次の子でも仕込んでろ。

ちなみにここは後宮ではない。あつちでラティアと二人きりになったら、すぐに押し倒しちゃうからね。俺は我慢強い男なので、もうすぐオツケーになる美少女を目の前に置かれて、お預けとか辛抱たまらないのだ。ヤツてオツケーな場所だったら耐えられない。

いいじゃん、数日ぐらい前倒しで押し倒しても！ となつてしまふ。

だいたい、くっついてくるラティアが悪い。腕に、むにと来てるんだよ感触が。誘つてんだろ、オラア！ ……まあ、ラティアはそういう気持ちではなさそうってことが分かるのがツライね。

そんな彼女は前と同じ香水を付けていた。この匂い、本人には言わないがちよつと喉飴っぽい。冷たく硬く喉や鼻がスーツとする感じ。荒ぶる股間がちよつと落ち着く。

ま、初めてのラティアには酷いこと出来ないか。

「そう、グレートレッドが出ないといいわね」

いつのころからかオフィス神に代わつて次元の狭間に住み着いたのがグレートレッドだ。

「進路予想は一応出来るんだよな」

「気まぐれで転移しなければ、五割くらいの精度で予測できるそうよ」「それ、よく分からんって言わないか？」

このグレートレッド、特に何をするわけでもなく次元の狭間を漂い続けている。そして、ごくまれに人間界や冥界、その他の異界に顔を出すことがある。レーティングゲームの戦闘フィールドにいきなり現れたなんて話もあるくらいだ。全盛期の二天龍から見てさえ圧倒的に強い存在なので、他者のことなど何も考えてはいないのだろう。

我々悪魔など、グレートレッドから見たら車の運転手にとっての道端の蟻のようなものだ。気にする対象ではない。

「次元の狭間には何も無いもの」

風も気温も、エサも、目標物らしきものもない場所を泳いでいる龍の進路を予測しなさい。なお、その龍は気分次第で進行方向を曲げると、ときどき空間転移だってします。

うん、そう考えると五割も当たるなら大したものだ。

「グレートレッドって何考えて生きてるんだろうな」

それなりの知能があることは確認されているが、対話はあまりした者がいないそう。機嫌を損ねると「ガンつけやがって……コツローツス！」ってされるそうで……気が短いのかな。強すぎてどうにもならない上にどこに地雷があるのかも分からなくて、さらに短気と来たらしりやなかなか話しかけ辛いよな。味方に付けたい勢力はごまんとあれど、敵に回してしまいうリスクを考えたらね。

ラティアさんは、どうして冷えた瞳で俺を見詰めてくるんですね。

好きだから？ 俺も好きだよ。

グレートレッド。少なくとも俺みたいに「セック〇、セツ〇ス」とは考えてはいまい。

「楽しいのかね、それだけで」

「ドラゴンの気持ちなんて、わたくしに分かるわけがないでしょう？」
なんとなく、グレートレッドには「神」と付ける気にならない。不思議なものだ。語呂の関係だろうか。というか、偉大な赤グレートレッドって名前じゃないよな。称号って感じがする。

この本名不明なグレートレッドさんは、『赤龍神帝』だの『D・オドラゴンブ・D』だのと呼ばれる最強の龍だ。『夢幻』を司るといふこの龍が現在の次元の狭間の支配者だ。

太古の昔から次元の狭間に居たオーフィス神は、グレートレッドに住処を奪われて何処かに去って行ったそう。

「乗騎にドラゴンを飼ってるだろうに」

「そういえばそうね。それに……ここにもドラゴンがいたわ」

ラティアはテレビに向けていた視線をこちらに向けてくる。横目

で見つめてくる切れ長の瞳はいつものクールさなのだが、それがかえって流し目のようで——乗騎のドラゴンに跨るくらいなら、俺の股間のドラゴンに跨ろうよって言いたくなるね。

なんだかんだ、エツチの気分ではなくても、向こうもドキドキとはしているようだしな。ふむ……時計を見ると、予定までもう少し時間がある。

膝枕してもらおうことにしよう。そうしよう。俺にはラテイアの太ももの感触を頭で味わう権利がある。ご主人様だからな。下僕『騎士』のラテイアには俺に太ももの感触を提供する義務がある。

「仕方のない『王』さまね」

ラテイアの声音は硬いが、膝枕は柔らかい。そして、どちらも心地よい。本日のラテイアは珍しいことに短パンを装備している。こう裾のところが太ももの半ばでキュツと締まった形のヤツ。なんて名前なのかは、よくわからない。俺はファッションに詳しくないんだ。

でもって、その短いズボンとオーバーニーなソックスを組み合わせているのだ。——そう、あるのだ！ あるんだよ、絶対領域が、今日のラテイアには！

後頭部もいいが、グルんと身体ごと回って、その絶対領域に鼻を突っ込むことすら可能なのだ。

どうしようか、やってみたいな。たぶん、怒られないと思う。いや、むしろ好感度がアップする可能性も……？

ラテイアは俺の『騎士』である。眷属である。下僕である。下僕とのスキンシップは重要事項。

よし！

着衣とはいいものだ。その隙間に存在するこの僅かな領域に顔を埋める至福。全裸の方が接地面積は大きいけど、これはなんとも、こう、隠されているからこそそのありがたさがあるものだ。水着グラビアよりも下着チラリズムに反応してしまうようなものかもしれない。

「そんなことをして楽しいのかしら？」

「楽しい」

頭上から振って来る声音には冷たさがあるが、彼女の手は俺の頭を

撫でている。髪を触れられるのはくっすぐった気持ちいい。

あーこの、エロまではいかないが、相当親しくならないと許されな
いだらうことをしている感覚は堪らないものがある。俺は甘えたい
男だからな。

「そう、たまにはこういうった服も着てみるものね」

思うにラティアの服装の趣味は、アスタロト卿の影響をかなり受け
ているような気がする。結構派手で、スカートに深めのスリット入っ
てたり、胸元が大胆だったりする感じのときが割とよくある。

正直それはそれで眼福ではあるのだが、今日は上はキリツと締めた
感じで脚のラインを強調する方向性だ。

どうしたんだろうかと気にはなるが、まあ、どうでもいいか。今は
この、膝上の感触と頭などで堪能したい。

気分は猫モードの黒歌である。ゴロゴロ。

おっさんがやると気色悪いかもかもしれないが、今の俺なら許される。
美少年は何をしたって絵になるのだ。

数時間後、転移魔方陣でジャンプした俺は「次元の狭間」にいた。

周囲には「無限」を生んだ「無」が満ちている。力の無い者がこの
次元の狭間に準備もなく落ちると、「無」に溶けて消えてしまうそう
だ。

様々な者や物が溶け込んでいるはずなのに、「無」とはどういうこと
なのか。「無限」の「無」で満ちた混沌空間、それが「次元の狭間」。俺
の浅い知識で考えるとここでは、ここはいわゆる集合的無意識とい
うヤツなのではないだろうか。

物質世界である「人間界」が中心に存在し、人間たちの形にならな
い精神世界でもいうべき「無限」の故郷であり「夢幻」の住処でも
ある「次元の狭間」が人間界を覆うように存在している。

平面的に考えると、人間界は大きな大地で、次元の狭間はその周
りを囲む人の心の海だ。その海の中に浮かぶ島々が、俺たちの暮らす冥
界であり、神と天使たち天界であり、文化・宗教・神話圏ごとの異界

なのだろう。

あるいは人間界を地球、次元の狭間を宇宙、神話圏ごとの異界を星々と考えてもいい。

「怖いかな？」

「手、繋いでいるから」

俺の隣には手をつないだらティアがいる。

ラティアは表情のいつものようにツンとしているが、身体の方は近頃よくするようにピタリとよせてくる。

空気も何もないはずの「無」の空間、「次元の狭間」でも匂いはするらしい。不思議だが、視覚も聴覚もキチンと働いているので、そういうものなのだろうと考えるしかない。

もちろん隣の美少女の感触も伝わってくる。つないだ手にかかる力が少し強い。そしてちよつと震えている。安心させるように、こちらからも強く握り返した。

「まさか本当にいるとは思わなかったな」

「予測はあてにならないわね」

我が麗しの『騎士』がブルってしまったているのは、次元の狭間の光景が原因ではない。

いるのだ。いたのだ。ここの主が。

「なあ、ドライグ」

「なんだ？」

『籠手の計測機能がエラー出してるんだが……』

俺の魂に繋がっている神器。『赤龍帝の籠手』には相手の強さを計測することが出来る能力がある。どれぐらいの力を籠めれば対象を打倒できるのかを教えてくれる便利な機能だ。

今、その機能がエラーを吐き出している。対象は、グレートレッド。この世でもっとも強いヤツは、神器では計り知れない強さつてことか。ドラグ・ソボールの強さ判定機みたいに「ボンッ！」てならなくて良かった。

『「倍加」して勝てるのなら、昔の俺が倒している。……歯牙にもかけられなかったがな』

ドライグはアレに挑もうと考えたことがあつたらしい。ドライグは、喧嘩大好き番長ドラゴンだしな。最強の龍に挑みたくなることもそりゃあつただろう。

「俺たちのことは気にもしていないようだ」

グレートレッドさんからすると、俺程度はどうでもいい存在らしい。助かる。姿を目にした瞬間、禁手化しなくなったが、刺激するとヤバいらしいので控えて正解だったのだろうか。いや、この力の差を考えると、どちらでも同じだったかもしれない。

なんにしても、もしもこつちに向かつて来ていたら緊急離脱しないといけないところだった。

「離れていくみたいね」

俺とラティア、おまけのドライグが息をひそめて見守る中、グレートレッドさんは気ままに次元の狭間を泳いでいた。

そのぶつとい尻尾がだんだんと遠ざかっていく。

「何の気まぐれでここにいたんだ」

「ドラゴンの気持ちは、ドラゴンに聞いてみたら？」

ラティアは視線を赤い籠手に向けた。

『俺に聞かれてもな。分からんと言えんよ』

しばらくすると、グレートレッドが完全に見えなくなった。ふうー、ビビらせやがって。

正直、ラティアが隣にいなかったら「ひえっ」と速攻で逃げ出していたところだ。女の子の前だから、ちよつと格好つけたくて見栄を張ってしまったじゃないか。いやまあ、俺もお貴族様なので家臣やらが居ても虚勢は張ってただろうけどな。

いやはや、それにしてもビビった。次元の狭間なんて、無尽無辺とまで言われる広大な場所だぞ。それがなんで、俺の出てきた場所にジャストなタイミングでグレートレッドさんがいるんだよって話だ。困りますよ、ホント。

と、一安心したところで——背後から聞き覚えのない声が。

「ドライグ、久しい」

ひえっ。

『今度はオーフェイスかッ!』

ドライグからの警告なしで、間近に莫大な龍のオーラを感じてしまい、思わず変な声が出そうになってしまった。敵意が無いとかそういうものではなく、これドライグも完全に気付いていなかったぞ。俺やラティアならともかくだ。

「その魂、どこかで——」

慌てて振り向くと、そこには黒髪の少女の姿をしたモノがいた。

俺の両の頬を彼女の小さな手が抑えた。有無を言わさぬ強大な力で頭を掴まれ、身動きが出来ない。エラー、エラー、エラー、計測出来ない。『赤龍帝の籠手』がまたも勝てないと伝えてくる。

オーフェイス神。全盛期のドライグが敵にもなれなかった龍神。神々よりも強かったというドライグとアルビオンが二「天」龍だったのは、先に存在していた神龍と比べてあまりにも弱かったからだと言ったこともあるが……。

「——見せてもらおう」

深淵の闇のような瞳が、迫ってくる。口づけ出来そうなほどの距離に、オーフェイス神の顔が——。

マズイ。頭だけでなく、指も足もピクリとも動かせない。

『なんのつもりだ、オーフェイス! クソつ、魂にッ!』

意識が薄れていく……。

「させない!」

「邪魔」

ラティアの悲鳴が……!」

『Welsh Dragon Balance Breaker!!!』

気が付くと、オーフェイスの顔面に『滅び』の拳をぶち込んでいた。

悪しき霊たちの王（レイジ・レックス・レギオン）

メガラニカあるいはテラ・アウストラリス（ラテン語で南方大陸）と呼ばれる大陸がある。

古代ギリシャの頃、大地が球形であるとするならば北方だけ大陸が多くてはバランスが悪い、だからきつと南方にも同じくらいの陸地があるはずだと学者たちは考えた。そうして未知なる南方大陸の存在は推測され、想像され——創造された。

メガラニカの面積はアフリカ大陸とユーラシア大陸を足し合わせたほどの巨大さと考えられていたので、実在したならそれはもう広大な大地だったことだろう。

古代ギリシャの頃から時は流れ、やがて航海技術を発展させた人間たちはこのメガラニカが存在しなかったことを確認し、南方大陸は夢や幻の代物だったのだと結論付けた。

だが、この大陸はたしかに創造され、たしかに存在していた。『次元の狭間』を『無』に蝕まれながら漂う『ファンタジー夢幻』の存在として、天使の住まう天界や、悪魔や墮天使が暮らす冥界のように存在していたのだ。

少なくとも昨日までは——。

魂を掌握される感覚の悍ましさに、咄嗟に拳が出た。

人型形態の龍神は、幼い少女の姿をしている。事前に聞いていた、白髭の老人の姿ではない。

衣装も奇妙。まるでエロゲのロリキャラクターのようなデザイン
の服を着ている。好きなだけ白濁をぶちまけてくださいと言わんば
かりの格好だ。

だが、いくらエロゲキャラのように見えようとも『無限の龍神』は『無限の龍神』。その力は俺の最大限をどれほど上回っているのか測り知ることさえできない。

『無限の龍神』相手に逃走は不可能。ドライグの特性が『倍加』なら、オーフィスの特性は『無限』と推測できる。ならば、その速度も無限大。誰も龍神からは逃げきれない。

城塞に籠るのも無意味だろう。無限のパワーを前にしたら、壁も結界も用をなさない。如何なるものも龍神を塞き止められない。

それでも、俺の魂は俺の魂だ。頭の中に火が付く、視界が紅に染まり始める。

怯えて竦んで頭を垂れて、諾々と従っていれば覗き込まれるだけで済んだのかもしれない。

だが、もう後の祭りだ。拳を振り抜いた以上は、闘争しかない。

「我の手を弾いた……？」

顔面に受けた滅びの拳には構いもせず、オーフィスは己が手を見詰めている。隙だらけのその姿には、無傷の余裕がある。

展開した禁手の装束。魔王の衣。両手に顕現させた籠手から爪を伸ばし、魔力を集束、オーラを収斂、滅びを凝縮。両手を広げ、翼を閉じるようにして左右の爪を振るう。

オーフィスの斬り刻みにかかる。右から五本の爪。左からも五本の爪。交差させる形で両手を振り抜くと、オーフィスの身体に升目のような切れ込みが奔り——龍神は何事もなかったかのように佇んでいる。

「いくつに割いても、無限は無限。それは無意味」

血の一滴も流れない。格子に奔った斬撃線は、次の瞬間には消え失せた。

指の具合を確かめるように、左右の手を幾度か折りたたんだでは開いている。

「……やはり、真なる豹？」

ラティアの姿を探す。見つけた。

オーフィスの狙いは俺にしかないようだ。むしろ、ラティアを認識しているのかさえ怪しいところだ。邪魔だと跳ね除けたときの仕草は、人が羽虫を払うものによく似ていた。龍神にとっては、純血の上級悪魔など目の前を飛び回らなければ気に掛けるほどのものではな

いのだろう。

ラティアに逃げろと言え、嫌だと返ってくる。『騎士』だから、と。ならば、俺と一緒に死んでもらう。死んだ気で戦ってもらおう。だけど、ラティアは弱い。全力に巻き込めばすぐに死ぬ。だったら、どうする。

こうする。

外に置いておけば、弱みにしかならない。であれば——喰ってしまえばいい。呑み込んでしまえばいい。『赤龍帝の籠手』にはその機能がある。

過去の所有者たちは、籠手の中に剣や槍、銃などを籠手の中に収納して用いていたという。過去の所有者たちは、その怨念を、思念を籠手の中に残していた。クレーリアの魂だつて封入している。この宝玉は、物質も精神も、肉体も魂も、取り込める。

我らはレギオン、一にして多なるが故に。

神器の淵から浮き上がって来た呪文を唱え、ラティアを抱きしめる。すると胸元の宝玉へと彼女が吸い込まれていく。

身体の中から、魂の近くから、神器の内側のどこかから、悪魔の魂の波動を感じる。俺とラティアは今、ふたりでひとつの悪魔合になっていた。

『ドラゴン・フォーム
龍 化』 『巨大化』

龍に変じ、身体を大きく、大きく、大きく。

悪魔の身体は脆い。人より遥かに強いが、龍より弱い。最強の生物はドラゴンだ。龍の肉体であれば、より大きい身体であれば、より強い力に耐えられる。

「我は、確かめなければならぬ」

こちらに合わせるように、オーフィスもまた真の姿である漆黒の蛇となった。『無限の龍神』はこちらが巨大化すればするほどに、それを上回る巨体になっていく。限りなく、どこまでも。

どれほど力を高めても、無限は常に上回って来る。

背筋が凍る。腹を見せて命乞いをしたくなる。

『珍しいな、オーフィス。お前がやる気になるとは』

「ドライブグの宿主、真なる豹かもしれない」

『真なる豹……？』

「真なる豹は、父なる神の影。封印を解く鍵になるかもしれない者。我はあの封印の向こうにグレートレッドに近い力を見た」

だが、世の中舐められたら終わりだ。無条件の降伏などあり得ない。対価もなく魂を差し出すものか。

恐怖を燃やせ、怯えを滅ぼせ。心が竦めば腰が退ける。狂気を起こして、無理矢理にでも闘争心を猛らせる。ドライブグの暢気な会話を気にしている余裕はない。

GuirraooooEoothooh——!!

牙を剥け、咆哮を、氣勢の雄叫びを上げろ。

「再び静寂を得るために」

意味なき音の羅列で心を奮い立たせる俺に向けて、漆黒の蛇神は光のない瞳を向け抑揚なくそう言った。



原色の絵具をぶちまけ、こねくりまわし、油をかけたような景色。毒々しい万華鏡のごとき次元の狭間の空を、深紅の流星が切り裂いていく。

紅く燃える流星の向かう先には、廣大無辺な空間の中にあつては珍しい大地があつた。

メガラニカ。かつて人々にあると信じられたことによつて生じ、今は次元の狭間を漂う夢幻の大陸だ。

その大陸中心部に豪速で落下して行く流星の中心で、全長15キロメートルの巨大な紅龍が吠えた。

強大な力の籠ったその咆哮が空間に波紋を生じさせながら向かう先、大地の面から見て上空にあたる方角には、これまた巨大な全長80キロメートルほどの黒龍の姿があつた。

O a r r r A h h o o W w r t h o o h h ——!!

只人であれば音を聞くだけで肉体どころか精神すら爆散するだろう紅龍の怒声。上位の人外異形であっても恐慌に陥るだろうそれを浴びながら、黒龍は一切動じた様子を見せない。静かで音の高低を感じさせない、それでいてどこまでも届く声で語り掛ける。

「ドライブでは、我に勝てない」

音速よりも遙かに速く墮ち行く紅の鱗に紫の瞳のドラゴン。彼ははその声に憤った。

猫科の肉食獣のようでもあり人のようでもあるフォルムを持つ西洋風の龍の名は、

『紫紅の龍帝』リヴラクス・グレモリー。

凡人の魂。力を『倍加』し続けられる赤き龍の帝王の神器。万物万象に終焉を齎す『滅び』の悪魔の力。三つを宿したケダモノ。

「それではすぐに終わる」

天から見下ろすのは闇の鱗に深淵の瞳を持つドラゴン。細長い蛇のような身体のどこまでが胴で、どこからが尾なのか。振り下ろした尾をくるりと丸めてみせるのは、

『無限の龍神』オーフィス。

その力は他の如何なるモノより大きい無限インフィニティ。その命は終わりなき無限エンドレス。無から生まれた無限の体現者。

無尽の生命力と防御力を持つオーフィスは、痛みを知らない。感じ取る機能を必要としない。ついでに、ヒトの常識もあまり理解していない。

オーフィスの振るった尾による一撃は、そのオーラでリヴラクスとの重量を地球上のモノでたとえるなら、エベレストが最も近いサイズになる。通常の物質を遙かに超えた強靱無比な鱗の内側に超高密度の筋肉と骨格を収納した最強の幻想生物ドラゴン。倍加を繰り返して巨大化した体。その重量、数百兆トン。

全長15キロメートルのドラゴンに変化したリヴラクスの大きさと重量を地球上のモノでたとえるなら、エベレストが最も近いサイズになる。通常の物質を遙かに超えた強靱無比な鱗の内側に超高密度の筋肉と骨格を収納した最強の幻想生物ドラゴン。倍加を繰り返して巨大化した体。その重量、数百兆トン。

超重量の龍体リヴラクスと幻想大陸メガラニカの衝突。その瞬間、最大規模の火山噴火の数億倍の爆発が発生。広島型原爆の10億倍を超えるエネルギーの炸裂は大陸の上に、太陽が生まれたかのようなだった。もしもこの墜落が次元の狭間ではなく地球上で起きていたならば、生物の大半が死滅するレベルの被害が出ていたことだろう。激突の衝撃で圧縮され燃え滾る大地には、幅100キロメートル、深さ20キロメートルを超えるクレーターが刻まれ、地球という支えを持たない漂流大陸はその衝撃で吹き飛ばされた。

大陸はひび割れ、砕けた破片を散らせ、焼け溶けた大地を深紅の尾のように引きながら次元の狭間を飛んでいく。

激突から十秒、気化した岩石が灼熱のガスとなっているクレーターの中心点で紫紅の龍帝は立ち上がった。全身にまとった滅びのオーラが広がると、周辺の赤熱地獄が消滅して行った。沸騰する大地と岩石蒸気の大气で溢れかえる円形のクレーターの中心部、そこに黒い球体が生まれ、広がり、直径数十キロメートルにまで達した。次の瞬間、その黒球が一気に収縮。大地にぽかりと開いた大穴が見えた。

クレーターによって深度20キロメートルまで抉られ、そこからさらに数十キロメートルを消し滅ぼされたことで、大陸の裏側まで貫通してしまっただのだ。

B a r r r w w A a a a o o o w w h——!!

龍化しているリヴラクス、その鋭い牙が並ぶ上下の顎の間に滅びと龍のオーラが集束していく。一旦、体外に放出して留め置いたオーラ。新たに放出しているオーラ。合わせて『倍加』し、上乘せして『譲渡』。さらに集束、これまでにない圧縮。

掌握しきれなくなったオーラが制御を外れ、撒き散らされた『滅び』が飛び散る。空へ大地に飛散した黒い帯によって、大地は穴だらけのチーズのようになっていく。

紅龍はその左右の掌にもオーラを束ね、集め、滅びの球体を形作つた。

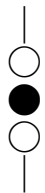
『オーフェイスとやり合えるとはな！面白い！』

突然、柔な魂に触れられたリヴラクスの頭の中は憤怒で真っ赤に染

まっていた。ときに臆病な小心者は、追い詰められると後先を考えない行動に出ることがある。

宿主のその臆病さを、ドライグは嫌ってはいなかった。危機に際して怯え竦むのではなく、怒りをもって戦闘衝動に身を任せる在り方を悪くはないと考えているのだ。

恐怖に怯え身動き取れなくなるよりも、発狂して暴れまわる方がよほどドラゴンらしいと――。



シレグヴァイラ

従 姉に強引に鑑賞させられたロボットアニメ。その中のどれかで見えた戦艦のブリッジに似通った室内。そこに用意された十と七の椅子のひとつにラティアは腰掛けていた。

彼女の両手は椅子の肘かけと一体となった二つの宝玉の上であり、彼女の頭脳と魔力とその特性は『王』の魔力制御を補助するため全力で稼働している。

「あれを受けて無傷なのね」

目の前には無数のスクリーンに映し出される映像群。ラティアはその一つ一つの画面のどれかに注視することなく、全体の情報として捉えていた。視線は動かない。ぼやりと広がる視界。

一番大きいメインスクリーンは、リヴラクスの両眼に映っている光景のようだ。

『オーフィスの力は無限だ。どれほど「倍加」しようとヤツからすれば同じこと』

無限の龍神の力は無限大。たとえば火山噴火の数億倍、数兆倍、数京倍、地球に月が落下したほどの威力を叩きつけたとしても、無限にとってはその全てが無に等しい。

実際、ついさつきリヴラクスが放った『滅び』の砲撃は地球の地表から中心部までを穿つほどの代物だった。もしかしたら貫通さえさ

せられたかもしれない。それを直撃させ、前後左右に口部を動かすことでオーフィスの蛇体を幾つかに裁断。さらに術式を加えることで直線砲撃から球状に変化させてオーフィスの全身を『滅び』に呑み込ませることまでした。

それなのに、滅びの暗黒球の中から姿を現した無限の龍神には、ダメージを受けた様子が一切ない。

「その攻撃は意味がない」

滅びの闇が消え去り、万華鏡の様相に戻った空からオーフィスの無機質な声が聞こえてくる。

その間もリヴラクスからの攻撃は続いているが、無限はソレに何の注意も払っていない。回避も防御も、その素振りすら見せない。

『幸いだったのは、オーフィスがこちらを殺そうとは考えていないところか』

ラティアとドライグは初対面ではない。これまでに何度か籠手から発する声と会話をしたことがある。戦闘好きで身勝手なドラゴンらしいドラゴンであることは承知しているが、頭に血が上っている状態のリヴラクスよりは話を通じるとラティアは判断していた。

「ドライグ、貴方は彼女の目的がわかるかしら？」

彼女——人型を取る時は老爺の姿をしていると聞いていたオーフィス。だが、ラティアが初めて見た無限の龍神は幼い少女の容姿をしていた。だから、ラティアにとってのオーフィスは女性という認識となっていた。

『真なる豹と言っていたが……分からん。分からんが、コイツの魂を確認しようとしていたことだけは分かる。あのまま受け入れていれば、案外あっさり去って行ったかもしれない』

「リアスは怖がりなのよ」

リヴラクス・グレモリーは臆病な気質だ。前提として命のやり取りまではしないゲームであったり自身の側が明らかに優勢ならば余裕を持って振舞うが、劣勢は避けるし、勝てない相手からは逃げる性質の持ち主だ。

本人が普段からそう言っていることも、事実そうであるらしいこと

も付き合いの長いラティアは知っている。さすがに神器として共にあり続けて来ているドライブには及ばないが。

『俺はの方が楽しいから構わんがな。コイツはこれまでの所有者と比べて強すぎる。全力を出せる相手がいなくて退屈していたところだ』

「気楽なものね」

宿主が裏路地の行き止まりで毛を逆立てて威嚇する猫のようになっていくというのに、このドラゴンは何を楽しんでいるのか。

ドライブに向けたラティアの言葉にはいつもより鋭い棘があった。戦と争乱を呼び込む『赤龍帝の籠手』などに憑りつかれていなければ、リヴラクスはもつと安穩としていられたと考えているからだ。

『見ている事しか出来んからな』

出来ることなら自分が戦いたい。不満そうなドライブの声を聞きながし、ラティアはスクリーンに映るオーフィスの行動の変化に合わせて術式操作の配分を切り替え始めた。

『滅び』^{バアル}から『時間』^{アガレス}へ。魔力制御の比重を後者に寄せる。

センスに任せて暴れまわる『王』^{リヴラクス}の時間を1000倍に加速。ラティア自身への時間加速は1024倍に——リヴラクスの動きを見てから魔力制御の補助を追いつかせ、無駄を削り、最適化、現在可能な魔力と術式運用の最高効率を目指す。

「数で抑え込むつもりかしら」

オーフィスの身体から数え切れないほどの黒く細長いものが現れ出で、天を埋め尽くそうとしていた。万華鏡の空が漆黒に染め上げられる。

漆黒の蛇の群れ。数え切れない。

紅の大龍と化したリヴラクス。本来の姿である黒蛇龍の形態をとるオーフィス。両者と比べると小さく見えてしまうが、湧き出した無数の蛇の一匹一匹の大きさはタンニーンほどもある。それらが雨粒のように空から降って来る。

轟音と共に降り注いだ黒蛇の雨を、リヴラクスは大地の上に移動して迎え撃った。足下も含めた前後上下左右全方位から攻められるよ

りも、地面を盾として下方だけでも塞ごうとする動きだ。

人間界の数百倍に加速された時間の中で、リヴラクスは黒蛇を爪で切り裂き、牙で噛み砕き、尾で薙ぎ、足で踏みつぶす。羽ばたきが岩とともに蛇たちを巻き上げる。放たれる滅びの砲撃が大地の上を奔り抜け、大陸の山々を消し飛ばして大地を平らにしていく。

数百、数千の黒蛇が裂かれ、砕かれ、潰され、消滅していくが、それに倍する数の蛇が尽きることなく空から落ちてくる。

切りが無い。無尽蔵に追加される蛇たちは、その一匹一匹が純血の上級悪魔の中でも上澄みにあるラティアを簡単に殺してしまえるだけの力を宿している。そんな怪物をいくら生み出しても、オーフィスには消耗する様子が無い。

スクリーンに表示される『無限の龍神』の力の量は、いつまでも^{エラー}∞、^{エラー}∞、^{エラー}∞。

(籠手の機能を使って相手の力を数値化して表示までして……。まるでシーグヴァイラの好きなゲームの画面みたいね。本当に命が掛かっているとこは笑えないけれど)

リヴラクスが以前から考えていて、去年になって眷属を得たことで発現させた『^{ブーステッド・ギア}赤龍帝の籠手』の^{バランスブレイカー}禁手。

『R a g e R e x L e g i o n 』。

R a g e は「憤怒」、「猛威」、「渴望」あるいは「狂気」。

R e x は「王」。L e x は「法」。

L e g i o n は「軍勢」「多勢」あるいは「選ばれし者」。もしくは己が身に無数の悪霊を巢食させた男が、自らの名であるとして答えたという言葉。

レ・レ・レと同じ音が続く様に適当にそれらしい単語を並べただけというネーミングについて、ラティアから特に意見はない。^{ウエルシユ・トラゴン}赤き龍の帝王、ローマの軍勢、^{悪魔}悪しき^魔霊たちの繋がりを説明されても理解はできない。

ただ、この禁手の性能が狂っていることは理解していた。禁手は神器のバグとも呼ばれるようだが、リヴラクスの禁手は拡張性その他諸々が高すぎる。

「王冠、叡智、理解、慈悲、苛烈、美、勝利、栄光、基盤、王国……。正義、勇氣、知恵、希望、信仰、節制、愛……。我にも解けぬ十と七の封印の鍵。サタナエルの言葉、確かめる」

そして、そんな禁手の力をもってしても僅かも削ることが出来ない『無限の龍神』オーフィス。

巨大な龍と龍のぶつかり合いに巻き込まれた哀れな超大陸メガラニカは、軋む地殻の悲鳴とともに今まさに崩壊の時を迎えようとしていた。

誘惑の果実 (Bad Apple)

地平線が捲れ上がってくる。足元の大地に巨大なひび割れが生まれ、それまでなかった峡谷が出来る。曲がって折り重なって大山脈が瞬時に形成され、ひしゃげ、ねじれ、砕けて飛び散る。

怒りという感情は一時的に強大な力をもたらしてくれる。怒り狂っている間は、恐怖心も消え去り、身体が竦むこともない。それどころか、普段は発揮できない力を奥底から呼び覚ましてくれたりもする。

普段これを超えると危険だと感じる領域。自分自身を保つための限界点。それを振り切つて、頭を狂わしてぶちかます瞬間。

前世で小学生をやっていた頃、田舎道で野犬と出会ったことがある。噛みつかれることをよしとし、その代わりに首を締めあげへし折つてやった。あのときに感じたものに似ているかもしれない。熊は賢かったのか、目ん玉にボールペン突っ込んでやるつもりで睨み合つてたら逃げて行つたっけな……賢い。

あるいは中学生のころ、下駄箱で跳び蹴りかましてきたクソ先輩。報復に玄関出てすぐの階段でタックル決めてやった次の日、アイツがお仲間連れてやって来たときもそうだった。真冬の放課後、川沿いの帰り道、アイツ一人に的を絞つて特攻からの諸共川ダイヴ。アレを決めてやったときの爽快感、は少し違うか。

大学生やってた頃、駅のホームで酔ったその筋っぼいのに絡まれた。あのときは、レールの上に引きずり込んで組み付いて粘つてやったんだっただか。大仰に肩揺らして胸倉掴んで来やがった野郎の引きつった顔は最高だったな。

給料とるようになった後、コンビニ帰りの夜道。金おろすところを見ていたらしい、いかにもな感じの未成年集団に囲まれたこともあった。あのときはライターと買ったばかりのライターオイルでやり合つたらどうにかなつたつものだ。俺をボコつて金とろうつてんだ、

プリンみたいな色の頭が焼きプリンになっても文句ねーだろ、一生ハゲてろ。

俺の前世で特に覚えのあるブチギレなんてこの程度のものだ。カツとなつてやつちやつたぜ！ って感じだな。

退けばなめられる。なめられたらむしられる。踏みつけられて生きたくはない。そう思えば、ああ、俺のあのときの対応は間違っていないのだ。少なくとも俺の中ではそう。

強いか弱いか、生きるか死ぬか、踏むか踏まれるか、どうせどちらかならば踏み躪る側でいたい。前世じゃそれだけの力はなかったが、今の俺にはそれがある。

だというのに、このオーフィスが！ 殴っても殴っても、滅ぼしても滅ぼしても、一向に終わらない、堪えた様子がない。

破壊、破壊、破壊、破壊、破壊……猛り狂つて爪を振るう。滅びを混ぜたブレスで存在を消去しながら、それを燃料に焼き滅ぼす。尾で薙ぎ払い。牙を立てて噛みつき、食い千切り、血の流れない肉を飲み干す。

悪魔の基準で言えば魔王クラスの蛇の群れ相手に、何時間戦っているのか。人間界の時間では数分も経っていないのかもしれないが、1000倍に加速した世界で過ごす俺にとっては、その数分が途轍もなく長い。

憤怒は短い間だけ、その力を貸してくれる。怒りに我を忘れていられる時間はそう長くない。この感情は消耗が激しい。感情で出力が左右される神器使いとしては、これが衰えるのはよろしくない。

全く善くないのだが、瞬間沸騰の怒りは冷めやすい。だからだろうか、前世のブチギレ案件なんてものを思い出してしまったのは——自分から苛つきに行かなければならないなんて事態になるとは、ああ、クソ苛つく！

なんか、もうやるだけやったし……いいかな。負けちゃってもさ。

といった感情が湧き始めているのがクソムカツク。オーフィスは強いのは分かっている。強いヤツは偉い。オーフィスは強いから、偉い。だから、言うこと聞け。

その理屈は俺の理屈であり、まったくもってその通りとしか思えないのだが……それはそれとして、一発ぶちかましておかないと気が納まらない。

正面からマトモにやり合えば勝てない。そうだとしても、相手に傷のひとつも残せないのでは、その後は何を要求されても受け入れなければならなくなる。

要求が過ぎれば痛い目に遭わされる。最低限そう思わせなくてはならない。

なめられるわけにはいかんだ。貴族はな！俺もグレモリーの看板背負ってるんだよ！

足場が脆い。苛つく。俺の重量がありすぎて、岩盤が沼地のようだ。歩くより飛んだ方が消耗がすくないって馬鹿みたいだな。

だが、それでも巨大な姿には意味がある。デカくて硬くて重けりや強い。人間の格闘技だって体重でクラス分けされている。

一匹の蛇の頭を握りつぶしていると、別の蛇が背中に喰い付いてきやがった。アツサリ貫通しやがって、この鱗の厚み何メートルあると思つてやがるんだ。無限め！貫通力特化のミサイルくらいなら余裕で弾く龍鱗が、竹槍も防げないダンボールアーマーのようじゃないか。

食い千切られた背中から炎が噴き上がる。『不死鳥』^{レイツェル}の特性が俺の命を繋いでくれる。

俺の牙がオーフィスの蛇を喰らい、オーフィスの蛇が俺の身体をついばむ。喰つて食われて繰り返して、消耗して行くのはこちらだけ。

『無限』はいつまでも減少しない。

そろそろ……厳しい、か。

頭の中を焦がしていた熱が急速に冷めていく。

気付けば魔力が心もとない。無限の軍勢を蹴散らしてはいるが、どこまでも追い込まれている現状が身に染みてくる。

周囲360度、地平の果てまでぐるりと囲んだ巨大蛇の群れ。空を覆い尽くす黒雲のような蛇たち。それらの動きが止まった。

数え切れないほどの分身たちを従え、遥かな高みからオーフィスの

光の無い瞳が見下ろしてくる。

「我は無尽。尽きることは無い。ドライグでは我に勝てない。それが理解できたなら、もう終わりで良い?」

平坦なその声にイラツとするが、発狂モードはこれまでだ。もう余裕がない。

ゲームのボス敵なんかは、HPが少なくなると攻撃が激しくなりがちだが、普通に考えれば傷つき消耗してからではそんなことは出来ない。万全の状態であればこそ、存分に暴れまわることができるといもの。俺の魔力はもう給油マークが点灯中なのだ。消費に回復が追いついていない。

だから、ここからはやり方を変えよう。俺はコイツに俺の価値つてものを理解わからさせてやらなければならぬ。

『聞こえるか、ラティア』

『ええ、聞こえてるわよ。頭はもう大丈夫なのかしら?』

『押し切れたら良かったが、そうもいかなかった。ここからは魔力の運用に関しては全部、俺の「騎士」に任せる』

『……そう。せいぜい上手く龍を乗りこなしてみせるわ』

アスタロトの特性で制御に長けたラティアに魔力の運用を丸投げ。空いたりソースを朱乃から譲り渡されている雷光と、黒歌の妖力と仙術の資質に回す。

光力、妖力は魔力とは別会計。まだ使っていないから満タンだ。魔力と比べるとかなり少ないが、そこは『倍加』で増やしてやればいい。

光力は悪魔や吸血鬼には強いが龍に特攻があるわけではない。それでも通用しないわけでもないのだから、攻撃手段としては有用だ。妖力は直接的な破壊力に変換するよりも、「化かす」ことに向いた力だ。幻術的な作用を発生させるのに向いている。といって肉体的な攻撃の手段として使えないわけではないのだから、混ぜて使っていくとしようじゃないか。

仙術は正直難しい。ついでに言えば、無限の生命力を持つオーフィス相手には通用しないだろう。スプーンで海の水をかき混ぜようとするようなものだ。それでも無いよりマシだが。

『ドライブグ』

『なんだ兄弟？』

『お前が知っているオーフィスの情報を教えろ。何でもいい、戦いな
がら聞く』

『構わんが、オーフィスについて俺の知っていることはそれほど多く
ないぞ』

『知っているだけのことでもいい』

敵を知り己を知らばなんとやらと言うが、俺は自分の全力もまだ知
らないし、オーフィスのことなどサツパリだ。

まったく、来るなら来るで事前に入念なミーティングをさせて欲し
いね。事前に検討していたら、そもそも戦うって結論が出ないだろう
が。

「まだ続ける？」

「続行だ、オーフィス」

理解できないと言った様子のオーフィスに、戦闘継続を伝えて光の
槍を掌に。槍に『倍加』を繰り返せば、ちゃんとの今の俺用のサイズに
なった。

いや、でもこれなんか扱い難しいな。そもそも槍とか剣とか手習い程
度にしかやってないわ。俺が一番慣れ親しんでいて、かつ朱乃と縁の
ある武器って言ったたら、やはり鞭だろう。鞭。朱乃はムチムチ。

両手に二本の雷光鞭を生成。バジン、バジンと振り回す。これでい
い。雷光が狙ったところに飛んで当たって弾けて焦がす。プレイの
最中に急所を的確に撃ち抜くために磨いた技だ。練習の本気度が違
う。だいたい光力なんて、武器の形がどうあれ当たればいいんだよ、
当たれば。武器の重量や勢いではなく、光力でダメージを出している
のだから。

打つ、撃つ、討つ。雷光の鞭で打擲し、妖力の帯で巻き取り、地に
引き倒して踏み潰す。地平の果てまで埋め尽くし、空を覆う黒蛇の群
れを――。オーフィスに仙術は効かないが、気配を探る役には立つ。
無限の龍神に技巧はない。詐術もない。戦術もなしの力押しは、普段
の俺と似たようなもの。無限のパワーとスピードがあれば、そんなも

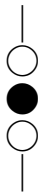
のは必要ない。

だから、気配を読むことは頭が冷えていればたやすい。攻撃の気を感じ取り、機を外すことでなるべく回避。それでも物量の前に、躲しきれはしなくなるがそこはラティアにお任せだ。

俺がやると常時全身を覆う形でしか使えない『滅び』のオーラによる防御。それが攻撃を受ける一点、その瞬間のピンポイントでカバーに入ってくる。薄く広く全身にはなく、濃く小さく被弾しそうな箇所のみを守る運用。そいつで黒蛇の牙を防ぐ。

空を舞う百千万の蛇たち、その顎が開くと炎の弾が降り注いでくる。狙いは甘い。甘いとその分回避の余地がない。ああ、喰らうなこれは……と思った瞬間、直撃コースの火炎弾の中心に『裂け目』が入った。それによって、火球の形が崩れるまではいかないがコースが変わる。

爆ぜる。無限の放った無限の熱量が、直撃せずとも周囲一帯を焼き尽くす。岩石が融解・蒸発する。



『無限の龍神』オーフィス。
ウロボロス・ドラゴン

混沌、虚無、無限を象徴するドラゴンの神。オーフィスは自身がいづから在ったのかを知らない。人間の祖先が二足歩行を始めた頃、あるいは人が初めて道具を使い始めた頃、もしかしたら人が「火」を扱い始めた頃か。

少なくともオーフィスが人間界に目を向けた頃には、既に人間たちは死者を埋葬する習慣をもっていただろう。

オーフィスは人間たちがそうしていることは知っていたはずだ。ただ、親もなく子もなく、兄弟もない無の独り子であるオーフィスはその理由を理解することは出来なかったと思われる。

ただ、いつの頃からかオーフィスはひとつの疑問を抱くようになって

ていたらしい。あるいはそれこそが、オーフィスの生まれた意味、存在の始まりに繋がるものなのかもしれない問いかけだ。

『我、なぜ存在するのか。その理由、何なのか』

オーフィスの求める答え。それは人間の哲学において有名な問題だ。究極の問い、存在の謎とも言われる問題である。

なぜ何もないのでなく、何かがあるのか。

なぜ我は我なのか。

我とはなにか。

真の無からは何も生じない。だが、たしかにここに我がいる以上、無ではない。では、無限を生じさせる無とは何か。

この世には、たしかに「何か」がある。だが、「なぜ」それがあのかという問いの行きつく果ては誰も答えられない。

「宇宙は何故ある?」「なぜビッグバンが起きる?」「なぜ起きるようになってる?」「……」「なぜ?」「なぜ?」「なぜ?」

「最初からすべては在った」「なぜ最初から在ったのか?」「永遠に続いているから」「なぜ永遠に続いている?」「……」「なぜ?」「なぜ?」「なぜ?」「なぜ?」

それは考えても考えても答えの出ない、無限後退の謎。それは生命の存在意義の問いにも繋がる疑問。

「どうせ死ぬのに、なぜ生きる?」「世界は辛く苦しいのに、なぜ子供を産む?」「生きる意味は?」存在の理由は?「……」「どうして?」「どうして?」「どうして?」

知恵を得たが故に、人間は永遠に答えの出ない謎について思考するようになった。その答えを求めるオーフィスのかつての姿は、哲学者の老人のようだ。

そして、現在のオーフィスは親に答えを尋ね続ける幼子のような姿をしている。そこにどんな心境の変化があったのか。

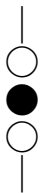
また、オーフィスはこうも言っている。

『我、次元の狭間に戻り、静寂を得たい』

オーフィスは次元の狭間の『無』から生まれた。次元の狭間とは、オーフィスにとつての親、母の胎と言つてもいい。ならば、母の胎の

中で誰にも邪魔されず、煩わされずに過ごしたいというオーフィスのこの願いは、一種の胎内回帰願望のようですらある。

かつては知識として知ってはいても、何も思わず何も味わわずに数万、数十万の年月を過ごしていた隠者のごときオーフィス。それがなぜ、今になって母に抱かれないと欲するようになったのか。



思考を巡らせながら夢中で戦い続けるうちに、いつしか周囲には小島ほどの土地しかなくなっていた。見渡す限り、地平線の向こうまで延々と広がっていた大地は細切れになって消し飛んでしまっただけらしい。

そして、オーフィスはそろそろ終わらせるつもりなのか黒蛇の群れを引き上げ始めた。

魔力はほとんど底をついていた。光力も妖力もない。そんな俺の身体には、これまでになかった力が宿っているが、こんなものはオーフィスから見れば塵芥も同然だろう。

サイラオーグのヤツは、身体を苛め抜く修業をしていたら身に付いた……とか言っていたかな。うん、あれだな、闘気って黒歌の素質ありならオーフィスの蛇と戦ってるだけで出てくるものなんだな。

まあ、俺の生命力を振り絞ったところで、無限には通用しないワケなんだけどさ。それでも次元の狭間の『無』に呑まれないためには役に立つ。

「我は無辺。はてはない」

『どこまで巨大になるつもりだ、オーフィス……』

ドライグが慄くのも分かる。なんだ、あの大きさ……いくら無限と言ったって、限度つてもものが……限度が無いから無限か。オーフィスは、無尽にして無辺。視界の全てがオーフィスの蛇体で埋まる。

スケールがデカすぎておかしくなりそうだが、あの鱗の一枚一枚が

グレモリー領くらいあるかもしれんな、コレは……。

天も地も、前も後ろも左も右も、全方位がオーフィスの蛇体に囲まれた。無限のオーラが吹き荒れて、転移の術は使用不能。逃げ場はない。

「付き合うのは、これで終わり」

獲物を絞め殺す大蛇のように、オーフィスは残された大地ごと俺を潰しに来た。こちらに抵抗する力はない。逆らうことは許されず、全方位から圧迫されて、圧縮されて、龍の姿を維持することも出来なくなっていく……。

だが、まあ……勝つのは俺たちだ！

純粹にして無垢。宗教、神話、現実の苦勞。それらに未だ穢されていない、ナマの疑問を抱き続ける幼子。

それがこれまでに考えていたことと、ドライグから聞いたことを合わせ、俺がオーフィスに抱いた印象だ。

グレートレッドによって次元の狭間から追い出される以前のオーフィスは、もつと超然とした存在だったらしい。だが、今の彼女は生まれた場所から出たことで、世の中について知り始めたばかりの小さな子供のようになっていいるのではないだろうか。それは世間に毒され、汚れ始めたとも言える。

仮定であり、推測に過ぎないが、もしもオーフィスに知識はあつても経験がない。経験があつても浅く薄いものでしかない。

そういうことならば手の打ちようはある。純粹さはいずれ擦り切れるもの。無垢は汚され穢されるのが世の定めというものだ。

次元の狭間を追い出された今のオーフィスは、徐々に変質し始めている。汚れ始めている。

だったら、その穢れ方を……この俺が決めてやる。どす黒い悪魔らしく、染め上げてやろうではないか。

ジジイだったらお断りだが、幸い今のオーフィスはロリロリではあつても女だ。だったら、ヤれる。俺はヤルときはヤル男だ。見た目はともかく滅茶苦茶年上なので問題ない。オーフィスは合法ロリである。いや、たぶん人類に「法律」なんて概念の無かつた頃から存在

しているだろうから、オーフィスは無法ロリなのかもしれない。

魔力や魔法、あるいはギリシア神話に悪名高いエロスの矢でもオーフィスには通じないだろうが……。俺はただこちらに興味を持っているらしい彼女に、情報を与えるだけだ。

『Transfer!!』

勝利の鍵は、朱乃の特性^{性癖}。俺は股間のコイツで無限に勝つ！

とてもとても頑張ってくれたラティアにはすまんが……。

これも勝利のためだ。耐えて欲しい。

失樂園のウロボロス（前戯）

ひとりの少女の記憶と想い。それは穢れを知らぬ蛇にとつては身を焼き焦がす猛毒だった。たった一つの毒リングが、無限をダメにする。

幼い身で母を殺された記憶。帰る場所、抛り所を失いあてどなく彷徨った記憶。

いつも追われていた。死の危険が常にあつた。誰も助けてはくれない。寒さに震え、ひもじさに呻き、寂しさに泣いて……。

その果てに血を分けた親類に殺されそうになり、追い詰められたときに助けてくれた相手がいた。

依存し執着するヒトに隷属することを許されている喜び。その方に蹂躪され、羞恥と被虐に悶え狂う悦び。

どんな形であれ傍に在りたい。何をされても絶対に裏切らない。そのことを信じて欲しい……。

甘く暗く重く渦を巻く猛毒が、どろりどろりとオーフィスの内を駆け巡る。

オーフィスは死への恐れを感じたことがない。痛みも、寒さも、飢えも知らない。

悠久の年月の間、寂しさには縁がなかった。ひとりで完結していた。誰かに助けを求めたことはなく、助けを必要としたこともなかった。

今は少し違う。グレートレッドが現れたことで、生まれた場所を追われ彷徨っている。どうにか戻れないかと手段を探している。

毒は僅かな共通点から侵入し、浸食し、オーフィスの心に染み込み始めていた。

オーフィスの中を駆け巡る毒は、肉欲のために創造主である神を裏切った墮天使と、愛欲に溺れて家を裏切った巫女の血で出来ている。さらにそこにたつぷりと情愛の悪魔の淫欲をまぶしてこね回した代

物だ。どう考えてもロクなものではない。

悪魔の公爵の息子、魔公子リヴラクス・グレモリー。龍化の術の解けた彼は、血のような紅色の髪と、妖しい紫の瞳をもった美少年の姿に戻っていた。

内包していた力の大半を使い果たし次元の狭間を漂う彼の姿を見て、どうやらもう抵抗する力と意志を失ったらしいと判断したオーフィスは、巨大な蛇龍から童女の姿へと変化した。

人型の存在と対話を試みる際は、やはり人型を取った方が話しやすいことが多い。それは、次元の狭間を離れてから学んだことだった。
「^{なれ}汝では……」

彼に近寄り話しかけようとしたオーフィスは、これまでの長い生の中にあつて一度も感じたことの無い感情を覚え、言葉を止めてしまふ。

「なあ、オーフィス。ひとつ聞いていいか？」

情欲の熱を宿した紫の瞳。魔公子の視線が品定めでもするようにオーフィスの身体をなぞる。すると、視線の通り過ぎた箇所が熱くなってくるように感じてしまう。

「なに？」

人型をとったオーフィスの姿は、後ろから見ればゴスロリドレスを着た黒髪の幼い少女と言ったところ。

だが、その印象は正面に回ってみると一気に変わることになる。

大きな黒い瞳、表情は乏しいが整った造形の顔立ち、大きなリボンの付いたチョーカーの巻かれた細い首。ここまでは良い。

だが、その下には乳首を×の字型のニプレスで隠しただけ、僅かな膨らみを見せる乳房の大半は地肌を晒している。あろうことか、オーフィスの着用しているゴシックなドレスは前面のほとんどの部分を露出させたデザインなのだ。

腹もヘソも、下着であるドロワーズも全て見えている。彼女の身体の前面で隠されているのは、胸下とヘソ下にドレスの背面部分から伸びて結ばれている紐の部分だけだ。

「どうしてそんな恥ずかしい格好をしている？」

はつきり言つて、オフィスの今の装いは痴女と呼ばれても致し方のない代物だ。子供の姿を取っているからまだマシに見えるが、この服装を成熟した大人の女性が身に着けたのならば他人の目には下品に映ることだろう。寝室で男を誘うための衣装にしか見えない。公衆の面前に晒すような服装ではない。

「我、恥ずかしい？」

聞き返しながら、オフィスはドレスの布を引つ張った。左右から後ろの布を手繰り寄せて、肌や下着を魔公子の視線から隠そうとする。

（恥ずかしい……。我、恥ずかしい？ 顔が、熱い……。なぜ？）

こんなことは、これまで一度もなかった。オフィスは他者からの視線など意に介さなかった。誰からどう思われようが、ただ独りで完結していたオフィスにとってはどうでも良いことだったから。

「いっそ全裸の方が潔くてマシなくらいには卑猥だ」

「卑猥……。我が」

卑しく、猥ら。嘲りと侮蔑のニュアンスをあからさまに含ませた魔公子の言葉に、なぜか身体の芯が火照り始める。

長い長い間、オフィスは最強の者として君臨してきた。統治はせずとも、稀に会う者たちからは畏怖か敬意をもつて扱われて来た。これまで、こんな扱いを受けたことは無い。そうだというのに、どうしてこうも言葉でなじられることに興奮を覚えてしまうのだろうか。

深淵の闇を湛えたオフィスの漆黒の瞳。その黒の中にかすかな光が宿り始める。

「どうしたんだ。なぜ隠そうとする。今までその衣装で出歩いていたんだらう？」

手で後ろから引つ張つてきたドレス生地で、ニプレスを貼った胸をどうにか隠そうとしているオフィス。魔公子にその仕草を嘲笑われると、なぜか張り付けたシールで抑えている乳首が痛いくらいに疼き、股の間が熱く潤み始めてしまう。

「……。あ……。あ。我、おかしい……」

いやらしい衣装に身を包み、男の視線を受け止めている自分。そのことを意識してしまうと、お腹の下あたりが熱くなってきてしまう。恥じらいを覚えていた。これまでそういった感情が存在することを知ってはいても、自分自身のものとして味わったことのない感覚に戸惑ってしまう。強い羞恥に細い脚線が震える。

無限の龍神にとって、衣装を変えるくらいのこととは造作もない。そうでなくとも後ろを向くだけで、恥ずかしくも露出させている部分が視線に晒されることはなくなる。

それが分かっているのに、オフィスはどうにも出来ないでいた。男からの舐めるような熱っぽい視線を受け止めていたいと思ってしまう。

視線で焙られた肌の表面がとろとろと蕩けていくような心地になっていた。オフィスの全身が、覚えたばかりの羞恥心で燃え上がる。

身体が重く感じられる。胸を隠せば下半身に、ドロワーズを隠そうとすればまた別の場所に……自身の動きに合わせて責め立てる箇所を変えてくる妖しい情欲の視線に翻弄されてしまう。

「無限の龍神も案外可愛いものだな」

そう言われたオフィスは、潤み始めた瞳から涙を溢しそうな表情を浮かべた。初めての興奮に腿がすり合わされる。

「我になにをした？ おかしい、ヘン……」

男の股間が膨らんでいるのが目に入った。——その途端、ゾクリと子宮が疼く。与えられた女の毒が、淫らな責め苦を望む性が、無限の龍神を蝕む。子宮口から垂れ落ちる毒液が、膣内を濡らす。

（力が……抜ける）

次元の狭間の空に浮かんでいる状態であつたから免れたが、もしも地に足を付けている状態であれば腰が砕けて蹲っつてしまいそうな状態だ。

視姦されているだけだというのに、恐ろしい興奮がオフィスの肢体を駆け巡り支配しようとしてくる。劣情を宿した目で見られていることに、身体が悦びを覚えてしまう。

その悦びが子宮を疼かせ、蜜路を搾り上げ、垂れ落ちた雫が太腿を伝う。細い腿を締め付けるドロワーズのゴム部分がじわりと色を変えていく。

「何も大したことはしていない。ただ、少し教えてやっただけだ」

紫の視線がオーフィスを突き刺す。

「み、みるな……。我を……。みる……。な……。っ。おかしくなる、おかしく……。っ」

胸と股間を視線から庇おうと、オーフィスは身体を丸めた。無限の龍神の力があれば、魔公子を消し飛ばすことも、どこへなり転移することも可能だというのに、それをしようとはしない。ただただ、恥ずかしそうに縮こまり、潤んだ上目遣いを男に向けながら龍神は肩を震わせ身を揉む。

「そんなことを言つて、本当は見られたいんだらう？」

知らず知らずのうちにオーフィスは男にすり寄っていた。視線に恥ずかしさを覚え、近寄るの止めたときにはあつた距離がいつの間にかなくなっている。

「いや、触りたいのか？」

リヴラクスの手が伸び、足首を掴む。片足を引かれて力の入らない抵抗すると、もう一方の足首も掴まれてしまった。

「あ……。ッ」

脚が左右に開かれていく。身をよじり抗おうとするオーフィスの長い黒髪が、万華鏡の空に振り乱され広がった。

（なぜ、止められない？ どうして、従ってしまう？）

身体が言うことを聞かない。割り抜けられていく両脚の付け根を見られることを、心が悦んでしまう。焼き付けられた『オンナ』の性サガが、オーフィスの子宮を疼かせる。

辱めの体勢が、龍神の頭の中をぼやけさせた。自覚させられた羞恥心が、蹂躪されることを期待してしまっている。

緩く股間を覆い隠すドロワーズの下で、男を知らない秘唇が涎を垂らして喘ぎだす。触れられたことのないクリトリスがはしたなく主張し始める。アナルの窄まりまでもが、ヒクヒクと蠢いていた。

薄い笑みを浮かべた魔公子が、嗜虐的な目でくねくねと腰を踊らせるオーフィスを見下してきた。

「クツ……ハハハッ！ 見られただけで発情しやがって、このマゾ雌がッ！」

罵倒の声を浴びせられると、ゾクゾクと妖しい快感が背筋を奔り抜けていく。

恥ずかしいという感情を初めて知った。恥じらうという行為を初めてした。覚えてたの羞恥心を、踏みにじられている。

それなのに首を横に振ることができない。分かってしまうのだ。自分の中に植え付けられた『オンナ』が、悦んでしまっていることが……。

ずっと年下の、簡単に圧倒できるはずの少年にいい様にされ、抗えないでいる。そう思うと、なぜか身体が火照ってしまふ。ひどく疼く。被虐の愉悦に浸かっていく。

「う……あ……」

なにも言い返せないでいるうちに、オーフィスの両脚はどうとう割り開かれてきってしまった。魔公子の纏う魔王の外套がふわりと広がり、リヴラクスの腹を両脚で挟むような形で抱き寄せられてしまふ。

腰を抱えられ強く抱きしめられると、股座に少年の腹筋を感じた。押し付けられたドロワーズが濡れた割れ目に密着し、いやらしい汁が布に染み出していく。自身の卑猥な器官から分泌された液が外套の下から現れた貴族服にまで滲む。外套に包み込まれるように抱かれたオーフィスの瞳にも羞恥が滲み、思わずこぼしてしまった吐息はどこか熱っぽいものになっていた。

最強の存在には似つかわしくない継るような目を上向かせると、冷たい嗜虐の青と熱情の赤が混ざり合った魔公子の見下す紫眼と目が合う。

「俺がどれだけ攻撃しても気にも留めなかった龍神が、まさかこんな変態だったとはな」

蔑みの視線と言葉に射貫かれたオーフィスの心は炙られたように

なり、ヴァギナがこれまで以上の熱を帯び始めた。黒い瞳に宿り始めた濁った欲の光が、さらに強くなる。

「こいつが欲しいんだらう？」

リヴラクスが腰を動かすと、淫靡な熱を宿して肥大化した牡の肉塊の感触がオーフィスの尻に触れた。

(当たってる。これ……)

雄の気配に怯えたように龍神はその両脚をどうの男の腹に絡みつかせた。自分から押し付けてしまった秘部の入口から、小さな官能の波が奥の肉襞へと流れ込む。

知らないはずの牡の器官の味わいを期待してしまった腰が痙攣し始め、可愛らしい靴の中でつま先がキュツと折り曲げられる。女性器の中の牝褰が、無数の蛇が絡まりのたうち回っているかのように動き出す。

膨張した雄の熱を感じて落ち着きを無くしたオーフィスの腰は、もぞもぞと左右にくねりだした。男のモノに擦りつけ——この先を誘うように、挿入を乞うように——尻を左右に揺すつてしまう。

「違う……我は、これ、求めてない。我は静寂を……」

予感があった。このオトコのモノを受け入れてしまえば、もう元には戻れなくなってしまうだろう。

誰もいない次元の狭間を独り漂い、何にも煩わされずに静寂の中に居続けた日々に戻れなくなってしまうはずだ。

身体と心に転写された味わい。オーフィスがこれまでに、味わったことがないはずの感覚がそう伝えてくる。

ソレを本当の意味で味わわされてしまったら——きっと、孤高の座から転落させられてしまうに違いないと。

(墮とされてしまう)

変質させられる恐怖に怯え、いやいやと首を横に振る。オーフィスは魔公子を押しつけようとした。

「どこが違うんだ？ お前がその気になれば俺程度を跳ね除けることなど簡単だろう？ それなのにこんな弱々しい抵抗をしてみせて……誘っているとしか思えないぞ」

力の入らない抵抗を噛まれてしまう。逃げ出せるのに逃げ出さない龍神の仕草は、雌を屈服させることに興奮を覚える雄の性を煽ろうとしているようにしか見えなかった。

寂しさに震える心が、孤独を恐れる想いが、人肌を恋しがるオンナの弱さが——本来オーフィスが持ち得なかったものが、悪魔の抱擁から抜け出させてくれない。

心が、抱きしめられ捕らえられることを望んでしまう。身体が、この男の抱かれながら甚振られることを悦んでしまう。

なじられるほどに貫かれたがる雌穴が、歓喜の涙を垂れ流す。

「違う」

もう一度、男の胸板を押しつけようとする。

すると今度はあつさりと上半身を後ろに逃がせた。ただし、腰だけは男の片手でがっちり抱え込まれていて下半身から湧き上がってくる熱は逃がせない。

「なんだ、その恥ずかしい衣装をよく見せてくれるのか？」

正面から見ると裸に近い上半身を、魔公子の視線が無遠慮に舐めまわす。視線に突き刺されたニプレスの下で乳首が反応し、胸から痛みが広がる。

露わな肌を撫で回すように鑑賞されたオーフィスは、恥じらいに頬を真っ赤に染めた。

「見るな。放せ……」

懇願をクツと笑って受け止めた魔公子は、片手をオーフィスの腹に当てた。リヴラクスの手が、緊張にひくつく腹部の手触りを楽しみながら撫で擦る。

「っ……いー」

愛撫に吐息が漏れた。優しく羽でなぞるように擦られた部位が淫熱を孕み、肌の表面からジクジクと熱さが染み込んでくる。

妖しい快感の波が身体を中心、すでに焙られている背骨にまで達すると、熱と熱が合わさって全身が火照っていく。

「や、あ、熱い……」

未知の官能に、耳まで熱く赤くなる。下腹部が燃えるようだ。子宮

が焼ける。そこに繋がる肉褰の穴の中で無数の蛇がとぐろを巻き、雄肉を求めて舌を伸ばす。股間の挿入口の肉の膨らみが、人間に合わせた体温を超える高い発情熱を放つ。

「ひ…………い…………あ♡」

これまでの長い生の中で、一度も出したことの無い甘え媚びた声。そんなものが己の口から出たことにオーフィスは恥ずかしさを覚え、それがさらに肉体を昂らせていった。

「少し撫でただけでこれか。感じやすいんだな、オーフィス」

淫熱が身体中を炙る。そうして一通り上半身を撫で回した掌が、ゆつくりとオーフィスの下半身へと向かい始めた。

両の胸をからかうようにかすめ、わきばらをくすぐり、腹の中心を真つすぐに下つていく掌。その向かう先には、女の身体でもっとも淫らな肉の豆。快感を得るためだけに存在する器官だ。

オーフィスを身悶えさせる愛撫の指先が、彼女のドロワーズの中へと潜り込んでいく。

「だめ、だめ…………だめ…………」

身を振らせてはみても、身体が触れられたがっている。心がそこを蹂躪されたがっている。

「龍神さまは、おねだりが上手だな」

下着への侵入を許してしまったオーフィスは、淫らな指先から敏感な箇所を逃がそうといじらしいダンスで出迎えた。

嗜虐心を満足させるその痴態に、魔公子の唇が歪に吊り上がる。

「やめつ…………」

敏感な肉芽を摘まみ上げられた瞬間、オーフィスは両手をリヴラクスノ身体に回して抱き着いた。小さく細い手足の指がクイツと曲がる。雌臭い汁が噴き出し、両脚の根元にこれまでよりもぬるりと濃い粘液が垂れる。

「そら、捕まえた。ハハッ、ここが無限のダメな場所か」

クリクリと弄り回された媚豆は、プクリと膨れ上がっていく。すりすり指紋の溝で擦られ、ヤスリをかけるように弄ばれる。

（なぜ…………？ この、感じ…………擦られるだけ、で…………ヘンに…………っ。へ

ンに……なる)

強烈な刺激に眼を見開き、快感から逃げるように目を閉じる。オーフィスは目の開閉を繰り返し、睫毛が何度も上下して震える。

「切っても焼いても消滅させても何も感じていなかったのに、クリトリスをちよつと弄られただけでこの有様か」

せつなげに悶える龍神の姿にニヤニヤとした笑みを浮かべながら、魔公子ははち切れそうなほどに浅ましく膨れ上がった肉芽に爪を立てて鞘を剥き——捻り上げた。

「い……ッ！ あ……んっ♡」

残虐な刺激が敏感な淫豆を貫く。剥かれた箇所をぐりぐりと蹂躪され、オーフィスは押し殺した悲鳴を上げた。

声の調子から無限の龍神の性感を掌中にしたことを把握した悪魔は、時に苛烈に責め立て、時にゆるりと優しく、そこを凌辱し始める。

「あ……っ、あぁっ♡ ん……あっ♡」

オーフィスはリヴラクスの背に爪を喰い込ませ、その責めを受け続けた。甚振られ、愛でられ、緩急をつけた責めに肉芽が早くも屈しようとしている。もつといじめて欲しいと、されるがまま。

喘ぎ、痙攣し、男の胸に顔を押し付け歓喜の嬌声を絞り出す様子は、同じ黒髪黒目のオンナによく似ていた。

「ククッ、小さい頃のアイツを苛めているみたいな気分になるな」

小さな快楽器官を自在に操縦され、オーフィスは官能の波に翻弄されていく。蕩けるような快感が背筋を奔り抜け、頭の中で弾けて雌の悦びを刻み込む。

(くるっ……っ、なにか……くる。指で触られているだけで……我、おかしくなる)

毒を吞まされた龍神の肉芽は、悦楽に堕ちた。もつと、もつと触つて欲しいと自分から悪魔の指先に押し付けていく。

もう少し、もう少しで、何かが来て、おかしくなる。おかしくなれる。

その直前で魔公子は手が止まると、せつなそうにオーフィスのスカートだけが揺れ続けた。

「なぜ……止める？」

哀し気な声を上げてしまったオーフィスは、はたと気づいて瞳を潤ませた。もつと続けて欲しかったように聞こえたのではないかと思っただけだ。こみ上げる羞恥に悦びの涙が浮かぶ。

「なに、そろそろこっちも寂しいだろうと思っただけだ」

リヴラクスは、ドロワーズから抜き出した片手で自身にしがみつくオーフィスの肩を押しやるとクツと歯を見せる。

密着状態から解放されたオーフィスは、寂しそうな表情を浮かべ……直後に、ひくんつ、と肢体を大きく跳ねさせた。

「ひっ……い……、ひう……っ♡」

魔公子の歯が、かすかな膨らみを見せる乳房の中心、ニプレスに隠された乳首を噛んだのだ。白く綺麗な歯が、貼り付けの下に押さえつけられた乳首に喰い込む。

シールごとコリコリと歯形を刻み込まれ、痛みと快感にオーフィスの胸が籠絡されていく。右の乳首を噛み締められ、左の乳首を指で押し潰すようにされ、オーフィスは啼いた。

啼きながら背を反らしていくその姿は、快感から逃れようとしているようにも、快樂に誑かされて何も考えられなくなっている浅ましいオンナのようにも見える。

「いやらしいな、オーフィスは。こんな子供みたいなナリをしておいで、しっかりと雌の反応をしてるじゃないか」

ひとしきりオーフィスの乳房を苛め抜いた後、リヴラクスは口を離してそう言った。

半開きにした唇の中で何かを求めるように舌をくねらせていたオーフィスは、トロリと濁った光を宿した目を魔公子に向ける。

「いやらしい？ 我が……？」

「ああ、お前はマゾ雌だ。ここを噛まれて自分から痛みを感じて、それでよがっているんだからな」

被虐の悦びを得ていると断定された龍神は、なぜか嬉しくなってしまう。

おあずけされた絶頂が、ジンジンと解放のときを待っている。心が

焦れる。身体が焦がれる。焦らされていることが、嬉しくなってくる。

「我……こんなことされたこと……なかった……」

墮落に向かつてぐらつくオーフィス。グレートレットを除けば最強に座にある龍神をマゾ奴隷へと躡ける愉悦は、リヴラクスに堪らない優越感を与えてくれる。

無限を蹂躪しようとする魔公子は、亜空間を開くと自らの『戦車』の好物を取り出した。

「いやらしいマゾ雌のオーフィスは、もつと俺にいじめられたいよな？」

取り出した乗馬鞭の先端を、ひたりとオーフィスの頬に当てる。本来、『無限の龍神』相手に鞭など意味はない。鞭に限らずあらゆる攻撃は通用しない。

だが、オーフィス自身が痛みを受けたがっているのなら話は別だ。味わいたがっているのだから、自分からその感覚を受け入れる。

「そらッー」

「い……あゝっ」

あどけないときえ言えるオーフィスの頬から、ピシィツと乾いた音が鳴った。打たれた頬にうっすらと赤い痕が残り、そこからオーフィスの身体に痛みが染み渡る。

「嬉しそうだな？」

「んっ……あゝっ」

頬の痕に手を当てたオーフィスの唇が、悦びにほころぶ。再び鞭を振り上げるリヴラクスに、乞うような目を向ける。

「ひっ……っっ♡」

パシィイインと強く打たれた腹から発した喜悦が、全身を犯していく。

ついにマゾ雌毒に浸食され切った身体は、鞭で打たれることに歓喜を覚える淫らなオンナのものになってしまった。鞭が振るわれるごとに、雌の肉肌には赤い痕がつくごとに、オーフィスの嬌声が大きくなる。

痛みは快感であり、ご主人さまからの鞭は悦んで受け止めるものになった。

ピシイッ！ ピシイッ！ と叩かれた箇所から熱い官能の波が広がる。

「オーフィス、鞭の味はどうだ？」

「うあ……♡ あ……♡ あ……♡ あっ♡ きもち、いいっ♡」

鞭の味を自分から受け取りに行く。どうとでも出来るはずの相手の振るう鞭に、従順に身体を投げ出す。

淫毒に蕩けた雌肉に、悪魔の公子の鞭が屈服と隷属の悦びを叩き込む。

「あー……♡ あっ、うああっ……♡」

「ほら、もつとくれてやるから、いい声で啼けッ！ クソマゾのオーフィス！」

鞭で打たれてよがり、嬌声を上げて乱れ、恍惚とする『無限の龍神』。

深淵の闇のようだった瞳は悦楽の色に染まって歓喜の涙を流す。超然としていた表情は今やだらしく崩れ、舌を躍らせて口の端から涎を垂らす無様を晒している。

「もつと？ あっ……もつと……いじめて♡」

ツンと鞭の先が次に打つ場所を突く。オーフィスは、予告された箇所を自ら前に差し出した。

「いつ……ああッ♡」

乳首を隠していたニプレスが鞭で打たれて剥がれ落ちる。露わになったピンクの肉柱に、追い打ちを受けて悶え狂う。

右が終われば、左。執拗に交互に打たれる左右の桜色の肉塔とその周辺は、赤い鞭痕が重なって痛々しい紅に染まっていった。

「はっ……♡ ああ……ッ♡」

服で隠されていない部分のほとんどに鞭の味を教え込まれたオーフィスの瞳が、墮落色の光に満ちていく。もう、毒の効果が切れても完全に元の光の無い漆黒に戻ることはないだろう。

「気持ちよそっうだな」

鞭の先端がドロワーズの中心付近をまさぐり始め、雌の割れ目を擦

り上げられると堪らなくなってしまう。焦げ付く絶頂の予感に頭の中がチリチリと焼け溶ける。

「あう……うん♡」

淫汁を湧かす割れ目を布越しに鞭で責められ乱れよがるオーフィスの姿に舌なめずりしたりヴラクスは、鞭の先で肉芽を探り当てた。その敏感な部位を押し潰しながら、サディスティックな笑みを浮かべて彼女を覗き込んだ。

紫の瞳に情欲の光を灯し、残酷な声音で短く命じる。

「脱げ」

言われるままに命令される悦びに浸りながら、オーフィスは魅入られたように下着を脱ぎ捨て始めた。

「ん……っ」

幼い外見通りのつるりとした陰部は、しかしその見た目に反した淫らに仕上がっていた。たらたらと流れ出る愛液でぐっしよりと濡れた陰唇周辺。はち切れそうに勃起上がった陰核。

「どこに止めを欲しい？」

鞭が太ももを撫で、ヴァギナから掬い上げた愛液を龍神少女の身体のうちこちに塗り付けていく。時折クリトリスを突かれると、その度に電流が奔ったようになってオーフィスは腰をヒクリと動かしてしまふ。

「……………ここに欲しい」

無言のまま鞭で指定された場所への責めを、オーフィスもまた望んでしまっていた。

「いいだろう。脚を開いて腰を前に突き出せ」

被虐快楽に蕩けた身体が勝手に動き、命じられるままに墮落させられた肉の豆を強調するように腰を前に突き出す。マゾ奴隷がご主人さまにおねだりする姿勢だ。

「っ……ううん」

ひどく恥ずかしいことをしている。そのことに興奮してしまう。

リヴラクスの手が大きく振り上げられた。

「あつ………いっうううツツツ♡♡♡」

一際大きい鞭の音が鳴り響くと、オフィスの身体がビクンツと跳ね、彼女の頭の中が真っ白になった。雌汁を噴き上げながらの絶頂快楽に何もかもが押し流されて、空っぽになる。

その意識の空白は、無垢で純粹であつたはずの『無限の龍神』を穢し墮とすのに十分な間隙だった。理性、矜持、目的、様々なものが蕩けて墮ちていく……。

「鞭の後には飴が必要だ」

悪魔は笑みを浮かべながら余韻に溺れるオフィスを抱きかかえ、周辺を見渡し手ごころな大地を探し始めた。



ふあさりと魔王の装束の外套が砕け散つた大陸の欠片の上に広げられた。欠片と言つても元は広大な大陸だ、人間サイズの者が情事に耽るには十分な面積がある。

(気持ちいい……)

気が付くとオフィスは男の胸に抱かれていた。ニプレスは剥がれ落ち、自ら脱ぎ捨てたドロワーズはもうない。後ろから見ればゴシックロリータドレスの少女、正面から見れば胸も股間もオンナの情欲の滾りを顕わにした雌と化した龍神の瞳には、魔公子の白い肌がいっぱいに映り込んでいる。

胡坐をかいて座つたりヴラクスの膝の上に、正面から抱き合う形でオフィスは座らされていた。上着を脱ぎ捨てた男の上半身は裸で、素肌と素肌の触れ合う感覚が鞭痕の残る身体に酷く心地よい。

焦点の合わないぼやけた視界を上に向けると、愛おしい者を見るような優しい紫の瞳と目が合った。

抱きしめられながら、長い黒髪に手櫛を通されているのだと気付いた。上から下へ、髪の間を男の指が何度も何度も繰り返して通り過ぎていくたびに嬉しさが込み上げる。

髪に触れる手とは反対の手が、オーフィスを抱き寄せながら背中を擦っている。ドレス越しに柔く擦られる感覚と、手のひらから伝わってくる体温が何ともこそばゆい。

何かを耳元で囁かれ、額に口付けを落とされた。

「なにを……している？」

蔑みと罵りに続き、これまで自分に向けられたことのないものに触れたオーフィスの胸の奥から、えも言われぬせつなさが湧き上がってくる。

「そうだな、愛しているところかな？ いや、愛でているといったほうがいいのか？」

身体か心のどこかにある、せつなさの生まれるところがギュツと苦しくなり、締め付けられたように痛む。苛烈な鞭責めから一転、飴を舐め転がすような愛撫が被虐の淫熱を孕んだ身体を甘く苛む。鞭を与えて打ち砕き、飴の甘さで溶かす悪魔のやり口だ。

事態に気付いたオーフィスは、身体を強張らせるが――

「そのまま俺に身を任せておけばいい。もつとよくしてやる」

少し尖った耳を優しい吐息でくすぐられると、その硬さはすぐにはぐされていった。あやすような魔公子の言葉を吹き込まれながら、ドレス越しに背の側を撫でられる。鞭を受けていない背の肌を生地に擦られるのがどうにも心地好く、囁かれるままに身を預けてしまいたくなる。

「んっ……くすぐった……いい♡」

頬や首筋、ときには手を取られてその小さく白い指までも、悪魔の舌尖にくすぐられ唾液を塗りたくられていく。肉体のあちこちをしゃぶられ、味見されていると、まるで自分がこの男のものにされていくような気分になる。

消さずに残してしまっている鞭の痕が疼く。愛撫に身を委ねながら、幼く白い柔肌に幾重に付けられたヒリヒリと熱い箇所を男の肌に重ね合わせる。熱く疼く場所が人肌に密着する感覚に、オーフィスはうっとり息を吐いた。

「……ん♡……ん♡……ん♡……ん♡」

妖しい恍惚が龍神少女を支配していく。

甘い睦言を囁かれたことなど無かった。優しくあやすように髪や背を撫でられたこともない。いやらしい劣情をぬたくりつけるように管めまわされたことなどあるはずもなく——頭の中がドロドロに溶かされてしまいそう。

心が攪拌されメスになる。肉悦にほだされた身体がオスに媚び始める。

「その気になって来たみたいだな」

「え……あ……ううん」

いつの間にか、オーフィスは自ら身体を男に擦りつけ始めていた。火照った肌をすり寄せると、艶めかしい官能のさざ波が生まれる。人肌を求めて甘えかかっていると、これまでに過ぎた長い長い年月が孤独で酷く寂しいものに思われて、寄る辺ない身の寂寥感せきりように胸の奥が締め付けられるように苦しくなった。

背に、髪に、愛おしそうに触れてくる男の手に抱かれていると、その苦しみがほどけていく。何とも思っていないなかつたはずの心に植え付けられ強制的に認識させられた冷たい寂しき、その孤独の穴をじわりじわりと男の体温で埋められていくと、リヴラクスが悠久の時の果てによりやく出会えた愛しい人のようにさえ思えて来てしまうのだ。

「っっっっっっっっっっ」

しつこく打たれて充血しきった乳首がピクピクと跳ねて疼く。その尖り切ったニプルを男の肌に当て、擦り、強く押し付け、いつそ懸命とさえ言える仕草でオーフィスは自らを慰めていた。

男に抱かれ、愛撫を受けながら自慰に耽る。漆黒の瞳を悦楽に潤ませながら、幼げな龍神は熱く張り詰めた胸の先を擦りつけていく。

止められない。止めたくない。身体が制御できない。淫らな衝動がオーフィスの心を染め上げていた。乳首から広がる幸福感にほんのりとした乳房の膨らみ全体が蕩けていくよう。

「うう……んんん……うあ……あんう……」

紅潮した顔を胸板に寄せ、とろんとした表情で頬ずりをする。男もまた自身と同じく興奮して熱を発していることが、たまらなく嬉しく

感じた。

あやすように背を撫でていた魔公子の手が背骨をなぞりながら下へと滑り降り、オーフィスの尻をまさぐる。黒いゴシックロリータドレスのスカートはもみくちゃにされ、卑猥な皺を作っては崩し、作っては崩し、幾度も形を変えていった。

背筋を伝い降り、小さな尻肉を揉み解した指先に後ろの肉の窄まりを押し込まれると、妖しい恍惚感が襲ってきて腰が前に動く。

「い……んっ♡」

すると、ここまで蕩けさせられながらも、まだどこかに自分を壊される恐怖が残っていたのか。積極的に触れさせることを避けていた箇所。露を滴らせる裸のメスの割れ目が、ズボンの中で窮屈そうにそり立つオスの肉棒に擦りつけられる。

「欲しくなったか？」

「んんっ、んうっ……いらない」

男の指がドレスの生地ごと尻穴を押し込んでくる。ここまでの愛撫で骨抜きにされたオーフィスは弄ばれても抗えず、指技に促されるまま腰を前後させてしまう。これまでの自分が壊れていくことへの拒否感が崩壊しだす。

剛直を収めたズボンの生地は龍神の股間から溢れ出す愛液でぐっしよりと濡れそぼり、内包する雄肉の放つ淫靡な熱と形を伝えてくる。物欲しげな陰唇と墮落したクリトリスが勝手にペニスへと吸い付いていった。

「こんな顔をしておいて、強情だな」

黒髪を弄んでいた男の手がオーフィスの頬に添えられ、小指で耳をくすぐりながら親指の付け根で顎を上向かせようとする。

目と目が合った。情欲と愛欲に満ちた視線が交差すると、龍神少女はリヴラクスの首に腕を回してしまふ。身をかがめた男の顔が近づいてくる。体勢の変化によって離れていく相手の腰をオーフィスの脚が絡めとって離さない。

布を挟んで密着する性器と性器が熱くて仕方が無かった。

「あっ……むう……ふぁ……んちゅ……っ」

しがみつきの唇を押し付け合う。接吻は徐々に激しさを増していき、すぐに舌と舌が絡まり始める。蛇はときに二重螺旋のように絡まり合いながら長時間の交尾に及ぶことがあるが、ふたりの口内で行われている行為はそれに似ていた。

見上げる形のオーフィスの口内に唾液が流れ込んで来て、それを嚙下するたびに喉や胃、身体の内側まで男のものにされていくような気分になってくる。受け入れるほどに心が蕩けていってしまう。

尻を弄っていた手がするりとくっつき合う身体と身体の間を滑り込むと、ベルト付近から音が聞こえてきた。リヴラクス of 意図を察したオーフィスが唇と身体を少し離れさせると、名残を惜しむように唾液の橋が架かり、崩れてふたりの間に垂れ落ちる。

ファスナーの下りる音がすると、待ちかねたように窮屈さから解放された肉棒が飛び出した。布を越して染み込んだ愛液に濡れた男性器は照り光り、オーフィスの目を吸い付け媚熱を孕んだ吐息を零れさせる。

「なあ、オーフィス……勝負をしようか？」

「勝負？」

「ああ、お前がコイツを欲しいと言ったら俺の勝ちだ」

「言わなければ私の勝ち？」

魔公子はどうあつてもオーフィスの口から、おねだりの言葉を引き出したいようだ。この悦楽にどろどろに蕩けさせられ、理性のふやけた状態ならば簡単に挿入出来るというのに、合意の言質を取ろうとしている。

質問に肯定の答えを得た龍神は、中断させられた肉と情の愉悦の続きを求めてコクリと頷いてしまった。

「……………い……………いん♡……………あええ……………あつ♡」

悪魔の思惑通りに淫らな宴は再開され、これまでズボンを挟んでいたもどかしさの分を取り戻すように性器同士が擦り合わされる。生の男根と生の女陰が愛液濡れでぬるぬると触れ合う。皮の剥けた雌芽の尖りが雄の肉とぶつかり、オナナの裂け目がヒクヒクと蠢いて濃厚な涎を撒き散らす。

オーフィスは情欲に潤んだ瞳を男に向け、肢体を振じらせ、くねらせ、悶えまわった。魔公子の成長途中の身体に、幼い肢体を擦りつけていく。

陰核を肉棒に擦りつけ身体を上下させるのに合わせて、黒いドレスのスカートがヒラヒラと舞う。淫蕩に浸り、快樂に溺れ、重ねた唇が離れると喉が唾液混じりの甘ったるい嬌声に揺れる。

「ほら、言っつてしまえ」

「だ、め……ええ、……あっ♡」

情欲にのぼせ呆けた表情を浮かべながらなおも粘るオーフィスの姿を男は面白そうに笑い、腰を動かし始めた。大きくグラインドする肉棒は陰唇と陰核を的確に刺激するが、決して蜜壺の中に入って行くとはしない。

幼い作りに見えていたオーフィスの雌肉がグチャグチャに歪まされる。愛液はとめどなく溢れ出て、胡坐をかいたりヴラクスを濡らしていく。

ペニスの鈴口と陰唇が口づけを交わすと、オーフィスの腰が動いて肉棒を呑み込もうとする。魔公子はそれをするりと躲しながら、接吻だけを何度も繰り返した。

すぐ近くで肉棒が上下動を繰り返しているというのに突いてもらえず、抉ってもらえない蜜路と肉襞が啼き声を上げている。

「……ううっ……くう……♡ うう……はあ……っ♡ ああ……うっ♡」

悪魔の玩具にされた龍神少女は、切なさに眉を寄せ男にギュツとしがみついた。頬をすり寄せ、唇を吸い付け、言葉にすることだけは我慢しながら甘え続ける。

墮とされた肉芽を中心にして、身体中に恍惚の波が広がりがつつあった。触れ合わせこすり合わせている男のモノもオーフィスの興奮に合わせるかのように脈動し始めている。

「いいのか？ 中でなくて？」

いやいやと首を横に振るオーフィスの腰を強く引き寄せ、男はこれまで以上の勢いで性器同士をすり合わせる。

「なら、このままイってしまえ！」

割れ目から濁り切った濃い体液を溢しながら、オーフィスは背を仰け反らせた。魔公子になすがままに弄ばれ、肢体を幾度も跳ねさせる。ヒクン、ヒクンと迫る快感の前兆に震え、訪れる甘い歓喜を願ってダンスを踊る。

絶頂の瞬間、オーフィスは両手で男の服を掴んだ。仰け反ろうとする背に逆らって男の胸に顔を埋める。

「——ッ♡♡ ——♡♡♡！」

先に達したオンナのヴァギナから雌汁が大量に噴き出した。それに撃たれた男根が、ググつと膨れる。

「下を向け」

リヴラクスは、しがみつくとオーフィスの頭を押さえ顔を下に向かせた。

そうして眼前に逸物を突き付けられたオーフィスに向けて——

「——ッ」

白濁を思いつきり発射した。驚いて目を閉じたオーフィスの顔面に、胸に、腹に、大量のスペルマがぶちまけられる！

「ふあ……っ、あああ……あっ♡」

ドビュツ！ ドビュビュビュツ！ と何度も噴き上がる白いどろどろとした体液。無限の龍神の身体を白い濁流が汚し続ける。

浴びせられた側のオーフィスは、初めは戸惑った様子を見せていたが……。しばらくして、その頬を嬉しそうに緩めた。

変質させられた龍神の瞳に淫靡な情愛の色がより一層濃いものとなって宿り、唇に付いた白濁をねろりと舐め取る。さらにオーフィスは身体のうちこちを汚したザーメンを指でぬぐい取って味わうと、唇を歪ませニヤリと笑んだ。彼女の唇が描いたその笑みの形は、鞭を振るっていたときの魔公子のものとよく似ている。

「我は、欲しいとは言わない」

オーフィスにトンと押され、リヴラクスの背が地に付いた。

仰向けに倒れた魔公子の上に無限の龍神は覆いかぶさり、彼の頭を掴んで口を吸う。押さえつけるようにしてキスを交わしながら、オーフィスはその身体から無数の蛇を生みだした。しゅるしゅるとリヴラクスの身体に蛇が巻き付いていく。

「んっ……っちゅ、……はあっ♡」

唇を離れたオーフィスは恍惚と嗜虐の表情を浮かべ、男の腹に手をつき腰を上げる。そうして、天に向かって屹立する肉棒の先端に、涎を垂らす雌穴の入口を宛がった。

欲しければ力で奪えばいい。